まんじ

No.139

2016.2.1

まんじ第百三十九号　目次

遥かな友に……新井　宏…4
定年チェンジ・ファーマー……古屋富雄…10
秋の七曲（ななまがり）への散歩……横山正義…13
真心（まごころ）……太田精一…24
短歌　行雲流水（四十八）……石黒修身…35
漢詩　潮騒録（八十三）《漢詩の流れ71》……鯨游海（くじらゆうかい）…38
漢詩　汲深録（三）……松井秀人…41
ロボット雑考（その三）……三戸岡道夫（みとおかみちお）…43
関東管領始末記⑳　御舘の乱……千坂精一…62
古い物・遠い夢「織部」いま（茶道史余滴）……忠内正之…71
『時評家　新明正道』（評伝その四）……山本鎭雄…85
性と化粧の物語（四）……鈴木　守…100
「司馬雑感」あれこれ（3）……山田嘉久…108
千家尊福伝（一〇）……村上邦治…115
　貴族院議員になった八〇代出雲国造
殉教（十）……鍋屋次郎…125
明治時代の著述者　渋江保の一生（その四）……山本　勉…143
密室銀行（二十二）……匠　克仁…150
白豚に乗った王女様……匠　克仁…157
編集後記……編集　子…165
表紙絵……田寺怜葦（たでられい）

「遥かな友に」

新井　宏

『まんじ』の同人・鯨游海さんの漢詩サロン「鯨游会」に平成十九年七月から参加している。本来は鯨さんから漢詩を学ぶ会だったようであるが、私が参加した頃から、漢詩勉強会と共に鯨飲会の性格も強くなっていた。

二ヶ月に一回のペースを保っていて、参加してから既に五十回ほどになる。次回は百四十二回というから二十五年近くの歴史がある。

主人公の鯨さんが昨年来、体調を崩して五回ほど欠席したが、その間も間断なく続いているのは、何よりも鯨さんの人柄であろうが、それと共に、幹事の伊藤清功さんのお世話のお蔭である。

伊藤清功さんは、鯨さんの銀行時代の後輩であるが、詩吟にも長じている。なにしろ、美声で、時には会場外まで圧するほどの声量で、鯨さんの「七言絶句」などを即吟する。

伊藤さんのもう一つの趣味は美声を活かしたコーラスである。町田市の男声合唱団「マルベリー」のセカンド・テノールで、有力団員の持ち回りらしいが、公演に誘われた頃は「団長さん」と呼ばれていた。合唱団は平成元年の創立で、団員は四十名～五十名、平均年齢は現在七十歳とかで、有名企業の経営者ＯＢ等も大きな声を張り上げている。

美しい響きの団名「マルベリー」は創立時の指揮者高桑勝氏の名前「桑」に因むというが、語源は英語のようで、スウェーデン語、フランス語、スペイン語も共通である。

濃紫色の桑の実はストロベリー（藁ベリー：いちご）に似て、食糧難で甘い物のなかった幼い頃よく摘まんで食べた。

定期公演会はいつも町田市民ホールで行われているが、九百ほどの席がほとんどいっぱいになる盛況である。毎年、耳慣れない新しい曲にも挑戦しているが、やはり安心して聞けるのは、「フォレスタ風」のレパートリー曲、古典的な合唱曲や唱歌、学生歌、懐かしのメロディ等である。

アンコール曲にしばしば出てくるのが「遥かな友に」である。早稲田大学グリークラブを指導した磯部俶の作詞作曲というが、各大学のグリークラブの定番曲で、静かで緩やかな曲想、歌詞もそれほど特別には思えない。しかし、不思議に魅了される。

1　しずかな夜ふけに　いつもいつも
　思い出すのは　おまえのこと
　おやすみやすらかに　たどれ夢路
　おやすみたのしく　今宵もまた
2　あかるい星の夜は　はるかな空に
　（繰り返し）
3　さびしい雪の夜は　いろりのはたで
　（繰り返し）

歌詞の全体的な印象は、去りゆきし恋人を思いながら「おまえ」と呼びかけているように思える。しかし「安らかに」とあるので若くして逝った友かも知れない。ところが「おやすみ楽しく」ともあるので、あるいは郷里の友、病める友、障害のある友のようでもある。いずれにしてもそこには、青春の「懐かしさ」が漂っている。

合唱曲の中で似たような印象を持つのが、シューマンの「流浪の民」である。伴奏のピアノ曲が単独でも演奏されるほどメロディが華麗であり、古風な訳詩も「懐かしさ」を漂わせる。しかもこの曲は、わが青春と共にあった。

前号の「月は上りぬ」でも、母校都立小山台高校のことを書いた。入学当初から新聞部の主力メンバーとして、放課後は校舎中央部にある八角塔の下の部室に詰めて黒板新聞の記事を書いていた。

部室の斜め下には音楽室があり、いつも放課後、女生徒が「エリーゼのために」を練習していた。練習とはいえ、生の音楽は心地よいものであった。

そうこうしている内に、合唱コンクールでも近づいたのであろうか、「流浪の民」が始まった。

ピアノが響く。混声合唱が天使の声に聞こえる。それをまたピアノが昂揚する。それ以来合唱曲といえば懐かしさに満ちた「流浪の民」となった。曲想が大きく異なる無伴奏の「遥かな友に」ではあるが、不思議なことに懐かしさは共通する。

「遥かな友に」についてインターネットで調べてみる。

作詞作曲の磯部俶は大正六年、東京大森生まれの合唱指導者・作曲家で十五年間早稲田大学グリークラブの専

それは昭和二十九年秋、私が小山台高校二年生の時であった。卒業した荏原第四中学校の五期生であったので、初めての同窓会準備の実行部隊として、一学年下の後輩達と共に走り回っていた。その中に八潮高校に通う川上初美さんもいた。

記録を見ると同窓会は十一月中頃に行われている。おそらくその反省会の席であろうか、川上初美さんから八潮高校の文化祭に誘われたのである。八潮高校は府立第八高等女学校の後身で、私の通っていた小山台高校（府立第八中学校）とは何かと「対」の関係にあった。絶好のチャンスと大喜びであった。

ところが、その前夜の反省会で、先輩達と焼酎の梅割りをガブ飲みして、酷い二日酔いとなってしまった。先輩と言ってもほとんどが二十歳前で、誰もまともな酒の飲み方を知らなかった。

さすがに、頭痛と吐き気で苦しかった。朝、家を出たが、よほど途中で引き返そうかと思ったほどで、文化祭もふらふらしながら見て廻わり、川上初美さんと会えたのかどうかさえあまり記憶がない。ただ、体育館か講堂の垂れ幕にNHK合唱コンクールで最優秀賞を受賞したと大書されていた。そして薄暗い会場に入り、腰掛けていると、多少二日酔いもおさまってきた。

この年のNHK合唱コンクールのラジオ放送は、十一月中旬に行われたので、文化祭が合唱部の凱旋公演だったに違いない。当然、課題曲、自由曲の他に、いわばアンコール曲も演奏されたであろう。「遥かな友に」が入っていたとしても全く不思議では無い。

もしかしたら小山台高校の「流浪の民」も、NHK合唱コンクールに向けて準備していたのかもしれない。だからこそ、「遥かな友に」を聞いて「流浪の民」と共通する不思議な懐かしさを感じたのであろう。

その後、川上初美さんとは三十年間以上、全く没交渉であったが、昭和六十三年になって、荏原第四中学校創立四十年周年の同窓会を開きたいとの学校側の要請で、昔の関係者が招集されたのが縁となり、年賀状の交換が始まった。

いつもご主人と連名の美しい賀状の余白に、小さな文字で五～八行びっしりと近況を伝えてくる。ほとんど途切れる年もなく、昨年の賀状まで二十五年間ほど続いていた。

年賀状だけの交流が続いていた中で、東日本大震災の起きた平成二十三年の三月二十六日、わが母校の荏原第四中学校が統廃合で無くなってしまうというので、最後の同窓会が開催された。

その時、初期の卒業生グループの中心として、一学年下の六期生が主体となって会の設営をしてくれた。

創成期の同窓会から何かと深く関わり合っていた私ではあったが、地元を離れて既に四十年も経っていた。幹事会に出席すれば、最年長組となるかも知れない。やはり適当な理由を付けて欠席した方が無難である。しかし、最小限の協力はしなければなるまい。

そこで、賀状などを頼りに個人的な交友関係をたどり、連鎖メールチェーン（幸福の手紙方式）によって同期生に出席を勧誘することにした。

これは、手数もかからずなかなか効率的であった。この種の会は、誰が出席するか判らないと、つい気後れするものであるが、知人からのチェーンメールなら様子が分かり、出席してみる気になる。その結果、意外や意外、直近の卒業年次を除いて、最も多くの参加者を集めることが出来た。

会場には、多数集まった五期生の他に、一学年下の六期生グループも群れを作っていた。しかし、そこには川上初美さんの姿はなかった。最終同窓会の総務役ともいうべき遠藤京子さんに訊ねると、川上初美さんは、数年前から筋ジストロフィー症を病み、もう首が動かず、ほぼ寝たきりの生活だという。

しかし、まさかそんなはずはあるまいと思った。

任指揮者を務めた。ボニージャックスの育て親でもあり、元学習院長の磯部忠正の弟だという。

曲が作られたのは昭和二十六年、早稲田大学グリークラブが神奈川県津久井渓谷・夫婦園で夏合宿をしていた夜、新入部員が枕投げなど大さわぎをしてなかなか寝ないので、「何か静かな曲を作ってください」という四年生部員の依頼によって、その場で即興的に書かれ、四人のパートリーダーによって歌われたと伝えられている。この頃、早稲田のグリークラブは分裂騒ぎで荒れていたことも関係していたのかも知れない。

夫婦園は、私の住む相模原市の緑区青根にある。

ついでにインターネットのユーチューブで「遥かな友に」を聴いて見る。

そこには各大学グリークラブに混じって、都立八潮高校合唱部が登場する。そういえば当時の八潮高校はNHK合唱コンクール常連の最優秀校であった。昭和二十七年から三十一年までの五年間に四回も優勝している。

そこで閃いた。もしかしたら、この「遥かな友に」を八潮高校の文化祭で聞いていたのではないかと。きっとそうだ。そうに決まっている。

そして昨年、筋ジストロフィーという難病で逝った川上初美さんのことを思い出した。

そう思って、その年（平成二十三年）の年賀状を見ると「……荏原四中の先生方への賀状も数学の久保田先生と体操の藤田先生だけとなり淋しいかぎりです。新井宏先輩もどうか今年もお元気で貴重なご研究を進められてくださいね。勉強させていただいています……」と例年と特に変わった様子を見せていない。

その前年（平成二十二年）を見ても「……昨年は白内障の手術をしてやっと世間が広くなったような気がしましたが、そろそろ好きな読書習慣をとり戻さないとますます世相にうとくなりそうです。今年もご活躍のほどをお祈りしております……」とある。既に筋ジストロフィーの症状が進んでいたはずなのに、不安な表情を全く見せていない。

いやそればかりではない。同窓会の翌年（平成二十四年）の賀状にも、「……昨年の四中の同窓会に出席した石井敏夫さんが、新井先輩、とてもサッソウとしていたと電話を下さりうれしく思いました……」とあり、例年と何も変わらない。石井敏夫さんは小山台高校の後輩でもあり、既にリタイアーしていたが、テレビ業界ではかなり知られた人物である。

ついでに同窓会の翌々年（平成二十五年）の年賀状も見ると、「……新井先輩を見習って何か自分でも出来そうなテーマを見付けられたらと思いながら下らない三文シナリオを持ち込んで脚本家の先生に笑われています……」と、ここでも病気のことには何も触れていない。

当方からの年賀状と言えば、いつも不特定の友達宛に、同一文で近況を書いて送るだけのものである。確かに「近況」にしては詳しい内容であるが、川上初美さん宛に、特に追記した記憶もない。それなのに、いつも丁寧に付き合ってくれていた。そして気付いた。

筋ジストロフィー症とは、未だ治療法が確立されていない難病で、進行性の遺伝性筋肉萎縮によって、初期にはつまずきやすくなり、やがて歩行困難、更には多臓器で障害が起こると言う。川上初美さんの場合の経過は知らないが、おそらく、かなり前から病気には気付いていたのではなかろうか。当然、社会生活は大きく制約されたであろう。活動的であった彼女にとって外界との遮断は、耐えがたい苦痛であったに違いない。そのため、私の賀状でさえも、彼女にとって「小さな窓」であり情報源となっていたのではないか。それを利用して友人達との交流をしていたのではないか。それにしても、衰え行く身体と向きあうことがどんなに不安であるか、私の今の歳になると判る。

年賀状をもっと遡って読んでみる。いつも明るく便りをくれた川上初美さんでも、その中に、筋ジストロフィーに気付いた頃のことが現れているかもしれない。

そう思って遡って見ると、平成十七年の賀状には「……この一年ほど民族・宗教について考えさせられた年はありません。結局は自分の生きる道を見誤らず生きるしかないのでしょうが……」とあり、平成十九年にも「着々と偉大な業績を残されていらっしゃる新井先輩をとても誇りに思っています。そろそろ店じまいを考えている自分が情けないです」とある。その頃から症状が現れていたのにちがいない。

それにしても、世の中には、病気になるとその不安を軽減するため、やたらと自分の病気のことを語る人が多いが、他人に不安を転嫁したところで、自分の不安が軽くなるはずはない。いやむしろ不安を増殖するのが関の山である。それに比べて、川上初美さんが何とすばらしかったことか。

彼女の最後の年賀状は昨年（平成二十六年）のものである。いつものようにご主人と連名の賀状に、ご主人の字で「家内は手の痺れでペンが持てませんが頑張っております」と書かれていた。

そしてその年の年末には、ご主人から「……初美が一月二日に七十五歳にて永眠しました……」との悲しい連絡が届いた。けなげな年賀状を頂戴した直後には、もう既に「遥か空に」逝っていたわけである。

実は、川上初美さんについては、高校生の頃の印象しか残っていない。色白で清楚、快活、理知的な佳人であった。七十歳過ぎても「新井先輩」などと言う童女でもあった。

それから六十年間、お互い、高校生の頃の先輩・後輩のままの交友だった。だから、本稿も旧姓の川上初美さんで通したが、いつも連名で賀状を送って下さったご主人は伊藤英也さんという。彼女に相応しい心優しい人柄だったに違いない。

どうやら私の人生、中学校の友達でも、高校の友達でも、大学の友達でも、職場の友達でも、よいヤツから先に逝く。女性も例外でなく佳人から逝くらしい。

あかるい星の夜は　はるかな空に
思い出すのは　おまえのこと
おやすみやすらかに　たどれ夢路
おやすみたのしく　今宵もまた

来年のマルベリー合唱団の公演でもまた、アンコールにこの無伴奏男声四部合唱「遥かな友に」が唱われるであろう。その時は、我が青春時代を思い出しながら川上初美さんを思って聞きたい。

定年チェンジ・ファーマー

古屋富雄

7・7%、第1種兼業農家13・8%、第2種兼業農家58・5%です。専業農家率は30%に満たない状況であり、さらに*自給的農家897千戸を加えると構成比率は205を切ってしまいます。

言い換えると805以上が農業以外の何らかの職業を持った兼業農家といえます。

そこで、自給的農家を含めた兼業農家の継続・育成を図りつつ、安定した担い手の確保を目指す兼業農家の新たなライフスタイルを提案します。

農業の継承を定年後（55歳から60歳）と家族間で予め決めておき、親から子へ、子から孫へと農業を継承させるビジョンで、その名称を「定年チェンジ・ファーマー」とします。

定年までは会社などに勤務し、定年後の安定した経済基盤を厚生年金や共済年金、退職金などで準備することができるサラリーマン生活を送ります。そして、農業の

「定年帰農者」という言葉は、農業関係者の間ではよく使われています。

その意味は、農村出身者が定年後に故郷に戻り農業に従事する。または、出身地を問わず定年退職者が農村に移住し、農業に従事するということです。

南足柄市では、2008年10月1日に施行した「南足柄市新規就農基準」により自立できる農家の育成を行っています。さらに、2009年9月1日には、定年後農業がしたい人などを対象にした「市民農業者制度」を施行させ、農家以外の多様な担い手の確保に努めています。

農家は、専業農家と兼業農家に大別され、10年農林業センサスの専兼業別農家数*（販売農家）によると、販売農家総数1、632千戸のうち専業農家452千戸、第1種兼業農家225千戸、第2種兼業農家955千戸が報告されています。それらの構成比率は専業農家2

仮に、55歳で会社を退職しても、この年金に加入することにより、国民年金に上乗せした年金の受給により、老後の生活費の担保としても効果な手段と考えます。

また、奥様が農業従事者の場合は、一緒に加入することができ、「老後の妻へのプレゼント」にもなる年金と考えます。

もちろん、兼農サラリーマンが、南足柄市新規就農基準（1、000㎡以上の農地の借り受け）により農家として認められ、かつ、その農業従事の実績が農業委員会などに認められれば、多いにこの年金が活用できるものと考えます。

「定年チェンジ・ファーマー」は、「定年帰農者」のように単に定年後、農業をするという漠然的な就農形態とは違い、親から子へ、子から孫へと継承される就農形態であり、自給的農家を含めた兼業農家の継続・育成に寄与できるものと考えます。シルバー世代が日本の農業の一翼を担う「定年チェンジ・ファーマー」こそ、発想の転換であり、大きな可能性を秘めた農業施策の試行ともいえます。

「定年チェンジ・ファーマー」が農業関係者に広まることを期待します。

継承を定年後と予め決めた人生設計を意識することにより、定年後に向けた農業技術の習得や地域のコミュニティーとの関わり方などを積極的に学ぶ姿勢が醸成されると考えます。

例えば、休日には、トラクターに乗り、草刈り機を使うという農業に従事する生活を送る中で、地域の風習や祭りなどの行事にも自然と関心を持つようになるでしょう。

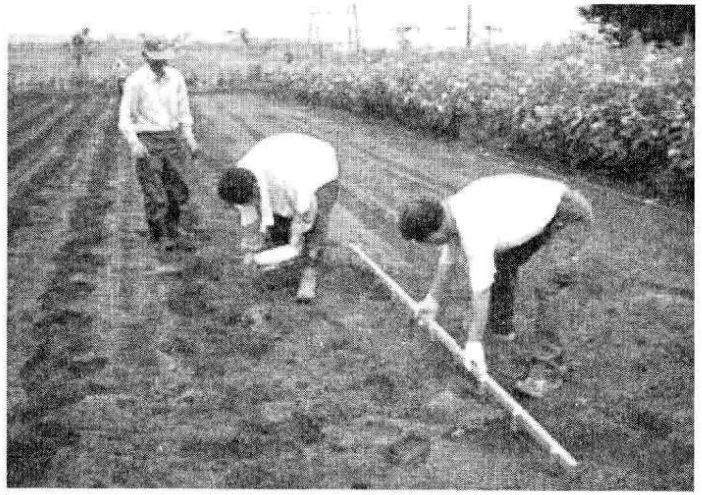
このように定年後を見据えた生活習慣がスムーズな農業継承に繋がると考えます。

また、60歳では、農業に従事するには、年齢的に遅いと考える人も少なくありません。このような人は、会社を退職し、国民年金の*第1号被保険者になれば、農業者年金に加入することができます。

農業者年金は、厚生年金や共済年金などのような*賦課方式ではなく、*積立方式のため、景気の変動などに影響されるリスクはありますが、自ら積み立てた保険料は、将来の自分の年金給付に使われ、加入者や受給者の数に左右されない安定した財源が確保されたシステムと考えます。

そして、その保険料は、月額2、000円～67、000円を上限として、契約することができ、その年額の保険料の全額が、所得税や住民税の社会保険料控除になります。

＊第1号被保険者とは、農家などの自営業や学生、無職の人などが加入する国民年金だけの加入者のこと。
＊賦課方式とは、働く現役時代の人が払い込んだお金を現在の高齢者に支給する方式のこと。
＊積立方式とは、若い現役時代に払い込んだお金を積み立て、老後にお金を受け取る方式のこと。
＊販売農家とは、経営耕地面積が30ａ以上または農産物販売金額が50万円以上の農家
＊自給的農家とは、経営耕地面積が30ａ未満かつ農産物販売金額が50万円未満の農家



頑張る中高年

秋の七曲（ななまがり）への散歩

横山正義

一、七曲の池

七曲とは静岡県菊川市にある、貯水池の名前です。七曲という場所に池が作られたので、皆さんが七曲の池と呼んでいます。

内田『名所・人物』百選（郷土を愛するうちだっ子はぐくむ協議会。参照）誌によれば二万四千立方メートルの水を蓄え、百六十七ヘクタールの田畑に水を送っている、とある。

東名掛川インターチェンジの出口に人目をひく、大きな七曲池の案内掲示板があり、日本各地から、ヘラブナ、バス釣りのメッカとして名が知れています。

私は秋の晴れ渡った日、二キロほどの道を、秋の七草狩りに行ってみようと、思い立ちました。オバナ、クズ、ナデシコ、朝顔、フジバカマ、萩、オミナエシなどを追つていきました。

二、平尾八幡宮と柿木神社、大蔵寺

まず八幡神社にお参りをし、中伊豆狩野城にある、柿木神社と同じ柿木神社があったという故地に拝礼し、神社の守護寺・大蔵寺の十一面観音を拝しました。

道は二十メートルほどの高さの尾根の間、蛇のような山間地の細い、田のなかの道を進みます。

七曲の池に行くには、東平尾と西平尾どちらからも行くことができ、どちらも蛇のような、地形で、尾のところに池があるのです。

三、慈恩寺

東平尾に大蔵寺を創始した粟田信麿の伝承があり、西平尾には石田三成の女子たえ姫（多恵姫か？）が建立したとされる、まぼろしの尼寺慈恩寺の伝承があり、まさ

に夫婦龍なのです。
中国の古代神話に人類の始祖となった、人頭蛇尾の聖夫婦の『伏羲と女媧』の話があり、太古の大洪水にただふたり生き残った兄妹が、やがて夫婦になって、始祖となったというお話があります。

慈恩寺の物語
静岡県菊川市
内田「名所・人物」百選（郷土を愛するうちだっ子はぐくみ協議会。参照）

「じおんじ」という地名に残るお姫様のお話
枯木ヶ谷の奥に「じおんじ」という池があります。枯木ヶ谷という地名は千三百年前、天武天皇の時代にすでにあったといいます。関が原の戦いで、徳川家康に敗れた西軍の総大将石田三成の娘「たえ姫」は何人かのお供とともにこの地に落ち延びてきて、今の「じおんじ」池の奥の小高いところに、粗末で小さな小屋を立て、戦場で亡くなった人達の供養をしていました。尼さんの茶を立てる金の茶釜の音が枯れ木ヶ谷じゅうになり響いたという。尼さんは旅にたったきり、帰ってくることはなかった。どこに行ったのか。
考えられることは 徳川家康の十男徳川頼宣が連れて行ったのではなかろうか。

私は考えてみました。仮説です。
同じ平尾村の中に、遠江の領主となり、のちに紀州藩藩主となった徳川頼宣の屋敷があり、時には、巡行のとき、徳川頼宣が立ち寄ることもあったのでしょう。
徳川頼宣は石田三成の娘の話を聞き、あわれみ、紀州に連れて行き、紀州の町医者・佐藤三益の妻として、頼宣が三十扶持を送ったということで、話が繋がります。
紀州屋敷跡と徳川頼宣お手植えの「なごみ」の木といわれる、梛（なぎ）の巨木が現在、平尾八幡宮に残こされています。
どうして、当地内田に「たえ姫」が来たのか。
近江の国は大陸と交流のある国で、それを証明する文化財も沢山あります。
内田は以前「からこ」郷と呼ばれ大陸の文化があったことに、起因するのではないか。
現在、近江には湖東三山百済寺、湖南石塔寺、立命館大学敷地内古代溶鉱炉跡、大津京敷地跡、百穴古墳、三井寺、三井寺守護神新羅明神神社、朝鮮人街道、鬼室神社、渡来人歴史館などがあり、先祖は渡来人といわれる。そして当地には西暦八五三年（仁寿三年）創立の滋賀県大津市延暦寺三世座主円仁創建の応声教院があります。その他に大津市三井寺の荘園がありました。
「たえ姫」が佐和山城を家人と脱出するときは、兄弟の次男八郎と伴に出たが大勢で目立ち、徳川方の西軍狩

りを恐れて、東西に別れてにげたのではないだろうか。
どうして「慈恩寺」という寺名をなずけたか。それは佐和山城が井伊直政に攻められ、逃げて内田まで来る途中、五個庄と亀山にある寺名です。
そして中国の「慈恩寺」の古事、高宋が母文徳皇后の慈恩に報いるために創建したのに倣ったのはないか。
たえ姫の自決した母への慈恩を偲ぶ、気持ちからでしょう。

内田と徳川頼宣の関係を調べます。
徳川家康は慶長十二（一六〇七）年に駿府城に入城し、二年後慶長十四（一六〇九）年に十男の徳川頼宣が駿河・遠江五十万石の大名として入部する。
徳川家康元和二（一六一六）年四月死亡。
徳川頼宣は元和五（一六一九）年七月に紀伊和歌山に五十五万石で転封し、御三家の祖となりました。

石田三成家の系図
『稿本石田三成・渡辺博士著』『石田三成のすべて・安藤英男』参照
石田三成は慶長五年（一六〇〇）九月十五日、大垣城を出て、関が原で徳川家康率いる東軍と戦い、敗走する。
同月十八日井伊直政により、攻められ佐和山城陥り、父正継、兄正澄、三成室自決。

三成は従四位下治部少輔・豊臣氏奉行近江佐和山城主三十万石家紋寄り九曜　旗印大一台大万大吉　慶長五年十月一日京六条川原にて絞首刑となる。享年四十一歳

室
宇多頼忠の息女慶長五年九月十八日佐和山城中で自決。

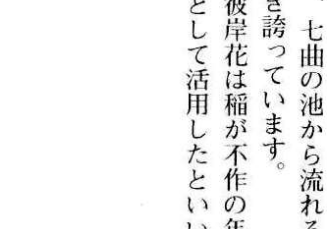
父、石田正継
従五位下隠岐守近江の内で三万石。慶長五年九月十八日佐和山城中で自決。

兄正澄
従五位の下木工頭・堺町奉行近江河内二万五千石慶長五年九月十八日佐和山城中で自決。

重家
長男・隼人正、関が原役の時に大阪城の秀頼に伺候、敗戦後に京都妙心寺寿聖院に入り済院宗享禅師として貞享三年閏三月八日死去

八郎
次男八郎右衛門　佐和山落城後に家人の出来蔵、三蔵の両名に守られて備中国小田郡吉田村に帰農　庄屋相勤石井氏初代。

石田三成家系図



参考

＊慈恩寺・滋賀県神崎郡五個荘清水鼻二七二　東海道線能登川駅　正平年間の開創。領主佐々木六角判官氏頼が母菩提のため創立。

＊慈恩寺・三重県亀山にあり、廃寺となり、寺名を変更。

＊慈恩寺・中国唐代の長安に建てられた貞観二十二年（六四八）当時、皇太子であった、高宗がその母文徳皇后の慈恩に報いるために創建したもの。

さらに進めば、七曲の池から流れる稲ヶ部川の土手には、彼岸花が咲き誇っています。

いにしえに、彼岸花は稲が不作の年、球根を灰汁抜きし、炭水化物源として活用したといい、米作と一緒に南洋から伝わったということです。

エメラルド色の池が見えると池の東に駒鼻取地蔵大菩薩という祠があります。

四、駒鼻取地蔵大菩薩

静岡県菊川市

内田「名所・人物」百選（郷土を愛するうちだっ子はぐくみ協議会参照）

駒鼻取地蔵は、七曲池の東の高台に御祭りされています。今から約千二百年前に龍雲という、とても偉いお坊さまがお祭りしたのが始まりと伝えられています。この地蔵様の正式な名前は駒鼻取地蔵大菩薩といいます。

今は七曲池の底に沈んでしまいましたが、その昔、内田山という低い丘があり、竜雲が駒形庵というお堂を建て、お地蔵様をお祭りし人々の幸と平和をお祈りしながら、人々は暮らしていました。

このお地蔵様は駒の鼻をつかみ、鼻を取るように引つ張つて畠や田を耕しましたので、駒鼻取地蔵と名づけられて、特に農業や病気のお守りとして人々の信仰を集めました、とある。

背景と解説

竜雲和尚が地蔵を創建したというから、最初は雨乞いの地蔵であったのでしょう。竜雲和尚とは誰であったのでしょう。それは同じ集落のなかに住む、霊験あらたかな良信和尚が想像されます。

そして年月を経ると、農民が困窮した時に助けてくれるお地蔵菩薩に変貌したのでしょう。

参考文献によれば、その昔、日照りが続づき、不作が予想され、田の水に困った時、人々はお地蔵様に願をかけたのでした。お地蔵様は願を掛けた人が過去に、お地蔵様を信仰していたか、冥界で良く調べ、積善の人であれば、河童を呼び、馬を池の中に引っ張り込ませ、窒息死させると、「けがれ」を、竜神が怒り、龍雲が起き、雨が降ってくるというのです。

地蔵が村はずれにあるのは、亀頭の風貌で、男根であり、ご利益は他所からの悪霊を防ぐ役目があるのです。

地蔵菩薩の役目は閻魔王と伴に同じ、冥界で「死者の生前の行為から賞罰を与える神仏」なのです。

参考に文献より地蔵菩薩について

参考一、『山島民譚集』「河童駒引」柳田國男著（甲寅業書刊行所）

牛馬ノ首ヲ水ノ神ニ具供疎ヘタル上古ノ儀式ヲ水ノ神ニ捧グル風ハ、雨乞ノ祈祷トシテハ永ク存シタリキ。

参考二、

『山島民譚集』「河童駒引」柳田國男著（甲寅業書刊行所）

「水神」

水神ト河童トハ假ニ、一歩ヲ退キテ最初ヨリ別物ナリトスルモ、少ナクトモ牛馬ノ災ヲ避クル為ニ水神ニ祈祷スルノ風習ノ広ク行ハレシ事ノミハ事実ナリ。毎年春ノ初又は夏ノ終ナドニ、牛馬ヲ引キテ川ニ入レ又は川原に於テ一日遊場バシムルコトハ、其一年中ノ災ヲ攘フ為ナリト信ゼラレ、農家ハ厳重ニ此行事を勤メタリ。

参考三

『今昔物語』巻第十七

「陸奥国女人依地蔵助得活語第二十九」

此ノ尼不出家ザリケル時、形チ美麗ニシテ心柔和也ケリ。此ノ女身ニ病ヲ受テ、日来悩ミ煩テ遂ニ死ヌ。冥途ニ行テ、閻魔庁に至る。

「地蔵菩薩来リ給ヘリ」

「我レハ此レ三途の苦難救フ地蔵菩薩ナリ」

地蔵菩薩

「今既ニ被召タリト云ヘドモ、速ニ返シ遣シテ、弥ヨ善根ヲ令修ムト思フ。如何に」ト。

閻魔王答テ宣ハク、

「只仰セノ旨ニ可随シ」

地蔵菩薩

「極楽ノ道ノシルベハ我身ナル心ヒトツガナホキナリケリ」

女は生き返りました。

参考四

『柳田國男集第二十七巻水引地蔵』

薩州鹿児島の西郊江月門と云ふ処の農夫、一日田を耕すに牛労れて鞭うてども行かず、日も夕に傾かんとす、素より村長の遺責急なれば甚憂ひ苦しんだ。時に一人の小僧忽然として来り牛の鼻を取り之を牽けば、進むこと常に倍し容易く数畝の田を耕し終った。寺の名を問へども荒爾として答へずに去る。家に帰って後日頃信心する地蔵を拝する御脛泥によごれて居た云々。今の西田村茶園迫にある鼻取地蔵堂は即ちこの地蔵である。

参考五、

『雨乞い風俗の研究』高谷重夫　法政大学出版局

雨乞い儀礼の諸相

『名杖探草』（暁隣蟻士著、安永七年序）より

滝の肩に龍穴あり。その深きこと人是を計るに知れず、土民雨を祈るに白馬の首を切って龍穴を穢すに忽大雨すといへり。滝は竜神の住みかであったのです。

参考六、

『出羽の国秋田領風俗問状答書』

羽後仙北郡花館村の龍官明神の水の神で、昔、神体は石の地蔵であった。これを土地では雨地蔵もしくわ雨乞い地蔵と唱えて、旱のときは綱で縛って洪福寺淵に沈めておくと雨がふるという。

参考七

柳田國男翁の『遠野物語』（増補版、一五二ページ）

岩手県の遠野地方では、滝壺に馬の骨等を投げ込んで、汚れで雨神さまを誘う雨乞い法が行われていたという簡単な記事がある。

五、墓地

池のほとりの西側を進むと、山の尾根から東に、龍の指が出たように、池の中に突き出て、この道が七曲りです。駒の死、水による人間の生、まさに生死です。紺碧の池面に、うるしの木が二つ三つ、赤く色ずいた紅葉が写っています。

道は九十九折りに進み、坂道を尾根まで進むと、池に注ぎ込むV字谷となり、尾根の上に到達すると、旧平尾村から旧森村との境で、広い墓地になり異界になります。

ここから東を見ると、雄大な富士が見え、東に小笠山に連なる山々が南北に屏のように立ちはだかります。夜明け前に来ると、北に北斗七星が鮮やかです。

六、北斗七星

平成二十四年、私は死した母を病院から搬送して、家に搬入しました。翌日、私がなんだか早く目がさめたので、家の外に出ました。まだ薄暗く、中秋のこれ以上澄み切った空は、みたことがないほど、すっきり夜空に光輝いていたのは北斗七星でした。

北斗七星は中国では人の生死と禍福を司る神様なのです。

＊七という数字の謎

女性が妊娠して、子供が生まれる日数は二十八×十、プラスマイナスで、排卵が二十八日で七の倍数です。鶏、ネズミ、猫等は二十一日、ダチョウは二十八日で生まれ、やはり七の倍数です。

＊暦は七進法で、人々は死の遺伝子も七の倍数日の上にあると、想像したのでしょう。そして死して

初	七日	秦広王	不動明王
二	七日	楚江王	釈迦如来
三	七日	宋帝王	文殊菩薩
四	七日	五官王	普賢菩薩
五	七日	閻魔王	地蔵菩薩
六	七日	変成王	弥勒菩薩
七	七日	太山王	薬師如来

と続き七の世界です。

＊七趣

衆生が死後に赴くところ。地獄・餓鬼・畜生・人・神仙・天・阿修羅北斗七曲はまさに人々にとって生死の狭間なのです。七曲までが水の湧き出る生の世界、尾根に上がれば死の世界なのです。

＊七逆

父を殺す、母を殺す、阿羅漢を殺す、衆僧の仏道修行を妨げる、僧に傷害を加える、和尚を殺す、阿闍梨を殺す。

＊七殺害死

最初に参拝した柿木神社のふるさと狩野城の落城は、北条早雲こと伊勢新九郎長氏に猛攻を受けることによるものでした（延徳三年・一四九一）。里の人々の伝承は次のとおりです。

城将は自刃する者、殿淵で自殺する者など全滅してしまいました。残されたのは七名の婦女子です。柿木神社に一枚の鏡を奉納し無事を祈り逃走しました。里人は財宝を奪うため、残された女子を皆殺しにしてしまいました。婦女子の怨念に里人は慄いた、と伝えられています。死の世界です。

＊七騎落ち

狩野城城主狩野茂光が支持した源頼朝が、治承四年（一一八〇）八月二十二日、石橋山の戦いで、惨敗し、土

肥の真鶴ヶ崎から安房の国北郡猟ヶ島というところに逃亡する時の武将が、八騎では縁起が悪いと、土肥遠平を外して、七騎落ちです。七騎の侍は北条時政、同じく義時、土肥実平などです。のちに頼朝は鎌倉幕府を開く、武将になるのですから、これぞ生です。

世界で、最初に一週間を七日としたのはバビロニアとユダヤ教です。ユダヤ人は週単位で生活したのでした。根拠は『創世記』で、神は六日で天地を創造し、七日に休息したと書いてあるからです。(紀元前五八六～五三八)

そして尾根は岩井寺、熊野速玉神社を奉る小笠神社、熊野信仰へと繋がっていくのです。

七曲の地は南北に連なる、小笠山、小笠神社の真西にあたり、大陸から偏西風に乗って、若狭湾を抜け、愛知県を抜け、浜名湖の水分を含み、小笠山の最高蜂台二メートルで冷やされ、竜雲を呼び霧がかかり、雨が多いのです。

お茶の最適地で、茶商には涎垂のお茶なのです。

農家が明治の初め、いち早く、報徳社から、仕法と資金を調達し、お茶の近代化を実現したのでした。

七、高天神の戦い

静岡県菊川市

内田「名所・人物」百選(郷土を愛するうちだっ子はぐくみ協議会参照)

山坂を登り、尾根に沿って歩くと、村人が高天神の霊であったという「上の原のお墓様」のお堂があります。

大正二年(一九一三)二月の上旬、栗原の鈴木新太郎さんが山を切り開いていたところ、誰とも分からぬ古いお墓を見つけました。お墓に手を付けずに関わりを避けていたところ、新太郎さんが原因不明の目の病気になり、失明してしまいました。困り果てた新太郎さんと家族の人たちは、たまたま堀川芳太郎の家に来ていた「占い師」に見てもらったところ、占い師は姿勢を正し、遠くを見つめ祈りをあげて、次のように言いました。

「高天神の戦いに敗れた武士の霊がこの地に宿っています。先祖と同じように手厚くおまつりなさい。そうすれば末永くこの地と新太郎さんの家族は守られるでしょう」

新太郎さんの家族は先祖様がお世話になる応声教院にお願いして、お堂をたて、手厚くおまいりしたそうです。新太郎さんの目の病気は霧がはれるように治ったそうです。

高天神の、武田、徳川の戦いは、地元にとって慶賀の戦いです。

戦争ともなれば、食料など、現地調達など美名のもと、殺人、略奪、婦女強姦などが起こり、農民は逃げなければならないのです。

徳川氏が天下統一し、二百七十年も平和な日が続く、戦いだったのです。

徳川氏は戦国の世を、平和に導けば、無償の殺生をしなかったのです。

平尾八幡宮を祀る栗田氏は徳川と戦った、武田側の武将であったが、統治能力があると判断したので、徳川氏は二十石を与え、平尾八幡宮の神官を務めさせ、高天神城の戦いで死した霊が怨霊や死霊となり怨みをもたないよう御霊神となり、この地を治めるように栗田家祖先に念じて、徳川家康は馬上の人となり、東の方に去っていったと、栗田家の由緒は伝えます。

八、凱旋山

静岡県菊川市

内田「名所・人物」百選(郷土を愛するうちだっ子はぐくみ協議会参照)

さらに尾根を進むと、凱旋山と呼ばれる、日清戦争、日露戦争で戦い、無事生還を果たした人たちの記念碑があります。農家の若者が参戦し最前線から帰還するのは、『将、功なりて万骨散る』といわれた時代で、大変慶賀の至りなのです。

七曲の池からは五百メートルほど上(かみ)で尾根下には、上池が広がっています。

尾根越えをすれば田になり栗原川があり、下流に行くと、上小笠川と合流します。合流のデルタ地帯の矢崎におんびん様という比丘尼堂があります。

九、おんびん様

静岡県菊川市

内田『名所・人物』百選(郷土を愛するうちだっ子はぐくみ協議会参照)

矢崎橋というところにある比丘尼堂、嘉永四年(一八五一)十一月七日に十九歳の比丘尼が死亡したので、祀ってある。おんびん様は、婦人科の病気を治すご利益があるという。

女性の神仏が橋のたもとにあり、自然の河という神世と人間の住む現世との、境にあるのです。

境ということは、生死、禍福のさかいにも通じ、生死禍福の神でもあるのです。

兄妹の近親相姦の道祖神、同性愛の姉妹道祖神など、神世と現世の境、峠、橋、辻などにあるのと同じです。

橋の袂にあるのは、女性信仰は他所からの悪霊の進入を防ぐのです。

比丘尼であること、うら若い女性であることは、霊能力が大変高いのです。

そして新しいことも、より霊能力を高めるのです。

巡礼の比丘尼は由緒ある神社仏閣に宿泊すると思いますが、橋の袂で亡くなったのですから、宿（しゅく）があったのかもしれません。

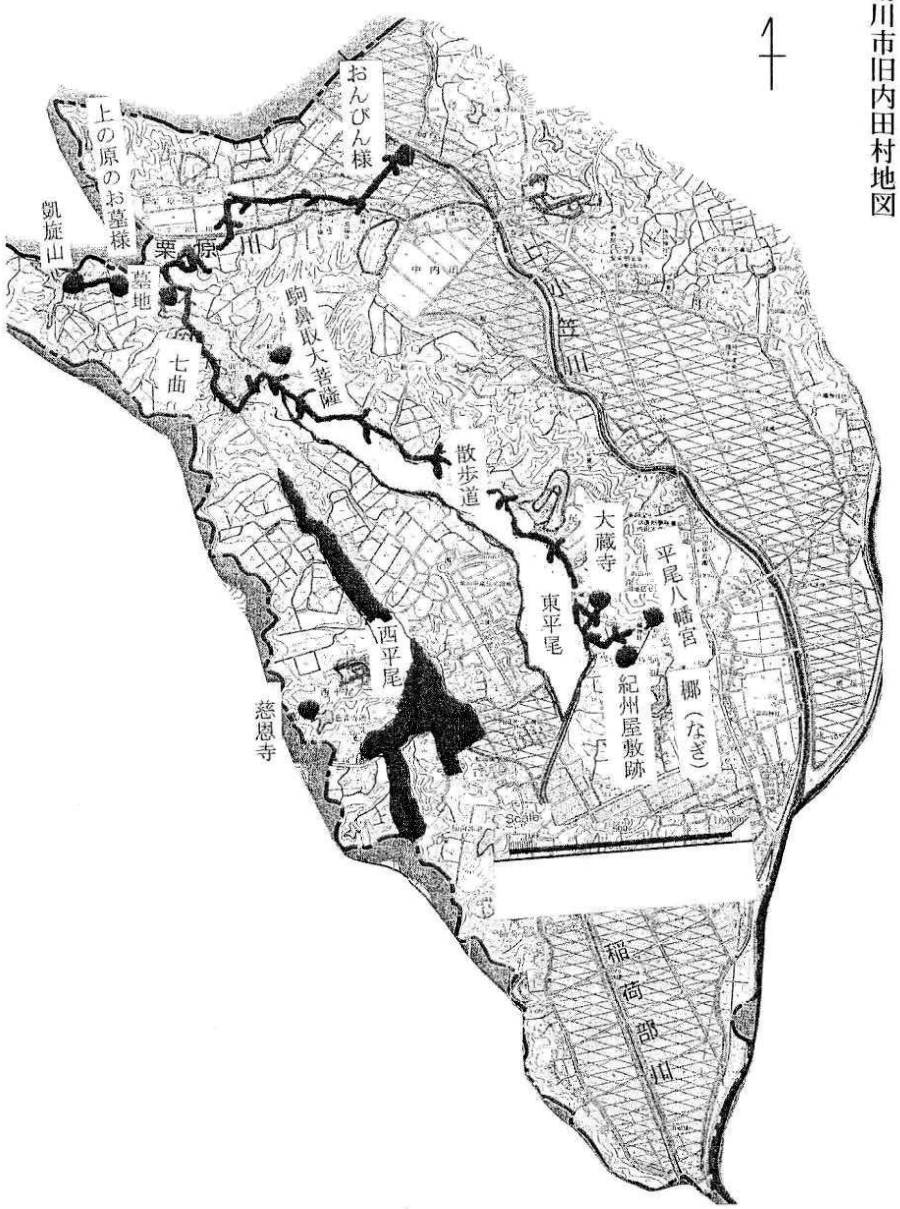
江戸時代、岡場所が神社仏閣の近くに建ったのは性が神代と現世の境の神ということでしょう。

七曲（ななまがり）池の『七』の数字と境の神は生死と禍福の神なのです。

『参考文献』

伊豆武将物語　小野真一　（有）明文出版社
山島民譚集　柳田國男　甲寅叢書刊行所
日本の神仏の辞典　大島建彦、茵田稔、圭室文雄、山本節　（株）大修館書店
世界大百科事典　下中直人　平凡社
静岡県菊川市
内田「名所・人物」百選　郷土を愛するうちだっ子はぐくみ協議会
曽我物語　梶原正昭・大津雄一・野中哲照　小学館
暦の歴史　ジャクリーヌ・ド・ブルゴワン　創元社
石田三成とその一族　白川亨　新人物往来社
曽画物語の基層と風土　二本松康宏　三弥井書店
戦場体験者　沈黙の記録　保坂正康　筑摩書房

菊川市旧内田村地図



真心（まごころ）

太田精一

一・若気の至り

昨夜来の雪が廓を白く染めている。年の瀬を迎え、吉原も客足が途絶えがちで、普段の賑わいを欠いていた。

大獄で吹き荒れた安政五年（一八五八）も残すところ後わずかである。

大門の中にある五十軒の引手茶屋にも、このところ素性の分からない人物が現れ、廓内の風情にもゆとりが感じられない。

その中にあって酔夢楼は、昔ながらの風情を保ち、落ち着いた店構えとほのかな色気を漂わす遊女を抱え、客の評判を呼んでいた。女将は年の頃四十前後、柔らかな物腰で客扱いも如才ないことから繁盛している。

ところが、今夜は、年の暮れのせいか、雪のせいか客が少ない。

色白の若い男が落ち着かない態度で店の前でうろうろしている。女将は、店にいる艶っぽい三十前後の紫という源氏名の遊女に、店に引き込むよう指示した。

「紫や、店の前でうろうろしている若いお侍さんを上げておやりよ」

暇を持て余していた紫は、若侍に声を掛けた。

「そこのお侍さんいい男だね。寄っていらっしゃいよ。ここには楽しいことがいっぱいあるから」

若侍は、紫に手を取られてふらふらと店に入った。

男を二階の部屋に上げた紫は、すぐに膳の用意をさせ、酒を持って来させた。

紫は、しなを作って若侍に酌をしながら体を寄せた。

「お侍さん、身なりから見て浪人ではなさそうだね。どこの御家中の方か、差支えなければ教えてくださいな」

「拙者は、秋田からつい一月ほど前に勤番となって江戸に来たばかりだ。江戸には吉原という大きな廓があって、そこにはたくさんの着飾った女が男を楽しく遊ばせてくれる、というので来てみた。名は、真壁十三郎と申す」

とつとつと語る言葉には、秋田なまりがある。

紫は、偽名であると察しがついたが、廓ではよくあることなので名前などどうでもよかった。

真壁十三郎と名乗る若侍は、年の頃二十歳（はたち）前後。色白で目元涼しく、髭の剃り跡が青々として鼻筋通った良い男である。だが、まだ少年の面影を残し、女は初めてらしい。遊女に甘く見られないように虚勢を張っているが、立ち居振る舞いが何となくぎごちない。

「お侍さん。初めてだね。国許で遊んだことは、一度もなかったのかえ」

紫は、女を知らないうぶな男を迎え入れる幸せを感じながら、胸をはだけ足をからませた。

若侍は、むしゃぶりつくように紫の胸に顔を寄せ、その豊かな乳房を吸った。

「痛い。そんな乱暴に女を扱うものではありません。もっと優しくしておくれ。そんなにあわてなくても、あたしはどこにも行きやしないのだから」

紫は、仰向けに寝て若侍の肩に手を回し、引きずり込むようにして足を開いた。

若侍は、われを忘れ、紫の体にしがみつき、むさぼるようにその体を求め続けた。

その夜を境に若侍は、吉原通いがやみつきとなってしまったのである。

若侍の実の名は、土屋喜三郎といって三十石二人扶持、秋田佐竹藩上屋庄五郎の三男である。

江戸勤番を仰せつかり、秋田から花のお江戸に出て来てまもない。

江戸は、見るもの聞くもの華やかで、ただ驚くばかりであった。国元では剣術と学問にいそしみ、剣は真庭念流の流れをくむ秋田鵜飼道場で学んだ。国許では、真面目な堅物で通っていたのである。

だが、何度も酔夢楼で紫と情を重ねるにつれ、すっかり彼女の虜になってしまった。一日も逢わずにいられないほどの思い入れようである。だが、金が続かないので月に二回程度の逢瀬で我慢していた。

逢える日が来た。二月の春も近い宵の頃である。喜三郎は、上野山下の辻駕籠立場から吉原の酔夢楼まで駕籠に乗った。

しばらく行くうちに駕籠が止まった。駕籠かきが、喜三郎を田舎侍と侮り、酒手を要求するため、途中でいきなり駕籠を止めたのだ。

「旦那、勢いを付けやすから酒手をはずんでくださいな。吉原まで五百文は出して貰わないと駕籠は出やしませんぜ」

と言って二人は、キセルを取り出し煙草を吸い始めた。

酒手をはずむまで梃でも動かないという態度である。
喜三郎は、早く紫と逢いたい。心がはやった。それに田舎侍と見くびられた悔しさもあった。
「おい駕籠屋、早く出せ。拙者は見ての通り侍だ。お前たちの言うままにはならん。吉原までの駕籠賃は、二百五十文位だと心得ておる。それを五百文とはなんだ。吹っかけおって、田舎から出て来て何も知らないと思っているのか」
「お侍、冗談言っちゃいけやせん。吉原まで繰り出すとあっては、金はたんまり持っていなさるはずだ。こちとらはあんたが、遊んでる間にも、汗水流し働いてるんですぜ。楽しみのお裾分けをしてくれたって罰は当たらないと思いやすがねえ」
「武士に向かって何を申すか。酒手の代わりにこの延べ金をくれてやる」
喜三郎は、脅しのつもりで刀を引き抜いた。
駕籠かきは、まさか本気で立ち向かって来るとは思わず、闇夜に光る刃先を突き付けられ、駕籠を放置して逃げ去った。
おとなしくその場を立ち去ればよかったが、喜三郎はどうにも腹の虫がおさまらない。そこに放置された駕籠が目に入った。彼は、腹立ちまぎれに道のわきを流れている川に、その駕籠を放り込んでしまったのである。
喜三郎が登楼してしばらくすると、酔夢楼の周りが妙に騒がしくなって来た。
「今、入った侍を出せ」
駕籠かきどもが五、六十人店の前に集まりわめき散らしている。店の連中は恐ろしくなって怯えている。楼の主人が、喜十郎に事の次第を聞いた。
「それは大変でございます。駕籠かきといえども、徒党を組んで店先に乱入されたら、お客様も何をされるか分かりません。また、他のお客様にも迷惑がかかりますので、ここはひとまずお逃げなされた方がよろしいかと存じます」
喜三郎は、紫に魅かれながらも、引き出されて袋叩きにされるのではないかと恐怖を感じ、店の者の導きで裏口から逃げ出した。
店を出てしばらくすると駕籠かきが、大門の前で待ち伏せしている。
喜三郎は、刀の柄に手を掛け、身構えた。田舎侍だと甘く見られていることに無性に腹が立ち、血気にはやり我を忘れた。駕籠棒を持って真っ先に突っ込んで来た奴に、峰打ちを食わすつもりで打ち付けた。だが、手元が狂い頭のあたりを切り裂いてしまった。
「人殺し」
駕籠かきどもが浮足立つ隙に、喜三郎は逃げた。
喜三郎は、人を切ったことの重大さに気付き、平静さを失い無我夢中でその場から立ち去った。どこをどう走

ったか、ふと気が付くと日暮里の亀田屋という貸座敷屋の前に出ていた。そこに飛び込み、客を装い素知らぬ顔でいた。
すると吉原の近くで、駕籠かきを切った侍がいるとの訴えを受け、町役人が、提灯を照らし、貸座敷を一軒、一軒改めている噂を耳にした。
喜三郎は、居たたまれなくなって勘定もそこそこに亀田屋を出た。帰宅途中、空腹を感じ、ふと見ると「下谷一番どじょう汁」という店が目に留まったのでそこに入ってどじょう汁を注文した。
店はしまいかけていて、鍋の火を落としたばかりであった。どじょう汁はなかなか煮えない。喜三郎は酒を飲んで、煮えるのを待っていたがとうとう痺れを切らした。
「番頭、いつになったら煮えるのだ、お前の店は、こんな時間に火を消すなんて、火の用心がよすぎやしないか」
「遅くなりご勘弁ください。もう何とか召し上がって戴けると思います」
そう言って出した泥鰌に十分火が通っていなかった。
「こんな泥鰌が食えるか。食えるか食えないか貴様が試してみよ」
喜三郎は、鍋を足蹴にした。鍋は引っくり返って、番頭の頭は汁だらけとなった。
番頭は、頭に泥鰌汁を被り火傷を負い、悲鳴を上げて頭を抱えその場を逃げ出した。
「気を付けろ、払いは後ほど取らす」
そう喜三郎は言い残し、店を立ち去ったのである。
駕籠かきが斬られたという話は、吉原中の話題になった。加えて、下谷のどじょう汁屋からも町方に訴えがあった。
駕籠かきを斬ったのは、秋田佐竹様の御家中の若侍らしいとの噂が流れた。浪人ではないので、町方がむやみに取調べをすることは出来ない。そこで南町奉行所に取調べを申し入れた。南町奉行は、老中を通して佐竹藩に取調べを依頼した。
佐竹藩としても捨て置けず、喜三郎を藩邸に召喚し、事実を確かめた。喜三郎は、素直に事実を認めたので、佐竹藩は、藩の名誉を傷つけたとして彼を藩から追放した。
浪人となった喜三郎は、南町奉行所のお白洲に据えられ、吟味与力の取調べを受け、八丈島へ遠島となったのである。

二、折助稼業

五年の月日が流れた。喜三郎は、ご赦免となり文久三年（一八六三）十二月島から江戸に戻った。江戸に着くとすぐ、紫を訪ねて酔夢楼に駆けつけた。
紫は、すでに酔夢楼にはいなかった。その時、紫の本名はみつであることが分かった。

事件当時の取調べは、醉夢楼にもおよんだ。聞き込みに来る役人の姿は、醉夢楼の客足を遠のかせた。

みつは、騒ぎを招いた遊女として同じ遊女仲間からも白い目で見られた。その上三十を超え、客足も途絶えがちとなったため、醉夢楼のお荷物となり事件のあった半年後、千住の桔梗屋に売られたのである。

開国に反対する志士たちによる外国人殺傷事件が相次ぎ、世の中は騒然としていた。幕府の屋台骨も揺らぎ、攘夷を唱える浪人が、将軍家のお膝元の江戸でも跋扈し始め、金品を狙われる商家も後を絶たなかった。

喜三郎は、かつて武士であった身分を捨て、折助として土佐藩の江戸屋敷に住み込みで雇われることになった。

折助は、殿様の御登城の際に河童駕籠を担いで行列に加わる、大名のお抱え人足である。通常七、八〇人の大部屋に住んでいる。その中には、小頭、役割と称する組単位の統率者がいて、その上に部屋頭がいる。部屋頭は、博打打ちの親分みたいなもので、一軒家を設け女房を持ち、楽な暮らしをしている。役割は、部屋頭と小頭の中に立ち、部屋を取り締まる。役割ともなると通常大部屋を出て家を持ち、まずまずの暮らしが出来るのである。小頭は、数人いて大部屋で一般の折助と一緒に暮らしている。

夜ともなれば大部屋では博打が盛んに行われる。その寺銭と給金のピンハネが役割と部屋頭の生活を支えている基盤となっているのである。

折助の給金は通常月二貫四〇〇文（八万四千円）位である。冬は紺木綿の給一枚、夏は、紺木綿単衣一枚で過ごしている。渡り者が多く元の職業は、まちまちで百姓町人はもちろん武士もいれば学者もいた。折助の日常は、酒と女と博打に明け暮れる荒れた生活の繰り返しであった。

喜三郎が折助となって半年後文久四年の夏、折助の大部屋で窃盗事件が起きた。仲間の掟により部屋の中で盗みを働いた者は、手酷い私刑を受けることになっている。枕の下に挟んであった一分金が二枚盗まれたといって役割に訴え出た者がいた。権助という元左官をしていた男で、盗ったのは元火消しの三次だというのである。三次は、身が軽く猿の三次と異名をとるほどすばしこい。

「三次が盗んだという証拠でもあるのかい」

役割は、権助に聞いた。

「へえ、これが証拠だというものはありやせんが、俺が寝ているときに俺の頭を横に動かしやがった。それに次の日、三次の持ち物の中から一分金が二枚こぼれ出るところを確かに見たのでがす」

役割は、折助家業をしている者は、皆その日暮らしで金を溜めているような奴はいないという先入観を持っている。そこで権助を問い詰めた。

「ところでお前は、何故二分もの金を枕の下に入れておくのだ。そんな金いつ稼いだのだ」

「実を申しますと、その金は女郎をしている娘からもらったものでがす。嘘だと思いなさるのなら品川の小春という女郎屋にいる娘に聞いてみてくだせえ」

権助の話を娘に確かめたところ、確かに父親に二分の金を渡している。

結局、権助が寝ているときに頭を動かしたということと持ち物の中から一分金が二枚あったというのが三次の疑われる原因となったのである。

「まくらを動かしたのは、権助の枕が頭から外れていたため、直してやったのだ。二分の金は、俺が折助になる前から持っていた金で盗んだ覚えはない」

三次は頑強に否定した。だが、前から二分の金を持っていたことを知っている者はいない。そのため三次は役割の指図のもとに捕えられた。

部屋の仲間が三次の両手を細い麻縄で縛り、それを部屋の中央の梁につるし、足の親指には水を入れた一升徳利を結び付け、前後に人が立ち、白状しろと三次を揺さぶった。大抵の泥棒は、その痛みに耐えかねて白状する。

だが、三次は、頑として否認した。

三次は、拷問によって息も絶え絶えになり口もきけないほど弱った。

喜三郎は、三次の様子から彼が盗んだのではないと確信した。部屋頭と親しくなった喜三郎は、犯人と決まったわけではない三次の私刑の手を緩めるよう頼んだ。

二日後、その金が訴人の蜜柑箱から出てきたので三次の仕業でないことがわかり疑いが晴れた。それ以来三次は喜三郎に恩義を感じ、二つ年上の喜三郎を兄のように慕うようになった。

喜三郎は、折助部屋で心から信頼し合える友がもう一人出来た。

同じ武士の出で、東北の生まれの馬淵勇五郎である。

冬の木枯らしの吹く寒い日の夕食時であった。喜三郎は、飯を盛った茶碗を持って、座る場所を探していた。すると大土釜の上に座って三、四人の折助が食べている。喜三郎は、あの上が暖かそうで良いと思い、釜の上の空いた場所に座り、食べようとした。

「おっとそこは貸し切りでお前が座るところではない」

屈強そうな一人の折助が、喜三郎を座らせようとしない。

「そんな掟は聞いたことがない。空いていればどこで食べてもいいではないか」

「何をこの野郎、新参者のくせに生意気なことをぬかしやがって勘弁できねえ」

大部屋は長さ十九間、幅八十九間、二百畳敷きの部屋

で、男だけの世界である。そのため喧嘩が絶えない。だから部屋頭が刃物は持たせないことにしている。それ故、刃物沙汰にはならない。喧嘩と言っても素手で殴り合うか相手を投げ飛ばすだけである。

側にいた馬淵勇五郎が、喜三郎に味方して言った。

「この男の言うとおりだ。別に席が決まっているわけではない」

文句をつけた折助は、仲間と共に四、五人で殴り掛かったが、武術の心得のある二人に散々打ちのめされてしまった。勇五郎は喜三郎と同年配ということもあって、それ以来二人は無二の親友となったのである。

また、折助部屋では、こんなことも起こった。

一人の目明しが松の木に括られ、折助仲間から暴行を受けたという話である。なんでも折助の一人が盗人と間違えられて番所にしょっ引かれ、手荒な真似をされた。疑われた折助は、釈放された後、どうにも腹の虫がおさまらない。仕返しに四、五人で徒党を組み番所に出掛け、目明しを屋敷に引っ張り込み、邸内の松の木に括り付け暴行を働いたのである。

目明しなど末端の警察権力も折助の乱暴にあっては形無しであった。

折助部屋での生活で、喜三郎が最も気を使ったのは、病気にならないことであった。一日病気になると悲惨である。特に長患いをしている病人が、医者に見離されたら最後だ。

「納めてしまえ」

そう組頭が言うと三、四人でこの瀕死の病人を「めでた、めでたの若松様よ」と言って胴上げをし、土間の叩き石にストンと落とすのである。瀕死の病人は、グウとも言わず死んでしまう。

「どうせ助からないものなら、苦しい思いをするよりもひと思いでよかろう。なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。成仏するがよい」

そう唱え葬る慣わしになっていた。

残酷なようだが、その日暮らしの折助たちにとって一思いに成仏させることの方が、本人のためであると思ったのかもしれない。

若い喜三郎は、その悲惨な姿を見て病気を怖れ、明日のない暮らしに嫌気がさし、出来るだけ早いうちにこの生活から抜け出そうと思うようになっていた。

三、足抜き

喜三郎は、あらゆる手掛りを辿って、紫の消息を尋ねた。島から帰って一年を越えていた。

みつが吉原から千住に流れて行ったとの噂を耳にした喜三郎は、千住大橋北岸の河原町のヤッチャ場といわれる青物市場付近の岡場所の遊女屋を一軒一軒しらみつぶしに訪ね歩いた。だが、探し当てることが出来なかった。

千住の岡場所は、青果市場に商いに来る百姓、町人相手の遊女屋が立ち並んだ処で、吉原に比べ安く遊ぶことが出来た。

正月も過ぎ、寒さの中にも春の萌しが見え始める頃であった。

喜三郎は、岡場所のあたりをうろうろしているうちに、湯桶を抱えた艶っぽい女が、湯屋から出て来るのを見た。一瞬紫だと思ったが、人違いであることを怖れ、声をかけずに後を付けた。すると桔梗屋という遊女屋に入った。

「紫というお女郎はいるかい。あるいは、ここではみつと言っているかもしれない。今夜は、その娼(おんな)の部屋に上がりたいのだが」

「そういう娼は家にはおりませんねえ。でも他にいい娼はたくさんいますよ。まあ上がってくださいな」

「変だな、今家に入った娼が紫、いやみつではないのかね」

「ああ、あれはおよしですよ。お好みなら今呼びますから待ってくださいよ」

女将は、二階に上がってよしという名の遊女を呼んだ。まぎれもなく喜三郎が夢にまで見た紫であった。

女と共に二階の部屋に入るとすぐ、喜三郎はまじまじと彼女の顔を見た。それから、まるで宝物にでも触るように両手でその顔を撫でまわして語った。

「ほら、紫が吉原の酔夢楼にいた頃、よくお前さんの処に通った土屋喜三郎だよ。あの頃は、俺も世間知らずの田舎出の若侍で、初めてお前さんに男にしてもらった。お前さんに逢うため酔夢楼に向かう途中で、ひょんなことから駕籠かきと喧嘩になりその男を斬ったため、大騒ぎになったことを覚えているかい。酔夢楼を逃げ出てから、あちこちで悶着を起こし、上げくの果てに島送りとなり、やっとご赦免になって、島から帰るとすぐお前さんを探し廻った。その甲斐あってやっとお前さんを見つけたというわけだ」

みつは、昔の記憶をたどって、喜三郎の顔をじっと見つめた。

「ああ、思い出したよ。土屋喜三郎さんだね。駕籠かきを斬って怖い顔で、部屋に上がって来た晩の喜三郎さんだ。狂うようにあたしを求めて慌てて出て行ってしまった。あんたさんがその時のあの喜三郎さんなの。それからぷつんと来なくなったのでどうしているかと心配していた。国許にでも帰ったのかと思っていた。うぶな喜三郎さんに色の道を教えて、狂わせてしまったあたしをずいぶん恨んでいなさるだろうねえ」

「そうじゃあない。お前さんに黙って国になど帰るものか。俺は、あの騒ぎを起こした咎で、秋田佐竹藩の家臣の身分を失い追放となった。それから南町奉行のお裁きを受け、八丈島に遠島となったのだ。島で五年暮らしたが、思うことはお前さんのことばかりだった。江戸に帰

ったら真っ先にお前さんに逢おう。そのことだけが俺の生き甲斐となって、生き長らえることが出来た。いわば、俺に生きる望みを与えてくれた恩人だと思っている。感謝こそすれ、恨み心など全くない」

喜三郎は、じっとみつの目を真顔で見つめた。その目に嘘偽りのないことをみつは感じ取った。真心のこもった目であった。虚飾の世界で生きて来たみつにとってこれまで見たことのない真剣な眼差しであった。

「おみつさん。一つ確かめたいことがある。お前さんは、あの頃、俺のことを、どう想ってくれていたのかね。俺は、おみつさんと情を重ねるうちに、一緒になれるなら侍を捨ててもいいと思ったほど惚れていたのだ」

「そうねえ。正直に言うとあたしは、初めは、喜三郎さんを一人の上客としてだけしか見ていなかった。だが、うぶで男前の喜三郎さんが可愛かったことは確かだった。でもね、しょせん身分も年も違うし、一緒になるなど考えもしなかった。だから、一つ床に寝ても、これはあたしの仕事なのだと思って喜三郎さんの満足するように努めていた。でも、喜三郎さんが足繁く通い、あたしを遊女としてより、連れ合いのように扱ってくれる。その思いやりにだんだん心が動いて行く、そんな自分が空恐ろしくなっていた。淋しくてやるせなくて、ぼんやり過ごす日が多くなったそんな時、あの駕籠かき事件が起き、喜三郎さんはぷっつりと来なくなった。それからは縁が切れたと思うようにしていたのさ」

「そうですかい。それを聞いて俺は騙されていたわけではない。独りよがりではなかった。そのことが分かっただけでも嬉しい。お前さんを探し歩いた甲斐があった」

喜三郎は、廓の女に真心などないから、廓通いは止めたらどうだと上役、同輩からも散々諫められた。真心を尽して惚れぬいたその情が、みつに通じていたかどうか。みつへの想いを貫くことは、一生を棒に振ってまで価値のあることなのか、島にいる間中考え続けた。

みつの語るしんみりとした言葉の端々に誠意を感じ取った喜三郎は、みつに心底から惚れたことへの悔いは残らなかった。

「おみつさん。これからどうなさるね。このまま婆さんになるまでここにいるつもりですかい」

「仕方がないだろう。あたしはいつもここを抜け出したいと思っている。けれど母親の病で借金が重なり抜け出せなかった。その親ももうこの世にはいなくなった。こんな商売は、いつまでも続けられないことは分っている」

「俺に甲斐性があれば、身請けをしてここから出してやることが出来るのだが、残念ながら今の身分じゃあどうすることも出来ない。足抜きも簡単にはできそうもないし」

その時、喜三郎は、ふと折助の仲間に手伝わせ、みつに足抜きさせることを考え付いた。

「おみつさん。本気でここから抜け出し、俺と所帯を持つ気があるかい。あれば、命懸けでやってみようと思うが、どうだい出来るかい」

「ああ、どうせこのままでは、飼い殺しにされるだけだから、喜三郎さんがそんなにあたしのことを大切に思ってくれるなら、どんなことでもしてみる」

「わかった、おみつさん。そんな気持ちになってくれて本当に有難い。今日はこれで帰るが、このあたりの様子、周りの抜け道などよく吟味した上でまた来ることにする」

喜三郎は、折助の仲間のうち最も信頼できる三次と馬淵勇五郎に足抜けの相談をした。

「礼は、大して出来ないが、俺の女の足抜きを手伝ってくれ。千住の桔梗屋という遊女屋にいる女で、名はおよしという。吉原にいるときは、紫といっていた。昔なじみの女だ」

喜三郎は、みつとのいきさつを語ると共に二人に協力を依頼した。

二人は、喜三郎の一人の女を一途に想う真心とその熱情に心を打たれた。そこで、喜三郎、三次、勇五郎の三人は、遊客を装い下調べを兼ね桔梗屋を訪れ、みつと足抜きの相談をした。

いよいよその日が来た。梅雨時のせいか蒸し暑い。朝から降り続く雨が、夜になっても降りやまない。

宵の口から桔梗屋に上がった喜三郎と勇五郎は、子の刻になって喜三郎が二階の廊下の裏手から綱をだし、みつを抱えて下りる。その間に、勇五郎が桔梗屋の店先で他の客と諍いをし、騒動を起こす。外では、三次が番所の見張り人の注意をひきつけるような行為をして、見張りの目をそらし、喜三郎とおみつは、木戸をすり抜け千住大橋まで出る計画を立てた。

計画は見事に成功した。

大橋のたもとにかねてから用意した船で二人は隅田川を下り、永代橋の付近の船宿に船を付けそこで夜の明けるまでのわずかの間を過ごした。

「足抜きはうまく行った。やっと逃げ延びることが出来そうだ。おみつさん、かねてからの想いがかなった。俺と夫婦になってくれ」

喜三郎の想いをみつは、今や素直に受け止めることが出来た。嘘とお世辞にまみれた遊客の中にこれほど濁りのない真心を持った男がいようとは、思わなかった。

「はい。こんな泥にまみれたあたしでよかったら、どうか喜三郎さんの女房にしてください。何があってもあなたについて行きます」

その言葉を聞いて喜三郎は、喜びに咽び、みつを引き寄せ固く抱きしめた。

「苦しいよ。でも幸せ。これからはいつもこうしていられるのだね」

みつは喜三郎の腕の中で、初めて真(まこと)の男を感じた。すると今まで多くの男の相手をしながら感じなかった不思議な感覚が走った。得も言われぬ快感が身を覆いつくし、しばらくはまるで雲の中をさまようような感じが続いた。

「あたし、今本当の女になったような気がする」

みつは、これまでの不幸な人生が洗われたような幸せを感じるのであった。

翌日、二人は永代橋の上に出た。夜も白々と明け、雨も止んだ。爽やかな川風が、門出を祝福するかのように高揚した二人の頬をそっと撫でた。

大川に浮かぶ船が、霞の中をゆったりと海に向かって下って行った。

(完)

短歌

行雲流水(四十八)

石黒修身

近詠二十首

晩秋

紅葉の季節となれば京洛と琵琶湖に遊びし憶(おも)いが回(めぐ)る

晩秋の箱根路行けば山間に紅葉の群れが処処に耀う

さながらに銀狐の群が迫り来る薄の原の風下に佇てば

紅葉も早や黄葉となりて散る銀杏並木は寂寞として

夕陽映え窓下の黄葉赫いて今日も終るか晩秋のひと日

中国

大国の矜持乏しき中国は大気汚染とチヤイナリスクと
中国を巡りし旅は五年前汚染は識らず北京上海
五年前曽遊の国に民族と格差問題如実に観たり
「梅原」が「北京秋天」描きしは一九四二空は澄みたり
空覆うスモツグ烟るこの首都に「北京秋天」還らぬ景か

はらから

パリのテロ早朝不安去りやらず吾息の無事なる確めるまで
単身でパリ勤務の吾息なればテロの懸念去りやらぬ日々
凱旋門セーヌ河畔と曽遊の地テロの脅威に怯びえると聞く
杖を曳く友ひとり増え応答えるに「転ばぬ先に」と弁えを謂う
その歌は大正ロマンか旧き佳き歌寄せし人病癒えずと

社会

鎌倉に棲むとの噂そのままに「原節子」逝く昭和は遠く
幻のごとく密かに生きしとう佳人の逝くは現となりぬ
逞しき斗志漲るラグビーにＢＲＡＶＥ　ＢＬＯＳＳＭのマーク鮮やか
集中かはたお祈りか「五郎丸」そのキックには神秘漂う
リベラルで反骨の文士「野坂さん」ひつそりと逝く無頼のままに

漢詩

潮騒錄（八十三）

鯨游海

賀丙申春

平成二八年元旦

病入膏肓慮外辛
幸哉平癒復迎春
過咽忘熱至言矣
意馬心猿愧我身

押韻・辛春身

〈丙中の春を賀す〉

病膏肓に入りて　慮外の辛しみ
幸ひなる哉平癒して　また春を迎ふ
咽を過ぐれば熱きを忘る　は至言なり
意馬心猿の　我身を愧づ

〔注　解〕

膏肓＝膏は胸の上部、肓は心臓の下部。難病の意（左傳）
慮外＝思わざる。意図せざる。意外な。予期せざる。
過咽忘熱＝咽喉元過ぐれば熱きを忘る＝病癒へて薬師（医師）忘る。
至言＝至極もっともな言葉。正しく当っている語。
矣＝文末に用いる断定の助辞。強調し念を押す＝焉。
意馬心猿＝野生の馬や猿が自由勝手にふるまい、騒ぎたてる様。またそれを制御出来ない人間の煩悩の喩え。

〔口語訳〕

過年、私は不条理にも難しい病気に犯され予期せざる辛苦を受けるはめに陥った。
然し幸運なことに手術の結果完治した。お陰さまで私は、再び新しい春を迎えることが出来たのだ。
ところで「咽喉元過ぎれば熱さを忘れる」という俚言は至極もっともな語であることよ。相変らず私は自から摂生し、健康に留意した生活態度に専念出来ないでいる。

☆咽喉越せば熱さ忘るは至言なり
　意馬心猿の我が身愧ぢつつ

清宮幸太郎選手

平成二七年八月

好球必打快男兒
二八紅顔況白眉
此國昨今多禍事
衆民託夢彼雄姿

押韻・兒眉姿

〈清宮幸太郎選手〉

好球必打の　快男児
二八の紅顔　況や白眉
この国昨今　禍事多ければ
衆民夢を託す　彼の雄姿に

〔注　解〕

今夏、一人の高校生が甲子園を湧かせた。清宮幸太郎という高校の一年生で弱冠十六歳。準決勝で破れ球場を去ったが、今後の活躍が期待される逸材。
二八＝十六歳。漢語特有の掛算の素数による数字表現。
紅顔＝元気な青少年のこと。劉希夷・代悲白頭翁「伊昔紅顔美少年」。況や＝副詞「まして、なおさら」
白眉＝多数の中で一番優れた者。蜀志・馬良傳「馬氏の五常（五番目の男子）白眉もっともよし」

☆梅檀の双葉かんばし快童の
　二十歳の春に夢は羽ばたく

木鐸之虚僞報道

平成二七年二月

正論正義報知命
木鐸音歪虚説流
捏造罪深於誤謬
新聞不信是當憂

押韻・流　憂

〈木鐸の虚偽報道〉

正論正義は　報知の命なるに
木鐸の音歪み　虚説流る
捏造の罪は　誤謬よりも深し
新聞不信　是れ当に憂ふべし

〔注　解〕

木鐸＝舌のついた鈴。法令を発する際鳴らした＝警鐘。
昨秋より朝日新聞社は二つの誤報について公表、謝罪し後社長が辞任するに至った。一は東電福島原発事故に際し、故吉田所長の言動を捏造し報じた事、二は先の大戦中の慰安婦問題に関し、当時の証言者の発言を曲げて報道したことであった。
正論正義はニュースの命であるのに木鐸がこれを自ら犯し捏造した。然し眞に心配なのは若者の新聞離れだ。

☆新聞は読まんと嘯く少年多し
　捏造の罪いよよ深かる

《漢詩の流れ71》 平安時代①菅原道眞

菅原道眞（八四五～九〇三）。平安時代を代表する文人で、今日に至る迄人々に最もその名を知られ、時代を越えて語られかつ研究され続けた日本国第一の漢詩人である。これに異を喩える人は居まい。

優れた学者であり詩人であった道眞は、晩年罪に問われ太宰府に左遷・流罪となったまま悲劇の生涯を閉じたのである。その為怨霊神として恐れられ、結果として学問や詩文、和歌の神として崇拝されることとなった。

北野天満宮を始めとする全国到る所に天満・天神のもとに崇拝され続け今日に至っている。つまり彼は神となったのだ。

学者の家系に生まれ若くして文章博士となった彼は、才能が花開き時代のエースとして官界で活躍していたが、時に地方に配されることもあった。この不遇の経験がまた彼の詩作により深い味をもたらしたともいえよう。

かく抜擢と没落という豊かな才能に恵まれた文人貴族の波乱に富んだ人生は、群を抜いて優れた詩を作らしめた。彼は菊、特に白菊を好んだ。また深夜、灯火の下で読書に没頭した自分の姿をしばしば詩に詠んだ。

忘れてならないのは彼の私淑した中唐の大詩人白楽天への傾倒であろう。残念ながら当時、彼の師たる詩才、学識を備えた人材は日本には居なかったのである。白楽天の「白氏文集」こそ彼が学ぶべき源泉であった。

月夜見梅花

月耀如晴雪　月耀は晴雪の如く
梅花似照星　梅花は照星の似し
可憐金鏡轉　憐れむべし金鏡の転りて
庭上玉房馨　庭上に玉房の馨れることは

道眞の幼少時、十一歳の時の作。

夏夜於鴻臚館餞北客歸郷

歸鴈浪白也山青　帰らんか浪白く也た山青し
恨不追尋界上亭　恨むらくは界上の亭を追尋せざる事を
腸斷前程相送日　腸は断ゆ前程に相送る日
眼穿後紀轉來星　眼は穿たる後紀に転び来たる星
征帆欲繫孤雲影　征帆繋がんと欲す孤雲の影
客館爭容數日扃　客館争でか容れん数日の扃
惜別何爲遙入夜　惜別何為ぞ遥かに夜に入る
緣嫌落淚被人聽　落涙人に聴かるることを嫌うに縁る

夏の夜、平安京の鴻臚館（迎賓館）で、北方から来朝した渤海国使一行の帰国を送別する宴を開いた時の作。

白詠

離家三四月　家を離れて三四月
落淚百千行　涙落つること百千行
萬事皆如夢　万事皆夢の如し
時時仰彼蒼　時々彼の蒼を仰ぐ

漢詩

汲深録（三）

古木寒鴉

古木の寒鴉

平成二十七年十二月

朔風凛冽落楓飛　朔風　凛冽　落楓飛ぶ
古木蕭条映夕暉　古木　蕭条　夕暉に映ず
如告啼鴉苦寒甚　告げるが如き啼鴉　苦寒甚だし
歸巢孤影遠山微　歸巢の孤影　遠山微なり

押韻・飛　暉　微

〔注　解〕

寒鴉＝冬の鴉。
朔風＝北風。
凛冽＝きびしく寒い。
蕭条＝もの寂しいさま。
啼鴉＝啼いている鴉。
苦寒＝きびしい寒さ。
孤影＝ここでは一羽の鴉のすがた。

〔口語訳〕

北風がきびしく寒く、落楓が飛んでいて、
古木がもの寂しく、夕暉にはえている。
寒さを告げているように啼く鴉、寒さがきびしい。
巣に帰る一羽の鴉、帰る先の遠くの山はうす暗い。

松井秀人

除夕遠鐘

除夕の遠鐘

平成二十七年十二月

紛紛飛雪弊廬中　飛雪　紛紛　弊廬の中
除夜燈前歳已窮　除夜　燈前　歳　已に窮まる
微聽遠鐘何處寺　微に聴く遠鐘　何処の寺
算來百八待春風　算來たる百八　春風を待つ

押韻・中　窮　風

〔注　解〕

除夕＝大晦日の夜。
紛紛＝みだれ散るさま。
弊廬＝あばら屋。
歳已窮＝歳ももう末になる。
百八＝除夜の鐘の数。
待春風＝新年を待つ意。

〔口語訳〕

雪はみだれ飛び散り、あばら屋の中にいる、
大晦日の夜、灯火のそばにいるが年ももう終わりになる。
微かに聴こえてくる遠鐘は、何処の寺のものだろうか、
算が百八になり、新年を待つ。

新春試筆

新春の試筆

平成二十八年一月

韶光満地太平風　韶光（しょうこう）地に満ち　太平の風
梅蕾窗前三兩紅　窓前の梅蕾（ばいらい）三兩紅なり
忽起詩心清筆硯　忽ち起きる詩心　筆硯を清め
閑人試翰草庵中　閑人　試翰　草庵の中

押韻・風　紅　中

〔注　解〕

試筆＝書初め。
韶光＝春ののどかな景色。春ののどかな日の光。
梅蕾＝梅のつぼみ。
窗前＝窓の前。
三兩＝ふたつみつ。
筆硯＝筆と硯。
閑人＝ひまな人。
試翰＝書初め。
草庵＝草ぶきの庵。

〔口語訳〕

春ののどかな日の光は地に満ち、太平の風が吹いている。
窓の前の梅の蕾も、二つ三つ紅くなっている。
詩心が起きてきて、筆と硯を清めて、草庵の中で書初めをする。

ロボット雑考（その三）

三戸岡道夫

（サービスロボットの拡大）

製造現場で活躍する産業用ロボットでは、日本のロボットは、世界シェアーの五割を誇るロボット大国である。

しかし製造現場の産業用ロボットだけでなく、最近はもっと生活に密着した「サービスロボット」も拡大し始めている。経済産業省が二年前に公表した調査では、サービスロボットの国内市場も二〇二〇年（平成三十二年）には一兆二四一億円に拡大し、製造分野のロボットに匹敵する規模にまで拡がると予測している。

そこで日本政府も「ロボットによる新たな産業革命」を掲げ、二〇二〇年（平成三十二年）までに、国内の全ロボット市場を、現在の四倍、二兆四千億円の規模に拡大させる戦略を発表した。安倍首相もロボット産業を、（新たな時代に日本が世界の中心で輝くための道筋）と位置づけしており、規制緩和やルールの整理を加速させる方向にある。

東京オリンピックに合せて催すロボット五倫（仮称）では、医療や農業などの課題を解決する、最先端のロボットが技を競うことであろう。

サービスロボットにはいろいろあるが、

○ソフトバンクの「ペッパー」、
○富士ソフトの「パルミー」、
○デアゴスティーニ・ジャパンの「ロビ」、
○プレンプロジェクトの「プレン・D」

などがある。

（ロボット普及相談所）

経済産業省は、介護や農業など幅広い分野でロボットの普及をはかるため、平成二七年九月に、官民の協議会を立ち上げた。

実用化を支援する相談拠点の新設をめざすほか、学校現場でロボットを教材に採用して、優秀な人材の確保につなげる。安川電機やパナソニック、大学などが参加した。

設立したのは「利活用推進ワーキンググループ」といい、自治体や民間企業の現役幹部、学識者など十六名が幹事を務める。

拠点を全国に整備する方針で、相談員が、介護事業者とロボットの開発・販売業者を仲介したり、地元の大学や研究機関に、ロボット事業への参画を働きかけたりする。高等専門学校などの教材にロボットの採用を促す策などについても、情報を交換する。

政府はサービス分野のロボット市場を、二〇二〇年に、現在の二十倍の一兆二千億円規模にする目標をあげている。介護や農業、建設など、人手が主な担い手の分野では、ロボットの導入によって生産の向上が期待されている。

（産業用ロボット）

人間のように二本の腕を器用に操る「双腕ロボット」の登場によって、産業用ロボットは急速に進歩している。これまでのロボットは溶接や搬送など単純な作業を正確に速くこなしてきたが、最近のロボットは熟練技能者と同じような複雑な作業も可能である。そのため創薬や臨床検査、研究現場など、これまで使われなかった現場へも用途が拡っている。

たとえばセイコーエプソンが開発した双腕ロボットは、様々な形の部品の山の中から必要なものを取り出し、形や方向を判断して、両腕を使って必要な場所に正確にはめ込むことが出来る。またねじ回しも、人が使う電動ドライバーを器用に使って、作業をする。

双腕ロボットは部品や道具の位置と姿勢を、人の目に相当する二つのカメラなどで正確に認識する。そして両腕で部品を握ったり、掴んだり、挟んだり、また部品を持ちかえて、正しい方向に直すことも出来るのである。

現在の産業用ロボットは、一つの作業をスピーディに正確にこなすのに対して、双腕ロボットは様々な作業が出来る「多能化」を目指しており、更にはその域を超えて「人間でなければ出来なかった作業も出来る」能力も持つように進歩していくのである。

ロボットが複雑な作業をこなせるようになったのには、いくつかの技術的な進歩があるからである。

たとえば腕の関節をこれまでより一つふやして、七つにふやした。すると腕をひねる動きを加えることで人間のひじの動きを再現し、多様な動作が可能になった。指先には力を感じるセンサーを組みこんでおり、力加減を微妙に変えてゴムなど軟らかなものも、つかむことが出来る。画像認識技術の進歩で、微妙な位置のズレも修正できるのである。いずれも人間の上半身に似た形で、七

つの関節で腕を器用に動かし、人間が使う道具をそのまま使えるのである。

こうして、これまでロボットの利用が進んでいなかった食品や製薬という分野や、細かな組み立てなどへも、ロボットの進出が期待できる。たとえば抗がん剤の調合をしたり、菌を培養する作業に使えば、調合時などの計量精度や、研究者の安全性を高められる。

こうして人間の熟練した手腕に頼っていた研究の世界にも、双腕ロボットが進出し始めている。そこで研究作業はロボットに任せ、人間はアイデアを考えたり、実験結果を解析したりといった、研究本来の仕事に専念することができるのである。

最近では人手不足が深刻になっているので、人間がやってきた熟練作業を双腕ロボットに肩代りさせようというニーズが高まっている。そして人間に対しては、ますます創造的な能力が求められるようになるであろう。

国際ロボット連盟によると、世界で稼働している産業用ロボットは二〇一二年末で、百二十万台を超え、その二十五パーセントが日本にある。人間の腕のような形をした多関節型ロボットが主力である。自動車産業が最大の使用企業で、溶接や塗装工程で大量に使われている。人件費の高い先進国を中心に普及してきたが、今後は新興国でも大量に使われるようになるであろう。

このように産業用で存在感を示し、二足歩行でも話題を集めた日本のロボットが、さらに使いやすく、進化を続けている。

富山県南砺市にある川田工業では、専門知識がない人でも、組立て作業を指示できる人型ロボットを開発した。また三菱電機は最先端の触覚センサーを備えた新型を投入した。

また川田工業の子会社のカワダロボティクス（東京）では、パソコン画面をクリックすると、人の上半身に似たロボット「NEXTAGE」が、腕や首、腰を動かした。頭部と両手に、四台のカメラを積む。人と一緒に機械の組立て作業ができる。当初は動き方を事細かにプログラムで指定したが、最近はカメラを改良し、プログラム技術を使わずに、ロボット自身がカメラを頼りに手に取れるように改良したのである。

また三菱電機の可児工場（岐阜県）では、腕型ロボットが電力機器に端子を次々と差しこむ。二本指を使って、長さ二センチメートル、幅一センチメートルの端子をつかみ、最先端の触覚センサーで力を加減するのである。

工場全体では八台が稼働中で、従来は複数の産業用ロボットが分担していた複雑な作業を、一台でこなしている。

二〇一一年の発売以来、電機や機械、食品工場向けに、約一万台が売れたロボットの最新型である。

（着用型ロボット）

少子高齢化や人口減少が進む中で、労働力の不足解消の切り札として、人型ロボット（サービスロボット）の活用が期待されている。

そのサービスロボットが出来て、医療や、介護、農業など、人間と同じような繊細な動作が出来るようになるか、どうかは、着用型端末（ウエアラブル）の開発次第である。

合成繊維会社大手の帝人と、関西大学は、「曲げ」「ねじり」などの動きを感知する生地を使った「着用型センサー」を開発した。折れ曲がると電気を発生する「ポリ乳酸」の繊維を採用し、動きを電気に交換して、データ化するのである。

特徴は、柔軟な繊維で、快適な着心地を実現したのであり、医師がロボットを遠隔操作して手術を行ったり、職人技のデータを集積したり、繊細な動きが必要となる分野での活用が期待される。

帝人と関西大学は、三年以内の実用化を目指している。

さらにウエアラブル（着用型端末開発）は、人間の動きの「再現」から、「補正」する段階にまで進んでいる。

システムの概要は次のようである。

操作者は、自分の腕や指の動きを伝える、チューブ状と手袋状のセンサーを身につける。また、ロボットの目から送られてくる画像を見るための、ヘルメットをかぶる。その画像を見ながら腕や指を動かせば、ロボットが自分の動きを忠実に再現してくれるのである。

すでに鉛筆をつかむという細かい動作もでき、劇薬の製造現場や災害時などでの活用が見込まれている。

また、人間とロボットでキャッチボールをするような、動くボールを捉えるには、画像の認識や操作の時間差が課題である。そのためロボットの画像認識の速度を人間の十倍まで向上し、操作者より先回りしてボールの軌道を予測する、などの改良を進めている。

ロボットの開発はいろいろな分野で進んでいるが、身体に付けて運動機能をパワーアップする「装着型ロボット」の実用化が急ピッチで進んでいる。

活用の場は、医療、介護や、建設、農業、物流などの、多様な重労働の現場で、腰への負担を軽くするもので、さらに防衛や災害救助などでも利用が計画されており、用途は更に拡大する見通しである。

装着型ロボットは「パワーアシストスーツ」と呼ばれ、手足や腰などの動きを様々な方法で補助し、人間の歩行や重量物を運搬するとき、人間の能力を上回るパワーを発揮できるようにするものである。

代表的なものは、筑波大学発ベンチャー企業である、サイバーダイン（茨城県つくば市）の「ロボットスーツHAL（ハル）」である。

HALは人間の腰への負担を軽減するのを目的としたもので、重さは二・九キログラムと軽量である。お腹と太ももにベルトを巻いて、腰にロボットを取付ける。

人が物を持ち上げようとすると、腰や、やや上の部分に貼り付けたセンサーによって、脳から神経を通って筋肉に電気が送られる。そのとき信号の一部が皮膚の表面に漏れるため、これをセンサーで検知して解析する。そして信号に応じて、筋肉の動きをモーターで補助する仕組である。持ち上げる力の、25～40パーセントを補助するという。

医療機関や老人福祉施設など、国内外の一六〇施設に約四七〇体が導入され、障害者や高齢者の介護、歩行トレーニングなどに使われている。

脳の信号がうまく筋肉に伝わらず、足が動かない人が装着する。そして「歩こう」と考えると、HALが足を動かすのである。同時に、「歩いた」という信号が、足の神経を通って脳に戻る。この反復が、脳や神経、筋肉の情報伝達機能の改善につながるのである。

東京理科大学の教授も「マッスルスーツ」と呼ぶ、装着型の腰補助ロボットを開発した。

マッスルスーツは、肩から背中、腰から太ももにかけて装着する、動作補助装置である。

背中のフレームには、ゴムチューブで作った人工筋肉が二本、または四本取りつけてある。チューブを口で吸うと、フレームに取り付けられたボンベから、圧縮空気が人工筋肉に送られ、収縮する。すると、太ももに固定されたワイヤーが引っ張られて、背中のフレームが動き、上半身を起こす仕組である。人工筋肉を四本取り付けた標準タイプを装着すると、腰への負担が最大で三〇キログラム減るという。

訪問入浴介護を手がける、アサヒサンクリーン（静岡市）は、全部で五百台ある専用の介護車に、一台ずつマッスルスーツを導入している。

和歌山大学では、農業用のパワーアシストスーツ「LIBERO」（リベロ）を開発した。

ミカンなど果物のコンテナや、米袋を持ち上げるときや、大根の収穫時などの中腰での作業、果物のコンテナなどを運ぶときの歩行を補助する。

リベロは、身体を流れる電気信号を利用するのではなく、手袋の中にあるセンサーで、「コンテナを持ち上げた」と、察知するのである。腰の部分にある制御用コンピューターで装着者の身体の動きを分析し、電動モーターを駆動して、上体を起こす動きを助けるのである。靴の中敷きにもセンサーが組み込まれており、二、三歩くと、歩くときの力を補助して、急斜面も楽に歩くことが出来る。二十～三十キログラムの物を持ち上げるときに十キログラムを補助するという。

ぶどうや梨の棚栽培での剪定や収獲は、腕を上げたままの辛い姿勢の作業なので、頻繁に休憩が必要だった。

しかしこの作業の「腕が楽で長時間の農作業が可能になった」と好評なのが、農機大手のクボタ（大阪市）が発売した「ラクベスト」である。ラクベストは、上げた腕の角度を電池駆動でがっちり固定、休憩が不要になり、数日かかった作業が、数時間で終る農家もある。

一台の値段は十二万九千六百円で、これまでに約百台販売している。需要は拡大しており、三年後には年間一千台の販売を予想している。

また、電機大手のパナソニックの子会社、アクティブリンク（奈良市）では、物流施設などの重労働に使う力持ちロボットを開発した。背中に装置するリュックサック型で、上体の動きをセンサーで検出し、作業者がどんな動作をしようとしているのかを解析して、モーターを動かし、物を持ち上げるときの負担を約十五キログラム軽くする。

装着型ロボットの活用は、民間企業だけでなく、陸上自衛隊員へも及んでいる。防衛省は平成二十八年度予算案に、七億円の研究費を計上している。

現場に出動する陸上自衛隊員が装着し、機動力や装備品の携行力を高めるのが目的である。防衛省技術研究本部によると、陸上自衛隊員の通常の装備重量は二十～三十キログラムであるが、出動目的によっては四十キログラムに及ぶこともある。防衛出動や災害救助など、一刻を争う派遣現場で、隊員が長時間にわたって効果的に活動するには、有効な装置である。

政府は平成二十七年一月に、多様な分野でロボットの活用を促進する「ロボット新戦略」を策定した。

また東京オリンピックの会場で、座席が入口から遠い高齢者や、階段を頻繁に上り下りするボランティアに、装着型ロボットを貸す構想なども考えている。こうした国を挙げての戦略は、民間実用化への追い風となるであろう。

このように最近着目されているのが、身体に着けて使う装着型ロボットである。重い荷物でも楽に持てるため、建築業界や農業、また高齢者など、筋肉を使う人の作業に役立つと期待され、開発されている。

東京都葛飾区のベンチャー企業「イノフィス」では、「マッスルスーツ」を作り、販売している。工場や物流施設、そして入浴介護などに使われている。

背中のゴムチューブが背筋のように伸縮し、荷物を持つ力を助けてくれる構造になっている。チューブに圧縮

空気を送ると、膨らむ力がワイヤを通じて伝わり、腰を引っ張り上げ、太ももも部分を押すのである。

装着は簡単で、背負って、腰のベルトを締めるだけである。五・五キログラムという重さも、特に負担には感じない。

スイッチを入れ、三〇キログラムの箱を持ち上げてみると、まるで箱が自分の力で持ち上っているかのように、軽く持ち上がるのである。

このマッスルスーツは、三〇キログラム相当の補助力があるのである。

次は神奈川県藤沢市のサイバーダインの子会社が運営する、湘南ロボケアセンターの、ロボットスーツ「ＨＡＬ」である。

ＨＡＬの原理はユニークである。人が動こうとすると、脳から筋肉へ伝わる微弱な電気信号をセンサーで検知し、それによってモーターが作動する。腰を引き上げると同時に太ももを押し、動作の補助をする。補助力は力の出し方に連動して変わり、重いものを持つ強い力となるのである。

ＨＡＬの腰補助型は、大林組が導入するなど、建設や介護施設などで採用が進んでいる。

大和ハウス工業はこのロボットを、成長の突破口にしようとしている。

大和ハウスは、筑波大発ベンチャー・サイバーダインの約二割を出資する第二位の株主であるが、平成二十七年に、サイバーダインの装着型ロボットの新商品を発売した。

発売したのは、高齢者の歩行を助けたり、介助者の負担を軽くしたりする、ロボットスーツ「ＨＡＬ」の新製品三種類である。身体に張り付けたセンサーで、脳からの電気信号を読み取って、身体の動きを予測して手助けするのである。

この種の同社の製品は、これまでは一種類であったが、今回は三種類である。それぞれ、下半身、肘や膝、腰に装着する、「ＩＲＴ」（情報ロボティクス技術）である。

下半身に着けて足が弱った人の歩行を助けるロボットは、従来製品の改良型で、センサーの精度を高めて、重度の人でも使えるようにしたものである。足や腕のリハビリ用に膝や肘に着けるタイプは、一・五キログラムと軽量で、持ち運べるほか、寝ながらでも使うことが出来る。

腰に装着し、高齢者を抱え起こしたりする時の負担を軽くする、介助者向けの支援ロボットは、初めて売り出すものである。腰の負担を四割抑えられるという。

高齢化は日本だけでなく、世界の先進各国で深刻な問題になっている。ロボットは今後の海外開拓の足掛りになる可能性が大である。

パナソニックは平成二十七年九月に、重量物の上げ下ろし作業などを補助する装着型ロボット「アシストスーツ」を発売した。

人手不足や高齢化社会を背景に、腰への負担を軽減する機械を量産し、物流会社や建設会社などに販売する。予定価格は一台百万円程度で、年間千台の販売を目指す。

パナソニックの発売する「アシストスーツ・ＡＷＮ―03」は、荷物を持ち上げる時にモーターが駆動して、上半身を持ち上げ、腰にかかる負担を十五キログラム程度軽くする。炭素繊維を部品材料に使い、重さは六キログラムと軽量化した。

装着型ロボットは林業の現場作業を補助するスーツも開発されており、また、介護現場からの導入も強く、今後の展開が期待される分野である。

（ロボットスーツ）

日本空港ビルデングと筑波大学発ベンチャーのサイバーダインは、平成二十七年七月、羽田空港旅客ターミナルビルへの次世代型ロボットの導入で、業務提携した。

九月までに、サイバーダインが開発したロボットスーツや、人工知能を搭載した、掃除・搬送ロボットを導入する。

ロボットスーツは作業員の荷物の持ち運び負担を軽減する。また人工知能を搭載したロボットは、館内を二十四時間清掃するほか、指示した届け先に荷物を搬送する。

また東京五輪に向け、外国人観光客向けの案内用ロボットや、セキュリティチェックを行うロボットなどの開発も、検討している。

（倉庫で活躍）

日立製作所は平成二十七年八月に、

（物流倉庫で商品の取り出し作業を人間並みにすばやく出来る、自律移動型双腕ロボット）

を報道陣に公開した。平成三十二年の市販化を目指す。

この新型ロボットは、走行台車の上に昇降台、二本のアームを搭載し、センサーで自らの位置や取り出す商品などを認識する。取り出し作業にかかる時間を従来の七秒から三秒にまで短縮することに成功。高度な連携制御技術でスムーズに移動し、奥行き約二十センチメートル、重さ約一キログラムの商品を、棚から取り出すことができる。

物流業界では、近年、通販市場の拡大や、顧客ニーズの多様化に伴い、多品種少量の商品を扱う倉庫が増加している。それに対して新型ロボットは、さまざまな形や重さの商品に対応でき、作業の効率化が期待できる。日立製作所は二～三年後に、まずグループの日立物流で実用化し、五年後の市販化を目指す。

ロボット技術をめぐっては、筑波大学発ベンチャー、サイバーダイン（茨城県つくば市）がレンタル事業を始めたロボットスーツ「ＨＡＬ」（ハル）が、介護、福祉施設などの歩行訓練で使われ、高齢化が進む先進国で需要が高まると期待されている。

また、車の自動運転技術開発を手がけるＺＭＰ（東京都文京区）は、平成二十七年五月に、ディー・エヌ・エー（ＤｅＮＡ）とロボットタクシー事業の実現に向けた研究開発などを行う、合弁会社を設立した。そして平成三十二年に、東京都内で運転手のいない「無人タクシー」の運行を目指す方針を、明らかにしている。

ロボットは銀行関係にも活躍の場を拡げはじめ、三井住友銀行では現金の集配作業の現場に、ロボットベンチャーのサイバーダインが製造する、装着型ロボットを、平成二十七年に導入し、社員の負担を軽減した。

作業支援型のロボットは建設現場などで導入されているが、銀行での使用は初めてである。

導入するのは「作業支援用ＨＡＬ」という、腰に装着するタイプのロボットスーツである。物を持ち運ぶときにモーターが稼働して、腰にかかる負担を軽くするのである。

（荷下ろしロボット）

ダイフクは、トラックの荷台にロボットが自ら上がって、荷下ろし作業をするロボットを開発した。

食品や衣料品の物流センター向けで、製品や原材料が入った箱を、荷台からベルトコンベヤーへ移す。トラック到着後の荷物の仕分けや、保管といった作業の、効率化に役立ててもらう。

四～六軸の関節を備えた産業用ロボットと、自動走行する台車を組み合わせた。距離センサーで周囲の人や障害物を把握して、ぶつからないように荷台に上がる。

三次元センサーで箱を自動認識し、空気で吸着したり、アームで挟んだりして持ち上げる。三十キログラム程度までの荷物を運搬できる。二〇一三年に買収した米ウィンライトが開発した。まず二〇一五年十月に米国市場向けに発売し、初年度に数十台の売り上げを見込み、米国以外での販売を目指す。

（会話もできる）

ホンダ電気通信大学などの研究チームは、『自然な話し言葉を理解するロボット』を開発した（平成二十七年）。

「テーブルのお茶を取って、ソファーに運んでくれ」といった複数の動作を含む指示や、人によって異なる表現も正しく理解し、言われた通り動作をするのである。子供からお年寄りまで、自然に使える家庭用ロボットへ

の応用をめざす。

ロボットは身長約一メートル。ホンダの研究開発子会社である、ホンダ・リサーチ・インスティチュート・ジャパン（埼玉県和光市）と、電通大の中村友昭助教らが共同で開発した。

同じ動作を指示するのにも、「テーブルのお茶を取ってソファーに運んで」とか、「お茶をテーブルからソファーに持ってきて」など、人によって表現方法は様々でも、ロボットは迷わずに、同じように動作するのである。

話し言葉の中から、操作対象を表す名詞と、操作内容を表す動詞を抽出し、それらの関係を判断する新たな人工知能を開発して、搭載した。一つの文章に三つの命令が含まれている場合まで、対応できる。

実験では、ペットボトルのお茶をテーブルへ取りに行き、指定したソファーに届けるという一連の命令を、話し言葉から認識して、実行するのである。これまでにも音声の指令で動くロボットはあったが、決ったパターンの短い文章しか理解できず、操作する人がそれを覚える必要があった。

人間に頼むのと同じ感覚でロボットを操作できれば、特別な準備は必要ない。家庭で高齢者の自立を助けたり、家事を手伝ったりする身近なロボットとして利用できる。

（女性ロボット「エリカ」）

人工知能を使って、身ぶりを交えて人とスムーズに会話ができる、人間そっくりの女性型ロボット「ＥＲＩＣＡ」（エリカ）を、大阪大や京都大などの研究チームが開発し、平成二十七年八月に都内報道陣に発表した。

エリカは二十三歳の女性という設定で、鼻と口とあごが一直線に並ぶなど、美人とされる顔の特徴を持たせる顔をコンピューターで人工的に合成した。

周囲に置いたマイクロやセンサーから情報を集めて、相手の声や動きを認識し、自律的に会話が出来るのが特徴である。音声は声優が録音した声を基に再合成して、人間らしく、目や口のまわり、首など、十九ヵ所を空気圧で動かし、さまざまな表情ができる。

エリカと他のロボットの違いは、

「エリカは言葉だけでなく、視線や身体の動きなども含めて、人のようにお話しできる」ことである。

研究チームは今後、エリカがより自然に会話したり、一度に複数の人と話したりできるように研究を進めていく。そして、

「より人間に近いロボットを実現させ、将来的には、会社の受付け事務や、カウンセリングの仕事ができるようにしたい」

と言っている。

（デジタル秘書）

交流サイト（ＳＮＳ）最大手の米フェイスブックは、平成二十七年八月、人工知能（ＡＩ）を基盤にした、デジタル秘書サービス「Ｍ」を発表した。

デジタル秘書の分野では、

○アップルの「シリ」

○米グーグルの「グーグルナウ」

○米マイクロソフトの「コルタナ」

などが先行している。

この秘書サービス「Ｍ」は、アップルの「シリ」に対抗するもので、たとえば「Ｍ」に、

「今度の旅行先でおすすめのレストランを教えてくれ」

と尋ねると、ＡＩがネット検索の結果を返すだけでなく、担当者がウエブサイトや電話で予約までしてくれる。「Ｍ」の運用にあたっては、フェイスブックに投稿された個人情報は当面使わず、メッセージのやりとりで、利用者が提供した情報を基に好みなどを判断するという。

ＡＩの研究は近年急速に進み、精度も向上しているものの、利用者の曖昧な質問や、複雑なリクエストを自力で正確に理解できるようになるのには、まだ時間がかかる。フェイスブックはコストが割高でも、人力を使うことで利用者の満足度を高め、技術的な進歩につなげたい考えである。

フェイスブックは二〇一三年十二月に、ＡＩの研究所をシリコンバレーに設立した。そして、ディープラーニング（深層学習）と呼ばれる研究分野の第一人者の一人で、ニューヨーク大学教授の、ヤン・ルカン氏をトップに招いた。ニューヨークとパリにも研究拠点を拡大した。人材獲得でも、アップルやグーグルなどとの競争が激しくなっている。

食品メーカーも生産ラインへのロボットの導入を急速に進めている。

食品メーカーは加工を中心に専用機械による自動化に取り組んできたが、工程間は単純作業でも、人が担うケースが多かった。しかし限定品や容量の違いで商品数が増え、近年は商品サイクルが短くなった。ロボットはプログラミングの変更で自在に動くため、専用機械よりも、多品種少量生産に対応しやすい。

人手不足や原材料費の高騰でコストが増すなか、自動化により生産効率を高めると同時に、品質の安定や従業員の負担軽減にもつなげようとするのである。

キューピーは、箱詰めやラベル貼りなどの作業を、ロボットに置きかえるなど、国内主力工場で人手に頼っていた作業を、順次ロボットに切りかえる。ドレッシングなどを製造する挙母工場では、容器にフィルムやラベルなどを自動で貼りつける、三菱電機などのロボットシス

テムを平成二十七年より導入した。投資額は数千万円で、容器の形や大きさにかかわらず作業できる。これまで紙のラベル貼りは従業員による手作業で、ずれが生じないように物差しを使っていたが、ロボット一台ですべてが対応出来るようになった。

鳥栖工場（佐賀県）でも平成二十六年に、ベビーフードのラインに箱詰めロボットを導入した。箱の組み立てから梱包まで、一台でこなし、従来二人分の作業をこなしている。

冷凍食品大手のテーブルマークは、平成二十五年から毎年十五億円を投じ、各工場の包装工程のロボット化を進めている。段ボールの組み立て工程では、従来従業員が三人必要だったのを、一人で出来ている。

トヨタ自動車は平成二十七年九月に、障害者の生活を支援するロボット（ＨＳＲ）の開発で、外部研究機関と連携する新組織「ＨＳＲ開発コミュニティ」を発足した。新組織は、当初は共同開発する大学など数機関が参加し、さらに年内に公募で企業や大学など約十機関を選定し、平成二十八年四月から二年契約を結ぶ予定である。

ＨＳＲは円筒形のボディに備えた長さ約六十センチメートルの「腕」を使い、歩行が困難な障害者などの代わりに、室内の物を取ってくるなどの用途を想定する。

トヨタは平成二十四年にＨＳＲを発表してから、大学などと一緒に改良をつづけてきたが、今度はより幅広い枠組みを作り、開発の加速や、技術革新につなげていこうというものである。

写真販売サービスを手掛けるユニファ（名古屋市）は、子供の写真を自動撮影するロボットを開発した。顔と表情を自動認識して撮影し、同社のネット販売システムを活用して写真を販売する。平成二十七年八月に保育園や幼稚園などへ貸出しを始める。

対話ロボット開発のヴィストン（大阪市）と共同で「ＭＥＥＢＯ（みーぼ）」を開発した。高さが約二十八センチメートルのロボットで、「写真をとるよ」、「もっと笑って」などと、子供に話しかけながら撮影する。緊急地震速報の通知や、クイズを出す機能も搭載した。

ユニファは幼稚園などで撮影された子供の写真を、専用サイトで購入できるサービスを展開している。

みーぼが撮った写真も、この仕組みを使って手に入るようにする。

つくば学園都市では大規模マンション「ウエリスつくば竹園」が建設中であるが（平成二十七年）、そこでロボットが活躍している。ロボットの名前は「ウエリボ」といい、このマンションギャラリーで、物件案内の仕事をしている。

ウエリボの名前の由来は、マンションの名前の「ウエリス」と、「ロボット」を組み合わせたものである。つくば学園都市は、科学の研究や教育に力を入れる文教都市であり、それを象徴するようなロボットにしたとのことである。

ウエリボは、マンション完成模型の前で客を待っており、たとえば客が、

「このマンションの見どころはどこですか」

と質問すると、

「僕のおすすめはキッズラウンジです」

と答えて、応待するのである。

子供連れの家族に特に人気が高いということであった。

（ペッパー）

ソフトバンクが自社開発して、平成二十七年六月に一般向けに発売した人型ロボット「ペッパー」が、わずか一分間で、初回販売分の一千台を完売した。ソフトバンクは、電子機器の受託製造サービス世界最大手、台湾・鴻海精密工業などとの共同出資会社を通じて、量産体制の確立を急ぐ。

ソフトバンクは平成二十七年六月二十日午前十時から、インターネット上の専用サイトで受付けたところ、一分間で完売したのである。ペッパーは人の感情を理解したり、人やニュースなどに接して、自ら感情を表現したりできるロボットで、スマートフォン（スマホ）のように、アプリ（応用ソフト）を追加で取得することで、用途や楽しみが広がる。

西武は平成二十七年七月四日、池袋本店で、「ペッパー」を中元商戦の助っ人として迎えた。ペッパーをアルバイト派遣サービスとして採用した百貨店は、西武池袋本店が初めてである。夏のボーナスの支給が本格的に始った最初の週末とあって、家族づれなどがペッパーの頭をなでるなどして、ふれ合いを楽しんだ。

西武池袋本店では、ペッパー二体が、午前十時の開店と同時に、従業員たちと一緒に来店客を出迎えた。開店後は七階の中元売り場で、商品のチラシが入ったテッシュを配ったり、アサヒビールの中元商品を勧めたりした。

ペッパーは七月五日まで働いた。アルバイトの時給は一体が一五〇〇円で、技術者にも同額の時給を支払うという。

（医療ロボット）

厚生労働省によると、七十～七十四歳で、介護が必要な人の割合は、六・三パーセント。八十歳～八十四歳では二六・九パーセント。九十歳超では七十パーセント近くに跳ね上がる。超高齢化社会は超介護社会でもある。

若い世代に代わり、介護の担い手として注目されるのが、ロボットやＩＴ（情報通信）技術である。

平成二十六年十月に、富士ソフトが神奈川県藤沢市の病院で行った実証実験では、身長四十センチメートルの人型ロボット「パルロ」が、

「両肩をグット持ち上げて、ハイ、ストン」

と、高齢者に体操の実演をして見せた。参加した人間は、

「動作が人間そっくりで驚いた」

と言っていた。富士ソフトでもロボット事業部のフィールドセールス室長は、

「いずれ高齢者の運動指導を任せられる」

と自信をみせていた。

神奈川県は平成二十五年、国の地域活性化総合特区の指定を受けた。パルロのほか、リハビリを支援する小型機器や、マイクロ波による見守りシステムの開発が進んでいる。県の産業振興課では、

「企業と大学、医療機関が連携するロボット開発の集積地にしたい。雇用創出も期待できる」

と言っている。

トヨタ自動車は歩行リハビリ用ロボットを、藤田保健衛生大と開発し、臨床研究を始める。自動車製造ラインで使う産業ロボットや、制御技術も生かした。

「日本のロボットの基礎技術は、世界の先頭を進んでいる」

と、パナソニックロボット事業推進センター所長を務めた本田幸夫教授は太鼓判を押すが、

「このままでは実用化で後れをとる恐れもある」

と、つけ加えることも忘れない。

課題は人材育成と、ルールの整備である。公的保険の適用や、事故が起きたときの補償などのルール作りもこれからである。

介護ヘルパーを対象にした、日本介護クラフトユニオンのアンケート調査では、九十七パーセントが介護ロボットの活用を前向きに捉えている。腰痛などの仕事の負担が軽減されるからである。

「今後、介護ロボットを介護業界で活用すべきか」という問に対しては、三十二パーセントが「活用すべきだ」と回答し、六十五パーセントが「懸念材料がなくなれば活用すべきだ」と回答し、合計で九十七パーセントであり、ほとんど全員が活用すべきだという意見であった。

東京工業大学と、東京医科歯科大学発の医療機器ベンチャー、リバーフィールド（東京・新宿）は、平成二十七年八月に、内視鏡を使う外科手術向け支援ロボットを売り出した。

医師の助手に代わって内視鏡を持ち、固定したり、動かしたりしてサポートする。執刀医は頭部に装着したセンサーを通じ、頭の動きに合せて、内視鏡を上下左右に動かす。

支援ロボットは、東工大と東京医科歯科大学が、共同で開発した。空気圧で駆動するのが特徴である。電動モーターによる駆動に比べて、繊細な動きになるという。価格は一五〇〇万円程度である。

（オクトパス）

地震や津波が襲った災害現場の、がれきが散乱する過酷な環境の下で、活躍が期待されるロボットがある。菊地製作所ものづくりメカトロ研究所（東京都八王子市）が、早稲田大学次世代ロボット研究機構と共同開発した、

（オクトパス）

である。四つの走行ベルトに四本の腕を搭載し、腕で自分自身を地面から浮かせて、大きな段差も乗り越える。災害対応ロボット産業の集積を目指す福島県の支援を受けて、平成二十六年春から開発に着手している。無線操縦機能や岩石切断用のファイバーレーザーを追加するなど改良を続け、平成二十八年には福島での実証実験に臨む予定である。

研究員の関雅俊さんは、「オクトパスの開発は、原発廃炉作業も想定しており、幅広い現場で活躍できる」と、自信を強めている。

（災害用ロボット（レスキューロボット））

平成二十三年の東日本大震災を機会に、災害用ロボット（レスキューロボット）の開発も盛んになってきた。

災害用ロボットの研究が始ったのは、平成七年（一九九五）の阪神大震災が起きた時からである。被災者から「家族が生き埋めになっているから助けてくれ」という通報で、震災の場に救助車がかけつけても、鉄筋コンクリートの建物の下敷きの人間を救い出せない。狭い空間を進む細長いへび型のロボットが必要なのであった。

そこで災害用ロボットの研究が始った。この平成七年（一九九五）は、レスキューロボット工学の研究元年といえよう。

しかし産業用ロボットでは世界シェア五割以上を握るロボット大国日本も、災害用ロボットはあまり普及していなかった。

そしてそのレスキューロボットが再び脚光を浴びたのが、平成二十三年の東日本大震災であった。京都大学の松野教授が中心になり、人が立ち入れない建物内部を調べるカメラや、熱赤外線センサーを搭載した探索用ロボット「コーガ3」を、岩手県や青森県に持ち込んだ。

しかし注目されたのは、軍事用や原発災害用として実績がある、欧米のロボットで、特に力を発揮したのはアメリカ製ロボットだった。

東日本大震災では、東京電力福島第一原発事故の発生

で、高線量の場所でも遠隔操作で、がれきの処理などが出来るロボット開発の必要性が急浮上した。そのため日本のロボット開発は、災害用に重点が移された。

（火山対策ドローン）

警備大手の綜合警備保障（ＡＬＳＯＫ）は、自治体の火山対策を一括で支援するサービスを開始する。ドローン（小型無人飛行機）などを使い、火山の撮影や分析から、非常食の管理まで手掛ける。

全国的に火山活動の活発化が目立つなか、きめ細かい支援メニューを提供し、自治体が持つ監視網や防災対策で対応しきれない部分を補うのである。

火山を通常時に定点観測するほか、噴火時には被害の確認も手掛ける。ドローンを使って噴火口に近づいて局地的に撮影したり、人工衛星や航空機で撮影した画像データーで、広範囲な火山の活動状況を監視したりする。

ドローン運航では、空撮事業のヘキサメディア（埼玉県ふじみ野市）と協力し、高精度カメラを積む。

ドローンの飛行料金は、平常時は一日八十万円からである。機体が損傷しやすい噴火時は百万円～二百万円を、上乗せする。

衛星撮影では、ＮＴＴ空間情報（東京・台東）と組み、航空機撮影はアジア航空と組む。

必要な人数分の非常食や、ヘルメットなど、防災備品の管理も代行する。

土石流発生を迅速に検地できるシステムも、提供する。

（インフラ点検）

橋やトンネルなどの公共インフラの点検で、ロボットの活用を促進するための規制の見直しを、政府は進める。ロボットの技術の向上で、人が行う作業の補助や代替が可能になったためで、平成二十八年度にはロボットでも出来るように、規制を緩和する。老朽インフラの点検が増えるなかで、技術者の不足に対応するとともに、点検の精度を上げて、インフラの安全性を高め、同時に技術開発を促して、ロボットを成長産業に育てる狙いもある。

政府の規制改革会議で、国土交通省などの関係省庁とともに、不要な規制の撤廃や、新ルール作りに着手する。

橋やトンネルの維持管理には、現在では人間が高い所に登って眼でひびが入っていないかを確認したり、また設備の表面を金づちで叩いて、その音で強度を確かめたりしている。

これをカメラ搭載型のドローンや、集音器付きのロボットに切りかえることを想定している。ダムの点検には潜水士が水中に潜ってコンクリートの劣化を調べているが、これも水中撮影が出来るロボットに代えるのである。

このような公共インフラの保守作業については、ロボットの使用についての法令が不明確であるので、そのルールを明確にして、ロボットによる作業を推進するのである。

またドローンについても、平成二十七年七月十四日に閣議決定した航空法改正案は、空港周辺や住宅密集地での飛行は禁じたが、安全が脅かされない地域では飛行を認める方向で、政省令を調整する。

電波法も見直し、インフラ点検に使うドローンや、無人駆動ロボットのための電波帯を、新たに決める方向で検討している。

政府がロボット活用を進める背景には、人材の不足がある。インフラの点検作業を行うのは、地方自治体などの委託を受けた建設作業員などである。しかし少子高齢化などで、技術や経験を持つ後継者が不足し、点検頻度が落ちる問題が起きている。

このままでは安全対策に支障が出ると政府は判断し、省力化や点検精度の向上につながるロボットの活用を進めるのである。

企業も需要を見越して、ロボットの実用化を急いでいる。日立ハイテクノロジーズは、高圧送電線の検査を自動化するロボットを販売する。送電線にぶら下がって走り、表面の傷を調べるロボットで、東京工業大学発のベンチャー企業ハイボットから、独占販売権を得た。

パナソニックはダムの壁面を点検する水中ロボットを開発中である。ＮＥＣや富士通はトンネル、橋の点検に使うドローンの開発を進めている。

世界的な公共インフラの老朽化で、頻繁な点検が必要な施設は、国内外で急増している。経済産業省によると、インフラの点検に関する市場の規模は、世界全体で直近の五十億円から、やがては一兆円に増える見通しである。

政府は規制緩和を通じて、点検ロボットの実用化や技術開発を促し、関連産業の育成を側面支援し、世界の市場で三割のシェアを握る目標をあげている。

（中国のロボット工場）

中国の山東省に、ロボットを製作している工場がある。電子機器の受託製造サービス（ＥＭＳ）で、世界最大手の、台湾・鴻海（ほんはい）精密工業の煙台工場である。この工場では、ソフトバンクの人型ロボット「ペッパー」を製造している。

煙台工場は二〇〇五年にスタートして、十年の歴史を持つ工場である。パソコンから液晶テレビ、ゲーム機などを作り、最近、ロボットにも手を伸すようになった。煙台工場は山東省にあるので、日本に近いという利点がある。ソフトバンクの「ペッパー」を製造するには、ソフトバンクと密接な連携が必要であるので、煙台工場でロボット「ペッパー」を製造することにしたのである。

その工場の中に入ってみると、ロボットの腕と脚、足元、胸など、工程別に区切られた、長さ二十メートルの

作業ラインが、ずらりと並んでいる。

ラインごとに白い制服の組み立て作業者が二十人ほど配置され、約三十時間かけて組み立てていく。稼動時間は午前七時四十分から午後六時四十分までである。

最終組み立て後の検査工程では、軽快なダンス音楽に合せて、ペッパーが踊る。もちろん楽んでいるわけではない。すべての部位やセンサーが正常に作動しているかを確認するためである。

組み立て作業員は現在七百人であるが、今後千人にまで増員し、生産能力を増強する予定である。

（米軍ドローン）

米国防総省は、情報収集や監視などに利用している、軍事用無人飛行機（ドローン）の飛行回数を、四年間で五割増やす計画である。過激派組織「イスラム国」など、テロとの戦いへの活用を広げるためである。

現状は一日に六十回の飛行回数であるのを、二〇一九年に九十回にふやす。二〇一四年には百五回前後だったが、アフガニスタンなどで国際テロ組織アルカイダの拠点の偵察や、空爆に使われはじめたのがきっかけで、飛行が急拡大した。現在は主に空軍が無人機の運用を担っているが、陸軍や特殊作戦部隊などにも、拡大する計画である。

ドローンの利用を拡大する地域として、ＩＳなどテロリストの掃討作戦を進めるイラクやシリア、北アフリカなどのほか、親ロシア派武装勢力の攻勢が続くウクライナ、中国が領有権争いを引起こす南シナ海などが、対象となる見通しである。

一方、無人機による空爆で、これまで三千人以上が死亡したとの推計もある。民間人が巻きこまれるケースも増え、人道上の問題を指摘する声も強くある。

また、遠隔操作で敵を空爆する無人機パイロットの中には、深刻な心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）に陥る人も多く、パイロット不足が続いているという。

（原子炉調査ロボット）

国際廃炉研究開発機構（ＩＲＩＤ）と、日立ＧＥニュークリア・エナジー（日立ＧＥ）は、平成二十七年二月に、東京電力福島第一原発一号機の、格納容器の内部調査を行う、無人ロボットを新開発した。

同原発の廃炉作業では、原子炉内で溶け出した核燃料（デブリ）を取り出すが、それに先立ち、ロボットで格納容器内の細かな状況把握を行うのである。

開発した無人ロボットは、高い放射線量の中でも動き、炉内で形状が変化して障害を回避できる、（形状変化型ロボット）である。

線量計や温度計、調査用カメラなどを搭載している。

そして格納容器に入る前の細いパイプ内を通過する時は、棒状に細長く変形し、その後格納容器内に入ると、凸凹のある床面でもスムーズに走行できるよう、コの字形に変形し、内部状況を把握できるように工夫してある。

まず格納容器一階部分の通路などの状況を調査し、さらに地下階にある原子炉圧力容器を支える構造物の周辺を調査する予定となっている。

（つづく）

関東管領始末記⑳

御舘の乱

千坂精一

一

二月に入ると、謙信が正月十九日付で発令した、『関東遠征の大動員令』を受けた越後軍団の諸将や近国の諸将から続々と、『出陣承諾書』が提出されて遠征の士気は弥が上にも盛んになった。

そして兵力を調達した部将たちが春日山城下の府内に集結し、溢れた大軍団は近隣の村郷にまでおよんだ。

そこへ討伐相手の北條氏政と武田勝頼から使者がきて、謙信と和睦し上洛に協力する旨の誓書が届けられた。

氏政は謙信に決戦を挑まれては勝算がなかったから矛先を信長討伐に向けさせるべく義弟勝頼と図って協力を申し出たのであろうし、勝頼にしてみても謙信に与することが先年長篠設樂ヶ原（愛知県新城市）での大敗の汚名を挽回する好機と考えて氏政に乗ったのであろう。

ともあれ、このことでひとまず関東の平穏は保たれたので、謙信は関東への出陣を上洛大遠征に切り替えた。

だが、いよいよ二月十五日の発向が迫ってきた九日の午刻（正午）ごろ、突然春日山城中で異変が起こった。

謙信が厠で倒れたのである。脳卒中であった。

謙信は酒豪で使用した馬上杯が遺っているから行軍中も飲んでいたのであろう。肴は梅干しを好んだという。

大酒と塩分の過剰摂取では頑健な身体も堪らない。

酒豪の謙信は以前にも軽い脳溢血を起こしていて足が不自由になったので青竹を杖にしていた。まえに述べた鶴岡八幡宮の社前で成田長泰を殴打したのはこの青竹である。合戦のときには采配替わりにしていたという。

医師団による懸命な治療や医薬も効なく謙信は昏睡状態のままなので、見守る宿将たちは眉を曇らせていた。

謙信は景勝、景虎のいずれを後継者にするのか決めていなかったので宿将たちはそのことが気掛かりだった。

直江大和守景綱の後室（未亡人）が枕許にすすんで、「御家督は景勝公へお譲り給うや」

そう耳許で大声で叫んだところ謙信は微かに頷いたようだったので、並居る宿老たちは安堵したという。

だがこれが事実なら揉めるはずがない。謀叛したのは景虎だとするためにのちにつくった話ではなかろうか。

謙信はついに意識が戻らぬまま四日後の十三日未刻（午後二時）に息を引き取った。享年四十九歳であった。

『上杉家御年譜』には、

このとき謙信は二月になぜか京から画工を招いて自分の肖像を描かせているし、そのうえ、

四十九年一睡夢
一期榮華一盃酒

という句まで詠んでいる。

これが最後の寿像となり辞世の句となったのであるが、人は誰しも自分の寿命を知るはずがないから辞世の句はのちに誰かが作ったものではないかと疑いたくなる。

だが、よく考えてみれば生涯の年数はあとで誰かが書き替えればいいわけでやはりこれは謙信の作であろう。

余計な推量はひとまずおくとして、この謙信の急逝は家臣団にとってまさに〝巨星墜つ〟の衝撃だった。

『上杉家御年譜』の天正六年三月十二日のところにも、

「未刻　御病悩相協ス　享年四十九齢ニテ遠行シ玉フ
越後ノ貴賤暗夜ニ燈ヲ失ヒタルカ如ク　何カ議ン　諸國ヨリ来リ集ル軍兵等モ此變故ニ逢フテ　進退度ヲ失ヒ愁涙袂ヲ濡ス　抑今般大等ヲ議リ　其年功ヲ遂スシテ吾儕空ク帰國セハ武夫ノ本懐何ノ時カ達ンヤ　唯管領ノ御爲ニ悲ノミニ非ス　天下國家ノ爲ニ是ヲ哀ム」

そう記述されている。

葬儀は謙信が天文二十二年に最初の上洛をしたとき、高野山の総本山金剛峯寺に参詣して無量光院住職阿闍梨清胤を訪ね眞言密教に入門していたことから導師は春日山北丸大乗寺の住職長海法師がつとめて執り行われた。

諡号は〈不識院殿眞光謙信法印大阿闍梨〉である。

遺骸は遺言により甲冑を装着して甕に納められ、上洛大遠征の出陣姿のまま不識院内に埋葬された。

謙信の石棺は慶長三年（一五九八）秀吉から會津へ国替えを命ぜられたときに春日山から會津へ移したし、同六年家康に米澤へ国替えさせられたときも同様に會津から米澤へ移していて、現在歴代藩主の御霊屋が左右に並ぶ上杉家墓所（米澤市御廟）の正面奥に安置された。

謙信の死は越後國の住人たちにとって暗夜に燈を失ったも同然の思いであったというが、今日まで庇護され安楽な暮らしを与えられてきた古管領憲政にとっては暖かい日差しで柔かく包み込んでくれていた日輪を突然何者かに奪われてしまったような不安と恐怖に襲われた。

「跡目は景勝なのか、それとも景虎なのか」

それが憲政にとっては心配なのであった。

もし北條氏康の子景虎になれば、宿敵関係の憲政は用捨なく討たれるか追放されるのではないかと戦いた。

たしかに謙信は生前二人の養子のどちらを後継者にするか定めていなかったが、前に触れた直江景綱後室の話は別にしても、景勝は父政景が横死したとき十歳の少年だったので謙信が手許へ引き取り春日山城外郭の中ノ城に上田長尾の老臣宮嶋三河守を付けて保護させている。

そして天正四年（一五七六）正月十一日長尾喜平次顯景だった景勝に上杉の名字と弾正少弼の官位を譲った。

謙信が将軍義輝から与えられた称号である。

もう一人の養子景虎は北條氏秀のころはじめ武田信玄の養子になっていたが、北條・今川・武田の三国同盟が破棄されて小田原へ戻されたあと、こんどはあらためて上杉の人質に送られてきたのであった。

謙信は景勝同様氏秀をも養子にすると、上杉三郎景虎を名告らせ姪（景勝の妹）を娶らせて二の丸においた。

景虎は景勝の一歳年長であった。

むかし、ある歴史雑誌にこの二人の将来について、

「もし謙信が老齢まで生きつづけていたら、越後生まれで人脈のある甥（姉の子）の景勝を越後国主に、北條氏政と兄弟関係にある景虎を関東管領に据えたであろう」

そう書いたことがある。

いまでもその思いは変わらない。

私がそう断定する根拠として、さきに触れた天正三年の『軍役帳』に景勝は中ノ城にいたことから御中城様として一門六人衆の筆頭に挙げて軍役を課しているが、そこに景虎の名はないことでも謙信の心中が推し量れる。

そんな下種の勘繰りは扨置いて先を急ぐことにする。

三月十五日に挙行された謙信の葬儀がおわると動員令を受けて集合した諸将は三々五々国許へ帰っていった。

春日山城下が静謐を取り戻し、近臣の者たちもそれぞれ落ち着いたころに、突然城内で異変が起こった。

中ノ城の景勝が直江景綱の後室に促されて素早く国主の座本丸（實城）に移って金蔵を抑えたのである。

それを知った景虎の近臣たちは本丸を奪取しようと二の丸から攻め上ったが、本丸は流石に要害堅固で攻め倦み形勢不利になったので、ついに景虎は二の丸を捨てて妻子を伴い憲政が安穏に暮らしている御舘を占拠した。

御舘は土塁と空堀だけで籠城に足る備えはなかった。

憲政は宿敵氏康の子の景虎が侵入してきたので危険を感じて奥に逼塞していたが、その様子はなく安堵した。

こうして景勝と景虎が睨み合っているあいだにそれぞれを支持する武将たちが両陣営に続々と集まってきた。

謙信の甥で最初に養子になった景勝を支持する部将のほうが多いと考えられていたのだが、いざ対立すると意外なことに景虎の許に集まった部将のほうが多かった。

景虎には兄の北條氏政と妹婿の武田勝頼が控えているから、景虎側のほうが絶対有利と判断されたのである。

景虎はその援軍を待っているようで、動かなかった。

そうなれば景勝側は北條、武田の援軍がくるまえに決着をつけなければならなかったから戦略に苦慮した。

あれこれ対策を回らしているうちに武田勝頼が数多の軍勢を率いて信濃との国境を越え、頸城郡大出雲原（妙高市小出雲）まで迫ってきているとの急報が届いた。

武田の大軍に春日山城を包囲されて糧道を絶たれれば、堅城を捨てて野戦を余儀なくされ衆寡敵せずになる。

重臣や有力部将たちが鳩首凝議した結果、

「背に腹はかえられぬ、和睦するより仕方あるまい」

そう結論づけられた。

その武田軍は、景勝の出方を窺っているかのように大出雲原で人馬を休めたまま動かずにいた。

だが、なぜ動かぬのか不気味でもあった。

このとき勝頼は義兄氏政に頼まれて出兵したものの、

「北條軍が小田原を発向した」

報がいっこうに届かぬので不審を抱きはじめていた。

氏政は父氏康の死後謙信との盟約を破棄して勝頼の父信玄に乗り換えた表裏者であるから信用できなかった。

（このたびも共同で景虎を支援しようと示し合わせておきながら、自分は高みの見物を決め込むのではないか）

そんな疑念が湧いてきて大出雲原で様子見に出たのであった。これが景勝にとっては物怪の幸いになった。

春日山城では景勝と諸将が協議して具体化を急いだ。

探索ったところ、勝頼の寵臣跡部大炊介と長坂長閑齋に賄賂を贈れば両名がよしなに取り計ってくれるということを突き止めたので、さっそく冨永清兵衛と吉田十右衛門を甲斐府中の躑躅ヶ崎館へ送ることにした。

和睦の条件については景勝が、

「東上野の所領に黄金一万両を添えるではどうじゃ」

そう切り出した。

諸将は景勝の気前のよさにおどろいた。

景勝はみなを納得させるように、

「勝頼は長篠で大敗いたしておるから領地も軍資金も喉から手が出るほど欲しいに違いない。小出しに釣り上げていったのでは揶揄われているとみて乗ってはこまい」

そう諭した。

交渉事は相手が納得する条件を出さねば成立しないことは勿論だが、そこのところをさらに耳を疑う好条件を提示すれば即座に飛びついてくるにちがいないのだ。

諸将は景勝の桁外れな椀飯振る舞いに舌を捲いた。

だが、景勝は別に惜しくはなく意に介さなかった。
それというのは自分の生命と越後一國の対価と思えば安いものだったし、もとをただせば東上野は古管領上杉憲政の領国であり、黄金は謙信が本丸の金蔵に貯えてあった三万両の一部なのだから、どちらも他人の所有物だったわけで、自腹ではないので痛くも痒くもなかった。
甲府へ着いた冨永と吉田は跡部と長坂に会って賄賂を与えると景勝の口上を伝えて勝頼への取次を依頼した。
跡部と長坂は賄賂の虜になって景勝からの和睦の申し入れを好意的に解釈して、勝頼に積極的に勧めた。
勝頼にしてみてもこの条件は垂涎の的であった。
氏政とともに景虎に助勢したところでこれほどの見返りがあるとは思えないし、景勝とは和睦に同意するだけで手に入る棚牡丹だから天秤に掛けるまでもなかった。
勝頼は信疑のほどが定かでない氏政よりも即断即決する景勝のほうが確実性があると踏んで和睦に同意すると、こんどは小田原勢を迎え撃つための布陣を固めた。

三

そのころ北條の援軍がようやく三國峠に到着した。
はじめ景勝は、北條軍侵攻の抑えに北上野廐橋城の北條輔廣、景廣父子と沼田城の河田重親を当てにしたのだが、どちらも景虎支持に回ってしまったので、上田荘坂戸城の兄長尾義景を頼みにせざるを得なくなった。
このとき北條軍を率いてきたのは氏政の舎弟北條新四郎となっているのだが、それがはたして誰なのか。
氏政の弟は景虎のほかに五人いる。列記してみると、
瀧山城（八王子市高月町）の氏照。
鉢形城（埼玉県大里郡寄居町）の氏邦。
韮山城（伊豆の国市韮山）の氏規。
唐澤山城（佐野市）の氏忠。
小机城（横浜市港北区小机町）の氏光。
である。
三國峠に近いのは鉢形城の氏邦と唐澤山城の氏忠なのだが果たして誰だったのか寡聞にして不明である。
ともあれ、八月下旬に三國峠を越えて侵入してきた北條軍は、景勝の兄長尾義景の坂戸城の支城樺野澤城（南魚沼市塩澤）を奪取したものの、長尾勢の頑強な抵抗に遭って動けず、徒らに糧米を減らすのみであった。
北條軍が大軍ならば一気に圧し潰されるところだが、申し訳程度の軍勢だったので長尾勢は持ち堪えられた。
景勝は北條軍が攻め入ってきたことによって勝頼の心境に変化が起こらないかどうかが心配になってきた。
和睦を破棄して北條と連合されれば一転不利になる。
景勝は勝頼の妹於菊を娶って絆を固めることにした。
勝頼に否やはなく騒乱のなかで忽々に婚儀が調った。
十月十六日に甲府を出立した於菊の輿は、甲斐軍の兵

士たちに護られて信濃國を経ると飯山から富坂峠を越えて越後國に入ったところでこんどは物々しい越後軍の兵士に引き継がれて二十日に無事春日山城へ到着した。
十月初旬に甲斐軍の退陣を知った北條軍の援将は、越後の豪雪に閉ざされて動けなくなるまえにと、沼田城の河田重親と厩橋城の北條輔廣、景廣父子にそれぞれ僅かの兵を預けておいて小田原へ引き揚げてしまった。
北條景廣は、父輔廣と河田重親に兵を預けて樺野澤城に残しておくと、自身の将兵を連れて御舘へ急いだ。
武田と北條の援兵が去ったあとは景勝と景虎派にわかれた越後諸将だけの対立になった。
下越の国人揚北衆は景勝を支持したが、中越の有力諸将が景虎支持に回ったため春日山と下越が遮断されてしまい不利な状態からはじまったので、勢いに乗る景虎派は栃尾（長岡市）の本庄忠長が景勝派の与板（長岡市）を攻めたが直江式部らの防戦に遭って引き退った。
信濃國から遠路参陣してきた飯山城（飯山市）主の桃井伊豆守は果敢に春日山城を攻めたが、景勝派は充分に引き付けておいてから大手の千貫門を開いて討って出たので桃井方は総崩れになり、桃井伊豆守は討ち死にした。
両派がおなじ越後の諸将なので矛先が鈍り雌雄を決するまでにいたらぬうちに景虎を救援にきた武田勝頼が景勝方に寝返ってしまったので、北條と武田の支援があるとみて景虎を支持した諸将のなかで動揺が起こり、一人二人と櫛の歯が欠けるように離散していってしまった。
なかでも鮫ヶ尾城（妙高市新井）の堀江宗親は景虎方の有力部将であったが、逸早く景勝側の安田信元に内通してきて降服の意を表すと鮫ヶ尾城で蟄居を約した。
そして景虎には鮫ヶ尾で小田原との通行路を確保する旨を言上して許しを得ると、さっさと帰ってしまった。
いっぽう二千の将兵を率いて樺野澤城を出立し御舘へ向かった北條景廣は、途中諸処で景勝側と遭遇して交戦しながらすすみようやく府内に辿り着いたものの御舘へは入ることができず、残兵を集めて來迎寺で越年した。

四

翌天正七年（一五七九）正月。
越後國は現在でもそうだが冬は豪雪で難儀する。
このころ内陸は大雪に閉ざされて人の往来もままならなかったが、府内は日本海に面した海岸地帯なので海から吹きつけてくる強風によって少しずつ雪が消えてゆき、正月も下旬になると馬が自在に動けるようになった。
晦日、北條景廣は明日御舘入りを決断して來迎寺を出ると八幡宮に参籠してそこで英気を養う酒宴を催した。
この報らせを受けた景勝は、北條勢が御舘へ向かう途中急襲を謀り中川口の土手の陰に兵を配置して待った。
そのなかに荻田孫十郎という十六歳の若武者がいた。

翌二月朔日は昼下がりまで待ちつづけ、痺れをきらしたころになってようやく北條勢がやってきた。
景勝勢の伏兵たちは得たりやおうと立ち上がり、獲物を狙う猛獣さながらに素早く北條勢に襲いかかった。
不意を衝かれた北條勢は隊列を乱して四散した。
荻田孫十郎は北條景廣の周辺に人影が消えたその一瞬の隙を衝いて馬上の景廣に長柄の槍を突きつけた。
手応えがあって素早く二の槍、三の槍を繰り出した。
北條景廣は荻田の槍を脇腹に受けたのだが怯まず、その柄を斬り落とすと素早く馬腹を蹴って走り去った。
そして、景廣は辛うじて御舘へ辿り着けたものの、深傷に耐え難くその日の夕刻に息を引きとってしまった。
頼みの勇将の死に御舘陣営はますます戦意喪失した。
翌日、景勝は御舘を攻めた。景虎勢は城を出て防戦したが形勢不利になると御舘へ退いて固く門を閉ざしてしまうので攻め倦み、外構えを焼き払って兵を収めた。
景虎側はよく御舘に籠城して救援を待ったが、小田原の北條、甲斐の武田が退いてからは国内の諸将だけになってしまい、それも景虎を見限って密かに帰国する者などが出て戦力は著しく低下していってしまった。
景勝は兵刀の損耗を避けて兵粮攻めに出た。これなら空腹に耐らず投降してくるのを待っていればよかった。
さらに糧道を絶ってしまえばもっと早く陥ちる。
御舘へ食糧を供給しているのは刈羽郡枇杷島城（柏崎市）の琵琶島彌七郎であることを突き止めさせた景勝は、枇杷島城を攻撃に向かわせたので、多勢に無勢では勝ち目がないと諦めた彌七郎は戦わずして軍門に降った。
御舘では食糧の補給が止まってしまったので、備蓄が減ってゆくにつれて戦意は著しく衰えていった。
「腹が減っては軍ができぬ」
で夜陰に乗じて戦列を離脱逃走する者が続出した。
こうなってしまってはもう御舘は持ち堪えられない。
景虎は小田原の兄氏政を頼って脱出することにした。
三國峠までは遠く追い付かれる虞があるので、新井から富倉峠を越えて信濃國へ入ることにした。飯山には討ち死にした桃井義孝の残党がいるはずだし、そこまでは行けずとも三里ほどすすめば鮫ヶ尾城に堀江宗親がいて小田原との通行路を確保しているはずであった。
景虎は糧道を絶った景勝が総攻撃をかけてくるまえに急ぎ御舘を脱出することにして、準備を急がせた。
内室（景勝の妹）と九歳の嫡男道滿丸、古管領憲政と宗四郎憲藤父子らは非戦闘員だから危害を加えられることはあるまいと御舘へ残すことにして、景勝勢が寝静まった未明に乗じて本庄新六郎、東條佐度守ら少数の部将たちと残存の雑兵二、三百人に護られて御舘を捨てた。
この日天正七年（一五七九）三月十七日。
夜が明けて景虎の御舘脱出を知った景勝はただちに追撃を命じ、自身も出馬して指揮を執った。

追い付かれた景虎側は氏政から派遣された平野次右衛門と篠窪出羽守の援兵少数が踏み止まって防戦したが、敢えなく崩されて平野と篠窪はともに討ち死にした。
景勝勢が小田原勢の抵抗に遭っているあいだに景虎は辛うじて鮫ヶ尾城に辿り着き、堀江宗親を頼った。
宗親は景虎に後ろめたい思いを抱きつづけていたので拒絶し難く、やむなく城門を開いて城中へ招じ入れた。
景虎勢は途中で討ち死にしたり離脱した者が多く出て、鮫ヶ尾城へ入ったのは僅かになってしまっていた。
追いついた景勝勢は、日暮れ近くになってきたので城の周辺に包囲網を布いておいてその夜は野営した。
翌朝未明、景勝勢は城下を焼き払って合戦に備えた。
そして景勝は、はじめ景虎支持だった堀江宗親から内応を受けた安田信元に宗親の去就を確認させた。
信元が密かに宗親に会ってそのことを糺すと、
「決して裏切りなどはいたさぬゆえご安堵召されよ。今夜二の丸へ火を放って城門を開きわが手勢が城外へ討って出ると見せかけるゆえそれを合図に攻め入られよ」
宗親は莞爾と笑ってそう答えた。
信元は宗親の態度を信ずるに足ると見て納得した。
その夜半、二の丸あたりから火の手が上がった。
景勝勢は城を出てきた宗親をはじめその手勢を離れた場所に収容すると、未明を待って一斉に攻め入った。
景虎勢はこれを最期と奮戦したが、所詮は衆寡敵せずで一方的になり、つぎつぎと討ち死にしていった。
午の刻（正午）ごろまでは辛うじて持ち堪えたものの、もはやこれまでと見切りをつけた景虎は奥へ入ると切腹して果てた。まだ二十六歳の青年武将であった。
景虎のあとを追った近江の宇野喜兵衛がその最期を見届けると、首を討って持ち帰り景勝の首実検に供した。
その宇野喜兵衛は、景勝の越後國平定後に剃髪して勘斎と号し、一向宗に帰依すると本願寺に依頼して『西生』という寺号を請け、仏門に帰依したという。

五

景虎を斃した景勝は、家臣たちが後世まで悔いを残さぬよう御舘を消してしまおうと考えて破却を命じた。
その御舘に残されていて夫景虎の死を知った内室は、悲しみのあまり嫡男道滿丸を道連れにして自害した。
もう一人、いつか氏康の子景虎に討たれるのではないかという強迫観念に駆られながら舘の奥に隠棲し、息を潜めて暮らしていた憲政は景虎の自刃で愁眉を開いた。
だが謙信が安息できる場所をと造営してくれた御舘が取り壊されるとなって行き場を失った憲政は、春日山城へ行って景勝に安住の場所を与えて貰おうと考えた。
そこで憲政は次男憲藤を伴って春日山城へ向かった。
二人が四ツ屋の木戸まできたとき偶然出会った桐澤具

繁の手の者が、憲政父子を景虎に与力していた敵方と思い込んで、捨て置けぬとばかりにその場で斬り捨てた。

七十三歳の古管領上杉憲政の呆気ない最期であった。誤解されての非業の死は不運であり哀れでもあった。

憲政の墓は照陽寺（米澤市城南五丁目）にあり、墓前に〈當寺関基上杉憲政公御墓〉の石柱が立っている。

墓碑の戒名は〈慶雲院殿泰公宋營大居士〉である。

建長四年（一二五二）五月、式乾門院の藏人藤原重房が鎌倉幕府六代将軍に迎えられた宗尊親王に供奉して関東へ下向するとき、丹波國何鹿郡八田郷上杉荘（京都府綾部市上杉町）を賜ってその荘名を姓としてから三二七年つづいた藤原姓上杉氏は憲政の代で断絶した。

そのあと、平姓長尾景虎が憲政から上杉氏を託されて家名をまもり、ときの権力者によって越後國から陸奥國會津、出羽國米澤と国替えさせられたが、しぶとく生き残り廃藩置県まで十四代二七五年つづいた。

（元）

参考文献

太平記
鎌倉大草紙
上杉家御年譜（謙信・景勝）
上杉氏系図
上杉氏外姻譜略
上杉御家中諸士略系譜
上杉史料集
上杉謙信のすべて　渡辺慶一編　新人物往来社
足利将軍列伝　桑田忠親編　秋田書店
鎌倉街道　蜂矢敬啓　有峰書店
関東合戦記　伊禮正雄　新人物往来社
小田原北條記（上・下）　岸正尚訳　教育社
後北條記　鈴木良一　有隣新書
戦国合戦事典　小和田哲男　PHP文庫
年表日本歴史（3）　鎌倉・室町・戦国　筑摩書房

古い物・遠い夢

忠内正之

「織部」いま（茶道史余滴）

（八）　大坂夏の陣と織部の死

親しい人物を続いて失う

織部は連歌の師匠というばかりでなく、禁裏につうじ、薩摩の島津家とも親しい近衛信尹を前年（慶長十九年）十一月に失い、その傷心を癒すひまもなく、幕府の要人であり、茶道の上で己れの弟子にあたる大久保忠隣が謀反の嫌疑により失脚、いままた伊賀（三重県）上野城主の筒井定次の自害を耳にして暗澹たる気持ちであった。

筒井定次のことは先にも、古伊賀水指「破れ袋」の処でふれたが、大和（奈良県）・郡山の城主・筒井順慶の養子で、天正十三年（一五八五）に大和から伊賀に移り、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦では徳川側に属したが、秀頼の側近である大野修理大夫・治長と親しく、ために家臣団の間では徳川、豊臣の両派にわかれて確執がつづき、定次は幕府によって磐城平へ流刑されていた。

筒井定次が伊賀の城主であった頃、織部は茶陶窯として伊賀焼に着目して、筒井を指導して、花生け、水指を中心に茶陶の名品を生みだした。それはとりも直さず織部と定次の濃い師弟関係によるものであった。この当時の焼物は〝筒井伊賀〟と称し今も珍重されている。

その筒井定次も大坂冬の陣がおきると、旧家臣の多くが大坂城へ入ったという。その上自らも、大野治長の弟・治房の軍を大和国・郡山に導き入れたというので慶長二十年（一六一五）三月五日、切腹を命ぜられ自裁した。五十四歳であった。

そしてその後を追うように大坂夏の陣が始まるのである。

さきにキリシタン追放によって、フィリッピンのルソン島へ渡った高山右近が二月四日（三日という説もある）マニラで病死した。

大坂夏の陣と織部の事件

大坂冬の陣の和議斡旋をして、さっさと行く末を見通して隠居してしまった織田有楽、またハト派として徳川・豊臣の平和的共存を夢みて、かえって豊臣方にありながら豊臣方から妬まれ、おのが居城である摂津（大阪府）の茨木に退去してしまった片桐且元。

徳川方にとって邪魔なものが徐々に減っていった。

家康は、大坂が裸城となったのを見すましてから、再び難題を吹っかけてきた。

秀頼を大和か伊勢に移すか、大坂城中の浪人どもを追放するか、二つに一つを選べと、いうのである。

大坂がたからみれば、国替の要求は、秀頼現状維持の誓約にもとるものであるし、浪人武士追放の要求も、古参、新参の身の上を保証するといった誓約に反する。共に不当きわまるいいがかりである。ことに、総濠や、二の丸、西野丸の一部さえ破却されてしまった現在、頼みとするのは浪人武士の武力だけであった。

慶長二十年（一六一五）の三月、豊臣秀頼は青木一重を、淀殿は常光院、二位局、大蔵卿局、正栄尼などを、それぞれ、駿府につかわし、国替の宥免をこわせたが、家康はこれを一蹴して、これを東西手切れの口実として直ちに諸大名に対して大坂再出陣を命じた。

大坂夏の陣の勃発である。

さて、この大坂夏の陣の始めにあたり、古田織部に関連する一大事件が起きたのである。それは、東軍の諸将が相次いで京都に集結し、大御所家康と将軍秀忠とが、二条城に会見して、大坂城攻めの軍議を進めているときのことであった。織部の家臣木村宗喜というものが主謀者となり、京都の町に放火を企てた。この企ては、未然に発覚したため、ことなきを得たが、ことの起こりを調査すると、前に述べたが織部の息子である古田九八郎が秀頼の御小姓となって大坂城にいた。

その様な関係で、木村宗喜は、大坂方の密命を受け、甲斐庄三などと共に、人数五百騎をもって、家康と秀忠とが京都を出馬して大坂に向ったあとで、二条城に放火し、それを合図に、大坂城中からも豊臣勢力を繰り出させ、南北から徳川がたを挟撃しようと計画したのであった。

ところが、大坂に籠城していた御宿越前という武士がそのことをかぎつけて、四月二十五日の夜に、京都所司代の板倉伊賀守勝重の屋敷に訴えて出たため、家康と秀忠の出馬は急遽延期されたのであった。

織部の処罰

京都所司代の板倉勝重は、家康の命を受けるまでもなく、京都や伏見辺を探索した結果、四月三十日（慶長二十年）になって、ついに主謀者の木村宗喜ほか数人を召し捕え、翌五月にかけて、大坂夏の陣が開始されたにもかかわらず、京都付近および大和方面にひそむ残党の総狩りを行なったのである。

五月七日、大坂城をおとしいれ、秀頼以下豊臣氏一族を滅すと、六月十一日になって木村宗喜の事件の責任を取らせるため、古田織部、および、その嗣子の山城守重嗣に切腹を命じた。罪名は、大坂がたに内通したというのである。ついで古田家の財産は没収され、領地は改易となった。主謀者の木村宗喜は、六月二十九日になって、死刑に処せられている。

織部父子が切腹したのは摂津（宇治市）の木幡だったという。検死は鳥居土佐守成次と内藤右衛門介とであった。

遺骸は紫野の大徳寺玉林庵に葬った。法名を金甫宗屋といい、墓は玉林庵のほかに、京都市西陣の興聖寺にもあり、供養塔は大徳寺の三玄院にある。

元来織部は文人派であった

古田織部が十七歳で信長に仕え、使い番として天正六年（一五七八）の播磨（兵庫県）神谷城攻撃のおり、摂津の荒木村重が伊丹城にたてこもって抵抗したとき、村重方についていた義兄の中川瀬兵衛・清秀を説得して味方に引きいれた。また天正十年（一五八二）信長が本能寺の変で明智光秀の謀反にあったとき、秀吉方の先鋒となり、秀吉の命により中川瀬兵衛・清秀の家臣のもとから人質をとることに成功し、夫々大きく貢献した。これらは必ずしも武功ではない。

秀吉の時代に入って、天正十三年（一五八五）織部正に任ぜられ、三万五千石の大名となったが、他の武将と比べて小禄である。

数多く戦いに参加したわりには禄高が少ないのは、猛将の部類でなく和平や話し合いを得意とする文人的性格が災いしたのであろうと思われる。

慶長三年（一五九八）秀吉の死去にともない、織部は山城西の国三万五千石を長男の重嗣にゆずり、自らは父重定の遺領三千石のみとなった。かくて慶長五年（一六〇〇）天下分け目の関ヶ原の戦いには東軍の徳川家康につき、尾張犬山城主石川備前守などの誘降に力を尽した功で、のちに七千石を加増されて一万石となった。このことは以前にも述べた。

いままた、大坂冬の陣では東軍について大坂城攻撃に

加わり、茶道の弟子である佐竹義宣の陣中を訪れ、流れ弾で負傷をしている。この事件一つをとってみても武芸一辺倒の武将とは異なった、和平への執心のつよい側面がみられるのである。

慶長十九年（一六一四）方広寺の鐘銘事件のおきる、前後二・三年間における駿府下向のおりには、織部は家康に会って徳川・豊臣家の平和的共存を進言したのではないかと思われる。

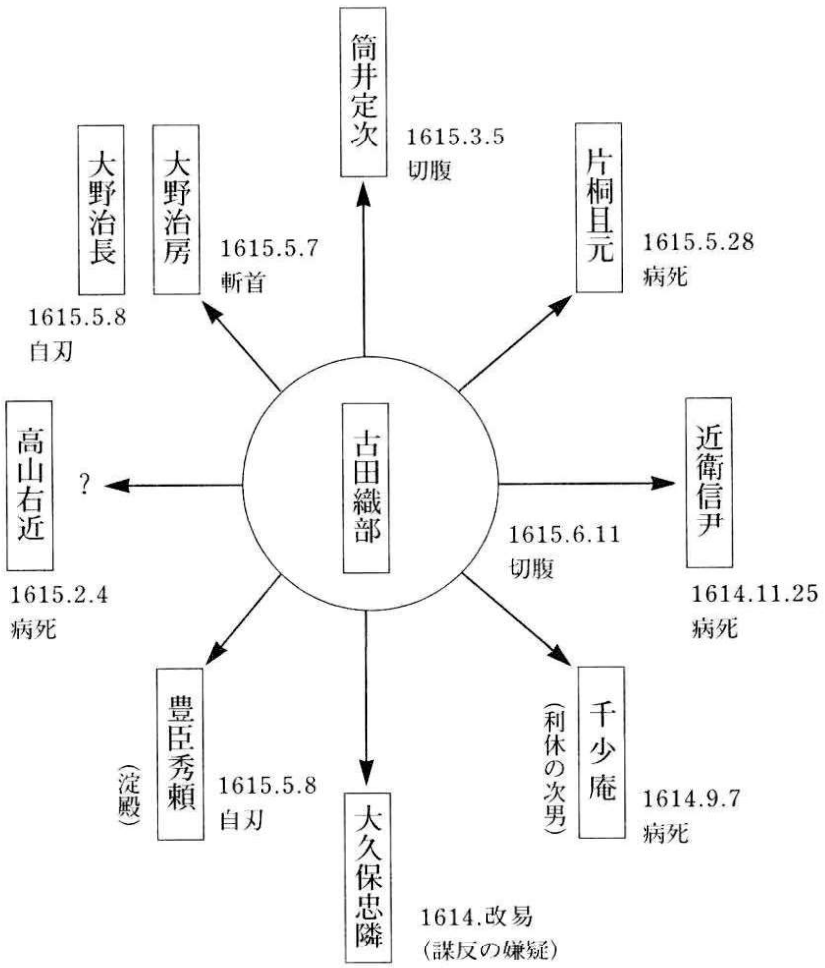
鐘銘事件の際に大坂方の片桐且元とともに駿府に入ったのも、且元の考えと共鳴する処があったからであろう。

しかし、織部の考える豊臣家存続への方向は、家康の思惑と大きな差異があったのである。家康は、徳川家安泰を築くには豊臣家およびその一族をも殲滅（せんめつ）する方策が最善と考えその計略の上に秀忠をして政事（まつりごと）を行わしめ、大坂夏の陣はいわば豊臣家への挑発であり、豊臣家の影響力を確認する絶好の機会であったのである。

秀頼は未だ若年であり、秀吉の恩顧の大半が薄れていくのを見定めて一挙に殲滅をはかろうとする家康の野望のまえに、事もあろうに清韓禅師を慰労するという事件。加えて、大坂方の主将、大野修理大夫・治長をはじめとして多くの茶道の門下を西側にもっていることから、この鐘銘事件を契機として織部は徳川方にとって危険人物視されていたとみるのが妥当ではないであろうか。

確かに織部の身辺の人々は別表にみるように消えていった。しかしだからといって感情の赴くままに無謀とも思える決起をうながしたり、自ら計画をたてるほど良識を失う人物とは考えたくない。戦国時代に武将の家に生まれ、多くの合戦にもまれたとはいえ、織部の精神の本質は文人派であったと思われる。

消えてゆく織部身辺の人々



織部処罰の原因

織部が単なる武人でなくて、文人派であった故に徳川方から危険視され、いずれは処罰する時期を窺っていた家康であったが、貧弱な根拠をもとに処罰するに、茶匠としての織部の存在があまりに偉大であった。そこで織部を処罰するには別に明確な理由が必要であった。

織部への切腹を仰せつける極めつきとなった理由として、大坂方への内通といわれるものがある。

先ず、織部の四男九郎八・重行が豊臣方にあって秀頼の家臣として、後藤又兵衛・基次のもとにあった。織部はこの九郎八あての矢文をもって徳川方の情報を連絡したというのである。但しその手がかりになる証拠はなに一つ残っていない。

自らは東軍の徳川方にあり他の四名の男子は全て東軍に置きながら、四男・九郎八がいるからといって、内通するとは考えられないのだが。

いま一つは薩摩から伏見の織部邸にきていた連歌師・如玄を使者として、薩摩の島津家へ密書を使わしたといわれる嫌疑である。

晩年、織部は連歌の好きな近衛信尹と懇意になっている。近衛家は島津家と深い関係にあり、島津義久、家久ともに関ヶ原の合戦に敗れたことから、雪辱を期していたともいわれるから、これに最も親しい近衛信尹と、とくに慶長十九年（一六一四）春頃から、連歌を通じてとはいえ、異常な接近をしていたことは、禁裏、公卿とは一線を画している徳川側からみれば危険視されていたことは否めない。

そのような時、島津家の連歌師・如玄師が信尹、織部のあいだにいたことは致命的な不運であったといわざるを得ない。

決起をはかった、木村宗喜が捕われるのは慶長二十年（一六一五）四月二十五日である。宗喜は織部の家臣であったことは間違いなさそうであるが、今もって存在ははっきりしていないという、織部門の主要な人物は天野屋覚市と服部道巴といわれ、茶会記にもその名が出ている。宗喜は大坂城側の勇士木村重成の親戚であったというが、織部側の下級武士に過ぎなかったのではなかろうか。

宗喜は、拷問を重ねられたが、決して織部の名は出さなかったといわれている程であるから、織部がこのような安直な計画をたてる訳ではなかったことがこれで判然とするのである。

史家桑田忠親は、洛中に放火を企て、東軍の後方を攪乱するぐらいのことは武士ならずとも、金銀をつかませれば不逞の博徒や浪人を集めて可能と考え、秀頼の直臣である大野治長あるいは治房あたりに使嗾され宗喜が独断で図ったのではないかと推理している。この見方は問

違いないなさそうである。

これだけであったなら、織部が謀議の主謀者であるとの根拠は薄弱であるが、ここに織部の女婿・鈴木左馬介なるものが、京都の日岡のあたりで暗殺された。（左馬介を兄の仇とねらう戸田八郎右衛門なるものに討取られたという。筆者の母の実家は旗本で武芸の田宮流の達人の血筋で、戸田八郎左衛門を代々名乗っているが、紛らわしい）

この事件が同じく四月二十五日であるから宗喜逮捕と合せられて、作られたストーリーとも思われる。その続きが出来すぎている。

左馬介の下僕は、その際大事な挟み箱を打捨てて逃亡した。板倉伊賀守は後日のため保管、宗喜らを搦めとった後、この挟み箱を取出し、中味を改めたところ、まぎれもなく大坂内通の密旨と、一揆蜂起の廻文が入っていたというので、それを証拠として織部逮捕に至ったという。

織部の女婿に鈴木左馬介が存在していたことも確証がない。この左馬介が暗殺されたところに織部を陥れる筋書きがあったように思われる。

一説によれば利休門下の、織田有楽らが、織部の名声を嫉妬して謀議をでっちあげたといわれている。しかしこのことは有楽の名誉のためにも否定されるべきである。

有楽こと織田長益は天文十六年（一五四七）の生れで、織部とは殆ど同年輩である。武将としてさしたる功労があったわけでもなく、信長の弟（信秀の十一男）という存在の重きにより、秀吉のもとでは淀殿が信長の妹・お市の方の子供であるということでその後見役となり、家康に属してからは三万石の大名であるが、淀殿との関係から秀頼の大坂方にあって、冬の陣では和議に努力し、その後は徳川・豊臣のいずれにも属せず法体となって隠栖、織田家をまもり、やがて有楽流の流祖となる文化・教養ゆたかな人物である。

従って織部と共通するところがあり、織部とは親しい間柄であった。冬の陣以後、生見い政治の第一線から身を退いて茶の湯に専念した程の人物が、なぜに織部の声望を嫉視するであろうか。

徳川側に身を置きながら禁裏・公卿・諸大名と、徳川・豊臣と二分される時勢の中でその何れにも親しく茶道の門弟をもつことの、織部の今のいき方に心配し、圧倒的な冬の陣以後の徳川優勢のなかで、豊臣に恩顧をもつものの立場が良く解っていたと思われる。

その意味において織部への批判や忠告をしたとしても嫉妬のうえ讒訴するなど考えられないところである。

ところで織部の日常生活について、とくに、これを非難し、織部の横死を予言した者がいる。それは有名な松

平伊豆守信綱（知恵伊豆）の実父にあたる大河内金兵衛尉正綱である。（余談だが正綱は筆者の出身地西尾市の豪族の出であり、先祖は吉良家に仕えていたという）

その理由として―織部という人は、世の宝をそこなう者である。床の間の掛物も、かっこうが悪いといって、切り捨て、茶碗、茶入れなども、疵が一つもついてないのを、わざと打ち割って、これをつくろい、その趣が面白い、などといっているから、このようなことになると予想していた―と、いうのである。

このことは、新井白石の著作にも引用され織部の人物を非難する唯一の根拠としており、織部の人物について、世人に対し一種のよからぬ先入感を提供した観さえある。

織部が、まつたき茶碗を―ぬるきものなり―といって、わざと、欠いて用いたことも、たまにはあったであろうが、それは二、三の実例にすぎない、いつもそんなことをやっていたのではない。大河内正綱の、このような言い伝えは、徳川の時勢におもねった言葉であり、処罰された織部を故意に非難しようとしたものであろう。

更に徳川時代に諸学者や史家が述べている内容等も、読み物としては、それなりに筋を通して面白いが、およそ常識で考えられないことが多く、その物証も殆んど無いので信じ難いのである。

織部処罰の原因は、清韓禅師を謹慎中にもかかわらず、茶に招いたこと、再三にわたって駿府入りをし、豊臣家の討滅だけは避け、平和裡に徳川・豊臣両家の共存に努力し、さらに大坂方の最もハト派であった片桐且元をともなって和平実現への働きかけを行ったことが、徳川側にありながら嫌疑をかけられる要因となったのではないか、徳川一辺倒になり切れない、ハト派の織部にとって、豊臣家に対して捨てきれない愛着が命とりになったといえよう。

そして降って湧いたように、大坂内通、あるいは洛中における挟撃計画で、木村宗喜の逮捕、鈴木左馬介の暗殺、さらに島津家の如玄を捕えたというであるから、織部処罰の条件はととのったのである。

徳川幕府を安泰に導くためには、この際、平和論者の織部は邪魔者となったのである。邪魔者は潰せということで、家康はこのチャンスを窺っており、内通の証拠をデッチ上げたのではなかろうか？

当時、徳川幕府が懼れた勢力は、島津、毛利、前田、伊達、上杉等が存在したが、彼等は場合によって、自ら徳川に替りたいという考え方をもち、豊家再興を第一に考えてはいなかった。従っていざとなれば武力、策略で抑える自信があった。しかるに豊家との共存を唱える、茶の湯の天下一の宗匠の始末に困っていた。そこでチャンスを作り、理由をつけて処罰に及んだものと思われる。

親豊臣派への有効な見せしめでもあったのである。

織部父子の自刃

慶長二十年（一六一五）大坂城落城をまえに、三月五日筒井定次は切腹、そして五月七日には大坂城を脱出した大野治房は京都で捕えられ斬首。翌五月八日には大坂城炎上、淀殿、秀頼、大野治長等が自刃。織部に対しても六月十一日、木幡（宇治市）の織部邸に鳥居土佐守・成次および内藤右衛門介が上使として赴き、織部と長男の山城守・重嗣に切腹を言い渡した。

かくて断罪され、取調べに対し「かくなる上は入組み難き故、さしたる申開きもなし」と一言の弁解もなく、わが事おわる。ただ死を待つ様子であったと伝えられる。大久保忠隣が行ったように、天海僧正などを介して幕府に陳謝の弁疏してみる手段もあったのではないかと思われるが天命に従った。

父子は泰然として刺し違えて果てた。織部七十二歳、重嗣三十七歳であった。

一日おいて六月十三日、次男の佐介・重尚（前田利光家臣）と三男の小三郎・重広（池田輝政家臣）はまた兄弟刺し違えて父と兄に殉じた。

一方大坂方にあった四男・九郎八は京都に脱出し、兄・重尚の子と自分の子を興聖寺の円耳和尚に託して、父と兄たちのねむる墓前に座して屠服した。

五男の左近・重久は徳川方にあって、青山伯耆守に属して大坂城攻めに加わっていた。五月五日、父捕わるの報をきき、せめて父の名をあらわすべく、自らが討取った首級に、「古田織部正」の名をしるし、また兄、九郎八にも遺書をおくって翌七日の大和国の激戦で戦死した。

さきに捕われた木村宗喜および連歌師・如玄らの二十数名は、六月二十九日洛中引き廻しの磔の刑に処せられた。

織部の妻のせんは髪を切り青霄院と号し、夫および五人の子の冥福を祈った。寛永六年（一六二九）五月二十九日、七十二歳で没した。奇しくも織部の没年と同年齢であった。墓は興聖寺にある。

織部死後の処分

徳川幕府は、織部一族を処罰すると同年六月十四日、織部の家財を没収し、二十日には伏見の織部屋敷にあった織部秘蔵の茶道具を京都の二条城に運ばせ、家康と秀忠とで、これを一覧したのである。

そのうち、へごみの茶壺、織部茶杓、織部硯などは家康がこれを取り、勢高肩衝茶入は秀忠の所有に帰したのである。なおこの勢高肩衝は大名物（足利将軍所有の名品）で、初め、細川忠興が金子五百枚で所望したが、将軍秀忠がこれを欲しがっていることを洩れ聞き、遠慮し

たということである。現在この茶入れは藤田美術館が所有しており今夏、東京で展覧されて筆者も鑑賞する機会があった。茶入の見事さと歴史の今昔を感じてしばし佇んだ。

このほか寧山の「法眼蔵涅槃妙心」の一行物は家康の十男頼宣に、頓阿筆の「続千載集」は書家の建部伝内昌興に、京都堀川の織部屋敷は藤堂高虎にあたえられ、のちに領国伊賀（三重県）の上野に移したということである。また江戸屋敷は坂部三十郎にあたえられた。

織部の死後

前にも述べた片桐且元は織部自刃より、ほんの少し前にあたる五月二十八日、大坂城の落城をきき、ひどく気を落して茫然自失、額田郡の額安寺に閑居して病没したという。

さらに八月二十四日には博多で神谷宗湛とともに、かつて秀吉のもとで活躍し、織部のよき茶友であった島井宗室が七十七歳で病没した。

また秀吉のもとで恩顧をうけた最後のひとり、福島正則も、元和五年（一六二〇）にいたって安芸五十万石から、信州川中島へ僅か四万五千石に減封され、寛永元年（一六二四）悲憤のうちに没したのである。六十四歳であった。

正則は生前、大坂方の蜂起がもう五年早いか、五年遅ければ、豊臣の天下は続いたであろうにと、述懐していたというが眞偽の程はわからない。

さて大坂夏の陣がおわると、七月十三日元和と改元、これを元和偃武と称して世は完全に徳川家のものになると同時に六月に「一国一城令」つづいて七月「武家諸法度」「禁中公家諸法度」さらに「寺家法度」などが相前後して定められていった。着々と内政が固められていくのである。

かくて翌元和二年（一六一六）には徳川家康が発病して四月十七日に没した。そこで翌元和三年（一六一七）には「東照大権現」の神号をうけ、日光東照宮に葬られる。七十五歳であった。

ここで美濃焼にもふれておきたい。織部の死とともに美濃焼には変容があらわれてきた。この年（一六一六）、九州・有田の地でさきに来日していた李三平によって泉山石（白磁鉱）が発見され、白川天狗谷において磁器を創成、それは染付け、色絵、染め錦手へとすぐれた磁器へと完成していった。またそれらは野々村仁清、尾形乾山などの出現へと結びつき、優美で、きらびやかな茶陶への道をたどった。

美濃焼は織部の死によって、優品から雑器造りへと凋落を余儀なくされたのである。

名古屋城内に設けられた、藩窯、御深井丸では灰に長石を加えた釉薬を用いる器が焼かれ、「御深井焼」などと呼ばれるものへと移っていった。

美濃焼といわれる茶陶、天正黒・黄瀬戸・志野・織部は、古田織部とともに栄え、織部の死とともにその運命をともにしたのである。かくして江戸時代に於ては、美濃の焼物は埋没し、瀬戸ものに代弁されて来た。

再び、美濃焼として、天正黒・黄瀬戸・志野・織部が見直しをされてよみがえるのは、昭和五年（一九三〇）荒川豊蔵による「志野筒絵茶碗」の陶片が、美濃の久々利大萱で発見されてからである。

むすびとして

古田織部の茶の師はまぎれもなく利休である。しかし利休のわび茶から進んで大名茶を完成させた。そして小堀遠州へ、片桐石州へとつながれた。

大名茶というものは、ただ単に物質的に豪華であり、ぜいたくであるのが、建前ではない。むしろ、精神的な豪放さであり、たくましさであり、気品と気位の高さにあると思われる。

武人としての織部の一生は、その戦功に比べて、むしろ不遇であり、しかも、その末路は極めて悲惨であった。しかし、大坂攻撃軍の中にあって、織部が大坂城内の人々と内通していたとか、いなかったとかいうことは、一代の名人織部の価値を、少しも左右するものではない。織部には、武功の事蹟もあるには違いないが、その本領は芸術家たるにあった。茶道を通じて、近世文化を創造したところに、その偉大さがあったのである。

織部は利休によって完成された中世ふうの茶式を破り、大名好みの桃山美術に見られる多様な色彩と、異国趣味の意匠を自在に表現することに成功した。

冒頭にも述べたが、茶の湯下手の酷評はあるものの利休につぐ時代の名人は、やはり、織部である。

織部の茶道芸術は、かれの死後その門弟の小堀遠州・本阿弥光悦などによって伝承され、織部の直系の子孫は断絶したが、その芸術は、利休のそれとならび称せられ、桃山文化の精髄として、不朽の光を放っているのである。

（九）　追記二題

織部の死後、さまざまな話題が提供されて世間に面白くおかしく伝えられている。信憑性のあるものから、荒唐無稽のものまであるようだが、後者に属する二題を書いておきたい。

「割って城を」

右は司馬遼太郎の短編小説の題である。司馬は、古田織部を題材にして一度だけ書いた。織部について関心はあった様であるが、二度と書かなかった。小説になり難いと思ったらしい。茶道そのものにはあまり興味はないといっているが、流石第一級の作家であり、作中、茶道への高度の知識の片鱗を、ところどころ見せている。では小説の梗概に進みたい。尚この資料は畏友山田嘉久氏に提供していただいたものである。

慶長十八年（一六一三）大坂夏の陣の二年前である。関ヶ原で主家を失った勇将、善十こと鎌田刑部左衛門は、縁あって古田織部に仕えることとなったが武将としての働き場もなく無為に過ごす毎日であった。織部家の茶道について無知ながら少しづつ慣れてきた。

たまたま善十が使っていた茶碗が宋胡録（スワンカローク）製であり、織部が之を賞めた上割って金継ぎをして、ひょうげた好みのものに変容させる話もある。司馬は曲りなりに茶道具のわきまえもあった様である。

翌慶長二十年五月、大坂落城。

その直前に、古田織部正は、京都にあって身柄を拘禁されている。

善十には、なぜその様なことになったのかよく解らなかったが、織部正が大坂方に内通していたらしいことが、だんだんと解ってきた。

「陰謀」の実相は、わずか一万石の大名にして豪壮すぎるほどのもので、夏の陣のとき、家康、秀忠が大坂にくだるのを待ち、天子を奉じて叡山に走り大坂と呼応して東軍を挟撃する、というものであった。

（まことか）

と、善十は疑った。茶人にしては恐るべき計画であり、また茶人なればこそ計画があまりにずさんすぎた。

狂気に近い。徳川家への反乱は、肥後の加藤、芸州の福島といった故太閤恩顧の大大名でさえ企て及ばなかったことであった。

それをなぜ、とるに足らぬ小大名がしかも単独でやる気になったのか。

既述する通り、計画は悲惨な結果となった。善十は計画をまるで知らされていなかった。

（惜しい）

と思った。織部正がもし事前にこの計画をあかしてくれたならば、調略、武略では多少の覚えがある。敗亡するにしてもかようなぶざまはなかったろうと思った。

（やはり茶人じゃ、思慮はこまごまと晦渋じゃが、大どころで抜けておる）

しかし織部正は、茶人らしい思慮で、あざやかな手は打っていた。事前に逃げている。

古田織部正として、幕府鳥居土佐守成次に召しあずけられ、慶長二十年六月十一日、堂々と切腹したのは、実

際は善十であった。善十は顔が織部にそっくりであった。

織部正の陰謀は、すでに善十を雇ったときから、周到にすすめられていたのであろう。

織部正は、自分の人生を、茶碗のごとく自分で割りくだいたが、みごとに相綴した。

のち薩摩に流寓し、その墓といわれる石が西南役前まであったという。

以上が司馬の小説であり興味深い。筆者ならば幕府鳥居を抱きこんでいたとしたい。なお面白くなったと思うのだが。

「家康暗殺」

家康は元和二年（一六一六）織部が死んで翌年の一月二十一日やまいにかかり、四月十七日に駿府城で他界し波瀾曲折の七十五歳の生涯を閉じている。

大坂夏の陣ではあの様に元気であった家康の急死は謎を秘めている感がある。暗殺説がいわれるのも故ありげに思われる。

森眞沙子筆の「家康暗殺」より抜粋する。

将軍家茶湯師範　古田織部の事

〃慶長二十年、大坂御陣の時、織部が茶頭木村宗喜なる坊主、大坂より命を受けて京都焼打ち相企るに付、捕はれたり、所司代、織部正重然へ、汝が知らぬといふこと有べからずと糾明に及びけるが、申し分立たざりければ、六月十一日、鳥居土佐守成次、内藤右衛門介の御検死を以て、切腹仰付かる。

罪、一族に及び、長男山城守重嗣も同日同刻、父子ともども切腹。二日後に次男及び三男切腹、四男九郎八重行、大坂より興聖寺に脱出して自刃、五男は秀忠公の御先手として戦ひ、自ら討取った首級に（古田織部正の手に之討取る首級十四の内）としたため、大和口の激戦に没す。

後に興聖寺の和尚或る夜咄に物語りたるに、近衛公未だ御存命の折、古織枕頭に召し給い、大坂のこと頼むとて、南蛮渡来の秘薬を授けたり。

織部、此之秘薬を茶器に工夫し、家康公の茶会に献じ、茶を奉らむと相企み候の所、先に宗喜の謀りごとに依りて召し捕はれければ、（かくなる上は入組み難き故、申し開きも見苦し）とて、潔よく切腹仕つる。久尻窯、この時織部の命にて、覆壊せらる。

大御所様、翌元和二年正月廿一日、丑の刻、駿府にて俄かに御虫差し起こり、御煩ひ長びきて、四月十七日巳刻、駿府の正寝に薨じ給ふ、これ、織部屋敷より召上げたる茶器にて茶を参り給ふに依る、となむ〃

些か怪文書に近いが、説明すると、

（織部は近衛公から、大坂を頼むと言われ、南蛮渡来の毒薬を渡された。これを茶器に仕込んで家康に献上しようと企らんでいたところ、事態の急変で、自分が先に切腹させられてしまった。しかし切腹後の財産没収で毒薬入り茶器は、家康の手に渡った。半年後の正月、家康はこの茶器を使って茶を呑み、毒に当って死んだ）

つまり織部は、結果として家康暗殺に成功したという内容である。

以上二つの話はあくまでも小説（フィクション）の域を出ないものであるが、織部没四百年となるいま、鎮魂のはなむけの一端ともなればと追記する次第である。

終

『時評家　新明正道』（評伝その四）

山本鎭雄

第三章　ヴ・ナロオド（人民の中へ）の東京帝大新人会（後篇）

五　新人会本部の共同生活

すでに触れたように、一九一八（大正七）年一二月五日、東京帝大法科大学緑会弁論部の最上級生の「快活の赤松克麿」、「奔放の宮崎龍介」、「石渡春雄の重厚」と評された彼らが中心となり、麻生久、佐野学らの卒業生の協力を得て、東京帝大新人会を結成した。翌年の冬休み明け、帰京した本郷ＹＭＣＡのグループの最下級生の門田武雄、山崎一雄、新明正道らは新人会に入会した（彼らは「青年会派」と称された）。さらに、吉野作造教授が働きかけたアカデミックな普通選挙研究会に参加した二学年の平貞蔵、波多野鼎、三輪寿壮、河西太一郎らも新人会に順次入会した。最初、新人会本部は東京市本郷区追分町（現在、東京都文京区）の狭い貸間に設けられた。

宮崎龍介の父・中国革命運動の援助者の滔天は、来日中の中国革命家の孫文と黄興を仲介し、中国革命同盟会を成立させた。滔天は孫文よりも黄興に親しく交流し、日本に亡命中の黄興は、中国人亡命者のために山手線目白駅近くの東京市外高田村（現在、豊島区目白）に豪勢な木造の黄興邸（洋館一三室）を建てた。黄興は東京からアメリカに亡命するとき、滔大に謝礼として大金を渡し、滔天は黄興邸の近くに自邸を建てるとともに、黄興邸の管理を委任された。ところが、黄興は上海で急逝したため、黄興邸は空き家になった。滔天は息子の龍介や新人会の依頼に応じ、黄興邸を喜んで新人会本部として無料で提供した（1）。

黄興邸は新人会本部としてほぼ一年間使用された。中心的メンバーの一致結束した「合宿」暮らしから、最高学府の一学生サークルが月刊機関誌を発行し、しかも盛

んに地方遊説・講演旅行を敢行し、さらに小樽、秋田、仙台、金沢、福井、名古屋、大阪、熊本などの各地の進歩的な青年が新人会地方支部を組織し、また新人会本部に吉野作造、香川豊彦、森戸辰男、大杉栄、櫛田民蔵などの当代の知識人が訪れた。

新人会本部の黄興邸の共同生活は新人会会員の一致団結の雰囲気を醸成した。のちに林要は次のように回想している。

この本部における生活は、外形的にみれば不規則きわまるものであった。…生活が共同的であったことから、気分的に一致がたやすく生まれ、理論的な穿さく討議ということは、おざなりに流れがちであった。…社会思想なども私には理論の形で頭に入るよりも、むしろ、皮膚から雰囲気を呼吸した形であった（2）。

前期新人会が、のちに学生だけの団体として組織的に改組されるまでの三年間、新人会の一致団結の雰囲気は続いた。この三年間の新人会は、すでに触れたように、月刊機関誌の発行、研究叢書の刊行、大学構内の例会、地方への宣伝旅行と講演、地方支部の組織化の他、学術的な啓蒙講演集の刊行、労働運動への支援とルポルタージュ、さらに大学教師らによって結成された黎明会の準機関誌『解放』の編集担当など、多種多様な対外的に実践的な活動を実施した。二学年次の九月の新学期に黄興邸で合宿生活をはじめた新明は、いずれの活動にも積極的に関与した。

新人会がとくに重視したのが、新人会機関誌（月刊）の継続的・定期的な発行であろう。最初、『デモクラシー』を創刊し（八巻）、『先駆』（七巻）、『同胞』（八巻）、『ナロウド』（九巻）と順次改題して発行された。新人会の綱領に賛同した者は会費として月額十銭を納付し、月刊機関誌の頒布を受けた。新人会機関誌は市販され、中国でも売られていたという。機関誌は通巻二二号を発行されたが、そのうち一二号が発売禁止の処分を受け、資金難に陥った。そのため、『先駆』創刊号から一時二十銭に値上げしたり、新人会機関雑誌発行出資組合を作り、会員その他に資金援助を一口一円で募集した。

吉野教授は新人会の「対外的な活動」に自重を望んだが、出資組合に多額の資金、また借家の敷金を提供し、新人会の活動を金銭的に援助した。新人会機関誌は発禁処分を受けただけではなく、東京地裁で二回にわたり編輯発行兼印刷人と執筆者に罰金刑の判決を言い渡された。最初、さきの両者には罰金は各五十円だったが、のちに罰金刑は各百円と増額された。新人会は権力の弾圧に屈服せず、かえって定期的に機関誌を発行し、次第に地方支部が結成され、「人民の中へ」（ヴ・ナロオド）という意欲に燃え、労働組合運動も支援した。

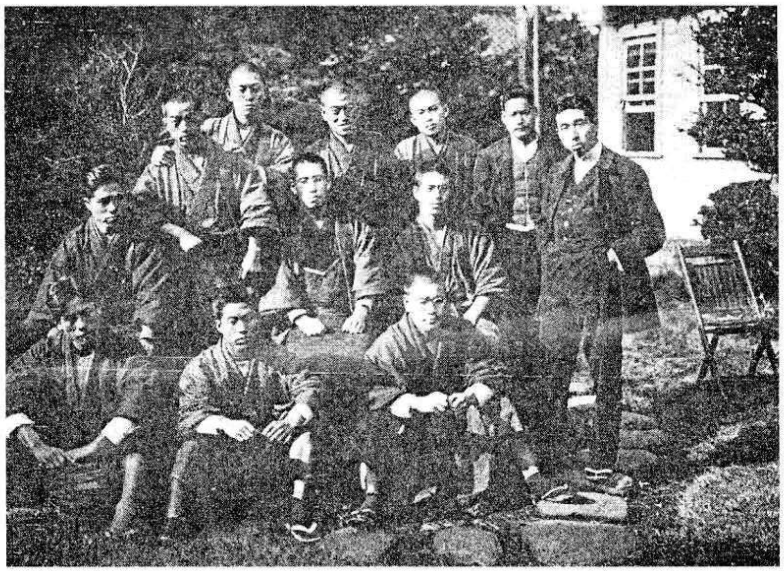
六　本部合宿所の新明正道

一九（大正八）年九月、新明正道は夏休みが明け（その当時、九月が学期始め）、二学年次の新学期に金沢の前田候の大久保別邸「敬義塾」から新人会本部の「黄興邸」に転居し、共同生活を始めた。早速、新明は新人会機関誌『デモクラシー』第六号（一九年九月）に「宣伝人民の方へ」を発表した。新明の活動宣言では、この青年社会運動の黎明期に何が青年の使命であるのかと自問した。それは「人民の中へ」（ロシアの青年が伝道の精神から提唱した「ヴ・ナロオド」）ではなく、まだ民衆の心を知らないと自省し、「人民の方へ」と宣言した。

新明は「決して現在の民衆が単にパンの為に叫びつつあるのではなくて、もっと根底の深い社会改造を要求しつつあるという事実」を認識し、かつ「大なる文化のcommon wealthを理想として」追求し、「我等は真理と共に死すべきである。真理は民衆にある。民衆へ！／真理へ！／人民の方へ！と叫ぼうではないか高く強く」と論じた。

新明は新人会本部で合宿生活をどのように過ごしたのであろうか。のちに、一学年上級の平貞蔵は新明の暮らしぶりを次のように回顧している。

四六時じゅうの不規則な生活は、寝る時間も起きる時間も各人各様で、食事時間も戦時的混乱ぶりであった。…オモチャ箱をひっかえしたような混乱のなかでも、新明は仲間の毒舌にこたえながら外国書をよんで



新人会一周年の記念写真（1919年11月30日、於：高田村の新人会本部）
向って左から〔前列〕赤松克麿、林要、平貞蔵、〔中列〕門田武雄、新明正道、三輪寿壮、〔後列〕河西太一郎、山崎一雄、伊藤武雄、嘉治隆一、河合正治、宮崎龍介。

いたが、わたしは新聞もろくによめなかった（3）。

大学卒業後、麻生久は夫婦で新人会本部にしばらく居住して退室した。彼が物語風に書いた『黎明』（新光社、一九二四年）で、新明は次のように回想されている。

今神戸の或る大学の教授をしているS（新明正道、括弧内、山本）と云う青年もやって来た。此青年は金沢の出身で、其家庭には何かしら暗い影があるらしく、どちらかと云えば貧窮の中に勉強していたのであった。彼は熱心な勉強家で学者肌のところがあったが、其頃には郷里の方の或る女と悩ましいローマンスを持っていた（なお、郷里の女性とは金沢の中野綾、のちの新明綾夫人である。括弧内、山本）。

東京帝大を卒業した弁護士の宮崎龍介は、赤松克麿に代わり、知識人が結成した黎明会の準機関誌『解放』の編集主任となり、女流歌人で「筑紫の女王」と呼ばれた柳原白蓮の戯曲『指鬘外道』の上演を依頼するために、大分県別府の豪邸を訪問した。白蓮は上京の折に宮崎龍介とたびたび会い、のちに二人は駆け落ちした。新人会出身で大阪朝日新聞記者の早坂二郎は「九州の炭鉱王」と呼ばれた夫の伊藤伝右衛門にたいする白蓮の絶縁状を同紙にスクープした。当時、宮崎と白蓮が恐れていたのは、刑法上の親告罪の姦通罪で伝右衛門が告訴するかどうかであったが、伝右衛門は告訴せず、宮崎と白蓮は正式に婚姻が成立した。

新人会は「白蓮事件」を契機に宮崎龍介を除名した（4）。その見返りに、宮崎家が管理する新人会本部の黄興邸から立ち退きを要求され、一時期、新人会本部は本郷区駒込動坂町の手狭な借家に移転し（現、東京都文京区）、卒業生の赤松克麿、在学生の新明正道、門田武雄、山崎一雄の四名が合宿した。山崎は新人会機関誌『先駆』の編集を続け、新明がそれを補佐した（二か月後、この本部を退去し、広い本郷区駒込上富士前町に移転した）。

ところが、『先駆』第七号（一〇年八月）に新明は秋闘直二という筆名でIWW（国際産業労働者組合）の歌「労働者よ、結束せよ」と「赤旗」の訳詩を掲載したため（事前検閲により伏せ字あり）、同号は発売禁止となったただけではなく、のちに山崎は編輯人兼発行人および訳者として東京地方裁判所から新聞紙法で起訴され、「安寧秩序を紊るもの」として計二百円の罰金刑を受けた。翻訳を勧めた山崎は新明の身代わりに、裁判所で自ら訳者と名乗り出たのである。新明は、そのことについて全く語っていないが、四高以来の友人の山崎に生涯にわたり最大の敬意を払ったであろう。

門田、新明、山崎は新人会結成の中心的メンバーの赤松の影響を圧倒的に受けた。もっとも赤松は労働運動（友愛会）に挺身する麻生久、棚橋小虎らの影響を受け、大学卒業後、東洋経済新報社に勤務のかたわら、しばらく黎明会の準機関誌『解放』の編輯主筆となり、新明と

山崎が編集を補佐した。のちに、赤松は鈴木文治が組織した友愛会に入会した。

二〇年五月の第一回メーデーで新人会会員は制服制帽で参加した。とくに門田は梯子に登り、学生帽を振り回して熱烈なアジテーションをした。門田は東京憲兵隊によって「通学の事実なき者」とされ、徴兵猶予を取り消されようとしたが、鹿児島に帰郷し、連隊区の検査官に抗議し、徴兵猶予を継続した（ただ、門田は大学卒業後、入隊し、除隊後は東京日日新聞の記者となって、社会運動から離れて新聞社を転々としてジャーナリストに徹した）。

山崎は駒込上富士町に移転した新人会本部に同行せず、大学卒業まで本所の労働者街に住みつき、労働争議のレポートなどを新人会機関誌に寄稿した。卒業後、山崎は大阪時事新報記者となり、神戸の川崎・三菱造船所の労働争議の応援で活躍し、機関誌『ナロオド』第三号（一九二一年九月）に「神戸の大労働争議に就いて」と「罷工エピソード（二）」を寄稿した。山崎は争議が終わり、新聞記者を自らの意志によって依願免職した。

文部省は三学年次の門田、新明、山崎の三人をとくに新人会の危険分子と見なし、東京帝大法学部長に注意した。政治史担当の吉野教授は、卒業後の新明を研究室の助手に採用しようとしたが、採用を断念した（新明正道「回想の八〇年（インタビュー）」（山本鎮雄・田野崎昭夫編『新明社会学の研究』所収、一九九六年）。だが、吉野教授は勉強家の新明にたいする信頼は厚く、新明もまた吉野教授に敬意を払い、吉野教授の期待に添うように懸命に学業にも努力した（後述）。

新明は新人会機関誌『同胞』の編集を担当し、卒業直前まで最後の前期新人会本部の駒込上富士前町で下級生の千葉雄一郎、黒田寿男、小岩井浄、荘原達とともに共同生活を送った。甲府在住で新人会地方会員の小沢景勝は矢崎源之助とともに革人会を組織した。一時期、小沢は上富士前町の本部に寄留し、のちに当時の新明を次のように回想している。

新明正道さん、これは赤松氏とは正反対の学者肌の人で、在学中プルードンの訳書『財産とは何ぞや』を世に問うなど早くすでに碩学の風貌がありました。その読書範囲は広汎で専門の社会学のほか文学の方面にも及び、わたしの接した頃はチェーホフを愛読されてゐました。…新明氏と同じ金沢が生んだ天才作家の島田清二郎の『地上』の話などをされた（5）。

初期新人会、とくに黄興邸の新人会本部の合宿所では「実践派」と「学究派」（あるいは「研究派」）の対立があったことは、つとに指摘されている。平貞蔵によれば、「どんな思想の流れがあるのか、わが国では何を解放運動の思想的な柱とすべきかが、わからないうちに無暗に先駆者ぶって動いてはならない」と考える「学究派」のグループにたいして、「その研究には際限がないから、

実践運動に飛びこみ、その過程で理論を確立しよう」（8）と志向するヴ・ナロオドの急進的な「実践派」である。

「実践派」の三学年次の赤松克麿、宮崎龍介、石渡春雄は、社会の改造と解放のために、とくに労働組合運動への実践を強調し、一学年次の門田武雄、山崎一雄がそれに同調した。彼らは友愛会・労働総同盟に出かけ、渡辺政之輔に協力して亀戸の新人セルロイド工組合を結成した。東京帝大の卒業後に友愛会に入会した棚橋小虎と、卒業後に「東京日日新聞」記者となったあと、友愛会に入会した麻生久、さらに東洋経済新報社に勤務ののち、赤松も友愛会に入会し、ともに友愛会幹部として協調路線から戦闘路線へと方針転換に活躍し、友愛会七周年大会で大日本労働総同盟友愛会と改称した（一八年八月）。

新人会結成時、二学年次の第一高等学校出身の「二水会」の三輪寿壮、林要、嘉治隆一の他、平貞蔵、波多野鼎などは「学究派」に属し、新人会機関誌には「広義の社会主義」について論考を寄稿し、また各地の講演・遊説旅行に同行するようになった。

当時、初期新人会の会員が東京帝大法学部法律学科を卒業すると、弁護士の資格が与えられ、弁護士として労働運動や農民運動の争議には率先して相談役となり、法廷にも立ち、ヴ・ナロオドとして実践的な活動に専念した。同政治学科を卒業し、中央官庁のキャリア官僚となることを拒否して大学教師、研究所の研究員、新聞記者となった。ただ、この二つのグループはともに東京帝大という既成の「学校的観念」を拒否したが、超エリートという意識をもち、ときに解放の戦士という誇りをもち、それぞれの分野で指導的位置を占めるようになった。

七　新明正道の思想的探索

新人会機関誌の文献調査によれば、新人会会員・非会員で機関誌にコラムを含めて執筆した回数は―匿名・無名の発表もあり、コラムを含めて実名が判明する限りで―、赤松二四回、山崎二一回、新明二八回、宮崎二四回、嘉治隆一二一回である（田野崎昭夫）。文章家の新明は二学年次の新学期の九月から執筆を開始し、三学年次の四月（学年歴が変更した）に卒業したにもかかわらず、執筆回数は会員の中でも上位を占めていることになる。

新明が新人会機関誌に掲載したジャンルは論考、時評、随想、報告、散文詩、訳詩、寓話などと多方面にわたり、速読即解、博覧強記の「思想青年」として多彩な文筆能力を如実に物語っていると言えよう（表一、参照）。さらに、新明はG・R・S・テーラー著『ギルド国家論』（一九二〇年）、新人会叢書第三篇としてブルードン著『財産とは何ぞや』（一九二一年、発売禁止）、大学卒業直後、カール・リープクネヒト著『軍国主義論』（一九二一年）を翻訳・出版した。

第一表、新人会機関誌上の新明正道の執筆論考その他

（創刊：1919.3.8―終刊：22.4.1、通巻：32号、うち発売禁止：11号）
（注）コラムを除く、丸付数字は発表順の番号／（6）は6号

『デモクラシー』（創刊：1919.3.8―終刊：20.1.8、通巻8号）
①宣伝　人民の方へ（6）／②散文詩　何といふ怯懦だ！　③帝国と民主主義（7）／④戦争平和其他　⑤交通労働者の新生（8）
新明　発行兼編輯人（8）
発禁；（2）（5）（7）（8）

『先駆』（創刊：1920.2.1―終刊：20.8.1、通巻7号）
⑥時代批判（先駆者を認めよ他）3月号／⑦「国家社会主義」の批評　⑧詩　抗夫へ　4月号／⑨中古主義への復帰と其陥穽　⑩新しき芸術へ（？）　5月号／⑪代議政治の価値　⑫信濃路の春（宣伝旅行、分担執筆）　6月号／⑬時代批判（資本主義は戦さを欲す他）⑭総てか無か　7月号／⑮訳詩「労働者よ　結束せよ」「赤旗」　8月号
発禁；8月号

『同胞』（創刊：1920.10.5―終刊：21.5.1、通巻7号）
⑯麺麭の道徳　10月号／⑰小作人の立場　⑱冬の夜話　12月号／⑲イロハがるたの話　1月号／⑳　西瓜一つ　2月号／㉑組合の価値　㉒社会笑話　3月号
新明　発行兼編輯人　1920年12月号、21年1月号、2月号、3月号、4月号
発禁　1920年12月号、21年3月号、4月号、5月号

『ナロオド』（創刊：1921.7.5―終刊：22.4.1、通巻9号）
㉓家庭時代に於けるバクーニン　創刊号／㉔軍国主義の発達　9月号
発禁；1921年10月号、12月号

晩年、新明は当時の新人会の思想的状況について次のように回想している。

思想的に見ると、新人会は百花繚乱のおもむきがあり、デモクラシーの思想は次第に希薄化されたものの、一方社会主義を説くものに対して、他方アナーキズムを支持するものがあり、社会主義のなかでもドイツ流の社会民主主義をモデルとするもの、イギリスのギルド社会主義を可とするものがあり、明確に麻生氏のようにロシアのボルシェヴィズムを標榜するものは、決して多くはなかったものである（6）。

勤勉家の新明は、ロシア革命についての文献を読み、正統派マルクス主義の思想には集権主義的・専制主義的な傾向が認められると考え、むしろ「広義の社会主義」、アナーキズム（トルストイの影響から）、ギルド社会主義、ドイツの社会民主主義の思想に関心を持ち、新人会本部で新人会機関誌の編集とその他の実務に時間をさきながら、新人会機関誌に頻繁に発表し、すでに触れた「ように、独学で三冊の外国書を完訳した。

新明が新人会機関誌に掲載した論考のうち、以下三編を選んで考察する。まず最初に『先駆』四月号の「『国家社会主義』の批評」（⑦）を取り上げる。室伏高信の近著『社会主義批判』でマルクスとエンゲルスの正統マルクス派社会主義の理論とドイツ社会民主党の綱領との論争を検討した。新明は室伏の近著が「国家社会主義」

の論述と指摘した。国家と社会主義の関係について、新明はあくまでも社会主義は through the state であり、国家社会主義は for the state である。社会主義の思想的本質はそれを実現するために国家を利用するのであって、国家のために社会主義を利用するのではないと論じた。

たしかに、社会主義と国家の関係について、マルクスとエンゲルスの理論と、その後のドイツ社会民主党の綱領・政策・論争とはかなりの亀裂が生じた。高伏はこの亀裂を無視した。だが、社会主義は国家の進化を否定して死滅・廃止を主張し、それを実現するために国家の存在を認めたに過ぎないのである。

ドイツ社会民主党が綱領・論争で国家を認めたとしても、新明は国家社会主義それ自体の主張とは同一ではないと反論した。要するに、国家社会主義は国家主義の延長に過ぎず、社会主義の国家観と国家主義の国家観は明らかに相違している。その相違を理論的に無視することは出来ない。のちに、デマゴーグのヒトラーはファッシズム政党を「国家社会主義ドイツ労働者党」〈ナチス〉と称して結党した。ドイツ留学中の新明は、反民主主義・反共産主義・反ユダヤ主義を党是とする国家社会主義の根本的な欺瞞性を鋭く批判した（後述）。

一九一八（大正八）年一一月、第一次世界大戦が終了した。日本国内ではその直後、休戦による反動不況が生じたが、その翌年春から企業ブーム、株式市場・商品市場の投機ブームが激化し、さらに都市を中心に土地投機ブームも生じた。ところが、二〇年三月以降、世界的に不景気となり、日本でも株式市場の株価と、商品相場の価格が暴落し、戦後恐慌が始まった。そのため、倒産、工場閉鎖、失業者が増加し、労働組合数も増加した。ところが、労働争議やストライキの件数は減少したが（小作争議は増加した）、労働運動のなかで少数の労働組合、例えば、友愛会とは別に、信友会に属する印刷工組合などでは「直接行動」を重視する急進的なアナルコ・サンジカリズムの思想が支持されるようになった。

新人会は機関誌『先駆』第二号（一九二〇年四月）で、労働組合運動を理論的に検討し、その試みとして「サンヂカリズムの研究」を特集し、佐野学「行動哲学の方へ」、赤松克麿「ソレルの悲観主義と解放運動」、嘉治隆一「各国に現れたるサンヂカリズム運動」を掲載した。新明は次号の『先駆』第四号でギルド社会主義を検討し、「中古主義への復帰と其陥穽」と題して掲載した（表一、⑨）。

新明はペンティーの近著『ギルドと社会的危機』を論評し、ギルド社会主義の中古主義（中世の商人・手工業者によるギルド組織への理想主義）への幻想的復帰とその陥穽を指摘した。中世ヨーロッパ都市における同業者組合のギルド組織は領主や諸侯に対抗可能な特権と権威をもつ自治的組織である。新明は私有財産制度の階級的

支配の下で、ギルドが階級的支配を避けて、新たに組織的に工夫すれば、「ギルドも新社会の望ましき一単位として受容される」と評価した。階級的支配を否認することが、ギルド社会主義の精神であれば、それは「新理想主義の一つの表現」であろう。しかし、それは「ギルド社会主義の母たるサンヂカリズムにみいだされる」。その結語として「サンヂカリズムは、ギルド社会主義の有するあらゆる長所を具へている」と指摘した。

さらに新明は新闘直二のペンネームで『先駆』第五号で「代議政治の価値」（⑪）と題して、政治の本質と代議政治の価値について論じた。現在の政治、すなわち代議政治は集団の秩序を維持するために必要不可欠である。現在の労働組合運動はその組合内部でも、一種の代議制度がますます完成される傾向がある（ちなみに、労使協調を指導精神として発足した友愛会は、結成七周年大会で大日本労働総同盟友愛会と改称し、理事の合議制、会長公選制などを決定した。括弧内・山本）。

新明は、将来的にギルド社会主義やサンジカリズムが実現された労働組合や職能組合においても、代議制度は発展することが予測される。改造後の社会において、一層それを存続するためにも代議制度に大いに価値があるが、それが実現されるか、どうか、新明は懸念した（なお、ギルド社会主義やサンジカリズムは有力な変革の思想的・実践的な理論になりえず、第一次世界大戦前後の短期間に注目されるだけである）。

すでに触れたように、勤勉家の新明は、旧制四高の時代にトルストイの人道主義と吉野作造教授の民本主義に大いに感銘を受けたが、東京帝大新人会の時代に精力的に研鑽を積み、ギルド社会主義、サンディカリズム、アナーキズム、マルクス主義、ドイツ社会民主党の諸思想などの「広義の社会主義」を模索した。のちに、新明は「戦闘的な社会主義の立場」を自らの思想としてイメージしたと回顧している。

八　反軍主義の思想・平和主義と軍国主義

さらに、新明のもう一つの関心は、戦争と平和、平和主義と軍国主義についてであり、トルストイの人道主義から脱皮し、社会主義の思想によって平和主義を基礎づけようとした。その試みが『デモクラシー』第八号に発表した「戦争平和其他」（④）と、カール・リープクネヒトの『軍国主義論』（一九二一年）と相互に関連し、『ナロオド』第三号に発表した「軍国主義の発達」（⑳）である。

一九一八年一一月、ドイツ革命の発端となったキール軍港で水兵が反乱を起こし、労兵評議会（レーテ）によってキール市を掌握した。さらにミュンヘンでは独立社会民主党のアイスナーを議長とする労兵農評議会が成立した。一九年一月前半、ベルリンではリープクネヒトや

ローザ・ルクセンブルクらの旧ドイツ社会民主党の革命派（スパルタクス・ブントと称した）は武装蜂起したが、ノスケ（ドイツ社会民主党右派の政治家で、その当時はベルリンの軍司令官）は義勇軍に依頼して蜂起を武力で鎮圧し、しかも指導者のリープクネヒトとルクセンブルクが逮捕・虐殺された。

その二か月後、新人会は機関誌『デモクラシー』創刊号（一九年三月）で石渡春雄（筆名は隅田春雄）は「リープクネヒトの軍国主義観（一）」、第二号にその続編を掲載し、ドイツの革命家のリープクネヒトの虐殺と『軍国主義論』によって反軍国主義の思想を紹介した。さらに『デモクラシー』第八号で山崎一雄（筆名は友成與三吉）は「ローザ・ルクセンブルグに就いて」を掲載し、リープクネヒトと同志の女性革命家ルクセンブルグの人格と学殖、ドイツ社会民主主義運動（左派）の理論と指導、武装蜂起したスパルタクス週間において二人が虐殺された経緯を詳細に記述している。

すでに触れたように、新明は東京帝大を卒業前後にリープクネヒトの『軍国主義論』（軍国主義と反軍国主義、一九〇七年）を翻訳・刊行し、また『ナロオド』第三号に「軍国主義の発達」を掲載した。新明の「軍国主義の発達」によれば、軍国主義は絶えず拡大する傾向が軍隊組織の根本的精神であり、近代初期以来のドイツの軍隊は武器・戦術の発達によって少数の熟練した兵士よりも、徴兵制による多数の従順な兵員を必要とした。

軍隊組織を全国的軍隊（＝国民的軍隊）と称しても、それは決して民主主義の軍隊ではなく、行政的官僚組織以上に指揮命令を徹底した組織である。つねに上官が高き恩賞を蒙り、兵士は低き賞与を享けるという事実は、依然として支配階級の手段であり、かつ高等な搾取の手段である。軍国主義は永久に支配と独裁を確立するための有力な手段として存続して行くものである、と論じた。

新明が言及しているように、たしかにドイツにおける軍国主義は永久の支配と独裁を確立するための有力な手段である。だが、第一次世界大戦は「軍国主義の発達」の結果、総じて欧米の交戦国が戦争に勝利するために、飛行機、戦車、毒ガス、潜水艦などの多くの新兵器を開発し、徴兵制のもとで戦時体制を強化し、国力を総動員した最初の「総力戦」に他ならない。だが、日本はすでに徴兵令によって戦時編制を常備し、日英同盟を根拠に参戦し、ドイツに宣戦布告してドイツ領の青島や南洋諸島を占領した。

九　新明正道の卒業と前期新人会の終息

新明は四高以来の親友の山崎とともに、新人会機関誌『先駆』、『同胞』の編集を担当し、「実践派」の赤松と新人会本部で合宿生活を送った。もっとも、学究肌の新明は労働組合運動という「実践」よりも、寸暇を惜んで内

外の文献の親しみ、文筆を好んだ。しかし、責任感の強い最上級生の新明はただ本読みと物書きに没頭することは許されず、しかも卒業直前まで駒込上富士前町の前期新人会の最後の本部で合宿生活を送り、下級生の千葉雄一郎、小岩井浄、黒田寿男、荘原達を指導し、率先して対外的に奔走しながら、自ら論考を執筆し、外国書を翻訳した。

そのこともあって、新明は、卒業直前まで就職活動をせず、それを見兼ねた満鉄調査局に就職し、東京に在職していた嘉治隆一の忠告で、研究員の森戸辰男を通して大阪・天王寺の大原社会問題研究所（所長・高野岩三郎）に応募した。ところが、一名を採用する予定だったが、同じポストに経済学の宇野弘蔵も応募したため、なかなか決定しなかった。（二一年五月、助手に就任）

そこで、新明は金沢の白銀教会の松岡貞一牧師に関西方面の副職先について相談の手紙を書いた。早速、松岡牧師から神戸の関西学院（当時は高等専門学校）で政治学の講師を探しているとの返書が届いた。新明は吉野作造教授の推薦状を添え、志願書を提出した。当初、新明は文学部社会学科で政治学担当の非常勤講師を依頼されたが、その後、専任の教授に採用されることになった。

当時、新設の関西学院文学部社会学科では専任は法学担当の河上丈太郎教授のみで、教授陣の増員を必要とした。関西学院は新明の専任教授の採用を決定すると、その条件として新明に政治学のほか、社会学、さらにドイツ語の講義を依頼した。

政治学徒の新明は社会学の講義にはまったく自信はなかったが、嘉治隆一に相談したところ、「社会問題をやっているから、なんとかやれるだろう」と励まされ、しかもはなむけとしてスペンサーの『社会学』全三巻を贈られた。当時、法律学、経済学、政治学などの社会諸科学のなかで、社会学は「社会問題や社会思想」を扱う程度にしか認識されていなかったのであろう（9）。

新明にとって、関西学院の大学教師になったのは偶然だったが、社会学を研究するようになったのは、それ以上に偶然だった。その後、新明は社会学の研究に懸命に研鑽を積み、東北大学文学部の社会学講座を担当し、「綜合社会学」の体系を確立し、多くの社会学研究者を養成した。昭和期の日本を代表する理論社会学、社会学史の研究者と評価され、晩年には社会学者として最初の日本学士院会員に推挙された。

新人会機関誌『同胞』を『ナロオド』と改題し、新人会三週年（ママ）を迎え、学生会員の減少もあって、大学内の学生のみの思想サークルとして再出発することを決定した。その際、卒業生会員は各自自由に行動し、新人会と独立の立場を取ることを要請した。その後、『ナロオド』第九号（二二年四月）に「廃刊の辞」を掲載し、「我等の目指す行手は、依然としてナロオドの中だ！　民衆の

中だ！」と「ナロオド宣言」をして、新人会機関誌を廃刊にした。そこで、新人会ＯＢの「学究派」は社会思想社を起こし、月刊同人誌『社会思想』を創刊した（一二年四月）。

新人会結成から新人会機関誌の廃刊まで「前期新人会」と称する。新明は「前期新人会」で、日本の社会運動の黎明期に「思想青年」として自らの魂を燃焼させ、新人会機関誌に論考その他を寄稿した。卒業後、新明は『社会思想』に政治評論や社会運動論、さらに大阪朝日新聞を退職した長谷川如是閑や大山郁夫らが創刊した文明批評誌『我等』に社会学的な論考を精力的に発表した。

（注）

（1）豪壮な木造の「黄興邸」は新人会本部として一九一九（大正八）年五月に利用され（機関誌『デモクラシー』第三号）、約一一名が共同生活を送った。ところが、新人会本部は翌年五月頃に移転した（『先駆』第四号による）。「白蓮事件」によって宮崎龍介は新人会から除名され、新人会は黄興邸から退去を余儀なくされた（なお、一九年一一月の新人会結成一周年の記念写真では、卒業した赤松克麿を含め、一二名が黄興邸で共同生活を送っている）。

（2）林要「新人会のころ」（『歴史をつくる学生たち』、東京大学協同組合出版部編、一九四七年）。

（3）平記念事業会編『平貞蔵の生涯』（平記念事業会、一九八〇年）。

（4）のちに、林要は新人会の宮崎龍介の除名処分について、次のように回想している。「宮崎どうも怪しからんということになって、やがて一同連名の絶交状が彼におくられた。むろん、わたしも署名したが、そうしなければならぬほどの理由は、いったい、どこにあったのであろうか？　いま考えてみて、すこし大げさすぎるように思われる」（林要「おのれ、あの人、この人―その七―」、『世界経済評論』一九五七年六月号）。

新明は宮崎龍介の除名処分について、次のように回想している。柳原白蓮女史との「恋愛が本格化し、宮崎君が会の仕事から疎遠になるにつれて、一部の学生のなかから非難の声が出て来ました。／しかし宮崎君が反省するどころか、かえつて威丈高になつて会の現状を批判するような言辞を弄したので、空気はますます険悪となり、ついに宮崎君を除名するというところにまで進んでしまいました」（新明正道「自叙伝―その一―」、『新明社会学研究』第八号、二〇〇三年）。

林要は「新明正道のごときは、この署名を右手でするのはケガワラしいといって、左手で書いた」と

記述している。このように書かれた新明は、「宮崎の除名処分に決定的なイニシアティブを取ったのではない」と病床でインタビューに答えている（新明正道「新人会について」、『東京帝大新人会研究ノート』第五号、一九八三年）。

（5）小沢景勝「新人会の人々（書簡）」（『東京帝大新人会研究ノート』第五号、一九八三年）。

（6）新明正道「遙かなる追想」（『ワイマール・ドイツの回想』、一九八四年）。

（7）新明正道「平和思想への志向」（『ワイマール・ドイツの回想』、一九八四年）。

（8）平貞蔵「修学と思想形成」（三輪寿壮伝記刊行会編『三輪寿壮の生涯』、一九六六年）。

（9）新明正道「自叙伝（その一）」（『新明社会学研究』第八号、二〇〇三年）。

追記　師の影を踏まず

「三尺下がって師の影を踏まず」とは、言うまでもなく、師（先生）と随行するとき、三尺下がって歩き、師の影をふまないようにせよとの戒めである。新明によれば、この戒めを師弟の関係を美化した表現であると評した。たしかに、社会の激変期には、弟子が恩師に尊敬の念を抱いても、世代的に相違があれば、師弟の間に思想的・理論的な相違が生じるのもやむを得ない。大正期から昭和二〇年、つまり大正デモクラシーから社会運動（社会主義）の高揚と弾圧へ、さらに軍部の独断専行から敗戦へと激変する時代に、師弟の間で思想的に対立と確執が生じ、弟子の中から「師の影を踏む者」が出てくることもあり得る。

大正デモクラシーの時代、啓蒙運動の指導者として輝いた福田徳三（東京商大）、吉野作造（東京帝大）、河上肇（京都帝大）の三人の教授はそれぞれの大学で多くの弟子を養成した。そのうち、福田と大塚金之助、吉野と赤松克麿、河上と石川興二のように、弟子は恩師と確執し、いわば「師の影を踏む者」である。

では、吉野教授と新明の師弟関係で、新明は吉野教授の思想を継承したのか、あるいは対立したのか。つまりどのような関係であったのであろうか。吉野教授はしばしば東京帝大新人会の世話役とみなされているが、新人会が機関誌を創刊し、『デモクラシー』と標榜したとき、大正デモクラシーの使徒の吉野教授にはまったく相談をもちかけなかった。

しかも、新明は、吉野教授の主張は「政治的デモクラシー一点張りで魅力の乏しい嫌いはあった」し、「面とむかって博士の立場（民主主義、括弧内・山本）を批判しないまでも、これをもって時代遅れと判定し、自分た

ちの立場（「広義の社会主義」、括弧内・山本）を原理的にはるかにまさるものと考えていた」。まさに多くの新人会会員と同じく、当時の新明もまた「師の影を踏む者」であった。

学生サークルから出発した新人会は、学内に止まらず、普通選挙制実施のために活動もしたが、社会改革のために労働組合の結成と活動に協力し、また地方の青年に呼びかけ新人会地方支部を組織したりした。各地の新人会支部は黎明期の社会運動の担い手となった。新人会は労働運動の思想的動向を先駆的に研究した。そこで、新人会会員は各人各様にギルド社会主義、サンジカリズム、ドイツの社会民主党の修正派と革命派の思想、ロシアのボルシェビズムなどの「広義の社会主義」の諸思想を新人会機関誌や新人会叢書として発表した。

ところが、新明は生涯を通して思想的に「師の影を踏み続けた」のではなかった。晩年の新明は「吉野作造先生生誕百年記念会」（一九七八年六月、宮城県古川市主催、現在、大崎市）に招かれ、「吉野作造先生と大正デモクラシー」と題して講演した。新明は吉野が発表した「現代政治上の一重要原則＝民主主義は何故わるいか」（『中央公論』一九二八年一二月号）に言及している。そこで、新明は吉野の「いわゆる民主主義の精神は社会主義そのものをも包容し、近代政治の全過程に亘り、これを一貫する根本の重要原則だと考える方が妥当である」と評価した。

大正、昭和初期に説いた吉野のデモクラシーの主張は歴史的な自由主義を超えた民主主義の大原理を含み、しかも社会主義に対しても反省を促すことのなったのである。最後に、新明は吉野先生の時代の大正デモクラシーの思想は第二次世界大戦後のデモクラシーが成長する基礎を築き上げ、「今後も日本のデモクラシーが発展するかぎり貴重な精神遺産としてますます光り輝いてゆく」と高く評価した（新明正道『現代社会学の視覚』所収、一九七六年）。このように、新明は思想的に「師の影を踏む者」ではなかった。

（前期新人会は地方支部の結成と活動に尽力した。新明は金沢の先進的な青年に呼びかけ、金沢支部が結成された。ところが、金沢の一青年から新明宛にきた手紙が官憲に押収されて「不穏文書」とされ、新人会本部は家宅捜査され、警察署で取り調べを受けた。その直後、金沢支部会員の自宅も一斉に捜査された。官憲の弾圧に屈せず、金沢は極めて保守的な土地柄ではあるが、金沢支部の会員は黎明期の社会運動を担った。そのことを詳述すべきだが、もはや紙数がないため割愛した）。



1978年（昭和53年6月）、
吉野作造博士の生誕百年記念式。宮城県古川市（現、大崎市）で講演。
『新明社会学研究』新明正道先生　生誕百年記念号（1999年6月）

性と化粧の物語（四）

鈴木守

第一話　性と毛の化粧（四）

第五節　元服化粧

元服化粧には、女性と公家の人達の眉化粧及び武家社会の月代と丁髷から成る髪化粧があります。これらの化粧については、第一話の第三節と第四節にて、既でに紹介しましたが、本節においては既報とは視点を変えて、①女性の眉化粧、②公家方の眉化粧並びに③武士社会の髪化粧が何故、元服化粧に登用されたのか、その理由を考察する事に焦点を当てる事にします。尚、本節では、第三節と第四節に引用した文献を使用する場合は、文献名のみを記載する事にします。

一項　女性の眉化粧

この項では、第一話第三節で紹介した『女性の眉化粧』が元服化粧とされた理由を考察します。

我が国の化粧史に記録されている眉化粧の最も古い資料は、『日本書紀』、仲哀天皇八年』に「処女の睩」の言葉でした。次いで、『古事記』、応神天皇』に記載されている「眉書き濃きに書き垂れ」の一文が認められました。

その後、飛鳥・奈良時代には『万葉集』に眉引が謳われ、正倉院御物『鳥毛立女屏風』には蛾眉の美女が描かれていました。

平安時代に入りますと、清少納言が『枕草子』に「物のあわれ知らせ顔なるものに眉抜き」を挙げ、「有難き物には毛のよく抜けるしろがねの毛抜」を推奨していました。毛を抜去して眉を描く化粧法の最も古い記録でした。尚、これ以降の眉毛を除いて眉を描く化粧を〝眉造り〟或は〝眉造り化粧〟とし、眉毛を取り去る事なく眉を引く化粧を〝眉引き〟或は〝眉引き化粧〟で表わします。

平安時代の書、『文華秀麗集』や『和漢朗詠集』には、

画眉、蛾眉、雙蛾、青蛾、翠黛、柳黛、片黛等の舶来語が使われていましたので、中国の眉化粧に触れておきます。

中国では戦国時代に登場しました。この化粧は秦、漢、三国時代を経て隋、唐の時代に至る間、衰える事なく続けられていました。石黛（墨）を黛硯（硯）で磨って黛としていました。隋、唐以降には、水を含ませるだけ使用可能な螺黛が使われるようになりました。しかし、黛硯や石黛、螺袋等の化粧料が輸入された証拠が認められませんでした。その為、本誌、三七号、第三節に「日本の眉化粧は、他国から伝播したのではなく、日本で自生した化粧風習である」と推論しました。所が、その後、岡田新川著の『秉穂録』、一七九六』に「婦人眉を剃る事、唐土にもあり。朱翌撰の『猗覚寮雑記』に「眉も剃り去り墨で書く」とあり、更に劉奇の『釈名』を引用して「黛は代也。眉毛を去りて滅し、以って其處に代える也」と認められていました。第三節の推論を「日本の眉を落とす化粧は中国から伝播した可能性も否定出来ない」と修正します。

日本の眉化粧に戻ります。

平安時代を過ごして、鎌倉時代になりますと、『香取宮遷宮用途記』に眉墨、『吾妻鏡』に眉造、『とりかえばや物語』に女性の眉抜きが見られ、室町時代には、伊勢貞陸の『嫁入記』に眉墨、『類聚雑要抄』に鑷子（毛抜）が記されていましたが、『健内記』に「予女九歳、祝着事有り。母が眉抜く」と書き記されていましたので、室町時代には元服の祝いに際して眉造り化粧を施す事が定めになっていた事が窺えます。

安土桃山時代の眉化粧については、大阪城天守閣編『戦国の女たち』に徳川家康由縁の女たち、築山殿と旭姫の殿上眉、千姫の三日月眉の写真が収録されていました。

江戸時代には、「元服の二剃刀は女也」の川柳は、女の元服の証は眉造り化粧である事を如実に示していますので、江戸時代の資料は豊富にありますが割愛して、眉造り化粧発祥説を紹介します。

石原正明の『年々随筆』には「眉を去るは、生え際のしどけなき所、色の濃き薄き所などありて、わろびれば、それを剃り落として、思うが儘に描くなり」とあり、加藤美樹の『南窓筆記』には「女の眉を落とす事は、人相の書に女の眉一文字に切れたるは多淫の相どと云えり。総じて女の眉にて相を計るもの故、悪相を隠さん為に眉を払い、愛作り眉（眉形の一種）にするなり」と記されています。その他、俗説に「夫の好みに応じて眉作りして貰う為に眉を落とす」と云われています。

これらの諸説のいずれが正しいか詮索しても甲斐なき事ですから、眉作り化粧が何故、元服化粧に採用された

のか、その理由を考察することにします。

室町時代、万里小路時房の日記『建内記』に「娘が元服の祝いで母親に眉毛を抜いて貰った」とメモが残されていました。このメモは室町時代には既に、眉造りの化粧が元服化粧の位置を確保していた事を呈示していましたので、室町以前の事跡を追う事にします。

平安時代には、清少納言が『枕草子』に「物のあはれ知らせ顔なるもの。はな垂り、まもなうかみつつ（絶え間なく噛み乍ら）物いふ声。眉抜く」と著わし、他に「ありがたきもの。舅にほめらるる婿。また、姑に思はるる嫁の君。毛のよく抜くるしろがね（銀）の毛抜。主そしらぬ従者」の既述がありました。ここで少納言の呟きに耳を欹てる事にします。

前の一文は「双の眉から全ての毛を抜去すると、痛さを通り越して〝物の哀れを知らせ顔〟になってしまう。兎に角、〝眉造り化粧は痛苦の極みだ〟と訴えている」ように思えました。だからこそ後文では「毛のよく抜くる毛抜に謝辞を述べた」のではないかと解釈しました。

では、痛苦を伴う眉造り化粧が何故、元服化粧の位置に座ったのか、その疑問の考察に移ります。この場合、〝痛みを伴う眉造り〟を主語にしますと、疑問解決の道は閉ざされます。〝痛みに耐え得る女性〟を主語にしますと、〝妊娠に伴う痛苦を抱える女性〟を想起します。妊娠と云う条件を設定しますと、生理的に見て成人化した肉体を想定する必要があります。本誌一〇八号で述べた疼痛を伴う抜去化粧は、男子が壮丁に成長した証に記される成人表示の化粧であり、本誌一二一号掲載の瘢痕化粧も又、一人前の女性になった事を示す成人表示の化粧に利用している部族もおります。瘢痕化粧も又、痛みを誘導する方式を採用しています。眉造り化粧も前例の抜歯化粧や瘢痕化粧と同様に、痛苦を誘起する故に、「元服化粧に登用されたのである」と推論した次第です。

二項　公家の眉化粧

男性の眉化粧文化は、公家の人達によって支えられていました。彼等は女性と同じように眉化粧を元服化粧としており、元服化粧として男の眉化粧が始まったのは、平安時代の後期・院政文化期の頃と云われています。しかし、十二世紀から十四世紀頃に描かれた『源氏物語絵巻』や『枕草子絵巻』等数多くの絵巻物が登場し、それらの絵巻に描かれた人達の眉を見比べてみますと、市井の人達の眉は公家や女官に比べて痩せており、公家の眉は女官より細身でしたが、眉際が整っていましたので、藤原文化期の公家達は眉抜きは行わないまでも、眉墨で形を整えていたように思えました。従って、公家衆の眉化粧は前述の院政文化期以前に既に始まっていたと思考されます。

院政文化期の頃の眉化粧については、江戸時代の書・『玉勝間』、『貞丈雑記』、『南窓筆記』等に「男性の眉を抜く眉造りは、鳥羽院が男色だった為、公家の子供達が参内する時、〝女のように化粧して出仕せよ〟と仰せられ、左大臣花園有仁と申し合わせて、両人が女の化粧を施した事に始まった」と述べていました。また、『烟霞綺談』では「若い公家が高眉（殿上眉）を中止する時は勅許を必要とした」と著わしていました。

平安終末期には、京家の武士達にも公家風の化粧風俗が伝播し、『平家物語』、『源平盛衰記』、『義経記』等に平敦盛や源義経が薄化粧に鉄黒を施し、眉を細く作っていたと記されていました。

鎌倉時代当初の頃、藤原定家は『明月記』に「成実。今日、直衣始の儀にて、鉄を付け眉を作る」とメモを残していましたので、定家の頃までに公家の眉化粧が儀式化した事が偲ばれます。

その後、鎌倉・室町時代の公家の眉化粧を記した書は未見ですが、安土桃山時代の武将・今川義元の公家風化粧が有名です。

江戸時代に入りますと、武家社会では眉造りの化粧は完全に廃れましたが、本島知良の『月堂見聞集、一七二八』に「享保十年、東宮様（後の桜町天皇）御眉作の御祝儀あり、諸家より御祝儀物献上。所司代よりも御樽御肴献上の由」とありました。江戸時代に至っても堂上人の間では、男性の元服時に眉造りの化粧を施す風習が残されていました。

明治時代になりますと、明治元年（一八六八年）正月六日に維新政府は公卿に対し、次いで一八七〇年は華族に対して〝作眉禁止〟が太政官より布告され、その後、男性の眉化粧は姿を消す運命を辿りました。尚、女性の眉造りは禁令外でしたが、昭憲皇后が率先して止められたのを機に、一般の人達の間でも眉造りが行われなくなりました。現在の婦人達は眉落としを伴わない眉化粧を施しています。

以上、公家衆の眉造りの歴史を大雑把に述べましたが、この叙述の中で、眉化粧が元服と係わりを持った歴史的な証拠としては、桜町天皇の東宮時に行った眉作り、それより遥かに遡って『明月記』に認められた直衣始の儀における眉造りがあり、それ以前には、鳥羽天皇の行状記が登場しました。

鳥羽院の行状については、北畠親房の『神皇正統記、一三三九』に「鳥羽院は容姿もよく綺羅を好まれたので、左大臣花園有仁と申し合わせて上下とも同じ風を装った」と記していますので、花園左大臣の援けを借りて、女性風の化粧を広め、己れの衆道趣味を満足させようとした事が元服化粧へ発展したのだろうと推察しています。この点を更に糾命しますと、今の世だから云える事ですが、鳥羽帝の衆道趣味を左大臣がバックアップして

是認した事は、現在の最高権力者内閣総理大臣の顔色を窺った衆参両院の与党議員達は民意等物かは戦争法案を可決した愚行によく似ています。従って、直衣始の儀に公家の若衆に女性風の化粧を施す風習を理論的に考察しても初まりません。時の最高権力者・帝の仰せに従ったまでの事と云わざるを得ません。その後、直衣始の儀から元服の祝に化粧始めを行うようになりました。

三項　武家の髪化粧

丁髷と月代から成るヘア・スタイルは武家の象徴であり、且又、元服化粧でもありました。この項では、本誌前号にて紹介した月代、茶筅髪並びに丁髷の概要を述べ乍ら、これらの髪形が元服化粧の仲間入りをする経緯を考察する事にします。

①　月代：　月代は応仁の乱以後、武士が常時兜を被っていた事に始まるとする説もありますが、西行作と云われている『選集抄』に「年頃来りて髻を切り月代見えわたりたり」と記され、年頃になると月代姿になる事が示唆されていました。又、江戸時代の書『年々随筆』には「時忠大納言の月代…」の文言が認められていましたので、平時忠や西行の時代には既に月代風習が創始されていた事は確定的です。尚、『西行物語絵巻』及び『法然上人絵』には、西行事佐藤義清や法然の落飾図が描かれ、両図共、戒師がが手に剃刀を手に剃髪する場面が認められました。従って、西行や法然が仏門に入った時代には、剃毛が可能だったので、既報では「剃刀が月代発祥を促したのではないか」と暗示しました。しかし、江戸時代の書『女用訓蒙図彙』の脚注に「毛抜：戦国時代には髪を抜いて月代とした」、並びに「剃刀：佛教の戒律により法具とされていたが、江戸時代には容飾具として記載」と注釈されていました。この注釈に基づくと、戦国時代までは、剃刀は法具としての使用はあったが、俗人の使用はなかった為、月代作りは毛抜で抜毛していた事になります。それ故、前述の月代発祥の示唆は成立せず、西行や平時忠の時代には髪を毛抜で抜毛していた次第です。毛抜による抜毛は、前報の『女性の眉化粧』で述べましたように痛苦を伴う化粧術ですから、月代の発祥は剃刀の使用に因るものではなく、「痛苦を耐え抜く武士の嗜みを演出する事に基づいて、戦国時代には年頃になると、〝負傷を恐れぬ武士〟を象徴して前髪を抜毛したのである」と結論付けしました。

②　茶筅髪：　茶筅髪は中世男性の髪形の一つで「髻を組紐で棒状に巻き先端をバラバラにして茶筅様に結った髪形」で頭頂を高く見せる意味がありました。中世は戦乱の時代でしたので、武士は一寸でも大きく見せて強さを誇示するのに利用しました。従って、茶筅髪の発祥は威嚇目的の頭髪化粧だったに相違ありません。

テレビ時代劇に登場した若かりし日の織田信長は、颯爽と茶筅髪を佇立させて馬を駆っていました。このシーンを見て思った事を率直に云いますと、「茶筅と云うよりか信長の屹立した男根」を想像しました。又、安土桃山時代の武将、加藤清正も茶筅髪を結っていた筈です。彼の丈高の兜は茶筅髪収納用に作られたと思います。この兜は『中西豪、大山格監修、戦国武器甲冑事典、誠文堂新光社、二〇一五』によりますと『長烏帽子形引懸兜』と呼ぶそうです。偉丈夫の清正がこの兜を被って睥睨すれば敵軍は蜘蛛の子を散らすように逃げ去ったのではないでしょうか。斯様に茶筅髪が強者のシンボルと見做されるようになりますと、それに肖って、元服の儀に茶筅髪を結うようになったと思います。特に、信長や清正の故郷・尾張の国の地域的風習を想像します。

③　丁髷：　騒乱の中世を過ぎますと、平穏な二百六十有余年の江戸時代が到来しました。この時代に入りますと、幕臣や陪臣等、主採りの武士達は丁髷と月代を標準的なヘア・スタイルにしました。この髪形がいつ頃から始まったか知りませんが、髪を頭頂で束ね、元の方を結んで先方を額の方へ髷げた髪形です。この髪形の感じをイメージした儘を述べますと、「茶筅髪は頭頂に屹立した男根と想定し、強者を象徴する髪化粧だとしますと、丁髷は勃起して前方に突出した男根を想定できます。それと同時に髷げた髪形はお辞儀の姿を想起させます。従って、丁髷は礼を心得た武士を象徴したのではないかと考えました。丁髷と月代を併せた元服化粧は、忍耐と礼を弁えた丈夫を祈願したのであろう」と考察した次第です。

明治時代になりますと、公卿、華族の黒闇・作眉の禁止令公布同様に明治四年（一八七一年）に断髪令が発せられ、丁髷風習も又、消滅の道を辿りました。何はともあれ、江戸時代まで続いていた元服化粧はいずれも明治政府の意向に従って消滅の道を歩んだのでした。

第六節　女子陰部無毛症用の義髪

義髪は所謂、髪の事です。髪は〝かつら〟若しくは〝かずら〟とも読み、〝かずら〟は古くは、〝頭の飾りに用いた蔓草〟の呼称でした。従って、髪を採用しますと、葛城の〝かつら〟、桂川〝かつら〟が蔓草のように絡まり付いてきます。例えば、髪と蔓は冠の相違だけです。従って、この節では義髪を採用する事にしました。

所で、禿げ頭に義髪を被るのと同様に陰部無毛症の御婦人は陰部に義髪を貼布します。以下、この義髪を〝陰部義髪〟と呼ぶ事にします。陰部義髪は薬事法で云う化粧

品又は医薬部外品に該当しませんので、これまで検討対象から除外して来ました。しかし、陰部義髪は本来、有るべき所にない為、有るが如くに見せる必要性に基づいて義髪を利用するようになりました。又、付け睫や付け黒子も薬事法では化粧として認めていませんが、一般の人達はそれらを化粧料の一環に加えています。それ故、文化人類学では、陰部義髪はカムフラージュ乃至は隠蔽を目的にした化粧品と見做しているように思えます。と云う事で『陰部義髪』をテーマとして取り上げる事にしました。

一項　女子陰部無毛症について

陰部義髪の話題を提供する前に女子陰部無毛症について紹介しておきます。この疾患については、臨床皮膚医学の専門書にも詳しく記述されていません。手持ちの書では「女子陰部無毛症は先天性無毛症の一つであり、治療にはアンドロゲン含有軟膏を一日数回塗布」と記されているだけで、本疾患の成因等については既述されていません。

従って、本疾患の成因を治療法から類推しますと、アンドロゲンを治療薬としています故、男性ホルモン失調が疑われます。女性の場合、陰毛の発育は副腎皮質から分泌されるアンドロステロンに依存している事は本誌一三六号で述べた通りで、「先天的に副腎皮質におけるアンドロステロン合成機能の失調」が原因ではないかと類推しています。

次に、陰部無毛症の発症率について触れます。私の知人・元警察庁科学研究所主任研究官だった須藤武雄氏は、毛髪鑑識の第一人者として知られていました。彼は産婦人科医と共同で無毛症の発症率を調査していました。彼等の調査結果では、一五六六人中二七人が無毛で、発症率は一、七二%でした。彼の言によりますと「鳥取、島根方面では無毛症発症率は約一〇%であり、お隣の中国では無毛又は無毛に近い者は七〇乃至八〇%に及び、逆に日本人のように濃い陰毛の人は二〇%以下である」との事でした。彼は付け加えて、「日本では青々とした濃い繁みは男性を引きつける魔器として悦ばれているのに対し、中国では黒々としたフサフサした繁みの持主は男性に嫌われる傾向にあるそうだ」と述べていました。所変われば品変わると言いますが、下草の生え方まで違うとは驚き桃の木でした。

二項　陰部義髪の話

いよいよ、陰部義髪の話に入ります。かつて私が子会社の薬品会社に出向した時の話です。子会社の医薬会社が新薬配合の軟膏剤を発売しました為、得意先となる皮膚科に精しい私に白羽の矢が立って子会社出向と相成りました。私の仕事の一つが皮膚科学会の時、設営される商品展示の責任者の役でした。展示会場には、医薬品会社を中心に二、三十社が商品展示していました。年に二、四回展示会がありましたので、展示会社の人達とも顔馴染みとなりました。その中に義髪会社の人達もおりましたので、義髪、取り分け陰部義髪に興味が湧いて来ました。当時、聞き及んだ話柄がメモ帳にランダムに書き残されていましたので、それらを書き連ね、脚色し乍ら取り纏める事にしましょう。

最初に責任者の方の話を纏めますと、「陰部義髪は昔等はオーダー・メイドでしたが、最近はオーダー・メイドのお客様は減って、現在では専ら機械製造の製品を販売しています。商品の形態は数種類ありますが、最も多い型は扁平な逆三角形型で、中には菱形の男性用品もあります。商品の性格上、販売につきものの喧伝はもってのほかで、秘やか販売しています。学会の商品展示は数少ない喧伝の場です。この学会の先生方は、ユーザーさん達の中継ぎとして非常に大切です。顧客を紹介して呉れたり、品質上の御意見を下さったり、有難い存在です」と先ずは建前から開陳しました。次いで、彼の話を続けますと、「現在のユーザーの人達の多くは、修学旅行や仲間と一緒に旅行する時、パイパンでは恥かしいと云うのが本音のようで、昔の人達のような悲壮感は薄れており、今後、レーザー等で陰部脱毛が手軽に出来るようになって若い人達に普及しますと、陰部無毛に対する抵抗感が更に希薄になる事が予測されますので、義髪に対する需用が減るのではないかと心配です」と語っていました。

責任者の方とは別に、技術畑の方がいました。彼の役割は技術的な質問への受け答えのようでした。彼の話を興味深く聞きましたので纏めますと、彼は「女性の場所が場所だけに自然の感触が大切で、その感触を出すには手作りに限る」と主張していました。古いお馴さん用の製品を手掛けているらしく「使用する材料にも拘泥わりがあり、毛としては羊の毛を黒く染めた物の材質は、手に触れる感触、強力性、縮れ具合とも最適で、毛を植えつける台（下地）は薄く鞣した鹿皮が極上です」と云い、「昔は銭湯の女湯にプカプカ浮いていたそうでしたが、最近は接着剤の進歩で今の製品は一ヶ月くらい貼替え不用で、入浴したり汗で濡れたりしても剥がれる心配はありません。手作りの義髪を御使用のお客様で二十年間も御主人に知られる事なく過ごした方もおります」と胸を張っていました。

（第一話・完）

「司馬雑感」あれこれ（3）

山田嘉久

三　家康の故郷

徳川家康は天文十一年（一五四二）に三河国の土豪である松平氏の第八代当主松平広忠の嫡男として岡崎城で生れたが、松平（徳川）家の発祥の地は、岡崎から奥地に二〇キロもはいった「松平郷」（現豊田市）であると云われている。

今ではバスも通っていない過疎の村落である。

入口に「東照宮」がある。家康を祀る東照宮は全国に百以上あるそうだが、此処は日光、久能山と並んで三大東照宮とのことだった。

徳川家の祖は「徳阿弥」という漂泊の遊行僧であった。

時宗というなんの戒律もない宗旨を奉じ、南無阿弥陀仏をすすめて歩く一種の賤民である。

村に入ると村の大尽家に逗留して、先祖の供養をしたり、諸国噺をしたり、時には色噺などをして村人を喜ばせ、村に飽きてくると紹介をもらって次の村にゆく。

徳阿弥も最初から三河国松平郷に流れて来たのではなく、近所の坂井（境、酒井）村にきた。そして豪家酒井家の娘か後家と情を通じて、子まで生ませた。

当時の里謡に「高野聖（遊行僧の一派）に宿かすな、娘をとられて恥をかくな」と歌われたように、この坊主は松平家にも入り込み子を生み、遂に居座って松平家を継ぐことなる。そして松平親氏と名乗る。

これが家康の八代前の当主だが、今では松平郷に彼の銅像が建っているが、いかにも精力的な顔をしている。

なお、先の酒井家については、その縁でこれを松平家の下に属させた。松平、酒井の強い関係はこの時から始まる。

徳川家が天下をとった後も酒井氏は譜代大名のなかでも別格として、大老の地位を約束された家柄となる。

松平郷の一番奥に「高月院」があったが、徳阿弥を始め松平家の菩提寺である。三代将軍家光の建てたものと

伝えられているが、境内には現在の当主（一八代目）が手植えしたという松が育っていた。

徳阿弥から三代目の信光の代に、山を下りて安祥（城）城を奪った。信光は八十五年の生涯に四十八人の子を得たが、この信光の多産が松平氏を勃興させたと司馬も書いている。

信光は勢いを駆って岡崎城も奪った。この城は六代信忠のころ他にとられたが、七代清康が相続早々、奪い返した。以来、岡崎城は家康に至るまでの三河松平家の居城となる。

そして、家康の父親（八代広忠）のころには三河半国の出来星大名までのし上がってゆくのである。

ところで徳阿弥（松平親氏）はどこから松平郷にやってきたのだろうか。

徳川家の言い伝えでは「上州の徳川村から来た」と云うことになっているそうだ。上州徳川村とは上野国新田郡徳川郷（現群馬県太田市福島町）であり、埼玉県深谷市の北方二キロにある。

この新田に鎌倉以前から源氏の一派が住みつき、鎌倉期には新田義貞が出た。義貞は、同じく近くの足利から出た足利尊氏によって滅ぼされるのだが、新田党はやむなく土地を離れて流浪した。その十代の後が徳阿弥だというのである。

これが徳川家の家系伝説となり引き継がれていく。

司馬はそれ以上詳しい徳川家系は記していないが、大正時代に出版された矢田挿雲の「江戸から東京へ」によると、八幡太郎義家の孫義重が新田氏の祖で、義貞は義重の三男義兼から伝わった八代目の嫡男であるが、一方、徳川氏は義重の四男義季から別れた家で、家康は義季十五代の孫とされている。つまり義季と家康の間に徳阿弥がいたことになる。

このあたり、いささか怪しい。

というのは家康ははじめは藤原氏の子孫であると称していたからである。このことは、織田信長が最初は藤原氏と称していたが、中途で平氏と云い直したのに、妙に一致する。

日本には古来から源平交代思想があり、武力勢力を樹立した最初は平家であったが、それが源氏の鎌倉政権にとって代わられ、その鎌倉政権も平氏の北条家にとられ、北条家は源氏の足利氏にとられ室町幕府になった。

それを倒すには平家でなければならず、そのため信長は平氏に改姓した。そのとき信長と同盟者の家康も源氏に改め、朝廷に請願した。

そのためには証拠が必要であり、この時に徳阿弥の言い分が役に立った。

「わが遠祖は、上州利根川沿いの徳川村に住んでいた新田源氏の族である」

家康は姓も徳川とあらため、これ以降、家康は正式に署名するときにも「源朝臣家康」と書くようになった。

このことが、後に家康が幕府を開く時に役立ってくる。

なぜなら藤原氏や平家では征夷大将軍にはなれない。征夷大将軍は頼朝の先例以来、源氏に限られているのである。征夷大将軍が貰えなければ幕府はひらけない。

因みに平家であった信長は幕府を開くことができず、やむなく公卿になって天下を統一しようとした。その後を継いだ秀吉も豊臣氏であったため、同様のこととなり、やむなく公卿の最高職の関白になった。

徳川の天下になってトクをしたのは上州徳川村である。当然、聖地となり、徳川幕府は、この部落に「徳川郷」という呼称を与えた。しかも租税不要の免租地とした。

しかし現在では、この地名は全く残っていない。

司馬もこの地を訪れた折、

「このあたりに徳川という所はありますか」と土地のひと数人に聞いてみたが、誰も知らなかったという。

司馬の云いたかったことは、日本の家系図ほどいい加減なものはないということだった。司馬は別のエッセイで、戦国時代の大名に氏素性があるわけはなく、徳川期まで生き残った大名たちは、こぞって徳川初期に家系を勝手にに作り上げたという。

幕府は大名の家系を書いて出せというお布令を出して官製の家系図（後の「寛政重修諸家譜」）を編集したが、ある大名が岡山城主池田光政に「池田候のご先祖はどなたですか」と聞いた時、光政は「いま林大学頭に申しつけてある。できましたらお知らせします」と答えたという逸話を紹介している。

司馬によれば、日本の家系図でほぼ信用できるのは天皇家と出雲の千家だけという。

（註）参考にした司馬作品

○長篇「覇王の家」（前）

○「街道をゆく」（濃尾参州記）

○「歴史を紀行する」（忘れられた家康のふるさと）

○随筆集「歴史と風土」（家系の周辺、家康と宗教）

○「司馬遼太郎が考えたこと」（徳川家康ほか）

○「この国のかたち」三（家康以前）

○「旅の中の歴史」（上州徳川郷）



松平郷高月院にて
（上村司馬遼太郎記念館長と）

四　佐賀藩は徹底的な偏差値教育だった

一般的に、明治維新は「薩長土肥」によって為されたといわれる。

薩摩、長州二藩が主導的役割を果たしたことは疑う余地もないし、土佐も坂本竜馬などの倒幕の志士などの活躍も目覚ましかった。しかし残りの「肥前」は何をしたのであろうか。どうも印象が薄い。

肥前藩（佐賀藩）からはこれといった倒幕の志士は出ていない。それば肥前の藩主（鍋島閑嫂）が他藩の人間と交際することを禁じたからである。だから他藩の士と交際するには「脱藩」しか方法がなかったが、さりとて肥前では脱藩した武士も殆ど見当たらない。

（僅かな例が江藤新平だろう。明治になって日本の司法制度を作ったにも拘わらず、後に「佐賀の乱」を起こして、裁判も掛けられずに大久保利通によって即日、クビをはねられて晒し首にされたという悲劇の人物）

佐賀藩はこのように藩主の命令により、他藩との交流を禁じる全くの「二重鎖国」の国であった。

第一、藩主の鍋島閑嫂自身が中央（幕府）ではよく知られていない人物だったようである。なにか肥前には、薩摩の島津斉彬、土佐の山内一堂に勝る名君がいるようだがの噂が立ったが、それ以上のことはわからなかった。彼も参勤交代で江戸には行ったのであろうが、病弱のためと称して、他と交際を持たず江戸屋敷に引きこもっていることが多かった。

その閑嫂が目指したのが「技術大国」「軍備大国」であった。結局、明治維新が「薩長土肥」によってなされたと云われた所以は、薩長土は人物を出したが、肥前は武器を薩長側に提供したことで功績があったわけである。

現に、全国で一番先に蒸気船を作ってのも肥前だし（伊予宇和島藩との説もある）、反射炉も早い時期に持っていた。そしてなによりも当時の近代兵器であるアームストロング砲では日本一の製造量を誇っていた。あの上野戦争で薩摩軍が威力を発揮したアームストロング砲は殆ど肥前製だった。そのため上野戦争は一日で終わっている。

閑嫂は産業開発のため、家臣の中から秀才を抜擢した。たとえば、そのアームストロング砲の製造を命ぜられた近習の秀島藤之助を主人公とした司馬の短篇「アームストロング砲」では「勉学は合戦と思え」という閑嫂の言葉が描かれている。

藤之助にとっては学ぶことが忠義であった。佐賀藩伝統の葉隠武士道の主従関係といえようか。

藤之助はこの砲の鍛造の段階で発狂、数年後に死去した。

「葉隠」の犠牲者といっていい。

司馬は云う。〈葉隠という異常道徳が佐賀藩史上、もっ

とも深刻に藩士の間に滲みこみ、藩の命令には犬のように従順な藩風ができた〉

また、このように肥前が「技術大国」に成り得た最大の理由は、地元に長崎を持っていたことだろう。

長崎は勿論、幕府領（天領）だが、実際にその警備にあたっていたのは佐賀藩である。（御番警備）。だから早くから洋式軍事工業も起こせたし、他国では許せない軍事力強化も幕府は大目にみていた。

幕府は幕末、長崎に「海軍伝習所」を作った。

勝海舟は四〇名の幕臣を引き連れて参加したが、この時、佐賀藩はそれよりも多い四十八名を送り込んだことは、あまり注目されていない。

この結果、佐賀藩は日本の中で最強最大の洋式陸海軍を持つことができた。

しかし閑叟は最後まで勤王、左幕いずれの側に組するか、態度を鮮明にしなかった。そのため、両陣営から「洞ヶ峠の順慶」とか「二股膏薬」とか、果ては「肥前の妖怪」とまで呼ばれた。が、最後になって勤王側に味方した結果、徳川滅亡に大きな役割を果たした。

これとて最初の鳥羽伏見の戦いには間に合わず、前述の上野戦争で初めて倒幕の態度を明らかにする始末だった。

この事は、逆にいえば佐賀藩は明治維新では藩内の有能な人物を失うことなく、明治の世まで温存する結果となった。

更に注目すべきは、佐賀藩を「技術大国」にするため藩主閑叟は特殊な教育制度を施したことである。

佐賀藩では、今日と同様、六、七才で小学に入れ（藩校弘道館）、二十五、六歳でようやく卒業させた。さしずめ今日でいえば、藩士のすべてが大学院卒業生だったわけである。

しかも、その教育内容たるや、すべて暗誦を重んじ、独創を否定した。司馬によれば〈佐賀藩では、江戸末期、人間の漬物でもつくるように家中の青少年を藩校という大桶に入れ、勉強漬けにしてしまっていた〉

それ以上に際立っていたのは、すべてが学業成績次第で決まった。就職も成績順だった。

そして恐ろしいのは子弟の成績如何によって、親の給料を上げ下げしたことは今日では全く想像できないことである。子供の成績が下がると親の給料を二割、三割とカットすることは日常茶飯事であったという。

中には八割カットという酷い記録も残っているそうだ。こうなると、親は子の教育に当然、熱心にならざるをえないだろう。

「藩の人物を悉く同一の模型に入れ、為に倜儻不羈（てきとうふき）（註）の気象を亡失せしめたり」といったのは旧佐賀藩士大隈八太郎（後の重信）だそうだ。

更に彼は「佐賀藩の学制は、豈に余多の俊秀を駆りて凡庸たらしめる結果なしとせんや」（大隈侯昔日譚）と書いた。

のち、彼が早稲田大学を興したのは、多分に佐賀の学制への憎悪がそうさせたと司馬は書いているが、これはどうであろうか。更に余談として〈この葉隠の不愉快さが鬱血し反発してできたのが、大隈の早稲田大学というべきであろう〉とまで記している。

大隈は佐賀藩士信保の長男として生れたが、閑叟の指示のもとに蘭学、英学を学び、更には採鉱冶金学、鉱物製錬法を専攻させられた。

司馬の教育論は佐賀藩から更に他藩に及ぶ。

佐賀藩と同じ九州の薩摩藩では全く逆に、意識的に学問を軽んじた。藩士の教育など初等程度でよいとされた。あまり教育すると理屈っぽくなり、峻烈果敢な士風が育たないと云うのである。

その代わりこの藩には他藩には全く見られない教育制度を持っていた。それが「郷中制度」であり、西郷隆盛を例に、司馬独特の郷中論を展開している。

だから明治七年、西郷が下野してできた私学校は学校ではなく郷中の別称だと云う。

薩摩の「郷中」は一般には若衆制、若衆組、若者組として知られている。司馬によれば若衆制は日本のほか太平洋諸島全円（ポリネシア、メラネシア、インドネシアなど）に広く存在したが、中国や朝鮮には存在しないと云う。だから若衆制文化に関するかぎり、日本列島は太平洋文化圏に属している。

日本列島では、若衆制は古代から存在したが、江戸期の武家社会ではこの制度はなくなり、僅かに薩摩藩にのみ残った。

平安時代に京都の若い公達が娘を持つ家に忍びこんで、盛んに「呼ばひ」（夜這い）をしたというのは、若衆制の典雅な変形だというのだ。だからこのような性風俗は中国、朝鮮のような儒教社会（北方父系社会）では全く考えられない。

そういえば司馬の長篇「翔ぶがごとく」の中で、西郷隆盛が西南戦争の末期、山の傾斜を這いのぼっていて「夜這（よべ）が如たる」といって、敗残の味方を笑わせる場面が出てくる。

若衆制は明治後、すたれた。

明治国家はこの制度を野蛮な習俗とみなし、文部省、内務省が主導して「青年団」として仕立て直したのである。

さらに司馬は昭和前期、参謀本部が統帥権というミコシをかついて若衆化して一大暴走を始めた。また関東軍参謀が若衆化して満州事変を起こしたとするのだが、少し飛躍していないだろうか。

司馬によれば江戸期の教育制度の特徴は大藩よりも小藩のほうが精度の高い学問を施したことを挙げている。たしかに著名な学者は多くは地方の小藩から出たし、江戸末期の蘭学にしても、多くは越前大野、石州津和野、肥前大村、伊予宇和島の出身者だった。

政治の中心江戸に至っては、各藩が江戸中期頃から競って藩校を持ち、その充実をはかったに反して、幕府はその瓦解までついに藩校というべき旗本学校を持とうとしなかった。

そのため江戸の旗本、御家人の子弟はぶらぶらと無学のまま生涯を送ることができた。その代表的人物として、司馬は勝小吉（勝海舟の父）を挙げている。

小吉は小気味のいい一生を送ったが、このような人物は「逆立ちしても」佐賀藩では育たなかっただろうという。また、別の本では勝海舟が若い頃、蘭学を志したのに対して、先生（永井青崖か？）から「江戸っ子は学問に向かないので、止した方がよい」と云われた逸話を紹介している。

（註）「倜儻不羈」（テキトウフキ）
司馬のもっとも好んだ四文字熟語で、座右の銘とした。このことは福田みどり夫人も認めている。（「司馬さんは夢のなか」）
語意は倜は（すぐれていて、拘束されないさま）、儻は（志が大きくぬきんでていること）、羈は（馬を制御するたずな）、不羈は（拘束されないこと）で、ある種の独創家、独志の人、あるいは独立性のつよい気骨といった人格をさすと司馬は解説を加えている。

江戸時代の知識人の間ではごく普通の言葉だったようだが、明治になって唱えたのは大隈重信（「大隈侯昔日譚」）だと司馬は書いているが、一般的には、同志社の創立者新島襄の言葉と理解されている。いずれにせよ、大隈と新島は一時期、一緒に仕事をしたこともあるので、いずれかが唱えたのであろう。

（註）参考にした司馬作品
○長篇「歳月」
○長篇「翔ぶがごとく」
○短篇「肥前の妖怪」
○短篇「アームストロング砲」
○随筆「この国のかたち1」
○講演碌「司馬遼太郎が語る日本」2

千家尊福伝（一〇）

貴族院議員になった八〇代出雲国造

村上邦治

はじめに

明治二一年六月、伊藤博文の推挙により、元老院議官に選任された尊福は、神道大社教管長から、政治・行政の世界へ転身した。二年後には、憲法制定、二院制による議会開設、それに伴う衆議院議員選挙が予定されており、日本が立憲国家体制の完成を目指し、先進西欧諸国に肩をならべる、文字通り、最終段階を迎えていた時期であった。

すでに、憲法草案の準備が始まっており、二一年四月には仕上がり、天皇に上奏された。同時に、新設された枢密院において、草案の審議が開始され、二二年一月に大日本帝国憲法は完成、翌月発布された。

元老院は、新憲法のもとでは、貴族院に改称され、衆議院と共に議会を構成することとなった。両院は、天皇が持つ立法権行使の協賛機関とされ、両院の権限は対等であった。衆議院では、総選挙で当選するのは、組織化された政党党員が、過半を占めることが予想された。その衆議院に対抗するには、天皇の藩屏たる、華族を中心とする貴族院の強化が、必要不可欠であった。

そうした時期、全く政治経験を持たない尊福は、老練な先輩議官と共に、立憲体制準備の一翼を担うのである。

一　元老院議官就任

明治八年、台湾出兵に反対・辞任した木戸孝允や、征韓論の否決で辞任した板垣退助ら、旧政府要人復帰のため、彼らの意見を取り入れて、大久保利通、伊藤博文、

辞任した二人らは、大阪で会議を開催した。その結果、「漸次立憲政体樹立の詔」がまとまり、元老院・大審院の創設と、地方官会議が開始された。

維新政府の統治機構は、王政復古の大号令（慶応三年一八六七）では、三職制（総裁、議定、参与）であったが、慶応四年、政体書により、七官制による太政官制（行政　神祇・会計・軍務・外国の四官、立法　議政官、司法　刑法官）に改正し、太政官への権限集中、三権分立など、中央官制統治の骨格が出来上がった。

廃藩置県後の明治四年、この体制を、正院（神祇・大蔵・兵部・外務・文部・工部・司法・宮内・開拓）、右院、左院の三院政に改正したが、大阪会議により、将来の立憲体制をにらみ、三権分立を一層明確にした体制に、作り直したのである。

当初、元老院の権限は、板垣退助が主張する急進的な改革により、立法機関として構想された。しかし、政府行政権の妨げになることや、朝鮮との江華島事件の迅速な処理を控え、「立法諮問機関」（元老院章程第一条　新法制定旧法改正を議定する）に縮小された。これらの処置を不満として、板垣は再び下野し、最初となる政社（立志社後の愛国社）を、高知で結成した。

我国初の「公議」組織であった元老院は、法案審議のみとされたことを、当時の新聞は、御用提灯処（元老院）に持ち込まれた大量の提灯（法案）に対し、職人（議官）が、黙々と作業して仕上げている、風刺画を掲載した。権限がなく、実質的に何もしない元老院を皮肉ったものである。審議は盛り上がらず、「議長は参議の腐敗者、議官は老朽官吏の巣窟たり」とか、「まともに議論しているのは幹事（陸奥宗光、河野敏鎌）と中島信行、細川潤次郎の四名だけ」と、揶揄されるほど、活動は低調であった。それには、議官の人選も大きな理由があった。当初は一三名（華族は皆無）であったが、その後、皇族や華族など、一〇名が追加選任された。以後、定数は無視され、年棒が高官並みであったため、貧乏華族の救済を目的に就任させた者もいた。さらに、政府高官・知事経験者など、次の役職に就くまでの、いわば待機部署として利用されたこともたびたびあった。こうした背景により、議官の人材は払底しており、議論が高まらない要因でもあった。最終的には定員は、九一名に膨らんだ。

しかし、新しい上院の土台づくりのため、華族令（一八八四）が、憲法制定をにらんだ内閣制度（一八八五）が、博文主導により実施された。そして、憲法により、貴族院と改称され、二院制の上院として国会を形成することになる元老院は、「下院（衆議院）が、如何なる人間が議員になるか分からない民選議院」に対処すべき危機感から、改革集団が生まれた。また、政府からも、これまでの元老院軽視の姿勢から、不平等条約改正を目指

し、議会政治を対外的に示すためにも、元老院による「公議政治」の実現を、積極的に後押ししていった。

先ず法案の審議が明らかに活発になった。明治一九年まで、ほぼ修正なく、元老院では承認されていた。二〇年以降は、約五割が修正された。しかも、法案・勅令の審議件数は、それまで年間八〇件程度であったが、二一年は一〇〇件を超え、二二年には一五〇件に増加した。しかも、この半数が、元老院により、修正されたのである。

議官の人選は、次の貴族院を見据え、学識のある者や、発言・行動力のある者が選ばれるようになった。尊福の就任した明治二一年以降、議官から貴族院議員に就任した者は、三割を占めたことからも窺える。もはやこの時期には、これまでとは異なり、衆議院に対抗する貴族院、という観点からの、議官人選が行われたのである。

神道宗教家の尊福が、博文から華族（男爵）として、元老院議官に推挙されたのは、こうした背景があったのである。

二　議官活動

尊福が元老院議官にあったのは、明治二一年六月から二三年七月までの約二年間である。この間は、もっぱら、二年先から始まる貴族院開院の準備に追われた期間であった。憲法草案の審議は、元老院ではなく、新たに設けられた枢密院で行われ、その一月前から始まった。明治国家体制の骨格となる、帝国憲法の成立に注力する博文は、自ら内閣総理大臣を辞職してまで、わざわざ新たに枢密院をつくり、その議長に就任し、憲法条文の背景と正確な理解に、細心の注意を払った。これらの経緯は、博文が、当時の元老院に対し、大きな信頼を置いていなかった事を、物語るものである。

尊福の政治家としての始動が、この時期であったのは、恵まれていたといえる。四〇歳まで宗教家として過ごしており、政治家として必須の、統治機構や議会運営、法律知識など、多くは未知であり、また身についていなかった。まして、先輩元老院議官、政府各省高官、民権運動指導者ら、初対面の人物も多かったであろう。新しい国家体制の議論が盛り上がる中、全て、憲法施行、議会開設待ちの、一時、政治空白に置かれていた時期でもあった。この期を生かし、精力的に政治・行政各分野の法令、政府官僚組織、地方府県会、製糸業や造船業など工業・経済、さらには諸外国の動向など、好奇心旺盛な彼にとって、吸収したものは多かったはずである。その間、水害などの被災地岐阜・大垣や静岡などの、地方視察をしている。次の飛躍のための、いわば充電期間であった。

また、明治二二年三月、各府県議長を招待し宴席を開

催した時は、柳原副会長や、蜂須賀茂昭、鍋島直彬ら一七名とともに、議官を代表して参列した。政治家としての知識習得だけでなく、行・財各界の人たちと積極的に交遊を重ねていた。政界入りして僅か二年であったが、議官の一人として、頭角をあらわし始めたのである。

それを象徴する行動が、元老院に研究会開催の提案をしたことである。第一回衆議院選挙は、事前に予測されていた通り、民党が三〇〇議席のうち六割近い一七一議席と過半を獲得した。政府与党ともいうべき吏党は、四割に過ぎなかった。この結果に衝撃を受けた一部議官たちは、元老院の中に、「議院運動準備の為、毎週月水金の三曜日を期し、政務調査の打ち合わせ議事規則等の研修会開くこと」を、建議したのである。この提案書には七名が連名しており、その筆頭は、尊福であった。尊福を除く六名は、細川潤次郎（土佐藩士元幹事）、山口尚芳（肥前藩士元幹事）、三浦安（紀州藩士後東京府知事宮中顧問官）、村田保（幕臣法制官僚）、渡正元（広島藩士元参事院議官）、伊丹重賢（朝廷志士元大審院判事）で、元老院の中心人物が揃ってのものであった。すでに元老院末期では、議官として、目立つ一人として活動していたのである。

三　帝国議会開設

明治二二年二月、大日本帝国憲法発布、同時に衆議院議員選挙法が公布され、翌年一一月に、新憲法のもとで、帝国議会第一議会開催が決定した。

第一回衆議院議員総選挙は、二三年七月に実施された。参政権は、満二五歳以上の男子で、直接国税一五円以上を納める者に限られたが、当時としては、欧米諸国と比較しても、さほど遜色のないものであった。（イギリスの男女平等普選一九二〇年、ドイツフランスは男子のみ）選挙権者は全人口の一・一パーセントではあったが、維新当初からの自由民権運動、政社・政党の結成、私擬憲法発表など、長い国会開設運動を経て、ようやく実現した選挙に、投票率は九四％と極めて高く、国会に大きな期待を示したのである。投票結果は事前の予想通り、野党である民党が約六割（立憲自由党板垣退助一三〇名、立憲改進党大隈重信四一名）と過半を制し、政府側吏党（大成会七九名、無所属四五名）を、圧倒したのである。

一方貴族院は、有爵議員として、皇族（一〇名）、公・侯爵は全員（三一名）、伯・子・男爵はそれぞれの同爵者の中から互選（一〇四名）、任期は七年であった。その他、国家に勲功ある者または学者で、終身の勅任議員として、勅選議員（六一名）、多額納税者議員（四五名）、合計二五一名であった。尊福は、男爵の互選で選任され、元老院議官から引き続き議員となった。尊福と同様に、元老院議官からの議員は、互選で二八名、勅選で二八名、合計五六名であった。一方非職となった者は、三二名に上った。この非職者達は、議官在任中ほとんど発言がなく、貴族院議員には、選任されなかった。

こうして、第一回帝国議会は開院され、日本が、立憲議会制へ完全移行したことを、世界へ告げるものとなった。しかし、明治二三年は、日本経済にとって、最悪の状況（明治二三年恐慌）であった。一八八〇年代後半から、イギリスに始まり、各国で経済不況に陥り、労働組合組成や、ゼネストが起きるなど、世界的な恐慌に広がった。我国では、松方緊縮財政がようやく成果を出始め、インフレの終息（銀本位制の確立）、生糸や綿製品による輸出増加により、経済は回復しつつあった。ところが、西欧諸国の経済恐慌により、生糸や綿製品の価格暴落と輸出の大幅減少、さらに、天候不順により二年連続の凶作となり、各地で米騒動が起こるなど、不況に喘いでいた年であった。

こうした経済事情を背景に、当初より「民力休養」（行政予算削減、地租減税）を、声高に主張する民党に、山縣内閣は、開会直後から押され続け、法案は四割しか成立しなかった。しかし政府は、前黒田首相の、政党動向に左右されない「超然主義」を唱え、利益線（朝鮮半島）の防衛のため、軍増強予算案を提出するなど、世論の意識と大きく相違していた。しかも初めての議会であり、運営については、全く不慣れであった。一方、議員の多くは寄生地主であり、自己の利益に固守し、議会は混乱し続けたのである。ようやく三月に入って、当初予算を大幅に減額修正し、やっと衆議院を通過した。

貴族院での審議期間は、残り一週間もない、わずか五日間であった。貴族院では、審議に時間が不足し不成立、期間延長が必要、国会開設の初年にて止む無く承認、の三つの意見に分かれ、紛議したのである。結局、貴族院は、屈辱を忍んでまで、衆議院に同意したのであった。多くの反対意見があったが、とにかく「第一議会だけは是が非でも失敗はさせられない」、という貴族院議員多くの心情からであった。しかし、一枚岩であると思われた貴族院でも、審議に際し、意見の相違が目立ったのである。こうした衆議院、貴族院ともに、混乱を繰り返したことに、嫌気をさした山縣首相は、第一議会終了後辞任した。後任は大蔵大臣であった松方正義が、大蔵大臣兼務のまま総理大臣に就任した。

貴族院で、意見の隔たりが浮き彫りになったのは、一一月から始まった第二議会の「勤険尚武建議」問題であった。建議自体は、政府に対し、国防の完備、民力の休養のための勤険を説いたものであったが、辛辣な政府批判が滲んでいたため、これを主張する反政府側と、政府擁護派に分かれ、次第に溝が深くなってきたのである。

催した時は、柳原副会長や、蜂須賀茂昭、鍋島直彬ら一七名とともに、議官を代表して参列した。政治家としての知識習得だけでなく、行・財各界の人たちと積極的に交遊を重ねていた。政界入りして僅か一年であったが、議官の一人として、頭角をあらわし始めたのである。

それを象徴する行動が、元老院に研究会開催の提案をしたことである。第一回衆議院選挙は、事前に予測されていた通り、民党が三〇〇議席のうち六割近い一七一議席と過半を獲得した。政府与党ともいうべき吏党は、四割に過ぎなかった。この結果に衝撃を受けた一部議官たちは、元老院の中に、「議院運動準備の為、毎週月水金の三曜日を期し、政務調査の打ち合わせ議事規則等の研修会開くこと」を、建議したのである。この提案書には七名が連名しており、その筆頭は、尊福であった。尊福を除く六名は、細川潤次郎（土佐藩士元幹事）、山口尚芳（肥前藩士元幹事）、三浦安（紀州藩士後東京府知事宮中顧問官）、村田保（幕臣法制官僚）、渡正元（広島藩士元参事院議官）、伊丹重賢（朝廷志士元大審院判事）で、元老院の中心人物が揃ってのものであった。すでに元老院末期では、議官として、目立つ一人として活動していたのである。

三　帝国議会開設

明治二二年二月、大日本帝国憲法発布、同時に衆議院議員選挙法が公布され、翌年一一月に、新憲法のもとで、帝国議会第一議会開催が決定した。

第一回衆議院議員総選挙は、二三年七月に実施された。参政権は、満二五歳以上の男子で、直接国税一五円以上を納める者に限られたが、当時としては、欧米諸国と比較しても、さほど遜色のないものであった。（イギリスの男女平等普選一九二〇年、ドイツフランスは男子のみ）選挙権者は全人口の一・一パーセントではあったが、維新当初からの自由民権運動、政社・政党の結成、私擬憲法発表など、長い国会開設運動を経て、ようやく実現した選挙に、投票率は九四％と極めて高く、国会に大きな期待を示したのである。投票結果は事前の予想通り、野党である民党が約六割（立憲自由党板垣退助一三〇名、立憲改進党大隈重信四一名）と過半を制し、政府側吏党（大成会七九名、無所属四五名）を、圧倒したのである。

一方貴族院は、有爵議員として、皇族（一〇名）、公・侯爵は全員（二一名）、伯・子・男爵はそれぞれの同爵者の中から互選（一〇四名）、任期は七年であった。その他、国家に勲功ある者または学者で、終身の勅任議員として、勅選議員（六一名）、多額納税者議員（四五名）、合計二五一名であった。尊福は、男爵の互選で選任され、元老院議官から引き続き議員となった。尊福と同様に、元老院議官からの議員は、互選で二八名、勅選で二八名、合計五六名であった。一方非職となった者は、二三名に上った。この非職者達は、議官在任中ほとんど発言がなく、貴族院議員には、選任されなかった。

こうして、第一回帝国議会は開院され、日本が、立憲議会制へ完全移行したことを、世界へ告げるものとなった。しかし、明治二三年は、日本経済にとって、最悪の状況（明治二三年恐慌）であった。一八八〇年代後半から、イギリスに始まり、各国で経済不況に陥り、労働組合組成や、ゼネストが起きるなど、世界的な恐慌に広がった。我国では、松方緊縮財政がようやく成果を出始め、インフレの終息（銀本位制の確立）、生糸や綿製品による輸出増加により、経済は回復しつつあった。ところが、西欧諸国の経済恐慌により、生糸や綿製品の価格暴落と輸出の大幅減少、さらに、天候不順により二年連続の凶作となり、各地で米騒動が起こるなど、不況に喘いでいた年であった。

こうした経済事情を背景に、当初より「民力休養」（行政予算削減、地租減税）を、声高に主張する民党に、山縣内閣は、開会直後から押され続け、法案は四割しか成立しなかった。しかし政府は、前黒田首相の、政党動向に左右されない「超然主義」を唱え、利益線（朝鮮半島）の防衛のため、軍増強予算案を提出するなど、世論の意識と大きく相違していた。しかも初めての議会であり、運営については、全く不慣れであった。一方、議員の多くは寄生地主であり、自己の利益に固守し、議会は混乱し続けたのである。ようやく三月に入って、当初予算を大幅に減額修正し、やっと衆議院を通過した。

貴族院での審議期間は、残り一週間もない、わずか五日間であった。貴族院では、審議に時間が不足し不成立、期間延長が必要、国会開設の初年にて止む無く承認、の三つの意見に分かれ、紛議したのである。結局、貴族院は、屈辱を忍んでまで、衆議院に同意したのであった。多くの反対意見があったが、とにかく「第一議会だけは是が非でも失敗はさせられない」、という貴族院議員多くの心情からであった。しかし、一枚岩であると思われた貴族院でも、審議に際し、意見の相違が目立ったのである。こうした衆議院、貴族院ともに、混乱を繰り返したことに、嫌気をさした山縣首相は、第一議会終了後辞任した。後任は大蔵大臣であった松方正義が、大蔵大臣兼務のまま総理大臣に就任した。

貴族院で、意見の隔たりが浮き彫りになったのは、一一月から始まった第二議会の「勤険尚武建議」問題であった。建議自体は、政府に対し、国防の完備、民力の休養のための勤険を説いたものであったが、辛辣な政府批判が滲んでいたため、これを主張する反政府側と、政府擁護派に分かれ、次第に溝が深くなってきたのである。

反政府側には、懇話会（子爵谷千城一派）、三曜会（公爵近衛篤麿一派）の二派が中心であった。特に、五摂家筆頭として公家華族の頂点にたつ近衛篤麿は、「従来の華族は優柔不断である。大名華族は回りくどくて役に立たず、公家華族は往々卑屈である。」との認識を強く持ち、そのため「三曜会は、政府への追随も慎み、政略にのらず、かりそめにも偏見と認めるものがあれば、決して賛同せず、皇室を護り、忠実に国利民福を講じる」というもので、藩閥内閣の専横に、徹底して厳しい批判をしたのである。近衛の主張は、貴族院の理念に沿うものであったが、批判の根源が、薩長を中心とする藩閥政府に対しての批判であり、貴族院の一体化を妨げるものであった。

これらに対抗する政府賛同諸派は、政府支持同志会（子爵加納久宜一派）、有志者会（侯爵中山孝麿一派）、伯爵・子爵を率いる正親町実正、岡部長職一派、そして男爵連を率いる千家尊福一派らであった。

四　貴族院会派の成立

当初の構想では、貴族院は一院制の持つ弊害を防ぎ、民党が過半を占めると予想される衆議院を、一体となって牽制することを目的として、設置された。衆議院は、「人民直接の利益を代表するところ」であり、公選によって選出された議員で構成される以上、支持層により、党派性を帯びるのは、当然であるとみられていた。しかし、貴族院は「国家全体の意思を代表するもの」であり、議員は、人民の投票によらず、資格、学識、財産等により勅任されるが故、その理念は、自ら国家全体の事を第一とするものとされたのである。衆議院が人民多数の意思とはいえ、目先の利益に固守し勝ちで、政府（内閣）の施策にも混乱が生じることは、当初より危惧されていた。だからこそ、この障害を克服し、従来通り内外の難題解決に当たる為に、皇室の藩屏たる華族を中心とする貴族院は、一枚岩となって、政府と衆議院の衝突緩衝の役割が期待された。当然衆議院と違い、政党は存在しない、とみられたのである。

しかし、第二議会以降、藩閥政府に反対を明確にする派と、あくまで政府擁護を基本とする派の、二つに大きく分かれることが、次第に明確になってきたのである。しかも政府反対派は、同じく政府に反対する衆議院の民党と、賛成派は吏党とそれぞれ関係を深め始めた。最早、当初貴族院の役割として考えられていた、「是々非々」主義・「不偏不党」主義は、追いやられてしまうことになった。天皇が任命する内閣（総理大臣その他国務大臣）は、議院内閣制ではないため、国会に支持基盤を持たず、その為、議案毎に、国会対策に手を焼いたのである。衆議院のみならず、政府を擁護するものとみられていた貴

族院の一部からも反対され、議会運営に、躓くこととなったのである。

明治二四年一一月、藩閥の専横として、政府を痛烈に批判する懇話会（谷千城）・三曜会（近衛篤麿）に対抗して、各派に分かれていた政府支持派は、大同団結して新たに「研究会」を結成した。発足当時約四〇名で、代表は置かず、幹事（幹部）として、伯爵大原重朝、同萬里小路通房、子爵岡部長職、同堀田正養、同山内豊誠、同酒井忠彰、同松平康民、同鍋島直虎、そして男爵千家尊福の九名が就任した。元老院議官に推挙され、政治家に転じて、僅か三年半という短い政治家経験しか無い尊福が、政府擁護派である最大集団「研究会」幹事の一人となり、貴族院を左右する立場にまでなったのである。

貴族院における研究会と三曜会・懇話会は、ほぼ互角の人数であった。政治家としての経験や資質は、三曜会・懇話会の議員が勝っていたものの、一人一党的で、逆に団結力に問題があった。一方、新たに結成された研究会は、尊福に代表されるように、政治家としての経験が乏しく、問題に対する理解力・判断力に欠けることもあり、政府官僚らの助けを借りることが多かった。しかし、「会員は総会の決議に従うものとする」と定め、いわゆる決議拘束主義を政党並みに採用したため、その政治力は、強力なものとなり、政府は、この研究会を最も頼りにしたのである。

明治二四年一一月から始まった第二議会は、衆議院民党側は第一議会と同様、軍艦建造費などを含む予算案の大幅削減と地租減税を要求した。貴族院においても、三曜会・懇話会の政府批判は厳しかった。追い込まれた松方内閣（第一次）は、やむなく衆議院の解散で対抗し、翌年二月、第二回衆議院総選挙が実施された。政府予算に激しく抵抗する、民党の勢力を削ぐべく、内務省（大臣品川弥二郎）を中心として、警察官や地方官吏を動員して、死者が二五名もでるほどの、猛烈な選挙干渉を行い、民党議員の当選阻止に躍起となったのである。しかし、露骨な選挙妨害に、かえって、選挙権者は政府に不信感を強めた。選挙結果は、民党過半数は防止できたものの、吏党も過半数を得られず、中間派の独立倶楽部が一割の三一名を当選させた。その為、衆議院は、独立倶楽部の動向に左右されることとなり、引き続き、政府の国会運営は不安定のままであった。

同年五月からの第三議会は、選挙干渉問題により、初めから衆議院は大荒れ、満足な審議はできなかった。さらに朝鮮半島をめぐる清国との紛争が続き、政府は軍艦製造費などの予算追加案を提出したものの、衆議院に否決されてしまった。ところが、貴族院では、海外情勢の

緊迫化から、政府予算案を復活させ、これを承認した上で、衆議院に再審議の為、回付した。衆議院では、受け取りを拒否し、貴族院に返戻した。ここに予算案は宙に迷い、貴衆両院は対立することとなった。これに対し、貴族院は、最後の解決策として、勅裁を仰ぐことにしたのである。天皇は枢密院に諮問し、「後議の議院は、前議の議院に対し何ら拘束されず、前議の同意を求めるものとする」と裁決したのである。その結果、衆議院は貴族院の回付を受領した。両院協議会を重ねて、若干の修正をしたうえで、やっと両院を通過したのである。衆議院民党は、「貴族院、枢密院、政府の三者にとりこまれて敗北した」と嘆いたのであった。議会終了後、松方は首相を、わずか一年で辞任した。

五　第二次伊藤内閣の成立

明治二五年（一八九二年）夏、外交においては、ロシア極東進出（シベリア鉄道起工一八九一）、朝鮮半島をめぐる清国関係悪化や不平等条約改正交渉、内政では、軍備増強予算（軍艦製造費）、公布済の民・商法施行延期（法典論争）、両院との議会対策など、難題が山積していた。初代伊藤首相が、枢密院議長就任のため辞任後は、黒田内閣（一年半）、山縣内閣（一年半）、松方内閣（一年）は、いずれも短命であった。ここで直面する難問に対処できるのは、もはや、伊藤博文しかいなかった。

伊藤内閣（第二次）は、元勲（山縣司法、黒田逓信）や、井上馨（内務）、大山巌（陸軍）、陸奥宗光（外務）、後藤象二郎（農商務）など、実力者をそろえて組成、この難局に当たることになったのである。

こうして、第四議会が、明治二五年一一月開会した。西欧諸国経済が不況を克服し、日本経済は、綿製品が輸出増加に転じ、ようやく好転、恐慌から脱していた。政府は、緊張する近隣諸国との紛争に備え、軍艦製造費を含めた歳出予算を国会に提出した。伊藤首相は、必死の説得を試みたものの、またもや、衆議院は軍艦建造費を認めなかった。政府は、やむなく停会を命じたのに対し、民党側は政府弾劾上奏で対抗、まさに審議は行き詰まったのである。

伊藤首相は、この打開策を天皇詔勅という手段に訴えた。明治天皇は、「建艦費負担の半分は、自らの皇室費を削減する」とした裁定を下し、政府と衆議院の妥協を図らせた。貴族院もこれを直ちに承諾し、緊迫する海外情勢に備える、伊藤首相の目論見は、ようやく達成できたのである。

第五議会（明治二六年）、第六議会（明治二七年）ともに、経済の好況をうけて、民党は、「民力休養」の要求は提出せず、代わりに、対外情勢を背景に「対外硬化

策」を主張したのである。これは、排外的な「内地雑居反対・対等条約締結・現行条約履行」（対等条約は必要だが、治外法権撤廃と引き換えに外国人に内地雑居を認めると、外国商人が進出し、また中国人が押し寄せ、日本人は失業者が著増する）を内容とするもので、「対外硬」と呼ばれた。これには、民党の立憲改進党（党首大隈重信）と吏党大成会の流れをくむ中央交渉部を改組した国民協会（会頭西郷従道）が、対外硬六派連合を結成し、伊藤内閣を揺すぶった。民党の自由党（党首板垣退助）は、この対外硬策に反対し、政府寄りの準与党に立場を変更した。

丁度開会中に、ロンドンで領事裁判権の撤廃と関税自主権回復を含む、日英通商航海条約の交渉中で、対外硬派の主張は、鎖国攘夷的な現行条約の継続であり、これの国会決議は、条約交渉に大きな影響を与えるとして、伊藤首相は、衆議院を解散した。

第三回総選挙は明治二七年三月実施されたが、準与党にかわった自由党は、三〇名近く伸ばしたものの、野党（対外硬六派連合）も一三〇名（約四五％）を占めたのである。結局、無所属（五一名）の動静に左右されることになり、また国会安定には、程遠い状態であった。

貴族院では、三曜会の近衛篤麿を筆頭に、反政府派は、対外硬派に賛同、最も大皇に近いはずの枢密院の一部も同調した。さらに新聞『日本』や『国民新聞』も、軟弱な政府の外交交渉を批判し、伊藤内閣は完全に行き詰まった。しかし、この間も、尊福が幹事を務める貴族院研究会は、一貫して伊藤内閣を支持したのである。

ところが、国会開会中、突然朝鮮で、「東学党の乱」（甲午農民戦争）が発生、朝鮮政府はこれを鎮圧できず、清国に援兵派遣を要請した。この事態に、反政府急先鋒の対外硬六派連合、貴族院近衛篤麿、各誌新聞は、対清国硬化で一致した。ここに、伊藤内閣は、清国との戦争に、踏み切り、八月日清戦争が始まったのである。

国会開設四年にして、「眠れる獅子」とよばれた強国清国に立ち向かうという、国の危機に直面したことで、政府と衆議院、貴族院は、ようやく一体化できたのであった。

おわりに

尊福は、元老院議官、貴族院議員と政治家に転身し、七年毎の貴族院議員選挙に終始当選し、生涯政治に携わった。その間、一政治家に終らず、主義主張を同じくする者を束ね、その先頭にたって行動する姿は、一〇年前の神道界を二分した祭神論争の尊福を、彷彿させるものであった。

日清戦争後、民党の立憲自由党（明治二四年自由党

（総理板垣退助）と立憲改進党（明治二九年進歩党総理大隈重信）は、一時離反するものの、明治三一年に、大合同して、憲政党を結成、初の政党内閣（隈板内閣）を成立させる。しかし半年で倒れ、憲政会は再び二政党（板垣系の憲政党と大隈系の憲政本党）に分裂してしまう。この憲政会を基盤として、伊藤博文は、立憲政友会を結成して、党首となり、第四次伊藤内閣を組閣する。

衆議院の目まぐるしい政党の離合集散を受けて、貴族院においても、政党はないものの、会派の盛衰は激しいものであった。なかでも、研究会から独立して、尊福が率いる男爵を中心とする木曜会は、一時貴族院最大会派に成長し、政治を大きく左右することになるのである。そこでも、一貫して、伊藤博文との信頼関係は維持されたのであった。

しかし、尊福には、貴族院の最大会派を率いるとともに、全く新しい世界が、待ち受けていた。明治二七年四九歳の時、最初の知事職に任命される。以後一二年にわたり、三府県の知事として、地方行政に深く携わることになるのである。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

殉教（十）

鍋屋次郎

長崎キリシタン墓地に埋葬されている高山右近の父の墓前礼拝を、村山等安が主宰し、長崎に拠点を置くキリシタン各派代表も出席して盛大に行うという噂がいつの間にか市中に伝わり、長崎在住キリシタン間では「ローマ教皇シスト五世から信徒として感状を戴いている高山右近」の父の墓前礼拝と言うことで、出席願望が熱狂的に高まっており、長崎奉行所としてはその墓前礼拝で高山右近の「反追放」運動が起こるのではないか不安であった。長崎奉行長谷川藤広は高山右近に会ったことはなく、人物像もよく分かっていない。キリシタン間での風評の異常な高まりは不安で、何はともあれ右近宿舎の動静を見張らせていた。

キリシタン墓地での墓前礼拝は六月三日、高山家家族八名、内藤家家族十名、クレメンテ師、キリシタン各派代表五名、その他参列を認められた者十七名　合計四十名が墓前に並び、クレメンテ師の説教に続いて、墓前に献花を行うこととしている。

その日は朝から風も爽やかで、墓前礼拝には絶好の日和で石碑に刻まれている文字は泥と苔で覆われていたが、右近家族がきれいに掃除すると、「ダリヨ　一五九五年京都にて帰天」の文字がはっきりと出てきた。右近は静かに墓石を撫でた。

墓前礼拝の始まる時刻に合わせて、キリシタン墓地入口左手前の広場には、高山家の墓前礼拝を一目見ようとキリシタンたちが数百人集まり、クレメンテ師の祈りに合わせて祈り、高山家など参列者の献花にあわせて讃美歌を歌っていた。その背後に長崎奉行所の役人が十名以上いたが、集まっているキリシタン達には、奉行所が懸念している右近に対する反追放運動の動きは全くなかったため、ただ見守っているだけであった。

この墓地には日本で亡くなった多くの宣教師も眠って

いるので、右近は礼拝が終わってからお世話になったオルガンチーノ師の墓を探したが分からなかった。

右近は墓前礼拝の翌日、村山等安から白宅の茶室で点前の教えを依頼された。茶室は等安屋敷の広い庭の山側に奥座敷に並ぶように建っていた。露地に面した躙り口の手前の蹲で手と口を清めて茶室に入ると、茶道具が利休の教えの通りに置かれ、釜の湯も沸いていた。

やがて村山等安が茶室に入ってきて

「高山様、このような茶室ですが、今日は高山様にお点前をお願いします。この等安にお点前のなんたるかを是非教えてください」

と頭を下げられ、右近は亭主座に移動した。

右近は作法通り茶道具の清めから順次行い、点てた茶を等安の前に差し出すまで、等安は右近の姿勢、腕の動き、手の動き、指の動きのすべてを食い入るように見つめていた。喫し終えた等安は作法通り椀を返した。

茶道具を清めている右近に

「高山様、有難うございました。結構なお点前でございました。高山様の品格あふれるお点前を拝見し、等安、感服いたしました。高山様のように、客を感動させるお点前は、何か秘訣はあるのでしょうか」

「秘訣も何もありません。利休師は、点前をするにあたっては、この点前のときは常に一期一会と考えなさい。つまりこのときは生涯に二度とないと思って点前をしなさい、と仰せられています。今の私の点前も、このようにして村山様と茶を点てるのも生涯に今回限りと思えば、それだけで気が引き締まります」

「・・・等安、言葉がありません。このご教訓、何物よりも有難く頂戴させていただきます。また、それにしてもなんとご丁寧な茶道具の清めでございましょう」

「これは私の習性です。一期一会のお点前と、それをもたらしてくれた茶道具への感謝の気持ちでしょう。今は亡き蒲生氏郷氏には、右近の清めは病的だ、とも言われていました」

やがて右近は大切に持ってきた風呂敷包みを開けて、箱から羽箒を取り出した。長さ一尺に満たない利休手製の羽箒である。竹の筒の先に形を同じくした鶴の羽を三枚重ねて、柄の方は掴みやすく、茶道具を清めやすくできている。加賀を出発するとき、右近は光があまり射さない茶室でこの羽箒を見たとき、三枚重ねた鶴の羽の先端部分が薄茶色の光を放っているように感じた。その時、この羽箒そのものに利休の思いが込められ、その思いが光ったのではないかと思った。その後明るいところでもう一度見てみたが、薄茶色の光はなかった。

「これを豊前小倉城主の細川忠興氏に届けたい。如何したものであろうか」

「はい。ご相手が豊前小倉の殿様でいらっしゃいますから、私の手の者に鄭重にお届けさせましょう。お持ちの箱も新しいのに取り替えて」

「いや、この箱も利休師から頂いたものであり、この箱ごと届けてほしい。細川殿は箱にも見覚えがあるかもしれない」

「それは知らないこととはいえ失礼しました。では箱ごと丁寧に包装いたしまして」

「ここに細川殿宛ての手紙も用意しています。更に、村山等安殿のご厚意でお届けする、と一筆加えたいので、筆と墨をお借りできないか」

細川忠興宛ての書状を認め終って等安に渡した後、しばらくの間、長崎でこれから想定されるキリシタン摘発の動きなどについて等安の考えを聞きながら話し合った。

右近は長崎に来てから、豪姫から頂いた「スピリツアル修行」を読んでは瞑想していたが、それだけを毎日しているわけにもゆかず、メスキータ神父の病院サンティアゴ病院に行ったとき、患者への介護の手が不足しているのを目の当たりにしていたので、メスキータ神父にお願いして手伝わせてもらい、らい病患者の崩れた患部の包帯の取り換えなどを行った。周囲の人々は「もと一国一城の主だった高貴な人ができるのか」といぶかったが、右近は何のためらいもなく行った。やがて妻ジュスタと娘ルチアもこの病院に手伝いに来て、炊事選択、縫い物をやり始めた。更に京都女子修道院の女性たちも手伝いにやってきて、中には医師の手術の助手を務める女性もいた。

休憩時間には、右近は病院内のメスキータ神父の部屋に行って、多くの書籍が並んでいる書棚から、人体解剖図入りの、ポルトガル語で書かれている医学書を見せて貰ったりしていた。病院内を歩いていて驚いたことに、ヴァリニャーノ神父が日本に持ち込んで天草にあったグーテンベルク印刷機が、教会取り壊しと同時に印刷機も破壊されることを恐れて、このサンティアゴ病院に移設されていて、有力な日本人キリシタンがパテレンの指導により日本語での印刷・製本も行っていた。

グレゴリオ暦日曜日の朝、教会の鐘楼からの鐘の響きを聴き、右近は家族一同とともに、隣接しているトドス・オス・サントス教会に出かけた。見回すと京都女子修道院の女性たちも来ており、右近一家は前列のほうに案内された。ミサはクレメンテ師が日本語で語ってくれた。

妻ジュスタも娘ルチアも、聖歌隊のグレゴリオ聖歌の合唱の響きの美しさに驚嘆していた。金沢では聞くことのできなかった美しさで、国外追放が目前に迫っていることも忘れて聞き入っていた。

十月も半ばを過ぎたころ、朝食を終わってすぐ、右近がトドス・オス・サントス教会で、十字架上のキリストを仰いでその像にぬかずいていたとき、トマス好次が騒々しく飛び込んできた。

「右近様、長崎奉行所の役人がきました」

と言い終わらないうちに、長崎奉行所与力が十数人の部下とともに教会の入り口から入ってきた。

与力は礼儀正しく

「貴殿が高山右近殿か、長崎奉行所与力の丹野といいます。今すぐ奉行所まで出立願いたい」

「かしこまりました。部屋に戻って出立準備をしますから、暫しお待ち願いたい」

部屋に戻ると、妻もルチアも自分の準備をしながら孫たちの出立の世話を焼いていた。聞けばトマス好次が知らせに来てくれたとのこと。内藤家は出立準備ができている。

やがて右近は丹野に

「お待たせしました」

と言って着替え等の荷物を小脇に抱えて、家族一同の先頭に立って長崎奉行所に向かった。

外に出ると、トドス・オス・サントス教会からクレメンテ師ほか数人のバテレンが、近くのサン・ペトロ教会からも数人のバテレンが、サンティアゴ病院からもメスキータ神父を始め医師やスタッフが数人連行されている。咄嗟に「病人は誰が看るのだ！」と口に出かかったが、辛うじてその言葉は呑み込んだ。

この様子だと、長崎奉行所は近隣の奉行所からかなりの人数を集めてきて、この一斉拘束を行ったのだと感じ、棄民船に乗せられる日も遠くはないと感じた。

右近たちは波止場に連行された。波止場には大小の船が係留され、その反対側の陸地の階段を上がったところに二階建ての奉行所の建物が建っている。よく眺めてみると、波止場一帯に多くの役人が集められていて、バテレンとキリシタンの国外追放のときが来ていることを感じさせていた。

右近たち一行が立たされている波止場の一角に先ほどの丹野与力がやってきて

「高山様、長崎奉行長谷川藤広様がお召でございます。ご同行願います」

と言ってきた。

「わかりました」

と言って、丹野与力の後に付いて歩きだしたとき、こ

こ一帯に集められているキリシタンとバテレン、警護の武士等全員の視線を感じた。咄嗟に、「付け狙う暴漢から狙われたらおしまいだ」と頭に閃いたが、何食わぬ面持ちで与力の後をついて階段を上って行った。

階段を上って行くと、与力が階段を二段余した所に右近と並んで立って

「長崎奉行様、高山右近を召し連れてまいりました」

と言うと正面の床几に座っていた長崎奉行は右近に向かって

「そこもとが高山右近か」

と尋ね、右近が

「そうです」

と鄭重に答えると、自分の前に置かれた床几を指して

「これに座るように」

と促した。高山右近は天下の大罪人であり、長崎奉行と床几に座って相対するようなことは全く考えられず、これを見ていたキリシタンたちからは一様に驚きのざわめきが聞こえた。右近が一礼して床几に座ると

「余が長崎奉行長谷川藤広である。少し話したいことがあるので聞くように」

と言って改めて右近を見つめた。

『ほかでもない。江戸の大御所様からも貴殿のことは伺っている。大御所様は貴殿のことを「惜しいやつよ」と言っておられた。これから貴殿はマニラへ向かうことになっているが、何か言い残すこと、言いたいことはあるか。あれば遠慮なく申せ』

「大御所様のそれがしに対する思い、誠にもったいなく心苦しく存じます。何か言い残すことはあるか、と有難いお言葉をいただきましたが、天正一五年（一五八七）、豊臣秀吉公のキリシタン棄教命令に従わず、明石六万石の俸禄・領地・家来などのすべてを返上した時から、常に死を覚悟して、引き続きキリシタンの道を歩んでまいりました。従って、お言葉ではありますが何も思い残すことはなく、言い残すこともありません」

と、二人だけの対話にしては大きな声で話した。

『そうか、あい分かった。貴殿のそのような考えや態度を、大御所様は「惜しいやつよ」と仰せられることもよくわかった。下がるがよい」

奉行のこの声に丹野与力が走ってきて、奉行に一礼をした後、右近を促して階段下の右近一家が待っているところまで右近を伴って戻った。右近の長崎奉行に対する回答が聞こえたのか、階段下にいた京都女子修道院の女性たちは、右近の戻ってきた姿を見て、声には出さず表情だけであったが「良く仰った」と言うようにうなずいた。丹野与力はそれを見て見ない振りをして通り過ぎた。

海岸端の家族が待っている場所に戻ると、しばらくして丹野与力がやってきて、船が出るまでの高山一家・内

藤一家の宿泊場所を案内してくれた。そこは船宿のような建物を一棟借りたものらしく、部屋数はあまりないが、一家族ずつ宿泊ができ、布団もあり、台所も備わっているので食材さえあれば生活はできることに安心した。ただ、十月も末になると、海風は寒く感じた。

十一月四日　空は曇っていて、海は荒いとまでは言えないがやや波立っている。ふと、頭の中で天候に関係なく出航させるのか、との思いが湧いた。全員に乗船命令が出て、右近たちは乗船場に集められた。追放される右近たちを見ようとする、また、別れの挨拶をしようとする群衆との間に、竹矢来が設けられていて、お互いに近づくわけにはいかない。

右近が竹矢来の隙間から群衆を眺めると、右近に向かって何度も頭を下げている町人風の男性がいた。右近も返礼として深々とお辞儀をすると、先方も丁寧なお辞儀を返した。右近はそれが誰なのかが思い出せない。その人は再度深々とお辞儀をして立ち去って行った。

すこし離れているところに集められているバテレンを見ていると、中にはポルトガル系やオランダ系のバテレンもいたが、マニラ行きにはスペイン系のドミニコ会系のバテレンが多いと感じた。一昨日出航したマカオ行きには、主にオランダ、ポルトガル、イタリア系のバテレンが送り返されていた。

長崎奉行所には、十日ほど前に江戸から、家康直々のキリシタン取締りの命令を受けた山口駿河守直友が到着し、長崎奉行長谷川藤広に、市中のキリシタン取締りの甘さと、キリシタンの国外追放処分の遅延を指摘し、更に矢継ぎ早に長崎周辺の有馬・島原・五島でのキリシタン摘発強化の指示をだしていた。そのような状況の中で、右近たちが波止場に留まっている間に、長崎の街の教会や学校、修道院、病院などが一斉に破壊されていた。右近たちが立っている波止場からも、その破壊の跡が見えた。

マニラ行きの船は二艘ともかなり老朽化しているスペイン船で、長崎奉行所がマニラのスペイン総督に代金を支払って借りていた。

マニラ行きはキリシタン百二十名、バテレン二十名であり、大きい船に百名、小さな船に五十名を乗せることにしている。

十一月十四日、朝、丹野与力が部下に多くの刀を持たせてやってきて、乗船する男子で武士であった者に大小一組ずつの刀を与えた。これは異国に向かうにあたっての武士の心得として、自分自身と同行者を危害から守るための長崎奉行の特別の配慮だという。右近も異国に行くのに、刀を使う、使わないに限らず帯びていた方が安全面では役に立つと思い、有難く頂戴した。

右近はやや荒れ模様の海を眺めながら、いよいよ棄民そのものが現実となる、そこに我が身と家族が置かれている現在の状態を見つめていた。悲しいとか、怒りとかはなかった。全ては神の賜うた道であり、何が神の御旨に叶うのかを祈り求めて進んできているし　これからもそれしか許されていないと覚悟はできている。現在、右近の置かれている立場として、乗船の前に、乗船する全員に、互いにキリシタンとして全てを神に委ね、祈り、いかなることがあろうとも全員一致して行動することを言っておく必要を感じていた。

乗船を前にして、長崎奉行所の役人が最後の人体改めを始めた。名簿を持って一人一人の名前を呼び、全員がいることを確認している。先に右近から丹野与力に「航海中の不安から、無用な争いが起きないように、皆に話しておきたい」と言って了解を得ていたので、奉行所の確認が終わったところで、右近が進み出て話し始めた。

「拙者がみなと同じデウスの聖名のもとに生きているキリシタン高山右近である。

これから誰も経験したことがない、我々に対する国外追放が始まる。海に出れば、いつ、どこから、どのような危害が加わるかは全く予測もつかない。島影から海賊が現れるか、船長たちが船をどこかの島につけて、我々の持ち物をすべて没収して、奴隷として売りとばすか、嵐で船が遭難して全員海中に抛りだされるか、全く分からない。船に乗った時から日本の為政者の庇護は全くない。船が安全に目的地であるマニラ港に着くことを祈るのみである。皆もそれぞれ不安を感じていると思う。我々キリシタンの強さは、デウスに祈ることができることだ。祈って一人一人がデウスの懐に抱かれている安心感を得ることだ。祈りが一人一人を強くしてくれる。この航海期間はデウスが与えてくれた祈りの時と確信して、朝に夕に航海の安全と、それから万一どのような状況に出くわそうと、それはデウスが我々に与え賜うた試練として、キリストにある者としてそれを受ける強さを与えたまえと祈って欲しい。船の中には告解を聴取してくれるバテレンはいないが、祈りの時、自分の心の思いの罪の許しをデウスにお願いするように。最後に皆で主の祈りを祈ろう。

天におられるわたしたちの父よ、
御名が崇められますように、
御国が来ますように。
御心が行われますように、
天におけるように地の上にも。

わたしたちに必要な糧を今日もお与えください。
わたしたちの負い目を赦してください。
　わたしたちも自分に負い目のある人を
　赦しましたように。
わたしたちを誘惑に遭わせず
　悪い者から救ってください。　（注　①）

（注　①）日本聖書協会発行　新共同訳聖書　マタイによる福音書　六章九節以降引用

いよいよ乗船になった。男女とも全員着替えなどが入った風呂敷包みを抱えている。右近たちは大きい方の船を指示され、長崎奉行所の役人が右近一家、内藤一家など家族・団体ごとに部屋や床の場所を割り振っている。どの部屋も甲板より下で窓はない。船室からデッキに出なければ外は見えない。右近一家と内藤一家十八人は二十畳くらいの部屋を割り当てられた。

いつの間にか三本のマストの全てに帆は張られ、船は出航の用意が整えられていた。いよいよ船が岸から離れるので、全員デッキや甲板に出て、日本の山や緑との永久の別れ、日本の国の見納めのような思いで目の前の長崎の街を見つめ、誰一人声を出すことなく静まり返っていた。

右近も「これが最後か、日本の見納めか」の思いで長崎の街と山の緑を目に焼き付けるように見つめていた。ふと後ろを振り返ると、娘ルチアは目に涙を浮かべ、隣に立っている母ジュスタの左腕にしがみつくようにして、こみあげてくる嗚咽をこらえていた。別れた夫と生後間もない子どもにも、自分が日本に居ればどこかで会わないまでも垣間見る機会はあるかもしれないが、マニラに行ってしまえば永久に会うことはできない。その悲しみに堪えていることは右近にも十分伝わってくる。ジュスタが優しくルチアの肩を抱いていた。五人の孫たちは、十太郎を真ん中に寄り添い、妻の横に立って遠ざかってゆく長崎の街を眺めている。別の場所では次第に遠ざかる長崎の街に向かって、別れを惜しむように手を振っていた京都女子修道院の女性たちも、眼頭を押さえて遠ざかる長崎の陸地、いや日本の地を眺めている。右近はこの人たちと比叡山下の坂本の地で初めて会ったとき、それから京都・高槻を経てこの大阪港に来るまでの間、この人たちの多くが、夫・親・子どもたちと離別して、家族の絆のすべてをそこに置いたまま一人で連れてこられている女性だろう。家族と離れて一人で殉教を選ぶ強さ、そこに右近はその女性たちのゆるぎない信仰の強さを感じていた。

船が港を離れて二刻くらい経過した頃、船酔いが始まっていた。女性たちは特に苦しそうだ。見れば妻もルチアも船酔いのために用意した襤褸布を口に当てて蒼白になっている。食事が用意されている食堂にも行こうとしない。右近は壁にもたれて、何度も深く息を吸い込んで船酔いを我慢していた。翌日になると全員船酔いは治まったが、どの顔にも疲れが出ている。

その後の二～三日は海も穏やかで、右近は豪姫から頂いた「スピリツアル修行」を読んでは瞑想し、また読んでは瞑想を繰り返していた。妻ジュスタとルチアは、京都女子修道院の女性たちと歓談したり、孫たちと話をして時を過ごしていた。ルチアはトマス好次の協力を得て、退屈する孫たちを甲板に連れ出し、相撲をさせていた。

右近は懐に入れている雑記綴りに、毎日の日付と船内の出来事を書いていた。

出航して十日目、風が強くなってきて船の揺れが激しい。トマス好次が乗船時に高山家と内藤家の荷物を部屋の片隅に片づけて積み重ねていたが、それが崩れ、床に落ちた風呂敷包みが船の揺れに伴って動き出した。波も高まっている様子。一人一人が自分の荷物を膝の上に抱えて座り込んでいると、天井から水滴が落ちてきて床に水が溜まりだした。天井は甲板であり、甲板に上がった水しぶきが隙間から落ちてきたものと思われる。全員、荷物が濡れないようにしっかり抱え、右近は持ってきている「スピリツアル修行」や、簡単なポルトガル語の辞書などが濡れないように抱え込んだ。それを見ていたトマス好次が

「この船は大丈夫か、なんというボロ船なのだ。七十人定員で、船員の他に百人も乗り込んでいるのだから危険だよ」

と文句を言っていた。

翌日になると風雨が治まり、船の揺れも治まっている。右近、妻ジュスタ、娘ルチアの三人がデッキに出てみると、空には雲一つなく、どこまでも青空が広がっている。昨日の水漏れ騒動は嘘みたいな感じだ。気持ちがいいので、甲板に上がってみた。周囲は見渡す限り海で、どの方向も水平線まで何も見えない。洋上にはこの船がただ一つあるのみであとは何もない。右近は今まで感じたことのない、現世から超越した別世界にいるような思いがしていた。

船長と船員数人が急ぎ足で甲板に上がってきて、船が進んできた方向を長い間見つめている。右近が船長に

「なにを見ているのですか」

とポルトガル語で聞くと、船長は

「嵐の前日から後続の船影が見えない。これから少し速度を落として、追いついてくるのを待つことにする」
と言って自分ひとり下に降りて行った。数人の船員は船の航海してきた方角を見つめ続けている。

日差しが強く、甲板に長くいられないので、部屋に戻った。妻ジュスタは後続の船を心配している。その船は遠洋航海するのには小さな老朽船で、本来は三十人くらいしか乗船できないところを、追放キリシタンのみで五十人を乗せ、船員を合わせると六十人程度が乗船している。長崎奉行所が航海の安全よりも、一日も早く追放することを優先した結果の出航であった。

その船にはパテレンも数人が乗っており、金沢で一緒だったクレメンテ師も乗っているので安否が気遣われた。

二～四日後、太陽が西の水平線に没しようとするとき、眩いばかりの陽光が、その射す方向の海を黄金色に染めている。何とも言えないほど眩く美しい海を眺めていた右近のところへ、トマス好次が血相変えてやってきた。

「大変です。船員五人とキリシタンの男三人が睨みあいしていて、今にも乱闘が起きそうです」

と右近に注進してきた。

「原因はなんだ」

とトマスに聞いたが

「そこまでは分かりません」

「そこに直ぐに案内いたせ」

と言って、そのまま行こうとしている右近に驚いて

「丸腰で行かれるのですか。お刀はお持ちにならないのですか？危険では？」

「なにを言うか。喧嘩しにゆくのではない。刀なんかいらない」

と言いながら

「早く案内いたせ」

とトマスを急がせた。

右近たちのいる階から一階おりた階段際で、日本人キリシタン三人と船員五人が、今にも互いに飛び掛からんばかりに睨みあっている。

右近は近づいて、船員にポルトガル語で

「ここはお互いに争う場ではない。日本人の無礼を赦してやって欲しい」

と丁寧に語りかけると、怒っていた船員たちは思いがけないポルトガル語に振り向き、右近に

「貴方は誰だ？　俺たちに指示する権利はあるのか」

とスペイン語で、半ば喧嘩調子で言ってきた。宣教師との交流で、右近はスペイン語も何とか聞き取れる程度の理解はあったが、語るのはポルトガル語で流暢に

「私はスペインのフィリピン諸島総督と、ローマ教会マニラ司教区大司教から招かれている高山右近である。全員を無事マニラに届ける任務がある。お互いに喧嘩はやめてくれ」

と言って日本人に向かい

「どんなことがあったか知らないが、今我々はこの人たちに命を預けている。無事マニラに着くまでは何事も辛抱しなさい。どうしても我慢できないことがあればこの右近に言ってきなさい。右近が聞いて対処しよう。この喧嘩、これで終わりにしなさい」

と言って聞かせ、次に船員に向かってポルトガル語で

「彼らも、この喧嘩はもうやめると言っているから許してやってほしい」

と微笑みながら船員たちに握手の手を差し伸べた。右近は宣教師との交流から西欧式の握手には慣れていた。船員たち五人は無言で右近と握手して自分たちの控室に戻って行った。

日本人三人は右近に向かって

「みっともない姿をお見せして申し訳ありませんでした」

と、謝罪して自分の部屋に戻って行った。

自分の部屋に戻った右近は、グレゴリオ暦に基づく教会暦を見ると、既に今日が十一月三十日で、長崎出航から十六日経っている。右近はクリスマスをマニラで迎えるのか、この洋上で迎えるのか確かめたくなって、船長にあと幾日でマニラに着くか、と聞いたところ、風が順風であればあと十日、逆風の日もあれば十五日以上かかるかもしれない、とのことで、クリスマスはマニラで迎えることが分かった。

翌日も、翌々日も、毎日のように船員数人が交代で後方の海を眺めているが、後続の船影は見えない。聞けば、この船は後続の船が追いつけるように速度を落とし、既に二日間分の航程を徐行して待ったが、後から船が来るのを期待しつつマニラに向かっていた。

それから三日後、金沢にいたクレメンテ師の友人で、病臥中の一人のバードレが天に召された。船はマニラにはまだ距離はあるがフィリピンに繋がる島々の近くに来ており、船長は遺体を水葬にするか、どこか近くの島に葬るか、仲間のバードレの意見も聞いた結果、近くの島に葬ることにした。

それから七日後、船は漸くマニラ湾入口に停泊した。湾内曳航船を待つためである。マニラ湾に着いたと聞いて、右近は甲板に出た。今日も雲一つない、抜けるような青空が空いっぱいに広がっている。湾内にはフィリピンの島々を巡る大小の船が沢山係留されている。湾の奥にはスペイン統治になってから建てたと思われる二階建ての石造りの建造物も並んでいる。周辺は平屋建ての建

曳航船が来てこの船に綱をかけ、船をつける岸壁まで曳航した。

船が岸壁に着き、右近たちが階段を一歩一歩踏みしめるように上がって行くと、岸壁を上がろうとしたところで、ドミニコ会のバテレン・サントスが右近のところにやってきて

「高山様、フィリピン諸島総督自らお出迎えです。いろいろと歓迎の挨拶や行事があると思います。お疲れでしょうけれども宜しくお願いします」

と言ってきた。右近は

「私たちは日本を追われた罪人です。歓迎して戴くわけにはいきません。また、私は大変疲れています。どこでもいいですから休息する場所をあたえてくださるだけで十分です。総督にそのようにお伝えください」

「お疲れのことは総督にもお話ししておきます。高山様はローマ教皇もお褒めになった信仰の勝利者です。お迎えする方の立場もお考えいただき、少しだけでも総督の好意を受けてやってください」

ここまで言われて好意を無にすることもできないと思い

「では、御好意は有難く頂戴します。総督様によしなにお伝えください」

と言ってから、階段を上がりかけているサントスに

物が多い。

停泊すると直ちに小舟をおろして、バードレ二名が船員とともに連絡に行った。小舟が岸壁に到着して間もなく、連続数発の祝砲が響き渡り、それに呼応して停泊中の多くの船からも祝砲が鳴り響いた。

右近が

「何の祝砲だろうか？」

と疑問に思っていると、船長がやってきてポルトガル語で

「あの祝砲は信仰の勝利者高山右近様を歓迎する祝砲です。

おめでとうございます。私も高山右近様を日本からこのマニラにお連れする船の船長ができたことを光栄に思っています」

と言って右近に握手を求めてきた。思ってもみなかった祝砲と船長の祝意に右近は感激し、船長の両手を握りしめ、ポルトガル語で

「有り難う」

と感謝した。船長は続けて

「過日の船員の無礼をお許しください。船員たちはよくわかっている筈なのに血気盛んで」

と過日の右近の仲裁にお礼を述べた。

「この大勢の方々はなんですか」

と聞くと、サントスは

「ローマ教皇シスト五世から感状までいただき、言語に絶するいかなる迫害にも耐え抜いて、キリシタン禁教の国からやって来た信仰の勝利者である高山右近様を一目見ようとする歓迎の市民です」

と、岸壁を埋め尽くしている市民たちを見上げた。

サントスの案内で岸壁中央の石造りの建物の前に右近が近づいてゆくと、警護の役人に囲まれて出迎えているスペインのフィリピン諸島総督ファン・デ・シルバが右近を抱くように歓迎し、高山右近と家族を自ら総督府貴賓室に案内した。

ファン・デ・シルバ総督は右近にポルトガル語で

「このマニラへお越しくださり、大変嬉しく思います。スペイン国王の名において、高山右近様ご一家を歓迎します。お困りになることがあれば何なりとお申し出戴きたい」

との申し出があったが、右近は

「このように歓迎していただいて恐縮です。自分たちは日本から追放された者で、このような歓迎は恐縮に思います」

と答えたが総督は

「今日は大変お疲れのご様子ですから、明日、ゆっくりとお話ししましょう。これから宿泊いただく場所にご案内させましょう。今晩はごゆっくりお休みください」

と言って見るからに疲れている様子の右近を気遣い、バテレン・サントスに、迎賓館宿舎に案内させた。

案内された迎賓館宿舎は寝室が六部屋あり、食堂には夕食が用意され、フィリピン人召使が待機していた。内藤如安一家には同じ迎賓館の隣の宿舎が与えられていた。

約一か月の船中での食事は、朝夕二回だけの粗末な菜食中心であった。乾燥したパン（南蛮せんべいと言っていた）にカビが生えていたり、野菜も瑞々しいものではなく、とにかく食べなければ死んでしまう、と言うことから、使用制限の厳しい少々の水で飲みこむように食べていた。全員痩せて、体力も気力も衰え大変疲れていた。特に右近は「やっと全員無事でマニラに着くことができた」安心感で、マニラ到着と同時にどっと疲れが出た様子が、ジュスタにはよくわかっていた。

迎賓館での今夕の食事は、焼きたてのパン、新鮮な魚、瑞々しい果物と果汁、飲みたいだけの水、などがテーブル上に並べられていたので、ジュスタは皆に

「一度にたくさん召し上がるとお腹をこわすから」

と、十太郎はじめ孫たちに言い聞かせていた。

夕食が終って無事航海を終えることができた感謝の祈祷の後、ジュスタに既に割り当てられていたそれぞれの寝室に行った。

右近は疲れてはいるが眠れなかった。明日も終日歓迎が行われる予定を聞き、ともにマニラに追放されてきた人々の、このマニラでの生活をどうするか、自分たちだけが歓迎会をしてもらい、生活の保障もしてもらうわけにはいかない。一緒に来た日本人全員が、マニラでの生活が保障されなければならない。そのためには、明日トマスに命じて全員の宿泊場所を確認して、お互いの連絡が取れるようにしなければ、など思っていたが、いつの間にか眠って、「朝食が始まる」とのジュスタの声で目が覚めた。

右近は持参した羽織・袴を身に着け、日本武将の正装をして帯刀し、昨夕のファン・デ・シルバ総督の歓迎出迎えに対する返礼のため、モレホン師の道案内で総督府に向かった。

総督は右近に

「高山殿ご一家の衣食住のすべての生活は、スペイン総督府にお任せください。スペイン本国からもその旨の指示書が届くことになっています」

の言葉に右近は

「私どもの私生活までご負担いただくわけにはいきません」

と断ったが総督は

「スペイン王のご意向と聞いています。私どもにお任せください」

と言って別の話題に入って行った。

その歓談中に、マニラ大司教がメトロポリターナ大聖堂でお待ちしているとの連絡が入り、総督との歓談が一区切りついた段階でメトロポリターナ大聖堂に向かった。

右近たちが大聖堂に入ろうとしたときに、右近の到着を待っていたように、パイプオルガンの荘厳な響きが聖堂内に流れ、その響きが終わったと思う瞬間、美しく落ち着いたオルガンの音色が聞こえてきた。右近は聖堂に一歩入ったまま動きを止めた。その音色と響きから、自分が今、恰も雲に乗り、天使たちに囲まれているような、地上に立っているとは思えない不思議な法悦を感じた。

同道しているモレホン師が跪くようにして挨拶する姿に驚いた右近は、正面にディエゴ・バスケス・デ・メルカド大司教が右近たちを出迎えているのに気がついた。慌ててモレホン師と同様に跪くようにして挨拶しようすると

「高山殿、ようこそ。お待ちしていました。どうぞ二階へ」

と、二階の応接室に案内された。

「高山殿のことは、イエズス会年報やいろいろな記録で、バチカンでも知らない人はいません。ここマニラが、神様があなた方に用意された楽園と思って、フィリピンの人が一人でも多くキリストを知り、それを通して人として心豊かな生活を送ることができるよう、一緒に活動しましょう。高山殿がポルトガル語を話せるので、対話に困らなくて嬉しい。パイプオルガンと普通のオルガンの響きはいかがでしたか」

と話しかけてくれた。右近は感じたままに

「突然天から響いてくるような素晴らしい音色に、自分が地上にいることを忘れて、天使に囲まれて雲の上にいるような感じがしました」

と言うと、膝を叩いて喜んでいた。その後、日本のことなどいろいろと質問があった後、右近は昨夜と言うか、今朝と言うか、眠れずに思っていたことを話し出した。

「大司教様、昨日百名の日本人がマニラに着きました。この人々はいつまでもマニラの方々のお客様でいるわけにはいきません。日本で修道院活動をやっていたり、長崎では一時的ですが病院でお手伝いしたりして来ています。何か大司教様のお役に立つような仕事を与えていただきたいと願っています」

と言うと、大司教は

「さすが高山殿、その通りです。私もできるだけ早くそのお考えが実現されるように努めましょう」

の一言に、右近は安堵するとともに、ともに追放された日本人のマニラでの生活に、希望が持てたことでほっとしていた。

グリゴレオ暦で十二月二十五日、クリスマス・ミサがメトロポリターナ大聖堂で盛大に行われ、右近夫妻もミサに招かれ出席した。この大聖堂内は支配国スペイン人のみが入ることができ、スペイン人以外は右近夫妻のみであった。大勢のフィリピン人たちが、うす暗い廊下に立ったままきらびやかな聖堂内のミサを覗いていた。おそらく大聖堂内で働いている人達であろう。これを見た右近は、高槻での復活祭では武士も領民も一切差別なく、そこに領民の熱狂的な参加と喜びがあり、また、ある時は貧しくて葬儀も出せない農民の棺を、父ダリヨと一緒に担いだときの「デウスの御前には殿様も領民もみな同じ」と言う、家臣・領民に与えた信仰のあるべき姿の無言の主張などを思い浮かべ、今ここに同じデウスを信仰するとはいうもののスペイン人の驕りと人種差別を感じ、宣教と侵略支配の矛盾など複雑な思いが頭をよぎった。

マニラ市内での政府機関、カトリックの諸機関とドミ

ニコ会など各会派への一通りの挨拶を終えると、自分の住まいの確保をするため、トマス好次を供にマニラ市内を歩いて土地を物色していると、好次が突然立ち止まって

「ここの土地に、京都女子修道院の皆さんが、修道院を作ろうと協議しているそうですよ」

と右近に説明してくれた。修道院建設計画が早くも動き出していることに驚き、このような形で教会に連なった活動ができてくることを嬉しく思った。

右近はスペイン人と現地フィリピン人がどのような言葉で話し合っているかを注意深く観察していたが、フィリピン人に与えている仕事は、一人一人に対しては極めて単純な仕事で、スペイン語での簡単な命令で事足りていた。

スペイン人に現地語タガログ語に詳しい人はいない模様で、聖書の言葉をタガログ語で語ることはできていない様子だった。ここに、これから右近がやらなければならない仕事があると思い始めていた。

それから十日間くらいは、トマス好次に手伝ってもらいながら、一緒にマニラへ来た日本人をイエズス会系のサンタ・アンナ聖堂に招き、これからどのようにこのマニラで生活してゆくかの話し合いをしていた。その時に船内で船員と乱闘寸前になっていた二人の日本人男性に、フィリピンでの現地人宣教には、タガログ語で神の言葉を伝えることができなければ宣教にはならない。そのためには先ず我々がタガログ語を習得する必用があることを説明し、日常使う言葉を一語ずつ日本語に訳して書き留めるように依頼した。

マニラへきて三十日過ぎた朝、足と腰の痛みと痺れで立つことができなくなった。最初娘ルチアが右近の立ち上がれない状態を発見して母ジュスタを呼び、ジュスタはモレホン師に連絡して来てもらい、モレホン師がサンタ・アンナ聖堂に行って医師の往診手配をお願いした。

やがて医師が来て、診察の結果はマニラまでの渡航の疲れが原因で、休養を取れば快方に向かうだろう、と言うことであった。しかし、その後食欲もなく、身体は衰弱の一途を辿っている。総督も大司教も心配して見舞いを届けてくれ、臥せっている右近も恐縮していた。

医師が来て五日経過しても病状は良くならず、その夜急に寒いと言い出したので掛け蒲団を重ねたが温まらず、熱がかなり出ていて、夜更けではあったがトマス好次が医師を呼びに行った。

医師は診察したのち

「フィリピン風土病の熱病に罹っている。部屋を暖め、患者に水分が不足しないように、常に口に水分を含ませるように」

と指示を与え、別室でジュスタに回復は難しいと告げて帰った。

その翌日、ジュスタはモレホン師を招き家族一同が見守る中で、祈りの後、右近に終油の秘蹟（注 ②）を授けてもらった。

右近は床の中で短い眠りを繰り返していた。その繰り返しの中で、右近は眠りに入った後、再び目を覚まさなくなることの恐怖を感じていた。翌朝目覚めたのち、ジュスタに家族全員を集めるように言って、全員が集まってから、ゆっくりと一人一人と目を合わせて確認し、おもむろに

「爺は一足先に天に帰る。皆の生活は総督も大司教も考えてくださっているから心配はない。一つだけ皆に言っておく。どのようなことがあっても、命をなくすようなことがあっても、信仰を守り続けなさい。ジュスタ、ルチア、十太郎、幼い孫たち、皆は本当に爺に良くしてくれた。有難く思っている」

と言うと間もなく、また眠りについた。その翌日の二月四日早暁、家族と内藤家全員とモレホン師が見守る中で、右近は安らかに天に帰って行った。モレホン師は終油の秘蹟を授けてからその時まで、ずっと右近の家で右近の様子を見ていた。

（注 ②）日本聖書協会　共同訳新約聖書　ヤコブの手紙五章十三節から十六節参照（傍線　筆者写記）

あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。喜んでいる人は、賛美の歌を歌いなさい。あなたがたの中で病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したのであれば、主が許してくださいます。だから、主にいやしていただくために、罪を告白しあい、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします。

右近の葬儀はサンタ・アンナ教会で、全市を挙げて盛大に行われた。ファン・デ・シルバ総督、ディエゴ・バステス・デ・メルカド大司教から、キリスト教徒の範となる高山右近の信仰の歩みを語る弔辞が、大勢の参列者に感銘を与えた。ミサは九日間続き、多くの人が右近の足に接吻して別れを惜しんだ。妻ジュスタや娘ルチアには、大勢のフィリピン人の別れを惜しむ姿が印象的であった。

埋葬式は荘厳なパイプオルガンの響きとともに始まった。パイプオルガンに続いてオルガンによる讃美歌の曲が静かに流れ、偶然ではあろうが、右近が過日メトロポリターナ大聖堂で、恰も天使に囲まれているような法悦を感じたときの状況が再現されていた。遺体はサンタ・アンナ教会聖堂本祭壇近くに納められた。本祭壇近くは主にイエズス会管区長たちが埋葬される場所であり、日本人は高山右近一人だけであった。

(完)

(お願い　本文の中に十七世紀初頭時代としての表現から、一部差別用語を使用していますがご理解ください)

参考文献

完訳ルイス・フロイス日本史　1・4　中公文庫
高山右近秘話　H・チースリク　聖母文庫
高山右近を追え　高橋敏夫　いのちのことば社フォレストブックス
茶の湯の心で聖書を読めば　同右
高山右近　海老沢有道　吉川弘文館
高山右近　加賀乙彦　講談社
キリシタン大名高山右近　谷　真介　パウロ文庫
キリシタン千利休　山田無庵　河出書房新社
利休にたずねよ　山本兼一　文芸文庫
キリシタン史の新発見　岸野久・村井早苗　雄山閣
千利休「侘びの創始者」　平凡社別冊太陽
茶　同右
茶　利休と今をつなぐ　千　宗屋　新潮社
武士道　新渡戸稲造　岩波文庫
茶の本　岡倉天心　講談社学術文庫
戦国武将と茶の湯　桑田忠親　宮帯出版社
日本史年表　歴史学研究会編　塙書房
日本キリシタン史　海老沢有道　岩波書店
高山右近　北国新聞社
聖書　共同訳新約聖書　日本聖書協会

明治時代の著述者

渋江保の一生（その四）

山本　勉

第三期　第一次修学時代（東京都）

一八七一年（明治四年）三月～一八七五年（明治八年）一月

渋江保が弘前から東京に出てきた一八七一年（明治四年）の秋に、岩倉具視を特命全権大使とした明治政府首脳陣や留学生等使節団総勢百八名が、一年十ヶ月余りに渡ってアメリカ合衆国やヨーロッパ諸国を歴訪している。これは欧米諸国の優れた先進技術、文化等の視察や不平等条約改正の予備交渉が目的であった。また国内においては、明治政府が中央集権国家を確立するために廃藩置県が断行された年でもあった。

第一次修学時代のことが『渋江抽斎』に十箇所に渡って見られる。この『渋江抽斎』の記述をもとに、渋江の第一次修学時代を見て行きたい。

渋江保の上京の目的は東京で英学を学ぶことであったが、『渋江抽斎』の九十に上京の目的が次のように記されている。「抽斎歿後の第十三年は明治四年である。成善は母を弘前に遺して、単身東京に往くことに決心した。その東京に往かうとするのは、一には降等に遭って不平に堪へなかったからである。二には減禄の後は旧に依って生計を立てて行くことが出来ぬからである。その母を弘前に遺すのは、脱藩の疑を避けむがためである。」ここには英学を学ぶことが記されていないが、他の記述より渋江保の英学修業の様子を見て行きたい。(一)

『渋江抽斎』の九一に英語修学のことが次のように記されている。「成善は英語を学ばんがために、五月十一日に本所相生町の共立学舎に通ひはじめた。父抽斎は遺言して蘭語を学ばしめようとしたのに、時代の変遷は学ぶべき外国語を易ふるに至らしめたのである。共立学舎は

尺振八の経営する所である。振八、初の名を二寿と云ふ。下総国高岡の城主井上筑後守正滝の家来鈴木伯寿の子である。天保十年に江戸佐久間町に生れ、安政の末年に尺氏を冒した。田辺太一に啓発せられて英学に志し、中浜万次郎、西吉十郎等を師とし、次で英米人に親炙し、文久中仏米二国に遊んだ。成善が従学した時は三十三歳になってゐた。」(一)ここで記載のある尺振八は、『鴎外歴史文学集　第五巻』の人名注によれば、「英学者で中浜万次郎に英語を学び、幕府の外国方通弁官となり、二度に渡り遣欧米使節団に随行している。明治二年（一八七〇年）には東京本所に共立学舎を創立している。」(二)とある。また、東京都墨田区教育委員会の『東京都墨田区の歴史』によれば、「尺振八は天保十年（一八三九）、下総高岡藩の石の子として生まれました。万延元年（一八六〇）二十二歳の尺はジョン万次郎や英学者西吉十郎らから英語を学び、文久元年（一八六一）からは福沢諭吉もいた幕府外国方に通弁（通訳）として勤めました。尺は幕府の文久三年（一八六三）の遣欧、慶応三年（一八六七）の遣米と二度の使節団に随行してじかに西洋文明に接しました。とりわけ、アメリカでは雪地、津田仙と共に教育施設も視察して帰国し、やがて諭吉は「慶応義塾」を、尺は明治三年（一八七〇）七月に相生町のこの地に「共立学舎」を開くことになります。「共立学舎」は寄宿生英語塾でしたが、英語だけにとどまらず、漢字も、かなりの教養がないと読めないものもあるからである。保が書いているように、英語の初歩の手ほどきをするような塾の教師が教えられないのは当然である。当時の保の英語力がさほどのものであったとは思われないが、その意欲には並々ならぬものがあったのだろう。」(七)とある。保は大きく時代が動こうとしたこの時期に英学を学ぶ必要性を強く感じたに違いない。では、渋江保ら当時の若者がなぜ故に英学を学ぶことを強く欲したのであろうか。大田雄三の『英語と日本人』には、当時の学生の英語の水準が如何に優れていたかを示す資料が掲載されている。例えば、「第二章　英語名人の時代」には、当時の英語熱について次のように書かれている。「物事は、順を追ってじょじょに発展していくことが多いが、日本人の英語力ということに関してはどうもこれはあてはまらないようだ。もちろん、時代がたつにつれて英語を学ぶ人間の裾野はどんどん広がっていったのだが、頂点に立つ、その時代時代で最高の英語力を身につけた人達の比較においては、日本人の英語力のピークは、まだ辞書なども完備していない明治のごくはじめの頃にきたようだ。これは一見不思議なようだが、西洋文明に対する熱狂のあまり、自国の伝統の価値を極端に軽んじる風潮のあった明治初年においては、自国語や自国語を通しての文化を犠牲にしてまで、欧語を重視した教育が未来のエリートに対して行われたからである。そこに生まれ

教育も行った洋漢兼学のバランスのとれた私塾であったために開塾後わずか半年で千名を越える生徒数を誇りました。尺はスペンサーの『教育論』を飜訳した『斯氏教育論』を刊行、自由民権運動の理論書として数多くの人々に愛読され、また未完の『明治英和字典』（死後、英学者永峯秀樹が後を継ぐ）の記述や多くの人材を輩出するなどの業績により、〝現代英学の祖父〟とも呼ばれ、諭吉と共に近代教育の幕明けを演じましたが、明治十九年（一八八六）十一月二十八日、四十八歳の若さでこの世を去りました。」とある。(四)

『渋江抽斎』の九二には、「成善は四月に海保の伝経廬に入り、五月に尺の共立学舎に入ったが、六月から更に大学南校にも籍を置き、日課を分割して三校に往来し、猶放課後にはフルベックの許を訪うて教を受けた。フルベックは本和蘭人で亜米利加合衆国に民籍を有してゐた。日本の教育界を開拓した一人である。」(五)とある。この事について山路愛山の『独立評論』再興第七号、澁江保氏談話「明治初年の学風」には次のように詳しく書かれている。「其頃本所に関新八の共立学舎といふのがあったが、私は其れに入って英語を学んだ。此塾に居た者は後に多く嚶鳴社員になった。即ち沼田守一、田口卯吉、島田三郎などが其れで、梅浦精一も此処に居た。何でも此頃グードリッチの英國史、佛國史、ウェーランドの経済論を読める者は大学者だと言われたもので、塾中それが読めるのは梅浦位のものだった。私共はどうかして其れを読めるやうになり度いと思って、共立学舎丈けでは慊らず、其頃林町二丁目に英人の立てた塾があったので、こっそり其処へ行って志望の旨を頼んだ処が、体よく断はられてしまった。初めは此方が学力の不足のため断ったのだらうと思ってゐたが、よく聞いて見るとさうではなく、実は向ふの英人がよほど無学な人間で、自分でも其れが読めないから余儀なく断ったのだといふとだった。又三味線堀に文明義塾といふのがあって、其処へ梅浦が半分教師、半分生徒といふ格で行ったので、私共も梅浦に誘はれて行って見た。亜米利加人のガスナーといふのが居て、スペリングから初めたが、少しやってる中に此の米人先生、私共の質問に答へることが出来ないやうになってしまった。仕方ないので此処もやめて九段の南甕へ行った。此処にはフルベッキといふ外国人が居て会話、文法等を教へて呉れたが、此処は流石に教授もやや規則立って居り、且つ生徒の成績に依り白と黒の点を取って、見てる間に席を換へるなどの奨励法が行はれたので、大に励みが出て一生懸命勉強した。」(六)とある。この澁江保氏談話について、稲田雅洋は『境　創刊号』の中で次のように述べている。「それにしても、まだ英語を習いだしたばかりの保が、いきなりグードリッチやウェーランドを読んでいる。（読もうとしている）には驚く外はない。これらの本は、たとえ英米人であろうと

たのが「英語名人世代」であった。」(八)とある。ペリー来航以降、明治政府が中央集権国家を目指し、西洋の先進的な技術をいち早く取り入れようとした明治維新の希有な情況が、若者達を英語熱に奔らせたものと思われる。当時の学生の語学力については、同書七十二頁に「外国人も驚く語学力」として、次のように書かれている。「北海道大学の前身の札幌農学校の初代教頭として、明治九年（一八七六）年に来日したウイリアム・S・クラークは、東京および札幌で、新説の札幌農学校への入学志願者に対する試験を行ったあと、その印象をそれぞれ次のように書いている。まず、東京で英語だけを使って試験をしたあとで、私たちは、彼らがマサチューセッツ農学校に入学許可になる学生の平均に決してひけをとらない位の学力を持っていると思いました。〔妻あて。一八七六年七月五日付の手紙〕。札幌での試験のあとで、四十九人の学生の試験をしましたが、彼らの多くは十分新入生となる資格がありました。彼らは英語をとてもよく読み理解しますし、英語を書くことはたいていのアメリカの学生よりすぐれています。〔ウイリアム・B・チャーチルあて。一八七六年八月五日付の手紙〕」(九)とある。妻やウイリアム・B・チャーチルへ宛てた手紙から、クラーク博士が、日本の学生の語学力の高さに非常に驚嘆していることが読み取れる。同書七十四頁の「英語名人世代」には、英語名人世代のグループの年齢について次のような記述がある。「一八六一から前に二、三年、後に四、五年くらいのびる合計十年ぐらいの期間に生まれて、高等教育を受ける機会に恵まれた人々が、実は近代日本で最も英語（または他の欧語）を深く身につけたグループであったと思われるのだ。彼らを本書では仮に、「英語名人世代」と名づけることにする。」(十)とある。一八五七年生の渋江は、「英語名人世代」の四年前に生まれており、明治維新後の文明開化の時代に多感な少年時代を過ごしている。渋江は、『西洋見聞録』や『西洋事情』を読み、新しい時代の幕明けを敏感に感じ取り、西洋の学問とりわけ英学を必死に吸収しようとしたのではないだろうか。それ故、『渋江抽斎』の九二にあるように、日課を分割して三枚に往来して英学を学び、更に放課後にはフルベックを訪ねて英語の教授を願い出たのであろう。

渋江保はその生涯において多くの著作翻訳を手がけているが、私の調べたところでは、二百三冊もの著作翻訳がある。何れ渋江保の著作翻訳についても改めて触れたいが、英学修学の成果でもある最初の著作は、一八七二年（明治五年）のカッケンボスの『米国史』の翻訳である。森鷗外の著書『渋江抽斎』のその九七には、「書肆万巻楼の主人が相識で、翻訳書を出してくれようといっている。早速翻訳に着手しようというのである。万巻楼

の主人は大伝馬町の袋屋亀次郎で、是より先保の初て訳したカッケンボスの『米国史』を引き受けて、前年これを発行したことがある。」(十一)とある。また、太田兼雄の『羽化渋江保の著作』にも、「明治五年（一八七二年）万巻楼より出版、渋江保十六歳」(十二)と見られるように、渋江の早熟ぶりが伺える。渋江は、『米国史』の出版後、『小学入門授業法』、『授業必携二巻』、『英国憲法論』、『ミルトン注釈』を出版し、その後博文館での執筆活動が始まる。

さて、渋江の最初の著作となったカッケンボスの『米国史』であるが、『米国史巻之一』の目録の次に「青森縣　渋江保纂輯　東京府　山田脩校正」(十三)とあるように、渋江抽斎の五男、保の兄が『米国史』の翻訳に関わったことがわかる。

渋江保は、『米国史』の翻訳について、山路愛山の『独立評論』第九号、澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」で次のように述べている。「其中再び私は東京へ出ることになったが、藩の邸が本所に在るので、なかなか三田の慶應義塾まで通ふことは出来ない。せめて福澤先生の著書でも読みたいものだと思ったが、其れも貧乏な自費生の悲しさには、思ふやうに書物を買ふことも出来ない。それで何とかして本を買ふ金を拵へたいものだと思って大胆にもカッケンボスの小米国史の翻訳を思ひ立った。其頃私は関新八の英学塾へ通って居たが、やっとリーダーの二あたりを読んで居る位の学力なので、やり初めて見ると片端から知らぬ字だらけで、一頁に四五十も字書を引かねばならぬ。今から考へると汗の出るやうな話であるが、それでもどうやらかうやら最期まで翻訳を終って、其頃大伝馬町にあった萬巻楼といふ本屋へ話して見ると、意外にも直ぐ出版を引受けて、十行二十字一枚五十銭の原稿料で買はうといふ。処が原稿は皆で八百枚ばかりもあるから四百圓位の金が入る筈だったのであるが、私の兄弟が何時か知らぬ間に本屋から其金をすっかり取り出してしまって、私が受取りに行った時には僅か五六圓位しか残って居らなかった。残念ではあるが、兄弟のことだから何とすることも出来ない、ただ僅かに残った五六圓の金で兎も角も色々の本を買って読んだ。福澤先生の『学問のすすめ』なども其時に買った。そして楠公と権助の論などを面白く読んだものであった。」(十四)

渋江保と山田脩の語学力であるが、稲田雅洋は『境創刊号』において山田の語学力を高く評価しているが、藤元直樹は、『渋江抽斎没後の渋江家と帝国図書館』において、稲田雅洋の『境　創刊号』の『渋江保伝上』を引用し次のように述べている。「稲田雅洋は、本書が成るにあたっては、抽斎五男で明治初年山田源吉の養子となった兄山田脩（専六）（一八五四～一九〇八）の力が大きかったのではないかとする。稲田は荒木伊兵衛『日

本英語学書志』に山田の著作が出ていることをその根拠とし、山田の英語の実力を評価している。しかし、同書に挙げられた書物は『版権准刻書目』から抽出されたものにすぎず、この書目には、実際に出版にいたっていないものも含まれている。（中略）これらを見れば決して山田の執筆活動が先行していたわけではなく、また梗概から判断すれば、山田の訳したものの質が保のそれを上回るものとは考えにくい。」(十五)稲田雅洋と藤元直樹の山田脩の語学力について見解の相違はあるが、どちらにしても渋江が英学を学び始めて一年余りにも関わらず大胆にも翻訳をしたことは驚愕に値する。ここに当時の渋江の学力を物語る資料がある。『犬養木堂傳上巻』である。犬養木堂とは政治家の犬養毅である。『犬養木堂傳上巻』に、犬養が慶應義塾に在学していた頃の記述が見られるが、当時の渋江の学力について注目に値することも同書で述べられている。「第二章苦学時代第六節慶應義塾時代の回顧、五諸友は語る　其頃の犬養さん　矢田績談」に「犬養さんは、英学しかやらなかった。私は総ての学科をやった。簿記、文章の稽古、数学、ところが犬養さんは、英学ばかりやり、簿記とか数学はやらなかった。僕等が、数学をどうしてやらないのかと訊ねると、俺にはそんなものは必要ない。英書が読める力がつけばそれでよいと、英学ばかりやっていた。其時の先生は、門野幾之進氏で、その人に学んだ本は、スペンサー、バイロン、ミルの経済学、ミルの自由論、イングリッシュパーテーション、英國憲法論などで、吾々及び犬養さんは、社会学、経済学や政治論を学んだ。それから成績は、犬養さんと私に渋江保、これは英文丈けの競争者です。三人の内大抵は渋江に負けた。渋江が首席を占め、犬養さんが二番目、犬養さんが一番になったこともあり、三番になったこともある。僕も一番や二番になったことがあるが、比較すると渋江が一番でした。犬養さんは渋江の奴に負けたなどと言って口惜しがって居られたものだ。要するに、三年で英学だけ一年ばかりやってゐると、明治十三年の暮に渋江が首席、僕がその次、この渋江は何でもよく出来た、そして卒業したが、犬養さんは卒業出来ん、それは外の学科をやらんから、卒業出来なんだ。それでも平気である。あんな証書なんかいらん、英書が読めればいいと平気だった、寧ろそれが自慢であった位だ。」(十六)とある。犬養も英語には自信あったようだが、その犬養より渋江は英語もその他の学問も優れていたことがこの文面から読み取れる。

注記

(一) 森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二五〇頁

(二) 森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二八二頁

(三) 森鷗外『鷗外歴史文学集　第五巻』（岩波書店二〇〇〇年一月十四日）四〇六頁

(四) 東京都墨田区教育委員会『東京都墨田区の歴史』（墨田区教育委員会　一九九六年三月　インターネット検索　検索日　二〇一五年九月十三日）

(五) 森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二五五頁

(六) 山路愛山『独立評論』再興第七号、澁江保氏談話「明治初年の学風」（独立評論社　一九一三年八月一日）二九頁

(七) 稲田雅洋『境　創刊号』（佐々木啓之　一九八三年九月一日）十四頁

(八) 大田雄三『英語と日本人』（講談社学術文庫　一九九五年九月十日）七一頁

(九) 大田雄三『英語と日本人』（講談社学術文庫　一九九五年九月十日）七二頁

(十) 大田雄三『英語と日本人』（講談社学術文庫　一九九五年九月十日）七四頁

(十一) 森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二七二頁

(十二) 大田兼雄『羽化渋江保の著作』（日本古書通信　一九六三年九月十五日二八巻九号）十一頁～十三頁

(十三) カッケンボス著　渋江保訳山田脩校正『米国史巻之二』一八七二年八月）原本に頁数の記載なし

(一四) 山路愛山『独立評論』再興第九号、澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」（独立評論社　一九一三年十月一日）二三・二四頁

(十五) 藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第六〇号　二〇〇四年三月）一〇五頁

(十六) 木堂先生伝記刊行会鷲尾義直『犬養木堂傳上巻』（原書房　一九六八年九月二十日）　一一〇頁

密室銀行（二十二）最終回

匠　克仁

〈前号までのあらすじ〉

東西銀行赤坂支店の金庫室で支店長が殺害された。金庫室は密室で支店も密室であった。金庫室には竹森も閉じ込められていた。

沢木雅子が逮捕された。雅子は自ら密室トリックを説明した。

「いよいよ今回で最終回である。

前回で密室トリックを解説したが、実は、他にも画期的な密室トリックを思いついた。

ぼくが密室からテレポーテーションで抜け出した方法は既に説明した。それで、ぼくはゴキブリ男となった。

テレポーテーションというと非現実的みたいである。しかし、実はこの技術は原稿を書いている時点で実現している。もっとも、現在は素粒子レベルである。

量子テレポーテーションというのが、正式名である。量子テレポーテーションによる経路をアインシュタイン・ポドルスキー・ローゼンチャンネルと呼ぶ。

ワームホールの正式名をアインシュタイン・ローゼンブリッジと呼ぶが、この二名は同じ人物である。

２０１４年6月にはオランダにおいて精度１００％で3mのテレポーテーションに成功した。素粒子レベルであるが、金庫室のような頑丈な密室の中からでも今現在の技術でテレポーテーションができる。

百年後くらいには物質でも生命体でも転送できるようになっているに違いない。

素粒子（そりゅうし）でなく、素粒子（もと・つぶこ）ちゃんという女性であっても可能になるだろう。

推理小説をやめて、ＳＦ小説にする手もあった。密室銀行は、現在より百年後の設定にする。事件は平成一二七年に発生した。

金庫室そのものが、物質転送装置であった。犯人は犯行後に物質転送装置のスイッチを入れたのである。

物理学とくに量子物理学に詳しい人は、ミスにすぐ気付いただろう。

量子テレポーテーションは理論的にも実験的にも証明されたが、ある問題がある。

実は、元の物質は消滅しない。つまり、密室の内と外の両方に犯人ができるのである。これでは犯人は密室から消えないから、意味がない。

ところが、量子物理学を馬鹿にしてはいけない、もっと凄いことがある。

それは量子トンネル効果である。不確定性原理に基づき、素粒子レベルでは古典物理学理論では通れない障壁を通り抜ける現象である。

この量子トンネル効果を応用して、密室を通り抜ける技術もさすがに百万年後には開発されているに違いない。これだと金庫室内の犯人も居なくなる。

密室銀行は百万年後の設定にする。事件は平成一〇〇〇二七年に発生した。

犯人は量子トンネル効果を応用した転送装置を利用して、密室を脱出したのである。金庫室が転送装置なのである。

量子論を使った密室トリックなんて、画期的だなあ。

書いている最中に、さらにミステリ史上に燦然と輝く密室トリックと意外な犯人を思いついたのである。

犯人は……密室そのもの、つまり、金庫室なのである。

この金庫室は実は生命体で、意志を持っているのである。そして金庫室の中から巨大な鉄の握りこぶしが出現して、被害者を殴り殺すのである。

密室そのものが犯人だなんて、意外な密室トリックで意外な犯人だなあ。究極の密室殺人犯である。

バルタン星人が金庫室に変装していたということにしよう。バルタン星人は生物だけでなく、何にでも変装できるのである。

絶対にバカミス大賞を受賞するだろう。バカミスとはバカバカしいミステリのことで、『このミステリーがすごい！大賞』で、バカミス大賞も毎年、発表されている。村上春樹の作品がノミネートされて、受賞できなかったくらいだからノーベル文学賞なみである。

ぼくが賞で最も欲しいのは、バカミス大賞である。

しまった。また、あらすじの注釈を書いて、本文を書く時間が無くなった。今回が最後なのにどうしよう。」

密室の説明が終わった後で、竹森と雅子は警察の車に同乗して、雅子の自宅に向かうことになった。

防犯ビデオのデッキを取りに行くためである。警官は竹森を連れていくのを拒んだが、雅子が強引に主張したのであった。

和加刑事が運転し、助手席に竹森が座った。制服姿の女性警官が待機していた。その女性警官と及川刑事とが雅子をはさむように後部座席に座ることになった。

密室は雅子が解き明かしたが、竹森は未だ疑問が残っていた。

事件当日は通用口のシリンダー錠が施錠されていたのに、雅子がどのようにして入ったかという謎であった。

竹森は刑事に断って、後部座席の雅子に声をかけた。

「もう一つ、疑問があるんだけど。どうやって通用口から入ったの。通用口はシリンダー錠が閉まっていたのに」

通用口の密室に鍵をかける謎は解決したが、そもそも入ることができないのであった。

竹森が通用口のサムターンを閉めたことは間違いなく記憶している。記憶を失ったのは、金庫室に向かう階段を降りた以降である。

「謎でも何でもないわ。だから説明は飛ばしたの」

雅子は答えたが、竹森は理解できず、首をひねった。

「ただの錯覚よ。あなたが記憶喪失になったタイミングを錯覚したからよ」

「錯覚…。記憶を失ったのは、金庫室へ行く途中の階段のところだ。支店長に続いて階段を降りたことを覚えている。だから、金庫室に入る直前から記憶を失ったことは確かだ」

竹森は事件当時を思い出した。

「それが違うわ。あなたが記憶を失ったのは、金庫室に入る直前じゃない。あなたは二回、地下室の階段を降りたの。一回目の地下に降りる途中から記憶を失くしたの」

雅子の説明に竹森は反論できずにいた。

「あなたが最初に階段を降りる途中で、私が通用口のインターホンのブザーを鳴らした。引き返して、ハンドルスイッチの遠隔操作でシリンダー錠を開けてくれたの。あなたは自分で開けた記憶も一緒に失ったのよ」

竹森は自分が通用口の錠を開けたと言われたが、記憶は戻らなかった。

まだ竹森の疑問は解決していなかった。

タイミングがずれて、二人が金庫室に入った後に雅子が通用口に来ていたら、竹森にはブザー音が聞こえなかった。雅子は支店に入れなかったことになり、犯行が不可能になる。

偶然、金庫室に入る直前にブザーを鳴らしたことで、雅子の犯行が可能になったということになる。

竹森の記憶喪失を雅子が予測した上で、竹森が地下室へ行くタイミングを知ってブザーを鳴らした、ということになるが、それは現実的でない。

さらに雅子の犯行動機が不明である。

セクハラなど殺されるようなひどいことを支店長が雅子にしたことだろうか、と竹森は思った。熊本支店長はセクハラやパワハラの噂が絶えなかったのである。

しかし、雅子が竹森を傷つけたり、殺人犯人にしたてたりするとは考えられなかった。事件当時もお互いに好意を持っていたし、現に二人は婚約している仲である。

竹森が疑問を抱えている間に、雅子の自宅に到着した。雅子の両親は旅行中ということで、留守にしていた。玄関前に車を留めると、女性警官を除いて家に入った。

雅子が他の三名を自室に連れて入れた。机の上にパソコンの液晶ディスプレイがあった。

雅子はベッドの下に手を入れると、ビデオデッキを引き出した。そのデッキは赤坂支店の防犯ビデオのものであった。

デッキはディスプレイと接続されていた。いつでも再生できる状態のようであった。防犯カメラの映像は通常のパソコンでも再生できる。

赤坂支店のディスプレイは十六ヶ所の防犯カメラの設置場所を十六分割・九分割・四分割・一画面と切り替えで表示できるようになっている。

支店のディスプレイは通常は十六分割であるが、特定の映像を全画面表示で見ることができる。

ディスプレイ上の映像に関係なく、十六ヶ所の映像データは全て個別の映像ファイルに分けて保存されている。映像も動きがある場合だけ効率的に録画している。

パソコンでファイルをクリックすれば、ほとんどの動画再生用ソフトで見ることができる。

ハードディスク内のデータは一週間分をＤＶＤに書き込みして、それを保管している。

「映像を見れば、すべての疑問が解決するわ」

雅子がパソコン上のアイコンをクリックすると、防犯ビデオの映像が始まった。

カメラは金庫室の扉の外側に廊下の天井から室内を覗きこむように設置している。死体の位置関係から決定的な瞬間が記録されているはずである。

これから雅子が支店長を殺害するシーンが映し出されると思うと、竹森は逃げ出したくなった。

刑事が言っていたように金属バットをつかったのであろうか、と竹森は考えた。

雅子がリモコンのボタンを押して、映像を開始した。

映像は、まさに殺害行為の瞬間から始まっていた。鉄の踏み台で支店長の頭蓋骨が砕かれている場面であった。

映像は鮮明に記録されていた。

竹森と二人の刑事がディスプレイの映像を見て、同時に驚きの声を漏らした。

十七

支店長殺しの犯人は雅子でなく、竹森であった。

竹森が支店長の頭蓋骨の上に踏み台を落としている映像が流れていたのである。

「支店長を殺したのは、僕…」

竹森は後の言葉が出てこなかった。

「少し巻き戻しするわね」

雅子がリモコンを操作すると、別の画面に変わった。最初に表示された場面から三分ほど前のシーンである。

「出勤した私は、水を飲もうと休憩スペースに入った」

防犯ビデオのディスプレイの設置している場所は、休憩スペースにもなっていて、ウォーターサーバーがある。

「防犯ビデオが視界に入ったの。竹森君と支店長が金庫室に入るところだった。気になったので、金庫室の映像を全画面に切り替えたわ」

映像では、支店長が金庫室を開けているところであった。その後で、竹森が入っていった。

「金庫室に落ちていたメモを竹森君が拾って、支店長に見せたの」

竹森が支店長にメモを見せていた。警察から指摘された持井建設の不正融資を示すメモである。このメモの通りの資金の流れであれば、違法献金である。

政治資金規正法は、企業から献金を受けることができるのは政党のみで、国会議員個人は禁止されている。

竹森は事件後にメモを見せられても気づかなかった。この時も何も知らないで渡したのだろう。

（自分ではメモが不正融資や違法献金を示すものと判らなかったのに。支店長が証拠を見つけられたと勘違いしたのだ）

メモを見せられた支店長は自分の不正融資と義兄の違法献金をとがめられたのか狼狽していた。

支店長は暗号で永田と書いたことを忘れて、義兄の波戸田の名前を書いたと勘違いした。そう竹森は考えたが、今となっては確認できない。

「支店長がいきなり怒り出して、竹森君の胸ぐらをつかんだのよ」

カメラ越しでも分かるほど、支店長は激高していた。支店長はもともと感情を爆発させる性格であった。特に部下から間違いを指摘されることを極端に嫌った。

支店長は右手で竹森の胸元をつかむと、スチール棚に押し付けた。バランスを崩した竹森は、後頭部をL字アングルに激しくぶつけた。

竹森が逃げようとして、体を左側にずらした。竹森は支店長の右手を外そうとして両手で手首をつかんで、振り回した。

その状態で竹森はそのまま倒れこんだ。支店長に押しつぶされないよう抵抗した様子で、右足裏で腹部を蹴り上げている。

まるで巴投げか合気道の技のように支店長の体が宙に浮いて、回転した。

支店長が後頭部を下にして勢いよく落下した。下には踏み台の鉄の角の部分があった。

「私が止めに行く間もなく、絡み合う感じで支店長が踏み台に頭から突っ込んでいったわ」

十数キロの踏み台で殴ったのでなかった。百キロの重さの衝撃が頭蓋骨に加えられたのである。

支店長は勢いで斜めに転がり、うつ伏せの状態になった。踏み台は頭蓋骨に埋まったまま、頭上に乗っかった。

転倒した竹森はしばらく頭を抱えていたが、支店長のもとへ歩み寄った。

「竹森君は踏み台をどけようとして持ち上げたの」

支店長の頭の上の踏み台を取り除こうと、竹森は持ち上げた。その瞬間、支店長の手が痙攣したようで、竹森の足を叩いた。

驚いた竹森が踏み台を放してしまった。

そのシーンが再生の最初に流れたときのものであった。

踏み台は角を真下にして落ち、陥没した頭蓋骨に突き刺さった。鉄の凶器で何度も殴ったのと同様であった。

「竹森君が正当防衛で無罪になるなら良いけど、この状況では難しいと考えたの」

映像の竹森は再び頭を抱えると、しゃがみ込むようにして倒れた。

支店長から受けた怪我の影響が出たのかもしれなかった。必死になって支店長と戦っていたが、緊張の糸が切れた様子であった。

自分がした行為にショックを受けたかもしれない。複数の原因が重なって、失神したのである。

「ここまで見て私は金庫室へ駆け出した。私が駆け付けたとき、二人が並んで倒れていたわ。もちろん、最初はすぐに救急車を呼ぼうと思った」

ディスプレイ上の雅子が金庫室に入るところである。

「支店長の脈を取ってみたけど、既に脈は無かったわ。頭蓋骨が割れて脳が飛び出している状況だった。素人目でも死んでいると思った。一方の竹森君はただ気を失っているだけだった」

雅子は支店長の脈を診た後に、竹森の耳元で囁いていた。

「私は支店長よりも竹森君を守ることに決めたの。私が助けるから、あなたは全て忘れて、と竹森君に呼びかけたの。まさか本当に記憶を失うとは思わなかったけど」

雅子は格子扉を閉めた。

「後の私の行動は支店で告白した通りよ。格子扉の鍵を閉めたところで、鍵束を中に落としてしまった。しかも運悪く支店長の手の中に入ってしまった」

雅子は格子の隙間から鍵束を落とした。その後、耐火扉を閉めると、駆け出して視界から消えた。

「耐火扉でダイアル錠を閉めれば、第三者の犯行に見えると思った。その時は通用口まで考えていなかったわ」
数分すると、画面はノイズとなった。雅子がデッキを外して、持ち去ったのである。
「竹森君が犯人にならない証拠をたくさん残したかったら、その場で思いつくだけ工作をしたわ」
実際に、雅子の狙いが成功して、竹森は逮捕されないで済んでいた。
外部からの密室工作の明らかな痕跡があったために、竹森が逆に犯人でないアリバイになった。『逆密室』と竹森が名付けたことを雅子は実現したのである。
ビデオデッキを持ち出したことが発覚して、雅子が殺人の容疑で逮捕されることになった。
「竹森君か私が逮捕されたら、ビデオを見せて事実を明らかにするつもりだった」
説明を受けた刑事たちも混乱している様であった。逮捕により雅子が真相を告げることになった。しかし、予想外の展開に驚いていた。
「映像があれば、正当防衛は難しくても過剰防衛は認められて刑が軽くなると思ったわ」
犯人は雅子以外の発見者の一人だと竹森は考えていた。密室の謎さえ解ければ、犯人は自然に特定されるだろうと竹森は思い込んでいた。
真犯人が自分という事実に竹森は混乱していた。【完】

〈作者の独り言〉
［六年もかかったが、やっと終わった～。犯人を明らかにしたので、だらだら書かずに強制終了する。
作者本人がまさか完結できると思っていなかった。途中で全く先に進めなくなった。
苦しまぎれに、前号までのあらすじの注釈やエッセイを書いて、ごまかした。そっちの方が面白かった気がする。
前号でも書いたが、密室トリックがどうしても思いつかなかった。最初に通用口のシリンダー錠が開閉ともに時計回りに60度回転させた後に元に戻すタイプという前提でトリックを思いついて、書き始めた。
書いている途中でそんなシリンダー錠は無いことに気付いたのである。いやあ。まいったなあ。
書き始めに想定もしていなかったハンドルスイッチの遠隔操作を最近になって思いついた。
犯人だけは最初から決まっていた。というよりも犯人当てがメインで書き始めた。
もっとも、二話くらいで完結するつもりが、さすがに六年近くもの間、だまし続けることはできなかったかもしれない。
連載途中で登場人物を紹介したが、プロフィールに犯人と書きそうになった。
きちんと最初から書き直したいなあ。］

白豚に乗った王女様

匠　克仁

ぼく（アイ・ハブ・ア・ドリーム）には夢がある。
それは逆玉である。逆玉は、逆『玉の輿』である。
男性の股間の右の玉と左の玉が逆になることではない。……と前号で書いて、脱線した。脱線話だけで一つのエッセイができた。
できた話が100%玉玉の話である。最初から10Pまで玉玉だらけである。エッセイ一本丸々が玉玉である。
『100』も『%』も『10P』も『一本丸々』も、玉玉と竿に思えてくる。
書いている本人があきれて、玉…じゃなく、あごが外れそうである。
男性の沽券（こけん）に関わるエッセイを前号で書いた…じゃない男性の股間に関わるエッセイを前号で書いた。おそらく男性読者は自分が右派か左派か確認したことと思う。
女性読者も、自分の夫か付き合っている彼氏など身近な男性の左右の玉玉を確認しただろう。おそらくまんじの女性の読者比率が高まった気がする。ぼく個人としては男性読者を狙って書いたのでない。実を言うと、前回は女性に読まれることを意識して書いた。
男性に好かれる文章を書いても面白くない。どうせなら女性から好かれたいのである。平等精神を持つ、ぼくは男性としてセクハラ的な表現をしない。ところで…
女は間違っている。
女は欠損している。突起物が欠けているのである。

女性の方が生物学的に優れていると思っている。ぼくが女は間違っているというのは漢字のことである。つまり女の字は、明朝体ではノが一を突きでないが、正確には女の一をノが姦通…、いや、貫通すべきである。まるで女の一が膜で、ノを反りかえった棒のようだ。明朝体の女を何千倍に拡大してもノが一を突きでていない。この女のような小一でも学ぶ漢字を誤記している。間違った女が氾濫している。ぼくは日本の国語教育界に働きかけ女絶滅運動を展開したいと思う。絶滅するのは明朝体の女である。ゴシック体も誤っている。しかし、行書体の女は、だいたい右上を貫通している。正しいスタイルの女を採用させたい。出るところは出たプロポーションの女を使用するべきである。明朝体で書かれている文章も女の文字が一部でも含んでいると、行書体に修正するか女の明朝体・ゴシック体自体を修正すべきである。まず女を矯正して両角が突き出た本来の姿に変える。日本の女がこのままでは、日本語や日本文化がおかしくなるし女のせいで日本は滅びるかもしれないと危惧する。また女という漢字を見ただけで、ぼくは興奮して書いた。

姦の字を見ると、もっと興奮する。

姦しい、と書いて『かしましい』と読む。ぼくだったら姦をレズビアンと読ませる。最近は、訓読みをしないが姦しいとは、やかましい、という意味である。音読みの姦（カン）は、正しくない性行為である。熟語で姦淫・姦通・和姦・相姦などである。不倫として使う。他にも姦は奸と同じで、悪賢い、を意味する。熟語だと姦計・姦臣・姦智などある。性差別だなあ。

嬲という漢字もある。

嬲る、と書いて『なぶる』と読み、今でも使う。例えば嬲り殺しだなんて、恐ろしい言葉もある。ぼくだったら嬲をサンピー（3P）とさわやかに読ませたい。

嬲の漢字の部首は男でなく女である。ちなみに音読みで嬲はジョウという。

嫐という漢字もある。

嫐は作字でもなく、正しい日本の漢字である。訓読みで嫐は『うわなり』と読む。もう一つは、先の字と同じく嫐る、と書いて『なぶる』と読む。

嫐の漢字の部首も男でなく女である。ちなみに音読みで嫐はドウという。

嫐とは後妻で、上に成るからきている。そこから派生で嫐とは、先妻が後妻を呪うとか襲う意味になる。つまり嫐（うわなり）に夫を奪われた先妻がこの後妻を恨んで嫐（なぶ）るのである。漢字を分解すればわかるように嫐の二人の女は、男の先妻と後妻である。女二人が男を嫐っているように、ぼくには見える。歌舞伎での演題に嫐がある。現代でも同じ様な現象はあるだろう。例えば嫐は元カノが今カノをストーカーするのである。ぼくは嫐の文字から一つ小説を考えている。

＊

こんな下品な文章ばかり書いていると、いつかとんでもない天罰、例えば冤罪被害などが起きるのでないかと心配になる。

実は先日、冤罪事件に巻き込まれそうな、世にも恐ろしい体験をした。

地下鉄の満員電車で前の男性のスーツから強烈なタバコの臭いがした。ぼくの苦手なタバコの煙で燻製をしたような猛烈な臭いである。

ぼくは失神しそうになった。

次の駅に着くと、ぼくは泡を喰って隣の車両へ飛び移った。ら、そこは女性専用車両だった。

ぼくは失禁しそうになった。

地下鉄はそのまま出発して、駅と駅の境のトンネルに入った。

川端康成がぼくと同じ体験をするなら、次のように書くだろう。

『駅境の短いトンネルに入ると天国であった。頭の底が白くなった。信号に地下鉄が止まった。向側の座席から娘が立って来たら、ぼくの息子が勃って来て、前の社会の窓を落した。車内の冷めた空気が流れこんだ。息子は社会の窓いっぱいに乗り出して、遠くへ延びるように…』

「駅長さあん、駅長さあん」とぼくの煩悩くんがパクパクと叫ぶ。女性専用車両で、そんな妄想にふけっていたが、そんな場合じゃない。

天国というのは、天国にいる気持ち、つまり生きた心地がしなかった、という意味で、あせっていたのである。

ここで捕まったら、ぼくのエッセイが痴漢の間接証拠になるかもしれないと怖れた。なんせ全裸の女子大生の満員電車なんてエッセイも書いている。

緊張して体の一部分がコチコチにバッキンバッキンに硬くなってしまった。

自分の玉玉が急に100kg以上になって、身動きが取れなくなるような感覚になった。

次の駅に着いた。幸い同じ側のドアが開いた。これで反対側のドアが開いたら、天国いや地獄であった。ぼくは重い玉玉を引きずりながら駆け逃げた。よけいに怪しい人間だ。

＊

赤裸々なエッセイばかりだ。今も全裸で真っ赤になって書いている。レレレでなく裸裸裸のおじさんである。

自分の玉玉が右下などと書いた。玉玉がめりこんだ悶絶した実体験まで告白している。

これくらい体を張った文章を書いている人って世の中にいないだろう。肉体派随筆家なのである。

自己犠牲的な崇高な精神だと自分で自分を褒めたい。鶴の恩返しのツルのようである。虎が飢えていて可哀そうなので、自分を餌に与えたというお釈迦さまの前世の

ようである。
身を削って血をにじませた努力で書いている。本当に刃物で身を削って血をにじませたこともある。
身を粉にして書いている。自分の身が粉々になった。
身から粉が出ていると思ったら、フケであった。
身から粉でなく錆が出ていた。伝家の宝刀も抜かないと、錆だらけである。伝家の宝刀といえば、遺伝子で代々伝わった、ぼくの煩悩くんである。煩悩くんも使わないと錆だらけになる。
粉骨砕身であって、木端微塵じゃない。小学生のときに粉骨砕身をコッパミジンと読み間違えて、こっぱずかしいみじめな思いをしたことがある。
粉骨砕身から牛肉ミンチや牛肉しぐれ煮の缶詰を連想する。牛骨粉とか狂牛病とかあったなあ。
牛の缶詰というと、牛が食べる缶詰をつい思い浮かべる。逆に、犬の缶詰というと、犬肉の缶詰を連想する。赤ちゃん売場というと、乳児を人身売買している闇市場と思ってしまう。
また文章が横にそれてしまった。これは左玉の法則に反して、右玉が下のせいだろう。

*

逆玉つまり、逆『玉の輿』に戻ろう。
玉の輿って、小学生のぼくはコシを、おみこしでなく、腰と勘ちがいしていた。
女性が玉玉のついた腰の上つまり男性の上にまたがるということだと思い込んでいた。小学生らしい微笑ましい勘違いである。
余談であるが、玉の輿の玉は男性の一物でなく、女性の一人である。
玉とは、三代将軍徳川家光の側室で、五代綱吉の生母の桂昌院のことで、その幼名である。
玉の輿の語源は、魚屋の娘のお玉が、家光に見初められて、御輿にかつがれて将軍の嫁入りをしたことという説がある。
家光は、ゲイである。もともと玉より玉玉が好きだったのである。歴史書にあるように、家光は衆道（男色）におぼれて、成人女性に興味を持たなかった。
成人女性が嫌いな家光は、未成年女子は好きだったようで、つまりロリコンである。
玉が大奥に入ったのは十三才である。家光は二十三才年下の玉を可愛がったのである。それで、玉玉よりも玉が好きになったのである。（玉が側室になったのは十九才のとき）
玉に子供を産ませたが、その子が五代将軍綱吉である。
マザコンの綱吉がママ玉に従って、犬を殺した人を殺すという生類憐みの令を出したのである。
玉（桂昌院）は日本の歴史上、大きな影響を与えた。
もっとも玉の輿の語源が桂昌院というのは、俗説である。通説は玉つまり宝石をつけた御輿である。
日本史上最高のシンデレラ、玉の輿が、たまたま玉という名前だったから、こんな俗説が出たのだろう。
桂昌院が建立にかかわった護国寺を玉の輿もうでをする女性がいるらしい。
玉といえば、歴史上の女性でもう一人、有名人が居るが、この玉は玉の輿になりそこねた。
明智玉、つまり、明智光秀の娘である。玉は織田信長のすすめで、細川忠興の正室となった。本能寺の変で逆賊の娘として幽閉された。最後は石田三成に囲まれ、家老に自らを殺させた（キリシタンなので自殺できない）。明智玉とは、別名で細川ガラシャである。
また脱線話で終わりそうだ。逆玉の本文を始める。

*

ぼくには夢がある。（アイ・ハブ・ア・ドリーム）
ぼくの夢、それは…
『白馬に乗った王女様』
いつか白馬に乗った王女様が、ぼくを王子様としておムコに迎えにきてくれると夢見ている。
ぼくってロマンチストだなあ。
何十年も夢見ているから、いつか思考は現実化すると信じ込んでいる。
ぼくは毎晩そんな夢を見ていて、昼間でも白昼夢を見る。同じ夢だとつまんないので、色々とバリエーションを考えている。
ある日の夢では、よく見ると王女様が乗っているのは白馬でなかった。
『白豚に乗った王女様』
乗っているのは、白馬でなく白豚なのである。
次の日の夢では王女様が太って、ただの大女になった。
『白豚に乗った大女様』
白豚も大女様も夢ごとに太ってきた。ボンレスハムにボンレスハムが乗っているみたいだ。
『白豚に乗った白豚様』
おムコに迎えにくるのは、人間でなく白豚であった。
白豚から婚約の誓いのキスを迫られ、押し倒される。
最近の夢は王女様がスリムになって美女である。
『白豚に乗った女王様』
王女様が女王様になった。女王様はピチピチの黒革のボディスーツを着て、手に鞭を持っている。
『白豚と罵り乗る女王様』
四つん這いのぼくを女王様が白豚と罵り、背中に乗って鞭で打つのである。
白豚はこのくらいで止めないと、変態ワールドになる。
『白熊に乗った王女様』
白熊が夢に出てきたのは、行動心理学の『白熊効果』が頭にあったからである。アカデミックな展開になった。
専門用語では、『メンタルコントロールの皮肉過程理

論』と言う。ウェグナーと言う心理学者の実験による。
白熊の映像を見せた後、『白熊のことは考えるな』と言った方が、覚えてというよりも白熊のことが頭から離れなくなったという実験である。
白熊を使ったのは、心理学上の何のシンボルになっていないものだからである。
あなたは、300kgもある巨大な白熊が、自分に向かって牙をむき出しにして、咆哮しながら襲って来ようとしており、その白熊の背中に絶世の美女が王冠をかぶって全裸でまたがっている、ということは考えてはいけない。あなたは絶対に絶対に、全裸の美女の王女様が白熊に乗っている姿を考えてはいけない。
白い熊って変な色の熊だ、変熊だ。変熊って、変態みたいである。
ぼくはしばらく白豚と白熊の王女様の夢を見ていたが、また白馬の王女の夢に戻した。
『白馬にまたがった王女様』
王女様は下品な乗り方なのである。M字型に大股を広げて乗っている。しかも下半身が裸である。
『白馬とまたがあった王女様』
股と股とが合うのである。
『白馬とまぐわった王女様』
王女様は人よりも馬好きの変態なのである。まぐわうは目合うと書き、馬咥うと書かない。
『白布をまたにあてがった王女様』
王女様は生理中なのである。
『白馬に登った王女様』
白馬とは白馬岳である。王女様は登山家なのである。
『白馬鹿に乗った王女様』
王女様の相手は、頭の悪い色白男性である。
『墓場にのたうった王女様』
半分腐ったゾンビの王女様がのたうちながら、ぼくを襲うのである。
『白馬に乗った王女様』
やっと元に戻った…かと思うが、違う。この王女様は競馬好きで、全財産を一レースの一頭の白馬の一点買いに乗ったのである。のるかそるかの性格の王女様なのである。(漢字は、賭け事や儲け話にのるは、乗るだが、のるかそるかは、伸るか反るかである)
『白UMAに乗った王女様』
UMAとはUnidentified Mysterious Animal(未確認動物)の略で、UFO(Unidentified Flying Object未確認飛行物体)、USO(Unidentified Submarine Object未確認潜水物体)の仲間である。ウソでないが、和製英語である。
代表的なUMAがネス湖のネッシーである。バブル期のモテ女の周りにはアッシーとメッシーというUMAが生息していた。

アッシー君の白い車に乗った王女様でない。
UMAでUFOでUSOと言うと、空飛ぶ人喰いイカである。王女様が空飛ぶ人喰いイカに乗って、ぼくを迎えにくるのである。
『白馬の脳になった王女様』
乗った→脳になった。ちょっと苦しい。
脳が馬に突然変異した王女様である。ヒヒーンといななきながら王女様がぼくを追ってくる。
『白い海馬になった王女様』
海馬は脳の一部である。海馬は大脳辺縁系の記憶をつかさどる部分である。
脳細胞の色は、白色(白質)と灰色(灰白質)との部分に分けられる。海馬は白質だから、もともと白いのである。灰色の脳細胞が普通になったのである。
海馬の原語は、hippocampusである。この語を翻訳するときに苦労したのだろう。
hippocampusはタツノオトシゴであるからである。海馬の形がタツノオトシゴそっくりなので、命名された。
タツノオトシゴは竜の落とし子(幼生)のような奇妙な生物である。いくらなんでも脳の部位にタツノオトシゴと直訳する訳にいかなかったのだろう。
タツノオトシゴは英語でsea horseである。それを海の馬と直訳したのである。冗談みたいな本当の話である。解剖学の訳語って少し変だなあ。
hippocampusとはギリシア神話の出てくる上半身が馬で下半身が魚の怪物である。
タツノオトシゴは魚である。
馬面に豚腹の独特の姿であるが、あれはオスが腹に卵を抱えているのである。だから、タツノオトシゴはオスが妊娠すると言われる。
メスの男性器のような輸卵管が、オスの子宮のような育児嚢に挿入してセックスする。オスの育児嚢の中で受精し、卵から稚魚になり、オスから出産するのである。
『白海馬(タツノオトシゴ)に乗った王女様』
王女様は白い巨大なタツノオトシゴに乗っている。
王女様は竜宮城の御姫様なのである。ぼくは竜宮城に着くまでに溺死する。
『白馬になった王女様』
ぼくは白馬に変身した王女様と結婚するのである。
『白馬に乗った王子様』
王女様でなく王子様がぼくを迎えにきてプロポーズする。王子様は同性愛者なのである。
ある日の夢の王子様は、暴れん坊将軍の松平健であった。テレビでは白馬に乗っている。八代将軍になる前の徳川吉宗は王子様である。
『白馬にまたがった王子様』
今度の王子様は先の王女様のようにM字開脚で、下半身裸である。

王子様は馬の後足で股間を蹴られて、玉ころがしている。

『白馬並のまたがあった王子様』

馬並の大きさの白い一物が股から生えた王子様である。

ぼくは心が広くケツの穴の大きい男である。ますますケツの穴が大きい大人物になってしまう。

という冗談を書いているから、同性愛者と誤解される。

『白UMAのまたがあった王子様』

白い空飛ぶ人喰いイカを股に持つ王子様である。僕と同類である。

『白馬に乗った玉子様』

そろそろネタ切れである。

おうじ様でなく、たまご様になった。よく見ると玉子が一個でなくて二個一パックで袋に入っているのである。袋は肌色で縫いしろがある。玉袋つまり玉玉であった。

『白馬に乗った玉玉様』

玉玉の妖怪の王子様が白馬に乗って、ぼくを迎えにきたのである。

玉玉で締めくくったので、終わりにしよう。玉玉に始まり玉玉に終わる。

せっかく夢の話をしたので、実現化する方法を考えよう。

白馬に乗った王女様も夢といっているから非現実的なのである。

夢を目的と変えれば、実現するのである。目的を目標に細分化し、計画にすると、達成するのである。

例えば、次のような感じである。

〈白馬に乗った王女様プロジェクト〉

1　ぼくは総理大臣になる。

2　日本がイギリスへの数兆円の貸付をする。

3　ぼくが訪英して、エリザベス女王が白馬に乗って迎える。

4　そこで、ぼくはエリザベス女王にプロポーズする。

ピキーンと世界が凍りついている間に女王と結婚する。

夢を目的や計画やプロジェクトに呼び方を替えただけで、楽に実現できそうになった。

おそらく一つ目の目標をクリアしたら、後は自動的に達成するだろう。

エリザベス女王が無理なら、アフリカのどこかの女王様を探す。白馬に乗った黒人女王様も芸術的である。

ぼくは博愛主義者なので、人種も性別も年齢も超越して愛するのである。

そうだ、わざわざ海外に行かなくても、日本でも究極の逆玉ができる。

『白馬に乗った内親王様』

愛子様が白馬に乗って、ぼくをおムコに迎えにくるのである。

天皇家に婿養子に入る夢…、いや計画を立てよう。

編集後記

139号から表紙絵が干支の申に変わりました。例年のとおり田寺怜葦様からの年賀状の絵です。この絵の意味する言葉は、田寺様から「三人寄れば文殊の知恵」と伺いました。まんじ誌は同人、維持会員合わせて五十余人います。三人どころではありません。みんなで大いに寄り集まって文殊菩薩を遥かに凌ぐ、素晴らしい知恵を出し合って今年も前進したいと思います。

次回発行の5月は140号記念号です。原稿締切は3月31日です。原稿用紙50枚以内での同人皆様の力作を期待しています。

139号の表紙の色は紀州上質紙の「鶯」にしました。2月発行ですので「梅に鶯」と春の香りを感じていただければと思っています。

お正月、普段考えないことに出くわしました。それは宇宙の大きさです。1光年の距離は約9兆4千6百億㎞。一番遠い星が128億光年とありました。その星までの距離は想像すらできません。その間に何千億という星があって、地球はそのうちの一つです。そのたった一つの小さな星に生きている人間が文明発達の根源の文字を作り、今や神秘そのものの生命の分野にまで近づこうとしています。

我々「まんじ集団」も、文字と言う素晴らしい手段・機能を使って、作品を発表し続けています。今年も我々にとっての珠玉の同人誌を作り続けたいと思います。

皆様のご健康とご健筆を心からお祈り申し上げます。

(鍋)

まんじ第139号

平成28年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045 (544) 5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 047 (346) 2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東ワークス モトヤマ（日東印刷株式会社）
〒154-0016　東京都世田谷区弦巻3-13-18-202

表紙の絵について

「三人寄れば文殊の知恵」

田寺（たでら）怜葦（れい）画

まんじ

No.139

2016.2.1

まんじ第百三十九号　目次

遥かな友に……新井　宏…4
定年チェンジ・ファーマー……古屋富雄…10
秋の七曲（ななまがり）への散歩……横山正義…13
真心（まごころ）……太田精一…24
短歌　行雲流水（四十八）……石黒修身…35
漢詩　潮騒録（八十三）《漢詩の流れ71》……鯨游海（くじらゆうかい）…38
漢詩　汲深録（三）……松井秀人…41
ロボット雑考（その三）……三戸岡道夫（みとおかみちお）…43
関東管領始末記⑳　御舘の乱……千坂精一…62
古い物・遠い夢「織部」いま（茶道史余滴）……忠内正之…71
『時評家　新明正道』（評伝その四）……山本鎭雄…85
性と化粧の物語（四）……鈴木　守…100
「司馬雑感」あれこれ（3）……山田嘉久…108
千家尊福伝（一〇）……村上邦治…115
　貴族院議員になった八〇代出雲国造
殉教（十）……鍋屋次郎…125
明治時代の著述者　渋江保の一生（その四）……山本　勉…143
密室銀行（二十二）……匠　克仁…150
白豚に乗った王女様……匠　克仁…157
編集後記……編集　子…165
表紙絵……田寺怜葦（たでられい）

「遥かな友に」

新井　宏

『まんじ』の同人・鯨游海さんの漢詩サロン「鯨游会」に平成十九年七月から参加している。本来は鯨さんから漢詩を学ぶ会だったようであるが、私が参加した頃から、漢詩勉強会と共に鯨飲会の性格も強くなっていた。

二ヶ月に一回のペースを保っていて、参加してから既に五十回ほどになる。次回は百四十二回というから二十五年近くの歴史がある。

主人公の鯨さんが昨年来、体調を崩して五回ほど欠席したが、その間も間断なく続いているのは、何よりも鯨さんの人柄であろうが、それと共に、幹事の伊藤清功さんのお世話のお蔭である。

伊藤清功さんは、鯨さんの銀行時代の後輩であるが、詩吟にも長じている。なにしろ、美声で、時には会場外まで圧するほどの声量で、鯨さんの「七言絶句」などを即吟する。

伊藤さんのもう一つの趣味は美声を活かしたコーラスである。町田市の男声合唱団「マルベリー」のセカンド・テノールで、有力団員の持ち回りらしいが、公演に誘われた頃は「団長さん」と呼ばれていた。合唱団は平成元年の創立で、団員は四十名～五十名、平均年齢は現在七十歳とかで、有名企業の経営者ＯＢ等も大きな声を張り上げている。

美しい響きの団名「マルベリー」は創立時の指揮者高桑勝氏の名前「桑」に因むというが、語源は英語のようで、スウェーデン語、フランス語、スペイン語も共通である。

濃紫色の桑の実はストロベリー（藁ベリー：いちご）に似て、食糧難で甘い物のなかった幼い頃よく摘まんで食べた。

定期公演会はいつも町田市民ホールで行われているが、九百ほどの席がほとんどいっぱいになる盛況である。毎年、耳慣れない新しい曲にも挑戦しているが、やはり安心して聞けるのは、「フォレスタ風」のレパートリー曲、古典的な合唱曲や唱歌、学生歌、懐かしのメロディ等である。

アンコール曲にしばしば出てくるのが「遥かな友に」である。早稲田大学グリークラブを指導した磯部俶の作詞作曲というが、各大学のグリークラブの定番曲で、静かで緩やかな曲想、歌詞もそれほど特別には思えない。しかし、不思議に魅了される。

1　しずかな夜ふけに　いつもいつも
　思い出すのは　おまえのこと
　おやすみやすらかに　たどれ夢路
　おやすみたのしく　今宵もまた
2　あかるい星の夜は　はるかな空に
　（繰り返し）
3　さびしい雪の夜は　いろりのはたで
　（繰り返し）

歌詞の全体的な印象は、去りゆきし恋人を思いながら「おまえ」と呼びかけているように思える。しかし「安らかに」とあるので若くして逝った友かも知れない。ところが「おやすみ楽しく」ともあるので、あるいは郷里の友、病める友、障害のある友のようでもある。いずれにしてもそこには、青春の「懐かしさ」が漂っている。

合唱曲の中で似たような印象を持つのが、シューマンの「流浪の民」である。伴奏のピアノ曲が単独でも演奏されるほどメロディが華麗であり、古風な訳詩も「懐かしさ」を漂わせる。しかもこの曲は、わが青春と共にあった。

前号の「月は上りぬ」でも、母校都立小山台高校のことを書いた。入学当初から新聞部の主力メンバーとして、放課後は校舎中央部にある八角塔の下の部室に詰めて黒板新聞の記事を書いていた。

部室の斜め下には音楽室があり、いつも放課後、女生徒が「エリーゼのために」を練習していた。練習とはいえ、生の音楽は心地よいものであった。

そうこうしている内に、合唱コンクールでも近づいたのであろうか、「流浪の民」が始まった。

ピアノが響く。混声合唱が天使の声に聞こえる。それをまたピアノが昂揚する。それ以来合唱曲といえば懐かしさに満ちた「流浪の民」となった。曲想が大きく異なる無伴奏の「遥かな友に」ではあるが、不思議なことに懐かしさは共通する。

「遥かな友に」についてインターネットで調べてみる。

作詞作曲の磯部俶は大正六年、東京大森生まれの合唱指導者・作曲家で十五年間早稲田大学グリークラブの専

それは昭和二十九年秋、私が小山台高校二年生の時であった。卒業した荏原第四中学校の五期生であったので、初めての同窓会準備の実行部隊として、一学年下の後輩達と共に走り回っていた。その中に八潮高校に通う川上初美さんもいた。

記録を見ると同窓会は十一月中頃に行われている。おそらくその反省会の席であろうか、川上初美さんから八潮高校の文化祭に誘われたのである。八潮高校は府立第八高等女学校の後身で、私の通っていた小山台高校（府立第八中学校）とは何かと「対」の関係にあった。絶好のチャンスと大喜びであった。

ところが、その前夜の反省会で、先輩達と焼酎の梅割りをガブ飲みして、酷い二日酔いとなってしまった。先輩と言ってもほとんどが二十歳前で、誰もまともな酒の飲み方を知らなかった。

さすがに、頭痛と吐き気で苦しかった。朝、家を出たが、よほど途中で引き返そうかと思ったほどで、文化祭もふらふらしながら見て廻わり、川上初美さんと会えたのかどうかさえあまり記憶がない。ただ、体育館か講堂の垂れ幕にNHK合唱コンクールで最優秀賞を受賞したと大書されていた。そして薄暗い会場に入り、腰掛けていると、多少二日酔いもおさまってきた。

この年のNHK合唱コンクールのラジオ放送は、十一月中旬に行われたので、文化祭が合唱部の凱旋公演だったに違いない。当然、課題曲、自由曲の他に、いわばアンコール曲も演奏されたであろう。「遥かな友に」が入っていたとしても全く不思議では無い。

もしかしたら小山台高校の「流浪の民」も、NHK合唱コンクールに向けて準備していたのかもしれない。だからこそ、「遥かな友に」を聞いて「流浪の民」と共通する不思議な懐かしさを感じたのであろう。

その後、川上初美さんとは三十年間以上、全く没交渉であったが、昭和六十三年になって、荏原第四中学校創立四十年周年の同窓会を開きたいとの学校側の要請で、昔の関係者が招集されたのが縁となり、年賀状の交換が始まった。

いつもご主人と連名の美しい賀状の余白に、小さな文字で五～八行びっしりと近況を伝えてくる。ほとんど途切れる年もなく、昨年の賀状まで二十五年間ほど続いていた。

年賀状だけの交流が続いていた中で、東日本大震災の起きた平成二十三年の三月二十六日、わが母校の荏原第四中学校が統廃合で無くなってしまうというので、最後の同窓会が開催された。

その時、初期の卒業生グループの中心として、一学年下の六期生が主体となって会の設営をしてくれた。

創成期の同窓会から何かと深く関わり合っていた私ではあったが、地元を離れて既に四十年も経っていた。幹事会に出席すれば、最年長組となるかも知れない。やはり適当な理由を付けて欠席した方が無難である。しかし、最小限の協力はしなければなるまい。

そこで、賀状などを頼りに個人的な交友関係をたどり、連鎖メールチェーン（幸福の手紙方式）によって同期生に出席を勧誘することにした。

これは、手数もかからずなかなか効率的であった。この種の会は、誰が出席するか判らないと、つい気後れするものであるが、知人からのチェーンメールなら様子が分かり、出席してみる気になる。その結果、意外や意外、直近の卒業年次を除いて、最も多くの参加者を集めることが出来た。

会場には、多数集まった五期生の他に、一学年下の六期生グループも群れを作っていた。しかし、そこには川上初美さんの姿はなかった。最終同窓会の総務役ともいうべき遠藤京子さんに訊ねると、川上初美さんは、数年前から筋ジストロフィー症を病み、もう首が動かず、ほぼ寝たきりの生活だという。

しかし、まさかそんなはずはあるまいと思った。

任指揮者を務めた。ボニージャックスの育て親でもあり、元学習院長の磯部忠正の弟だという。

曲が作られたのは昭和二十六年、早稲田大学グリークラブが神奈川県津久井渓谷・夫婦園で夏合宿をしていた夜、新入部員が枕投げなど大さわぎをしてなかなか寝ないので、「何か静かな曲を作ってください」という四年生部員の依頼によって、その場で即興的に書かれ、四人のパートリーダーによって歌われたと伝えられている。この頃、早稲田のグリークラブは分裂騒ぎで荒れていたことも関係していたのかも知れない。

夫婦園は、私の住む相模原市の緑区青根にある。

ついでにインターネットのユーチューブで「遥かな友に」を聴いて見る。

そこには各大学グリークラブに混じって、都立八潮高校合唱部が登場する。そういえば当時の八潮高校はNHK合唱コンクール常連の最優秀校であった。昭和二十七年から三十一年までの五年間に四回も優勝している。

そこで閃いた。もしかしたら、この「遥かな友に」を八潮高校の文化祭で聞いていたのではないかと。きっとそうだ。そうに決まっている。

そして昨年、筋ジストロフィーという難病で逝った川上初美さんのことを思い出した。

そう思って、その年（平成二十三年）の年賀状を見ると「……荏原四中の先生方への賀状も数学の久保田先生と体操の藤田先生だけとなり淋しいかぎりです。新井宏先輩もどうか今年もお元気で貴重なご研究を進められてくださいね。勉強させていただいています……」と例年と特に変わった様子を見せていない。

その前年（平成二十二年）を見ても「……昨年は白内障の手術をしてやっと世間が広くなったような気がしましたが、そろそろ好きな読書習慣をとり戻さないとますます世相にうとくなりそうです。今年もご活躍のほどをお祈りしております……」とある。既に筋ジストロフィーの症状が進んでいたはずなのに、不安な表情を全く見せていない。

いやそればかりではない。同窓会の翌年（平成二十四年）の賀状にも、「……昨年の四中の同窓会に出席した石井敏夫さんが、新井先輩、とてもサッソウとしていたと電話を下さりうれしく思いました……」とあり、例年と何も変わらない。石井敏夫さんは小山台高校の後輩でもあり、既にリタイアーしていたが、テレビ業界ではかなり知られた人物である。

ついでに同窓会の翌々年（平成二十五年）の年賀状も見ると、「……新井先輩を見習って何か自分でも出来そうなテーマを見付けられたらと思いながら下らない三文シナリオを持ち込んで脚本家の先生に笑われています……」と、ここでも病気のことには何も触れていない。

当方からの年賀状と言えば、いつも不特定の友達宛に、同一文で近況を書いて送るだけのものである。確かに「近況」にしては詳しい内容であるが、川上初美さん宛に、特に追記した記憶もない。それなのに、いつも丁寧に付き合ってくれていた。そして気付いた。

筋ジストロフィー症とは、未だ治療法が確立されていない難病で、進行性の遺伝性筋肉萎縮によって、初期にはつまずきやすくなり、やがて歩行困難、更には多臓器で障害が起こると言う。川上初美さんの場合の経過は知らないが、おそらく、かなり前から病気には気付いていたのではなかろうか。当然、社会生活は大きく制約されたであろう。活動的であった彼女にとって外界との遮断は、耐えがたい苦痛であったに違いない。そのため、私の賀状でさえも、彼女にとって「小さな窓」であり情報源となっていたのではないか。それを利用して友人達との交流をしていたのではないか。それにしても、衰え行く身体と向きあうことがどんなに不安であるか、私の今の歳になると判る。

年賀状をもっと遡って読んでみる。いつも明るく便りをくれた川上初美さんでも、その中に、筋ジストロフィーに気付いた頃のことが現れているかもしれない。

そう思って遡って見ると、平成十七年の賀状には「……この一年ほど民族・宗教について考えさせられた年はありません。結局は自分の生きる道を見誤らず生きるしかないのでしょうが……」とあり、平成十九年にも「着々と偉大な業績を残されていらっしゃる新井先輩をとても誇りに思っています。そろそろ店じまいを考えている自分が情けないです」とある。その頃から症状が現れていたのにちがいない。

それにしても、世の中には、病気になるとその不安を軽減するため、やたらと自分の病気のことを語る人が多いが、他人に不安を転嫁したところで、自分の不安が軽くなるはずはない。いやむしろ不安を増殖するのが関の山である。それに比べて、川上初美さんが何とすばらしかったことか。

彼女の最後の年賀状は昨年（平成二十六年）のものである。いつものようにご主人と連名の賀状に、ご主人の字で「家内は手の痺れでペンが持てませんが頑張っております」と書かれていた。

そしてその年の年末には、ご主人から「……初美が一月二日に七十五歳にて永眠しました……」との悲しい連絡が届いた。けなげな年賀状を頂戴した直後には、もう既に「遥か空に」逝っていたわけである。

実は、川上初美さんについては、高校生の頃の印象しか残っていない。色白で清楚、快活、理知的な佳人であった。七十歳過ぎても「新井先輩」などと言う童女でもあった。

それから六十年間、お互い、高校生の頃の先輩・後輩のままの交友だった。だから、本稿も旧姓の川上初美さんで通したが、いつも連名で賀状を送って下さったご主人は伊藤英也さんという。彼女に相応しい心優しい人柄だったに違いない。

どうやら私の人生、中学校の友達でも、高校の友達でも、大学の友達でも、職場の友達でも、よいヤツから先に逝く。女性も例外でなく佳人から逝くらしい。

あかるい星の夜は　はるかな空に
思い出すのは　おまえのこと
おやすみやすらかに　たどれ夢路
おやすみたのしく　今宵もまた

来年のマルベリー合唱団の公演でもまた、アンコールにこの無伴奏男声四部合唱「遥かな友に」が唱われるであろう。その時は、我が青春時代を思い出しながら川上初美さんを思って聞きたい。

定年チェンジ・ファーマー

古屋富雄

7・7%、第1種兼業農家13・8%、第2種兼業農家58・5%です。専業農家率は30%に満たない状況であり、さらに*自給的農家897千戸を加えると構成比率は205を切ってしまいます。

言い換えると805以上が農業以外の何らかの職業を持った兼業農家といえます。

そこで、自給的農家を含めた兼業農家の継続・育成を図りつつ、安定した担い手の確保を目指す兼業農家の新たなライフスタイルを提案します。

農業の継承を定年後（55歳から60歳）と家族間で予め決めておき、親から子へ、子から孫へと農業を継承させるビジョンで、その名称を「定年チェンジ・ファーマー」とします。

定年までは会社などに勤務し、定年後の安定した経済基盤を厚生年金や共済年金、退職金などで準備することができるサラリーマン生活を送ります。そして、農業の

「定年帰農者」という言葉は、農業関係者の間ではよく使われています。

その意味は、農村出身者が定年後に故郷に戻り農業に従事する。または、出身地を問わず定年退職者が農村に移住し、農業に従事するということです。

南足柄市では、2008年10月1日に施行した「南足柄市新規就農基準」により自立できる農家の育成を行っています。さらに、2009年9月1日には、定年後農業がしたい人などを対象にした「市民農業者制度」を施行させ、農家以外の多様な担い手の確保に努めています。

農家は、専業農家と兼業農家に大別され、10年農林業センサスの専兼業別農家数*（販売農家）によると、販売農家総数1、632千戸のうち専業農家452千戸、第1種兼業農家225千戸、第2種兼業農家955千戸が報告されています。それらの構成比率は専業農家2

仮に、55歳で会社を退職しても、この年金に加入することにより、国民年金に上乗せした年金の受給により、老後の生活費の担保としても効果な手段と考えます。

また、奥様が農業従事者の場合は、一緒に加入することができ、「老後の妻へのプレゼント」にもなる年金と考えます。

もちろん、兼農サラリーマンが、南足柄市新規就農基準（1、000㎡以上の農地の借り受け）により農家として認められ、かつ、その農業従事の実績が農業委員会などに認められれば、多いにこの年金が活用できるものと考えます。

「定年チェンジ・ファーマー」は、「定年帰農者」のように単に定年後、農業をするという漠然的な就農形態とは違い、親から子へ、子から孫へと継承される就農形態であり、自給的農家を含めた兼業農家の継続・育成に寄与できるものと考えます。シルバー世代が日本の農業の一翼を担う「定年チェンジ・ファーマー」こそ、発想の転換であり、大きな可能性を秘めた農業施策の試行ともいえます。

「定年チェンジ・ファーマー」が農業関係者に広まることを期待します。

継承を定年後と予め決めた人生設計を意識することにより、定年後に向けた農業技術の習得や地域のコミュニティーとの関わり方などを積極的に学ぶ姿勢が醸成されると考えます。

例えば、休日には、トラクターに乗り、草刈り機を使うという農業に従事する生活を送る中で、地域の風習や祭りなどの行事にも自然と関心を持つようになるでしょう。

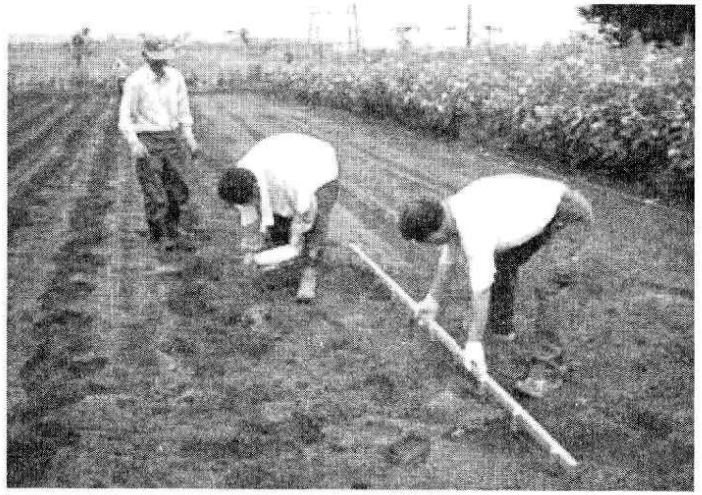
このように定年後を見据えた生活習慣がスムーズな農業継承に繋がると考えます。

また、60歳では、農業に従事するには、年齢的に遅いと考える人も少なくありません。このような人は、会社を退職し、国民年金の*第1号被保険者になれば、農業者年金に加入することができます。

農業者年金は、厚生年金や共済年金などのような*賦課方式ではなく、*積立方式のため、景気の変動などに影響されるリスクはありますが、自ら積み立てた保険料は、将来の自分の年金給付に使われ、加入者や受給者の数に左右されない安定した財源が確保されたシステムと考えます。

そして、その保険料は、月額2、000円～67、000円を上限として、契約することができ、その年額の保険料の全額が、所得税や住民税の社会保険料控除になります。

＊第1号被保険者とは、農家などの自営業や学生、無職の人などが加入する国民年金だけの加入者のこと。
＊賦課方式とは、働く現役時代の人が払い込んだお金を現在の高齢者に支給する方式のこと。
＊積立方式とは、若い現役時代に払い込んだお金を積み立て、老後にお金を受け取る方式のこと。
＊販売農家とは、経営耕地面積が30ａ以上または農産物販売金額が50万円以上の農家
＊自給的農家とは、経営耕地面積が30ａ未満かつ農産物販売金額が50万円未満の農家



頑張る中高年

秋の七曲（ななまがり）への散歩

横山正義

一、七曲の池

七曲とは静岡県菊川市にある、貯水池の名前です。七曲という場所に池が作られたので、皆さんが七曲の池と呼んでいます。

内田『名所・人物』百選（郷土を愛するうちだっ子はぐくむ協議会。参照）誌によれば二万四千立方メートルの水を蓄え、百六十七ヘクタールの田畑に水を送っている、とある。

東名掛川インターチェンジの出口に人目をひく、大きな七曲池の案内掲示板があり、日本各地から、ヘラブナ、バス釣りのメッカとして名が知れています。

私は秋の晴れ渡った日、二キロほどの道を、秋の七草狩りに行ってみようと、思い立ちました。オバナ、クズ、ナデシコ、朝顔、フジバカマ、萩、オミナエシなどを追つていきました。

二、平尾八幡宮と柿木神社、大蔵寺

まず八幡神社にお参りをし、中伊豆狩野城にある、柿木神社と同じ柿木神社があったという故地に拝礼し、神社の守護寺・大蔵寺の十一面観音を拝しました。

道は二十メートルほどの高さの尾根の間、蛇のような山間地の細い、田のなかの道を進みます。

七曲の池に行くには、東平尾と西平尾どちらからも行くことができ、どちらも蛇のような、地形で、尾のところに池があるのです。

三、慈恩寺

東平尾に大蔵寺を創始した粟田信麿の伝承があり、西平尾には石田三成の女子たえ姫（多恵姫か？）が建立したとされる、まぼろしの尼寺慈恩寺の伝承があり、まさ

に夫婦龍なのです。
中国の古代神話に人類の始祖となった、人頭蛇尾の聖夫婦の『伏羲と女媧』の話があり、太古の大洪水にただふたり生き残った兄妹が、やがて夫婦になって、始祖となったというお話があります。

慈恩寺の物語
静岡県菊川市
内田「名所・人物」百選（郷土を愛するうちだっ子はぐくみ協議会。参照）

「じおんじ」という地名に残るお姫様のお話
枯木ヶ谷の奥に「じおんじ」という池があります。枯木ヶ谷という地名は千三百年前、天武天皇の時代にすでにあったといいます。関が原の戦いで、徳川家康に敗れた西軍の総大将石田三成の娘「たえ姫」は何人かのお供とともにこの地に落ち延びてきて、今の「じおんじ」池の奥の小高いところに、粗末で小さな小屋を立て、戦場で亡くなった人達の供養をしていました。尼さんの茶を立てる金の茶釜の音が枯れ木ヶ谷じゅうになり響いたという。尼さんは旅にたったきり、帰ってくることはなかった。どこに行ったのか。
考えられることは 徳川家康の十男徳川頼宣が連れて行ったのではなかろうか。

私は考えてみました。仮説です。
同じ平尾村の中に、遠江の領主となり、のちに紀州藩藩主となった徳川頼宣の屋敷があり、時には、巡行のとき、徳川頼宣が立ち寄ることもあったのでしょう。
徳川頼宣は石田三成の娘の話を聞き、あわれみ、紀州に連れて行き、紀州の町医者・佐藤三益の妻として、頼宣が三十扶持を送ったということで、話が繋がります。
紀州屋敷跡と徳川頼宣お手植えの「なごみ」の木といわれる、梛（なぎ）の巨木が現在、平尾八幡宮に残こされています。
どうして、当地内田に「たえ姫」が来たのか。
近江の国は大陸と交流のある国で、それを証明する文化財も沢山あります。
内田は以前「からこ」郷と呼ばれ大陸の文化があったことに、起因するのではないか。
現在、近江には湖東三山百済寺、湖南石塔寺、立命館大学敷地内古代溶鉱炉跡、大津京敷地跡、百穴古墳、三井寺、三井寺守護神新羅明神神社、朝鮮人街道、鬼室神社、渡来人歴史館などがあり、先祖は渡来人といわれる。そして当地には西暦八五三年（仁寿三年）創立の滋賀県大津市延暦寺三世座主円仁創建の応声教院があります。その他に大津市三井寺の荘園がありました。
「たえ姫」が佐和山城を家人と脱出するときは、兄弟の次男八郎と伴に出たが大勢で目立ち、徳川方の西軍狩

りを恐れて、東西に別れてにげたのではないだろうか。
どうして「慈恩寺」という寺名をなずけたか。それは佐和山城が井伊直政に攻められ、逃げて内田まで来る途中、五個庄と亀山にある寺名です。
そして中国の「慈恩寺」の古事、高宋が母文徳皇后の慈恩に報いるために創建したのに倣ったのはないか。
たえ姫の自決した母への慈恩を偲ぶ、気持ちからでしょう。

内田と徳川頼宣の関係を調べます。
徳川家康は慶長十二（一六〇七）年に駿府城に入城し、二年後慶長十四（一六〇九）年に十男の徳川頼宣が駿河・遠江五十万石の大名として入部する。
徳川家康元和二（一六一六）年四月死亡。
徳川頼宣は元和五（一六一九）年七月に紀伊和歌山に五十五万石で転封し、御三家の祖となりました。

石田三成家の系図
『稿本石田三成・渡辺博士著』『石田三成のすべて・安藤英男』参照
石田三成は慶長五年（一六〇〇）九月十五日、大垣城を出て、関が原で徳川家康率いる東軍と戦い、敗走する。
同月十八日井伊直政により、攻められ佐和山城陥り、父正継、兄正澄、三成室自決。

三成は従四位下治部少輔・豊臣氏奉行近江佐和山城主三十万石家紋寄り九曜　旗印大一台大万大吉　慶長五年十月一日京六条川原にて絞首刑となる。享年四十一歳

室
宇多頼忠の息女慶長五年九月十八日佐和山城中で自決。

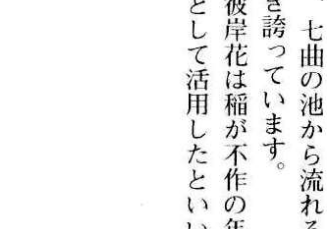
父、石田正継
従五位下隠岐守近江の内で三万石。慶長五年九月十八日佐和山城中で自決。

兄正澄
従五位の下木工頭・堺町奉行近江河内二万五千石慶長五年九月十八日佐和山城中で自決。

重家
長男・隼人正、関が原役の時に大阪城の秀頼に伺候、敗戦後に京都妙心寺寿聖院に入り済院宗享禅師として貞享三年閏三月八日死去

八郎
次男八郎右衛門　佐和山落城後に家人の出来蔵、三蔵の両名に守られて備中国小田郡吉田村に帰農　庄屋相勤石井氏初代。

石田三成家系図



参考

＊慈恩寺・滋賀県神崎郡五個荘清水鼻二七二　東海道線能登川駅　正平年間の開創。領主佐々木六角判官氏頼が母菩提のため創立。

＊慈恩寺・三重県亀山にあり、廃寺となり、寺名を変更。

＊慈恩寺・中国唐代の長安に建てられた貞観二十二年（六四八）当時、皇太子であった、高宗がその母文徳皇后の慈恩に報いるために創建したもの。

さらに進めば、七曲の池から流れる稲ヶ部川の土手には、彼岸花が咲き誇っています。

いにしえに、彼岸花は稲が不作の年、球根を灰汁抜きし、炭水化物源として活用したといい、米作と一緒に南洋から伝わったということです。

エメラルド色の池が見えると池の東に駒鼻取地蔵大菩薩という祠があります。

四、駒鼻取地蔵大菩薩

静岡県菊川市

内田「名所・人物」百選（郷土を愛するうちだっ子はぐくみ協議会参照）

駒鼻取地蔵は、七曲池の東の高台に御祭りされています。今から約千二百年前に龍雲という、とても偉いお坊さまがお祭りしたのが始まりと伝えられています。この地蔵様の正式な名前は駒鼻取地蔵大菩薩といいます。

今は七曲池の底に沈んでしまいましたが、その昔、内田山という低い丘があり、竜雲が駒形庵というお堂を建て、お地蔵様をお祭りし人々の幸と平和をお祈りしながら、人々は暮らしていました。

このお地蔵様は駒の鼻をつかみ、鼻を取るように引つ張つて畠や田を耕しましたので、駒鼻取地蔵と名づけられて、特に農業や病気のお守りとして人々の信仰を集めました、とある。

背景と解説

竜雲和尚が地蔵を創建したというから、最初は雨乞いの地蔵であったのでしょう。竜雲和尚とは誰であったのでしょう。それは同じ集落のなかに住む、霊験あらたかな良信和尚が想像されます。

そして年月を経ると、農民が困窮した時に助けてくれるお地蔵菩薩に変貌したのでしょう。

参考文献によれば、その昔、日照りが続づき、不作が予想され、田の水に困った時、人々はお地蔵様に願をかけたのでした。お地蔵様は願を掛けた人が過去に、お地蔵様を信仰していたか、冥界で良く調べ、積善の人であれば、河童を呼び、馬を池の中に引っ張り込ませ、窒息死させると、「けがれ」を、竜神が怒り、龍雲が起き、雨が降ってくるというのです。

地蔵が村はずれにあるのは、亀頭の風貌で、男根であり、ご利益は他所からの悪霊を防ぐ役目があるのです。

地蔵菩薩の役目は閻魔王と伴に同じ、冥界で「死者の生前の行為から賞罰を与える神仏」なのです。

参考に文献より地蔵菩薩について

参考一、『山島民譚集』「河童駒引」柳田國男著（甲寅業書刊行所）

牛馬ノ首ヲ水ノ神ニ具供疎ヘタル上古ノ儀式ヲ水ノ神ニ捧グル風ハ、雨乞ノ祈祷トシテハ永ク存シタリキ。

参考二、

『山島民譚集』「河童駒引」柳田國男著（甲寅業書刊行所）

「水神」

水神ト河童トハ假ニ、一歩ヲ退キテ最初ヨリ別物ナリトスルモ、少ナクトモ牛馬ノ災ヲ避クル為ニ水神ニ祈祷スルノ風習ノ広ク行ハレシ事ノミハ事実ナリ。毎年春ノ初又は夏ノ終ナドニ、牛馬ヲ引キテ川ニ入レ又は川原に於テ一日遊場バシムルコトハ、其一年中ノ災ヲ攘フ為ナリト信ゼラレ、農家ハ厳重ニ此行事を勤メタリ。

参考三

『今昔物語』巻第十七

「陸奥国女人依地蔵助得活語第二十九」

此ノ尼不出家ザリケル時、形チ美麗ニシテ心柔和也ケリ。此ノ女身ニ病ヲ受テ、日来悩ミ煩テ遂ニ死ヌ。冥途ニ行テ、閻魔庁に至る。

「地蔵菩薩来リ給ヘリ」

「我レハ此レ三途の苦難救フ地蔵菩薩ナリ」

地蔵菩薩

「今既ニ被召タリト云ヘドモ、速ニ返シ遣シテ、弥ヨ善根ヲ令修ムト思フ。如何に」ト。

閻魔王答テ宣ハク、

「只仰セノ旨ニ可随シ」

地蔵菩薩

「極楽ノ道ノシルベハ我身ナル心ヒトツガナホキナリケリ」

女は生き返りました。

参考四

『柳田國男集第二十七巻水引地蔵』

薩州鹿児島の西郊江月門と云ふ処の農夫、一日田を耕すに牛労れて鞭うてども行かず、日も夕に傾かんとす、素より村長の遺責急なれば甚憂ひ苦しんだ。時に一人の小僧忽然として来り牛の鼻を取り之を牽けば、進むこと常に倍し容易く数畝の田を耕し終った。寺の名を問へども荒爾として答へずに去る。家に帰って後日頃信心する地蔵を拝する御脛泥によごれて居た云々。今の西田村茶園迫にある鼻取地蔵堂は即ちこの地蔵である。

参考五、

『雨乞い風俗の研究』高谷重夫　法政大学出版局

雨乞い儀礼の諸相

『名杖探草』（暁隣蟻士著、安永七年序）より

滝の肩に龍穴あり。その深きこと人是を計るに知れず、土民雨を祈るに白馬の首を切って龍穴を穢すに忽大雨すといへり。滝は竜神の住みかであったのです。

参考六、

『出羽の国秋田領風俗問状答書』

羽後仙北郡花館村の龍官明神の水の神で、昔、神体は石の地蔵であった。これを土地では雨地蔵もしくわ雨乞い地蔵と唱えて、旱のときは綱で縛って洪福寺淵に沈めておくと雨がふるという。

参考七

柳田國男翁の『遠野物語』（増補版、一五二ページ）

岩手県の遠野地方では、滝壺に馬の骨等を投げ込んで、汚れで雨神さまを誘う雨乞い法が行われていたという簡単な記事がある。

五、墓地

池のほとりの西側を進むと、山の尾根から東に、龍の指が出たように、池の中に突き出て、この道が七曲りです。駒の死、水による人間の生、まさに生死です。紺碧の池面に、うるしの木が二つ三つ、赤く色ずいた紅葉が写っています。

道は九十九折りに進み、坂道を尾根まで進むと、池に注ぎ込むV字谷となり、尾根の上に到達すると、旧平尾村から旧森村との境で、広い墓地になり異界になります。

ここから東を見ると、雄大な富士が見え、東に小笠山に連なる山々が南北に屏のように立ちはだかります。夜明け前に来ると、北に北斗七星が鮮やかです。

六、北斗七星

平成二十四年、私は死した母を病院から搬送して、家に搬入しました。翌日、私がなんだか早く目がさめたので、家の外に出ました。まだ薄暗く、中秋のこれ以上澄み切った空は、みたことがないほど、すっきり夜空に光輝いていたのは北斗七星でした。

北斗七星は中国では人の生死と禍福を司る神様なのです。

＊七という数字の謎

女性が妊娠して、子供が生まれる日数は二十八×十、プラスマイナスで、排卵が二十八日で七の倍数です。鶏、ネズミ、猫等は二十一日、ダチョウは二十八日で生まれ、やはり七の倍数です。

＊暦は七進法で、人々は死の遺伝子も七の倍数日の上にあると、想像したのでしょう。そして死して

初	七日	秦広王	不動明王
二	七日	楚江王	釈迦如来
三	七日	宋帝王	文殊菩薩
四	七日	五官王	普賢菩薩
五	七日	閻魔王	地蔵菩薩
六	七日	変成王	弥勒菩薩
七	七日	太山王	薬師如来

と続き七の世界です。

＊七趣

衆生が死後に赴くところ。地獄・餓鬼・畜生・人・神仙・天・阿修羅北斗七曲はまさに人々にとって生死の狭間なのです。七曲までが水の湧き出る生の世界、尾根に上がれば死の世界なのです。

＊七逆

父を殺す、母を殺す、阿羅漢を殺す、衆僧の仏道修行を妨げる、僧に傷害を加える、和尚を殺す、阿闍梨を殺す。

＊七殺害死

最初に参拝した柿木神社のふるさと狩野城の落城は、北条早雲こと伊勢新九郎長氏に猛攻を受けることによるものでした（延徳三年・一四九一）。里の人々の伝承は次のとおりです。

城将は自刃する者、殿淵で自殺する者など全滅してしまいました。残されたのは七名の婦女子です。柿木神社に一枚の鏡を奉納し無事を祈り逃走しました。里人は財宝を奪うため、残された女子を皆殺しにしてしまいました。婦女子の怨念に里人は慄いた、と伝えられています。死の世界です。

＊七騎落ち

狩野城城主狩野茂光が支持した源頼朝が、治承四年（一一八〇）八月二十二日、石橋山の戦いで、惨敗し、土

まんじ

No.140
記念号

2016.5.1

まんじ第百四十号　目次

妖　星……三戸岡道夫……4
新八礼讃……千坂精一……43
「古事記」天皇崩御は一次史料か……新井宏……59
サイバー戦争進行中……田寺怜葦……75
「農業、農村そして地方の応援ソング」……古屋富雄……80
古い物・遠い夢……忠内正之……84
焦土の中から……太田精一……97
その時代の歌人たち……石黒修身……116
君なんぞ高歌・沈吟せざるや……鯨游海……120
漢　詩　汲深録（四）……松井秀人……129
萌　芽……横山正義……131
ヨーロッパ化粧史の概要……鈴木守……136
「司馬雑感（四十）」司馬遼太郎と戦車……山田嘉久……148
放火魔の心裏……堀内永人……159
千家尊福伝（一一）……村上邦治……177
　始祖天穂日命に助けられた埼玉県知事
『時評家　新明正道』（評伝その五）……山本鎭雄……195
遠州森町……鍋屋次郎……216
明治時代の著述者　渋江保の一生（その五）……山本勉……232
密室銀行（あらすじ）……匠克仁……237
編集後記……編集子……252
表紙　絵……田寺怜葦

妖星

三戸岡道夫

（一）大悪人

時は永禄十三年（一五七〇）の正月、織田信長の岐阜城で年賀の集りがあった。この時の織田信長はすでに京へ入り、半ば天下を手に入れたも同然であったから、あまたの武将が陸続と集った。

松永久秀もすでに二年前から、やむをえず信長に服従していたから、当然といおうか、仕方なくといおうか、祝賀の席に参上していた。

その席上であった。突然、信長が大勢の武将を前にして、

「徳川殿、徳川殿……」

と、徳川家康に呼びかけたのである。家康は何事ならんと、

「はっ、なにか……」

と顔をむけると、信長は、近くに座っている松永久秀を指さして、

「この爺はな、天下の大悪人でござるよ」

と久秀を紹介したのである。

三河と遠州を統治する徳川家康は、信長とは同盟者の関係にあり、信長の家臣ではない。そのため久秀と面識のない家康へそう紹介したのであろうが、しかし最初の紹介の言葉が『大悪人』では、穏当とはいい難い。しかし信長のことであるから、なにか狙いがあるのであろう。

爺といわれた久秀は、この時六十一歳。しかしまだ野心満々の久秀は、自分がそれほどの老人とは思っていなかった。

久秀を指さした信長の右手は、久秀の心臓を刺すようにまっすぐに突き出され、久秀を見る両眼は射るような鋭さで、それは一瞬、信長と久秀との白刃での対決を思わせた。しかし、

（天下の大悪人でござるよ）

と言い終った信長の顔は、すぐ、またいつもの表情に戻っていた。

（ふん、なにが大悪人だ。そういう自分こそ、もっと大悪人じゃないか）

久秀は内心ではそう叫んだが、しかしそんな気配いは毛ほども見せず、

にやり

と不敵な笑みを口許に浮かべただけで、若い信長と家康の顔を等分に眺めていた。この時の信長は三十七歳、家康は二十九歳、久秀から見ればほんの若僧にすぎず、

（ふん、こんな若僧に何がわかるものか）

と、家康をじろりと一瞥した。

しかし家康の方は信長から呼びかけられているのだから、黙っているわけにもいかず、

「…と申しますと、どのような悪事を仕でかしましたので……」

と、信長の次の発言を促す形となった。

畿内におけるこれまでの松永久秀の悪事の数々は有名である。たとえ遠州という遠隔地にいるとはいえ、家康が知らない筈はない。だがその久秀の悪事を、信長はことさらに大勢の武将の前で言いたがっているのだと察した家康は、

（どのような悪事を…？）

と、如才なく、とぼけて答えてみせたのである。

「では教えてつかわそう」

信長はまるで自分の手柄話でもするように語り出した。信長の話す狙いは、家康へ話すという口実のもとに、大勢の前で、『お前は大悪人だ』ということを、久秀本人に対して言うことにあるのは、明々白々だった。

だから信長はいたぶるような視線を久秀の方にちらちら送りながら、

「まず第一の大悪事は、自分の主家である三好長慶を謀略で殺害し、主家を乗っ取ったことだ」

と断定的に言った。だが久秀はそっぽを向いたまま、知らぬ顔をしていた。

「大悪事の二つめは、将軍を攻め殺したことだ。将軍を討ち奉ること以上の大悪事があるであろうか」

信長はよほど久秀が大悪人であることを、並いる武将の頭に印象づけたいらしい。信長の、大悪人、大悪人という連呼に、久秀は、

「うぐっ……」

と泡を吹くような声を出しかけたが、すぐ、

（ここで怒ったら負けだ）

と怒りを押えて、いつもの古沼のような顔に戻った。

「三つめの大悪事は、なんと、奈良の東大寺の大仏殿を焼き払ったことだ。これこそ神仏を恐れぬ大悪人と言わねばならぬ」

言い終ると、久秀や武将たちの反応を見るように、信長はからからと打ち笑った。

徳川家康はどのように対応していいのかわからずに、眼を瞠り、驚いた様子をするばかりだった。

しかし久秀の方は肚の中で、

(なぜ大悪人、大悪人と、わめき散らすのだ。そんなに大悪人が好きなのなら、お気に召すように第四の大悪事も起こしてやろうじゃないか。その四番目の大悪事こそ、信長よ、お前の命を狙っているのだ)

とせせら笑っていた。

久秀の三大悪事は、ここに集った武将たちの間には周知の事実である。それをなぜ信長は、わざわざ喋ったのか。それは久秀の大悪人ぶりを、大勢の武将の前で話し、(ただしこのような大悪事は、この信長に対しては絶対やるな)

と久秀に釘を刺したかったからである。

たしかに久秀は、現在のところは信長に服従している。しかしそれは表面上だけで、心の中では何を考えているか、わからない人間だった。主人を殺し、将軍を殺し、東大寺まで焼き払って、畿内のトップに躍り出た久秀である。そうやすやすと信長に臣服するとは思われない。いつ信長の許からとび出して、謀反の牙をむくか、わかったものではない。将軍さえ殺した男である。信長を殺すことぐらい、何とも思っていないであろう。その久秀の野心を、大勢の武将の前で大悪人呼ばりすることによって、事前に防止しようとしたのである。

それと同時に信長は、久秀を例えにして、家康や家臣の武将たちにも、

(久秀のような大悪事をこの信長にするでないぞ)

と牽制したのである。

信長はいちおう将軍足利義昭を奉じて京都へ入ったけれども、まだ完全に畿内を平定しているわけではなかった。降服させなくてはならない敵は多くいる。天下布武の正念場はこれからである。同盟者である徳川家康との連合や、家臣の武将たちの結束強化は、一段と強めねばならぬ時にきていた。そこで年賀の場を利用し、久秀をだしに使って、家臣団結束のパフォーマンスを行ったのである。

しかし信長の意図がどのようなものであったにせよ、今日の年賀の集会は、久秀にとって愉快なものではなかった。

(ちえっ、新年そうそう縁起でもない、わしを大悪人にしくさって……)

久秀はもう一刻もこんな岐阜城にとどまっている気はなかった。

集会が終ると久秀は馬に乗り、一日散に京都の自邸に駆け戻った。途中、長浜に一泊しただけで京都まで走りに走ったが、馬上でも信長への怒りに燃え狂っていたので、強行軍の疲れはほとんど感じなかった。

邸に着いても、久秀の怒りはまだ治まらなかった。なまじ岐阜城において怒りを爆発させずに押え込んでいたので、その反動で、尾を引いた怒りがいつまでも静まらないのだった。

しかし、やっと邸に着いたときには、さすがに疲れがどっと出て、久秀は玄関の式台にくずれ落ちるようにへたりこんでしまった。

「お帰りなさいませ」

「はやくお部屋の方へ……」

近習や側女たちが抱きかかえるようにして部屋へ運びこむと、

「酒だ、酒だ、酒を持ってこい」

着がえもせずに、わめきたてて、酒をぐいぐい呑みはじめた。岐阜城で押さえて飲んでいた反動で、久秀は浴びるように飲みまくり、

「少しゆっくりお休みなさりませ」

と側女が久秀の肩に手をふれようとすると、

「うるさい、あっちへ行け」

と邪険に追っぱらった。

久秀は一人で飲みつづけた。飲むほどに、酔うほどに、久秀の意識の中では、岐阜城でのことは次第に朦朧となり、忘れられていった。しかし、それが、とある段階を越すと、今度は逆にそれが鮮明に甦ってきて、

(この爺は天下の大悪人でござるよ)

信長の声が、久秀の中で割れ鐘の音のようにひびきはじめたのである。

「畜生め!よくも大勢の前でこのわしに、恥をかかせてくれたな」

叫んで、久秀がはったと宙の一点を睨みつけると、そこに信長の顔が幻のように浮かんで見えた。やにわに久秀は、

「おのれ、信長め!」

持っていた茶碗を、信長にむかって投げつけた。

茶碗はすさまじい勢いで宙を飛ぶと、幻の信長は消え、茶碗は床の間の柱に当って、砕け散った。

と、その瞬間、

「ニヤーッ!」

鋭い叫び声をあげて、小猫が床の間から、ころがるように走り出てきた。久秀がかわいがって飼っている、紅丸と名づけた小猫だった。

「む、どうした?」

床の間で背を丸めて休んでいた小猫の身体に、久秀の投げつけた茶碗の破片が当ったのである。

突然の衝撃に驚いて久秀を見上げた小猫の両眼が、その瞬間、久秀には、信長の眼に見えた。久秀は小猫にかけ寄ると、

「うぬ、この信長め！」

その首筋をわし掴みにし、

「この信長め、おぬしは死ね！」

襖にむかって力一杯に小猫を投げつけた。小猫は一声、

「ニヤーッ……」

鋭い一声をあげて宙を飛んだ。そして襖に音を立てて激突すると、どさりと床の上に落ちた。

昨日まではあれほど可愛がられていたのに、急激なこの乱暴は何事なのかと、わけのわからぬ小猫はもう一声、

「ニヤー」

と鳴くと、さらに久秀はもう一度小猫を捉えて、

「信長め、死ね！」

と投げつけた。

小猫はふたたび宙を飛んで、襖へ激突した。

こうして久秀は何回も何回も、

「この信長め！」

「信長、死ね！」

と気が狂ったように小猫を投げつけた。小猫はいつまでも久秀の虐待に堪えてはいられない。やがて、

「ニヤーッ」

と最後の一声を残すと、部屋から逃げ去った。するとその後を、久秀の茶碗がもう一度飛んだ。

（二）　生いたち

戦国時代にはいわゆる三悪人とよばれる武将がいた。北条早雲と、斉藤道三と、それにこの松永久秀である。

この三人はどこがいったい悪人だったのか。たしかにこの三人は悪人と呼ばれるにふさわしい悪事をした。しかしこの三人を悪人というのなら、戦国時代の悪人は他にもたくさんいる。さしずめ織田信長などはその最たる者であろう。織田一族の支配権を握るために、伯父や弟を謀殺したり、比叡山を焼き打ちにしたり、長島一向一揆を皆殺しにしたり、将軍を追放したり、その悪事の数々は久秀の域をはるかに超えている。しかし信長は日本の歴史では三悪人どころか、英雄のナンバーワンに祭り上げられている。

日本人は、三大美人とか、三聖人とか、三悪人、御三家などと、三人揃えるのが好きである。その人数揃えのために、久秀は三悪人の仲間に入れられてしまったのであろう。

さて、その久秀の生い立ちと、その三大悪事の内容を、ここでちょっと振り返ってみよう。

久秀の出生については、阿波の生れとか、京都西ヶ岡の商人の子とか諸説があって、はっきりしない。久秀の

名前が歴史の中に出てくるのは二十歳をすぎた頃からであり、それ以前のことは不明である。そして久秀も自分の出生については、生涯ひた隠しにして語らなかった。

当時は家柄や肩書きが大きく物を言う時代だったから、久秀の出生は人に語れないほどのものだったのか、それとも恥ずべき出生だったのか、それはわからないが、久秀はそれを明かすことの不利を計算して、わざと秘密にしておいたのではあるまいか。

いや考えようによっては、その逆効果を狙って、わざと不明にしておいたのかもしれないのである。というのは、つまらない出生を話して軽蔑を買うよりも、かえって隠しておいた方が、その出生の神秘性が高まるからである。

出生不明ということになれば、あるいは公卿や将軍の隠し子などという、高貴な血を引いた人間であるかもしれないという想像力を、人々にかき立てさせることもできる。そうなれば出生の価値がぐんとはね上ってくる。現に久秀の築城術における独創性や、茶道具の審美眼には、貴種の血を思わせる鋭さが光っている。

また逆にその出生が、大盗賊とか、海賊の血を引くなどということにでもなれば、それはそれでまた久秀の悪事の迫力にも一段と凄みが増し、悪事を重ねて世の階段をかけ昇る、戦国武将の悪の能力への恐怖感が強まり、久秀の悪事への神秘性が高まる期待もあるわけである。

久秀の出生不明説には、そうした久秀の計算が多分に働いていた可能性があり、また久秀ほどの悪知恵の働く者なら、当然考えられることである。

このようにして出生不明の久秀は、享禄二年（一五二九）、二十歳のとき、三好長慶に仕えた。

三好家は阿波の国の名門細川家の家老であったが、長慶の時代になると、三好家の勢力は細川家を凌ぎ、室町幕府の実権を握るまでになっていた。

もっとも久秀が三好家に仕えたときには、長慶はまだ七歳の少年にすぎなかった。久秀は頭脳明敏で、才智は無類、それに事務能力が抜群であったので、三好家の右筆として重用されると同時に、少年である長慶の養育掛りも兼務した。そして長慶が長じても引つづき身近かに仕えたので、長慶からの信頼は非常に厚かった。

そのため久秀は四十歳を越すころには、三好家の一族に準ずる『内者（うちもの）』にのし上っていた。しかし並行して長慶の方も、久秀の奸智、軍略の力を借りて、室町幕府の実質執権にまでのし上っていったのであるから、二人の主従関係は、持ちつ持たれつ、といえばよかった。

やがて久秀は京都守護職に任命されると、いよいよ本領を発揮して、人頭税や通行税を思いのままに取って私腹を肥やし、その金で朝廷や公卿に贈物をし、要路に取り入るという辣腕ぶりを発揮した。

こうして永禄二年（一五五九）、五十歳になった久秀

は、長慶の河内平定作戦に従って大和に入ると、信貴山城を修理して居城とした。そして翌永禄三年には、その本丸に四階櫓を設けて、天守閣を築いた。

またこの永禄三年に、久秀は弾正少弼に昇任した。そのため世人は久秀のことを、松永霜台と呼んだ。霜台とは弾正台の唐名である。また永禄四年には従四位下に昇叙せられて、将軍義輝の相伴衆となるなど、久秀は三好家の家臣の中で、重鎮に成り上っていった。

なお、この頃の世の中の動きを見ると、永禄二年には織田信長と上杉謙信が入京して、将軍義輝に謁しており、やがて京都に何事かが起らんとする気配いを見せていた。

また永禄三年には織田信長が桶狭間の戦いで今川義元を討ち破り、また永禄四年には武田信玄と上杉謙信が川中島での合戦を起すなど、天下の動乱の予兆があちこちで始っていた。

こうして久秀は、出生不明の男が昇り得る最高の座に辿り着いたのである。しかし久秀はここで立ち止っているような人間ではなかった。久秀の胸の中には、

(ここまで来たのだから、自分が長慶に代って幕府の実権を握ってやろう)

という、主家乗っ取りの野望が、牙をむいてきたのだった。

(二) 三大悪事

こうして久秀の第一の大悪事が起こるのである。主家三好家の乗っ取りである。

三好家は四国の阿波の出身で、同じく阿波出身である管領細川家の家老をつとめる家である。その関係から阿波から近畿へと進出し、細川家の衰退につれて、自分から勢力を伸ばした。そして三好長慶の時代になると、その勢力は管領細川家に取って代わるまでになっていた。したがって形の上では細川家が管領であるが、実質的には三好長慶が管領であるといってよかった。

久秀はそうした三好家の家臣のトップに躍り出たのである。野心満々の久秀の食指が、その、

(実質的な管領)

の座へと動いたのは、当然すぎるほど当然といってよかった。

三好家は、長慶の兄弟たちや、近親者によって、強力な組織に固められていた。久秀はまず、長慶の周辺の切り崩しから手をつけたのである。

長慶には、義賢、冬康、一存という三人の弟があったが、最初の犠牲者になったのは、次弟の義賢だった。義賢は阿波を治めていたが、久秀はことあるごとに義賢のことを長慶に讒言して、兄弟の間を引き裂き、反目させた。その結果義賢は次第に失脚し、戦いで戦死してしまった。これで長慶を支える三人の弟の、一人が消えたわけである。

次に長慶の末弟の一存が、有馬温泉で怪奇な死をとげ、これも久秀の策謀だと噂された。そして最後に残った冬康も、久秀は長慶に讒言して、怒った長慶がこれも殺してしまうという惨劇となった。こうして久秀の陰謀によって、長慶が力と頼む三人の弟は、すべてこの世から消えたのである。

最後に久秀が狙ったのは、長慶の嫡子の義興である。そして久秀はこの義興も毒殺してしまった。

長慶の心の最後の拠りどころは、この嫡子の義興だったが、その義興にも先立たれてしまうと、長慶は落胆のあまり、永禄七年(一五六四)、四十二歳で死亡した。しかしこの長慶の死にも、久秀の毒殺であるという噂が流れた。久秀ならば、ありえないことではない。

こうして主家乗取りの野心に取りつかれた久秀は、三、四年の間に、三好一族の中心をなす人物の五人を、この世から消してしまったのである。それが完了したとき、久秀は五十五歳になっていた。

今や三好政権は久秀の掌中にあった。主家毒殺の噂がひろまっても、誰も久秀に表だって楯つく者はなかった。久秀は望み通り、長慶に代わって京、大和、和泉の三国をそっくり手に入れ、畿内を握り、細川家をあやつって、実質管領として君臨したのである。

こうして実質的に管領となった久秀の前には、もう立ちはだかる者は誰もいなかった。いるのは、ただ将軍一人だけである。

当時の室町幕府は、衰退期というよりも、むしろ滅亡期に入っていたといった方がよく、将軍といってもそれはただ形だけのものにすぎなくなっていた。したがって幕政は管領の思いのままだった。

しかしこの時の将軍は十三代足利義輝であり、彼は、足利歴代将軍の中でも英明で覇気のある人物だった。だから新実力者である久秀の、思いのままにならなかった。久秀は、

(これは当てが外れたわい。なんとかしなくては…)

とあせり始めた。

一方、将軍義輝の方もある思惑にかられていた。それは将軍の権威の復活だった。

というのは、長慶の死は久秀にとっては好都合であったが、それによって三好一族自体としては、衰退の兆をあらわしはじめたのである。そこで義輝はこの機会を幸いと、三好政権を排除して、将軍の権威を復活させようとしたのである。

しかし三好一族はこの義輝の動きをいち早く察し、危機感を抱いた。

三好長慶父子とその兄弟が死んでも、三好一族には、三好長逸、三好政康、岩成友通という、三好三人衆と称する武将がいて、三好政権を支えていた。

そこで久秀は三好三人衆と共謀して、

（将軍が三好一族を滅亡させようというのなら、先手をとって、こちらから将軍を殺ってしまおう）

と将軍殺しの陰謀を立てたのである。

永禄八年（一五六五）五月、久秀と三好三人衆は、清水詣りと称して一万の軍兵を集めて、将軍の御所二条館へ乱入し、将軍義輝を殺害した。

そして、それと同時に久秀は、義輝の従兄弟にあたる阿波公方の足利義栄を新将軍（十四代）に擁立したのである。すなわち久秀は、将軍までもわが手の中に納めたわけである。もはや久秀には恐れるものは何もない。久秀は五十六歳になっていた。

それから二年たった永禄十年（一五六七）、久秀は五十八歳になった。

前途に何の障害もないと思われていた久秀政権の前にも、突如、障害物が現われた。

それは久秀の独裁制が強まるにしたがって、これまで協調してきた三好三人衆との間に、対立が生まれてきたのである。

そもそも三好政権での久秀のポストは、出生のさだかでない他人者が三好家へ入りこみ、陰謀と悪事の積み重ねの中から、掴み取ったものである。三好一族にとっては面白かろう筈がない。なんとしてでも三好政権内の主導権を、三好一族の手に取り戻さなくてはならない。この久秀と三好三人衆との対立は、

（来るべきものがついに来た）

といえばよかろう。

将軍義輝が殺害された二年後の永禄十年（一五六七）十月十日、両者は奈良において対決した。久秀が五十八歳のときである。

両者の対決は半年におよぶ激しい攻防戦だったが、容易に決着がつかず、三好三人衆が陣取った東大寺の大仏殿を、久秀は焼き払った。大仏殿とともに、大仏の首も焼け落ち、人々の崇拝していた東大寺は全焼した。かつて治承四年（一一八〇）に平重衡によって焼かれた大仏殿は、源頼朝の再建から三百七十年余後に、ふたたび戦火で焼かれたのである。

人々は久秀を非難し、信長も久秀を、

（神仏を恐れぬ大悪人だ）

と、ののしった。しかし久秀は世の非難に対して、

（木や銅で作られた大仏殿が焼けたって、なんの罰が当るものか。わしは仏罰などは信じない。そもそもこの世は、正法などでは救えはしない。この世は外法によって救うしかないのだ）

と、うそぶいていた。久秀は、

（この世は力の論理によって生きる）

という合理主義者であり、無神論者であった。神や仏を信じなかった。神の摂理とか、仏道の因果応報というものを信じない。もし神や仏があるのなら、なぜこの世に悪事が横行し、貧しい者が苦しむのか。神や仏はそうしたものを救えはしない。それを救えるものは、力である。力がなくては、何もできない。これが久秀の無神論である。

しかしその久秀を、信長が、

（神仏を恐れぬ大悪人だ）

と非難しながらも、その信長自身が久秀以上に神や仏を信じぬ無神論者だった。信長が、久秀の大仏殿焼打ちなどの比でない、比叡山延暦寺を全焼し、何千人の僧徒を焼き殺したのは、久秀の大仏殿焼打ちからわずか四年後のことだった。

（四）偽りの服従

東大寺大仏殿の焼き打ちによって松永久秀は悪名を残したが、その打撃で三好三人衆は総崩れとなり、退却した。

三好三人衆に勝った久秀は、翌年の永禄十一年（一五六八）の正月には、奈良の多聞城に帰って、元旦を迎えた。三好三人衆を退却させたとはいえ、撃滅させたわけではない。三好三人衆を中心とする三好一族は、したたか者で、結束が固い。いつ、また、勢いを盛り返して、攻撃してくるかもしれない。油断できなかった。久秀は多聞城で酒を飲みながら、じっくり天下の形勢を睨んでいた。

すると天下の一大事が起きたのである。同時にそれは久秀にとっても一大事だった。織田信長が将軍義昭（足利十五代将軍）を奉じて、京都へ入ったのである。久秀と三好三人衆とで擁立した十四代将軍の足利義栄は、腫物をわずらい、すでにこの世を去っていた。信長の本格的な天下布武の戦略が開始されたわけである。

うすうす予想していたとはいえ、久秀の運命を左右する大問題が、こんなに早く、突如として起るとは思わなかった。

（これにどう対処するか）

畿内は、天皇や将軍が日本を統治する、国の中心であり、したがって畿内を治める者は畿内の者でなくてはならない、と久秀は思っている。そして久秀は曲りなりにも、その畿内を手中にしているのである。だから他国者の侵入を許すわけにはいかない。畿内は久秀の領域なのである。

（信長のごとき尾張の田舎者に、この畿内に足を踏み入れさせてなるものか）

これが久秀の決意だった。しかし、

（だが……）

と、老獪な久秀は考えるのだった。

（相手は織田信長だ。それで本当にいいのだろうか？）

聞くところによると信長という男は、若いながらなかなかの出来星だという。五十九歳の久秀に対して、信長は三十五歳である。数年前の桶狭間の戦では、信長は若干二十七歳にして天下の勇今川義元を討ち取り、それを機会に尾張五十六万石、美濃五十四万石を手中にした。また、遠州、三河を領する徳川家康と同盟を結び、いざとなれば、五、六万の軍勢をそろえて京へ攻め上ってくることも出来るという。だから、

（この信長に本当に反抗してよいのか）

ここが思案の仕どころであった。

（信長軍と激突して本当に勝てるのか？）

（信長を敵に廻すのは損ではないのか）

思い悩む久秀の顔に、そのとき、

（うむ、これじゃ）

という不敵な笑みが浮かんだ。妙案が浮かんだのである。妙案とは、世にいう、

（面従腹背）

である。表面では服従と見せかけて、内心では従わない作戦である。

正直言って今の久秀は、信長と戦って勝てる兵力を持っていない。これまでの久秀は三好家に寄生し、三好一族の軍力に頼って、今日までやってきたのである。その三好三人衆と決裂してしまっている現在、久秀が頼れるものは、自分の軍力しかない。その軍力だけでは、とうてい信長に対抗することはできなかった。

（ここでは、いったん従うことだ）

それが賢明な策というものである。

だが、久秀がそう決意した裏には、実はもう一つの計算があった。たとえ信長が京へ入ってきたとしても、簡単に畿内を平定することはできない。信長は利恰な男であるから、そのことを知っている。だから畿内を平定するのに、自分の軍力でするよりも、畿内にある既存の軍力を使うはずである。

その有力な軍力が久秀なのである。だから久秀が信長に服従を誓っておけば、信長は久秀を手先として使うだろう。信長の手先になることによって、久秀は自分の地位を安泰にすることが出来るのである。信長に会って

（京のことならわたくしめが逐一存じておりますから、ご上洛のときには杖がわりにご案内いたしましょう）

とでも言っておけば、大よろこびするであろう。

（これは一挙両得だ）

だが悪がしこい久秀には、さらにもう一つの計算があった。信長の畿内平定は、当然、三好一族をも標的にするであろう。だから、久秀の力によっては全滅させられる。それが、はからずも先方から折れて出てきたのである。だが、

（本気かな？）

鋭い信長の頭は、すぐ、その先へと回転するのだった。

（あの爺のことだ、まさか本気ではあるまい。しかし今は、その本気に乗ったふりをすることだ）

信長の方も老獪であった。武力一辺倒の者ならば、武力で押えればいいが、悪知恵の働く奸物は、武力だけでは片付かない。しかしそうかといって、こちらから折れて出るわけにもいかない。それが久秀の方から折れて出てきたというわけである。

信長にとっても、久秀は使い道があった。

（おれが京に足を入れても、畿内には敵が多い。畿内の地侍は一筋縄にはいかぬ。それを押えるには、畿内で力を持っている久秀を使うに限る。毒をもって毒を制するというわけだ）

と、はやくも久秀の利用方法を考えていた。

（利用できるものは徹底して利用するのだ。そして利用価値がなくなったときは、それはその時のことだ）

信長も久秀と同じようなことを考えていたわけである。

こうして久秀は信長の傘下に入ることによって、引つづき大和一国を統治することを許され、いちおうその地位を確保したのである。

これが久秀の決意だった。しかし、

（だが……）

と、老獪な久秀は考えるのだった。

（相手は織田信長だ。それで本当にいいのだろうか？）

聞くところによると信長という男は、若いながらなかなかの出来星だという。五十九歳の久秀に対して、信長は三十五歳である。数年前の桶狭間の戦では、信長は若干二十七歳にして天下の勇今川義元を討ち取り、それを機会に尾張五十六万石、美濃五十四万石を手中にした。また、遠州、三河を領する徳川家康と同盟を結び、いざとなれば、五、六万の軍勢をそろえて京へ攻め上ってくることも出来るという。だから、

（この信長に本当に反抗してよいのか）

ここが思案の仕どころであった。

（信長軍と激突して本当に勝てるのか？）

（信長を敵に廻すのは損ではないのか）

思い悩む久秀の顔に、そのとき、

（うむ、これじゃ）

という不敵な笑みが浮かんだ。妙案が浮かんだのである。妙案とは、世にいう、

（面従腹背）

である。表面では服従と見せかけて、内心では従わない作戦である。

正直言って今の久秀は、信長と戦って勝てる兵力を持

ってい ない。これまでの久秀は三好家に寄生し、三好一族の軍力に頼って、今日までやってきたのである。その三好三人衆と決裂してしまっている現在、久秀が頼れるものは、自分の軍力しかない。その軍力だけでは、とうてい信長に対抗することはできなかった。

（ここでは、いったん従うことだ）

それが賢明な策というものである。

だが、久秀がそう決意した裏には、実はもう一つの計算があった。たとえ信長が京へ入ってきたとしても、簡単に畿内を平定することはできない。信長は利恰な男であるから、そのことを知っている。だから畿内を平定するのに、自分の軍力でするよりも、畿内にある既存の軍力を使うはずである。

その有力な軍力が久秀なのである。だから久秀が信長に服従を誓っておけば、信長は久秀を手先として使うだろう。信長の手先になることによって、久秀は自分の地位を安泰にすることが出来るのである。信長に会って

（京のことならわたくしめが逐一存じておりますから、ご上洛のときには杖がわりにご案内いたしましょう）

とでも言っておけば、大よろこびするであろう。

（これは一挙両得だ）

だが悪がしこい久秀には、さらにもう一つの計算があった。信長の畿内平定は、当然、三好一族をも標的にするであろう。だから、久秀の力によっては全滅させられる。それが、はからずも先方から折れて出てきたのである。だが、

（本気かな？）

鋭い信長の頭は、すぐ、その先へと回転するのだった。

（あの爺のことだ、まさか本気ではあるまい。しかし今は、その本気に乗ったふりをすることだ）

信長の方も老獪であった。武力一辺倒の者ならば、武力で押えればいいが、悪知恵の働く奸物は、武力だけでは片付かない。しかしそうかといって、こちらから折れて出るわけにもいかない。それが久秀の方から折れて出てきたというわけである。

信長にとっても、久秀は使い道があった。

（おれが京に足を入れても、畿内には敵が多い。畿内の地侍は一筋縄にはいかぬ。それを押えるには、畿内で力を持っている久秀を使うに限る。毒をもって毒を制するというわけだ）

と、はやくも久秀の利用方法を考えていた。

（利用できるものは徹底して利用するのだ。そして利用価値がなくなったときは、それはその時のことだ）

信長も久秀と同じようなことを考えていたわけである。

こうして久秀は信長の傘下に入ることによって、引つづき大和一国を統治することを許され、いちおうその地位を確保したのである。

ない三好一族を、信長の力によって征服するのである。言ってみれば、信長を久秀の手先として使うわけである。

（京と畿内の掃除を信長にさせてやるのだ。尾張の田舎者の小倅には、掃除役がお似合いじゃ。掃除の終った段階で、わしが畿内をいただくという寸法さ）

天下に恐れられた信長を、自分の手先として掃除役に使うなどということを、たとえ頭の中だけのこととはいえ、考えることが出来たのは、歴史上、この松永久秀一人だけだったのではなかろうか。

（これこそ一挙二得である）

いわば、利用したり、利用されたりというわけである。要はその信長と久秀の化かし合いが、いつまで続けられるかということであろう。

そう決心すると久秀は躊躇しなかった。

直ちに岐阜城へ使いを走らせた。そして人質と、献上品を信長に差し出し、服従を誓った。

人質には、側室の一人が生んだ、四歳の男子を差し出した。そして献上品として差し出したのが、名高い「つくもがみ」と呼ばれる茶入れである。信長はその茶入れを掌にのせ、もてあそぶようにしながら、

「う、ふ、ふ…、あの爺めも、頭を下げてきたか」

と、満足げにつぶやいた。

実は信長の方も、奸物と悪名高い松永久秀を、どのように料理すべきか思案していたところだったからであ

信長の軍門に下った久秀は、その後、信長軍と共同して、三好三人衆や筒井順慶などへの攻撃を行った。当然、久秀一人で戦うよりかはるかに強力であり、また信長にとっても、畿内の勝手知ったる久秀と手を組んだ方が、信長軍だけで戦うよりも好都合であり、信長と久秀との関係は、表面上はうまくいっているように見えた。

やがて信長は石山本願寺に五千貫、奈良興福寺に千貫、堺に二万貫の矢銭を課した。矢銭とは、信長が戦費に使う軍事税のことである。石山本願寺と奈良興福寺はすぐ承知したが、堺はこれに応じなかった。応じないばかりか、塁を設け、濠を深くして、応戦の構えをした。

堺は中国貿易、南蛮貿易、密貿易の拠点であり、九州の博多と並ぶ日本の代表的な経済都市である。信長が天下を統一するのに、絶対必要な都市である。だから堺に二万貫を課したのは、二万貫の金が欲しいからではなくて、それを機に、堺を自分の支配下に組み入れたいのだった。相手が応戦する構えなら、武力で屈服させるほかはない。

ところが久秀にとっては堺は地元であり、親交があった。久秀は三好家の家臣であった頃、堺の代官を勤めたことがあったので、堺の代表的な顔役である会合衆や、納屋衆と親しかった。そのため久秀は堺を使って私腹を肥やすという、抜け目のない力量も発揮していた。久秀が動けば、信長は武力を使わなくてもすむのである。

その信長の心理をよく読んだ久秀は、如才なく両者の間を仲裁し、信長と堺の間をうまく取り繕めたのである。すなわち久秀は点数を稼いだのである。信長は、

（うむ、爺め、なかなか、やるわい）

と満足の態であった。

かと言って、もちろん信長も全面的に久秀に心を許したわけではなく、

（久秀め、おれの勢いが盛んなときは、おれに従っているであろうが、旗色次第で、いつ、どう寝返るか、わかったものではない。油断は禁物だ。だが、いましばらくは使っていて大丈夫であろう）

と、鋭い打算を働かせるのだった。

（五）二条城の造営

永禄十二年（一五六九）二月に、信長は京都勘解由小路に、二条城の造営に取りかかった。将軍義昭の居館とするためである。久秀ももちろん大和から大勢の役夫を送るなどして、それに協力した。

工事は突貫工事によってスピーディに行われ、はやくもその年の四月には、いまだ未完成ながら、将軍義昭は二条城へ移転した。

将軍義昭のために二条城などを造営して、信長と義昭

との間は一見うまくいっているように見えたが、それは表面だけで、水面下では次第に二人の間は嫌悪になりつつあった。それは信長が、将軍義昭の権限を規制する『殿中御掟』という九ヵ条の掟書を作ったりして、義昭の権限、自由を、制約したからである。信長は足利将軍を奉るというよりも、自分の指揮下に組み込んでしまおうという意図が、露骨になってきたのである。

だが義昭にしてみれば、

（自分は信長の力によって将軍になることが出来たのだ）

ということがわかっていても、将軍としてのプライドがそれを許せなかった。

義昭は信長の許可を受けずに、ひそかに、上杉、武田、大友、毛利、朝倉などの諸国大名に御内書を発して、将軍の権力支持を要請した。そして、そうした義昭の暗躍を、信長は察知した。

やがて信長と義昭の関係が表面上も崩れてくるようになると、信長と諸国大名との対決関係も、次第に変化してきた。だから、そのことに気がついた信長は、この年（永禄十二年）の岐阜城での年賀の席で、久秀を出しに、

（信長に対する反逆は許さぬぞ）

と、久秀や家臣たちを牽制し、家中の団結をはかったのである。

そして、その年賀の席の後ただちに、すなわち永禄十三年正月十三日に、信長は、

（諸国大名に御内書を出されるときは、事前に信長にお知らせください）

という内容を中心とした五ヵ条の誓書を、義昭へ送り、これを承認させた。

永禄十三年二月末に、信長は数千人の家来を従えて入京した。それは二条城完成の祝宴を開くためであったが、同時に信長の威信を京に知らしめるためでもあった。

永禄十三年四月十四日にその祝宴は開かれ、猿楽能が興行された。もちろんその席に久秀も招かれた。しかし、つい三ヵ月ほど前の、岐阜城の年賀の席での信長の仕打ちが、頭に鮮明に残っているだけに、猿楽能に興ずる信長の姿を見るにつけても、久秀の腹は煮えくり返る思いがした。しかし今は、腹の中を信長に気どられてはならぬと、無念の唇をぐっと噛みしめた。

祝いの席には、信長、将軍義昭につづいて、大勢の武将たちが居流れていたが、その中に朝倉義景だけが姿を見せていなかった。久秀は、信長と朝倉義景の間にひろがる黒い闇を感じた。

そして、久秀のその予感は適中した。二条城の祝宴が終ると、信長はただちに朝倉義景攻撃の陣触れを発したのである。

もちろん久秀も何くわぬ顔をして、数百人ほどの供をつれて信長軍に加わり、朝倉攻めに向った。

義昭は将軍になる前の亡命中に、長く朝倉義景の世話

になったことがあるので、義景との仲は親しかった。そこで義昭の頭を押えるのには、その朝倉義景を討って、義昭を支援する勢力を弱めようと、信長は考えたのである。

しかし朝倉攻めは一筋縄にはいかなかった。朝倉義景が浅井長政と歴史的な同盟関係にあったからである。そのために信長軍は朝倉と浅井の両軍の挟み打ちにあい、信長はいったん岐阜城へ逃げ帰った。そして戦備を整えると、後日、姉川において朝倉、浅井の連合軍に対決し、これを破って完勝することが出来た。世に名高い姉川の合戦である。

(六) 反信長同盟網の中で

姉川の合戦は信長の完勝ではあったが、朝倉義景の止めを刺すまでには至らなかった。そのため、朝倉、浅井の反抗がきっかけになり、畿内の反信長勢力が動きはじめた。

永禄十三年（元亀元年）七月には、三好三人衆が河内でふたたび活動をはじめ、また九月に入ると、石山本願寺の顕如が各地の門徒を蜂起させた。

さらに翌年の元亀二年（一五七一）になると、抗争はさらに深刻な様相を呈するようになった。本願寺顕如と将軍義昭が結束する、反信長同盟網に、甲斐の武田信玄が加わったからである。武田信玄も、信長と同じように天下統一を狙っている。その上顕如の夫人は、信玄夫人の妹であったから、顕如と信玄の連結は密であった。

こうして元亀二年になると、将軍義昭を中心とする、本願寺顕如、朝倉義景、浅井長政、武田信玄、三好三人衆という、巨大な反信長の同盟網が張りめぐらされたのである。

久秀がこの反信長同盟網をだまって見ているはずはなかった。とくに武田信玄が同盟網へ参加したことは、

（わが機会、到来す！）

と久秀を狂喜させた。表向き信長に服従しているが、それは仮の姿であって、いつ信長へ反逆するか、久秀はその機会を虎視眈眈と狙っていた。その機会がやっと来たのである。

「うむ、やっと武田信玄も腰を上げたか。これで信長の前途も終りであろう。待った甲斐があって、やっと信長へ反旗をひるがえす機会がやってきたわい。この機会を逃す手はないぞ」

久秀はにやりと唇をゆがめると、元亀二年五月十七日に武田信玄に書状を送って、

（公儀の御威光をもって上洛されたときは、ねんごろにご協力をいたしたい）

と協力を申し入れた。

また久秀は同時に三好三人衆とも手を結んで、信長へ

の作戦行動を開始した。いったん三好三人衆とは対立したものの、反信長という畿内勢力結集のために、両者はふたたび結束したのである。

また元亀二年六月十三日、本願寺顕如は、長子の教如光寿と、朝倉義景の娘との婚約を成立させた。この事は、朝倉義景の母の広徳院が甲斐の武田氏の出身であること、また顕如の夫人が、武田信玄夫人の妹であるということも関係して、顕如、義景、信玄の三者による反信長戦線は、いっそう強固なものになったのである。

こうした久秀の裏切りを知った信長は、

「久秀め、油断のならぬ腹黒の狸だと思っていたが、やっぱり正体を現わしたか。ふん、馬鹿な奴め。わしがやすやすと、そんな同盟軍などに敗けるものか。わしを見限るのは、ちとまだ早すぎるわい。わしを見限るのは、おのれの運を見限るのと同じだということが、わからぬのか。この、おいぼれ爺いめ……」

と、せせら笑った。だが、

（それにしても目先を読むのがすばやい奴だ）

と、警戒の眼を走らすことも忘れなかった。

そうした状況の中で、信長は元亀二年九月に、岐阜と京都の間に立ちはだかって信長の京都入りを阻み、かつ朝倉義景と組んで信長に抵抗する、比叡山を焼打ちにした。

そのとき久秀は高槻に兵を進めていたが、九月十三日、比叡山が燃える焔を遠望すると、

（ふん、信長め、きさまもついに寺を焼いたか。わしが東大寺を焼いたのを『天下の大悪人』と面罵しくさったが、比叡山を全焼させ、四千人もの僧俗を焼き殺したきさまこそ、もっと大悪人ではないか。比叡山のような聖地を焼き打ちするようでは、信長の命運も、そう長くはつづくまいぞ）

比叡山の方にむかって唾を吐きかけた。

そうした状況の中で、久秀が最も期待するのは、武田信玄の動きだった。そして、その上洛の動きは、久秀の期待した通りの目ざましいものがあった。

信長が比叡山焼き打ちをやった次の年、すなわち元亀三年九月二十七日、武田信玄は京都を目ざして、西上の軍を動かしはじめた。元亀三年十二月には、三方ヶ原の合戦において、信長の同盟軍の徳川家康を大破した。信玄の上洛は目前に迫っているといえた。

（これで信長は、武田信玄とわれら近畿勢との挟み打ちになって、もう終りだわい）

次の期待へと久秀の胸は躍るのだった。

元亀三年十二月二十九日に武田信玄は、久秀へ、三方ヶ原の合戦の大勝を知らせるとともに、

（わたしの上洛に協力してほしい）

と要請してきた。よろこんだ久秀は、年が明けた元亀

四年正月二日付で、信玄の戦勝を祝う書状を送った。
だが……。
どうしたわけか、その後の武田信玄の動きがぴたりと止ってしまったのである。信玄がいっこうに上洛の気配いを見せないのである。
（どうして信玄は動いてこないのか）
久秀は急に不安にかられた。
（信玄に何かあったのか？）
その疑念は久秀の中で次第にふくれ上がっていった。
（あれほど上洛の意欲に燃えていた信玄の動きが急に止るのには、何かの理由があるとしか考えられない。ひょっとして信玄は暗殺されたのか、病で死んだか。それとも病で動けぬのか？）
そして久秀の予感は当ったのである。元亀四年（一五七三）の四月十二日、信玄は持病の労咳が悪化して、甲府への凱陣の途中で、病死したのである。信玄の嫡子の武田勝頼は信玄の死を秘したが、信玄の死の噂は十日もたたないうちに、あっという間にひろまった。
武田信玄の死は久秀を狼狽させた。
「信玄め、死におったか。これは難儀なことになったわい」
さすがの久秀も、一瞬、言葉を失った。
武田信玄は、反信長同盟の柱である。久秀が反信長同盟に加担したのは、その中に武田信玄がいたからである。
その信玄が死んだとは、晴天の霹靂としか言いようがない。久秀の心は、一瞬の闇に閉された。
だが、久秀のふてぶてしさは、いつまでも心の闇に逡巡していないことだった。
「まあ、いいじゃないか。信玄が死んだって、まだ、朝倉、浅井、本願寺、それに三好一党がいる。また、信玄の代わりには、上杉謙信もいる」
と久秀の精神はすぐ衝撃から立ち直った。
しかし、反対側の信長の方にしてみれば、信玄の死は、天から降った幸運といってよかった。信長が一番恐れ、警戒していたのが信玄だった。それが突然自滅したのである。
（天はおれに味方した）
信長は着々と、反信長勢力の撃滅作戦を進めていった。
そしてその勢いに乗って信長は、天正元年七月に、将軍義昭を追放して、足利幕府を滅亡させた。そして年号を元亀から天正へと変えた。
その天正元年八月二十六日に、念願の朝倉義景を滅亡させることに成功した。
朝倉滅亡の報せを受けたとき、
「なに、朝倉が滅びたとな。越前の朝倉といえば強軍と心頼みにしておったのに、なんと早き往生よのう」
と、さすがの久秀も、みぞおちの辺りに痛みが走るのを感じた。そして、

（朝倉が潰れたら、次は浅井か）
久秀が思った通りに、信長は次に電光石火の如く浅井長政を攻め、あっという間の四日後の八月三十日には、浅井長政の小谷城を陥落させてしまった。
（うーむ、浅井も落ちたか）
久秀はうめいた。
武田信玄につづいて、朝倉、浅井も滅亡し、将軍義昭も追放ということになっては、あと頼りになるのは本願寺だけだった。
（おれの作戦はやはり失敗だったかな）
と、久秀は瞠をかんだ。
（こうなると、こっちの首も危くなってきたわい。さて、どうするか。今度は信長もそう簡単には許してくれないだろう。仕方がない、頭でも剃って丸坊主になり、信長の前に這いつくばらねばならぬかもしれぬな）
と自虐的につぶやいた。しかし、信長が簡単に許さないだろう、とは思いつつも、
（でも、信長は絶対おれを許すだろう、いや、許さざるを得ないだろう。なぜならば、おれはまだ信長にとって利用価値がある）
という、久秀のふてぶてしい自信はゆるがなかった。
そして久秀が考えているように、信長の方も、久秀の利用価値を十分に計算に入れているのだった。
信長は畿内の武将や地侍が、いかに統治しがたい者であるかを、よく知っている。彼等は利に誘われて、離合集散常ならぬ行動をくり返し、その複雑な勢力は侮れない。信長はそれを自分で押えるよりも、畿内に力を持っている者にやらせた方が、やり易いと考えている。その男が、
（松永久秀）
なのである。
加えて信長は商業都市である堺を押える必要がある。そのために、堺商人と親密な関係にあり、その裏表に通じている久秀の力が、まだ必要である。
（畿内平定に、まだまだ久秀は利用価値がある。まだまだ、爺め、その首根っこを手放しはしないぞ）
と信長の方も、久秀と裏腹のことを考えているのだった。

（七）ピラニア

久秀は内外の情勢から判断して、信長に服従したほうがいいのかな、と思いつつも、心の底には、
（信長などに、いまさらへいこら出来るものか）
という気持も強いのである。だから酒に酔うと、飼い猫の首をわし掴みにして、
「信長猫め、死ね！」
と、柱に投げつける凶行が、いつまでたっても止めら

突して、猫が死のうものなら、
「やったぞ、やった！」
「信長が死んだ！」
と、盃を片手に狂喜して、居間の中を踊りまわるのだった。
そんなある日のことだった。
久秀が多聞城へ帰ってくると、家臣が、
「殿、珍しいものが届いております」
と報告してきた。
「何じゃ？」
「珍らしい魚でございます」
「魚・・・？」
「はい、堺の商人が、珍らしい魚が毛唐から手に入りましたので、ぜひ殿に差し上げたいと、持ってまいったものでございます」
「どんな魚だ？美味いのか？」
「いえ、食べる魚ではありません。毒魚でございます。いや、毒魚というよりも、人食い魚、人殺し魚と申した方がいいかもしれません」
「人食い魚…？」
久秀の眼がギョロリと光った。
「はい、名前はピラニアとか申すそうで、なんでも遠い南国のアマゾンとかいう大河にしか棲まぬ怪魚だそうでございます。はなはだ凶暴な性質で、鋭い歯を持ち、牛

れなかった。
止められないどころか、ますます激しくなってくる。酒に酔うと久秀の中に凶行への衝動が、つむじ風のように荒れ狂ってくるのである。とくに信貴山城や多聞城へ帰ってきたときは、自分の城へ帰ってきたという安心感からか、凶行への衝動が一段とはげしくなるのだった。
久秀は猫の首をわし掴みにすると、思いきり、
「信長、死ね！」
「くたばれ、信長！」
と、信長の前では絶対口にできない悪態を思いきり叫び、猫を柱に投げつけた。
だから猫は次第にこわがって、久秀に近づいてこなくなった。そこで家臣たちは猫さがしに忙しくなり、民家の猫でも野良猫でも片はしから捕えては、久秀の手許に集めねばならなかった。そしてその数は、いまや十匹にも及んでいた。
その猫に久秀は、一、二、三、と番号をつけて、
一番信長
二番信長
三番信長
などと名前をつけていた。そして投げつけるたびに、
「一番信長、死ね！」
「二番信長、死ね！」
と声高に叫び、運よく（猫にとっては運悪く）柱に激

や馬が河を渡ろうとして水に入ると、たちまち襲われ、食い殺され、餌食になってしまうとのことです」
「ふむ」
と久秀はちょっと考えるふうにしていたが、
「すると人間でもそうなるな」
「おおせの通り、あっという間に血を吸われ、食い殺されてしまいます」
「うむ、気に入ったぞ、はやく見せろ」
「かしこまりました」
運ばれてきたのは巨大なギヤマンの水槽だった。それは将軍家でも大名家でも見ることの出来ぬような見事なギヤマンの大水槽で、さすが堺衆の手によらねば入手できぬ逸物と、久秀を感嘆させた。
その透明な水槽の中に、キラリ、キラリと、刃物のように光ったものが群れて泳いでいた。それはあたかも光の波片が水中で飛翔しているかのようで、
「怪魚というから、獰猛な顔をした巨大な魚かと思ったのに、案外小さいのだな」
ピラニアと呼ばれるその魚は、一尺（約三十センチメートル）ぐらいの体長で、それが五匹ほど、鉄砲弾のような金属的な光を放ちながら泳いでいた。
「はい、身体はこの程度ですが、凶暴で、一匹が獲物の血にありつくと、血の臭いを嗅いで他のピラニアたちが、あっという間に獲物に集ってきて、肉に群り、短時間に

食いつくして、骨ばかりにしてしまいます」
それを聞くと久秀の頭に、いつも投げつけていじめている信長猫の姿が浮かんできた。
「猫でもそうなるのだな」
「もちろん猫なら、なおさら、あっという間に血祭りにあげられてしまうでしょう」
家臣にも久秀の考えていることがわかってきて、にたりと笑みをもらしながらそう答えた。
「じゃ、信長猫でためしてみるとしようか」
家臣が、信長猫と名前をつけた猫を持って部屋に入ってくると、猫はまたいつもの凶行にあうのかと、鋭い警戒の眼を久秀に向けた。が、久秀は無造作に猫の首をわし掴みにすると、一気にギヤマンの水槽へ突っこんだ。
「ギャー、ニャー…」
猫は泣き声とも、叫び声ともつかぬ声をあげて、もがき、あばれた。
久秀は信長猫にどんな異変が起るのかと、水槽の中を見つめた。
一匹のピラニアが猫の横腹でキラリと光ったかと思うと、猫の動きがぴたりと止った。それは不思議なほどの急変で『動』の世界が一瞬にして『静』の世界へ、そして次の瞬間、キラリ、キラリと光の破片が『静』の周囲できらめきはじめたかと思うと、すでに五匹のピラニアが猫の身体に食いついており、見る見る猫は血を吸われ、

肉を食いちぎられ、あっという間に骨ばかりになってしまった。

「うーむ、そちの言う通りだ、気に入ったぞ」

久秀の背筋に甘美な戦慄が走った。

「もう一匹つれてこい」

「かしこまりました」

家臣がもう一匹の猫をつれてくると、今度も久秀が首筋をつかんで、

「二番信長猫、食われろ！」

ギャマンの中へ思いきり突っこんだ。二匹目の信長猫

「ギャー、ニャー！」

と絶叫すると、たちまちピラニア軍団に襲われて、骨ばかりになってしまった。

久秀の中で、信長への憎悪感がいくらか解消され、血圧も下がっていくように思われた。

この日を境にして、久秀の信長猫を柱に投げつける凶行は、このピラニアへの餌じき作戦へと変っていった。

ギャマンの巨大な水槽は床の間の正面に飾り置かれ、久秀は酔うと信長猫を、

「信長死ね！」

「信長、食われろ！」

と水槽の中へねじこみ、そしてゆっくり酒を飲みながら、ピラニアの鋭い歯が信長猫の血を吸い、肉を食いちぎり、骨になっていくのを、じっと時間をかけて眺めていた。

（八）　再びの服従

久秀は内外の情勢から判断して、信長に服従したほうが有利だと判断した。そこで天正元年十一月、臆面もなく佐久間信盛のところへ使者をやって、

（信長への降参の斡旋）

を懇願した。その条件としては、久秀が所有する二つの城、すなわち多聞城と信貴山城のうち、多聞城を信長に差し出し、久秀は信貴山城のみに在城することを誓った。

佐久間信盛から、久秀の申し出を聞いたとき、信長は苦笑して、

「久秀め、また態度を豹変させたか。節操のない爺だ。今度許しても、また、いつ叛くか、わかったものではない。だが、その節操のないふてぶてしさが、気に入ったわい。これから畿内を平定するのには、そのふてぶてしさが必要なのだ。まだまだあの爺は使える玉だ。いましばらくは、生かしておくとしようか」

そう言って、久秀をあっさりと許した。

信長からの赦免の通知を受けると、久秀は、

（やはり信長は利口者だ。わしの利用の仕方をよく知っているわい。信長の気の変らぬうちに、詫びておかねばならぬ）

そうつぶやくと、すばやく行動した。

久秀は信貴山城を出発すると、夜を日に継いで岐阜城へ急行した。岐阜城は三年前の年賀の席で、信長から『天下の大悪人』と面罵された場所である。その屈辱は久秀の胸の底に、今もどす黒くどぐろを巻いている。しかし今は、そんなことにこだわっている時ではない。

岐阜城に着き、信長に謁見すると、久秀は畳に額をすりつけて、孫（嫡男久通の子の春松）を人質の追加として差出し、それに約束の多聞城、牧渓の絵、そして不動国行の太刀と薬研藤四郎の脇差しを献上して、

「それがしは度々の心得ちがいを重ね、今日ここにお詫びに参上いたしましたは、面映ゆい限りでございますが、寛大な思召しをいただき、ありがたき幸せに存じます。いったんはなき命を、拾った思いにございますれば、今後は粉骨砕身のご奉公をいたすでありましょう」

と言上した。

信長は醒めた眼でその久秀を眺めていたが、

「うむ、今度だけは許してつかわそう。だが、何回詫びたとて、魂まで入れ代えることは出来ぬであろう。いいか、爺い、この後わしの命運が尽きたと思ったときは、遠慮なく謀反するがよいぞ」

ずばりと久秀の心の底を言い当てた。

さすが老獪な久秀も、心の余裕を失い、背筋に冷や汗をかいた。が信長は、その久秀の心の傷口に手を突っ込むように、すぐ次の指示を下した。

「わしは朝倉、浅井を討ち滅し、将軍義昭は京都から追い出して、すでに目ざわりな者はいなくなった。しかし、まだ一人邪魔な奴がいる…」

「はあ…？」

と久秀はとぼけてみせたが、みぞおちのあたりに冷たいものが走った。

「三好義継じや。あれを討て」

三好義継は、亡き三好長慶の養子である。すなわち久秀が仕えていた主家の主である。したがって信長は久秀に、

（主殺し）

を命じたのである。変節極りない久秀のことである。どんな事でも平気でやるだろうと、信長は冷徹に久秀の反応を観察していた。

かつて久秀は主家乗取りのために、主君の長好長慶と、その嫡子の義興と、二人も毒殺している。したがって久秀は、信長から三人目の主殺しを命ぜられたわけである。毒を食わば皿までというが、久秀は二人目の主殺しに何の躊躇も見せなかった。

「かしこまりました。さっそく信貴山城へ戻り、仰せのごとくいたすでありましょう」

平然とそう返事した。

三年前この岐阜城で、久秀は、主君三好長慶殺しを信長に指摘されて『天下の大悪人』とののしられたのに、今度は同じ岐阜城で、信長から、その大悪事をさらに命令されたのである。

（ちえっ、信長め、勝手な奴だ）

内心舌打ちしながらも、表面は恐懼のていで信長の前から退出すると、岐阜城を後にした。

信貴山城へ戻ると、久秀はただちに、三好義継が詰める河内若江城へ、密使をさしむけた。そしてひそかに、多羅尾右近、池田丹後守、野間左吉という、三人の重臣を呼び寄せた。この三人は主君の義継から重用されず、主君に恨みを抱いていると、久秀はにらんでいたからだった。

久秀は声を低めて、

「信長は天下無双の大将であり、そのうち天下は信長のものとなる。そう睨んで、わしは先日、岐阜城へ駆けつけ、服従を誓った。義継はわれらの主君ではあるが、器量乏しく、あんな主君に従っていても、陽の目を見ることはない。おのおの方も、義継などを見限り、信長についた方が、前途が開けるというものだ。如何かな」

と説得すると、三人とも深くうなづいて、

「わかり申した。信長殿が河内へご出馬されるときは、忠節をつくしまする」

と賛同した。

「それがよい。それならばさっそく、岐阜へその旨をご注進いたすであろう。必ず恩賞を下されるであろう」

天正元年（一五七三）十一月十日に、信長は三好義継攻撃のために西上し、若江城へ出陣した。

久秀も七千の兵をひきいて、参戦した。

信長軍が若江城を取り巻くと、かねて久秀が手を廻しておいた、多羅尾右近、池田丹後守、野間左吉の三人が叛逆し、夜になって信長軍を城内に導き入れた。

三好義継は頼りに思っていた久秀に叛かれて進退きわまり、血に染った本丸で、妻子とともに自害して果てた。

こうして久秀は三度目の主殺しを平然と行い、信長の期待に応えたのである。

久秀が信長へ献上した多聞城へは、信長の重臣である柴田勝家が入り、奈良地域の諸政を取りしきった。

またこれと前後して、久秀とは宿敵にあたる筒井順慶が、信長と手をにぎって、筒井城に返り咲いた。久秀と信長の間の軋轢のいきさつを、いち早く嗅ぎとった筒井順慶が、勢力挽回のために信長にすり寄ったのである。

（九）再びの反信長同盟

年が変わって天正二年（一五七四）三月、信長は平氏姓を名乗って、平氏幕府創設を朝廷に申請した。しかし

許されなかったので、その腹いせに香木蘭奢待を所望して、公家衆を威圧しようとした。

蘭奢待というのは、東大寺の御物の一つとして有名な名香木で、聖武天皇のころ唐から持ちこまれた黄熟香である。これまでに下賜された者は、足利八代将軍義政ただ一人だった。それを信長は無理を承知で、所望したのである。

三月二十六日に朝廷から蘭奢待下賜の勅許が下り、勅使が東大寺へ向った。

信長はそれを受取るために、三月二十七日に多聞城へ入り、待っていた。

多聞城は信長が久秀から取り上げた城である。たとえ多聞城が東大寺の近くにあり、蘭奢待を受取るのに都合がいいとはいえ、多聞城を選んだのは、明らかに久秀に対する当てつけだった。

多聞城は久秀が信貴山城よりも精魂をこめて築いた、自慢の城だった。それが今、信長の土足で踏みにじられるのは、久秀の顔が信長の土足で踏みつけられるのと、同じであった。

多聞城の磨き上げられた檜の廊下を、信長はわがもの顔で歩いていることであろう。久秀が愛用していた茶室で、得意になって茶会を開いていることであろう。それを想像すると、久秀の頭にかっと血がのぼってきた。

だが久秀にとってその屈辱感は、皮肉なことに、それがある復讐感と同居していることであった。

久秀は岐阜城で信長から『天下の大悪人』と面罵されて以来、酒に酔うと、

（信長、死ね！）

と猫を投げつけて怒り狂うのだったが、その狂気の沙汰は、多聞城でもしばしば行われていたのである。

だからその多聞城の中で、信長がしたり顔をして蘭奢待を受取ったということは、久秀に妙な自虐的な復讐感をさそうのだった。

蘭奢待が多聞城へ運び入れられると、信長は勅封を解いて、一寸八分を切り取った。切り取った香木を打ちくだいて香包みに入れると、戦功のいちじるしい家臣に与えた。

その様子を知った久秀は、

「ふん、香木などに何ほどの価打ちがあろうや。香がそれほど欲しければ、おれの屁でもかがしてやろうわい」

と悪態をついて、側近を笑わせた。

すると次の月、すなわち天正二年四月に、石山本願寺の顕如が兵を起した。それは顕如が、

（信長が石山本願寺攻めを行う）

という情報を手に入れて、先手を打ったのである。

信長はただちに本願寺攻撃の軍を進め、久秀のところへも出陣の触れがきた。信長に服従した今の久秀としては、これに従うしかない。久秀は八千の兵をひきいて信

貴山城を出ると、大坂へ向った。

本願寺勢は手強かった。信長軍をしてもそう簡単に陥落さすことはできず、信長は半月ほどの攻撃のあと、やむなく兵を退かざるをえなかった。

しかし信長はその後も手をゆるめることなく、同じ年（天正二年）七月に、伊勢長島の一揆勢攻撃のため、九万の兵を発した。そして八月には、長島勢の老幼男女一人のこらず皆殺しにして、長島征伐を成功させたのである。

その報を聞くと久秀は、信貴山城の山腹の風通しのよい館で酒を呑みながら、

「ちっ、信長め、やりおるわい。ほんまに悪運の強い奴じゃ。はやく甲斐の大将がやってきて、蹴とばしてくれると面白いのになあ」

と、はるか東の方、甲斐の方角に視線を走らすのだった。

甲斐の大将というのは、死んだ甲斐の武田信玄の子の、武田勝頼のことである。この頃、久秀はひそかに、武田勝頼から密書を受け取っていた。

そして、その武田勝頼を陰で動かしているのは、将軍義昭なのだった。義昭は信長によって京都から追放されたものの、追放されたままになってはいなかった。義昭は紀伊由良の興国寺に流寓していたが、武田勝頼へ、

（上杉謙信、北条氏政、本願寺顕如などと謀って、わしを京都へ帰れるようにしてくれ）

という内書を送り、信長打倒の作戦を進めていたのだった。

久秀は好き好んで、信長に服従しているわけではない。機会があれば再び信長へ牙を向けようと、その機会を狙っているのである。だから勝頼からの動きは、久秀にとって大歓迎といってよかった。久秀は注意深く勝頼の動きを眺めていた。

武田騎馬軍団は武田信玄の亡きあとも、日本で随一といわれる強力軍団である。その軍団を引きつれて武田勝は、遠江から三河、そして東美濃にいたる広大な地域に転戦し、徳川家康や織田信長を脅やかしているのを、久秀は期待をもって眺めていた。

その勝頼と、久秀は陰で連絡を取りあっているのである。そして同時に、上杉謙信や北条氏政とも密書を交わしていた。

勝頼はまだ若い上に、父の信玄よりも性格がはげしかった。だから久秀から見れば、上杉謙信や北条氏政に期待するよりも、勝頼の攻撃力が心強く感じられるのだった。

（信長め、はやく倒れろ、はやく死ね！）

表面は服従をよそおいつつも、久秀の中では信長への憎悪がますます燃え上るのだった。

（十）本願寺攻撃

武田勝頼に対する久秀の期待は大きかった。しかしその期待も裏切られてしまった。

天正三年（一五七五）五月、勝頼は長篠の合戦において信長軍に惨敗し、武田軍は崩解してしまったからである。久秀はがっくりと肩を落し、

「勝頼なら猪武者だから、なんとか信長をけ散らかすだろうと思っていたのに、やはり駄目だったか。信玄といい、勝頼といい、武田は案外役に立たなかったわい。信長の武運が強いんじゃな。やはり今しばらくは、信長にひれ伏している以外はないということか」

久秀の心中は、無念さと、くやしさで、きりきり舞いをする思いだった。

長篠の合戦で大勝すると、信長はその勢いをかって、その年の八月に、越前一向一揆を征伐した。すなわち昨年の伊勢長島につづいて越前一向一揆を退治して、石山本願寺支振の根拠地を壊滅させたのである。

そして次の年、すなわち天正四年（一五七六）二月に、天下征覇の拠点として、琵琶湖畔に、七層天守閣を持つ巨大な安土城を完成させた。安土城建築に当っては、久秀の多聞城が大いに参考になっていた。

天正四年五月に信長はいよいよ、畿内に唯一残る敵である石山本願寺の攻撃に取りかかった。

信長軍は六千余の軍兵をこれに向けた。

これに対し石山本願寺の方は、諸国の門徒四万人が集結して、八町四方の寺域に立てこもった。そしてその勢力の中核は、四千挺ともいわれる鉄砲を駆使する、紀伊雑賀鉄砲衆であった。

そのため石山本願寺の勢力は強硬で、信長軍の先手は潰走せざるをえない破目に陥った。また後詰めの軍勢も苦戦し、総崩れとなった。そのため、やむなく信長軍の中核は、天王寺村の四天王寺に立てこもらざるをえなかった。

この時信長は京都の妙覚寺に宿陣していたが、信長軍総崩れの報を聞くと、ただちに諸大名に陣触れを出し、また自分自身も出陣した。そして石山本願寺周囲の天王寺に付け城を構えて、諸将にこれを守らせ、兵糧攻めの持久作戦をとった。

そして久秀も、佐久間信盛たちとともに、天王寺付け城の定番に置かれた。

しかし天王村の砦や付け城は、仮普請のため、要害とはいえなかった。だから本願寺勢の猛攻にさらされ、天王寺砦は陥落する危険もあった。もしそのようなことがあれば、畿内の形勢が急変しかねなかった。

だから信長軍の諸将の中にも、微妙な動きをする者が出るのは当然だった。その中でも、

（松永久秀がもっとも危険だ）

と信長は見ていた。そしてもし久秀が変な動きをすれば、同調する大名や豪族が他にも現われる危険があった。

信長は天王寺砦の援軍のために、三千人の軍勢を揃えていた。三千人を三組に分け、第一陣には佐久間信盛、松永久秀、細川藤孝などがいた。久秀は信長の動静に眼を光らせ、虎視眈眈と脱出の機会を狙いながら、何くわぬ顔をして、本願寺攻撃の隊列の中に身を置いていた。

天正四年五月七日の夜明け、本願寺門徒勢二万人と、信長勢一万人との死闘がはじまり、それは二刻ほどつづいた。そして本願寺門徒勢は信長勢の猛攻に屈して、退却しはじめた。

久秀もその信長勢の中に混って戦っていたわけであるが、戦いながらも久秀は、

（本願寺門徒勢は退却したが、まだ勝敗は決ったわけではない。石山本願寺がそんなにたやすく落ちるはずがない。上杉謙信や毛利輝元の応援もある。必ず信長を倒す機会はある）

と、胸に秘めた悲願の灯は消さなかった。

事実、毛利輝元も、久秀が期待していたように、本願寺へ兵糧を送るために、天正四年七月に六百余艘に兵糧を積み、兵船三百余艘に警固させて、本願寺を目ざして、木津川河口へ向っていた。

木津川河口は信長の水軍四百艘が封鎖していたが、毛利船団は海戦の駆けひきに習熟した強軍である。熾烈な海戦の結果、毛利水軍が大勝した。毛利軍が大坂湾の制海権を握れば、石山本願寺への兵糧、弾薬の補給が可能になり、本願寺はゆるぎはしないであろう。

その報告を聞いた久秀は、

（うむ、今度ばかりは信長も立ち直れないだろう）

と顔に凄い笑みを浮かべた。

翌年（天正五年）の二月、信長は兵力六万余人を率いて、紀州へ向った。本願寺勢の中核である、雑賀門徒討伐のためである。

信長が総力をあげて石山本願寺を攻撃しても陥落しないのは、鉄砲の威力を持つ雑賀勢がいるためである。本願寺を撃滅させるには、中核である雑賀を撃つ必要があるからである。

久秀は五千の兵をひきいて天王寺定番をしていたが、

（雑賀勢は手ごわい相手じゃ。そうやすやすと信長の手に落ちるものか）

と冷やかな眼で眺めていた。

さて、この時点での天下の形勢を眺めてみると、信長によって京を追われた足利義昭は備後の鞆にいたが、まだ京への帰参をあきらめてはいなかった。そのために越後の上杉謙信を味方につける工作に狂奔しており、その効果が次第に現われてきていた。その動きと並行して、

謙信も昨年（天正四年）五月に、宿敵であった石山本願寺顕如と和睦していた。

また北条氏政も昨年（天正四年）八月に、反信長戦線に参加していた。

その後、越前、加賀の一向一揆もいっせいに蜂起して、信長へ果敢なゲリラ戦を挑んでいた。

久秀は天王寺定番として本願寺を攻撃するふりをしながら、

（上杉謙信は間もなく京都へ兵を進めてくるであろう。そうなれば、今度ばかりは信長も進退きわまるであろう）

と、上杉謙信と頻繁に連絡をとりながら、裏で本願寺顕如と通じていた。そして、

（そうなれば、いつまでも信長の尻にくっ付いている必要もないわい）

と、もう一度信長へ叛旗をひるがえす時が来たのを、本能的に感じ取っていた。

そして久秀の予感は当った。天正五年七月になると、上杉謙信は大兵をもって七尾城攻撃のために、越中へ乱入した。上杉謙信の西上が始ったのである。

久秀はこれを知ると、

「いよいよ謙信が動き出したか。これでやっと、わしの信長へ叛旗をひるがえす時が来たわい」

とその妖怪な顔に眉を決した。

「わしはもう二度と信長へは降参せぬぞ。こうなれば、喰うか、喰われるかだ」

そう決心すると、これまで久秀を押えつけていた信長という重石がすっと肩から外れた気がして、気分が軽くなった。

意を決すると久秀は、天正五年八月十七日に突如として大坂天王寺を引きはらった。

すなわち十七日の深夜、久秀の軍勢は陣屋に篝火を燃して在陣を装い、他の付け城の者たちに気づかれないように、ひそかに天王寺の付け城を引きはらったのである。主将の佐久間信盛が、紀州の雑賀の残党を征伐するために出張っていた留守を狙ってのことだった。

久秀は八千余の兵力をひきいて河内平野をまっしぐらに東へむかうと、明け方近くに信貴山城へ帰り着いた。そして信貴山城と、麓の松尾城に分れて、立てこもった。

そして翌日から、信長軍の攻撃に備えて二つの城の補強工事にかかり、兵糧米の備蓄にもはげんだ。

（十一）信貴山籠城

石山本願寺を攻撃するための天王寺の布陣から、久秀が突如脱出して、信貴山城へ帰ってしまったとき、信長は安土城にいた。

京都所司代村井貞勝の使者が、その久秀の動静を知らせるために、早馬で安土城へ駈けつけて、

「松永弾正久秀が八月十七日に謀叛を企てて大坂表を引きはらい、大和信貴山城へ帰り、立てこもりました」
と報告すると、信長は、
「爺め、やっぱり、やりおったか」
と、ふんと鼻先で笑った。しかし、
（久秀の奴め、おれが読んでいた時点よりは、少し早いな）
と警戒する眼になった。
信長にとって久秀は、どうしても欲しい味方ではない。しかし、敵に廻せばうるさい相手である。いま信長は、石山本願寺、雑賀衆、上杉謙信、毛利輝元と、四勢力に取り囲まれ、あまつさえ石山本願寺を攻めあぐねている。うるさい敵は一人でも少い方がいい。久秀はいつかは謀叛する人間だという覚悟は、信長の中に出来てはいる。しかし、今は時機が悪い。そういう意味で、少し早いな、と警戒したのである。
そこで信長は、久秀と親交のある堺の松井友閑のところへ使いを出し、久秀を翻意するように命じた。
松井友閑はただちに信貴山へ行き、久秀に会って、懸命に諭した。
「この時になって信長公に弓を引くとは、いかなる魂胆か。叛いて勝てる算段があるのならまだしものこと、勝てるわけがない。いかにこの信貴山城が名城だといっても、信長軍に攻撃されたら、ものの一ヵ月も持ちこたえられはしまい。だから、お詫びをした方がいい。わしが間に入って取り次げば、必ず信長公は許してくれる。条件としては、おぬしが高野山へ隠居することと、平蜘蛛の茶釜を差し出すことじゃ。悪いことは言わぬ。ぜひ、そうされよ」
懇懇と話したが、久秀は説得に応じようとはしなかった。久秀の腹はすでに決っていたからである。
「友閑殿、そなたの御意見はありがたい。が、わしはこれまで自分の胆力で浮世の荒波を乗り切ってきた。その世渡りのために、時には心ならずも信長に服従の態をよそおうてきたが、いつまでも己れをいつわって、信長にひれ伏して生きることは出来ぬ。わしも、もう六十八歳じゃ。自分の人生は、自分の意思で生きてみたい。もう偽りの人生は、生きたくない。たとえそのために、自分の人生が滅びようとも、少しも悔いはない。男は自分の一生の締めくくりを、自分の手でつけなくてはならぬ。その時が、わしには来たのだ。信長に情けを乞うて生きのびたとて、それが何になるであろう」
そこには久秀の人生を賭けた決意が吐露されていた。
久秀はさらにつづけて、
「友閑殿、悪人にも、悪人としての本性があるのでござるぞ」
そう言って、は、は、はっ、と笑った。それは友閑にむかって言うというよりも、信長にむかって叫んでいるかのようであった。そして最後に久秀は、ぽつんと一言、
「友閑殿、わしはな、一度だけ、信長に反抗してみたかったのじゃ。ただ、それだけのことなんだよ」
久秀は宙の彼方にむかって、虚無的に笑った。
「友閑殿、おぬしとは長い間のよき朋友として、厚くお礼を申す。じゃが、これが今生の別れだ。安土城へ戻って信長へ申してくれ、『久秀はもう信長のところへは戻りませぬ』とな。わしは逃げも隠れもせぬ。この城におる。信長に、存分に討ち果たせ、と申してくれ」
そこまで久秀の決意が固ければ、これ以上友閑は言うべき言葉を持たなかった。
「わかりました。立派な覚悟でござる。感服いたした。たが久秀殿、一つだけ配慮した方がいいことがある。それは平蜘蛛の茶釜じゃ。平蜘蛛の茶釜だけは、信長殿に献上された方がいい。あれは天下の名器、世に残し、後世に伝えてこそ、価値がある。信長殿の手に渡れば、平蜘蛛の名器も、後世に末永く残ることで出来るであろう」
久秀は当時の武将の心得として、茶道にも通じ、高価な名物茶器も秘蔵していた。その中の代表的なものが「平蜘蛛の茶釜」と「つくも茄子の茶入れ」であった。中でも平蜘蛛の茶釜が最高のものであった。
二つの秘蔵品の中の「つくも茄子の茶入れ」は、すでに久秀が信長に服従を誓ったときに（永禄十一年）、信長に献上してしまっていた。最高級品である平蜘蛛の茶釜の方は、手許に秘蔵して手放していなかった。
平蜘蛛の茶釜というのは、平釜の一種で、ちょうど蜘蛛がぺったりと地面にへばりついたような恰好に見えるところから、平蜘蛛という名前がつけられたもので、名器中の名器と評判が高かった。
（その茶釜を信長に差し出せ）
というのである。信長は平蜘蛛という名器を欲しいこともさることながら、久秀が最高品として愛蔵しているものを、久秀から取り上げたいのだった。
久秀は首を横に振った。
「信長があの茶釜を喉から手が出るほど欲しがっているのは、重々承知している。しかし信長が本当に欲しいのは、茶釜ではなくて、茶釜を差し出すわしの『心』が欲しいのだ。だが、わしは『心』を信長へは渡さぬぞ」
信長は茶道具の名器に眼を光らせ、名器集めに異常な熱意を示していた。そのため諸大名、諸武将は、きそって所有の名器を信長に献上していた。
信長が名器を集めるのは、その名器を欲しいというよりも、誰が、どの名器を差し出すか、その各人の覚悟のほどを知りたいのである。一番大切な名器を差し出すか、一番目のものは隠しておいて、二番目、三番目のものを差し出すか、それによって信長への忠誠度が判るのである。
したがって信長が名器を並べて茶会を開くのは、茶会

が好き、名器が好きというよりも、集めた名器を人々に見せびらかすことによって、

（これは誰が差し出した茶椀、これは誰が献上した茶入れ）

と、大名の名前を見せびらかすのが目的だった。そして、

（これは誰々の一番の宝物だ）

（これは誰々の宝物といっても、二番手のもので、一番手ではない）

と、宝物のランク付けを無人の眼に示すことによって、

（だから、誰々の忠誠心は一級で、誰々の忠誠心は二級だ）

と、信長への忠誠心の度合いを発表しているのだった。

久秀は信長へすでに「つくも茄子」の茶入れを献上しているが、それは久秀にとって二番目の宝物である。それが信長には不満なのだった。だから一番目の平蜘蛛の茶釜を要求しているのである。しかし久秀は、

「わしの白髪首と、平蜘蛛の茶釜は、わしが冥土への土産なのじゃ。いかなることがあろうとも、信長へ渡すわけにはいかぬ。もし、どうしてもと言うのなら、信長自身がこの場へ来るべきではありますまいか」

断固と拒否した。

そこまで言われては、友閑も引き下がらざるを得なかった。

友閑が安土城へ戻り、その旨を信長に報告すると、信長は眼を閉じ、

「……」

無言でそれを聞いていたが、ややあって、

「爺め、立派な心境になりおったな、気に入ったぞ」

と、うめくように言った。が、

「しかし戦乱の世じゃ。みせしめは、きっちりとつけねばならぬ」

そう言うと信長は、ただちに、久秀から預っている人質の成敗を部下に命じた。

人質になっている二人の少年は、久秀謀反のみせしめに、翌日、京都の六条河原へ牛車で曳かれ、磔にかけられた。

（十二）　謙信の動向

久秀は上杉謙信の西上を待ちわびていた。

久秀が信長への謀叛に踏み切ったのは、反信長戦線の中心として、上杉謙信の活動が期待されるからだった。

その久秀の期待通りに、上杉謙信は天正五年七月には、能登の七尾城を陥し、さらに加賀の尾山城を包囲した。能登、加賀を席捲した上杉軍へ、さらに地侍が続々と加わったので、総勢で三万余にふくれ上った。それを聞く

と、久秀は、

（謙信め、なかなかやるわい）

と満足した。

謙信は七尾城につづき、尾山城もたちまち降参させた。

そしてさらに越前へと転進し、信長軍と戦った。上杉軍は優勢なので、信長軍はじりじりと押され、近江まで引き下ってしまう始末であった。久秀が、

（うむ、これは調子がいいわい）

と思っていると、どうしたわけか、九月下旬（天正五年）になると、謙信の軍がぴたりと止ってしまったのである。止ったどころか、上杉軍は越中に後退してしまった。

間もなく雪の季節である。北陸は冬になると、雪が降りしきる。雪では戦争が出来ない。

（上杉謙信はいったん越後の春日山へ凱陣し、来年春の雪どけを待って、ふたたび兵を出す）

ということのようであった。久秀は、

「なんてのんきなことを言っているのだ」

と地団駄を踏んだが、どうしようもなかった。

しかし謙信の退却の理由は、たんにそれだけではなかった。相模の北条が関東へ出撃してきたので、謙信が本国越後を留守にしていては、危うくなってきたからである。関東、越後を、北条から守るための撤退だったのである。

「うーむ」

と久秀はうなり、

（信長め、北条をそそのかして、上杉謙信の背後を撹乱させたな）

と、怒りが身体中を熱風のように駆けまわった。

やにわに久秀は、ピラニアの入ったギヤマンの水槽に駆け寄ると、

「やい、信長猫を持て！」

と叫び、家臣が持ってきた飼い猫を、

「信長猫め、食われて死ね！」

と、水槽の中へ突っこんだ。

ギャー

叫びもがく猫の周辺で、ピラニアの群がキラキラと金属片のように光ったかと思うと、猫は殺人魚の群に食いつかれて、ぴたりと動きを止めた。

久秀はしばらく水中の猫の死骸を眺めていたが、

「信長め、腹が立つが、まあ仕方がない。こうなったからには、信貴山城に立てこもり、石山本願寺と毛利軍の援軍を頼みに、来春まで頑張るだけだ。わしの造ったこの信貴山城は堅城じゃ。弾薬や食糧も十分たくわえてある。必死になって守れば、どんな大軍に攻撃されようとも、半年や一年は大丈夫持こたえられるわ。それに信長だって、この信長猫のように、いつピラニアに襲われて死なぬとも、限ったものではない」

（十三）　信貴山攻撃

天正五年九月、信長は大和の筒井順慶に、信貴山城攻撃軍への参加を命じた。

筒井順慶は大和への支配権をめぐって、たえず久秀と雄雌を争っていた武将である。久秀が信長に叛いたと見るや、いちはやく信長はその筒井順慶に目をつけて、久秀を攻めさせたのである。信長の臨機応変の手腕も、並大抵のものではない。

信長の命を受けると筒井順慶は、

（これこそ大和の支配権を久秀から奪い取る絶好の機会だわい）

と勇みたち、五千の軍勢をひきいて、信貴山城攻撃に出陣した。

信貴山城攻撃軍四万の総大将は、信長の嫡男の信忠である。それに明智光秀、細川藤孝、筒井順慶などが従っている。その信長軍は、まず久秀の支城である片岡城を陥すと、十月三日に信貴山城に着陣し、攻撃を開始した。

その夜、信貴山寺の毘沙門堂が焼かれ、攻撃は十月五日から始った。

攻撃の先陣は筒井順慶がつとめ、順慶は信長から報賞を得ようと、激しく攻撃した。

それを迎え撃つ久秀の軍勢は、主君の久秀の性格を反映して獰猛で、攻め寄せる信長軍に、凄まじい勢いで立ちむかった。その決死の防戦のために、信長軍はたじろぎ、攻撃はいったん頓座した。

その戦況を眺めながら、久秀はにんまりと笑うと、

「うむ、しめしめ、目算通り優勢だわい。しかし油断は禁物、合戦の本場はこれからじゃ。とにかく、石山本願寺と毛利軍に連絡して、援軍を急がさせねばならぬ」

と、森好久という武将を、密使として石山本願寺へと走らせた。

森好久はかって筒井順慶の譜代の家臣であった。それが筒井順慶が久秀に攻められて、筒井城を失い、逼塞すると、筒井順慶を見限って、久秀へ寝返った人物だった。目先を読むのが敏捷な男である。

森好久は石山本願寺へ走るべく、信貴山城を出た。

しかし、信貴山城を取巻いて山野を埋める、信長軍の巨大な軍勢を眼にすると、

（これは城内から見ていた情勢とは大違いだわい。これではとても久秀側に勝ち目はないぞ。この辺で、信長軍の方に付いた方が得かもしれないぞ）

と、勝敗の行き先を読んだのである。

そう判断すると、行動はすばやかった。森好久は、久秀の指示した石山本願寺へは行かずに、信貴山城を包囲する筒井順慶軍の、松倉右近の陣所へ駆けこんだ。ふたたび森好久は寝返ったのである。

「や、や、おぬしは森好久殿……」

と松倉右近は驚いたが、すぐ事情を察知すると、

「わかり申した。すぐご案内つかまつろう」

と、森好久を筒井順慶の本陣へ案内した。

筒井順慶がどう反応するか、森好久には心配であったが、今の戦況では森好久の寝返りは、順慶にとっても大歓迎である。順慶は、以前の森好久の寝返りをとがめることもなく、

「うむ、好久、よく戻ってきてくれた。褒美を取らせようぞ」

そう言って、金子三十両を与えた。二人はしばらく、ひそひそと密議をこらしていたが、

「うむ、それがよかろう。それで行こう」

と筒井順慶が膝をたたいた。その作戦というのは、（筒井順慶が精兵二百人を信貴山城内へ侵入させるのに、石山本願寺の援軍だと偽って入れる。森好久がその導入の便宜をはかる）

という策略であった。

「しかし、ここの陣営からまっすぐに信貴山城へむかっては怪まれるから、面倒でも、いったん精兵二百をひそかに河内の平野まで移動させ、そこから石山本願寺援軍のふりをして、信貴山城へ向かうのがよかろうと思う。信貴山城へ着きましたら、わたくしめが手引きをいたします」

森好久はそう筒井順慶と密謀を練ると、石山本願寺へは行かず、そのまま信貴山城へ戻った。そして何食わぬ顔で久秀に、

「ただいま戻りました」

「うむ、御苦労であった。どうであった？」

「石山本願寺にまいり、顕如上人に会って、援軍のことをよくお願いいたしました。顕如上人は心よくご承知下され、さっそく援兵二百人を送って下さるとのことでござりまする」

森好久は臆面もなくそう答えた。嘘がすらすらと、自分でも不思議なほど、喉の奥から出てきた。筒井順慶への再寝返りが、森好久の心を安定させているのかもしれなかった。

「うむ、うむ……」

この時の久秀には、その森好久の言葉を疑う気持がなかった。それほど石山本願寺の顕如を信ずる心が、強かったのである。

そんな頃からであった。

毎晩のように、西南の夜空に妖星が現われて、異様な光の尾を引きはじめていた。

妖星の中心部は桃色で、周囲は緑色に輝き、三尺ばかりの青白い光芒をひいて、音もなく夜空を横切っていく。それは彗星（箒星）であったが、人々はその異様な星の

ただずまいに、
「あれは、いよいよ松永弾正久秀が滅亡する前兆だ」
と、さわぎたて、この妖星を、
(弾正星)
と呼んだ。

天正五年十月九日の夕方、石山本願寺から信貴山城へ二百人の援軍が到着した。もちろん、森好久と筒井順慶の仕組んだ、偽の援軍である。
森好久がただちに久秀へ、
「約束した石山本願寺の援軍が到着しました」
と報告すると、
「うむ、ただちに城内へ入れろ」
偽せの援軍はうまうまと、信貴山城の中へ侵入することが出来た。
筒井順慶は、城内へ侵入した二百人がどんな行動を起こすか、心待ちにしていた。
すると夜に入って、信貴山城のあちこちの曲輪から、火の手が上った。
そして、それがきっかけになって、十月十日の未明から、筒井順慶軍の猛攻撃が開始された。
筒井勢は鬨の声をあげて、山上に迫った。それに対して松永勢も荒れ狂って防戦し、筒井勢に甚大な損害を与えた。

その時であった。
城内の煙硝倉が轟音とともに爆発し、城内からいっせいに火の手が上った。城内に入りこんだ偽の援軍の、内部破壊行動が始ったのである。
「寝返りだ！」
「裏切者が出たぞ」
城兵たちは、たちまち浮き足立った。
城兵が、本丸に控える久秀のところへ、
「森好久が導入しましたのは、石山本願寺の援軍などではありませぬ。偽の援軍です。本当は筒井順慶の鉄砲隊にござります」
と報告に走った。
久秀の顔はにわかに引きつり、
「なに、好久に謀られたのか…」
血を吐くように叫び、
「好久め、まだ筒井順慶と手が切れていなかったのか」
と、すさまじい勢いで宙の一点を睨んだ。
だが、久秀の怒りはすぐ、
「ふ、ふ、ふ…」
と不気味な笑いとともに、平静に戻った。
(おれも散々やってきたことだ。そして今、それをやられているのだ。好久もおれと同じことを、やっているだけのことではないか)
死を決している久秀の心は、不思議と平静であった。

(十四) 信貴山城炎上

偽の援軍として城内に入った筒井順慶の軍勢によって、信貴山城内は混乱に陥り、それを合図にして、信貴山城を取り巻いていた信長勢がどっと城内に押し入って、阿鼻叫喚の死闘が終日つづいた。
久秀は本丸の天守の広間に陣取っていた。
が、不思議なことに、信貴山城に立てこもってからの久秀は、まるで憑きものが落ちたように、生き生きとしていた。それは信長への偽りの服従、偽りの生き方から脱して、自分本来の姿に戻って生きているという、生命の充実から来るものだった。
これから城といっしょに死ぬのだというのに、生き生きとしている。それは「死ぬ」ことによって、自分本来の生き方を生きているという、生命の燃焼なのだった。
すでに日は暮れて、信貴山城は夕闇に包まれ、闇の中で炎上する曲輪の炎が、あちこちに見られた。
久秀がその炎と、夕空とを等分に眺めていると、家臣が、
「殿、あれに弾正星が現れております」
と、夕空の一角を指さした。すると久秀は、
「なに、弾正星とな。そちは世間で噂しているように、『松永弾正久秀の滅亡の前兆として妖星が光っている』と、そう言いたいのであろう」
と、家臣と弾正星とをじろりと睨んで、
「この久秀が滅亡だとな…？　馬鹿なことを言うな。わしは滅亡などせぬわ。わしは自分の意思で死ぬのだ。星などのせいではない。弾正星などというものが、あるものか。ただの星にすぎない。天体の現象によって、ただの彗星が光っているにすぎないのだ。わしの運命などと、何のかかわりがあるものか」
弾正星などというものは、たんなる天体の物理的現象にすぎないと、言い切ったのである。戦国時代には珍らしい、神や仏を信ぜぬ、合理主義者、唯物論者である久秀の、面目躍如とした発言であった。
そしてこうした面は、久秀と信長の共通した性格でもあった。そうした意味で信長と久秀の攻防は、似た者同志の愛憎劇だったのではあるまいか。

西南の夜空にかかる妖星から眼を離すと、久秀は冷静な口調で、
「灸の用意をせい」
と命じた。久秀は中風の予防のために、灸を脳天にすえるのを日課としていた。しかし、死を前にして中風の予防でもあるまいと、家臣たちは不思議に思い、
「えっ、灸でございますか？」
と顔を見合せた。すると久秀は、けらけらと笑って、

「腹を切るときに、中風の発作が起って手許が狂っては、末代までの恥となる。それで用心するわけよ。さあ、早くせい」

側女が後にまわって、ふるえる手先に線香を持って、灸に火をつけた。

やがて白い煙が頭頂からまっすぐに立ちのぼると、久秀は眼をつむって、じっとその熱さに耐えていたが、その泰然とした態度は、家臣たちの眼には、死を前にした久秀の秘儀のように映った。

あたりは森閑として、敵軍に包囲された城の中で行われているとは思えないほどの、静寂さであった。

やがて灸の煙が消え去ろうとしている頃、広間の一角から、

シュン、シュン、

という清冽な音が聞えてきた。

久秀はうすく眼を開けてその方を見た。久秀はこの世の名残りに、天守の広間で茶を点てようと、風炉に平蜘蛛の茶釜をかけておいた。その湯がわいたのを、告げているのだった。

久秀は席を立つと、風炉の前に座った。

まもなく茶釜の湯は沸騰して、蓋が小刻みに鳴り出していた。蓋の音はときどき中断して、煮えたぎる湯の音だけになったかと思うと、また強く湯気をふき出して、蓋を鳴らした。

その茶釜の姿は、あたかもその場に身を構たえた大蜘蛛が、熱さに身もだえして、這い出そうとしているかのようだった。

すると、その釜鳴りの音は、久秀の耳には、

(信長死ね…)

(信長め!)

と聞えてくるのだった。その幻聴を聞いたとき、茶を点てようとする久秀の気持が、突如、あらぬ方向に変った。

久秀は興奮した声で、

「急いでピラニアのギヤマンを持ってこい」

と命じた。家臣たちが、

「えっ、なぜ?」

という質問を許さず強硬な口調に、家臣がピラニアを飼っているギヤマンの水槽を広間に運んできた。

久秀はやにわに水槽を横に押し倒すと、水を床の上にぶちまけた。放り出されたピラニアの群が、床の上でピチピチと跳ね廻る。

久秀は茶釜の蓋を外した。

そしてピラニアの一匹を指先で捕えると、煮えたぎる湯の中へ、

「信長め、死ね!」

叫んで、投げ入れたのである。人が恐れる殺人魚も、熱湯にはかなわない。ピラニアはあっという間に、熱湯の中で死に絶えた。

「思い知ったか、信長め!」

久秀は床の上で跳ね廻るピラニアを次々に掴んでは、茶釜に投げ入れた。

それはあたかも大蜘蛛が、次々に殺人魚を食べつくす様にも似ていた。

ピラニアが一匹ずつ、熱湯の中に消えるたびに、久秀の脳裏には、熱湯に焼けただれて絶叫する信長の姿が、鮮やかに浮かび上ってくるのだった。

ピラニアはすべて死に絶えた。

そのとき広間の中へ、三の丸や馬屋丸の方から流れてくるきな臭い煙が、しのび込みはじめた。

それは信貴山城の最後が近いことを告げていた。

広間の壁ぎわには、かねて火薬庫から運びこまれた火薬樽が、積み上げられていた。久秀は眼でその樽の数をもう一度確認して、

(これだけあれば、おれの首も、この平蜘蛛の茶釜も、木っ端微塵まちがいない)

とつぶやいた。

久秀は死後、自分の白髪首と平蜘蛛の茶釜を、意地でも信長の手に渡したくないのだった。火薬で木っ端微塵にしてしまえば、信長の手に渡らなくてすむ。平蜘蛛の茶釜を冥土の土産に持っていくことが出来る。それが死に際しての、久秀の作戦だった。

寄せ手の攻撃も、一瞬手を止めて、静まり返っている。それは久秀の最後を待っている、一瞬の静けさのようであった。

久秀は家臣に命じて、天守閣に火を放たせた。

そして、その炎が次第に燃えひろがってくると、久秀はおもむろに火薬樽に火を放った。

瞬間……、

天地も引さく大轟音とともに、四層櫓の天守閣は空中に飛び散り、久秀の身体も、平蜘蛛の茶釜も、跡かたもなく微塵に砕け散ってしまった。

こうして妖星松永弾正久秀は、信貴山城の炎の中で、六十八歳の凄絶な最後をとげたのである。

そして奇しくもこの日は、十年前に、久秀が奈良東大寺の大仏殿を炎上させた日(永禄十年十月十日)と、同じ日であった。

(十五) エピローグ

久秀が死んで五年後の、天正十年(一五八二)六月。

信長は毛利攻めの途中、京都の本能寺において茶会を開き、明智光秀の襲撃によって、この世を去った。

その茶会の席に信長は三十八種類の名器を並べたてたが、その中には、かつて久秀が信長に献上した「つくも

茄子」の茶入れもあった。

久秀は平蜘蛛の茶釜とともに、炎の中でこの世を去り、信長はつくも茄子の茶入れともに、同じく炎の中でこの世を去った。

「つくも茄子」の茶入れが久秀や信長をあの世へ導いたなどという因縁めいたことを言えば、合理主義者、無神論者の信長も久秀も、からからと大笑いすることであろう。

（終）

新八礼讃

千坂精一

一

奥羽山脈や朝日、飯豊、吾妻の連峰など優に千メートルを超える峻険に囲まれている出羽國（山形県）米澤盆地は、冬は豪雪に埋もれ、夏は猛暑に辟易させられる。

その高温多湿の夏も、このごろ秋の気配を窺わせる涼風を受けて、ようやく重い腰を上げようとしていた。

藩校の道場でたっぷりと汗を掻いた山吉新八盛侍は、いつものように遠回りして城下を流れる松川の土手に出ると、川面を渡る風で涼を取りながら悠くり散策した。

新八は、二十五石五十騎組山吉與左衛門盛富の弟で、二十歳を過ぎた現在もまだ部屋住みの厄介者であった。

米澤藩は寛文四年（一六六四）閏五月七日に先代藩主上杉綱勝が急死したことによって改易させられるところであったが、綱勝の岳父で将軍家綱の補佐役會津藩主保科肥後守正之の計らいで、綱勝の甥吉良三郎の末期養子が認められ、半知十五万石で辛うじて存続が許された。

だがそのため家臣団の俸祿も二分の一に減らされた。

このことによって貧窮に陥った下級家臣たちは、荒地を開墾して糧を得る半士半農の生活を余儀なくされた。

このとき、山吉家では祖父五左衛門盛長が二百石だったので百石の減俸ですんだが、父七郎左衛門盛俊の代で五十石に減り、さらにまた兄盛富の代では二十五石になってしまったので、新八は生涯部屋住みで兄に扶養してもらうわけにはいかなくなった。

（俺の行く末はどうなるのだろう）

財政逼迫した藩が、新規に召し抱えることなどしてくれるはずはなかった。

別家を立てることも、生涯部屋住みで暮らすことも叶わぬとなれば、他家へ養子入りするしか方法はない。

しかし、それとてもこれまでに話はまったくなかったのだから、このさきも希みなどあろうはずはなかった。

そうなると、あとはもう僧侶か農民にでもなるよりほかに生きて行く道はない。

新八は、先行きの不安を振り払うように武術の鍛錬に励んだ。

稽古に打込む新八の様子をみて、道場の仲間たちは、

「いくら伎倆を磨いたところで、この太平の世で役立つことなどありはしないさ。ほどほどにしておくがいい」

そう言って新八の時代錯誤を嘲笑って冷やかしたが、新八は武士を捨てることへの未練からまるでなにかに憑かれたかのようにますます稽古に励んでいった。

誰も彼もが武術は程々でよしと考えているのに、新八だけがのめり込んでいるのだから当然腕前に差がついていき、いつか新八は道場一の遣い手になっていた。

だが、新八はときおり考え込んでしまうことがある。

(この太平の世に果たして武士は存在意義があるのか)

迷ったあとで、

(このまま武士でいられるのなら武術の鍛錬は必須だが、農民になるのならむしろ鋤鍬の使いかたを、僧侶の道を選ぶなら看経に励んだほうが賢明なのではないか)

そう問いかけると心が揺れて、このさき果たして武士でいられるかどうか判らぬ身でありながら武術修行に励んでいることがなんとも虚しく思われてくるのだった。

毎日この土手を歩きながら、そんな思いに落ち込み、

(俺はいったいどうやって生きていったらいいんだ)

そう叫びたい衝動に駆られる惨めな新八を、川面を渡る涼風がやさしく頬を撫でて慰めてくれた。

二

そんな新八に思い掛けない転機が訪れたのは、元禄五年(一六九二)二十三歳のときである。

盆地を襲っていた猛暑つづきもようやく収束に向かい、朝夕には秋の気配が漂いはじめたころであった。

いつものように稽古帰りに松川の土手を散策して屋敷に戻ると、いつになく嫂が微笑を湛えて出迎えてくれ、

「兄上様がさきほどから仏間でお待ち兼ねですよ」

そう急き立てた。

新八は、兄與左衛門がわざわざ自分を父の位牌のまえに呼びつけることを訝りながら嫂の顔色を窺い、

「なんの話でしょうか」

そう探索を入れてみた。

「よいお話がおありのようですよ」

嫂は、にこやかな笑みではぐらかした。

(ひょっとして諦めていた養子話でも入ったのかな)

新八は、そう思いながら、直接仏間へ向かった。

「新八、遅かったではないか」

仏間へ入るなり、待ち倦ねていた與左衛門が咎めた。

「なにごとですか、兄上」

「まあ、そこへ坐れ」

ひとあし遅れて、嫂も部屋へ入ってきた。

「今日御家老の須田様から呼び出しがあって登城したところ、新八、よろこべ、おまえの仕官が決まったのだ」

「えっ」

新八は一瞬わが耳を疑った。まさか自分が仕官できるとは思ってもいなかったので俄には信じられなかった。

「それが急な話で、早速江戸へ出立せよとのことだ」

「江戸詰ですか」

「そうではない。一昨年吉良家へ養子にお入りなされた左兵衛義周様の近侍にお取り立ていただけたのじゃ」

「吉良家へ行くのですか」

「そうじゃ。左兵衛様には養子入りなされるときすでに上杉家中から村山甚五右衛門殿を新貝彌七郎殿が随行しておられるが、もう一人ご所望とのことなのじゃ」

「そうですか。江戸詰ではなく吉良家へですか」

新八は気がすすまなかった。

吉良家の当主上野介義央の父義冬は、先代綱勝を毒殺して上杉家を乗っ取ったといわれている人物であった。

「儂とても吉良家勤仕ときいて手放しでは喜べなかったが、ご下命とあらば止むを得まい。江戸藩邸へまいり御家老千坂兵部様のご指示を仰げとのことであった」

新八は、たとえどのような勤めであろうとも武士を捨てるよりはましだ、と慰めるよりほかはなかった。

そんな新八の複雑な心境をよそに、嫂は厄介払いできることをよろこんでか、祝いの膳を仕度してくれた。

新八は、兄與左衛門と苦い酒を汲み交しながら、明日道場へ行って仲間たちに訣れを告げれば祝福どころか顰蹙を買って軽蔑されるに違いないと思い気が重かった。

いや、すでに噂は広まっているかも知れなかった。

翌日、登城して須田家老から正式に下命を受けた新八は、道場へ回ると稽古をしていた人たちに手早く挨拶をすませてから、いつものように松川の土手に向かった。

(吉良家に出仕すれば、生涯江戸詰で終ろうから二度と米澤の土を踏むことはないであろう)

新八はそう心に決めて重畳たる吾妻連峰や松川などの田園風景を飽くことなく眺め回しながら、これで故郷の山河は見納めかと思うといつになく感傷的になり、名残りを惜しんで当て所もなく彷徨い歩いた。

三

九月四日に米澤を出立した新八は、関根、大澤を経て板谷峠を越え、福島領の李平へ降りて庭坂で宿泊した。

福島は現在譜代大名堀田正仲十万石の城下町であるが、先代藩主綱勝までは上杉領だったから懐かしかった。

（あの事件さえ起きなければ、所領を半減された上杉家の家臣団は窮乏に喘ぐことはなかったのだ）

そう思うと、没収地を行く新八の足取りは重かった。

米澤から江戸までは七十七里十丁（三百キロ余り）ほどある。その道程を新八は七泊八日の旅を重ねて十一日の朝千住宿を出立し、ようやく江戸の土を踏んだ。

なにしろはじめての江戸で右も左もわからぬ新八は、教えられたとおり只管江戸城を目指して歩きつづけ、夕刻近くになってようやく内堀櫻田御門まえの外櫻田にある上杉家上屋敷（藩邸）に到着した。

新八は応待に出た老家臣に案内されて仲間部屋のような小部屋に入って旅装を解くと、酒肴を与えられて旅の労を犒われ、夕食をすませてその日は床に就いた。

翌日、朝食をすませたところへ昨日の老家臣がやってきて江戸家老千坂兵部高房に挨拶するよう命ぜられた。

新八は、国許では登城はおろか重臣がたに対面するなど滅相もないことだったので予期せぬことに驚いた。

恐縮して到着の挨拶に出向いたところ、直々に吉良家出向の心構えを諭された。これとても異例であった。

「当家と吉良家との関わりについてはその方も国許で風聞いたしておろうが、むかしのことゆえ忘れて勤めよ」

新八は、当時の無念な様子を聴かされたうえで、

「しかと、心いたせよ」

そう戒められると思っていたところを逸らかされて、

「ご家老はあの存亡の危機を口惜しく思われませぬか」

身分も弁えずそう問い質してしまった。

「あのとき儂はまだ無役であったが、父兵部高治の手伝いをいたしておったゆえ、一部始終を見聞いたした」

兵部は、語気鋭く新八の詰問を撥ね返した。

二十八年まえの寛文四年（一六六四）閏五月朔日、在府大名総登城で出仕した綱勝は、帰路妹富子の婚家外堀鍛冶橋内の吉良邸へ立寄り若狭守義冬、上野介義央父子と面談した。

吉良家では昨年十月に富子が出産したばかりの嫡男三郎を綱勝の生母生善院に請われて上杉家の養子に差し出したが、まだ幕府に届出をしてくれていなかったので参覲で出府した綱勝が立ち寄ったのをさいわい督促したのだが、綱勝はよい機会を見てとその場をはぐらかした。

綱勝にしてみれば生母が血筋の絶えるのを心配して娘の子をと先走ったまでのことで、まだ二十七歳の若さでわが子が出来ぬとは信じられなかったのであろう。

上杉家では生母のほかにも綱勝の寵臣で中小姓頭の福王寺八彌が権勢の持続を謀って會津の保科家に取り入り、正之の五男正純を養子に迎えようと画策していた。

義冬・義央父子は、綱勝に男子が授かるかまたは保科正之の五男正純の養子が確定してしまえば、米澤三十万

石を乗っ取る機会をうしなってしまうので焦った。

そんな吉良家の思惑を他所に綱勝は、吉良三郎はまだ仮養子のままでよいと気楽に考えていたのである。

双方ともに結論にいたらず、話が尻切れになったまま、綱勝は酒肴の接待を受けて吉良家を辞したのであるが、夕刻上屋敷に戻ってから腹痛や嘔吐をおこして苦しみつづけ、ついに七日後に急逝してしまった。

「あのとき、この上屋敷におられた重役は、参覲に供奉して出府なされた国家老澤根伊右衛門恒高様、三番組侍頭須田相模秀満様、それに江戸家老の父であった」

兵部は当時のことに思いを馳せているかのように、顔をあげてじっと虚空に視線を向けたままそう呟いた。

「そのとき、ご重役がたはいかがなされました」

新八は、そのあとを知りたくて責付いた。

「うむ。ご重役がたは養子届を出してなかったのが不運ではあったが、しかし、吉良家に乗っ取られるくらいなら改易されたほうがましだ、と開き直られた。ただし、御敵を討ち取り吉良家をも廃絶させなければ武士の意地が立たぬと、ご一同は堅く心に誓ってそう申された」

須田相模率いる三番組の武装集団がひかえていた。

「そこまでお覚悟なされましたか」

「だが、急を聴かれて駆けつけられた保科中将様に、家臣たちの動揺を鎮め軽挙妄動を慎むよう強く諫められて、やむなく涙を呑んで思い留った。無念であった」

そして上杉家は保科正之の尽力により半知削減で吉良三郎の養子が認められ、辛うじて断絶を免れたのだった。

「あのときわが父は、みずからを慰めるようにして『君は一代、家は末代じゃ』と呟かれた。つまり政務を預かる立場にある者として、たとえ主君は上杉の直系でなかろうとも、家名が存続すればそれでよしとせねばならぬと、無念の思いを断ち切ろうとしておられたのじゃ」

「われらは、その三十年まえに起こった御家騒動を人伝に聴いて無念のあまり悲憤慷慨いたしておりまする」

「新八。武士はいさぎよくあらねばならぬ。じゃによってそちは吉良左兵衛義周様にお仕えするのではなく上杉春千代様の小姓を仰せつかりお仕えするのだと心得て励めよ」

兵部に懇々と諭された新八は、米澤から引き摺ってきた蟠りが吹っ切れて、心機一転することができた。

その夜新八はもう一泊したが、明日から吉良屋敷住居になると思うと、なにかと気懸かりで寝つけなかった。

翌日新八は兵部に随行して鍛冶橋の吉良邸へ赴いた。

まず小林平八郎、左右田孫兵衛、齋藤宮内、松原多仲らの重臣に面接して着任の挨拶をしたが、武辺を誇る上杉家とは異なり松原のほかはいずれも老齢で見るからにおっとりした人物たちばかりだったので拍子抜けした。

足利将軍家の一族を祖とする高家筆頭の吉良氏は、武家といっても幕府の典礼、朝廷との諸礼や使節、勅使の

接待、伊勢大神宮や日光東照宮への代参などを司る役職にあるのでむしろ公家に近く、四千二百石の禄高だから大名ではないが権威を笠に着て自尊心が高かった。

新八には十五万石の上杉家でさえ家老は国許に三人、江戸に一人であるのに、高々四千二百石で同数とは体裁を繕って兄栄を張っているようにしか思えなかった。

いよいよ兵部に伴われて奥座敷へ罷り越し、当主上野介夫妻に目通りすることになった新八は唧か緊張した。

「出羽米澤の上杉家家臣山吉新八盛侍でござりまする」

怨みを抑えて鄭重に挨拶をしたが、上野介は軽く頷いただけで、長旅の労を犒う慰めの言葉はなかった。

かわりに江戸生まれで米澤を知らぬ富子夫人が、新八の身に付着している実家の香りを懐かしむようにして、

「長旅大儀であったのう。左兵衛のこと頼みまするぞ」

そう声をかけてくれた。

上野介は、新八を無視して兵部のほうに微笑みかけ、

「兵部、またちと無心があるのじゃがのう」

そう唐突に言って膝を乗り出した。

「これより新八を伴い左兵衛様にご挨拶申し上げねばなりませぬゆえ、ご用向きは後刻お伺いいたしまする」

兵部は上野介の矛先を躱すと、新八を促し退出した。

案内も請わずに勝手知った左兵衛の居間へ向かう兵部は、不機嫌を表面に現して苦り切った顔貌をしていた。

初対面の左兵衛は、まだ七歳の少年であった。

「小姓役を仰せ付かり米澤から出府いたしました山吉新八盛侍にござりまする。お見知り置き下さいませ」

新八は、幼君に拝謁すると、丁重に挨拶をした。

米澤十五万石上杉家の二男に生まれながら、祖父と父のあいだで運命を弄ばれたこの幼君が不憫であった。

新八は、

(御家老様の仰せどおり、上杉家御二男春千代君にお仕えする上杉家の臣と心得て、その使命を全うしよう)

そう心に誓った。

四

新八は、上杉家から出向してきている二人とひとつ屋根の下で起居をともにすることになったが、村山甚五右衛門とは親子ほども年齢が違うので敬遠して、もっぱら七歳年長の新貝彌七郎安村と馴れ親しんでいった。

吉良邸での生活に慣れたある日、誘われて新貝の部屋で寛ろぎ、互いの身の上などを明かして話が弾んだ。

「そうか。新八の家は五十騎組か」

「父は五十石拝領いたしておりましたが、兄の代で御家が半知になりましたことから二十五石になりました」

「儂の家は中之間勤めの百石取りだったが、やはり御家が半知になったとき五十石削減されて馬廻組に入った」

「馬廻組は謙信公以来の由緒ある侍組でありますな」

「五十騎組も景勝公御実家の伝統ある侍組ではないか」

「遠いむかしのはなしでござりまする」

越後軍団は雑居で、守護山内上杉家、守護代の謙信実家府内長尾家、謙信のあとを継いだ景勝の上田長尾家、それに揚北衆と言われる揚川（現在の阿賀野川）の北方に蟠踞する鎌倉御家人の末裔などの混合集団であった。

「泰平の世になって武功を誇る機会もなくなり、最早刀は武士を証すための飾り物になってしまった」

「国許では原方衆ですから農作業の傍ら武道に励んでおりますと、城方から鋤鍬持てと揶揄われました」

主家が半知に削減されたとき家臣団の俸祿も半分になったため下級家臣たちは生活に困窮したので城下周辺の原野に屋敷地を与えて住わせた。原方衆と呼ばれたこれら家臣たちはそこで城の防衛と原野の開墾を任務とする半士半農の生活をおくらせた。

そのため、上級家臣の子弟達は下級家臣の子弟達を、

「原方の糞掴み」

と蔑み、

下級家臣の子弟達は上級家臣の子弟達を、

「城方の粥腹」

といってやり返し、仲が悪くなった。

「ほう、新八は原方衆になっても武士の誇りを失わず、武道に励んでおったのか」

「武士として当然のことをいたしておりますまでで、他人に揶揄われるいわれはございませぬ」

「新八は武士の誇りをうしなわぬ天晴れ者じゃのう」

そんな話をして二人で寛いでいるところへ上野介付の家老小林平八郎から新八に呼び出しがかかった。

「また、上杉への使いであろう」

「そのようですな」

新八は新貝に目礼して小林家老のご用部屋へ急いだ。

用向きはいつもの商人に支払う代金の無心であった。

大名小路を通って日比谷御門を出れば外櫻田の上杉家上屋敷はすぐであったが、新八の足取りは重かった。

新八が届けた上野介からの書付を受け取った若侍は、

「またか。御家老は金策にご腐心なされておられるぞ」

そう言うと新八に嫌みをぶつけてきた。

新八とても兵部の心中は察するにあまりあった。

上杉家としては上野介に嫁いだ先代藩主綱勝の妹富子の化粧料は欠かさず送り届けているのに、上野介の嫡男を養子に迎えて当主に立ててからは夫妻の衣服代や交際費、さらには勝手向きの諸費用までも当然のように強請ってくるので、兵部は近臣の者たちに、

「上杉家は、お屋形様を二人抱えているようなものだ」

そう嘆いて遣り繰りに苦労していた。

これまでもっとも金策に苦しんだのは、現在の呉服橋御門内に吉良邸を新築したときの費用の捻出であった。

元禄十一年（一六九八）九月六日、数寄屋橋門外南鍋

町から出火した火災は上野にまでおよび、徳川将軍家菩提所東叡山寛永寺なども焼失する大火になった。

この日、寛永寺では根本中堂完成の落慶法要がおこなわれ、東山天皇の勅額が到着することになっていたことから、のちにこの大火を〈勅額火事〉とよんでいる。

そのとき、鍛冶橋御門内の吉良邸も全焼したので、上野介夫妻は上杉家を頼って麻布中屋敷に寄寓した。

その後吉良家は呉服橋御門内に替地を拝領した。

屋敷新築の膨大な費用は、上杉家に押し付けられた。

兵部はその資金の捻出に窮して、形振り構わず出入りの商人たちのあいだを懇願して調達に奔走した。

綱憲は老齢の兵部を慮って翌年正月六日後任の江戸家老に色部又四郎安長を着任させた。兵部は四箇月かけて色部の指導にあたったのち四月二十三日に引退した。

江戸家老は一人制だったのでいちども米澤へ帰ることのなかった兵部は、二十五年振りに故郷の土を踏んだ。

おそらく浦島太郎のような心境だったであろうが、一年後の五月三日に老衰でこの世を去った。

三人目の兵部を号した嫡男尚親は、宝永四年（一七〇七）四番組侍頭を経て二年後に国家老に就任した。

四人目の兵部安親は、享保十四年（一七二九）三月九日四番組侍頭を経て二年後に江戸家老に就任している。

余談なのだが、この際「千坂は四代つづいて兵部を号していた」ことに触れたのは、明治のおわりから昭和のはじめにかけて活躍した江戸時代の風俗・文学研究者三田村鳶魚がその著書『元禄快挙別録』『横から見た赤穂義士』のなかで千坂兵部について書いているのだが、四人いたことには触れていなかったからだ。

三田村鳶魚は考証に詳しい人であったから大仏次郎も吉川英治も当然参考にしたであろうが、一人と勘違いしてしまったのではないだろうか。

話が横道に逸れたので、もとにもどす。

五

色部又四郎安長が江戸家老に就任して二年後の元祿十四年（一七〇一）、吉良家に大事が出来した。

この年、上野介は朝廷への賀使を勤めることになっていたので、勅使・院使の公家衆接待役はおなじ高家の畠山下總守・大友近江守、品川豊前守に代わった。

正月十一日に江戸を発った上野介は二十八日に京へ到着、所司代松平紀伊守を伴い参内して東山天皇に年賀を言上すると、二月一日に仙洞御所の靈元上皇にも年賀を言上して二十八日に江戸へ帰着、将軍綱吉に復命した。

公家衆の御馳走役は月番老中秋元但馬守喬知がすでに指名してあった。勅使は播州赤穂五万三千石淺野内匠頭長矩、院使は伊豫吉田三万石伊達左京亮村豊である。

畠山によれば、伊達村豊は初役であるが、淺野長矩は

十七歳のおりにいちど経験していたし、去年勤めたばかりの藝州廣島の支藩備後三次の淺野土佐守長澄に問い合わせてすでに準備をすすめているということであった。

準備万端整えて待ち受ける勅使・院使一行は三月十一日にようやく到着、呉服橋御門内の傳奏屋敷に入った。

そして、十二日に将軍綱吉に拝謁して賀詞を述べ、十三日は能楽鑑賞のあと饗応され、十四日に綱吉に暇乞いの挨拶をするというまさにその当日、上野介は殿中の松の廊下で淺野内匠頭に脇差で斬りつけられた。

手負いの上野介は駆けつけてきた高家衆の品川豊前守と畠山下總守に抱えられて辛うじてその場を脱出した。

上野介は高家衆控えの間で外科医栗崎道有の治療を受けたあと神妙に控えていたが、なんのお咎めもなく、「養生いたすように」

の裁定を受けてそのまま帰宅を許された。

上野介の屋敷は呉服橋御門内に新築成って戻っていたので、和田倉御門から辰の口の傳奏屋敷まえを通って帰邸するのが道筋であったが、この日は淺野の家臣が詰めている傳奏屋敷のまえを通ることを避けさせるため平川御門から退出させられたので、大手御門前から道三堀の対岸を通り銭瓶橋を渡って裏門から屋敷に入った。

事情を知った屋敷内は上を下への大騒ぎになった。

新八は、上野介が将軍の御座す江戸城内で御馳走役の大名に斬りつけられたということが信じられなかった。

殿中刃傷は所領没収、御家断絶に処せられる大罪なのだから一国一城の主が短慮で犯すことなど考えられないのだが、家臣を路頭に迷わす行為を敢えて犯した淺野内匠頭長矩はいかなる人物なのか新八は理解に苦しんだ。

捕えられた淺野内匠頭はその日のうちに陸奥一關三万石田村右京大夫建顯の芝愛宕下上屋敷に預けられ、夕刻まえに幕府から大目付庄田下總守安利がやってきて、

「その方儀、意趣これあるの由にて、吉良上野介を理不尽に斬りつけ、殿中も憚らず時節柄と申し重々不届き至極に候。よって切腹仰せ付けられ候」

そう申し渡した。

その処断があまりにも性急で、そのうえ大名が座敷ではなく庭先で切腹させられたことが物議を醸した。

将軍綱吉と側用人柳澤吉保にしてみれば、勅使・院使に無事役目を終わらせて帰国させるその最後の詰めのところで殿中刃傷を起こされたのだから、怒り心頭に発しかっとなって頭ごなしに極刑を申し渡したに違いない。

判官贔屓の江戸っ子たちは、淺野内匠頭が悲愴な最期を遂げさせられたことへの怒りの矛先を吉良上野介に向けてきて、喧嘩両成敗の片落ちは不法であると詰った。

新八はそんな噂話をきいて上野介が可哀相になった。

淺野内匠頭への処罰は幕府がやったことであって吉良は預かり知らぬことであるし、喧嘩は双方が争うことであってこんどのことは淺野のほうから一方的に仕掛けら

れたのであるから喧嘩とはいえず非は淺野にあると思った。

だが、噂は噂を呼び尾鰭がついて広がっていった。

上野介はその誇張されて留まる所を知らぬ悪評に耐えかねて、ついに幕府へ御役御免を申し出るにいたった。

幕府は、待ってましたとばかりに役職を剥奪した。

柳澤吉保はこれで両成敗なると微笑んだに違いない。

新八は、打ち拉がれてゆく上野介が気の毒になった。

その憐れなすがたをみているうちに、ふとこの小心な好々爺が上杉の当主を毒殺して乗っ取ることなどできるだろうか、と疑心を抱くようになっていった。

下手人はやはり父義冬であろうとの意を強くした。

上野介の隠居というのは、高家肝煎という世話役を辞任して無役の表高家に戻ったということなのである。

刃傷事件の話題が下火になったころ、こんどは淺野の遺臣たちが主君の討ち漏らした上野介を討って怨みを晴らそうとする動きがあるという噂が拡まっていった。

そんなある日、幕府から吉良上野介へ通達があった。

「呉服橋御門御曲輪内大名小路の邸宅を召し上げ、本所一ツ目の近藤登之助屋敷跡を与える。早急に転居せよ」

それはまさに上野介にとって屈辱の告知であった。

祖父義弥以来三代つづいた高家筆頭の名門を誇る吉良氏を、江戸城曲輪内からはるか北東の隅田川のさきもと下總國へ放逐するとは侮辱も甚だしい遣り様であった。

一説によると、隣り屋敷の阿波徳島蜂須賀飛騨守が赤穂浪士の吉良邸討ち入りを恐れて再三幕府へ申し出た結果吉良家の移転になったというのだが、柳澤吉保が幕府の膝元での騒動を警戒してのことではないだろうか。

事実幕府では、赤穂浪士の吉良邸襲撃の噂が拡がっているのに野放しにしておいたふしがあるから、江戸の外でやってもらおうと思ってのことにちがいない。

はじめのころ隅田川には橋がなく、武藏と下總を往来するには川船を利用するしかなかった。幕府は隅田川を川ではなく江戸城防衛の大外堀と考えていたのだろう。

それが明暦三年の大火で水死者が大勢出たので、幕府は万治三年（一六六〇）に橋を架けることにして着工し、翌寛文元年に百七十メートルの木橋が完成した。

はじめ大橋といったが、武藏國と下總國とを結ぶので両國橋と改称した。

いまでは隅田川は疎かそのさきの荒川、中川が東京に入り、江戸川がようやく千葉県との境になっているのに、橋の名称はいまもって両國橋のままである。

本所一ツ目（のち松坂町）二千五百五十坪の吉良邸新築の工事費用はまたもや上杉家に押しつけられた。

呉服橋邸新築のときは千坂兵部が二十五年も在府していて商人と馴染みが多く信頼関係もできていたのでどうやら資金調達ができたが、色部又四郎は着任二年あまりでまだ商人たちとも馴染みが薄いうえに無理算段にも手

馴れていなかったのでとても資金調達ができなかった。

色部は、苦慮のすえやむなく材料も職人もすべて米澤から調達することにした。窮余の策であった。

このことが、吉良は赤穂浪士の報復を恐れて秘かに堅固な要塞を造っている、と誤解されてしまったのだ。

ともあれ、半年後には二千数百坪の敷地に主家四百坪、長屋四百坪、部屋数四十余りの吉良邸が落成した。

芝白金の上杉家下屋敷に長逗留していた上野介はさっそく一ツ目の新邸に移ったが、夫人の富子は実家を離れ難く本所へは行かぬと突っ張って別居してしまった。

その年十二月に、六十一歳の上野介は家督を養子の義周に譲ることを願い出て幕府の許可を得ると、高家職からも吉良家の当主からも離れて楽隠居の身になった。

相続した義周はこのときまだ十六歳の少年だった。

六

それから一年が経過したが、本所一ツ目の吉良邸は淺野の旧臣たちの襲撃もなく、平穏に打ち過ぎてきた。

噂を真に受けて緊張の連続だった家臣たちにも気の弛みが出はじめて、それが次第に蔓延していった。

新八も退屈のあまり新貝彌七郎に、

「やってきませんなあ」

待ち草臥れてそう愚痴ると、彌七郎に、

「迎え撃つ準備万端調えて手薬煉引いて待っているところへ、攻め込む愚か者などいるわけがないさ」

そう宥められたあとで、彌七郎に、

「災厄は忘れたころにやってくる。これからが正念場だ。油断するなよ」

そうきつく諭された。

そうこうしているうちに今年も師走を迎えた。

そして、十二月十四日に吉良邸で茶会が催された。

上野介は千利久の孫宗旦の一番弟子山田宗偏（四方菴）の宗偏流に入門していた。

宗偏は武藏岩槻五万石の老中小笠原佐渡守長重に召し抱えられて、吉良邸から近い本所二ツ目に住んでいた。

宗偏の計らいで小笠原長重を主賓にしてみずからも出席し、上野介は高家大友近江守と品川豊前守を招いた。

今宵の茶会は昨年末に家督を譲った義周が今年七月に表高家として出仕したその御披露目のつもりもあった。

雪は夕刻になって止み、皓々たる月夜になった。

上野介の点前による茶の湯のあと、能や舞い謡などを披露して酒肴が供され、茶会が終わった。

あと片付けをおえた家臣たちに慰労の酒が振る舞われ、無礼講の酒盛りは夜半までつづいたので、泥酔して千鳥足で長屋へ戻った家臣たちはすぐ大鼾で眠り込んだ。

茶会は客の出入りですぐに外部へ知れてしまう。

家臣たちは慣れない長時間の下働きで疲労困憊する。
上野介の迂闊であった。やはり油断だったのだろう。
それとも、将軍の御座す花のお江戸で仕返しという野蛮な行動はおこらないと思い込んでいたのだろうか。
とにかく、無事に茶会を終えた上野介は老体に疲れがどっと出て家臣たちが酒盛りで騒いでいる蛮声を遠くにききながらいつしかぐっすり眠り込んでしまった。
新八は、酒席の喧騒で眠りが浅くうとうとしていた。
彌七郎からつねづね、
「振る舞い酒は飲みすぎるから注意いたそうぞ」
そう戒められていたのであまり過ごさなかったのだ。
日が替わって十五日の八ツ半（午前三時）すぎ、しずかに門の開く音と複数の足音がきこえた。
新八がきたかと蒲団を蹴って立ち上がったところへ、彌七郎が寝間着のまま押っ取り刀で飛び込んできた。
「新八、きたぞ」
「そのようですな」
そう言葉を交わすと雨戸を蹴破って庭へ飛び出した。
そこには鎖帷子で身を固め、甲頭巾で頭を防護して完全武装した盗賊紛いの刺客集団が闖入してきていて、
「われらは浅野家の旧臣亡き殿の恨みを晴らしに参上」
そう口々に大声で叫んだ。
「新八はお屋形様を護れ。儂は玄関で防ぐ」
彌七郎はそう言い残すと素早く馳け出していった。

新八は、竹塀を飛び越し、本屋の雨戸を蹴外して義周の部屋へ急いだ。
廊下を奥にすすんだところで三人の浪士に立ち塞がれたので、刀を交えながら広い庭へと誘き出した。
そこで一人が積雪に足を滑らして蹌踉けたところを池の中に斬り落とし、さらにもう一人を縁側で斬りつけたのだが後ろから槍で突かれ辛うじて躱したものの重心を失ってふらついてしまったので新手の浪士に刀を浴びせられて鬢先から口辺にかけて斬られその場に昏倒した。
眼に入った鮮血を拭い、刀を杖がわりにして立ち上がったときにはもうそこに浪士たちのすがたはなかった。
蹌踉とした足取りでようやく義周の部屋まで辿り着いたが、そこには誰もいなかった。
義周の安否が気遣われたので、さらに探し求めて奥へいったところで二人の浪士に出会ってまた刀を交えたが、槍で腹部を突かれて再度昏倒し、意識を喪った。
刃毀れした新八の刀は、ささらのようになっていた。
新八が気付いたときには、もう惨劇は終わっていた。
彼らは幕府の誤った裁きに抵抗できなかった腹癒せに八つ当たりしてきた過激なテロ集団であった。
夜明けを待って上杉家上屋敷から江戸詰の奥取次野本忠左衛門が医師や介護の人数を伴れて駆けつけてきた。
新八は、医師から傷の手当てを受けながら、野本忠左衛門から調べたところによる昨夜の様子をきかされた。

上野介は、近習二、三人と台所の隅の炭小屋に隠れていたが、浪士が台所に入ってきたので近習が物を投げつけておいて飛び出したがたちまち槍で突かれて斃れた。
上野介は最早これまでと脇差を抜いて斬り掛かったが、間重次郎という者に槍で脇腹を突かれて立ち止まったところを武林唯七という者に斬り倒された。
大石内蔵助に止めを刺され間に首をとられたという。
義周は、米澤から従ってきた村山甚五右衛門に起こされて白小袖のまま紫の手拭いを鉢巻にして長押の小長刀を抱えると上野介の寝所へ急いだが途中で浪士たちに出会ってしまった。一緒にいるはずの村山は消えていた。
義周は小長刀を振るって奮闘したが、複数の浪士に囲まれてしまい如何ともし難く、割られた額の鮮血が眼に入って翳んだところを背後から肩口を斬り下げられて骨まで達する深傷を負い意識が溷濁した。
気を取り直して上野介の寝所まで行ったがそこで力尽きて昏倒してしまった。一命は取り留めたという。
新八は、主君義周が生存していると聴いて安堵した。
だが、新貝彌七郎の討ち死にを知って愕然とした。
新八とわかれて玄関口へ走った彌七郎は、数人の浪士が槍衾に構えているところへ一人で斬り込んでいった。
槍を使うということは腕に自信がないから長い柄を頼りにするのだと思っていた。
間断なく繰り出してくる槍の穂先を素早く横に払って奮戦したのだが、多勢相手ではいかんともし難く次第に追い詰められて防ぎ切れなくなり、十文字槍を腹部に受け、さらに股を斬られてその場に昏倒し事切れた。
槍の穂先が腹から出ていた壮絶な死に様であった。
翌日、吉良邸の番士に当てられた大熊彌一右衛門は、国許の大河原忠左衛門に送った報告書のなかで、
「新貝彌七不便に存じ候。山吉新八の働き当夜随一なり」
と書き記している。
このとき新貝彌七郎四十歳。新八三十三歳であった。

七

赤穂浪士の襲撃で死者十七人、負傷者二十八人を出した吉良邸惨劇事件から年末年始を挟んで二箇月が経過した元禄十六年（一七〇三）二月四日、法度を侵して四家に預けられていた赤穂浪士に切腹の処断が下ったその日に義周も大名小路辰ノ口の評定所へ出頭を命ぜられた。
「なにごとであろう」
眉を顰めて訝る義周に、新八は、
「あの夜の騒動は当家に非のないことは明白でござりますれば、きっとご謹慎が解かれるのでござりましょう」
そう希望的観測を述べて義周を励ました。
義周は外科医栗崎道有と上杉家の医師有壁道是の往診を受けて額の疵はようやく癒えたが、右肩下を斬り下げ

られたときの骨折はまだ捗々しくなかった。
新八は疵跡がまだ疼いたが、とにかく義周の供をして駕籠を悠くりすすませ、辰ノ口の評定所へ出頭した。
正門から玄関までは駕籠のままで通行を許された。
そこから義周一人若侍の肩を借りて控の間へ行った。
そこで一刻（二時間）あまりも待たされたあと、取次の荒川丹波守と猪子左太夫に促されて広書院へ入った。
そこには寺社奉行、勘定奉行、町奉行が列座していて、物々しい雰囲気が漂っていた。
待つことしばし、大目付仙石伯耆守が出座した。
仙石は着座すると、まず作法どおり、
「そのほう、吉良左兵衛義周に相違ないか」
そう確かめ、義周が相違なき旨を答えると、おもむろに懐中から裁決文をとり出し、威丈高な口調で、
「淺野内匠頭家来ども、吉良上野介を打ち候節、左兵衛其方仕方不届きにつき、領地を召し上げられ、諏訪安藝守忠虎へ御預け仰せつけらるるものなり」
そう宣告された。
義周は、不当な処分に驚愕した。
だが、いかに理不尽な裁きであろうともいっさい釈明は許されない。有無を言わさぬ上意下達であった。
義周は本所へ戻ることを許されず、その場で信州高島三万石諏訪家へ永預けとなり、駕籠に錠前をかけられ青網を被せられて市ヶ谷の諏訪屋敷へ護送された。
こうして赤穂浪士切腹と吉良家改易処分は同時に行われたのであるが、諏訪家では浪士たちが討ち漏らした義周をいつまでも江戸に留めておくのは危険と判断した。
新八は、罪人に付き添いは許されなかったが、義周が蒲柳の質であるうえに骨折の身でもあるので介添えが必要であることを力説して義周付の家老左右田孫兵衛と二人目立たぬようにと念を押されて随行を許された。
左右田孫兵衛は六十九歳の老齢なのだが、隠れて難を逃れた卑怯を悔やんで義周の世話を申し出たのであった。
二月十一日に江戸を発った一行は十六日諏訪に到着。
臨時収容所に当てられた志賀利兵衛の屋敷に入った。
出迎えに出た諏訪家家老諏訪圖書と大熊善兵衛が、
「只今城内に南丸を新築中にて落成までのあいだこの屋敷にお囲い申し上げまする。役目柄監視人は立てまするが、お部屋うちではご自由にお過ごしなされませ」
そう説明した。二人は義周を預かる事実上の責任者であったが高圧的な振る舞いはなく、むしろ幕府の目の届かぬ細部は鄭重に扱おうとする柔軟な態度を示した。
そのあと二人の医師がやってきて義周の脈をとり異状のないことを確かめてくれたので新八は安堵した。
監視人頭は渡邊治右衛門といい、昼八つ（午後二時）夜四つ（午後十時）の二回見回るということであった。
夕食をすませた義周はなすこともなく床に就いた。

新八は義周が安眠できるか心配だったが、あれこれ思いを回らしているうちに長旅の疲れで眠ってしまった。
その後も諏訪家では慇懃に振る舞い鄭重に扱ってくれたが、禁錮刑であることに変わりはなく、幽閉されての不自由な身に義周は途惑うばかりの様子であった。
新八と左右田は一日僅かの時間面会を許されてはいたが、それも監視つきなのでなんとも煩わしかった。
諏訪家としても江戸から随行させたり義周に面会させたりしていることは幕府の許可を得ていない黙認のかたちなので、幽閉屋敷の様子や新八と左右田のことは内密にせねばならず、家中に箝口令を布いて秘密保持に神経をつかっていたが、その他のことは定法どおりに取扱われていっさい融通がきかなかった。
たとえば、新八が繰り返し、
「義周様の髭や月代をお剃り申し上げたい」
と申し出ても剃刀は使えず伸び放題にされたし、着衣も昼夜兼用で垢に塗れるまで着替えは許されなかった。
義周はその束縛に辟易して心を傷め滅入っていった。
そんな義周の様子を心配した諏訪圖書がある日新八に、
「なにか、お慰みになる方法はないか」
相談しにきた。
新八が、
「日頃から絵を描くことをお嬲しみにしておられた」
ことを告げると、
「それはよい。絵筆と料紙の差し入れをお許し願おう」
そうさっそく取り計ってくれた。
ほかにも諏訪家は規則限度ぎりぎりまで手際よく計らってくれて、御伽草子や草双子、煙草などの嗜好品も逐次差し入れがあり義周の無聊を慰めてくれた。
翌年六月に父綱憲の訃報が届くと、つづいて八月に祖母富子逝去の報が届いた。
義周は落胆して心の支えを失い落ち込んでいった。
高島城は周囲が湿地帯なので蚊が群棲して日がな一日猛烈な集団に襲われ苦しめられた。新八が監視人に、
「義周様に蚊帳をお下げわたしいただきたい」
そう再三懇願したが、諏訪家では蚊帳となると幕府に伺わねばならぬので悪意はなくとも即応ができなかった。
焦れた新八は団扇を借りて左右田と撃退につとめた。
だが夜は義周の身辺にいることが許されなかった。
蚊に襲われた義周は瘧に罹り、間欠熱に悩まされた。
父と祖母を喪い気鬱症になってしまったうえに、参観から帰国した諏訪安藝守から特赦の報せがなかったことが追い討ちになって体調がますます悪化していった。
気弱になった義周に新八が、
「公儀に屈してはなりませぬぞ」
そう低声で励ましたが、義周は弱々しく、

「新八。無念じゃ、無念じゃぞ」
譫言のようにそう呟くと眼に涙を浮かべた。
義周は配所にあって三年、無念の思いを抱いたまま正月二十日明け六つ（午前六時）に息を引き取った。
遺体は諏訪大社上社本宮横の小径を上ったところの法華寺に運ばれ、本堂の裏山にひそかに土葬された。
新八と左右田は法華寺の住職に、
「供養に石塔を建てていただきたい」
そう頼んで三両を寄進した。
住職は方形の台石の上に高さ三尺余り（約一メートル）の自然石の墓碑を建てて、懇ろに供養してくれた。
室燈院殿岱嶽徹宗大居士、享年二十一歳であった。
江戸へ帰る左右田孫兵衛と甲州道の途中で別れて米澤へ向かった新八は、上杉家の重臣に吉良義周病死の報告を終えたら、ふたたび諏訪へ戻って法華寺の住職に頼んで寺男にしてもらい、義周の菩提を弔おうと考えた。
だが帰国してみると赤穂浪士との奮闘の様子が伝わっていて覚え目出度く、帰参して三人扶持五石を賜り五十騎組に配属となっていたのでそれはかなわなかった。
その後の新八は、勘定頭になって五十石、物頭に栄進して二百石、最後は三十人頭まで出世した。
そして、寶暦二年（一七五二）に致仕すると、翌年八十三歳で世を去った。
墓所は米澤市城南の照陽寺にある。
（了）

『古事記』天皇崩年は一次史料か

新井宏

一、はじめに

『古事記』には開化天皇以前の九代を除き、崇神から推古までの二十四代の天皇のうち、十六代の崩年が記されている。『日本書紀』では天皇の崩年が全て記されているのとは極めて対照的である。しかも、『日本書紀』の紀年には干支二運（一二〇年）の延年操作があり、そのまま信用し得ないのに対して、『古事記』の崩年は「倭の五王」の記事とも、ある程度の対応関係が認められることから、年代定点として明治以降重視されている。

しかし、『古事記』の崩年が「一次史料」であるとの前提は、歴史学の基本から言えば自明ではなく、まず検証してみる必要がある。もちろん、ここで言う「一次史料」の意味は、『古事記』編纂時に存在していた「伝承」のことであり、それが「正しい年代」を示しているか否かの問題ではない。

そもそも、『古事記』は紀年には無関心な書であり、崩年が分註の形で、しかも特定の天皇にのみ記されていることから見ても、状況的には「二次史料」の可能性を否定し得ない。本居宣長も崩年分註を古伝として重視しながらも「稗田老翁奈が誦伝へたる勅語の旧辞には非じと見ゆ」として削除したほどである。

それにもかかわらず、明治以降の研究史において、崩年を伝承一次史料として取扱う流れがあるのは、那珂通世に続き、修史局学派の星野恒や菅政友が、書紀の紀年に代えて古事記崩年干支を用い、「倭の五王」の比定に大きな成果を挙げたからであろう。しかしながら、本来の歴史学の「史料批判」の原則に照らすならば、「倭の五王」の問題があるからこそ、二次史料の可能性があるとも言えるのであり、この点についての研究を深めて行かなければならない。

当然のことながら、今までにも、歴史学の原則に則って「一次史料性」を疑い、論拠としては採用しなかった研

究者が多くいた。

久米邦武は、修史局時代の同僚が、『日本書紀』の紀年を捨て、『古事記』崩年干支を復活したことについて、「史学の尺度となるべきに非ざる」と完全に退けてしまっている(1)。また、原勝郎は「日本書紀紀年考」の中で、古事記崩年干支が『宋書』に依拠して成立したとして「仁徳の崩御を丁卯にかけて居るのは倭王珍を以て反正に擬し、其即位の年を宋書通りに壬申にかけ、それからして履中の在位数六年を逆算して得た」と示した(2)。前田直典も、戦後になって『古事記』崩年干支は「後世の追記で信用すべきでない」と断じ、原の指摘に賛意を表している(3)。

しかし、古事記崩年干支が、『宋書』等に依拠して後世になって作られた「二次史料」であることを、学術的に検証した研究は見当たらない。論理的には循環論法になりやすいテーマなので避けて通ってきたのかも知れないが、『古事記』の崩年について注意深く考察すれば、その一次史料性を疑わせ、後世に二次史料として成立したことを示唆する状況もかなりある。

その第一は、『古事記』の崩年干支の月日が、奇妙な形で『日本書紀』の「別の天皇」の崩年月日に一致する場合が十三件中八件、一日違いが三件もあり、とても偶然とは考えられないことである。それはあたかも『日本書紀』の「他の天皇」の崩年月日を流用しているかのような状況なのである。

その第二は、『古事記』の崩年分註の有無と天皇の在位期間の「対外交渉」の有無の間に、強い対応関係が認められることである。ただし、ここで「対外交渉」というのは、渉外記事をほとんど載せない『古事記』ではなく、『日本書紀』や『宋書』、『三国史記』のことであるが、「対外交渉」記事のある天皇の場合のみ、崩年干支が記載されているのである。

もちろん、『古事記』の成立した和銅六年(七一三年)には、一一四五年の『三国史記』はもとより養老四年(七二〇年)の『日本書紀』も存在していなかった。『宋書』などを参照し得たか否かについても明らかではない。しかし、『日本書紀』の編纂は既に始まっており、『三国史記』の底本となった『百済記』などは十分に参照されていた。『古事記』編纂者なら、同等な情報を知り得た可能性はあり得る。更に言えば、もし『古事記』の崩年分註が、後世になってから挿入されたものとすれば、この問題は大きな制約事項とはならない。

すなわち、あらかじめ「推論」を示すならば、『古事記』の崩年、特に「倭の五王」に比定される六天皇の崩年は、「ある時点」において『日本書紀』や『宋書』、そして『(原)三国史記』などの情報を参照し得たならば、かなり正確に算出できるのである。

本報においては、主として「倭の五王」に関連する天皇の『古事記』崩年干支について、『日本書紀』と『宋書』および『三国史記』の渉外記事を援用し、その復元過程を推測し、崩年干支が、はたして「伝承一次史料」と言えるかについて、批判的な立場から論証する。

二、日本書紀から流用された可能性のある崩年月日

『日本書紀』の崩年月日は干支によって「八月庚午朔丙子」などと示されている。この場合の朔日の庚午は干支の七番目、日付の丙子は十三番目であり、丙子は朔(月初)から数えて七日目になる。すなわち八月七日である。

一方、『古事記』の崩年月日は、全て八月九日のように直接数字で示されている。

両者の大きな違いは、『日本書紀』の干支表現は、元嘉暦にしても儀鳳暦にしても、各年各月の朔を干支で知る必要があり、あらかじめ膨大な暦を備えるか、複雑な計算を経ないと求められないのに対して、数字の月日は、暦についての知識をほとんど必要としないことである。

ちなみに、『古事記』において、干支を用いて月日を表示している例は、推古天皇の崩年月日のみで「三月十五日癸丑日崩」とある。しかも、「癸丑」が正しいならば三月十五日は誤りで『日本書紀』の崩年と完全に一致して「三月七日」でなければならない。このように『古事記』の崩年は、暦について習熟せず、何かを援用していたのではないかとの疑いがある。

その意味で注目すべき点は、『古事記』の崩年月日の大部分が『日本書紀』の「別の天皇」の崩年月日と一致、または「一日遅れ」で一致していることである。状況を確認するために、『古事記』の天皇崩年月日と『日本書紀』の「他の天皇」の一致状況を整理して表1に示す。

表1によれば、『古事記』には月日まで示された崩年が十三件ある。その内、八件が『日本書紀』に載る三十八件の「他の天皇」の崩年月日(分布の明細を表1の下欄に示す)のどれかに一致している。確率計算によれば、八件が一致するのは約二千分の一であり(4)、とても偶然とは考え難い。しかも、『日本書紀』の「他の天皇」の崩年月日の「一日遅れ」まで対象にすれば、十三件の内十一件まで対応関係が認められるのである。例外は二件に過ぎない。

更に奇妙なことは、『日本書紀』の崩年月日が『古事記』の次代天皇の崩年月日になっているのが二件、次々代天皇の崩年月日になっているのも一件ある。

崩月日	日本書紀	古事記
六月十一日	(一三代) 成務	(一四代) 仲哀
八月　九日	(一〇代) 安康	(一一代) 雄略
四月十五日	(一九代) 欽明	(二一代) 用明

このような法則性が偶然に発生する確率は、ほとんどあり得ない。その一方で、『日本書紀』と『古事記』で同

表1　古事記の崩年月日と日本書紀の崩年月日の一致状況

古事記崩年月日	日本書紀崩年月日	一致状況
(13) 成 乙卯 3月15日	(17) 履 乙巳 3月15日	別天皇　月日一致
(14) 仲 壬戌 6月11日	(13) 成 庚午 6月11日	先代天皇　月日一致
(15) 応 甲午 9月09日	(40) 天 丁亥 9月09日	別天皇　月日一致
(16) 仁 丁卯 8月15日	(30) 敏 乙巳 8月15日	別天皇　月日一致
(17) 履 壬申 1月03日		
(19) 允 甲午 1月15日	(19) 允 癸巳 1月14日	同天皇　1日差
(21) 雄 己巳 8月09日	(20) 安 丙申 8月09日	先代天皇　月日一致
	(21) 雄 己未 8月07日	同天皇　2日差
(26) 継 丁未 4月09日	(09) 開 癸未 4月09日	別天皇　月日一致
	(31) 用 丁未 4月09日	別天皇　月日一致
(27) 安 乙卯 3月12日	(01) 神 丙子 3月11日	1日差
(30) 敏 甲辰 4月06日	(23) 顕 丁卯 4月05日	1日差
(31) 用 丁未 4月15日	(29) 欽 辛卯 4月15日	先々代天皇 月日一致
(32) 崇 壬子11月13日		
(33) 推 戊子 3月15日	(17) 履 乙巳 3月15日	別天皇　月日一致

日本書紀の天皇崩年月日（38天皇）を月別に示す。
（ ）内に示す日付は古事記分註に同じ日付があるもの

1月　9日, (14日), 16日, 16日, 23日	7月　24日
2月　5日, 6日, 7日, 8日, 10日, 15日	8月　5日, 7日, (8日), (9日), (15日)
3月　7日, (11日), (15日)	9月　2日, (8日), (9日)
4月　(5日), (9日), (9日), (15日)	10月　9日10日
5月　10日	11月　3日7日
6月　(11日)	12月　3日, 5日, 6日, 8日, 17日

じ天皇の崩年月日が一致する例は皆無で、月日だけ一日か二日の違いで一致している例が二件、月のみが一致している例が一件ある。

日本書紀　　古事記

（一〇代）崇神　辛卯年十二月五日　戊寅年十二月
（一九代）允恭　癸巳年一月十四日　甲午年一月十五日
（二一代）雄略　己未年　八月七日　己巳年　八月九日

太田亮（5）は、この三例を以て「三帝の崩年干支竝に月日は確実なる史料によったものに違ひない」と主張する一方で、『古事記』の崩月日が『日本書紀』の別の天皇の崩月日に一致していることにも触れ、「天武天皇の御命日を誤って応神天皇に当て奉って居る」ことから「註文は断じて書紀以前のものとすることはできない」と強調している。いずれにせよ『古事記』と『日本書紀』の崩年月日が全く一致していないにもかかわらず、奇妙な形で密接な関係にあることは疑い得ないのである。

以上の検討によって、『古事記』の崩年干支を無条件に「伝承一次史料」とする見解には疑義があり、むしろ「二次史料」である可能性の方が高いことを示し得たと考える。

しかし、それではなぜわざわざ『古事記』に崩年干支を記載したのか理由が判然としない。崩年を作るなら、特定の天皇だけでなく、対象期間の天皇について全て記載する方が自然なのに、対象とされていない天皇がある。そこに崩年干支を二次史料と疑うもうひとつの理由、すなわち「倭の五王」を含む渉外記事との奇妙な関連があるのである。

三、『古事記』崩年干支と「対外交渉」記事

『古事記』の崩年干支の有無と、各天皇の「対外交渉」の有無の間には、強い対応関係が認められる。ただし、ここでいう「対外交渉」とは、「対外交渉」を載せない『古事記』の記事ではなく、『日本書紀』や『宋書』、『三国史記』の記事である。

表2に各天皇の崩年と対応する「対外交渉」の記事の関係を「各史書」から拾って示す。

表中の成務天皇には対外交渉記事がないが、その直後の仲哀天皇の記事を参照できるので、「対外交渉」があったグループと見なせば、ほぼ例外なく対応関係が認められる。崩年干支と記事との強い対応関係は、崩年干支が「伝承一次史料」ではなく、「各史書」の記事を基に復元された「二次史料」である疑いを強くする。

しかも、表2からすぐに気付くことは、「倭の五王」の時期、『日本書紀』が全く「渉外交渉」を載せていないことである。『宋書』等を全く見なかったか、意図的に無視しているかのようなのである。更には、百済王の崩年記事が干支二運繰上げられて『日本書紀』の「神功紀」「応神紀」に載せてられているにもかかわらず、「倭の五王」の時期に対応する十八代久尓幸王と十九代毗有王の崩年記事だけが全く記載されていない。二十代蓋鹵王の崩年記事が復活するのは「雄略紀」なのである。何らかの理由で『宋書』等を意図的に無視した可能性が高いのである。

表2　『古事記』崩年干支の有無と「体外交渉」記事

天皇	書紀崩年	古事記崩年	渉外記事の対照関係
崇神	−30	258	[日] 蘇那曷叱知朝貢(崇神65)、[三] 倭使臣蘇那曷叱知(253)
垂仁	70		
景行	130		
成務	190	355	
仲哀	200	362	[日] 新羅遠征（仲哀9)、[三] 倭兵大挙新入（364)
応神	310	394	[日] 良馬二匹貢（応神15)、[三] 良馬二匹記事（368)
仁徳	399	427	[中] 讃遣使（413)、讃除綬（421)、讃遣使（425)
履中	405	432	[中] X遣使（430)
反正	410	437	[中] 珍立つ（年？)、遣使・安東将軍（438)
允恭	453	454	[中] 済遣使・安東将軍（443)、済を安東将軍（451)
安康	456		[中] Y遣使（460)、興遣使年？)、興を安東大将軍(462)
雄略	479	489	[中] Z遣使(477)、武を安東大将軍(478)、鎮東大将軍(479)
			[日] 呉国へ使者（雄略8、雄略12)
清寧	484		
顕宗	487		
仁賢	498		
武烈	506		
継体	531	527	〉[中] 武を征東大将軍(502)。百済本記からの引用（4件)

四、ある時点での「倭の五王」の比定

議論を単純化するために、ある時点で律令期の史人が

「倭の五王」を比定したとするならば、どのような結果になったかについて、まず仮託の議論を行ってみる。それは、当然のことながら、活用できる資料が限定されていることから、現代の所見と大きく変わるものではないであろう。

(1) 現在の比定と同じ推測過程

いわゆる「倭の五王」、すなわち讃、珍、済、興、武がヤマト王権、天皇家の系譜とどのように対応するかについては長い研究史がある。いわば、日本の古墳期の年代定点を与える極めて重要な議論であるが、倭王の遣使等に対応した記事が『紀記』にほとんど見られないことから、未だ「定説」は成立していない。極端な場合、「倭の五王」をヤマト王権の大王ではないとする見解（いわゆる九州王朝説など）さえあるが、大方の歴史関係者は、ヤマト王権の大王と認めた上で、その対応関係に諸説がある。これらの研究史については笠井倭人の『研究史倭の五王』(6)があり、筆者の記述でも大巾に参照している。

さて、未だ定説が成立していないとは言っても、武を雄略、興を安康、済を允恭天皇とするところまでは、ほぼ定説化しており、珍、讃の比定問題も、おおよそ次の三説に集約されている。

(A説) 珍を反正天皇、讃を履中天皇とする説
(B説) 珍を反正天皇、讃を仁徳天皇とする説
(C説) 珍を仁徳天皇、讃を応神天皇とする説

もちろん本稿は、改めて「倭の五王」の比定について意見を述べようとするものではなく、ある時点で律令期の史人が『宋書』と『(原)日本書紀』を参照して、「倭の五王」を日本の天皇に比定し、崩年を推定したならば、どのような結果になるかについて論じようと思うのである。

『古事記』の編纂された頃（七一二年）に『宋書』が将来されていたことは確認されていないが、藤原佐世が編集した寛平三年（八九一年）頃の『日本国見在書目録』には記載されている。したがって、『古事記』の崩年干支が『古事記』成立時のものという制約を外せば、律令制の史人に仮託した議論は継続できる。

さて、律令期のある時点での「倭の五王」の比定結果は、おそらく現代の学説と大きく異なることはなかったであろう。利用し得る史料について、ほとんど同じであるからである。

問題を極力単純化して議論したい。「ある時点」で律令期の史人が「倭の五王」を比定するとしたら、どのような前提条件に立ったであろうか。ほぼ間違いない点は次の二項である。

【Ⅰ】「倭の五王」に対応する天皇家の系譜と治世期間の長短については、『日本書紀』の内容に通じる認識を持っていた。また、雄略天皇の在位を『日本書紀』の記載時期に近いと考えていた。

【Ⅱ】中国史書としては『宋書』の他に、『晋書』、『南斉書』、『梁書』も見ていたかも知れない。

いずれの前提条件も、後世を含む「ある時点」でという幅を設ければ、取り立てて問題となる項目はないので、その内容を簡単に整理して示す。まず、天皇家の系譜とその在位年数は『日本書紀』によれば、図1の通りである。在位年代については、『日本書紀』では干支の繰上げを行っているので、異常に長い場合があり、信を置けないが、在位の長短については当時の認識が反映されているであろう。なお『日本書紀』では雄略天皇の在位を四五六年から四七九年としている。

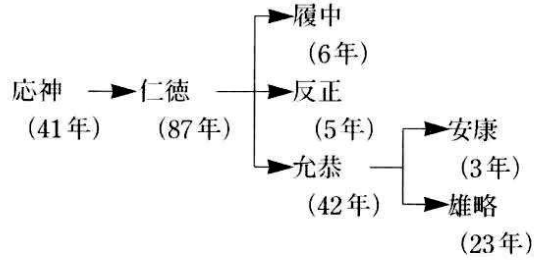


図1 応神天皇～雄略天皇の系譜と在位年数

一方、『宋書』に記載された「倭の五王」の遣使状況は、表3の通りである。『晋書』、『南斉書』、『梁書』の記載もあわせて示す。

比定の前提条件が簡単であり、しかも現在の認識と大きく異なることがないので、「倭の五王」の比定過程も当然のことであるが現在の比定に似てくる。

表3 中国文献の倭の五王関連記事

	王朝	遣使などの記事	出典
413年	東晋	讃遣使　讃は安帝(396～418年)の人	『晋書』安帝紀『南史』
421年	宋	讃遣使　讃除綏	『宋書』倭国伝
425年	宋	讃遣使	『宋書』倭国伝
430年	宋	X遣使	『宋書』文帝紀
?	宋	讃没し弟珍立つ　珍を安東将軍に除	『宋書』倭国伝
438年	宋	珍を安東将軍に除　遣使	『宋書』文帝紀
443年	宋	済遣使　済を安東将軍に除	『宋書』倭国伝
451年	宋	済を安東将軍に進号	『宋書』倭国伝
?	宋	済没し世子興遣使	『宋書』倭国伝
460年	宋	Y遣使	『宋書』本紀
462年	宋	済の世子興を安東将軍に除	『宋書』孝武帝紀、倭国伝
?	宋	世子興没し弟武立つ	『宋書』倭国伝
477年	宋	Z遣使	『宋書』順帝紀
478年	宋	武遣使　武を安東将軍に除	『宋書』順帝紀、倭国伝
479年	南斉	武を鎮東将軍に進号	『南斉書』倭国伝
502年	梁	武を征東将軍に進号	『梁書』武帝紀

まず、『宋書』の武が雄略天皇に比定される。在位年代がほぼ一致している他に、済の世子興の弟という系譜関係が一致しているからである。したがって、天皇系譜によれば、武および世子興の父の済は允恭天皇になる。世子興は安康天皇である。ここまでは、現在の歴史学界の「定説」とも良く一致しているので詳論しない。

問題は済（允恭天皇）と珍の関係である。『宋書』には記載がないが、『梁書』では済を彌の子としている。彌（弥）を珎の誤りとすれば、珎は珍の異字体であるから、珍は済（允恭天皇）の父になる。しかし天皇系譜では允恭天皇すなわち済の前の珍は、反正天皇であり、その場合は父ではなく兄である。更に反正天皇の前の履中天皇に対応させても、やはり父ではなく兄である。したがって『宋書』に記載のなかった済と珍の関係が『梁書』に現れているのは、後世の誤った推測と判断したであろう。

ただし反正天皇の在位が短かったことを考慮すると、遣使記録が一代欠けていて、珍が履中天皇であったとの推測も存在したかも知れない。しかし四三八年の記事によれば、珍は讃の弟である。珍には兄がいたことになり矛盾するので、ここに珍が反正天皇であり、讃が履中天皇と決まる。

このように理解すれば、四二〇年の遣使のXも讃と考え、天皇系譜と倭の五王の関係には全く齟齬がない。現代の比定の（A説）である。江戸時代の松下見林も新井白石も、明治になって英国人アストンも系譜の対応関係のみによって同じ結論を導いた(6)。

ところが、律令期の史人は、履中天皇の在位が短かった（五年）との認識を持っていたはずである。讃の在位は『宋書』のみによっても十年以上、『晋書』を含めれば二十年以上になり、履中天皇では対応関係がとれない。在位が長かったのは何と言っても仁徳天皇である。讃は仁徳天皇に比定すべきなのではないか。当時の史人ならそう考えるのはむしろ自然であったろう。

そうなると、四三八年の「讃没し弟珍立つ」は『宋書』が誤ったのであり、「（履中）没し弟珍立つ」と書くべきだったと考えた。『宋書』が誤ったのは、四二〇年の貢物の主が記載されていなかったことにあり、この時の遣使が履中によって行われたと見れば、当時の史人には最も理解し易い話となる。これは現代の比定の（B説）に一致している。

天皇の在位期間に注目して、讃を仁徳天皇と比定したのは橋本増吉が初めてのようであり(7)、それを更に進めたのが池内宏である(8)。池内は、『記紀』では在位期間を長く表現することはあっても、短縮して示すはずがなく、在位六年とされている履中天皇が讃（在位十年以上）では有りえないとして、讃を仁徳天皇に比定している。ここでの推論は、筆者が律令期の史人に仮託して前提条件[Ⅰ]と[Ⅱ]から導いた結論と同一である。

表4　律令期史人の宋書による崩年推定と古事記の崩年

	日本書紀		計算年		修正	古事記	差
	在位	崩年	即位	崩年	崩年	崩年	
讃（仁徳天皇）	87年	399年		427年		427年	0年
X（履中天皇）	6年	405年	428年	433年		432年	1年
珍（反正天皇）	5年	410年	434年	438年		437年	1年
済（允恭天皇）	42年	453年	439年	457年	453年	454年	−1年
Y（安康天皇）	3年	456年	458年	474年	460年		
武（雄略天皇）	23年	479年	461年	489年		498年	0年

① 前天皇の崩年は、表2の遣使年、除位年に基づき、次の式で計算した。
前天皇の崩年＝遣使到着年－3年＝除位年－5年

② 済（允恭天皇）の崩年は『書紀』の453年に準拠。

③ Y（安康天皇）の修正崩年460年は『書紀』の在位3年により計算した。

④ 武の崩年は『書紀』雄略12年の呉国遣使と『宋書』の478年遣使を対比し、これに在位23年を考慮して、478＋(23－12)＝489で計算した。

⑤ 履中、反正、允恭に差が生じたのは、允恭崩年に『書紀』を採用したのが原因と考えている。

結局、律令期の史人なら、現代の分類では、（A説）よりも（B説）を採るのが自然だったのであり、（C説）は対象にならなかった。近年（B説）を準定説としている場合が多いのであるから、律令期にも同じ認識に至ったとしても全く不思議ではないであろう。

(2)『宋書』による「倭の五王」の崩年推定

四二〇年のXを履中天皇とする（B案）によれば、前提条件としては次の二点を採ると、各天皇の崩年範囲は表4のようになる。

1、天皇崩御とその翌年の天皇即位の報告使節は、新たに除位（叙位）を求め、崩御三年後に宋に着くものとし、崩年は『宋書』の遣使年の三年前と計算する。

2、除位の請求に対しては、原則としてその翌々年（崩御五年後）に授与されるとして、崩年は『宋書』の除位年の五年前と計算する。

表4には計算年の他に、①～⑤の注によって、修正崩年と『古事記』分註の崩年も併記するが、この結果をどのように評価すべきであろうか。『宋書』による「倭の五王」の崩年推定計算結果が、『古事記』の崩年とかなり良く一致しているのである。

『古事記』の崩年が『宋書』による推定年より一年ほど新しくでているのは、おそらく律令期の史人が、允恭天皇の崩年に『日本書紀』の崩年四五三年を意識して、推定年よりも四年も新しい四五四年を採用したことに原因があると考える。ここでも『古事記』の崩年干支は、『日本書紀』を参照しながら、わざわざ一年異なった見解を意図的に主張しているようなのである。

(3)『日本書紀』による雄略天皇の崩年推定

次に、雄略天皇の場合を検討して見よう。もちろん、ここに掲げた『日本書紀』による崩年推定という項目が奇異なのは承知している。『日本書紀』には雄略天皇の崩年を四七九年（己未）と明記しているから、それを利用すれば済む話である。しかし、『古事記』の分註は崩年を四八九年と示して独自性を主張している。

それは、次のような手順で、『古事記』分註の崩年四八九年が「正しく」計算できるからである。

『日本書紀』には、雄略八年二月と雄略十二年四月四日に「身狭村主青と檜隈民使博徳を呉国に派遣」の記事が見られる。呉は宋のことであるから、『宋書』に見える四七八年の武の遣使はこのいずれかに対応する。しかも四七八年には、武（雄略天皇）は安東将軍ではなく、安東大将軍に除（叙）せられているのであるから、雄略十二年を対応させるのが当然であろう。済の場合を見ても、安東将軍を経て大安東将軍に進められているからである。そうすると雄略十二年は四七八年となり、『日本書紀』の雄略没年すなわち雄略二十三年はそれよりも十一年後であるから四八九年となり、『古事記』分註の崩年と完全に一致するのである。

(4)『日本書紀』による応神天皇の崩年推定

応神天皇の場合も、雄略天皇と同じように、『日本書紀』では崩年を三一〇年（庚午）としているが、『古事記』分註は三九四年としている。『古事記』が三一〇年を採らなかったのは、おそらく次の論理によって、三九四年（甲午）を「正しく」計算して導くことができたからである。

まず、『日本書紀』には応神十五年八月六日に「百済王が阿直伎を遣して良馬二匹を貢った」との記事がある。ここには百済王とのみ記されているが、『古事記』の応神紀には「百済の国主の照古王が牡馬一匹と牝馬一匹を阿知吉師に託して献上」との記載があり、百済王が肖古王のことであると分る。おそらく『日本書紀』が肖古王の記載を避けたのは、干支二運（一二〇年）の延年操作により、肖古王は神功五十五年に死亡したことになっていて矛盾が露呈することを避けたからと思われる。

さて、『三国史記』の「百済本紀」によれば、肖古王二十三年（三六八年）に「使者を新羅に派遣し、良馬二匹を送る」との記載があり、対応記事が「新羅本紀」にもある。律令期の史人は『三国史記』を見ることはなかったが、その基となった「百済本記」「百済記」「百済新撰」によって同様な記事を承知していた可能性はある。「良馬」の記事は『日本書紀』にも『古事記』にも載る大ニュースであり、肖古王二十三年に新羅に送ったのと同じ時であったとする解釈は極めて自然なのである。

応神十五年は肖古王二十三年（三六八年）である。一方、『日本書紀』によると応神天皇は応神四十一年没である。したがって、応神天皇の崩年は、三六八年から二十六年後のこととなり、三九四年と計算され、『古事記』の崩年と完全に一致する。

(5)「倭の五王」以前の天皇の崩年問題

本稿では『古事記』崩年分註は、「倭の五王」との一致こそ二次史料の可能性を示すものなのではないかとの視点で検討してきた。したがって、『宋書』と『日本書紀』から、『古事記』の崩年を推定復元できることを示すだけで一応の目的は達せられたと考えている。

しかし『古事記』崩年干支には、倭の五王以前の仲哀・成務・崇神天皇や以降の継体、安閑、敏達、用明、推古天皇の崩年を載せている。この内、継体天皇以降の五天皇の崩年については、一次史料であるか二次史料であるかについては、現状ではいずれとも言い難い。

ただし、倭の五王以前の仲哀・成務・崇神天皇の場合については、倭の五王の場合と同様に、二次史料としなければ、論理の一貫性に欠ける。そのため、憶測と恣意的な解釈となることを承知しながら、一応の試案を述べてみたい。したがって以下の議論は、『古事記』の崩年分註が二次史料であることの論証というよりは、ひとつの状況の理解方法として提示するものである。

まず、『日本書紀』には、仲哀天皇が仲哀九年二月五日に没したこと、そしてその年の十月に神功皇后が新羅遠征を行ったことを記している。この遠征記事に対応する事件を『三国史記』の「新羅本記」にみると、奈勿尼師今九年（三六四）四月に「倭兵が大挙して進入してきた」との記事を見出せる。『三国史記』の紀年は広開土王碑文との比較で一年の遅れがあるので、この記事は正しくは三六三年のことになる。しかも、神功皇后の新羅遠征は十月であるが、「新羅本記」では四月なので、これを翌年のこととすれば、仲哀天皇の崩年は三六二年となり、『古事記』崩年と完全に一致する。

次に、成務天皇の場合は、仲哀天皇の在位が九年であることから、仲哀天皇の崩年推定の三六二年を基準にすれば三五三年と計算され、『古事記』の三五五年より二年早くなる。

さて、最後に崇神天皇の場合についても検討する。

『日本書紀』に渉外記事が初めて現れるのは、崇神紀の崇神六十五年七月「任那国が蘇那曷叱知を遣して朝貢」の記事である。崇神天皇は崇神六十八年に崩じているから三年前である。関連して五年後の垂仁二年に「蘇那曷叱知の帰国」の記事がある。また垂仁三年には「新羅王の子の天日槍の来帰」の記事があるが、その後は新羅遠征まで渉外記事が長い間途絶える。

一方、『三国史記』によれば、倭国との交渉を示す記事の初出は列伝五の沽解尼師今七年（二五三年）の「倭国の使臣葛那古」の挿話である。もちろん、この使臣は倭から新羅への派遣であり、任那の蘇那曷叱知は関係ないが、『日本書紀』の編纂者が、「倭国の使臣葛那古」を意識して、任那からの朝貢や天日槍の来帰の記事を崇神・垂仁

紀に繰り上げた可能性がある。傍証は、天日槍の記事が『古事記』では応神天皇の項に天之日矛として記載されていることである。

何も史料のないなかでは、両国の外交初出記事の時期を同年代と見る考え方はあり得たと思う。そのように考えると、蘇那曷叱知の渉外記事の三年後に崩じた崇神天皇の崩年は二五六年と計算される。『古事記』の崩年よりも二年早いが、大略の一致と言えるであろう。

以上の議論が憶測を重ねた結果であり、崩年の二次史料性の論拠とはなり得ないが、ひとつの可能性として提示して見た。

五、『古事記』崩年を一次史料とする議論

それでは、『古事記』の崩年を一次史料とみなす証拠はないのであろうか。

結論から言えば、直接的な証拠は皆無である。かつては、一次史料を支える唯一の証拠として、田中卓の『住吉大社神代記』「船木等本記」の崇神天皇と垂仁天皇の崩年に関する研究（9）が注目され、原秀三郎などの積極的な支持（10）を得ていたが、現在では鎌田元一の研究（11）によってそれは否定されている。今回の推論とも若干の関連があるので、その概要を紹介する。

田中卓の研究した『住吉大社神代記』には崇神天皇の崩年が崇神六十八年戊寅、垂仁天皇の崩年が垂仁五十三年辛未とあり、干支で示された崩年が『日本書紀』と明らかに異なる。しかも崇神天皇の崩年は『古事記』の記載と同じであり、一方の垂仁天皇の崩年は『古事記』にはないことから、田中卓はこれらを『古事記』とは独立した伝承と見た。そして、崇神天皇の崩年の戊寅に二五八年説と三一八年説があったのを、垂仁天皇の辛未を三一一年として、二五八年に確定させる案を提示した。この論考は古墳時代の年代論にも一定の影響を与えたのではないかと思う。

これに対して、鎌田元一は崇神の治世六十八年が、紀年延長のある『日本書紀』の在位と一致していることから、『住吉大社神代記』が『日本書紀』を参照していることは明らかであり、崇神天皇の崩年干支のみを『古事記』から引いたのだとして、更には、垂仁天皇の辛未は、崇神二十九年生まれで宝算が百四十歳であったとする『日本書紀』の記録から計算したものであることを示した。すなわち、『住吉大社神代記』の崩年を二次史料と明らかにしたのである。整理して、表5に示す。

この論証のプロセスは今回の筆者の検討プロセスと実に良く似ている。すなわち、『日本書紀』の記載をもって、『日本書紀』の崩年を訂正しているのである。

以上のように、現在のところ、『古事記』の崩年を裏付ける一次史料は何もないのである。

表5　鎌田元一の『住吉大社神代記』に冠する指摘

天皇	生年・即位・崩年	日本書紀		古事記		神代記	
		年	干支	年	干支	年	干支
崇神	宝算/生年干支	120	壬辰 (29)	168	辛卯 (28)		
	治世/即位干支	68	甲申 (21)			68	辛未 (08)
	崩年干支		辛卯 (28)		戊寅 (15)		戊寅 (15)
垂仁	宝算/生年干支	140	壬子 (49)	153			
	治世/即位干支	99	壬辰 (29)			53	己卯 (16)
	崩年干支		庚午 (07)				辛未 (08)

干支の（）は甲子を01とした時の順番　薄灰色の網掛けは計算値

鎌田元一の『住吉大社神代記』に関する指摘

崇神の治世68年は『書紀』。崩年干支戊寅（15）は『古事記』。

垂仁の崩年干支は『書紀』の垂仁の生年［壬子（49）］と宝算（120歳）からの計算結果の辛未（08）。

垂仁の即位己卯（16）は崇神崩年戊寅（15）の翌年

垂仁の在位53年は崩年辛未（08）と即位己卯（16）からの逆算。

六、『宋書』の将来された時期

『宋書』が完成したのは六世紀初とされている。この『宋書』が八九一年頃に編集された『日本国現在書目録』に載っていることから、平安前期には日本に将来していたことは確実である。そこには『宋書』と共に『晋書』も載っているが、『梁書』はない。

問題は、『日本書紀』や『古事記』の編纂時期に『宋書』が将来していたかであるが、『晋書』を除くと『宋書』も『梁書』も奈良時代の史料の中にまったく姿を現していないという。しかし、その事実だけから奈良時代に将来されていなかったと結論付けることはできない。それは小島憲之の研究（12）による『日本書紀』の「出典書名分類表」に『梁書』が載せられているからである。『日本国現在書目録』に見られない『梁書』の記載が、『日本書紀』に引用されている形跡が濃厚だと言うのである。

ただし、小島憲之の研究によっても『宋書』が『日本書紀』に参照された形跡は全くない。そこから、村上啓一のように『宋略』は見ていても『宋書』は未だ将来されていなかったとの説が生まれた（13）。その一方で、和田博徳のように、『日本書紀』に引用されていないのは、「倭の五王」の記載が不名誉であると考えて、意識的に隠したためとする説もある（14）。結論は正反対であるが、『日本書紀』に『宋書』の影響を認めない点では一致している。

ところで、筆者は、応神三十七年二月一日の「阿知使主、都加使主を呉に遣して縫製工女を求めた」記事に注

目している。周知のように、応神、神功記には、「百済記」からの記事が、干支二運（一二〇年）を繰上げて挿入されている。『日本書紀』では応神三十七年は二〇六年であるから、これを二運分修正すると四二六年になり、『宋書』の讃の遣使の四二五年と一年の差しかないからである。

逆説的であるが、『古事記』の崩年を二次史料であると結論するならば、そのことこそが、奈良朝初期に『宋書』が将来していた証左となるのである。

七、古事記の分註崩年の成立時期

以上の検討結果を踏まえると、『古事記』の崩年記事が『宋書』の影響を何時ごろ受けたかが重要な問題となる。

『古事記』の成立は七一二年とされていて、『日本書紀』の七二〇年の八年前である。もし、『古事記』の崩年記事が『宋書』の影響を受けていたとするならば、なぜ『日本書紀』がその影響を受けていないのか。和田博徳の言うように、『日本書紀』の編者が「不名誉と考えて」全く触れなかったのだとするならば、『日本書紀』よりも日本の独自性をうたう『古事記』がなぜ参照したのであろうか。逆に言えば『古事記』の編者さえ参照した『宋書』を『日本書紀』の編者はなぜ参照しなかったのであろうか。

もちろん、『日本書紀』の編者は『古事記』を見る機会がなかった可能性があるから、異とすることはないかも知れない。しかし、『古事記』の編者さえ参照していた『宋書』を『日本書紀』の編者が参照しなかったことが、やはり異様なのである。『古事記』と同じように、崩年の算出にのみ、引用しておいて、倭の五王の比定にふれなければ、特に不名誉なことでもないからである。

そうなると、原初『古事記』には崩年がなく、後に分註として挿入されたのではないかとの「疑い」が強く生じる。

八、おわりに

『古事記』の崩年は、一部では「伝承一次史料」とされているが、歴史学の基本から言えば自明ではなく、「倭の五王」との整合性により補強されている面がある。したがって、「史料批判」の原則に照らすならば、「倭の五王」と整合するからこそ、「二次史料」の可能性がある。

今回の試論は、「律令期の史人」に仮託して、『宋書』と『日本書紀』の記載から『古事記』の崩年を求める議論を行ってみたものであるが、要約すると次のようになる。

(1)　『古事記』の崩年月日は、『日本書紀』のような干支表現ではなく、数字表現と記載されている。月日を干支で表現するためには、暦に関する知識が不可欠であるが、『古事記』の崩年月日はあたかも結論のみを記載しているようなのである。

(2)　しかも、『古事記』の崩年月日は、『日本書紀』の崩年干支を見て、流用しているとしか考えられないほど良く似ている。『古事記』記載の十三件の内、八件が『日本書紀』の他の天皇の崩日に一致し、その内の三件が『日本書紀』の前代あるいは前々代の天皇の崩日と同一で、更には八件以外にも一日遅れで一致している例が三件あり、例外は二件しかない。それにもかかわらず、同一天皇に関しては、『古事記』と『日本書紀』で全て異なる。

(3)　『古事記』に崩年干支が記載されている天皇に関しては、必ず外国史書に対応記事があるが、記載のない天皇の場合は例外なく対応記事を認めない。『古事記』は、『日本書紀』の記事に対応する「外国史書」によって崩年干支を計算しているかのようなのである。

(4)　そのため、筆者は「ある時期」の律令期史人に仮託して、同一基準を定め『日本書紀』と『宋書』『三国史記』を対比して崩年干支を計算してみた。結果は次の通り、かなりの精度で一致している。

天皇	復元崩年	古事記	差
崇神天皇	二五六年	二五八年	二年
成務天皇	三五三年	三五五年	二年
仲哀天皇	三六二年	三六二年	○年
応神天皇	三九四年	三九四年	○年
仁徳天皇	四二七年	四二七年	○年
履中天皇	四三二年	四三二年	一年
反正天皇	四三八年	四三七年	一年
允恭天皇	四五七年	四五四年	三年
雄略天皇	四八九年	四八九年	○年

(5)　もちろん、仮託した律令期の史人が、何時からこれらの史書を利用できたか明らかでないが、『古事記』の成立時には『日本書紀』が完成していなかったので、論理的には、後代の追記となる。

(6)　しかし、崇神天皇の崩年干支を戊寅とする『住吉大社神代記』の完成が七三一年なので、その時点までには追記が行われていたはずである。しかも、周知のように『古事記』は、完成後百年間ほどは、秘されていて関係者以外に閲覧することが出来なかった。

(7)　そこで、私説を述べたい。

『日本書紀』は、干支二運の延年などにより、本来の年次を大幅に変更しているが、延年のもとになるべき年次については、外国史書を参照して調べたはずである。それらは、紀年延長のある『日本書紀』からは排除されたが、担当した史人によって伝えられたに違いない。当然、発表の機会を待っていた。それが学者というものである。そこに崩年干支のない『古事記』があった。『古事記』の政治的な立場は、『日本書紀』とは異なる。必ずしも、絶対年代に結びつかない崩年干支だけなら追記出来る。

(8)　いずれにせよ、『古事記』の崩年干支は一次史料による伝承ではなく、外国史書との対比によって、二次的に作成された可能性が濃厚なのである。それは、研究史的に言うならば、奈良時代の「倭の五王」比定研究の成果であった。

本報はタイトルを「天皇崩年は一次史料か」としているように、必ずしも『古事記』の崩年分註を「二次史料」と断定するものではない。しかし、今後の研究において、「二次史料」としての可能性がより明確になることは十分に有り得ると考えており、まず試論としての提出し、参考に資するようにしたものである。これを機会に、更なる研究の深化を期待したい。

[註記]

(1)　久米邦武「仲哀帝以前紀年考」『史学雑誌』第十三編第二号、一九〇二年

(2)　原勝郎「日本書紀紀年考」『日本中世史の研究』一九一七年

(3)　前田直典「応神天皇朝といふ時代」『オリエンタリカ』創刊号、一九四八年

(4)　表1のように『日本書紀』に現れた崩月日は38件あるが、重複を除くと36件であり、一年(日数365)当たりに単純計算すると一致する確率は36/365＝0.0988であるが、『日本書紀』も『古事記』も日付は、ほぼ十七日までに限られているので、意味のある一年の日数を17×12＝204とすると確率はP＝36/204＝0.1765である。13件中n件一致する確率公式は、pn×(1-p)13-n×13Cnなので、偶然八件一致する確率(n＝8)は0.00046である。

(5)　太田亮「古事記註文干支月日論」『日本古代史新研究』一九二八年

(6)　笠井倭人『研究史・倭の五王』一九七三年

(7)　橋本増吉『東洋史上より観たる日本上古史(邪馬台国論考)』大岡山書店、一九三二年

(8)　池内宏『日本上代史の一研究』近藤書店、一九四七年

(9)　田中卓「古代天皇の系譜と年代」『神道史研究』二十四巻四号、一九七五年

(10)　原秀三郎「古代地域研究の文明的方法」『地域と王権の古代史学』塙書房、二〇〇二年

(11)　鎌田元一「古事記崩年干支に関する二・三の問題」『日本史研究』四九八号、二〇〇四年

(12)　小島憲之『上代日本文学と中国文学』上、塙書房、一九六二年

(13)　村上啓一「日本書紀編修に関する私見(1)」『天理大学学報五号、一九五一年

(14)　和田博徳「神功皇后紀の倭女王注記について」『史学雑誌』六二巻一号、一九五三年

サイバー戦争進行中

田寺怜葦

「良いものはカタツムリのように進んで行くのです」
ガンジー

この言葉を噛みしめて今の世の中を見回してみると、あらゆるものが怖ろしい程のスピードで進んでいるような気がして少しばかり不安になります。

特にIT技術の進歩には目を見張るばかりです。おかげで私達の生活はより一層便利になり、情報は一瞬にして世界中に共有されるようになったのですが…。

いまや地球は、サイバー空間という異次元の雲に覆われ、その中で人々はますますスピードと便利さを追求しています。

もはや人類が存続する限り、この雲が消えることはないでしょう。

電力、通信、交通、金融などなど、先進国であるほどその国の社会インフラはデジタル化されたデータとして共有されています。

個人のプライベート情報から国家規模の情報に至るまで、私達の日常はこのサイバー空間によって維持されていると言っても過言ではありません。

テレビがここ数年で地上アナログ放送から地上デジタル放送に変わったように、本当に短い年月で、社会インフラの仕組みは変換しました。

アナログ世代の人間にとっては順応するのが大変です。

私の場合、娘の影響で十五年以上前からパソコンに触れていましたので、サイバー空間が比較的身近であったことは幸いでした。

デスクトップ型の重量級パソコンが懐かしく思えます。

パソコンの形態が進化した以上に、サイバー空間の拡大には著しいものがあります。サイバー空間の成長は、世

米国のセキュリティ会社「ノース社」が開発した「IPViking」というシステムでは、全世界を舞台に急激な勢いで起きているサイバー攻撃の様子がリアルタイムで観測できるようです。

今、どの国がどの国を、どんな攻撃方法で標的にしているのかが、まるで天気図を見るようにひと目でわかるのです。

同じようなシステムをロシアの「カスペルスキー社」もサイト公開しています。日本でも、国内の主要部署および自衛隊各所へのサイバー攻撃に対応するため、サイバー防衛隊なるものが設立されているようですが、これに関して「日経コンピュータ」の清嶋直樹氏が以下のように述べています。

「日本のサイバー防衛隊は陣容や練度などの点で、北朝鮮サイバー軍の実力に遠く及ばないだろう。」（日経トレンディネットより）

昨年6月に、日本年金機構へのサイバー攻撃で百二十五万件の個人情報が流出しましたが、公表されない被害、あるいは誰も気付いていない被害がどれだけあるのかを考えるとぞっとします。

日本に向けられているサイバー攻撃で、もっとも多いと思われるのが中国からのものです。その正体のひとつは

界中の様々なシステムを変容させました。

戦争も例外ではありません。

例えばコンピュータ制御された戦闘機は無人です。昔のように、パイロットが命がけで乗る必要はありません。操縦者は遠く離れた場所で、ゲームでもするように指を動かしていれば良いのです。

危険な場所の視察には改良されたドローンが行ってくれるでしょう。

そして情報争奪戦では訓練されたハッカー、クラッカー達が腕を競います。

ひと昔前なら、映画「007」シリーズや「スパイ大作戦」のように、その道のスペシャリストが敵陣へ潜入し、重要な文書やフロッピーディスクなどを盗み出しました。

しかし、「スパイ大作戦」が「Mission Impossible」に変わったように、いまや彼らは自宅からモニターとキーボードを駆使して遠い異国の機密情報を盗み取ることができるのです。

もちろん、どんなシステムにもそれなりのセキュリティがかけられているわけですが、完全であるとは言いきれません。

守備に躍起になるセキュリティ会社と、それを突破しようとするクラッカー達の知能合戦は日々激しさを増しています。

中国人民解放軍の南海島基地の陸水信号部隊。訓練された一一〇〇人位のプロフェッショナル集団のようです。

この部隊は政府直属のものですが、中国国内には、これ以外にもおよそ二五〇あまりのクラッカー集団が存在するようです。

米国や台湾の軍事関連施設、チベット関連施設、そして言うまでもなくわが日本国内のあらゆる方面へのサイバー攻撃を行っており、米国の電力網を論理爆弾（ロジック・ボム）で破壊する能力さえ備えつつあると推測されています。中国に限らず、アメリカ、ロシア、イスラエル、北朝鮮もそれぞれにサイバー戦闘能力を磨いています。今日では先進国の大多数がサイバー攻撃能力をもっていると見るのが正しいでしょう。

実際、二〇一一年にはイランの原発がスタクスネットと呼ばれるコンピュータウィルスによる攻撃を受け、核開発に二年以上の遅れが出る結果となりました。今やサイバー攻撃は原発をも破壊するほどの威力を持ち始めています。

銃器やミサイルなどの攻撃と違い、サイバー空間での攻撃は直接目には見えません。被害を受けた企業や公的機関が保身のみに走ることなく、国益を考慮して行動することを願うばかりです。

適切な危機感とセキュリティ意識を国民に啓蒙する責任もあります。

それには媒体となるマスコミの貴任は非常に大きいと思いますが、今の日本で国益という言葉を理解しているマスコミがどれだけあるのか、それを考えると暗澹たる思いにはなりますが…。

情報を盗まれるということは国を盗まれると同じです。

マスコミのみなさんもっと勉強してください。

勉強してほしい人々はマスコミだけではありません。

熾烈な情報戦争がくり広げられている現実を知ろうともせず、一年一日のごとく何事につけ「戦争反対！」の呪文を叫び続ける妄想過敏症の人々にも申し上げたい。およそこの世の中で「戦争したい」と考える人間は、一部の戦争マニア以外ゼロなのです。特に日本では。

おんぶに抱っこの国日本で甘やかされた妄想人間よ、勉強して下さい。弱肉強食は野生動物だけの掟でしょうか。自分を守る権利を棄てた生物や国家は滅びるしかありません。

そして、国が滅べば自由も人権も滅ぶのです。

情報流失の脅威は国家や企業だけでなく個人をも取り巻いています。

インターネットの世界へ踏み込む時には危険を察知する嗅覚も研ぎ澄まさなければなりません。便利なものにはリスクがあるものです。

単一民族で他人を疑う事の苦手な私達日本人は、いま世界中の悪意ある者達からターゲットにされています。個人も企業も国も、それぞれの立場で防衛しなければならない時代が始まっています。日本人が長年置き去りにしてきた防衛意識とそれを行使する権利を、今こそ取り戻さなければならないのではないでしょうか。

先日、北朝鮮がミサイルを発射しましたが、日本人にとってはそう悪い出来事ではなかったと感じています。何故なら、危機というものが目近に姿を現してくれたのですから。

かつて、公の場で「戦争って、いったいどこの国が攻めてくるんですか」とのたまった議員がいましたが、彼は今でもそう言い続けるのでしょうか。

目に見えないサイバー戦争は既に進行中です。

原爆を落とされなくても、情報インフラを破壊されれば社会は一瞬にしてその機能を失います。最悪の場合には、国の防衛機能、社会の治安機能も著しく低下あるいはマヒするかもしれません。そんな時に救いの手を差し伸べてくれるのはアメリカでしょうか、国連でしょうか？

「天は自ら助くる者を助く」

いまこそ日本人が心に留めなければならない言葉だと思います。

本日、またサイバー攻撃のニュースがありました。

国税庁（！）が攻撃されたようです。世界的ハッカー集団「アノニマス」を名のっていますが、果たしてその正体はどうでしょうか。

二〇一六年二月十日

追記

先日メールチェックをしていたらアマゾンから本のお勧めメールが来ていました。「世界サイバー戦争」ドキッとしました。

私がネット検索していた情報は、すべて監視されているということなのですね。これまでもさんざん体験してじゅうぶん理解していたつもりですが、少しショックです。まあ、私のような人間の個人情報など知られても特に困りはしないのですが、用心に越したことはありません。こちらの購買心を読まれて「はい買います。」というのも癪でしたが、結局のところ買ってしまいました。

すっかり繰られている自分が情けない。

届いた本をパラパラとめくってみると、知りたかった事柄が満載で、この拙い文章を書く前に読みたかったと悔やむことしきりです。

本の著者は安全保障の世界的大家であり、アメリカ政府の政治、軍事問題を担当してきたリチャード・クラーク氏で、今日のサイバー戦争の詳細がわかりやすく描かれているようです。

蛇足になりますが、サイバー社会の危機を題材にしたミステリー小説二冊もかなり楽しめますのでご紹介させていただきました。

「世界サイバー戦争」リチャード・クラーク著（徳間書店）

「ブラックアウト　上・下」マルク・エルスベルグ著（角川文庫）

「ゼロ　上・下」マルク・エルスベルグ著　（角川文庫）

農業、農村そして地方の応援ソング

古屋富雄作品集第2弾　～ふるさと回帰、村に戻って～

古屋富雄

都市と農村のあり方を多くの人に考えてもらう歌として2015年10月にリリースしました古屋富雄作品集に「過疎」と「遠い思い出」があります。

高度経済成長期（1955年～73年）がもたらした負の遺産と称される「村の過疎化」により寂れていく村の姿を、また、幼い少年・少女の淡く辛い別れをフォーク調に仕上げたもので、哀愁のある心休まる歌としてご評価いただきました。

そして、この2曲を聞き、歌われている村の暮らしや少年・少女のその後はどうなったかと?との問い合わせが多く寄せられました。

近年、国が示す地方創生と連動するように新聞には、「田舎から日本を変えよう」、「田園回帰どう定着・村をめざす若者たち」、「故郷のない都会人が田舎を持てる仕組み」などと、農村での暮らしのニーズやトレンドを煽るかのように掲載しています。

テレビも例外ではなく、地方公務員が過疎の村を再生させた唐沢寿明さん主演の「ナポレオンの村」が大反響を呼ぶなどメディア媒体を通した地方への関心が多いに高まっている現実があります。

このような背景を感じつつ、古屋富雄作品集第2弾「ふるさと回帰」と「村に戻って」のリリースに至りました。

2曲とも、「過疎」と「遠い思い出」のアンサーソングそして、農業や農村、地方を元気にする応援ソングとして、J-POPに仕上げてあります。

「ふるさと回帰」は、高度経済成長期でも離農することなく、過疎の村に留まった少年が結婚して40年が経過した今の心情を歌ったものです。

町の暮らしに憧れ、より合理的な暮らしを求めたことが本当の幸せだったのかどうかを問う一方、「農ある暮らし」に憧れる若者が村にやって来ている現状をどのように考えるかを提起しています。

また、代々守り続けたお墓の管理についても、おろそかにすることがないように「先祖の墓に花をたむけよ」と言うメッセージをぶつけています。

この曲は私が作詞をして東郷昌和さん（BUZZ）が曲をつけてくれました。

東郷さんの伸びやかな声質が如何なく発揮され、東郷ワールドに引き込まれる素晴らしい作品になっています。

演奏については、ギターリストで音楽プロデューサーの伊藤銀次さん（佐野元春さんのプロデュースや大瀧詠一さん、山下達郎さんとナイアガラ・トライアングルを結成していた）と、その仲間のバンドの皆さんが参加してくれました。

「村に戻って」は、父親の工場への勤務が決まり、幼い日に遠い町へ行ってしまった少年と少女の淡い別れのその後を歌っています。

少女の家は町での暮らしを求めて村を出て行ってしまいました。

そして、少年の家も同様に村を離れてしまうことになるが、二人が大人になった時に、再び村に戻り一緒に暮らして生きていこうとするストーリーを描いています。

曲については、前回の作品集、「遠い思い出」のメロディーを踏襲しています。

イギリスでは、「都会で暮らすこと」は、人が生きていくための「義務的な生活」であり、「田舎で暮らすこと」は、人が人らしく生きていくための「権利的な生活」であると言われています。

我が国でもお金や物の豊かさ以外に、人が人らしく生きていくための豊かさが農業や農村、地方にもあることを、この2曲を通じて感じていただければと思います。

ふるさと回帰　～過疎のアンサーソング～



みんな町へ行ってしまいました
あれから40年が経ちました
私は妻と村に留まっています
農ある暮らしを続けています

町の暮らしはどうですか
楽しい日々は続いていますか
私は今日も畑に出ています
明日の糧を作っています

アー　ふるさと回帰
優しい母の胸に戻れよ
アー　ふるさと回帰
先祖の墓に花をたむけよ

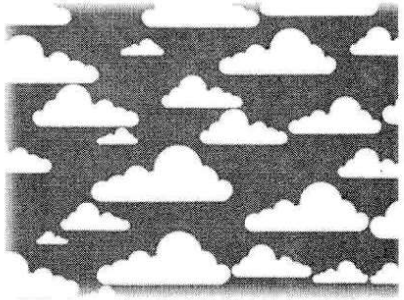
そろそろ村に目を向けませんか
あれから40年が経ちました
町から若者がやってきています
農ある暮らしがしたいようです

新しい風が吹いています
町から村へと吹いています
暮らしていく術は教えます
まずは花でも植えましょう

アー　ふるさと回帰
優しい母の胸に戻れよ
アー　ふるさと回帰
先祖の墓に花をたむけよ
優しい母の胸に戻れよ

村に戻って　～遠い思い出のアンサーソング～

君と二人で遊んだ村に
一足早く戻ってきました
見上げた空はどこまでも青く
暖かな日差しに「ホッ」としました



これから僕はこの村で
君の帰りを待ちながら
郷土料理でもてなす宿を
母の生まれた　家で始めます

荒れた畑を元に戻して
蕎麦の種を播いてみました
今年の暮れは蕎麦でも打って
新たな年を　君と迎えたい

君から手紙が届いていました
約束どおり村に戻って
早く一緒に暮らしたいと
小さな文字に　笑顔が見えた

古い物・遠い夢

忠内正之

志野茶碗
―「ザ・ラストクイーン」ゆかりの―

またぞろ茶道具の話かと嫌われると思うが、「ザ・ラストクイーン」と言われる非劇の王妃・李方子の持物であった志野の茶碗が幸いにして手に入った。

李王妃の数奇な一生を辿って、遺品とも言うべき茶碗について書いてみたい。

（一）　李王家最後の皇太子妃　「李方子」

李方子は、梨本宮家の第一女子である。梨本宮家は伏見宮家から分かれた宮家で、方子はその第一女子として生まれた。

梨本宮家は、伏見宮貞敬親王の第七王子守脩親王が慶応四年に門跡から落飾して、明治三年に梨本宮家を創立した。第二代は山階宮菊麿王が継いだ。

明治七年三月、久邇宮朝彦親王の第四王子である、守正王殿下が第三代梨本宮家を継いだ。

方子は明治三十四年（一九〇一）、父守正王と母伊都子の長女として誕生した。

方子の母である伊都子は、秩父宮勢津子妃の母である信子と姉妹であり（共に佐賀の藩主であった鍋島直大の娘）、方子と勢津子は従姉妹同士であった。

方子は皇太子（後の昭和天皇）のお妃候補にも数えられていたが、皇太子妃は薩閥政争の影響もあってか、島津系の良子妃に決まった。

そして方子は李王家の世子である李垠（韓国音では「イ・ウン」）に嫁ぐことになる。

一三九二年、高麗王朝を滅ぼして、朝鮮王朝を統治した李王家は、明治四十三年の日韓併合によって「王族家」として日本の皇族に準ずる扱いとなっていた。

この婚姻は、日韓融和を目指した政略結婚として知られ、大正天皇の「思し召し」により無理矢理おしつけられたかの如くいわれているが、実際には梨本宮家側より縁談を探していたという事情もあって、初めての国際結婚が成立したのである。

李大王（李垠の父）の急逝があり、また三・一の独立運動などに配慮した延期もあったが、大正九年（一九二〇）に婚礼が行われ、方子は李家の人となる。

邸宅は赤坂見附に造営され、伏見宮家（現・ホテルニューオータニ）に隣接し、平成二十三年に営業を終了した赤坂プリンスホテル（現在新築中）が敷地であり、二人のために建てられた王朝様式の建物であった。近年迄この建物は保存されていたが、ホテルの新築を機に、残念ながら取壊しとなった。

当時の皇族男子は、軍人になるのが義務であった。

李垠も陸軍将校となり、日中戦争開戦時には北支方面軍に派遣され、戦地を視察する傍ら満州の溥儀とも会見している。その後は近衛師団長、航空軍司令官を歴任し、軍事参議官として無事に終戦を迎えた。

しかし乍ら、終戦後の二人を待っていたのは、極めて過酷な運命であった。李家が日本国籍を外されたにも拘わらず、大韓民国の初代大統領となった李承晩が受け入れを拒絶したのである。李王の政治的力量や王政復活の客観情勢の有無にかかわらず、自分が不利な立場になることを危惧したものと思われる。

昭和二十五年に朝鮮戦争が勃発しても、夫妻はこれを日本で眺めるより他なかった。

敗戦後の李王家の一番の問題は経済的困難であった。新円切換えによる旧円の封鎖、財産税の賦課、宮内省からの歳費などの停止等により経済的逼迫を招いたのである。このため赤坂の李王家邸は人手に渡り、更に盗難、詐欺等の被害を受けて、結局、全部切り売りされてしまい、やむなく田園調布の駅近くのこじんまりした売り家をやっとみつけ、そこを安住の地と定めたのは、昭和二十七年初夏のことであった。しかし同三十二年には垠が脳血栓で倒れてしまう。

夫妻が朝鮮への帰国を許されたのは、朴正熙政権が成立した同三十八年のことであった。朴大統領は旧王家の人脈に連なる縁もあると言われ帰国を歓迎したようである。

当時はまだ日韓の国交が回復しておらず、渡航も非公式に行われた。垠は祖国に戻れたものの、寝たきりでほとんど意識も無く、そのまま同四十五年に死去した。満七十二歳であった。その葬儀には、日本から秩父宮勢津子妃が参列している。

大韓民国に帰化していた方子は、夫の死後も日本に戻らなかった。日本の皇族に対する韓国人の視線は厳しかったが、李王家の人間として生き抜く決意をしていたのである。

ソウルには、「景福宮」に対する離宮として「昌徳宮」があり、その一角に「楽善斎」という建物がある。ここが王宮の女性隠居所であり、方子はここを住いとした。

日韓の橋渡しの役割を自らに課した方子は、大韓民国独立（一九四八）後も当地に留まった日本人女性たちを取りまとめる婦人会「芙蓉会」を結成し、その会長を勤めている。

さらに障害児教育に取り組み、知的障害養護施設「明暉園」、知的障害養護学校「慈恵学校」を設立した。その運営資金を補うために、方子は工芸制作に取り組むようになった。

趣味で七宝焼を習得していたため、「ソウル七宝研究所」を設立して制作を指導。さらに陶芸を学び、高麗茶碗を焼いた。茶碗を制作したのは、日本の茶道界での需要を理解していたからであろう。女性の手作りらしい、小ぶりな井戸風のものが多く（筆者も時たま市場で拝見したことがある）、中には高麗青磁や三島写しの茶碗も含まれていた。茶碗には「方」の一字が入るのが特徴であり、福祉のための寄付をした人への御礼として贈られたようである。

方子は平成元年（一九八九）に逝去、昭和天皇崩御の三ヶ月後のことであった。方子と昭和天皇は生年が同じ明治三十四年であった。

方子が皇太子妃候補を外されたのは、同年齢でつり合いが悪かったことが一因ともいわれている。そんな方子が、昭和の終焉を異国で見届け息を引きとったのである。

まさに「数奇」と呼ぶべき人生であったが、方子は「流れるままに生きて幸せであった」とよく口にしていたそうである。

方子は、当初は冷ややかな視線を浴びながらも、韓国の恵まれない子供達のための福祉活動に身をささげた。そしてついには「韓国の母」とまで呼ばれるように親しまれた。

朝鮮王朝最後の皇太子妃、ラストクイーン方子は八十七歳でその生涯を閉じたのである。大韓民国では韓国皇太子妃として準国葬の礼をとった。日本からは三笠宮夫妻が参列した。

葬儀は韓国民の涙で見送られ、その葬列は数キロにも及んだという。

近年、韓国や日本ではテレビドラマの影響で、李王朝への関心が高まっている。李方子は、まさにその李王朝

最後の皇太子妃であった。そして子息李玖の最期をもって李王家は事実上断絶したといえる。しかし一方で王朝ブームを反映してか、韓国では李垠の兄である李堈の子孫たちなどが皇族復権の運動をはじめているという。折しも日本では女帝論以後、旧皇族復帰論が台頭しており、こうした日韓のロイヤル志向の動きに興味がもたれるところである。

この様な動きに合せてか、李王妃の遺徳を偲んで、日韓国交正常化五十周年迎える二千十五年九月二十七日、創作オペラ「ザ・ラストクイーンズ」が日本の新国立劇場で世界初演されたのである。

この物語りは記述する通り、日本と韓国の狭間におかれながらも、「和」を求め一生を捧げた李方子妃をモデルとしたモノオペラであった。

私は、たまたま家人に重い腰を押されて観劇する羽目になり渋々同伴したのであった。

オペラの中で展開される内容はダブルので説明を省略するが、従来多少の知識はあったものの、主演者 田月〝仙〟の迫真の好演技によって方子妃の生涯を再認識し、感激すること一入で、家人と共に今後のオペラの運営資金として若干の寄附を行ったのである。

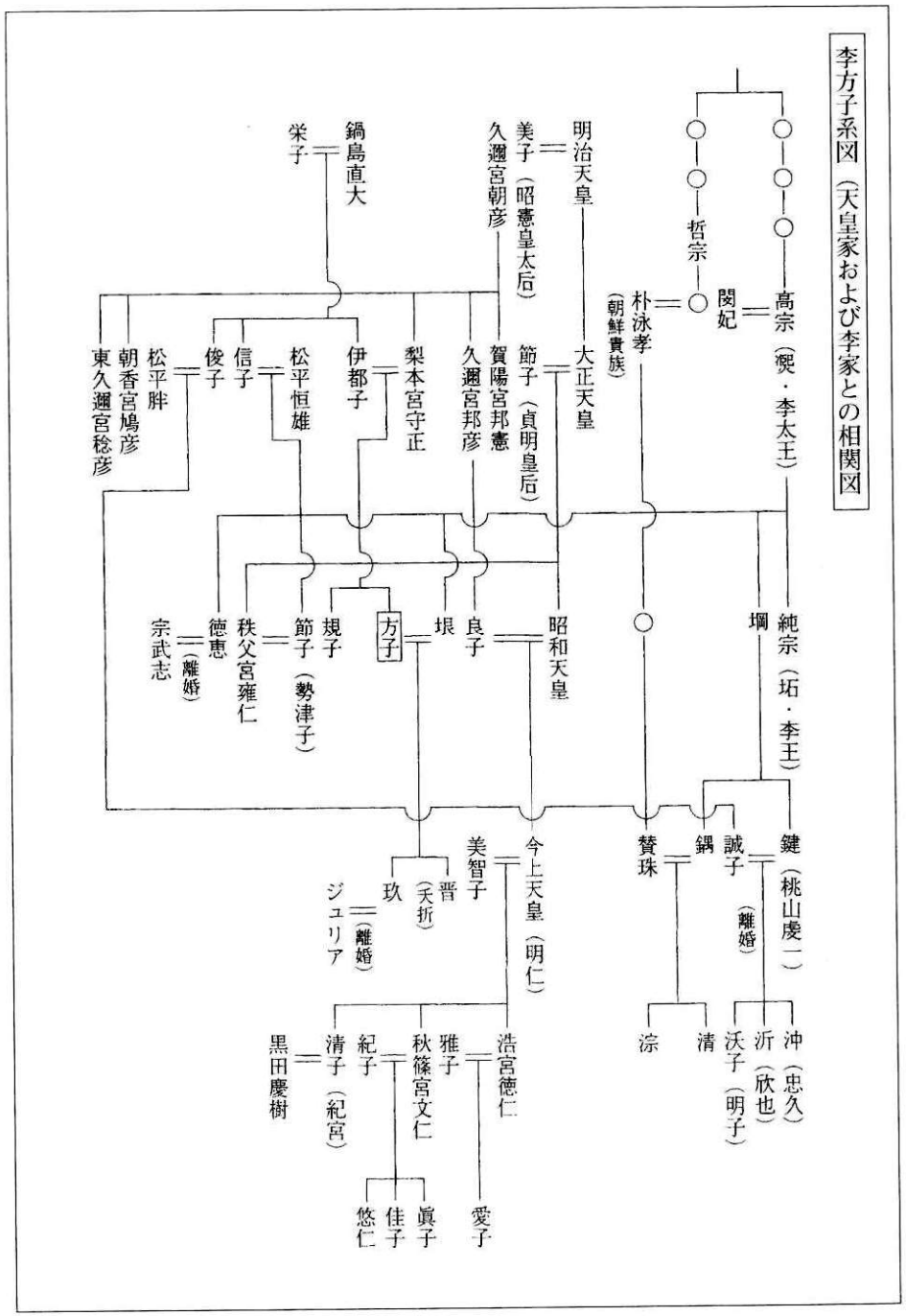
帰り途、感激のあまりほてる顔を初秋の風に冷やしながら家人はしきりに私に話しかけて来るが、私は別のことを思い出していた。それは志野の茶碗のことである。

度々私の文章に現われる、資産家で、人格者で、そして極めつきの美術品愛好家であるIさんが秘蔵する絵志野の茶碗のことであった。

十数年前その茶碗は一度だけ拝見させてもらったことがあるのみであるが、筒型の気品ある抹茶碗で李王妃ゆかりの品と聞いた。

欲しいなあとは思ったが、到底手が出せる値段とは思えなかったので、高嶺の花と諦めていた。しかし今はこのドラマを見て再びチャレンジ精神が沸々と湧いてきた。何とかして手に入れたいとの一念にかりたてられたのである。

思いついたら止まらないのが、私の困った性癖である。何とか頼みこんで、漸やく譲っていただくことに成功した。しかしその見返りとして当方も惜しい一品を提供したのである。コレクターが愛蔵品を手放すときは身を切られるように辛いものがある。それを許して下さったIさんのご好意はいくら感謝してもし足りない程ありがたかった。



（二）　絵志野の茶碗

本題に入る前に先づ茶碗の歴史について簡単におさらいして見よう。

茶碗の名称については、広義と狭義にわかれるが概ね次のようになる。

茶碗
- 喫飯用
- 喫茶用
  - 煎茶用
  - 抹茶用

そしてここで述べるのは喫茶用の抹茶碗である。

抹茶を喫する慣はすでに鎌倉時代に伝わり、南北朝、室町、東山時代には宮中、将軍、武将等特権階級に拡がって、闘茶から茶会へと発展し、紹鷗・利休の時代となって侘びの茶の湯となった。

更に利休以降、織部、遠州等秀れた指導者たちの出現によって、武士から町人に至る迄の茶の湯の普及を見たのである。

茶の湯の普及と発展に伴って、茶道具の需要が高まっていった。就中、主要な茶道具の一つである茶碗については、時代の変遷と共に、唐物（中国）から高麗（朝鮮）へ、また安南と紅毛が加わると共に、国内の開窯や進展が見られ、和物茶碗が多用されていった。

次に抹茶茶碗の時代推移を要約する。

〔平安時代〕　青磁茶碗　「馬蝗絆」の到来。

〔鎌倉時代〕　天目・青磁茶碗を禅僧が持ち帰る。

〔室町時代〕　天目茶碗各種を輸入（おもに室町幕府）、後期に入って高麗茶碗を輸入する。日本でも瀬戸で天目を焼成する。

〔桃山時代〕　高麗茶碗各種を輸入。後期には一部注文も始まる。国内で瀬戸のほか、美濃・信楽・備前・唐津・萩などでも抹茶茶碗を焼成する。天正年代の後半、楽焼が始まる。安南茶碗の一部を輸入。

〔江戸時代〕　高麗茶碗の注文が盛んとなる。（織部時代―御所丸・金海・彫三島、遠州時代―御本各種）。文禄・慶長の役後、国焼諸窯が始まる（高取・上野・薩摩ほか）。中国へ注文（古染付・祥瑞・呉州）、遠州紅毛へ注文。京焼が盛んとなる。また楽家では、代々それぞれの個性を生かした茶碗が作られる。諸大名の御庭焼も盛んとなる。

本文章の主題である志野茶碗は瀬戸黒・黄瀬戸・織部と共に桃山時代に「美濃窯」で焼成された。それでは先づ美濃窯全体像から見よう。

美濃窯について

日本の茶陶の中で、美濃窯ほど数奇な運命を辿った窯はないといわれる。

即ち寛永のころから、この窯はすっかり姿を消してしまい、その作品はすべて愛知県の瀬戸窯の産物と見られることになり、江戸時代はもとより明治・大正を経て昭和の初めまで、だれ疑うことなく瀬戸産と決められていたのである。

恐らくは、美濃窯には古田織部の息がかかっており、織部失脚後は徳川幕府に対する遠慮から逼塞せざるを得なかったのであろう。

ところが昭和五年のある日、荒川豊蔵（陶芸家・文化勲章受章）が、名古屋の某家で志野の竹の子絵茶碗を拝見し、これとよく似た陶片を自分の生まれた故郷である美濃の山中で見た記憶があるのを思い出し、翌日山中に入り陶片探しに没入した結果、同じ竹の子の絵のある陶片を見つけたのである。

その後は近辺に発掘ブームが起き、瀬戸黒・黄瀬戸・志野・織部焼の陶片が、土岐・多治見などの近民一円から続々と掘り出されたのであった。荒川豊蔵を先達に、次々とその地で窯を焼く人が現れ、現在では瀬戸に負けない一大窯業地になっている。

古い窯の作品についてであるが、種類としては、瀬戸黒・黄瀬戸・志野・織部に大別される。年代は天正の初めから寛永初年に及んでおり、概して瀬戸黒と黄瀬戸は、利休時代、志野と織部は織部時代と推定される。

前者は利休好みを含んでおり、後者は織部好みが主流になっている様である。前者も後者も同じ窯跡から陶片が発掘されているという。

次に美濃窯の中から志野茶碗をみる。

志野茶碗

和物茶碗のなかで、近年最も人気を高めているのがこの志野であるという。その理由は、他の茶碗はおおかた中国か朝鮮の形式にならっているのに対し、志野と織部はまさしく純然たる日本で発生した独自の意匠であり、これが桃山芸術の象徴ともみられ、しかもその純白の生地に施された鉄絵の力強い筆鋒と発色がたぐいない魅力として再認識されるに至ったからである。

志野窯の作品としては、茶碗のほかに向付・鉢類が多く、ついで水指・香合などに優品があり、焼物の質の分類としては、無地志野・絵志野・鼠志野・紅志野などがある。

「無地志野」は白釉だけで絵がなく、「絵志野」はこの白釉の上に、鉄釉（鬼板ともいう）で絵を描いたもので、白釉の雪肌を思わせる乳白色と、鉄釉の赤（緋色・褐

色・紫色・黒色などに変化する）の発色の美しさと、図柄と運筆の力強さが見所となる。

「鼠志野」は一度全体に鉄釉を塗りつめ、釘彫りで絵を描き、その上から白釉をフルに掛ける。そして窯に入れると絵の部分は白く抜け、それ以外は鼠色を呈するように焼き上るので「鼠志野」と呼ばれる。

「紅志野」はその白釉が薄くかかったため、総体に赤く発色したものを指す。

そして土はいずれも白く粘りがあり、まれに赤土と練り合せたものも見られ、これを「練り上げ手」と呼ばれる。また赤志野は土が赤く発色したものを言う。

志野茶碗の名品については以下のものが有名である。

・絵志野―「卯花墻」「羽衣」「広沢」「朝萩」「朝陽」「振袖」「五条橋」「通天」「初音」「蓬莱山」「住吉」「武蔵坊」「浪花」「猛虎」「玉川」（竹の子絵）

・鼠志野―「山の端」「峯紅葉」「横雲」「さざ波」

（なお、私が今迄に拝見できたのは右のうち、絵志野茶碗「卯花墻」「猛虎」「玉川」の三点と鼠志野茶碗「山の端」「峯紅葉」のみである）。名品とは「仔細」が良いもの、つまり良い条件を具備したものでなければならないので数が少くなる。

数少ない名物志野のなかでも卯花墻は、その釉色・形姿・気品の三拍子が揃った名碗として知られている。これには更に茶人片桐石州の箱書がついている。

現在、和物の国宝茶碗は僅か二つのみであり、卯花墻はそのうちの一つである。現在は三井記念美術館の所蔵となっている。

蛇足ながらもう一つの和物国宝茶碗は、本阿弥光悦（一六〇一―一六八二）作、楽焼白片身替茶碗（銘不二山）で、現在サンリツ服部美術館の所蔵となっている。

茶碗の説明が長くなるがもう一点紹介したい絵志野茶碗がある。これが本題の志野茶碗と似ているからである。

絵志野竹の子文筒茶碗銘　「玉川」

柔かい志野独特の釉の中に、竹の子が幻想的に浮かび上った端正な作行きの茶碗である。

もとは向付けとして作られたが、茶碗に転用された。

「玉川」は、小堀遠州の第三子である小堀権十郎（一六二五―一六九四）の命銘であるとされる。

名古屋の名家関戸家に所蔵されていた本品を目にした陶芸家荒川豊蔵は志野が瀬戸で焼かれたとする通説に疑問を抱き、美濃の大萱の古窯跡を調査し、本品と同手の志野の陶片を見つけた。この陶片発見が、志野や織部などの桃山陶は、瀬戸ではなく美濃で焼かれたことを説明するきっかけとなり、日本陶磁史の定説を覆す大発見となった。

私は、近年この茶碗を徳川美術館で拝見し、更に陶片

をも展覧会で鑑賞することが出来たがいまもって深い印象が残っている。

この志野竹の子絵筒茶碗こそ私がこれから述べようとする李方子が所持した絵志野茶碗とよく似ているのである。

絵志野草文半筒形茶碗（李方子所持）

それでは問題の茶碗を見てみよう。

先づ古い風呂敷に包まれた、茶碗の入った箱をとり出す。箱はかなり古く、しっかり作られた二重箱である。

外箱の表には、「李王家徳壽宮」と印刷した古いラベルが貼られている。徳壽宮はかつて李垠の生まれた宮殿である。

昭和八年、徳壽宮を公開して徳壽宮内洋館の石造殿に日本近代美術工芸品を展示して好評を博したというから、この茶碗も展示された一品であったかも知れない。

外箱の蓋裏には、三行にわたりしっかりした墨書きがなされている。

志野
茶碗
今日主（花押）

この書と花押はまさしく裏千家第十四代家元「淡々斎宗室」の若い頃の極め書きである。

淡々斎宗室（一八九三―一九六四）は七十二歳と当時としては長寿であり、裏千家を隆盛に導いた中興の祖とも言うべき人物である。

献茶を通じて、宮中や皇族方とも親しく交流があったと伝えられている。

次に内箱の表には「志野」の墨書の貼紙があって、左横に「李王職」の紙が貼られている。

李王職とは、明治四十三年公布の皇室令第一条に「李王職は宮内大臣の管理に属し王族及び公族の家務を掌る」とあり、李王家の一切を仕切っていた。

従ってこの茶碗は李王家の大切な什器として公に取扱いされていたものと思われる。

内箱の蓋裏に、朱肉の印鑑が押してあり、唐様の文字でかすかに「方子」と読める。

方子妃の私物でもあったのであろう。

さてそれでは、いよいよ本体の茶碗との対面である。

先づ紫色の仕服（茶碗を保護する袋）から茶碗を取り出す。

純白な端正な姿の茶碗が現われる。温もりのある半筒形で長石釉が輝やいている。

胴に一筋紐状が走る。いわゆる胴紐作りである。紐の

線上に唐草文の絵が認められる。

手に持つと掌にしっとりと収まる。ところどころ釉切れがあり、志野の見所でもある緋色を見せている。

高台（裏底のこと）は一重で薄い作りであるが茶人を喜ばせるコゲがある。

非力の私では、この茶碗を適格に表現する力は全く乏しいので写真をご覧願います。

形は絵志野茶碗にしては珍らしい半筒形で、黄瀬戸の向付と同形である。胴紐作りである点も類似している。

絵志野の名碗はすべて「卯花墻」に見られる様にひずみの形や絵もひょうげたものが多い。

しかしこの茶碗は黄瀬戸の端正な器形に草花文を書いて長石釉をかけてしっかり焼成したものと思われ極めて珍品と言える。

現在この茶碗と同様の完品は絶無で、辛うじて陶片のみが資料館にあるのみという。

本質は違うとしてもかなり類似した茶碗が一つ現存する。それが前述した「志野竹の子文筒茶碗銘玉川」である。

こちらも写真で並べて鑑賞願います。

サイズはこちらが半筒形であるため、高さが約2cm低いが、口径約10cm、高台径約7cmと略同じである。

絵は当方の草文に対して、竹の子絵で微笑ましい。発色に差が認められるが焼成時の条件と、その後の保存状態によるものと思う。

器形は共に端正な筒形であり、胴紐作りである。この点が一番の類似するところであり、この形は黄瀬戸にあって志野には無いものだという。

美濃焼は、時代の移りに伴い黄瀬戸焼きから志野焼が加わって来たといわれるが、移りの途中で出来たもの、つまり黄瀬戸の器体の土に絵を入れて、長石釉をかけて焼成された試作的な出来上り品だと言えるのである。

従って価値基準は別として、両者共に桃山時代に美濃の大萱窯あたりで焼かれた、兄弟同様の生まれであり、極めて珍品であると思う。

永年に亘り骨董品を集めてきた私であるが、交換という方法で、直接懐は痛まないもののこれ程の名品を持つことが出来たことは、本当に嬉しい。骨董集めを続けてきた甲斐があったと幸運を感じている。

協力して戴いたI氏には、唯々感謝の意を表する次第である。

この名品を我家に迎えることにより、家人の茶道への打ち込みも、またお弟子さんの指導にも一層の力が加わるに相違ない。

私の気力・体力も、もうぼつぼつ限界である。何度も

言っているので家人は信用しないだろうが、この名品を最後として、骨董集めは終了とする。

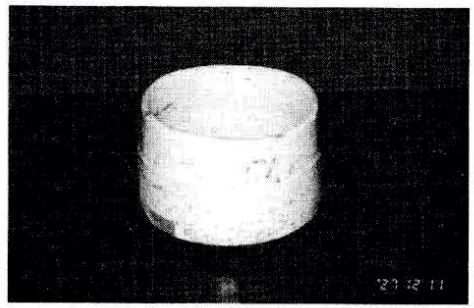
奇しくも、最近読んだ本の中で、「なんでも鑑定団」の中島誠之助先生はこう言っている。

「同じような焼き物でも、粘土を練って作ったものは陶器といいます。陶器の原点は何かといいますと、四〇〇年前の桃山時代に美濃地方で作られた、志野織部を代表とする美濃の陶器です。これは人類が火と粘土を天から与えられ、作り上げた極致のものです。だから、陶器を極めるには桃山時代の志野織部を知らなければいけない。」

また別のページでは

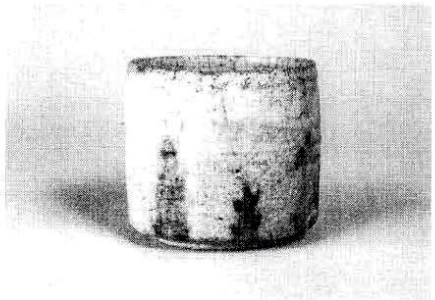
「そういう私は、今後は骨董品を買わないでしょう。というより買えないでしょう。今の私が本当に欲しいものは、知り合いの骨董屋へちょっと寄った時に見かけた桃山時代の志野の茶碗のようなものです。」

秀れた権威者である中島先生に追従するのは全くおこがましいが、私の心境も同様である。私は幸いにして桃山志野の一碗を手に入れたので、これで家人の点てた茶を楽しんで、残された人生を楽しみたいとも思っている。



「李方子ゆかり」絵志野草文半筒形茶碗

絵志野竹の子半筒形茶碗　銘 玉川



(三)　結びとして

李王妃ゆかりの茶碗はなぜにきれいなまま伝世したのか、私なりに推測してみたい。

話は大げさになるが、醍醐天皇（八九六―九三〇）の頃、美濃は陶器の調貢国としての記録が残っているという。勿論当時の焼物は行基焼と呼ばれる須恵（すえ）器の類であったと思われる。

また美濃は、土岐源氏発祥の地で、ことに初代美濃守護の土岐頼貞は、文武を兼ねた名将で夢窓国師に帰依して、多治見に虎渓山永保寺（一三一三）を興したのをはじめ、美濃各地の禅寺の興隆に寄与したという。

この土岐氏が、斎藤道三に滅ぼされるまで十一代二百年にわたって、この地を支配したことから、中央と直結した美濃の文化というものが発生したと思われる。因みに、明智光秀、古田織部も、この地の出身であった。

美濃焼の古い伝統の上にたって、信長・秀吉の庇護のもと桃山期のはなばなしい開花がもたらされたのであるが、平安・室町期から中央との繋りがあったとされるルートを通じて、この茶碗は宮中ないしは皇族に献上されたのではないかと思われる。

皇族の中で一番勢力の強かった伏見宮家に伝わり、更に梨本宮家へ、次に梨本宮家と親しかった、淡々斎家元の書き付けをもらい、更にその娘である方子の持物として李王家に持ち込まれたものであろう。その時期は今となっては不明であるが、大切に扱われたと見えて、非常にきれいに保たれている。

戦前は皇公族の中でも、李王家は格段に資産家だったといわれたが、既述の通り、戦後は経済的に貧窮した。その過程でこの茶碗も他の美術品と共に売出されたものらしい。

その茶碗が廻り廻って、I氏の手許に入ったのが、三十年以上前のことであり、I氏の倉庫に眠っていたものである。

その茶碗が今私の手許に来たのである。茶碗は物を言わないが、言わない物の方が凄味を持って迫ってくる。魂をもった生物の様でもある。どの様な四百年の生き方を送って来たものであろうか？限りなく想像の環が拡がるのである。

「オペラ」「ザ・ラストクイーン」は好評により、二〇一六年十一月一日・二日と再演されることになっている。

茶碗を見て、経緯を聞いて、感動した家人のお弟子さん達はこぞって観劇するという。

とげとげしかった日韓関係が少しづつ好転して来た今日、誠に嬉しい催物である。私も是非再参加したいもの

と予定している。

終り

参考資料

李　方子　小田部雄次著　ミネルヴァ書房
皇室事典　皇室事典編集委員会　角川学芸出版
伏見宮　浅見雅男著　講談社
もう一つの天皇家
流れのままに　李　方子著　啓友社
三代の天皇と私　梨本伊都子著　講談社
和物茶碗　小田栄一著　河原書店
日本陶磁大系(11)　志野・黄瀬戸・瀬戸黒　平凡社
骨董掘り出し人生　中島誠之助著　朝日新聞社
他

焦土の中から

太田精一

桜が咲き始めた。春本番も近い。

木本さきは、日赤病院の病棟から庭の桜を眺めている。一か月前に入院してから、自分の命が桜の満開の季節まで持つかどうか、思い煩いながらベッドに伏っていた。

膠原病が発症してから二十年近くになる。

四十八歳の更年期に差し掛かった頃であった。白く感覚が鈍くなった指先に異変を感じ、病院で診てもらった結果、膠原病と診断され難病指定を受けたのである。それからずっと病気と向き合いながら、機能の衰え行く体に鞭打ち、働き続けてきた。

しかし、気丈なさきも昭和五十六年二月に倒れたまま、ついに起き上がることができなくなった。

桜が好きであったさきは、せめて花の季節まで生きて、桜花散る中で人生の幕を閉じたいと願っていた。

さきは、夢をみることが多くなった。とくに戦中、戦後の混乱の時代にもかかわらず、溌剌と生きた時代の頃の夢が混濁する意識の中から蘇ってくる。

夢は、脈絡もなく衝撃的な出来事を中心に断片的に頭に浮かんできた。

さきは、意識がはっきりすると、これまで見た夢のかけらを拾い集め、古い順に思い出してみた。そうすることによって自分の生きた証を自分なりに納得させることが出来ると思ったからである。

一・東南海地震

激しい地鳴りがした。地の底が割れるようなすさまじい地響きとともに地面が揺れた。まるで地底で得体のしれない怪物が暴れているようだ。昭和十九年十二月七日午後一時半を少し回っている頃であった。

さきは、二歳半になる次男の強司を抱き、長男の伸一

のいる隣の部屋に向かって叫んだ。
「伸一地震だに。お母さんと一緒にすぐ外に出よう」
さきは、伸一のいる部屋を覗き込んだ。だが、部屋にいるはずの伸一がいない。さきは、大声で伸一の名を呼びながら外に出た。すると伸一は、玄関先の空き地に震えながら蹲っていた。
外に飛び出したものの立っていられるような状態ではない。家がまるで波に翻弄されている小舟のように揺れている。
さきは、強司の体を左手で抱えながら右手で伸一を抱いた。
「伸一。いてよかった。地震はもうすぐ収まるから、しばらく三人でここにいよう」
幼い強司は恐怖に怯えて母のさきにしがみついて離れようとしない。
さきの家は、浜松市大工町の西の端にあった。大工町は、浜松駅前の大通りを鴨江観音に向かう途中の小さな町である。現在は、中央区大工町となっている。
徳川家康が、岡崎から浜松に城を移す時に連れて来た大工たちを集めて住まわせたところから町名が付けられたという。
当時、さきは夫の吉雄、祖父の巌次郎、長男の伸一と次男の強司の五人家族の主婦であった。
夫の吉雄は、日本楽器に勤めていて地震の起きた時には、家にいなかった。祖父の巌次郎は、佐鳴湖に釣りに出かけていた。
しばらくすると揺れも収まった。
「やっと収まったようだね。でも余震があるといけないから、もうしばらくこうしていたほうがいい」
さきが、子供たちと空き地に蹲っている間に、北隣の畳屋の後家、河野すずが三人の子供を連れて避難してきた。次いで南隣の未亡人でさきの義姉(あね)杉本ちかが、嫁ぎ先の母親しまとともに避難してきて、互いに地震の恐怖を語り合った。
「こんな大きな地震は始めてだに、家が倒れやしないかと気が気でなかったやあ。道路に飛び出してみたら足が地につかなかったから、そこにあった電信柱にしがみついていたずら。倒れなくてよかったやあ」
杉本しまが震えながら地震の恐怖を語った。
杉本家は、江戸時代から代々大工の棟梁の家柄であったが、長男の長十郎の子供が女の子ばかりであったため、次男の睦五郎が、棟梁を引き継ぐことになった。その睦五郎に子供がなかったために、木本家に嫁に出した長十郎の娘きくの次男昭治を養子に貰い受け、棟梁の杉本家を継ぐことにしたのである。
吉雄は、木本家の三男であったが、次男の昭治を杉本家に養子に出した後、木本家では、長男雄一が病死して

しまったため、吉雄が木本家の跡取となった。したがって、杉本家の昭治と木本家の吉雄は兄弟で、さきにとってちかは、義理の姉さんに当る。
棟梁の家を継いだ昭治は召集を受け、昭和十二年に中国で戦死した。そのため、大工の杉本組は、棟梁に誰を立てるかで親戚一同が話し合った。
ちかは、江戸時代から続く大工の杉本組を解散したくなかった。
ちかには、当時六歳の男の子と二歳の女の子がいた。夫に先立たれたちかは、長男が成長するまで夫の後を引き継ぎ、杉本組を存続させようと願ったが、五十人からの大工職人を取りまとめ、経営することは困難であろうとの親戚一同の考えに押し切られた。
そこで棟梁の弟である木本家の吉雄に白羽の矢が立った。ところが、父親の巌次郎が反対したのだ。
「残念ながら吉雄にはとても無理だ。大工の棟梁は、普通の職人以上に、腕が良くなければいけない。親の口から言うのもなんだが、吉雄の技量はそこまで達していない。それに、吉雄は人に好かれる性格だが、信頼されるほどの器量を持ち合わせていない」
巌次郎の言葉は、集まった親戚たちの意見を大きく左右した。結局杉本組は一旦解散し、六歳になる長男の紘一郎が成人した暁に、職人たちは組の再結成に力を貸すということで話し合いがついた。その決定に従い、職人たちもそれぞれ身の振り方を考え、散って行ったのである。
「おじいちゃ、家の息子には、大学で建築学を学ばせ、将来は杉本組を率いてもらいたいと思っているけどそれでいいだね」
ちかは、杉本組の後継者は、夫昭治の長男紘一郎であることを巌次郎に承知させておきたかった。そうすることによって、夫に先立たれたが、あくまでも杉本家の嫁としての地位を固めておきたかったのである。
その後、ちかは、紘一郎を浜松第一中学校に入学させた。浜松一中は、進学率も高く旧制の高等学校、高等工業学校、高等商業学校に進学する者が六割を超えるほどであった。
「私は、おばあちゃんの手を引いて外に飛び出したはいいが、預金通帳と家の人の位牌を忘れたことを思い出してまた家に入った。けど、揺れで倒れた箪笥の前に尻餅をついて起き上がれないだに。それで、とうとう地震が収まるまで家の中に閉じ込められちゃった。ごめんね、おばあちゃん。空地にほったらかしにして」
ちかはそう言いながらおしまの着物の埃を払った。
北隣の畳屋の女房の河野すずは、昨年ご亭主に先立たれた。糖尿病が悪化して腎臓を患ったのが命取りとなったのである。

すずは四十二歳で未亡人となり、昭和十九年に畳屋の店を閉めている。

河野家には、男の兄弟が三人いた。長男が家業の畳屋を継ぎ、次男も畳職人となったが昭和十七年召集を受け、南方の島に派遣された。

三男の道雄は、松江の高等学校に入学し、島根県の松江で大学を目指して勉強していた。

河野家の西隣には焼判屋の神谷家がある。そこのかみさんの澄枝は、さきが心を許せる最も親しい女友達であった。

澄枝の亭主は、焼判屋のかたわら消防隊員として消防署に勤めていた。だが、彼も召集を受け、澄枝も未亡人同然であった。

したがって、さきの周りの家は、軒並み女所帯で、さきは、亭主の吉雄が家にいるというだけで近所のおかみさんたちから「男手があって頼りになるからいいね」と羨まれていたのである。

紀伊半島南東沖で発生したこの地震は、戦後になって公式には、マグニチュード七、九、東海、近畿全体で、七千人余りの死者・行方不明者を出したと発表されている。

各所で道路に亀裂が入り、倒壊した家屋も少なくない。浜松の近在でも大きな被害が出ている。浜松市の隣の可美村にある遠州織機（現遠州製作所）鈴木織機（現スズキ自動車）にも被害が出て建物が倒壊し、その下敷きとなって圧死した人もいた。

だが、被害状況は、家族にも知らせることができないほど厳しい箝口令が敷かれていたのである。

軍需都市浜松は、この地震によって大打撃を受け生産力が著しく低下した。しかし、損害は軽微なりとしか発表されず、詳細は戦後になるまで明らかにされなかった。

浜松の被害状況は、戦後になって初めて、住居の全壊は二百二十八戸、半壊四百六十七戸、死者二十二人と公表されている。

佐鳴湖に釣りに出かけた厳次郎が帰ってきた。厳次郎は、帰る途中で見た悲惨な状況を次のように語っている。

「佐鳴湖から入野を通って帰って来たが屋根瓦が落ちて、土壁が崩れた家をあちこちで見た。道のところどころに地割れがあった。相当大きな被害がでているのではないか」

吉雄は勤務先の日本楽器で復旧に当っていたため、地震の当日は、家に帰ることができなかった。翌日家に帰っても、日本楽器の被害状況については、家族にも語らなかった。

余震も収まったので、空き地に集まった近所の女たちはそれぞれ家に帰り、散乱した器物や家具などの後かたづけに追われた。

東南海地震後、浜松は、米軍の爆弾、焼夷弾、艦砲射撃と実に二十七回の攻撃を受け、市内の九十二パーセントが灰燼に帰している。

さきも近所の女たちも度重なる空襲警報のサイレンの音に悩まされ、おちおち眠ることができない。そうした状態が昭和二十年六月十七日夜の浜松大空襲と七月二十九日夜の艦砲射撃によって全市域がほぼ壊滅するまで続いたのである。

二、浜松大空襲

敗色濃厚となった昭和二十年六月十七日深夜。けたたましい空襲警報のサイレンの音でさきは目を覚ました。

蒸し暑い夜であった。

いつもと違う数のB29の爆音に恐怖を感じたさきは逃げ支度を始めた。

「伸一、すぐ起きな。空襲だに。今日はいつもより飛行機の数が多いだら。すごい爆音が聞えるずら。ぐずぐずしていると逃げ遅れるに」

伸一は、寝間着のまま裸足で家を飛び出し夜空を見上げた。上空には、B29が大編隊を組んで轟々と爆音を響かせている。

突然、目の前の材木が炸裂音とともに燃え上がった。辺り一面まるで昼間のように明るくなった。

材木置き場からの火が移って、南隣の杉本家が炎上し始めた。ちかと中学三年生の長男の紘一郎が、小学四年の長女優子の手を引き、着の身着のまま家を飛び出し、火の手が上がっていない方角目指して逃げて行った。

杉本家の火炎がさきの家にも延びてきた。火の粉が木本家にも飛び散っている。奥の部屋から厳次郎が大声でさきに告げた。

「おさき。子供たちを連れて早く逃げろ。今夜は敵機の数も多い。火なんか消している暇はないぞ。俺は位牌、預金通帳、印鑑を持って、すぐ要るものを乳母車に積んで後から栄町の杉本の防空壕に行くから先に行け」

「はい。おじいちゃ。伸一と強司を連れて先に行くからね」

さきは、強司を背負って伸一の手を取り、走り出そうとした。その時、伸一が寝間着のままであることに気付いた。

「伸一、服を着て運動靴を履き、防空頭巾を被ってきな。これから火の中を逃げなければならないかもしれないだら」

伸一は、薄暗い家に入るのが恐ろしかった。灯火管制のため、光が外に漏れないように電灯の笠に黒い布を被せ部屋を暗くしている。

枕もとにある学童服を着て防空頭巾を被り、玄関の運動靴をつかんで飛び出そうとした。すると家の中に入れておいた鶏が異変に気付き、羽をバタバタさせ、鳴き声

を上げている。毎日卵を産み可愛がっていた鶏であったので、伸一はとっさに抱きかかえ連れて行こうとした。

「何をしているの。早くしないと火に巻かれてしまうだに。あちこちに焼夷弾が落ちて火の手が上がっているずら。可哀そうだけど鶏は、家に置いて行きな」

伸一は、可愛がっていた鶏を放すことができないでいる。だが、北隣の畳屋にも火が回り、もはや鶏を置いたまま逃げるしかないと思った。

「ごめん。お前を連れて行けない」

伸一は、玄関の戸を閉め、さきに抱き着いた。まるで鶏に死刑宣告を与えたような暗い気持ちになった。

さきは、伸一の手を引き大工町から隣の栄町まで、鴨江観音通りを約三百メートル一目散に駆け抜け、やっと杉本家の防空壕に辿り着いた。壕の中には、すでに三十人ほどの人たちが避難していた。

壕は、小山をくり抜き、幅二メートル位のアーチ型に掘られている。天井は二メートルほどあった。長さ八十メートル程度の抜け穴で、通り抜けられるようになっている。中は暗くじめじめしていて蝙蝠でもいそうな感じである。明治の初期、もともと物置小屋として作られたもので、防空壕に利用されるようになったのは、空襲が激しくなってからである。

さきたちが入ってから新たに二十人ほどの人が避難してきて総勢五十人ほどになった。誰もが不安げな表情で蹲ってじっと息をひそめている。

ぱちぱちと物がはじけるような音の中に混じって、ゴーと地鳴りのような音がする。

煙が壕の中に充満し、喉の痛みを訴える者や咳をする者が多くなった。すると中の誰かが声を掛けた。

「水溜りに手拭いを浸し、煙を直接吸わないようにしたほうがいい。爆音が聞えないところをみると、どうやら敵さんは立ち去ったようだ。もう少しの辛抱だぜ」

その言葉に励まされ、お互いに煙を直接吸わないよう声をかけあって一夜を明かした。

翌朝、全員恐る恐る外に出た。目の前の景色は一変していた。まるで悪魔が魔法をかけたように家も草も山の木々も赤茶け、黒ずみ変色している。

さきは、一夜にして別世界に足を踏み入れたような気がした。

太陽の光が壕の東口から差し込んできた。梅雨の合間にもかかわらず、上空は良く晴れている。

「全員無事でよかった。だが、この分じゃ家は丸焼けずら」

避難した人たちは、お互いの無事を喜び合い、それぞれ自宅に帰って行った。

さきは、茫然と外の焼跡を眺めている。後から来るはずの源次郎の姿が見えないのだ。

夫の吉雄は、昭和二十年二月、本土防衛という名のもとに再度召集を受け新潟にいる。

(家はすでに焼け落ちているに違いない。子供たちを抱えこれからどうしよう)

さきは、今後の身の振り方について思いめぐらしていた。

突然、目の前に光が射したようにさきは感じた。厳次郎が元気な姿で現れたのだ。破れた着物の裾をからげ、麻裏の草履を履いている。顔は煤で汚れていた。

「無事だったのか。よかったな。お前たちを先に行かせてすぐ乳母車に荷物を載せ、家を出てここにきた。ところが、杉本の家が燃えている。防空壕の上の山も火に包まれていた。とてもこんなところにいるはずはないと思って五社神社に逃げた。神社は、すでに焼け落ちて周りの木々はまだ燃えていたが、火の勢いが衰えていたので池の水を頭からかぶって、境内で一夜を過ごした。途中で乳母車にも火が移ったので、捨ててしまった。結局懐に入れた位牌と貯金通帳と印鑑だけが助かっただけだ」

厳次郎は、昨夜の危険をまぬがれ、命拾いをした安堵感と家族の無事を喜び、興奮が冷めやらぬ面持で口早に語った。

「大工町の家は、焼けてしまって跡形もないと思うが行ってみるか。火災からまぬがれるようにと思って地中に埋めておいた食器類は使えるかもしれない」

厳次郎の言葉で、さきは気をとり直し、子供たちと共に大工町の家に戻った。

予想していた通り家は跡形もない。辺り一面焼け野原となっていた。かろうじて土中に埋めた食器類だけが残っていた。

大工町、伝馬町、鍛治町、千歳町など下町で残った家は一軒もない。大工町と元魚町を流れる排水路にも火を逃れるために苦し紛れに川に飛び込んだ死体が重なり合って横たわっていた。

三、実家へ避難

焼跡に茫然と佇んだ厳次郎とさきは、まずねぐらを確保しなければならなかった。

差し当たってさきの実家の白羽町の大庭家に身を寄せることにした。

厳次郎は兄弟、親戚がほとんど死に絶えていて、近くに身寄りはなかった。厳次郎の妻の実家である栄町の杉本家も、かろうじて防空壕として使った物置用の横穴だけを残し、すべて灰燼と帰した。

「やっぱり、白羽の実家にしばらく身を寄せよう。家の人が帰ってくるまでは、おじいちゃも一緒にそこにいたらいいじゃん」

「そうだな。しばらく厄介になるとするか。俺まで転が

り込んで迷惑をかけるがそうするよりしょうがないなあ」

巌次郎は済まなさそうにさきに言った。

「そうしよう。兄さんと義姉さんには悪いけど一部屋位なら開けてくれると思う」

大庭家では、さきの父親はすで他界し、母親のふみと兄の定吉夫婦、妹の静子の四人家族である。兄夫婦に子供はなく妹の静子が養子を迎え、家を継ぐことになっていた。

さきは家族と共に着の身着のままの姿で掘り出した食器類をボロ布に包んで背負い、四キロの道のりを白羽町の家に向かって歩いた。

瓜内橋を渡り中田島街道に差し掛かると田んぼが広がっている。稲が青々と育っていた。昨日の空襲がまるで嘘のようにのどかな風景だ。朝から晴れていた。強い日差しが照り付け、さきは汗を拭きながら白羽へと向かった。

石ころだらけの乾いた道に砂埃が舞い上がっていた。

大庭家には、さきの妹のみずえも子供連れで身を寄せてきた。みずえの嫁ぎ先菅原町の藤本利右衛門商店も六月十七日の空襲で焼失したのである。

藤本家は、江戸時代から続く商家で、罹災した当時は建材店を営んでいた。みずえの主人利右衛門はその店を継ぐ跡取り息子であったが徴兵され、長い間海軍で兵役を勤め、下士官となっていた。

終戦まで軍隊生活を送っていたので、家が焼失したことすら知らなかった。

大庭家は、これまでの四人だけの生活が、さきの家族とみずえとその子供が加わり、一度に十一人が一つ屋根に暮らす大所帯となった。しかも子供は男の子ばかりで、家の中はまるで戦場のようであった。

さきは、自分の嫁ぎ先木本家の家族が世話になっていることに気がねし、実家の農作業を手伝うことにした。

伸一は、白羽での田舎暮らしが性に合っていた。虚弱体質であったが、すっかり丈夫になり近所の子供たちとも打ち解け、毎日を楽しく過した。

元城国民学校から白脇国民学校へと転校したが、学力レベルに相当差があったため、成績もずっと上がり、クラスでも一、二番を競うほどになった。

戦局はますます厳しさを増し、ラジオから流れるニュースは、玉砕や空襲の報道ばかりである。

終戦も近い七月二十九日の夜十一時半頃、さきは、昼間の畑仕事の手伝に疲れてぐっすりと眠っていた。

突然、けたたましい空襲警報のサイレンと早打ちの半鐘の音で起こされた。

遠州灘に集結した米国の軍艦から浜松市内に向けて艦

砲射撃が開始されたのである。

さきは、伸一と強司を起こし、庭先に掘った防空壕に退避した。伸一は、防空壕の入り口に座り、そこから夜空を見上げた。

ずしんずしんと腹に響く音とともに閃光が流星のように頭上を走り、浜松市内に向かって流れて行く。その空の奥には無数の星がきらめいていた。

「中田島の沖にアメリカの軍艦がぎょうさん集まって浜松市内に向かって撃っている」

表の家の大庭弥四郎が、海岸で見てきた様子を語った。

「浜松に上陸するつもりずらか」

定吉が心配そうに弥四郎に聞いた。

「さあ、敵さんが考えていることは分らんが、すぐに攻めてくるような様子ではなかったぜ」

それを聞いて周りの人々は安堵の胸をなでおろした。

砲撃は、一時間余りも続いた。

砲声が鳴りやむと蛙の鳴き声がひときわ大きく聞こえてきた。海鳴りが再びかすかに聞こえ始めた。どうやらアメリカ艦隊も引き揚げたらしい。辺りは夜の静けさを再び取り戻している。

防空壕から出たさきは、ほっと胸をなで下し、子供たちを抱きしめ無事を喜んだ。

その日の艦砲射撃で浜松市内に打ち込まれた砲弾は千六百二十発。死者、重傷者、軽傷者合せて三百二十三人。家の全壊三百二十四戸、半壊二四八戸と発表されている。すでに浜松は、六月十七日深夜から十八日未明にかけての焼夷弾攻撃によって街の半分以上が焼失し、その上に艦砲射撃の砲火に晒されたため、街は壊滅状態に陥ったのである。

八月六日は、広島に原爆が投下された。

さきは、中部日本新聞の一面に報道された記事を読んで、戦争の行く末に不安を抱き、子供たちを海岸近くではなく、山奥深く長野県との県境の近くまで疎開させることを真剣に考え始めた。

広島に次いで、八日にはソ連が参戦、九日には、長崎にも原爆が投下され、ますます日本の敗色は濃くなった。

運命の八月十五日を迎えた。

田の草を取っていたさきの耳に町内会長から伝言が入った。重大な発表があるから集会所に集まるようにとのことである。

汗が滴る暑い日であった。

天皇陛下の玉音放送がラジオから流れ、よく聞き取れなかったが、戦争に負けたことをさきは感じ取った。

「いくら日本の兵隊が大和魂を持って戦っても、鉄砲も弾丸も飛行機も無ければ勝つはずがない。竹槍では勝負にならんだら」

さきの兄の定吉は肩を落として泣いた。

さきは、日本が負けたことは悔しかったが、戦争が終わったことでほっとした。

（これで明日から空襲に悩まされることはない。子供たちの命を危険にさらさなくても済む。そのうち夫も帰ってくるだろう）

複雑な思いが、頭の中で交差し、訳もなく涙が止まらなかった。

「お母さん。日本が負けたって本当なの。日本は神の国だから負けるはずないって言っていたのに、神様はいなかったね」

「さあ。いないじゃなく、お力を貸してくれなかったと思う」

「どうして力を貸してくれなかったの。日本人は、みんな戦争に勝ちたいと思っていたのに」

「そうだよね。でも、勝つためには日本人がいなくなってもいいだかって、神様は考えたかもしれないずら。力を貸さなかったのは、たくさんの兵隊さんが死んで国中の街が空襲を受け、家を焼かれ死んだ人がたくさん出たからじゃないだらか。たとえ勝ってもそこに住む人がいなくなれば、国は亡びてしまうから、もうこのあたりで止めときなさいというお告げだったように思うだに」

伸一は、さきの言葉を聞いて釈然としなかった。だが、戦争に負けたことは間違いない。やり場のない悔しさがこみ上げてきて、伸一は外に飛び出した。

太陽がギラギラ照り付け青空が広がっている。裏の林から蝉の声が聞え、田んぼの上をオニヤンマが飛んでいる。

近くの小川、しゃぐじ川の土手に腰を下ろした伸一は、田んぼを吹き抜ける爽やかな風に当りながら、うつろな目をしてつがいとなったオニヤンマを眺めていた。

四、復興への槌音

新潟県三条市で兵役についていた吉雄が帰ってきた。

二週間ほどさきの実家で暮らしていたが、九月初めさきと子供たちを連れ、大庭家を出た。大工町の焼跡に家を建てることにしたのである。家を建てる間、六月の大空襲の時、避難した杉本家の防空壕を仮住まいとした。

壕は、ところどころ水溜りがありじめじめと蒸し暑い。天井からは、水滴がぽとぽと落ち、床板を渡して作った寝床を濡らした。その床板にはカビが生えている。

伸一は、疥癬ができ、頭の大きなデキモノが三つ化膿し、冬になるまで治らなかった。

十一月になって木本家では、やっと二間×三間のバラックを建てた。焼け焦げの残る材木を使い、太藺草（ふとい）のゴザを敷いた粗末な家であったが、何とか雨露をしのぐことができた。電気がつくようになって厳次郎を引き取り、やっと家族が一つ屋根の下で暮らせるようになった。

終戦の年から翌年にかけての冬はひときわ厳しかった。

傷痍軍人が寒空に募金箱を持って街頭に立っている。戦争の傷跡は街の至る所に残っていた。

焼跡に戻って来た人々も、毎日の食糧を求めて農村に買い出しに出かけた。闇市で不法な食料品を購入する者も後を絶たなかった。終戦直後の生活は、生存をかけての飢えとの戦いであったのだ。

さきは夫の吉雄と共に担ぎ屋を始めた。農家に買い出しに行って穀類、芋類を仕入れ、それを背負い汽車に乗って名古屋、大阪まで運び、売り捌く闇商売である。

食糧不足の時代であったため、面白いように売れて儲かった。

終戦の翌年、昭和二十一年になって北隣の畳屋の河野すずが子供たちとともに戻ってきた。

南隣の杉本ちかも義母のしまと子供たちを連れ、焼跡に家を建てた。家を建てるにあたっては、戦死した棟梁昭治の弟子たちの支援があった。六畳、六畳、四畳半に台所のついたこじんまりとした家であったが義母のしまと長男紘一郎、長女の優子の四人で暮らすには十分である。

勝気なちかは、何としても長男紘一郎に、高等教育を受けさせ、杉本組を率いる立派な人物に育てたいと考えていた。

収入は、戦死した昭治の遺族年金しかなく、所有地を切り売りする生活であったが、何とか菌を食いしばって息子を大学に入れた。

紘一郎は家を焼失し、受験勉強もほとんどできない状態で過ごした。疎開先の中田島の母の実家から浜松一中まで徒歩で二時間余りを要した。

そのため、授業には遅刻しがちで、勉強ができる状態ではなかった。

紘一郎は、日本大学の工学部土木学科に昭和二十二年入学した。

翌二十三年木本家の前の洋服屋のあった土地に小料理屋ができ、焼け野が原となった大工町もぽつぽつとバラックが立ち、復興の萌しが見え始めた。

厳次郎も鴨江観音通りの焼判屋の跡地を借り、家を建て増し「かざりや」の看板を出した。

飾り職人であった厳次郎は、簪（かんざし）、指輪、キセルなどの金属細工を手掛ける店を始めた。社会も少しずつ落ち着きを取り戻すにつれ装飾品類の需要も出始めたからである。

春夏の彼岸には、鴨江寺への参詣人が近郷近在から大勢集まる。伝馬町と大工町の交差点から鴨江寺までの一キロ余り続く沿道には、大道商人がテントを張って瀬戸

物、おもちゃ、駄菓子、食べ物屋などの店を出し、連日縁日のような賑やかさであった。

鴨江寺の境内には、サーカスや見世物小屋が立ち並び、軽業、唐人形、ろくろく首などの見世物小屋が庶民の人気を呼んでいた。

娯楽の少なかった昭和二十年代には、こうした見世物小屋が賑わい、鴨江観音参りは浜松地方の庶民の最大の娯楽の一つになっていたのである。

木本家では、この彼岸の期間中一週間だけ参詣客を当て込んで、甘味類を中心とした休み処を開いた。汁粉、甘酒、団子、饅頭などの甘味をお茶に添えて提供する店である。

店は、さきが切り盛りした。参詣客で賑わうその期間は、猫の手も借りたいほどで春、夏の彼岸の二週間で年収の半分を稼ぎ出すほどであった。

夫の吉雄は、東洋紡績で働いていたが、父親の厳次郎の収入と彼岸の甘味処の収入で十分生活ができるほどであったので、家には、給料の半分しか入れず、残りの半分は小遣いとしていた。

家計の主役を担っていない吉雄は、木本家の大黒柱としての自覚がない。兄弟姉妹が皆若くして他界したため、大事に育てられ、金銭的な苦労もなく育ったこともあって一家を支えようとする責任感に欠けていた。

杉本組が解散した後、日本楽器に勤めていたが、戦火が激しくなった昭和二十年には、兵隊として再召集され、復員後は、東洋紡績に職を替えた。が、束縛されるのが嫌いな吉雄は欠勤も多く、収入も少なかった。

それでもさきは、夫がいるだけで幸せであった。周りには、夫を亡くし未亡人となった婦人が多い。子供や夫の親を抱えながら生計を支え、生きるために懸命に働いていた。

義姉のちかは、夫の昭治を日支事変で失い、昭和十二年以来未亡人となった。大学生の息子と高等学校の娘を抱え、苦しい家計の中懸命に生きている。

北隣の河野すずは、主人を糖尿病で亡くした。また、木本家の前の空地に小料理屋を開いた山内美保も一人身で店を切り盛りしている。

さきは、夜の床で夫に抱かれ、その温もりを感じながら幸福を感じていた。

(大して働きはないけれど家の人が生きて帰ってくれたおかげでこうした歓びを味あうことができる。おちかさんやおすずさんはこんな夜、どうしているずらか)

さきは、ときおり憂いに沈むちかやすずの顔を思い出していた。

ちかの義母、杉本しまは、七十歳を少し超えていたが、色つやも良く、年の割には若い。身だしなみには常に気を使い、そこはかとない色気が漂っている。杉本家に嫁ぐ前は芸者をしていたという。

しまは、かつて羽振りのよかった杉本組のおかみさんであった頃のぜいたくな暮らしが身についていて、苦しい家計の中、やりくりしながら大学に通わせているちかと諍いが絶えなかった。親戚もなく身寄りもなかったため、しまにとって、さきは愚痴をこぼす格好の相手であった。しまは、ちかの行いや諍いの一部始終をさきに語り、日頃の鬱憤を晴らしていたのである。

五、恋模様

ちかは、息子のことで悩んでいた。紘一郎は、卒業を来年に控え、手紙でちかに将来の希望を書き送っていたのだ。

紘一郎が、東京から帰省し、ちかと厳次郎に自分の将来について語った。

「最初は建築科に入って浜松に帰り、杉本組を再興するつもりでいた。だが、戦争によって職人は家を焼かれ、自分の身の振りかたさえ定まっていない。卒業して浜松に帰っても僕一人だけではどうすることもできない。また、すぐに職人を集め再興するだけの資金もない。だから卒業後、浜松に帰って来るより、どこか適当な会社に就職することを考えている」

紘一郎は、卒業をまじかに控え、ちかと厳次郎の前で将来の方針を語った。

「戦争がすべてを狂わせてしまった。お前の思った通りにするがいい。こんな時代になって、俺には最早お前の人生についてどうこうしろと言うだけの権利はない」

厳次郎は、孫の紘一郎を家の束縛から解放し、自由にしてやりたいと思った。

一方、ちかは、息子の申し出を頭では分かっていたが、素直に認めることができないでいる。

「しばらく家の職人の中で一番腕のいい時田敏三郎のところで修業して、学校で学んだことを生かし、折を見て杉本組を再結成しておくれでないか」

「お母さん、それは無理だ。大きな会社は、卒業のこの時期を逃がしては、採用しなくなる。暮らしも困っていることだし、卒業したらすぐ就職して少しでも家計を助けたいのだ」

ちかは、夫を奪われ、空襲により家や財産を焼失し、息子までも自分の手の届かないところに連れて行ってしまった戦争を恨んだ。だが、まだ中学生の娘もいる。何としても生き抜いて老いた義母や娘を養って行かなければならない。そんな状況の中で紘一郎が就職してくれれば助かる。

ちかは、しぶしぶ息子の説得に従った。

そこで息子の帰省のために用意していた六畳間を旅行者のための民宿とし、玄関の脇にある四畳半の部屋を貸間とすることにした。

借り手はすぐついた。坪内つや子というお妾さんであ

る。

一方、民宿に使っている部屋は京都から遠州地方に呉服を売り捌くために出張して来る進藤幸次郎がよく利用するようになった。

つや子のところには、毎金曜日週に一度、旦那の谷島富夫が通ってくる。彼は水道工事請負業をしていて羽振りがいい。

金曜日になるとつや子は、銭湯に入り、念入りに化粧をして昼間から谷島を待っている。その仕草は艶めかしく、ちかは妙な想像に掻き立てられるのであった。

蒸し暑い夏の夕暮れであった。昭和二十四年七月の土用の日である。つや子は、風を入れるため、襖を半開きにして谷島の体を迎え入れていた。つぎづぎと押し寄せる快感に思わず声を上げ、その声がちかの耳に入った。

ちかは、両手で耳をふさいだ。だが、その指の隙間から漏れ聞こえる喘ぐような声は、ちかの想像を掻き立て、体がほてり金縛りにあったようにその場から立去ることができなかった。

四十になったばかりのちかにとって、それは地獄の業火の中に身を置いて逃れようともがき苦しんでいる夢を見ているような気持であった。ちかは、女として奔放に生きるつや子に嫉妬し羨んだ。だが、そうした生き方のできない自分に腹立たしさを感じ、つや子に対する憎しみが生じた。

「つや子さん。半年間部屋をお貸ししましたが、娘も年頃で自分の部屋が欲しいというもんだから、三カ月以内に部屋を空けて頂けませんか。それから谷島さんが来られる日は、部屋を閉め切って下さいね」

「分かりました。お嬢さんも年頃ですし、いつまでも谷島とこうしているわけにはいけませんわね」

つや子は、ちかの言葉に従い部屋を空けた。

がらんとした部屋に座ったちかは、このまま年を重ね、女としての魅力が失われて行く自分に憐れみを覚え、やるせない気持ちを拭い去ることができなかった。

彼岸を迎えても暑さは、まだまだ続いていた。そんな時、進藤幸次郎が京都から冬物の反物の販売のため、浜松に出張してきて、杉本家に宿泊した。

つや子が部屋を空け渡した一ヶ月後である。

進藤は、帰着後玄関前の井戸端で体を拭いていた。色白で筋肉質の進藤の体は、ちかにとっては眩かった。ちかは、何となく見てはならないものを見たような気がして、思わず目をそらした。

「ここにタオルがありますので使ってください。体を拭き終えたら、すぐ夕食にします」

「おおきに、ありがとさんです。今日は、特に汗をかいたので冷たい水で冷やしとうなって、えらい失礼しまし

た」

進藤が部屋に戻るとちかは、夕食の膳を整えている。

「ビールでもお付けしましょうか。こう暑くては、冷たいビールが美味しく感じられますよ」

「そうして頂けると有難いですな。日中歩き廻ったため、喉がもうカラカラですねん」

進藤は、ちかの注いだコップのビールを旨そうに一気に飲み干した。

「どうだす。おちかさんも一杯いかがですか。少しは涼しくなりまっせ」

「飲めませんが一杯だけ頂きます」

ちかは、酒を飲んだことはほとんどなかった。だが、むげに断るのも進藤に失礼だと思いコップに注がれたビールを口にした。冷えた液体が喉を流れ、爽快な気分になったような気がして、勧められるままにもう一杯飲んだ。すると次第に酔いがまわって、顔が赤くなり頭がボーとしてきた。

「あら、酔ったみたい。何だか体が自分のものではないようです」

ちかは、立ち上がろうとしたが、思うように立てない。

「危のうおます。慌てて立たないで、ここで少し休んで行かはったらどうだす」

進藤は、ちかを抱きかかえるようにして座らせた。ちかは進藤の胸の中へ崩れ折れるように体を預けた。着物の裾がはだけ、赤いけだしの中から白いふくらはぎを覗かせている。五十になったばかりの進藤は、欲情をそそわれた。彼は、思わずちかを抱きその場に押し倒した。

ちかは逃れようともがいたが、覆いかぶさって来る進藤の体をはねのけることができない。一瞬気を許した隙に進藤の手が乳房に触れ体を這った。ちかは、あがらうことのできない魔法にかかったような状態に陥り、そのうちにえもいわれぬ快感に襲われ、そのまま堕ちて行くことに何の抵抗もなくなった。

(前からこうなることを望んでいたのかもしれない)

そう思ったちかは、成行きに任せることにした。

その後、進藤は、ちかとの逢瀬が楽しみで商いの多寡にかかわらず頻繁に浜松へ出張して来るようになった。

そうした関係が終わったのは、戦後の混乱が去り落ち着きを取り戻した昭和二十七年十二月、年の瀬も迫る頃であった。

「もう今年でこの土地に行商に来ることは終わりにしようと思っていますのや。洋装が多くなり着物を着る人が少のうなりましたよってあまり売れまへんのや。それだけではあらしまへん。反物が仰山出回るようになりましたよって、この土地の呉服屋はんもわてらのような行商人からは、あまり買わなくなりました。それにわてももう五十の半ばを過ぎましたのやよって荷物を担いで歩くのもしんどくなりましたんや」

ちかは、じっとその言葉を聞いて、来るべきものが来たという思いに駆られた。別れるのはつらく悲しい。三年余り続いたこの関係をもう少し続けたかった。夫に先立たれた侘しさを慰め、満たされた時間を与えてくれたことを思うと進藤に恨みがましいことは言えなかった。

「分かりました。もうこの土地での仕事がなくなったのであれば仕方がありません。私は、この杉本の家を息子に引き渡すまで、この土地を離れるわけにはいきません。京都には、あなたの奥さんが待っているから、ついて行きたいけどそれもできない。でも、あなたと結ばれた三年間は、私にとって本当に素晴らしい時間でした」

ちかは、涙をこらえ、作り笑顔を見せ、進藤を浜松駅まで見送った。

木枯らしが吹き、温暖な浜松にも風花が舞っている。プラットホームの灯が、侘しげに光っていた。

ちかは、別れに握った手の温もりが、遠ざかる列車とともに消えて行くのを感じ、コートのポケットにその手をそっと隠した。

六、夫の浮気

昭和二十四年の秋頃から、さきはちかの物腰が柔らかくなり、艶めかしくなったことを敏感に感じ取っていた。

ことに呉服屋の進藤さんが宿泊する日は、そわそわして落ち着かず、念入りに化粧するちかの姿をしばしば見かけた。

さきは、義姉さんと進藤さんは、男女の関係にある。そのことでふしだらなどと非難すべきではない。むしろ自然の成り行きとして温かく見守ってやりたいと思っていた。

そんな気持ちになれるのは、さきには夫がいて子供にも恵まれ、家業も順調で経済的にも余裕があり、現在の生活に満足しているからであった。

しかし、さきの感じていたその幸せも長くは続かなかった。

吉雄に悪い癖が出た。

カフエで知り合ったきわという女に溺れ、家に寄りつかなくなったのである。

「おじいちゃ。家の人に女ができたらしい。昨夜も帰ってこなかった。このところずっと帰ってきていない。どうしたらいいずら」

さきは、巌次郎に相談した。

巌次郎もすでにそのことには気付いていて再三吉雄を叱りつけていた。

ところが、相手の女に夢中になってしまった吉雄は、巌次郎の言うことに耳を貸さなかった。

吉雄は、きわの魅力にとりつかれ分別を失っていた。色白のキメ細かな肌、しなやかな肢体、粘りつくようなあえぎ声、女のすべてをさらけ出し、官能の世界に身を

置くきわが愛しくて離れることができないでいる。

(さきの方が美人であるのに、さきにない爛熟した色香が、俺をとりこにして離さない。女房や子供を捨て、親父に背いてまで一緒になる価値はあるのか)

吉雄は、一緒に暮らしたいと迫るきわの言葉に迷った。だが、経済力のない吉雄には、二人の女を養うだけの力はない。切羽詰まった吉雄は、社会の倫理や規範をかなぐり捨て、きわへの恋情を選択した。

吉雄は、きわに誘われるまま、木本家を捨て、彼女の故郷である秋田県の角館へと逃避した。

家族の幸せが音を立てて崩れて行く。さきはそれを押し留めることのできない悔しさともどかしさを感じ泣き崩れた。

巌次郎は、息子の不行跡を怒り、そんな息子に育てた自分を責め、さきに謝った。

「さき。本当に申し訳ない。吉雄は、お前という女房がありながらとんでもない野郎だ。俺が別れるよう話を付けようと思って女の処に行った時には、もう遅かった。すでに部屋は空っぽで何も残っていなかった。近所の人に聞くとどうやら女の故郷の秋田県まで手に手を取って逃げちまったらしい。吉雄がいなくなったからといって食うに困るわけではないから、大きな子供が一人いなくなったと思って我慢してくれ」

巌次郎は、義理と人情を大切にする明治の男である。浜松大空襲の時、世話になった嫁の実家には恩義を感じていた。その嫁を不幸にする息子の行為を許すことはできなかった。

また、十年余り一つ屋根に暮らしたさきへは、実の娘のような愛情を感じていた。吉雄が家を出たことで、さきまでも家を出るのではないかと心配だった。

さきは、吉雄が家を出て以来、吉雄ときわの絡み合う姿が、頭の中を離れず一人寝の淋しさのなかで嫉妬に身を焦がす日々を送った。

すると、これまで温かい目で見守ることの出来た義姉と進藤さんとの関係が、何故か不潔で厭らしくさえ感じるようになり、ちかとの付き合いもできるだけ避けるようになった。

そんな思いでいる間に吉雄が家出してから三カ月がたった。

空っ風の吹く寒い日の夕闇迫る頃であった。

ジングルベルの歌が街に鳴り響いていた。

玄関の戸口に男が立っている。厚手のオーバーに顔を隠し、中を覗き込むようにしている。

伸一が、帰宅し玄関の戸を開けようとした時、その男に気付いた。

「あれ、お父さん。お父さんじゃない。どうしてそんなところに立っているの。寒いから中に入ろうよ」

吉雄は敷居が高くて家に入ることができない。玄関か

ら覗きこみ、中の様子を窺っていたのである。
「お父さんが帰って来たよ」
伸一の声に驚いて、さきと厳次郎が家の中から出てきた。
厳次郎は、厳しい視線で吉雄を睨みつけ言った。
「どの面下げて今頃戻って来たのだ。お前はもう息子でもなければ、家族でもない。死んだものと諦めている」
「申し訳ない。親不孝をし、さきや子供たちにも迷惑をかけ、全く俺はどうかしていた。これからは心を入れ替え真面目に働くから許してくれ。この通りだ」
吉雄は、目を伏せて恥じ入るような声で詫びた。それから涙ながらに秋田での生活を語った。
「秋田の角館できわと暮らしたが、仕事がない。しばらく日雇いでその日暮らしをしていたが、だんだん寒くなって、十一月も半ば過ぎたら雪が降り出してきた。土地の言葉にもなかなか馴染めなくて心細くなるばかりだった。そうしたら無性に浜松の街や家族が恋しくなってきわと別れて帰って来た」
「おじいちゃ。私は家の人が憎かった。恨んでいた。それ以上に私から家の人を奪ったきわとかいう女を憎んでいた。二人で暮らしていると思うと胸が張り裂けそうだった。いつまでも幸福でいられるはずがない。必ず不幸が訪れる。そうでなければ、余りにも私がみじめ過ぎる。神様がそんなことはお許しになるはずがない。そう思って暮らしていた。でも、今ここに家の人の哀れな姿を見て、私の思った通りになった。その途端、可哀想になってきた。もともとこの家は、この人のものだし、もう一度、一緒に暮らすことを許してあげて」
さきは、厳次郎に吉雄を許すよう懇願した。
「さきがそういうなら仕方がない。子供たちにとってもその方がいいだろう。だが、二度とこんなことを仕出かしたら勘当どころでは済まないぞ。俺は、お前と刺し違えてでも許さないからな。よく覚えておけ」
厳次郎は、年を取り少し弱気になっていたので、頼りにならない息子でも家にいた方が、家族も落ち着くだろうと思って吉雄の願いを聞き入れた。
吉雄が木本家に戻ってから、さきのささくれ立った気持ちも収まり、妬心によるちかへの悪感情が、薄れて行くことに気づくのであった。
(ちかと妻子ある進藤との関係は、儚く限りがある)
そう思うとつかの間の幸せを求めたちかの切ない想いがさきには分かるような気がした。
病院の桜は、風に吹かれ花吹雪となって舞い散っている。
さきは、昭和十九年から二十七、八年頃までの激動の時代に、三十代を過ごした。
その間、夫の出征、東南海地震、相次ぐ空襲、家屋の

焼失、穴倉暮らし、担ぎ屋、夫の浮気、振り返ってみれば多難な時期であった。四人の子供を育て、舅に仕え、家計を切り盛りしてひたすら家族のために尽くしてきた。
それでもさきは、こうした苦境を乗り超え、懸命に生きた三十代のこの時代が最も輝いていて、華の時であったように思えるのであった。
夫の浮気が収まり、子供たちも独立し、経済的にも安定した頃には、すでに女としての盛りは過ぎていた。
(早くに夫に先立たれたおちかさんとは違い、私は夫が旅立つまで連れ添うことができた。でも、そのためにおちかさんのような激しい恋はできなかった。夫の他に好きな人もいないわけではなかったが、目に見えない心の壁が、私の体を閉じ込め、一歩踏み出すことができなかった。今となっては、そのことが良かったのか悪かったのか。波乱に満ちた六十七年であったが、私にとって良くも悪くもなかった人生だったように思える)
さきは、朦朧とする意識の中で、窓の外に舞い散る桜花を見た。ひとひらの桜花が天空に浮かぶ白い雲に向かって飛んで行く。それを目で追いながらさきは静かに目を閉じた。

(完)

その時代の歌人たち

背景と寸描

石黒修身

〔一〕はじめに

本稿でいう「その時代」とは、戦後間もない一九五〇年頃からの短歌史のなかで、前衛短歌運動の黎明期、いわば夜明前の時期であると思料する。

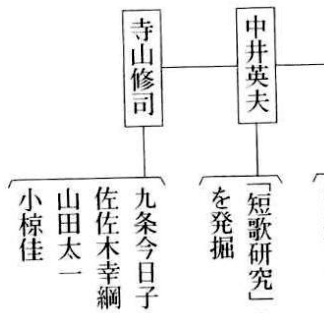
一八九十年に勃発した「短歌革新運動」によりリニューアルしたのが近代短歌で、与謝野晶子、石川啄木、斎藤茂吉に代表されるものである。この当時の歌壇は未だ近代短歌を引きづり乍ら前衛短歌運動が本格的に始動し、隆盛期を迎えた時期であった。

こゝで云う「歌人たち」は、この時期に短歌史に残る顕著な活動をした人物である。

本稿ではこの短かい時期を概観し、歌人、編集者同士の関係、そして現在に繋がる人的な系譜を探り、概説ではあるが現在を生きる人々の理解を得ようとするものである。

〔二〕掲出歌人

本文での理解を得やすくするために、歌人らをチャート式に表示する。



〔三〕歌人について

(1) 寺山修司（一九三五～一九八三）

青森県弘前生れ、少年期より短歌と俳句に親しみ、早大在学中に「短歌研究」第一回五十首詠特選の中城ふみ子に刺激され、第二回五十首詠に応募「チェーホフ祭」で特選となる。この間に編集者の中井英夫との関連が生ずる。

この「チェーホフ祭」では俳句からの模倣問題が取沙汰され、歌壇を騒がせたと伝えられるが、鮮烈なデビューであったと云う。学生時代は病いと貧困と戦い乍ら、文芸活動を行う。現役の映画監督山田太一との交流する時期もあった。

早大中退後演劇活動で戯曲、脚本、ラジオドラマを作る。この間に九條今日子と結婚、後に離婚した。歌人としては、佐佐木幸綱、谷川俊太郎、岡井隆らとの交流があった。

その後も映画、演劇活動を続けたが、病を多発し、四十七才で死去。青山斉場での葬儀では、谷川俊太郎、中井英夫、山田太一、唐十郎らが弔辞を捧げたと云う。

(2) 中井英夫（一九二五―一九九三）

東大文学部中退「短歌研究」の編集を一任される。その後角川「短歌」編集長として読者短歌の選を担当する。

第一回新人歌人の発掘と育成に盡力し、「短歌研究」募集の「五十首詠」の中で、第一位に中城ふみ子を選び、以降書簡往復が続き、作品と歌集刊行の助言をする。

中城の代表作「乳房喪失」を刊行するが、その過程で中城との交流が続き、乳がんを治療中を入院していた札幌の病院に見舞うなど手厚く付き合っている。この見舞は中城に強く請われたもので彼女の死の直前であった。

中井の主宰する「短歌研究」は当時の新人歌人の登竜門であったことは既述したが第二回の五十首詠には寺山修司の「チェーホフ祭」を特選としたことは前記した。

他に筆者の身近かな存在として、筆者が参加している歌誌「万象」の主宰である安藤昭司らも五十首選入選を機として、綜合誌歌壇へのデビューを果しており、中井の肝煎りによるものと自称している。

(3) 中城ふみ子（一九二二―一九五四）

北海道帯広市生れ、東京家政学院に学ぶ。

中城博と結婚三男一女を設けるが二十八才で離婚、帯広の作家クラブ等で作歌活動をする。帯広の病院で、左乳房単純性癌と診断され、左乳房切除、その後北大病院を経て札幌医大病院に移る。病院から「短歌研究」五十

首詠に応募、中井英夫の目に留まり特選となり、中井の支えで第一歌集「乳房喪失」を刊行、間もなく癌は進行し危篤に瀕し、中井の見舞を受けその直後に死去。この間中井に対し、面会を懇願する手紙が何通かある。

「乳房喪失」は末期癌と、今でいう〝不倫〟の歌が多く、それだけで指弾される時代であり、彼女は〝恋多き女性歌人〟と評されたらしい。この間の事情は渡辺淳一の小説「冬の花火」に生々しく描かれている。

別の話題として、自歌集「花の原型」に川端康成が序文を寄せている。これは中城が川端に手紙で寄文を懇願したもので、川端は「未知の人ではあったが心に響いた」と記している。

(4) 九条今日子（一九三五―二〇一五）

松竹歌劇団から映画界へ。一九六二年寺山修司と結婚するが、仕事の都合が折り合わず協議離婚、寺山作品の普及に盡力した。

寺山の歿後彼の母親に請われて養女となり、最終は寺山の義妹となった訳で数奇な運命を辿った女性であった。本名は寺山映子、昨二〇一五年四月（食道静脈瘤破裂）死去。

(5) 渡辺淳一（一九三三―二〇一四）

脚本家の山田は寺山と一九五四年早大教育学部入学の同級生である。

山田は当時を懐かしみ「みずみずしい頃の、飾りない日々がこゝにあります」とコメントしている――「寺山修司からの手紙」岩波書店刊

(8) 小椋佳（一九四四―）

作詩、作曲家の小椋は学生仲間の付き合いの周辺で寺山と交流があった。

寺山が毎月一度自宅で開いた「寺山サロン」と称する集まりで、小椋は次作の歌を披露し、寺山が作る詩に小椋がメロディーを付するなど濃密な交流があった。

〔四〕おわりに

個々の歌人概説を省りみ、本来なら評伝として一冊の本にもなるものを、このよう縮めて記するのは如何にも難かしく、可成り粗雑なものになったのではないかと懸念する。

人的系譜についても、筆者の未知の事柄も多々あると思う。

全体を通じ、短歌史として、また短歌界につき不適当な記述があったかも知れない。

中城ふみ子の評伝的小説「冬の花火」を著し、彼女の生涯をリアルに描く。

中城が死亡した時渡辺は札幌医大の一年生であったとする。渡辺は中城の歌のことも、恋のことも知らなかったが、後になって、その歌の華やかさと、哀しみと、したたかさを知ったとこの小説の背景を語っている。

余談になるが、筆者も渡辺と同年次の北大の学生で、札幌医大の停留場を過ぎて通学していたので、その当時の佇まいを懐かしく思い出す。

(6) 佐佐木幸綱（一九三八―）

短歌界の代表的歌人である佐佐木幸綱は寺山修司との交流があった。雑誌社が主催する鼎談で寺山と同じく歌人の大岡信と「歌の伝統とは何か」をテーマにして語っている。

寺山との交遊については、寺山は自分と違い酒を飲まないので、演劇等を通し何度も誘って呉れたが、半分も付き合はなかったと、また新橋の寺山家を訪ね新妻の九条映子のもてなしを受けた事など、寺山の青山斉場での葬儀の思い出とともに述懐している。

(7) 山田太一（一九三四―）

ほゞ同世代を生きた、市井の一隅の歌人と自任する筆者の独断と未熟さの故としてご容赦頂ければ幸いである。

以上

君なんぞ高歌・沈吟せざるや

鯨游海

およそ数多く存在する世界の文字の中で、もっとも詩歌に適したのは漢字であろう。表意文字であるからだ。しかも漢字は一字一母音という稀な特性を持つ。多数の漢字の羅列は整然と揃い、荘重な構成美を成す。定型詩の独擅場であろう。

漢字文化を遺伝子に刷り込んできた我々日本人。漢文脈の訓読の文語文は緊張とエネルギーに満ち溢れ詩吟に昇華した。「菊を採る東籬の下　悠然として南山を見る」この美しい一句に陶然としない人は居まい。七五調の快適なリズムを有する文語文の美しさ！

これら名句名吟を「きみ　なんぞ高歌し　将たなんぞ沈吟せざるや」……。

国破れて　山河在り
城春にして草木深し

國破山河在　城春草木深

栄華を誇った大唐帝国だったが、玄宗皇帝が楊貴妃に溺れて政治をおろそかにした為、安祿山のクーデターに遭い都の長安が占領されてしまう。

杜甫は家族とも離散し長安に辿り着くが、眼の前には破壊された市街と茫然自失した庶民の姿があった。

しかし眼を転じると、山河草木の大自然が超然と存在していた。何事もなかったように花は笑い鳥が歌っていた。

この名句は、敗戦後の日本人にとって何よりも共感出来る詠嘆であった。

詩聖といわれた杜甫が得意とした律詩（八行句）の最高傑作の冒頭の二句である。

なお城は「城郭」ではなく「市街」を指す。

春望　杜甫（唐）

孤帆の遠影碧空に尽き
唯だ見る長江の天際に流るるを

孤帆遠影碧空盡　唯見長江天際流

送別詩の白眉。詩仙李白得意の絶句（四行句）の後半二句である。

親友だった孟浩然と別れた悲しみと、雄大な長江の眺めとが渾然と溶けあって読者に迫ってくる。

友の乗った舟は漸く視界から消えた。地平線の彼方で長江が蒼天に吸い込まれてゆく。

帆の白色と空の碧色が鮮かで、長江の悠々たる流れは悠久の時間を連想させる。

現在、この光景は遠い昔のこととなった。

空港に見送る機影は、瞬時に視界から消え去ってしまい情緒纏綿を欠くのは致し方のないことである。

しかし、せめて想像力だけは何時までも失ないたくないものだ。

黄鶴樓送孟浩然之廣陵　李白（唐）

春眠暁を覚えず
処処に啼鳥を聞く

春眠不覺曉　處處聞啼鳥

もの憂い春の朝。気だるいが心地よいさまを描いて秀逸。

身も心も暖まり、浮き〳〵としてくる。永い冬がようやく終ろうとし春が来た。

小鳥たちのさえずりは軽やかなアンサンブルだ。

しかし前夜は春の嵐であったことが後半に歌われている。この為ことさらにこの前半の二句（前聯という）が生きてくる。

因みに後半の二句（後聯）も見てみよう。

夜来　風雨の声
花落つること知る　多少ぞ

千三百年も前に生まれたこの詩人と同感出来るこの幸福な充足感こそ詩の醍醐味といえよう。

春暁　孟浩然（唐）

江碧にして鳥逾々白く
山青くして花然えんと欲す

江碧鳥逾白　山青花欲然

色鮮かに大自然の美を、端正な対句で詠い上げている。

江と山、碧と青、鳥と花、白と燃える炎の赤、逾と欲……一幅の絵画といえよう。

しかしこの裏には、杜甫の悲しみが秘められていることが後聯によって明きらかになる。

即ち、光陰の速さへの慨嘆と望郷の切ない念いが。

今春　看のあたり又過ぐ
何れの日にか　是れ帰れる年ぞ

なおこの詩の題である「絶句」とは、「四行の詩」を現す詩の形式を指す言葉だが、ここでは単に「無題」という意味で使われており、杜甫の詩に多くみられる所である。

一行五言の四行詩を略して「五絶」という。

絶句　杜甫（唐）

征馬前まず人語らず
金州城外斜陽に立つ

征馬不前人不語　金州城外立斜陽

あまりにも有名な日露戦争に於ける乃木将軍の感懐である。起句は「山川草木　転た荒涼」で始まる。

征馬とは戦地に征いた軍馬。

赤い夕陽が沈みゆく大満州（中国東北部、大連市の北方）の荒涼たる風景と、戦況ままならぬ将軍の苦悩とが重なって読み手の胸に迫ってくる。多くの将兵を失って茫然と立ちすくむ孤独な老将軍の姿に、当時の日本人は涙を流したのである。不幸なことに長男勝典も、更に次男もが一兵士としてここで葬れた。

なお当時の高級軍人は皆漢詩を愛好し自ら詠んだ。大山巌、児玉源太郎、山縣有朋、広瀬武夫、秋山兄弟……。その中でも抜群のセンス溢れる詩を詠んだのが乃木希典だった。

金州城下作　乃木希典（明治）

春宵一刻直千金
花に清香あり月に陰あり

春宵一刻直千金　花有清香月有陰

春の夕刻の値打ちは千金にも相当する。花は爛漫と発いて好い香りを放ち、空に掛かる月はおぼろにかすんで墨絵のようだ。

万人に愛唱される共感を呼ぶ詩である。金銭で計れない価値あるものを敢えてそれで表わそうとしたウィットが素晴らしい。

但しこの句は、現代の中国や台湾の人、特にご婦人の前ではうっかり口にしない方が無難だという。少し品のない寓意があるらしい。

中国人との会話が増えるだろう現代人、特に学生や商社マン、現行マン等も要注意だ。

蘇軾は本名で号は蘇東坡。書も良くし凡ゆる学問芸術に通じた才子であった。父の蘇洵、弟の蘇轍も文名が高く、三蘇と呼ばれ尊敬を集めた。

春夜　蘇軾（宋）

君聞かずや胡茄の声最も悲きを
紫髯緑眼の胡人吹く

君不聞胡茄聲最悲　紫髯緑眼胡人吹

胡茄は草笛。聞く者を切ない想いにさせるという。作者は名門に生まれ進士出身ながら辺境の西域で永く軍高官として従軍した志の高い人。書も良くし特に楷書に優れていた。

詩形は雑言古詩。六聯十二句の送別詩。この起聯二句の後は次の如く続く。

之れを吹いて一曲猶お未だ了らざるに
愁殺す楼蘭征戍の児
涼秋八月蕭関の道
北風吹断す天山の草
崑崙山南月斜めならんと欲す
胡人月に向かって胡茄を吹く……

楼蘭は西方ロプノール湖の辺りに在った国でシルクロードの要衝にあり、数々の歴史に登場するロマンに満ちた地名。

胡茄歌送顔眞卿使赴河隴　岑參（唐）

今夜知らず何処に宿るかを
平沙万里人煙を絶つ

今夜不知何處宿　平沙萬里絶人烟

今夜は一体どこに宿営することになるのだろう。万里の彼方まで広がる大沙漠には、一筋の人家の煙さえ見えない。

茫漠たる大砂漠の無限の海を征く孤独と寂寥。しかも作者は重い任務を帯びているのだ。

前聯を見てみよう。満月が二回の長い旅だ。
馬を走らせて西に来り　天に到らんと欲す
家を辞して　月の両回円かなるを見る

旅の愁が切々と伝わる名吟。平仄破格の七言絶句。詩題の磧とは小石の混る砂をいう。

かく岑參の詩は、西域の軍旅を詠むがどこかロマンティックな甘美な響きがある。

名門の科挙合格者にみられる育ちの良さが厳しい辺塞に在りながらも美的感性として表出するのであろう。唐の乃木希典と呼ぼうか。

磧中作　岑參（唐）

昔聞く洞庭の水
今上る岳陽楼

昔聞洞庭水　今上嶽陽楼

「昔聞くパリの空、今上るエッフェル塔」或は「昔聞く天の橋立、今渡る秋の砂洲」とでもいう感慨は、誰しもが経験する所だろう。

幼児の頃から耳にし一度は行ってみたかった所に、老いて始めて到着した感動の吐露。

しかも、激情を押えた歌い起こし。

漂泊の旅を続け、心身ともに疲弊した杜甫が辿りついた所は、中国最大の湖、洞庭であった。戦乱や愛娘との死別、病がちで官界での野望も断たれた老詩人の胸中に去来するものは何であったか。完璧な正格の五言律詩。

律詩は二四句（頷聯）、五六句（頸聯）を必らず対句とするが、この詩は一二句（首聯）も対句としている。「呉楚東南に坼け　乾坤日夜浮かぶ」と続く。乾坤はここでは陽と月。

登嶽陽楼　杜甫（唐）

晩来何者か門を敲いて至る
雨と詩人と落花と

晩來何者敲門至　雨與詩人與落花

今夜、君の家の門を敲いて訪れたのは誰なのかと尋ねたところ、

それは春雨と一人の詩人と桃の花びらだと答えてくれた。

この詩の前聯をみてみよう。

菉園葱畦　路を取ること斜なり
桃の尤も多き処　是れ君が家

つまり結句の詩人とは、この作者廣瀬旭荘のことであった。詩題の筆庵が「君が家」の主人。旭荘は兄淡窓を凌ぐ江戸を代表する詩人。清の愈樾が「変幻百出」する第一人者と褒めた。大分日田の人で感宜園で教え、後大坂に出て名流と交わった。菉園葱畦は菜っ葉や葱畑。ヴァレリーと称えられるが、私は彼こそ日本の李白と呼びたい。

春雨到筆庵　廣瀬旭荘（江戸）

君見ずや
黄河の水天上より来るを
奔流し海に到って復た回らず

君不見黄河之水天上来　奔流到海不復回

貴方は見ない筈がない。きっと見たであろう。黄河の水が天の上から滔々と流れ落ちてくるのを。この奔流は海に行き着くと、もう二度とは回ってくることはない。

将進酒と題する雑言古詩「将に酒を進めんとす」。

短かい人生を思う存分楽しむには酒が一番だと高言する李白らしい豪快な詩である。

人生意を得ば　須らく歓を尽くすべし
金樽をして空しく月に対せしむること莫れ
天我が材を生むは　必ず用あり
千金散じ尽くすも　還た来らん
古来聖賢　皆寂寞
唯だ有り　飲者のみ其の名を留む……
酒呑みには心から共鳴出来る嬉しい詩だ。

将進酒　李白（唐）

時に及んで当に勉励すべし
歳月人を待たず

及時當勉勵　歳月不待人

しかるべき時を失なうことなく、先ずは一生懸命励むべきである。

歳月というものは、人を待ってはくれないのだ。

時に及ぶ、とは「チャンス到れば」の意。

励むのは勉強ばかりではない。スポーツも遊ぶことも、人を愛することも事業に当るのも全てをいう。

人生　根蒂なく
飄として　陌上の塵の如し

に始まる詩の尾聯。根蒂とは根と蒂。草や木は大地が受けとめつなぎとめてくれる根や蒂があるものだが、人にはそれが無いことを自覚せよと説く。五言古詩。六聯十二句のうちに人生を掘り下げている。盛年重ねて来たらず。

雑詩　陶潜（晉）

大絃嘈嘈如急雨
小絃切切如私語

大絃嘈嘈如急雨　小絃切切如和語

潯陽江頭　夜客を送る、で始まる七言古詩。白楽天の「長恨歌」に次ぐ長篇叙事詩。全四四聯八八句、六一六言の美の世界である。

江頭に親友を送別した夜、ふと琵琶の音色が聴こえてきた。逢って話しをすると、元長安の歌姫だった。嘈嘈は大きな音の形容。彼女は最初ためらいをみせたが、白楽天の誘いにより琵琶の弾き語りを始める。

それは昔の栄華を誇った絶頂の時から、あっという間に歳を重ね、男に騙される等人生の辛惨をなめ、今は落ちぶれてしまったという悲しみの歌であった。

左遷の身の白楽天は自分の境遇と重ね合せ同情の涙を流す。「泣」下ること誰か最も多かる　江州の司馬青衫を湿ほふ」と結ぶ。

琵琶行　白居易（唐）

水光瀲灩として晴れ方に好く
山色空濛として雨亦た奇なり

水光瀲灩晴方好　山色空濛雨亦奇

瀲灩とは広々と充ち溢れるさま。また瀾が光り輝くさま。即ち起句では水が溢れてキラキラと輝いている晴日の素晴らしさを称える。

一方山が霧に包まれた雨の日も捨て難い。

作者は湖の自然の美を何れも美しいと肯定し、優劣をつけ難いと唱う。

さて、後半は如何にまとめるのか……

西湖を把って西子に比せんと欲すれば
淡粧濃抹　総て相宜し

この美しい西湖を美女西施に例えてみるならば、薄化粧といい濃いそれといい、どちらも全く素晴らしく西施その人のようだ。

要するに西湖讃歌なのである。

西施は越の陰謀により美しく養育され、敵国呉の王である夫差の妃として送り込まれた。

飲湖上初晴後雨　蘇軾（宋）

李白一斗詩百篇
長安市上酒家に眠る

李白一斗詩百篇　長安市上酒家眠

李白さんは一斗の酒を飲みながらも、詩を作らせたら、瞬く間に百篇も詠んでしまう。謹厳実直な杜甫が詠んだ珍らしいユーモア溢れる諧謔の詩。諧謔とは気の利いた冗談。

この頃、長安の酒豪八人を「飲中八仙歌」として面白可笑しく七言十一聯二二句、一五四言で歌い上げた。この続きも面白い。

天子呼びに来れども　船に上らず
自から称す　臣是れ酒中の仙なりと

玄宗皇帝が呼び出しても、居酒屋で泥酔していたという逸話から引いている。この他、

汝陽は三斗にして　始めて天に朝し
道に麴車に逢うて　口に涎を流す
左相日に興ずれば　万銭を費し
飲めば長鯨の　百川を吸うが如し…と続く。

飲中八仙歌　杜甫（唐）

漢詩

汲深録（四）

居合道納会稽古　居合道納会稽古

平成二十七年十二月

早晨高館峭寒侵　早晨の高館　峭寒侵す
帯劒微軀虚室臨　帯剣の微軀　虚室に臨む
日日錬磨精妙境　日日　練磨　精妙の境
無心白刃断塵心　無心の白刃　塵心を断つ

押韻・侵　臨　心

〔注　解〕

早晨＝早朝。
高館＝大きなやかた。ここでは武道館。
峭寒＝きびしく寒い。
微軀＝いやしい体。微賤の身。
虚室＝人のいない部屋。ここでは道場。
日日＝ひび。毎日。
精妙＝すぐれていること。
塵心＝ちりにまみれた心。

松井秀人

〔口語訳〕

早朝の武道館は寒さがきびしく
身に剣を帯びて、人のいない道場に臨む。
日々練磨してきて、精妙の境に至り
無心の白刃が、塵にまみれた心を断つ。

帝城殘雪　帝城の殘雪

平成二十八年二月

帝城料峭谷風吹　帝城　料峭　谷風吹く
雲蔽街衢春動時　雲蔽う街衢　春動く時
聞得暗香殘雪路　聞き得たる暗香　殘雪の路
枝頭負白點冰姿　枝頭　白を負う冰姿の点

押韻・吹　時　姿

〔注　解〕

帝城＝みやこ。帝都。
料峭＝風の寒いさま。
谷風＝東風。春風。
街衢＝まち。ちまた。

聞得＝香りは聞くという表現をする。
暗香＝どこからともなく匂ってくるよい香り。
殘雪＝消え残りの雪。
枝頭＝枝の先。
負白＝ここでは、雪を背負う意。
冰姿＝梅の異称。

〔口語訳〕

みやこはまだ寒いが、春風が吹いている
雲が蔽うちまたも、春めいてきた。
雪が消え残る路にも、どこからともなく
よい香りがしてきて
雪を背負う枝の先には、梅の小さな黒い点が見える。

幽徑花魁　　幽徑の花魁

平成二十八年二月

黄昏欲訪早梅村　黄昏（こうこん）訪ねんと欲す 早梅の村
幽徑微風春未暄　幽徑（ゆうけい） 微風 春未だ暄ならず
時覺芳芬似招我　時に覺ゆ芳芬（ほうふん） 我を招くが似とし
花魁一朵故人門　花魁一朵（かかいいちだ） 故人の門

押韻・村 暄 門

〔注　解〕

黄昏＝夕暮れ。
幽徑＝奥深くもの静かな小路。
春未暄＝春は未だ暖かくはなかった。
時覺＝時より気づく。
芳芬＝よい香り。
似招我＝我を招いているようだ。
花魁＝梅の別名。百花のさきがけの意。
一朵＝枝。花のついた枝。
故人の門＝旧友の住む門。

〔口語訳〕

夕暮れ、早梅の村を訪ねようとした。
静かな小路には微風が吹くが、春は未だ暖かくはなかった。
時より気づく良い香りは、私を招いているようで
梅の花のついた枝が、旧友の住まいの門に見える。

漢詩実作を始めて五年目。個々の漢字そのものの持つ意味を踏まえ、詩語の習得に励みながらも、一首にまとめるのに精一杯で、まさに苦吟の中。
しかし中国古典の学習と繋がって来て、その味わいを楽しんでいます。
今年は「神奈川漢詩連盟」創立十周年。その記念事業の一つとして、「神奈川漢詩紀行」の編纂に携わっています。先人の神奈川の漢詩八十首、十月の完成を目指しています。

萌芽

新春に、掛川木鶏クラブが、開催される運びとなったことを、三戸岡道夫先生よりご紹介を頂き、私は参加させて頂きました。

掛川木鶏クラブ
日時　平成二十八年一月十六日
場所　掛川報徳社別館
出席者　宮川正夫先生他十三名

一、『致知』誌朗読

致知誌とは儒教の朱子学『大学』より、取った月刊誌です。

知を致すは物に格（いた）るに在りとは、我の知を致さんと欲すれば、物に即きて其の理を窮（きわ）むるに在るを言う。

横山正義

訳　自分の知識を押し窮めたいと思うなら、事物の中の理を求め、それを窮めつくすべし。

木鶏クラブ

全国各地で自主運営されている『致知』愛読者の会、木鶏クラブ。名称の由来は、紀省子という男が立派な闘鶏を育て、ものに動じないその様子が木の鶏のようであったという中国の古典『荘子』にある故事です。

『致知』誌2016年2月号より
「巻頭の言葉」日本を美しくする会相談役　鍵山秀三郎
日本人本来のよさが発揮され始めた

「愛知県のある定時制の学校は、家庭では食事の面倒もろくに見てもらえず、給食で空腹を満たすために学校に来るような子もおり、校内の雰囲気も大変荒んでいま

した。なんとかこの状況を変えたいと一人の先生が立ち上がり、他の先生が無関心の中でトイレ掃除の実践をはじめました。いまでは生徒が進んで手伝うまでに学校の雰囲気は一変しています。同じ県の別の学校では、授業が全く成り立たず、すっかり自信を失った先生が、仲間の助けを借りながら学校のトイレ掃除を始めました。誰からも見向きもされませんでしたが、十回目に至って他の先生が自主的に参加するようになり、クラスの授業も面白いようにスムーズに運ぶようになったのです。」

一人ひとりが小さなことにも気を配って
公の心を取り戻すことで、この社会から
心の荒みがなくなることを願ってやみません

二、『知致』誌「巻頭の言葉」を参加者一名が朗読し、みんなで感想をのべるなかで、話題になったことを、次に記します。

二の一、便所の掃除について（致知誌より公共への福祉について）

会社の社長が便所の掃除をしている。学校の教師が便所の掃除をする。家庭の主婦が便所の掃除をする。便所の掃除の話題がでました。

私として、いやいや、掃除をするだけでは意味がないので、考えてみました。

「便所の掃除をする」聞くだけで、悪臭がただよいます。

インフルエンザ菌、大腸菌、そのほか疫病の菌が蔓延し、罹病する可能性があります。

しかし誰かが便所の掃除をしなければ、予防することはできません。

トイレを清潔に保てば、環境が良くなり、作業効率、勉学の効率も上がるという、家庭の便所では、身近です。心に浮かぶことを、記していきます。

①しぶしぶ、手を出すことを考える。

まず、消臭剤、消毒剤などを散布する、防臭、防菌マスクをする、ゴム手袋で身を守るために、準備することなどが目に浮かびます。

②いやいや、手を出すことから、始まります。

始めると、早く効率的にやろうと、思い立ちます。

少しずつであるが綺麗になっていきます。

すると、小さな汚れが目につきます。これを綺麗にしようと思います。便所がきれいになります。

③綺麗になったと、達成感と喜びを、体感します。

孔子はあるとき。老子に教えを問いました。

『史記』「孔子世家」より

「賢く物事を理解していながら、死ぬような目に遭うのは、他人をあれこれ非難するのが好きだからだ。非常に口達者だが、その身を危うくするのは、他人の悪を暴いたりするためだ。人の子たるもの、人の臣たるものは、我を張ってはならない。」

老子『かくあるべきとは危険だ。心にうかぶままに行動することが、大切だと言っているのです。』

「便所は清潔に」はかくあるべきで、孔子の教え、老子の感想は「心に浮かぶままに」は前記、文章①から③と思います。①から②は葛藤の時です。

言葉に捉われることなく、自由闊達であれば、言葉は座右の銘となります。

これらは日々の生活に、また、人の人生に通じるものでもあります。

静岡県・袋井市の禅宗の曹洞宗可睡斉では、大きな便所を鳥枢沙魔明王、明王として奉り、庫裡の中央にあり、それは修行に便所が使われているからです。

家庭では、便所はこの世とあの世すなわち神代との境なので、清潔にし、便所の神を奉らなければと、古老の話です。

以前、田舎では春になると、トイレから、蛇が入ってきました。老人が家守りの、近隣の八幡宮の化身だから、大切にしなければと言い、蛇は穀物に群がる、ネズミを捕獲し、飲み込みました。そして田の水を守ると言われていました。

子供のいる布団のなかに入ってくることもあり、蛇は家の中を縦横に移動し、家人を守り、秋になれば、山の神社にもどって行きました。

二の二、身体障害者について

（致知「感動」エッセイ（ＶＯＬ二十一）誌よりの抜粋）

「園長先生との一つの約束」曹洞宗長徳治住職　酒井大岳

子供のとき、焼けどし、手が不自由になった子供さんが、成長して身体障害の施設で元気に働いている事例が報告されました。

ここで大切なのは身体障害者の心のもちかたで、それはいじめにあうでしょうし、蔑みの目にさらされるでしょう。

二の三、数年前、プロ野球の話で、私はテレビでみました。

広島と近鉄と日本選手権を戦いました。五分五分の戦

いで、最終戦最終回、一点広島がリードして、この回を広島が押さえれば優勝というとき、当時押さえのエースといわれた江夏投手が登場しました。しかし、江夏投手は阪神、南海、日本ハムとエースを勤め、晩年でピリとしません。コントロールは悪く、ボールが多く、往年のスピードは無く、四球を出したり、ヒットを打たれたり、三塁までランナーが行ってしまいました。弱小球団の広島は優勝など夢の球団なので、めったに無いチャンスなのです。ベンチの監督、コーチが立ち上がりウロウロし始めると、投手江夏は代えられるか、心配なのか、浮き足だっているのが、テレビの画面から見えます。

すると、一塁手衣笠選手が江夏投手のところに駆けつけ、二言、三言。

後に、衣笠選手は「ベンチを見るな。バッターを見よ」と激励をしたと証言しました。

江夏投手はみごと、バッターを打ち取り、広島は優勝しました。

人それぞれ、立場が変われば、環境も変わります。便所の掃除、身体障害者の心境、江夏投手の心境合い通じるものがあるように思います。

「ただ、なにがまわりで起きようと、目の前のやるべきことを、やっていくだけです。」

そこに人生が開け、『さとり』の心境に到達するのです。煩悩、苦しみとは不可能を可能のように、ぼんやりと錯覚することです。

便所を綺麗なものと、考えようとすること、江夏投手であれば、往年のスピードを出せる投球術です。さらに、人々は向上心を求めて、次のステップになります。

私は去る三月九日、三戸岡道夫先生より「小さな修養論」致知誌代表取締役社長藤尾英昭著を恵贈に浴しました。

三戸岡道夫先生が前書きを執筆されています。

そのなかに『無の精神から、人間にとってもっとも重要な、仁、義、礼、智、信の徳が生まれてくる。人間の人生とは、この徳への修養なのである』とある。

心の生長は煩悩、葛藤、悟徳と進化していくのです。

三、人間の上下関係

最近の風潮として、師を敬い、年功序列が崩壊している。

我々の子供の頃、昭和二十年以前、将来、どんな職業になりたいか。子供に尋ねると、必ず、大将と言いました。

それは一番安全だからでした。陸軍士官学校、海軍士官学校各学校の卒業生の戦場での死亡率は三パーセントで、大変低いのです。アメリカの陸士、海士の卒業生の死亡率は三十五パーセント、アメリカでは上官が先陣を切らないと部下は就いて来ないのです。日本の上官は一番安全な場所で、作戦を立て、命令をするのが役目であったのです。

兵隊の上下関係を徹底しないと、軍が前に進まないので、そこには暴力が介入したのでした。我々の子供のころ、教師が子供に暴力をふるうのは日常的に目にしました。

上官の死亡原因のひとつに、上官が戦場に出ると、不満をもっている部下が、前を打つ構えから、突然、うしろの上官めがけて討つ、『うしろ鉄砲』があり、上官は表には出なかったのです。

フィリピンのレイテ島沖海戦で栗田艦隊が、突っ込めば勝利出来るのに、敵前中断したのでした。アメリカ軍も手薄なのに、どうしてと疑問に思ったと戦後のアメリカの回顧録で報告されています。艦長は日本に帰国し、陸士の校長など歴任され、責任を問われることはありませんでした。それは軍部の上官は作戦を立てるのが業務で、戦う業務はないからだといわれました。

しかし、現在はアメリカ型の民主主義が根づき、やはりリーダーになるには、努力し、それなりの成果をあげなければ、後輩がついて来ない、そんな世のなかになってきました。

私たちが成長したころ、戦後、昭和二十年代、戦争の総括がされていました。先輩が調査されたことと最近テレビで放映されたことを、参考に致しました。

掛川木鶏クラブは神・仏などの超人間的・絶対的なものを思慕・崇拝・信仰して、それによって慰め・安心・幸福を得ようとする宗教的活動ではありませんで、科学的根拠に元づく、心理の探求であります。

『参考文献』

儒教の本　　学研

ヨーロッパ化粧史の概要

鈴木守

第一節　古代地中海文明

ヨーロッパにおける化粧事始めは、紀元前30世紀頃から始まったエーゲ文明の時代であった。クレタ島クノッソス宮殿に通称『パリジェンヌ』と呼ばれる壁画（前一五〇〇～前一四五〇年）に、その証拠が見られる。彼女は大きな目の回りをアイライナーで隈り、眉を描き、唇に紅を指しているので、当時のクレタの女性は、少くなくともアイライナー・黛・口紅を使用していた事が窺われる。

一項　古代ギリシャの化粧

ギリシャ本土では、前9～8世紀頃、北方民族が南下し、アテネ、スパルタ等のポリスを設立し、古代ギリシャ社会が誕生した。

初期ギリシャの女性は極めて質素な化粧しか施しておらず、また、ギリシャ人は質実剛健を旨とし、美的感覚としては女性美より健康的な男性美を尊んだが、それでもエーゲ文明の影響を受けて、大筋においてエジプト風の化粧を施すようになった。但し、エジプトのアイ・メイクは強い日射しや砂埃りから目を保護する為の化粧であり、ギリシャの風土では不要の化粧であった。

それよりも北方民族であったギリシャ人は色白の肌を好み、白化粧や美白化粧に執着した。その為、不幸にも白化粧に鉛白を用いるようになり鉛中毒の患者が発生するようになった。所がギリシャの知恵ある女性は、普段は穀粉で白化粧し、余所行きの衣裳の時だけ鉛白で装ったと云われているが、鉛白の使用は亜鉛華が発見されるまで鉛中毒の悲劇をもたらし続けた。

それとは別に美白剤には、水銀化合物が使われ、医師

ガレノス（一三〇～二〇一年）は「昇汞は顔の黒子やしみを消してくれるが、これを塗っている女性は水銀が体に貯って、若いのに肌が萎びて皺だらけになり、年でもないのに病気で足もとがふらつき身震いしている」と警告を発していた。

古代ギリシャにおける化粧技術の進歩としては、当時のギリシャ人はエジプトで開発された親水性のクリームを使用していたが、前出のガレノスが蜜蝋と硼砂から成るコールド・クリームを作るのに成功し、この処方は昭和の中頃までコールド・クリームの基本処方として応用されていた。

その他、ギリシャ人は歯磨粉を開発し、歯を磨く習慣を確立し、古代人の衛生観念を高めるのに貢献した。又、羊毛からラノリンを得、オリーブの実等から搾油する方法も開発して化粧品技術の進歩向上の一端を担った。

二項　古代ローマ

ローマ帝国は、前八世紀中頃、都市国家ローマとして出発し、一時エトルリア人の支配下にあったが、前6世紀末に共和制国家として再出発した。

共和体制下のローマは、北部イタリアのエルトリア人、ガリア人を駆逐し、南部イタリアのギリシャ植民地も征服して、前3世紀にはイタリアの統一を果たした。その後、ポエニ戦争に勝利してカルタゴを滅し、東方のヘレニズム世界も統一して前二世紀末までに地中海の制海権を確保した。

更に、前一世紀には、ガリア、ブリタニアを収め、前三二年にエジプトを滅ぼし、前一七年に帝政ローマを樹立した。その後、約二百年間の所謂〝パックス・ロマーナ〟（ローマの平和）の時代を謳歌した。五賢帝時代（九六～一八〇年）にはローマの勢力範囲が最も広まり、東はメソポタミア、西はヒスパニア、ブリタニア、北はダキア（現ハンガリア・ルーマニア地方）、南はアフリカ北部の地中海沿岸地域に及んだ。

しかし、二三五～二八四年に至る軍人皇帝時代には内乱が繰り返され、ローマ繁栄の担い手であった中流市民が浸落し、ローマの衰退が始まった。斯くして、三九五年に帝国は東西に分裂し、西ローマ帝国はゲルマン人の侵入によって四七六年に滅び去った。

化粧の話に移る。

前三世紀以前のローマ人には化粧風習が不在とされているが、当時の南イタリアに居住していたギリシャ人の女性達は当然の事ながら化粧を施していた。また、ローマ北部を支配していたエトルリア人も化粧していた。エトルリア人の故地には、前六世紀頃のアイラインを引き眉を描いた女性のテラコッタと長い下げ髪を編んで肩から垂らした女神像・並びに化粧箱が残されており、他に前二百年頃の化粧鏡も見られた。これら考古学的な証拠

から古代エトルリア人は、アイ・メイク用化粧品を始め、頬紅や口紅のメイク化粧品を使用し、髪の手入れも行っていた事が推察された。

初期ローマ社会の人達には化粧風習がなかったとされているが、当時の肉体労働者は、日常的に手足を川で洗い、九日に一回沐浴したと云われているので、化粧風習の一環として身体を清潔にする文化は既に培われていた。その後、ローマの隆盛に伴い水道が作られ、二百年前後の頃、有名なカラカラ浴場が設立され、その当時のローマ市内には八百前後の浴場が分布していたと云われている。斯様な浴場の発達は、ローマ市民の衛生に資すると共に、彼等の社交生活の一部でもあった。ネロ（三七～六二）の后ポッパペアは、ロバのミルク風呂を発案し、それに入浴した。また彼女の旅の従者にはロバが加った。

当時の著述家プリニュウス（二三頃～七九頃）らの著書を参考にすると「市民階級のローマの女性は眉を描き、目の周囲を隈って、顔に白粉をはたき、頬や唇に紅を指していた様子」を窺う事が出来ます。そして、ローマ人達は、化粧をアルス・オルナトリクス（美顔術）とアルス・フカトリクス（化粧術）に類別し、前者は現代で云う基礎化粧、後者はメーク化粧に相当する。アルス・オリナトリクスに類別された処方には、日焼けを鎮静する効能や肌の艶を改善する効能、更には皺を除く処方、雀卵斑を薄くする処方等があり、当時のアルス・オルナトリックスが現代の皮膚治療薬へ分化する様子が窺えた。

また、ルキアノス（一二〇?～一八〇?）は「貴婦人人達は、美容を目的に白粉やポマード、顔料とは別に、入浴、歯茎の薬、付け睫毛、付け眉毛、衰えた肌の回復薬を使用した。彼女達が最も熱心だったのは髪型であった」と記していた。

化粧史上、最も贅沢な化粧を施したのが前出のポッパペアである。彼女の化粧は手がこみ過ぎていた為、百人もの奴隷が必要であった。夜、彼女は碾割粉を湿らせて賦香したパック剤を顔に塗った。翌朝、乾いて固くなったパックをロバの乳で洗い落した。彼女は肌を美しく保つ為に、ロバのミルク風呂に入り、その後に白亜（炭酸カルシウム）と鉛白（塩基性炭酸鉛）で肌を覆った。また、海藻ヒバマタ?の赤紫の色素で唇や頬を染め、アンチモンで睫や眉を黒くし、静脈を描くのに青い色素を用いた。この化粧はクレオパトラも施しており、白い肌を演出する化粧法であった。爪は竜の爪と呼ばれる色素を羊の脂に混ぜて染めた、彼女は後れ毛に脱色剤、雀卵斑の脱色には碾割粉のペーストとレモンの絞り汁、歯を白くするのに軽石、吹出物に大麦粉とバター、髪の毛のブリーチにヘシアン・ソープ?を用いたと云われている。

第二節　中世ヨーロッパの化粧

アジア系遊牧民のフン族が四世紀頃、南ロシアに移動して来た為、ゲルマン人の一派ゴート族がドナウ川を越して、ローマ帝国内に浸入した。これがゲルマン民族の大移動と云われる歴史上の大変動が生じた。その為、ローマ帝国の勢威が衰え、三九五年にローマ帝国が東西に分裂し、ヨーロッパ社会が無秩序の状態に陥り、古代通商を滅亡させてしまった。結果、化粧の歴史を正確に辿る事が不可能になった。この状態を『メークアップの歴史・ポーラ文化研究所・一九八二』の著者リチャード・コーソンは「中世において化粧料がどのように使われたか解っている事は精々その概要だけで、彩色写本、美術品、考古学上の偶然の出土品、それに化粧をした女性について曖昧で突飛な記述から知る程度のものである」と慨嘆していた。

ヨーロッパ社会が暗黒の時代に入った当時、ローマ文明の燈火は東ローマ帝国（ビザンチン帝国、三九五～一四五三）に灯され続けて来た。又、西アジアからヒスパニアに至る地域を征服したイスラム社会は、バグダッド、ゴルドバ、アレキサンドリアに文化の花を咲かせた。

一項　ビザンチン帝国の化粧

ビザンチン帝国の主都ビザンチウム（現イスタンブール）には古代ローマの化粧の伝統が維持されていた。ビザンチンの婦人は眉毛を抜き眉を黒く染めていた。アイラインは脂肪性の植物を半焼きにした炭で描いていた。頬と唇はバラ色に彩っており、髪を被り、マスクをしていた事が知られている。

二項　イスラム社会の化粧

ウマイア朝時代（六六一～七五〇）のアラビア人は、シリアやエジプトの文化を取り入れ、アッパース朝（七五〇～一二五八）には、ギリシャ文化も導入して独自のイスラム文化を確立した。この文化の下、錬金術が盛んになり、蒸溜や炉過の技術を開発し、物質を抽出、精製するようになった。その結果、純度の高いアルカリやアルコールを得て、石鹸を作り、現在のオーデコロンの前身とも云える〝ゴアの水〟を開発した。

イスラム社会の人達の生活環境は、強い日射・乾燥した大気、それに加えて砂塵の飛来が厳しかった。その為、婦人達は家に閉じ籠る事が多く、外出時には日射、乾燥、砂塵を避ける目的で、顔をベールで覆っていた。従って、目が魅力のポイントとなったので、アイメイクに気を配っていた。

上流階級の婦人方は、半月に一度の割合いでハンマム（美容院）へ通い、蒸し風呂に入ったり、髪の艶出しにヘンナ（指甲花）を用い、マニキュアやペディキュアを施した。藍を煮出した汁で眉を描き、目の周囲を黒く染

めた。鬫は貝殻と卵殻の粉にカーボンを混ぜて磨き、鬫茎はキンマ（コショウ科植物）を噛んで赤くし、頬には赤い粉を延ばしていた。

三項　ヨーロッパ諸国の化粧

アルプスはケルト語で〝岩山〟の意であり、パリの語源は傑作である。セーヌ川シテ島に拠点を置いたケルト系パリシュ族の〝パリシュ〟は〝田舎者〟とか〝野蛮人〟を意味していた。だとすると〝パリジェンヌ〟は〝田舎娘〟と云う事になる。序に云うとシテ島のシテは市（シティ）を意味していた。

パリジェンヌが田舎娘の時代、先述したように西欧社会ではローマ化粧が影を潜めたのであるが、化粧風習が閉ざされた訳ではなかった。中世ヨーロッパの乏しい化粧資料を拾って行くと、上流階級の婦人達は青白く見られる事を臨んでおり、顔を白く塗ったり、青白くさせる為に出血させる事も屡々であった。化粧は専ら娼婦が行っていて、六世紀のスペイン、九世紀のドイツではピンクに、十一世紀のイギリスでは顔を白く塗っていた。

イタリアでは、メークアップはあらゆる階層の女性達が行っていたが、肌色に近い自然な化粧が大勢を占めていた。紅については、一般市民は娼婦ほど頻繁に使用しなかった。六世紀のスペインではピンク系、八～九世紀のドイツやイギリスではオレンジ系の色を頬や唇に使用していた。斯様に、化粧に採用した彩りは、夫々の国で好みが異っていた。

四項　十字軍の影響

十一世紀から十三世紀にかけて前後七回の十字軍遠征があった。この遠征によって西ヨーロッパ社会は様々な影響を受けた。それらの影響のうち、化粧文化に直接、間接に関与した変化を挙げる。

直接的な影響としては、遠征に参画した騎士達は西アジアの土産として香料や化粧料を持ち返った為、化粧後進国の西欧の国々がアラビアの化粧を知る事になった。間接的な影響としては、貴族達の留守を守った夫人達の位置が高まり、政治に参画するような婦人が現われる事になった。今一つ取り挙げると、十字軍を輸送し、東方の香料を持ち返った港湾都市が潤い、ベネチアやジェノバが盛え、これと並んで内陸部のフィレンツェやミラノに手工業が起り、これらの都市も繁栄の道を辿った。

このような刺激がヨーロッパにも化粧の気運を高め、十三世紀のイタリア・トスカナでは上流婦人達は顔に明るいピンクを塗り、アイメイクも行き亙り、上瞼に墨で線を入れ、茶、褐色、青緑、紫色のシャドーを塗るようになった。下層の人達でも安価な褐色がかった赤を顔に塗った。

十三世紀頃からフランスやイギリスも化粧への認識が

高まり始め、十五世紀頃にはアイシャドーやアイライナーを用いるようになった。眉の化粧には大きな変化があった。エジプト以来、眉は太く濃く、しかも両眉の間が狭く塗られていたが、それに対して、細く繊細な眉が好まれるようになった。斯くしてイタリア・ルネッサンスの素地が固まった。

第三部　ルネッサンス期の化粧

ルネッサンスは文芸復興と訳され、本来、ギリシャ・ローマの古典文化再生を意味し、ヒューマニズムを求める動きでもあった。

本節では、ルネッサンス期の社会背景の概略を述べた上で、西欧諸国の化粧風習を紹介する。

一項　ルネッサンス発祥の社会背景

ルネッサンス発祥の地、北イタリアでは、ローマ時代に栄えた都市は衰え、中世も末期に至る頃には、荘園で毛織物を織るようになり、生産技術が高まるにつれて生産物の余剰を生じ、交換経済は始まった。その結果、領主の城下や交通の中心地に市が立てられ、やがては、フィレンツェやミラノのような都市が発祥した。

一方、十字軍の遠征を機にジェノバやベネチア等の港湾都市が急速に発展、一三世紀頃には活動の範囲を広げ遠隔地商業を確立してイスラム商人がもたらす東方の化粧料や香料を西欧に運んで莫大な利益を独占して都市国家を樹立した。就中、フィレンツェのメディチ家は商業や銀行業によってヨーロッパ屈指の大富豪となり、市政を掌握すると、民衆を保護すると共に、学者や芸術家を優遇したので、メディチ家の支配下に多くの天才達が集まりルネッサンスの曙となった。

二項　ルネッサンス諸国の化粧

ルネッサンス諸国として、イタリア、スペイン、フランス、イギリスの化粧について述べる。ルネッサンス期には、イタリアとスペインが化粧先進国であり、フランスとイギリスは後進国であった。

①イタリア：　一三世紀頃には、イスラム教圏から香料や化粧料を輸入した為、イタリア各地に化粧風習が復活し、文豪ダンテ（一二六五～一三二一）が「化粧しない女性は例外的存在」と記しているように、イタリアの女性は化粧品を自由に使用していた。彼女達は白粉を首や胸にまで塗り付け、肌を白く滑らかにする為、昇汞を使用していた。彼女達は目の周囲を黒く隈取り、栗色の髪や金髪を好んでいた。又、様々な処方の鬫磨粉で鬫を磨き、氷砂糖をレモン水に浸して手の肌荒れを防いでいた。

所が、中世の殻に閉じ籠ったままの聖職者達は化粧に

批判的で、化粧する女性に説教を垂れていたが、女性達は例え有毒成分による不運に見舞われたにしても、化粧をしなければ美しくなれないと信じて化粧に励んでいた。医師達も鉛白粉や昇汞の毒性を教え注意を喚起したので、一部のインテリ女性は、化粧をよりよく使う為に化粧法を勉強する会を設けていたと云われている。

②スペイン：　スペイン人は水浴の風習を維持していたと云われ、又、イスラム教徒の影響でイタリアと同様に早くから化粧習慣を回復していた。

スペインの女性は顔や唇だけでなく、耳の先きや手にも化粧を施し、尼僧でさえ麝香の香りのする紫系の白粉を用いていたそうである。又、肌の白さを保つ事に心掛けていた。

コロンブスのアメリカ大陸発見（一四九二）によってスパイスの市場がイタリアからイベリア半島に移った事もスペインの化粧の発展に寄与し、一六世紀中頃には、スペイン・モードの全盛時代に入り、スペインの化粧料がフランスにも輸出された。

③フランス：　フランスの化粧は上流階級の婦人層から始まった。と云うのは、フィレンツェのメディチ家から嫁して来たカトリーヌとマリは夫々、バロア期のアンリ二世王妃、並びにブロボン朝のアンリ四世王妃であった。彼女達の洗練された化粧が王宮内に広まった事による。しかも、カトリーヌは彼女の政治的地位を確かなものにする為、自製の練り香油や香水を与え、化粧を勧める事によって近臣ばかりだけでなく、子息のアンリ四世をも軟弱にしてしまったと伝えられている。

④イギリス：　一六世紀のイギリスはイタリア、スペイン、フランスよりも豊かさにおいても文化の面でも水準が低く、風俗は粗野であった。エリザベス一世（一五三四～一六〇三）はイギリスの経済基盤を固めると共に化粧についても容認した。しかも女王自身の化粧も大胆で、赤い髪の毛に合わせて流行の頬紅と白粉をつけ、肌を露わにしており、晩年には表情が分らない程に白粉を厚く塗った。その為、ロンドンの女性達は女王を真似て厚化粧するようになった。この厚化粧をシェークスピア（一五六四～一六一六）は〝ペインティング〟と表現し、一七世紀の詩人リチャード・クラショーは女性の念入りな化粧を〝メイクアップ〟と呼んだ。現在の彩色化粧・メイクアップはここから始まった。

第四節　絶対主義の時代から近代へ

一七世紀から一九世紀にかけての西欧諸国は、植民地からの収奪によって経済基盤を固め、絶対主義の隆盛の

下、王朝文化を築いた。斯様な流れは、上流社会を中心に贅を凝らした化粧風習をもたらし、化粧の中心はイタリアからフランスへ移った。その後、イギリスの台頭とアメリカの独立、更には、西欧各地に市民革命が生じ、上流階級の専有物に近かった化粧品の衰退を一時的に招いた。

他方、イギリスに始まり、ヨーロッパ各国からアメリカに及んだ産業革命を通じて資本主義が確立されるに至り、一九世紀末頃から化粧も一般市民の手に届くようになる素地が築かれた。

一項　一七世紀の化粧事情

一七世紀半ば頃から化粧の中心がフランスに移り始め、当時の洗練されたフランス王宮の女性達は、ムーシュと呼ばれる付け黒子を貼るなど、おしゃれに気を使ったが、彼女達の美容は昔ながらの方法で行われ、白く瑞々しい肌を守る為に昇汞や鉛白、白墨を用い、外出する時は日焼け防止を目的にマスクを掛けた。

一七世紀初頭のイギリスでは、白粉を使う事が一般化し、下層階級でも白粉を塗り始めた。彼女達の使用した白粉は鉛白粉であった。白粉を付けた後に辰砂で作った頬紅を広く塗り、眉には黒っぽい色が多く使われ、上流階級の婦人達はブルー、茶、グレーのクリーム状アイシャドーを用いていた。

二項　一八世紀の化粧事情

一八世紀に入ると、ヨーロッパ各地でフランスの化粧品を使い、上流婦人の夢はパリジェンヌになる事であると云われる程であった。

フランス宮廷における化粧は、白粉で厚い壁を作り、眉を引き、静脈を青色擦って浮き立たせ、唇一杯に紅を塗った。所がイギリスの高貴な女性達は、「年をとっても自然に見えるようにいろ〳〵試し、若き日の幻影を保持しようと努力を払った」と云われている。

一八世紀初頭の頃から、フランスでは頬紅を使う化粧が流行し始め、この時代の一つの特徴となったが、そのような華やかな化粧も、一八世紀が絶頂であり、この世紀の後半、マリー・アントワネットの頃には、彼女の好みの影響もあって、自然な化粧が尊重されるようになった。従って華美な化粧が廃れて行ったが、香水の使用が盛んになり、入浴の風習回復されつつあった。

一八世紀には、化粧品も商業ベースで販売されるようになったが、高価な為、自家製造も行われた。又、広告による宣伝も行われるようになった。

一方、白粉の有害性が新聞に書かれ、人々に大きな動揺を与えた。又、紅に有毒な水銀系色素の辰砂が使われており、これに対して現代化学の創始者の一人、ラボアジェ（一七四三～一七九四）は鉱物性の紅が入っている

か否かの鑑別にアルコール清拭法を推薦した。清拭によって脱色しないのが有毒で、脱落するのが植物の色素と云う事である。著者が知る限り、最も古い安全試験法である。このような問題の対策として、一七七九年にフランスの王立医学協会が、新規販売の化粧品の検査して許可を与える事になったが、有名無実で、これが真剣に取り上げられたのは、一九〇六年になってからである。

三項　一九世紀の化粧動向

一九世紀には、一八世紀の技巧的な化粧法から、薄く自然な化粧へ移って行った。そして流行は紅を付ける事から青白く見える化粧に変化した。化粧の流行が地味になったのは、フランスでは派手好みのルイ王朝が滅亡した事に起因し、イギリスでは、一九世紀後半のヴィクトリア女王の時代には、夫君を失った女王が喪服を脱がず化粧をしなかった為、イギリスの女性達の身嗜みが控え目になったと云われている。

話はずれるが、日本では一八六八年に、日本古来からの伝統化粧〝お歯黒〟と〝作り眉〟、次いで、一八七一年には士族達の〝丁髷〟を禁止し、欧風文化に意を注いだ。

ヨーロッパに戻すと、一九世紀の化粧が彩りから青白さに移ったが、紅を全く使わなかった訳ではなかった。又、真珠のような肌の白さや艶を保つ為に、パック、化粧水、乳液、クリームが使われたが、その処方には新鮮味がなかった。

この時代に生じた化粧上の革命としては、長い間忘れられていた衛生と清潔の観念が甦って来た事である。毎日、歯を磨き、入浴する事が再び勧められるようになった。やがて、このような衛生的生活が一般大衆にも可能となった。この復活を支えたのは、ベルギーのアーネスト・ソルベーの業績であった。彼は一八六二年にソーダを安いコストで作る方法を開発した為、石鹸の製法が改善され、質の良い石鹸が安価に得られるようになった。

四項　化学の進歩と化粧

一七世紀以降の化粧について見ると、植民地経営で潤ったヨーロッパが絶対主義最盛期に向うにつれて、手の込んだ化粧へと化粧法が進んだが、化粧の内容や技術に直接係わる目立った進歩はなかった。寧しろこの時代に関しては、現代の化粧品を生み出す下地となった自然科学の進歩に光を当てるべきである。

先ず先述したラボアジェの無機顔料と有機染料の鑑別である。これは衛生化学的な安全性試験の発端となった。次いで、ルイス・パスツール（一八二二～一八九五）の細菌学の研究は、殺菌剤や防腐剤のみならず、衛生学的な試験法の開発に寄与するものであった。又、前述のソルベーのソーダ製造法は安価な石鹸を供給して一般社会の衛生を進展させた。一八二八年にウェーラーが有機合

成化学の幕を開けると、香料の合成に始まり、一八五六年にパーキンが赤紫色色素のモベインを合成する等、広く色素合成の基盤が築かれるに至った。

何はともあれ、直接、化粧品に関する業績として特筆されるのは、一八六五年に白粉の原料として亜鉛華が毒性の強い鉛白に代わって使用されるようになり、ギリシャ時代よりこの方、数多くの女性の身体を蝕み続けて来た鉛白の害を人類の生活から追放出来るようになった。

合成法の他にも、物質を抽出したり、精製したりする技術が考案され、更に物質を大量且つ安価に作る方法の基盤が生れ、これらの芽が成長して二十世紀に入り、現代化粧品の進歩に繋って行くのである。

第五節　現代化粧の大要

一項　化粧の大衆化

一九世紀に引き続き科学技術の進歩は著しく、二〇世紀になると科学技術の進歩に伴って化粧の大衆化が顕著となった。『メークアップの歴史』の著者リチャード・コーソンは「二〇世紀に入って、化粧は再び全く自由で解放的な方向に戻って来た。古代エジプト以来、恐らく初めて、化粧品の無制限な使用が社会的にも道徳的にも広く認められるようになった。」と述べていた。

化粧が大衆化した背景には、科学的、経済的、社会的な条件が揃わなければならない。

先ず科学技術の面では、既でに述べたように産業革命以来の科学の進歩によって、鉛白や水銀化合物を追放し、石鹸を普及させて大衆の健康を著しく向上させ、二〇世紀に入ると、化学の新しい分野である生化学は、ビタミン等の生理活性物質の研究を行い、これらの物質により化粧品の効用範囲を広めた。

経済的な面では、化学工業の発展により、化粧に必要な素材が大量に生産され、しかも安価な値段で供給されるようになった。二〇世紀に入って、ドイツ、フランス、イギリス等の西欧諸国だけでなく、アメリカや日本の化学工業の発展は著しく、これに勢いを得て、化粧品市場も資本主義体制の中で大いに進展した。

社会的な要因としては、基本的人権である平等を獲得した市民、労働者階級の生活水準の向上が化粧品需要の拡大に貢献し、更に人口の増加、平均寿命の延長、女性の解放も化粧品需要を促進した。

二項　日本の化粧文化

日本の化粧は、地理的な意味ではヨーロッパの化粧とは云い難いが、前述したように、明治時代初頭に日本古来からの化粧、お歯黒、眉作り、丁髷が禁止された。この禁止の理由は「上古になく諸外国にもない野蛮な風習」と云う事であったので、化粧の欧風化が生じ、一九世紀

末には欧風化粧が定着。二〇世紀初期には化粧の大衆化が着々と進行していたが、不幸にも一九三七年に日華事変が起き、続いて太平洋戦争（一九四一～四五）が生じた為、化粧の進歩も停滞してしまった。

終戦後、一九五〇年に朝鮮戦争が勃発し、その余恵を受けて回復に向かうと、化粧品産業もその波に乗って急速に発展し、工場の増改築、新設によって大衆化した化粧品の需要を満たすと共に化粧品研究にも力を入れた。その結果、日本の化粧品産業は西欧の化粧先進国と肩を並べるに至った。中でも研究に関しては欧米諸国を凌駕するに至った。その証拠を示すと、化粧品業会では四年に一度、国際化粧品技術者会学術大会を催し、優秀論文三題が表彰され、日本は表彰される常連国でこれまで受賞から外れた事はない。

三項　非イオン界面活性剤の登場

二〇世紀に入ってから登場し、化粧品開発に多大な貢献を果たした素材として、非イオン界面活性剤を挙げる事が出来る。現代の化粧品科学の進歩は、非イオン界面活性剤の出現によってもたらされたと云っても過言ではない。例えば、昔はクリームと云えばアルカリ性のカリ石鹸で乳化しており、又、化粧水に油を溶かしたもの等考えられなかったが、非イオン界面活性剤は酸性のクリームや乳液を可能にし、油溶性の成分を可溶化した化粧水も登場するようになった。

その他、メークアップ化粧料では顔料の分散剤として用い、フォーム状シャンプーでは起泡剤、乳液状のファンデーションでは、乳化剤、顔料分散剤として使用される。このように、非イオン界面活性剤の恩恵を蒙っている化粧品はまだまだあるが、界面活性剤の化学構造を簡単に述べる。界面活性剤は分子中に親水基と親油基を有し、水と油の二層の界面に親油基を油層側に、親水基を水層側に配位させた膜構造を作り、これを振盤、撹拌し、水或いは油の分散粒子を作ると界面活性剤は分数粒子の凝集を防ぐ為、乳化状態を維持する事が可能となる。

界面活性剤の親油基側が陽イオンの界面活性剤をカチオン活性剤と云い、石鹸のように親油基が陰イオンの場合、アニオン活性剤、親油基と親水基の結合にイオンが介在しないものをノニオン（非イオン）界面活性剤と称している。化粧品のpHが酸性の場合は陰イオン活性剤の効果は失墜。逆にアルカリ性の化粧料には陽イオン活性剤の機能は発揮できない。その点非イオン界面活性剤は化粧品のpHに関係なく界面活性を維持出来る利点がある。

参考文献

ジャック・パンセ、イバンヌ・デランド著、青山典子訳、〝美容の歴史〟、白水社、一九七〇

春山行夫、西洋の化粧文化史、〝化粧品の全て〟、国際商業出版、一九七八

リチャード・コーソン著、石山彰監修、ポーラ文化研究所スタッフ訳、〝メークアップの歴史〟、ポーラ文化研究所刊、一九八二

鈴木守、〝化粧品進化論〟、化粧文化一八号、一九八八、同一九号、一九八八、同二〇号、一九八九、同二一号、一九八九

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額一、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二一

加入者名　まんじ

（司馬雑感　四十）

司馬遼太郎と戦車

山田嘉久

司馬遼太郎は戦時中、戦車隊の小隊長だっただけに戦車に対する思い出は人一番強い。

戦車に関する随筆も数編書いているし、戦車隊長としては先輩に当たる軍神、西住小次郎を取り上げた小品もある。

〈私にとって戦車という機械は昭和十年代の日本国そのものであった〉（「石鳥居の垢」）という戦中の戦車兵体験から、昭和十四年、日ソ戦車隊の激突となった「ノモンハン事件」に関する資料は大量に集めていた形跡がある。

司馬がノモンハン事件を題材に、「昭和」を主題とする小説を書く構想をもっていたことはよく知られているが、ついに書かれることはなかった。

一　戦車の歴史

日本陸軍が戦車を作りだしたのは昭和の初年からである。当時、まだ国産の自動車もなかった時代だった。

その試作車が完成したのが昭和四年で、戦車の名は「八九式中戦車」と名付けられた。

当時の日本陸軍では戦車については軽戦車（十トン以内）と重戦車（二十トン以上）の概念しかなかった。しかも軽（殆どルノー製）が主力で、重は少なかった。そこに両方の機能を持った中戦車が初めて登場したのである。

当時、世界で戦車をつくれる国は英、米、ソ、独、仏、伊の六カ国にすぎなかったが、そこに日本が加わった。

これを製造するために、三菱重工が大井に戦車専門の工場を作った。

そして昭和六年の満州事変では早速、登場した。

尤も当時の中国軍ではろくに砲兵もなく、小銃と機関銃とせいぜい迫撃砲程度の火力だったから、この程度の戦車でも、当時の新聞が好んで表現したまさに「鉄獅子」だった。

しかし昭和十四年に起きたノモンハン事件でソ連のベーテー戦車と対決して殆ど全滅した。

敗因は装甲の薄さと砲力の不足だった。

貧乏性の日本陸軍は安くあげるため鋼板を薄くし車載砲の砲身をうんと短くした。そのため射撃してもソ連製戦車を貫通することができず、逆に敵の弾は面白いように八九式に当たった。

これに驚いた日本陸軍では、既に昭和十二年に三菱重工で試作していた九七式中戦車の大量生産に踏み切った。

これが司馬が乗った中戦車で通称「チハ」と呼ばれた。

最大の特徴はガソリンエンジンの代わりに、世界最初のディーゼルエンジンを使用したことで、火炎瓶を投げつけられても他国のガソリンエンジン車のように炎上はしない。

当時としては最新鋭の中戦車だった。

重量は十五、三トン、機関は一七〇馬力空冷ディーゼル、砲は五七ミリ戦車砲、重機二挺だった。

余談だが、数年前、日米戦の激戦地だったサイパン島を旅行した際、無数の弾痕を残して、今も放置されている無残な戦車の残骸を見たが、これが司馬の乗っていたと同種類の戦車（チハ車）だと直感した。

司馬によると九七式中戦車は当時の価格で一輌三十五万円もしたという。爆撃機が一機二十万円、戦闘機が一機七万円に比べると、如何に戦車が高価であることが分かる。

九七式は単なる消耗品の武器ではなく、一種の宝物だった。

これが日本の主力戦車として太平洋戦争が始まると、全戦場で活躍したが、そのなかでも最も活躍したのは、緒戦のマレー、シンガポール作戦だった。

当時の英軍は戦車らしいものをほとんど持っていなかったために無人の野を行くように突進した。一個中隊十八輌の戦車で英軍二個師団を壊滅された例もある。

しかし戦争も半ば過ぎ、ビルマ、中国などにアメリカの軽戦車（M3）が現れると九七式の火力、装甲の点で歯が立たなくなった。

そこで戦争末期には米軍のM3（後にM4）に対抗するため4式中戦車が開発されたが、実用化に至らなかった。

そのため、第二次大戦の最後まで（硫黄島の戦いなど）日本軍は時代遅れの九七式に頼らざるを得なかった。

（註）戦時中、日本陸軍が極秘に試作した世界最大の「百五十トン戦車」の設計図が見つかったことが最近報じられた。（平成二十七年十月二十四日付朝日）

しかし物資の欠乏で鋼鉄が手に入らず、生産工程にも入れなかった。もし実現すれば当時世界最大の独ナチス（タイガーⅡ六十九トン）をはるかに上回る筈だった。

世界で最初に戦車の登場したのは第一次大戦中である。

フランス製のルノーFT17、イギリス製のマークLが最初の戦車であるが、いずれも塹壕戦の突破を目的としたものであることは、映画「西部戦線異状なし」で描か

れた通りである。

第一次大戦は一九一四年七月に開始されたが、西部戦線での連合軍（英仏）と同盟軍（独墺）との戦いは次第に膠着し、塹壕戦となった。それを打開したのが開戦二年後の戦車の初投入によるソンム（フランス北部）の戦いであったのはよく知られている。

そして、わが国には早くもルノー製が一九一八年（大正七）に輸入されている。当時、戦車は日本では Tank または装甲車と呼ばれた。

（騎兵から戦車へ）

司馬が戦車の中で持っていたのは騎兵銃だったことから分かるように、戦車の前身は騎兵である。

日本軍の騎兵は実質、日露戦争に備えて「坂の上の雲」の主人公の一人秋山好古によって作り上げられた。それだけに司馬にとって、騎兵の父といわれた好古には特別の因縁を感じたのであろう。

しかし時代の花形だった騎兵隊も時代の変遷とともに変質してゆく。

第一次大戦が始まると、日本陸軍では早くも自動車、装甲車、戦車に対する研究に着手している。そして大正七年にフランス製ルノー戦車を輸入したのは前述のとおりである。

昭和に入ると騎兵部隊に機関銃隊、騎砲兵隊、装甲自動車隊が設置されることになる。そして日中戦争の始まった昭和十二年には装甲車隊は戦車隊に改称された。

同時に千葉市と満州四兵に戦車学校が設けられた。

（なお、司馬は四兵戦車学校の卒業生である。）

昭和十四年に起きたノモンハン事件は各国の戦車の改良に拍車を懸ける結果になった。

ノモンハンの敗戦で日本は慌てて九七式の車体に四七ミリの長い砲をつけて世界なみにした。しかし日本が四七ミリをつけてほっとしている間に、世界の中戦車の標準は七五ミリと野砲なみになっていた。

因みに秋山好古によって創設された騎兵第一旅団が戦車第三師団に変わったのは太平洋戦争の始まった年の翌年（昭和一七年）だった。ここに伝統ある騎兵部隊は完全に姿を消した。

（戦後、自衛隊では当初、戦車を「特車」と呼んだが、昭和三十七年からは元の「戦車」に戻った。なお現在、陸上自衛隊の主力戦車は「一〇式戦車」（重量四四トン）である。二〇一〇年に命名された。）

二　兵器の年式呼称

ところで戦車の種類を八九式とか九七式とか呼ぶ。いずれも（西暦でない）皇紀の下二桁年に採用されたことを意味している。

すなわち八九式とは皇紀二五八九年（西暦一九二九、昭和四）に採用された中戦車である。九七式とは皇紀二五九七年（西暦一九三七、昭和十二）に採用された。

皇紀の下二桁の名称とすることは、有名な軍用機ゼロ戦（零式艦上戦闘機）が皇紀二六〇〇年（西暦一九四〇、昭和十五）に採用されたことで世によく知られている。

因みに日中戦争で主力だった戦闘機は九六式であった。

このことは、兵器の歴史に詳しい友人の話では、昭和三年六月の官房機密七九〇号で決まったと云う。

「兵器は年度を示すに用い神武即位紀元年数の十位以下を以てす」

従って、それ以前に採用された兵器については、呼称が必ずしも統一されていなので厄介である。

例えば司馬が戦車内で持っていた兵器は前記の通り三八式騎兵銃と十四式拳銃だと本人が書いているが、三八式騎兵銃は明治三八年（一九〇四）に作られたものだし、十四式拳銃は大正十四年（一九二五）製である。

因みにその他の兵器を調べてみると、

我が国初の国産銃である十三年式村田歩兵銃は明治十三年（一八八〇）製だし、第二次大戦の主力だった三八式歩兵銃は、前記三八式騎兵銃と同様に明治三十八年（一九〇五）に作られた。

思えば、大戦中は司馬に限らず、かなり旧式の兵器を持たされていたことになるが、司馬は別の随筆で、日本の兵器は大げさにいえば戦国時代の元亀天正とあまり変わりはなかった意味のことを書いている。

昭和四十九年にルパング島で発見された小野田元小尉が携行していた銃も「三八式歩兵銃」だった。

しかし更にややっこしいのは、折角決まった皇紀年号式とは別に「愛称」が通用したことである。

司馬の乗っていた九七式戦車は愛称「チハ」と呼ばれた。チは中戦車の略、ハは「イ、ロ、ハ」のハすなわち三番目に国産化されたことを意味している。

皇紀二六〇一年（昭和十六）採用の一式陸軍戦闘機は「隼」、皇紀二六〇四年（昭和十九）採用の四式戦闘機は「疾風」と名付けられ「愛称」の方が有名となった。

そこで海軍では昭和十八年以降は皇紀年号ではなく愛称一本としたことが更に複雑にした。戦闘機は「風」（烈風、陣風）、陸上戦闘機は「雷」「電」（雷電、紫電）、攻撃機は「山」（天山、連山）、爆撃機は「星」（彗星、明星）などである。

逆に陸軍では重爆撃機「呑龍」に至っては皇位二六〇一年採用にも拘わらず、前年の皇位二六〇〇年祝賀ムードを引きずって「一〇〇式重爆撃機」と命名した。「百式」として親しまれたが、明らかに海軍の「ゼロ戦」を意識している。

そう考えると昭和の陸海軍は肝心の作戦面だけでなく、些細な兵器呼称に至るまで互いに対抗していたことを窺い知ることができる。

三　司馬の戦車体験

司馬は昭和十七年、太平洋戦争の最中に徴兵検査を受けたが、結果は本人も驚いたことに「甲種合格」だった。「甲種合格」などは熊野灘でクジラをとっているような筋骨隆々たる壮丁にのみ与えられる栄誉だと司馬は思っていたようだが、戦局も苛烈になってよほど合格基準が下げられた結果に違いないと司馬は解釈した。

数日後に小さな通知書が届いたが、それには「戦車手」と書かれていた。早速、乙種合格になった親友に見せると「戦車なら100%死ぬな」と気の毒そうに云われたという。

友人のいう通りだった。敵の撤甲弾が戦車の横つ腹を打ち抜いたとした場合、車内できりきりとミキサーのように旋回するため乗員の肉も骨もこまぎれになって、挽肉状になってしまう。

司馬は戦車を「憂鬱な乗物」と名付けた。

〈私はいまでもときに、暗い戦車の中でうずくまっている自分の姿をみる。（略）追憶の甘さと懐かしさの入りまじった夢なのだが、しかし悪夢ではないのに、たいてい魘されたりしている。〉（「石鳥居の垢」）

昭和十八年、司馬は兵庫県加古川市にあった戦車第十九連隊に初年兵として入隊した。

しかし初年兵の練習のための本物の九七式中戦車は、五十人に一輌しかなかった。それくらい貴重な「宝物」だった。

初年兵教育を終えた司馬は速成将校訓練を受けるため満州へ送られた。

（司馬達が去った後の戦車第十九連隊は程なくフイリッピンへの動員令が下ったが、途中輸送船が敵潜水艦に沈められ殆どが戦死した。）

満州の四平戦車学校（前述）に入れられた司馬は八ケ月、戦車教育を受けた。此処では四人に一台の割合で九七式（チハ車）を持たされた。

その時の司馬について同期生の一人が語っている。

「（司馬さんの）操縦技術は同期生の中でも、とびきり下手だった。しかし八ケ月間の教育が終了した一九年一二月には、なんとか機甲将校らしく、様になってきた」

（平成二七年八月九日付　産経新聞）

司馬自身も初年兵時代、古年兵から「スパナを持ってこい」の命令にスパナを知らなかったため〈頭蓋骨が陥没するほど〉殴られたことを吐露している。

随筆「戦車の壁の中で」でも〈私はそのころ形ばかりの四輌の長だったが、操縦はとびきり下手で、始動がとくに苦手だった〉と書いている。

司馬は、チハ車の後戦争末期に作られた「三式中戦車（チス車）の運転にも苦労した筈だが、不思議にこの戦車については殆ど触れていない。専ら恨みは「チハ車」にぶつけられている。

しかし、翌二十年春には本土帰還命令を受けているので、司馬には実戦経験はなかった。

四　司馬とノモンハン事件

一九三九年（昭和十四）五月から同年九月にかけて、満州国とモンゴル人民共和国の間の国境線を巡って紛争が発生した。

所謂「ノモンハン事件」である。

満州国軍とモンゴル人民共和国軍の衝突に端を発して、両国の後ろ盾となった日本陸軍とソビエト赤軍が戦闘を展開したのである。

日本側はソ連側のモンゴル軍がさきに侵犯したと主張し、ソ連側は日本支配下の満州国軍が一方的に国境を越えたと反論し、その真相はいまだに不明である。

ノモンハン事件の重要性は、ソ連側が対欧戦略というスケールの大きい基本構想で戦っているのに対して、日本側は戦略という自覚がなく、単に「関東軍の面子、威信の保持」の考えしかなかったと司馬は歎く。

前年の昭和十三年に新設された輜重部隊が実戦に登場したのは、このノモンハン事件からである。

しかし実際には、当初は死体運搬が主な仕事だったと司馬は云う。ハイラルの兵站基地から前線に弾薬を運んだあと、帰りは死体を満載するのである。

主力戦車は昭和四年製の旧型八九式中戦車だったが、同十二年製の新型チハ車が登場するのは事件の終わりごろ（同年七月からの所謂「第二次ノモンハン事件」以降）で、それまではソ連の戦車集団と日本の旧式歩兵との鉄と肉との戦いであった。

その結果ハルハ河を挟む荒野は日本歩兵の死体で埋まった。

ようやくやっと海を渡って来た五頭身で短砲身の八九式戦車団が雲霞のようなソ連のBT戦車団に戦いを挑んだ。しかしソ連のBT戦車になすすべもなかった。五七ミリの大砲は砲身が短かすぎ、敵車に対する貫通力が全くなかった。それに鋼板が薄いため敵の砲弾がどんどん貫いてくる。

攻撃力も防御力もない単なるオモチャであったと司馬は書く。

ソ連のBT戦車も大した戦車ではなかったと司馬はいうが、ただ日本の八九式より装甲が厚く、砲身が長かった。戦車同士の戦いでは装甲の厚さと砲の大きさだけで勝負がつく。

たしかに日本戦車の射撃は正確だった。

ところがBT戦車を操縦するモンゴル人の大砲は命中

するごとにブリキのような八九式戦車を串刺しにして殆ど全滅させた。

そのためノモンハンで生き残った日本軍の戦車小隊長、中隊長の数人が発狂して廃人になった。当時の日本陸軍の首脳にはろくな戦争指導能力がなかったことを示している。

そのためか軍は、ノモンハンから還った下士官は内地に帰すなという暗黙の指示を隷下部隊に通知していたという。

同年七月から始まった第二次ノモンハン事件では、日本軍も戦車二個連隊と歩兵第二十六連隊を主力とした総兵力一万五千人を動員、本格的戦闘に入ったが、その詳細は東京の大本営に報告されることはなかった。

空中戦に限っては、緒戦から日本軍が優勢だったが、そのうちソ連軍は日本を遥かに上回る数の航空機を動員するようになる。そのために日本軍は旧式な複葉機の九五式戦闘機を投入する始末だった。

八月に入るとソ連軍の攻勢は益々激しくなった。

ソ連軍が、戦車四九八輌、装甲車三四六輌の計八百輌を超える大量車輌を投入できたことは、当時のソ連を巡る欧州情勢と無関係ではなかったであろう。

同月二十三日、スターリンは天敵であるヒットラーと「独ソ不可侵条約」を締結していたのである。このことは既に「日独防共協定」を結んでいた日本にとってはまさに青天の霹靂だった。

翌々日の二十五日には、当時の平沼騏一郎内閣は急いで日独同盟の締結交渉延期を閣議決定。二十八日には首相が「欧州の天地は複雑怪奇なる新情勢が生じ」と有名な声明を出して総辞職してしまった。

（結局は翌十五年九月、後の近衛内閣によって日独伊三国同盟は締結されるのだが）

一方のスターリンは文字通り「後顧の憂いなく」、東方攻撃に専念することができたのである。

九月一五日、両軍による停戦協定が成立した。

日本の連隊長級の前線指揮者の多くは戦死していたが、生き残った連隊長の多くも敗戦の責任を負わされて自決を強要された。小松原師団長も事件の一年後に病死するのだが、実態は自殺に近い状況に追い込まれていたという。

一方、独断専行を主導した辻政信、服部卓四郎らの関東軍参謀は太平洋戦争開戦時には、なぜか陸軍の中枢部に帰り咲いている。

司馬によれば、大日本帝国陸軍の戦車という戦車は、どれ一つとっても敵に勝てる代物ではなかった。彼が配属された満州の戦車連隊は、いわば対ソ戦に備えた秘密機甲師団であった筈である。それが、ひとたびソ連戦車と会戦すれば、たちまち全滅させられるであろうことは

明らかであったという。

問題は、それを戦車兵ならだれでも知っているのに、誰一人として口に出して云う者がいなかった事実である。

そのため、何も知らない大本営の参謀将校たちは皆、実戦に役立つものとばかり信じていたらしい。

司馬はこれら陸軍のエリート参謀たちを次のように酷評している。

〈「参謀」

という、得体の知れぬ権能を持った者たちが、愛国的に自己肥大し、謀略をたくらんでは国家に追認してきたのが、昭和前期国家の大きな特徴だったといっていい。〉

「この国のかたち1」

（註）司馬はノモンハン事件は日本軍の惨敗であったと説くが、一九九〇年代以降、ソ連軍の損害が明らかになってくると、一部の研究者の中には日本軍がむしろ勝っていたとする説も登場した。現代史専門の秦郁彦も「一般にノモンハン事件は日本軍の惨敗だったと云われるがペレストロイカ以後に旧ソ連軍から出た新資料によれば実態は引き分けに近い」と語っている。

ともかく、司馬はこの事件の日本軍主力が後に自分が所属することになる戦車第一師団であるだけに、関心が深くこの事件の資料を数多く集めていた。

当時の司馬担当記者の手記によれば、防衛庁秘蔵のノモンハン関係資料、特に小松原中将日記、各連隊長の回想録、参謀本部各幕僚の事変報告書、「戦史叢書　対ソ戦備、ノモンハン事件」の基礎資料など大量資料が集められたと云う。

更に司馬自身、新宿区市谷台にある防衛庁戦史室も見学している。（しかし米国立公文書館に近い相応な施設を期待した司馬だったが、同室の全くの貧弱な内容にひどく落胆した。それもその筈、日本の敗戦が決まった昭和二十年八月十五日に陸軍参謀本部の保有する機密資料は殆ど焼かれてしまったからである。）

しかし、ノモンハン事件の生き残りの須貝新一郎大佐からは多くの資料収集や直接聞き取りもしている。

須貝は小松原道太郎率いる第二十三師団配下の歩兵第二十六連隊の連隊長だったが、サイダー瓶を使った火炎瓶攻撃を組織的に実施し、八十三輌の敵戦車を破壊したことで有名だった。

このことはノモンハン事件の古典ともいうべき「静かなノモンハン」（伊藤桂一著）にも、司馬の死後書かれた「ノモンハンの夏」（半藤一利著）にも描かれている。

しかし須貝は小松原師団長が指示した、わずか四百名の兵力で敵側背に迫ると云う無謀な作戦を拒否した。その上、小松原師団長や辻政信参謀の無謀な作戦計画を批

判したため事件後、前述の通り自決を強要されたが、それを拒否、直ちに予備役に編入された。

須貝は戦後は長野上山田温泉三楽荘の主人となっていた。司馬も須貝を主人公にした小説を構想していた節があるが、この構想はひょんなことから破綻する。

昭和四十七年正月号の「文芸春秋」で司馬が元大本営参謀瀬島龍三と対談したためである。これに激怒した須貝はそれまでの取材内容の使用と今後の取材を拒否した。

これにより「坂の上の雲」を書き終えた司馬に、次は昭和史を題材とした小説を期待した読者の願望もむなしく終わった。

司馬が次に執筆したのは「西南の役」を主題にした「翔ぶがごとく」で、時代は明治初期に逆戻りしてしまった。

問題の対談「太平洋戦争と昭和国家」は何故か「司馬遼太郎対談集」にも載っていないので、友人から当の文芸春秋を借りて読んだが、さしたる問題点は探し出せなかった。

対談の内容よりも、瀬島本人を嫌悪していた須貝にとっては、対談そのものが許せなかったのだろう。

尤も、司馬自身は若い頃の同人誌「近代説話」の同人同士だった伊藤桂一との対談では、ノモンハン事件の事を考えると「日本国家そのものを否定したくなる」と言い、自分はそれを書けば、「血管が破裂すると思う」とまで言っているが。

司馬に言わせれば、ノモンハンは明治以来すっかり官僚組織化した日本の軍隊機構が生みだした愚行の典型であり、いまだに日本人の脇腹に擬せられた短刀だというのである。

五　「軍神西住戦車長」

ノモンハン事件より数年前、昭和十二年、日中戦争（シナ事変）が始まると、中国大陸で八九式戦車四両を率いて転戦していた西住小次郎という陸軍中尉が死後、昭和の軍神第一号となった。

戦車四両を率いた戦車第一連隊の隊長といえば、司馬の戦車経歴と全く同じである。

いわば司馬にとって西住小次郎は戦車隊の先輩に当たることになる。それだけ彼は関心があったようで昭和三七年「軍神西住戦車長」という小品を書いた。

西住戦車長は昭和十三年五月十七日、有名な除州大会戦の直前、南平鎮付近で戦車の砲塔から飛び出し、前方の地形を偵察中、敵弾を太股にうけ、出血多量で死んだ。

軍部は、この青年を昭和の軍神第一号として発表したので、彼の最期は新聞や雑誌に喧伝され、一躍「時の人」となった。

映画化もされ、当時小学生だった私も先生に引率されて映画館で観た記憶がある。主人公の西住隊長に扮したのは当時の二枚目俳優上原謙だった。

しかし、司馬によれば西住隊長は全く作られた軍神だという。

明治以降、軍部は大戦が起こるたびに軍神を作った。

日露戦争では海軍は広瀬武夫中佐、陸軍は橘周太中佐だった。大正時代には軍神はいなかったが、昭和に入ってシナ事変が始まり、更に拡大されると国民の支持を得るため軍神が必要となった。それがたまたま西住隊長だったにすぎないというのである。

なおその後の太平洋戦争では真珠湾攻撃の「九軍神」、や加藤隼戦闘隊長が選ばれている。

小次郎は熊本の生れで、土地の県立御船中学から昭和五年陸軍士官学校に入学したが、成績も中程度で、とりたてた才能も持っていなかった。

明治の軍神広瀬武夫がもし戦国時代に生れていれば一ぱしの英雄になったかもしれないのに対して、西住はせいぜい、区役所の律義な書記タイプとは、司馬もかなり厳しい。

西住は昭和十一年八月に久留米戦車第一連隊に赴任し、翌八月に中支に派遣された。この時から戦死までの一年間、三十数回の戦闘に参加したが、その活躍ぶりは作家菊池寛によれば「常に陣頭に立ち、実に国軍戦車の華、武人の亀鑑と称すべきである」となっている。（当時の菊池寛がいかに軍部寄りであったか目に見えるようだ。）

しかしこれだけでは軍神の資格はないと司馬はいう。

なぜならこの程度の活躍なら西住だけでなく他にもいくらでもいたからだ。

西住が軍神に選ばれた理由のひとつが彼が戦車に乗っていたからだと司馬は意外な面を指摘している。

当時、戦車隊は新しい兵科で、「日本にも戦車があるぞ」と内外に宣伝する必要があったというのである。日本に戦車が豊富にあれば宣伝の必要もなかったかもしれないが、実情は申し訳程度しかなかったので、軍神を作って壮大な機甲兵団があることを示す必要があったのである。

西住戦車長の戦死の場面はこうである。

戦車三台で進出してきた西住小隊の前面にはクリークが横たわっている。そのクリークの向こうには敵歩兵が退却しようとしているのが見えた。

西住中尉は操縦手に「止まれ」を命じ、ためらうことなく砲塔を開いて車外に飛び出し、ひるまず戦車の渡河点をさがすためクリークにおりた。その間、敵弾が間断なく降り注いでいる。

この場面が映画でもクライマックスにもなっていて、小学生の私も手に汗をにぎって画面を見ていたことを鮮明に覚えている。

結局、西住は敵弾を大腿部にうけ出血多量で死ぬのだが司馬によれば、偵察のため指揮官みずからが車外にでることは当然の行為で、なにも西住に限ったことではないという。げんに西住が所属していた細見連隊では西住と同様な行為で戦死した将校が数人いた。

彼らは軍神になることなく、西住一人が軍神の栄誉を担うことになる。連隊長の細見大佐はその後、千葉戦車学校に転任したが、たまたまある会合で陸軍情報部の某中佐に西住のことを語ったことがきっかけになり、戦死後六ケ月目に報道部から「軍神」として大きく発表された。

これには細見大佐が一番驚いたと云う。

司馬も前述の通り、戦車学校で速成士官の教育をうけたが、不思議なことに、学校内で一度も西住隊長の話を聞いたことがなかったという。その後、偶然にも西住と同じ戦車第一連隊に配属になったが、ここでも西住を話題にする者はいなかった。

結局、西住連隊長はあくまで銃後用の「作られた軍神」であって、軍隊内の神様ではなかったことになる。

（参考にした司馬作品）

○戦車と文明　（司馬遼太郎全集68）
○戦車、この憂鬱な乗物　（私の雑記帳2）
○戦車の壁の中で　（私の雑記帳3）
○石鳥居の垢　（歴史と視点）
○軍神西住戦車長　（歴史と小説）
○ノモンハン、天皇、そして日本人（対談　D　クックス）
○ノモンハン一兵卒と将校、下士官（対談　伊藤桂一）
○太平洋戦争と昭和国家　（対談　瀬島龍三）



九七式中戦車

放火魔の心裏

堀内永人

目　次

一、倉真温泉郷
二、放火の容疑者逮
三、容疑者の仮面
四、容疑者の心裏
五、意外な真犯人
六、保険金の行方

一、倉真温泉郷

東京駅で、東海道新幹線下りこだまに乗車し、八番目の掛川駅（静岡県）で下車。

北口駅前から静鉄バスの倉真行きに乗り、県道三九号線を北へ四キロほど行った石畑停留所で、県道八一号線に分岐し、さらに五キロほど北へ行くと、標高五三二メートルの粟ケ岳の西麓、倉真温泉郷に着く。

温泉郷といっても、数軒の温泉旅館があるだけの鄙びた山間の温泉場である。

日頃、平和でのどかな倉真温泉郷で、平成二十五年十一月二十三日（土曜日、勤労感謝の日）の夜十時過ぎ、《ジャーン、ジャンジャーン》

と、火災の発生を知らせる半鐘が鳴り響いた。

火災は、倉真温泉明誠旅館の物置小屋であった。

今度の火災も、普段火の気が全くないところで発生したので、放火としか思えない。

さいわいすぐ横を、倉真川の清流が流れているので、旅館の従業員が、川の水を手動ポンプで汲み上げて消火

な正源寺に隣接する一戸建て住宅が全焼した。

この火災も、火の気のない所から出火したことと、被災家屋に三千万円の高額な火災保険が掛けられていたことで、保険金目当ての放火事件ではないかと疑われた。この火災も未解決のままである。

それから、一か月後の八月二十四日（土曜日）の午後八時過ぎに、三つ目の火災が発生した。最初の火災現場の直近の農機具小屋がほぼ全焼した。

この火災も、火の気のないところが火元と見られた。しかも、被災物件が、最初の火災と同じ山田藤吉所有の小屋であった。

火災があれば、被災者は犯人を憎むか、火災の原因などについて関心を持つのが普通である。が、被災物件の所有者の長男で、消防団員の山田漣一は、なぜか火災の究明に消極的であった。

倉真温泉郷の住民は、六月、七月、八月と続けて三回も火災があったので、次はどこの家に放火されるかと震え上がった。

犯人は愉快犯か、それとも世間に恨みを持つ者の仕業か、住民はお互いに詮索し合い、疑心暗鬼となり、平和な温泉郷に気まずい雰囲気がただよい始めた。

三つ目の火災があった翌日、掛川市当局は事態を重く見て、急遽、市長、副市長以下幹部職員が集まって対策を協議し、夜警団を組織することになった。

した。

この火災は発見が早かったので、他に類焼することなく鎮火した。が、火災は半年間に六つも発生し、今度の火災で七つ目である。

警察では、捜査員を総動員して犯人逮捕の手掛かりになる証拠資料を探したところ、火災現場の周辺に不審な靴跡があった。

ここ倉真温泉郷では、五十年間も火災がなかったので、住民は恐怖におののき、疑心暗鬼に陥った。

最初の火災は、平成二十五年六月十五日（土曜日）の夜十一時過ぎに、倉真温泉明誠旅館の仲居堀池冬子が住むアパート山田荘（所有者山田藤吉）の付属物置から出火した。

さいわい直ぐ近くの倉真温泉会館の消火設備が使えたので、アパートの外壁を焦がした程度でことなきをえた。

この火災は、火の気のないところが火元と見られ、放火の疑いで捜査が進められた。

火災があった数日後、美人仲居の堀池冬子に横恋慕して、山田荘の周辺を徘徊するストーカー松葉旅館の板前吉川為三が、重要参考人として警察から事情聴取された。が、証拠不十分で釈放され、事件は未解決のままである。

それから一ヶ月後の七月二十八日（日曜日）、夜九時頃、二つ目の火災が発生し、『ぼっくり地蔵尊』で有名

夜警団は、倉真消防団の幹部で、温泉旅館青雲荘の専務松井健太郎、同じく小笠信用金庫の職員中山修一、同じく松浦鉄工所社員の山田漣一らが中心になって組織され、早速その夜から夜間巡回が始まった。

松浦鉄工所の社員山田漣一は、委託されて明和火災の外務員を内職にしていた。

そんなある日、誰言うともなく、

（火災は、消防団の夜間巡回のない夜に発生する）

という噂が流れ、さらに、

（三つ目の火事のときに、警察は燃える状況を撮影しないで、消火作業の消防団員や火事場見物の野次馬の方にカメラを向けていた）

という噂もささやかれた。

秋の彼岸、九月二十三日（月曜日）の午後十時過ぎ、四つ目の火災が発生した。火災は、倉真温泉郷から南西へ四キロほど下がった、子宝の霊泉で人気がある、報泉寺温泉滝沢旅館の従業員寮で起きた。

今度の火災も、火の気のない自転車置き場から出火し、バイクと自転車が数台燃えただけで、消し止められた。

この日は月曜日であったが、旗日であったので、消防団員による夜間巡回は行なわれなかった。

（消防団員の夜間巡回のない夜に、火災が発生する）

という噂が現実となってきた。

（土地勘があって、消防団の内情に詳しい者が犯人ではないか？）

という話が、半ば公然と語られ始めた。

そして、住民から火災があった直ぐ後で、白っぽい小型車に乗り込む不審な人影を見たという情報が提供された。

不審者は、小太りの男で、自動車に乗るときの足取りが少し重そうだったということである。

また、その夜の十一時過ぎに、倉真温泉会館の地階にあるスナック『白百合』に、松葉旅館の板前、吉川為三があわただしく駆け込んできて、

「ママ、頼みがある・・・」

と言って、白百合のママ斎藤真紀子に、アリバイ工作を頼んだという噂が流れた。

さらに、火災現場付近で、為三に似た人を見かけたという情報まで警察に寄せられた。

警察は、不審な行動の目立つ為三を、捜査本部に呼んで事情聴取したが、為三は、

「知り合いの女性を訪ねただけだ」

と、当日のアリバイを主張して、犯行を否認した。

その後、松井健太郎、中山修一、山田漣一ら消防団の幹部は、消防本部の会議室に集まって、夜間巡回の強化について話し合った。

警察では、白い小型車を持った小太りで、歩き方に特徴のある男に焦点を絞って、消防団員の一人ひとりにつ

いて内偵を始めていた。
それから三日後の木曜日、中山修一と組んで夜間の見回りを終えた山田漣一は、倉真温泉会館の地階にあるスナック『白百合』に姿を見せた。
白百合のママ斎藤真紀子は、知的な美貌と巧みな英会話で、倉真温泉郷を訪れる観光客には、なくてはならない存在であり、白百合の常連客は、いつしか彼女のことを『倉真温泉郷のマドンナ（恋人）』と呼んでいた。
真紀子ママは、カウンター席の片隅に、一人寂しく腰を下ろして考え込んでいる山田漣一を見て、
「漣一さん、どうしたの、今日は元気がないわね。何か会社で嫌なことがあったの？　話してごらん。少しは気が晴れるわ・・・・」
と優しく漣一を慰めた。漣一は、幼馴染の真紀子ママに慰められて、いくらか癒された気がした。
その夜、真紀子ママは、内気な性格の漣一が気になり、弁護士であるフィアンセの伊藤光夫に電話で相談した。
伊藤弁護士は、
「それは難しい問題だな・・・・。漣一君が心を開くのを待つしかないかな・・・・」
と真紀子ママの問いに答えた。

二、容疑者逮捕

それから一か月後の十月二十日（日曜日）の薄暮、突然、火災を知らせるサイレンが山間の倉真温泉郷に鳴り響いた。
火災現場は、県道八一号線から少し脇道に入った真砂地区の自動車部品工場であった。
出火の通報は、付近の住民から一一九番にあった。
遂に五つ目の火災が発生したのであった。
それもこんなに早い時間帯に・・・・。
住民は恐怖に震えあがったが、さいわいにも誤報であった。
しかし、その日の夜半に本当に火災が発生し、再びサイレンが倉真温泉郷に鳴り響いた。
火災現場は、温泉郷の中心部にあたる真砂地区の県道八一号線沿いの製材工場の物置小屋であった。
火災の現場は、製材工場の裏手の狭い山道に沿ったところで、夜間は通行人もなく、火の気もない場所で発生したのである。
火災の第一報は、出火の直後に匿名で一一九番にあったが、この匿名通報とは別に、出火当時、たまたま近くを通りかかった地元の女性から、白っぽいセダンの自動車が南の方に走り去ったという情報提供もあった。
セダンを運転していた不審者は、小太りで、外灯に浮かび上がった顔は、人気タレントの「U君」に似ていたという話しである。
警察は、この目撃証言をもとに、不審者を隠語で「U君」と呼び、ある人物の行動確認を強化した。
住民は、これら一連の火災を《倉真温泉郷の鬼火》といって恐れた。
消防団員の中山修一は、これらの目撃情報を推理しているうちに、毎日一緒に夜間巡回をしている山田漣一が、顔も、小太りの体型も、目撃証言の「U君」に似ていることに気付いた。そのうえ、彼が通勤に使用している車は、白のセダンだ。しかも、職場で使う油が沁みた安全靴を履いて、右足を引きずるように歩いている。
《そうか、「U君」とは、山田漣一のことか？》
そう思った修一は、勤務先の小笠信用金庫から帰宅すると、友人で、消防団幹部の松井健太郎に電話して、自分の考えを話した。
次の土曜日、夜間巡回終了後、修一は話したいことがあるからと言って、漣一を自宅に誘った。あらかじめ連絡しておいた健太郎も、すぐにやってきた。
修一は、固くなって正座している漣一に、
「漣一君、今度の倉真温泉郷の火災で、不審者の目撃証言があったようだが、その話を君も聞いているか？」
とおだやかに訊ねると、漣一は、
「うん・・・」
とわずかに頷いた。すかさず修一は、
「漣一君、今度の火災では、警察は『U君』なる不審者を絞り込んで、尾行しているという噂だ。君、心当たりはないか？」
と問い詰めると、漣一の顔がゆがみ、喉元がヒクッ、ヒクッと苦しげに動いた。
修一と健太郎は、
（やっぱり漣一は怪しい・・・）
と思った。すると漣一は、突然、
「ウワァ・・・」
と大声をあげて泣き伏し、
「おれは知らない。おれの家は被害者だ。自分の家に火をつける奴がいると思うか。おれの家は二度も火を付けられたんだ。おれは何もやっていない」
と、喉から絞り出すように叫んだ。
「なに、自分の家に火を付ける奴はいないって？」
修一と健太郎は、唖然としたが、そのすぐ後で、
「ウーン、そうか・・・」
と、一瞬納得したような気がした。
そのとき、いままで泣きべそをかいていた漣一は、
「おれを馬鹿にしやぁがって、おれは帰る」
そう言うと、右足を引きずるようにして帰っていった。
（漣一は絶対に黒だ）
と思っていた修一と健太郎の二人は、拍子抜けして、
「やっぱり警察に任せるしかないか」
と思った。時計の針は、夜中の十二時を廻っていた。

五つ目の火災があってから、半月経った十一月四日（月曜日、振替休日）の夜十時過ぎ、修一や健太郎の家から二百メートルほど離れた民家から、六つ目の火災が発生した。

出火場所は、倉真川に沿ったヒノキの大木のある一軒家で、その家の周りには生垣があって、道路からは屋敷の中が見えにくかった。

消防団員の中山修一が、火災現場に駆け付けると、既に山田漣一が消火作業をしていたので、一瞬驚いた。間もなく消防車も出動し、倉真川の水を汲み上げて放水した。

修一と漣一は、協力して消火に当ったが、修一が民家の裏側に廻ろうとした時、

「修一さん、そっちにはガスボンベがあるから気をつけて・・・」

と、漣一が大声で叫んだ。

「なに、ガスボンベがある？そうか・・・」

修一は、漣一の気配りに感謝した。

火災は、一時間ほどして鎮火したが、ほぼ全焼の状態であった。

この家の所有者は、鈴木澄子というちょっと艶っぽい感じのする若い後家さんで、消防団員から大いに同情された。

警察と消防は、火災現場の証拠保存のため、立ち入り禁止の処置を取った。

翌日早朝より、現場検証が始まった。

その結果、ガスボンベ置き場の周辺から、幾つかの靴跡が見つかり、その中の一つから微量な油の反応が出た。

直ちに鑑識に廻され、油は工場で使われる切削油の一種であることが判明、それと同時に、その靴跡が、《日の出製靴製》の安全靴のものであることも判明した。

警察が証拠調べをしている間に、発生した火災が、本書の冒頭で記した明誠旅館物置小屋の火災で、七つ目である。

警察は、六つ目の火災現場と、七つ目の火災現場の両方から採取した靴跡を、重要証拠として調べた。

警察の動きは速かった。その日の内に、安全靴の販売店から重要参考人を絞り込んだ。

重要参考人は、中山修一が予想していたとおり松浦鉄工所の社員で、明和火災の外務員を内職にやっている山田漣一であった。

その日の夕方、漣一は重要参考人として、掛川警察署に身柄を拘束された。が、漣一は、警察の厳しい取調べに対しても、頑として口を割らなかった。

（消防団員だ、ガスボンベの近くに行く可能性もある）

警察も攻めあぐねていた時、有力な物証が見付かり、その物証を突き付けられて漣一は遂に自白した。

五つ目の火災現場であった真砂地区の製材工場の焼け跡近くに、普段見かけない半生木の、ヒノキの小枝の燃えカスが落ちていた。それを警察は押収していたのである。

さらに、証拠品として押収した漣一所有の白いセダンのトランクにも、ヒノキの枯れ枝が残っていた。

警察は、

《燃えやすいヒノキの枯れ葉を、火付け木に使った》

と、推測した。そして、

《容疑者の山田漣一は、最初は人の迷惑を考えたのか、自分の家の借家に放火したが、次第にエスカレートして、無差別に放火を繰り返すようになった》

と判断した。

火付け木に使ったヒノキの葉は、自宅の庭に落ちていたもので、それをビニール袋に入れ、乗用車のトランクに隠し持っていた。このヒノキの枯れ葉が、決め手となったのである。

警察が取調べているうちに、六つ目の火災で全焼した建物と家財一式に、五千万円の火災保険が掛けられており、しかも、それが火災保険業務を内職としている山田漣一がらみであることも分かった。

さらに、漣一と焼失した家屋の住人鈴木澄子の二人の間には、恋愛感情があり、この地域の住民に、密会しているところを見られていることも分かった。

半年間にわたって倉真温泉郷の住民を震撼させた連続放火事件も、ようやく解決のメドがついた。

三、容疑者の仮面

《倉真温泉郷の鬼火》と怖れられた遠州粟ケ岳西麓真砂地区の連続放火事件も、平成二十五年十二月六日、三十二歳の容疑者山田漣一が逮捕されて終焉した。

また、火災が縁で知り合った、消防団の幹部で旅館青雲荘の専務松井健太郎と美人仲居の堀池冬子は、華燭の典を挙げ、松井専務の友人で、小笠信用金庫の職員中山修一も披露宴に招かれた。

倉真温泉郷のマドンナ斎藤真紀子の結婚も、そう遠いことではない。平和な倉真温泉郷に再び温かな湯煙りが立ちこめた。

一方、逮捕された山田漣一は、その夜、正面と横向きの写真を撮影され、さらに、指紋と掌紋を採られて、そのまま留置場に留置された。その後、警察で用意した遅い夕飯を済ませ、入浴して就寝した。

警察では、被疑者の自殺など万一の事態に備えて、看守二名のほかに、警察官二名を増員して監視に当った。

留置場で一夜を明かした漣一は、翌日午前六時過ぎに看守から声を掛けられて、寝具を片付け留置場内を清掃した。

洗面のあと、母親が差しいれた朝食を食べ、しばらく

休憩した後、午前八時三十分から取調べが始まった。
取調べは、掛川警察署刑事一課鈴木警部補が主任となり、二人の警察官が当った。
取調べは、まず家庭状況、経歴など簡単な事項から始まり、放火の動機、放火の方法など細部にわたって供述させたところ、その内容が警察で捜査収集した証拠とほぼ一致した。
証拠調べが終わった段階で、掛川警察署長は、刑法第一〇八条『現住建造物等放火の罪』で静岡地検掛川支部に送致した。
地検の担当は大杉勇一検事で、被疑者を掛川警察署に留置したまま身柄を受取り、直ちに取調べに掛かった。
連一は、素直に取調べに応じ、即日、裁判官の勾留質問を受けるため、静岡地方裁判所掛川支部へ連行された。
裁判所へ着いた連一は、法廷とは別の部屋で、裁判官から犯行事実の確認があり、勾留期間は、十二月七日から十六日までの十日間と決まった。
勾留期間が決まると、直ちに掛川警察署に戻され、放火事件について取調べが始まった。
連一は、七月二十八日の正源寺隣家放火事件と十一月四日の倉真川民家放火事件以外は、比較的すらすらと供述したため、調書をとる取調官をほっとさせた。
動機について連一は、
(勤務先で上司にたびたび叱られ、それが原因で、鬱憤が溜まり、その憂さを晴らすためだった。赤い焔が燃え上がると、胸がすっとした)
と供述した。
警察が、裏付け捜査を終えた七つの火災は、
一、平成二十五年六月十五日、アパート山田荘放火事件
二、平成二十五年七月二十八日、正源寺隣家放火事件
三、平成二十五年八月二十四日、農機具小屋放火事件
四、平成二十五年九月二十三日、報泉寺温泉滝沢旅館従業員寮放火事件
五、平成二十五年十月二十日、真砂製材工場放火事件
六、平成二十五年十一月四日、倉真川民家放火事件
七、平成二十五年十一月二十三日、明誠旅館物置小屋放火事件
であった。
勾留期間が半ばを過ぎた十二月十三日(金曜日)の昼頃、掛川警察署の受付に、弁護士の伊藤光夫が現れ、連一の私選弁護人になると申し出た。
伊藤は、師である高桑正行法学博士の法律事務所で弁護士活動をしている若手の法律家である。師の高桑博士は著名な刑法学者で、政治家の絡む裁判や、難事件といわれる裁判の弁護団にはほとんど名前を連ねていた。
被疑者と弁護人は、刑事訴訟法第三十九条第一項の規定により、立会人なしで面会できる接見交通権がある。
伊藤は、留置場に来て、父親の山田藤吉と、連一の幼

馴染である斎藤真紀子の依頼で、私選弁護人を引き受けたことを告げて、連一に、『弁護人選任届』に署名と指印を押させた。
連一は連日取調官から厳しく追及されたが、二つ目の正源寺隣家放火事件と六つ目の倉真川民家放火事件は頑強に否認し続けた。
検察官は、第二と第六の火災を除く五つの事件について、静岡地方裁判所掛川支部へ起訴した。
連一は起訴された後も、二つ目と六つ目の火災について取調べを受けるため、引き続き掛川警察署に留置されていた。
連一の家庭は、連一と、五十八歳の父山田藤吉、五十五歳の母梅子、弟の秀二の四人家族である。
父親の藤吉は、地元の森林組合に勤め、僅かであるが農地と山林を所有し、勤めの余暇に田畑を耕していた。
一方、母親の梅子は、次男秀二の教育費の足しにするため、パートで温泉旅館の調理場で働いていた。
弟の秀二は、県下有数の進学校、静岡県立掛川中央高等学校の三年生である。
秀二は、小学校五年生の時に、知能テストで、知能指数(IQ)一三六と、驚異的な高さを示して周囲を驚かせ、小学一年から今日まで、学業成績は常にトップクラス。親からも、学校からも大いに期待されていた。
弁護人の伊藤は、連一と警察署で面会を重ねているうちに、事件については口を閉ざすが、雑談の中で、弟秀二の大学受験の話になると、
「先生、その後、秀二の成績はどうでしょうか」
と、しきりに弟秀二のことを気にしていた。
そんなとき伊藤は、スナック『百百合』のママ斎藤真紀子がふっと洩らした、
「連一さんは、弟の秀二さんが欲しがるものは、参考書でも何でもよく買ってやるようよ。お父さんが違っても、歳が離れた弟は可愛いのね・・・」
という、何気ない話を思い出した。
(連一は、母親の愛情まで弟に奪われ、弟を恨んでいる)
というのが世間の見方であったが、伊藤の見方は少し違った。

四、容疑者の心裏

二月中旬、弁護人の伊藤は、連一に面会した。その時も連一は、
「弟の秀二が、肩身の狭い思いをしていないか」
と、しきりに秀二のことを気にしていた。伊藤弁護人は、
「大丈夫だよ。秀二君は優秀だから、きちっと勉強しているよ。大学受験も大丈夫だ」
と、連一を慰めたが、実情は少し違っていた。
入試センター試験の結果も、予想をはるかに下回って

いたし、大学受験も滑り止めの私学に合格しただけ、第一志望の大学は勿論、第二志望の大学も失敗した。そのため、秀才といわれた秀二の葛藤は激しかった。

第一回の公判が、平成二十六年四月四日と決った。

公判の五日前、三月三十日の夜半、真砂温泉郷に不審火と思われる火災が、またまた発生した。

火災現場は、市の公営施設『倉真温泉会館』の広場に隣接する仮設店舗で、掛川警察署倉真警察官駐在所の真裏にあった。

放火魔の警察への挑戦か？

それとも新たな放火魔の出現か？

再び放火の恐怖が、倉真温泉郷を襲った。

弁護人の伊藤は、公判の前に漣一に面会した。用件が済んだ後で、伊藤が駐在所裏の火災の話をすると、漣一は、

「えっ、また・・・」

といったまま目を閉じ、両手を握り締めて、ぶるぶると、震え出した。そのとき伊藤は、連一が、誰か人の名前を口にしたような気がした。

「漣一君、君、今、人の名前を言った？」

と問いただしたが、漣一は顔をこわばらせ、口をつぐんだままであった。伊藤は話題を変えて、

「漣一君、君の供述調書を読んだが、各事件について、放火した時の状況が、どうもはっきりしない。そのうえ供述内容が時々変わっている。裁判官には真実を話して本当のことを知ってもらう必要があるんだよ。だから隠していることがあったら、私に話してくれないか。それが君にとって不利になることなら別だがね」

と諭した。すると連一は、ようやく重い口を開き、

「今は何も言えません。しばらく考えさせて下さい」

と言ったきり、二度と口を開こうとしなかった。

伊藤は、これ以上聞いても進展はないと判断して、面会を打ち切った。

平成二十六年四月四日、いよいよ第一回の公判が、静岡地方裁判所掛川支部（太田正雄裁判長）で開かれた。

被告人山田漣一は、二人の看守に伴われ、紺のスーツ、白いワイシャツ、ノーネクタイ、ゴム草履を履いて出廷した。

太田裁判長は開廷を宣した後、

「被告人は前に出なさい」

とうながし、続いて冒頭陳述に入った。証言台に立った漣一は、前かがみの姿勢で裁判長をじっと見詰めていた。

裁判長は、名前、生年月日などの人定質問を行い、続いて、公判担当検察官が起訴状を朗読した。

罪状は、刑法第一〇八条現住建造物等放火罪及び第一

○九条非現住建造物等放火罪である旨を述べた。次いで裁判長は、

「法廷で発言したことはすべて証拠になるから、自分に不利なこと、言いたくないことは答えなくてもよい」

と黙秘権（供述拒否権）のあること、意見があればいつでも発言してよいことを告げ、続いて、被告人山田漣一の罪状認否に入った。

裁判長は、

「被告人は、今、検察官が読み上げた公訴事実に間違いないね」

と連一に訊ねた。傍聴席は、漣一がどのような陳述をするのかと、固唾をのんで見守っていた。

漣一は、しばらく黙っていたが、

「いずれの事件についても、今は言いたくないです。もう少し考えさせて下さい」

と意外にも大きな声で、はっきりと答えた。

弁護人の伊藤は、漣一の言葉に驚いた。

裁判長は、左右の陪席裁判官と意見を交わし、さらに、検察官と弁護人の意見を聞いたうえ、被告人の漣一に向かって、

「被告人はよく聞きなさい。弁護人は君の弁護について真剣に考えておられる。君も心を開いて素直な気持になり、小さなことでも何でも弁護人と相談しなさい」

と諭すように言い聞かせた。すると連一は、

「はい、先生とよく相談します」

と答えた。こうして第一回の公判は、三十分ほどで閉廷し、被告人の罪状認否は第二回公判に持ち越された。次回公判は、十日後と決まった。

第一回公判の三日後、弁護人の伊藤は漣一に面会し、両親や弟の気持ちを話したところ、漣一は、両手をわなわなとふるわせ、意を決したかのように、

「せ、先生！　お、おれは話します。全部話します」

と、声を絞り出すように話し出した。

「おれは、今の養父に、すごく感謝しているんです。おれの実の父親は鬼畜のような奴でした。大工でしたが、大酒呑みの博打好きで、仕事もしないで、競輪とパチンコばかりやっていました。車券を買う金がなくなると、母が日雇いで稼いだ僅かな労賃を取り上げて、車券を買っていました。それだけではありません。おれのミルク代にとっておいた百円、二百円の金まで競輪につぎ込んだのです。

その時、母が、

《漣一のミルク代だから、これは駄目です》

といって拒むと、母を殴ったり蹴ったりして、おれのミルク代まで奪っていきました。

おれは物心がつくようになってから、

《母さんをいじめないで・・・》

と泣きながら、父親の足にしがみつきました。すると

父親は、
《邪魔だ。うるさい》
と、おれを蹴飛ばしました。父親の暴力で、母とおれはいつも生傷が絶えませんでした。着る物は勿論、食べる物もなく、いつも空腹で、おれは痩せこけていました。
おれは父親の姿を見ると、また母をいじめるのか、また自分も蹴飛ばされるのかと、終始おどおどしていました。そんな毎日だったので、おれはだんだん無口で人嫌いになってしまいました。
母は、これ以上父親と一緒に生活していては、わが子の将来はないと思って離婚したのです。おれが四歳の時でした。
そして、母は、おれが六歳の時に、現在の養父と再婚したのです。幸いにして養父はとても優しい人で、おれを養子にして、実の子のように可愛がってくれました。
やがて弟が生まれました。それが秀二です。弟が生まれても、養父のおれに対する愛情は、少しも変わりませんでした。
弟はおれと違って明るい性格で、勉強はいつも一番でした。それにおれによくなついてくれました。おれも歳の離れた弟が、とても可愛かったのです。
両親は弟に期待していました。おれにとっても自慢の弟でした。だから弟には、
《一流大学に入って出世してもらいたい。そして養父と母を喜ばせてもらいたい》
と思っていました。おれはいつも弟を応援していました。大恩ある養父に恩返しするためにも、弟をなんとかしてやりたかったのです」
と漣一は、涙を流して話した。
漣一の生い立ちを知った弁護人の伊藤は、
「そうだったのか、君の気持はわかった。それでどうしようとしたの」
と話の先をうながした。すると漣一は、
「はい、実は、おれは放火していません。本当です」
と意外なことを言い出した。
「えっ、なんだって、放火してないって？」
伊藤は、唖然として、二の句が継げなかった。
漣一は、心の奥に閉じ込めていた秘密を吐露して、いくらか気持ちが楽になったのか、漣一の顔には安堵の色が浮かんでいた。
伊藤は、
「なぜそれを早く言わないんだ。それでは犯人は誰だ。どうして自分が犯人だと嘘を言ったんだ。君は真犯人を知っているな・・・」
伊藤の声は、思わずうわずった。
しかし漣一は、
「今は、それだけしか言えません。次の裁判までに心の整理をしておきます。だから今日は、これ以上聞かないで下さい」
と言って一礼し、ゆっくり立ち上がった。
面会を終わった伊藤弁護人は、その足で両親の山田藤吉夫妻に会って、ことの次第を説明した。そして、次回の公判で何があっても驚かないように念押しもした。

五、意外な真犯人

平成二十六年四月十五日（火曜日）、静岡地裁掛川支部で第二回公判が開かれた。四十席ある傍聴席は、報道陣で埋まっていた。
山田漣一の服装は、前回と同じ紺のスーツ姿であるが、今日は顔を上げてしっかりした足取りで入廷してきた。
裁判長の太田正雄は、開廷を宣した後、証言台に立った被告人の漣一に訊ねた。
「被告人は、罪状認否について申し述べて下さい。公訴事実に違いがあるならば、『違う』と遠慮なく言いなさい。ではもう一度訊ねます。公訴事実は間違いないですか」
公判廷内は、漣一の発言を一言半句も聞き漏らすまいと、シーンと静まった。
肩で大きく息をしていた漣一は、頭を上げ、身を乗り出すようにして、
「裁判長さん、おれはやっていません。おれはひとつも火付けなんかしていません」
と、小声ではあるが、はっきりした口調で申し立てた。
「おぉー・・・・」
傍聴席から、声にならないどよめきが湧き起った。すかさず裁判長は傍聴席に向かって、
「静粛に願います」
と、どよめきを制したが、その実、裁判長自身も驚いた。検察官も驚いた。裁判長は、
「被告人は罪状を認めないですね。では、どうして今まで事実と異なる供述をしたのですか」
と重ねて訊ねた。しかし漣一は、口を閉じたまま、それ以上、口を開こうとはしなかった。裁判長は、
「被告人はこの法廷で、はっきりと真実を述べなさい」
と重ねてうながしたところ、漣一は、両手で証言台を強く掴み、肩で大きく息をしていたが、遂に口を開こうとはしなかった。
たまりかねた弁護人の伊藤は、挙手をしてから、
「裁判長、私から被告人に問い質したいことがあります。ご許可願います」
と裁判長に発言の許可を求めた。裁判長は検察官席を見て、
「検察官、ご意見は・・・・」
と検察官の意見を質したところ、検察官は、
「異議ありません」
と言葉短く答えた。裁判長は、

「弁護人の発言を許可します」
と弁護人の発言をうながした。弁護人の伊藤は、裁判長席に向かって一礼してから、被告人に向かって、
「漣一君、君は前回面会した時に、《お養父さんに申し訳ないから》と言ったので、面会後にご両親といろいろお話した。お養父さんは、《漣一は一人で苦しんでいるようだ。なんとか救ってやりたい》と、君のことを大変心配しておられた。今日は君がどんなことを言っても、お養父さんは許して下さるから、心の中に思っていることを話しなさい。それがご両親のためなのだ。勇気をもって話をしなさい」
と、諭すように話しかけると、
「ハイ」
と返事して漣一は、ゆっくり身体の向きを替え、傍聴席で固唾を呑んで座っている両親に頭を下げたまま、歯を食いしばり、懸命に高ぶる感情を抑えていた。
ややあってから、小さな声で、
「お養父さん、許して下さい」
と謝った後、再び正面の裁判長席の方に向き直り、
「裁判長さん、やったのは、実は・・・・」
と小声で人の名を言った。
裁判長には、漣一の言葉がよく聞き取れなかった。傍聴席にいた両親にも、漣一の声は聞こえなかった。傍聴席は一瞬ざわついたが、すぐに静まった。裁判長は、

「被告人は、もう少し大きな声で言いなさい」
とうながした。漣一は肩を震わせ、嗚咽をこらえていたが、やがて裁判長を見上げると、しっかりした声で、
「やったのは弟の秀二です」
その瞬間、法廷を強烈な衝撃が走ってどよめいた。
《優等生の秀二が放火魔とは・・・》
母親の梅子は、驚愕のあまり、傍聴席にへたりこんでしまった。養父の藤吉も呆然となった。
「傍聴席は静かにして下さい」
と制しつつも、裁判長自身も驚いた。
「被告人にもう一度訊ねるが、君は弟の身代りになったと言うことかね。もっと詳しく話しなさい」
と、詳細な事実関係を求めると、漣一は、ややうつむき加減の姿勢で、次のような事実を語り出した。
「弟は、高校二年の夏頃から成績が下がってきて、なにか焦っているようでした。最近は、持病の蓄膿症が再発して飽きっぽくなっていたようにも見えました。そのような状況のなかで、去年の六月の中間テストの成績が悪かったのか、いらいらしていました。そして、六月十五日の深夜、《山田荘の壁際に積んである薪束に火を付けたら、赤い焔がぱぁーと燃え上がり、嫌なことを忘れた》と言いました。おれは消防団員でもあるし、これは大変なことになったと、心配でたまりませんでした。その時、直ぐお養父さんに相談しようと思いましたが、弟

に期待しているお養父さんが気の毒で、言い出せませんでした。幸い犯人が判らないので、それをいいことに、おれは黙っていました」
ここまで供述すると漣一は、いくらか気持ちが高ぶったのか、《ごくり》と喉を鳴らして一瞬口を噤んだ。が、再び供述を始め、
「その後も次々と火事があり、困ったことになったと思いましたが、言い出すきっかけがなく、悩みました。十一月になり、再び人の住んでいる家に放火するようになって、《これ以上隠す事はできない》と思いました。その間には、消防団の仲間から、おれがタレントの『U君』に似ている、と犯人呼ばれされて責められましたが、おれは黙って耐えていました。その後、倉真川沿いの民家が燃えた時、おれがガスボンベの設置場所を知っていたことと、おれの安全靴の足跡があったということで逮捕されました。ガスボンベのことは、おれが消火に行く時、弟が教えてくれました。
弟は運転免許を取ってから、時々おれの車を運転していました。安全靴はいつも通勤に使っている車に積んであるので、弟が履いたと思います。それで、おれが身代りになれば、弟も放火を止めるだろうと思い、罪をかぶることにしました。養父や母を喜ばせるためにも、弟にはいい大学に入って欲しかったのです。それで、おれが身代わりになりました」
漣一は、ここまで供述すると目を閉じ、証言台をぎゅっと掴んで口を閉ざした。ややあって漣一は、喉をごくりと鳴らし、再び供述を始め、
「先日、伊藤先生から駐在所裏の火事のことを聞き、《また弟がやったのか》と、びっくりしました。これ以上弟が犯罪を重ねたら大変なことになると思い、二日間考えました。それで今日、本当のことを話すことにしました。今まで嘘を言って済みませんでした。お養父さん、お母さん許して下さい」
漣一は、身代りになったいきさつを一気に供述した。
漣一の供述を聞いた裁判長は驚いたが、直ぐ弁護人の伊藤に向かって、
「弁護人、ご意見は・・・」
と弁護人の意見を求めた。伊藤は、
「被告人は自分の気持を表面に出さない性格です。次回の公判で詳細を述べますが、被告人の生い立ち、特に幼年期には、言葉に言い表せない悲惨なものがありました。非道な実父に比べて、現養父の温かな愛情は、被告人の心を大きく動かし、日々その大恩に感謝しております。被告人が事実と異なる供述をしたことは、その辺に深い事情があるように思われます。
被告人とよく話し合いたいので、次回公判まで少し時間をいただきたい」
と陳述した。裁判長は、

「検察官、ご意見がありますか、冒頭陳述しますか」
と、検察官に意見を求めると、
「裁判長、被告人が起訴事実を否認するという、予想外の事態となりました。弁護人が被告人の心情をよく確かめたいというならば、それまで冒頭陳述を差し控えます」
と公判担当の検察官が意見を述べ、裁判長は第二回公判の閉廷を宣した。
こうして《倉真温泉郷の鬼火》と恐れられた連続放火事件は、意外な方向に展開していくのであった。

次の公判で検察官は、公訴を取消し、即日裁判長は公訴棄却を決定した。
漣一は釈放されたが、代わって弟の秀二が逮捕され、取調べが始まった。
秀二は、七月二十八日の正源寺隣家放火事件を否認した。さらに、十一月四日の倉真川民家放火事件も否認した。
倉真温泉郷に真の平和が訪れるのは、当分先になりそうである。

六、高額保険金の行方

山田漣一は、裁判で真実を供述して放火犯の疑いは晴れたが、犯罪の泥沼から救ってやりたかった弟の秀二が、逮捕取調べを受けているので、気分が滅入っていた。
倉真川民家放火事件の被害者鈴木澄子は、明和火災から、五千万円の保険金の支払いを受けるため、漣一に相談した。そして、漣一に相談に乗ってもらっているうちに、二人は次第に親密になり、一緒に食事をする仲にまで発展した。
あの古い住宅と粗末な家財に、五千万円の付保額は高額過ぎる。火災の原因も分からないし、犯人も逮捕されていない。当然のこととして、明和火災は保険金の支払いをしなかった。そのため漣一は、明和火災の本社と何度も交渉を重ねて、ようやく五千万円の保険金が交付されることになったのである。
保険金の受領者鈴木澄子は、
「漣一さん、あなたのお蔭で保険金が下りたわ。私はね、火災があったことであなたと親しくなり、とても嬉しかったの。だから、初めは保険金が下りなくてもいいわ、と思っていたの……。でも住む家もなくなったし、生活費も困るし、なんとかしなくてはと焦っていたの。そして知り合いから、放火犯が捕まらないうちは、保険金が下りないと言われ、それで漣一さんに相談したの……。それが切っ掛けで、こういう仲になれたから、私にとっては火事さまさまね、ウフフ……」
「うん、おれもそんなことではないかと想像していたよ。だって、澄子さんはおれには高値の花だったから……。なにか事情がなければ、澄子さんがおれのところに来るはずがない……」
「いやねー、漣一さん……」
と、澄子は艶っぽいまなざしで、漣一に流し目を送って、にじり寄った。
漣一は、初めは澄子の流し目がまぶしくて、タジタジであったが、密会を重ねるうちに次第に大胆になり、《澄子さんは五千万円もの大金を手にした。それに美人で女盛りだ。しかも独身だ……》
と思い、自分の方から積極的に接近していったのである。
漣一は、右手で澄子の艶やかな手をそっと押さえ、左手を弾力のある背中に回して力を入れた。澄子もそうされるのを待っていたかのように、豊満な肢体を漣一に投げかけた。
漣一は、両手に力を入れて澄子を抱きしめた。澄子は、目を閉じ、唇のあいだからピンク色の舌を少し出し、誘いをかけた。
漣一は、澄子の舌に自分の舌を絡ませた。

住む家を焼失した鈴木澄子は、ひとまず山田漣一の父が所有するアパート山田荘のひと部屋を借りて、自宅を建築するまで住むことにした。
二人が密会するには、澄子が山田荘にいる方が便利である。二人は、頻繁に密会を重ねていった。
二人は、時間の都合が付けば、漣一の白いセダンに乗ってドライブした。時には一泊、二泊の小旅行もした。そんな時には、二人は世間の目を気にすることもなく、思いっきり楽しんだ。
ドライブなど密会の費用は、いつも澄子が出した。澄子には、五千万円の保険金がある。その保険金は、漣一が明和火災と交渉を重ねて受け取ったものである。漣一は、
「いつも澄子さんにお金を出してもらってすまないね……」
と言ってはいるものの、密会の費用を澄子が負担することを気にしていなかった。
二人の密会は、日を追って多くなり、半ば公認されたかのように大胆になっていった。

一方、逮捕された弟の秀二は、警察の厳しい取調べでも、高額の保険が掛けられていた、二番目と六番目の火災は、頑強に否認した。そして、
「六番目の倉真川沿いの民家が燃えた時、僕は屋敷に忍び込もうとして、あらかじめ下見しておいた生垣の間から、屋敷に片足を入れました。その時、建物の角から不審な人影が現れたので、急いでからだをひっこめ、様子を窺っていました。不審な人影は、すぐ見えなくなり、その直後に燃え上がりました。僕は、人に見つかっては

大変だと思って、あわてて民家から遠ざかりました」
と供述した。取調官は、
「君、その不審者は、男か、それとも女か？」
「身長は、どの位だったか？」
「太っていたか、やせ型だったか？」
と、矢継ぎ早に問い質したが、秀二は、
「ウウン・・・」
と言って、喉をヒクヒクさせ、何かを言い出しそうになったが、それっきり、口を噤んでしまった。
その後、秀二に対する取調べには、大した進展がないまま、日時が経過していった。

初夏の太陽が照り付け、蒸し暑い日曜日の午後、山田漣一と鈴木澄子は、漣一の白いセダンで県道八一号線を北上し、新東名高速の下を通って、葛折りの坂道を大井川上流の寸又峡温泉に向かって車を走らせた。
葛折りの下り道は、右側が杉の大木が繁茂する山々、左側は千尋の谷である。
澄子は、助手席の窓をいっぱいに開け、樹林の間から吹き込む心地よい風に顔をなぶらせていた。
「ねぇ漣一さん・・・、私はね、今度の火災で家も焼け、着物も、洋服もみんな焼けてしまったの・・・。でも、漣一さんと親しくなってとっても幸せよ・・・」
と言って、運転している漣一の方にからだを向けると、両手を漣一の左腕にからませた。
「危ない！放してくれ！」
漣一は、澄子の方を向いて腕を振りほどこうとした。
その時、セダンはタイヤをきしませて、大きく左車線の路側帯をはみ出した。
漣一は、慌ててハンドルを右に切ろうとしたが、車は急カーブを曲がり切れず、名ばかりのガードレールを突き破って、谷底に向かって大きくダイビングしていった。
その夜、漣一の両親は、
「漣一と澄子さんは、なかなか帰って来ないわね・・・。今日も向こうに泊まるのかしら・・・」
と言って、二人の帰りを、いつまでもいつまでも待っていたのである。
（おわり）

千家尊福伝（一）

始祖天穂日命に助けられた埼玉県知事

村上邦治

はじめに

明治二五年（一八九二）八月、外（清国との緊張情勢、ロシアの極東南下）内（選挙干渉問題、海軍拡張予算）の難局に対処するため、強力な政治主導を必要としたことから、元勲内閣と呼ばれた、伊藤内閣（第二次）が成立した。一二月、貴族院議員として頭角を現し始めた千家尊福は、この内閣により、文部省普通学務局長（高等官二等）に任命され、半年間という短期間であったが、初めて政府行政官の任に就いた。
博文が多くの反対者を説き伏せて、文部大臣に任命した森有礼は、西洋の先進的な教育と、わが国固有の精神を調和させ、学校教育の基礎を築きつつあったが、帝国憲法が発布された当日、国粋主義者により、短刀で刺され急死した。その後、榎本武揚（幕臣）、大木喬任（肥前）が勤め、当時の大臣は、河野敏鎌（土佐　内務、司法、農商務各大臣歴任）であった。
尊福にとって、初めての任官であり、それも文部省の主要職であったので、業務に精励するとともに、学び経験するところは、多かったはずである。普通学務局は小中学校を所管し、全国にその設置を急がせていた時期であった。この時の体験が、後の知事に就任した時、大いに発揮される。
文部省局長が短期間に終ったのは、わけがあった。就任前、正月四方節の式典で、合唱される唱歌の作詞の依頼を受け、完成させ提出していた。その後作曲も出来上がり、儀式用唱歌として告示される手はずになっていたが、「一月一日」の作詞者が、担当の局長であることを

避ける為、発表前に辞任したのである。しかし尊福には、次の大きな行政官の仕事が待っていた。

明治二七年一月、尊福は、貴族院議員のまま、第七代埼玉県知事に任命されたのである。

一　難治の県

新しい地方自治は、廃藩置県後、明治一一年（一八七八）に制定された、三新法（郡区町村編制法・府県会規則・地方税規則）から本格的に始まった。府県には、公選議員からなる府県会を設置し、地方税により支弁すべき経費及びその徴収方法について、議決権を付与したのである。わが国で公選議員による議会制度は、この府県会が最初であり、国会が開設される一〇年以上前より、始まっていた。（区町村会は県会から二年後開始）

大日本帝国憲法の発布を受け、明治二三年新たな府県制・郡制が制定された。これにより府県郡は、国の行政機関としてではなく、地方公共団体として、自治を行うものであった。府県会は、府県内郡市の複選制選挙（郡会と郡参事会の選挙）による名誉職議員（無給）で構成し、予算の決定、決算報告認定等を議決することとされた。府県の執行機関は知事（国の官吏）とし、府県会の議決を執行、財産を管理、府県費支弁工事を施行することなど、三新法より自治の範囲は大きく拡大された。また郡には、新たに郡会が設置され、町村会選出議員と高額納税者互選議員で構成され、執行は、府県知事により任命された郡長と名誉参事官員で構成される、郡参事会によるものとした。

当時の埼玉県政が「難治」といわれたのは、県議会では、第一党の改進党支配による中央政府への反発と、各地域の対立により、選出議員による予算獲得の強い要求から、常に知事と鋭く対立したからである。そのため、新府県・郡制への移行は、五年を経ても、郡制がまとまらず、新県制の実現にいたっていなかった。

各地域の要求が強かったのは、埼玉県のおい立ちと、その地理的なものからであった。現在の埼玉県は、武蔵国に属し、維新後、東京府、神奈川県に分割され成立した。武蔵国は、平安期東山道から東海道に移管され、相模、下総両国の陸路が整備されるに従い、しだいに開発され発展した。中世以降、鎌倉期は北条氏が、室町期は関東管領上杉氏が、それぞれ実権を握り支配した。戦国期には、小田原を本拠とする北条氏の領地であった。

徳川幕府が開かれると、武蔵国内は、江戸を除けば、支配が多岐に分かれ、複雑な地域となった。現埼玉県には、北部に武蔵三藩と呼ばれる、川越藩（幕末時松井松平家八・四万石）、忍藩（奥平松平家一〇万石）、岩槻藩（大岡家二・三万石）が置かれ、いずれも徳川の重臣を

城主に据え、北の守りとした。しかし、その他一四藩は、五万石に満たない小藩であり、乱立していた。しかも当地内には、徳川家の所領が多くあり、幕府直轄領、旗本領、徳川三卿家領、伊賀者や鉄砲玉薬組の給知領が点在した。さらに、周辺国（上野、下野、上総、下総、常陸など）諸藩の飛地領や、寺院の所有地が数多くあり、これらが入り組み、混在していた。埼玉県下には、抜きんでた藩もなく、多くの地権者に分割され、地域としてまとまりを欠いていた。

一方県内には、中山道（蕨、浦和、大宮、上尾、桶川、鴻巣、熊谷、本庄）と、日光街道（奥州街道）（草加、越谷、粕壁、杉戸、幸手、栗橋）が縦断し、その宿場町は、城下町以上に、繁栄していた。そのほか、複数の郡町村をまたがる「領」（例川口市安行領）が存在し、一層複雑にしたのである。県内には、誰もが認める中心地はなく、当初大宮におかれた県庁は、岩槻、熊谷、浦和などで、奪い合いが長年続いたのである。

また、城下町や宿場町が数多くあり、それらをつなぐ道路の整備が、経済発展のためには不可欠であった。道路整備予算をめぐる各地域間の獲得争いは、毎議会で生じていたのである。

県内北部及び秩父地方は山岳地帯であるが、その他は、関東平野の中心をなす平地で、豊かな農地である。その平野を造った河川が多くあるのが特徴で、県内を流れる河川の面積割合は日本最大である。この多くの河川では、毎年のように大雨による洪水が発生し、災害が繰り返えされた。第一期県会では、利根川、荒川、高麗川、入間川など一六の川を、土木事業を起こし、早期に改修を要すべきものと定めたが、その費用配分でも、地域間で対立することが多かった。道路や橋梁の整備、河川の改修・復旧など、地方税を財源とする県予算では、とても賄いきれず、拮抗する地域間同士の予算の奪い合いが、常態化したのである。

秩父地方山岳地帯は「埼玉の北海道」よばれ、裕福な平野地との貧富の差は大きく、明治一七年には、約一万人の農民が蜂起した、秩父事件が発生している。この時期、各地で急進的な自由党員が、民衆を巻き込んだ民権運動を引き起こしているが、この事件は、困窮した農家や養蚕家が、高利貸しを襲ったのが発端であり、自由党の影響は薄く、秩父地方の貧困さを如実に語る事件であった。この紛争は、埼玉県警では抑えきれず、政府は、東京憲兵隊と高崎鎮台の軍隊派遣を、決めざるをえなかった。軍隊の出動により、発生から三週間後に、ようやく鎮圧されたのであった。

地域選出の議員による埼玉県議会は、県予算の分捕り争いの場となっていた。

二　険悪な県議会

当県は、一四年の政変に敗れ下野した大隈重信が、結成した立憲改進党の牙城であった。というのも、改進党結党と同時に、大隈の幕下で、当時珍しい慶応義塾卒の、経済財政に詳しい加藤政之助（一五年から二三年まで県会議長、後貴族院議員）が、県議四〇名のうち、三〇名を結集し、埼玉支部を結党したことからである。加藤は記者や新聞社主として、幅広い社会経験、新しい財政知識、地方門閥出身としての名望など、兼ね備えた人物であった。資金的にも、浦和宿の有力宿経営者の支援を得たこともあり、盤石な地盤を形成していたのである。

一方自由党は、一五年四月板垣が、岐阜で遭難したことから、改進党より二年遅れ結成された。しかし改進党の圧倒的勢力に、対抗することができず、全国的には、自由党が改進党を凌駕していたが、当県では、劣勢が続いたのである。改進党が南部を地盤としたのに対し、自由党は北部各郡に支持者が多く、南北対立の様相もみられた。

当時の知事は、政府内務省の官僚であり、内務大臣の指揮監督に属した。各省の主務に関するものは、各省大臣の指揮監督を承け、法律・命令を執行した。県内においては、行政及び警察を、統率するものであった。

議会と知事との関係が特に険悪になったのは、明治二四年四月内務省書記官から就任した、第五代久保田貫一（兵庫県士族）からであった。久保田は、藩閥に属した人物ではなかったが、性格は律儀一方、仕事については厳格そのもので、役所以外の場所では一切話さない、まさに中央官僚意識を強く持った人物とみられ、県民や議員にあまりよろこばれなかった。議会では、議員から知事と親密な議員の職権乱用や収賄問題が糾弾され、また県当局と工事会社との堤防工事にかかわる入札談合などについて、種々追及されて、混乱が続いた。さらに、知事は、師範学校の管理が悪いとして、校長を更迭した。ところが、前校長を慕い、逆に新校長の官僚ぶりに、生徒が前校長復帰を、連署して県に陳情する騒ぎとなった。生徒からの申し入れを、知事は烈火のごとく憤り、首謀者とみられた一一〇名を、無期停学処分にする、強圧な処分を行った。生徒や教師はこれを不満として、同盟の休校を行い、県と対立することが起きた。

久保田知事のこうした強権強引な県政に、改進党を主流とする県議会は、県が提案する議案の採決には、常に反対にまわり、知事側と対立したのである。

こうしたなか、松方正義（薩摩）首相により、明治二五年二月、第二回衆議院総選挙が実施された。この選挙は、第一、二回帝国議会において、山縣、松方両内閣とも、民党（自由党、改進党）の厳しい抵抗により、国会運営に苦慮し、この行き詰まりを打開するため、解散したものであった。政府を支持する吏党の勝利を、何としても勝ち取りたい内務大臣品川弥二郎（長州）は、いかなる手段を使っても、民党に勝利するよう、徹底した選挙干渉を、府県知事に指示したのである。この選挙では、民党支持者と警察との衝突が全国で発生し、死者二五名、負傷者四〇〇名と、大規模な事件となった。なかでも、自由党総理板垣の郷里高知県と、改進党総理大隈の郷里佐賀県では、知事がいずれも薩摩出身ということもあり、松方首相を援護すべく、熾烈な干渉を行い、高知県で死者一〇名負傷者七〇名、佐賀県で死者八名負傷者九〇名と、この二県で、全国犠牲者の過半を占めたのである。

当県の久保田知事は、品川内務大臣秘書官から、知事に起用された人物だけに、品川の指示に、積極的に応え、吏党勝利を成し遂げるため、あらゆる手段を用いた。

まず、政府擁護を標榜する国民協会（総裁西郷従道）に所属する北埼玉同志会を、新たに結成した。そして定員八名（五選挙区）の選挙区に、同志会から四名を出馬させた。そして全員当選させ、過半数を占めることを期したのである。民党二党の改進党、自由党は各々五名を擁立、合計一五名が、八議席を争う熾烈な選挙戦となった。

品川内務大臣の意を受けたとはいえ、久保田知事の干渉は立憲国家にあるまじきもので、辛辣を極めた。取り締まる側の県下警察署は、有権者を戸口調査し、いずれの候補者に投票するかの意向を問い正し、民党候補者を選ぶ者には、理由なく警察署に連行した。こうした不法監禁を非難した県の幹部は、即座に解職された。候補者に対しては、所轄裁判所検事局の名により、召喚状を出し、選挙活動を妨害した。民党候補者の選挙参謀には、一日中尾行を続け、その活動をさまたげた。また各郡長には、大地主や事業家に利害を説かせ、同志会候補者への投票を勧奨させた。さらに、町村巡視と称し、税の滞納状況や整理を名目に、民党へ投票する者に対しては、ただちに、未納者には強制執行を行った。

こうした尋常でない手段による選挙干渉は、かえって選挙民の反感となり、民党二党へ傾くことになった。選挙結果は、改進党四名、自由党三名が当選し、大掛かりな選挙干渉をしてまで、全員の当選を目論んだ支援候補者は、僅か一名の当選に終ってしまった。

総選挙後、県議会では民党二党が提携し、選挙干渉や失政が続く県知事、警部長を弾劾し、県会議員四〇名全員の連署調印をまとめ、松方首相と品川大臣に対し、二人の転任願書の提出を行うまでに発展した。知事提案に対してはことごとく反対し、予算案の大幅修正や、中学校建設案を全員一致で否決するなど、県行政は不能に陥

った。

さらに県議会では、知事、警部長二人の転任更迭を願う、各郡別による県民の記名捺印をした陳情書を、内務大臣に提出した。その内容は、選挙干渉、不正入札黙認、不当な土木工事入札、不要な中学校創設案、師範学校騒動の生徒処罰、非牧民で不親切などを挙げ、県民の強い不満を訴えたのである。それでも知事転任が行われないことから、県議会は、知事に対する不信任権がないにもかかわらず、二人の不信任案を決議した。知事はこの不信任決議は、法律違反として認めず、逆に県議会を解散して対抗した。しかし、すでに品川内務大臣は、選挙干渉の責任を取らされて辞任しており、二人はついに、その職を解かれたのである。選挙干渉問題により、松方内閣は、総辞職を余儀なくされた。

次の伊藤首相は、松方内閣が行った県知事選挙干渉問題に対し、国会で、

「上官の命令なりといえども、能くその理否曲直を考え、不法の命令は断じて奉行を拒み命令を待つべし。徒らに上命に盲随するは知事の職任にあらず」

と、知事に対し、厳しく戒めたのである。

久保田の後任は、東京府の一部長であった銀林綱男（東京府平民）を、第六代知事に抜擢した。前任の横柄な官僚型から、初の平民出身の誠実かつ親切で、人柄の良い人物を当てることにより、失墜した知事の権威回復と、県議会との融和を促進させたい、との狙いであった。しかし、久保田知事が更迭される直前、議会の不信任案に対抗して行った県議会選挙結果は、改進党二二名、自由党一三名、吏党二名となり、圧倒的な民党勢力に、変化は起きなかった。この議会の政党構成では、人当たりが良くても、さしたる実績もない銀林知事にとって、この難局を解決するには、何分荷が重すぎたのである。

県知事は、内閣が任命する国の官吏で、地方統治の要である。首都に隣接する埼玉県の混乱を、「難治の県」としてこれ以上放置することは許されず、伊藤首相と井上馨内務大臣は、政治家・行政官としては日浅いものの、早くも貴族院男爵議員達を束ねたその統率力と、人望のある千家尊福を、第七代埼玉県知事に任命し、異常事態の解消をはかろうとしたのである。

三　知事就任

明治二七年（一八九四）一月、尊福は埼玉県知事（高等官二等）の任命を受け着任した。当県知事としては、初の有爵かつ貴族院議員であり、しかも伊藤首相の知遇を受けていることも、多くの人に知れ渡っており、前任銀林知事が平民出身であったことと比較して、政府の力の入れ方に、議員、県民とも驚いた。

着任前より地元の評判を得た尊福は、二日目に恒例となっていた、県下の郡長、警察署長などを県庁に集めた。そこで、知事として県政に臨む方針を述べた。その中で、一〇日後に行われる、県会議員の半数改選選挙に対して、特別に注意を与えた。新知事の最大任務が、政党との混乱を鎮め、県政の渋滞を解消することであり、この選挙について、あらゆる選挙妨害を、厳禁したのである。

訓示後は、これまでなかった、知事と出席者の懇談が行われた。尊福は、郡長に多くの質問をし、郡の抱えている問題の把握に努め、合わせ郡長の技量をおしはかり、今後の県政に役立てたい、との思慮からであった。また華族でありながら、年少より万苦をなめつくし、出雲においては、郡長の役目を経験していることも話し、民間の世情によく通じている事を、皆に悟らせたのである。出席者は、新知事とのやり取りから、早くも、尊福の才徳深浅を、知ることとなった。

第五回帝国議会（通常会）の会期は、明治二六年一一月から解散により、一二月末までであった。第三回総選挙を経て、第六回特別議会が、五月中旬から六月初めまで開催された。引き続き、政府の条約改正における、外国人内地雑居容認が政治問題となった。元来政府与党であった国民協会は、こぞってこの政府案を批判し、改進党などとともに民党六派を結成し、政府の改正案に統一して反対した。これに対し、伊藤首相はまたもや、衆議院の解散を行い、条約反対派に対抗した。

こうした国会の慌ただしい動向をみながら、貴族院議員の尊福は、知事の仕事に専念した。県内事情の把握と、地域間の対立を和らげるために、着任二か月後の四月より、三か月間にわたる県内巡視を行った。特に郡長や町村長から、郡や町村の事務、議員選挙、道路や河川の土木工事、農作物の出来具合、地場産業、教育、衛生、徴兵、徴税などの、状況について報告を受け、情勢把握に努めたのである。

県庁所在の浦和を拠点として、一巡視を一週間から一〇日程度に分けて、帰庁しては溜まった業務を片付け、また次の日から出発する強行日程であった。四月は、児玉郡（本庄）、秩父郡（秩父）、高麗郡（越生）、比企郡（小川、松山）、入間郡（川越、豊岡）を一〇日間で回った。五月には、大里郡（熊谷）、榛沢郡（寄居、深谷）、北埼玉郡（忍、羽生、加須、栗橋）を、一〇日間で実施。一旦帰庁して、北葛飾郡（杉戸、吉川）、新座郡（志木）、南埼玉郡（越谷、岩槻、粕壁、菖浦）、北足立郡（桶川、川口、草加）を一一日間かけて視察した。六月には中葛飾郡（庄和）、北葛飾郡（杉戸、吉川）へ三日間、さらに南埼玉郡（粕壁、岩槻）に三日間、と精力的に県内を回った。これにより、県内をほぼ網羅した巡視となり、知事としての意気込みを、県幹部や郡町村長、それに県

民に示したのである。かってないおおがかりな巡視は、体力的にも過酷なものであったことであろう。しかし、大教正西部管長の教導活動、出雲大社教会や神道大社教の布教巡幸など、これまで全国広範囲に駆け回った尊福にとっては、大変といえるものではなかったであろう。政府施策の実施という使命を受けた、県最高責任者としての視察であったのだから、県内各地では、最大限の扱いを受けたのである。

歴代知事も、着任後同様な県内巡視を行ったが、短期間で顔見せの、形式的なものであった。ところが尊福は、これまでには無い、県内くまなくまわる徹底したものであった。知事として、各地の現状調査は無論の事、郡長・町村長の指導性や人間性についても、直接把握しようとしたのである。また県民に、新知事千家尊福自身をみせることにより、埼玉県の抱えていた、根強く残る地域間の対立を、少しでも解消させ、県としての一体化を進めたいとの願いからであった。

四　県議会の情勢変化

千家知事は着任早々から、男爵という身分でありながら、県役人や郡、町村長との会話に努め、また、県内をくまなく巡察し、県民に積極的に語りかけるなど、これまでの知事とちがった「温厚な君士人」として、敬愛されるに時間はかからなかった。尊福の最大の任務であった、「難治の県」をまとめることについては、成果をみせ始めていた。そしたなか、尊福にとって、追い風が吹いて来る。

その一つは、民党二党のうち、伊藤内閣を最も批判した改進党が牛耳る県議会は、着任一〇日後の半数改選選挙で、自由党二四名、改進党一七名、国民協会三名（欠員一名）となり、自由党は初めて、第一党の地位を占めることになったのである。当時の中央政界では、伊藤内閣に対し、板垣退助率いる自由党は、与党よりの姿勢をみせていた。尊福と伊藤首相、井上内相の親密な関係から、県自由党は、知事批判を控え、知事と友党的関係に変化したのである。かくして、野党は第二党に後退した改進党のみになった。これまで知事に対し、最大の批判党であった改進党の凋落は、県政の円滑な運営に、大きく前進することとなった。

そしてさらに大きな出来事は、知事赴任の半年後、日清戦争が勃発したことである。維新後、国内の統制や産業発展に注力してきた政府にとって、外国との戦争は、最初であり、しかも東洋一の軍事力をもつ、清国が相手であった。当時清国は、アヘン戦争によりイギリスに香港を割譲、インドシナをめぐるフランスとの戦争に敗北、内政的には一五年間にわたる太平天国の乱による経済の

疲弊など、国力の衰退が目立っていたが、それでも日本にとっては、初めての強国との戦争に間違いなく、全国民は緊張し、この難局に一丸となったのである。

埼玉県においても、団結し国難に当たることになった。まさに非常の時であり、県議会で県当局を非難することや、予算案などに長い議論は慎むべき、との風潮が、一気に盛り上がったのである。一〇月の帝国議会第七議会は、戦地に近い広島において開催され、大本営も広島に移された。県議会は、県民を代表して、天皇に奉伺文を奉呈し、参謀総長（有栖川宮）に拝謁、陸海軍大臣（西郷従道兼務）に面談、傷病兵慰問など、戦時体制に協力したのである。

こうした情勢を背景に、一二月中旬からの通常県議会では、次年度予算案は、日清戦争中で物価は高騰し、新しい事業は折り込めなかったにもかかわらず、大きな波乱もなく、予算案は提案通り可決された。

五　産業発展の支援

尊福は知事就任時に、二つの大きな課題を掲げた。一つは、緊切な課題である県内各地の融和および政党との良好な関係など、埼玉県を一つの県として、まとめあげることであった。

当初「難治の県」であった埼玉県政を、尊福の精力的な県内巡視と、改進党の凋落および自由党の支援により、県議会では、次第に知事の提案は、受け入れられるようになり、対立一辺倒から、穏当な議論の場に変わってきた。それを決定的にしたのは、何と言っても、日清戦争の勃発であったことに間違いはない。戦時という国を挙げての危機意識が、むやみな議論や反対を抑え込んだのである。

もう一つの目標は、地元の産業振興、すなわち実業を発達させることである。特に、日清戦争後は、全国各地で、近代産業が急速に発展したが、当時県の主要産業は、農業と林業であった。そのために、産業における技術指導と、同業者の組織化に注力したのである。二八年度予算のうち、県提案の農事改良費は、議会で削除された。肥沃な土地に農業を展開していた豪農が、議員の大半を占めていたが、

「農事改良の如きものは、干渉してもこれを進めることは、利益なることであったが、今日では、却って発達に害を及ぼす」

として、反対したのである。

尊福は、議会の予算削除に同意せず、再議を求めた。

「県民の多数は、農を以て産業いたしており、農事の改良は焦眉の急である」

と述べ、土地の整理、土壌の改良、農具耕作の促進、肥

料の研究、気象の応用などについては、学識ある専門家を招き、各地を巡回し、指導を受けることが肝要である、と熱弁をふるい、県会に復活承認させた。その一環として、「害虫駆除予防法規則」を発布して、害虫の種類、駆除法を示した。また農産業に不可欠な気象情報の重要性から、熊谷に測候所を開設した。これは明治二〇年、各県に設置することが求められたが、長年県議会の反対により、実現できずにいたものであった。尊福はさらに、県内一〇か所に、気象観測所を設置し、一層の充実をはかった。

また農事改良上の研究普及は、農会を組織すべきである、との議会の意見を積極的に採用して、二八年「農会設置準則」を発布し、町村・郡・県の三段階にわたって、系統的な設立を勧奨した。二九年三月は、七村であったが、三〇年三月では、一〇四町村一郡に広まった。

当県の特産品は、蚕業・織物業があり、これらに強い関心を示し、二八年に開催された、内国博覧会にあたっては、とくに告諭をだし、

「貴重な名誉（受賞）を博すれば、本県の面目、国家の利益となる」

として、当業者に一層の努力を求めた。この博覧会では、埼玉県から約三〇〇の繭が出品され、一一〇余りが受賞した。そして、日清戦争後、絹・綿織物製品の、海外販路拡大為、同業者による組合を組織させた。

そのほか製茶業育成の為、県の施設として、製茶伝習所や、藍のさらなる普及のため、製藍伝習所を設け、品質と生産の向上を支援した。知事はこうした施策が、実を結ぶことに意欲を示し、幾度も品評会や共進会の開催を促し、その支援・補助をしたのである

六　中学校の新設

尊福の治績として、教育の振興が挙げられる。当時中学校を設置していない県は、埼玉県だけであり、教育の後進県とされていた。政府は明治二四年一二月、各府県に尋常中学校一校を、設置することにした。文部省の指示により、当時の久保田知事は、翌年二月と、七月の臨時県会、同一一月の通常県会と三度にわたり、県立中学校一校設置案を提出したものの、県会は、

「水害により復旧工事を優先すべきで、不急の事業である中学校は、後回しにすべきである」

とか、

「東京に近いので、中等教育を受けたい者は、東京の学校に入れば差支えない」

などと理由をつけて、予算案を否決し続けたのである。ちょうど、久保田知事の行った選挙干渉や、師範学校騒動の強圧的処罰などにより、知事と議会が、もっとも険悪な関係にあった時期であった。県議会側は、「久保田

憎し」から、難ぐせをつけ、県の提案を否決し続けたのである。次の銀林知事は、任期が短く、県議会に提案さえされなかった。

文部省普通学務局長を歴任していた尊福にとっては、教育後進県というこの不名誉な汚名を、即急に取り去る必要があった。議会提案の前に、当時第一党であった、埼玉自由党の議長宅を訪問し、

「この案だけは、是非通過させて欲しい」

と、頼み込んだ。

もともと県議会は、尋常中学校の設置には賛成であったが、すべてに官僚的で、強引な久保田知事に対する反感から、反対していたので、議会では、

「独り埼玉県のみ、全国の中で中学校が無いのは、体面上からも不都合である」

「中学校を今日まで埼玉に置かないのは、貧乏のためではない。一時の事情に制せられた為」

など、千家知事の提案に、賛意を示すとともに、知事提案の一校案より、さらに積極的な案が、議会で提案された。議員からは、浦和もしくは大宮と熊谷の二校案、さらに川越を加えた三校案、川越にかえて東部地区の粕壁（現春日部）にすべし、との意見も提出され、議論は白熱した。

こうして、長年埼玉県の懸案事項であった中学校設立問題は、一気に知事案よりさらに前向きな、二ないし三校増設案に発展したのである。地域争奪戦の様相があったが、結局浦和と熊谷の二校設置に決定した。しかしこの案に不服な議員から、粕壁と川越に中学二分校設置を、二九年から二か年の継続事業とする、建議が提出され、結局二分校案も採択された。尊福の熱心な教育行政の推進に、議会も政党を超えて、積極案でこれに応えたのである。これにより、教育後進県の汚名は、一気に取り払われた。

七　郡制の実施

新政府による地方自治制度は、明治一一年（一八七八）の三新法から、本格的に開始されたが、明治二一年憲法制定にあわせ、まず市制・町村制が制定された。この制度は、町村にも法人格を与え、公共事務・委任事務を処理させ、条例・規則の制定を認めた。執行機関は町村にあっては、町村長とし、公民選挙による名誉議員で構成された町村会で、選挙により選ばれた。町村会は、町村に関する一切の事件及び委任案件を、議決することができたのである。この市制・町村制には、特に問題はなく、直ちに施行された。

明治二三年、府県知事は従来同様中央政府の任命であったが、地方公共団体として定め、白治権の範囲拡大を

認めた、府県制・郡制が公布された。これにより、府県・郡・市町村の三段階による地方自治制度は、完結するはずであった。

ところが公布されたものの、この府県制の開始には、公布後一〇年経過しても、全府県で実施にいたらず、長期間遅れたのである。というのも、その実施には、まず統合整理された郡制の施行が必要であった。政府は、郡制の遅れにより、新しい府県制が開始できないことを、大きな問題にし、早期実施に躍起となった。障害となっていた郡制の早期実施を、府県知事に、強く指示したのである。しかし、一部の府県では、郡の統合整理が進まず、新府県制・郡制実施の県と、明治一一年新三法のままの県、とに分かれるという事態が続いたのである。

埼玉県は、従来の一八郡を、半分の九郡に統合する必要があった。しかし各郡町村の権利意識は強く、しかも議会では、長らく政府批判の改進党が圧倒しており、しかも公布後知事の在籍は、三代平均一年半の短期間であった。県議会と対立した久保田や、凡庸な銀林では、郡統合という大仕事は、とても処理することはできなかった。

郡統合の最大の難関は、北部の榛沢郡が、大里郡の合併に抵抗し続け、独自に男衾・幡羅両郡、児玉郡の一部と、独立の郡をつくることを計画したからであった。県の統合案である大里郡との合併では、地理的に不便を強いられ、しかも中心部は、大里に移る事を懸念したからであった。榛沢郡は改進党が強く、知事と対立関係にあることから、早期解決は困難と思われた。

この時またも尊福にとって、幸運な事態が中央政府でおきた。当初伊藤内閣に批判的であった自由党は、日清戦争後、伊藤内閣に協調の姿勢をみせていたが、二九年四月には板垣自身が、内務大臣で入閣したことにより、与党になった。これにより、民党二党の関係は、これまでと、大きく変化したのである。埼玉県においても、従来のように、野党としての一致した反対運動は、行うことができなくなった。郡の合併に熱心な尊福は、自由党の協力が見込まれることになり、議会となお一層の、融和的関係を築くことに注力した。

尊福は、反対議員を粘り強く説得し、ようやく二九年三月、北足立（新座合併）、入間（高麗）、比企（横見）、秩父、児玉（賀美、那珂）、大里（幡羅、榛澤、男衾）、北埼玉、南埼玉、北葛飾（中葛飾）の九群に、統合の賛同が得られ成立した。かくして、新郡制は、同年八月から施行された。それに必要な郡議会は、九月町村会選出選挙と高額納税者互選選挙が行われ、一〇月各郡で、第一回通常郡議会が発足した。これにより、府県制に基づく県議会は、翌年から実施となり、長年の課題であった府県制・郡制の施行は、公布後七年を要して、ようやく

実現したのである。

八　県民の支持

尊福は、これまでの上から見下した中央官僚的知事と異なり、県のために良い事と思われることは、私信なくやりとげる、「県民のための知事」という新しい知事像を創りあげた。着任早々の県内巡視により、県民との対話が行われ、尊福の人格を広めることとなった。

日清戦争開戦の折は、告諭をだし、

「夫れ国に常制あり、民に営業あり。我が県民においては営業に励み、国富を増殖に、以て聖慮を安んじ奉る事を勉めるべし。以てここに篤く諭示す」

と、自分の考えを県民に訴えた。こうした告諭は、教育に関するもの四回、衛生に関するもの一一回、産業に関するもの六回など、尊福の存念を明らかにするとともに、県民の心構えについて、熱意を込めて説いたのである。

尊福は県内発行の雑誌に、得意の和歌や漢詩を、積極的に寄稿した。多くの人の作品に混じり掲載されたが、これも県民に親近感を与えた。

日清戦争後、戦死した出征軍人の慰霊祭、葬儀・葬祭、招魂祭には、できるだけ出席し、残された家族や参列者を感激させた。自ら出られないときには、県の要人が尊福の言葉を述べた。復員した兵士の歓迎会にも、多く出席し、慰労するとともに、皆で帰還を喜び合った。そのほか、小・中学校の開校式、農・工業団体の表彰式などにも、できるだけ参列し、祝辞を述べた。

開校式に臨んで、

「子を思ふ　親の心にくらぶれば　我が喜ぶは　もののかすかは」

と詠み、これを寄稿した。また小・中学校から、校歌の作詞を依頼され、快く依頼に応じた。現在でも数校残っている。

尊福が作詞した、「一月一日」は、明治二六年から、正式な儀式用唱歌として定められた。正月学校で式典が行われ、全員でこの歌を唱和した。わが県の知事が作詞したこの歌を、小・中学校生徒や県民は、皆、誇らしげに歌ったことであろう。

こうした尊福の、内務省官僚らしくない、人間味あふれた行動や発言は、県民に一層の親密感をもたらし、千家知事に対する人気は、次第に高まった。長年難題として、手が付けられなった課題を解決する上に、大きな支援となったのである。

九　武蔵国一の宮氷川神社

大宮には、地名の由来となった氷川神社がある。旧中

山道から一の鳥居に始まり、南北二キロにわたる直線の参道を行くと、三の鳥居があり、ここが神社の入り口である。真っ赤な神橋をわたると、杜に包まれた氷川神社の拝殿と本殿がある。武蔵国では、このほか大宮氷川神社から分祀した社が、過っては約三〇〇社あり、圧倒的な存在を示していた。（昭和二四年調査　東京都五九社、埼玉県一六二社、その他七社）

氷川神社の発祥については、神社の説明では、出雲国に鎮座していた杵築大社（出雲大社）を勧請し、中国山地から流れる、斐伊川（ひいかわ）からつけられたとする説と、この地の水の豊かな土地には水の神がおり、水を表すヒとカワをつけた、との説を挙げている。祭神は、スサノウ尊、大国主命、櫛名田姫（くしなだひめ）の三神である。社家の角井家（明治以降西角井家、東角井家）は、出雲国造家と同じ天穂日命を祖先としていた。『古事記』『日本書紀』いずれにも、天穂日命は「出雲国造、武蔵国造の祖である」と記載されており、律令期以前から大和朝廷に先立ち、出雲族が多くこの地に移住し、支配していたことを物語っている。奈良期には、武蔵国一の宮として信仰を集め、平安期に編纂された『延喜式』には、名神大社として記載があり、当地を代表する神社であった。

しかし、政治の中心が南の国府（現東京都府中市）に移るに伴い、武蔵国一の宮は、小野神社（現多摩市）とされ、過っての面影は次第に薄くなっていった。中世からの神仏習合期には、氷川大明神とよばれ、仏教の色を濃くし、祭神は一時忘れ去れた。それでも、江戸期には門前町として知られており、周辺は中山道の宿場町として栄えていた。しかし、祭神の大明神は如何なる神なのか、また出雲の神々との関連についても、知る人は少なくなった。大宮氷川神社は次第に寂れ、武蔵国に散在した多くの分祀された氷川神社は、宮司も常駐しておらず、寺院が管理するまでになっていた。

ところが、明治維新となり、事態は一変する。維新政府は、まず天皇を中心とする「祭政一致」を掲げて、「王政復古」の大号令、「五箇条の御誓文」、政体書による神祇官の復活、国家祭祀による明治天皇即位式挙行と、矢継ぎ早に、神道に基づく政府の確立を急いだ。慶応四年（一八六八）七月江戸を東京に改称、九月明治と改元、その月天皇は京都御所を立ち、東海道を東上し、東京に行幸、江戸城に入った。

その四日後、突如大宮の氷川神社に、「武蔵国総鎮守」とする勅書が出された。祭神は一社一神の原則により、スサノウ尊だけとなり、大国主命と櫛名田姫は除外された。その一〇日後、天皇自ら大宮を訪れ、親祭を行ったのである。これ以後、勅祭社（天皇自ら祭る神社）となった。明治三年にも行幸があり、天皇は再び親祭を行った。

天皇自ら祭政一致を、民衆に示したこの行幸は、本来は、東北や蝦夷の平定のために創建された、東国随一かつ常陸国一の宮である、鹿島神宮が最もふさわしい神社であった。祭神は、大国主命から国譲りの最終使者として出雲に遣わされた、天神建御雷神（たけみかづちのかみ）であり、武神として名高く、格式の高さを誇っていた。しかしまだこの時分は、会津藩降伏の直後であり、榎本武揚らがたてこもる函館五稜郭では、戦闘が続いていた。鹿島まで数日かかり、東京よりさらに東への行幸は、万一の恐れがあった。こうした事情から、東京に近くて、古くから名神大社とされていた、大宮氷川神社が選ばれたのであろう。しかし天皇が親祭を挙行するには、祭神に大国主命が祀られていては、いかにも都合が悪く、スサノウ尊一神に、急遽変更したものと思われる。

しかし急いだこととはいえ、天照大神を祖先とする天皇が、スサノウ尊を祀る氷川神社に赴き、頭を下げることは、その後の国家神道からみれば、決して許されないことであった。スサノウ尊を祀る氷川神社に、皇居移転を予定する首都東京がある武蔵国の総鎮守などと、政府がお墨付けを与えることは、ありえない事であった。しかし、維新成立直後で、天照大神を神道の中心に置く国家神道が、まさに確立する直前の、混乱した時期にあったことから、生じたことであった。一〇年後の天照大神（伊勢神宮派）と大国主命（出雲大社派）による激しく長く続いた祭神論争では、とても考えられないことが起きたのである。まさに維新成立直後の、一大椿事であった。

その証拠に、明治二年廃藩置県に先立ち、天皇が行幸した氷川神社のある大宮は、武蔵国では急に重きを置かれ、新しく大宮県が新設された。そして一躍中心地となり、県庁もおかれたのである。ところが、同年九月に急遽、県庁は大宮宿から、より小さな浦和宿に移された。大宮県は廃止となり、浦和県となった。版籍奉還から廃藩置県の間に、こうした改変は一つもない。この慌ただしい変更は、スサノウ尊を祭神とする氷川神社を重視したままで、国家神道を進めていくことは、これから大きな差しさわりになる事に、気づいたことからであった。

しかし、ともあれ天皇の行幸は、氷川神社にとって、まさに千載一遇の幸運をもたらした。天皇親祭社となり、四年の社格決定に際しては、最高位の官幣大社に位置付けられた。天皇の行幸は、長く忘れられてきた、出雲大社の分祀であることを、広く県民に知らせることになった。天皇が天照大神の第一子天忍穂耳命（その御子が瓊瓊杵尊）を祖先とするのに対し、第二子天穂日命の末裔が、出雲国造（千家家及び北嶋家）と武蔵国造（東及び西角井家）であることを、思い出させたのである。

この度新知事として埼玉県に参ったのは、大宮氷川神社の総本社に当たる、出雲大社の大宮司で、大国主命の神代から綿々と祀り続けた、第八十代出雲国造の千家尊福である。大宮氷川神社の氏子のみならず、県内町村にくまなく祀られていた、分祀三百社の氷川神社の氏子にとっては、天皇が「現人神」と思われたと同様、尊福を「生き神様」と、崇めたのも無理からぬことであった。

しかも、これまでの県庁の奥にいる知事ではなく、巡視や式典、さらに各団体の会合、祭り、葬儀など、積極的に県民の前に姿を現し、語りかけたのである。知事告諭も、これまでの知事では考えられない程、自分の信ずるところを、率直に述べ、信念を教示してくれた。威張り散らし、上から見下ろしたこれまでの知事ではなく、県民の言うことや苦情・不満に、よく耳を傾けてくれた。県民を人と見てくれ、聞いてくれる天穂日命の末裔に、分祀社を含め、県民の大半を占める氷川神社氏子にとっては、尊福が県知事として、埼玉にいてくれるだけで、僥倖であった。

だからと言って、知事尊福が、氷川神社隆盛のために、特別にしたことはあまりなかった。年の初めの五穀豊穣を祈る祈年祭（としごいのまつり）や、一一月その年の作物の出来に感謝する新嘗祭（にいなめさい）に参向するぐらいであった。明治一〇年年代の祭神論争において、伊勢神宮派の論客であった平山省斎（幕臣総外国奉行後教派神道一三派の一つ神道大成教創設者）が、宮司を務めていたことから、距離を置いたものと思われる。

たった一度だけ、維新時にスサノウ尊一神にされたことに対し、再び櫛名田姫と大国主命の二神を復活させ、合祀することに、知事として尽力を依頼された時、尊福は自ら内務省に上申した。しかし三度にわたり無視されたが、尊福の真摯で粘り強い要請により、半年経って二神の合祀が認められ、維新時と同じ三神に戻った。神社の社号を、さらに上位をあらわす神宮に、改称するよう上申したが、これは認められなかった。

県民が知事に、親近感を持ち、敬愛尊敬しつつ、難題解決を、大きく支援をしたのは、尊福と氷川神社との関係が、存在していたのである。

一〇　埼玉県知事辞任

埼玉県知事在任中、四回ほど国会は開院されており、すでに、貴族院議員会派の幹部として一派を率いていた尊福は、どうしても国会開院中は、帝国議会の出席を、優先せざるを得なかった。しかし、歴代知事が先送りをしていた難題や、政党間の抗争、地域間の予算争奪、自然災害の復旧（大雨による河川の氾濫、茶や桑の霜害）など、知事としての業務は山積していた。どちらも手を

抜くことは許されず、東京と浦和を何度も往復し、いずれにも全力で、対応したのであった。常人では、とてもやり通すことは、できるものではなかった。

三〇年四月、在任は三年三カ月となり、二人分の期間となった。四年間続いた伊藤内閣は、日清戦争で獲得した中国遼東半島を、ロシア・ドイツ・フランス三国の干渉により、手放さざるを得なかった。これを非難され、結核の病気でもあった陸奥外相が辞任、続いて大蔵大臣が辞任し、結局伊藤内閣は総辞職をしていた。その後は、博文とはそりが合わなかった、松方が総理大臣、板垣と張り合った、大隈重信が外務大臣の、いわゆる松隈内閣が、明治二九年九月に成立していた。大隈の率いる進歩党（旧立憲改進党）から、県知事への強い就官要請が、内閣に多くて寄せられていた。知事報酬は年棒三千円にのぼり、しかも機密費（遊女屋や娼妓から徴収する税は不浄金として、予算に計上せず、知事の機密費とされた）が年棒以上あり、豪奢生活と、かなりの蓄財ができたのである。

しかし松方内閣は、尊福を今度は、静岡県知事に任命した。伊藤派の一人とみられていた尊福が、これだけの実績を挙げたことから、政府としても、ここで非職とするわけには、どうしてもいかなかったのである。

この辞令が発表されるや、自由党有志は、留任の請願運動を起こそうとした。しかし尊福は、

「地方牧民官（人民を治める者）たるもの、松隈内閣の意見とは異なるが、余の良心に恥ずべき点が無いのであれば、異見の内閣の任命に反対するのは、却って心苦しい」

と述べ、静岡転任の反対運動を中止させた。

県内発行の新聞・雑誌は、

「中央政府と県会との間にあり、前々久保田知事は中央政府の意向にのみ同調し、強圧的な県政を行った。前任の銀林知事は、県会にこびいり、中央政府から批判を受け、退任した。千家知事は、中央政府にも意見をし、県会においては、よく意見を聞き、徳をもって解決に努力した」

など、こぞって、尊福の在職三年あまりの功績を、たたえたのである。

また、

「赴任以来鋭意熱心県治に労苦し、録すべきの功績鮮なからず。去れば県民は、皆能く其の功を称し、其徳に服して、良二千石の万歳ならんことを、こいねがわざるものあらざりし。父子別離する如き情をもって、送らざる者はなし」

と、埼玉県を離れる尊福の転任を、惜しんだのであった。

おわりに

尊福にとって、最初の知事職であったが、多くの幸運に恵まれたとはいえ、埼玉県知事として、難治と言われた県政を、見事に軌道に乗せた。県内地域間の抗争や対立について、その解消に率先して行動し、県としての一体化について、努力を惜しまなかった。長年の難しい先送りされていた懸案を、あせらず機を見ながら、一つずつ解決処理していった。地場産業の振興にも目配りし、その発展を、たえず支援した。こうした根深く難しい諸問題を、解決し遂げることができたものは、県民に強く支持された、千家尊福しか、いなかったことであろう。

尊福は、三年にわたる埼玉県知事の実績を、高く評価され、次は、躍進する静岡県知事に任命され、赴任することになったのである。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

『時評家　新明正道』（評伝その五）

山本鎭雄

第四章　関西学院文学部教授の五年間

―激動と弾圧の関西社会運動の渦中で―

一　東京から金沢を経て神戸へ

一九二一（大正一〇）年四月、新明正道は東京帝大法学部政治学科を卒業し、弱冠二三歳で神戸の関西学院文学部教授に任用された。新明と同期に卒業した山崎一雄は大阪時事新報の記者となり、神戸で川崎と三菱の両造船所の労働争議を支援した。さらに松沢兼人は大阪市役所社会部長の志賀支那人の勧誘で、卒業前後に大阪市立市民館開設の準備のために書記となった（のちに、日本で最初の公立隣保事業施設の開設）。初期新人会で「青年会派」（本郷ＹＭＣＡ会員）と称された新明、山崎、松沢はこの激動と波乱に満ちた阪神で奇しくも再会した。のちに、松沢は新明に依頼し、関西学院文学部教授となって社会政策を担当した。山崎は大阪時事新報を退職し、上京して東京朝日新聞の記者となった。

二一年五月（上旬）、新明は新人会金沢支部から思想講演会で演説を依頼された。そのため、新明は東京から神戸に赴任する途次、アナーキストで詩人の石川三四郎とともに金沢に立ち寄り、指定の時間前に講演会場に行ったところ、意外にも会場には立て看板もなく、ドアは閉鎖され、まったく人影もなかった。

新人会金沢支部の会員はしばしば上京し、新人会の本部会員と親しく懇談したほどである。金沢支部は広島支部その他とともに最も活発な地方支部である。保守的な金沢で、金沢支部は官憲によって思想的に弾圧され、そのことからかえつて過激化し、大杉栄らが提唱する急進的なアナーキズムの「知識階級の排除」の影響を受けるようになった。知識階級の東京帝大新人会、しかも金沢支部の結成とその活動に協力した新明も知識階級の一人として排除され、講演会を流会したのであろう。

二一年一月、東京本郷の新人会本部は警視庁の特別高等係の刑事に家宅捜索され、さらに新明を含む本部員五名とともに警視庁で事情聴取を受けた（『同胞』第六号、二一年三月、「家宅捜査」）。その直後の同年二月、「不穏文書」の嫌疑で金沢支部会員五名が一斉に家宅捜索され、勾引された。官憲は金沢支部会員を「思想が過激だ、言論が不穏だ」と見なして家宅を捜索し、しかもそのうち二名の支部会員は言掛かりをつけられて裁判所書記を解雇された。このような官憲の不当な弾圧に「泣き寝入りが出来ない」と激しく反発した（河合正治「落花狼藉」、『同胞』第七号、二一年四月）。

新明は内心ではこのことによって新人会金沢支部は崩壊したと見なした。また金沢支部の機関誌『異邦人』はアナーキスト系の北土社から発行されたが（第二巻四・五合併号）、官憲によって次々と発売禁止となり、ついに廃刊に追い込まれた。なお、金沢の警察の資料では、金沢支部会員の河合正治、本部仁太郎（堺利彦の義弟）は「無政府・共産主義」派とされ、泉鏡花の書生であった示野吉三郎と、その妻の勝目テルは同関係人物とされている(1)。

二一年五月、金沢に立ち寄った新明にたいして、京都の第三高等学校の学生会代表の大宅壮一から電報で、記念祭講演会で演説を依頼された。新明は石川三四郎とともに、京都へ行き、新人会の來間恭、山崎一雄と合流し、三高で演説会に出演した。講演会では「聴衆は堂に満ち、稀に見る盛会であった」。とくに石川の「進化と表現」と題する演説は「学生諸君に強いショックを与えた」（『ナロオド』第一号、二一年七月）。

新明は石川と同行し、大阪で別れた。大阪の刑事は連絡が悪く石川を見失い、その代りに任地の神戸に行く新明を尾行した。その翌朝、新明は関西学院に初出校したところ、校門の外で早朝から監視のため出迎えたのが、神戸の特別高等係の私服の刑事だった。新明は刑事を「露払い」にして初出校し、学生はこの「型破り」の新任の新明を面白半分に興じた。カナダ人の宣教師のベーツ院長やウッヅワース学部長は何ら問題にせず、緊張した新明はひとまず安堵し、新進気鋭の教師として学問研究のほか、啓蒙活動、社会運動、さらに評論活動に専心した。

その当時、関西学院には中等部、神学部のほか、専門部として高等商学部と文学部の二学部がおかれた。開設間もない文学部社会学科では、専任教員は法学担当の河上丈太郎教授（戦後、社会党委員長）ただ一人だった。河上は一人で憲法、民法、刑法、国際法などの法学関係の講義を一手に引き受けていた。河上は東京帝大法科大学政治学科に在学中、同じクリスチャンの森戸辰男とともに弁論部で活躍した。新明が神戸に赴任する直前に謝辞と別辞の挨拶に行った吉野教授は、学生時の河上について「私はよく知っており、なかなかよい人だ」と語り、はなむけに背広上下一着とズボン一本を贈った。新明は吉野教授に敬意を表し、関西学院の教員生活に心強く感じ、神戸へ赴任したことであろう。



関西学院文学部教授の新明正道



関西学院のベーツ院長（右）と川上丈太郎教授（左）

二　戦間期最大の労働争議

第一次世界大戦後、二〇年三月中旬に東京・大阪の株式市場の株価が暴落し、それ以後、米・繊維のほか各種の商品相場も暴落して深刻な不況にみまわれた。この戦後恐慌で工場の倒産と閉鎖が激増し、労働者の解雇と賃金の値下げが常態下した。結成された労働組合は増加し、農村各地で小作争議も急増した。

大阪の大阪電燈会社（二一年五月）、藤永田造船所（同年六月）などの労働争議が、関西で最大の港湾・工業都市の神戸に飛び火した。同年六月から神戸の三菱および川崎の両造船所を中心に神戸製鋼所・台湾製糖・東神護謨（ゴム）・ダンロップゴムなどの主要工場で総勢三万人の労働者がストライキに突入した。大阪から来援した労働者も加わり、沿道の市民が歓迎するなか、三万人以上の画期的な大デモンストレーションが展開された。

友愛会神戸連合会は産業民主主義の立場から会社側に横断組合の承認、団体交渉権の獲得、労働組合を基調とする工場委員会制とともに、さらなる賃金値下げの中止、順当な解雇手当ての支給、疾病や休業時の労災補償の支給を要求する労働大争議となった。神戸のキリスト教牧師の賀川豊彦は友愛会神戸連合会、関西労働同盟会の理論的・実践的指導者として、生産者議会を主張するギルド社会主義の立場から、労働者による工場管理や工場委員会の新設、さらに議会制度を通じて着実に社会主義に

移行する戦術を採用した。

賀川は宗教的信念により過激な直接行動派の戦術を採用せず、あくまでも産業民主主義や議会による社会政策の実現（議会政策派）を主張し、行動的には「無抵抗主義の抵抗」を実践した。労働争議団の「工場管理宣言」をめぐり、警察の介入と弾圧、軍隊や憲兵の出動、会社側のロックアウトと大量解雇、争議団との流血の惨事のなか、会社側は結束する労働者を切り崩し、しかもボイコットする労働者を解雇して工場の操業を再開した。

警察は川崎および三菱の争議団の賀川豊彦ら幹部一三〇数名を検挙し、各警察署に留置した。争議団は秩序のある団体行動と無抵抗主義を貫き、「惨敗宣言」（一二年八月一二日）を発して、四五日間に及ぶ激烈な労働争議が終結した。この神戸における労働争議は戦間期における労働運動史上では画期的な大争議と言われている(2)。

この労働争議で賀川らの「議会政策派」の指導部は孤立したが、高潔無私の賀川は神戸購買組合（のちに神戸消費組合、神戸生活共同組合と改称）を設立し、労働争議の犠牲者やその家族に生活上の便宜をはかった。さらに賀川はすでに発刊した『労働者新聞』（友愛会・関西同盟会機関紙）で労働者の当面する諸問題で論陣を張り、また労働問題講演会などで大いに弁舌を振るった。

東京帝大新人会ＯＢで、労働総同盟の幹部の赤松克麿は川崎争議団本部の顧問となり、また大阪時事新報の記者の山崎一雄は三菱争議団の顧問となって、労働争議に参画した。さらに川崎争議団が神戸地方裁判所に起訴されると、新人会ＯＢで弁護士の三輪寿壮と小岩井浄が東京から駆けつけ、進んで法律相談にあたった。ところが、関西学院文学部教授に赴任早々の新明はこの大争議にどのように関与したのか、極めて謎である。ただ、神戸における新明の学究生活、評論活動、学外講義に大きな影響を与えたことであろう。

三　大阪労働学校の「社会学」講義

賀川豊彦は労働者の意識と教養を高め、労働運動を着実に発展するには、労働者の学校が重要だと考え、労働学校の設立に着手した。東京の日本労働学校に次ぎ、賀川はベストセラー『死線を越えて』の印税（一〇万円）の一部五千円を基金に、「有産階級の独占から教育を解放し、…我等は学ぶべき権利を持っている。我等有産階級に奪われた大学を奪還しなければならない」という趣旨で、大阪労働学校（校長、賀川豊彦）を開校した（二二年六月）。その後、心中自殺した有島武雄の遺贈金の一部を補助金（日本郵船三七株）にあて、労働学校は困難を排して継続的に運営された。

大阪労働学校は「労働者及び労働組合幹部に必要な知識の啓蒙」のために、関西労働組合連合会の加盟組合から推薦された労働者を受講生にして、夜間・週三回、三



神戸大争議の街頭行動
川崎造船所前
(1921年7月)

か月を一学期（二六回、九〇時間）として、二学期をもって卒業することにした。労働学校の開校式には、賀川校長の開校の辞、労働組合の代表や新聞記者の激励の挨拶のあと、新明の基礎学課「社会学」の最初の講義が行われ、このあと新明の講義は四学期まで続いた。大阪労働学校には関西学院教授の河上丈太郎のほか松沢兼人、さらに高野岩三郎、森戸辰男、櫛田民蔵（大阪天王寺の大原社会問題研究所の所長・所員）などが講師として協力した。

のちに、新明はこの講義について「毎期何回ほど講義をしたかはっきりしておらず、肝腎の講義の内容にしても、何を話したか、皆目覚えていない」。だが、「一九二二年には未熟ながら『社会学序説』を書いているので、あるいはその内容に近いものを労働学校で披露するつもりで社会学の講義を引き受けたのではないか」と回顧している(3)。

新明の大阪労働学校の初回に受講して修了した平井重太郎は感激して次のように回想している。

開校第一講は、新明さんの「社会学」の講義によって始められた。…優れた諸先生が誠に真摯に学生に対しておられることは、およそ類のないことであった。…諸先生の熱心な講義は、一同、心を一つにして、ことごとく吸収せねばやむないとする聴講ぶりに、先生方も昼間の大学生とは比較にならない受講態度だと喜んでいた。

松沢兼人は東京帝大を卒業後、大阪市立市民館のセツラーになったが、多忙な開館の準備のため体調をくずした。大阪労働学校の開校の準備中、松沢は賀川、山名義鶴らに懇望され、労働運動の一端にコミットすることに生き甲斐を見い出し、初代の有給の労働学校主事（兼講師）に就任し、「社会政策」の講義を担当した。

新明が大阪労働学校の開校日に「社会学」を講義するようになったのは、賀川や松沢の勧誘があったからであろうか。松沢は労働学校の夜間の生活でも健康を害した。新明は松沢から関西学院への就職を依頼され、松沢を河上丈太郎教授に紹介し、関西学院文学部教授として「経済学」と「社会政策」を担当した。ところが、健康を回復した松沢は引き続き夜間に大阪労働学校、神戸労働学

校のほか、明石、尼崎などの労働講座にも出講した。

四「自由大学の専任講師」

大阪労働学校で新明の「社会学」の講義を取材した長野県飯田出身の大阪時事新報の塩沢元二記者は、新明に飯田の自由大学の講義を打診した。その後、新明は長野県における自由大学運動の指導者の土田杏村（大正・昭和期の在野の思想家・教育者）から「社会学」の集中講義を正式に依頼された。土田は自由大学の理念としてイギリスの社会主義者のポール夫妻が提唱したプロレット・カルト（労働と教育）論を参考に、農村青年が「労働しつつ、学ぶこと」を奨励した。

長野県の農村青年―その中心は自作農の養蚕農家の好学の後継ぎ―が養蚕の農閑期（一〇月から翌年三月まで）に「知的欲求の向上と自己成長のために」（山野晴雄）、土田杏村の絶大な協力を得て、自主的に自由大学を開校した。新明は自由大学運動に共鳴した一人として、はじめ信南自由大学（飯田、のちに伊那自由大学）、次いで信濃自由大学（上田、のちに上田自由大学）の集中講義に出講し、主として「社会学概論」を講義した。

とくに伊那自由大学では五日間にわたって集中講義を行った（二四年三月）。政治学徒の新明は、すでに触れたが、『社会学序説』（二二年一一月）の刊行後、つまり関西学院文学部教授時代の後半、高田保馬、ドイツのジンメル、フォン・ヴィーゼなどの当時の最新のオーソドックスな形式社会学の研究に着手していた。そのことは、新明の研究が社会思想や社会運動からヒントを得た「広義の社会」の研究から、個人と社会との関係、人間の心的相互作用の考察という「社会学」について研究するようになったことを物語っている。

新明は大阪労働学校の「社会学」の講義とは異なり、伊那自由大学では「社会学概論」としての形式社会学を講義した。新明は伊那自由大学の運営にあたった横田憲治に宛てた手紙に、「学校には真の学究の気持のある人が少ないのには悲観しています。自由大学のように、自ら進んで学問に近付かうとする人々の集まりで話の出来るのはうれしく思います」（要約）と書き、喜んで出講することを伝えた。さらに新明は「社会学概論」の学習参考書として、「原論的なもの」として高田保馬著『社会学原理』、『社会学概論』（本書を「最も良し」と注記している）および『社会と国家』、米田庄太郎著『現代文化人の心理』および『経済心理の基礎』、ジンメル著『社会学の基礎問題』など、「特殊的なもの」として土田杏村著『新社会学』、新明正道著『社会学序論』など、三〇数点の著作を記述している(4)。

新明は「自由大学の専任講師の一人」と自認し、飯田に三回、上田に二回、自由大学の集中講義に出講した。ところが、二四年三月、飯田町で自主的青年運動団体の

下伊那自由青年連盟ＬＹＬの中核メンバーの羽生三七をはじめ、自由大学の運営にあたった横田憲治、平沢桂二らが秘密結社の容疑で一斉に検挙されたが、すでに自由青年連盟を退会していたため不起訴になった。しかし自由大学運動の受講生や支援者にたいして大きな衝撃と警戒心を与えた。そこで、自由大学運動が自由青年連盟とその趣旨と目的で明確に異なることを明らかにするために、宣伝文書『自由大学パンフレット　自由大学とは何か』を発行した（二四年八月）。

このパンフレットで自由大学の提唱者の土田の他、小説家・戯曲家で「随一の人気講師」（「信州の鎌倉」と呼ばれた別所温泉に在住）のタカクラテル（高倉輝）、新明が寄稿した。新明は「自由大学の精神」と題して、自由大学の目的を社会運動におけるイデオロギーの「宣伝」と区別して、「大学は大学である。教育は教育である。事実の探求は第一であり、政策の宣伝は第二である。自由大学は飽く迄事実の正確にして濁らざる討究を事とする。智識は力であるといふ。我等は、この言葉を信じて、謬りない智識の吸収によって自己に自主的な固い力を養ふことを目的とする。此処に自由大学の目的は尽きる」と述べ、自由青年連盟とは異なる、自由大学の意義を明らかにした(5)。

自由大学運動は長野から新潟（魚沼、八海）、群馬、福島にも広がったが、農村の不況、とくに蚕糸業の不況で受講生の減少による財政難、若手講師の確保難（若手研究者の海外留学や移動）という事情が重なり、上田自由大学は二七年晩秋から始める予定の第六期の講座を停止したように、昭和初期には早くも停滞期に入った。

二七年三月、金融恐慌の最中に行われた伊那自由大学の三日間、高橋亀吉の経済史、谷川徹三の哲学史に続き、新明も「近世日本社会史」を講義したが、受講生は一人の女性を含めて僅か一二名に過ぎなかった。

五　関西学院教授グループと京都学連事件の余波

新明が関西学院文学部教授として赴任した翌年の二二年五月、社会学科の学生は社会学会（学内学会）を発足させた。学生はそれを記念する公開講演会を新設の関西学院中央講堂で開催することを企画した。新明の斡旋で月刊『我等』を刊行し、中央の論壇で活躍している文明批評誌の編集者の長谷川如是閑と大山郁夫を講師に招いた。公開講演会は多数の市民と労働者が集まり、新明の「開催の辞」のあと、二人の講師は四時間にわたり、熱弁を振るって大盛況だった。自ら企画し、準備し、それを実施した学生は予想外の結果に喜悦した。社会学会の学生は大いに自信を持つとともに、新任早々の新明への敬意と信頼を深めたであろう。

その後、社会学会は、それを母体にして社会思想研究会（研究団体）と社会科学研究会（社研、学生運動団体）

を結成した。社会思想研究会の特別ゼミとして最初に河上教授の「クロポトキン研究」、次いで新明教授の「インターナショナル運動研究」、さらに松沢教授の「労働組合論」をそれぞれ講じ、盛会だった。だが、社会思想研究会は次第に学生運動団体の「社研」に圧倒され、自然に消滅した。

全国的に大学・旧制高校・高等専門学校の学生は、学生連合会と同時に学生社会科学連合会を組織した。学生運動の高揚にたいして、岡田良三文部大臣の発議で高等学校校長年次会議を主催し、各校の「社研」の解散措置を申し合わせた（一四年一一月）。そのことがかえつて、「社研」は学問の自由を擁護する穏健な高等学校、高等専門学校の学生に支持され、「学連」を中心に全国学生軍事教練反対同盟を結成した（一三年一一月）。その翌年の一月まで、軍事教育反対デーとして学生の大規模なデモが実施された。

全国の大学が参加し、東京で学生社会科学連合会が開催された（一四年九月）。学連は「学生軍事教育反対演説会」を開催し、軍教反対運動を組織した。関西学院の「社研」の活動家の酒井一雄なども参加した。二五年四月、天皇によって制定された「勅令」によって、陸軍現役将校学校配属令が公布され、中学校では各校ごとに現役将校による軍事教練が実施された。

すでに、政府は治安維持法案を上程し、貴族院で可決した（二五年三月）。それと同時に普通選挙法案（女性には選挙権は与えられない）が衆議院と貴族院で修正可決し、両院協議会で可決した（同年三月）。いわば「アメとムチ」の政策であろう。京都府警察部特高課長に任命された久保田某とその部下は、学連の活動家を常時監視し、一斉検挙を企んでいた。京都府警は学連メンバーを検挙するために京都帝大の学生寮を家宅捜査し、三〇数名の学生を警察署に勾留・尋問した（二五年一二月、京都学連事件の発端）。

ところが、京都帝大をはじめ多くの大学・学校で抗議集会が開催された。とくに京都帝大の法学部・経済学部の教授団も学問の自由と大学の自治の侵害として意見書を発表した。京都府警は広範な抗議行動に驚き、逮捕者を一週間以内にすべて釈放した。

それ以前、京都帝大の社会科学研究会から関西学院文学部教授の河上と新明に来学の依頼状が寄せられ、約束の日に京都で「社研」の学生らと話し合って神戸に戻った。ところが、京都学連事件の発端となったその日、関西学院の河上、新明、松沢、田村市郎の各教授は「社研」学生を背後から扇動したと疑われ、一斉に家宅捜査された。ベーツ院長はそのことを不問に付し、通常の自由な学園生活が続けられた。

ところが、翌年一月、治安維持法を最初に適用した「京都学連事件」が起こった。京都帝大、東京帝大などの学生が第二回学連大会（京都）の翌日の学連幹部の秘密会合に参加したとして、最終的に三八名の学生（中退者と卒業生を含む）を一斉に逮捕した。その後、治安維持法違反で有罪が確定した。関西学院では小崎正樹、酒井一雄らが家宅捜査され、拘引された。小崎は治安維持法違反で検挙され、酒井は学内で不穏ビラを配布したとして放校処分となった。それに同情する学生の広範な処分撤回運動にもかかわらず、ベーツ院長の強行な方針のために処分撤回は実現しなかった（二六年一一月）(6)。その後、関西学院の学生運動は停滞期に入った。

六 政治研究会神戸支部の結成

二四年一月、元老の山県有朋閥の清浦奎吾（枢密院議長）が超然内閣を組閣すると、政友会・憲政会・革新倶楽部の三派の有志が清浦特権内閣打倒の第二次護憲運動が開始された。同年五月、第一五回総選挙で護憲三派が大勝し、清浦内閣の総辞職ののち、第一次加藤高明内閣が成立した。関東大震災後、全国的に護憲運動と普選要求が高揚し、労働組合、農民組合、思想団体、学生団体は普通選挙における無産階級の政党組織の結成が共通の政治課題になった。その準備団体として嶋中雄三、青野季吉らによって「政治研究会」が結成され（二四年六月）、講演会や機関誌によって民衆への政治的啓蒙活動を本格的に実施するとともに、全国各地に地方支部の結成と活動を促した。

政治研究会神戸支部の結成（二五年六月）について、新明自身は多くを語っていないが、松沢の回想によれば、前期新人会ＯＢの三輪寿壮・平貞蔵（社会思想社の同人）らが新明と松沢に神戸支部の結成を働きかけた。そこで、新明は松沢、田村市郎らの関西学院文学部教授とともに奔走し、支部長に河上丈太郎を担ぎ上げて神戸支部が発足した。同年九月の発会式記念講演会では、東京から駆けつけた大山郁夫と婦人運動家の奥むめおが演壇から激励し、地元から新明、松沢、さらに葛山義二（京都）らが演説した。神戸でも無産政党樹立をめぐって左右の激しい対立と抗争があったが、関西学院教授グループが発起人として正式に神戸支部が発足した。松沢の回顧によれば、神戸支部は「きわめて小さな組織であったが、燎原の火と燃える火種を作った」(7)。

その後、神戸支部の結成に奔走した関西学院文学部の進歩的なグループのなかで、新聞学担当の坂本勝講師は河上教授と賀川牧師に勧められ、日本労農党公認として（衆議院普通選挙の前哨戦と言うべき地方選挙）、兵庫県会議員選挙で意外にもトップで当選した（二七年秋）。その翌年の最初の衆議院普通選挙で日本労農党公認（兵庫第一区、定員五名）の河上丈太郎候補は、警察の激しい弾圧にもかかわらず、第四位で当選した（二八年二月）。河上の当選は無産政党諸派八名のうちの一名で極めて注

目され、しかも小会派の無産政党諸派は衆議院でしばしばキャスチングボートを握った。その翌年、松沢兼人は日本大衆党（日本労農党を中心に七党が合同して結成された）公認として神戸市会議員選挙で当選した。勤勉家の新明は衆議院などの各種普通選挙の時期、すでに関西学院教授を退職し、東北帝大法文学部助教授に就任して学究生活の道を歩んだため、しばらく政治的活動を自制した。

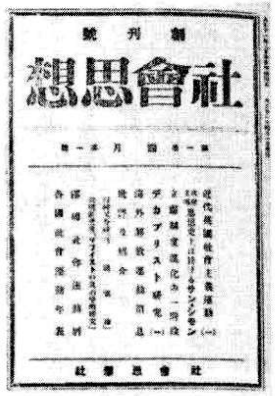
七　ソフィストの相対主義の政治思想

新明は関西学院文学部教授に就任し、最初に上梓したのが『ソフィストの政治学的研究』である(8)。

新明は当時の国家の絶対的な権威を拒否し、古代ギリシアのソフィスト（原義は「知者」の意味）の相対的な政治思想を研究した。新明は政治思想として「国家をもって完全に統一された一つの実体、または精神」という見解を「絶対主義」と位置づけ、それは権力主義、専制主義、保守主義として具現する。「絶対主義」は古代ギリシアのプラトンやアリストテレスの理想的国家論の政治思想であって、それ以前、ソフィストの一群はアテネのペリクレス治下の民主制下で雄弁と論争によって「権力」、「征服」、「奴隷」からの解放を訴え、それは改革主義、平等主義、進歩主義という「相対主義」の政治思想と特徴づけられる。



初めに社会思想社に集った人たち（1922年頃）
左より，〔前列〕平貞蔵，林要〔後列〕佐々弘雄，笠信太郎，三輪寿壮，石浜知行，嘉治隆一，河西太一郎，山村喬（蠟山政道は外遊中）。この会合で一学年後輩の新明と田中九一は同人に加えられた。



『社会思想』創刊号
（1922年4月）
新明正道著『ソフィストの政治学的研究』の書評を掲載
（評者・蠟山政道）

このように、新明は政治思想史で詭弁学派と一蹴されたソフィストの政治思想を「批判的相対主義」と認識し、プラトンやアリストテレス（さらにヘーゲルやヒットラー、括弧内、私注）の「権威主義的絶対主義」を大胆に批判した。当時の日本国家の権威と横暴にたいして、若き政治学徒の新明は拒否的姿勢に駆られ、ソフィストの政治思想の研究に着目したのであろう。

本書は東京帝大政治学科の吉野作造教授が編集した「政治研究」シリーズ第五編として上梓された。吉野教授はその序文で新明のソフィストの政治思想の研究について、以下のように評価し、若干の疑問を呈した。

> 僕は君ほど優秀なる学生を余り多く見た事がない。…君は熱情に駆られて実際的活動に突進しながらも又、好学研鑽の青年的嗜好に決して遠ざからなかった。…僕は必ずしも新明君の立場に全然同意するものではない。僕は新明君ほどソフィストを買っては居ない。…僕には現代多数の青年と僕とのへだたりだとすれば、夫れだけ僕は古くなったのかも知れない。

八　『社会思想』の政治評論と政治学研究

東京帝大の前期新人会は結成三周年を迎えたあと、卒業生を除外し、大学内の学生思想団体として存続することを宣言し、機関誌に「我等の目指す行手は、依然としてナロオドの中だ！民衆の中だ！」と「ナロオド宣言」をして終刊した（『ナロオド』第九号、一二年四月）。

そこで、新人会ＯＢの学究派の三輪寿壮・平貞蔵・嘉治隆一・蠟山政道ら（一〇年卒業）は新明と田中九一（一二年卒業）を加え、「社会問題の研究」のために社会思想社を結成した。その後、「新しい社会の実現」と「社会運動への貢献」を目指し、十二名の同人によって月刊誌『社会思想』を創刊した（一二年四月）。最盛期には同人は総勢四八名に達し、内外の社会運動の思想と理論を模索する日本では最高水準の知的集団を形成した。

社会思想社はほぼ前期新人会の活動スタイルを踏襲し、月刊同人誌を発行し、『社会思想叢書』（一一点）を出版し、月例公開研究会や学術講演会を開催した。その間、社会思想社は心中自殺した有島武郎の遺贈をもとに有島財団を設け、労働教育事業のために労働教育会を設立して大阪労働学校などへ補助金を提供し、労働事情調査も実施した。

社会思想社は世界最初の訳書『マルクス・エンゲルス全集』（改造社版、二七巻・別巻・補巻、三五年八月完）と、日本で最初の『社会科学大辞典』（改造社版、三〇年五月完）の編輯とともに、全面的に執筆に協力した。新明は『マル・エン全集』第一巻にマルクス著『ヘーゲル法哲学批判』（部分訳）を服部栄太郎と共訳し、『大辞典』には「社会学」その他の項目を執筆した。

社会思想社の同人の思想傾向は多種多様だが、主とし

て社会民主主義か、マルクス主義を支持し、社会思想と社会問題を論じた。一時期、無産政党の中間派の日本労農党を誌上で支持し、準機関誌として二〇〇〇部を発行した。同人はすべて外国語に堪能で、本読み物書きの才能に精通し、職業は大学教員、新聞記者、弁護士、研究機関の調査員で勤務は比較的ゆとりのある知識階級である。だが、『社会思想』は創刊して七年、二九年一二月に第八巻一二号（通巻八八号）をもって終刊した。

また「白虹事件」で大阪朝日新聞を退社し、長谷川如是閑、大山郁夫、井口孝親らは東京で文明批評誌『我等』を創刊し（一九年二月）、ほぼ七〇〇〇部を発行し、三〇年三月号（通巻一二八号）をもって終刊した。その後、『社会思想』同人の常連寄稿者の嘉治隆一らの仲介で『社会思想』を吸収・合併し、如是閑らは後継誌『批判』を創刊した（同年五月号、当初の誌名は『現代批判』）。『社会思想』同人と『我等』の編集者と執筆者はすでに密接な関係にあり、さらに大原社会問題研究所の所員とともに二〇年代の知的共同体を形成した（後述、追記）。『批判』は急速なファッション化の進行で第五巻二号をもって終刊した（三四年二月）。

すでに触れたように、『社会思想』の創刊時の同人は東京帝大法学部二〇年の卒業生が中心だったが、二一年の卒業生の新明と田中九一（新人会に東京帝大を卒業後に入会した）が同人として入会した。もっとも、社会思想社の編集会議、雑誌の発行の中心は東京であって、関西に在住する新明とは疎遠になりがちであった。とは言え、『社会思想』の編集後記によると、研究熱心な後輩の新明にたいする最大限の期待と関心が記述されている。

「神戸に雌伏している新明君が久し振りに出京しました。之から毎号何か書くという約束が編輯者との間に成立しました」（『社会思想』第一巻三号、二二年六月、編輯者は平貞蔵であろう）。早速、新明は同号に「ギルド社会主義の近勢」を寄稿し、最近のギルド社会主義者の革命派のメラーの主張を紹介し、彼らのロシア革命の衝撃を分析している。

二三年春、新明は極度の過労のため、微熱から高熱を発症した。たまたま賀川豊彦が来宅し、チフスの恐れがあると判断し、賀川の懇意の病院に運びこまれた。新明は真正のチフスで一か月近く入院した。『社会思想』の編輯後記に、「久しく病を養っていた新明君も、元気恢復、本誌の上で、これから大いに活躍してくれるとのことである」（一巻六号、一三年六月）。さらに「新明君はイヨイヨ、来月から雄篇を寄せる」（第二巻七号）と期待された新明は「政治進化の悲観と楽観」（第二巻八号）を寄稿した。

新明は政治の進化について二つの対立した見解に大別されると記述した。それは政治の絶えざる進化を認める楽観論にたいして、政治はその形態が表面上に変更しても、その特質は変更しないという悲観論である。政治進化の悲観論は古代ギリシアの政治学説をはじめ、近代のデモクラシーを基調とする民衆政治においても衆愚政治に転嫁する可能性が大いにあって、政治の進化への期待は消滅せざるを得ないのである。このような悲観論にたいして、どのように政治の進化を肯定する楽観論が成立するのであろうか。新明は政治の進化の楽観論についての「議論を次号に譲る」として筆を擱いている。次号以降に壮大な「議論」が展開するかも知れない。

九　社会運動の方向転換への苦言と反応

ところが、『社会思想』第二巻八号（二三年八月）の発行後、関東大震災が起こった（同年九月）。社会思想社の事務所の東京月島の平貞蔵宅と三輪寿壮宅、同じ月島の「第二印刷所」が焼尽したため、『社会思想』はしばらく休刊せざるを得なかった。新明は関東大震災の二日前に在京していたが、帰郷した金沢で関東大震災の報道で甚大な被害を知り、しかも朝鮮人暴動の流言が広がり、警察と各地の自警団による虐殺事件も知った。のちに、新明は米騒動とともに、関東大震災の群集の心理と行動を解明するために、「群集社会学」の研究を上梓した（『群集社会学』、ロゴス書院、一九二九年、『新明正道著作集』第九巻所収）。

その後、新明は同誌に「社会運動の定型」（第三巻八号、二四年一〇月）、「定型論再説」（第三巻一〇号、二四年一二月）を矢継ぎ早に掲載した。労働総同盟本部は赤松克麿を中心に現実主義への「方向転換宣言」を起草し、労働総同盟第一三年大会で採択された（二四年二月）。新明は社会思想社に締め切り直前に「社会運動の定型」を「雑録」として寄稿し、その趣旨は必ずしも明瞭ではないが、『社会思想』の編輯者の判断で「論考」として掲載された。

新明は実際的運動家の赤松に敬意を表し、「私は、大体において、総同盟の執りつつある態度、及びこれに近い政策を認容する」と述べつつ、総同盟の方向転換を「一時の政策であるに過ぎぬ。これを定型と了ったならば、ここには恐るべき社会運動の化石化が生じる」と警告した。労働組合運動で急進左翼の日本労働組合評議会にたいして、労働総同盟右傾的な定型化ののちに、現実主義と称してさらなるを右傾化を懸念したのであろう。

新明の短い「短文」にたいして、『新人』（二二年一一月号、新人会）に秋山次郎（是枝恭二の筆名、後期新人会の活動家）は、「『社会運動の定型論』を笑う―マルクスへの引導式―」を掲載した。新明はこの雑誌の広告記事を見て、早速『社会思想』に「定型論再説」を寄稿し、労働総同盟の右傾化という方向転換は、果たして大衆の自発的要求に基づいているのかどうか懸念し、その前途

を憂慮した。その後、『社会思想』の編輯者の三輪寿壮によれば、新明は秋山の批判を読み、『社会思想』に「定型論三説」を寄稿したが、発行直前になって編輯者に掲載を見合わせるように連絡した。

三輪は編輯後記に、新明が「覆面（記事）の揚げ足取りと応酬することは大人気ないと気がついた為であろう。編輯子はその意を諒として之を削った」と記述した（第三巻一〇号）。新明は「定型論再説」の冒頭で「僕は今迄相当に人に対して怒り又は笑ってきたものである。因果応報というか、今度は愈々お鉢が廻ってきたらしい」と自笑した。新明がこのような真正面から揶揄的批評を被ったのは、初めての体験だった。しばらくの間、新明は揚げ足取りを招くような、単なるインテリに過ぎない政治時評の発表を自制し、しばらく政治論、政治思想、さらに社会学の研究に専念した。

十　月刊誌『我等』への寄稿

すでに触れたように、長谷川如是閑や大山郁夫らが「大阪朝日新聞」を退社し、上京して「我等社」を結成し、月刊同人誌『我等』を創刊した（一九年二月）。東京帝大新人会との関係でいえば、長谷川如是閑は講演会に講師に招かれて講演した。その翌年、東京帝大経済学部の森戸辰男助教授が紀要『経済学研究』創刊号に「クロポトキンの社会思想の研究」を発表した（一九年一二月）。国家主義者で憲法学の上杉慎吉教授は教授会で森戸助教授を弾劾し、さらに上杉教授が指導して結成された右翼の学生団体「興国同志会」などはこれを「危険思想」として学内で盛んに宣伝・攻撃した。



『我等』創刊号
（1919年2月）

新人会は法学部学生大会などで「学問の自由」を擁護するために論戦し、また機関誌『先駆』創刊号（二〇年二月）の「新人会記事」で森戸助教授が「起訴」されたことは「学問の自由」の問題であると指摘し、さらに次号の「銀杏の木陰」で長谷川如是閑の「森戸助教授筆禍事件の論理的解剖」（『我等』第二巻二号二〇年二月）を「周到なる研究によって遺憾なく考察され決定的なる価値判断を下されてゐる」と評価した。

「森戸筆禍事件」により森戸助教授の失職は、のちに治安維持法容疑で検挙した三・一五事件を機に京都帝大の河上肇教授の依願免官、東京帝大の大森義太郎教授、九州帝大の石浜知行教授、佐々弘雄教授、向坂逸郎教授の大学追放などの悲しき前例となった（二八年四月）。

前期新人会の嘉治隆一と田中九一は学生時代に長谷川如是閑のもとに通い、満鉄東亜経済調査部（東京）に就職し、『我等』の編集を補佐し、盛んに寄稿した。さらに前期新人会の会員では嘉治隆一のほか、新明正道、来間恭らは長谷川のもとをたびたび訪問し、長谷川を「囲繞する人びと」（丸山眞男）である。ほかに新人会ＯＢで社会思想社のグループでは河西太一郎、平貞蔵、波多野鼎、荘原達らも長谷川の自宅（『我等』の編集室）をしばしば訪問した(9)。

新明は『社会思想』に社会学的な論考として「社会学派概説」（上・下）を発表したほか、主として政治評論と社会運動論である。ところが、ほぼ同時期に『我等』に発表した論考は、政治学史として「人生と恐怖政治」と題してイギリスの哲学者ホッブスの『リヴァイアサン』を論述したほか、あえて社会学的な論考を寄稿した。

新明の回顧によれば、「私は教師になってしばらくの間は勉強の方針を社会学中心としまして、政治学の方を従とし、外国の書物なども八割位は社会学の本を買い込んで大いににわか勉強をやったものであります」と述べている（「社会学五十年の回顧」、六八年一月）。

十一　「人間社会の印象記」と国家論

新明は関西学院の求めに応じて「社会学」を講義した。新明は、たしかに「にわか勉強」だが、あらかじめ講義原稿を作成し、講壇でそれを棒読みしたのではないが、受講生の反応を考えてその原稿を訂正し、完全原稿を作成した。新明は出版社の求めに応じ、懸命な学究生活によって早くも研究二年目に大著『社会学序説』を上梓した（二二年一一月、『新明正道著作集』第一巻所収）。新明は本著の「はしがき」で社会の精確な観察録の必要性を認めつつ、「社会の印象記」であり、「序説」として「私の社会の研究の基礎」（『新明正道著作集』第一巻、三～四頁）と位置づけている。

新明はまず最初に人間生活と動物生活（主としてクロポトキンの『相互扶助論』（一九〇二年）を参照）を比較し、動物よりも複雑な「人間社会の構造」に注目し、各自の欲望を充足するための「協同」から、各人各様の独自な欲望を満足するための協同の組織である「組織集団」の仕組みに言及した。だが、新明はこのように「動物よりも、組織を有しているという点で優越している人間社会が、生活内容にいたっては、はるかにこれに及ばないというのは、いかなる原因によるものであろうか」と疑問を提起している（三五頁）。

新明は社会における統治の機能を詳細に言及し、それと比較して社会（とくに国家）における統制の機能の関係とその差異に言及している。現代社会の国家ついて、

それは「全社会の成員の欲望を代表する性質を失っている。それは階級的利益を包蔵する団体である」（三七頁）と批判的に指摘している。古代社会において戦争が頻発し、しかも激烈になると、首長の統制は「鉄と血」による支配となる。そうして新明は「人間社会の構造」の分析を踏まえて、「社会と国家」の関係について言及した。

そこで、新明は国家の起源を考察するために、グンプロヴィッチ、ラッセンホーファー、さらにオッペンハイマーのオーストリアの「社会学派」の独特の国家観を検討した。新明は「社会学派」の総括者で、最もマルクス主義の階級国家論に接近したオッペンハイマーの国家観に言及し、「社会の統制を執行すべき首長は明らかに自己の私利を追求し、しかも社会成員の非難を抑止するに足る権力を擁しているのである。この形態は、すでに国家そのものである」（四九頁）。国家の起源と関係して、「労働」する階級と「享楽」する階級に分裂した。社会的にも享楽と労働という二つの生活方法を中心にして階級的に分裂した結果、社会闘争が現出した。

十二　社会主義論と社会進化論

マルクスとエンゲルスは社会の歴史は階級闘争の歴史であるが、唯物史観として歴史的に階級対立を止揚すると力説した。新明はレーニンの国家論ではその過渡的国家を経て、その国家が雲のように「無政府」のなかに没していくものと説いていると指摘した。だが、その過渡期において無産政党の階級独裁を肯定し、ソヴィエト（労兵評議会）とは別に、政府の首脳らが構成する「人民委員会」があらゆる機能を吸収し、永久に絶対的なものとなることが懸念されると言及した（一〇二頁）。すでに新明はマルクス（・レーニン）主義の国家論は「集権的」であると批判した。

ついで、新明はマルクス主義とは別に、「広義の社会主義」の理論を考察し、アナーキズムやサンディカリズムの理論は二〇年代には社会運動を教導することが出来ずに衰退したと指摘した。新明が最も注目したのが、コールが提唱した国家の主権と権威という絶対的優越性を否定し、国家を一つの機能的団体と位置づける多元的国家論（ラスキ）を支持し、社会の機能を基礎とした団体の連合とするギルド社会主義を検討した。しかし、ギルド社会主義はロシア革命後の国際的労働運動の分裂と、ソヴィエト政府によるマルクス主義優位の提唱よって自ずから衰退した。

新明は『社会学序説』の最終章で「社会進化の示唆」に論及した。社会学の創始者コントは知識（精神）の「神学的状態」から「形而上学的状態」へ、さらに「実証的状態」に至るという「三状態の法則」という社会進化の法則を提示した。さらに社会学史で同じ古典的社会学者のスペンサーは社会進化の法則として「軍事型社会から産業型社会へ」を定式化した。新明はスペンサーの定式は必ずしも完璧ではないとして、コントの「神学的状態」に対応する国家発生以前の原始社会（スペンサーの「軍事型社会」以前）の、群族が長老を崇拝した「宗教型社会」を提示した。

本来は「軍事型社会」は戦争と防衛のために、種族は支配者と被支配者（とくに奴隷）の二つの階級に分裂し、そこに厳格な主従関係が成立し、煩瑣な諸階層に編成された軍隊的組織が当然視されている。たしかにスペンサーが定式化したように、イギリスの近代資本主義社会の有力な理論として「産業型社会」が支持された。ところが、新明は「産業型社会」を資本主義の理想とみなすことは困難であると批判した。「真の『産業型』社会は利潤のためではなく、生活のために産業の重大であることを認識した社会」（一五五～六頁）であって、資本主義社会はそのような意味で真の「産業型社会」であるかどうかと疑問を呈した。

十三　長谷川如是閑と大山郁夫の影響

最後に、新明の『社会学序説』は当時はオーソドックスな社会学とは言えず、むしろ克明な「社会の印象記」である。主要にはオーストリア社会学派に感化された国家論であり、ラスキ、マッキーバーなどの多元的国家論であり、コントとスペンサーの社会進化論の検討である。新明が最も影響を受けたのは、長谷川如是閑の『現代国家批判』（一九二一年）で独自の社会観が表明され、また大山郁夫の『政治の社会的基礎』（一九二三年）である（本書は新明の『社会学序説』よりも遅く上梓されたが、それに収録された諸論文はすでに『中央公論』や『我等』その他に発表されている）。

長谷川は「国家の神話学」を批判し、「社会と国家」の関連についていえば、社会が国家に先行し、社会が人間生活の基底にあるとして、「国家の博物学」を求め、批判科学としての国家理論を構築しようとした。新明は『社会学序説』で長谷川の「国家は、如何なる時代においても、国家の実権を握っている階級の昌栄を目的したものであった」（七五頁）という文を引用した。

新明はこのような事実から「現代国家の私有財産的存在」、つまり国家の資本主義的性格を指摘し、しかも「国家制度は…階級的に解釈しなければならない」として階級国家論を批判した。その結果、新明は「国家は狡智である」として、国家による国民の言論の自由の権利や平等主義を厳しく制約していることを批判したのである（『著作集』第一巻、七五～六頁）。

当時、大山郁夫は長谷川とともに文明批評誌『我等』を創刊した。その後、大山は早稲田大学に復職して政治学・国家学などの講義を担当し、「科学としての政治学」と称して『政治の社会的基礎―国家権力を中心とする社

会闘争の政治学的考察』を上梓し、政治現象はそもそも社会現象の一部で、政治学は広義の社会科学の一部門とみなした。それ以前に、大山はガリ版刷りの講義録『国家学』（早くて二二年二月と推定される）を残している。これらで新明は大山が克明に考察したオーストリア社会学派の集団闘争を基調とした進化主義の立場を参照し、文化国家という国家論とともに、マルクス主義の階級国家論に言及している。このように新明はオーストリア社会学派のなかで、最もマルクス主義に近いオッペンハイマーの『国家論』（一九一〇年）を参照し、国家の起源と階級社会の発展を独創的に論述した。

新明は若き関西学院文学部教授としてに政治学のほか、にわか仕込みで「社会学」を講義した。ところが、新明は東京帝大在学中は大正デモクラシーの時代に「政治学徒」として新人会機関誌の編集と同誌に論考その他を掲載した。のちに、新明は『社会学序説』について、内面的に名を「社会学」というよりも、「政治社会学」としたいと述懐している。だが、本書は「官憲」にラジカルな印象を与え、出版後に発禁処分となった（『新明正道著作集』第一巻、「序言」）。新明が本格的に社会学の研究で評価されるようになるのは、関西学院文学部教授の後半以降の懸命な研鑽により、当時の社会学研究のオーソドックスな「形式社会学」に関する習作を発表し、若き社会学者と認められようになって、東北帝大法文学部助教授（社会学講座分担、初代）に就任した（一九二六年四月）。

（注）

(1) 「金沢市在住思想要注意人物覧表」（一九三〇年九月）。なお、「金沢新人会支部の動向」については梅田俊英著『社会運動と出版文化』第一章（御茶の水書房、一九九八年）に詳しい。

(2) 神戸労働大争議については兵庫県労働運動史編さん委員会編『兵庫県労働運動史』（一九六一年、兵庫県）、隅谷三喜男著『賀川豊彦』（岩波書店、一九七八年）を参照した。

(3) 法政大学大原社会問題研究所編『大阪労働学校史』（法政大学出版局、一九八二年）。「大阪朝日新聞」（二二年六月二日付）は、前日に開催された大阪労働学校の開校式と新明の講義を報じている。

(4) 山野晴雄編著『伊那自由大学関係書簡』（横山家所蔵、自由大学研究会、一九七二年）。上木敏郎著『土田杏村と自由大学運動』（誠文堂新光社、一九八二年）。金原左門著『昭和の歴史第一巻 昭和への胎動』（小学館、一九八八年）を参照した。

(5) 新明正道「自由大学の精神」（『自由大学パンフレット』一九二四年。自由大学研究会編『自由大学運動と現代』所収、一九八三年）。晩年の新明は「土田杏村の会」（上木敏郎）および「自由大学研究会」（山野晴雄）に招かれ、講演やスピーチを行い、それぞれの機関誌に回顧談が収録されている。

(6) 「国体の変革、私有財産制の否認」を目的と見なされた結社・運動を厳禁する治安維持法が制定された。ところが、京都学連事件に見られるように、治安維持法を適用して急進的な学生運動を弾圧するには、法的に速やかにその目的を達成することは出来ず、かえってメディアや世論などの反発を招いた。そこで、文部省は教育の奨励と改善を実施する一方、他方では学生運動にたいして学校当局にたいして直接取り締まりを強化した。関西学院のベーツ院長が酒井一雄の放校処分を強行したのは、文部省の方針に従ったからであろう（関西学院文学部の教授、学生らの動向は『文学部回顧』（一九三〇年）および『文学部「創立回顧」』（一九三四年）が参考になろう）。

なお、新明の在任中は関西学院文学部教授であって、関西学院大学教授ではない。二二年七月になって関西学院大学は設立を認可されたからである。

(7) 松沢兼人「社会学科の思い出」（『関西学院七十年史』、一九五九年）、『私の現代縦走』（田中印刷出版、一九六四年）。

(8) 新明の最初の著書。のちに『新明正道著作集』第七巻（誠信書房、一九七七年）に収録されている。

(9) 二九年から三〇年にかけ、一方では世界恐慌が日本にも波及し、その後、本格的に昭和恐慌に突入し、そのために学問・思想・言論にたいする弾圧も強化された。

追記　大正後期以降の時代と知的共同体

すでに第一章で触れたように、北川隆吉は新明正道論のための試論として「三層の構造」を提起した。第一層の基層はその個人の「生涯」と「経歴」であり、第二層は基層と上層の媒介層であって「思想」および「生き方」である。第三層の上層は「論理の体系」あるいは「学問体系＝理論」である（『時評家　新明正道』〔評伝その一〕、『まんじ』一三六号）。そこで、これまで第一層および第二層に触れた。

ところが、私は丸山眞男の「近代日本の知識人」（『後衛の位置から』一九八二年、所収）を読み、新明について「三層の構造」の記述に終始せず、丸山が日本の知識人の思考様式と思想（イデオロギー）とその歴史的変化に応じて、「知的共同体」についての知識社会学的な観点から考察する必要性を痛感した。

もっとも、丸山自身はその考察を「まだ不十分だ」と認識しつつ、第一期の知的共同体は明治維新からほぼ明治中頃までの近代日本の知識人の生誕期に形成されたが、公私の官僚制の中に編成された制度的知識人とその外にある「自由知識人」の間の分化が次第に固定し、知的共同体は解体した（私は知識人の二類型について、大学教員・常設の研究所の所長・研究員などの「在任の知識人」と、社会運動家、弁護士、作家、（流動的な）新聞雑誌の編集者や記者などの「在野の知識人」と類型化することが適切であると考える）。

丸山によれば、第二期の知的共同体は一九二〇年代（大正

九年以降）に形成された。吉野作造が『中央公論』（一六年一月号）に発表した民本主義論の影響が強い。もっとも、この歴史的論文は普通選挙・言論の自由・政党内閣制の実現について説得力をもって主張されたが、それをもって第二期の知的共同体が形成がされたのではない。その後、ロシア十月革命、国内では米騒動、「白虹事件」、さらに労働組合の同盟罷業や農村の小作争議が増加した。

すでに触れたように、吉野作造対浪人会の立会演説会を契機に東京帝大法科大学（のちに、法学部）の理想主義的な学生によって思想団体「新人会」、さらに吉野作造・福田徳三・大山郁夫らの知識人の呼びかけで思想啓蒙団体「黎明会」が結成された。さらに大原社会問題研究所の創立総会が開催された（その後、所長に高野岩三郎が就任した）。すでに大阪朝日新聞を退社した長谷川如是閑・大山郁夫らは我等社を結成し、文明批評誌『我等』を創刊した。早稲田大学では北沢新次郎、大山郁夫教授の指導によって民人同盟会が結成された。まさに第二期の知的共同体は大正デモクラシーの時代の自由主義・民主主義および社会主義の思潮と、広範な民衆の社会運動と密接な社会状況の中で形成された。

第二期の知的共同体の「在任の知識人」と「在野の知識人」は思想および言論・出版界をリードした。この時期、丸山によれば、「思想問題」という表現は学生、知識人によって提起されたのではなく、司法省・文部省などの「当局」によって学生・知識人の思想表現を取り締まるために慣用された。「当局」は出版法と新聞紙法で事前検閲、裁判では「朝憲紊乱」の容疑者と見なし、罰金・体刑処分などを執行した。思想と言論の統制、出版物の発売禁止など強制的に出版物の統制を実施した。さらに治安維持法の成立・改正により思想運動、社会運動、さらに思想、学問、言論、表現などを厳しく弾圧した。

その一方、学生・知識人は思想・出版物の統制を意識しながら、民主主義と社会主義の諸思想を検討し、しかも自主的に雑誌・著書を刊行した。社会主義の諸思想のうち、サンディカリズム（サンディカは労働組合の意味）は日本では労働組合の組織率は少なく、その思想の実現性は乏しい。またギルド社会主義は第一次世界大戦前後に注目されたに過ぎなかった。ところが、ドイツ革命やロシア革命で主導したマルクス主義、あるいはマルクス・レーニン主義は、日本でも人間の解放と社会の変革をトータルに解明する運動理論として大きな影響を与え、その結果、学生の多くはマルクス主義の経済・社会の理論を唯一の「社会科学」と見なし、社会科学研究会（「社研」）、さらに全国的に「学連」を組織した。

すでに触れたように、創刊された月刊誌の『我等』・『社会思想』などに、若き新明は政治評論・社会運動論・社会主義論、さらに社会学関係の習作、そのほか編集者の長谷川如是閑の好みに応じて一幕物の戯曲「夜の影」（筆名・那智嵐）を寄稿した。また新明は大宅壮一らの編集の月刊誌『クラルテ』（第一次）に短編小説「称名寺住職」、「砂糖と白楊」、「夢遊武官」を発表し（二五年六月～八月、三号雑誌で終刊した）、依然として文学青年の精神を持続している。

森戸辰男や新人会ＯＢが在職する大倉社会問題研究所の所長と所員とも密接に交流した。このように、新明は知友とともに二〇年代以降の第二期の「知性の王国」の少壮気鋭の知識人の一人だった。丸山によれば、第二期の知的共同体は三〇年代、世界恐慌が日本に波及して昭和恐慌を開始し、満州事変が発生し、思想統制と出版検閲体制が強化され、「国体明徴」問題を契機に国家主義的思潮が高まり、知的共同体は三五年頃に壊滅、変質した。

訂正とお詫び

前号の「評伝その四」の九六～七頁、林要は新人会の宮崎龍介との絶縁状で新明先生が左手で署名したという記述を引用しました。生前、新明先生はそのような事実はないと語っていましたので、その部分を削除し、訂正してお詫びいたします。

私にとっての
遠州森町

鍋屋次郎

遠州森町、十八歳になるまで私を育ててくれた故郷であり、文字通り忘れがたき故郷です。故郷は「遠きにありて思うもの」とも言われていますが、自分自身故郷を出て六十三年、その間には何度も出かけていますが、毎回が落ち着かない訪問でありましたので、自分なりに故郷の思い出を綴ってみようと思った次第です。

以下に、私の中にある森町を、アトランダムに綴ってみます。

森町を知らない人たち

静岡県以外の他県に行ったときに、森町の所在を「静岡県周智郡森町」と言ってみても、殆どの人たちは「知らない。そこ何処？　どこから行くの？　どんな田舎？」の質問が矢継ぎ早に飛び出してきます。そこで広沢虎造の浪曲、清水次郎長外伝「森の石松」の一節

秋葉路や花橘の茶の香り
流れも清き太田川
若鮎踊る頃となり
松の緑も色さえて
遠州森町よい茶の出処
娘やりたやお茶摘みに
ここも名代の火伏神
秋葉神社の参道に
産声あげし快男児
昭和の御世まで名を残す
遠州森の石松・・・・・・。

と全部ではなくても森の石松のことを話し始めると、年配の方々は

「あー、清水次郎長の子分の森の石松か。あの森町ね。わかった。ところで森の石松って、本当に居たの？」

と話が始まって行く。昭和二十四年、森中学の修学旅行で東京・上野に行ったとき、夜の上野に出て、夜店の親父さんとの会話がまさにこの通りでした。

昭和九年三月、森町明治座で行われた広沢虎造の「石松義侠伝」の初日口演は、木戸銭が大人一人四十銭にもかかわらず、熱狂的な会衆で満員だったと伝えられています。この浪曲は、森町の製茶業者がお茶の販売促進のためのコマーシャルとして作ったものです。

遠江の名前の由来

遠江の名前の謂れは、遠江（とおとおみ）、または遠淡海（とおつおうみ）からきています。

近江（おうみ）は大和朝廷から距離的に近い琵琶湖を指し、遠江（とおとうみ）は琵琶湖と比べれば遠い江（今の浜名湖、当時は淡水湖であり、数百年前の大地震で遠州灘と隔てていた陸地がなくなり、その後淡水湖ではなくなった）であることから遠江（とおとうみ）の名がついたと云われています。

遠江と言われ始めたのはいつごろからかは時代的にはっきりしていませんが、万葉集の中に遠江を歌った歌が十八首あると言われ、その中の一つを紹介すれば

「遠江　引佐細江の　澪標（みをつくし）　吾を頼めて　あさましものを」（等保都安布美　伊奈佐保曾江乃水乎都久思　安礼乎多能米弖　安佐麻之物能乎）

があります。

意味　遠江の引佐細江の「みをつくし」を頼るように、私に信じさせておきながら、（でもあなたは）軽い気持ちだったのですね。

「みをつくし」は、船が浅瀬に乗り上げないで安全に進めるように、水深の深いところを示すための標識です。

(http://www6.airnet.ne.jp/manyo/main/fourteen/m3429.html から引用)

万葉集が七世紀後半から八世紀後半にかけて編纂されたことから考えれば、遠江とその頃から言われていたことになります。

遠江の国は今の静岡県中西部、大ざっぱに言って浜松から大井川に至る間を指しており、小生が子どもの頃国鉄二俣線（現天竜浜名湖鉄道）の駅名は森の駅であれば「遠江森」、隣の一宮の駅であれば「遠江一宮」というように全て駅名に「遠江」の二文字がついていました。

蓮華寺と小国神社について

森町に現存する天台宗の名刹蓮華寺と崇敬を集める小国神社は、森町の由来を眺める上で省くことはできません。

蓮華寺

蓮華寺は太田家の菩提寺で、寺の過去帳を見せていただくと寛保年間（一七四一～一七四四）に太田家先祖の最初の記録がありました。子供の頃、位牌ごとの月命日に住職が読経に来てくださるのを見たり、祖父母の葬式その他先祖の法事ごとにお寺に連れて行かれたので、寺の本堂・庫裏・墓地は今でも目に浮かびます。寺に登る階段の下に流れる幅一㍍くらいの堀（農業用水？その時水量は少なかった）の中の石の上に沢蟹が何匹かいて、獲りたかったけど墓参の途次ということで獲ることはダメと言われたことを覚えています。

寺伝によれば現天台宗蓮華寺は、慶雲元年（七〇四）行基による開山と伝えられ、当代で一三九世に至ります。当初は法相宗でしたが、法相宗などの衰退に伴い、蓮華寺六世慈覚大師は最澄の弟子で、天長八年（八三一）法相宗蓮華寺を天台宗に改宗、一山三十六坊を建立し、七堂伽藍の整備を行い、のちに比叡山延暦寺第三世座主となりました。

以下に蓮華寺の歴史を偲ばせる「歴史の散歩道」図面をご覧いただき、若干の説明を加えることとします。（以下寺伝引用）

☆八形山　八形山は、橘山との連山で往古の馬道として開けた生活道路でもあった。山頂は、奇岩奇石の霊山と言われ、伝説の山としても有名で、数多くの神仏が祭祀された海抜一九八㍍で風光絶景の地である。

☆初馬の由来と馬道　古来より馬を田の神の乗り物とする信仰があり、馬を曳いて神詣での行事を初午（馬）祭と云う。初馬は蓮華寺に始まり、大洞院の二の馬で往時は賑わった馬道である。大洞院までの行程は約五、五キロである。

☆黄金塚　元和二年二月二十六日西方上人入定（往古は生きながらにして石棺に入る）の砌り金銀小判を敷きご入寂せられて七日七夜の間、念仏を唱え、鉦をたたき生きながらにして極楽往生した上人様の墓を黄金塚と云う。

西方院上人は、宣舜上人とも云い百十二代の住職である。永禄八年（一五六六）に武田の兵乱に遭い全山火の海となり、七堂伽藍を始め三十六坊悉く焼け落ちて廃転せんとしたが上人之を天朝に請願して左中弁晴豊公及び京都の青蓮院宮尊朝法王より御綸旨を賜り、当山の復興に寄与し再興の祖と仰がれ、徳川家康公より寺領高代々五十五石の御朱印を賜りて元和二年（一六一六）二月二十六日入定された。

☆禅勝上人塚　蓮華寺七十一代（建歴元年、西暦一二一一年）正嘉二年（一二五八）法然上人より念仏奥儀を伝授せられ、遠江各地方に念仏を広め、遠州念仏宗の開祖となり、その隆盛を極む。後鳥羽禅正法王三十七回忌の大法要について御綸旨を賜る。正嘉二年（一二五八）七月十四日阿弥堂屋敷に入定された。

☆観音堂跡　平安の初期天長八年（八三一）慈覚大師が観音堂を建立し、聖観音像をお祀りした堂跡で戦国時代、武田の兵火により永禄年間に消失し、徳川家康により再興された。そして文化（一八一四）十年再興したものを大正十年蓮華寺本坊に移築された跡地である。

☆不動堂跡　飛鳥より奈良朝にかけて慶雲元年（七〇四）僧行基が遠江国に先がけて文武天皇の勅願の不動尊像を祭祀した旧跡なるも、明治九年の野火が延焼し惜しくも堂宇を消失した。

☆鏡石　蓮華寺住三十七代慈海上人が平安の中期、天延二年（九七四）今より千有余年前八形山頂において国家安穏の紫燈大護摩の秘法を修し、火生三昧（火渡り）の修行をしたところ、不動尊像が石に影じて光を放ったと伝えられ三光の鏡石と称された霊石である。

蓮華寺の檀家

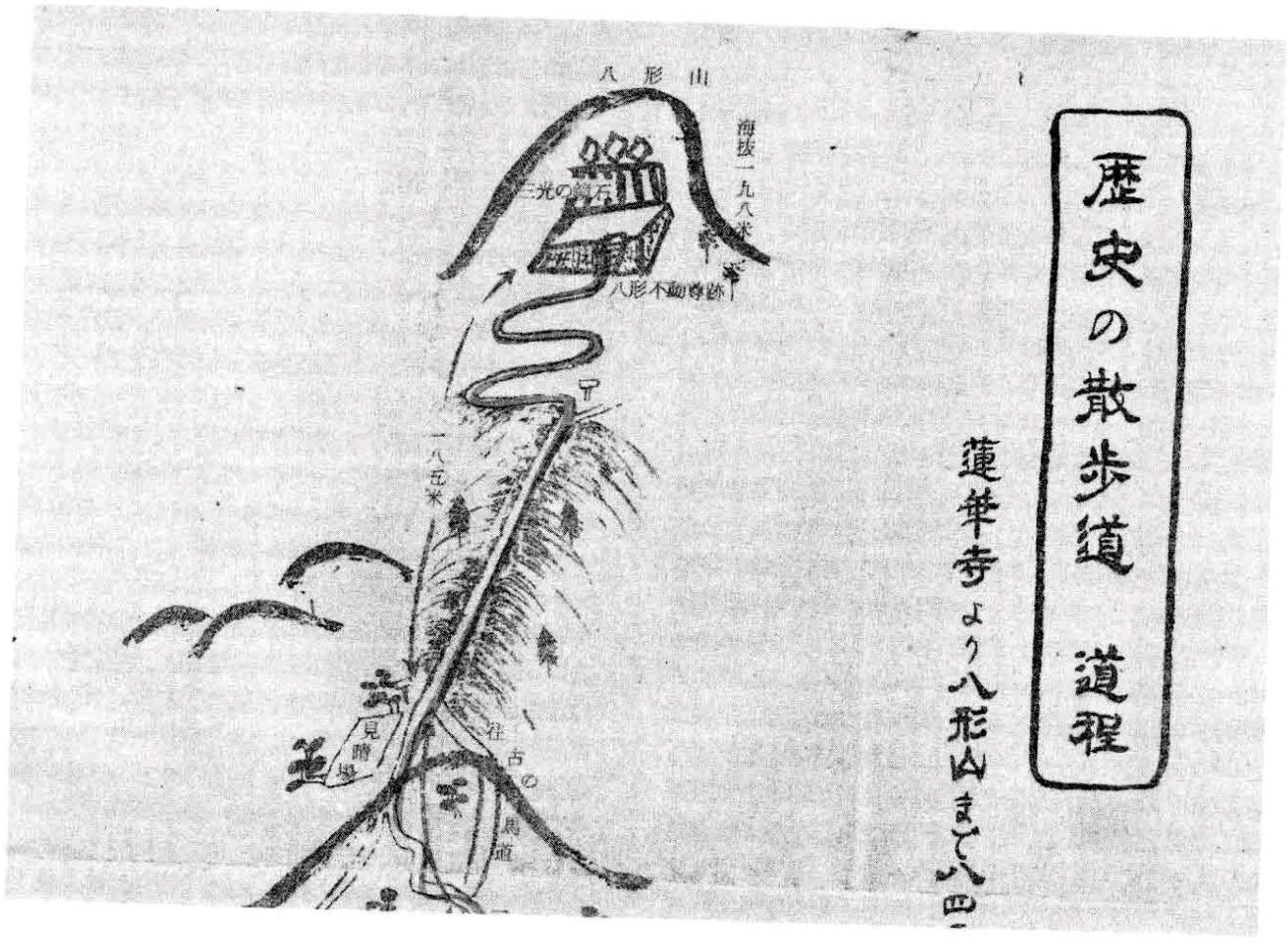
歴史的には寺社は荘園領主として力を持っていたが、一部寺社が一揆勢力として対抗したこともあり、為政者は勢力を弱める必要から、寺社の領地である荘園を廃止し、新たに寺社領を安堵することによって寺社を支配下に治めた。その後、キリシタン弾圧等を原因として、幕府の寺請制度の一端を担い、宗門改めを通して村の人口動態、宗派、通行手形の証人となって幕政の末端に組し、寺社奉行の管轄下におかれた。

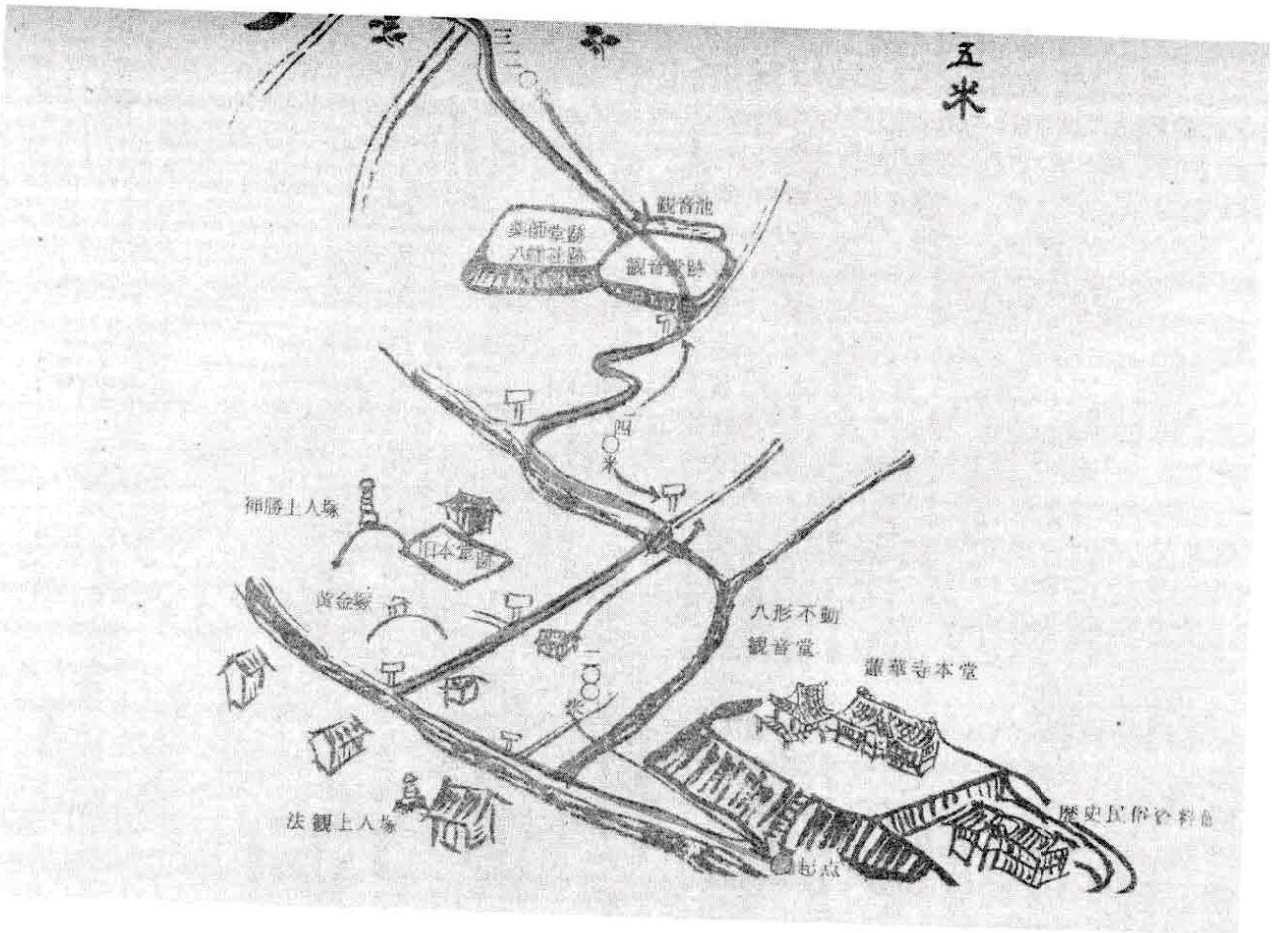
寺の旧記（過去帳）によれば、檀家の最初の記録は慶長十一年（一六〇六）二月、門前八左衛門先祖、ついで慶長十九年（一六一四）二月、門前・六郎右衛門父とある。その後時代を下って安永五年（一七七六）の寺文書の「本末並分限御改書」に門前百姓二九軒、檀方十一軒、文政五年（一八二二）の「人別御改書上」（山中家文書）に蓮華寺内寺領百姓一二六人、内男六十五人、女六十一人とある。文久二年（一八六二）の「天台宗旨御改証文」（山中家文書）に蓮華寺檀家十七軒、人数五十九人、男二十六人、女三十三人の記録があり、初期には門前と金屋の住人が多いが、元禄（一六八八）以降には森町の住人が少なからず加わっている。

金屋の住人とは蓮華寺の西北の一宮村に西脇という地名があり、そこに鋳物師が多数住んでいた。

なお、蓮華寺は後述一宮小国神社の別当や社僧を務めていた時期もあります。

伝説　桜御前由来記　附森町蓮華寺のこと


歴史の散歩道　道程
蓮華寺より八形山まで八四
八形山
海抜一九八米
三光の岩石
八形不動尊跡
一八五米
見晴場
往古の
鳥道


五米
三二〇米
観音池
観音堂跡
四〇米
神勝上人塚
黄金塚
八形不動
観音堂
蓮華寺本堂
一〇〇米
法観上人塚
起点

子どもの頃、落人伝説として桜御前の話は聞いた記憶がありますが、蓮華寺開創一三〇〇年記念寺史に詳細な記録がありますので、全文を引用させて戴きます。

「桜姫幼にして穎悟、和歌音律を好み、才色衆に超ゆ。桜待中納言と私通し一女を生む。清盛の女、中納言をめぐりて桜姫と格競す。後尼となりて遠江にて死す。享年四十四。桜姫は、近衛天皇の久壽二年（一一五五）十六歳の春から美福門院に仕へたという。おそらく保延庚申（一一四〇）の生まれであろう。後の桜待中納言藤原成範との私通も門院に仕へる頃のこと哉、成範は少納言信西の三男、安元二年（一一七六）権中納言に進み、民部卿を兼ね、文治三年（一一八八）五十三歳で薨じ、風雅の道に長じてゐたといはれる。

才色兼備の桜姫と相思の仲になったのも偶然ではない。間もなく藤原氏同族間の醜い軋轢が表面化されて保元の乱が起こり、その結果、信西は所謂淫刑を行ひ、多くの同族を流刑に処した。中でも桜姫の同胞、兼長、師長、隆長は悉く遠国配流と決した。

師長は琵琶等の奥秘を極め、三五要録仁智要録等名曲を残すほどの異彩を放ったから、桜姫とはその趣味の上で、他の兄弟よりも親しかった。彼が大物浦で、源惟守に蒼海波の秘曲を伝授したと伝わるのは、この配流の途上である。

兄弟を失う桜姫の哀慟は想像に剰あるが、成範の狼狽は如何ばかりであったろう。いとしい姫を悲嘆の淵に落としたのは我が親、信西。然のみならず、信西は平氏との政策関係から、清盛の女を迎え成範の正妻とした、が、桜姫に対する寵は一層募るばかりで、間もなく一女をもうけ、三条小河に屋敷を構えて住はしたので、後にこの女児を小河殿と呼んだ。

幾許もなく、平治元年（一一五九）、信西が殺され、成範配流の噂も起こったが、清盛の女婿であるから、刑を免れることだけはできた。しかし、清盛はこの恩典と引き換えに妻に対し寵を求め、桜姫を流そうと計った。清盛の奸計が辛辣を極め、成範の恩愛にもすがりかねた姫は、永暦元年（一一六〇）の秋美福門院崩ずと聞くや、終に意を決し、丈なす黒髪も、住み馴れた都も、愛し子も、凡ゆる羈絆を断ったといふ。

その後の消息は明らかでない。一族の流されてゐる東国へ向かひ、北陸道から武蔵、常陸に至り、東海道を西上し、たものであろうか、兎も角この間、流浪の歳月は十有余年に及んでゐる。

成範の官位は次々と昇って、仁安（一一六六～一一六九）年間小三位に叙せられたが、桜姫への春戀は決して弛まなかった。特に小河殿が成育するにつれ、母の俤に髣髴たることが却って成範の心を痛めた。

仁安三年（一一六九）正月、京都は大火に遭ひ、中納言

◉森・天宮の町並み

古くから地域の拠点的な位置にあった森町村（森市場）は、三島神社が鎮座する山「森山」にちなんで村の名がつけられたといわれています。中世の市場通りは太田川の水害に見舞われることが多かったため、戦国期から整備された町割りが、本町・仲町・横町・新町の今の町並みとして残っています。

発明王で日本製糖業の父・鈴木藤三郎

1855（安政2）年、遠州森に生まれ、5歳で叔子庄鈴木伊三郎の養子となりました。19歳で家督を継いだ後、1883（明治16）年に米穀の国内製造に成功したのを皮切りに、白糖製法、製塩業、生糸乾燥装置など広い分野で自ら工夫を重ね、技術開発につとめました。生涯で150件の特許を取得、日本の産業革命を牽引した一人です。



1577（天正5）年に徳川家康が森市場に出した禁制

土蔵や町家が残る町並み

森町は掛川宿から秋葉山にいたる秋葉街道の沿道に当たり、主要な宿場町でした。商家・旅籠も多くあり、北遠からの茶・木材・椎茸などの集散地として、また海浜からは塩や乾物が集まり、人や物の移動が活発だったことから賑わいをみせていました。現在も残る古い町並みや土蔵に、当時の面影を見ることができます。

の屋敷も焼かれた為、樋口町に新邸宅を構へた。この時、彼は、吉野から数千の桜を移植した。その名の如く、儚く散った姫に対し、愛着止むことのない心を慰めたのであろう。

森町旧家山中家蔵「森町始の記」によれば「蓮華寺十六代慈覚大師は、天長八年（八三一）よりの住とあり、その後の頃なるや、堂上の人一人此に来りけるを住所しつらひ安住なさしめ給ひける所の跡なるや塚（桜御前塚）今にあり（筆者注・・・桜御前の石塚が森町小学校校門左に今もあります）、この辺の田地を桜御前といふ。字名になりて残り、前なるところにや小御門（みかど）といふ」とある。

この前後の模様を察するに、治承元年（一一七七）五月延暦寺座主明雲は清盛のため、伊豆に流され、その途次、遠江に入って当時東海の本山に当たる蓮華寺に錫を止められた。蓮華寺は慶雲元年（七〇四）行基菩薩開山となられ、文武天皇の勅願により、八形不動明王堂建ち、十六代の慈覚大師の世、比叡山延暦寺末に加った。この時から、寺領は一万石にのぼり、境内本堂観世音十二所権現社、同奥院八形不動堂、同稲荷小社、仁王門八幡社十二天社をはじめとし、三十六坊建ち並ぶ大規模な境内を有するに至った。

坊の名に残るものを挙げれば、山本坊、西蓮寺坊、圓想坊、杉本坊、般若院、一乗坊、地蔵坊、西来寺坊、分増坊、極楽坊、安養坊、西蔵坊等である。

中にも六十五代調意住職の世、高倉天皇の嘉應年間（一一六九～一一七一）、比叡山東坊功徳院の上人大阿闍梨（皇円大阿闍梨）が遠江桜が池を尋ねて入られ、当時の庵大な勢力と、豪壮な構内とは得て知るべきである。明雲の配流もこの前後で、街道を西上する桜姫が三つ木の里に蓮華寺の門を叩いたのは、都の高僧といふ明雲に心をひかれたことに由るであろう。長年月に亘る流浪の後、この地へ永住と決した原因は、山紫水明、明媚な風光が都に依稀たること、尋ねる兄弟の消息が判明せぬことが主たるものであろうか。

斯くて、庵山（注①）の下に小庵を結び、一族の冥福を祈る読経灌佛の片手間に土地の子弟を集めて、薫化努めるといふ侘しい乍らも優雅な日を送り、鄙びた人々とは自ら異なる生活を、誰云ふとなく、桜御前、庵への途を小御門（こみかど）小路と名づけたのは、今にその地名が残っている。

御前が庵を構えて、二星霜即ち、治承三年（一一八〇）の冬、痛ましい報知が都に伝わった。

畏くも、帝の寵妃となった小河殿（潜に宮を出でて嵯峨の民舎に匿れたが、帝は北面の武士源仲國に命じて之を探し遊ばされ、仲國独り、騎して嵯峨に至り、遥かに想夫戀の琴声を聞いて伴い帰った）は清盛の手に捕へられ、敢えない最後を遂げた。思へば、才色衆に優れる母子が同じ悲運に弄されたのはいたましい極である。

今は成範も、桜の邸に風流を楽しみ、散り行く花を惜し

んでは又来ん春を待ち侘びる日を送ってゐた。

（開創千三百年　記念事業寺史（一八八頁記載）伝説桜御前由来記　より全文引用しました）

（作年不明　浜松市立図書館　蔵）

（注①）庵山は森町小学校のすぐ北側の小高いなだらかな山で、「庵山の下に小庵を結び」を地理的に考えれば、小学校正門左に現存する「桜御前石塚」の場所になるのではないかと思います。庵山は森町小学校の校歌に

常盤の森の庵山の
変わらぬ姿仰ぎつつ
日ごと日ごとに集い来て
学ぶ吾らの楽しさよ

と歌われていました。私も六年間歌ってきました。（七十年前の記憶を辿っています。歌詞の記憶相違は深謝）

なお、蓮華寺墓地から太田家の墓前に通っている狭い山道を東に行くと、庵山の下の森小学校にでます。

蓮華寺と一宮の鋳物師

中世における森町域内には、遠江の小国神社が存在したが、それには様々な人が従っていた。その一つに鋳物師（いもじ）と呼ばれる工人が遠江一宮西脇にいた。鋳物師は金属を溶かし、諸種の型に入れて、武器や仏像・鏡・釣鐘・鰐口（わにぐち）・鍋・釜などを鋳造した。彼らは戦国時代は蓮華寺（小国神社の社僧）の支配下にあり、西脇に居住していた。伝承では西脇の近くの西金谷にもいたという。

森という地名は中世以降に登場するが、一般化するのは永禄六年（一五六三）以降である。元来、森は太田郷と呼ばれていたが、蓮華寺門前に市が立ち、森山（三島山）の麓に市場集落が形成され、その辺を森村・森郷（もりのごう）と云うようになった。

森町は交通上の要地であるため、永禄年間（一五五八～一五七〇）に今川氏は関を置いた。森は遠江の山間地域と平野地域を結ぶ接点に位置する。即ち、森から北上する道（信州街道）、川根筋（家山・下長尾）へ抜ける道、また、南部へ向かう道（掛川・見附・浜松）もあり、南北・東西の道の交叉する地点にある。

森町の鋳物師　山田七郎左衛門

近世を通じ、遠江・駿河両国の鋳物師（いもじ）を支配したのが山田七郎左衛門家であった。遠江一宮近辺を拠点とする鋳物師の存在は、南北朝までさかのぼることができる。その後、蓮華寺・今川氏などとのつながりを持ちながら、近世森町鋳物師へと連なって行くのである。

山田七郎左衛門は、天正十五年（一五七八）、小牧の陣

従軍などの功績により、徳川家康から「駿遠（すんえん）両国鋳物師惣大工職」の朱印状を与えられた。当時の鋳物師は、大砲や石火矢など最新の兵器を製造する技術者でもあり、軍事的な必要性から山田七郎左衛門は徳川軍に組み込まれていたのである。

家康による幕藩体制成立後、平和な時代の到来とともに、鋳物師の経営にも大きな変化が現れる。それまでの軍需中心の経営は行き詰まりを見せ、民間需要への転換が進められる。

このような中で、近江出身の鋳物師が駿遠に入り込み、在地の鋳物師の経営を圧迫してゆく。これに対し、山田家は約八十年をかけて、ようやく自らの支配体制を確立する。この支配の根拠が家康朱印状であった。

近世の鋳物師の主力製品は、鍋や釜であった。遠州では鋳物師が鍋・釜屋商人に山田家が定めた価格で請売りをさせる方式を取っていた。この他、栄泉寺・大洞院・可睡斎など各地の寺院に残る梵鐘が鋳物師の活動を物語っている。

幕末期、山田氏は、森町などの知行主であった土屋氏の御用達金などを賄い、また、陣屋の代官に登用されるなど、鋳物師以外の活躍も大きい。（出典引用下記 HP）

(http://www.tomn.morimachi.shizuoka.jp/kanko/rekishi/choshi22.html)

国立資料館での山田家資料から

徳川家康からの朱印状により、駿・遠二か国の鋳物師惣大工職を任命された結果、駿・遠の鋳物師の統括者となる。毎年正月には駿・遠二か国内の鋳物師は山田七郎左衛門のところに集まり、山田七郎左衛門の支配下にあることを認める署名捺印をしていた。（おそらく、寺の梵鐘、仏像の製造などは山田家の承認と山田家への上納金があったものと思われる）

釜屋証文・鍋屋証文

先にも記載されている通り、徳川政権になってから武器弾薬の市場性は皆無となり（買った大名は徳川政権に対する謀反容疑となる）、軍事需要は皆無で、鍋釜類の需要しかなくなった。（寺の梵鐘や仏像の鋳造は鋳物師が日常の生活を賄うだけの需要はない）。そこで、鋳物師が作った鍋・釜を鋳物師の指定価格で売って歩く鍋屋・釜屋商人が必要になり、その人たちから徴求したものが釜屋証文であり、鍋屋証文である。

（参考　記憶では森町に鍋を売って歩いた商人が三件あったものと思われる。屋号しか記憶はないが、「鍋権」（なべごん）、「鍋とも」（なべとも・・・漢字は不詳）、「鍋屋」（なべや）の三軒であり、「鍋屋」と「鍋とも」は江戸末から明治初めにかけて姻戚関係にあり、「鍋権」は江戸末から明治～昭和初期に「鍋屋」の大番頭を務めていたことが「鍋屋」の記録に存在する。鍋屋は太田家であり、小生のペンネームはそこに由来します。）

太田川の由来

冒頭記載の広澤虎造の浪曲にある「流れも清き太田川」は、子供のころの私にとっては、春から夏・秋にかけては学校から帰ると直ぐ魚獲りの道具を持って出かけ、終日過ごした遊び場でした。清流に泳ぐ鮎、川石に隠れている川海老、小魚を獲ったり、流れを一部堰き止めて魚が上流に上る道を作ったり、友人と泳いだり、自然とともに過ごしていました。

川の名前は私の名字「太田」と一緒で、我が家の川とは思いませんでしたが、大変親しみを持っていました。

川の名前の由来は（遠淡海地志から抜粋　土屋家の記載事項から）、「森の郷、往古太田村と号す。故に太田川と云ふ」と記録にあります。また、森町地域の物産としての記録は（太田川を含めた土地の物産と思われる記事から）

砥石、菊甲石（又は亀甲石）、鮎、川魚、茶、椎茸、古着、米　と記載があり、鋳物師のことも特に「金堀穴　西脇（注　蓮華寺の西、旧一宮村）ニアリ。穴二ヶ所　隋松寺山　清石衛門山。穴の大きさ（注　と思われる）　中凡五、六畳敷アリ」と記載されています。

小国神社

御祭神

御祭神は大己貴命（おおなむちのみこと）（だいこくさま）と呼ばれ、豊葦原の瑞穂の国（日本の国）を造り治められた天孫に国をお譲りした神様で、『古事記』・『日本書紀』に多くの神名が伝えられています。神話の中でも「因幡の白うさぎ」は良く知られており、赤裸にされたうさぎを助けられた、心のやさしい神様として親しまれております。

国上開発・殖産・医療などの知識や文化を人々に授けられるなど大きな力を発揮され、国土経営・諸業繁栄・夫婦和合・縁結び・厄除けなど、御神徳の高い神様として崇敬されております。

御由緒

創始は神代と伝えられ、延宝八年（一六八〇）の社記によると、人皇二十九代欽明天皇の御代十六年（五五五）二月十八日に本宮山峯（本宮山）に御神霊が鎮斎せられて後、勅使が遣わされ、山麓約六キロの現在地に社殿を造営し、正一位の神階を授けられました。

それ以来、年々御神前に幣帛を捧げられ文武天皇大宝元年（七〇一）春十八日に勅使奉幣の際、特に十二段舞楽を奉奏されました。延喜七年（九〇七）延喜式内社に列せられ、中世には武将をはじめ朝野の崇敬が極めて篤く近世に

至っています。

元亀三年（一五七二）の戦いでは、徳川家は御神霊を別所に遷し、願文と三条小鍛冶宗近作の太刀を奉り戦勝を祈願した後、社殿を全て消失しました。天正三年（一五七五）に勝利を得た家康公は、御本殿の造営、拝殿・桜門を再建され、更に社領五百九十石の朱印を奉り、以降世々の徳川将軍家より、社殿の改造・修復料を寄進されました。明治六年六月十三日に国幣小社に列せられ、明治十五年三月に再度の火災により御本殿以下建造物など悉く失いましたが、明治十九年に復興され現在に至っております。平成十七年には御鎮座一四五〇年祭が斎行され、『遠江国一宮さま』として崇敬され親しまれております。（全文　パンフレットより引用　文字・仮名遣い原文のまま）

大洞院

応永十八年（一四一一）恕仲天ぎん禅師（ぎんは門構えに言を書く）は観音菩薩の教示により初めてこの地に錫を留めますと、時の将軍足利義持公は禅師の高徳を慕い帰依して、自らその荘園とその境内の地とを寄贈し、禅師のために一大梵刹を創建し、これを橘谷山大洞院と号し、曹洞宗の名刹です。以来数百年大洞院の門風は益々栄え、現在に至っています。

この寺の一角には「石松の墓」があります。この墓石が、自分に正直で、開けっぴろげで、ざっくばらんな性格、これが次郎長に愛され、森町の人々に愛され、親しまれてきた所以と思います。

森の石松略伝（村松梢風　作　昭和二十三年）

村松梢風　明治二十二年（一八八九）～昭和三十六年（一九六一）　現森町飯田に生まれる。著書「正伝　清水次郎長」他

旧幕の頃、秋葉街道に名高い遠州の森に、五郎と云う侠客があった。森の五郎と呼ばれ、遠近に侠名を馳せた。

ひととせ、森町の天宮神社の祭典の折に、境内に一人の迷ひ子が現はれた。年は七、八つの頑是なさ。どこから来たかと問へば、只指差して「あっち」と答へる。名を問へば「石松」と答へた。

神社の付近の人々が憐れんで食物などを与へてゐる処へ来合わせた五郎であった。事情を聞いて五郎がこの迷ひ子の石松を引き取って育てることになったのである。

石松の親は木挽きであるとも、また炭焼きであるとも云ひ、名も生国も明らかではないが、妻は夙く喪なひ、やもめ暮らしで、一人児の石松を連れて他国から入り込んできて、森の奥辺りでさうした渡世を送るうち、不幸にも病のために世を去ったので、あはれ石松は孤児となって山間に商運、ギャンブル運を呼ぶという噂が広まって、削って行く人が後を絶たず、建て替えること二回、現在は三代目で、これも掘った文字が読めなくなり、削り直したということです。

（http://www.inh.co.jp/maru7/mori/daitou/html から引用）

余談ですが、私が銀行勤務の頃の事、掛川近くの菟城ゴルフ場に支店のお客様を案内し、ゴルフを終わった後、帰り道に石松の墓に行きました。麻雀好きの方々が墓石を削って石片を懐に入れて「これで今夜の麻雀は勝ったも同じ」とニコニコしていましたが、その夜、墓石の石片を懐にした四人が卓を囲んでいました。私は「ご利益のあるのは誰？」と笑いながら見ていました。

森の石松

森の石松についてどのように紹介記事を書いたら良いのか、大変困りました。森町史や森町図書館にある図書も見ましたが、結果として森町が生んだ作家「村松梢風」の文章がありましたので、石松の生涯をお知らせするのにはそれを引用、紹介することがベストと思い、以下に記載します。

私は石松が大好きです。子どもが大好きで、情にもろくて、反面、誰にも臆しない勧善懲悪的で、全く飾り気のない、取り残される運命となったのであった。併し乍ら、歳に似気なき大胆不敵な性格は其の頃より既に閃き、足に任せて森の町に迷い出で、図らずも仁侠五郎の手に救ひ取られたのが、その開運の創まりで、後世に「森の石松」の名を遺すまでに立ち至ったのである。

石松は幼少より腕白を過ぎた乱暴者であった。しかも、生まれ付き怪力を具え、十二、三歳になると、すでに大人と角力をとっても負けなかった。元来山の中で育てられてゐるから木登りや走ることは猿のごとく、敏捷眼を驚かすばかり、嘗って一度も負けたことがない。然るに育ての親の五郎は、職業柄に似合わぬ温厚の人故、此の石松の乱暴をほとほと持て余した。

其の頃、東海道清水港の侠客清水次郎長は、漸く売り出しの途上にあったが、ある時森の五郎の許に足を留め、審に石松の人と成りを観察して、大いに未来を嘱望した。そこで五郎に懇願して石松を貰い受けて我が手に引取り、清水港へ連れ帰ったのであった。時は天保の末年頃で、石松は十四、五歳であった。

次郎長は子弟を養育することに大いに努めた人であったが、石松は其の中の尤もなる者であった。即ち一の乾児であった。石松は森を出身とするがゆえに森の石松と呼ばれた。

石松は長ずるに及んで膂力衆に勝れ、且つ剣に長じ、平常酒を好み酔いを買って喧嘩を事とした。清水一家、一人

彼に当たる者がなかったのみならず、次郎長に従って遠征をして各地の梟雄を屈服せしめ、豪勇森の石松の名四方に震ふに至った。併し乍ら石松は資性極めて正直、単純で、正義を尚び、不義背徳を憎むこと蛇蝎の如く、情宜の為には命を軽んじ、横暴なる権力に反抗し、常に弱者の味方を任じた。当時の侠客社会にあっても稀なる理想的快男児であった。

石松は非常に子どもが好きで、よく近隣の児童を集めて菓子を買って与へた。石松が一度憤激して暴れだすと、鬼神も当たるべからざる勢ひであったが、子供を側へ連れて行けば忽ち鎮まったといふ一事を以ても、彼がいかに無邪気で、天真爛漫で、そして神の如く潔白であったかを想像するに難くないのである。

されば次郎長石松を重んじたことは、他の儕輩の遠く及ぶ処ではなかったとのことだ。爰に、石松の大恩人にして育ての親たる森の五郎は不慮の事から、人手にかかって横死を遂げたのであった。石松憤慨して、五郎のために復讐せんことを誓った。次郎長また之を援け、八方捜索の結果、遂に五郎の仇人が甲府に在ることを探知し、清水一党大挙して之を甲府の長楽寺に襲ひ、首尾よく復讐を遂げたのであった。

此の事より次郎長は、甲州の侠客黒駒勝蔵との間に隙を生じ、後十年に亘る我国侠客社会未曾有の大闘争の端を発したのであった。萬延元年（一八六〇）、次郎長は四十一歳であった。石松は二十歳であったと云ふ。

此の前、次郎長は尾州のほげたの久六と云ふ者を討ち取り、恩人の仇を報じたのであった。此の事について、日頃信仰する讃岐の金毘羅神社に祈願を掛けたのであるが、首尾よく目的を達したので、御礼詣りに赴くべきであるが、折悪しく自身は差支えがあって行かれず、一の乾児石松をば代参に立てたのであった。其の時次郎長は、久六を斬った井上真改の一刀を石松に持たせて金毘羅宮に奉納した。

石松は首尾よく代参の役目を果たし、帰途、江州草津の見請山鎌太郎なる侠客を訪ねると、鎌太郎は喜んで石松を厚遇し、数日滞在せしめた後、石松の出発に臨んで、先年名古屋で病没した次郎長の妻のために香奠として金二十五両を石松に托して次郎長に贈った。

石松はその金を持って清水港を指して帰る途中、遠州中郡の都鳥吉兵衛なる者を訪ねたことが、彼の不運の因であった。吉兵衛は心善からぬ人間であったから、石松を欺き、鎌太郎より托されたる二十五両の金を横領した上、卑怯にも常吉、梅吉の兄弟三名共謀して遂に石松を殺したのである。

此の委曲は次郎長の伝に詳しく、講談、浪曲等に作られて人口に膾炙する物語であるから、爰には省略するが、此の時石松は吉兵衛兄弟のために騙し討ちに遭い、満身に刀創を受けて猶且つ死せず、叢の中に潜れて一度び危地を脱することを得たにも係らず、折から通り掛かった兄弟より

卑怯者と罵られ、憤激の餘り我を忘れ、わざわざ叢中より飛び出し三名を相手に奮闘して遂に乱刃の下に命を捨てたのであった。此の悲愴なる最後こそ、森の石松の真骨頂を最もよく発揮せるもので、遊侠伝中に奕奕たる異彩を放つ所以でもある。

石松の遭難と、都鳥兄弟の不義を知った次郎長の憤りは譬ん方なく、必ず石松の仇を討つべしと誓った。吉兵衛兄弟は転々として次郎長の追窮から逃れてゐたが、文久元年（一八六一）正月十五日、反って清水に逆襲に来った兄弟を次郎長は東海道の追分で討ち果たして首尾よく本懐を遂げたのである。

次郎長は晩年に至る迄、談たまたま石松の事に及べば、涙涕して、其の死を惜しむこと我が子の如くであったと云ふ。

我が国の侠客は封建時代の産物である。そして石松の行路は素より学ぶべからざるものであるが、而も猶、正義仁侠を理想とした其の精神こそは日本魂の発顕であって、現代に伝へていささかも恥じないのである。世人が石松の伝を知って、その短を棄てて長を採らば至倖である。

（注 http://www.inh.co.jp/maru7/mori/ishimatsu.html から引用させていただきました。　文体・漢字・仮名遣いは原文のままとしました）

あとがき

森町について、蓮華寺と関連して森に伝わる伝説、小国神社、鋳物師、等について、個人的に興味ある観点から見た、いくつかの森町の始期から歴史的側面を記載し、大洞院と森の石松で、森町の紹介的な本稿は終わりました。

江戸期の森町は、古着の集散地としてその繁盛ぶりは注目されていました。また、十数台の屋台が練り歩く、毎年十一月に行われる森の祭りも、森町に育った人々には忘れることのできない故郷の一大行事です。森町の歴史と社会変遷の中で寛保年間（一七四一）から昭和二十年までの太田家の記録と私の記憶を通して、森町の中での太田家がどうあったかを、これからいつになるか分かりませんが書いてみたいと思っています。

平成二十八年三月

鍋屋次郎

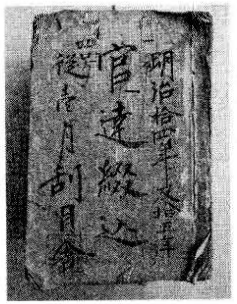
明治時代の著述者　渋江保の一生（その五）

山本勉

第四期　浜松時代（静岡県浜松市）

一八七五年（明治八年）二月～一八七九年（明治十二年）十月

師範学校を卒業した渋江保が浜松県に赴任した時のことが『渋江抽斎』に次のように記されている。「抽斎歿後の第十七年は明治八年である。一月二十九日に保は十九歳で師範学校の業を卒え、二月六日に文部省の命を受けて浜松県に赴くこととなり、母を奉じて東京を発した。」(1) 渋江が浜松県へ向かったのは、明治八年に開校した瞬養学校に赴任するためであった。実際に渋江が瞬養学校に勤務したことが明治七年に出版された『文部省（明治七年）第二年報』に見られる。同書百十三頁から百十七頁の濱松縣学事年報の教員養成の法に「子弟十四歳以上の者を変則生徒とし和学文学歴史理学地理書算術等を授く小学教員陶成の科を設く尚且近日派出の師範卒業生渋江保を訓導に任し是を元程として専小学教授方一定普及の挙を振起せんとす」(2) とある。また、『浜松北高等学校八十年史』に、当時の渋江の給料について以下のような記載が見られる。「瞬養学校の教師としては渋江のほかにわかっているものが数人ある。『明治八年七月ヨリ十二月迄経費内訳表　浜松県』（袋井東小学校文書）の中の「教員給明細表」によると、渋江保は六月二三日に月給二〇円となったが、月給二〇円を給せられたのは二人、年一五〇円となっている。（中略）当時渋江保は高町の坂下、紺屋町西端の雑貨商江州屋速見平吉のはなれ座敷を借りてここに移った。」とある。(3) ここに記載の『袋井東小学校文書』の袋井東小学校とは、静岡県袋井市にある袋井市立袋井東小学校のことである。実際に『袋井東小学校文書』の『明治十四年及十五年官達綴込従壱月刮目舎』の中に渋江保の名前を確認することができる。ここに記載の「刮目舎」とは、袋井東小学校の旧校名である。


（袋井東小学校文書：袋井東小学校蔵）

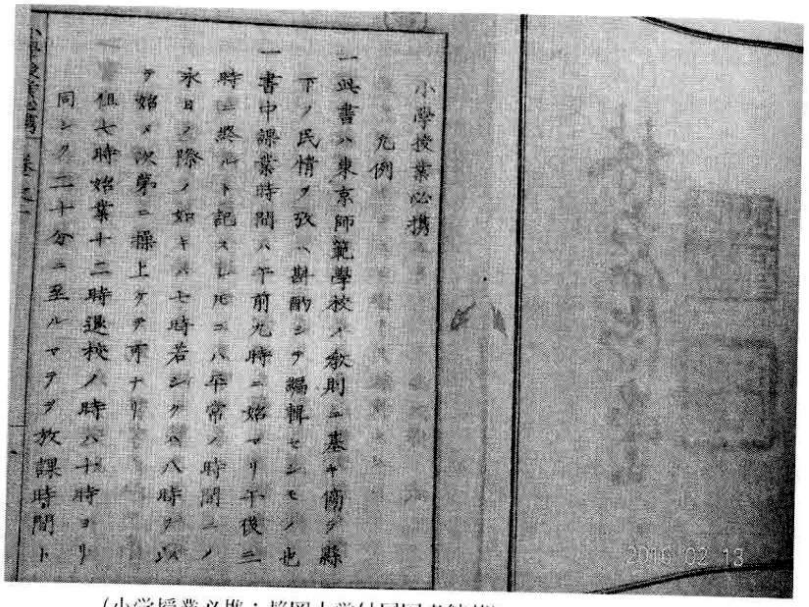
渋江の浜松県での生活の様子が『渋江抽斎』に次のように記されている。「山田屋の向いに山喜という居酒屋がある。保は山田屋に移った初めに、山喜の店に大皿に蒲焼の盛ってあるのを見て五百に「あれを買って見ましょうか」といった。「贅沢をお言いでない。鰻はこの土地でも高かろう」といって、五百は止めようとした。「まあ、聞いて見ましょう」といって、保は出て行った。価を問えば、一銭に五串であった。当時浜松辺で暮しの立ちやすかったことは、これに由って想見することが出来る。」(4) とある。鰻五串が一銭とすれば、月給二十円の渋江は、当時経済的に余裕のある生活をしていたことがわかる。またこの頃の渋江の様子が山路愛山の『独立評論』再興第七号、澁江保氏談話「明治初年の学風」に次のように詳しく書かれている。「卒業間際になると各県から学務課の役人達が上京して来て、卒業生聘用の交渉をする。当時師範学校で鼻つまみにされて居たのは東京府と浜松県であった。それは東京府はあまり開け過ぎて居るため、又浜松県へは旧幕府の人が沢山行って県庁に職を奉じてるので、薩長政府に対する反感から、其政府のよこした人間に対して何を仕出来すかもわからないためであった。私は卒業間際に中国の或る県へ赴任することに相談が出来て居たに拘はらず、卒業後になって文部省から、処もあろうに其の浜松県へ派出を命ずといふ辞令が来た。然るに他の県では態々役人が迎へに来たり、赴任旅費をよこしたりして居るが、浜松県からは何の沙汰もない。仕方がないので此方から押しかけて行って見ると、同県の学務課長大江孝文といふ人が、何しに来たといふ挨拶、此方では師範学校卒業生などは要らない、来て貰っては却って邪魔だと、丸で寄って付けないやうな鼻息だ。私も勃然としたから、文部省の辞令を出して、うんと言い度いことを言ってやった揚句、それでは帰って文部省へ此旨報告すると、少し高飛車に出た。其れに少しく意を動かした上に、私が旧津軽藩のものだといふと大江は「私の母も津軽だ」と言って其れから大に打ち解け、兎に角暫く滞在するやうにと勧める。私は大江に、師範の卒業生はいやだなどと食はず嫌いはおよしなさい、兎に角実地の授業を一度お目に掛けるから、其上で採否を決せられ度いと言って、数十人の人を集めて例のアイウエオの発音を教えると、大江は大に感服してしまって、直ぐに私を採用し、やがて県に師範学校、中学校を立てて私に其の授業を任せるやうになった。此の大江といふ人は詩人の大江敬香の父で、「雷大江」といへば

誰れ知らぬ者のない位、頑固と我儘とで有名の人だった。圧制家で、人の言ふことなど容易に容れないが、其の代り妙に光風向霽月の襟懐もあって、一度信任した以上は、全く任せきりに其れに任せた。土地の者などは大に恐れて、高が学務課長位なのに、常に「大江公」と呼び、此人が道を通れば「大江公のお通りだ」と言って大騒ぎをしたものであった。下僚に対しては勿論厳格を極め、小学教員などには、「おい教員々々」と呼んだもんだ。官尊民卑の風は此当時一般に甚しかったが、就中浜松県などは殊にひどい方で、県令の林の外出する時など、部下の者はどんな雨降りの日でも屹度傘もささずに後から随いて行ったものである。私はこの県で五カ年間勤務し、その間に多少の学資を貯へて上京し、慶應義塾に入ったのである。」(5)

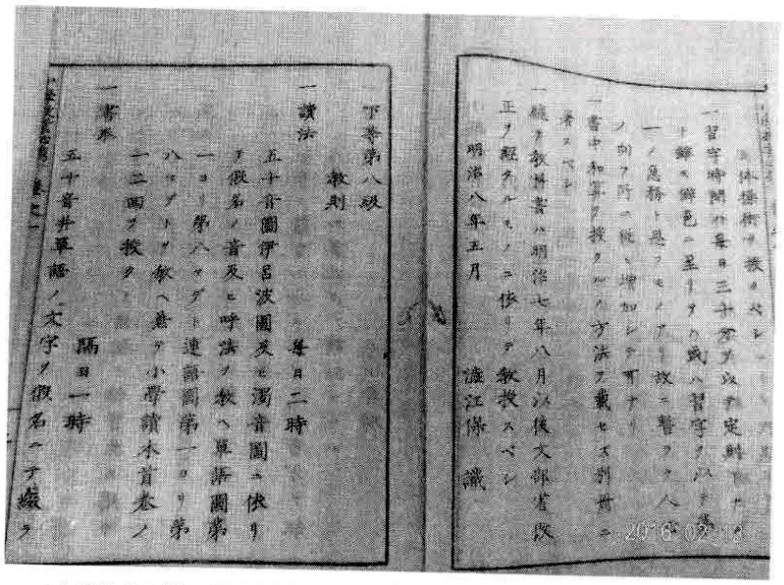
渋江保が勤務した瞬養学校は、一八七六年（明治九年）八月に浜松県が静岡県と合併するに伴い、十月に静岡師範学校浜松支校と改称、一八七七年（明治十年）、浜松変則中学校、一八七八年（明治十一年）には、更に浜松中学校と改称している。渋江は浜松に五年余り過ごしているが、この間の渋江が残した足跡として忘れてはならないものとして、一八七六年（明治九年）一月に出版された『小学授業必携』がある。渋江が勤務していた瞬養学校（師範学校）の生徒の指導書として執筆したものである。『小学授業必携』は、静岡大学附属図書館と国立教育政策研究所教育図書館の二館にあることが確認できた。本稿に掲載したものは、静岡大学附属図書館に所蔵されているものである。

渋江は一八七九年（明治十二年）十一月に慶應義塾に入学するが、渋江が浜松を去り、慶應義塾に入学するまでの経緯が『渋江抽斎』に次のように書かれている。

「抽斎歿後の第二十一年は明治十二年である。十月十五日保は学問修行のため職を辞し、二十八日に聴許せられた。これは慶応義塾に入って英語を学ばんがためである。これより先保は深く英語を窮めんと欲して、いまだその志を遂げずにいた。師範学校に入ったのも、その業を卒えて教員となったのも、皆学資給せざるがために、やむことをえずして為したのである。既にして保は慶応義塾の学風を仄聞し、頗る福沢諭吉に傾倒した。明治九年に国学者阿波の人某が、福沢の著す所の『学問のすゝめ』を駁して、書中の日本は爾たる小国である」の句を以て祖国を辱むるものとなすを見るに及んで、福沢に代わって一文を草し、『民間雑誌』に投じた。『民間雑誌』は福沢の経営する所の日刊新聞で、今の『時事新報』の前身である。福沢は保の文を采録し、手書して保に謝した。保はこれより福沢に識られて、これに適従せんと欲する念がいよいよ切になったのである。保は職を辞する前に、山田脩をして居宅を索めしめた。脩は九月二十八日に先


小學授業必携
凡例
一此書ハ東京師範學校ノ教則ニ基キ傍ラ縣下ノ民情ヲ攷ヘ斟酌シテ編輯セシモノ也
一書中課業時間ハ午前九時ニ始マリ午後三時ニ終ルト記スレ凡コハ平常ノ時間ニノ永日ノ際ノ如キハ七時若シクハ八時ヲ以テ始メ次第ニ操上ケテ可ナリ
但七時始業十二時退校ノ時ハ十時ヨリ同シク二十分ニ至ルマテヲ教課時間ト

（小学授業必携：静岡大学付属図書館蔵）


下等第八級
教則
一讀法　毎日二時
五十音圖伊呂波圖及ヒ濁音圖ニ依リテ假名ノ音及ヒ呼法ヲ教ヘ單語圖第一ヨリ第八マデト連語圖第一ヨリ第八マデトヲ教ヘ兼テ小學讀本首卷ノ一二画ヲ授ク
一書形　隔日一時
五十音并單語ノ文字ヲ假名ニテ綴ラ

（小学授業必携：静岡大学付属図書館蔵）　「明治八年八月　渋江　保」

ず浜松を発して東京に至り、芝区松本町十二番地の家を借りて、母と弟とを迎えた。」(6)とある。同様のことが山路愛山の『独立評論』再興第九号の澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」の三十四頁に見られる。「その後私は師範学校に入り、卒業後浜松県の学校に赴任したがある時阿波の人某が何とかいふ本を書いて福澤先生を大に攻撃した。それは『学問のすすめ』の中に『日本は蕞爾たる小国なり』とあるのを論難して、日本は上は高天原より下は黄泉の国に亘る大国で、なかなか小国どころではないといふやうな馬鹿げた議論をしたものであった。私はそれを読んであまり馬鹿々々しいもんだから其の反駁文を五六十枚書いて、当時慶應義塾から発行していた民間雑誌（今の時事新報の前身）に投書した。それが掲載されると共に福澤自筆の手紙が来て、私の投書の礼を言った上に、東京へ来たらぜひ訪ねて来いなどと言ふて来られた。私は其時先生のやうな大家が見ず知らずの後輩に対し随分丁寧な礼を尽したものだと思って頗る意外に感じた。当時私は慶應義塾に入って最う一度修業をしたいと思って居た折柄だったし、且つ友人の古渡資秀といふのが、やはり慶應へ這入って居て、頻りに私の上京を促して来るので、私も遂に明治十三年の十月に浜松の学校を辞めて上京し、十一月に希望通り慶應義塾に入学した。」(7)とある。『独立評論』の渋江の回想では、「明治十三年の十月に浜松の学校を辞めて上京し」とあるが、実際には明治十二年の記憶違いであると思われる。どちらにしても、渋江はこうして東京に戻り、憧れの慶應義塾で英学を学ぶことになった。

注記

(一) 森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二七五頁

(二)『文部省（明治七年）第二年報』百十三頁～百十七頁

(三) 静岡県立浜松北高等学校八十年史編集委員会『浜松北高等学校八十年史』（静岡県立浜松北高等学校八十年史編集委員会　一九七四年十月十二日）十五頁

(四) 森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二七五・二七六頁

(五) 山路愛山『独立評論』再興第七号、澁江保氏談話「明治初年の学風」（独立評論社　一九一三年八月一日）四一・四二頁

(六) 森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二七九・二八〇頁

(七) 山路愛山『独立評論』再興第九号の澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」（独立評論社　一九一三年十月一日）三四頁

密室銀行（あらすじ）

匠　克仁

一　金庫室の殺人

竹森和久が失神から目覚めると、目の前に死体が横たわっていた。死体は頭蓋骨が叩き割られ、脳みそと眼球が飛び出していた。

現場は、東西銀行赤坂支店の地下の金庫室の中である。金庫室は外から耐火扉と格子扉の両方ともが閉められていた。

犯人が金庫室に死体と一緒に自分を閉じ込めたのだと竹森は思った。死体は久間猛支店長であった。

竹森は同じ赤坂支店に勤務する銀行員である。現在は二十八歳で、銀行に就職して六年目であった。赤坂支店には三年ほど在籍している。

時間を確認すると、午前九時十分であった。竹森が支店長と支店に入ってから二十分ほどしか経過していない。支店長の腕時計が壊れており、八時五十五分を指して止まっていた。

九月一日土曜日で、銀行休業日である。八月三十日に担当先の企業が倒産したので、休日出勤したのであった。

竹森は倒産企業の書類をキャビネットでなく間違えて金庫室に入れてしまった。そのため予定外で金庫室を開けることになった。

支店長と一緒に金庫室を開ける直前から竹森は記憶を喪失していた。

凶器は金庫室内に備え付けている鉄製の踏み台であった。踏み台は三段の踏み板が有り、十キロ以上の重さがある。何年も使われて、台の滑り止めのゴムが削れて金属が剥き出しになっている。

その凶器で何度も頭部を殴打した様子であった。金属バットのように殺傷力の有る危険な凶器となった。

竹森は金庫室から抜け出そうとして、格子扉に近付いた。支店長の死体が扉の前にあるので、迂回した。

格子扉は、直径二センチの円柱の格子が、横方向に中

央に一本、縦方向に七センチ間隔で十二本と並んだ構造である。格子扉は外側から鍵が掛かっていた。

格子扉の隙間から両手を入れて、耐火扉を押してみた。耐火扉も外から施錠されているようで、全く動く気配は無かった。耐火扉は鉄製で、厚さが三十センチで、二百キロもある。

救出は月曜日の朝になるかもしれない、と不安になった。二日間を死体と一緒に過ごすことになる。

その間は食べることもできない。竹森は既に喉の渇きを感じていた。飲食だけでなく、トイレの問題も有る。

激しく息をしていたので、息苦しさを感じた。耐火金庫室は完全な気密性・水密性の構造となっている。通常の営業時間中は耐火扉を開け、格子扉だけ閉めているが、今は完全に密閉されている。

金庫室は奥行きと幅が四メートル程、高さ三メートルの直方体の空間である。印鑑届や手形類を格納したキャビネットが金庫室の奥半分を埋めていた。営業室に出しているキャビネットを毎日業務終了後に金庫室に格納するのである。

空気が淀んで、既に酸素が少ないような気がした。二日分の酸素が足りないと竹森は不安を感じた。

金庫室内は異常に蒸し暑く、死体の腐乱も進んでいく。

死体の右手が脇腹につくようにして、甲を下に固く握られていた。

拳の中に鍵束が包まれているのに竹森は気付いた。三つの鍵がリングで繋がっており、耐火扉と格子扉と支店通用口の鍵であった。

休日出勤することになった支店長が、鍵を借りた際に三つの鍵をリングで一緒にまとめていた。三つの鍵は全てシリンダー錠の鍵であり、複製ができない。

竹森は死体の右手から鍵を抜こうとした。死体の指は固く握られていた。支店長が犯人に渡さないように強く抵抗したように思えた。竹森は無理やりに鍵束を引き抜くことができた。

格子扉の錠の位置は内側から見ると右端になる。鍵を持った左手で、格子の隙間に差し込んだ。

耐火扉と格子扉との間隔は、鍵が長さより少し大きいくらいで、鍵穴に入れるのにかなり手間取った。何とか鍵穴に差し込み、解錠することに成功した。

格子扉を内側に引き開けた。格子扉を開く途中で死体に引っ掛った。竹森は格子扉の反対側に回り込んで、扉で死体を押して移動させた。

耐火扉に体全体を付けるようにして押したが、全く動かなかった。

格子扉が開いても、耐火扉が開かなければ、脱出は不可能であった。

次第に意識が薄れていき、再び気を失った。

二　密室

二日間も閉じ込められる事態にはならなかった。竹森が再び気を失ってから二十分後に救出された。

他に四人が休日出勤したので、発見されたのである。

最初に沢木雅子が赤坂支店に着いた。

雅子は竹森と同期で、預金と総務を担当している。竹森と婚約していて、支店でも公認の仲である。

休日を二人と過ごす予定であった。竹森が急に出勤することになり、自分も溜まっている仕事を片付けようと来たのである。

雅子が暗証番号錠のテンキーのボタンを押しているところに草津史郎が通用口に着いた。ちょうど午前九時と草津は確認している。草津は竹森の一年先輩の取引先係である。

暗証番号を押してもドアが開かないと雅子は言った。草津も同様にテンキーボタンを押したが、同様にドアは開かなかった。

草津はシリンダー錠が中から施錠されていると考えた。シリンダー錠は内側からサムターン（内鍵つまみ）を回して施錠する。

電気が点いているから、久間支店長と竹森が支店に居ると二人は思ったので、何度もインターフォンを押した。支店内からは全く反応が無かった。

草津は赤坂支店に電話をしたが、誰も出なかった。竹森の携帯にも電話をしたが、電波の届かないところにいるようで、繋がらなかった。

草津は当日の鍵当番の志方高志に携帯で電話をした。

鍵当番は、係長以上と一般行員との二名が交代で担当している。鍵当番は毎日始業前の午前八時半に解錠して、終業後に施錠する規則になっている。

志方は竹森の三年先輩で、取引先係長をしている。本人は休日出勤する予定でなかったが、車で近くまでいるということであった。

草津が支店前の道路で鍵を受け取ることになって、通用口を離れた。雅子は通用口の前で待っていて、誰も出て来る者は居なかったと証言している。

十分後には草津が戻ってきて、通用口のシリンダー錠を解錠して二人で支店に入った。

二人が竹森たちを探したが、見つからなかった。

志方は出勤の予定でなかったが、自分も仕事をすることにした。それには金庫室の中の書類を出したかった。

鍵は副支店長の島居忠安が持っている。志方は島居に連絡すると、相手も出勤すると聞いた。

島居が来たらすぐ出せるように、志方はダイアル錠を解錠した。この時には耐火扉は開かなかったことを志方は確認している。

その五分後には島居が到着した。予定外で休日出勤することにしたのである。

四人でも竹森たちをすぐに見付けられなかった。
雅子は島居から鍵を借りて、物品庫を開けた。借りた物品庫の鍵と金庫室の鍵は一つの鍵束になっていた。
志方の依頼で島居が金庫室を開けることになった。
金庫室のダイアル錠は志方が既に解錠していた。島居がシリンダー錠を解錠しただけで、耐火扉が開いた。
二人が支店長の死体と竹森を発見した。二人の叫び声で雅子と草津も金庫室に集まった。
竹森は後頭部を床に打ち付けた状態で、意識を失ったまま倒れていた。雅子は竹森の頭を両手で抱えた。
地下で携帯電話が通じないので、草津が警察と救急車を呼ぼうと階段へ登った。
防犯カメラのデッキが盗まれていることに草津が気付いた。
給湯室には防犯カメラの映像を録画しているデッキとディスプレイが設置されている。ディスプレイは元のままであったが、デッキが持ち去られていたのだった。
赤坂支店には防犯カメラが店内に十六台が設置されていた。通常はディスプレイに交代に表示されている。一ヶ所を全面表示することも、四・九・十六の分割表示をすることができる。
映像データについては、ディスプレイ表示に関係なく十六ヶ所のデータがハードディスクに記録されている。
十六台の防犯カメラの一つは金庫室の前に設置されていた。ちょうど耐火扉が前面に映る配置であった。扉が開いていれば、金庫室内の映像、つまり、犯行時の犯人の姿も残っている筈であった。
犯人は防犯カメラの存在を知っており、そのデッキを持ち去ったのであった。
デッキ自体はノートパソコンほどの大きさで普通のかばんにも入る。もちろん、当事者のかばんの中や行員のロッカーなどは警察で確認されたが見つからなかった。
竹森は救急車で病院に運ばれた。後頭部から出血があったので、精密検査をした。脳波に異常は無く、一日だけ入院した。
無限の時間のように感じたが、実際に竹森が金庫室内に閉じ込められた時間は四十分ほどであった。
十日の二日間も閉じ込められると思い込み、酸素が無くなる等の恐怖のため時間が永遠に感じられたようだった。
竹森は病院で意識を取り戻したときに、見舞いに来た雅子から発見された状況の説明を受けた。
格子扉は竹森自身が開けたが、耐火扉はダイアル錠とシリンダー錠の両方が施錠されていた。通用口は暗証番号錠だけでなく、シリンダー錠も施錠されていたと言われた。
犯行現場は三重の密室であった。
密室の状況は表1の通り

三　容疑者

今回の事件はテレビや週刊誌などでも大きく報道された。密室殺人としてセンセーショナルに扱われた。
推理作家がトリックに挑戦するという企画もあったが、誰も明快な回答を出すことができなかった。
竹森は被害者として実名を報じられていたが、一部の週刊誌ではまるで犯人と疑うように書かれた。
金庫室の中に閉じ込められた状態で二人の内一人が殺されていたのである。支店長殺しの犯人と疑われても当然かもしれなかった。
自分が最も怪しい容疑者とされていることを竹森は自覚していた。
第三の人物が金庫室に二人を閉じ込め、パニックになった竹森が支店長を殺した。という筋書きを警察が持っていると竹森は考えた。
それでも実際に竹森が逮捕されるということはなかった。
閉じ込めた人物がいるのであれば、その人物が犯人という可能性が出てくる。
また、閉じ込めた人物がいなければ、竹森では密室を工作することが不可能な状況である。
竹森は自分で『逆密室』という概念を思いついた。密室にいることで、逆に犯人であり得ないのである。
他の例では、密室に二人いて一人が殺されるが、凶器が密室の外で発見される場合である。そのような状況も、密室にいる人間のアリバイが成立する。
そうであれば、犯人がなぜ密室にしたのか、疑問を感じた。陥れようとしても竹森に密室工作ができないことは明白である。
仮に犯人が逮捕されても、密室トリックが分からなければ起訴まで持ち込めないからと竹森は考えた。
逮捕状の場合は、『被疑事実の要旨』があれば、密室トリックが解明できなくても出せるかもしれない。しかし裁判に持ち込むための、起訴状を出すのは難しい。
刑事訴訟法二五六条三項では起訴状に書くべき事項として定められている。
『…できる限り日時、場所及び方法を以て罪となるべき事実を特定して…』
方法とは、密室を作った方法も含まれると考えられる。
犯人が特定できても犯行方法を具体的に特定できなければ、逮捕できても起訴できない。密室殺人の場合は、トリックが解けないと起訴できない。そのように竹森は考えていた。
事件との関係が不明だが、久間支店長のポケットから丸めた手紙が出てきた。前日に倒産した会社の社長からであった。
当初の融資の見返りに支店長に過剰な接待と過大な贈答をしたようであった。

表1　　○＝可能　×＝不可能

			入		出		特　徴
A金庫室	Ⅰ格子扉	①シリンダー錠	○		×		外側からは、鍵が9時の方向で施錠。3時の方向で解錠になる。 正鍵：融資課長が持つ　副鍵：死体が握る（預金主任から借りる） 格子の隙間から鍵を中に入れても、死体に握らせることはできない。 竹森が鍵を逆向きに掴んで、格子の隙間から手を入れて解錠した。
	Ⅱ耐火扉	②シリンダー錠	○	○	×	×	外側からは、反時計回りに360度で施錠、時計回りに360度で開錠になる。鍵を抜き差しするのは12時の位置になる。内側からは、施錠はできないし、扉を閉じることは無い。 正鍵：副支店長が持つ　副鍵：死体が握る（預金課長から借りる） 最後に支店に到着した島居副支店長が解錠した。(副支店長が 鍵を持って出勤することは、誰も知らず、この鍵を使って計画できない。) ダイアル錠を解錠したときに志方係長が耐火扉が開かないことを確認している。 副支店長は鍵は物品庫の鍵と一緒にしており、物品庫を開けるために雅子は鍵束を借りた。 (雅子が鍵を借りる前に志方が施錠を確認している)
		③ダイアル錠	○	○	×	○	直径10cmの円盤で、100の目盛が刻まれている。00から90まで10ごとに数字があり、5の目盛が長い。円盤の土台の一番上に赤い縦線がある。 円盤を次の方法で回転させて解錠する。時計まわりに四回転以上して、23に合わせる。反時計まわりに三回転して、86に合わせる。時計まわりに二回転して、81に合わせる。反時計まわりに一回転して37に合わせると、解錠する。 施錠は円盤を回転させるだけである。一目盛ずれると施錠する。 係長以上の行員と総務担当だけが解錠方法を知っている。 副支店長が到着したらすぐに耐火扉を開けられるように、事前に志方係長がダイアルを回して解錠していた。
B支店	Ⅲ通用口	④シリンダー錠	×	×	×	×	外側からは、反時計回りに90度ひねり元に戻して施錠、時計回りに90度ひねり元に戻して解錠になる。鍵を抜き差しするのは6時の位置になる。 内側からは、サムターン（内鍵つまみ）をひねって施錠・解錠する。サムターンが水平で施錠、垂直で解錠になる。 来客などの際で直接、通用口の前まで行かなくても済むように遠隔操作で、施錠・解錠できる仕組みになる。営業室にリモコンレバーがモニター画面の下に付いている。 シリンダーの鍵（鍵穴）とサムターン（内鍵つまみ）とデッドボルト（閂）とリモコンレバーが連動している。リモコンレバーで操作した場合には、タイムラグがあり、またデッドボルトがストライク（受座うけざ＝ドア枠の穴）に完全に一致したときにスライドする。 事件当時は、竹森が内側からサムターンをひねって施錠していたので、犯人が入れないはずであった。(竹森が記憶を失ったのは金庫室に入る直前からで、施錠の記憶は残っていた) 正鍵：鍵当番(役付)(事件当時は志方係長が持つ)　副鍵：死体が握る(鍵当番から借りる) 雅子も草津は鍵が無く入室できなかった。鍵当番の志方係長から草津が鍵を預かって雅子の前で解錠した。(志方が鍵を持って近くにいたのは、草津が電話で確認するまで誰も知らず、この鍵を使って計画できない。)
		⑤暗証番号錠（テンキー錠）		○		○	テンキー（0～9の数字）のボタンと「＃」と「開」ボタンがついている。 入る側だけの施錠で、出る場合は関係が無い。 通常の開け方は、四桁の暗証番号（事件当時は0814）の数字ボタンを押した後に「開」ボタンを押すだけである。暗証番号は行員全員が知っている。 暗証番号を正しく押しても、間違えて押しても、特にメッセージは表示されず、音も鳴らない。 現在の四桁の暗証番号と「＃」を押すと、設定変更のモードになる。「＃」「1」で暗証番号変更になり、新しい暗証番号を求める。新しい暗証番号と「＃」を二回繰り返すと、変更になる。以前に使った同じ暗証番号でも登録できる。暗証番号の変更履歴などは残らない。設定変更モードで暗証番号を初期設定（0000）にできる。 暗証番号錠もシリンダー錠と同じく営業室のリモコンレバーで遠隔で解錠ができる。 雅子も草津も正しく暗証番号を押したが、入室できなかった。草津がシリンダー錠を解錠すると同時に暗証番号錠も解錠して、雅子と一緒に通用口を開けた。

その案件は竹森が架空売上の粉飾の疑いを指摘して、融資を否認していたものであった。その指摘を無視して支店長が強引に実行したものである。

融資後に架空売上の相手が倒産したので、強引に回収をしたのである。融資金の全額では無かったが、会社の預金全額を回収に充てたので、銀行が死刑宣告をしたようなものであった。

支店長はこの会社の倒産よりも社長の手紙の対応で、休日出勤したようであった。手紙は事件の前日に支店長宛の親展で届いていた。その後の調査で事実であると確認された。

この手紙が今回の殺人事件とどう結びつくのか、竹森は想像もつかなかった。

謎は密室だけに留まらず、凶器や犯行自体も謎であった。凶器が金庫室内の踏み台であったが、何度も頭蓋骨に叩き付けたので、死に至ったのである。

踏み台を使って、計画的に殺人を犯すことに矛盾がある。

密室を構成するくらいの犯人であれば、撲殺という手段で無く、刺殺や絞殺などの確実に死に至る方法を選ぶように考えられた。

支店長は元ラグビー選手で、百キロを越し屈強な体格をしていた。竹森自身も柔道の黒帯であるなど一般の人より強い自覚がある。

この二人を重い踏み台を使い、同時に倒すというのは無理である。

踏み台が金庫室の奥の方にあり、犯人は二人に気付かれずに取ることもできない。

踏み台が死にいたらしめた凶器としても、その前に金属バットのようなもので襲ったのかもしれない、と竹森は推理した。

金属バットなら、体力の劣る人物でも犯行が可能である。踏み台を死体の上に載せたのは、偽装のためと考えられる。

その後の調べで、金庫室の中の棚の金具と床に竹森の血液が付着していたことが分かった。

竹森の後頭部の怪我の一つは踏み台や金属バットなどでなく、棚の金具に叩きつけられたためであった。

それでは竹森は犯人と正面に向かい合って見ていたことになる。記憶喪失は偶然にすぎなかった。犯人は見られたことを全く気にしなかったのである。

竹森はうつ伏せになっていたので、床の血痕は、そこに後頭部を叩きつけられたものと見られた。

柔道の有段者である自分をそのようにして失神させる犯人はよほどの怪力の人物でないかと竹森は思った。

依然として竹森は容疑者のような曖昧な立場であった。そのまま逮捕されることはなく、事件から二週間が経過した。

四　死後硬直

竹森は史遊会という歴史研究会に入っていた。

会員の一人が一時間ほど講演をして、その後に討論をする。

その日の講演のテーマは、武蔵坊弁慶の立ち往生であった。医者で検死経験もある会員が専門の立場から説明するという内容である。

太って大柄な久間支店長は、テレビで見た弁慶役の俳優に似ていた。弁慶と支店長の死体が想像で重なった。

事件の謎の一つは、三本の鍵が死体の掌に固く握られたという事実である。

鍵は単に密室の中に放り込まれていたのでない。死体掌の中にあったことが密室の解明を困難にしている。

固く握った拳そのものが小さな密室のように竹森は考えていた。

事件の時に竹森は死体の拳をこじ開けるようにして、三本の鍵を取り出した。

まるで支店長が犯人に奪われないように、固く握っていて、その状態で殺害されたような印象を受けた。

鍵が単に密室の中にあるのであれば、何らかの方法で密室の中に放り込んだと考えられる。

しかし、今回の事件では三本のシリンダー錠の鍵が密室の中にあっただけでなく、死体が握っていたのである。

講師は死後硬直のことから説明した。

死後硬直というのは、死体の筋肉が硬くなる現象である。

死亡により筋肉への酸素が届かなくなる。酸素が必要な代謝はできなくなるが、酸素の不要な代謝は死後も続くのである。

その結果、筋肉中のＡＴＰ（アデノシン三リン酸）というエネルギー源が使われて、グリコーゲンが分解されて乳酸を作る。少しずつ筋肉のＰＨが下がる。筋源繊維のタンパク質であるミオシンとアクチンが結びついてアクトミオシンを生成し、筋肉が固くなる。

死後硬直は死後二、三時間で顎・首から始まる。死後六から八時間で手足その指に及ぶ。死後硬直が全身に及ぶのは死後十二時間くらいであり、硬直は一日から一日半続く。

例外的に硬直が早く進行する場合がある。例えば死体が糖尿病の場合、正常な人と比べて死後硬直が早く進行する。

筋肉質な人は死後硬直が早くなる。

死亡前に極端に疲労していた場合も早く進行する。

死体の状況だけでなく。周りの環境も死後硬直の速さは変わる。外気温が高いほど、死後硬直が早く進む。

糖尿病・筋肉の量・疲労度・気温の条件で死後硬直が早く進むことを示している。

支店長が糖尿病で、指が太く、徹夜明けであったこと

を竹森は思い出した。金庫室はサウナのように暑かった。
その条件では死後硬直が早く進むと考えられる。
しかし、いくら条件が多くても、死後六から八時間かかる指の硬直が数分になるまではないと竹森は思い直した。
講師は死後硬直に特別な現象があると説明した。
死後十数時間でなく、死の直後に硬直が起きる例がある。即時性死後硬直と呼ばれる現象である。
具体的には、脳幹が破壊されて死亡に至った場合に、発生することがあるという。
脳幹というのは、延髄・中脳・橋という部位である。
弁慶は仁王立ちの状態で無数の矢を受けて死んだ、と講師は説明を続けた。
弁慶の死因は脳幹の損壊によるものである。無数に帯びた矢の内の一本が弁慶の脳幹を射抜いたのである。脳幹損傷で即死したため、即時性死後硬直による立往生になったのである。
脳幹機能が破壊されて死亡した場合というのは、支店長が殺されたときが同じ情況であった。
死の現象としては、弁慶と類似している。死体が鍵を固く握っていたのは、即時性死後硬直に違いないと竹森は思った。
しかし、犯人が即時性死後硬直を予想して犯行をするのは不可能であった。疑問は解決しないままであった。

五　密室の解明

事件から一ヶ月経った十月一日の午後五時に刑事が赤坂支店に現れた。応接室に入り、沢木雅子を呼んだ。
竹森は、彼女の婚約者で事件の被害者だからと強引に同席した。
刑事は雅子に逮捕状を見せた。逮捕の容疑は防犯カメラのデッキの窃盗であった。殺人の別件逮捕だと竹森は思った。
支店近くのコインロッカーにデッキを保管している雅子の姿が防犯カメラに写っていたのであった。
死体発見前にデッキをかばんに入れて持ち出し、コインロッカーに隠したのであった。すぐに戻ってきたので、誰も外出に気付かなかった。
雅子の指紋も防犯ビデオのデッキのコードから検出されている。これは窃盗の証拠と言えないが、不利な事実であった。
雅子が否認すると竹森は思った。しかし、雅子はデッキを隠したことをあっさり認め、自宅にデッキを置いているので渡すと約束した。もともと自分だけでなく誰か逮捕者が出れば、全てを話すつもりだったという。
密室工作を作った方法を説明すると言って、雅子は刑事と竹森を案内して、地下の金庫室に降りて行った。密室を工作した方法を実演してみせた。

密室トリックは表2の通り

六　真相

密室の説明が終わった後で、竹森と雅子は警察の車に同乗して、雅子の自宅に向かうことになった。
防犯ビデオのデッキを取りに行くためである。警官は竹森を連れていくのを拒んでいた。今度は雅子が竹森の同席を強引に主張したのであった。
家に着くと、雅子が三名を自室に連れて入れた。雅子は両親と三人暮らしであったが、両親とも旅行中であった。
机の上にパソコンの液晶ディスプレイがあった。雅子はベッドの下に手を入れると、ビデオデッキを引き出した。そのデッキは赤坂支店の防犯ビデオのものであった。
デッキはディスプレイと接続されていた。いつでも再生できる状態のようであった。防犯カメラの映像は通常のパソコンでも再生できる。
ディスプレイ上の映像に関係なく、十六ヶ所の映像データは全て個別の映像ファイルに分けて保存されている。映像も動きがある場合だけ効率的に録画している。
パソコンでファイルをクリックすれば、ほとんどの動画再生用ソフトで見ることができる。
雅子がパソコン上のアイコンをクリックすると、防犯ビデオの映像が始まった。
カメラは金庫室の扉の外側の廊下の天井から室内を覗きこむように設置している。死体の位置関係から決定的な瞬間が記録されているはずである。
これから雅子が殺害するシーンが映し出されると思うと、竹森は目をそむけたくなった。凶器に金属バットを使ったのであろうか、と竹森は考えた。
映像は、まさに殺害行為の瞬間から始まっていた。鉄の踏み台で支店長の頭蓋骨が砕かれている場面であった。
映像は鮮明に記録されていた。
竹森と二人の刑事がディスプレイの映像を見て、同時に驚きの声を漏らした。
頭蓋骨に踏み台を落としている人物の映像が鮮明に映っていた。
殺人犯人は、雅子でなく、竹森であった。
支店長を殺したのが自分と知り、竹森はにわかには信じられなかった。
雅子が巻き戻しをした。最初に表示された場面から三分ほど前のシーンである。
この時に雅子は出勤したのであった。防犯ビデオのディスプレイが雅子の視界に入ったという。
映像では、支店長が金庫室を開けているところであった。その後で、竹森が入っていった。
金庫室で支店長が手紙らしいものを落とした。竹森がその紙を拾った。
竹森は記憶を失っていたが、もし不正に気付けば、何か言ったに違いなかった。竹森が否決した案件を強行し

表2　○＝可能　×＝不可能

			入		出		トリック
A金庫室	Ⅰ格子扉	①シリンダー錠	○		×		雅子は犯人が他にいるように見せかけるために格子扉のシリンダー錠を施錠して、鍵を中から届かない場所に置こうとした。 しかし、あわてて鍵束を格子扉の隙間から金庫室内に落とした。鍵束は死体の背中にあたると滑って、手の中に入った。 死体に即時性死後硬直が発生し、鍵束を拳で握りしめて離さないようにみえた。
	Ⅱ耐火扉	②シリンダー錠	○	○	×	×	雅子は誤って鍵を落としたので別の工作をしようとした。耐火扉を閉めてダイアル錠を施錠すれば、竹森に犯行は不可能に見えると考えた。 雅子は耐火扉のダイアル錠を回しただけで、シリンダー錠は施錠しなかった。(鍵穴の位置が常に上向きで変わらないため、外からはシリンダー錠が施錠か解錠か分からない。) 竹森が不可能な状況にするため、外から耐火扉をストッパーで固定した。 雅子はストッパーを隠すつもりはなかった。金庫室前のマットがずれたため、ストッパーにかぶさって見えなくなった。 副支店長の到着前に、志方が金庫室を早く開けることができるように、ダイアル錠を解錠した。ダイアル錠を解錠しでも、耐火扉が開かなかった。 ストッパーでなく、シリンダー錠が施錠していると志方は誤認した。耐火扉は200 kgあるので、ストッパーの軽い抵抗だけでも全く動かなかった。 副支店長が出勤して、雅子に物品庫を開けるように鍵を渡した。雅子は同じ鍵束に耐火扉の鍵があったので、シリンダー錠を施錠した。 ストッパーよりもシリンダー錠の方が竹森が犯行不可能な状況が深まると思い、とっさに判断した。不要なストッパーは外した。
		③ダイアル錠		○		○	

B支店	Ⅲ通用口	④シリンダー錠	×	×	×	×	＜入＞錯覚 竹森が記憶喪失した時を誤認したための、錯覚であった。 内側からサムターンを回して施錠していたので、犯人が入れないと思い込んでいた。記憶を失ったのは金庫室に入る直前からと思っていた。 実際は、金庫室の前にいるときに雅子がインターフォンを鳴らした。竹森は一階に戻ってリモコンレバーで解錠したが、その記憶も含めて喪失した。 ＜出＞暗証番号錠と遠隔操作の二段構え 雅子が通用口を出たとき、草津がやってきた。(デッキは入りなおした後で隠すつもりであった。) 外部に犯人がいる証人に草津になってもらおうと、暗証番号錠に工作をすることを雅子が思いついた。暗証番号錠が開かないふりをして、草津の目の前で暗証番号を変更した。(総務の雅子は暗証番号を初期設定に戻して、解錠することができた) 雅子は犯人が暗証を変えたと草津に確認させたら、初期設定に戻して、入ろうとした。草津は正しく番号を押して暗証番号錠が解錠したと思い込んだので、通用口が開かないのはシリンダー錠が施錠されていると誤認した。(暗証番号錠は番号を間違えてもエラー音が鳴らない。鍵穴の位置が常に上向きで変わらないため、外からはシリンダー錠が施錠か解錠か分からない。) 草津は鍵当番の志方に連絡を取り、鍵を持ってくるように依頼した。草津が志方から鍵を受け取るために支店を離れた。志方が通用口の鍵を持ってくると聞き、雅子はシリンダー錠を施錠することにした。雅子は暗証番号錠の暗証番号を元にもどし、支店内に入った。 雅子は防犯カメラのデッキをかばんに隠した。 傘立てで通用口の扉を開けたまま固定した。営業室のモニターの下にあるリモコンレバーを使って、シリンダー錠の施錠を遠隔操作した。 通用口が開いていると、閂は動かない。雅子はその状態で外へ出て扉を閉める。閂が受座と一致するとスライドして、施錠になった。(雅子は総務担当として、仕組みを知っていた) 最初から遠隔操作のトリックを使うと、入れなくなる。草津が来るまでにそんな時間は無かった。(犯行時刻から5分後には草津が通用口にいた) 鍵が届くことを知ってから雅子は遠隔操作のトリックを使った。
		⑤暗証番号錠(テンキー錠)		○		○	

て、見返りに銀行員として許されない行為をした。
自分の不正が見つかって、支店長は狼狽した様子をみせた。
急に怒り出して、竹森の胸元をつかんだ。もともと感情を爆発させる性格であった。特に部下から間違いを指摘されることを極端に嫌った。
支店長は竹森をスチール棚に押し付けた。バランスを崩した竹森は、後頭部をL字アングルに激しくぶつけていた。
竹森が逃げようとして、体を左側にずらした。相手の右手を外そうとしたようで両手で手首をつかんで、振り回した。
その状態で竹森は倒れこんだ。このとき自分の頭を強打していた。
重い体に押しつぶされないよう抵抗した様子で、右足裏で腹部を蹴り上げている。
まるで巴投げか合気道の技のように、相手の体が宙に浮いて、回転した。
後頭部を下にして勢いよく落下した。下には踏み台の鉄の角の部分があった。
十数キロの踏み台で殴ったのでなかった。百キロの重さで踏み台の上に頭から落ちたのであった。
支店長は勢いで斜めに転がり、うつ伏せの状態になった。その頭上に踏み台が乗った。
転倒した竹森はしばらく頭を抱えていたが、支店長のもとへ歩み寄った。
頭の上の踏み台を取り除こうと、竹森は持ち上げた。その瞬間、支店長の手が痙攣したようで、竹森の足を叩いた。
驚いた竹森が踏み台を放してしまった。
そのシーンが再生の最初に流れたときのものであった。
踏み台は角を真下にして落ち、陥没した頭蓋骨に突き刺さった。鉄の凶器で何度も殴ったのと同様であった。
映像の竹森は再び頭を抱えると、しゃがみ込むようにして倒れた。
受けた怪我の影響が出たのかもしれなかった。必死になって戦っていたが、緊張の糸が切れた様子であった。
自分がした行為にショックを受けたかもしれない。複数の原因が重なって、失神したのである。
雅子は金庫室へ駆け付けた。二人が並んで倒れていた。
雅子は二人を見て、救急車を呼ぼうとした。雅子は支店長の脈を取ってみたが、既に脈は無かった。
頭蓋骨が割れて脳が飛び出している状況だった。素人目でも死んでいると思ったのである。
竹森はただ気を失っているだけだった。このままでは、婚約者が殺人罪で逮捕されると雅子は思った。
雅子は婚約者を守ることに決めた。その時は本人が記憶を失っているとは思いもしなかった。

雅子は格子扉を閉めた。後の雅子の行動は支店で告白した通りであった。
格子扉の鍵を閉めたところで、鍵束を中に落としてしまった。しかも運悪く支店長の手の中に入ってしまった。
その後、耐火扉を閉めると、駆け出して視界から消えた。
数分すると、画面はノイズとなった。雅子がデッキを外したのである。
竹森が犯人でありえない証拠をたくさん残したかったので、思いつくだけ工作をしたと雅子は言った。
実際に、雅子の狙いが成功して、竹森は逮捕されないで済んでいた。外部からの密室工作の明らかな痕跡があったために、犯人でないアリバイになった。
逆密室と竹森が名付けたことを雅子は実現したのである。
ビデオデッキを持ち出したことが発覚して、雅子が窃盗で逮捕されることになった。
竹森か自分が逮捕されたら、ビデオを見せて事実を明らかにするつもりだったと雅子は言った。
正当防衛は難しくても過剰防衛は認められて、刑が軽くなると雅子は判断した。そのため映像を残していたのであった。
竹森は説明を聞いていたが、真犯人が自分という事実に混乱していた。

《平成二二年五月の116号から139号まで6年間22回連載した小説のあらすじである。
合計121ページを15ページに圧縮した。といっても、連載中は、前号までのあらすじの注書きが多すぎた。
元から変更してアナザーストーリーになったので、あらすじでなく『うらすじ』にしようと思った。しかし、うらすじだと別の物と誤解するので止めた。すじをなぞるだけでもヒーヒー言って書いた。書き始めは想像もしていないトリックなので、矛盾だらけなのである。
密室とそのトリックは読者に分かりやすいように、表にした。面倒くさくて書けなかったのでは、けっしてけっしてない。2枚の表だけで済む話だったなあ。
連載時の用語を変更した。開錠→解錠　数字錠→暗証番号錠（テンキー錠）　ハンドル→リモコンレバー
【補足】一般に錠のことを鍵と呼ばれているが、誤用である。鍵を閉める（掛ける）というが、日本語として誤りである。鍵を使って錠を閉める（掛ける）が正しい。
鍵＝錠を開閉する道具
錠＝扉の開閉を困難にする道具　鍵穴＋閂＋受座など
錠は鍵を含めた全部を指す場合もある。
【蛇足】鍵はオス・男で、錠はメス・女だとイメージすると分かりやすい。正確には、錠は閂というオスの部分を持っており、もう一つ受座というメスがある。ぼくの漢字のイメージでは、鍵が男なら、錠は嬶である。》

編集後記

まんじ誌百四十記念号の編集過程で思ったことは、天下広しといえども、ここまで続いている同人誌は他にないのではないかということです。

この「まんじ誌」がここまで続き、更に未来へ発展する力を秘めていることを、ここに皆様とともに慶びあい、そして同人を励まし支えてくださっている維持会員の皆様、印刷製本を引き受けてくださっている業者の方に、心からの感謝を申し上げます。

同人仲間の忠内さんの提唱で、この百四十号の合評会の後、三戸岡道夫さんの「米寿をお祝いする会」が開かれることは素晴らしいことです。日頃、矍鑠（かくしゃく）として私たちを導いてくださるお姿はとても米寿とは思えない若々しいお姿で、私たち後輩に夢と希望を与えてくださるものであり、本紙上をお借りして三戸岡さんの更なるご健筆・ご健勝を祈念申し上げる次第です。

本誌の編集最中に起こった「熊本地震」は、私たちに改めて地震の恐ろしさを教えてくれました。お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りし、お怪我をなさった方々、罹災して避難している方々に心からお見舞い申し上げます。活断層の恐ろしさと、人知では及ばない地震予知などに、人間の無力さを改めて感じました。

（鍋）

まんじ第140号

平成28年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045 (544) 5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 047 (346) 2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東ワークス モトヤマ（日東印刷株式会社）
〒154-0016　東京都世田谷区弦巻3-13-18-202

表紙の絵について
「天上天下唯我独尊　世界は私の内に在」
田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.141

2016.8.1



まんじ第百四十一号　目次

命尽きるまで……太田精一…4
小さなカボチャ……新井宏…14
「あなたも田舎で暮らすなら」と「村の明日」……古屋富雄…21
葛藤……横山正義…24
短歌　行雲流水（四十九）……石黒修身…27
漢詩　潮汐錄（八十四）《漢詩の流れ72》……鯨游海…31
漢詩　汲深録（五）……松井秀人…34
ロボット雑考（その四）……三戸岡道夫…36
吉宗と大岡越前―享保の改革―……千坂精一…54

古い物・遠い夢　逃げる有楽斎……忠内正之…69
（司馬雑感　四十一）
里見氏と北条市―房総の戦国興亡史―……山田嘉久…76
性と化粧の物語（五）……鈴木守…86
微かな記憶を再現して記録する……山本鎭雄…93
千家尊福伝（十二）……村上邦治…107
　政治信念を貫いた静岡県知事
明治時代の著述者　渋江保の一生（その六）……山本勉…121
男男男（たばかり）……匠克仁…127
編集後記……編集子…133
表紙　絵……田寺怜葦

命尽きるまで

太田精一

一．戦後の混乱

焼跡の瓦礫の中から芽生えた可憐な草花が、焦土の傷跡を癒すかのように咲いている。

焼け焦げの残っていた木々からも、若葉が芽吹き始めた。

戦災を受け、壊滅状態であった浜松の街にも、昭和二十二年の春には、復興の槌音が響き始めた。疎開先から戻って来た家族が、バラックを建て、街は再び賑わいを取り戻しつつある。

河野すずも男二人、女一人の三人の子供を連れ、大工町に戻って来た。

すずは、二十二歳となった昭和五年に河野家へ嫁いだ。その頃の河野家は、すずの夫広一の他、義父の芳蔵、義母のとみ、次男の義男、三男の邦夫の五人家族であった。

義父の芳蔵は、畳職人であったが、数人の職人を雇い、大工町に店を構えて繁盛していた。だが、すずが嫁いだ五年後の昭和十年に脳溢血で倒れ、帰らぬ人となった。

すずの夫の広一は、畳屋の長男として、河野家を盛り立てて来たが、糖尿病を患い、昭和十九年に他界した。そのため、同じ畳職人であった次男の義男が跡を継ぐ話が持ち上がった。ところが、折悪しく義男は昭和十七年に招集され、南方戦線に派遣されたままで消息が分からない。

戦火が激しくなるにつれ店にいた職人もつぎつぎと召集を受け、畳屋を続けることは出来なくなった。

その上、昭和二十年六月の浜松大空襲で、母親のとみは焼死してしまった。

三男の邦夫は、勉強が良く出来、初めから畳職人になるつもりはなかった。浜松第一中学校から大学を目指し、昭和十八年に島根県の松江高等学校に進学して昭和二十

二年には、東京大学の学生となっていた。

すずは、大工町に戻って来たものの、中学二年、小学五年の男の子と小学二年の女の子の三人の子供を抱え、生活の道を講じなければならない。

そこで、鴨江観音通りに面した地の利を生かし、野川屋という屋号の貸本屋を始めた。野川はすずの旧姓である。

戦禍によって本や雑誌の類をことごとく焼失してしまった民衆は活字に飢えている。娯楽も少なかったため、本であれば何でも読まれた時代であった。抑圧された戦時中の反動からか、解放感が街中にみなぎり、性的欲望を掻き立てるような雑誌や単行本がとくに好まれた。

しばらくは貸本業も順調に利益を上げ、経済的余裕も出来た。そのため子供たちは三人とも静岡大学教育学部附属浜松中学校に入学させることが出来たのである。

昭和二十三年春、義男が復員して来た。

義男は、母親のとみや親戚の意志を引き継ぎ、畳屋の再開を図った。

だが、すでに貸本屋を始めていたすずは反対した。店を畳屋に変えようとはしなかったのだ。義母のとみはすでにこの世にいない。河野家は、嫁のすずがすべてを取り仕切るようになっていたのである。

「この大工町にあって代々続いて来た畳屋を兄貴と共に盛り立てて行こうと思って、俺は畳職人になったのだ。兄貴はいなくなってしまったが、俺だけでも十分やっていける。戦後復興でこれからどんどん家が建つから、畳の需要は伸びるはずだ。貸本屋よりもずっと儲かるに違いない。何とか俺に畳屋をやらせてくれ」

義男は、すずに畳屋の再興を呼びかけた。

「畳屋をやるにしても私は手伝えない。でも、私たち親子は、ここを出るつもりはありません。他に行くところなどないのです。今更三人の子供を連れて実家に帰るわけにもいかない。女房でもないのに義男さんが私達親子四人をこれからずっと養ってくれるとでもいうのですか。それし、私は家中埃の立つ畳屋は嫌いです」

畳屋に嫁いで来たものの、ぜんそく気味のすずにとって畳の埃は、苦痛であった。そのため、嫁入り以来店先に出ることはなかった。

女学校の頃からすずは、映画や音楽が好きで、知性と教養のある男性に憧れていた。だが、自分の育った家の周りにはそんな男性はいなかった。

資産もあり、立派な家系であるとの説明を仲人から受けた親は、乗り気になった。その親の勧められるままにすずは、河野家に嫁いで来たのである。会社員の家庭に育ったすずには、結婚当初、夫が家の中にいて汗を流し働く姿が、馴染めない。一日中家にいる夫が、時には煩わしくさえ感じることもあった。

だが、嫁いだ以上、河野家の家風に馴染み、家族の一員として認められたいとの思いもあり、自分なりに努力して来たつもりであった。

すずが嫁いで来た時には、昔堅気の義父母に厳しく河野家の家風を押し付けられた。義父の亡き後も義母のとみと二人の小舅の面倒を見て苦労はしたが、夫が優しく、すずの味方になってくれたため、それなりの幸せを感じ、三人の子供まで設けた。

ところが、戦争が厳しさを増し次男の義男や職人たちが召集を受け、夫の広一が糖尿病で体が衰えた頃から、河野家の家運が傾き始めた。収入の道が閉ざされ、家計は苦しくなるばかりであった。それに追い打ちをかけるように、浜松大空襲によって家が焼失し、義母のとみが焼死した。しばらく親戚の家に身を寄せた後、やっと戻って来て、貸本屋を始め、何とか生活の目途が立ち始めたばかりに持ち上がった畳屋再開の話である。すずにとって到底受け入れることは出来なかった。

すずは、子供たちに高等教育を施し、知的職業に就かせたかった。

「私は、畳屋を始めるより、貸本屋をこのまま続け、子供たちには、将来邦夫さんのように大学まで行かせたいと思っています。それには常に本に親しむような環境を作ってやることが大切だと思っています。この家の跡取は、私の生んだ長男の秀一ですから、どうしても義男さんが畳屋をやりたいというのなら他所でやってください」

すずは、そういって自分の建てた家を動こうとしなかった。

やむなく義男は、河野家を出て、塩町で家を借り畳屋を始めることにしたのである。

二、知性と教養

次男の義男が河野家を出た年の昭和二十三年の夏、三男の邦夫が、夏休みで帰省した。

すずにとっては、邦夫は、まぶしい存在であった。邦夫は、知的で読書好きな青年で、何よりも東大生である。その邦夫を義弟に持つことは彼女にとって誇りでもあった。

「邦夫さんには、仕送りもしないでごめんなさいね。アルバイトをしながら大学に行くのは大変でしょう。でも邦夫さんは、何としても大学を出て、社会に役立つ立派な人間になるのだと言って、子供の頃から目標を立て、その道を真直ぐに進んでいるから偉いと思う」

「義姉（ねえ）さん。ぼくは別に偉いわけじゃあない。広一兄さんが、畳屋は俺と義男がいるからお前までやる必要はない。大学を出て出世し、河野家を盛り立ててくれと言って、応援してくれたから進学することが出来た。それよりも何か手伝うことがあれば何でもするよ。今は、

居候の身分だからな」

「居候だなんて。もともとここは邦夫さんの家じゃない。遠慮することなど何もありゃしないよ」

すずは、邦夫がいてくれるだけでほのぼのとした気分になり、嬉しかった。

一方、邦夫はすずの存在がまぶしく感じられた。じっと家の中で本を読んでいても何となく落ち着かず、本棚の本の整理を始めた。

「邦夫さん。本の整理なんかしなくていい。ここにある本は、邦夫さんの読むような高尚な本は、一冊もありません。あるのは大衆小説と俗っぽい雑誌ばかり。高尚な本を置いても借りてくれるお客さんは少ないから置いてないの」

すずは、下着だけの肌を顕わに出した女性のグラビア写真のある本を邦夫から取り上げ店に出ないように邦夫に言った。

立秋は過ぎたが、残暑の厳しい八月の蒸し暑い夜であった。

二階に寝ていた邦夫は喉が渇き、水を飲みに台所に下りて来た。すずは、台所の椅子に座って雑誌を読んでいた。

邦夫がそっと近づき、その雑誌を覗いてみた。すずは、男女の絡み合った挿絵のある小説を食い入るように読んでいる。

邦夫の気配に気付いたすずは、雑誌を伏せ振り返った。目の前には好奇心に溢れた目をした若い男の顔がある。

暑さのため、下着がはだけ、こんもりとした二つの乳房が顕わになっている。

すずは、思わず下着に手をやり胸元を隠した。

邦夫は、背中から覆いかぶさるようにすずの体を抱きしめた。

すずは、邦夫の行為を期待していたかのように振り向きざまに、彼の胸に顔を埋めた。

邦夫の胸の鼓動が激しく聞こえる。

すずは、ほてった顔を上げ、邦夫の唇をまさぐった。唇が触れた途端、二人は堰を切ったように求め合った。

すずは、夫が旅立って以来、久しく忘れていた感触が蘇って来て激しく邦夫を求めた。

邦夫は、女が初めてではない。東京の洲崎パラダイスで、すでに女を知っていた。だが、四十の坂を越えたばかりの女が本当に燃えた姿を見たのは初めてである。夢中になってむさぼるようにすずの中に溶け込んで行った。

東の空が白み始め日の出も近い。邦夫は、ふと我に返った。

隣には、年増の熟れきった女が、邦夫の体に身を寄せ、安らかな寝息を立て眠っている。

そのすずの寝姿が、邦夫を夢の中から現実の世界に引き戻した。

（そうだ。こんなことをしてはいられない。大学に戻らなければ。ぼくにはまだこれからやることがいっぱいある。ここで義姉（あね）に溺れ、学業を放棄しては、折角の今までの努力が無駄に終わってしまう）

邦夫は、すずを起こし、学校に戻ることを告げた。

「義姉（ねえ）さん、ごめん。こんなことになってしまって言いにくいのだが、今日の夜行で東京に戻ることにする。子供たちを抱えて大変な時期に生活の支えにもなれなくて申し訳ないが、そうさせてほしい」

「あら、いやに急ね。夏休みはまだたっぷり残っているのだから、もう二、三日、ゆっくりしていたらいいじゃないの」

すずは、若さ漲る男性の体から発散する汗の匂いがたまらなく愛おしく感じていた。いつまでも引き留めておくことは出来ないと分かっていても、せめてもう二、三日は女としての歓びを味わいたかった。

それにこれまで身の回りにはなかった知性豊かな男性からさまざまな知識と教養を吸収したかったのである。

「実は、このままでいるのが怖いのです。義姉さんは、ぼくにとってあまりにも魅力的すぎる。そのうちに義姉さんの虜になって、学問も将来の夢もどうでも良くなりそうな気がするのです」

邦夫は、すずの姿態の艶めかしさに目をそむけて、窓から射しこむ陽の光を見た。

外から雀の囀りが聞こえて来た。暑さを予感する湿った空気が南の窓から流れ込んでいる。首筋の汗が陽を浴びキラリと光った。

その夜、邦夫は東京へ戻って行った。すずは、別れ際に涙を見せたくなかったのであえて見送らなかった。

その後邦夫は、在学中一度も浜松に帰ることはなかった。

三、秀一の旅立ち

邦夫が東京に戻って虚しい日々が過ぎ、木枯らしが吹き始めた十二月初旬のことである。

色白で背が高く、目元涼しい二十七、八の好青年が本を借りに、店にふらっと入って来た。

本棚の本をひとわたり眺め、すずに声をかけた。

「この店には、書道に関する本は置いていませんか。持っていた本が戦災に遭い焼けてしまったので、あればぜひ借りたいと思って、古本屋とか貸本屋巡りをしているのです」

「そうですか。あいにく家では扱っていませんね。ご覧の通り貸本屋に来るお客さんは、手軽な読物を好みますので、お堅いものは置いてないのです」

「そうですか。それは残念です。ところで、どこかこの

辺で部屋を貸してくれるような家はないでしょうか。場合によっては、店の一角でもよいのですが」

「そんなところを借りて、どうしようというのですか」

「実は、そこで書道教室を開きたいのです。戦後教育によって、古き良きものが捨て去られようとしています。書道もかつてのような輝きはなく、学校でも細々と続けられている程度です。書道は、単に字が上手く書けるようになるだけでなく、集中力と忍耐力を養い、精神修養にもなります。また、文字の持つ意味を知り、教養を高めることにも役立ち、東洋の文化を理解するためにも大切な役割を担っています」

すずは、その男の説明を聞いてなるほどと思った。折しも、貸本屋だけでは三人の子供たちに立派な教育を受けさせるのは、経済的に困難であると感じていた時である。すずは、思い切って店の一角を書道教室に貸すことにした。

男は、近藤一真（かずま）と名乗り、年は二十八になるという。子供の頃から書が好きで、書道教室に通ううちに、各地で行われる書道展に応募し、数々の賞を受賞している。

特に定職の無かった一真は、教室の運営に専念し、生徒も少しずつ増えて行った。とはいえ、店の一角を間借りしただけの教室であるため、狭く長い座り机が五本置いてあるだけである。一つ机に二人ずつ座り、一度に十人程度しか教えられない。

本を借りに来る客の中には、子供に書道を習わせようとする人もいて、二、三カ月の間に、生徒は二十人を超えるほどになった。

近藤一真は、戦争未亡人となった母親の手で育てられ、親一人、子一人の暮らしである。

母親のきぬは、戦時下の厳しい時代を針仕事の内職によってやっと生き抜いて来た。そのため、息子の一真を上の学校にやることが出来なかった。

一真は、小学校での成績は、良かったにもかかわらず、高等小学校を終えるとすぐ自転車屋の店員として働きに出た。だが、戦災により自転車屋が焼失したため、職を失ってしまった。それから二年余り母親の実家篠原村に身を寄せ、ひたすら書道の修業に励んで来た。

しかし、いつまでも母親の実家にいるわけにはいかない。そこで塩町の焼跡に建てたバラックの一間を借り、母親と共に浜松で暮らすことにしたのである。

すずは、貸本屋の収入と書道教室への家賃で親子四人何とか生活していたが、それだけでは、到底三人の子供を高等学校に進学させることは出来ない。

そこで、すずは、貸本屋の店を一真に委託し、伝手を頼って臨時雇員として、某都市銀行の浜松支店に就職した。すずは、女学校を出ていたため、臨時ではあるけれ

ども金融機関に職を得ることが出来たのである。
すずは、子供たちを進学させようと必死であった。
まず長男秀一の高等学校進学である。すずは、何としても浜松北高等学校（旧浜松第一中学校）に入学させたかった。ところが秀一は、家庭の事情から、進学は無理であると思っていた。高等学校に入るには、たとえ県立の高等学校であっても学費が要る。弟と妹を抱え、懸命に働く母親の姿を見て来た秀一は、母親に今以上の苦労を掛けたくないとの思いから密かに就職をしようと決めていたのである。

寒さも峠を越え、つくしが芽生え始めた頃、秀一は見てはならないものを見てしまった。それは思春期を迎えた彼にとって大きな衝撃であった。
その日は、寒の揺り返しを思わせる空風の吹く寒い日であった。夜も十一時を回っていた。秀一は喉が渇き、二階から台所に下りようとした時、書道教室のあたりから異様な物音と激しい息遣いにつれ喘ぐような声を聞いた。教室は、一真が帰った後、すずが寝室として使っている。
秀一は、母親のほかに誰かいるようなので、障子の隙間からそっと覗いてみた。すると一真とすずが寝乱れた姿で、半裸で絡み合っている。
秀一は、心臓が早鐘のように鳴り、しばらく呼吸が出来ないほどのショックを受けた。母親が、一真に組み敷かれ、下で喘いでいる。髪を乱し、胸をはだけて、口に手を当て、声を押し殺そうとしている。掛布団が跳ね除けられ、絡み合った白い足が見えた。
秀一がこれまで一度も見たことのない母親のあらわな姿であった。
（近藤さんは、もう帰ったはずなのにどうしてここにいるのだろう）
秀一は、一真に声をかけようとした。だが思い留まった。思春期を迎えた秀一には、その場の光景が、とても声をかけられるような状態ではないことを理解したのだ。
その夜、秀一は一睡も出来なかった。
秀一が起きた時には、一真はすでにいなかった。彼は、昨夜のことは夢ではないかと半信半疑ですずに聞いた。
「昨日夜遅くになってから近藤さんが家に来たの。書道教室の中から近藤さんとお母さんが何だかひそひそ話をしているような変な声が聞こえて来た」
「うん。何か忘れ物をしたとかで家に来たの。でもすぐ帰ったよ」
すずは、秀一から目をそらし、うつむき加減に消え入るような声で言った。
秀一は、乱れた髪と気だるげな母の表情から、昨夜見たことはやはり夢ではなかったと思った。

朝遅い朝食のテーブルにつき食事を終ると、秀一はすぐにすずに告げた。
「お母さん。ぼくやっぱり学校に求人募集のあった川崎の鉄工所に住み込みで行くことにするよ。ぼくは、勉強がそんなに好きじゃないし、家も僕が高等学校に行けば、生活はますます苦しくなるしね。それとこんな狭い家に、四人で暮らすのは、もう息がつまりそうで早く家を出たいと思っている。一人減れば、この家もそれだけ生活費が少なくなり、書道教室に部屋を貸さなくても済む。そうすれば、弟の賢二も宏子も一人ずつ部屋を使うことが出来るからね」
「お前には上の学校に是非行ってもらいたいと思っている。叔父さんは東大の学生だよ。お前だって大学を目指して頑張ってほしい。そのためにお母さんはこうして働いているじゃないか」
「いいんだ。ぼくは早く家を出たい。その方がお母さんにとっても好都合じゃあないのかな」
「秀一。それはどういう意味だね。お母さんといるのがそんなにいやなのかい」
「とくにお母さんと一緒にいたくないというわけではない。でも、ぼくがいつまでも夜遅くまで勉強していると、お母さんはそれに合わせて夜寝るのが遅くなるだろう。それでも朝は決まった時間に仕事に行かなければならないから、睡眠不足で体が壊れてしまう」
秀一は、一真がいつまでもこの家で書道教室を続けることが嫌であった。
一真が家にいるときのすずは、何となく艶めかしく秀一を避けるようにする態度が感じられるのだ。
すずは、母心と恋心の狭間で揺れる自分を感じていた。四十の坂を越えて知ったときめきと、体に刻みつけられた感触を失いたくなかった。
（きっとこれが女として咲くことが出来る最後の花の季節となる。このまま老いて朽ち果てて行くのは儚く忍び難い。自分があまりにも哀れだ。少しでも長く一真との関係を続けたい）
そう思うかたわら、息子を邦夫のような有名大学に入れ、社会的地位のある人間に育てようとする希望が失われていく悲しみを味わっていた。
「そうかい。分かったよ。お前がどうしてもこの家を出て自活するというのであれば、無理に進学せよとは言わない。浜松北高に入学願書を出し試験もあと三日に迫っているが、受験しないのだね」
すずは、家を出ようとする息子の強い意志を感じた。昨夜のことを秀一に見られ、一真との関係が知られたに違いない。そのことへの嫌悪感が、秀一に家にいたくないという気持ちを起こさせていると、すずは察したのである。
隣の木本家の前の空地から梅の香りが漂って来た。焼

けただれた梅が、息を吹き返し、花をつけ始めた。
すずは、外を見た。雀の親子が餌をついばんでいる。小雀が、親雀から離れ飛び立った。
すずは、秀一の門出をそっと見守ることにしようと決心した。

四、恋の行方

秀一が家を出てから一真は、すずの家に居着くようになり、河野家の家族の一員として振る舞った。だが、次男の浩二、長女の道子は、いつまでもなつかなかった。
一真は、河野家で夕餉を共にし、塩町の母親のもとに帰らなくなった。すずの帰りの遅い時など食事の支度をして、彼女の帰りを待つこともしばしばであった。
すずは、自分より年の若い婿を迎えたような気になり心が華やいだ。戦中から戦後にかけての暗い時代を耐え抜いた甲斐があったと思った。あたかも灰色に閉ざされたトンネルを抜け、一度に明るい世界に飛び出したような解放感に満たされていたのである。
しばらく一真との甘い関係が続いた昭和二十四年五月の梅雨も近い頃、突然老婦人がすずの家を訪れた。
年の頃は六十を超えている。一真の母親と名乗り彼のいない留守を狙って来たようであった。
「私は、一真の母親でとみと言います。一真が大変お世話になっているようでお礼を申し上げます。今日は、あの子のことで相談に上がりました。こんな話をいきなり持ち出して申し訳ありませんが、このところ一真が家に寄りつかなくて困っています。世間では、息子を河野家に養子に出したように受け止められております」
「いえお母さん。お世話になっているのは、むしろこちらの方です。一度ご挨拶に伺わなければと思いながらつい伸び伸びになってしまいました」
すずは、きまりの悪そうな顔をして、一真の母親のとみに頭を下げた。
「あなたと一真との関係は、あの子から聞きました。ぶしつけなお願いですが、一真と別れてはくれませんでしょうか。あの子はまだ二十八です。これから世帯を持ち、世に出て活躍して行かなければなりません。私も夫に先立たれ女手一つでそのことを楽しみに生きて参りました。このままでは、世間様にも亡き夫にも顔向けできません。お願いですから一真を私の所にお戻し下さい。聞けば、お宅にも年頃の息子さんと可愛いお嬢さんがいるというではありませんか。息子さんにもこんな関係を見せつけるのは良くないと思います。あなたも母親であればそこのところは良くお分かりのはずです」
「お母さんのおっしゃる通りです。私も一真さんをいつまでも引き留めてはいけないと思いつつ、今日まで来てしまいました。浮いた気持ちで一真さんとこうなったわけではありません。なるほど年は十三も違い、まるで親子のようだと世間様にも言われますが、私は真剣です。一真さんがいるだけで幸せを感じています。世間の噂になっていることは、承知しています。ですが、どうしても私の口から別れてくれと言えないのです。別れるのが一真さんのためと思いながら、別れたくない気持ちが私の口を閉ざしてしまうのです。お母さん、どうぞ分かってください。もし、一真さんから別れてほしい、と言われたら引き止めることは出来ません。私としては、別れたくはありませんが、一真さんの意志であればあきらめることも仕方ないと思っています」
「まあ、あきれた。あなたという人はどういう人でしょう。息子は、あなたに誘惑され、道を踏み外してしまいました。その責任を取ってくれと申しているわけではありません。ただ、別れてほしいと息子に言ってくれるだけでいいのです。それも聞いてくれないのですか」
「そう言えば、私は自分の気持ちを偽ることになります。私は、他人に何と言われましても、自分の気持ちを偽ることは出来ません。強情な女だとお思いでしょうが、これだけは守って生きて行きたいのです」
すずは、涙ながらに自分の気持ちを素直に訴えた。
すずは、世間から悪評を受け、後ろ指を指されても、子供からふしだらな母と蔑まれても、好きなものを嫌いと言えるような女ではなかった。
とみは、あきらめてすずの家を出た。
とみは、一真に「別れる」と言わせる以外に解決の道はない。だが、これまで別れるよう説得したが聞き入れようとしなかったのだから、恐らく一真は当分の間、別れはしないだろうと思った。
(時が解決してくれるのを待つしかない。あと十年すれば、すずは五十の峠を超え、女としての魅力も失うだろう。その時、一真はまだ三十の後半である。それからでも人生をやり直すことも出来る)
とみは、野川屋を出て、失意のうちに大工町から元魚町へと夕暮れの道を歩いていた。
ふと気が付くと、小さな排水路に架る恋沢橋の手前にいる。薄暮の空に下弦の月がぼんやりと傘を被っていた。
とみにすずの家を訪ねたと告げられた一真は、その一月後、すずの家を出た。元魚町に空き家を見付け、そこで書道教室を開いた。
母親のとみを呼び寄せ、母を看取るまで共に暮らした。だが、すずとの関係は、すずが七十八歳で永眠するまで続いた。
一真は、生涯妻を持たなかった。すずをただ一人の妻と心に誓い独身を通したのである。

(完)

小さなカボチャ

新井　宏

終戦直前の昭和二十年春、小学校二年生になった時に、今の新潟県長岡市（旧古志郡）に疎開し、四年間少年時代を過ごした。

最初の一年間は、母の実家の古志郡高島村で世話になったが、父が復員してきてからは、父の長姉の住む古志郡片田村に間借りして、隣村の十日町小学校に通った。食糧難の時代ではあったが、コシヒカリで知られる「米どころ」で、貧しいけれど、ごく平凡な生活を送っていたように思う。

しかし、今の年齢になると、かすかな記憶が無性に懐かしく思い出され、そのひとつひとつが、自分の形成と無関係ではなかったことに気付く。

わずか四年間の疎開生活ではあったが、微妙な訛りから新潟出身者はすぐ判る。書き言葉としては標準語であっても、訛りは別だ。例えば越路吹雪の場合、『愛の賛歌』の中で「♫～あなたの燃える手で」、「♫～かたく抱きあい、燃える指に髪を」と歌っているが「燃える」の「る」が、まさに越後訛りなのである。

ところが、越路吹雪は、東京麹町生まれで長野県の飯山高等女学校に進んだという。そんなはずはあるまいと多少ムキになって調べてみると、父の転勤で新潟にも住んだことがあるという。そもそも「越路」の名前からして越後ではないか。

標準語の「う」を「う」と「い」の中間で発音すると越後訛りの「う」となる。似ている発音が東北訛りにもあるが、これは標準語の「い」を「う」に発音したもので「新宿、渋谷、品川」を「スンズク、スブヤ、スナガワ」というが如くである。しかし、東北弁は越後訛りと微妙に異なる。似た発音が、韓国語では標準的に使われている。

疎開したばかりの二年生の時は、高島村の小さな小学校だったので「複式授業」で、一年生と一緒に勉強していた。おしゃまな一年生の女の子が、調子を付けて教科書をすらすら読むのに、二年生にもなって一文字ずつ拾い読みしている状態で恥ずかしかったことを覚えている。喜怒哀楽は忘れても、恥ずかしかったことは忘れないらしい。

父が北支から復員して来たので三年生になる時に、片田村に移り、やや大きな十日町小学校に転校した。最初に貰った教科書は使い古しを墨で塗りつぶしたものであった。時代の変わり目を目撃したが授業のことは何も覚えていない。

おそらく四年生になった時の事だと思うが、校庭の片隅でカボチャを育てていた。食糧難の一助にというのであろうか、児童が手分けして小さな畑を作り野菜を植えていたのだと思う。

ところが、毎日見に行くが、カボチャの実がいつまでたっても大きくならない。濃緑と乳黄白緑、橙色が入り混じった実は、後の知識のカボチャに間違いない。葉も花も間違いなくカボチャであった。

夏休みが終わり、二学期になって、いよいよみんなで飼っていたうさぎと一緒に野菜類を収穫して、大きな鍋で料理することになった。それでもカボチャは大きくならない。

うさぎを捌いたのは担任の女教師だったろうか。当番でうさぎに草を食ませていたので、ちょっとはかわいそうに思ったが、女の子が割烹着を着て、急に大人っぽく料理を手伝っていた。ただ、それだけの記憶なのだけれど、なぜカボチャが大きくならなかったのかずっと気になっていた。

まず思いつくのは、肥料を施した記憶がなかったことである。乾燥した校庭の片隅を耕して作った畑に水をやった記憶も無い。他の作物がどうなっていたかも覚えていない。それにしても、韓国の路地に野生するカボチャを見た時、誰が収穫するのだろうかと思ったほど大きく育っていた。もしかしたら、カボチャの種類の所為だったのだろうか。

インターネットで調べると、普通のカボチャは一～二キログラムなのに世界記録は九一〇キログラムだと言う。その記録も昨年一〇五二キログラムに更新された。

食用にはならないが、世界中で大きなカボチャを競う大会がある。ハロウィンのシンボル的存在といえば、お化けのカボチャ。日本でも、四〇〇キログラムほどのカボチャが作られている。シンデレラの金の馬車はカボチャの変身である。

一方、小さなカボチャの種類もある。手のひらに乗る

ほどの小さな「黒皮小玉カボチャ」は緑～濃緑で、品種としては「坊ちゃん」とか「小菊」がある。「坊ちゃん」はホクホクとした甘味があり食べやすいサイズで、「小菊」はおもに北陸で栽培されていて、上品な甘味があり日本料理に適しているという。しかし、食糧難の時代にわざわざ小さなカボチャの種を植えたとは思えない。

カボチャは十六世紀中頃カンボジアに寄港したポルトガル船が豊後（大分県）にもたらしたもので、その際「カンボジア」が訛って「かぼちゃ」という名前になったという。しかし正確に言えば、その頃、カンボジアという国名はなかったはずなので、どうも疑わしい。

カンボジアにカンポットという港町があるので、おそらくこれに由来するかと思う。しかし、調べてみると、カンボジアの語源には、もっともらしい説がある。

それは、インドの僧カウンディニャ（カンブ）がこの地に建てた王国カンブジャ（カンブの子孫の意味）とする説である。カウンディニャは《梁書》七八八年に（扶南國）王憍陳如闍邪跋摩とある人物だというから時代的に見て、神話の類であろう。それはカンボジアには十世紀から十五世紀に掛けてアンコール・ワットで有名なクメールという強大な王国が存在していたからである。そこに「カンボジア」を示す国名はない。

ムキになって言うほどのことではないが、一昨年、アンコール・ワット等の築造に使われたクメール尺に関する論文を書いた際に、インド、ベトナム、中国との関係をかなり徹底して調べたことがあるからである。

まあ、語源はともかくとして、原産地は中央アメリカから南アメリカ北部の熱帯地方とされている。

ちょうど、「小さなカボチャ」を育てていた頃だと思うが、同級生に「坊ちゃん」に見える男の子がいた。画が抜群に上手く、特に風景画の秋色表現がすばらしかった。さっさと書き上げた画を見て、なんとか真似て色合いを出そうとするが、写真風の理屈っぽい色になってしまい、画の才能のないことを実感した。画家の息子だと聞いたが、一緒だったのはごく短期間だったように思う。その子も私も「旅（たび）の子」と呼ばれていたので、都会から疎開して来ていたのであろう。名前でも記憶していたなら、今頃どこかの画展でその名を見付けたかもしれない。

四年生の頃から、手当たり次第に本を読み始めた。まずマンガ『のらくろ』に夢中になった。『のらくろ二等兵』とか『のらくろ一等兵』という題名を覚えているので戦前の発行のシリーズである。どこにあったのか知らないが、「軍隊物」なのに厳しくは禁止されていなかったようだ。

黒い野良犬「のらくろ」が、犬の軍隊へ入営して、二等兵から徐々に出世し、最終的に大尉になる物語。昭和六年から「少年倶楽部」に連載され単行本にもなっているが、軍や内務省の評判が芳しくなく、太平洋戦争の始まる昭和十六年には終了している。

それからというもの、手当たり次第に「活字」を読んだ。田舎にも講談本がかなりあり、「真田十勇士」とか「岩見重太郎」「山中鹿之助」「荒木又右衛門」等を、繰り返し、繰り返し読んだ。ルビが振られていたので、小学生でも、とにかく読める。

その頃、村にも「おばさん」が経営する小さな「貸本屋」が出来た。本のない時代なので、戦前の本を集めて開業したのであろうが、紙質の悪い本もあったので、戦後の出版物も混じっていた。そこで「ロビンソンクルーソ」と共に「十五少年漂流記」も読んでいる。小学校四年生の冬に出た小出正吾の訳本がもう入っていたものと思われる。

不思議なことに加藤武雄の名前を良く覚えている。その頃、加藤武雄は少年少女小説を多く書いていたので、「小公子」や「小公女」の流れで、読んでいたのだと思うが、読み終わってしまうと、加藤武雄の本なら手当たり次第に借りてきて読んでいた。しかし、それらはほとんど「恋愛小説」で、大人の世界を覗いて見ても、よくわかるはずが無かった。

今では忘れられ去られた加藤武雄ではあるが、かつては菊池寛と並ぶほどの大作家で、膨大な通俗小説を書いて一世を風靡したという。私の住む相模原市の出身で、城山に文学碑があり、門人に佐藤愛子がいる。

加藤武雄の文学碑のある近くまで散歩で遠出することがあるが、その城山を下ると、夭折した詩人八木重吉の記念館がある。八木重吉は、武雄の再従兄弟で、重吉の第一詩集「秋の瞳」は武雄の尽力によって出版され、重吉没後にも重吉の妻の登美子の依頼で、詩集の出版を援助している。

登美子は、稀有の人生を送り、夭折した重吉の詩を世に出すため尽力し続け、重吉没後十九年目に万葉歌人吉野秀雄と再婚し、今度は秀雄を支え、九十四歳で平成十一年に世を去った。その縁であろうか、加藤武雄の墓碑は吉野秀雄の筆になっている。秀雄は良寛の研究者でもあり書に秀でていた。

ここまで書いたところで、加藤武雄や八木重吉のことをもう少し詳しく調べてみたくなり、相模原の図書館に出かけた。今では、市の図書館でも、郷里にゆかりの人物については、ある程度までの検索ができる。

そこで、びっくりする本を見つけた。久米準の『堺川を歩こう』である。城山の文学碑近くに源流を持ち、江の島に至る相模川に沿って名所、旧跡、文学碑などを紹

介している。著者の経歴を見ると、間違いなく小学校六年生の時の担任の先生だ。

久米先生に出会ったのは、疎開先から東京に戻った時である。先生はまだ二十歳だったのではなかろうか、よれよれの詰襟学生服を着ていた。授業ではしょっちゅう吉川英治の『天兵童子』などを何時間も朗読してくれた。まだ世の中が固まらず規制のゆるい良き時代であった。その中で歴史好きの少年が何人も誕生した。

後のことになるが、久米先生は、小学校四年生以上が使用する地図帳の山、二百四十七山を全て登って『先生の約束―社会科地図帳の日本全山踏破』を上梓し、それが済むと外国の山まで足を伸ばしていた。

疎開先のことに戻る。

田舎の学校ではあったが、五年生の夏休みに宿題が出た。その中に理科もあった。

理科については、もうその頃、天体運動についてかなり読んでいたので、生意気にその解説を書いて提出したが、先生はあまり評価してくれなかった。

ところが、もうひとつのレポート、「ピアノの鍵盤上の赤いフェルトが、黒い筐体に赤く写ることを観察した記録」を激賞してくれたのである。

ちょうど夏休みの最中に、田舎の小学校にもピアノが入ってきた。エナメル塗りの黒く筐体が輝いていた。そっと鍵盤カバーを開けると赤いフェルトが敷いてある。それが黒い筐体に赤く写るのである。なぜかその時大発見をした気分であった。校庭に出て、いろいろな色の花や葉っぱを集めてきては写してみる。予想通り元の色が写る。ただ、それだけのことを、大発見のように、書いて提出したのである。

先生から見れば、「当たり前なことを仰々しく」と感じたに違いないのに、褒めてくれたのである。

ここで、いきなりノーベル賞の話をする。

韓国は昨年もノーベル賞に無縁であった。先進国入りし、科学技術の水準も世界の水準に達していると自負しているのに、いつまで経っても音沙汰ない。隣の日本では既に二十一名もノーベル賞の受賞者がいる上に、昨年は中国育ちの女性がノーベル医学賞を受賞した。

何かにつけて、躁鬱症の韓国である。やたら優越感に浸って威張っていたかと思うと、急に劣等感に陥りシュンとしてしまう。その落差がはげしいのが韓国の特徴であるが、さすがに気づき始めている。最先端の話題の周辺でいくらたくさんの論文を書いても、ノーベル賞の対象にはならない。新しい科学の核となる新発見や新理論は、好奇心を暖め続け、幸運に恵まれて初めて生まれる。しかも華々しい成果が生まれるのは、そのごく一部に過ぎない。

科学技術の面で、急速に世界の水準に追いついた韓国は、その成功体験を基に、ますます「役に立つ研究」にシフトし逆に大混乱を起こした。例えば、ソウル大の黄禹錫教授のES細胞捏造事件のような研究に予算を集中し、好奇心ベースの雑多な予算を大巾にカットしてしまった。いわば遊びの精神を排除して一直線で成果を求めたが、ノーベル賞を対象とするならば自殺行為であった。その上、韓国は朱子学の国で、「理論」を教えてくれる「先生」に対しては、批判を抑制しないと生きて行けない。訳の分からない個人的な興味に没頭し、既存の権威に疑問を呈することなど、韓国では不毛の分野であった。

黒いエナメル塗りのピアノに写る「幼稚な観察」を褒めてくれた先生。そのことが、今の年齢に至るまで、私の好奇心を支えてくれたと思っている。

もうひとつ似た事例がある。新制中学の三年生の時であった。たまたま学級新聞を発行することになって、親から「ガリ版」を買ってもらった。へたくそな文字でA4版二ページが原則、毎月、出していたように思う。その内に、おそらく国語の先生の紹介で朝日新聞社の「学級新聞コンクール」に応募した。

もちろん入賞などするレベルのものではなかったが、審査担当者から「おほめの言葉」を頂戴したのである。ただそれだけのことであったが、それからは、新聞編集が病みつきになり、高校でも大学でも新聞部の部室に入り浸っていて、ついには、朝日新聞の科学記者になろうと思ったほどであった。

だから数年前から続けている『史游会通信』の編集など、他のメンバーからは「ご苦労なことに」と見られているかも知れないが、本人は意外に楽しんでいるのである。

幼い時に「ほめられること」、特に「好奇心」を鼓舞してくれたことは生涯の宝物。それは大人だって変わるまい。

まず、学ぶ前に自分で考える。考えて見て幼稚ではあっても「答」を出してから、回答を見る。それが「合っている」時の楽しさは醍醐味であり、次の問題に対して自信を生む。学んだ知識は時間と共に消えて行くが、自分で考え出した知識や理屈は、生涯忘れることがない。これが、私のやり方であった。

専門学者でもないのに、随分多くの論文を学会誌に載せた。「共著論文」を除いても約五十編あり、学会誌の名称を数えてみると二十誌以上になる。いかに多様な(種々雑多な)テーマについて好奇心の赴くままに、ひとりで研究をしてきたかがわかるであろう。

現在の学界では、主要学会誌に「単著論文」が載るこ

となどほとんどなく、最低でも指導教官と連名であり、時には十名以上の「共著論文」も珍しくない。そもそも「単著論文」が異例なのである。まして、同一人物が数多くの異なる分野に論文を載せることなど「有り得ない」のである。しかし、好奇心という次元で見れば、いずれも根っこは繋がっていて、いわば同じ分野なのであるが、他者からは「独創性」と評価される。

このような性向のため、勉強しなければできない英語が嫌いであった。本気で英語が零点でも入れる大学を探したほどである。小学校時代からの「乱読」の影響もあって、とにかく小説はもちろん歴史・地理、社会問題まで何でも読んでいた。多読は国語力を高めるし、講談に始まる歴史好きは、雑学的な社会科で一定以上の成績を取れる。その上、「自分で考える」理科や数学が好きで成績も良かったから、英語を軽視して過ごしても何とかなると思っていた。それでも、高校卒業までには、何とかローレンスの『チャタレー夫人の恋人』を読破しようと半分ほどまで読み終えたが、結局、進学は工科系を選んだ。

ここで、再びノーベル賞の話しに戻る。

この十年間に日本人の受賞者は十一名いるが、その出身学校を見ると、東大と京大は合わせて二名なのに、いわゆる地方大からは、山梨大、埼玉大、神戸大、佐賀大、長崎大と五名もいる。その上、日本のノーベル賞受賞者に共通するのは、みな幼少のころから「読書」に親しんできたことである。もちろん巨額な予算が支える「ノーベル賞プロジェクト」もあるが、日本には好奇心が支えた個人研究に秀でたものがある。

韓国では「陶工」が社会の底辺に位置付けられていたが、日本では名匠として上流階級と交流する機会があった。技術者としての道を究めるより、すぐに経営者になって指揮を執りたがる韓国人。韓国にいて、最も違和感があったのがそのことである。

時代の所為もあったと思うが、新潟で四年間過ごした疎開生活が単に懐かしいばかりでなく、自分の人生行路を定めたとの思いがますます強くなっている。

いずれ、「小さなカボチャ」の成因を探る実験を行ってみたい。

「あなたも田舎で暮らすなら」と「村の明日」

古屋富雄

今後も、都市と農村のあり方をテーマに農業や農村、地方の応援ソングを作り続けていきます。

今回のリリース、「あなたも田舎で暮らすなら」と「村の明日」を添付します。

都市と農村のあり方をテーマに農業や農村、地方の応援ソングとして、CD「古屋富雄作品集」のリリースを続けています。初版は、「過疎」と「遠い思い出」です。

そして、この2曲のアンサーソングとして、「ふるさと回帰」と「村に戻って」を7月にリリースしました。

さらにこの次は、コンセプトアルバム風に「あなたも田舎で暮らすなら」と「村の明日」を予定しています。

私は、農業や農村、地方の活性化を図るため、本「兼農サラリーマンの力」を出版しています。

また、誰でもが農業や農家になることのできる仕組み「市民農業者制度」などを創出し、講演活動を積極的に進めています。私の本や講演は、興味のある人しかその対象ではありません。

しかし、音楽は、興味のない人でも、メッセージを伝えることが出来る最も有効なツールと考えます。

あなたも田舎で暮らすなら

田舎の空気は美味しいでしょう
もちろん水も美味しいですよ
神社の椛は綺麗でしょう
レンゲの花も満開ですよ
村の人は親切でしょう
何かと面倒みてくれますよ
そろそろ田植えが始まる頃です
「植え付け順」は村が決めます

村社会、村社会、村には村の決まり事
独りよがりはできません
あなたも田舎で暮らすなら　分かって下さい　この事を

もうすぐ稲の刈り入れですね
一家総出の仕事です
時には助けを求めます
隣の家が来てくれますよ
村の道を歩いてみましたか
デコボコ道はなかったでしょう
年に一度は普請をします
皆で汗を流しています

結の心、結の心、村には村の思いやり
互いに助けて支えあう
あなたも田舎で暮らすなら　結の心を持ちましょう
あなたも田舎で暮らすなら　結の心を持ちましょう



村の明日

君と二人で登った丘に
百合の花は咲いていました
遠い昔に君に捧げた
花はそこに　咲いていました

二人の名前を記してきました
山の寺の住民帳に
夫婦になると先ずは行う
村の素敵な　習わしなのさ

何か空気が変わってきたと
村の人が言っています
君と営む農家の宿に
町から人が　来はじめています

やがて僕らに子供が生まれ
大きな声で泣いています
あやす君の優しい顔に
村の明日が　見えるようです



葛藤

横山正義

新緑の候、垣根のかずら、棚の藤の花が彩りを添える季節となりました。

掛川木鶏クラブ四月定例会
『致知』誌二〇一六・五号参照
日時　平成二十八年四月十六日土曜日午後六時半
場所　掛川報徳社別館
出席者　宮川正夫先生他十三名

巻頭の言葉
「攀念痴（はんねんち）を持たない」
日本を美しくする会相談役　鍵山秀三郎

①筆者は就職した時、何の知識も技能もなかったので、ずいぶんいじめられ家畜のようにこきつかわれました。うらむことなく、ただ与えられた仕事に励みました。

②私の両親は、戦争で全てを失いました。しかし自分にふりかかる理不尽や不条理をだまって受け入れ、静かにたちあがりました。

③心のエネルギーは建設的に用いなければなりません。

④仕事に精通して現在、経営者として活躍中。

⑤徳の活躍として、日本を美しくする会相談役を勤められています。

一、心の葛藤

葛藤、苦しみがどうして起こるのでしょうか。現実と理想との間におこります。

世の中での屈辱、蔑みなどで恨み、憎しみを抱き、反抗し、仕返ししようとすれば、ますます葛藤が大きくなり、脳からアドレナリンが出て、血圧が上がり、血管に血栓がたまり、心筋梗塞や脳梗塞の引き金になり、寿命を縮めます。

人類は約六百万年前、地球上に誕生し、進化を遂げ、十万年から五万年前にアフリカを出て、悪戦苦闘の末、私たちの祖先は一万八千年前、日本の地にたどりつき、その子孫、私たちは生きて働くだけで、働くことに貴賤は無く、いとおしく掛け替えの無い、尊い人生なのです。ましてや、人の尺度、名誉、金など関係ありません。

そして、その過程で、どこかに生きるヒントを、私たちの心に中に残してくれています。「それは有って無い世界がある」ということです。

自分に不都合なこと、さまざまな苦しみ、葛藤が有っても、ただただ、自分のなすべきことを前向きに、創意工夫することによって、アドレナリンの出ない世界、無の体感ができるのです。

それは筆者鍵山秀三郎の人生は物語っています。そして『徳』の世界、『致知』誌の巻頭の筆者として、私たちを啓蒙されています。

二、トイレの掃除

『致知』誌筆者鍵山先生はカー用品販売会社を設立し、成功を収めたということです。

次の文章は大変参考になる、例です。

『致知』誌二〇一六・二号参照
日本人本来のよさが発揮され始めた
日本を美しくする会相談役鍵山秀三郎

身近では、絶対的環境、逃げられない、誰も一生、使用するトイレの掃除、「やろうかどうしようか」という葛藤、「やろうという決心」です。

『意識の流れを変えるのです』
そこに苦しみがあってもない、世界が開けるのです。

三、禅

『致知』誌二〇一六・五号参照
第二十三回禅語に学ぶ
「一無位の真人」鎌倉円覚寺管長　横田南嶺

平成二十八年は、臨済宗の宗祖臨済義玄禅師の千百五十年忌にあたる。臨済禅師は、中国唐代の禅僧である。宗祖の千百五十年忌の法会を勤めるにあたり、まず修行僧たちが合同で大摂心を行うのです。摂心とは「心をおさめる」が原義である。静かにすわって心を整えます。

四、意識の流れを変える

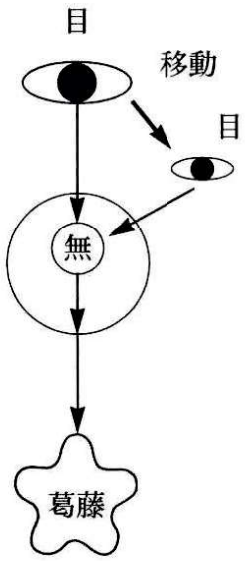
通常の業務から離れて、『意識の流れをかえることです』

これに気が付いたのは中国の達磨菩薩で禅宗を唱えて、千五百年、日本には鎌倉時代に入り、臨済宗、曹洞宗など、江戸時代に黄檗宗が伝えられ、今に伝えていま

す。

アドレナリンが全く出ない状態が長く続くと、ボケになるといわれます、健全な刺激は必要で、自らのマインドコントロールが必要となります。

五、自覚



与えられた環境での創意工夫によって、目の位置が変わり、無だけになり、葛藤が見えなくなるところがあるのです。葛藤は残影として残り、「あってない世界」です。禅宗では自覚といっているのです。

『参考文献』
人類の進化大研究　河野礼子監修　ｐｈｐ研究所
致知誌二〇一六・二号
致知誌二〇一六・五号

短歌

行雲流水(四十九)

石黒修身

近詠三十首

近況

坦々と齢(よわい)重ねて八十三息災に生きるを悦びとせん

春陽(はるひ)射す上野公園そぞろ行き「兵馬俑」観る博物館に

曽遊の西安で観し壮大を整々展示の労を顧慮する

旅をして短歌を詠むには身の捌き重きを覚ゆる老いの昨今

耳遠くなりし友との問答は声高となりあたり憚る

「告別は近親者のみ」友の訃に香も手向けず野辺も送らず
「老生」と自称を記しペンを置くためらいもあり紙面を睨む

被災

地震(な い)多き国に生(あ)れしは宿命と被災のさまを憂いつつ視る
活断層神の描きしこの地脈人智を越えし命運と識る
この国は「ゆりかご」のようだと逃げ出せし異邦人ありと笑うに術(すべ)なし
被災地の惨状報ずる映像に一臂を仮せぬ吾を苛む

社会

元知事の公私混同極まりて晩節穢す引き際までも
「ノーブレスオブリージ」は死語ならず高く掲げよ長(つかさ)の人は

異次元の「マイナス金利」は妙薬かはた劇薬か怯えつつ見る
元素記号113は何なるぞ日本が生みし「ニホニウム」の誉れ

世界

誰民を排除する国多くありシリアの民の流氓憐れ
西欧を「十字軍」と敵視するISの妄執に恐怖覚ゆる
テロリストその妄執の根底に宗教絡む深刻さ識る
大統領指名投票米国の無責任なるポピュリズム憂う
異様なる言動多き候補者の人気高いは米の病弊
謝罪など求めるものかオバマさん核廃絶の念い一途に
EUの残留決める投票を怯えつつ待つグローバリズム

「ドーピング」方針としてあったのか独裁国家の病弊顕わ

故郷

六月となれば故郷札幌で季節を感じ人との邂逅も
二百万大都市となりし札幌の涯はどこまで見極めつかず
吾れ滞りし間の札幌は小寒にてリラは咲けども華やぎはなし
常宿のホテルロビーは異国人ハングル・チヤイナの会話囂し
夕張市再建不調と聞きし午后メロンを食し美味を確かむ
ブランドと化しても旨し夕張のメロンを愛でて知友に贈る
故郷を訪ねることもあと幾度ふと過るのは老いの感懐

漢詩

潮汐錄（八十四）

鯨游海

慶祝大貫滿雄先生米壽

平成二八年五月

米壽龜監書百卷
大貫報德滿雄篇
鷄群一鶴時休筆
松籟徐煖茶釜泉

押印・卷 編 泉

〈大貫滿雄先生の米寿を慶祝す〉

米寿の亀鑑 書は百巻
大いに報徳を貫く 雄編に満つ
鶏群の一鶴 時に筆を休め
松籟もて徐に暖たむ 茶釜の泉

〔注 解〕

龜監＝亀鑑＝手本。模範。鑑。監は両声、鑑は仄声。
鷄群一鶴＝掃き溜めに鶴。多くの凡人中に居る究めて優れた人物の喩え。晉書・嵇紹傳「昂昂然如野鶴之在鷄群」
松籟＝松に吹く風。その風音。転じて茶釜の滾る湯の音。ここでは釜を煖める炭火に送る風と、湯の湧く音とを掛けた。また泉は「湧き上る茶の湯」と「湧き出る文藻＝文想」とを暗喩した。

〔口語訳〕

先生は米寿のお手本、長生きする人の鑑とでもいうべき模範の人で、その著わされた書物は百巻を越えよう。
二宮金次郎の研究者としても知られ、そのご高著は報徳精神が大いに貫徹している雄編ばかりだ。
掃き溜の鶴の如く、凡人ばかりの世間の中に在って究めて優れた才能をお持ちの先生は時に筆を休め、
松に吹く風を送って徐に茶釜の泉（文学、小説の構想）を煖めておられるのだ。

☆白皚々米寿めでたき白鶴は
松籟聴きて茶釜あたたむ

錦織圭選手　　平成二七年八月

右旋輕打如飛燕
左轉強攻疑鬼神
討滅群雄逾四傑
猶多未信是倭人

押印・神　人

〈錦織圭選手〉
右旋軽打　飛燕の如く
左転強攻　鬼神かと疑ふ
群雄を討滅して　いよいよ四傑
なほ多し　未だ信じざる是れ倭人と

〔注　解〕
起句踏み落とし。燕＝国名は平声、鳥のつばめは仄声。
錦織選手が世界順位四位と「世界の錦織」になったが、テニス先進国の欧米人は彼が日本人だとは中々信じない。

〔口語訳〕
右に旋り軽やかに打ち返すさまは恰も飛燕のようで、
左に転じ強攻する様子は鬼神そっくりだ。
世界に名だたる群雄たちを討ち滅ぼし今や世界四傑。
しかし世界中の多くの人は彼を日本人と思っていない。

☆緑眼と紅毛人の国技なり
　誰か想はん倭人の四傑

五郎丸日本初勝南阿弗利加　　平成二七年九月

六三連敗脱皮年
低首偏挑鐵壁肩
結印蹴球靈驗灼
雲蒸龍變世騒然

押印・年　肩　然

〈五郎丸日本南アフリカに初めて勝つ〉
六三連敗　脱皮の年
首を低れて偏ら挑む　鉄壁の肩に
印を結び球を蹴れば　霊験あらたかに
雲蒸竜変し　世は騒然たり

〔注　解〕
六三＝十八。数の表示に掛算の素数を用いる漢語特有の語法。白樂天「三五夜中」＝十五（満月）の夜中。
鐵壁＝堅固な守りの表現。金城鐵壁。
印を結ぶ＝神仏に誓願する為手指でポーズをとる。五郎丸選手は独特のポーズでファンを魅了した。
靈驗＝神仏の不思議で、測り知れない力の顕れること。
雲蒸龍變＝雲が群がり蛇がこれに乗じて竜と化し天に昇る不思議な働き。英雄が機会を得て世に出る譬え。

☆五郎丸印を結べばあら不思議
　さくらジャージー秋空に舞ふ

《漢詩の流れ72》平安時代②大江朝綱、藤原爲時

大江朝綱（八八六～九五七）

平安中期の学者。官は丹後守、参議に上った。詩文を良くし、渤海国の外交使者と応接する際の日本国側のエースとして菅原道眞の後を継いで名を馳せた。

渤海の斐璆は、彼の詩序に感嘆し、帰国後「朝綱は既に三公に昇るや」と質したという。

その詩序「夏の夜　鴻臚館に於いて北客を餞す」の一部は左の如くである。

「延喜八年　天下太平にして海外化を慕う　北客彼の星躔を算えて此の日域に朝く　扶木を望みて鳥の如くに集い　滄溟を渉りて子の如くに来る……
　時に日鶉尾に会い　船龍頭を艤う　麦秋搖落の情を動かし　桂月分隔の恨みを倍す　嗟呼
前途程遠　（前途ほど遠し）
馳思於雁山之暮雲（思いを雁山の暮の雲に馳す）
後會期遙　（後会　期遥かなり）
霑纓於鴻臚之曉涙（纓を鴻臚の暁の涙に霑らす）
嫗ずらくは遼水の客に対いて　敢えて孟浪の詞を陳ぶることをと爾云う」

この句が名句として人々に膾炙するようになったのは「平家物語」の忠度都落ちの条で「三位うしろを遥かに見送って立たれたれば、忠度の声とおぼしくて『前途程遠し思いを雁山の夕の雲に馳す』と口ずさみ給へば、俊成卿いとど名残をしう憶えて涙をおさへてぞ入り給ふ」と引用されたのが大きく影響している。

藤原爲時　紫式部の父。菅原道眞の孫の菅原文時の門下生。「和漢朗詠集」「本朝麗藻」等漢詩集に於ける最主要漢詩人。
和高礼部再夢　高礼部（高階積善）の再たび唐故白太保作　保（白樂天）を夢みるの作に和す
兩地聞名追慕多　両地に名聞こえ　追慕する者多し
遺文何日不謳歌　遺文　何れの日にか謳歌せざらん
繫情長望遐方月　情を繫けて長に望む　遐か方の月
入夢終踰萬里波　夢に入りて終に踰ゆ　万里の波
露胆雖隨天曉隔　露胆　天暁に随って隔つと雖も
風姿未與影圖訛　風姿　未だ影図と訛らず
仲尼昔夢周公久　仲尼（孔子）昔　周公を夢みて久し
聖智莫言時代過　聖智　言う莫れ　時代過ぎたりと

これらの詩からも、当時の漢学者の間で、如何に白樂天が憧れの的であったかを物語っていよう。

爲時の詩では積善の夢を孔子がいにしえの聖人周公をしばしば夢にみていたことになぞらえている。

論語で「甚だしいかな、吾が衰えたるや。久しいかな吾れ復た夢に周公を見ず」と歎いている。

漢詩

汲深録（五）

松井秀人

車窗望海　　車窓望海

平成二十八年六月

長汀窗外聴濤聲　長汀（ちょうてい）窓外　涛声（とうせい）を聴く
短艇滿帆滄海晴　短艇　満帆　滄海（そうかい）晴る
羣鳥亂飛魚忽躍　群鳥　乱飛　魚忽ち躍り
遙望富嶽夕陽傾　遥かに望む富岳　夕陽傾く

押韻・聲　晴　傾

〔注　解〕

長汀＝長く続くなぎさ。
涛声＝うねりの音。
滄海＝大海原。
富嶽＝富士山の中国ふうの名称。

〔口語訳〕

長いなぎさのそばをドライブをしていると、窓から波の音が聞こえ、
ヨットは帆を一杯に張り、大海原は晴れわたっている。
鳥の群れは乱れ飛び、その下の海では魚が躍っている。
遥かに望む富士山に、夕陽が傾いていく。

初夏偶成　　初夏偶成

平成二十八年六月

小園池畔綠參差　小園の池畔緑参差（ちはんりょくしんし）
疏雨絲絲濕柳枝　疏雨　絲々として　柳枝を濕す（うるお）
蛙鼓相呼醒午夢　蛙鼓　相呼び　午夢を醒まし
閑居軒下好風吹　閑居の軒下　好風吹く

押韻・差　枝　吹

〔注　解〕

小園＝小さな庭。
池畔＝池のほとり。
參差＝高さが不揃いのさま。
疏雨＝まばらな雨。
絲絲＝糸のように細い線をなしたもの。

濕柳枝＝柳枝を湿らす。
蛙鼓＝多くの蛙の鳴く声。
午夢＝昼寝の夢。
閑居＝静かな住まい。
軒下＝のきした。

〔口語訳〕

小園の池のほとりの柳の緑は、高さが不揃いで、
まばらな雨が糸のように降り、その柳の枝を湿す。
蛙の声々が呼び合い、昼寝の夢から醒めてしまい、
静かな住まいの軒下に、好風が吹いている。

山湖星影　　山湖星影

平成二十八年六月

山亭仰看夜天悠　山亭（さんてい）　仰ぎ看る　夜天悠なり
眼下清湖一望収　眼下の清湖　一望に収まる
星影熒熒映波上　星影　熒々（けいけい）波上に映ず
遙遙列宿漢河幽　遙遙（ようよう）たる列宿（れっしゅく）漢河幽なり

押韻・悠　収　幽

〔注　解〕

山亭＝山中のあずまや。
眼下＝目の前。
清湖＝清らかな湖。
一望収＝一望に収まる。
星影＝星の光。水などに映る星のかげ。
熒熒＝月や星の光り輝くさま。
遙遙＝はるかに遠く離れるさま。
列宿＝大空に連なる多くの星。
漢河＝天の川。

〔口語訳〕

山中のあずまやから、仰ぎ看る夜天は悠かに遠い、
目の前の清らかな湖は、一望に収まっている。
星の光りは輝き、波上に映っていて
遥かに遠い空に連なっている多くの星、天の川はかすかでほの暗い。

ロボット雑考（その四）

三戸岡　道　夫

（ロボット様のお通りだーい）

二十一世紀に入り、日本は少子高齢化の時代になってきた。人手不足。そのために、保育施設の充実、婚活のサポート、イクメンの推進など、いろいろ叫ばれているが、どれも決め手になる解決方法はない。

いよいよロボット様のお出ましである。

下にー、

下にー、

ロボット様のお通りだーい。

しかしまだロボットも出始めたばかり、これから出ようとしている段階で、それほどの力を発揮しているわけではない。まだロボットは、人間をサポートする補助手段にぐらいにしか、考えられていないのではなかろうか。

たしかにまだロボットは出始めたばかり、いや、これから出ようとしている段階で、それほどの力を発揮しているわけではない。現段階では、まさにそうである。しかしロボットの開発は、予想以上のスピードで進むのではあるまいか。

そして人間が気がついた時には、人間はロボットに征服され、ロボットが主人で、人間が使用人になっているかもしれないのである。

（そんな馬鹿な！）

と言う人がいるかもしれないが、現在の情報科学の技術はそこまで発達し、これが妄想ではなくなってきている、ということである。

二十一世紀に入り、世界ではいろいろな混乱が起きている。

それはテロであったり、デモであったり、領海荒したったり、様々な形態である。その内容も、経済問題、政治問題、民族問題、難民問題、格差問題、宗教問題などと、様々である。

しかし、これは言ってみれば、地球上の人間同志の争いである。

しかし人間がそんな紛争にうつつを抜かしている間に、ロボットという、新しい「人間のライバル」が迫っているのを、人間は氣がついていないのではなかろうか。そのライバルは、やがては人間を地球上から抹殺してしまうかもしれない、恐ろしい力を持った「人間のライバル」なのである。それはロボットが人工頭脳によって動くようになったからである。

二十一世紀に入り、ロボットの人工頭脳は急速に発達してきた。

人間の頭脳は一口に言って、「知、情、意」という三つの分野の活動をするが、それはロボットの人工頭脳においても同様である。

知情意のうち知については、巨大コンピューターの発達によって、ロボットの方がすでに人間より優れてきている。その一例として勝負の世界の将棋では、すでに名人よりも強いという。また記憶においても、種々の辞典とか、バイブルとか、論語をはじめ現代に至る種々の書籍をすべてロボット（人工頭脳）は記憶することが出来、どんな人間でもかなわないであろう。

ロボットの人工頭脳が、まだ人間に追いつくことが出来ないのは、感情や意思の分野である。

では感情や意思の分野では、ロボットは永久に人間に追いつくことができないのであろうか。いまその辺の研究が進んでいるのであるが、それも徐々に距離を縮めているのである。

たとえば人間に何かの感情が起ると、脳のある部分に、いろいろな変化が起るのである。子供が死んで親が悲しむと、脳のある部分に、A、B、Cという変化が現れる。そこで今度はロボットの人工頭脳の同じ三ヵ所に、A、B、Cという変化を起こさせると、ロボットの人工頭脳にも「子供を失った親と同じ悲しみ」の反応を起こすのではなかろうか。

そしてこの悲しみの種類を次第にふやしていけば、ロボットの人工頭脳にも、感情が芽生えてくるのではあるまいか。時間はかかるかもしれないが、十分可能性がある。

人間も何億年という巨大な時間をかけて、現在の頭脳に達したのであるから、ロボットの人工頭脳がそこまで到達するのには、やはり巨大な時間がかかるのであろう。

しかし今は、その人工頭脳の中心部であるコンピューターが、驚くべきスピード能力に発達している。短時間で、京（兆の一万倍）の計算できるコンピューターが出

来ている現在である。ロボットの人工頭脳の製造にこのコンピュターを使えば、人間の頭脳が何億年もかかって発達してきたものが、何時間、いや何十分という短いスピードで、出来てしまうのではあるまいか。

そしてここまで人工頭脳が発達してくれば、ロボット人工頭脳に感情が芽生え、意思の力がつくのは、そう遠いことではないと思われる。そうなれば更に、推理力とか、直感力、先見性、決断力はもちろんのこと、仁、義、礼、知、信の徳性の世界にも及び、ついには「無」の境地にも達することも出来るのではなかろうか。

さて、こうして人間に代ってロボット社会になってしまうと、政治はどのようになるのであろうか。

二十世紀、二十一世紀は、民主主義、民主主義の大合唱である。そして民主主義のシンボルは選挙である。政治家は人民によって選ばれる。したがって政治家は人民の代表である。したがって、

（政治家は人民の意に沿った、すぐれた、よい政治をする筈である）

という前提に立っている。

しかし現実は必ずしも、そうではない。選挙政治は暗愚政治になる危険もある。そしてその実例を、我々は見たり、聞いたり、体験させられたりしている。

政治で一番いいのは名君政治である。しかし名君政治の問題点は、いつの時代にも必ず名君が現れるという、保証がないことである。世界の歴史を見れば、それは一目瞭然である。

歴史を見るとたまには名君が現れることもある。名君だから、独裁政治に任せておいても安心である。しかし次も名君が現われるという保証はない。名君は一代だけで、後は暗君、愚君の独裁政治では困るのである。それならば、暗愚政治でも、民主主義の方が平均して安全度が高いとして、選挙、選挙ということになるわけである。

しかし、歴代、名君が現れるということが確約出来れば、名君政治の方がいい。そしてその名君を確約できるのが、ロボット政治である。

すなわち理想的な名君ロボットを作るのである。名君は歴史上に大勢いるから、それを綜合した名君ロボットを作ればいい。

すなわち、仁徳天皇から聖徳太子、上杉鷹山、二宮尊徳、孔子、キリスト、ガンジー……等々の、政治思想、政治業績などを綜合して、ロボットの政治人工頭脳を作ればいいのである。そしてロボットは死ないから、いつまでも名君ロボットは名君政治を続けることが出来、人気は安泰なのである。

（ロボットの世界になったら……）

ロボットは人間のように死ぬことはない。

しかし、ソフトの老朽化とか、型が古くなるとか、金属疲労とかによって、使用に耐えなくなることはある。

しかしそうなれば、そこで解体して、新しいロボットを作ればいいのである。人間のように、女性が産むとか、産まないとか、大騒ぎする必要はない。すぐ名君生産工場で、大名君を作ればいい。

また、ロボットには男女の区別はない。すなわち中性である。もちろん、男性ロボット、女性ロボットを作ることは出来るが、その必要はない。人間の子供は男女の営みによって出来るのであるが、ロボットはそうではなくて、工場で生産されるからである。

したがって、子供のロボットもない。人間は、赤ちゃん、子供、大人という段階を経て、一人前の人間になっていくのであるが、ロボットは工場で一気に大人のロボットが作り上げられてしまうからである。したがって現在大問題になっている、子育て、保育、いくめん、学校教育の問題も、まったくなくなってしまうのである。

したがって保育所も、学校も必要ない。必要な知識は工場で生産する時に、ロボットの人工頭脳の中に、全部インプットしておけばよいのである。そして不足している知識や、その後に発生した新しい知識を補うためには、現在町角にあるガソリン・スタンドのような「知識スタンド」に立ち寄って、ガソリンを注入するように、新知識を注入してもらえばいいのである。

しかし子供ロボットがいないといっても、育てるのではなく、可愛がるために欲しいという場合もあるであろう。いわばペット代りである。そうなればペット・ロボットを作ればいい。しかしペット・ロボットであるから、可愛いければいいのであって、育てる必要はない。もちろん、

（もっと可愛いいロボットを）

と、改良することは出来る。そうなると、犬や猫は要らなくなる。しかし人間赤ちゃんペットより、犬、猫ペットの方が好きだという人（ロボット）が居るかもしれない。そうすれば犬ペットロボット、猫ペットロボットも出来てくるであろう。

またロボットは病気にならない。したがって、医者も病院も必要なくなる。そうしてまた薬品も不要である。

その代り、ロボットは故障したり、古びてきたりするから、修理工場、改修工場が必要である。しかしその工場で働いている作業者も、全部ロボットなのである。

またロボットは病気にもならない、死ぬこともないと同時に、食べなくてもいいのである。そうすると人間にとって一生のうち一番大切な、食料が必要でなくなる。

すると地球の上から、農業がいっさい不要になってしまうのである。ということはいま問題になっている世界の食料事情が一挙に解決してしまうのである。

現在、地球の上の人口は約七十億人。そろそろ地球の食料供給力は、その限界に近づいてきているという。二十一世紀が終らないうちに、地球上では食糧難に陥り、餓死者が続出し（現在でも地球上のある地方では、そのような現象が起きている）、食糧をめぐっての地球規模の大困乱に陥るという。その食糧大問題がロボットによって見事に解決されてしまうのである。

その代わり、ロボットに必要なのは電気である。ロボットの頭脳や身体を動かす源は、すべて電気であるから、ロボット社会になると、飛躍的に電気が必要になる。現在でも電源については、石油、石炭、ガス、原発と、世界的に大問題になっているのに、それをどうするのか。

ロボットはその問題を簡単に解いてくれる。その電気は、原発で作ればいいのである。ロボットは原発の放射能など無関係、こわくない。なんと合理的、科学的ではあるまいか。

そもそも地球にとって人間とは何かと考えてみると、地球は人間が住むために在るのではない。地球は地球として物理的に太古の昔からそこに在り、そこに何が生えようが、何が棲もうが、地球自体には関係のないことである。

そこへ長い時間をかけて、人間が生まれ、棲みついたのであり、人間は、

（地球は人間が棲むためにある）

などと考えているが、それはとんでもないことである。地球が頼んで人間に住んでもらっているのではなく、人間が勝手に住んでいるのである。地球から見れば、人間が住んでいても、いなくても、どうでもいいのである。大昔のように、巨龍でもマンモスでも、かまわない。したがって人間に代わって、今度はロボットが住む世界になっても、ちっともかまわないのである。

これから千年先、二十二世紀のことを考えてみると、地球はロボットによって占領され、人間の姿はいなくなってしまうかもしれない。いや千年などと言わなくとも、もっと短期間にそうなってしまうであろう。

そうなるとロボット達が集って、

「昔は人間って動物がいたんだってねえ」

などと話し合う。

「うん、そうだってねえ」

「その人間をどこかで見ることは出来ないかなあ」

「うん、動物園へ行けば居るかもよ」

そこでロボット達がぞろぞろ動物園へ行くと、檻の中で、人間がおむすびを食べているのを見た、というようなことになるのではあるまいか。

（人工知能ブーム）

ロボットがこのように人間にとって大きな問題となり、更に人間の未来までも左右するようになったのは、人間の頭脳に当るロボットの頭脳、すなわち人工知能（ＡＩ）が、コンピューターの異常ともいえる発達に伴って、急速に発達してきたからである。

人工知能（ＡＩ）はもちろん以前から研究されてきたが、現在はその第三次ブームを迎えている。

第一次ブームは一九五〇年代（昭和二十五年代）である。人間の脳の仕組みをまねたＡＩの概念が生まれたが、技術的な制約もあって、下火であった。

第二次ブームは一九八〇年代（昭和五十五年代）である。専門家に代わりデータを基に様々な判断をするシステムが実用化されたが、応用範囲が狭く、普及しなかった。

第三次ブームは二〇〇〇年代（平成十二年代）である。無数のデーターから特徴を見つけ出す「ディープラーニング（深層学習）」などの学習技術が発達し、幅広い実用化に向けた開発が加速した。

いま人工知能の研究開発は、世界中で加速しており、その進歩は、二乗、三乗、四乗…という指数関数的な伸びを示すので、三十年後の二〇四五年には、人類全体の知能を上回る「技術的特異点」に達すると予測されている。

その時点で人類は、コンピューターに支配されるかもしれないし、そうならないまでも、一大変革に見舞われることは不可避であろう。すなわち三十年後の二〇四五年には、コンピューターに高度の知的能力を持たせた人工知能がもたらす、主客の転倒劇が、起る可能性があるというわけである。

宇宙物理学者のホーキング博士たちも、この問題を憂慮しているが、近づく特異点に対して注意を喚起する彼等の声は、まだ世界に浸透していない。人工知能は、当面は社会の利便性を拡大し、産業競争力を増す方向に作用するという利点が、事の重大性が認識されないままに、事態は進行していくのであろう。

欧米に比べてかなり出遅れ感があった日本も、ここに来て人工知能の研究のアクセルを一気に踏み込んでいる。先ごろ示された平成二十八年度予算の概算要求で、文部科学省、経済産業省、総務省の総計は一五〇億円に達している。このうち一〇〇億円を計上した文科省では、理化学研究所に人工知能の研究拠点を新設する方針である。将来の経済成長を支える次世代中心技術として期待されていることから、三省合同で研究開発力を強化するという。

ＩＢＭが開発した人工知能の「ワトソン」は、二〇一一年に米国のクイズ番組に挑戦し、人間を相手に優勝した。普通の言葉で出された問題の、意味を理解しての即答である。チェスの試合で勝つより、難易度は高い。

間もなく車の自動運転への利用や、介護ロボットへの搭載、病気の自動診断などが、実現しそうな勢いである。

先進国で人口が減少しても、さまざまな困難は人工知能で克服できる。だから人類の将来はバラ色の夢に満ちていると思われがちである。先端科学技術は鋭利な諸刃(もろは)の剣である。本格的な人工知能時代の扉を開けると、同時人類時代の日没が待っている可能性も高いのである。

人工知能は、自分のプログラムをより適切な形に書き換えるなどして、経験を基に賢くなる機能を備えているので、決してSFの世界などと、あなどることは出来ない。

しかも先進国の政府や巨大企業は、生存競争に血眼になっている。したがって人工知能の進歩は、抑止不能な上昇曲線を描くのである。

人類は自分たちが主人のつもりでコンピューターやロボットを開発してきたが、じつは既にコンピューターの掌上で踊らされているのかもしれないのである。

そう思う理由は「ムーアの法則」である。世界最大の半導体企業である米・インテル社のゴードン・ムーアが一九六五年に提唱した、半導体チップの性能向上のテンポに関する将来予測である。一~二年ごとにチップの集積度が二倍になりながら、高性能化が進むという予測であるが、実際に素子の集積度は、指数関数的に増え続けて、現在の情報化社会を出現させている。

しかし見方を変えれば、ムーアの法則による自己誘導があったからこそ、チップ産業界はそれをよりどころに高い壁を乗り越えながら、倍々の高性能化を推進できたのである。

イギリスの数理科学者アラン・チューリングが、コンピューターサイエンスのドアを開いてから、約六十年が経過した。インターネットの出現で人類は、一〇〇億個の神経細胞に変身しようとしている。地球が宇宙に浮かぶ一個の脳になろうとしているのである。

人工知能は、これからの三十年で、過去三十年とはフェーズの異なる発展を遂げる。今は機械にすぎない人工知能が、「意識」を持つとどうなるか。開発の流れは、人工知能をより高度化するために、ロボットに意識を持たせる方向へ進んでいるのである。

たとえ話であるが、大きな湖に、毎日二倍に増える浮草が発生した。六十日かけて増殖した浮草は、湖面の半分を覆うまでになった。この湖の全面が浮草で覆いつくされるのは何日、何日後であるか。答えは「翌日」である。この例え話は、人工知能にも当てはまるのである。

（深層学習）

人工知能が注目されるきっかけになったのが、「ディープラーニング」（深層学習）

と呼ばれる技術の登場である。人の脳をまねた情報処理の仕組みで、大量データの中にひそむ複雑な特徴を、自力で探し出す。ロボット制御や、画像解析、工場での故障検知、病気診断など、多くの応用が期待される。

ボールを見つけた身長六十センチメートルの人型ロボットが、ボールを両手の間で転がし始めた。ボールを制御するプログラムは入っていない。人がロボットの腕をつかんで動かし、動作を教えただけである。

早稲田大学の尾形教授らは、ディープラーニングをロボット制御に生かす。腕の関節の角度や、カメラの画像情報などをロボットに学習させ、手の力の加減によって、ボールや手の見え方がどう変わるかを関連づけた。

ボールを持つ、ベルを鳴らす、といった動作を教えると、次からはボールやベルを差し出すだけで、動作をくり返す。尾形教授は「画像や音、制御信号など、種類の異なる情報をすべて組み合わせて学習できる」と利点を説明する。

ディープラーニングの登場前は、画像認識なら、輪郭の形、色合いなど、特徴の抽出方法がコンピューターに教えていた。しかし人間は、目に映ったり耳に入ってきたりした情報を、無意識に処理するケースが多く、特徴を決めるのは難かしかった。

ディープラーニングなら、人が気づかないデーターの特徴も見つけ出せる。「人工知能における五十年来のブレークスルーだ」と、東京大学の松尾准教授は高く評価する。

この技術が世間の注目を浴びたのは、二〇一二年である。インターネット検索大手の米グーグルは、大量の画像から「ネコの顔」を人工知能に認識させることに成功した。カナダのトロント大学はディープラーニングを使い、画像認識の精度に関する競技会で一位に輝いた。こうした成果に触発されて、日本でも研究が加速した。歩行者を認識する自動車の安全技術などに取入れる例も出てきた。今のところディープラーニングで優れた成果が出ているのは、画像や音声関連が多いという。

しかし優れた技術にも課題はある。その一つがコンピューター内部の複雑な処理を、人が理解しにくい点である。IT（情報技術）企業の担当者は、

「中身がブラックボックス化していて、顧客のデータを分析して得た結果の理由を説明できない」

と言う。

弱点を克服する人工知能の進化版も誕生している。東京工業大学の長谷川修准教授らが開発した「SOINN」（ソイン）である。複雑なネットワークで計算するディープラーニングに対し、データの量と特徴に合わせた必要最低限のネットワークで済む利点がある。

計算量が少なく、途中経過の後から分析可能である。実験ではインターネットの情報を使い、写真の物体を認

識したり、ドローンに自律飛行を学ばせたりすることができた。

長谷川准教授は二〇一四年にベンチャー企業も設立した。NTTコミュニケーションズと位置測定の技術を開発し、土木大手などと水害予測の実験も進める。

「今の人工知能はインターネットの黎明期に当る」と松尾東大准教授はみる。ネットは当分冷めそうにない。

人工知能（AI）の研究者たちが一九八〇年代に提唱した「モラベックのパラドックス（逆説）」というものがある。大人ができることよりも、子供ができることの方が、コンピューターで実現するのが難かしいというものである。コンピューターに知能テストを受けさせたり、ゲームをさせたりするよりも、一歳児レベルの知覚と運動のスキルを与える方が、はるかに難かしいか、あるいは不可能である。

一九六〇～一九七〇年代にかけて「医療診断をするAI」や「定理を証明するAI」など、専門家ができることが、次々と実現した。そして最近ではクイズでチャンピオンに、将棋でプロ棋士に勝つAIも現れた。凄いことであるが、AI研究者からすると、驚くには当らない。

一方で、画像に映っているものが猫か犬かを判定するような「画像認識」や、「積み木を上手に積む」といった運動スキルなど、子供でもできるようなことは、何十年もコンピューターには一向にできなかった。

しかし二〇一二年、ジェフリー・ヒントン・トロント大教授たちのチームは、画像認識のタスクで、従来を大きく上回る精度を達成し、研究者たちをあっと言わせた。ディープラーニング（深層学習）という技術である。画像を見分けるという、まさに「子供にもできること」で、精度が大幅に向上したのである。

その後、二〇一五年（平成二十七年）二月に米マイクロソフト、三月には米グーグルが、人間の画像認識の精度を超えるプログラムを開発した。ついに「子供のAI」が現実になり始めたのである。

認識の次にできるようになることは、行動の熟練である。たとえば犬にお手を教えたい時は、餌を与えることを繰り返す。つまり、褒美をもらう前にとった行動が強化される。人間も、例えば「サッカーボールを蹴る」という行動を何回も繰り返すと、そのうち少しずつ上手になっていく。

米カリフォルニア大バークレー校は、二〇一五年五月、ディープラーニングと、強化学習というタイプの学習方法を組み合わせて、ロボットの動作が熟練していく様子を見せた。たとえばおもちゃの部品を組み立てるなどの動作が、試行錯誤により徐々に上達する。

我々は次のように思い込んではいないであろうか。機械は「機械的」な動きしか、ロボットは「ロボット的」な動きしかできないと。人間や犬は、歩く、走る、飛ぶなどの動作が徐々に上達するのに対し、機械やロボットは上達するはずがないと。

これらが出来なかったのは、「子供のAI」すなわちディープラーニングが可能にした、現実世界から何を取り出すかという、「特徴量の抽出」が、できなかったからだ。ひとたび「子供のAI」が出来れば、人間と同じように動作が上達、熟練する。

ここで注意しなければならないのは、AIが勝手に成長し、人間を脅かすことはないという点である。知能は生命とは異なる。知能は与えられた目的に対し良い方法を見つけるが、生命のように生存や増殖といった目的を、自発的に持たない。おもちゃを組み立てるなどの目的を与えた時、適切な方法を見つけ出し上達しても、自らおもちゃを組み立てることはない。

いま、AIブームを迎えている。米IBMの「ワトソン」などは、「大人のAI」だ。企業もビックデータを取得するようになり、それを活用するためのAI利用が進んでいる。これも「大人のAI」だ。知的な振舞いができるように、裏で開発者が一から十まで設計している。とはいえ、これまでデーターを蓄積できなかった、あるいは活用できていなかった領域（顧客管理、医療、金融、教育など）では、そのインパクトは大きい。

「大人のAI」と「子供のAI」を混同してはいけない。どちらも重要だが、戦略が異なる。「大人のAI」はビックデーターの世界であり、グーグルや米アマゾン・ドット・コムが強く、最初にプラットフォームを築いたものが有利である。経営とどのように結びつけるかが鍵で、マーケティング、販売と、相性がよい。ビジネスチャンスをかぎとる力が重要で、成功しなければすぐに撤退するピボット（旋回）戦略と、ノリの軽さが、必要である。アメリカが強く、これから日本が逆転するのは難かしい。

一方で、「子供のAI」は、ハードサイエンスと真面目な研究開発が重要だ。個別分野でニーズに正しく応え、圧倒的な性能向上により製品の付加価値を生む。きちんとした設備投資と設計が必要で、ものづくりと相性がよく、日本にもチャンスが大きい。

画像認識のためのカメラから始まり、センサー、セキュリティ、製造装置、ロボット、建機や農機などの機械設備、物流、インフラ産業が関係する。さらには、モーターなどの駆動系や素材産業も間接的に関係する。様々な産業が「子供のAI」により一気に発展する可能性がある。

日本はいま、熟練工の後継者不足、介護人材の不足、農村の耕作放棄地、原子炉の廃炉問題など、多くの問題

を抱えている。これらに共通するのは、運動を伴う労働の不足だ。「子供のＡＩ」で、機械やロボットの運動能力が向上することにより、解決策が見えてくるかもしれない。

「子供のＡＩ」、すなわちディープラーニングの技術で先行するのは、アメリカ、カナダ、フランスである。日本はひいき目に見ても、二番手集団の一角といったところだ。グーグルやアメリカ・フェイスブックなどは、膨大な資金で優秀な技術や研究者を集めている。しかし面白いことに、本当にチャンスがあるのは、こうしたネット系企業や移民を受け入れるアメリカではなく、ものづくり企業や労働力不足の日本である。

日本が国としてやるべきことは、まず「子供のＡＩ」に、きちんと研究開発投資をすることだ。ディープラーニングと既存技術の組み合わせでは、例えば、ロボティクス、推論、言語、知識処理に関する重要な研究課題が数多くあり、大きな産業的インパクトがある。また、ディープラーニングを使いこなせる人材の育成が急務だ。また産業の新しい成長を阻害しないような法整備と、新しい産業構造を踏まえた産業政策の実現も重要であろう。

産業界も対応が急がれる。最近は技術革新のスピードが速すぎて、会社が事業化に追いついていない。各社は早急に、自らの領域で、何が変わる可能性があるのかを調査し、動くべきである。ポイントは、画像認識精度の向上と、運動能力の向上だ。基本的な戦略は、ディープラーニングを使った画像認識の製品を早期に投入し、その後、機械・ロボット系の製品を投入していくことだ。個別分野でのデーターの獲得が、先行者利益と、参入障壁を生むのである。

この点から世界の動向を見ると、諸外国は、「子供のＡＩ」が物作りに大きな影響があることを、まだ明確に意識していない。諸外国に対する時間的な優位は、おそらく半年から一年である。この間に一気に、ＡＩを組み合わせた製品を、世界市場に投入できるか。それが勝負である。

最後に大胆な予想をしてみよう。ＡＩを使った世界的な超巨大企業、つまり「ネクストグーグル」は、建機、農機、食品加工の分野から出現する。これまでは自然物相手にするために、本質的な自動化・機械化ができなかった。しかし巨大な市場を持つ分野であり、今後、そこを制した企業が、インフラから日常生活に至るまでＡＩを使って、社会全体を豊かにする様々な製品を生み出す可能性がある。

モラベックのパラドックスは崩れた。急がねばならない。

人工知能（ＡＩ）の産業別の可能性

	大人のＡＩ	子供のＡＩ
自動車		生産、運転、事故防止
建設		建設現場での各種作業
医療	医療データーからの知識発見、健康アプリ	画像診断、見守り、手術支援
不動産	物件検索	防犯、監視による付加価値向上
外食	マーケティング	調理、接客
物流		積み替え、運転、戸口配送
電力	節電アプリ	点検、建設、廃炉作業、異常監視
介護	コミュニケーションアプリ	見守り、移動、トイレの世話
農業	データー分析による栽培	耕運、整地、播種、育種、追肥、除草、収穫、見張、調製

すなわち、世界で企業間の競争が新たな段階に入ったのである。企業の種類や規模は関係ない。ルールも働き方も従来とは違う。そこかしこで次代の新産業を切り開く胎動が見えてくる。これから企業が成長を続けるには、この競争に加わり、勝たねばならないのである。

手工業から機械工業へと転換した十八世紀以来、人類は幾度かの技術革新を経て、生産性を高めてきた。しかしＩＴが社会に深く入り込んだ今の変革は、これまで以上のインパクトを放つのである。企業や業界の垣根は消え、プレーヤーが入り乱れる大競争になるのである。その混沌が加速度的に技術革新を促し、産業の姿を大きく変えるのである。

世界で初の実用的な電子計算機といわれる「エニアック」が生れて、約七十年がすぎた。スーパーコンピューターがようやくこなした計算も、今では手のひらサイズのスマートフォン（スマホ）で瞬時に処理できる。ＩＴ（情報技術）は加速度的に進化する。その革新の担い手は、思わぬところにいた。

「病気の一歩手前の『未病』を見つけることだって不可能ではない」

と、某大学の教授は言う。しかし、この教授は医学部の教授ではない。複雑な現象を数式で解き明かす、数理工学と呼ぶ新分野の専門家である。製薬会社などと組み、病気の予兆をつかむプロジェクトを主導している。

病気の症例や治療法、二万種を超える遺伝子の情報など、様々なデーターから数式を基に、治療や予防に役立つルールを導き出す。数字と医療という、垣根を越えた組み合わせが、病気に苦しむ患者に光を与えるのである。

米カリフォルニア州マウンテンビュー。公道と米グーグルの自動運転実験車が走る。交差点での停止や、発進はスムーズであり、車線変更もなめらかである。路肩を走る自転車があれば、車間距離を十分にとって、抜き去っていく。運転席に人は乗っているが、運転は人工知能（ＡＩ）がやっている。走行にぎくしゃくした動きはなく、熟練ドライバーのようなハンドルさばきである。人間より安全に走行する日が迫っているのである。

この自動車産業への影響は、計り知れないものがある。車の性能を左右するのはエンジンの馬力でも、燃費でもなく、ＡＩ（人工知能）の賢さである。約一三〇年にわたって磨いた技術やノウハウに、自動車産業は安住しては生き残れないのである。

（ロボットは機械ではない、知性である。）

労働力の不足を補い、いかにして工事の効率をあげるかと、建機大手のコマツが二〇一五年（平成十七年）に編み出したのが「スマートコントラクション」である。

一見したところは黙々と地面を掘る黄色の油圧ショベルであるが、中身はハイテクの建設機械である。完成図面のデーターと衛星からの位置情報を頼りに、高い精度で作業をこなしている、人間ならば十年経験しないと身につかない熟練の技を再建する、建設ロボットである。

ドローン（小型無人機）を飛ばして、工事現場を正確に測量し、完成イメージを照らし合わせて、施工範囲や土量を割り出す。そして三次元化した図面データーをショベルなどに送れば、自動制御が可能になるのである。

建設機械はカメラを備え、人がシャベルで掘った分などを含め、刻々と変わる現場の様子を把握する。クラウドコンピューティングで情報を一元管理し、作業にムダがないか、常に目を光らせる。インテリジェンスの高さが、競争の軸になるのである。

新種のロボットの活躍は、局地的な現象にとどまらない。

「三十年後のロボットは一〇〇億台と、人間の数を超える」

と、ソフトバンクの孫社長は予言する。二〇一五年（平成二十七年）発売の人型「ペッパー」は、ほんの始期の作品にすぎなくて、これからは様々な姿、用途のロボットが、数多く生れてくると、孫社長は予言する。

これまで日本はロボット産業に、絶対の自信を持ってきた。二〇一四年（平成二十六年）の産業用ロボットの世界シェアは、首位のファナックをはじめ、上位五位のうち三社が日本勢であった。ソニーのペット型「アイボ」や、二足歩行するホンダの「アシモ」など、ロボット史に足跡を残した。しかし今は米国での研究が盛んである。東京電力福島第一原発の事故でも、即戦力として使えるのは日本のロボットではなく、米国などの製品に頼らざるを得なかった。

その背景には、ロボットの定義を一変させるうねりがあるからである。ＩＴ化の大波である。ネットワークにつながるロボットが、これからの主役になるからである。日本のロボットが世界競争に勝つには、ロボットを端末として生かすネットワークビジネスを構想しなくてはならない。

今後のロボットは環境への柔軟な対応や、複雑な意思決定への助言が期待される。日本が強みを持つ機械的なハード力より、ＡＩやビッグデータ分析など、ソフト力がものをいう。ＩＴが得意な米国企業の攻撃が始っているのである。

その象徴は、検索のグーグルを傘下に抱え、多様な事業を手がけるアルファベットである。二〇一三年（平成二十五年）に、日本のベンチャーを含むロボット関連七社を傘下に収め、この分野への傾斜を鮮明にした。「走るロボット」の自動運転車でも、開発の先頭を行っている。丸みをおびた試作車はハンドルやブレーキがなく、コンピューターやセンサーを満載している。

ネット通販のアマゾン・ドット・コムも、物流ロボット会社を買収し、十三の巨大倉庫に、三万台以上を導入して、商品の搬送を任せる。宅配用ドローンも開発し、ロボット工学の研究者や、元宇宙飛行士らが知恵を絞っている。

自動化ロボットでは、米国が断トツで、世界のリーダーであると言われている。

米国では企業に加え、国防総省の国防高等研究計画局（ＤＡＲＰＡ）が、長年ロボット分野に資金を投じてきた。オバマ大統領は製造業復活を目標に掲げているので、小回わりがきき、人のすぐ隣りで動かせる協働ロボットの実用化でも成果をあげている。

日本からロボット覇権を奪おうとしているのは、米国だけではない。

世界知的所有権機関（ＷＩＰＯ）の調べによると、ロボット関連の特許出願数では、これまでトヨタ自動車など日本企業がランキング上位を独占していたが、足元では中国が猛追してきている。民生用ドローンの世界最大手は、中国の新興メーカーのＤＪＩである。ドイツがＩＴで製造業を刷新する「インダストリー４・０」を推進するなど、ヨーロッパも野心的なロボット開発を急いでいる。

日本政府はモノのインターネット（ＩＯＴ）や、ＡＩを成長戦略の柱とし、ロボット産業の強化もうたっている。しかし、グローバルな競争の中での危機感、スピード感は、十分であろうか。企業も過去の栄光にこだわらずに、新たなアプローチが求められている。コマツなど大手だけにとどまらず、担い手の層を厚くしなければな

らない。しかし、十分に芽はある。

学校から帰った子供が、食卓にある高さ二十センチメートルのロボットに手を伸ばす。お腹の再生ボタンを押すと、外出中のママの声が流れる。

「おかえり。台所におやつがあるよ」

今度は録音ボタンを押し、子供が、

「わかった。宿題もちゃんとやるよ」

ユカイ工学（東京・新宿）が開発した「ＢＯＣＣＯ（ボッコ）」は、家族のコミュニケーション、だんらんのためのロボットだ。スマートフォンとの間で音声や文字をやりとりできる。玄関など、ドアの開け閉めを検知するセンサーとも連動し、人の出入りもわかる。研究者は、

「マイクやセンサーの情報から、人の状態を推定、予測して、人が何を欲しているか、空気を読める機能を持たせたい。シリコンバレーに負けていられない」

と言っている。

ＡＩベンチャーのプリファード・ネットワークス（東京・文京）は、ロボットと自動運転に力を入れ、ファナックや、パナソニック、トヨタなど、有力メーカーと手を組む。ＡＩがいくら立派でも、ロボットや自動車の制御、品質が不十分なら、全体の完成度は高まらないと考えるからである。

「ハード、ソフト、ネットワークを連携させる努力が必要である。それが出来れば、日本のロボットの価値を世界に示せる」

プリファードの西川徹社長は、日本のもの作りと、ＩＴの融合に活路を探っている。

米国には、ベンチャー同士の勝負なら、シリコンバレーが優位との見方がある。何にでもトライする熱狂的な人々が、ここにはいる。

二十一世紀の世界は、ロボット大戦の時代である。

（ディープラーニング）

最近は人工知能（ＡＩ）が大きな注目を集めているが、それはコンピューターの処理能力の向上に加えて、「ディープラーニング（深層学習）」と呼ばれる、人間の脳の構造をまねて作られた新しい技術が生まれ、ＡＩの姿を大きく変えようとしているからである。

これまでのＡＩは、たとえば「猫の画像」を見せても、その画像から自分の力で猫の特徴を見つけて、猫と判断することができなかった。そのためにＡＩの仕組みを作る時に、猫の情報や、データーの分析方法をあらかじめ人間が考えて、組み込んでおく必要があった。

しかし二〇一二年に米国で行われた、画像認識ソフトウェアのコンテストで、従来の精度を大きく上回る画像認識技術に成功したチームがあった。それがディープラーニングである。これによって、コンピューターが自力

で情報やデーターに潜む特徴を突き止め、画像を見分けることが出来るようになった。

その後、二〇一五年二月に米マイクロソフト、三月には米グーグルが、人間の画像認識の精度を超えるディープラーニング（深層学習）の技術を開発し、現在では人間の顔も見分けられるようになった。

そして今後、静止画面だけでなく動画も高い精度で認識できるようになれば、人間が目で確認している作業の多くは、ロボットが代行できるようになるであろう。たとえば製造工場での検品作業や、監視カメラによる不審者の発見、店舗内の客の行動の追跡などである。また医療現場では、レントゲン写真から病変を発見することも可能になる。農業では作物の状態から、収穫時期を判断することもできる。

そして次の段階では、車の自動運転などが出来るようになり、次は言語の理解や知識の獲得などが考えられる。ただ、目的を与えるのは常に人間である。ＡＩ（人工知能）は与えられた目的を効率的に達成する方法を見つけるが、目的そのものを自ら持つことはない。したがってＡＩが勝手に成長して、人間を脅かすことがない点は強調したい。

しかし新しい技術革新が起るたびに、人間の仕事は変化する。製造ラインでの仕分けや検品、長時間の監視作業などは、ＡＩにシフトしていくであろうが、人と直接触れ合いサービスを提供する仕事は、人が行う仕事として、むしろ増えていくと思われる。たとえば、病気の診断はＡＩが行うが、その結果を総合的に判断し、わかりやすく患者に伝え、適切な治療手段を提案するのは医師の仕事である。

また学校にＡＩが導入されることで教師の事務作業が減り、教師が学習指導や進学指導に費やす時間を、沢山取ることが出来るようになるであろう。

とにかくＡＩに目的を与え、仕事をさせるのは人間である。ＡＩが人間の仕事を奪うのではなく、人間の仕事が現在より高付加価値化していくと、考えるべきである。

現在世界的に見ると、ＡＩの研究では、米国やカナダ、フランスが先行している。しかし研究と、その産業化とは、別である。研究面での遅れが、そのまま産業面の遅れに直結するわけではない。日本においては、少子高令化による労働力不足などを解決するために、企業の高い技術力、真摯な研究開発の姿勢を、活かすチャンスがあると考えられる。

二〇一五年十一月に、米グーグルが、ディープラーニングを含む機械学習の最初ソフトを無償公開すると発表した。

ＡＩの技術をビジネスに結び付けるには、製造業でいえば、ニーズに適した製品をきちんと設計して生産計画

を立てるといった、「真面目な姿勢」が問われる。このような点において、今後ＡＩは、建設機械や農業機械、精密機械、電機、自動車、自動車、食品加工など、あらゆる分野での発展が期待されるものである。

（ＩＣＴとＩＯＴ）

このようにロボットは今後の人間に対する大きな問題であるので、企業関係の人ばかりでなく、若い人や学生などにも関心が拡ってきている。次の「ＩＣＴとＩＯＴ」は私の孫（大貫陽平・大学四年生）の書いたものであるが、参考までに掲載する。

グローバル化と少子高令化が進行するなかで、日本企業はＩＣＴ（情報通信技術）の導入を積極的に進めていくべきである。またＩＣＴのうち、ＩＯＴと呼ばれる分野についても注目すべきである。

ＩＣＴの真価は、「コストの削減」と「利便性の向上」である。コスト削減は少子高令化による人手不足が想定される日本において、大きな価値がある。「利便性の向上」による製品の評価向上は、グローバルに製品展開するにあたって重要である。したがって、第一にＩＣＴの導入による業務の効率化が、第二にＩＯＴの導入による、ユーザーの需要により適した製品の開発が必要である。

まずＩＣＴの導入による業務の効率化であるが、このためには企業の全業務を支援し、すべての資料を管理する綜合的な社内コンピュータシステムが必要である。

現在、業務が煩雑となっている原因の一つは、日本企業の事務手続きの多くが、紙を重視していることである。また、ペーパーレス化をうたった企業であっても、単なる紙の代替物として電子データを用いているケースもあり、これでは作業の効率化は見込めない。

電子データの最大の長所は、時間や空間を超えて、同一のデータを共用できることである。電子データーは紙と比較して信頼性がないように思われるが、すでに電子署名など紙の書類に劣らないレベルの信頼性を担保する技術が、実用化されている。このため、作業の承認手続きや社員同士の連絡などは、すべて社内コンピュータシステム上で行い、極論すれば、各社員が自宅からでも業務をこなせるような環境を作り出すことが望ましい。

総合的な社内コンピューターシステムを導入すれば、書類の検索性の向上や情報共有の高速化、業績把握の正確性向上、事務分野での人件費削減などが見込める。地方に小規模な営業所を複数抱えているような企業であれば、営業所の管理職を廃止し、本社の営業部門管理者が営業所の社員を一括して管理することも可能となり、人件費の削減につながる。また、営業の社員が営業先にいながら、本社の技術職社員とやり取りをすることで、商談をより有利に進めることも可能となる。

また、社内コンピューターシステムに人工知能を搭載することで、システム上の情報をもとに、人工知能に意思決定の支援や業務効率のためのアドバイスなども行わせることも可能となる。人工知能は今後発展の目覚ましい分野であり、その導入のための素地を作っておくことが重要である。

次にＩＯＴ（Internet of Things）の導入による、ユーザーの雇用に、より適した製品の開発である。

ＩＯＴとは様々な物をインターネットに接続し、情報収集を行うことで制御を行う仕組みである。現在注目されている概念であり、アメリカでは「インダストリアルインターネット」、ドイツでは「インダストリー４０」として、実用化が進められている。

製品開発の場においてＩＯＴを活用する場合、自社の製品にＩＯＴを導入することが考えられる。製品にＩＯＴを導入することで、ユーザーがどのように自社製品を使用しているか、製品にどのような問題点があるかを、すばやく簡単に把握することが可能となる。この情報を活用すれば新製品を短期間で開発したり、すばやく製品を改善することが可能となる。

エアコンにＩＯＴを導入することを考える。そのためには、エアコンにＩＯＴのためのセンサーを搭載し、インターネットに接続し、企業はその情報を常時収集することになる。このようにすると、企業は、

（どの時間帯に最もエアコンを使用しているのか）

とか、

（十分に部屋の温度が管理できているか）

（気温と消費電力の関係）

といった情報を得ることができる。

このデータをもとに、より進歩したエアコンの制御ソフトウェアを開発し、インターネットを経由して、ユーザーのエアコンにインストールをすれば、ユーザーの手を煩わせることなく、エアコンの改良を行うことができる。

このような「ユーザーの使用データを収集し、それをもとに製品を改善、インターネット経由で改善を行う」という手法は、コンピューターソフトウェアでは頻繁に使用されている手法であるが、それ以外の分野では普及が進んでいない。このため、この手法（ＩＯＴを導入した製品作り）を行えば、ユーザーからより高い評価を得られる可能性が大きい。これが製品開発の場へのＩＯＴの導入の利点である。

以上のように日本企業では、ＩＣＦと、ＩＯＴの積極的な導入による、企業価値のさらなる向上が、可能だと考えられる。

（つづく）

吉宗と大岡越前
——享保の改革——

千坂精一

厄介者から藩主になった幸運児

吉宗は貞享元年（一六八四）十月二十一日、御三家うちの紀州藩二代藩主徳川光貞の四男として生まれた。

だが次兄が早世していたから実質的には三男である。

大名家は家名存続のために、男子は何人いてもめでたいのだが、吉宗の場合はすこし事情が違っていた。

原因は生母にあった。

吉宗の生母紋は巨勢村の農民の娘で、側室ではなく湯殿の雑役をしている下働きの大女であった。

紋の妊娠を知ったとき光貞が、

「男子なら捨てよ」

そう苦々しく唾棄したことから、不憫に思った家臣の加納五郎左衛門がひそかに引き取って養育したというのだが、実のところは光貞が、まさか雑役婦に産ませた子を手許に置くわけにはいかないので、五郎左衛門に預けておいて時機を待とうとしたのであろう。

源六と名付けられて五歳になったとき、父光貞に対面を許され、新之助とあらためて部屋住みになった。

このとき、はじめて二人の兄がいることを知った。

十九歳年長の長兄綱教は紀州藩五十五万五千石の三代藩主を約束されている人であり、四歳年上の三男頼職は綱教に嗣子ができぬときは四代藩主になる予備者であって、新之助だけが生涯部屋住みの厄介者であった。

それでも御三家の若君ということで十二歳のときに従五位下主税頭に叙任されて名を頼方と改め、翌年には従四位下左近衛権少将に叙任され、さらに翌々年十四歳のときに綱吉から越前國丹生郡鯖江三万石を賜わり兄頼職

を差し置いて御三家庶流の一小大名になって独立した。

だが領国へは行かず家臣に統治を任せるのだが、いずれは生まれ育った温暖の地和歌山から厳寒の地北陸に移住して小大名の生涯を終えることになるはずであった。

ところが、八年後に一大転機が起こった。

寶永二年（一七〇五）五月十四日に三代藩主綱教が四十一歳で死去するとつづいて八月八日に隠居の父光貞が八十歳の天寿を全うし、その一箇月後の九月八日には四代藩主になった三兄頼職が二十六歳の若さで急逝した。

わずか四箇月のあいだに、二代、三代、四代藩主が相次いで死去するという凶事が出来したのである。

このため紀伊徳川の血筋は頼方一人になってしまった。

頼方は、将軍綱吉に拝謁して一字を賜り、吉宗と改名して五代藩主になった。ときに二十二歳であった。

運は常日頃努力精進を積み重ねている者だけがひょっとして掴むことの出来るものであって、あてにして待っていて飛び込んできてくれるものではないはずである。

ところが吉宗は藩主になろうと努力したわけではない。周辺の事情の変化であれよあれよという間にそうなってしまったわけで、本人も面食らったことであろう。

ともあれ、三万石から一躍五十五万五千石の大々名になったのだから、まさに幸運児というよりほかにない。

紀州藩の改革

紀伊國は和歌山県全域と三重県の熊野市、尾鷲市、北牟婁郡の全域と松坂市が飛び地であったからかなり広大な面積であったが、そのほとんどが山地で平野部は海岸に沿って半島の縁を巡るわずかな部分しかなかった。

紀伊國の山地は全国有数の木材産出量を誇っていたので、「木の國」といわれ、人々が「木ーの國」と長くのばすようになったのでいつごろからか定かではないが〝紀伊〟の字をあてるようになったのだという。

余談はさておき——。

紀州藩は、御三家第二位の名家で大藩とはいえ、吉宗が藩主になったときには財政が極端に窮乏していた。

この十五年間の莫大な出費集中がその原因であった。

明暦三年（一六五七）一月十八日をはじめ、寛文八年（一六六八）二月一日、天和二年（一六八二）十一月二十八日、元祿八年（一六九五）二月八日、同十六年（一七〇三）十一月十八日の大火で江戸屋敷焼失したこと。

貞享二年（一六八五）長兄綱教が将軍綱吉の娘鶴姫と婚姻したこと。

その婚姻によって、綱吉が元祿十年（一六九七）と同十四年（一七〇一）に二度江戸屋敷に来臨したこと。

などによる不時の出費である。

吉宗は財政再建に緊縮政策をとり、みずから一日二食などの厳しい倹約を実行し、家臣、領民にまで強要した。

経費支出の削減については、行政改革を実施して、藩の下役人八十名の整理を断行した。

緊縮のいっぽうでは、紀の川流域に灌漑用水を施工して農村の立て直しを図る積極策を講じた。

これらの改革を推進するかたわらでは、城外に投書箱を設置して広く善し悪しの意見を求めた。

これが、のちに八代将軍になってから評定所の門前に設置した目安箱の着想になるのである。

藩主に就任して早々に、大鉈を振るって藩財政を立て直した吉宗は、たちまち名君の誉れを高くした。

のちの『享保の改革』の小型版になったこの藩政改革を手掛けたことによって、吉宗は充分準備運動をしたうえで本番に立ったのであるから、自信をもって剛速球を投げることができたのであろう。

八代将軍に抜擢される

寶永六年（一七〇九）一月十日五代将軍綱吉が六十四歳で身罷り甥の甲府宰相綱豊（家宣）が六代将軍になったが三年五箇月後に五十一歳で逝去してしまった。

家宣は、臨終間近の病床に新井白石を呼び出して、

「鍋松（家継）はまだ四歳の幼児ゆえあとはいったん尾張の吉通に譲り、成人ののちに返してもらってはどうか」

そう漏らして尾張家に継がせようとしたが、白石は、

（ひとたび譲ったが最後二度と戻ることはない）

そう判断して、

「宗家には幼君なりといえども鍋松君が御座しますからには、われらが身命に代えてお守りいたしまする」

断固として家宣の弱音を諫めた。

このとき、もし白石が家宣の意志を忠実に実行していたら、将軍の座は宗家から尾張家に移ってしまい、吉宗とその子孫は代々紀伊藩主で終わるところであった。

というのは五歳で七代将軍になった家継が三年後に夭折してしまい、徳川宗家が絶えてしまったからである。

（宗家絶ゆれば御三家が継ぐ）

この家康が万一の場合を慮って手立てを講じておいた遺言がはじめて活かされるときがきたのである。

そこで、白石の諭しによって実現しなかった家宣の遺志が活かされ、ご三家のうちから筆頭の尾張吉通が選ばれてすんなり八代将軍になるところであった。

ところが、尾張徳川家にとってまことに残念なことに、その吉通は家宣死去の翌年、正確には正徳三年（一七一三）七月二十六日に二十五歳の若さで急死してしまい、その子五郎太もまたおなじ年の十月に三歳で夭折してて、尾張家の正系は絶えてしまっていたのだ。

こうして、次期将軍の決定は白紙になってしまい、あらためて御三家のなかから選ぶことになった。

このときの御三家の当主は、それぞれ尾張家が吉通の

弟継友、紀井家が吉宗、水戸家は綱條であった。

このうちの誰を八代将軍にするか。

それをめぐって、家宣の正室天英院と、側室で七代将軍家継の生母月光院とではげしい権力闘争が起こった。

権勢を誇る月光院は、側用人間部詮房と組んで尾張継友を担いだ。二人とも尾張家に恩を売って本丸と大奥での権力の座を継続しようと謀った。

いっぽうの天英院は、紀伊吉宗を推して夫家宣の死後月光院に奪われていた権力の座を取り戻そうと謀った。

これに老中たちが乗った。彼らもまた綱吉時代からの側用人制を廃して幕府組織の最高権威である老中支配政治を復活させようと図り、間部失脚を狙ったのである。

利害が一致した天英院と老中たちは吉宗を将軍にするための秘策を練った。

そして、間部詮房の主張する家宣の遺志について、

「文昭院様（家宣）は、吉通様をお名指しになられたのであって、尾張家に譲ると申されたのではない」

そう一蹴すると、

「次の将軍の条件は、第一に東照權現様（家康）にもっともお近いお血筋のかたであられること」

が相応しいと釘を刺した。至極もっともなことであって、月光院・間部側に反論する余地はなかった。

尾張継友は玄孫（四代目）であり、紀伊吉宗と水戸綱條は曽孫（三代目）であった。

これで、継友は候補から外れて、吉宗と綱條のいずれかに絞られた。

「東照權現様のお血筋を問われるからには、ご生母様のご出自も大切でござる」

そう間部が切り返してきた。

綱條の生母は、家光時代の大老下總古河十六万二千石土井利勝の娘で、吉宗の生母とは格段の差があった。

「さらには、長幼の序も尊重せねばなりますまい」

このとき綱條は六十二歳、吉宗は三十三歳であった。

間部は、

（してやったり）

そう心中で叫んでにんまりした。

天英院、老中側は一転して苦境に追い込まれた。

「いや、紀伊様も水戸様も、ご曽孫でござれば優劣はござらぬ。されば、統治のご実績について検討いたそう」

老中たちは、生母と長幼の序で不利な立場をはぐらかして、統治の実績に矛先を転じた。

それが将軍にとって最重要課題であることは万人の認めるところであった。

これが老中側にとって起死回生の一打になった。

吉宗はまえに述べた紀州藩の改革に成功して名君と謳われていたが、綱條のほうは元禄十六年（一七〇三）に六年計画の『寶永の新法』を実施して改革に着手したものの五年目の寶永五年（一七〇八）に大一揆を起こされ

て財政をより悪化させてしまい、計画最終年にあたる寶永六年に挫折して改革は失敗に終わってしまっていた。

この両者の極端な実績の差が決め手になってついに天英院と老中たちの推す吉宗が八代将軍に決まったのだ。

吉宗は格式や序列を重んずる封建社会の常識を超えて三番手の部屋住みから思いもかけぬ紀州藩五十五万五千石の太守になり、いままた御三家の第二位から一躍将軍に抜擢されるという一度ならず二度までも幸運を掴んだ。

まさに、強運の星の下に生まれた人というほかない。

元祿バブルとその崩壊

吉宗が八代将軍になったときの幕府財政は貧困のどん底にあって、その二進も三進も行かない窮状から脱皮するためには旧弊の全面改革を余儀なくされていた。

その事情を知るために、開府からここまでの経済の波動を大雑把に述べてみることからはじめる。

家康が征夷大将軍に任じられて江戸に幕府を開いたのは慶長八年（一六〇三）二月で、すでに關ヶ原の役を最後に戦乱は収まり、平和の世を迎えようとしていた。

大名たちはそれぞれ領国経営のための国づくりにとりかかり、社会資本整備の時代に入った。

家康は、

「年貢は、百姓を生かさぬよう、殺さぬよう、ぎりぎり一杯とるように」

布告すると、七割の高税率（七公三民）を課して、公共事業投資の財源に充てさせた。

城下町の建設、上水道の整備、建築材や燃料（薪や炭）づくりの木材供給、街道の修復、消費地城下町へ物資を補給する水上交通のための港湾や河岸の整備、それに、北上川、利根川、常願寺川、富士川、木曽川など大河川の改修、といった復旧工事が全国規模で展開された。

それはちょうど太平洋戦争の空襲で無惨に破壊された焦土から立ち上がった昭和二十年代前半（一九四五～五〇）の復興時代とおなじ情況だったに違いない。

開府から五十年後の承應三年（一六五四）関東地域の幕府直轄領を支配する關東郡代伊奈忠克は、赤堀川を延長して利根川の水路を常陸川に接続し、銚子から太平洋に流す付け替えの大工事を完成させた。

それまでの利根川は、現在の江戸川だったのである。

北上川や阿武隈川流域の東北大穀倉地帯の米を江戸へ運び込む船は千島海流に乗って太平洋を南下するのだが、銚子沖で北上する暖流とぶつかるので当時の航海術では房總半島を回って江戸湾へ入るのが難儀であった。

そこで江戸湾へ流れ出ている利根川（現江戸川）を東に回して銚子から太平洋へ流し、東北からの米運搬船はその利根川を遡って佐原で川船に積み替え、関宿から江

戸川に入って江戸湾へ到着するようにしたのである。

これによって輸送中の難破座礁事故は大幅に減少し、貴重な米の損耗を不可抗力の天災による最少限度にとどめることができた。

社会資本整備の進捗にともなってそれまで高率だった年貢がしだいに減税されていき、四代将軍家綱後半期の明暦以後はわが国税制史上最低の三割課税（三公七民）にまで逆転した。

この大幅減税が牽引車になって、五代将軍綱吉時代の元祿初期には高度成長を謳歌する豪華絢爛なバブル時代になった。

可処分所得の急速な増大で庶民の生活水準は著しく向上し、それまで粗末な麻布だった衣服は保温性、耐久性に優れた木綿（太物）や絹（呉服物）織物に替わり、食事は一日二食だったのがこのころから三食になり、飽食に慣れるとこんどは味覚を娯しむ初物食いを競い合うようになっていった。

住居もまたそれまでの掘っ立て式の柱が礎石建築様式に替わり、不浄場所として別棟にしてあった便所が母屋のなかに組み込まれて陰陽道で鬼が出入りするといわれ忌み嫌う鬼門（北東）と裏鬼門（南西）をはずした乾（北西）の隅に設置されるようになった。

さらにこれまでは日が暮れると寝ていたのが行灯という照明器具の出現によって夜も生活時間に繰り込まれるようになり、盛り場は夜おそくまで人出で賑わった。

こうして、老いも若きも元祿の世の繁栄に浮かれて酔い痴れていたが、この世に永久につづくものなどはないもので、バブルが頂点に達して停滞し、やや下降期に入った開府百年目の元祿十六年（一七〇三）二月に蟄居中の赤穂浪士四十六名が切腹を命ぜられたその年の十一月二十二日、南関東に大地震が起こった。

房総半島沖を震源としたマグネチュード八を越す超弩級で、江戸城はじめ市中の被害甚大、相模（神奈川県）、安房、上總（千葉県）には津波が押し寄せ、小田原城は大破して二千三百人の死者が出たと『徳川實記』に記録されている。他の古文書などには倒壊家屋二万戸、死者約五千人とも記されていて、大正十二年（一九二三）九月一日の相模湾を震源とした二十世紀最大級の関東大地震がマグネチュード七・九だったというから、この元祿の大地震がいかに大規模であったかがうかがえる。

そして、その爪痕をのこしたまま新しい年を迎えた元旦早々こんどは浅間山が大噴火を起こして三箇日のあいだ噴煙をあげつづけた。

幕府は、この相次ぐ地殻の怒りに怖れ戦く人心を鎮めるため、三月十三日に年号を〝寶永〟と改元した。

だが、春にはまた地震が頻発し、六月中旬から半月あまり降りつづいた長雨で江戸市中が出水した。

さらに、八月四日に利根川、中川、綾瀬川、荒川が決

あれば頼もしい武将と見られたに違いない。

この年は五代将軍綱吉が歿してから八年目であった。綱吉が柳澤吉保、荻生徂徠を起用してはじまった側用人政治は家宣、家継の代にも引き継がれ、間部詮房、新井白石によって今日までつづいてきたが、吉宗は将軍に就任すると同時に間部詮房、新井白石の両名を罷免して側用人制を廃止し、開府以来の組織である老中以下の幕閣を重用した将軍独裁政治に戻すと改革政治を実施する機構整備にとりかかった。今日でいう行政改革である。

まず行政機構最上位の老中については、これまでの合議制を廃止して業務を分割し、民政・財政担当専門職の〝勝手掛老中〟を新設して特別編成組織の責任者にした。つまり、財政再構築担当である。

これによって、将軍―御用取次―勝手掛老中―町奉行・勘定奉行という将軍直裁の指揮系統が確立された。

ここでいう〝御用取次〟とは、文字どおり将軍と勝手掛老中とのあいだを取り次ぐただの使い走り役であって、綱吉時代の柳澤吉保や家宣・家継時代の間部詮房のように寵臣が将軍の権勢を笠に着て政治介入していた側用人的存在ではない。

その御用取次には、吉宗が紀州藩主時代の側役で公平無私の実績がある有馬氏倫と加納久通を任命した。

そして、合理性を図って〝事務掛〟を分別した。

事務方の担当を訴訟や請願などを取り扱う総務・庶務

壊して、大洪水になるという災害がつづいた。

ととまるところを知らない天災がようやく収まり、災害を忘れかけた三年後の寶永四年（一七〇七）に度肝を抜く未曽有の大事件が起こった。

十一月二十三日に富士山が大噴火したのである。

この大噴火で富士郡の家屋が全壊、駿河（静岡県）、甲斐（山梨県）、相模では降灰が数尺（約一メートル）も積もって田畑が全滅。江戸市中は上空を噴煙に覆われて日中も行灯がなくては暮らせなかったという。

これらの大災害による消費の冷え込みが景気の下降に拍車をかけ、大商人たちは値上がりを期待して買い溜めておいた商品が滞貨になって資金繰りが悪化したところへ、これまで有望な投資対象にしてきた大名たちへの貸付金が「お断り」と称して実質的に踏み倒されてしまい、多額の不良債権が出て経営難に陥った。

こうして、元禄バブルは崩壊し、以後二、三十年もつづく長い大不況のトンネルに入ってしまったのである。

行政改革

吉宗が正式に将軍宣下を受けたのは、六月二十二日に『享保』と改元されたばかりの八月十三日であった。

ときに三十三歳の男盛りで、その長身で頑健な堂々たる体躯は武家の棟梁征夷大将軍に相応しく、戦国時代での公事方と、天領支配や年貢収納・金銭収支などの財政業務を取り扱う財務の勝手方の二部門に分割して、それぞれが担当業務に専念できる体制にした。

これまでは公事も勝手もごちゃ混ぜだったので事務が錯綜して能率が上がらなかったが、この総務部門と財務部門を分別してそれぞれに適任者を配置したことでより専門的になって処理が迅速になり、見違えるように効率がよくなった。

公事方の業務のなかでもっとも手間のかかるのは紛争事件の調停だったので行政が介入しないことを考えた。

これまで町奉行所は金銭貸借や商業取引などによって生じる紛争の訴訟を裁いてきたが、今後は当事者間の話し合いで解決させることにして享保四年（一七一九）十一月十五日に『相対済し令』を発布した。

以後は刑事事件のみで民事事件は受理しないことによって町奉行所の政務を身軽にし、その余力をもって改革に専念させるのが狙いであったがこれは改悪であった。

そもそも民事事件は当事者間で解決できないから公平な裁きを司法に求めるのであって、町奉行所が介入しないとなれば、ない袖は振れぬ借り方が有利になって焦げ付きや踏み倒しが続出し、社会秩序が乱れる結果になることは明らかで、行政機関職務怠慢の謗りは免れない。

事実金銭紛争を当事者間だけで解決することは至難の業で、紛争が拡大してついに社会問題に発展してしまったので吉宗はやむなく十年後の享保十四年（一七二九）十二月十一日にこの『相対済し令』をあらため、今年正月以後の債務関係紛争を遡及して受理することにした。

年貢の徴収についても問題があった。

年貢は代官が実地見分して決める『検見取法』でこの方法が正確で理想的なのであるが、その反面決定権が代官にあるため賄賂で手加減する不正の温床でもあった。

これをその年の収穫の善し悪しに拘らず、予め定めた年貢量で取り立てる『定免法』にあらためることによって、人に頼らず制度で補う簡便化を図った。

この方法は不正の撲滅になる一挙両得の策であったがある企みが隠されていた。それについては後で述べる。

大岡忠相を町奉行に抜擢する

町奉行といえば映画やテレビで知られているのが大岡越前守忠相と、遠山の金さんこと遠山左衛門尉景元だ。

この二人が活躍する劇の筋書きは、変装で町中を巡回していて偶然事件に出会い探索に奔走してみごと犯人を逮捕するが、その裁きの場面であくまで白をきる犯人に大見得を切って動かぬ証拠を突きつけるところが最高潮になるお馴染みの型で、一件落着するというものだ。

町奉行といえば現在の裁判官という印象が強いが、実際は刑事や民事事件だけに専念していたわけではない。

町奉行は、おなじ老中の支配下にある京や大坂のように頭に地名をつけずにただ町奉行と称して重んじられ、勘定奉行とともに役方（文官）旗本の最高位であった。

そしてその管轄は、江戸府内の武家地、寺社地を除いた町屋の民政をすべて取り扱っていたのだから、現代に譬えれば、都知事、地方裁判所長官、警視総監、消防庁長官を兼務していたようなもので、超行政官であった。

そればかりではない。町奉行は大名職の寺社奉行を加えておなじ旗本職の勘定奉行とともに三奉行と称ばれ、幕府の最高裁判所である評定所の構成員でもあるのだから、老中、若年寄に次ぐ重職であった。

重職たちの勤務時間は巳刻（午前十時）から未刻（午後二時）までであったが、町奉行は下城してから奉行所での勤務がはじまるので、かなり過酷な勤務であった。

奉行所といえば、大岡越前の南町奉行所と遠山金四郎の北町奉行所が有名だが、吉宗が八代将軍になったときにはもうひとつ中町奉行所というのがあった。

北町奉行所は呉服橋門内におかれ、以前は東京駅八重洲北口を出たところの国際観光会館入口右のさくら銀行の看板の下に標識の石板があったのだが、いまあのあたりはすっかり様変わりしてしまったので説明しにくい。

南町奉行所のほうは数寄屋橋門内におかれ、有楽町駅前交通会館右側道路の電話ボックス横に石板があった。

もうひとつの中町奉行所は北町奉行所と南町奉行所のほぼ中間に位置する鍛冶橋門内にあったが、吉宗の行政改革で廃止されて以後は復活されることがなかったので、あったこと自体あまり知られていない。

奉行所は月番交代で訴訟を受理していたが、このころは三箇月おきの当番制であった。

寶永元年（一七〇四）十月一日に大坂町奉行から南町奉行に転任して十三年勤めた松野壹岐守助義が、享保二年（一七一七）正月に老齢を理由に致仕（辞任）を願い出てきたので、吉宗は後任を決める必要に迫られた。

綱吉時代に開設した中町奉行所は、行政改革で廃止することに決めていたが、坪内能登守定鑑は松野と同じ年齢なので南町への横滑りは考えられなかった。

北町奉行中山出雲守時春もすでに六十歳を越えているところから、若手の抜擢人事を実行する好機であった。

だが、町奉行は前に述べた役方旗本の最高位であるため、これまでずっと五十歳代の老練者を登用する慣例があって、長崎奉行、京都町奉行、大坂町奉行、勘定奉行などの要職を歴任した練達者が到達する役職であった。

（年功序列では、改革の推進は覚束ない）

このとき吉宗は、事勿れ主義でいたずらに高級官職を歴任してきた者よりも、実務担当の中級管理職でつねに問題意識を持ってことに当たっている者のほうが好ましいし、また年齢にしても充実した一年は漫然と過ごした十年に勝ると判断したに違いない。

吉宗が、そんな思いを巡らしていたとき、ふと脳裏に閃いた人物がいた。

それは吉宗がまだ紀州藩主だったころ、幕府の山田奉行だった大岡能登守忠相である。

さっそく御用取次の加納久通を呼んで調べさせたところ、大岡忠相は現在普請奉行の役職にあって当年四十一歳であることが判った。

紀州藩主の吉宗がなぜ幕府の官僚山田奉行の大岡忠相の名を記憶していたかについてはこんな経緯があった。

山田奉行というのは、伊勢神宮の警備と遷宮、祭祀を担当すると同時に周辺の天領を支配し、海上交通の要衝である鳥羽港を管理する幕府遠國奉行の一人であった。

そのなかで松坂六万石だけが紀州藩の飛び地になっていて、奉行支配の天領に囲まれていたところから境界や水利権をめぐって農民同士の紛争が絶えなかった。

そのほとんどは松坂の農民に非があったのだが歴代の山田奉行は相手が御三家であることを恐れて訴訟を採り上げず、詮議を保留にして後任者に引き継ぎしていた。

大岡忠相は、正徳二年（一七一二）三十六歳で山田奉行に着任すると、それまで保留になっていた案件をひとつひとつ採り上げて理非を糺し、和解させることに努めたが、どうしても互いに譲らぬものについては双方の口書（供述書）を幕府の評定所へ送って裁決を仰いだ。

忠相がすべて裁決を下したという話もあるが、御三家相手の紛争を遠國奉行が直接裁けるはずがない。

これはのちの世の忠相贔屓が捏造したものであろう。

それはともかくとして――。

以前に松戸市役所が、「行政は事務処理が遅い」という不評を払拭するために〈すぐやる課〉というのを新設して、迅速な処理をすすめたことで話題になったことがあったが、忠相の案件処理ぶりはまさにそれで、しかも情実を絡めず的確な判断に基づいて対処し、賄賂はいっさい受けつけなかったというから、

（汚れる水を清く澄ませた）

爽やかな能吏ぶりだったのだろう。

その忠相の容赦ない詮議に不利を覚った松坂農民が権威に縋って藩主吉宗に嘆願したことがあった。

その事件は、秣場をめぐっての境界争いだった。

秣場というのは当時農業の労働力であった牛馬の飼料にする草刈場のことで、農民にとって水利権とともに重要な場所なのである。

嘆願を受理した吉宗は有馬氏倫を派遣したが、氏倫は若い新任奉行の忠相に理路整然と松坂農民の権威を笠に着た長年の横暴を立証されて、返す言葉もなかった。

氏倫から報告を受けた吉宗は、忠相を公明正大で気骨のある役人と感じ入った。

そのときの記憶が鮮明に蘇った吉宗は、二月二日に松野壹岐守助義の辞表を受理すると、翌日には迷うことな

く普請奉行の大岡忠相を南町奉行に任命したのである。

能力給『足高制』を導入する

江戸時代の俸祿は、家格による〈家祿〉であった。

この制度だと本人・子・孫とその家が世襲されてゆくかぎりつづく永代雇用であって終身雇用どころではなかったから、凶作、飢饉のつづく長期不況になっても人減らしの雇用調整は出来ず一部借り上げの減給でみんな我慢して切り抜けるよりほかに方法はなかったのである。

話が横道にそれたのでもとに戻す。

現代は労働の対価として応分の給料をもらっているが、江戸時代の発想はこれがまったくさかさまで、家祿をもらっているから報恩のために勤務するというのだ。

家祿が高いほど役職も上位にあるのは現代とおなじだが、祿高と人材が一致しないところに問題があった。

優秀な人ほど役職も給料も高い現代の組織は誰もが納得できるが、江戸時代は家祿であるから役職が高いほど優秀な人材であるとは限らないのだから始末が悪い。

吉宗は改革にあたり実務担当の役職者の活性化を図って人材を抜擢したのだが、これは大きな矛盾があった。

実務担当役職者がその職責を全うするためには、役料だけでは間に合わず、かなりの私財を投げ出していた。

ことに民政担当の町奉行はなにかと物入りだった。

家綱代の寛文六年（一六六六）の役料は千俵だった。

この役料は天和二年（一六八二）に一度廃止されたが、元祿の繁栄で経済活動が促進されると民政が多忙になってきたので綱吉は元祿五年（一六九二）に役料を復活して家祿三千石以下の者に七百俵を支給した。

だが、これでは必要経費が賄えなかった。

吉宗は大岡忠相のほかにも優秀な人材がいることに目をつけて、それらの者たちを活用する抜擢人事ができるようにするために『足高』という制度を編み出して、享保八年（一七二三）六月に実施した。

『足高制』というのはあらかじめ役職ごとに役高を定めておいて、それ以下の家祿の者が就任してきたときは役高との差額を全額支給するという制度である。

つまり、現代の企業でいえば、それまでいくらの給料であろうとも、営業部長になればいくら、総務部長になればいくらにするということで、一定額の手当を出すのではなく、役職別賃金にするということなのだ。

『足高制』による役高は、

○側衆、留守居、大番頭、　五千石
○書院番頭、小姓組番頭、　四千石
○大目付、町奉行、勘定奉行、百人組頭、小普請組支配、甲府勤番支配、　三千石

（その他略す）

などであった。

この『足高制』の実施で、低い家祿の者でも能力に相応しい役職に抜擢することが可能になり、その役職に見合う給与も支給できるようになったのである。

このことによって、町奉行、勘定奉行の実務担当職に小祿の者からの抜擢が目立つようになっていった。

町奉行は三千石と定められたのであるから、八年まえに南町奉行に抜擢された大岡忠相は家祿千九百二十石に役料七百俵が付加されただけであったのが、三千石になり、千石あまり加増になった。

町火消の誕生

大岡忠相の話が出たところで、さっそく忠相が献策した〈江戸の防火対策〉について触れてみる。

江戸府内は現在の二十三区全域ではなく、江戸城を中心にして東は本所、深川、西は四谷大木戸、南は品川大木戸、北は板橋、千住以内の狭い地域であった。

そのうち六十九パーセントが武家地、十五パーセントが寺社地で町地は僅か十六パーセントに過ぎなかった。

そこに五十万人の町人が居住していたのであるから大名屋敷や神社仏閣のような広大な敷地はのぞむべくもなく棟割長屋と称ばれる粗末な木造家屋が密集していた。

だからひとたび出火すると手のつけようがなかった。

「火事と喧嘩は江戸の華」

といわれるくらい火事が多かった。

代表的なのが〈振袖火事〉といわれる大火である。

明暦三年（一六五七）一月十八日未刻（午後二時）ごろ、本郷丸山の日蓮宗本妙寺である檀家の施餓鬼供養が行われ、亡くなった娘の振袖を焼いたところその火がおりからの北風に煽られて本堂に燃え移った。

このところ八十日余りも雨が降らずに乾燥しきっていた悪条件もあって煽られた火はたちまち本郷一帯を嘗め尽くし、湯島から駿河台に延焼して鎌倉河岸におよんだ。

夕刻近くに西風に変わると、こんどは八丁堀から佃島にかけての下町一帯を火の海にし、さらに北は神田から浅草、東は深川、南は京橋にまで燃え広がっていった。

一昼夜燃えつづけた紅蓮の炎は、十九日朝になっていったん鎮火したが、正午ごろ小石川で燻ぶっていた燠火がふたたび焼え上がり、神田から鍛冶橋門内にまで火勢を延ばすと、ついに江戸城をも焼き払い、外桜田にまでおよんで二十日朝ようやく鎮火した。

江戸城内は西の丸が辛うじて類焼を免れたほかはすべて焦土と化し、将軍居城の象徴であった五層の天守閣もこのとき灰燼に帰してしまったのである。

短期政権ではあったが織田信長、豊臣秀吉の居城安土城と大坂城にはいずれも天下を睨めつけるような天守閣が聳えていたのに、長期政権を樹立した徳川家康の江戸

城にないのをこれまで不思議に思われた向きもあったであろうが、明暦三年正月までは確かにあったのである。

では、なぜ再建されなかったのか。

余談だが、そのことについて触れておく。

江戸城再建計画のなかには、本丸、二の丸、三の丸とともに当然天守閣も含まれていたのだが、三代将軍家光の異母弟で将軍輔弼役の會津藩主保科正之が、

「城に天守を備えたのは織田右府の安土城以来のことであるが、さして軍事上の要害になったとも聞かぬ。ましてや現在は無用の長物、下の難儀を救わず贅を尽くしていては治政よろしからず。浪費は慎むべきである」

そう進言したので家綱も得心して天守閣の再建を中止させたという経緯があり今日にいたっているのである。

さて、話を被害状況に移す。

三日間も燃えつづけたこの〈明暦の大火〉は、江戸開府以来五十年にして前代未聞の大災害になった。

当時の記録によると、焼失したのは江戸城の本丸、二の丸、三の丸、天守閣をはじめ、大名屋敷五百余、旗本屋敷七百七十余、組屋敷は数知れず、神社仏閣三百五十余、橋梁六十、町数四百町、片町八百町の計二十二里八町が焦土と化し、焼死者数は十万八千余人にのぼった。

この焼死体を合葬して建立したのが両国の諸宗山無縁寺、現在の浄土宗回向院である。

この大火で江戸府内の六十パーセント以上が焼野原になってしまい、家康のつくり上げた将軍膝元の城下町の原形は敢えなく消滅してしまったのである。

吉宗が八代将軍になったのはこの〈明暦の大火〉から六十年後のことであるが、その年も正月早々の十一日に湯島無縁坂から出火して八丁堀、霊岸島（中央区新川一、二丁目）まで延焼した大火があり、二月十四日にも日本橋通りあたりから出火して二十四、五町を類焼した。

四月二十日に七代将軍家継が八歳で病歿して吉宗が宗家を継ぐと、六月二十二日に年初から大火がつづいた不吉な年〝正徳六年〟を〝享保〟に改元した。

しかし、大岡忠相が町奉行に抜擢された翌享保二年（一七一七）にも、一月二十二日に小石川馬場から出火して曲輪内大名小路の評定所を焼くと、日本橋や深川にまで延焼して二百余町が焼失した。

さらに翌年の享保三年には、十月三日に中橋桶町から出火して十余町を類焼するという大火がつづいた。

当時の消防体制は、幕府若年寄支配の旗本による定火消と諸大名が交替で受け持つ大名火消が制度化されていて、町人はまったく関与することができなかった。

町奉行大岡忠相は、町地のほうは町人によって自衛させるべく防火対策を献策した。

その骨子は、建物を不燃化させる積極策と、町火消制度創設の防衛策であった。

不燃化計画の内容は、火除地の増設と、それまでの草

葺きや板葺きの屋根を漆喰塗りや瓦屋根、土蔵造りなどに葺き替えさせることであった。

これまでは、武家の権威を示すために一般町家での瓦葺きや銅張りは禁じられていた。

大名、旗本屋敷のほうは瓦屋根が多かったが、なかには古式を重んじて柿（木材の細片）などの板葺きや茅葺き屋根が残っていたし、寺社や神社にいたっては、むしろ重厚な柿葺きや、草葺き屋根がほとんどであった。

これらの建物には瓦屋根か銅張りにするよう督促し、町家は板葺きには漆喰を塗り、草葺きには捏ねた土を被せる塗屋根にするよう奨励した。

火除地の増設は幕府の出費だから問題はなかったが、屋根の葺き替えは自己負担なので家主たちが渋った。

忠相は、

「焼失して建て直すより、負担は軽いはず」

そう説得して強引に推し進めていった。

いっぽう、町火消制度創設のほうは、簡単にことが運ぶと思われたが、意外にも幕閣の抵抗が強かった。

「江戸は武家社会ゆえ何事も武家が取り仕切るべき」

「町人に各町内ごとの火消組をつくらせることは、徒党を組み易くさせるし、飢饉のときの打ち毀しなど由々しき事態を招くことになりかねない」

「火事場で旗本の定火消と町人の町火消が出会ったときに、喧嘩口論になる虞がある」

などの反対論が相次いだのである。

しかし、大名火消と定火消だけに依存するのはもはや限界を越えていることは幕閣も承知しており、忠相の熱心な説得もあって双方が歩み寄り、

○火災発生の際は、風上二町、風脇左右各二町の六町にそれぞれ三十名ずつを出し、互いに協力して消火にあたること。

○火事場において、武家火消と争いを起こさぬこと。

などの七箇条が定められて、火災が発生したときに限る臨時の組織としてようやく承認されたのである。

だが、忠相はそれに満足せず、あくまでも町火消組織の常設に情熱を燃やして、臨時町火消が大名火消や定火消と火事場で摩擦を起こさないよう腐心して、協調関係の実績づくりに地道な努力を重ねていった。

そして、二年後の享保五年（一七二〇）八月、念願叶って常設の町火消が結成された。

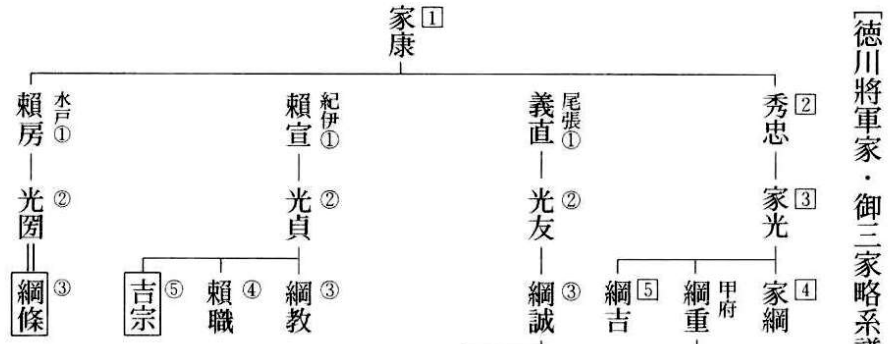
隅田川（吾妻橋付近から下流を〈大川〉とも称んだ）以西の町地を二十町単位で四十七組の小組に分けた忠相は、組名にいろは四十七文字を当てたが、そのうちの〈庇〉と〈裸〉と〈火〉は忌避されるところから、この三組は百、千、萬に変えた。

なお、隅田川以東の本所、深川地区は十六組の小組に

編成して、組名に数字を用い、一組から十六組とした。
のちに芝二本榎や高輪あたりの寺社門前地が町地に加えられたので一組増えたが、四十八文字目の〝ん〟では語呂が悪いので、〈本〉組とした。
これで町火消は全部で六十四組になり、纏や幟で組を識別した総勢一万人の大消防組織が実現したのである。
これが現在の東京消防庁組織の原形になり毎年一月初め皇居前広場での出初式がその名残りをとどめている。

（以下次号へつづく）

［徳川将軍家・御三家略系譜］



古い物・遠い夢

忠内正之

逃げる『有楽斎』（茶道史余滴）

茶道史を繙く途次で、古田織部まで進んできたが、同時代に生きた織田長益（一五四七―一六二一）（後の有楽斎）の存在が面白いと思った。
信長の年の離れた弟として生まれ、信長、秀吉、家康の激しい権力争いの間で、器用に周旋役に徹して、武人として茶人として生涯を全うした。その足跡を追ってみたい。

一

信長が生まれ育った織田家は、父信秀が家督を継いだところ、二派にわかれていた守護代織田家のその一派で、清州城を本拠とする織田大和守家の、そのまた三奉行の一家にすぎなかった。
末流ではあるが、智勇にすぐれた信秀は本家筋を次次に屈服させ、尾張を二分する勢力の一方の旗頭にのし上がり、天文七年（一五三八）、那古野城を占拠するに至った。
天文二十年（一五五一）、信秀の死により、信長は十八歳にして当主となった。
信長は生まれつき体が小さく、すぐに熱を出し、同年輩の女の子からも、よくいじめられて泣いたという。
だが十三歳で元服した後、信長は弱虫と言われた過去を覆い隠すかのごとく、急に粗暴になったと聞く。
出生が信長元服の翌年である長益は、弱虫時代の長兄を知るよしもない。
幼時の長益が見た長兄の奇抜な装いと恐怖の行為を忘れることはできない。
長益が四歳か五歳の頃の出来事だが、庭で、長益が可愛がっていた仔犬が、信長に吠えかかったのである。

「畜生の分際で、刃向うきやー」

信長は甲高い声で叫ぶやいなや、子犬をつかんで投げ上げ、宙で一刀両断に斬り捨ててしまった。

のみならず、御殿の女子供が飼っていた、犬猫を残らず差し出させ、腰の手斧で半殺しにしたあげく、十数匹を、積ませた薪や藁で焼き殺してしまったのである。

信長に決して逆らわない、争いごとを好まない、従順温和な、おのれの性格がつくられたことに、かの幼時の体験が無縁でないと、長益は思う。

だが、逆らわなくとも、従順であっても、長益は二十人に近い、兄弟姉妹同様、理由なく信長になぐられたり、足蹴にされていたのである。

この理不尽の暴力を避けることができる唯一の場所は、城郭内にある平手政秀の屋敷であった。

平手中務丞政秀は、織田信秀家四宿老の一人で、他国にまで聞こえた文武両道の士である。

粗暴な嫡男吉法師信長の守り役をつとめ、後に自刃にまで及んで信長を諫めたことで知られている。

源吾長益は末っ子に近い上、素直で賢げな子であったので、平手夫妻に格別、庇護され茶の湯の道も信長の了解を得て指導を受けたのである。

平手政秀は、数寄の本場である上方から遠く離れた尾張の国では珍らしい、茶の湯の名人とされている。それは、山科言継ら、京や堺から時たま訪れる公家や納屋衆がひとしく認めるところであった。

源吾長益は、その政秀から、平手流数寄の手ほどきを受けたのである。

この後、幼馴染である政秀の娘お清を正室として迎えることになる。

しかし、長益が平手屋敷に留まったのは、一年余りにすぎない。政秀が、突如、自刃して果てたのである。

天文二十二年（一五五三）、信長二十歳、長益七歳の、閏一月十三日の椿事であった。

尾張半国を治める領主となってからも「大うつけ」を改めようとしない信長へ、後見役として死をもって諫めた、という理由のほかに、当時の織田家に政争があったからである。

平手政秀と対抗する勢力であった宿老林通勝とその一派が動き出していたのである。

通勝はさんざんてこずった「大うつけ」の信長を廃し、温和で礼儀正しい、同じ正室腹で直ぐ下の弟、信行を織田家当主に守り立てようと画策していたのである。

信長に恐怖を感じていたのは、近親の子女ばかりではない。家臣一統も、領民もひとしく若い暴君を忌み嫌っていた。信行擁立には、上下から大いに期待がかかっていたのである。

政変は成るかに見えた。

その矢先政秀は老い腹をかき切ったのである。

政秀の遺書は二通あった。一通は信長の立直りを諫めるものであり、もう一通は政敵林通勝にあてた、激烈な訓戒であった。

現今の尾張内外における緊迫した情勢を説き、長幼の序を曲げての廃嫡は国の乱れであり、内訌は亡国への道であり、譜代の臣としてこれほど不義不忠はないと断ずる内容であった。

政秀の自刃は、信長とその取巻き、通勝とその一党、双方へその死をもって諫めたことになる。

信長はさすがに亡骸にとりすがり、

「じい許せ。そなたの死は、断じて、断じて、無駄にはしないぞ」

と、人目をかまわず号泣して前非を悔いたという。後に政秀寺という寺を作って祀ることになる。

一方通勝は、懸命に釈明すると共に、改めて信長に忠誠を誓ったのである。

雨降って地固まるかに見えた織田家であったが、内紛の火は消えていなかった。

平手政秀自刃の三年後、弘治二年（一五五六）八月、林通勝や柴田勝家ら重臣が信行を擁し、信長に対して反乱の軍を起こしたのである。信行側は千七百余人が結集し、信長方は七百人足らずで、信長は大いに苦戦し、兄弟の生母の哀願を時の氏神として和睦をせざるを得なかった。

翌弘治三年の十一月、信行側に再び挙兵の企てがあることを密告したのは、柴田勝家である。勝家の裏切りであった。

信長は病気を装い、兄弟全員に、相談の儀もあるゆえ、そろって見舞にくるよう通告した。

織田家の本拠は、那古屋城から、西北へおよそ一里の清州城に移っている。

この日、信長の枕許に集まったのは男の兄弟だけであった。妾腹の兄（長男）信広、三男信行、四男信包、五男信治、七男信興、九男信照、十一男長益、十二男長利の九人である。

六男信時と八男秀孝は、それぞれ家臣の手にかかるという奇怪な死をとげていた。

信広は長男であっても妾腹であり、重きをなしていなかった。当人も凡庸で、ひたすら身を挺するばかりであった。

兄弟を代表して、言葉を述べる役は事実上の次男信行であった。

この日、一座より進んで謹しみ平伏した信行を、その瞬間、布団をはねて蹴り上がった信長が押えこみ、

「見よ、わしに逆らうやつは、身内とて容赦せぬぞ」

叫ぶや、脇差を血しぶきで濡らし、二の太刀で信行の首を掻き切ったのである。

長益は、当時十一歳であった。腰を抜かすとは、あのことを指すのであろう。やさしかった兄信行の首が、血をほとばしらせて、ちょうど目の前に転がったのであるから、長益は片手をついて腰を落としたまま動けなくなったのであった。

長益は、この日、家督信長には絶対に逆らえない、逆らってはならないという思いを新たにしたのであった。

長男信広をはじめ兄弟全員も、あらためて、信長に恐怖し、服従を心の底より誓ったことであろう。

信長は、この効果を狙って、激烈な見せしめを断行したに相違ない。

長い前置きとなったが、幼少時の体験と、本来の穏やかな性格とが相俟って、長益のその後の身過ぎ世過ぎの処世術となっていったものと考えられるのである。

兄であり総師である織田信長は、次々と版図を拡大していった。戦国時代の終焉を目指して、時には悪逆無道と非難されながらも、天下統一まで今一歩のところまで討ち進んできた。

長益は常に信長の麾下にあって、表面に出ることなく、兵站線を守ったりして裏方の支えを行ったという。時には外交交渉の面で特技を見せたりして、信長も「長益は算勘の才あり」といって、末弟のことでもあり武将の働きはなくとも大目に見てくれたのである。

信長の隆盛は続いた。

天正八年、勅命を引き出して、法主の石山退去を条件に本願寺と講和、事実上勝利を収め、畿内の覇権が確立された。

この年、柴田勝家の軍団が加賀を平走し、戦線は越中へ延びた。

天正九年、信長は、北は能登と越中、西は因幡、美作、備前のそれぞれ大半を掌中にしていた。

天正十年、甲斐、信濃とその周辺を制する武田家の決戦となった、信玄亡きあとの総大将は武田勝頼であった。

三月に、長益が属する信長の長男信忠を総大将に、織田徳川連合軍五万余が大勝し、勝頼を天目山に追い込み、自害させたのであった。

版図は甲信まで広がり、信長の全国制覇は時を待つのみの形勢となった。

はなしの本題を進めたい。

二

天正十年（一五八二）六月二日、織田長益は何かの気配で目を覚ました。

その日、長益は甥の信忠ひきいる二千の手勢とともに、京都二条の妙覚寺に宿泊していた。

昨夜、信長が主催する本能寺での茶会における名物開きの席に列していた信忠が、宿所の妙覚寺に戻ったのは遅い時刻であった。

明智光秀謀叛の報せが届いたのは、信忠がまだ熟睡中のことである。

（悪い夢のつづきを見ているのか）

信忠は自問自答した。

だが、それは夢ではなかった。そして

長益にうながされつつ、手勢をひきつれて宿所を出て本能寺に向わんとしていた。

明智の軍は、少なく数えても一万数千、組下大名になっている細川藤孝、池田恒興、筒井順慶、高山右近、中川清秀らが共謀しておれば、三万四万にもなる。

対する味方は、本能寺に森蘭丸や小姓組を主体とした七十余人、ここ妙覚寺に五百数十人、合わせても、わずか六百人足らずであった。

（兄者の油断じゃ）

権勢に驕り、畿内に敵なしの自惚れが、美童を集めた小姓組のみの護衛に甘んじ、自ら墓穴を掘ったことになる。

（その巻き添えは、残念無念）

長益は緊迫した中で、何とかして逃れ出る方策は無いかと焦っていた。

そこへ京都所司代の村井貞勝が駈けつけて来た。

「本能寺の御殿、すでに焼け落ちました。やがて敵は、ここ妙覚寺にも攻めて参りましょうほどに、ひとまず、構えも堅固な二条御所に立てこもり、応戦すべきかと存じまする」と息せき切って述べた。

信忠は、この進言を聞き入れた。

二条御所とは信長が新公方足利義昭のために構築した、二条城である。意のままにならなくなった義昭を放逐した信長は、二条城を正親町天皇の皇太子誠仁親王の御所にあてていた。城郭造りであるから、立て籠もるのに利があると見たのである。ところが息まく、明智勢、一万三千に抗すべくもなかった。

ほどなく、御所に火の手があがるのを見て、長益は信忠に言った。

「致し方なし、敵の手にかからぬうちに、みずから腹を召しませ」

信忠は、自分の遺体は縁の下に隠すように命じておいて、腹を切った。介錯した鎌田新介をはじめ、六十余名の家来は残らず信忠に殉じた。

長益はこの渦中からひとり逃げのびた。

兄信長、甥であり主君の信忠、それに末弟の長利という身内の討死を尻目に遁走したのであった。当然のことに非難はまぬがれない。

のちの評判では、長益の行為を非道だと断じたうえ、「織田の源吾（長益のこと）は人ではないよ。御腹めせめせ召させておいて（信忠のこと）、我は安土へ逃るは源吾、むつき（六月）二日に大水出て、おた（織田）の原なる名を流す」という戯歌まで歌われ長益はそしられた。

それがために長益は、終生、「逃げの源吾」「逃げの有楽」という汚名を背負わされ、その屈辱に耐えることを強いられるのである。

尤も、長益のとった行動を弁護する声もなくはない。

天守閣が炎上すれば、城主が自刃するのは戦国の習いである。よって長益は、この時点では二条城の城主といえる信忠に、腹を召しませと進言するのは当然である。また落城寸前に城から落ちのびるのは、城主の遺児、血縁者である。

長益は、城主の最後を見とどける責任を果たし、織田家を存続させんがために自らが、生き残ったのだという説もある。

信忠が自刃する際に、長益に対し命令として言い残したというのである。

「岐阜城には、三法師（信忠の長男）がおる。まだ三歳である。だがまぎれもなく織田家の正統である。叔父貴は何とかここを脱出して岐阜城へ走って、三法師を護り織田家の存続を計ってくれ」

しかし、長益はこの命令によってのみ生き残ったとは思われない。なぜなら、信忠には、信雄や信孝という弟たちが健在だったからである。

では、なぜ長益は遁走したのであろうか。

理由は単純、「死にたくなかった」からである。甥の信忠に殉じるという武門の誇りなど望まない。兄信長からも、武人として嘱望されていなかった。生きがいは、幼くして学んだ茶の湯にふけること、殊に、早くから手ほどきを受けた、今井宗久や、千利休のような、名人上手になりたかった。そのためになら武門の恥など厭わない。武門のために犬死にするほど、もってのほかだった。

長益は頭を丸めて、行脚僧のいでたちで、明智軍が充満する京洛を抜け出た。日頃より光秀とは格別に親しい間柄であったというから、何等かの便宜が図られたのではなかろうか。

六月五日の早朝には稲葉山（金華山）を無事仰ぐことができた。

岐阜城は混乱をきわめていた。

いずれ跡目相続の争いなどで乱世の騒ぎになるであろう。長益は、後年しばしば「逃げの有楽」と呼ばれるように、今日も書き置きを残して、姿をくらましたのである。

「法体となりたる様に、浮き世を捨て、方々の菩提を弔いたく発心やみがたく、伏して御寛恕のほどを、三法師さまのこと、くれぐれも願い上げ申しまする」

という置き手紙であった。

宛名は、岐阜城の留守居の将、長谷川丹波守であった。

岐阜城下を忍び出た長益は、所領の知多郡大草城へは寄らず、桑名へ向った。

途中、大草城在の妻子と家老宛に飛脚を送り、無事の消息としばしの遁世を告げ、十二歳に成長していた嫡男長孝に、「父に代って城へ出仕し、三法師さまをお護りせよ」と命じている。

亡命先は、茶の湯の匂いがただよう堺の町を措いてほかにあろうか。ここには、気の置けない、実の弟にもまさる茶友がいる。今井宗薫だった。

宗薫は、大名物「松島」の茶壺を信長に献上した、茶人今井宗久の嫡男である。しかも宗久や利休の師でもある、いまは亡き武野紹鷗の孫にあたる。

長益は、もはや伝説上の人物となった紹鷗を尊敬していたこともあり、宗久に招かれて度々堺を訪ねるうちに、年齢も三つほど若いだけの宗薫とたちまち親しくなっていた。

かくして、しばしの間、長益は安寧の日をここ堺の地で過ごすことになった。

続く

（司馬雑感　四十一）

里見氏と北条氏
――房総の戦国興亡史

山田嘉久

（はじめに）

関東の戦国動乱は「享徳の乱」から始まった

15世紀半ば、5代将軍足利義量には後継がなかったため、次代将軍は前代未聞のくじ引きで決められた。6代将軍足利義教である。

そのため義教の将軍としての権威は極めて弱かった。そこで義教は、代始めの新政を印象付けるために、自ら裁判を行うこと（御前沙汰）を定め、共に将軍位を争った足利持氏の血統を断ち、鎌倉公方に自分の子を任命するなどの強硬策を立てた。

1438年、室町幕府と鎌倉府の協調をはかってきた関東管領上杉憲実と持氏とが対立すると、機会を狙っていた義教は大軍を派遣して、翌年持氏を自殺させてしまった。（永享の乱）

更に、義教は守護大名の家督決定まで介入しようとしたため、1441年、播磨守護の赤松満祐の一族によって謀殺されてしまった。（嘉吉の乱）

嘉吉の乱後、上杉憲実は幕府首脳に働きかけて足利持氏の子成氏を鎌倉公方に迎えた。しかしその成氏は関東管領上杉憲忠（憲実の子）と次第に対立を深めて、1451年ついに上杉憲忠を謀殺した。

これが「享徳の乱」である。

成氏は鎌倉を出て上杉勢を討伐する間、下総古河に居を構えた。「古河公方」といわれる。これに対抗して幕府は1457年、足利義政の弟足利政知を東国に派遣した。しかし政知は鎌倉には入れず、伊豆の堀越で一地域の領主とならざるをえなかった。こちらは「堀越公方」と呼ばれる。

以上、15世紀半ばの幕府の動きを教科書風に記したが、非常に分かりづらい。ともかく「享徳の乱」をきっかけに、東国の武士は分裂した。そして成氏とその子孫と、上杉氏を中心とする勢力との間に30年以上も動乱が続き、東国は他の地域に先駆けて戦国の世に突入したのである。

房総に限って言えば、下総では千葉氏嫡流家が滅亡して馬加千葉氏が宗家を奪った。上総では上総武田氏が成立し、安房では房総里見氏が成立した。

その後、8代将軍足利義政のとき、将軍家でも家督争いが起きた。義政の弟足利義視が次期将軍と決められていたが、後に義政の正妻日野富子が義尚を生み、この両者が家督を争ったのである。

この当時、幕府の実権は管領の細川勝元と山名持豊が握っていたが、勝元ははじめ義視を支持し、持豊は富子と結んで義尚を立てていた。

これに畠山、斯波家の内輪もめもからんで、1467年、細川方（東軍）と山名方（西軍）は武力衝突した。この戦いは11年に及んだ。応仁、文明の乱である。

この乱は幕府の権威を失墜させ、前記享徳の乱とともに連動して、戦乱は全国各地にひろがり、日本全体が戦国時代に入って行くのである。

一　房総と北条氏

房総の戦国時代は一口にいえば、在郷勢力と北条氏との抗争の歴史である。

1　小弓公方と真里谷武田氏の動向

関東の戦国時代は、享徳の乱に続く長享の乱、永正の乱という内乱で始まった。上杉氏では山内上杉氏と扇谷上杉家間で分裂、抗争が繰り返され、それに伴い古河公方足利氏でも永正時代に入ると政氏（成氏の子）と高基（政氏の子）の父子間で対立が起こった。

関東の諸氏は必然的にこれらの抗争に巻き込まれた。

房総では、千葉孝胤が没した翌年永正3年（1506）、扇谷上杉氏の重臣三浦道寸が相模三浦郡から房総へ渡海して砦を構えた。

一方、これらの抗争の間隙をぬって、北条早雲（伊勢宗瑞）が伊豆韮山を根拠に、大森氏の小田原城を奪取、鎌倉の占領と、確実に相模、武蔵の支配権を拡大させていった。

ほぼ同時的に、房総の真里谷武田氏は対立する原氏（千葉一族）の小弓城を北条氏の援助を得て攻略した。

それをふまえて永正15年には、足利義明が武蔵高柳から下総小弓城に入部した。これを支援したのが他ならぬ真里谷武田氏であった。

この小弓公方の成立は本格的な戦国時代突入を示す画期となった。

足利義明とは古河公方足利政氏の次男で下総小弓（現千葉市）に御座所を構えたことから、世に小弓公方と呼

ばれた。

ただ彼は最初からそのような境遇にあったわけではない。はじめは僧籍にあり、関東宗教界の頂点たる鎌倉鶴岡八幡宮の別当職にあった。しかしそのうち、父政氏と対立するなどして関東各地を転々とし、そして永正15年（1518）に上総真里谷武田氏の招聘にこたえて下総小弓に御座所を移し、世に小弓公方と称せられるように至ったのである。

それ以降、その血筋のよさから房総統合の象徴的存在として君臨することになる。

2　北条早雲、氏綱の上総茂原侵攻
―「藻原寺文書」の発見

千葉県中央部にある茂原市周辺の台地は古来より拓け、東京湾岸の木更津地域とともに中世から上総国の文化、経済の中心地として発達してきた。

その茂原に所在する常在山藻原寺は「茂原」の語源になっただけに、日蓮の弟子日向の創立と伝えられる東上総地域きっての日蓮宗の古刺である。別名「東身延」と称せられる。

その藻原寺から1991年、北条氏の東上総進出を直接裏付ける貴重な資料が発見された。「上総藻原寺文書」である。

その発見者滝川恒昭氏（現県立船橋高校教諭）は云う。

「北条氏がかなり初期の段階から東上総地域と関わりを持っていたことは、先学によって指摘されていたものの、関係資料の僅小性から、その実態については殆ど不明であった。それが今回の発見によって多少でもその空白を埋めることができた。」

その貴重な資料とは永正13年（1516）、伊勢宗瑞（北条早雲）が茂原に侵攻した時に発給した制札である。

そのほか、2代目氏綱が永正16年に発給した制札なども含まれていた。

「制札」とは中近世の武家政権またはその下部組織が寺社、村落等に掲げた木札のうち内容が禁制や掟書のものである。受給者（地域）にとっては生命財産の「安全保障」となり、発給者にとっては軍事勢力を誇示する手段でもあった。

時には寺社や地域住民側から金銭を出し合って、発給者に依頼する場合もあった。似たものに軍勢の暴力行為を禁止する「禁制」があるが、「ふるさと茂原のあゆみ」では「北条氏禁制」となっている。

（伊勢宗瑞制札）

「制札

右、当手軍勢甲乙人等　乱妨狼藉事、堅令停止畢、若有違犯之族者、可処重科者也、仍如件

永正十三年十一月（花押）　」

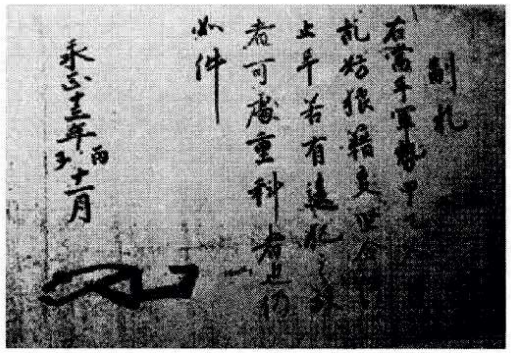
（伊勢氏綱制札）

「藻原　妙光寺

制札

右、軍勢甲乙人等　不可到濫妨狼藉、若於違背之族者、可為生涯者也、仍如件

永正十六年七月（花押）　」



（註）「藻原寺文書」は古文書鑑定の第一人者渡辺包夫氏によって本物と鑑定されている。同氏は日本画の大家で民放番組「なんでも鑑定団」で有名。

蛇息ながら私は戦前、旧制長生中学で同氏から美術を教わった。

さて、この文書が発給された永正13年（11月）とは、茂原にとって（早雲にとっても）どんな年だったのだろうか。

その年の7月には早雲は4年間にわたる攻城戦の末、ついに三浦半島新井城に拠る鎌倉幕府以来の名族三浦氏を滅ぼしている。

その結果、北条氏にとっては海を隔てて直面する房総半島への侵攻が可能となったのである。

それゆえ早雲は、余勢を駆って一気に房総の地まで侵攻した（或いは房総側のある勢力の要請による進出か？）ことは十分考えられる。

そしてその結果、この茂原周辺地域（二宮荘）は一時的にせよ早雲支配下に入ったのであろう。事実、翌年に真里谷武田氏と真名城主三上氏との領地争い時にも、武田方に援軍を出して茂原郊外の真名城を落城させている。

この頃、真里谷武田氏は小弓城主で千葉氏の執権であった原氏や真名城主の三上氏と対立しており、北条氏に支援を求めたのである。

真名城は茂原市と長柄町の境界に近い、比高40mの丘陵上に築かれている。この地の豪族三上氏の居城であった。三上氏は、足利幕府の創世期に活躍した稀代の梟雄佐々木道誉の一族が、足利尊氏から上総畔蒜荘を与えら

れ三上氏を称したとされる。

真名城を攻略した早雲は、上総二宮荘を獲得したらしく、1590年に滅亡まで北条氏はその領有を主張していた。

また、北条氏に援軍を求めたという真里谷武田氏は上総武田氏の一派である。上総武田氏は武田信長（信玄の5代前）から始まると云われる。古河公方足利成氏によって上総国の支配を認められ、同国を支配した。

武田信長の死後、嫡流は庁南城（長南城）に、分家は真里谷城に本拠を構え、それぞれ長南武田氏、真里谷武田氏を名乗った。

以後、長南武田氏は北条氏傘下の将として、徹底した反織田、反豊臣路線を貫き、1590年の秀吉の小田原攻めで滅びた。

一方、真里谷武田氏は戦国時代前半には上総国西部から中部一帯を領有する一大勢力となった。しかし秀吉の小田原攻めによって、長南の本家と運命を共にした。

次に北条氏綱が発給した永正16年には房総はどうだったのであろうか。

すでにこの2年前の永正14年には足利義明が小弓の地（現千葉市）に入部して房総の地に一大勢力を築きつつあった。これを支援したのが他ならぬ真里谷武田氏であったこと、また小弓公方の成立は房総の本格的な戦国時代突入を示す画期となったことは前述した。

それに脅威を感じた古河公方足利高基が、義明を支える真里谷武田氏の拠点である椎津城（現市原市）を攻めたのが永正16年8月であった。

一方、北条氏綱は義明、真里谷武田氏を支援するため、茂原近辺まで侵攻してきたことが考えられる。

いずれにせよ、これら北条氏の「制札」により、永正10年代の房総は、古河公方家内の権力闘争がそのまま房総内の武田、原、里見、千葉等の在地勢力に反映され、さらにその争乱に北条氏が介入して大乱の様相を呈してきた。

北条氏の4代目を継承した氏政は、天正2年に関宿城を落とした後、本格的に房総への侵攻を開始した。天正3年に入ると「郷村残所」が無いほど本納、東金、土気に押し入った。

3　北条早雲の実像

―小説「箱根の坂」の世界

ところで、上総茂原に侵攻した「伊勢宗瑞」は「北条早雲」と理解されているが、厳密には歴史上「北条早雲」という人物は存在しない。

小田原北条氏が「北条」と名乗るのは2代目氏綱からであり、それまでは「伊勢」と名乗っていたからである。

初代の名は伊勢新九郎盛時といい、入道して早雲庵という庵を結んだ。（「茂原市誌」では「伊勢新九郎」で統一している）

彼は書面には、すべて法名「宗瑞」で署名している。従って北条早雲といわれてきた人物の晩年の名も「伊勢宗瑞」が正しい。

素浪人から身を起こし一国の領主に成り上がったというのが「早雲像」だったが、その後の新史実の発見などにより、事実は少し違うようだ。

宗瑞は幕府政所の役人伊勢盛定の次男（伊勢新九郎盛時）で、決して身分の低い素浪人ではない。姉（或いは妹）は駿河の今川義忠の正室北川殿である。文明5年（1473）に北川殿は嫡男竜王丸（後の今川氏親）を生んだ。

宗瑞は今川家の家督に絡んで幕府から派遣された工作員のような役割を担ったようだが、史実は（特に前半生は）あくまで不明である。

その早雲を主人公にした小説「箱根の坂」を書いた司馬遼太郎は云う。「早雲の前半については、実際の早雲のさまざまな小さい破片を集め、おそらくこうであったろうという気分が高まるまで待ち、造形した。この作業ほど、ひめやかな悦びはない」（あとがき）。

司馬は新九郎を応仁の乱で荒れる京の町で、家業の鞍作りをしながら将軍足利義政の弟義視に仕える側近としている。

また北川殿は作中、新九郎の腹違いの妹千宣である。義視に仕えるため宇治からやってきた千宣に駿河国守護職今川義忠が夜毎に通うようになる。

名目上は兄妹とはいえ、互いに惹かれあう新九郎と千宣。しかし千宣は今川義忠に伴われ、駿河に下って行く。

一方、京の町の戦火がようやく下火になりかけた頃、再び鞍作りの暮らしを始めた新九郎（早雲と名乗る）に義忠の死の知らせが届く。千宣と義忠の遺児竜王丸に危機が迫っている。早雲は駿河に向かった。

早雲の奔奔によって国人衆らの同意を得た竜王丸は、亡き義忠の従弟今川新五郎を後見とし、正式に義忠の後継者となる。（後の今川氏親）早雲も竜王丸の執事役として駿河の興国寺城に留まることになった。

しかしあわよくば駿河守護の後継者たらんとする今川新五郎は関東の上杉、尾張の斯波を後ろ盾に動き出す。それに対して聖たちを動員する大胆な策をもって、首尾よく新五郎を討ちとり、政敵を退けることに成功した。

興国寺に戻った早雲の視野にはすでに伊豆があった。折しも伊豆の足利政知はその長子茶々丸に殺され、これを機に早雲は伊豆に出陣、早雲に追われた茶々丸は三浦に落ちて行った。

早雲が伊豆を奪った事件は旧勢力が滅び、新興勢力が勃興する下剋上であり、戦国時代の幕開けとなった。

伊豆韮山に入った早雲は、北条に簡素な住居を建てた。やがて土地の者はだれかれとなく早雲を「北条殿」と呼

ぶようになった。

そのころ、箱根の坂を超えた向こう関東では、扇谷上杉と山内上杉のいつ果てるともない争いが続いていた。

早雲は小田原の大森藤頼を討つことを決心する。早雲の周到な攻めに小田原の館はあえなく落ち、早雲はここを関東一の堅城にするための普請を始める。

西相模の多くは小田原城の早雲に臣従を誓った。早雲、64歳のことだった。

翌年秋、相模の東半分を持つ三浦道寸が攻めよせてきたが、早雲はじっと耐え、機を待った。早雲が小田原城に入って17年が経った秋、収穫をねらって今年もやってきた三浦勢は、突然打って出た早雲軍によって壊滅。6年後に滅亡したのは前述の通りである。

三浦氏の滅亡により相模全域を手にした早雲は、その翌年88才の生涯をとじた。

以上、小説「箱根の坂」の概要だが、近年の研究では康正2年生れ(1456)すなわち64歳説が有力となっているという。しかしこの説だと早雲が足利義視に仕えた時期(1460年代)には10歳前後となってしまう。

そして何よりも早雲のイメージ「遅咲きの武将」あるいは「大器晩成」は一挙に壊されてしまわないか。

司馬が早雲を「身分の低い素浪人」の姿を守りながら、伊勢氏の末流として家伝の鞍作りを業とする職人的人物として描いたのも、前述の司馬の云う「ひめやかな悦び」であったであろう。

なお「箱根の坂」では、前述の早雲茂原攻めの記述を茂原出身の私は期待したが、この小説はその前の早雲が箱根の坂を超えたところで終わっている。

「早雲がようやく箱根の坂を超えてあずまに入ったときには、書いている作者自身まで足腰の痛みをおぼえた」(あとがき)

二　房総里見氏の台頭

遡って天文2年(1533)7月、安房稲村城内は異様な緊張感に包まれていた。里見家元当主里見義豊が、叔父里見実堯と安房国内きっての実力者正木綱道を城中に召喚したのである。

両者はかねてから義豊の治世に対して、不穏ともとれる行動を繰り返し、最近では秘かに連携を深めていた。

そもそも安房里見氏は、前述の15世紀後半に起きた「享徳の乱」(鎌倉公方と関東管領上杉氏との抗争)の最中、公方足利成氏から上杉氏一掃の命を受けて白浜に入部した里見義実を祖とするが、義豊の父義通の時には、すでに安房一国の支配権を掌握していた。

しかし安房国内を複雑にしていたのは、安房における里見氏が義実から派生する系統だけではないことであった。そのため、おそらく義豊が両者の詫びを入れ、ことを平和裡に収めるだろうとの観測が専らだった。

だが事実は秘密裡に練られた義豊側の逆クーデターだった。

稲村城内はたちまち大混乱に陥り、不意をつかれた実堯、通綱を始めその従者たちも悉く討たれた。

急報に接した義堯(実堯の子)は、ひとまず上総の百首城に難を逃れ、そこから相模北条氏に支援を要請した。また正木通綱の遺族ともすぐに連携を取るなど反撃の態勢を整えた。

(房総里見氏略系図)

義実―義成―義通―義豊
　　└実堯―義堯―義弘(以下略)

そして8月末には、義豊軍と北条氏の支援を受けた義堯軍が激突したが、義豊は敗れ義父の真里谷(武田)氏を頼って上総に落ちた。

そして翌天文3年4月、義豊はついに上総から安房に侵攻したが、乱戦のなか敗死。その首は北条氏のもと小田原に送られたという。

ここに里見義堯は嫡流系を滅ぼし里見家宗主権を掌握した。

以後、里見氏はその強力なリーダーシップのもと、戦国大名として発展の道を歩いてゆくのである。

三　江戸湾をめぐる戦国動乱
―北条水軍と里見水軍

房総は内陸部においては香取の海を擁し、外縁部は内海(江戸湾)と外湾(太平洋岸)に囲まれた袋状の地形である。それゆえ外縁部ではその沿岸と内陸をつなぐ水陸交通が古来発展してきた。湾岸都市の発達も同様であった。

江戸湾(内湾)では、武蔵、相模側の品川、六浦、神奈川などが著名で、房総側では下総葛西、船橋、小弓、上総木更津、富津佐貫それに安房金谷、勝山が存在したが、その中心は富津であった。その富津から品川経由で伊勢大湊など西国への往来が可能となっていた。

こうした港湾都市も、戦国時代に入ると有力な領主の支配下に入っていった。特に品川が北条氏に支配されると、江戸湾を巡る房総領主らの緊張関係は一気に高まった。

戦国期後半の江戸湾支配権をめぐって、激しく争ったのが北条氏と里見氏である。

相模小田原に本拠を構える北条氏は、戦国末期には事実上、関東の支配権を握ったが、それを支えるための経済活動の保護確保が大きな命題となっていた。その上で大きな障害となっていたのが、江戸湾の活動に大きな影響力を持つ房総の海上勢力者―とりわけ里見氏、それに大枠では従う「海民」という存在だった。

特に後者は日常では漁業を始め商業、職人など様々な形で海に関わりながら、一旦事あればすぐさま海賊に化する人々であった。そしてこのような人々こそが、有名な里見水軍を支えた存在であったわけである。

15世紀前半に小弓公方足利義明と真里谷武田氏を滅ぼした北条氏は、房総の全面支配に乗りだしてきた。しかし一方で、自領内への房総側勢力の侵攻にも苦しんでいた。特に相模、武蔵の江戸湾岸に所在する湊集落と海上を航行する船舶への、房総側からの略奪には手を焼いていた。

その対抗策が紀州から招聘した梶原氏や伊豆田子の山本氏などであった。そして彼らの下に地生えの水軍が組織されていった。

一方、里見氏側の水軍の主力を構成したのは安西、正木など伝統的に水上活動に優れた氏族の常備水軍と里見氏に味方する水上生活者で構成されていた。

ただ戦国末期になると、国力の差もあって次第に里見氏は北条氏に圧倒されてきた。このことは房総側の港集落の大半が里見氏の直接的支配を離れてくることを意味する。

かくて制海権を北条氏に奪われた里見氏は、天正5年（1577）、屈服を意味する講和を結ばざるを得なかった。

ただその後も、体制に従わない房総側の海賊による対岸への略奪はしばしばみられ、それは江戸幕府の体制が確立するまで、断続的に繰り返された。

海の支配権をめぐる抗争は、なにも江戸湾沿岸に限定されることなく、外湾（太平洋岸）でも展開されていた。

たしかに黒潮が房総沖でもっとも海岸に接近するために太平洋をいく航路は危険であるという認識が根強い。とはいえ、北条氏は守護山内上杉氏から伊豆、大島の支配権を継承し、前述の早雲以来の茂原、一宮支配や正木氏（勝浦）や両酒井氏（土気、東金）への接点も、北条氏の外湾進出が目的であった。

その後も里見氏は北条氏と江戸湾内外で合戦を繰り返した。

そのさいの北条水軍山本氏の活躍は著名であったが、と同時に相互に内部撹乱を行っていた。

こうして海の領主たちは、海での生業を主としつつも、ときに略奪行為を働き、または水軍の一員として海賊、海民たちを支配していた。とくに三浦半島の沿岸では里見氏方の海賊船のゲリラ攻撃を再三受け、盗み、放火、女童の略奪を受けていた。

また商人たちの動きも同様であった。

常陸布川の新井氏や武蔵金沢の山口氏などの海河川の商人たちは、里見氏から過書（税免除の通行許可書）をもらって商売を行っていた。逆に上総嶺下郷（富津市）の野

中氏などは、北条氏から営業許可を得て相模、武蔵で活動していた。

彼らは北条氏と里見氏双方に属する両属商人であった。

そのほか下総古河の福田氏、下総関宿の会田氏、下総水海の小池氏、下総野尻の宮内氏なども古河公方足利氏、千葉氏（海上氏）、北条氏などの権力の間に立って活躍した商人だった。

（北条氏略系図）

① 伊勢長代（早雲）—②氏綱—③氏康—④氏政—⑤氏直

（続く）

性と化粧の物語（五）

鈴木守

第二話　性と歯の化粧

性に纏わる歯の化粧には、〝歯磨き〟、〝抜歯〟、それと今一つ〝お歯黒〟が知られています。第一話『性と毛の化粧』に引き続いて、今回から『性に係る歯の化粧・三題』を取り上げる事にします。

尚、蛇足ですが、歯を磨く行為を〝はみがき〟と云いますが、歯を磨く剤も〝はみがき〟と呼ばれていますので、前者を〝歯磨き〟、後者を〝歯磨〟と表記する事にします。

第一節　性と歯磨き（一）

性と歯磨きについて、最初に『歯の基礎知識に触れた上で、『現代の歯磨き』と『江戸時代の歯磨き』を紹介します。

一項　歯の基礎知識

これまでに歯や歯磨の勉強をした事はありませんので、歯の基礎知識として、①歯の構造と組成、並びに②歯の成長についての知識を導入する事にします。

①歯の構造と組成：歯は歯茎（歯齦、歯肉とも云う）から表面に出ている部分と歯茎の内側に隠れている部分に分けて、夫々歯冠及び歯根と呼称しています。

歯は硬い石灰質で構成され、歯の表面から、エナメル質、象牙質、セメント質が配備されており、その奥の院に血管や神経を備えた歯髄が鎮座しています。エナメル質は人体で最も硬い組織で、硬さは水晶や石英に匹敵し、化学的にはヒドロキシアパタイト（燐酸カルシウムの一種）や炭酸カルシウムのような無機塩がほゞ96％を占めています。

歯根の部分はセメント質で覆われていますが、虫歯で

象牙質やセメント質が浸されますと歯痛が生じます。

②歯の成長：歯は通常、生後六・七か月頃から生え始め、二才か二才半くらいになると、上下20本の乳歯が出揃いますが、乳歯は五才から七才で抜けて永久歯に生え替わります。

一九八一年（昭和56）、厚生省が行った実態調査結果では、三歳児の虫歯発生率は80％に及んでいました。この発生率から察しますと、乳歯は抜け落ちて新たに永久歯が生えますので「乳歯の手入れは不要」の考えが普及していたのでしょうか。最近の歯科医は「乳歯の次に生えてくる永久歯の案内役を果たす故、乳歯が生え始めたら、可及的に早く歯口の清掃を始めなさい」と云っていますが、歯磨類を使用する歯磨きはエナメル質の摩耗を理由に否定的です。

二項　現代の歯磨き

現代人の歯磨きは、歯磨を付けた歯ブラシで歯の表面を磨いたり、歯間を擦ったりして、食物残渣や歯石、歯垢、並びに舌表面の舌苔を取り除いています。この項では、(1)歯磨と薬事法並びに(2)戦時中の歯磨きに焦点を当てる事にします。

(1)　歯磨と薬事法

歯磨も化粧品同様、薬事法（以下、文中では法と略す）の規制下にありますので、法が定める①歯磨の剤形、②歯磨の効用並びに③歯磨の原料成分を紹介します。

①歯磨の剤形：法に収載されている歯磨の剤形には、液状、粉末状、半練り状、並びにペースト状があります。それらは夫々、水歯磨、歯磨粉、潤製歯磨、及び練歯磨と称していますが、現在市場で見られる歯磨の殆どがチューブ入りペースト状薬用歯磨で、その他の剤形の歯磨を見る事は滅多にありません。

②歯磨の効用：歯磨は効用の相違によって、化粧品と医薬部外品に分類され、後者を薬用歯磨と称しています。化粧品に分類されている一般的な歯磨の効能、効果を羅列しますと、「虫歯を防ぐ」、「歯を白くする」、「歯垢を除去する」、「口中を浄化する」、「口臭を防ぐ」、「歯の脂を取る」、「歯石の沈着を防ぐ」があります。薬用歯磨では、一般的な歯磨の効能・効果に加えて、「虫歯の発生及び進行を予防する」、「口中を爽快にする」、「歯槽膿漏の予防」、「歯肉炎の予防」が効用として認められています。

③歯磨の主たる原料成分：歯磨類の主な原料として、研磨剤と発泡剤があります。両原料とも歯磨の種類の如何に関わらず、いずれの歯磨にも配合される必須の原料です。研磨剤の配合量は歯磨の種類ごとに多様で、例えば練歯磨には10～50％程度しか配合しませんが、歯磨粉には70～95％と大量の研磨剤が使用されています。

医薬部外品の場合は、抗炎症剤乃至は殺菌剤のいずれかが薬効成分として必ず配合されています。薬用歯磨の場合は、医薬部外品の資格を得るには、法の定めた薬効成分を指定量の範囲に配合する事が絶対条件となっています。

(2) 戦時中の歯磨

我々同年輩の会合では戦時中の体験談も飛び出して来ます。その中の話題の一つに塩や消し炭による歯磨があります。先日は近所の奥さんと話をすると、塩で歯を磨いたとの事です。斯様に、塩、炭の歯磨は昭和年代の史実であり乍ら、戦時中の歯磨きを題材にした記録を目にした事はありません。従って、この項では「戦時中の歯磨き」として自己体験を記しておきます。

私は満州事変が起った翌年、一九三二年（昭和七年）の五・一五事件の一週間前に生を受け、私は戦時中に生れ育ちましたので、私の歯磨き体験は『戦時中の歯磨き』の一部を構成していると云えます。

①歯磨粉による歯磨き：　現代社会でも、現在の時点では、歯磨粉で歯磨きしている人を見掛ける事はありません。しかし、私達が乳幼児の時代には、歯磨粉で歯を磨いていました。事実、私の乳幼児期は家族の人達に歯磨きして貰っていました。

物心ついた頃の意識の中にライオンの姿が浮かんで来ます。それと〝クチュクチュ〟と云う音声も耳に残っています。後に、この間の事情を姉から聞いた事があります。姉が云うには「歯磨粉をガーゼにつけて、歯と歯茎を清拭し、〝クチュクチュしましょ〟と云い乍ら口漱ぎした。その結果、クチュクチュが歯磨きの代名詞になった」と教えてくれました。姉の話を聞いたのは四、五歳の頃かと思います。ライオンの絵に反応したり、クチュクチュの音声を発したのは、三歳児の頃だったと推察しています。

次に歯の迷信の話をします。歯磨していると歯が一本抜け落ちました。隣で歯を磨いていた兄に報告すると、「抜けた歯を天井裏の鼠の通り道に供えておくと、丈夫な歯が生えてくるそうだ」と教えてくれました。兄は梯子を持って来て、天井板が外れる場所におき、板を外して「抜けた歯を天井裏に供えて手を合わせなさいと命令して、私が天井裏に首を突っ込むのを手伝ってくれました。この乳歯が脱落した頃の歯磨きには歯磨粉を使っていましたので、昭和十二年から十四年頃には未だ歯磨粉が使われていた事を示しています。

②塩の歯磨：　手に塩をつけて塩のついた指で歯や歯茎を擦って歯磨きにした記憶はありますが、その歯磨きをいつ頃から始めたかは記憶に残っていません。塩の歯磨きではっきり覚えているのは、ある夏の朝、兄が畠から胡瓜を採って来て半分に折り、片方を渡し乍ら、「横

須賀（現在の掛川市横須賀）の連中に教えて貰った歯磨きだ」と云いざま、塩をたっぷりつけてガリガリ胡瓜を食べ始めました。このハプニングは、兄が中学へ行くようになり、学徒動員で家を不在にした昭和十六年から七年頃であり、遅くとも、この時期までに我が家でも、塩の歯磨を始めていた事になります。

③震災と炭の歯磨：　本誌、一四〇号に収載された太田精一氏著の『焦土の中から』に描出された東南海地震は、我が家をも襲い、母屋は全壊、診療棟の別館は半壊の憂き目をみました。地震当日の午後の授業の最中に机が揺れ始め、地震に気着いて運動場に飛び出しました。すると、運動場の地平が波立って校舎の方向に押し寄せてきました。その時の恐怖は未だに忘れられません。地面にへたり込み、手近に生えていた槙囲いの根元を掴んで目を瞑っていました。揺れが鎮って目を開けると校舎は無事でした。

この地震で、我が家が倒壊したのに加えて、父が往診中に、家の下敷きになった小学校五年の女の子と赤ちゃんが我が家の庭先きで息を引き取りました。小学校二年の女の子は、寝たきりのお祖母ちゃんを救けようとして揺れている家の中に飛び込んで下敷きになったと聞きました。

④歯磨粉とジュラルミン：　中学に入学し終戦近くになりますと、校舎の一部が軍需工場化しました。ここで何を作っているかは機密でしたが、洩れ聞いた噂話によりますと、

「ジュラルミンの板の表面を平らにしている」との事でした。当時は〝ああ、そうか〟と聞き流していましたが、大学（理学部化学科）に入学した後に、ジュラルミンがアルミニウム（以下、アルミと略）の合金で、飛行機や自動車の材料にしている事を知りました。

参考までに、アルミの特性と利用について紹介します。アルミは軽金属の代表で、展延性に富んでいるので、アルミ箔として利用され、電線や電気器具にも使われています。この酸化物の赤色を帯びた物がルビー、青色の物がサファイアであり、硬度があるので金剛砂としての利用があります。

話を本筋に戻します。酸化アルミが金剛砂に利用されている事を知り、母校の即席軍需工場では、ジュラルミン板を酸化アルミの砂で研磨しているのかと推察しました。しかし、終戦近くの戦況を見ますと、米軍機が毎日、上空に飛来して来ましたので、上空の制空権を挽回するには、米軍機より性能の高い航空機の増産が必要であろうと軍の首脳部は考えたに相違ありません。その一つの方策として、航空機の機体を構成するジュルミン板の表面を平滑にして、空気抵抗の少ない高速の航空機を増産する方策を選び、青少年教育の場である教室を軍需工場に変え、しかも民需（歯磨等）の研磨剤を軍需用に切り

替えて、ジュラルミン板の研磨が行われるようになったのではないかと類推し始めています。

三項　江戸時代の歯磨き

現代社会における歯磨行為と性の関係を示す資料は認められませんでしたし、手持ちの文献資料の範囲では、明治・大正と続く近代の歯磨を記した文書を見出し得ませんでした。

本項では、江戸時代・近世社会の歯磨きについて、①庶民の歯磨、②女性の歯磨、及び③楽隠居の歯磨を(1)歯磨き三態として纏め、次いで、(2)歯磨と楊子、続いて(3)口臭と歯磨を話題として取り上げます。

(1)歯磨き三態

①庶民の歯磨き：　裏長屋の宿六が朝一番に歯を磨いています。すると〝ナットー・ナット〟の呼び声が聞こえて来ました。〝おーい、納豆屋〟と宿六が呼び止めました。この音だけの光景を川柳子が聞きつけ、「歯磨を吐き出し乍ら納豆よ」と一句捻り出しました。斯くて江戸の一日が始まりました。

②女性の歯磨き：　『女鏡秘伝書』、著者不詳、一六五〇』は「歯の養生は朝夕、歯を磨く事であり、食後に楊子を使い、漱いをしなさい。殿の見ている所で磨いてはいけません。夜、恐ろしげな所で磨けば、鬼神も怖れをなすでしょう」と述べています。他の書には、「百年の恋も冷めてしまうでしょう」と表現していました。又、佐山半七丸は『都風俗化粧伝、一八一三』の中で、「朝起きて歯をよく磨き、楊子もて歯の間の滓と舌苔を取り去るべし」とお節介をやいていました。

とは云え、お歯黒を付けた女性は歯磨きでお歯黒が剥げるので、歯を磨かなかったと云われています。それに反し、花魁は歯を染めなかったので、歯磨きを必要としていました。尚、お歯黒女は三日に一回程度歯を染め、食後にはお茶か白湯で口漱ぎするのが風習で、その際、歯間の滓や舌苔を総楊子で除いた為、彼女達は歯磨きをしなくても虫歯は少なかったそうです。

③楽隠居の歯磨き：　著者不明ですが『催情記、一六五七』に「楊子を喞え、雪隠へ磨き砂を持ち行き、ゆるゆる磨き、其後、煙草をのめば、腹中よく通ずるもの也」とあり、斯様に江戸時代初期の頃は楊子と砂で磨いていましたが、当時、楊子や砂を使って歯を磨くのは富裕階級の人達で、庶民は食後に、湯か茶で嗽いし、食べ滓を吐き出すのが普通でした。

(2)　歯磨と楊子

『狂歌夜光珠・棗由亭負米編、一八一五』は丁子屋歯磨を詠んだ狂歌を収載していました。丁子屋歯磨は『道聴塗説、著者不明、一八二九』によりますと、「寛永廿年（一六四二）丁子屋喜左衛門、朝鮮人の伝を得て歯磨の製造が始まる」との事でした。

その当時、一七世紀頃、我が国では富裕層の人達の間で歯磨きの風習が高まりましたが、歯磨を買えない庶民達は砂や塩、米糠を使用していました。川柳に「消炭も歯磨ほどに匂う也」と詠まれていましたので、消し炭も歯磨として使われていたのでしょう。

製品としては〝房州砂〟や〝松葉塩〟がありました。前者は水飛によって分別した微粒子の砂に竜脳と丁子を混じ、後者は塩を松の実と混ぜて黒焼きにした製品です。水飛は砂や粘土を水中に入れて撹拌し、細粉、粗粉を分別する方法です。

楊子は今様の妻楊子より長く、木枯紋次郎が口に喞えていた楊子のように長い楊子でした。楊子は白楊の枝を削って作り、男性用は堅めの材が選ばれ、女性用はお歯黒が削がれないように柔軟な材で作り、先を房状にした総楊子で歯を磨き、舌苔を除いていました。

(3)　口臭と歯磨き

現代の歯磨では〝口臭防止〟は必須の品質条件とされています。江戸時代でも同じ事だったと思いますが、歯磨きが口臭を防止したとする実例を記した江戸時代の書は見当りませんでした。唯一、『今昔吉原大鑑、著者不詳、一八三四』に「遊女達は歯を磨かぬ客を敬遠した」と叙述していました。歯を磨かぬ客の口臭には辟易した事でしょう。

色里の女ならずとも、秦宗巴は『犬枕、一六〇六』に〝穢き物〟に枇杷色の歯を挙げています。斯様に江戸時代早期の人達も歯を磨かぬ枇杷色の歯を嫌悪していましたので、ましてや遊治郎は妓楼の女に嫌われないように歯を磨いて、白い歯の維持と口臭の防止に努めたに違いありません。

口臭の話のついでに、女の口臭について述べておきます。池波正太郎は『おとこの秘図、新潮文庫、一九八三』に「情事の最中の女の口臭は一種独特のもので、江戸時代には、これを防ぐ手段に金盞丸と云う丸薬があって、それを口中に含むと口臭が全く消えて花の香りが口中に漂う」と記していました。この丸薬は現在の医薬部外品に属している仁丹のような物と推察されます。かつては、京・島原では口臭防止剤として服用したそうです。

最後に、歯磨きの慣習と性の文化の関連について一言述べておきます。

本稿では性と歯磨きの関連について検索して来ましたが、我が国の現・近代社会には、この事を示す証拠は見当りませんでした。近世・江戸時代に至って、「歯を磨かない男は不快な口臭を発する為、女性から忌避され、歯の手入れをしない枇杷色の歯を穢きものとして蔑まれ

ている」事が文献に示されていました。

この二つの事実は、歯磨きの不履行が男女間の関係を疎遠にさせている事の証拠であると云えます。この二つの証拠から見ますと、現代の歯磨の効能・効果のうち、「口中を浄化する」、「歯を白くする」、「口臭を防ぐ」等はいずれも歯磨きの慣習が性の文化の維持・向上に貢献していると信じています。

参考文献

村沢博人、津田紀代、化粧品文献資料年表、ポーラ文化研究所、一九七九

阿部龍二著、日本化粧品技術者会編、最新化粧品科学、改訂増補、薬事日報、一九八八

鈴木守、コスメトロジー入門、幸書房、一九九二

渡辺信一郎、江戸の化粧―川柳で知る女の文化、平凡社新書、二〇〇二

柳下徳雄、ホームドクター・家庭の医学、小学館、一九七二

田村健夫、広田博、香粧品科学―理論と実際―、フレグランスジャーナル社、一九九六

微かな記憶を再現して記録する

―東西冷戦下のベルリン都市生誕七百五十年祭（一九八七年）の光と影―

山本鎭雄

ロックの巨星、天国に昇天

二〇一六年一月十二日付の『朝日新聞』で同月十日に世界的ロック歌手で俳優の「デビッド・ボウイさん死（六九歳）、ロック変革、世界に影響」という二段組みの見出しを読んだ。インターネットでは、ドイツ外務省はツイッターで「さようなら、デビッド・ボウイ。今やあなたはヒーローズの仲間入りだ。壁の崩壊に力を貸してくれてありがとう」とメッセージを発信している。「壁の崩壊」というのは、言うまでもなく、あの歴史的な「ベルリンの壁の崩壊」のことである。デビッド・ボウイと「ヒーローズ」（英雄）と「ベルリンの壁」の崩壊とは三題噺だが、それらはどのように関係するのであろうか。

デビッド・ボウイ死去の記事を読み、三十年前の薄れた記憶が微かに蘇ってきた。一年間、あの「壁の町」西ベルリンで暮らし、デビット・ボウイらのロック・コンサートを下宿の窓越しで聞いた。当時、新聞・週刊誌の記事を切り抜き、スクラップ・ブックにした。今、それを改めて読み返し、私の微かな記憶を再現し、同人誌『まんじ』に寄稿することにした。

今、「ベルリンの壁」、ドイツ再統一という世界的な変革期に関する何冊かのドキュメントを読み返した。さらに、私はベルリンがドイツ再統一の首都に決定した直後、ベルリンを再訪した。今から二十年前後の歴史的な出来事と私の拙い体験で、話題としてあまりにも陳腐だが、あえてエピソードとして記録に遺したいと考えた。

その後、一月二四日付の『朝日新聞』でベルリン発の記事、「壁の向こう　自由のロック」という見出しで、

英国出身でロックスターのデビッド・ボウイが西ベルリンに滞在中の三年間に作詞・作曲したベルリン三部作のうちの名曲「ヒーローズ」の歌詞の一節、「忘れないよあの壁の横で　銃弾が二人の頭上をかすめていったことそれでもキスしたね　僕らは英雄になれる　一日だけは」を紹介している。

今、改めて英文の歌詞を読むと、「僕たちはヒーローズHeroesになれる」と繰り返し、それは「たった一日だけは」と書かれている。恋人同士が頭上に銃弾の飛ぶ「ベルリンの壁」の横で、熱愛のキスをする一時のアバンチュールを讃美したのであろうか。あるいは一日だけの悲壮なヒロイズムか、刹那の恋への挑発か。出来事のリアリティを優先して考える私には、歌詞は何とも奇妙にしか思えない。

壁際のデビッド・ボウイらのロック・コンサート

今から三十年前の八六年十月から翌年九月まで一年間、私は「壁の町」西ベルリンに滞在した。西ベルリンは「赤い海に浮かぶ白い陸の孤島」と称され、「ベルリンの壁」は東西冷戦を象徴し、社会主義体制の東独にたいして「自由主義のショーウインドー」だった。しかも、西ベルリンは依然として米英仏の共同管理地で駐留軍が常駐していた。知人を介して米軍の駐屯地で肉厚のバーベキュウをご馳走になったことがある。

この「壁の町」で、私は近来まれな「冷凍室のヨーロッパ」と言われた極寒の冬を過ごした。待望の五月になると、一斉に花が咲く（しかもドイツ再統一後、日本のテレビ局がキャンペーンをして、ベルリンの壁の跡地などに二五年にわたり日本の桜の木の植樹に奔走し、ベルリン各地に八千本の桜が根づき、平和のシンボルとして美しい桜の花が満開だそうである）。

八七年春、ベルリンでは東も西も年間を通して都市生誕七百五十年祭が盛大に開催され、メディアは盛んにこの「マラソン・フェスティバル」を報道した。西ベルリンではフェスティバルの一環として、さきに触れたデビット・ボウイの他、オイリュトミックス、ジェネシスの世界的なロックバンドが共演し、八七年六月に三日連続のロック・コンサートが開催された。

このコンサートは「ベルリンの壁」に近い西ベルリンの広大な共和国広場で行われ、六万人のロック・ファンを熱狂させたという。夜間、私は下宿の窓越しにロックの音響とその直後の観衆の歓声を聞いた。もっとも、数多くのラウドスピーカーは観客席だけでなく、「ベルリンの壁」の東側の東ベルリンにも向けて置かれたという。この野外のロック・コンサートの開催以前、西ベルリンの駐留米軍が管理するリアス放送局がこのロック・コンサートの開催を盛んにアナウンスした。当然、放送局の電波は「ベルリンの壁」を越え、東ベルリン市民はこの



共和国広場
(デビット・ボウイらの野外コンサート開場)

放送局のアナウンスを聴くことが出来た。とくに熱烈なロック・ファンは仲間たちで密かに話題にしたであろう。

東ベルリンのロック・ファンの群衆行動

ロック音楽は東独でもアンダーグラウンドではなく、社会主義体制を批判しない限り、若者に熱狂的に歓迎されたポピュラー音楽だった。現に東ベルリン七百五十年祭ではイギリスのソフトロック・グループのバークリー・ジェームス・ハーヴェストが招かれ、東独のロック・バンドと共演し、東独各地から「ベルリンの壁」の東側にある広大なトレプトワー公園に四万五千人のロック・ファンが集まり、東独の国営テレビで放映されたという。

当時の新聞・週刊誌によれば、東ベルリンのロック・ファン約千名は、デビット・ボウイらのロック・コンサートを身近に聞くため、東ベルリンの警官隊がウンター・デン・リンデン大通りに設けた非常線を突破し、「ベルリンの壁」の東側すぐ近くに殺到した。

警官隊は今や彼らを群衆と見なしてロック・ファンを警棒で殴打し、警察犬で追い払い、三十人を逮捕したという（ただし、彼ら群衆とは別に、「ベルリンの壁」の近くでこのコンサートを心から堪能したロック・ファンもいたであろう）。群衆化したロック・ファンは警官隊と対峙して「壁をどけろ（Die Mauer muss weg!）」、「われわれに自由を与えよ」と叫び、期せずして「インターナショナル」（世界的な労働歌）を合唱した。

タブロイド判の大衆紙によれば、群衆は西ベルリンから取材に来たレポーターとカメラマンのマイクやカメラに向って「壁をどけろ！」と叫んだという。さらに西側の報道関係者は東ベルリンの警官によって殴打された上、報道機材を奪われ、取材中のカメラマンの一人は警官の殴打によって頭脳から出血し、腎臓が破裂し、重傷を負ったと、センセーショナルに紙面を飾った。

コンサートの最終日、東ベルリンの群衆は警官隊にたいしてシュプレヒコールで応酬し、今度は「ベルリンの壁」のすぐ近くにあるソ連大使館に向って、「ゴルバチョフ、ゴルバチョフ」と連呼したという。彼らは社会主義の東独国家の崩壊を望んだのではなく、東独の老齢のホーネッカー国家評議会議長の強硬路線と抑圧体制に抗

議し、ゴルバチョフ流にペレストロイカ（社会主義の建て直し）と民主化、さらに「ベルリンの壁」を撤去し、旅行（往来）と言論・思想の自由を要求したのであろう。東ベルリンのロック・ファンの群衆行動は両独政府だけではなく、東西のメディアによって批判と抗議の厳しい応酬が続けられ、ロック・コンサートは政治的な問題を誘発した。

東西ベルリンを舞台にした首脳外交

七百五十年祭は絢爛豪華なフェスティバルと言ってよい。だが、それはその数年後の「ベルリンの壁」の崩壊、東西冷戦の終結、東西ドイツの統一、ドイツ連邦共和国のベルリン「首都」の決定という世界史的な事件のために、歴史の記憶から打ち消され、あまり話題にのぼらなくなった。東独政府は東ベルリンの七百五十年祭を盛大に実施した。そのため、東ベルリン以外の東独の地方都市では市民の不平不満が鬱積したという。のちに知ったことだが、東独の工業と芸術の都市ドレスデンで「旅行の自由」を求めるデモ隊と警官隊が衝突し、さらに東独第二の都市ライプチヒの市民が教会に集まり、「月曜日」デモが実施され、首都東ベルリンにも波及した。

七百五十年祭の五十年前、ベルリン・オリンピックの開催とともに、ベルリン七百年祭も開催された。当時、独裁者のヒトラー総統は偉大な「ドイツ民族」と第三帝国の「国威発揚」を世界的に宣伝するために利用した。今回の七百五十年祭はその反省に立ち、東と西に分かれたベルリンが相互に競い合って開催し、そのテーマは欧州のロンドン、パリと並ぶ都市ベルリンの激動する歴史と反ナチズムだったように思う。

ベルリン七百五十年祭では各国の首脳が招待され、それは東西ベルリンを舞台にした首脳外交だった。東ベルリンには社会主義国家のソ連共産党のゴルバチョフ書記長、同じく中国共産党の趙紫陽総書記が訪れたのは当然だが、何故か、中曽根康弘首相が東独のテレビで放映されたのには驚いた（イタリアのベネチア・サミット［第十三回主要先進国会議］のあと、東ベルリンに立ち寄ったのであろう）。

西ベルリンにはフランスのミッテラン大統領、アメリカのレーガン大統領が訪れ、ブランデンブルク門をバックに演説した（後述）。顔見せのために、イギリスの女王エリザベス二世はヴィルヘルム皇帝記念教会の脇のクーダム大通りで専用車から降りた。私は優雅にピンクのコートを装い、少し猫背で歩く高貴な容姿を観衆の一人として見物した。沿道の観衆は歓呼と拍手で歓迎し、静かにGod Save the Queen（神よ女王を守らせ給え）という国歌も聞こえた。

ゴルバチョフとホーネッカー

ゴルバチョフがソ連共産党書記長に就任し、のちにペレストロイカとグラスノスチ（情報公開）による民主化と一方的な軍縮を提唱した。八六年四月、ウクライナ共和国のチェルノブイリ原発が史上最悪の爆発事故を起こした。チェルノブイリ原発事故の後、ゴルバチョフは東独を最初に訪問し、東独市民に熱狂的な歓迎を受け、「ゴルバチョフ旋風」を巻き起こしたが、その一方でゴルバチョフは「ベルリンの壁」を監視する東独の国境警備兵にたいして社会主義諸国を守護する「真のヒロイズム」を称賛した。しかも北大西洋条約機構ＮＡＴＯに対抗するソ連東欧圏のワルシャワ条約機構（相互防衛機構）における軍事上の緊密な共同行動の重要性を強調した。

八十年代後半、ゴルバチョフは明確に改革路線に転じたが、東独のホーネッカー国家評議会議長は依然として一党独裁体制のもとで強硬路線を堅持しようとした。のちに、両者の会談でゴルバチョフは「一歩遅れた者は、その責を一生背負うだろう」と語り、老いたホーネッカーの時代遅れの政治姿勢を牽制した。「東欧社会主義のモデル国家」と自負していたホーネッカーは東独国家の政治的・経済的な危機と国民の政治不信任を何ら認識していなかった。

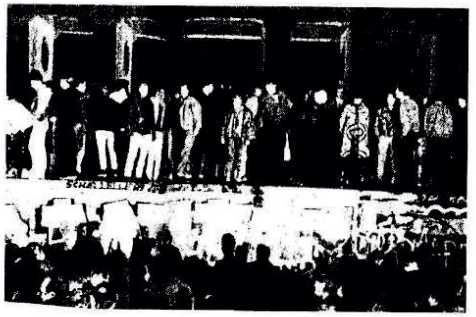
八七年五月一日、私は東独のメーデーを見物するため東ベルリンの検問所を通り、ホーネッカーが立つ仮設の演台の近くで見物した。恐らく私の周囲にはドイツ統一後、盛んにメディアでその存在が問題視されたシュタージ（国家秘密警察）が目を光らせていたであろう。私は迂闊にもそれらしき人物にはまったく気付かなかった。ホーネッカーは演台から盛んに愛嬌をふりまき、整然と行進するデモ参加者もホーネッカーの前で盛んに気勢を上げた。子ども連れの親子が解散地点の先のアレキサンダー広場の中央百貨店に消えたのが印象的だった。

社会主義下の東ベルリンの観察と体験

すでに触れたように、ホーネッカーはゴルバチョフの社会主義経済の再建と軍縮の世界的な政策転換と新思考外交をまったく理解していなかった。だが、私は、ホーネッカー国家評議会議長が東独建国四十周年記念式典を主催したあと、解任され、辞任したことに驚いた。西ベルリンから帰国後、私はドイツ社会学の研究に没頭し、ソ連・東欧諸国の急激な地殻変動にあまり関心を持っていなかった。八九年十一月九日の翌朝、夜なべ仕事をして、朝寝をしていた私は妻からテレビで「ベルリンの壁」が映っているよと起こされて、眠気まなこでテレビを見た。

夜間、何と、数多くの東ベルリン市民が東ベルリンの検問所のゲートを自由に通過しているではないか。西ベルリン市民は「検問所のゲートの開放」というラジオ放送を聞き（のちに、このラジオ放送についてベルリンの

友人から聞いた)、「ベルリンの壁」の西側に殺到し、東ベルリン市民を笑顔と拍手で大歓迎しているではないか。また、西ベルリンの若者はブランデンブルク門前のコンクリートの壁によじ登り、立っているではないか。まさにわが目を疑った。



ブランデンブルグ門前の「ベルリンの壁」(1989年12月)

私はこの歴史的事件を予想さえもしなかった。日本では考えれないことだが、東ベルリンでSバーン(日本のJR)に乗ると、入口のドアは閉まらずに走行していた。また、Sバーンの車窓から眺めると、走行不能の廃車が遠くの廃線に放置されていた。財政不足で鉄道、しかも道路などのインフラに手が回らないのだろうと推測された。

当時、通貨は西独では「Dマルク」(ドイツ・マルク)といい、東独の通貨を「東マルク」というように、日常生活では東独と西独の通貨はそれぞれ十分に通用していた。ただ、東独対西独の公式の為替レートは1対1で、東ベルリンの検問所から東独に入国するには、一日当たりDマルク25にたいして東マルク25を強制的に換金させられた。実際の交換レート、つまり西ベルリンの私設の両替所ではほぼ7対1だった。東独と西独の経済的格差はあまりにも歴然としていた。東独は外貨不足か、対外債務が問題なのであろう。東独ではDマルクが貴重だったのであろう。私が東ベルリンの人の疎らな大通りを歩いていたら、通りすがりに「チェンジ・マネー」と声を掛けられた。私は「ナイン」と答え、まつたく相手にしなかった。

私は西ベルリンの私設の両替所で東マルクに両替し、数日後に東ベルリンに見物に出掛けた。「アレックス」と称された東独随一の広大なアレキサンダー広場でしばし休憩し、雑踏する東独市民を観察したあと、その一隅の屋台で土産用に天然香水のブルガリア・ローズを十個ほど衝動買いしたことがある。ときに東ベルリンに絵葉書を持ち込み、郵便局で必要数の切手を買い、それを貼って日本に郵送したこともある。西ベルリンで郵送するよりも日数がかかったが、郵送料ははるかに安かった。

東ベルリンの検問所で認められた一日ビザは東ベルリン市内でしか通用出来ないことになっている。違法だが、私は「ベルリンの壁」の南側に沿って走る電車に乗り、東ベルリン市外の南西のポツダムに行った。プロイセン・ロココ様式のサンスーシ宮殿を見学し、高台のテラスで見物していたら、見物人から「あれがアインシュタイン塔だ」と教えて貰った。アインシュタイン塔というのは相対性理論を検証するために天文台に建設された塔望遠鏡をいうようだ。

その後、私はソ連のスターリンが主導して、第二次世界大戦後の事後処理について協定を結んだポツダム会談の会議場も見学した。このツェツィーリエンホーフ宮殿は会議場のほかは、高級ホテルで宿泊することが出来る。この宮殿は周囲に鬱蒼とした森林があって、林道を歩いていると、通行禁止の警告板を見かけた。周囲に警備兵を見かけなかったので、構わずハーフェル川の川岸に出た。

ハーフェル川の真ん中にロープが張られ、ブイが浮かんでいた。それは東独と西ベルリンの国境であろう。それも西ベルリンを囲む「ベルリンの壁」の一部だろう。ここでも西ベルリンは「壁の町」だと実感した。手前の東独のポツダム側は清んだ水流だったが、西ベルリン側の水流はいささか濁っていた。ここから泳いで行けば、西ベルリンに安全に越境出来るのではないかと、ふと妄想した。だが、この境界には機雷が設置されているのではないと想像した。ここでも、冷戦下の東西ドイツの非情な現実を垣間見た。「ベルリンの壁」がなければ、子供にとって格好な水遊び場だったのであろう。

西ベルリンで聞いた話では、東ベルリンでは楽譜が安く売られている。そこで日本人音楽留学生が楽譜を買おうとして、まず最初に検問所近くの両替所で東マルク紙幣と両替し、電車に乗車中にその紙幣を靴下の中に隠した。東ベルリンの検問所でパスポートを見せて入国しようとした。ところが、別室の入国管理室に行くように指示された。東マルクを所持して不法入国したとして、パスポートを取り上げられた上、罰金を課せられ、西ベルリンに追い返されたとのことである。それが発覚したのは、恐らく西ベルリンに東独のシュタージが潜入していたのであろう。すでにシュタージの通告で東マルクを所持する不法入国者としてマークされ、検問所でトラブルとなったのであろう。私はすでにその話を聞いていたので、検問所ではかなり慎重に行動した。

レーガン大統領の西ベルリン来訪デモ

八六年十月、アイルランドの首都レイキャビークでレーガン大統領はゴルバチョフ書記長と会談し、中距離ミサイル核兵器(INF)などの削減交渉がほぼ合意に近づいたが、レーガン大統領(退役空軍大尉で元二流俳優)

が提唱した「スターウォーズ計画」（アメリカの戦略防衛構想・ＳＤＩ、ＳＦ映画「スターウォーズ」〈未来の宇宙戦争〉に由来、第一作はアメリカで史上最高の興業記録を樹立）をめぐって決裂した。

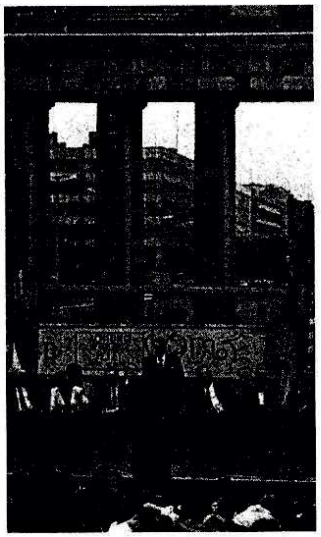
欧州各国は、緊張緩和外交と国際的な核軍縮という「新思考外交」を志向するゴルバチョフ書記長に期待し、アメリカ共和党タカ派のレーガン大統領を対ソ強硬外交の推進者と見なした。レーガン大統領は欧州に配備されたＩＮＦ（中距離核戦力）の撤去と東西冷戦の緊張緩和の一大ブレーキであり、映画でベトナム戦争でアメリカ人好みの元戦士の主役を演じた「ランボー」と見なされた。欧州では「ランボー」レーガン大統領である。

八七年六月、イタリアのベネチア・サミット（主要先進国首脳会議）のあと、レーガン大統領は七百五十年祭の西ベルリンに立ち寄った。西ベルリン市民がレーガン大統領の来訪を迎えたのは大規模な抗議デモだった。ドイツ社会民主党、ベルリン自由大学学生自治会をはじめ、「緑の党」の姉妹組織、平和団体、婦人団体など一五〇の団体がレーガン来訪反対デモを共催し、デモ参加者は約十万人に達し（警察の発表は約二万人）、デモ終了地点で平穏裡に解散した。

私は大通りの歩道でこのデモ行進を見物した。なかには、若者がうろうろと自転車をこぎ、ベトナム戦争の退役戦士「ランボー」もどきにグリーンのベレー帽を横ちょに被り、顔にレーガン大統領を描いた仮面をつけた奇抜なデモ参加者もいた。私はこれも伝統的なベルリン・ルフト（ベルリンの空気）というユーモアかと妙に感心した。

配布されたビラによれば、「東・西における軍縮の実施」、「即時・包括的核実験停止協定の締結」、「ヨーロッパのあらゆる中距離ロケットの即時撤去」、「世界的規模の非軍事化」である。レーガン大統領の世界政策、とくにヨーロッパに配備された中距離核ミサイル（ＩＮＦ、中距離核戦力）に抗議した（のちに八七年十二月、レーガン大統領とゴルバチョフ書記長は中距離核戦力を全廃するための条約に調印した）。

レーガン大統領のベルリン演説の当日、西ベルリンで来訪反対デモ以上の大規模な抗議集会が予定されていたが、西ベルリン行政裁判所は治安の混乱と不穏な事態の発生を懸念して、集会禁止を命じた。主催者側はそれに従って集会の中止を呼びかけた。だが、集会中止を不満とする約二百名のデモ隊は都心の路上に坐り込み、機動隊は彼らを包囲して強制的に排除した（テレビでは当日の集会中止とともに、レーガン大統領の抗議デモは合法的に実施するように丁寧に放映した。日本では視聴者から料金を徴収する公共放送ＮＨＫだが、テレビ放送の地方番組でさえもまったくあり得ない放映だろうと思った）。



レーガン大統領のベルリン演説
(1987年6月、中央)

それとは別の動きとして、西ベルリンの空き家を不当占拠して男女共同で共同生活をおくるごく少人数のアナーキスト系のグループがいる。彼らと連絡して、欧州各地からアナーキスト系のグループが西ベルリンの外国人出稼ぎ労働者や低所得者・浮浪者などが集住する不良住宅地のクロイツベルクＳＯ36（ＳＯはベルリンの中心から南東、36は郵便番号）の空き家に集結した。過激なアナーキスト系のグループがこのヨーロッパに今なお存続していることは、私には意想外のことだった（西ベルリンの善良な市民は「ベルリンの壁」に隣接し、「リトル・トルコ」と呼ばれるこのクロイツベルクＳＯ36にはほとんど近寄らない）。

私は、恐らくクロイツベルクから出発し、西ベルリンの大通りクーダムをデモ行進するアナーキスト系の男女一隊を歩道から見物した。彼らは機動隊に挟まれ、黒い覆面頭巾、黒い革ジャン、ジーパンを身につけ、ポケットには小石を入れ、デモ行進する異様な一隊である。ときに彼らは路上からデパートや商店のショーウインドーに向けて弓なりに投石した。投石は歩道の見物人や別の機動隊の頭上を飛び越え、ショーウインドーのガラスをガシャガシャと割った。彼らデモ隊の横断幕には「この国家と国際的人民殺戮センターＵＳＡに火と炎を」、「われわれは国家に何も要求しない。我々は国家を破壊するだけだ」と書かれていた。機動隊は彼ら約三百人を逮捕したという。

レーガン大統領の西ベルリン演説とその後

八七年六月の西ベルリンの過激派のデモ騒動の夕刻、私は下宿のテレビでレーガン大統領が東ベルリンのブランデンブルク門をバックに、防弾ガラスに囲まれた特設ステージで演説するのを見た。言うまでもなく、ブランデンブルク門は東西冷戦と分割都市ベルリンのシンボルである。レーガン大統領は「ベルリンはすべてのヨーロッパに開放されている」。ゴルバチョフ書記長を名指して「あなたがもし平和を求めるなら、もしソ連と東欧に幸福を望むなら、もし自由化を欲するのなら、あなたはこの門に来たまえ。あなたはこの門を開放し、この壁を取り壊せ！」と演説した。

戦後、東西ドイツの分裂から六一年八月まで、ドイツ

市民二百五十万人が東ベルリンから西ベルリンに自由に出入りし、そこから自らの意思で西独各地に向かった。もっとも、東ベルリンには自由に出入りするリクルーターがいて、とくに熟練・専門的技能者をスカウトして、労働力不足の西独の職場に彼らを送り、「奇跡の経済復興」に貢献した。それにたいして、計画経済の東独はプラン通りの計画的な経営と生産・流通・分配（消費）に支障を来たした。そこで、東独政府は「ファシズムから社会主義を守護する壁」と称して、用意周到に準備した上、東独の警察隊・軍隊・作業員を総動員して、鉄条網とブロックで市民の自由な往来を厳禁する「ベルリンの壁」を構築した。

それ以後、東独政府は「ベルリンの壁」の近代化と称して鉄条網から頑丈なコンクリート製のブロック塀で補強したが、「ベルリンの壁」を構築してから二十七年三か月後の八九年一一月に事実上崩壊した。その前後、壁の崩壊が歴史的契機となって、ソ連・東欧諸国の社会主義体制の崩壊を加速させ、東西冷戦は終結した。

九〇年九月、二プラス四（ツー・プラス・フォー）、すなわち両独の二か国と米・英・仏・ソの戦勝四か国がドイツ統一をめぐる諸問題について、「ドイツ問題の最終解決に関する条約」を締結し、国際的に枠組みが画定した。同年十月、アメリカ大統領を辞めたレーガンは欧州歴訪の途次、ベルリンに立ち寄り、八七年六月の西ベルリン演説でゴルバチョフに「ベルリンの壁」の開放を要求したが、このように「壁がなくなるとは思わなかった」と率直に述懐した。

「壁の町」西ベルリンの散策体験

八六年秋から一年間、西ベルリンに滞在した私は西ベルリンの都心だけではなく、周辺も良く散策した。ときに「ベルリンの壁」の越境に失敗し、銃殺された犠牲者の十字架の墓標を見た。そのなかには、死亡年月日が明記されていたが、「氏名不詳」（ウンベカント）という墓標もあった。帰国後、私はヴィム・ヴェンダース監督作品の映画『天使の歌』（一九八八年）でサーカス団の舞姫のマリオンが「ベルリンはどこへ行って壁の町」と語っていたが、「壁の町」西ベルリンを改めて痛感した。

夜、下宿に帰ろうとしたが、途中で乗り換えたバスは下宿の近くのバス・ストップになかなか停車しない。そのうちバスは終点に着いた。バスから降りて、周囲を見回すと、数棟の集合住宅があった。終点は例のコンクリート製の壁に隣接し、ジープに乗った二人の監視兵が壁の東側をうかがっていた。私は彼らに早く都心に戻る方法を質問した。監視兵は静かに素っ気なく「バスが来たら、それに乗れ」という返事だった。手でコンクリートのざらざらの壁に触ってみたり、街灯は暗く、静まり返った終点で不気味な思いでバスの到来を待った。

その時、私はまさにこのバスの終点で東西冷戦下の

「現代史」に立ち会ったと痛感するとともに、内心で「こんな壁はどけろ」と叫び、多少アナーキスティックな心情になった。当然、そんなことを考えたところで、「ベルリンの壁」はびくともしない。所詮、「鱓の鬼軋り」に過ぎない。レーガン大統領は「強いアメリカ」を宣言し、ソ連のゴルバチョフ書記長に向って「壁を開放しろ」と要求したが、それでただちに実現したのでもない。

再統一ドイツの首都ベルリン

八九年十一月、東独政府は突然「ベルリンの壁」の通行自由化を発表し、壁は事実上崩壊した。その後、東独国家は西独国家（ドイツ連邦共和国）に吸収合併され、再統一した。当然のスケジュールとして、ドイツの中央政府の所在地を何処にするか、ボンかベルリンかという激しい首都論争がドイツ連邦議会を中心に起こった。旧西独は暫定的に連邦政府と連邦議会の所在地をライン川河畔でベートーベンの生地として知られる地方都市ボンに決めた（人口三十万）。

九一年六月、ドイツ連邦議会は党議拘束をはずし、議員一人一人が自らの意見を発言するマラソン討議の結果、十七票の小差で連邦議会、首相府、大統領府の所在地をベルリンに決定した（大統領府は西ベルリンに置かれていた）。ベルリンは四十六年ぶりに首都として再スタートした（もっとも、東独では東ベルリンが実質的に首都であったが）。首都はドイツ語ではHauptstadt（主たる都市）といい、「主都」と解することも出来る。政治首都がその国の最大の都市（「主都」）と異なる事例は、アメリカ合衆国のワシントンD・Cとニューヨーク、スイスのベルンとチューリヒ、ブラジルのブラジリアとリオデジャネイロが有名である。

そこで、再統一ドイツでボンを依然として政治首都とし、ベルリンを経済と文化の「主都」とすることは国際的にあり得ないことではない。ドイツ連邦議会が「主都」ベルリンを「政治首都」と決定した。もっとも、連邦制のドイツでは十六の連邦州からなり、各州には州政府があって、教育・財政・法律などについて大幅な自治権が認められている点で、実質的に中央集権的な行財政構造の日本とは決定的に異なる。

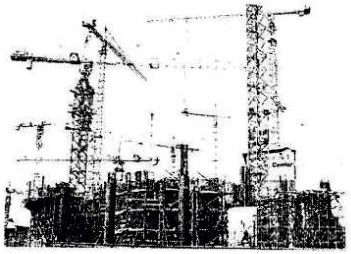
ドイツが再統一したで、欧州の西部（西欧）と東部（東欧）の中心部（中欧）の大国になり、これまで以上にEUの指導的国家となろう。ベルリンはEUでも地政的に重要な都市となるであろう。東西冷戦下の西欧ではロンドン、パリ、ローマを結び、北西から南東へと枢軸を形成したのにたいして、冷戦後の欧州ではパリ、ベルリン、ワルシャワを結ぶ西から東へと枢軸を形成するであろう（しかも北欧のオスロ、コペンハーゲン、中欧のベルリン、ウィーン、さらに南欧のローマを結び、ベルリンを中心に北欧、中欧、南欧の枢軸を形成されるかも

知れない）。

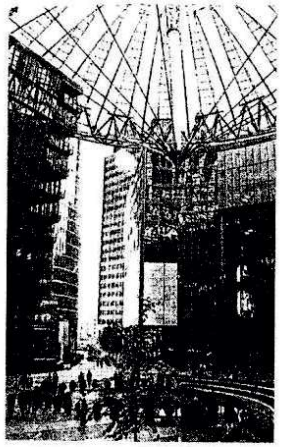
すでに触れたように、中央官庁の一極集中化の日本とは異なり、連邦制のドイツではフランス国境に近いカールスルーエには憲法裁判所と最高裁判所があり、フランクフルト・アム・マインには連邦銀行、会計検査院など金融関係の政府機関、ボンには連邦参議院が置かれ、多極的に分散している。だが、ドイツの首都となったベルリンは経済と文化の主都としてますます膨張するであろう。



広大な空地のポツダム広場



ポツダム広場の再開発
ソニー・センターの建設



竣工したソニー・センター
（外観は富士山をイメージ）

ベルリン再訪（一九九一年八月）

九一年六月、ベルリンがドイツの首都に復帰を決定したので、私は同年八月の三週間の予定でベルリンを見物した。旧東ベルリン南方の郊外にあるシェーネフェルト空港に降りた。前回の滞在で知遇を得たベルリンのギムナジウム（中等学校）の先生が自家用車で空港に迎えに来てくれた。途中、ここに「ベルリンの壁」があったと教えて貰わなかったら、恐らく気づかずに通り過ぎてしまったであろう。

コンクリートの壁はすでに片づけられ、壁と壁の狭い回廊はアスファルトで舗装されていた。子どもたちは喜々として自転車を乗り回し、その近くで母親たちがしきりに談笑していた。危機と激動を乗り越えて、このような穏やかな平和な生活を享受出来たのだと、ひどく得心した。先生の自宅で夕日を浴びながら、ガーデンで奥さんの手作りのドイツ風の家庭料理を味わい、四年ぶりに来し方行く末を懇談した。

その翌日、早速ベルリンの観光客が訪れる「ベルリンの壁」、ブランデンブルク門、ポツダム広場を見物した。ところが、「ベルリンの壁」はすべて撤去されていた。

ブランデンブルク門の周辺には、壁を小さく砕いたコンクリートの破片、旧東独兵士の勲章や帽子が屋台に並べられていた。売り手はトルコ人が目立ち、これらは観光客のみやげ物として販売されていた。小さなガラスのケースに色の付いたコンクリートの小さな破片が良く売れるようだ。

観光客は東西ベルリンの分断を象徴したブランデンブルク門を徒歩で自由に往来することが出来たが、自動車やバスは排気ガスでブランデンブルク門の劣悪化を危惧して通行は禁止されていた。そのため、バスと自動車は渋滞し、迂回するために時間がかかった。後日、ブランデンブルク門（建設）二百年祭が開催されたので見学した。祭典ではオーケストラが演奏したあと、夜空に盛大に花火が打ち上げられたことが今でも記憶に残っている。

私は「ベルリンの壁」があった当時、壁の西側に設けられた粗末なお立ち台からポツダム広場を見物したことがある。欧州の最大の繁華街といわれたポツダム広場は戦争末期のベルリン大空襲で灰燼に帰した。廃墟のポツダム広場は壁と壁に囲まれ回廊を除き、雑草も疎らな広大で荒涼とした無人地帯だった。その北東にヒトラーが敗戦直前に愛人とともに自殺した総統防空壕跡があるはずだとお立ち台から目で探したが、ここだと確認することは出来なかった。何故か分からないが、私は芭蕉の平泉の一句「夏草や兵（つはもの）どもが夢の跡（あと）」をしきりに思い出した。

ところが、ドイツ再統一後、このポツダム広場は都市再開発のために広大な工事現場に一変し、クレーンが林立し、ブルドーザーが稼働し、地下水を汲み上げ、それを処理するために縦横に太いホースが張り巡らされ、水溜りが散見された。その後、ダイムラーベンツやソニーセンターなどの新高層ビルが完成したそうである。しかもドイツの首都として国会議事堂も再建され、新首相府も完成したそうである。

ベルリンから列車に乗り、ドイツ東部のフランクフルト・アン・デア・オーデルを見物した。川岸のフェンスにもたれて、オーデル川を眺めていると、職業学校の先生に話しかけられた。川岸にある、朽ちかけた建物は東独の政治犯が収容された刑務所だったとのこと。ドイツの住民がオーデル川に架かる橋を渡り、対岸のポーランドへフリーパスで家族ずれで行くのを見て、私も見物しようとした。ところが、ビザを持たない私はポーランド側の審査官から入国を拒否された。

私はかねてから国境紛争のオーデル川と川岸の主要都市を見物したかった。第二次大戦後、ドイツとポーランドの国境線をオーデル川とその支流ナイセ川の境（オーデル・ナイセ線）とするかどうかで長らく東西が対立した（ドイツ再統一後に国境線として確認された）。結局、

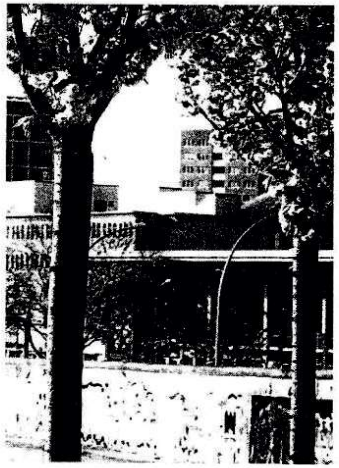
戦勝国の旧ソ連はポーランド東部を領有し、その代わりにポーランドは旧ドイツ領を領有した。そのため、ポーランドの領土は全体的に西に移動したことになる。

追記

一年間、「壁の町」ベルリンで過ごした。それから、今や三十年が経過した。三十年前の記憶はまったく薄らぎ、ロック歌手のデビッド・ボウイ逝去の新聞記事を読み、この機会に過去の記憶を蘇えらせ、私が滞在したベルリンについて体験をまじえて記録することにした。「ベルリンの壁」の崩壊、ドイツ再統一、ベルリンの首都決定など歴史的に激変した。

一九二九年四月から二年間、新明正道博士はドイツの首都ベルリンに留学し、克明に大学ノートに日記をつけた。晩年、日記を浄書し、その一部を公表した。その後、ご長女の家永美夜子夫人が遺志を継ぎ、日記の大部分を浄書し、『ドイツ留学日記―一九二九年―三一年』（時潮社）と題して出版された。新明先生は留学中の一年間、十二編の政治・思想評論を月刊誌『経済往来』に寄稿した。帰国して三編を加筆して『欧洲の危機』（日本評論社）と題して出版された。

『ドイツ留学日記』はドイツ・ワイマールの崩壊期、同時にヒトラー・ナチスの台頭期に洋行した貴重な記録であり、『欧洲の危機』の舞台裏が率直に記録されている。『ドイツ留学日記』の編集にあたり、時代は半世紀以上も異なるが、私の一年間のベルリン滞在、冷戦下の東西ベルリンの散策は大いに本書の解読の参考になり、不遜にも『欧洲の危機』と合わせて同書に「解説」を掲載した。そのことが契機となり、私の細やかな研究として現代ドイツ社会学研究に加え、政治・思想評論を中心に新明社会学研究に没頭するようになった。



記念に残された「ベルリンの壁」の近くに植樹された日本の桜
（『家庭画報』2016年4月号）

千家尊福伝（一二）

政治信念を貫いた静岡県知事

村上邦治

はじめに

明治三〇年（一八九七）四月八日の東京朝日新聞は、「松方内閣人材登用の大英断　地方官大更迭発表」の大見出しをつけ、昨日約六割（当時一道三府四三県）にあたる、二六名の新県知事任命を報じた。この内、前知事は一一名、台湾総督府、警視、陸軍、書記官等からの昇進五名、非職中の元知事一名、残る九名は新任で、ほとんど進歩党（旧立憲改進党）員であった。

進歩党の協力を得て成立した第二次松方内閣は、党首大隈重信を外相に起用した。松方を中心とする薩摩閥と、進歩党を背景とする大隈外相の連立内閣であったため、「松隈内閣」と称された。

明治一四年（一八八一）北海道開拓使官有物払下げ事件を端緒とした政変により、野に下った大隈（肥前　参議）は、次年に立憲改進党を結成し、イギリス流議院内閣制（二院制、君臣同治）を標榜して、各地に支部を設け、国会開設を睨んで党勢拡大を急いだ。集会条例や新聞紙条例、讒謗律（ざんぼうりつ）など、政府の自由民権運動弾圧に苦しみながらも、知識層や実業家など全国に支持を拡大していった。

明治二二年（一八八九）憲法が発布され、議会開設されたのちも、第二回衆議院議員総選挙で起きた死傷者四〇〇名を超える、政府による過酷な選挙干渉にも耐えて、板垣が率いる自由党とともに、長州・薩摩による藩閥政府に、厳しく対抗してきた。野党に終始してきたが、結党して苦節一五年、伊藤内閣総辞職を受けて、大命が降下した松方正義から、破格ともいえる提携条件を受け、

協力することになったのである。その見返りは、党首大隈が外務大臣として入閣し、局長・知事など一〇人（伊藤内閣での自由党の約三倍）の就官者を受け入れさせたのであった。その最大の猟官目標は知事職であった。

すでに三年を超えた千家埼玉県知事は、伊藤博文系とみられており、辞任させ、進歩党員の就任先として、空ける必要があったものの、尊福の余りに見事な埼玉県政の立て直しに、更迭・非職にはさせられず、次の知事職を用意せざるを得なかった。埼玉県の実績から、当然それ以上の先ではならず、当時人口百万人を超え、農業大国でありながら、工業でも著しい発展をしていた静岡県に決められた。

かくして、四一名にのぼる県知事更迭発令の筆頭に、「埼玉県知事従三位勲四等男爵千家尊福、任静岡県知事（叙高等官二等）」が記載された。

明治三〇年四月尊福は、第六代静岡県知事に就任したのである。

一　静岡県の成立

慶応三年（一八六七）大政奉還後、王政復古の大号令により明治維新政府が樹立した。これにより激変したのは、駿河府中（駿府）藩であろう。第一五代前将軍徳川慶喜は、駿府に謹慎した。同時に一六代徳川宗家は、田安家からわずか六歳の田安亀之助が継ぎ、徳川家達と名を改めて、駿府藩主となったが、新政府が与えた禄高は、徳川家四百万石の二割弱、わずか七〇万石にすぎなかった。明治二年版籍奉還時、「府中」は「不忠」に通じることや、全国に府中の地名は律令時代からあり、また公的な名称であることから、静岡藩に改称された。家達は改めて、静岡藩知事に任命された。

明治四年廃藩置県により、静岡藩の駿河部分が静岡県に、遠江部分と堀江県（旧堀江陣屋後堀江藩）が浜松県となり、伊豆は、韮山県（旧代官領）として成立していたが、この時足柄県に編入された。明治九年全国的に合県政策が推進され、足柄県が廃止になる時、旧韮山県を、その後浜松県を、各々編入し、ほぼ今日の静岡県が出来上がった。

こうした経緯を経た静岡県の最大の問題は、徳川幕府の幕臣の多くが、東京から静岡に移住してきたことであった。幕臣のなかには、江戸（明治二年より東京に改称）にて、飲食や骨董のたぐいの商人となったが、所謂士族の商法で大半は失敗し、やむなく故主を頼って、駿河に移ってきた者が大勢いた。続々集まる旧幕臣が、生活の不満から反乱に至ることを恐れた政府は、産業資金の下賜や、農業牧畜を志願する者には、官有地半値払下げを行うなど、幕臣士族の帰農帰商を支援した。

農業では、西洋式の作物、種子、農具、家畜等を指導し、当時知識階級であった士族帰農の新興農民が主に従事した。牧羊、牧牛、養豚については、いずれも成功したものはほとんどなかった。その中で唯一成功したといえるのは、山岡鉄太郎らを頭株とする若手五〇〇人の精鋭隊が行った、金谷原の開墾事業であった。開拓地に茶樹を育て、大規模茶園の経営を行った。気候と地質に恵まれ、みかんなどの柑橘栽培と共に当県の主要産業に発展していった。

二　初代県令大迫定清

静岡県は、維新政府が最も気を遣う県であった。中央集権を確立したい明治政府であったが、県内には数千人の幕臣が移り住み、政府や地方行政に対し、批判的姿勢を示していた。

この特殊な情勢に鑑み、政府は最高責任者である県令の人選を、旧幕臣の実権者である勝安房（海舟）に、事前に相談せざるを得なかった。勝は、東山道先鋒総督本営付であったとき、知合ったと思われる元薩摩藩士陸軍中佐大迫定清を推薦した。その理由は、太っ腹で、てらいもなく、虚飾もない、その性格にあった。薩摩は長州とともに、討幕の急先鋒であり、しかもその軍人を、多くの幕臣がすむ静岡県の県令に就任させるという人事については、時の内務卿大久保利通は、これに反対した。しかし勝の是非に、という強い要請により実現したのである。勝は、江戸城総攻めにあたり、西郷を始めとする薩摩の態度に、譜代の幕臣は、感激しまた感謝するものが多い、という事をよく知っていたのである。

明治八年権令として着任、次年県令に昇進し、以後一〇年間その職を務めた。まず、駿遠豆三国を統一し、現静岡県を誕生させた。東海道宿場町として発展した沼津・清水・藤枝・島田らの複雑な権利関係の処理や、経済的困窮により不満の多い旧幕臣らに、志公至誠、大量寛宏の態度であたった。こうした仕事振りから、徳望は自然に集まり、勝の目論み通り、県政に混乱は生ぜず、幕臣らとの諍いも、起きなかった。大迫は、長期にわたる円滑な県政を評価されて、静岡県知事の後は、警視総監に抜擢された。

勝の人物を見る目は、確かであった。しかも、旧幕臣の心情を的確に読み取っていた。大迫の起用で、静岡県の県政は、波乱に陥ることなく、運営することが出来たのである。

三　静岡県を支えた報徳思想

静岡県は、他県と比較して比較的裕福な県といえた。

明治三一年当時、人口一二〇万人、農業（一九百万円）、工業（三百万円）、林業、水産等、生産高は二八百万円を超え、県税は八十万円を超えたのである。

当県の主要産業である農業の特徴は、二宮尊徳の報徳思想が早くから普及し、効率的な生産と改良に、いち早く成果を挙げ、農村復興を図ったことである。尊徳の弟子である掛川藩の庄屋岡田佐平治が、明治八年設立した「遠江国報徳社」（明治四四年大日本報徳社に改称　現公益社団法人）を起源とし、明治九年長男良一郎が二代目の社長に就任するとともに、県下の農村・商業地に多くの報徳社（遠社の支社）を設立し、その思想と実践について波及させた。当県では、この報徳思想を中心に、良一郎の冀北学舎や片平信明の杉山報徳社など、夜学会や青年会の組織化がはかられるなど、多彩な結社が結成された。当県では士族のみならず、下層農民に至るまで、農業改良の実践、知識を高める教育活動、さらに経済のみならず、福祉活動も活発で、先進的な県であった。

一方、幕臣は県下の開墾に従事したものの、ほとんどは失敗したが、牧ノ原、三方原、愛鷹山などでは、茶の生産や、搾乳事業の基礎作りに貢献し、一部は事業化した。

江戸期の最幹線交通路である東海道宿場町の二二宿を抱えていた当県は、商業がことのほか発達し、経済的に潤った地域であった。それは、県内には、第二十五（現静岡銀行）、浜松第二十八、見付第百二十四（現磐田市）等国立銀行や、共同社（現スルガ銀行）、信用組合（掛川）など銀行類似会社が多く設立され、県民から多額の預金を集めたことでも明らかである。これら資金は、主に輸出品である製茶業へ向けられた。

さらに日清戦争後、浜松を中心として、オルガン等の楽器を中心に軽工業が拡大した。元々徳川の城下町であった浜松には、木工や木挽それに鉄砲や刀などの武器を製作していた工人が保護され、技術を有していたのである。少し遅れて、豊田佐吉らによる紡織機の発明や改良が続き、紡績関連産業が発達しつつあった。浜松を中心とする、これら機械金属加工業へも融資されたのである。

農村の報徳活動による勤倹貯蓄、畦畔改良、夜学による学習活動などにより、村民の政治意識は高く、教育については、幕臣による沼津兵学校や静岡学問所の設立を皮切りに、早くから高い教育水準を、誇っていたのである。こうした他県より進んだ農工業の発達と、特殊な県民性の理解が、最高責任者である県知事にも、求められていた。

四　第六代県知事就任

当県の県知事には、内務官僚的な権威を盾に威張り散らし、あるいは細かいことにこだわるような人物ではなく、大迫のような度量寛大型や、第三代関口隆吉（幕臣　山口県令時萩の乱を鎮静）の公平無私で、県民優先する徳治政治型、第四代知事時任為基（薩摩　七県知事歴任）の豪傑型が、高く評価されており、これに適う人物として、前埼玉県知事千家尊福が選任されたものと思われる。前任小松原英太郎（後文部大臣）の長崎県知事転出の後を受けて、明治三〇年五月着任した。

当時の県政は、二三年に公布された「府県制」「郡制」が、ようやく明治二九年九月より開始された。まずこれまでの二三郡を一三郡に統廃合し、「郡制」が発足、そして尊福の発令と同じ四月より、「府県制」が施行されていた。新制度による県議会選挙が四月に実施されたが、富士、駿東、田方、賀茂の各郡は自由党が、富士川以西は進歩党が制した。その結果、第一回郡会市会による間接選挙では、進歩党の大勝利となり、五月臨時県会が開催された。

千家知事は、この県会が始まる直前に赴任した。すでに日本三宮司の隋一である出雲大社元宮司で、はじめ宗教家として活動していたが、伊藤博文の知遇を得て、官界に入ったことは知り渡っており、着任早々、「茫漠温容見るからに棟梁の器を想わせる」として、県民は千家新知事の来県を歓迎した。

当時の県会は、改進党（後の進歩党）が自由党を圧倒していたが、議会では党派的な抗争は少なく、少数派の建議でも、正当と認めれば、多数派も賛成するなど、議会は正常であった。同一党派においては、河川の修復など出身地の利害によっては、対立することもあったが、他県と違い、党派を超えて県議会が、円満に運営できたのは、版籍奉還以来、特別な配慮をして選んだ、これまでの県知事に、人を得た結果であった。尊福の人柄・性格・人望は、当県知事に相応しいものであった。実務の細かい事は、書記官と警部長に任せることが多く、二度目の知事職として、出番を心得た憲治ぶりは、県議会及び、郡・町村長らにも好感をされ、信頼を増したのである。

五　治績

先ず、株式会社静岡農工銀行の設立が挙げられる。日清戦争後、政府は殖産興業政策を推進するために、明治二九年日本勧業銀行法を制定した。これを各地に行き渡らせるために、その支店機能を持つ農工銀行を、各県に設立することにしたのである。当県では、明治三〇年秋政府からの交付金を受けて、県が三分の一の株主となり設立した。この株式は知事の管理に属していたため、役員の選任や定款の改正などは、千家知事の意向が左右した。

役員の人選には、進歩党、自由党、吏党から、議会の勢力に応じて選任し、業務体制を整備し、長期資金の融資を、いち早く実施できるように努力したのである。

静岡農工銀行は、地場主要産業の製茶・製糸業や、浜松の楽器製造業、綿織機の機械製造業、富士川周辺における洋式製紙業（富士製紙、王子製紙、四日市製紙）など、県内の工業発展に寄与したのである。

文部省普通学務局長を経験している尊福にとって、教育の充実には、特に注力した。当時教育に力を入れていた当県には、静岡、浜松、韮山に三中学校が置かれていた。この三校に加え、掛川、沼津を加えた五校、さらに榛原、豆陽を加えた七校を主張する議員らがおり、県会ではなかなかまとまらなかった。当時の段階では、まず現行三中学校制の拡充が重要とみた尊福は、三中学に絞り、設備の整備と内容の充実を行った。具体的には、組合立の浜松尋常中学校と、田方郡立韮山尋常中学校を、思い切って県立に移行したのである。県立尋常中学校は静岡尋常中学校に改称した。これにより三中学校県立制が出来上がり、混乱していた中等教育機関の強化が、進められたのである。その他静岡市には、市立静岡商業学校の開校にも援助したほか、公立舞阪水産補習校、賀茂の南上実業補習学校、田子実業学校等の開校にも、知事自ら努力した。

当県は、天竜、大井、富士、安倍、狩野など大川のもたらす豊富な水は、稲作のみならず、みかんなど柑橘類、制茶、養蚕業に多大の収穫をもたらしたが、大雨による洪水の発生が、毎年のように繰り返しおきた。そのため、当県ではこれら河川の改修土木工事は、長年継続して行われていた。

海に面しているところでは、台風による高波や地震による津波のみならず、太平洋からの大波による浸食が激しい箇所が多くあった。これを防ぐための潮除工事を急ぐ必要があり、尊福は焼津の潮除工事を重視した。大掛かりな増強工事を決断し、毎年継続して行うことにした。結局焼津潮除工事の完成は、更に一〇年を超える大工事となったのである。

製茶業の発展にも尽力している。これまで製茶の先進県は、尊福の前任埼玉県川越（河越茶現狭山茶）であった。当時の手揉製茶法では、均質の量産は難しかった。埼玉県高麗郡出身の医師高林謙三が、全財産をつぎ込み、さらに県からの融資と川越商人の援助をうけて、試行錯誤のうえ、明治三〇年、蒸しから乾燥までの全工程を、機械で一貫して行う、高林式製茶機を発明して、特許を取得した。高林は民間発明家として、初めての特許取得者であった。この製茶機は、日本の産業に貢献した最初の発明とされ、製茶業の形態を一変させるものとなった。

従来の四倍というこの高性能製茶機を、三一年に、いち早く小笠茶業組合（現菊川市）が導入することになり、殖産に力を入れた埼玉県の製茶業をよく知る尊福は、この採用に尽力した。埼玉県では高い評価が得られなかったこの製茶機は、機械製造についても、菊川で行うことになり、当県の製茶業の発展と輸出の増大に、大きく貢献することになった。両県の製茶業を詳しく知る尊福のみに、この架け橋の役目は出来たのである。

六　箱根用水破壊事件

箱根用水（深良用水とも呼ばれる）は、箱根山をトンネルで貫き、神奈川県箱根芦ノ湖の湖水を、静岡県裾野狩野川水系黄瀬川支流の深良川（ふからがわ）にそそぐ江戸初期に完成したとされる灌漑用水路である。この用水路に水を確保するため、芦ノ湖湖尻逆川（さかさがわ）に石を積み重ねた人工の堰を設けていた。明治二九年日照りが続き、困窮する農民を助けるため、この堰を神奈川県足柄下郡の三村の村長らが、堰を破壊して、湖水を神奈川県側に通水したのである。この行為に、静岡県駿東郡深良村などの農民は怒り、一千名あまりが集まり、神奈川県に押し寄せ、力づくで、元に戻そうとしたことから、双方が衝突し、大騒動に発展した。

もともと、水源の芦ノ湖は神奈川県にあるが、この水利権は静岡県にある、という矛盾により、江戸期以来水利権をめぐり、紛争が絶えなかったのである。県知事同志による話し合いはつかず、ついに訴訟となった。横浜地裁での一審は、神奈川県の勝訴、続く控訴も棄却された。それでも納得のいかない静岡県側は、大審院へ上告するに及び、三〇年七月、大審院は第二審を破棄し、再審の決定を下した。

四か月後の三〇年一〇月、静岡県側の勝訴判決を下し、破壊した三被告を有罪判決としたのである。三一年一月再度神奈川県の上告は棄却され、水利権は静岡県にあることが確定したのである。しかし司法による審判で、長く続いてきた水利権の紛争決着は難しい、と判断した千家知事は、両県の農民による和解を薦めた。同じ貴族院議員富田鉄之助（元日本銀行総裁、東京水力発電取締役）を介して、神奈川県に芦ノ湖一割分水という和解案により、両県の農民を納得させた。会派は違うものの、貴族院議員同士で、和解案での解決に動いたのである。富田は、芦ノ湖を自然ダムとして水力発電所を計画しており、芦ノ湖の通年安定した水量確保するためには、静岡県が主張する、堰止めが必要としたからでもあった。

この和解成立（明治三六年）に対し、静岡県を離れていた尊福は、

「あしの湖の　流れにさわぐ　波たえて　あふれにけりな　民のよろこび」

と詠い、祝ったのであった。この二県に分かれ、長年紛争を繰り返した村民を、和解させることができたのは、貴族院議員である尊福でしか、できない事であった。

箱根用水爆破事件が法廷で争われていたころ、中央政界では、藩閥政府と民党二党の間に、大きな波乱が、生じつつあった。

七　藩閥政権の行き詰まり

明治一八年（一八八五）太政官制を廃止し、伊藤博文を初代総理大臣とする内閣制度に移行し、憲法制定を睨んだ近代的な行政制度が始まった。

新憲法では、二院制による国会開設、衆議院議員選挙が規定され、国家予算は議会の承認を必要とした。当初藩閥内では、自由民権運動の経緯からみて、この憲法導入は、時期尚早として反対者が多かった。しかし西欧諸国の議会制度に追いつき、民主的制度の定着を目指した博文により、導入されたものであった。

無論立案した博文にも、当初は野党として、民権派の自由党（板垣退助）、立憲改進党（大隈重信）が多数を占め、政府予算案に反対することは、予想していた。そのため議院内閣制をとらない君主内閣制（帝室内閣制大命内閣制、元勲内閣制とも呼ばれる）であっても、これら反対派に充分対抗できる手段を織り込んでいた。

一つは、内閣の持つ解散権である。政府の提案に議会が反対する場合には、議員としてもっとも厳しい試練である、解散・選挙をちらつかせることで、反対を抑え込めるとみたのである。

第二は衆議院と貴族院の二院制としたことである。公選で選ばれる衆議院に対し、その対抗勢力として、皇室の藩屏たる華族から選ばれる貴族院の地位を、衆議院と対等とした。衆議院での民党反対による議会混乱を、貴族院の存在により、従来通り政府主導により行えるものと考えた。

最後に、新憲法では、主権は天皇にあり（主権在君）、統治権のすべてを握る総攬者（天皇大権）としたことである。議会は、天皇の立法権を行使するための、協賛機関と位置付けたのである。

しかし国会開設した第一回帝国議会から、この目論見は大きく外れ、時の総理大臣は、予算承認をめぐり、議会運営に苦労の連続を、強いられたのである。解散権を乱発しても、総選挙では、選挙権者（満二五歳以上男子で直接国税一五円以上の納税者　大半は中規模以上の地主・豪農）は、自分たちの利益を代弁してくれる、野党である二党に投票し、常に民党二党の優位は変わらなかった。

衆議院を抑える役目の貴族院も、政府擁護一色ではなかった。政府に批判姿勢を見せたのは、維新政府により、これまでの権力を奪われた、公家達であった。特に五摂家筆頭公爵近衛篤麿は、民党寄りの姿勢を示し、三曜会を結成した。また国粋・農本主義の対場から、欧化政策に反対する谷干城を旗手とする懇談会がつくられ、政府の予算・法律案に批判し続けたのである。

天皇大権を国会運営に度々用いることは、立憲上から許されず、天皇自身も極力国会運営に口を挟まなかった。天皇の信任が篤い博文が、窮地に陥った時に、数度天皇の威光を活用したに過ぎなかった。

第一回議会から藩閥政府の議会運営は、過半を占める民党（自由党・改進党）の攻撃に対し、政党活動に無理解な事も手伝い、紆余曲折を余儀なくされた。黒田清隆や山縣有朋両首相は、一党一派に左右されない超然主義を唱えた。第二回議会では、樺山資紀海相の藩閥擁護の蛮勇演説や、品川内相の選挙干渉という稚拙な手段により、民党だけでなく貴族院からも、厳しい批判を浴び、窮地に陥った。その打開を、解散権の行使で対抗したが、選挙結果は、政府に有利となることは、一度として生じなかった。

この対立の根源は、政府の基本的政策は、東アジアに進出する西欧列強諸国に対峙するため、軍事強化を図るための「地租増微」の増税政策であった。一方民党は選挙権者が要求する「民力休養・歳出削減」という減税政策との相違であった。

八　藩閥政府と政党の協調

藩閥政府と、民党との妥協が見られるのは、日清戦争の勃発からである。明治政府にとって本格的な対外戦争となった、東アジアの大国清国との戦争により、一時的とはいえ挙国一致体制が、ようやく実現し、政府と議会の対立は一旦解消した。戦後からは、政府は野党であり国会の過半を占める民党（自由党、立憲改進党）と、協力関係を模索し始めた。

一方民党も、列強諸国の軍事力を背景にした、遼東半島返還など、我国に対する熾烈な要求を目の当たりにして、選挙権者である地主・豪農など一部富農層が求める、地租減税の主張では、西欧諸国から、朝鮮、台湾を含め日本国を維持することは不可能であり、軍備拡大は避けて通ることはできない、との認識に変わっていった。

第二次伊藤内閣（明治二五年八月～二九年八月）は、「元勲総出」内閣と呼ばれたように、藩閥の有力者（長州　伊藤、山縣、井上馨　薩摩　黒田、大山巌）で、組閣した。しかし、日清戦争後、政府は自由党に接近し、

明治二九年、ついに歳入の二年分にあたる軍拡予算を支持した自由党と提携し、党首板垣退助は、内閣の中核である内務大臣に就任した。しかしこの時の増税案は、清国からの賠償金をあてることができたので、地租増徴に頼らず、営業税（法人税）・酒造税による増税により、辛うじて賄えたのであった。

次の第二次松方内閣（明治二九年八月～三〇年一二月）では、進歩党（前立憲改進党）が、軍拡・産業育成計画を全面的に支持することで、提携が成立した。この内閣では党首大隈重信が外務大臣に就任し、世間では、「松隈内閣」（しょうわい）と揶揄された。進歩党は、歳出総額は日清戦争前の三倍という規模に膨れ上がるものの、松方のデフレ政策を期待し、軍備縮小・財政整理による財源捻出に期待をしての提携であった。伊藤内閣は新設の営業税国税化で乗り切ったが、松方内閣には、商工業者からの軽減要求（資本金課税から利益金課税に変更と税率の軽減）が強く、地租増徴の実施は、もはや避けられなくなった。

松方内閣は、対外緊張による軍備拡大は避けられず、一方、戦後恐慌による商工業者の軽減要求から、地租増徴に頼る以外、手立てはなかったのである。

松方内閣で地租増徴案が検討されると、直ちに進歩党は提携解消に踏み切り、大隈外相は辞任した。結局、日清戦争後の藩閥と政党との提携蜜月内閣は、「地租増徴には手を付けない」という前提の上で、成立したのであった。

こうして再び藩閥政府と政党との、予算をめぐる正面衝突が繰り返されたのである。

九　藩閥政府の落城

進歩党の離反により、松方内閣は総辞職を余儀なくされた。次の首相には、伊藤か山縣の二人が、奉答されたが、天皇は、またもや伊藤博文を指名した。外交面では列強諸国の中国分割が目前状態にあり、内政では、軍備拡大による増税問題の解決が、緊急課題であった。

明治三一年一月、第三次伊藤内閣は発足した。しかし、博文が構想した挙国一致体制とは、ほど遠いものであった。当初、野党である自由党と進歩党双方の協力を得て、強力内閣を目指したのである。そのために、自由党板垣退助を司法大臣に、進歩党大隈重信を農商務大臣に据え、またその他の閣僚は、藩閥を問わず、少壮の人材を大臣に抜擢するものであった。

しかし、日清戦争後、板垣は既に内相、大隈は外相、という内閣中枢の大臣を歴任していた。しかも二人とも、年齢は博文より上で、維新当時には二～三年早く参議になった先輩格であり、両党党員の手前、伊藤の構想を受

けることはできなかった。しかも両党は、その他の大臣をも要求し、さらに党員の就官などを求めるもので、博文の予想を超えていた。

博文は、両党の協力は、議会運営上不可欠との認識を持ちながらも、あまりの過大な要求のため、応じることができず、結局両党を取り込むことはできなかった。しかし次代を担うことになる、西園寺公望（文相）、桂太郎（陸相）らが入閣し、大幅に若返り、新鮮な顔ぶれとなった。

前内閣により、議会が解散され、第五回衆議院議員選挙が三月に行われた。その結果は、自由党九八名、進歩党九四名合計192名（定員三〇〇名）にのぼり、元勲最高実力者の博文をしても、議会運営は当初より、波乱が予想されたのである。しかし数の上では、議会での敗北は決定的であるものの、最大武器の解散権を駆使、万一のときは憲法停止、さらに自由党との協調復活などの手段を考慮していた。

こうした情勢のなか、第一二回特別国会（五月一九日～六月一〇日）が開かれた。過半を制する民党二党による否決が充分予想されるなか、伊藤首相は、三二年度の歳出不足を補うため、ついに、地租増徴案を提出した。まず特別委員会では、地租の税率が過大、地価の公平性が図られていない、三二年度予算の編成が終わっていない等の理由により、多数を占める民党二党により、否決された。

国会期間を一週間延長して、再度本会議に上程し、「増税案を否決することは、国運の進歩を阻むもの」と、解散をもほのめかした必死の説得を行ったものの、六月一〇日の本会議の採決は、賛成二七票反対二四七票の、圧倒的な大差で否決された。政府はまたもや、直ちに衆議院を解散した。博文としては、当初より絶対的不利な増税案を、最後には自由党との提携を、再度復活させることにより、衆議院通過を狙ったものの、結局提携は成立しなかった。山縣が主張した非常手段である憲法一時停止は、立憲制を否定することになり、博文は採用しなかった。結局、解散権という手段を何度でも駆使することにより、増税反対勢力に対抗するほかなかったのである。

伊藤内閣の行き詰りを見ていた自由党と進歩党は、解散直前二党間に、合同機運が一気に盛り上がった。地租増徴問題の実現は切迫しており、松方、伊藤、両内閣は窮地に追い込まれていたことが、明白となった。それが両党を強気に変え、二党連合による政権奪取を、身近なものにさせたのである。

結党以来、これまで相容れなかった自由党と進歩党は、六月二二日大同団結し、新たに「憲政党」を結党、憲政党内閣樹立をめざしたのである。新党は、

「藩閥の余弊尚団結し、為に朝野の和協を破り、国務の延滞を致せり」

と宣言し、慌ただしく憲政の擁護、政党内閣の樹立、歳計の権衡、陸海軍の適度の設備等、九項目の綱領を定めた。

二党結成という急変した情勢から、伊藤首相は予てからの持論である、野に下り、自らの政党を結成し、選挙戦で憲政党に挑む決意を固めた。しかし、山縣らの政党結成後に、「伊藤内閣が成立すると、大臣は政党人からなり、結局政党内閣が成立することになる」として反対、元老誰一人として、結党構想に賛同せず、博文は諦めざるを得なかった。当時山縣ら元老達は、政党政府が出来れば、行政・立法が一体となり、政策の決定や国務大臣の任免が、政党の意向により左右され、君主内閣制、三権分立という憲法の精神を侵し、天皇主権が形骸化することから、「国体」がそこなわれることを、恐れたのである。

しかしここに至っては、博文や大蔵大臣井上馨は、「だれが政権を取っても、財政政策の選択の余地はほとんどなく、むしろ政党に内閣を譲って、やらせてみよう」と思い始めた。そうすることで、逆に地租増徴がいち早く、実現できる、と思ったのである。

憲政党に対抗する一大結党の賛同者はなく、また山縣ら元老誰一人として、首相を受ける者もおらず、ついに伊藤首相は、後継内閣の首班候補として、憲政党大隈重信と板垣退助を推薦して、辞表を出したのである。ここに行政府は憲政党の手に落ち、山縣有朋は、「明治政府の落城」、と嘆いたのであった。

一〇　貴族院の内部事情

議会開設当初、選挙により選出される衆議院に対し、華族や勅任により構成される貴族院は、万が一の時の議会対策のために、政府を支えるという、明確な役割を持つものとされた。

ところが、政党なしとする貴族院は、議会開設当初から、一枚岩ではなかった。反政府姿勢を明確にする摂家筆頭公爵近衛篤麿は、薩長専横を批判して、公家出身者らからなる三曜会を率いた。また国粋・農本主義の立場から、第一次伊藤内閣の農商務大臣をつとめた谷干城（土佐）は、同じ立場を共有する元大名華族や勅選議員（富田鉄之助）による懇話会を形成した。

一方政府を支持する子・男爵の各派（加納子爵の同志会、中山侯爵の有志者会、千家男爵、岡部子爵、正親町伯爵ら各派）は、合同して研究会を結成し、三曜・懇話会に対抗したのである。そして政府擁護派と批判派は、新たな勅選議員や貴族院議員選挙をめぐり、激しく勢力拡大を目指したのである。

日清戦争後、軍備緊縮・地租増徴反対を主張し、政府と対立する三曜・懇話会は、衆議院の民党二党と接近した。政府の施策に同調する研究会は、明治三〇年の伯・子・男三爵議員の総改選選挙で圧勝し、貴族院内で最大勢力となった。第二次伊藤内閣の自由党との提携、第二次松方内閣の改進党との提携を牽制し、衆議院の国民協会や行政を支える官僚層とともに、政党の政府樹立に抵抗したのである。

一一　「隈板」内閣成立と知事辞任

明治三一年（一八九八）六月二七日、天皇から大隈と板垣の二人に組閣の大命が下り、三〇日大隈首相、板垣内相とする憲政史上最初の政党内閣（隈板内閣）が成立した。憲政党結党から、わずか二週間後であった。勝海舟は、「隈板内閣は一種の藩閥内閣である」と皮肉ったが、衆議院で圧倒的な議席を擁している憲政党を土台にする、まさに政党内閣の誕生であった。

天皇の勅命により、桂陸相と西郷海相は留任したが、それ以外の閣僚は全て、憲政党員であった。閣僚の割り振りは、旧進歩党は、大隈首相の外相兼務を含め司法、文部、農商務の五に対し、旧自由党は内務、大蔵、逓信の三、で組閣された。しかしこの配分は、第一党であった自由党派内に、不満を生じさせることになった。

伊藤内閣総辞職と同時に、衆議院が解散され、八月一〇日に衆議院議員総選挙が行われることが決定した。

貴族院研究会派の重鎮の一人として、常に政党の政策と行動をみていた尊福は、政府批判に徹し、目先の利益のみを追求し、選挙基盤である地主や豪農の主張を代弁するのみで、東アジアの列強諸国対策や、日清戦争後のわが国のとるべき方向を示すことのできない二政党に、政治を委ねることはできない、と強く認識していた。貴族院で政党政権阻止の旗振り役の一人であった尊福には、隈板内閣の成立には、大きな失望を感じざるを得なかった。ましてその内閣の一地方官として、県政に携わる事には、もはや我慢が出来なかった。

静岡県民の支持を集め、順調に県政を指揮していた尊福は、着任一年三か月の短期間であったが、憲政党内閣成立と同時に、県知事の辞表を板垣内相に提出した。そして隈板内閣成立わずか二週間後の一六日に、静岡県知事の職を辞任したのであった。

進歩党との協調による松方内閣には、不満をこらえ、静岡県知事の任命を受けたものの、この度は、憲政党内閣の地方官として、県政を担うことは、貴族院議員男爵千家尊福の矜持が許さなかった。

中央政界の政変という理由での辞職は、県知事としてふさわしい理由ではなかったが、尊福は、これまでの政

治信念を貫いたのであった。

おわりに

憲政党内閣成立と同時に、静岡県知事を辞任した尊福の潔さは、藩閥の元老、官僚層、貴族院議員らに称賛された。県知事から一議員に戻ったが、却って政治家として、評価を高めたのである。

後任は、憲政党員加藤平四郎（作州津山藩士　衆議院議員自由党幹事）が抜擢され、着任した。進歩党の強い当県では、この人事に不満を示し、進歩党派選出議員らが、大隈首相に加藤知事の変更を迫った。大隈首相は「彼の長閥すら、かって山口の県治を幕臣関口隆吉に託せしに非ずや」

と諭し、受けつけなかった。中央では統一できたものの、支部段階では、いまだ融和は図る事はできていなかった。そのため、加藤知事は、進歩党派に遠慮し、何事もなしえなかった。自由党派からは無能の烙印をおされ、進歩党派からは、不公平な非難を受け、三カ月で辞任を余儀なくされた。

明治三二年八月の衆議院議員総選挙で憲政党は、定員二〇〇人のうち二六三名の当選者を占め、圧倒的勝利を得た。この選挙結果から、政党内閣である大隈内閣は盤石にみえた。憲政党内閣に反対した尊福の復権は、今後長期間難しく、かなりの年数を要するものと、予想された。

ところが、思わぬ事態により、尊福は静岡県知事辞任後、わずか四か月後に、大舞台に復活するのである。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

明治時代の著述者　渋江保の一生（その六）

山本勉

第五期　第二次修学時代（東京都）

一八七九年（明治十二年）十月～一八八一年（明治十四年）七月

渋江の二度目の東京での修学は一年九ヶ月余りである。二年にも満たない期間であるが、今後の渋江の人生にとって大きな影響を与えた時期でもある。この点について、『境　創刊号』の「渋江保伝（中の二）」の中で稲田雅弘は次のように述べている。「保にとっては二度目の修学時代にあたるこの約一年一〇ヶ月程の期間は、彼のその後の人生を考える上で極めて重要な時期である。」(1)ではなぜ渋江にとって重要な時期であったのか。本稿ではこの点を中心に第二次修学時代について述べてみたい。

森鴎外の『渋江抽斎』のその百に浜松を発ち東京へ向かうことが次のように述べられている。「抽斎歿後の第二十一年は明治十二年である。十月十五日保は学問修行のため職を辞し、二十八日に聴許せられた。これは慶応義塾に入って英語を学ばんがためである。（中略）五百、保の母子は十月三十一日に浜松を発し、十一月二日に松本町の家に着いた。」(2)この記述の東京到着の日時について、稲田雅弘は森鴎外の誤記であると指摘している。実際に鴎外が『渋江抽斎』を執筆するにあたって参考にした『抽斎歿後』で確認してみると、

「同月三十一日を以て浜松を発し十一月三日を以て無事着京し」(3)とある。

上京後の慶應義塾での様子を『渋江抽斎』の記述より見てみたい。『渋江抽斎』のその百一に「保は東京に着いた翌日、十一月四日に慶応義塾に往って、本科第三等に編入せられた。同行者の山田は、保と同じく本科に、中西は別科に入った。後山田は明治十四年に優等を以て卒業して、一時義塾の教員となり、既にして伊東氏を冒

し、衆議院議員に選ばれ今は某銀行、某会社の重役をしている。中西は別科を修めた後に郷に帰った。保は慶応義塾の生徒となってから三日目に、万来舎において福沢諭吉を見た。万来舎は義塾に附属したクラブようのもので、福沢は毎日午後に来て文明論を講じていた。保が名を告げた時、福沢は昔年の事を語り出でてこれを善遇した。当時慶応義塾は年を三期に分ち、一月から四月までを第一期といい、五月から七月までを第二期といい、九月から十二月までを第三期といった。保がこの年第三期に編入せられた第三等はなお第三級といわんがごとくである。月の末には小試験があり、期の終にはまた大試験があった。」(4)とある。同様のことが、山路愛山の『独立評論』に次のように書かれている。「田舎に居た頃には慶應義塾は大層ハイカラな学校であると想像して居ったが、来て見ると大違いで、至って古臭い、質朴な塾舎であった。塾は昔の九鬼式部少輔の下屋敷を其儘用ひたもので、講堂は昔の御殿、入口は昔の中屋敷、そこから長い廊下があって、其の屋敷の所が教場になって居た。すべての構えが一寸見れば学校と思はれぬ位で、生徒も袴を穿く者などはなく、古ぼけたどんぐつ布子に古ぼけた帯を締めて、羽織さへも着てをらぬ。まるで商家の丁稚か小僧のやうな見えである。入学試験といふやうなものは無く、ただ最初の日に教師が私に、今迄どんな本を読んだかと聞く。是れ是れの本を読んだと答えると、それでは二等生徒に這入ったが可からうといふ、当時慶応の制度は、本科は一等より五等まで、予備科は一番、二番、三番と分れた居たので、私は予備科に這入るつもりで居たのに、だしぬけに本科の二等に入れるといふ。其れでは修業年限が余り僅かで不本意なので、教師に談判して、やっと三等に入れて貰ふことになった。学級は一年を三期に分つて、三月末、七月末、十二月末に試験を行ひ、二期に一等（一級）づつ上る、つまり二年間に三級を卒へるといふ制度だったのである。」(5)とある。慶應義塾時代の渋江や渋江を取り巻く犬養毅、井上角五郎等学友達や福沢諭吉のことは『独立評論』の再興第九号澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」に詳しく書かれている。

さて、第二次修学時代で最も注目すべき点は自由民権運動との関わりである。この点について森鷗外の『渋江抽斎』・『抽斎歿後』・山路愛山の『独立評論』、そして、稲田雅洋の『境　第二号』に掲載された「渋江保伝（中の二）」より辿ってみたい。先ず、森鷗外は渋江の自由民権運動との関わりをどう見ていたかである。『渋江抽斎』のその百一に「抽斎歿後の第二十二年は明治十三年である。保は四月に第二等に進み、七月に破格を以て第一等に進み、遂に十二月に全科の業を終えた。」(6)とあるので、在学は僅かに一年余りということになる。渋江の卒業後について『渋江抽斎』では「抽斎歿後の第二

十三年は明治十四年である。当時慶応義塾の卒業生は世人の争って聘せんと欲する所で、その世話をする人は主に小幡篤次郎であった。保はなお進んで英語を窮めたい志を有していたが、浜松にあった日に衣食を節して貯えた金がまた罄きたので、遂に給を俸銭に仰がざることを得なくなった。この年もまた卒業生の決口は頗る多かった。保の如きも第一に『三重日報』の主筆に擬せられて、これを辞した。これは藤田茂吉に三重県庁が金を出していることを聞いたからである。第二に広島某新聞の主筆は、保が初めその任に当ろうとしていたが、ついで出来た学校の地位に心を傾けたために、半途にして交渉を絶った。学校の地位というのは、愛知中学校長である。招聘の事は阿部泰蔵と会談して定まり、保は八月三日に母と水木とを伴って東京を発した。諸生山田要蔵はこの時慶応義塾に寄宿した。」(7)とある。ここにあるように、渋江は三重日報の主筆の話を断ち、広島某新聞の話も断っているが、その経緯については詳しく触れていない。なぜ渋江は三重日報や某広島新聞の話を断ったのか。渋江は山路愛山『独立評論』第二巻第四号の澁江保氏談話「新聞今昔譚（其二）」で、三重新聞を断った理由や自由民権運動との関わりについて次のように述べている。

「当時の新聞記者には慶應義塾を出た者が多く、どの新聞でも争ふて三田へ記者を買ひに来た。藤田茂吉氏は明治八年の三田出身者で、是は卒業前に報知新聞から買ひに来て、百五十円の月給を出し卒業すると同時に其の主幹になった。明治十一年には今の日本新聞社長の伊藤欽亮氏が卒業して、後月給五十円で静岡新聞の主筆になって行った。伊東氏は其頃林といふ家へ養子に行って同姓を名乗って居た。養父の林三助といふのは警視庁の要位に居り、圧制家として聞えた人物であったが、欽亮氏は自ら其れと意見が合わず、妻子のあるにも拘はらず独りで別に下宿をして居た。明治十二年には別科生の古渡資秀が新潟新聞主筆になって行き、間もなくコレラで死んだ後へ尾崎行雄氏が赴任したが、矢張り月給は五十円であった。其頃三級生だった加藤政之助氏は後報知新聞に入ったが、雑事類篇を引張り廻して熟語を漁り、其れで論文を書くといふので、一寸評判であった。十二年には斉藤常太郎といふ人が卒業して奥羽日々新聞に入ったが、其の月給は七十円であった。私の卒業したのは十三年であるが、卒業前から津市の三重日報から招請を受け、行くつもりになって居た処が、ふと聞くと其の新聞は県庁の御用紙で、主筆には県庁から新聞社の月給位の金を与へるとの事なので、急に厭気がさして止めた。其後丸山作楽の明治日報といふのが出来て、其処からも交渉を受けたが、是れは隠し看板のない帝政党の機関新聞なので、直ぐに断った。福沢先生などは『なあに、白ばくれ丸山の喜びさうな事を書いとれば可いんだ、月給を取れば取り得だから行けば可いじゃないか』と勧められたが、

どうしても気が進まなかった。此んな訳で三田の書生は概して此頃民権論的の傾向を持って居た。話は少し横道に入るが明治六七年以来民権論の天下を風靡した勢ひは非常なもので、東京は勿論、僻遠の地方に至るまで假にも政治を言ふもので民権を口にせぬ者は殆んどないと言ってもよい位であった。私は六七年頃は浜松県に居たが、同県でも岡田良一郎、金原明善、丸尾文六、大塚儀一郎等が熱心に民権を主張し、後遂に民会といふものを拵えて盛んに人民のために気焔を吐いた。其頃県の役人に藤尾伍鹿といふ人が居たが、之れが又熱心な民権家で、夢中になって民会のために奔走をして居た。」(8) とある。ここで渋江が触れた帝政党は、立憲帝政党のことで、一八八二年、勃興する自由民権運動に対して政府支持政党として結成された御用政党であった。自由党や立憲改進党などの民党に対抗し東京日日新聞社長の福地源一郎、明治日報の丸山作楽、東洋新報の水野寅次郎によって結成された。この点からも渋江は官権を毛嫌いし、民権思想に傾倒していたかが窺える。また、三重日報の主筆を断った経緯について『抽斎歿後』では、「無論私は母に相談して承諾の趣を答へて小幡君は至極満足の様子でその旨を報知新聞主幹藤田茂吉に通じた私は藤田に面会した。然るに段々聞いて見ると月給の外に県庁から月々やはり月給位の手当が出て県庁の顧問になるのだといふことだ「エッそれでは官権新聞ですね」私の声は仰山であった是は私がなぜか「官権」といふことを非常に嫌ったからであるで私は切角進行し掛けたものを一も二もなく拒絶した。」(9) とある。続けて、小幡から広島で創立する新聞社の主筆の話があり、「今度は間違いなく民権ですよ」(10) と小幡に言われたが、渋江は愛知県の中学校長として赴任することになる。『抽斎歿後』から渋江は新聞社への就職を希望していることが窺える。この点について、稲田雅洋は『境　第二号』の「渋江保伝（中の二）」において、「保が、就職にあたり、新聞社に対して積極的であったのは、当時の慶応には各地から記者の需要があったことにもよるが、それと並んで、いやそれ以上に、その頃の保が、自由民権運動に共鳴しており、自らすすんで新聞社にはいって記事を書き、自分の意見・思想を社会に主張していくことを目指していたことによる。」(11) と述べている。渋江は山路愛山『独立評論』第二巻第二号の澁江保氏談話「新聞今昔譚」で、当時の新聞界と自由民権運動について次のように述べている。「私が新聞紙に興味を持ち始めたのは明治の初年浜松に居った頃であった。其当時はまだ新聞雑誌に対する取締の行はれて居なかった頃で、随分乱暴な種類のものがあった。朝野新聞、あけぼの新聞、報知新聞等は何れも当時の有力な新聞で、常に過激な記事論説を掲げたものであったが、日刊以外の新聞雑誌にも過激の記事は頗る多く、殊に海老原穆といふ鹿児島人の出して居た評論新聞

といふ雑誌の如きは、『三條実美斬る可きの論』とか、『政府転覆論』とかいふ物凄い標題の論説を常に掲げ、又小松原英太郎氏の経営して居た近事評論も、『明治政府転覆す可きの論』などを掲載する等、総体に乱脈な新聞雑誌会に於て、此の二者は就中殺気を帯びた雑誌の一副対と称せられて居った。其中に新聞条例が出来て此方面に対する政府の制裁が厳重になり、朝野の成島柳北、あけぼのから朝野へ転じた末広重恭等が各々二回禁獄の処分を受け、報知の藤田茂吉氏も同様の運命に逢ひ、其他知名の新聞雑誌記者にして此刑を受けざる者殆ど無きに至ったので、新聞社会では政府の圧政に反発して一層過激の筆鋒を弄し、随て禁獄さるれば随て反省するといふ有様で甚だ活気のある状態を示して居た。此時政府に於て新聞条例をこしらへた当事者は井上毅、尾崎三良の二氏であるといふことで、例の近事評論では『井上、尾崎の闇魔王』などといふ憎まれ口を利いて居た。」(12) また、『平賀敏君伝』の「東京遊学時代

（二）角帯と政談演説」において民権派に身を置いた渋江の名前が見られる。「当時先生は盛んに士人帰商論を唱え塾生は袴を禁じ角帯を締めさせられたので、平賀君其他士族連は初め異様に感じてゐたさうだ。併し一方には演説を奨励し、政談演説をも塾生にやらせてゐた。学生間には又経世社と名づくる演説会の団体を設けた。其顔触れは、平賀敏、村田豊、高橋正信、矢田積、北川例弼、渡辺修、浅岡満俊、井出徳太郎、渋江保、芹沢徳一、枝元長辰、坂井次永等の諸氏で、何れも一廉の論客として盛に活動してゐた、之には塾の演説館ばかりでは世間に反響がないので、福沢先生が木挽町に明治会堂なるものを設けて充てがふ。其所で民権論などを主張して公会演説をやる、又卒業生等は屢々教師連に引率されて地方へ出張演説をやったものである。」(13) こうした渋江の当時の自由民権運動との関わり中で渋江自身も民権運動に身を委ね、彼の心の中に民権思想が育っていった。そしてその思想が渋江の後々の生き方や翻訳スタンスに影響を及ぼしたと思われる。

注記

（一）稲田雅洋『境　第二号』（佐々木啓之一九八四年十二月二十日）四十二頁

（二）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二七九・二八〇頁

（三）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』六十五頁（頁が付記されていないため便宜的に付した。）

（四）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二八一・二八二頁

（五）山路愛山『独立評論』再興第九号の澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」（独立評社　一九一三年十月

一日）三四頁
（六）森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二八二頁
（七）森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二八三・二八四頁
（八）山路愛山『独立評論』第二巻第四号の澁江保氏談話「新聞今昔譚（其二）」（独立評社　一九一五年四月一日）五八・五九頁
（九）東京大学の鷗外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』七十一頁（頁が付記されていないため便宜的に付した。）
（十）東京大学の鷗外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』七十二頁（頁が付記されていないため便宜的に付した。）
（十一）稲田雅洋『境　第二号』（佐々木啓之　一九八四年十二月二十日）四十五頁
（十二）山路愛山『独立評論』第二巻第二号の澁江保氏談話「新聞今昔譚」（独立評社　一九一四年二月一日）五十三頁
（十三）本山彦一『平賀敏君傳』（平賀敏君傳記編纂会　一九三一年十二月十四日）八十八・八十九頁

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

男男男（たばかり）

匠　克仁

姦・嬶・嫩を使ってまんじのエッセイを書いた。なにか姦計をたばかっていると読者は思うかもしれない。実は姦（よこしま）な思いで書いている。この文章もぼくは姦知を使い執筆している。ぼくはもともと妄想癖があり姦の字を見るだけで妄想が膨らんでくる。それにしても姦という漢字は不思議で興奮させる漢字である。熟語で姦雄がある。松永久秀や三国志の曹操を連想しそうだが姦雄の字からぼくは一夫多妻制を妄想する。一人の男に姦の様に妻が三人いるのだ。一夫多妻制を羨ましい人は姦通罪…じゃない、カンチガイをしている。そのような姦違いの人に「奥様と同じ人間が三人いたら」と聞くと姦違いの人は「絶対に嫌だ」と答えるだろう。既婚者で姦通（浮気）願望の人も浮気相手と奥様が同盟を組むと姦通なんてできるはずがない。話は変わるが、漢字では姦の女は両方の角が飛び出てるのが正しい。六つの角の姦が三倍怖い。三人の女が怒っているようだ。ところで姦は「よこしま」「かしましい」の他に、かつて古語では姦しで「みめよし」と読んだ。見目好し、見て美しいで姦が古語では良い意味でも使われていた。それが今では姦は悪い意味でしか使われない。これは女性差別であり姦の字の概念を変える必要があると思う。ぼくは強いて姦を良く使うという意味でキャンペーンを展開したい。強姦キャンペーンとして全国的に展開したい。侃侃諤諤（けんけんがくがく）姦姦諤諤の議論をしていきたい。なお喧喧囂囂（かんかんごうごう）の喧も侃も姦しいという意味であるが、混用誤用される。例えば姦姦囂囂…じゃない、侃侃囂囂という表現は誤りであるが姦違いの表現の方が使用されている気がする。ところで姦を使って書いているが、ろくな熟語がない。例えば獣姦・死姦・青姦・近親相姦など汚らしい。といっても獣姦は『白馬とまぐわった王女様』として書いている。死姦は『全裸の女子大生の満員電車』のテーマである。青姦は『変態式健康法』である。このエッセイでは近親

相姦と擬似相関を間違えた。『鉄のペリカン』のテーマは鶏姦である。ぼくのパソコンはケイカンと入力すると、鶏姦という字の方が警官とか景観よりも優先候補として変姦…でない…変換する様にカスタマイズされている。鶏姦とは卑猥なので伏字にすると肛〇性×なのである。鶏姦は男性の同性愛を指す法律用語でもある。明治には鶏姦罪があって、男性の同性愛が処罰された。法律上は鶏姦罪では挿入される方も処罰される。直腸鏡とぼくは鶏姦罪で明治の初期だと逮捕されるのである。ところで鶏姦って本当はヒトの男が二人なのにニワトリと女三人の姦というのは何か変である気がする。振り返ってみると姦に関係するエッセイが、多いような気がする。今回は姦の女の代りに別の漢字がないか、と書き始めた。この姦の様に同字を重ねるのを理義字という。理義字の中に品字様（ひんじよう）がある。理義字は三に限らないが品字様は理義字の中で三つ重ねる漢字である。けっして品字様（しなあざさま）という人名ではない。これから品字様について詳しく書いていくのであるが、代表例は品である。なんか当たり前といえば当たり前の話であり品の字の様に、三つの同じ漢字を組み合わせるのだから品字様というのである。くどくなったが、くどい文章は品が無いので、ぼくは書かないようにしている。ぼくは品格のある文章になるように心がけている。冒頭から上品でエレガントで洗練されたエッセイである。ところで品川（しながわ）の川の様に横に三つ並んでいるものは品字様とは言わない。あくまで上一つ下二つに並ぶのが品字様である。だから、横でなく縦に三つの三の様に三品の三の様に縦に三つ並んでいるものも対象外である。三品は「さんしな」でなく仏教用語「さんぼん」である。上品（じょうぼん）・中品（ちゅうぼん）・下品（げぼん）と品性を三段階に分けて考えるのである。これが、今の上品（じょうひん）・下品（げひん）の語源である。さらに品性を三つに分けているので上上品から下下品までの九品（くほん）に分けられる。下賤から高尚な話まで、高品質（ハイクオリティ）な内容になってると思う。この品の口の代わりに一本線を足した日を三つにした漢字が晶である。人名に多く使われるのでよく目にする。この晶（あきら・しょう）という漢字は理義字であり、かつ品字様にもなっている。昌という漢字は理義字であるが品字様ではない。まんじのエッセイは、血と汗と涙の結晶なのである。ぼくは『なんとなく、クリスタル（＝水晶）文章法』という方法で書いている。なんとなく、液晶ディスプレイを眺めていると、脳の中でアイデアが結晶化されるのである。まんじのエッセイを書くときは水晶の六角柱を一回転すると六回光を反射するように、晶晶（しょうしょう）として輝く表現になるようにする。晶晶とはキラキラという意味である。全く関係ないが、晶晶は北京五輪のパンダである。さきほど血と汗と涙の

結晶と書いて、とても苦労をしているような表現をしたが晶（あき）らかに嘘である。妄想癖があるので、勝手に森羅万象が浮かんでくる。例えば、植物というと花（ラビア）・花惢（＝芯）・蕾・巨根・陰茎小体いや地下茎・木・林・森などのイメージが出てくる。動物というと液体の天道蟲・ゴキブリ男・空飛ぶ人喰いイカが浮かぶ。鉱物は水晶のペリカンのくちばしのイメージが現れてきた。雷の轟のような刺激的な妄想を書くので刺激的過ぎて非難轟轟になるのである。ぼくはブーイングを受けても非難轟轟…、いや避難GOGOで逃げる。たまに逃げそびれて轟沈するのである。エッセイには、ぼくの中の好奇心の蟲（＝虫）がそのまま表れるのである。そのため、蠱（蟲に皿）惑的な文章になる。たまに文章にぼくの豪放磊落な性格が表れている。豪放磊落と同義の四字熟語で磊磊落落がある。ときどき、レトリックに拘りすぎて、毳毳（けばけば）しい、派手な表現を使う。余談であるが毳は一字で「むくげ」と読み産毛を意味する。ところで毳から毛むくじゃらのサンタクロースを連想した。彼は毳の木つまり橇に乗っている。橇を引くのは三匹の鹿＝麤である。サンタクロースの二字熟語を思いついた。麤毳でサンタクロースと読ませよう。われながら、とても歯（しぶ＝澁・渋）いエッセイを書いていると思う。新鱻（＝鮮）な文章を考えている。創作の神様が耳もとで聶（＝囁・ささや）いている。原稿を書くことが最大の毘（＝喜）びなのである。ラッキー7が3つも並ぶから毘が喜びというのは分かりやすい。七七歳の祝いを喜（毘）寿というのは七十七と見る。ぼくは書きたい文章が焱（＝炎）のように沸き起ってくる。ネット上だったら焱上しているような過激なエッセイをよく書いている。火焱の方が火炎よりも火が強くみえる。三字の熟語で火炎焱というのはどうだろうか。エッセイを書くのも読者の劦（＝協）力を得るのが必要なのである。協力ではなく劦力と書く方が四倍も勇気づけられるようだ。ところで劦に月が左につくと脇だが下につくと脅しである。単に劦十肉で、筋肉に力をこめ、脇を閉め、脅すのである。花惢（＝芯）と書いたが、めしべを漢字で書くと、雌蕊（惢）である。この漢字は動詞で別の読み方があって、「惢う」で「うたがう」とも読む。女心から造語して、姦惢を考えた。女の猜疑心である。女力から造語して、姦劦を考えた。女性上位の社会である。ぼくのエッセイを贔屓（ひいき）にしてほしい。引きたおすくらいの依怙贔屓をしてほしい。ついでに、地球環境に優しいECO贔屓してくれると、ぼくのEGOも満足する。ひいきは贔負とも書く。屓の字は正確には貝が一つでなくて中も贔で貝が三つである。しかも、四字熟語があって、贔屓贔屓（ひいきびいき）という表現をするのである。後の贔屓は「びいき」と濁る。この四字熟語の屓も正しくは贔だから一つの熟語で貝が十二個になる。因数分解で

4鱻十2（戸一一）つまり12貝十2（戸一一）である。

磊磊落落という熟語があるくらいだから同じ語順にして鱻鱻厑厑（ひ～ひ～きっきっ）の方が良いと思う。文章が麤麤（＝粗・あら）くなったが、書き進めよう。理義字で犇（ひしめ）くように無理をして書いている。ところで犇くをぼくは小学生のときに読み書きができた。好きな森村誠一の作品に多く出てきた表現だからである。他に蟲に皿の蠱も蠱惑がよく出てきたので覚えた。純文学は森鷗外が好きである。森鷗外の鷗の区の中は×でなくて品である。

犇のように理義字は動物が三匹集まってできた字が多く犇は別に牛に限らず馬でも集まる意味になる。

鱻（ヒョウ）とどろく。競馬ではない。

鱻木（とどろき）という町や駅名がある。その場所は青森県である。

鱻は馬が群れているから、ぼくなら「ぐんま」にする。

麤麤は鹿が島のようだから「かごしま」である。

鱻や麤麤があるなら熊でも作ろう。熊みっつが訛って熊の品字様で「くまもと」である。熊もっとでもいい。鳥の品字様で鳥スリー「とっとり」である。

猋猋（ヒョウ）多くの犬が走ること。

猋猋猋

男男男

まんじ

No.142

2016.11.1

まんじ第百四十二号　目次

黄色いハンカチ……新井　宏…4
酒乱……太田精一…10
ARについて……大貫陽平…18
内田国の市物語……横山正義…22
高齢社会フォーラムin東京……鍋屋次郎…37
短歌　行雲流水（五十）……石黒修身…52
漢詩　潮汐録（八十五）《漢詩の流れ73》……鯨遊海…56
漢詩　汲深録（六）……松井秀人…59
ロボット雑考（その五）……三戸岡道夫…61
吉宗と大岡越前―享保の改革―……千坂精一…78
世界の国旗から学ぶ（第一回）……米村典紘…94
古い物・遠い夢　逃げる『有楽斎』（茶道史余滴）……忠内正之…119
里見氏と北条氏―房総の戦国興亡史―（2）……山田嘉久…128
千家尊福伝（一三）……村上邦治…137
　隈板内閣打倒を率いた貴族院議員
『時評家　新明正道』（評伝その六）……山本鎭雄…150
「農ある暮らし～私の日常～」(1)……古屋富雄…159
性と化粧の物語（六）……鈴木守…163
明治時代の著述者　渋江保の一生（その七）……山本勉…169
上上上……匠克仁…177
編集後記……編集子…181
表紙　絵……田寺怜葦

黄色いハンカチ

新井宏

『まんじ』に参加してから、いつの日か〝小説〟を書きたいと夢見ていた。もちろん、まったくオリジナルな小説を書こうと言うのではない。感動した名作などを下敷きにして、いわゆる〝翻案小説〟なら書けるかも知れない。

そんな候補のひとつに、金東仁が一九三二年に書いた『赤い山―ある医者の手記―』があった。二十年ほど前に韓国語の勉強を始めた頃、繰り返し、繰り返し、テープで聴いた短編小説である。

余が広漠たる満州の朝鮮人小作人部落に滞在していた時のことである。一年ほど前から、〝山猫〟というあだ名の容貌怪異で、けんか早く、博打好きで、すぐ言いがかりをつけ、女に乱暴する流れ者が村に居ついていた。村人は誰もが〝山猫〟を追い払う相談をしたが、彼は平然としていた。追い出すのに先に立つ者がいなかった。

だから、彼が隣村の満州国人の賭博場に行って、なぐられ血だらけになって帰って来ても、みんな放っておいた。

ある日、村の宋じいさんが、ロバに年貢を積んで満州人の地主に納めに行ったが、収穫が少ないとなぐられ、ロバに括りつけられ、送り返された時には絶命していた。村人は誰もが復讐を叫んだが、またもや先頭に立つ者がいなかった。

翌朝のことであった。〝山猫〟が部落の入口で血だらけになって死んでいるという。余が駆けつけて応急処置をほどこすと、「先生、行きました。あいつ……地主の家に」と絶え入る声でいう。余が溢れ出る涙をこらえていると「あそこに赤い山が、それから白い服が…、あれ何ですか…」と。しかし、荒涼たる満州の野原がひろがっているだけだった。

「先生、歌ってください。最後のお願い、東海と白頭の乾き滅るまで…を」

余が歌いはじめると、宋じいさんの縁者や村人たちのコーラスが後に続いた。

むくげ　三千里
うるわし　山河

彼の死を弔う厳かな歌（後の韓国国歌）が次第に大きく厳粛にひびく中で、彼は冷たくなっていった。

韓国語の勉強とは言え、テープで聞くたびに、私は涙くんでいた。

この短編小説を何とか翻案して『まんじ』に載せたい。そう思って、もう既に十年以上になる。いつも散歩をしながら、登場人物、時代背景、地域などの構想を練るが、原作の「感動」に押しつぶされ、空々しいイメージしか浮かばない。やはりダメだ。

もうひとつ温めていたのが、わが家の次男、武の中学英語教科書に載っていた「黄色いハンカチ」である。このことは、十五年前に『まんじ』八十一号の「多率寺にて」に少し書いた。

二〇〇一年の六月六日、韓国は戦没者慰霊の休日「顕忠日」で、晋州市から三十キロほどのところにある名刹「多率寺」まで散策に出かけた。兼農サラリーマンが休日を利用して田植に励む中、木漏れ日の小道を歩きながら、ウツを病む弟のことを考えていた。ひと回り違う弟は、大手商社に入り、美人の妻を娶り、愛らしい息子にもめぐまれ、傍目には順調そのものであったが、地位が上がると、雑事をさばけず、同僚たちから遅れはじめた。劣等感に苛まれるようになり、野球をやめ、ゴルフをやめ、友達付きあいを絶ち、ひたすら仕事と妻と子供に心を集中していったが、それがひとり相撲となり、愛する妻や子が去り、リストラの季節を迎えた。そんなことを想っている内に、やっと多率寺にたどり着いた。

そこに妻から妙子のところに初孫が生まれたとの電話が入る。あいにく、郊外で電波事情が悪く、良く聞き取れなかったが、とにかく無事に生まれたらしい。

早めに参拝を切り上げ、多率寺を下りて麓の食堂でひとまずビールで乾杯し、軽い食事をとって外にでると、心地よくふらつく。暑い日差しであった。

そういえば、妙子の生まれた日もこんな日差しであった。たまたま日曜日で長男と次男を連れて妻の実家に出向いたところに、前置胎盤で異常出血があり、国立相模原病院に緊急入院したとの連絡が入っていた。

様子が全くわからない。とにかく病院に急行しなければならない。車よりも電車とタクシーの乗り継ぎが早い

と考えて田園都市線で長津田に向った。そこまでは順調であったが、長津田駅前には一台もタクシーがいなかった。子供は駄目かも知れない。妻はどうしているだろうか。

十分、十五分、二十分。まだ来ない。もし電車が来たら隣の町田駅まで行った方が良いか。いや、もう少し待てば来るに違いない。三十分、四十分、まだ来ない。七月の初めだと言うのに、真夏の日差しであった。駅前は死んだように暑く静かであった。

やっとの思いで相模原病院にたどり着いた。受付に駆けつけると白帽の看護婦さんがこちらを振り向いた。たまたま妻の帝王切開手術を終えて、いま休憩中の看護婦さんだという。帝王切開で生まれた胎児は、酸素が欠乏して蒼白だったそうだ。危ないところだったという。美しい人であった。白い帽子が良く似合っていた。絶対にこの顔は忘れまい。

その妙子が男の子を産んだという。異常がなければそれで十分だ。いや異常があったって良いではないか。

私たちには武という障害を背負った子がいる。この子が果たして、ひとりでバスに乗れる日が来るであろうか。それが、初めて異常に気づいた時の想いであった。

その武が今では、社会福祉法人の工場でお給料を貰って働いている。とても他人との比較にはならないが、以前の彼と比較すれば、確実に一歩ずつ進んでいる。その進歩を見つける度に、私たちふたりは喜び合ってきた。

武のお陰で、私たちはより深く人生を味わえたとも思っている。将来に不安がないかといえば、そんなことはないが、恵まれながらウツを病む弟などには、この気持が全く分らないのであろう。恵まれ過ぎていると人の心が分らず、恵まれないと人生を深く味わえる。人生とはそんなものであろうか。だから、初孫に何かあっても、妙子は強く生きて行けるはずだ。

心地よく酔って歩き疲れたので、やっとバスに乗る気になった。田舎のバスに乗って、また思い出した。

日本語もおぼつかない武がなんとか公立の中学校に入れてもらえた時のことであった。英語の授業が始まっていた。せめて、読み方だけでもと思い、毎朝一時間、武と一緒に英語の教科書を読み続けた。その中に「黄色いハンカチ」があった。

刑を終えて、バスで故郷に向う男がいた。もし妻子が迎えてくれるなら、バス停の樫の木に黄色いハンカチを掲げて欲しいと手紙を送った。

ハンカチが出ていなければ、そのまま通り過ぎる。そんな不安の中で男が見たのは、樫の木いっぱいに結ばれた黄色いハンカチの群であった。

毎朝、同じところを読みながら、同じように感動した。そして武がはじめて普通の生徒なみの成績を得たのが英語であった。

この「黄色いハンカチ」の翻案なら、何とか書けそうである。その思いは、金東仁の『赤い山』の場合よりもはるかに強いものがあった。

そのために、数年前、武の使っていた「中学英語教科書」をさがしてみた。

すぐ見つかるはずであったが、まったく手ごたえがない。そもそも国会図書館に置いてない。見つかるのは「高校英語教科書」に載る「黄色いハンカチ」ばかりである。そんな馬鹿な……。

調べてみると、教科書類の保存管理は公益財団法人教科書研究センター附属教科書図書館（江東区千石）が行っていると言う。

中学英語教科書を片っ端から探すが、これが大変な作業。英語教科書の出版社がこんなに多いとは考えてもみなかった。

やはり見つかるのは高校英語教科書に載る「黄色いハンカチ」ばかりである。しかし、高校版にはかなり難しい語彙があり、内容も高度で、武と一緒に読んだ教科書とはとても思えない。念のため、いくつかの出版社にメールで問いあわせるが、中学校版はないという。相模原市の教育関係部署に問い合わせても、二十年以上も前の教科書の記録は残っていない。

ただ、こんな調査をしている中で、「黄色いハンカチ」には、ピート・ハミルの〝Going Home〟という原作があることを知った。一九七一年にニューヨークポストに載ったコラムで、翌々年には、ほぼ同じ内容の歌詞を持つ「幸せの黄色いリボン」というトニー・オーランド＆ドーンのポップスが全世界を席捲したという。こちらの歌の方は中学校の英語教科書に載せている出版社もある。手掛かりになりそうだ。

そうこうしている内に、思いがけないことが分かった。高倉健が「生きている限り公にしない」と言う条件で、三十年以上も刑務所の慰問を重ねていたというニュースの中に、山田洋次監督の『幸福の黄色いハンカチ』のことが出ていたのである。

一九七七年に公開されたこの『幸福の黄色いハンカチ』は同年の映画賞を総なめにし、高倉健ばかりでなく、倍賞千恵子、渥美清、武田鉄矢、桃井かおり等の俳優陣を輩出した映画だと言う。その当時はもう映画を見なくなっていたので知らなかったが、後年になってテレビで放映される『幸福の黄色いハンカチ』のことは、うっすら

と知っていた。しかし、まさか武が中学校で勉強していた時より前に作られた映画だとは思わなかった。

関連記事を見ると、その『幸福の黄色いハンカチ』の原作がピート・ハミルの〝Going Home〟とあるではないか。ニューヨークポストのコラム記事をどうして山田洋次が知り、それを下敷きにして、映画を作ろうと想ったのか。小山台高校で六年ほど先輩に当たる山田洋次の博識ぶりに改めて驚いたが、どうやら日本版のリーダーダイジェストに掲載された文を見てのことらしい。

いずれにしても、永年温めていたテーマ「黄色いハンカチ」も、かくして候補から消えてしまった。そもそも翻案で小説を書こうという心がけが間違いだったのか知れない。

せめてもの慰めは、私も山田洋次と同じく「黄色いハンカチ」の翻案を考えていたことであろうか。それで自己満足するしかあるまい。

実は、「黄色いハンカチ」をピート・ハミルの原作とするのには異論があるらしい。それは前出のトニー・オーランド&ドーンのポップスが全世界を席捲した時に、ハミルが著作権を主張したが認められなかった裁判があった。

離ればなれだった愛する恋人や家族が「黄色いハンカチ」を飾って帰還を待つのは、アメリカの一般的な風習であり、ジョン・ウエインの「黄色いリボン」などもその流れにあるのだという。それにしても、ハミルの〝Going Home〟の筋立てとポップスの「幸せの黄色いリボン」の歌詞の内容はそっくりで、素人目にはハミルに歩があったと思うが、被告側がハミルのコラムより前に書かれた文献を証拠として提出したため諦めたのだという。

ついでに、ピート・ハミルのことを調べて見る。高校中退の学歴でありながら、ニューヨークポストの俊敏記者・コラムニストとなり小説家としても知られ、日本で出版された著書に『ニューヨーク・スケッチブック』という短編集があるという。〝Going Home〟もハミルが「人間スケッチ」の一編として描いたものであるが、残念ながら『スケッチブック』には載っていない。

訳者の高見浩によると、ハミルはアイルランド系のブルックリン生まれ、酒と女とボクシングを愛し、ヴェトナム戦争の取材経験から、反戦の論陣を張りつづけ、女優のシャリー・マクレーンと同棲し、ジャクリーヌ・ケネディ・オナシスと浮き名を流すなど、米国ではなかなかの有名人だと言う。

山田洋次の映画『幸福の黄色いハンカチ』は二〇〇八年に米国でリメイクされ、人気を呼んだという。これがハミルの原作の映画化ではなく、山田洋次のシナリオを

映画化したのだと言うのが嬉しい。翻案とは言え、原作を越えた山田洋次であるから、寅さんの『男はつらいよ』シリーズを生んだのであろう。

今まで高倉健のことを任侠ヤクザ俳優くらいにしか思っていなかったが、生前の二〇一三年には「文化勲章」を貰っていると言う。同い年の山田洋次がまだ貰っていないのだから、まさに国民的な大俳優である。

山田洋次と高倉健とが組んだ映画には『はるかなる山の呼び声』もある。倍賞千恵子の他に武田鉄矢や渥美清も出演しているが、タイトルが『シェーン』の主題歌と同じなので、すぐにわかるように、これも翻案映画といえるであろう。少年ジョーイが〝Shane!! Come back!〟と叫ぶワイオミング、イエローストーンのラストシーンは別れであるが、「黄色いハンカチ」の再会の感動と良く似ている。

高倉健は福岡県の高校で同級生だった元名古屋高検検事長に頼まれ、三十年前から内々に刑務所の慰問を重ねていたという。生きている限り公にしないとはこのことであった。そう言えば、高倉健には『網走番外地』シリーズという刑務所映画があった。高倉健が若い頃ボクシングに熱中していたことも、ハミルのボクシング好きと妙な形で重なる。

まあ、そんなわけで、小説などと欲張らずに、雑文でも書き続けるのが、私には似合っているのかも知れない。

注記　金東仁の『赤い山―ある医師の記録―』は、管野裕臣著『朝鮮語の入門』白水社（一九八五）に載っていた韓文とその翻訳文で、四百字つめ十枚ほどの小編。この頃から韓国語の勉強を始めていたわけで、懐かしい教科書である。

酒乱

太田精一

一・狂言殺人

「刑事さん。俺、たった今女房を殺して来た」

べったりと血糊のついた包丁を右手に持って一人の中年男が浜松の中央警察署に駆け込んだ。男の目は血走り、蒼白な顔をして包丁を持つ手が震えている。

着物の裾をからげ髪を乱し、見るからに風采の上がらない小柄な男が興奮冷めやらぬ面持ちで何か訳の分からない言葉を口走っている。

「何、女房を殺しただと、本当か。どこで殺した。女房の名前は何と言うのだ」

警官は、半信半疑でとりあえず事情聴取のためその男を取調室に入れた。

戦災の傷跡も薄れ、復興の息吹が力強く感じられる昭和二十七年の春、彼岸も過ぎ、夜十時を少し回った頃であった。

「へい、俺の名は畑野稔（みのる）といいます。伝馬町で八百善という八百屋をやっています。女房の名前はつやといいます」

「何故奥さんを殺した」

「へい、飲み屋で酒を飲んで帰ると、その払いのことでごちゃごちゃぬかしゃあがるので、喧嘩になり思わずそこにあった包丁で腹を刺したように思いますが、よく覚えていません」

中央署の警官は、すわ殺人事件だとパトカーを二台連ねサイレンを鳴らし、その八百善に急行した。

八百善は、すでに店を閉めていた。

「警察だ。戸を開けなさい」

警官が大声を上げて表戸を叩くと、中から背が高く体格の良い女が、顔を出した。

「さっき、この店の主人畑野稔と名乗る男が女房を殺したと自首して来たので、こうしてパトカーで駆けつけた。あんたが畑野の奥さんのつやさんかい」

「はい。私が畑野の家内のつやです。警察の方がパトカーで来るなんて、何かありましたか」

つやは、眠気まなこを擦りながらいぶかしげに警官に顔を向けた。

「何があったどころじゃあない。お宅の主人が女房を殺したと警察に自首して来たので、それは一大事だと思ってこうして駆けつけて来たのだ。そうしたらあんたはぴんぴんしている。一体これはどうなっているのだ」

「家の人は、酔っていませんでしたか。酔うと人が変わってしまうんです。普段はおとなしく真面目な気の弱い人ですが、飲むと駄目なんです」

つやは、日頃鬱積した気持ちを一気に吐き出すように喋り始めた。

「今日も店を閉めた後、ぷいと外へ出て、二時間もすると帰ってきました。すぐ床に就くのかと思っていましたが、庭の兎小屋で何かごそごそやっていました。しばらくするとまた外に出て行ってしまいましたので、もう帰って来ても家に入れないようにしようと思い、鍵をかけ寝てしまいました。何しろ八百屋は朝が早く、いつまでも亭主の帰りを待っているわけには行きませんからねえ」

駆けつけた警察官は狐か狸に化かされたような怪訝な顔をして引き上げて行った。

署に帰るなり、その警官は畑野稔を取調室に連行し問い詰めた。

「おい、畑野、警察に何の恨みがあってこんなことをしたのだ。警察を舐めるのもいい加減にしろ。あの血糊のついた包丁は何だ。誰の血だ」

「へい、相済みません。女房に小言ばかり言われてむしゃくしゃしていたので兎を刺し殺し女房を殺した気になっていましたところ、その血の付いた包丁を眺めているうちに、頭の中が混乱し何が何だか分からなくなって、本当に女房を殺した気になってしまい、思わず警察署に駆け込んでしまいました」

「あきれた野郎だ。本当に女房を殺したのでなくてよかった。だが、このままおとなしく帰すわけには行かない。二度と警察をたぶらかすことのないよう焼きを入れてやるから道場に来い」

パトカーで出動した警官四人が畑野を柔道場に連れ込み、散々彼を投げ飛ばし、一晩留置所に留め置き、翌日帰宅させた。

畑野は、これに懲りてしばらくは、酒も飲まずおとなしく家業に精を出していた。

二・見合い

畑野稔が酒に溺れるようになったのは、つやを嫁にして五年後の二十七歳になった昭和九年の春の頃である。

結婚後五年間は、酒を飲んではいたが、溺れるほどではなかった。

稔は、六歳の小学校に入る頃に畑野の家に養子として浜松近郊の芳川村の農家から貰われて来た。

夫婦に子供の無かった畑野家では、家業の八百屋を継ぐ者がいなかった。そこで主人の畑野安造は老後のことを考え、妻のうめと相談して自分の出身地芳川村から養子を取ることにし、実家の近くの倉橋家の三男、稔を養子にしたのである。

稔は、田舎育ちで浜松の生活が馴染めなかった。体も小さく勉強も出来るほうではなかったため、町の中心にある元城小学校では馬鹿にされ、いじめられ、いつも教室の隅で小さくなっていた。

安造は、八百屋に学問は要らないと考えていた。それよりも稔を早く一人前の青果物商に仕立てようとした。

学校から帰ると店を手伝わせ、朝早くから青果卸売市場に連れて行き、仕入れの青果物を選定するコツを教え込んだ。

稔が尋常高等小学校を卒業するとすぐ安造は、稔を修業のために知り合いの大きな八百屋へ奉公に出した。

奉公先では、おとなしく真面目に働いたため気に入られ、三年後の十七歳の時に八百善に戻って来て、安蔵と共に店を切り盛りするまでになった。

安造は、おとなしく真面目な稔を可愛がって、時折自分の晩酌の相手をさせた。そのうちに稔は酒の味を覚え、次第に酒量が増えて行った。

これといって趣味の無い稔は、安造と共に晩酌を楽しむうちに毎日飲まずにはいられなくなってしまった。

「稔、もうこれ位にしておこうや。明日の朝また早く起きなければならないからな。深酒は体に悪い。酒は百薬の長というけれど、また前後の見境を失わせる水でもある。飲み方によっては、毒にも薬にもなるからな」

安造は、酒好きであったが、酒に飲まれるようなことはなかった。限度をわきまえ、明日を生きる糧として酒をこよなく愛し、たしなんで来たのである。

稔は、いつも飲みたらなく感じていた。だが、安造の前では、思うことの半分も言えず、我慢を重ねて来た。

稔が二十二歳になった年の昭和四年の正月に嫁の話が出た。

「稔、お前もすでに二十二となった。そろそろ嫁を貰っても良い年頃だ。俺の平田町の八百屋仲間の久米八が、お前にいい娘を世話すると言っている。中島町の漬物屋の次女で名はつやというのだそうだ。見合いをしてみる気はないか」

稔は、養父から薦められるままに見合いをした。

見合い相手のつやは、背が高くやや小太りで、女としては立派な体格で力も強そうである。見合いに立ち会った養父の安造の方が気に入ってしまった。

「稔、良さそうな娘じゃないか。見るからに立派な体格をしており、丈夫そうだ。着飾って乙に済ましているような娘でもなさそうだし、八百屋の嫁にはふさわしい娘だと思う。子供もたくさん産むことも出来そうだしな」

安造は、つやを嫁にすることを稔に強く薦めた。女房のうめも安造に同意して是非にと稔に迫った。

稔は、必ずしも乗り気ではなかった。第一に自分より背が高く、体重もありそうである。世間から蚤の夫婦と言われかねない。第二に大柄でしゃれっ気がなく色気が感じられない。第三に働きものであることは良いとして、気が強そうで、将来尻に敷かれっぱなしになるのではないかと危惧したからである。

とはいえ、稔には選択権がないも同然である。

養子に来た時から、養父母に頭を押さえられ、何事も養父母の言いなりになって来た。また、これまで女性との交際が全くなかった稔には、女性の良し悪しについて批評する目も経験も持ち合わせていなかったのである。

気の弱い実には、否応なく進む縁談に逆らうことが出来ず、ずるずると結婚式の日を迎えることになった。

つやにとってもこの縁談は、あまり気乗りしなかった。稔の感じたことの全く裏返しで、背が低く貧弱な体格の稔に男性としての魅力が感じられない。また、真面目が取り柄だと言われているが、気弱そうな感じがして何となく頼りない。話題が少なく話の端端から知性が感じられないなど、気にかかる点は少なくなかった。だが、拒否する積極的な理由とも思えず、年も二十二となっていたので、仲人や親の薦められるままに結婚を承諾した。

稔は、見合いの席で、つやの正座している座布団から大きなお尻がはみ出している姿が強く印象に残っただけで、顔すら正視することが出来なかった。後になって印象を聞かれても、ほとんど答えられなかった。

結婚式は、伝馬町の自宅八百善で行われた。

初夜の床入りで初めて女性に触れた実は、つやをどう扱って良いやら分からずどぎまぎするばかりで、つやの体にしがみついて一方的に行為に及んだ。

つやは、そうした稔のぎごちない行為がこれまで女を知らなかった証であると思った。そのことがかえって嬉しく、稔を身近に感じたという。つやは、ちょっと頼りないが、この人と共に良い家庭を築こうとの思いを強くするのであった。

三、無銭飲食

結婚後五年が経った。家業の八百屋は、順調に売り上げを伸ばしている。子宝にも恵まれ、長男孝男と長女の康子が産まれた。畑野家は人が羨むほどの幸せな家族であった。

ところが、稔のたった一つの楽しみである酒が、畑野家の家運を傾かせることになった。

安造とうめが次第に年を取るにつれ、八百屋の家計は若夫婦の稔とつやの手に移って行った。

稔は酒量が増え、家で晩酌をするだけでは、満足出来なくなった。あちこちの飲み屋で深酒をし、夜遅く帰宅するようになったのである。

そのうちに稔に悪い癖が出た。

稔は、飲むと前後不覚となり自分が何をしているのか全く分からなくなってしまうのだ。

稔の潜在意識下には、養子として育った抑圧感、身体的なコンプレックス、幼少の頃、実父から頭ごなしに叱られ、殴られた恐怖感が、混在している。それが、酒を飲むと一度に発散され、解放された気分になるのであろう。酒が稔の心に必要以上の勇猛心を呼び起こし、妄想を駆り立て、普段の気弱な稔とは別の人格を与えてしまうのである。

昭和十二年、盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が始まり、日本は、戦争への道をまっしぐらに突き進むことになった。

昭和十六年、太平洋戦争が開始され、統制経済となり、物不足が深刻になった。酒も思うように入手できなくなった。飲み屋の灯も途絶えがちとなったため、酒もほとんど飲めなくなり稔の悪癖も収まるかに見えた。

戦争の激しくなった昭和十八年から終戦の翌々年の昭和二十二年までに稔夫婦は、男一人、女二人の三人の子供を設けている。それによって稔は、長男孝男と長女のやす子を含め五人の子供の父親となった。

空襲により店を焼失した畑野家は、戦後すぐ焼跡にバラックを建てて店を再開した。その時養父母は、すでに七十を超え、八百屋はほとんど稔夫婦に任せ、口出しをしなくなった。

戦後復興が進むにつれ、商いも順調に展開し、家計にも余裕が生まれた。するとまた稔の悪い癖が始まった。

家で飲むだけでは飽き足らず外の飲み屋にも出かけるようになったのである。

あまり頻繁に飲みに出掛けるため、女房のつやに愛想を尽かされ、財布のひもを握られ、稔は、ほとんど小遣いも与えられなくなった。

「あんた。今日も飲んで来たずら。たった今あんたの飲み代を支払ってくれと飲み屋のおかみさんが来ただに。しょうがないから払ってやったけど、次に来たってもう払わないから」

つやは、そう言いつつ稔の飲み代を払ってやった。

だが、ほとんど毎日のように飲み屋の支払いに追われたつやは、とうとう我慢も限界に達した。

(このままでは、家が破産するのは目に見えている。子供たちのためにも家を守らなければならない)

そう決心したつやは、勘定取りに来た飲み屋のおかみさんに言った。

「このまま帰っておくれ。これ以上家の人の飲み代を払い続けたら家は破産してしまう」

「お宅で払わないというなら無銭飲食で警察に訴えるに」

「ああ、どうにでもしておくれ。払えないものは、払えないんだから。仮に無銭飲食で家の人が罪に問われ刑務所に入ったとしてもしょうがないと思ってる」

怒ったおかみは無銭飲食で畑野稔を警察に訴えた。その他にも、あちこちの飲み屋の勘定を踏み倒したため、裁判にかけられることになった。

その結果、稔は懲役刑を言い渡され、収監されることとなった。

初めのうちは、刑期も短く半年余りで釈放された。刑期を終え、家に戻ってしばらくはおとなしく家業に励む。

ところがアルコールを欲する体は、どうしても抑えることが出来ない。

街にネオンが点き、赤ちょうちんに灯がともる頃になると、いてもたってもいられなくなり家を飛び出し、まるで誘蛾灯に吸い寄せられる蛾のように、縄のれんをくぐり飲み屋に飛び込み酒を求めるのである。

四. 裸の交通整理

昭和二十八年八月の暑い盛りの日中のことであった。

警察からつやのところに電話が入った。

「畑野つやさんですか。警察だが、ちょっと困ったことが起きた。すぐにパンツなど下着、ズボンやシャツを持って中央署まで来てほしい」

つやは、何事が起きたのか心配しながら、とりあえず稔の下着類とズボン、シャツを整え、中央署に駆けつけた。

すると四人の警官に取り囲まれて稔がしょんぼりと椅子に座っている。

その姿を見てつやは唖然として稔に声をかけることも出来なかった。身には何も纏っていない。まるっきり素っ裸で貧弱な体を取り囲んでいる警察官の前にさらけ出している。

「あんた、そんな恰好で一体どうしたの。とにかく早くパンツだけでもはいて」

つやは、やっとわれに返り、稔に駆け寄りパンツをはかせた。

「この男は、鍛治町の松菱デパートの前の交差点で、真っ裸のまま警察官を気取って交通整理をしていた。通行人が驚いて警察に通報して来た。そこですぐにパトカーを出動させ、車に乗せここに連れて来た次第だ。どうしてこんなことをしたか聞いてみても本人はさっぱり覚えていないようだ。何故警察署にいるか分からないというばかりで話にならない」

鍛治町の松菱デパートの前の交差点は、浜松で最も繁

華な場所として知られている。いわば東京の銀座四丁目の交差点と言ったところだ。

昨年、兎を刺し殺し、女房を殺したと駆け込んで来た前歴が稔にはあったため、身元がすぐ分かり、警察としても前代未聞の奇行行為として書類送検した。

そもそもこの珍事は、鍛治町の飲み屋「かがり灯」の縄のれんを稔がくぐった時に始まった。稔は、「かがり灯」で飲んで勘定が払えなかった。

すると店の裏からやくざ風の男が出て来て稔に勘定を払うよう脅した。

酒をしこたま飲んだ稔は気が強くなっていた。

「無いものは払えない。付けにしておいてくれ」

「何、付けだと。当店では、一元の客には付けでは飲ませないことにしている。勘定も払えないなら着ているものを脱いで置いて行きな。飲んだ分には足りないが、残りはお前の家の者から払わせることにする」

「家に金を取りに行っても女房は一銭も払わないぜ」

「それはどういうことだ」

「俺は、女房に愛想を尽かされているからだ。どうせ一文無しだ。さあどうにでもしてくれ。なんならパンツまでくれてやってもいいんだぜ」

稔は、啖呵を切りパンツまで脱ぎ捨てて店を飛び出した。そのまま街角に立って交通整理を始めたという次第である。

その間のいきさつは全く稔の記憶から欠け落ち、気が付いた時には警察署の椅子に縛り付けられていたという。

帰宅後、つやは泣きながら稔に懇願した。

「あんた、あんなみっともない真似は今後金輪際しないでちょうだい。私は本当に恥ずかしかったやあ。死にたいくらいだっただに。人前であんたが恥ずかし恰好を見せていると私の恥ずかしい姿が見られているように思うじゃん」

「済まなかった。これからは酒を飲まんようにしよう。酒さえ飲まなければ、お前にも子供たちにも苦労を掛けずに済むからな」

稔は、つやに手をついて謝り、もう飲むまいと決心するのであった。

ところが、稔の飲酒癖は治らない。アルコールが切れると、彼は見えない糸に手繰り寄せられる夢遊病者のように巷の飲み屋に足を運ぶのであった。

無銭飲食が、度重なるにつれ前科が重なり刑務所暮らしも長くなった。そんなことを繰り返すうちに、昭和三十年九月、とうとう十年の刑期を言い渡され、網走刑務所に送られることになったのである。

服役中、養父母は、この世を去った。

その知らせを受け取った稔は、涙を流した。親不孝を

心から詫び、釈放され浜松に帰っても今度こそ一滴の酒も飲むまいと誓うのであった。

寒い網走の刑務所で一冬過ごすごとに、稔は老いの辛さと侘しさを感じた。浜松の温暖な気候の故郷と家族が恋しくて、これまで鬼のように思えた女房のつやの顔が慈母のように感ずる夢をたびたび見た。

その後の稔は、服役中ひたすら看守の言葉を忠実に守り模範囚として勤め上げ、八年で仮釈放された。

昭和三十八年秋、夢にまで見た郷里の浜松に戻って来た。

日本は高度成長期を迎え、街は活気に溢れていた。

東京オリンピックを翌年に控え、浜松のような地方都市でも繁華街にはビルが立ち並び、街の様子が一変していた。

稔は、浜松駅に降り立ち、浦島太郎のような心境で、まるで変ってしまった街の様子に驚きながら実家のある伝馬町まで歩いた。

つやは、細々と八百屋を続けていたが、子供は一人として家業を継ぐ者がいない。皆成人しそれぞれの道を歩み始めている。その子供たちも刑務所帰りの父を恥じてか家には寄りつかなかった。

網走刑務所服役中の八年の間に稔の体の中にあったアルコールを欲する虫が消え去り、体質が変わったように酒を飲みたいと思わなくなった。

刑務所暮らしを続けるうちに自分の心の弱さが招く不幸を身に染みて感じ、一滴でも酒を口にすると自分が自分でなくなることに恐怖感を抱くようになっていた。酒は、まさしく稔にとって悪魔を呼び寄せる魔法の水であったのだ。

つやは時間とともに、稔との嫌な思い出が薄れて行くのを感じた。生まれ変わって帰って来た彼を受け入れる気持ちが次第に芽生えてくる自分を愛おしく感ずるのである。

つやは別れたのも同然の亭主であっても、やはり稔はたった一人の夫であり男であったのだ。

稔が家に戻った十年後の昭和四十八年、畑野夫婦は共に六十の半ばを超えた。体力の衰えを感じた夫婦は長年開いていた八百屋を廃業した。

それから十年二人は仲睦まじくひっそりと暮らした。

稔は、七十の半ばで人生の幕を閉じた。網走から帰った後は一滴の酒も口にしなかった。

だが、稔の祥月命日には、つやが持ち込むお銚子が二本、線香代わりにいつも供えられていた。それは、つやの稔へのせめてもの供養であったのだ。

その供養は、つやの八十歳で他界するまで続いた。

（完）

ARについて

大貫陽平

現在、AR（Augmented Reality）（拡張現実）は、めざましい発展を遂げている。

ARの根幹は、現実世界に他の世界の情報を投影することにある。たとえば現実の空間に「架空の動物」という情報を投影し、あたかもそれが存在するかのように、人に思いこませるのである。

ARの代表的な例としては、架空の動物を捕獲するゲーム、「ポケモンGo」があげられる。その他にもコンサートなどの芸術分野では、すでにAR技術が実施されている。

現段階では娯楽方面での活用が目立っているが、今後は産業分野や個人レベルの実用が想定されているので、ARが今後社会にどのような変化を及ぼしうるかを考えてみたい。

（一）　AR装置

人間がARに接するには、何らかの機械が必要であるが、このための装置として最も期待されているのが「スマートフォン」である。

架空の生物をARで表現したい場合、利用者に、カメラを起動した状態のスマートフォンを「架空の生物が存在する方向」に向けてもらい、スマートフォンの画面には、カメラで撮影された背景に架空の生物を合成した画像を表示すれば良い。多くのスマートフォンは、加速度センサーやGPS（Global Positioning System、全地球測位システム）など、ARに必要な多くの装置が組み込まれている。また、スマートフォンの高い普及率は、これを利用したARサービスの市場が大きいことを示している。

ARの装置としては他にも、メガネにプロジェクタとコンピュータを組み込んだ装置、「ARメガネ」が考案されている。メガネのグラスに映像を投影できるようにすることで、現実世界の情報と架空の情報を融合させるのである。スマートフォンと比較すると現段階ではまだ全く普及していないが、利点としては、スマートフォンを手で持つ必要がなくなるので、フリーハンドでARを利用できるという点が存在する。

利便性の面から将来的にはARメガネも一般化すると考えられるが、普及率の関係上、当面の間はAR装置としてスマートフォンが用いられると考えられる。

（二）　今後考えられるARのサービス

現在考えられているARのサービスとしては、現実世界の情報とインターネットの情報を融合するサービスがある。インターネット上には様々な情報があり、その中に例えば「○○駅前の××というラーメン屋は美味しい」というような、地図と結びつけられる情報が存在する。こういった情報を用いたARサービスとしては、飲食店の看板にスマートフォンのカメラを向けると、その店のインターネット上の評判が表示されるサービスが考えられる。ARメガネであれば、目的地までの道のりを示す矢印を、メガネに投影するサービスも考えられる。

インターネット上の情報を現実世界に投影するサービスが、ARサービスの主流になると考えられる。

（三）　ARの社会的意義

ARは人とインターネットを強く結びつける技術である。今までインターネット上にある情報を人間が活用するには、それらを意識的に用いる努力が必要であった。例えばコピー機の使い方がわからない場合、現状だとコンピュータでインターネットに接続して、コピー機の説明書をダウンロードする必要がある。もしARが一般的になればコピー機を見るだけで説明書を表示することが可能である。

インターネット上の検索は一見簡単に見えるが、それなりに慣れるのに必要な作業がある。しかしARの登場により検索がいっそう簡単になり、多くの人が有用な情報に触れられるようになることが期待される。私生活の向上も見込めるが、それ以上に大きいのが産業分野での効率の向上である。

工場向けのARサービスの一例として、機器のメンテナンス手順書をARで用いて表示することで、作業者の負担を軽減するというサービスが、すでに存在している。ARの活用は工場のみでなくオフィスなどでも期待でき、今後企業には、ARの導入及びARを導入可能な環境の

整備（書類の電子化など）が求められる。

インターネットの登場により社会が大きく変化したと言われるが、ARの登場はそれと同等の変化を社会にもたらす可能性が高い。いままでインターネットは現実世界とはおおよそ独立した別個の社会であった。すなわち「現実社会」と「インターネット社会」の二つの別々の社会が存在していたと言っても良い。ARの登場によりこの状況は解消され、二つの社会の融合が進んでいく。

（四）　AR登場後の勢力図

スマートフォンを用いて架空の生物ポケモンを収集するゲーム、ポケモンGoは、現在最も流行していると言えるARコンテンツといえる。ポケモンGoでポケモンと遭遇するには、現実世界を歩きまわる必要がある。GPSを用いることで現実の位置情報とゲーム内の位置情報を対応させている。また、現実世界の目立つ地点（噴水や駅舎など）をゲーム内の重要な場所としており、現実世界とゲームの内容を強く対応させている。

ポケモンGoは「現実世界を探検してポケモンを捕まえる」という体験を利用者に与えている。これを実現させるために、インターネットサービス企業の最大手Google社の持つ膨大な地図情報が活用されている。ポケモンGoを開発したのはGoogle社から独立した米企業Niantic社であり、Niantic社の役員のうちの何名かは、Google社の地図サービスGoogle mapの開発に携わっている。

Google社は世界最大の地図情報を有している企業であり、他の企業の追随を許さない。このことは、今後ARサービスを開発する上での大きな優位性をGoogle社が持っていることを示している。現在考えられているARサービスの多くでは、地図情報が要求される。

例えば先に述べた「飲食店の評判表示サービス」の場合、サービス提供者は、どこに、どんな飲食店があるかを知っている必要がある。Google社に匹敵する規模で地図情報を有している企業は存在しておらず、国家の場合でも「世界のどこにどんな店が存在するか」などを組織立てて把握している国家は存在しない。

他にもGoogle社はスマートフォンにアプリケーション（追加機能）を配信するためのサービスを提供しており、仮にスマートフォンを用いたARサービスを提供する場合、このGoogle社の配信サービスを利用せざるを得ない。また、Google社がARサービス開発のためのサービスを行う可能性もあり、こうした場合多くのARサービスがGoogle社の参加で運営されることとなる。

以上のようにGoogle社は、ARサービスに必要な様々なものを所有している。Google社はインターネットの黎明期に検索サービスを提供することで今日の繁栄を築いたが、仮に今後ARが普及していく場合、インターネット登場時同様、Google社が優位な立場を築くのは間違いないと考えられる。

唯一ARサービスにおいて、Google社に対抗できる可能性があるのが、アメリカのコンピュータ企業であるApple社である。Apple社は自社規格のコンピュータやスマートフォンを販売しており、Google社同様にスマートフォンにアプリケーションを配信するためのサービスを所有している。また、Apple社はAR分野への投資に積極的である。ただしGoogle社と異なり、Apple社は地図情報などを有していないため、AR分野での劣勢を巻き返すためには何らかの「地図情報を用いないARサービス」を開発し流行させる必要がある。

ARサービスの将来に関しては、本命はGoogle社、対抗はApple社といった状況であろう。この二社の共通点として、どちらもスマートフォンの製造に大きく関与していることが挙げられる。

Google社はスマートフォンを動かすための基本ソフトウェア「Android」を開発し、他社（ソニーやパナソニックなどにも）に提供しており、Apple社は自社開発の基本ソフトウェア「iOS」を搭載したスマートフォンを製造、販売している。現在市場のスマートフォンのほぼすべてがAndroidかiOSを搭載した機種であり、この二社がスマートフォン市場における勝者であると言える。ARの共通基盤としてスマートフォンが利用される以上、ARの市場においてこの二社が台頭するのは当然の事であるともいえる。

他の企業としては無理に対抗しようとするよりは、これらの企業の影響下でいかに利益を上げていくかを考えるべきである。ARの基盤の面でGoogle社とApple社（特にGoogle社）は大きく他社に先行しており、余程のことがないと追いぬくことは不可能だからである。

（五）　まとめ

ARの登場により、人々がより早く簡単にインターネット上の情報にアクセスできるようになると考えられる。これにより、生活レベルの向上や産業の効率化が見込まれる。ARが普及していくにあたってはGoogle社またはApple社がリーダーシップを取っていくであろうが、企業としてはいかにこの二社と連携する態勢を整えるかが重要だと考えられる。

内田国の市物語

横山正義

『歴史ロマンと現代（中日新聞平成十二年九月五日）中村肇著』

名所旧跡の旅『塩の道』より。

まえがき

私は歴史の門外漢ですが、「郷里に誇りを持ちたい」と思いの一念から、平尾八幡宮、近隣の由緒、地図等の伝承をもとに、歴史書を調べてみました。

一、応声教院の近くに市がありました

市とはなんでしょうか。神代（自然）と現代との間にあり、交換・売り買い取引が行われる場所です。応声教院は「辻」という地名の場所にあり、四方から道がつながり、交差する場所にあります。幹線道路は遠州灘、駿河湾から信州につながる「塩の道」です。

古代から開けた場所で、山に沢山の横穴式古墳があり、大炊御門頼実の荘園を彷彿される、御門、頼実などの地名があります。

参考

近くに、塩の道の途中、海産物と山の産物とを交換する市がありました。応声教院裏手の尚宝院（応声教院末寺）があり、この西に市場がありました。駿河湾相良からの塩魚などの海産物と信州からの椎茸、山菜の漬物などの山の幸と交換する場がありました。

辻という地名にふさわしく、応声教院に鎮座する道祖神は伏犠と女蝸一、兄妹の近親相姦が十八、姉妹の同性愛が一、子育て地蔵二、地蔵菩薩が一、全部で二十三体です。

二、道祖神は境の神

蝉丸禅師

これやこの行くも帰るも別れても、知るも知らぬもおさかの関

蝉丸は目が悪い。盲目、座頭市、道祖神で逆髪姉との近親結婚。自らも近親結婚の子で目が悪いのではないか。歌神の柿本人麻呂も、目が不自由であったという伝承があります。家に柿木があったことから、柿本を名のったと言うことです。

昔話に登場する柿の木は、天や地獄など異界とのこの世を結ぶ境にたっていることがあり、市に立っていたのです。

柿の字は木篇に、作りは市で、市のゆかりの字です。柿は奈良時代に中国から渡来したとする説があります。

市は、本来農耕民・山地民・漁労民など、生業を異にする人々が物質の交換を目的として、接触するところに成立したものであり、そのために山際や河原、浜といった境界に、立てられることが多かったのです。

市は他界との、境界と見なされ神聖視されていました。そこには大勢の人が集まるので、ひとに見せしめのため、絞首刑が施行され、次に仇討ちがおこなわれ、そして、宗教者、芸能活動が行われる場所でもありました。

したがって、市の周辺には神社仏閣、当地においては応声教院・誠訪神社が建造され、自然や他国からの悪霊を防ぐため、神の巫女である、おんびん様がまつられています。

そして、柿の木にはこんな伝承があります。

＊柿の実は霊魂と深い関係があり、長野県東筑摩郡では、人魂は生前に住んでいた家の柿の木に来て寄り付き、人魂は熟柿だというのです。

＊柿の木から落ちると三年以内に死ぬ。

＊柿木の実がなる夢や食べる夢を、見ると葬式の知らせや、重病人があれば死ぬ。

＊柿木は念誦や葬儀用の薪とする。

＊嫁入るさい、柿の苗をもって嫁ぎ、死ぬと柿木を切り火葬の薪とする。

などの伝承があります。

三、市司が王を祭る

応声教院から塩の道、相良往返道を南に二キロほど下ると十字路があり、東側が耳川牛殺しという地名の場所があり、西側に平尾八幡宮があります。

江戸時代末期、平尾八幡宮の宮司が国学者、歌人栗田土満でした。晩年に、験が減じたと、柿木神社を富士の方面に預け、取り戻して、改めて創建し、験を強めたといいます。柿の木は神と人を結ぶ木なのです。

参考

平尾八幡宮由緒より

（この地に奈良朝の頃、柿本庄司という豪族が住んでいました。近郷を広く領有し、家、富栄えたので世人は柿木長者と称しました。庄司に女子が一人ありました。清家家末葉より粟田大蔵信麿という人を養子としました。この信麿という人が天朝に奉請し勅許を得て、河内の国、誉田（こんだ）八幡（応神天皇）をこの地に勧請し奉った。時に人皇第四十四代元正天皇の養老三巳未年紀元一三七九年西暦七一九年八月である。）

参考

誉田八幡宮

（足利義教が西暦一四三三年に当宮へ参拝の際に、旧い縁起を補遺して、新図を作り奉納した誉田宗苗縁起によれば、誉田（こんだ）八幡宮は欽明二十年（西暦五五九）欽明天皇によつて創建された。全国八幡神社の総本宮宇佐神宮は欽明天皇二十二年（西暦五七一）年で誉田八幡宮は十二年ほど創建が早いことになります。）

平尾八幡宮は誉田（こんだ）八幡宮を勧請した神社としては日本で最古で、現在の誉田八幡宮宮司のお話によると、ほかに鎌倉時代に千葉県に一社あるのみとのことです。誉田八幡宮の鎮座地は応神天皇稜と比される大前方後円墳の南、前方です。平尾八幡宮前方の丘、補陀洛浄土には前方後円墳があります。

平尾八幡宮の創建が養老二年（西暦七一九年）が事実とすれば、誉田（こんだ）八幡宮の創建は西暦五五九年となります。そして平尾八幡宮は誉田八幡宮、宇佐八幡宮についで日本では三番目に古い歴史の八幡宮となります。

門外漢の私はここで粟田氏と大蔵信麿とは違う人物ではないか。

鎌倉時代初期に藤原大蔵良信という人物が実在し、当地に卵塔の墓碑が実在するからです。当地が鎌倉時代初め、京都青蓮院の荘園であったので、関連の人物であったのではないか。粟田氏はだれであったのか。私の仮説として粟田人上ではなかったと考えるのです。

江戸時代末期の平尾八幡宮宮司、粟田土満は賀茂真淵の弟子で、賀茂真淵は万葉集の研究の第一人者でした。

万葉集の歌神、柿本人麻呂の柿本家は自宅門前に柿の木があったことから柿本を名乗り、粟田土満は柿本庄司の子孫と名乗っているので柿の木にゆかりがあるのでしょう。

どちらも市司の一族ではなかったと、私は仮説を立てるのです。

市の中で、神代の伝言を人代に繋ぐ人たちを、市子（いちこ）すなわち巫女でシャーマンだといい、卑弥呼も巫女ではなかったかといいます。

奈良の箸墓古墳は大市にあり、被葬者は大市すなわち巫女ではなかったかという説があります。

柿本人麻呂は市司で境の神、蟬丸は座頭市で、琵琶法師でした。

現在の劇場の座頭市は神代で悪という人を殺害し、また目明きと目暗、明と暗の境の人間です。

栗田土満は老いともに、弟子であり、妻の弟、栗田真菅に市左衛門の名を与え、市司として、歌神と弟子のあいだをとりもたせたのではないか。

山部赤人

田子の浦にうちでて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ

この歌が作られたのは田子の浦、富士という火山、ホッサマグナ等の上にあり大変、天変地変が過去にもあり、今後も予想される場所です。富士地溝帯、フイリッピン海溝を震源とする、地震による津波など大変な自然エネルギーと現世との接点の市ではなかったか。神霊パワースポットです。

栗田土満は験を強くするため柿木神社を、富士の方に神霊をあずけたのは、この神霊スポットではなかったと、私は思うのです。山部赤人は和邇・春日氏の一族で粟田氏と同族です。栗田土満の歌には同族意識があったのではなかろうか。

参考

栗田土満（くりたひじまろ）

（元文二年（一七三七）～文化八年（一八一一）七月八日、享年七十五歳。

遠江国城飼郡平尾村（静岡県小笠郡菊川町平尾）の平尾八幡宮宮司官。名は富五郎（幼名）・求馬、通称民部・壱岐守（吉田官）、号岡の屋。明和四年（一七六七）三一歳のときに賀茂真淵に入門し、天明五年（一七八五）十一月には本居宣長の門人となった。県門十二大家のひとりに数えられたほか、『古事記伝』二十一の巻の版下作成等宣長の信頼も厚く、『恩頼』に記された有力鈴門二十名のうちの一人でもある。また、自らも石川依平ほか多数の門人を抱えた。著書には、『岡の屋歌集』（歌集文化四年刊）・『神代紀葦牙』三巻（『日本書紀』注釈書・文政元年刊）・『思いのままに』（随筆・未完）等がある。詠歌は県居の流れを汲む古風和歌の名手として聞こえ、その円熟した万葉調と、記紀歌謡の導入は真淵晩年の歌風を踏襲するものとされる。また、『神代紀葦牙』は当代における『日本書紀』神代巻研究の到達点を示すもので、初版発行以来明治にいたるまで版を重ねて流布した。国学思想については、ほぼ宣長のそれを踏襲するものであるが、その古学観・社会感等に無意識的な変質を指摘することができる。）

四、平尾八幡宮に隣接して王の内という地名があります。

帰化人の住んだ所。

わが国土に来た外国人がすべて「帰化人」ではなく、国家の秩序に従い、その範囲に入った人（つまり「化内の人」）あるいは化内の人たるべき人を、古代法の精神では「帰化人」と理解しているのです。王化すなわち「帰化」と認識していた。新羅社祭っているので新羅から来た人たちであろう。

参考

（神宮皇后が三韓を征服して皇威を海外に示し、第十五代応神天皇の御代には王化（大王の徳化）三韓（高句麗、新羅、百済）におよび彼の地より来朝したる、ごときなり。）

『教育勅語（昭和天皇の教科書）杉浦重剛　勉誠出版』

王のうちという地名に隣接して牛殺しという地名があり、市があったのではないか。

参考

郷土史研究ナンバー1

（『牛殺し地名起源考』堀川録朗菊川町郷土史研究会一九九一年四月

菊川市内田に牛殺しという地名があります。堀川氏が由

参考文献

高倉一紀「岡の屋年譜考」（一）～（三）

（『皇學館大學神道研究所紀要』⑨～⑪）

高倉一紀「『神代紀葦牙』成立考―後期国学者における著実刊行の」一側面―」（『ピプリア』八十四）

堀川録朗『栗田土満伝』（栗田土満顕彰会）

参考

栗田真菅

（生年不詳～文化三年（一八〇六）六月十日。通称市右衛門。名管麿。遠江国城飼群（静岡県小笠郡）の人。栗田土満の門人で、その歌集『岡の屋集』の上本に奔走。土満の主著『神代紀葦牙』には真菅の説も取り上げられている。また、土満が一上～二三まで転写して、その後中断した『古事記伝』の残巻（二四～四四）を補写、揃本とした。本書は現在、京都大学付属　図書館蔵。

鈴屋には天明八年（一七八八）三月入門。）

参考文献

小山正『内山真竜』の研究。

中村幸彦「栗田土満稿本古事記伝をめぐって」

（『中村幸彦著述集』第一二）。

高倉一紀「岡の屋年譜考」三

（『皇學館大學神道研究所紀要』⑪

来として牛を殺してその肉を神に捧げ、豊饒、降雨を祈ったのではないかと論文を発表されています。根拠として次の例文を報告されています。

日本書紀

天豊財重日姫天皇　皇極天皇一年（六四二）

秋七月の甲虎の朔　略　戊虎の日、群臣相語て曰く、「村々の祝部の所教の隋に、或いは牛馬を殺して、諸の社の神を祭る。或いは頻りに市を移す。或いは河伯を祷る。既に所効無し」といふ。）

この例からも古代から、この地に市があったのではと考えます。

神輿を渡御する桜番場の道の東西に東市、西市です。東市は現在の耳川集落、西は現在の東平尾です。

旧栗田家跡地に柿の古木があり、小粒の柿、種（たね）が大きく数が多い、渋い。柿は奈良時代中国からもたらされたという説があります。

栗田家は江戸時代、賀茂真淵の弟子、栗田土満を輩出した名門家です。

栗田家四十七代目当主が八年ほど前（平成二十年ごろ）に亡くなられ、栗田家は途絶えてしまい、屋敷は人手に渡ってしまいました。

それよりさかのぼること十年ほど前、平成十年ごろ、四十六代御当主令室より私は招かれ、次が令室の残され

た言葉です。令室はすでに齢、百歳に近い年齢でした。「私はこの家に嫁いで、主人よりこの引き出しを開けない事と言われた」と本箱の下の施錠された引き出しを指し、筆者私に告げました。

令室の子息四十七代御当主が逝去されると、栗田家は途絶えてしまうことになり、最後、葬式のとき、親戚縁者の了解の下、私は引き出しを開けてみました。

すると、一枚の地図が出てきました。

奈良蹟、姑藪城（偉い人が住む場所の意）、唐都長安社、（皇城、興慶宮、大明宮、等）九重（高貴な人が住む場所）、仏陀国（新羅国）渤海国などの建物が平尾八幡宮宮司栗田家の前方に広がる茶畑のなかにあったとされる、図面でした。

江戸時代末期、内山真竜の遠江風土記には一構ありとあります。

市神として大明宮社、慶皇宮社、皇城、九重など。寺として、江戸時代の平尾村内平尾八幡宮より離れること百メートルに大蔵寺、五百メートルほどに慈恩寺がありました。

栗田土満の子孫神官四十六代当主栗田　たかし氏作の平尾八幡宮の古地図にある皇城、興慶宮、大明宮、慈恩寺などは唐の都、長安にあつた建築物です。そのほか九重、姑藪城など高貴な人の住む場所です。

地図一、地図二、地図三、地図四参照。

慈恩寺には石田三成の息女たえ媛の伝承があります。
唐の都・長安と平尾八幡宮創始に関した粟田氏を結びつけるものは、私案として粟田真人です。
石田三成の故郷、琵琶湖の湖北左和山白周辺には当地内田と同じく、奈良時代粟田氏が住んでいた伝承があり、そして、石田村は粟田氏発祥の地、京都東山青蓮院の荘園で当地内田と領家を同じくしていました。
その他に、青蓮院の荘園として、現在の滋賀県大津市にもあり、なにか当地内田と近江の国は関連があるように思います。

参考
『改訂近江国坂田郡志　滋賀県坂田郡教育会』
粟田臣に朝臣姓を賜ふ
（天平神護元年三月発巳、近江国坂田郡人粟田臣乙瀬・真瀬・斐太人。池守等四人に朝臣の姓を賜ふ。（続日本書紀）
称徳天皇の時、本郡に粟田臣あり。其の族繁栄せしか。乙瀬・真瀬・斐太夫・池守の四人同姓にして、在郡せり。何の勲功に依りて、朝臣の姓を賜はりしか分明ならざれども、同族四人同じ恩恵に浴す。居住の遺蹟、詳ならず。）

参考
『新修大津市7　　大津市（一九八四）』
（近江国

（中国儒教の根本聖典とされるそのうち詩経より
神鹿として聖所に飼うたことは、〔詩、大雅、霊台〕に「文王、霊囿に在り、雌鹿ここに安ず」これは春日大社で神鹿を養うのと同じ。
霊囿とは西周の神廟の鳥獣飼い場。囿は庭、かこいの意で林や池、鳥獣を養うところ）
鹿城とは王の住むところでした。そして平尾村のなかに大鹿という地名があります。
春日大社を奉る春日氏は粟田氏の祖先粟田氏と同じ、春日・和邇氏です。

＊粟田土滴の鹿の歌
鹿
あさもよし紀ノ川霧や隔面む鹿ぞなくなる妹とせの山
秋さればをじか妻こふ阿波々あはでやぬらむ長き此の夜を
筑波山このもかのもに鹿ぞなく神のいさむる妻ならなくに
遠方のしげき葉山のほぎりややほ霧がくりさを鹿なくも

六、王とは誰であったのか、
王とは皇胤の身分を示す称。天武天皇の御代に親王・諸王の別を生じたが、ついで定められた『大宝礼』の制規によると親王は皇兄弟・皇子（一世）諸王は皇孫（二世）・皇曾孫（三世）皇玄孫（四世）の三世代と定め、五世王は王名を称するも皇親の範囲外とした。

伊香立荘
滋賀県滋賀郡の荘園。現在の滋賀県大津市内。
立荘時期は未詳。無道寺領で、長承元年（一一三二）青蓮院行玄が無動寺検校を兼ね、これを契機に青蓮院が本所になったものか。保延元年（一一三五）の記録に荘名が見え鎌倉初期、青蓮院の収集は米六十石。北にあった葛川との間に鎌倉期を通じて境、争論が展開された。）

五、王を祀る
私は残された謎を追って見ました。
当地は鹿城（読み、からこ）卿と呼ばれていました。

参考
（城飼郡鹿城郷
平安期に見る卿名。「和名抄」遠江国城飼（きこう）郡十一卿のひとつ。訓は「加良古」。戦国期には唐木谷が見え、また「掛川誌稿」には、「上内田より山を隔て、南に枯木の谷と呼ぶところあり、・・・・・此枯木ノ谷を下内田と称す」とあり、唐木谷・枯木谷は当卿の遺称地と思われる。現在の菊川市下内田を中心とする一帯と思われる。裏山に横穴式古墳あり。）

鹿城とはどのような場所であったのか。

参考
『五経』

平尾八幡宮の祭神
足仲彦命　人皇第十四代仲哀天皇
誉田別命　人皇第十五代応神天皇
息長足姫命　仲哀天皇妃、応神天皇母神功皇后
仲哀天皇
═══応神天皇
神宮皇后
王とは誰であったのか？
それは仲哀天皇、応神天皇ではなかったのではないか。
どちらも大阪に前方後円墳があります。
応神天皇は五王のひとりであったという説があります。
＊粟田土満の歌に神功皇后を歌つた歌があります。

川
玉島の川の瀬光りな釣らすと裳ひきたたしし神代し思ほゆ

注書
玉島の云々
古事記に見えた、神功皇后が筑紫末羅県の玉島の里の川辺でお食事に河中の石に座して御裳の糸を抜き取って飯粒を以って鮎を御釣りになったことを詠じたもの。

七、王を祭った粟田氏とはだれであったか。

伝承によれば栗田家が以前、江戸時代のはじめ、戦国の世から平和の時代に変わる頃、栗田から姓を変えたというのです。栗田姓を調べてみると、天皇家・孝昭天皇の子孫に、栗田真人がいます。門外漢の私の仮説として、その子に栗田人上という人がいます。栗田信麿という人物がでてくるが、信麿は藤原良信ではないか、卵塔の良信墓碑が実在するからです。

栗田人上（あわたのひとかみ）（―七三八）

奈朝時代の地方官。天平の始め頃、太宰少弐に任ぜられ、同十年歿す。その詠歌一首は万葉集に収められる。

栗田人上は養老三年（七一九）に地方官として当地と縁があったのではないかと、私の仮説です。平尾八幡宮の創設された年で、栗田人上の父栗田真人がこの世を去った年です。

栗田真人（―七一九）

上代の学者、遣唐執節使、太宰師。その先は天足国押人命より出ず。父は左大臣嶋。平尾八幡宮創建の年に死亡しているのです。

学を好み能く文を作り容儀高尚であった。

大宝三年六月二十九日死亡。

栗田真人は遣唐使で則天武后と唐都長安で面会した人物です。

七〇三（大宝三年）栗田真人は唐にわたり、則天武后と面談します。

栗田人上は天皇家孝昭天皇の子孫で、栗田真人の子、そして山上憶良と父祖を同じくするのです。

田守は遣渤海使。

和邇・春日系図（図中枠内関連人物）

孝昭天皇―天足彦国押人命―押彦命―彦国老津命―彦国葺命

大口納命―難波根子建振熊命―米餅搗大臣命

春日臣人華―宇久臣―於保貝臣―磐麻臣

佐都紀臣―河内臣―美奈古臣―山菜臣―山部赤人

磐麻伎臣―萬臣―得定臣―大庭臣―柿本人麻呂

鳥子臣―細目臣―島臣―栗田真人―栗田人上・・・・栗田土満

栗田必登

山上憶良

岡上臣―野依臣―渕名臣―大樹臣―春日仲若子臣―小野臣妹子―小野臣毛人

小野朝臣毛野―小野朝臣老―小野朝臣竹良―小野朝臣永見―小野朝臣岑守

田守

小野朝臣篁

栗田人上の歌

梅の花さきたる園の青柳は鰻鬚（ひげ）にすべくなりにけらずや（万葉巻五）

＊栗田土満の歌には栗田人上を意識したように、梅と青柳を題材にした歌が十一と他に比して多いのです。

梅を

去年の冬さきそめてける梅の花春くる色はまたぞえならぬ

梅

ううらうらと霞む朝けに梅が香をさそふばかりの春風ぞふく

梅の花さきに匂ふなり玉だれのをすのすげきの隙もとめつつ

梅が香のはつかに薫るあしたより花に心をひそめつも

梅が香をふきくる風のなかりせば春の夜すがら物は思はじ

梅の宮に梅の木植うるとてよみてそへて奉れる

うゑはやす若木の梅は瑞垣にみづえ栄えてにほへとぞ思ふ

早梅

梅の花冬さく色もかはらねばのちこむ春のかひやなからむ

柳

青柳にぬくや白露玉のをのたまもゆら、に春風ぞふく

六田川かはそひ柳うちなびきかげそふ水もみどりなりけり

雨中柳といふことを

春雨のけふそめかくる青柳のしずくや野辺の色となるらむ

垣の柳

春風はふきも吹かずも誰がために垣つの柳うちなびくらん

＊栗田土満の柿本人麻呂に関する歌

柿本の神の御かたに

言の葉の神と聞ゆるいにしえの神ならふべし後ならはめや

＊市は生と死の境で、市司の柿本人麻呂、栗田土満の歌、どちらも死にまつわる歌が多いのです。

①岡部大人（賀茂真淵）の東にて身まかり給ふと聞きける時

②友達のしはすばかり身まかりける時

③駿河国なるいもうとの身まかりける時しはすばかりの身まかりける時父

④しはすばかり父の身まかりける時

⑤あくる年の春猶こもりゐて

⑥忌日に

⑦をじの十月ばかり身まかりける時

⑧人の娘の歌よみならはむとせしせしが程なくうせにけるを其の後彼の家にゆきける時よめる

⑨其の後人の夢

など五十句。岡の屋歌集より

八、内田国の奈良時代の歴史

六八四（白鳳）八色の姓制定。当地稲ヶ部は稲置といい、稲置が住んでいたのでは。

そのほか県史によれば、当地に軍団があつた、と言う説があります。

七〇一（大宝一年）大宝律令により。皇軍防人、常備の軍団として各国郡に駐屯。

七一二（和銅五年）太安万侶古事記撰上

七一九（養老三年）粟田真人死す。粟田何某平尾八幡宮建立、応神天皇奉る。

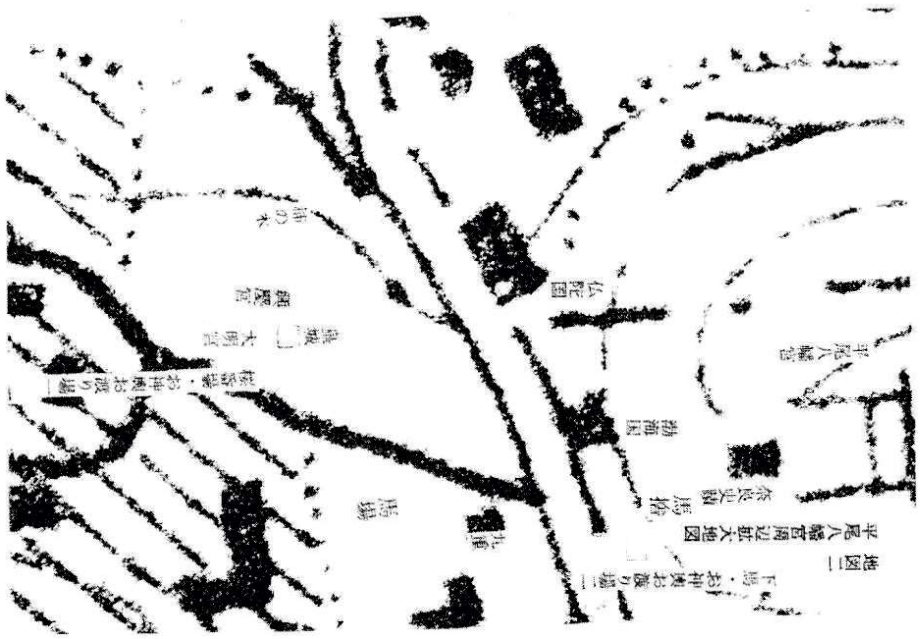
七二〇（養老四年）舎人親王ら、日本書紀撰上

伝承より私の仮説として、平尾八幡宮は粟田人上によって建立され、軍団を創設し、平安時代末期、京都粟田にある青蓮院の荘園のときに藤原良信が来たのではないか。粟田土満は藤原朝臣土満と名乗って歌を作っているのです。

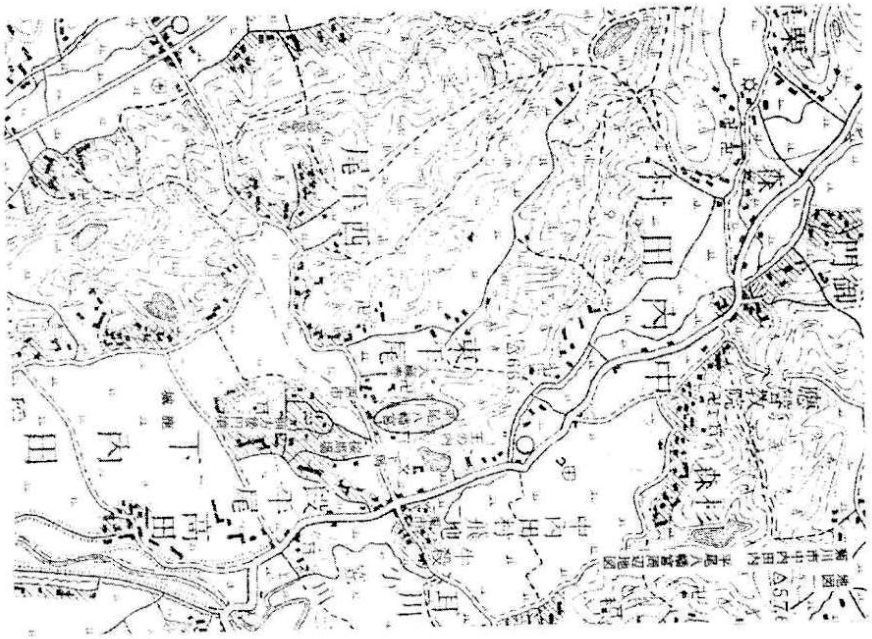
『参考文献』

国史大辞典　編集　国史大辞典編集委員会　吉川弘文館
日本史辞典　編集代表　藤野　保　編集委員　岩崎卓也
阿部　猛　峰岸純夫
鳥海　靖
発行者　朝倉邦造　発行所　㈱朝倉書店
日本の神仏の辞典　編者　大島建彦　園田稔
昭和天皇の教科書・教育勅語　杉浦重剛　便誠出版
―郷土誌―内田のさと　発行所　静岡県菊川市内田
郷土誌編纂委員会
編集　中　森秀
発行者　中　晴世
大阪府羽曳野市誉田三―一―八
電話〇七二―九五八―〇六三六
日本古代政治史研究　著者　岸　俊夫　㈱塙書房
公家人名大辞典　監修　野島寿三郎
日外アソシェツ（紀伊国屋書店）
日本古代史事典　監修　江上波夫・上田正昭
佐伯有清　大和書房
日本民俗宗教辞典　監修　佐々木宏幹・宮田　登・
山折哲雄　東京堂出版
字訓　白川　静　株式会社平凡社
世界大百科辞典　編集発行者　下中直人
株式会社平凡社
古代地名大辞典　編集　財団法人　角川文化振興財団
角川歴彦　株式会社角川書店
京都市姓氏歴史人物大辞典　編著者　京都市姓氏歴史人
物大辞典編集委員会
発行者　角川歴彦　株式会社角川書店
日本民俗大辞典上下　編集　福田アジオ・新谷尚紀・
湯川洋司・神田より子・
中込より子・渡辺欣雄
株式会社吉川弘文館

日本神話事典　監修者　大林太良・吉田敦彦　大和書房
日本古代中世人名辞典　編集者　平野邦雄・瀬野精一郎
株式会社吉川弘文館
続難読姓氏・地名大事典　著者　丹羽基二　新人物往来社
日本説話伝説大事典　編集者　志村有広・諏訪春雄
発行所　勉誠出版㈱
殺牛・殺馬の民俗学　筒井功　河出書房新社
曽我物語の基層と風土　二本松康広　三弥井書店
日本史大事典　編集・発行者　下中　弘　㈱平凡社
八幡信仰　中野幡能　塙　新書
内田「名所・人物」百選誌
発行　郷土を愛するうちだっ子はぐくむ協議会
教育勅語（昭和天皇の教科書）　杉浦重剛　勉誠出版
『牛殺し地名起源考』　堀川録朗
菊川町郷土史研究会一九九一年四月
改訂近江国坂田都志　滋賀県坂田郡教育会
新修大津市7　大津市（一九八四）
近江が生んだ知将　石田三成　大田浩司
サンライズ出版株式会社
歴史ロマンと現代（中日新聞平成十二年九月五日）
中村　肇著
新装版訳文　万葉集　編者　森　淳司　㈲笠間書院
本居宣長事典　編集　本居宣長記念館　東京堂出版
栗田土満略伝　堀川録朗　㈱開明堂
栗田土満翁伝　尾澤只一　松井プリント



地図二　平尾八幡宮周辺古墳分布図

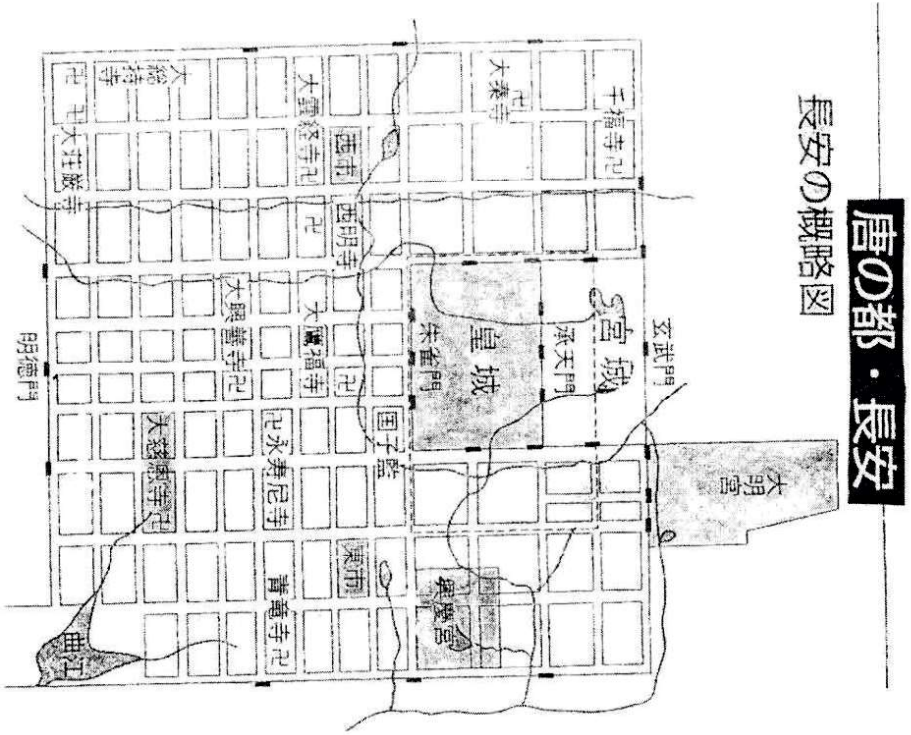


地図三　唐の都・長安
平尾八幡宮市神・皇城・大明宮・興慶宮・東市・西市・慈恩寺等

参照図
面白いほど良くわかる
古代日本史
著者　鈴木旭
株式会社日本文芸社発行

唐の都・長安

長安の概略図





地図四　航空写真

—郷土史—内田のさと　発行所　郷土誌編纂委員会

高齢社会フォーラム in 東京

鍋屋次郎

平成28年度

高齢社会フォーラム in 東京

多世代が共に輝く地域を創る

日時
平成28年7月20日(水)
10:00~15:30(9:30開場)

会場
イイノカンファレンスセンター
(定員:200名)

主催:内閣府　後援:文部科学省、厚生労働省

第1分科会

多世代交流のコミュニティ

高齢者と若者が共に安心して暮らせる住まいと地域社会を求めて

格差と貧困が拡大する今日、高齢世代と若者世代との対立をあおるような記事があふれています。今こそ世代間の対立ではなく協調や連帯を築くことが必要です。高齢者と若者との協働を通じて、安心して暮らせる住まいと地域社会を創るために何が必要か、実践例を基に考えます。

●コーディネーター

【1部】
袖井 孝子
お茶の水女子大学名誉教授



【2部】
宮崎 冴子
一般社団法人 社会貢献推進機構
キャリア開発研究所 所長



●パネリスト

近山　恵子　一般社団法人コミュニティネットワーク協会副社長
※[illegible]

白木里恵子　早稲田大学理工学部助教
※[illegible]

太田　善朗　NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ元理事
※[illegible]

内閣府主催の平成二八年度「高齢社会フォーラムin東京」が、霞が関のイイノカンファレンスセンターで去る七月二〇日に開催されました。

六月中旬のある日、お茶ノ水女子大学名誉教授袖井孝子先生から突然電話がかかってきて

「太田さん、七月二〇日の午後空いている？」

私はとっさに手帳を開いて

「何も予定は入っていません。はい、空いています」

「あーよかった。実はね、内閣府主催の高齢社会フォーラムがあって、私がコーディネーターをすることになっている第一分科会のパネリストをお願いしたいの。貴方が始めて今でも続いているシニアの子育て支援のお話しをしていただければ、と思って。パネリストを誰にお願いしようかと思ったとたん、太田さんのお名前が浮かんだの」

お世話になっている袖井先生からの依頼でもあり、何をどうするかよく分からないまま

「私で宜しければお引き受けします」

と返事をしてしまいました。

袖井孝子先生（注①）はNPO法人「シニア社会学会」の代表をなさって、高齢者の生き方をいろいろな角度から研究発表されています。

（注①）袖井孝子先生経歴　お茶の水女子大学名誉教授、シニア社会学会会長、NPO法人高齢社会をよくする会副理事長、著書　高齢者は社会的弱者なのか　「今こそ求められる老いのプラン」他多数。

袖井先生のご指導を受けた経緯

私は二〇〇五年に、神奈川県の認証（第八号）、横浜市の指定（第八号）を取得して、福祉サービス第三者評価機関（正式名称　ナルク（注②）神奈川福祉サービス第三者評価事業部）を仲間とともに設立し代表に就任していました。ナルクで福祉施設の評価を行った評価内容を、神奈川県と横浜市がホームページでそれを公表することから、評価機関内に評価委員会を設置し、その評価委員会の審議を経たものを公表用に県・市に報告することと定めていました。評価委員をどの先生にお願いするか考えた結果、先輩からの意見もあり、袖井孝子先生をお茶ノ水女子大学研究室にお伺いして、評価委員就任をお願いして現在に至っています。

（注②）ナルクとはNPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブの日本のN、アクティブのA、ライフのL、クラブのC　の四文字NALCを並べてナルクと称しています。

その後評価機関の評価活動も軌道に乗り、今では神奈川県内所在保育園の第三者評価を中心に高齢者施設・社会的擁護施設などの評価も行い、年間七十施設程度の評価を行っていますので、毎月のように評価委員会も開催することから、袖井先生には毎月横浜にお越し戴き親しくご指導をいただいています。

一方ではそれまでに多くの仲間とともにやっていたボランティア活動を組織化して、二〇〇〇年にボランティア団体「NPOニッポン・アクティブライフ・クラブ東横浜支部」（初代代表太田）を設立して活動していましたので、袖井先生はシニア会員による子育て支援活動も良くご存じであったことから、小生に声を掛けられたものと思います。

シニアの子育てボランティア

子育て支援団体へのボランティア活動のきっかけは、二〇〇〇年四月に「NPO法人びーのびーの」が横浜市港北区菊名で「子育てひろば」をオープンしたことによります。そのきっかけは、一九九九年に、アンテナネットの主催による横浜市内の子育て世代とリタイアメントシニアのマッチングセミナーが約一年間毎月一回開催され、そこに「NPO法人びーのびーの」の設立と同時に代表に就任された奥山千鶴子さんが参加されていて、小生も毎回の会合に出席していました。（たまたまNPO法人WACから小生にアドバイザー的役割を果してほしいという要請があったことによります）

その会が始まって六か月くらい経ったとき、その日の会の終了時に奥山千鶴子さんから

「事業計画の企画書です。ご覧になってご協力いただければと思います」

と、封筒入りの分厚い企画書を私の所に持って来られました。

「お預かりして拝見させていただきます」

と言ってその日は自宅に持ち帰りました。読むとその内容は、奥山さんと同年代、またはもっと若い人たちを孤独な子育てから解放するため、子育て中の女性が子どもと一緒に自由に参加できる「子育てひろば」を新設する計画書でした。

読み終えて、もうじき二人目のお子さんの出生を控えている三十代の主婦（奥山さん）が、社会的に三世代同居が少なく、また、親元を離れて都会で生活することからの、孤独な育児で悩んでいる人達の悩み解消のために立ち上がろうとするその考えに共鳴しました。

早速協力を申し出て、NPO法人の設立などの登記事務を、小生が銀行勤務時代に親しくしていた司法書士に依頼するなど、できることからお手伝いをはじめました

新たに設立したNPO法人の会計事務は、スタッフ全員

経理事務経験がなかったので、小生が会計事務担当者の指導に当たり、そのうち小生が財務及び法律関係事務（外部との契約他）の担当理事として設立後十年間お手伝いをして、スタッフも育ってきましたので理事を退任し、ＮＰＯの監事に就任して現在に至っています。

後日談ですが、「ＮＰＯ法人びーのびーの」での「子育てひろば」発足後、厚生労働省が同様施設を全国的に展開することとなり、厚生労働省に招かれ、システム・組織等について説明に霞が関に行ったこともありました。その後厚生労働省がその施設の全国展開を行い、現在ではその全国組織「ＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会」が設立され、全国の千団体を上回る子育てひろばが加入して、その法人の理事長は発足時から奥山さんが就任し、太田が法人監事を務めています。

二〇〇〇年四月の「子育てひろば」のオープン後、そこに来場する親子に対応するスタッフが不足したことから、ボランティア受け入れの必要性が発生、二〇〇〇年の六月頃と思いましたが、設立して間もない私たちのボランティア団体の月例会に奥山代表に来て戴き、どのような活動を行うボランティアを必要としているかをお話ししてもらいました。

その翌週から、先ず女性ボランティア会員が何人か連れだって子育てひろばのお手伝いに行きました。その関係が現在でも続いています。

その後、「ＮＰＯ法人びーのびーの」の活発な事業展開が社会的に注目されていたことから、二〇〇四年三月に横浜国大等三法人合同の調査が行われ、「ＮＰＯ法人びーのびーの」の経営そのものが素晴らしいことと、それを支えている要因として、ナルクのボランティア活動支援があることの調査結果が公表されました。（注③）

（注③）公表された調査結果は四十四頁に掲載しました。

その後、支援ボランティア団体の代表である私に対して、神奈川県及び鎌倉女子大学から「子育て支援に対するシニアのボランティア活動の状況発表」を求められ次のように実施しました。

（1）神奈川県

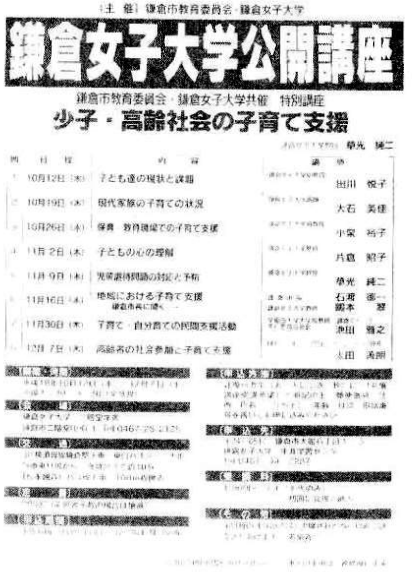
平成十七年十月二十三日に横浜市山手の神奈川近代文学館で行われた、松沢成文神奈川県知事の「知事と語ろう・・神奈川ふれあいミーティング・・・かながわぐるみ・子ども家庭応援プラン」の講演の後、「育児中の親子の居場所づくりに取り組んでいる」として、ナルクのボランティア活動の発表を行いました。



（2）鎌倉女子大学

平成十八年十二月七日、鎌倉女子大学公開講座（テーマは「少子・高齢社会の子育て支援」）第八回目に招かれ「高齢者の社会参加と子育て支援」の発表を行いました。

このような経緯をご存じの袖井孝子先生が、今回小生にパネリストを指名されたものと思います。



当日の「高齢社会フーラム」での発表内容

パネリストとしての当日の発表内容を、会場スクリーンに投影したパワーポイント画像を　頁に掲載しましたので、それを参考にしながらお読みいただければと思います。

A　シニアと若い世代の協働が長続きするポイント

シニアと若い世代の協働が長続きするポイントは、お互いに共通した目的に努力している、そしてお互いを理解しあっていることです。私達の場合の目的は、つどいの広場に集まってきている子育て中の親子に笑顔が出ることで

す。若いスタッフには目的達成感がもたらされます。そこに、シニアと若いスタッフとの間に、お互い素晴らしいパートナーとしての存在感を感じあうことが、世代間交流のコミュニティ存在の要諦と思います。

B　シニアがそこでどのような活動をしているか

シニアがそこでどのような活動をしているか・・・写真（1）（2）を見てください。親子が集まって遊んでいるところで、子どもたちと遊びます。その間、母親は遊んでいる我が子の姿を目で追いながら、母親同士で育児情報の交換や楽しいおしゃべりができて、孤独な育児から解放されます。

子どもと遊ぶシニアは、孫のような可愛い子どもさんと遊んで楽しい、子どもさんからエネルギーを沢山戴いたとよろこんでいます。

C　ボランティアが守るべきこと

ボランティアが守るべきことは、つどいの広場に集まってきた親子が、安心感をもってくつろぐことができるために、ボランティアがどのような態度と姿勢をとることが必要かを考えました。

シニアと若い世代の方々とは、ジェネレーション・ギャップからくる心理的すれ違いが生じます（この点は神奈川近代文学館で開催された県知事のタウンミーティングの中で、県知事からもその解消方法について質問がありました）。一般的にシニアは何かとお節介を焼くことが心配されるので、ボランティアに行く人たちに

●育児世代の人たちの生活スタイル・価値観・子育てのやり方などについて口を挟まない。
●頼まれもしないのにお節介を焼かない。
●子どもの躾には口を出さない。
●母親から質問等があった場合は、絶対に上から母親を見下ろさないで目線を水平に置いて話をする。
●優しい態度で母親の話をよく聞くこと。途中で話を折らない。
●答える前に、質問内容を確認する。
●ゆっくりと、分かりやすく答える。

などについて打ち合わせをして確認しています。

D　女性のボランティアが主にしていること

女性のボランティアが主にしていることは

●子どもと遊ぶ（男性も）
●ピアノを弾く
●お母さんの話を聞く
●イベントへの参加（男性も）
●スタッフ会議や研修時に、スタッフの子どもたちの一時預かり。

などです。

E　男性が参加して行ったこと

男性が参加して行ったことは

●簡単な家具什器の設置と修理
●花壇・野菜つくり
●木のおもちゃ作り

写真の木のおもちゃの豊富さをご覧ください。木製の調理台付きレンジ、単独のレンジ、おもちゃ、アイロンなどもっともっと沢山作りました。これはボランティア活動に参加された上場企業を退職された方が趣味として木のおもちゃを作っていて、レンジはドイツの木のおもちゃの絵本を参考として、八月一杯掛けて作ってくれました。その方は子どもたちが取り合うようにして喜ぶ姿を見て、多くの種類のおもちゃを作ってくれました。一度ご自宅に伺うと、奥の座敷の一間幅の押入れの下段の奥に様々な工具がつりさげてあり、手前には木をいろいろな形に切るために固定する台があり、押し入れ上段には作りかけのおもちゃや木の材料が置いてありました。奥様にお礼を申し上げると、「作っている間は静かでいいです」と笑いながら答えてくださいました。

●七夕に、ひろばに来た子どもたちが作って、家に持ち帰ることができる程度の大きさの笹。

これは港北区には竹藪のある山が沢山あり、ボランティアが知り合いの所にいって大きな竹から手頃な笹を切り取って百本くらい戴いてきます。苦労したのは、水に浸けておいても翌々日には笹の葉に生気がなくなってくることが分かって、毎日来る子どもは代わることが多いので、一週間に三度くらい切り取ってこなければいけないことが分かりました。

●クリスマスのサンタクロース役
●事務支援――会計・決算の指導と支援　税務署提出書類の作成手伝い

これはスタッフに会計事務経験者がいなかったので、簿記・財務諸表に堪能なボランティアがＮＰＯ法人規則を片手に、スタッフが記帳する家計簿的な収支明細から、税務署提出に耐える程度の書類作成を指導し、中でも苦労したことは税務署提出の消費税計算で、まだ消費税が始まった頃で税務署からも丁寧な指導はなく、書店で専門書を買ってきて読みながら計算をしました。

【事例12】 NPO法人びーのびーの

(1)NPO 法人概要

法人名称	NPO法人びーのびーの
代表者	理事長　奥山 千鶴子
主たる事務所の所在地	横浜市港北区大豆戸町1019－6(臨時) (横浜市港北区篠原北1－2－18)
連絡先	045－549－5210
認証年月日	2000 年 12 月 19 日(神奈川県知事認証)
設立趣旨・目的	この法人は、核家族化、少子化が進行し地域的つながりが薄れる中、子育てに悩む親を支援するとともに、子どもたちの健全な育成をめざし、地域の中で支え合い育て合うための施設運営事業を行い、活力ある住み良い地域社会を作ることを目的とする。
設立経緯	1999 年、アンテナネットの主催による横浜市内の子育て世代とリタイアメントシニアのマッチングのためのセミナーで、NPO 法人ニッポン・アクティブライフクラブの理事である太田善朗氏(現びーのびーの監事)と出会ったことをきっかけに、シニアの時間とノウハウを活用した子育て支援 NPO の設立に至った。(詳細は下記参照)
活動領域	？？(17 種から選定、複数の登録もあり得る)
スタッフ数	スタッフ約 30 名 子育てサポーター登録約 20 名 学生ボランティア登録約 80 名

(2)活動の概要

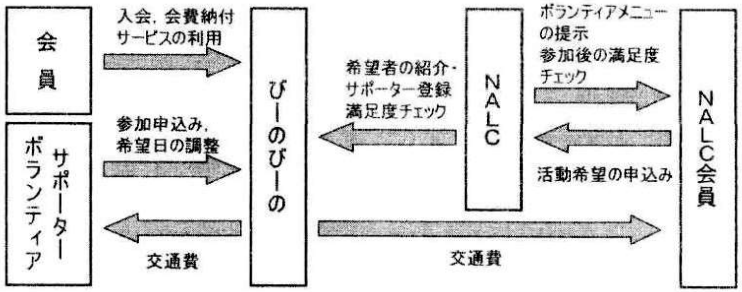
- びーのびーの代表者の奥山氏と事務局長原美紀氏は、港北区の子育て通信づくりに4年間携わってきた。横浜市は、核家族で子育てする在宅の主婦が多く、また転出入率も高いことから自分が育っていない場所で子育てする親が多く、また、こうした親には情報が少ないこと、横浜市には児童館などの施設がないことなどから、地域での子育てを支援する活動が重要であると考えるようになった。このため、行政と母親との中間的な視点に立って「幼稚園ガイド」「お医者さんガイド」「公園ガイド」などを作成し、販売するなどの活動を始めた。こうした取り組みの中で、子育て支援には情報も重要だが、最も重要なのは親子の居場所であり、居場所があればそこに情報も集まってくるとの確信を深めていった。
- 1999 年に、生活者やグループ等のネットワーク化を支援する団体アンテナネットの主催による横浜市内の子育て世代とリタイアメントシニアのマッチングのためのセミナーが開催され、その場で NPO 法人ニッポン・アクティブライフクラブ(NALC、1999 年 6 月 7 日内閣府認証)の理事である太田善朗氏(現びーのびーの監事)と出会った。このとき、太田氏から地域での子育て支援の重要性に対する賛同を得られ、また、NALC での NPO 法人設立等に関する経験・ノウハウや太田氏の現役時の職業(銀行の支店長)での経験から NPO 法人化を含むびーのびーのの事業全体への助言が得られたことにより、現在の

形でのシニア子育てサポーターが参加する形での「おやこの広場」ができあがった。

(3)高齢者の参加状況 [実態]

- 「おやこの広場」は、会員制により近隣の親と子が自由に参加できる場所である。入会金、年会費とも1000 円となっている。親と子がともに「広場」を訪れ、そこにスタッフ、子育てサポーター、学生ボランティアなどが集まり、「広場」での活動を支援する。このうち、有償のスタッフは6名のみで、その他は交通費だけを支給している。
- サポーターの役割は、「広場」の運営を支える業務全般で、各人の経験や能力などによって事務的業務のほか、子どもの遊び相手、ピアノの演奏など多様である。各人の活動できる範囲で参加する形態のため、週1回程度から週3回等まで参加頻度も多様である。毎月、翌月の参加日を各サポーターから申請してもらい、人数などは相互に調整しているため、1日概ね3～6名くらいで平準化している。
- サポーターのうち8割が 65～80 歳までのシニアである。年齢は高くとも、健康状態のよいシニアが多い。男性も2名参加しており、うち一人は 70 歳のときにヘルパー2級を取得した人である。
- シニアのサポーターは、NALC が提供しているボランティアメニューの中から自分で希望して参加している。NALC は通常は時間預託型でボランティアメニューを提供しているが、びーのびーのでの活動は預託の対象にならない。そのことを説明しても、子育てという領域で活動したい人は多く、最近では口コミにより参加を希望するシニアも出てきている。

図 びーのびーのにおけるシニアサポーターの参加の仕組み



- このほかに、木のおもちゃづくりなどを行う木工班の取り組みがある。子どもたちのための木のおもちゃで遊ぶ会を催す(不定期)ほか、「広場」の棚なども作成。木のおもちゃは会員以外にも有償で販売している。木工班のリーダーは、元上場会社の副社長を勤めた人で、木工はあくまで趣味であった。今では、子ども達や広場で使ってもらうこと、喜んでもらうことなどが「人生の喜び」であると言う。
- 参加しているシニアの感想として、「自分の役割がある」こと、「子どもからエネルギーがもらえる」こと、「自分の子育て期の経験や反省を活かしつつも、そのときよりも楽しんで子育てに参加できる」ことなどが聞かれるという。

(4)高齢者の活用に関する今後の方針

- サポーターには、2ヵ月に1回のサポーター連絡会や、定期的なスタッフ研修会などへの参加も求めており、必要な知識や情報がサポーターに届くような仕組みとしている。
- NALC の提供するボランティアメニューは、それぞれにコーディネーターが決められており、参加者側と受入側の相互の満足度を定期的にチェックする仕組みを取り入れられている。仮に、いずれかの満足度が低い場合は、改善を勧告したり、辞めてもらったりすることもあるが、ぴーのぴーのでは現在までそのような事態になったことはない。自らの判断で活動を辞めて行く場合はあるが、その理由はほとんどの場合、身体・体力上の問題である。これは、太田氏から、シニアサポーターに「子育てやしつけに関して勝手なアドバイスはしないこと。子どもとひたすら遊んであげること。親から求められたときだけは丁寧に助言すること」を伝え、徹底していることによる効果と考えられる。シニアと子どもとの関係は上手くいきやすいが、親との関係づくりは難しいという。このルールは、シニアと親との関係が上手くいかなかった他の団体から学んだものであり、運営上とても重要な点となっている。

(5)高齢者活用の阻害要因 と 高齢者の活用促進のための必要施策

- シニアが参加して得ているのは、報酬ではなく、「自分の出番が世の中にあったという喜び」である。自分が求められている、ということが参加の最大のインセンティブになっている。
- シニアサポーターは NALC を介して参加する形態となっていることから、シニア間の連帯意識などが強く、よい関係が築けている。
- NPO が欲している能力を持つシニアと NPO 法人(もしくは法人設立前でも NPO としての活動をはじめたい主体)とのマッチングが重要である。ボランティアに関心はあるが、自分に何ができるのか、他の人と上手くやれるのか等、漠然とした不安を持っていて参加に躊躇している人も多いのではないか。こうした人たちの不安をなくさせることが重要である。よく知らないということがこうした不安の原因になっているため、行政(特に区など身近な単位)や社協などが主催してボランティアフェスティバルのようなものを開催し、多様なボランティアメニューから自分で選び、体験できる機会をつくってはどうか。こうした取り組みは、1回で成果を求めるのではなく、長く継続して定着させていくことが必要である。
  - 本事例では、アンテナネットの主催による横浜市内の子育て世代とリタイアメントシニアのマッチングのためのセミナーが、NPO 法人そのものの設立のきっかけとなった。
  - NPO の設立については、事業の組み立てや申請・登録手続き等において、会計、税務などを中心に、ビジネスでの経験や知識が必要であった。特に、NPO の申請や会計報告などは、税務署との協議・調整が必要になるが、新しい制度であるために税務署側でもよく理解しているわけではない。このため、NPO 側で活動内容やお金の流れなどについて税務署の理解を得られるように説明していくことが必要となる。このため、シニアであれば誰でもよいわけではなく、会計・税務面の専門性と NPO 法人制度への理解、税務署などへの説明力・交渉力などが必要とされる。例えば、横浜市からの活動助成金は会計上では収益扱いとなってしまうが、利益はもちろん、スタッフの人件費もなしでやっていることなどを説明して、費用弁償の扱いとしてもらうことができた。
  - 太田氏「草の根のボランティアが育たないのはそこ(こうした役割を果たせる人材がいないこと)にあると思う」

◆考察・その他

- NPOの設立や事業の組み立てなどのタイミングで、ビジネスの経験や知識(特に会計、税務などに関する知識)を持つシニアの助言・支援が得られたことにより、適切に組織化・事業化が図られたと言える。このパターンは、退職したシニアの能力を生かした参加の一形態と考えられるが、誰でもよいわけではなく、会計・税務面の専門性とNPO 法人制度への理解、税務署などへの説明力・交渉力などが必要とされる。
- キーパーソンである太田氏のパーソナリティによるところが大きいと感じた。専門的な知識を持っているだけでなく、穏やかながら、シニアのリーダーとして苦言的なことも言うことができる人間性がある。

多世代交流のコミュニティ

NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ
元理事　太田善朗

シニアと若い世代が一緒に働く地域活動

事例 1
横浜市港北区 ボランティアグループ「ナルク東横浜」の 子育て支援活動

事例 2
保育園サポート「ナルク神奈川福祉サービス第三者評価事業部」の保育園評価とサポート

シニアと若い世代の協働がなぜ続くのか

そこには、シニアと若い世代の人たちとの共通目的がある。
お互いの目的達成
シニアの生き甲斐と喜び。
若い世代の目的達成感。
お互いに素晴らしいパートナーとしての存在感・・・ここに世代間交流のコミュニティがある。

子育て支援活動

対象事業所　NPO法人びーのびーの

① 2000年4月 親と子のつどいの広場事業 おやこの広場びーのびーの 開設。
② 2006年3月 横浜市港北区地域子育て支援拠点(どろっぷ・・・横浜市委託事業)開設。
③ 2016年3月 同上サテライト(どろっぷサテライト) 開設。

高齢者(シニア)の子育て支援活動

実施してきたことからの発言

NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ(略称ナルク)東横浜拠点 が実施している

子育て支援NPO法人「びーのびーの」へのサポート事例





子育て支援・・高齢者(シニア)の参加

子どもと遊ぶ
この間母親は、我が子の姿を目で追いながら、母親同士で育児情報の交換や楽しいおしゃべりができる。
高齢者(シニア)の感想
孫のような可愛い子どもさんと遊んで楽しい。そしてエネルギーを沢山戴いた、と喜んでいる。

子育て支援・・高齢者(シニア)の参加

つどいの広場で高齢者(シニア)が
守っていること
ジェネレーション・ギャップから来る
心理的すれ違い を表面化させない。
育児世代の
生活スタイル・価値観・子育て手法などについて、一方的に批判しない。
頼まれもしないのにお節介をやかない。
子どもの躾には口を出さない。

子育て支援・・高齢者(シニア)の参加

子育てアドバイス・・・質問に対して答える時の注意

目線を水平におく・・・見下ろさない。
優しい態度で・話をよく聞く・途中で話を折らない。
答える前に、質問内容を確認する。
ゆっくりと・分かりやすく・答える。

子育て支援・・・女性の参加

子どもと遊ぶ

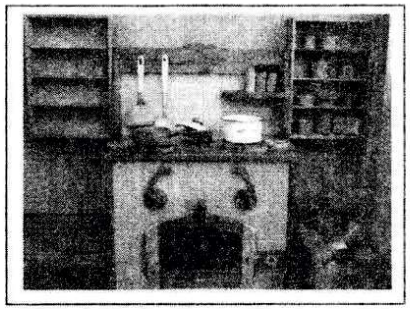
ピアノを弾く

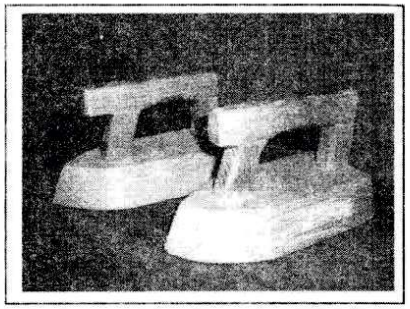
お母さんのお話を聞く

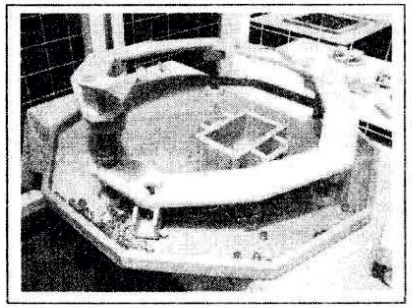
イベントへの参加

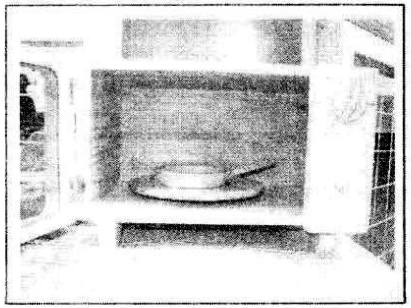
一時預かり(スタッフの研修時)











子育て支援・・・何が求められているのか

ひろばに来る人たち・・・同世代の交流と育児情報を求めて・・・・孤独の育児からの不安の解消・・・安心とやすらぎを得る。

「びーのびーの」では、「ひろばスタッフ」は同世代中心

「ひろばでの高齢者(シニア)」・・・サポートに徹する。

子どもとの遊び、運営上の裏方(何でも)、育児 相談(求められたとき)。

子育て支援・・・何が求められているのか(ひろば以外で)

「びーのびーの」の運営スタッフでは、手が回らないものは「何でも」。

花壇つくり、木のオモチャつくり、家具・室内造作(日曜大工仕事)、会計(決算支援・税務署提出書類支援)、法務的相談(契約書などの事前チェック)、イベント支援(クリスマスその他)。

ここに、「昔とった杵柄」の出番がある！！
惜しみなく提供するところに、喜びがある。

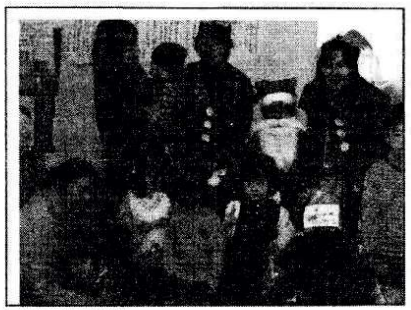


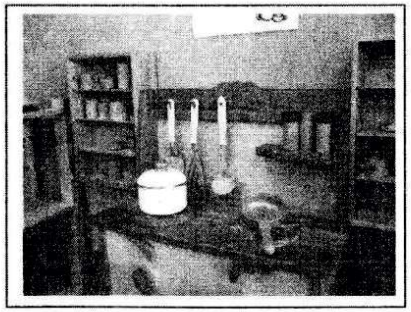
子育て支援・・・男性の参加

イベントの支援
- クリスマスでのサンタクロース役。
- 七夕の竹を調達する。
- 木のオモチャつくり。
- 簡単な家具の設置と修理。
- 花壇・野菜つくり。

事務支援
- 会計・決算支援・・・税務署提出書類の作成。









短歌

行雲流水（五十）

石黒修身

近詠三十首

近況

迫り来る現実厳し老来の矜持も美学も虚しくなりぬ

老いたれど友は夫々主張持つ同期の集まり励みとならん

急逝の友を語らう朋友（ともがら）も寡くなりて老いは深まる

リオ五輪夜のＬＩＶＥを観んとして昼夜逆転老人（おい）の所業は

寝苦しき夏夜に耐えてあかときの曙光を待ちて熟寝（うまい）に入る

束の間の単身帰国もそこそこに息（こ）は任地へと戦士の如く

自からの修業と思い引き受けし同人歌誌の選に苦しむ

たまさかに選委（まかさ）れしその批評達意に遠く悔いが残れり

社会、世界

大いなる台風いくつ列島に豪雨運びて惨禍を残す

リオ五輪の祭り終りて何かしら不安の残る世情となりぬ

ＩＴの生みしゲームに乗せられて老若男女はポケモンを捜す

スマホをば握りポケモン追いかける無我の姿を羨（とも）しと思う

定番の帽子と靴の老夫婦扶け合いつつスーパー巡る

核持てば勝者になると妄信の彼の国原爆の悲惨を知るか

九月

長月となれば曽遊の八尾にて追いしひと群「風の盆」憶う

「風の盆」その幽玄の舞の群闇に消えゆく幻のごと

菅笠（すげがさ）に顔は見ずとも夫々が男女（おとこおみな）の役割を舞う

季節（とき）ならぬ豪雨続きて故郷の北海道を水浸しとす

不馴れなる水害に遭い故郷は対応遅れて被害多発す

こと更に暑き夏去りこの国に懸案多き秋とはなりぬ

追悼・曽根竣作氏

最期まで文芸と短歌に親しみし知徳の人は天寿を遂げり

大正の時代を引き寄せ昭和をば詠みし歌人はロマンの使徒か

統治良き台湾に生（あ）れ名門に育ちし人は品格高し

格調の高き歌詠むその歌人性豪にして心優しき

不肖なる吾をさながら弟（おとうと）のごと慈しみ呉れし恩顧忘れじ

湘南は鵠沼に居し海を愛で江ノ島を詠み富士を謳えり

中学の同級生で親しみし「呉建堂」は「台湾万葉集」の編者なり

台北の帝大予科の想い出を「椰子の葉茂る」寮歌に籠めて

スポーツは太極拳と乗馬やラグビー好みし言葉はノーサイド

故郷をこよなく愛でて歌詠みし歌人の魂（たま）は台湾に遊ぶ

漢詩

潮汐錄（八十五）

鯨游海

飄飄たる＝世俗に拘わらず悠然とした。脱俗は無欲に通じる。先生は故郷の韮山に美術館や温泉場を寄贈した。

一介の＝つまらぬ。無価値の。独りのエリートでない。

村夫子＝田舎の先生。田舎学者。先生の生家は農家で定時制高校の教師をしながら大学院で学んだという。

一塊の＝ひとかたまりの土くれ。無価値にみえる土泥。

〔口語訳〕

阿弗利加大陸の風土病、不治の感染症「河川盲目症」この難病の制圧に貢献したのは一体誰であろうか？（それは）世俗をかけ離れたしがない田舎学者だった。彼は一塊の泥土を以って百獣と万民を救済するという偉大な実績を挙げた。然も特許料を辞退し、その代りに民衆に無料で投薬、この風土病を地上から根絶したのだ。

☆阿弗利加の涯なき闇を照らしたる
　甲斐の山家の皺深き人

大村智先生　　平成二七年十月

熱帯病魔盲目症
誰何貢獻此難題
飄飄一介村夫子
救獸援人一塊泥

〈大村智先生〉

熱帯の病魔　盲目症
誰か　この難題に貢献したるは
ひょうひょうたる一介の　村夫子
獣を救ひ人を援く　一塊の泥もて

押韻・題　泥

〔注　解〕

盲目症＝河川盲目症。阿弗利加の風土病。大村先生は伊豆伊東で採取した泥土より抽出した治療、予防薬イベルメクチンによって病魔を根絶ノーベル賞を授与された。

羽生結弦選手世界新記錄　　平成二七年霜月

滿堂氷結寂無聲
一躍四旋疑羽生
遂舞應弦而倒伎
感窮莫涙不千行

押韻・聲　生　行

〈羽生結弦選手世界新記録〉

満堂氷結して　寂として声なし
一躍四旋　羽生へしかと疑ふ
遂に舞ふ「応弦而倒」の伎を
感窮まりて涙　千行せざるは莫し

〔注　解〕

詩中に羽生結弦の四字を読み込んだ。

フィギア世界選手権のＮＨＫ杯戦で前代未聞の高得点３２２点を出し世界を驚かせた。３００点超の世界新。

應弦而倒＝史記・李廣列傳「李将軍の弓は、ビュンと弦の音がした瞬間、遠くの敵が必らず倒れる＝巧みな伎」

涙千行＝庾信・寄王琳「獨下千行淚」いっぱい泣く様。

この時、採点に参加した審判らが彼の神伎に感窮まって感激の涙を流したという程の名演伎だったという。

☆氷上の四回転の神伎に
　羽根ありしかと眸凝らすも

琴奨菊關初得賜杯　　平成二八年正月

仰天蹲踞祓蒔鹽
發氣揚揚相撲炎
不退不逃偏寄耳
和魂未戚撫鬚髯

押韻・鹽　炎　髯

〈琴奨菊関初めて賜杯を得〉

天を仰ぎ蹲踞し　祓って塩を蒔く
発気揚々　あひ撲つ炎
退かず逃げず　偏に寄るのみ
和魂いまだ滅ばず　鬚髯を撫す

〔注　解〕

仰天＝天を仰ぎみる＝荒川静香のイナバウアーの後継。

蹲踞＝うづくまる。しゃがむ。相撲の仕切直前の姿勢。

祓＝災厄や穢れを払い除く神事。ここでは動詞として用いた。鹽＝塩の正字。

撲＝うつ。なぐる。投げ倒す。相撲つ＝相撲。

戚＝滅。ほろぶ。ほろぼす。詩・正月「赫赫宗周　褒姒滅之」。鬚＝顎ひげ。髯＝頬ひげ。髯の正字。

琴奨菊は技に拘泥せず愚直の突進（寄る）が身上。

☆我れ退かず唯だ進むのみ一直線
　寄せ来る波の迫る如くに

《漢詩の流れ73》平安時代③巨勢識人、釋空海

巨勢識人（？―八二〇）平安初期の人。文華秀麗集、凌雲集、經國集に計二十五篇の漢詩を載せる従五位上の官人であるが詳細は明らかでない。

秋日別友（秋日友と別る）

林葉翩翩秋日曛　林葉翩々として秋日曛る、
行人獨向邊山雲　行人独り向かう辺山の雲。
唯餘天際孤懸月　唯だ余す天際孤懸の月、
萬里流光遠送君　万里流光遠く君を送る。

（後聯の解釈）願わくは天の涯に月影を残し、その流れる光で君を送り、遠く万里の彼方まで照らして欲しい。

釋空海　眞言宗の開祖。最澄と共に我が国平安仏教の泰斗。幼時より神童と称され、三十歳で渡唐、密教をわが国に伝え広めた。（死後朝廷から賜わった尊称）弘法大師。

後夜聞佛法僧鳥（後夜仏法僧鳥を聞く）

閑林獨坐草堂曉　閑林独り座す草堂の暁、
三寶之聲聞一鳥　三宝の声一鳥に聞く。
一鳥有聲人有心　一鳥に声あり人に心あり、
聲心雲水俱了了　声心雲水ともに了々。

（後聯の解釈）鳥は無心に鳴いているが、人には感ずる心がある。この鳥の声と人の心とが感応しあい、又この霊山の雲水と融け合って法悦の境地にひたるのだ。

漢詩

汲深録（六）

山寺晩鐘　山寺晩鐘

平成二十八年九月

遠尋山寺暮煙傍　遠く尋ぬ山寺　暮煙の傍ら
険路攀來借石牀　険路攀じ来たりて　石牀借る
忽聽鯨音自千古　忽ち聴く鯨音　自ら千古
雲端聲入覺無常　雲端に声入り　無常を覚ゆ

押韻・傍　牀　常

〔注　解〕

暮煙＝夕方にたちこめるもや。
攀來＝よじ登って来た。
石牀＝石でできた長いす。
鯨音＝釣鐘の響き。鐘の音。
千古＝遠い昔。
雲端＝雲の端。遠い所。

〔口語訳〕

遠路尋ねる山寺は、夕暮れのもやの中。
険しい路を攀じ登ってきたので、石の長いすで休む。
忽ち聴こえてくる山寺の鐘の音、自ら遠い昔からの響き。
その音は雲の端に消え入っていき、ただ無常を覚える。

松井秀人

過圓覺寺　円覚寺に過る

平成二十八年九月

松杉千樹綠陰深　松杉　千樹　緑陰深し
晩照山門同古今　晩照の山門　古今に同じ
白鹿尋師塵外境　白鹿　師を尋ぬ　塵外の境
鯨音隱隱滿幽襟　鯨音　隠隠　幽襟に滿つ

押韻・深　今　襟

〔注　解〕

松杉＝松と杉。
古今＝昔と今。昔から今まで。
白鹿＝白毛の鹿。円覚寺の山号は瑞鹿山、開山は無学祖元。白毛の鹿の群が衆と共に、祖元の説法を聞いたという故事。
塵外＝世間の外。俗世間を離れた場所のこと。
鯨音＝釣鐘の響き。鐘の音。
隱隱＝憂えるさま。かすかではっきりしないさま。車や雷の音のさま。
幽襟＝心中の深い思い。

〔口語訳〕

多くの松と杉とで緑陰が深い。

晩照の山門の姿は、昔と今も同じだ。
昔、白鹿がここ世俗の外の地に、師を尋ねて来た。
釣鐘の音が響きわたり、その余情が心の中に広がってくる。

旅窗暁月　　旅窓暁月

平成二十八年九月

白頭行客拂暁牀　白頭の行客　暁牀を払う
窗下放思歸路長　窓下　思いをはせれば　帰路長し
殘月西傾光彩淡　残月は西に傾き　光彩淡し
九天萬里望家鄉　九天　万里　家郷を望む

押韻・牀　長　鄉

〔注　解〕

白頭＝白髪頭。
行客＝旅びと。遊子。
暁牀＝明け方の寝台。
窗下＝窓の下。
放思＝思いをはせる。
殘月＝明け方の空に残っている月。
九天＝天を方角によって九つに区分したもの。
万里＝一万里。きわめて遠く離れた所。

〔口語訳〕

白髪頭の旅びとが明け方に寝床から起きてきて窓下で故郷への思いをはせると、帰路は長い。
残月は西に傾き、光彩は淡く
天のように遥かに遠い故郷を望む。

客舍聽琴

平成二十八年九月

小村客舍夕陽沈　小村の客舎　夕陽沈む
靜聽琴聲燭影深　静かに聴く琴聲　燭影深し
開牖清光千里思　牖を開けば清光　千里の思い
西風瑟瑟入幽襟　西風瑟瑟　幽襟に入る

押韻・沈　深　襟

〔注　解〕

客舍＝宿屋。旅館。
琴聲＝琴の音。
燭影＝ともしびの光。燭火の影。
清光＝月の光。
西風＝秋風。
瑟瑟＝風の寂しく厳しく吹く音のさま。
幽襟＝心中の深い思い。

〔口語訳〕

小村のひなびた宿屋があり、夕陽が沈んでいく。
静かに聴こえてくる琴の音、部屋には燭火の影。
牖を開くと月の光が射し込み、遠い故郷にも同じ月がでているだろうと思いをはせる。
さらに寂しい秋風も吹きこんできて、望郷の心に沁み込んでくる。

「神奈川漢詩連盟」創立十周年の記念事業の一環として、石川忠久先生監修の下、「歩こう神奈川　漢詩八十景　神奈川漢詩紀行」が、神漢連叢書として刊行されました。

ロボット雑考（その五）

三戸岡道夫

（農業とロボット）

現在の日本の農業は限界に来ている。少子高齢化に加えて、農業を継ぐ家族が少くなり、現在の農家の平均年令は六十六歳と余裕がなくなってきた。そのため耕作放棄地となった農地が、日本全国を合計すると埼玉県の面積と同じ位になるという事態に至っているという。

この状態をはやく改善しないと、日本の農業、食糧事情は、危機に陥る。しかし幸いと言おうか、これに並行してＴＰＰ問題が起きているので、ＴＰＰをチャンスに農業問題を解決することができる。そして、その時、その主役になるのが農業ロボットである。いや主役というよりも、農業ロボットがあればこそ、農業もＴＰＰを実現できるのである。

ＴＰＰで農業が成功するには、どうしたらいいであろうか。一口に言って、それは農業の大型化と、農業の法人化である。

これまでの日本の農業は、個人単位、家族単位であったが、これを法人化するのである。そうすれば、家族が農業を継がなくても、従業員を一般から採用すればよい。そして農地も大規模になれば、コストダウンになって採算性も上り、農業が発展的な方向で継続できるのである。

そこへ登場するのが、農業ロボットである。これまでの農業は肉体労働であるので、次第に就業者が減ってしまうのであるが、これからは肉体労働は全部ロボットがやり、人間は監理室からロボットの農作業を、操作監理すればよいのである。従って農業はこれまでの泥まみれの肉体労働から、一般の企業と同じような労働になるのであるから、後継者がないということは起らず、農業は継続できるのである。

また農業を大型化することによって、コストダウンが出来る。これまでも、農家にはある程度の機械は使っている。しかし小規模のため、高価な機械を買っても、一年のうち使うのはほんのちょっとの間だけで、あと長時間は倉庫の中で眠っている。しかし、これが十倍の農業会社になれば、フル稼働するわけで、機械コストもペイするようになる。

ではちょっと、無人で農作業をする農業ロボットの活動状態を見てみよう。

ある広大な農場で、いまロボットトラクターが田畑を耕している。トラクターの運転席には、もちろん人間は乗っていない。その田畑の運営している監理室の中で、タブレット端末を手にした人間が、トラクターの作業を監視しているだけである。このトラクターは衛星利用測位システム（GPS）による位置情報を使って、自動運転で農作業を行うロボット農機なのである。

農地の地図を元に、作業内容を指定すれば、自動で農機が作業を行うのである。田植え機やコンバインなど、他のロボット農機の開発も進んでおり、複数を同時に使えば、作業効率はさらに高まる。そして将来はこれらを一台に合体した綜合農業ロボットが、出来るであろう。

そして最終的には、「農業統合情報システム」という情報システムによって、農業は行われるようになるであろう。それは衛星画像による気象情報や、農作物の成熟期予測情報、病害虫予測といったデーターまでをも解析し、作業の内容や時間、農機の位置などの必要な情報を、スマートフォンに伝え、それを監理室で遠隔操作、監視するのである。

そして管制室は一つの農地だけでなく、いくつもの農地を管理出来るのであり、また遠く離れた農地も管理できるのであるから、農業会社に一つあればいいわけである。極端に言えば、農地は全国に散らばっていても、監理室は東京に一つあればいいわけである。すなわち全国で活動する農業ロボットを、一箇所で管理するというように将来の農業はなっていくのである。

したがって農業をやる人間も、普通の会社に入って、ＩＴで仕事を処理すると同じような仕事の形態になるわけであり、農業も特殊な労働形態の仕事ではなくなるわけである。現在のように、後継者がなくて、老人化することもない。一人が退職すれば、一般の企業のように一人募集すればよいのである。

また農業情報システムには、農業の

「何を、いつ、どのようにやるのか」

という農業作業全部の情報が入っているのであるから、素人でも判断できるわけであり、新しく農業会社へ入る人間も、それほど特殊な訓練を受けなくても、働くことが出来るのである。

また農業のロボット化と並行して、植物工場も今後拡っていくであろう。現在でもある程度の植物工場はあるが、今後はＩＴ技術をもっと活用した無人植物工場が拡っていくと思われる。

たとえば東芝は平成二十六年九月に、横須賀市内の工場の遊休施設に植物工場を設置し、レタスなどの葉物の生産を始めた。また富士通は会津若松市の半導体工場で、パナソニックは福島市のデジタルカメラ工場で、自社の植物工場を運営している。

また最近は農業だけでなく、漁業においてもＩＴとロボット技術がなくては、成立しなくなってきている。

平成二十五年の漁業就業者の数は、約十八万人と、過去最低となった。水産庁では、イルカの持つすぐれた超音波探知（ソナー）能力を活用した、通称「すごい魚探」という魚群探知機の開発を急いでいる。しかしこの機器は魚群量だけでなく、魚種や魚体長まで把握できる「次世代型計量魚群探知機」である。

一方、水産総合研究センターでは、探査ロボット「水中グライダー」で、水中の水温や塩分などを測定している。尾翼で海流をとらえ、少ない消費電力で動くこのロボットは、最大約一年間、約六千キロメートルを移動できるのである。

海中のプランクトンの数や水温、塩分濃度などのデーターを収集する仕組で、海が荒れていても利用可能で、人間では出来ない貴重な調査をすることが出来る。

このほか同研究センターでは、

ロボット補助艇（巻き網船の補助艇を無人化する）

洗浄ロボット（船の船底や、養殖場の網を清掃する）

耕運ロボット（干潟を耕す）

などの開発も進めており、漁業現場のロボット化も着々と進んでいる。

（農業ロボットへの政府方針）

人が乗らなくても、トラクターなどの農機が、自動で農地を耕す自動走行を、政府は二〇二〇年（平成三十二年）までに実用化する方針を固めた。

自動走行に必要なシステム開発を支援するほか、公道も走れるように、道路交通法などの法改正も検討する。

農業の担い手の高齢化や、農地の大規模化が求められていることを踏まえ、少ない人手で効率的に生産する技術を確立する。

ＴＰＰ（環太平洋経済連携協定）が合意に達し、日本の農業は生産性の向上が急務になっている。担い手の高齢化が進むなか、限られた人手で大規模化を実現するには、自動走行技術を取り入れるべきだとの声が、強まっている。日本国内のメーカーも関連の技術を開発してい

る。

まず平成二十八年度中に、農水省が農機の自動走行に関する指針をまとめ、平成三十年までに企業が自動走行システムを搭載した農機を製品化できるようにする。自動走行中に人が農地に立ち入らないなどの、安全基準なども明確にして、トラブルを未然に防ぐ。

平成三十年の段階では、たとえば三台のトラクターのうち一台には人が乗って、事故が起きないよう作業を見守る。一人の作業で三台分の仕事ができれば、作業効率は上がる。

平成三十二年には、農地に人がいなくても、離れた管制室などから遠隔操作ができるようにする。事前に農地の形状などを入力すれば、畑や水田に沿って土を耕したり、種をまいたりすることが出来る。

道路交通法などの法改正も検討する。現在は無人のトラクターが農地と農地をつなぐ公道を走るのは、道路交通法違反である。しかしこれからは、農作業は例外とするなどの措置を、念頭に置く。

（五輪ロボット国際競技大会）

ロボットによる五輪ロボット国際競技大会が平成三十二年に開催されるが、政府は、無人トラクターなど農機の無人運転技術を競技種目とする方向で検討している、農業の担い手不足や、農地の大規模化に対応するため、競技会を機に、技術の向上を促す狙いである。具体的な詳細は平成二十八年十一月までに決める。

競技種目は、社会への訴求力、発信力、研究開発などの加速力、国際性、継続性、人材育成の観点で選定する。工場や農業現場での「もの作り」、接客や介護などの「サービス」、インフラ点検や災害救助などの「公共」の、三分野を想定している。農機の無人運転技術は情報通信技術（ＩＣＴ）を活用した農業の生産性向上技術を競う種目として、「もの作り」分野に分類される見通しである。

政府は農業分野について、無人で耕作するトラクターの運用ルール作りなどを進め、平成三十二年までに農機の無人運転技術の実用化を目指す方針である。環太平洋戦略的経済連携協定（ＴＰＰ）発効に備え、ロボット技術が国内農業の競争力強化に不可欠である。政府はロボットの活用を成長戦略の柱に据えており、国内ロボット市場の規模を、平成四十二年に二兆四千億円と、現状の約四倍に引き上げる目標をあげている。

（シドニーの大フィールドロボティクスセンター）

日本の二十倍という広い国土に、日本の五分の一の人口が暮らすオーストラリア。その広大な土地を生かした大規模農業や鉱業をロボットで支えようと、シドニー大

が一九九七年に設立したのが、オーストラリアン・センター・フォー・フィールドロボティクス（ＡＣＦＲ）である。

ＡＣＦＲは、コンピューター科学や機械電子工学、数学など、様々な分野の百二十人の研究者を擁する。屋外で働くロボットを研究するフィールドロボティクスの分野では、世界有数の規模を誇る。

ＡＣＦＲが取り組む最大のテーマは、コスト削減につながる機械の自動化である。教授のサラ・スカリエは、

「農地であれ鉱山であれ、オーストラリアでは人件費が経営の大きな課題となる」

と言っている。

ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）によると、オーストラリアはルクセンブルク、フランスに次いで最低賃金が高く、アメリカの約一・五倍にあがる。強い日差しや乾燥した大地など、過酷な自然環境で働く人手は、不足する傾向にあるからである。

農業団体の依頼で開発した「テントウムシ」という愛称のロボットは、四輪で農地を無人走行する。センサーで作物と雑草を認識し、肥料と除草剤を使い分けて、ノズルで噴射する。適量しか使わないので、肥料代などを節約できる。

ソーラパネルを装着した「テントウムシ」は、晴れていれば太陽光のみで稼働する。機械メーカーに技術を供与して、商品化する予定である。価格は、農家が二年程度で投資費用を回収できる水準に設定する見通しである。

スカリエが描く農業の未来像では、農民はもはや農地で働いてはいない。自宅の居間でロボットに指示を与えるだけである。その未来に向けた一歩が、現在開発中の果樹園向けロボットである。

全地球測位システム（ＧＰＳ）やセンサーなどを使い、農園を無人走行しながら、カメラで果樹を一本ずつ撮影する。農家は花のつき具合いなどのデーターを基に、果実の収穫を予測したり、水や肥料が必要な果樹を特定するなどして、収穫量の増大につなげる。

現在のところ、ロボットはマンゴーやアボカドなどの果実を認識することはできるが、どの果実を収穫すべきかまでは特定できない。どうやって収穫するかも、今後の開発課題である。それでもスカリエは楽観的で、

「今はオーストラリアでロボットを使っている農家はほとんどいないが、五年後には多くの農家が導入しているだろう」

と予測している。

農業に先立ち、鉱業では遠隔管理などの動きが進行している。平成十九年にＡＣＦＲが英豪資源大手リオ・ティントと設立した「リオ・ティント・センター・フォー・マイン・オートメーション」は、トラックや鉄道の無人走行など、同社が取組む鉱山運営の自動化に一役買

ってきた。

スカリエによると、リオティントはこれまで同センターに約四二〇〇万オーストラリアドル（約三十六億円）を拠出した。

「我々の主な役割は、総業効率を向上させる理論や、アルゴリズムを開発することだ」

と、スカリエは説明している。

ＡＣＦＲの運営資金の九十五パーセントは、こうした産業界からもたらされている。これまでは計六十社と共同開発し、現在は七～八社のプロジェクトが進行中である。研究成果を実用化するだけでなく、産学連携を深めて、ロボットが活躍する新たなフィールドを切り開こうとしている。

農業のＩＴ（情報技術）化へ向けた取組みが、こうして今広がっている。

クボタは平成二十八年一月に、無人で耕作などの作業が出来る自動運転トラクターを公表した。ヤンマーも近く、ドローン（小型無人機）を使って、土壌の測定を始める。高齢化が進み、後継車が不足して、生産が思うようにできないといった国内農業の問題点をＩＴで克服する。まずは国内で販売し、今後はアジアでの展開を目指す。

クボタのトラクターは、全地球測位システム（ＧＰＳ）などで車体の位置を計測。あらかじめ登録しておいた農地の形状や広さのデーターをもとに、ハンドルや耕作装置などを自動で制御する。無人で農地を耕し、肥料、農薬の散布まで出来るようになる。凹凸が激しかったり、水浸しだったりすると、ハンドルを取られやすく運転が難かしいが、こうした水田でも安定走行できる。木股社長は、

「農作業に慣れない人も使いこなせる農機への要望が非常に強い」

と思っている。十年後までに全国十五ヵ所に自社農場を整備し、ＩＴ農業の実験場に活用することも発表した。田植えなどを自動で出来る技術開発も進める。井関農機やヤンマーも、クボタと同様の自動運転トラクターを開発している。

欧米の大手は小麦畑などで使う自動運転農機を開発しているが、日本の各社は水田での自動運転技術をいち早く確立。まずは国内で販売する。稲作が多いアジアも、将来は高齢化などで日本同様の課題を抱える可能性があり、需要が増えると期待している。

人手がかかる土壌調査もＩＴで効率化する。ヤンマーは土に含まれる水分や、酸性度を離れた場所から測るセンサーを、ドローンに装着。土壌を診断し、肥料を選んだり、土壌改良に活用したりする。

異業種企業が独自の強みを生かして参入する動きもある。ＩＨＩは人工衛星で作物の生育を監視し、情報を農家に提供する技術を開発している。人工衛星が撮影した画像で、作物の状態を把握。センサーで集めた土壌の状態などのデーターを組み合わせ、解析する。

トヨタ自動車はコメの生産法人向けのクラウドサービス「豊作計画」を開発した。生産法人と、農場にいる作業員の間で、作物の生育や作業状況のデータを随時やりとりする仕組み。田植えや収穫などの作業計画を自動で割り出す。

農林水産省の調べでは、国内農家の平均年齢は六十六・八歳（平成二十六年）で、六十五歳以上が六割を占める。多くの農家で高齢化が進んでいるが、作業員を雇うにも、人手不足で思うように集められない。

一方、ＴＰＰの大筋合意によって輸入農産物が増える見込みで、競争は激化する。ＩＴ農業が普及すれば、日本の農産品の競争力強化につながる可能性がある。

（トマトの収穫はロボットにお任せ）

パナソニックは農作業用ロボットに参入する。自社の画像センサーを使い、収穫が近づいたトマトを無人で収獲できる機器を開発した。農家で実証実験を始めており、センサーの性能を高めて実用化を目指す。また自社で運営している植物工場での利用も検討する。

開発したロボットは七万画素以上のカラー映像を撮影する小型カメラを搭載した。赤く色づいたトマトを特定し、形や位置を立体的に検出する。果実に傷をつけないように、生え際の茎の部分だけを引き伸ばして、収穫する仕組みである。夜間など、人がいない時間でも作業する。

収穫用のかごが満杯になると、無線通信で知らせ、空のかごと自動交換する。収穫量や品質をデーターで管理でき、収穫計画を立てやすくなる。一個の収穫時間は開発中の機種なら二十秒程度で、今後はセンサーの性能向上などで、六秒に速めていきたいとしている。

パナソニックはセンサーをはじめ、これまで培った技術を応用し、植物工場など農業分野に進出してきた。高齢化、人手不足に直面する農家のニーズが高い農作業用ロボットにも踏み出すことで、農業分野を新たに収益源に育てたい考えである。

（軍事用ロボット）

ロボットがこのように多方面に拡ってくると、兵器や軍事用ロボットも現代戦では不可欠になってくる。

軍事用ロボットとは、軍事的な活動に利用されるロボット全般を指す。危険な作業を人間に代わって遂行することが主な目的の、高度に自動化・無人化された兵器で、

世界的な開発競争が繰り拡げられている。

無人偵察機や無人爆撃機、地雷処理車、爆弾処理車、無人潜航艇などが代表的なものである。人間並の戦斗ロボットは、SF小説などではおなじみであるが、現実に進められている事例は非常に少い。

しかし平成二十七年（二〇一五）に、ロシアの軍事技術研究センターで、軍事用の人間型戦闘ロボットが開発された。

人間のような形をした戦闘ロボットが彩服姿で、四輪バギー（荒れ地走行用車輌）に搭乗している。そして金属性の指でハンドルを器用に操り、発車、カーブ、停止など、スムーズな運転をした。また遠隔操作によってロボットの指で銃の引き金を引き、銃弾五発を命中させた。

しかし軍事用のロボットは、要は戦闘に勝てばいいのであって、あえて高度な制御技術が必要な「人間型」にする必要があるのか、どうか、という根源的な問題がある。

無人航空機の保有国は、日本を含む八十ヵ国あまりに達する。爆弾処理ロボットなどの無人陸上車両も、アメリカでは二〇一〇年秋までに約八〇〇〇両を戦場に投入したという。そのほか機雷捜索用の無人水中航走体も現存する。

ロボット兵器が開発、使用されるのは、省力化に加えて、兵士に代って、

デンジャラス（危険な）、
ダーティ（汚染された）、
ダル（単調な）、
デイプ（奥深い）

という、いわゆる4D任務を遂行し、攻撃側の犠牲を出さないからである。そしてこれらは科学的技術の発達とともに、進化している。

現在使用中の大半は、遠隔操作の無人戦闘機のように、人間の命令でしか標的を選択、攻撃できない「人間統制型」である。

事前に設定された標的を自動的に探知、追撃・迎撃するが、人間が戦闘行為を途中で停止できる、セミ自律型ともいえる「人間監視型」である。航空機やミサイルの対空脅威に対する自動防空システムなどが該当し、すでに海上でも陸上でも、実戦に使われている。この段階では、まだ人間の意思をロボット兵器による敵対行為の開始や、中止に、反映させることが出来る。

しかし最近は、自律性を高める研究が進み、自律走行する警戒監視用の無人陸上車両や、空母で自律的に発着艦する無人艦載機の開発の成功例が出てきた。人工知能の研究がさらに進めば、二十年・三十年後には、人の意思を介さずに機械独自の判断で標的を選択し、迎撃する、自律型殺傷兵器の出現が予測される。

このような近未来の自律型ロボット兵器は、人間より冷静に行動し、興奮や恐怖など人間の感情による判断ミスをしないという。

しかし、そうした反面、そもそも機械に人間の生死の決定権を与えていいのかという、倫理の問題が生じてくるのである。

（空飛ぶロボット）

日本の農業は、農業人口の減少、農家で働く人の老齢化、TPPへの対応など、大変改期にある。その大改革を乗切るためには、農業の効率化は必須の要件であり、空飛ぶ無人機、すなわち空飛ぶロボットの活躍が今後大いに期待される。

東京大学と名古屋大学と凸版印刷、そして農業法人の西部農場（福島県須賀川市）などは、平成二十七年から「ドローン」（空とぶ無人飛行機）を使った、稲の生育管理システムの開発に乗り出した。

西部農場が管理する福島県内の水田を、ドローンによって上空から定期的に撮影する。そして稲の成長具合から、肥料を与える時期の判断や、病気の早期発見を、手元のタブレット端末などで、ほぼリアルタイムで確認するのである。農作業が効率化され、低コストの米作りが可能になり、老齢化やTPPへ対処する、日本農業大改革が可能になるのである。

ドローンは、「ドローンシステム開発」（東京・台東）の作ったものを使うが、縦横一メートル弱の大きさで、四枚のプロペラを持つ。離着陸以外は自動飛行でき、デジタルカメラのほか、葉緑素量などを測定する、専用カメラも載せることが出来る。

農業は現在、国内米価の下落や、国際競争の激化などで、稲作農家のコスト削減が迫られている。これまで人間が観察して判断してきた生育状況などを自動測定できるようになれば、農作物の品質を維持したまま、省力化につながるわけである。空飛ぶロボット「ドローン」は、日本の農業改革の決め手になるのではなかろうか。

（自律移動ロボット）

日本政府は平成二十七年七月に、自ら判断し行動する、自律移動型ロボットの運用ルールを、平成三十年度までに整備する方針を固めた。空港などでの実証実験を通じて、人に対する安全性を確保するルール作りを進め、二〇二〇（平成三十二年）年の東京五輪までに、公共の場での本格運用を目指す。小型無人機「ドローン」のように規制が後手にならないように対応を急ぐとともに、国際規格のルールを策定して、ロボット利用で世界をリードすることを狙う。

平成二十九年度に、国内外から自律移動型ロボットを開発している企業や団体を公募し、平成三十年度に、成田・羽田両国際空港や日本科学未来館など、先端施設がある東京・お台場地区、市街地などで、実証実験を行う。実験結果を分析し、一般環境での安全な運用を確保するために、必要なルール作りを進める。具体的にはロボットの動作速度や大きさ、外装の素材などの規定や、障害物などに衝突した場合に、自動停止する機能搭載の義務付けといった規制も検討する。

現在、自律移動ロボットの運用については詳細な規定や法律はないが、すでに一部の公共施設内などで来館者を案内するロボットや、施設内の清掃、警備、巡回を行うロボットなどが利用されている。また、ソフトバンクが平成二十七年六月に一般向けに販売した人型ロボット「ペッパー」の、初回販売で一千台を完売するなど、消費者にも身近になっており、今後、自律移動型ロボットの普及が急速に進む可能性がある。

政府がロボット運用のルール作りに着手する背景には、平成二十七年四月に首相官邸の屋上に、ドローンが落下した事件の影響もある。ドローンなどの無人機は、運用上の具体的なルールや法規制が整備されていない中で急速に普及し、人混みでの落下事故などの問題が起っている。自律移動型ロボットについても、運用次第では事故につながる可能性があるとみて、想定される問題を考慮しながら、先にルール作りを進めるべきだと政府関係者は判断したのである。

一方、政府はこうしたルールを他国に先駆けて整備し、国際規格化させることで、日本に世界中のロボット技術が集積する効果も期待する。運用の実証実験も、空港などの施設をロボットの海外売りこみに向けた「見本市会場」と位置づけることで、「日本がロボット先進国である」ことを、世界にアピール狙いもあるのである。

（ペッパー）

ソフトバンクでは人型ロボット「ペッパー」を販売しているが、その特色は次の三点である。

一、頭脳となる高性能コンピューターを、インターネットでつながった、クラウド型のロボットであること

二、使い方に応じてアプリを開発して、機能を追加できること

三、人間の感情を読み取ったり、自らの感情を表現したりできるので、人間との心理的な距離を近づけることができる

このペッパーの反応は好評である。発売前は、ペッパーをビジネスに使う法人向きと、家庭などに置く個人向きとでは、家庭向きが多いと考えられていたが、発表してみると法人向きの方が多い。

というのは、人間では限界があるような仕事でも、ロボットには出来るからである。例えば、商店の販売員は、売り場の商品の一つ一つについて細かい仕様まで覚えられない。客から質問されたとき、商品知識がないと正確な答えを瞬時に返すことができない。このような仕事はロボットが得意である。ホテルや駅で案内人の代りに働くとか、教育現場に立つとか、介護の場で高齢者の相手をするとか、活躍の場はどんどん拡がると思われる。

ソフトバンクはＩＢＭの人工知能ワトソンの日本語化を進めている。ワトソンは医療など分野ごとに特化した、膨大で深い知識を持っている。したがってペッパーの頭脳として使うには、相性が非常にいいのである。

今後、サービス分野でも定型的な仕事は、次第にロボットが担うようになるのではあるまいか。仕事の種類によっては、人間がやる仕事が先細りになっていくものもある。したがってそれが過度に進まないように、ロボットや機械の導入をコントロールすべきだという考えもあるが、しかし、今後人間の仕事がロボットに置き代わっていくのは、必然的な方向であると思われる。その動きはグローバル化で進むであろう。この流れに日本だけが逆らったとしても、生産性を上げることは出来ず、日本の競争力や国力にとって、マイナスであろう。

ロボットは現状の技術でも、相当の仕事は出来る。しかし、今後ますます進化していくであろう。ロボットの頭脳となるＡＩについては、もっと進化する余地は大きい。そうなればロボットとのコミュニケーションでも、人間がもっと楽しく感ずるようになり、自分を理解してくれるのはロボットだというぐらいになって、本当に家族に一員のようになれるのである。

世界に拡るロボット化の中で、日本のロボットビジネスは、五年後の東京五輪を強く意識し、この舞台で日本のロボット技術の凄さを、示すべきであろう。日本は本来、ＩＴ産業に強いはずであるが、今使われている機器は、アメリカや韓国のメーカーのものが多い。ネットビジネスも多くはアメリカ企業が主導権を取っており、日本企業は元気がない。

しかしロボットはいわば日本のお家芸であり、スポーツでいうと柔道のようなものであり、日本が絶対勝たなければならない分野である。

スティーブン・ホーキング博士や、ビル・ゲイツ氏などの著名人や、人工知能研究者の中にも、異口同音に、ＡＩ（人工知能）の急速な進歩がもたらす、人類への脅威を警告する者も多い。

ディープラーニングという新技術によって、ＡＩが人間の助けを借りずに進化できることがわかり、人間の能

力を超える時期が、意外に早いのではという見方を呼んでいる。

技術進歩に伴って、機械が人間の労働を代替していくのは、産業革命以来、常に起きている現象であるが、AIやロボット技術の進展は急激で、従来は脅威論とは無縁だった頭脳労働者の領域にも、その影響は及ぼうとしている。

AIやロボットは、人類の味方なのか、敵なのか、答えはすぐに出そうにない。

ソフトバンクが台湾の鴻海精密工業グループと、人型ロボットの共同生産を始める背景には、インターネット上のクラウドや様々なネットワークサービスと、ロボットを連携させた、新たな経済圏を創出する狙いがある。

少子高齢化などを背景に、先進国ではロボット経済圏が拡大するとの見方が多いが、実際の需要はまだ未知数である。世界に先行して量産化するソフトバンクにとっては、リスクと背中合せでもある。

日本ロボット工業界によると、人型ロボットのようなサービス提供型ロボットの二〇一四年の国内企業の取扱額（輸入も含む）は、前年比三割増の六一〇億円である。産業用ロボットの総出荷額五九〇〇億円と比べると規模は小さいが、「急速に普及する可能性がある」と、日本ロボット工業界では言う。

それ以上に市場拡大が期待できるのが、ソフトビジネスである。専用アプリ（応用ソフト）を入れること用途が拡がる点は、ゲームや動画、様々なサービスのアプリを取り込むことで価値が高まる、スマートフォン（スマホ）と同じ構図である。

ただ実際の需要開拓はこれからであるので、価格を抑えたとはいえ、企業や一般家庭に一台二十万円もするロボットの需要がどれだけあるかは、見通しにくい。具体的なビジネスモデルを如何に構築できるかが、事業成功のカギとならう。

（リハビリロボット）

手や足が不自由になった人のリハビリテーションに、ロボットを活用する医療機関が増えている。ロボットを使った訓練は、患者のやる気を引き出すことにもつながり、機能回復の効果も従来のリハビリと比べて、一般に高い。ロボットリハビリの専門外来も登場している。

ロボットアームのような器具の先端に患者が左手を固定し、正面のディスプレーに映し出された手の位置を確認しながら、矢印の指示に従って腕をゆっくりと動かしていく。腕には動きを補助したり負荷をかけたりする力が伝わり、患者はこれを感じながら、決められた作業を進めていく。

次の例は、佐賀大学医学部付属病院が二〇一四年十月に開いた「ロボットリハビリテーション外来」でのケースである。患者（七十六才）が使っているのは、帝人ファーマの上肢用の訓練支援ロボット「REOGOIJ」である。患者の男性は三年前に転倒して左手が上らなくなり、六月から週一回、一時間の訓練をしている。

「いろいろなリハビリの経験があるが、このように様々な動きが練習できる機械は始めてである。最先端の訓練をしているという感じで、励みになる」

と、やりがいと効果を実感している。

廊下では女性（六十九才）が、ホンダの「歩行アシスト」を下半身に装着して、スタッフに付き添われて歩行訓練をしていた。この装置は股関節部の角度センサーの情報をもとに、足の踏み出しをタイミングよく補助する。正しい歩き方を身体に教えてくれるので、訓練を重ねることで歩行能力が回復する。

歩行アシストの訓練プログラムは、通常、週三回で二カ月である。歩行能力を訓練の前後で比較すると、十メートルの距離を歩く時間が短縮し、六分間に歩ける距離が伸びた。効果には個人差があるが、脳卒中の後遺症で仕事をやめた人が、リハビリ後に職場に復帰した例もある。

佐賀大はロボットのリハビリ利用に二〇一〇年頃から本格的に取組んでおり、導入機器は、

○サイバーダインの「ロボットスーツHAL福祉用」
○帝人ファーマの「ウォークエイド」
○トヨタ自動車の「歩行練習アシスト」

など、上肢用、下肢用、合わせて八種類である。

兵庫県立リハビリテーション中央病院（神戸市）や、第一病院（東京都）も、ロボットリハビリの専門外来を設けた。リハビリテーション診療科などにロボットを導入し、生活期（維持期）のリハビリに使う例も増えた。

ロボット利用には現在、保険が適用されていない。多くは病院側が関連費用を負担しており、患者側負担は通常と変わらない。

現在は、ロボット利用の効果を最大限にするためのノウハウを蓄積している段階である。機器のレンタル費用が下れば、小さな病院でも導入しやすくなり、患者が自宅で使う形も増えてくるのではないかと思われる。

リハビリに使うロボットは上肢用と下肢用に大別され、国内では合せて十種類以上の機器が使われている。歩行訓練などを担う下肢用で最も普及しているのは、筑波大学発ベンチャーのサイバーダインの「ロボットスーツHAL」である。医療機関のほか、専用のフィットネス・スタジオでも利用されている。

股関節の動きを補助する機器では、ホンダの「歩行アシスト」が普及している。トヨタ自動車は平成二十六年

から、「歩行練習アシスト」と、「バランス練習アシスト」の二つのタイプを供給している。

これらの機器がモーターや油圧の力で動くのに対し、電気刺激による筋力の強化や、まひの改善をはかる「機能的電気刺激」（ＦＥＳ）と呼ぶ機器も、上肢・下肢向けに、製品化されている。

ジーボのジーボ（Ｊｉｂｏ）

ＫＤＤＩは平成二十七年八月、家庭向けロボット開発ベンチャーのアメリカ・ジーボ（マサチューセッツ州）と、資本提携した。会話したり情報を教えてくれたりするロボットは、家族で便利に使える新たなインターネット端末である。需要が飽和に近づいている携帯電話につづく商品になり、顧客獲得競争がロボットの世界でも始まりそうである。

ジーボは、二〇一二年創業のアメリカ・マサチューセッツ工科大学発のベンチャーである。

丸みをおびたロボットの名前は、社名と同じ「Ｊｉｂｏ」（ジーボ）である。自ら動くことはできず、卓上で使う。重さは三キログラム足らずである。顔認識機能などで、家族も見分けて、感情を把握する。

クラウドに接続され、相手の行動を学習して対応を変えていく人工知能を備える。たとえば料理で手がふさがっている時に届いたメールを、音声で知らせてくれたりもする。

携帯大手の家庭向けロボット事業では、ソフトバンクグループが平成二十七年六月に「ペッパー」を一般販売を始めて、先陣を切った。

ＮＴＴドコモも、タカラトミーと「オハナス」を共同開発し、平成二十七年十月に発売を開始した。

クラウドを使って様々なサービスを提供する点では、ロボットもスマートフォン（スマホ）も同じである。見守り役も果せるロボットなら、スマホと縁遠い高齢者や子供も、サービスの顧客に呼びこめる。外部企業がアプリ（応用ソフト）を提供できるようにすることで、ロボットの利便性も高まる。

さらにロボットが家庭で「あらゆるものをネットでつなぐＩＯＴインターネット・オブ・シングス）の核になる（ＫＤＤＩ）との読みもある。ロボットが気温や人の出入りに応じて家電の行動を指示し、快適な暮らしを演出する。ＫＤＤＩはすでにＩＯＴ関連ベンチャーへの投資を始めている。

日本国内では平成三十二年頃にサービス用ロボット市場が産業用を逆転し、二〇三五年には十兆円規模になるとの試算もある。

自ら移動できるロボット……、扱いやすく値ごろなロボット……、機能や価格など選択肢を拡げていければ、携帯大手が新たなロボット時代の担い手になる。

産業用ロボットは世界各国の工場で右肩上りに導入され、その半分は日本製である。しかし最近は医療や介護や、清掃など、家庭サービスなどの広い分野に拡がりつつあり、国が平成二十六年六月に、日本再興戦略改訂版の中で打ち出した「ロボットによる産業革命」の政策が、ロボットの進化、市場拡大の後押しになっている。そしてロボット戦略を策定するための「ロボット革命実現会議」の初会合が、平成二十六年九月に開かれた。

産官学の関係者をメンバーとして、五年計画のアクションプランを作る。それに基き技術開発の支援を与えて、汎用性のある標準規格化を進め、規制の緩和を行うのである。

東京五輪が開かれる二〇二〇年までに、産業用ロボットの市場を二倍の一兆二千億円に、それ以外のロボットの市場を二十倍の一兆二千億円に拡大するのが目標である。

関係する省庁は、これまで中心的な役割を果してきた経済産業省、文部科学省、総務省のほか、農林水産省が農作業支援、国土交通省がインフラ整備に取り入れるなど、幅ひろい分野におよび、ロボット技術の綜合的な利用が考えられる。

現代では、どのようなロボットが実用段階で評価されているか。経済産業省は平成十八年から、国内外でロボットを公募し、大賞、優秀賞を贈っているが、平成二十六年のサービスロボット部門の優秀賞の一つに、床下の点検をするロボットがある。

クローラーで走行するビデオカメラ搭載の小型ロボットを使い、離れた場所からコンピューターで、姿勢制御や段差を乗り越えさせる操作を行い、リアルタイムでカメラの画像により、現場の状態を詳細に確認が出来る。

経済産業省では、これまでの開発者の視点だけで考えていた便利さに加えて、ユーザー側の使い勝手の意見も積極的に取り入れる設計に変化してきていると、評価している。

また、人と日常接するロボットでは、「安全」の確保が必要である。このため、新エネルギー・産業技術総合開発機構（ＮＥＤＯ）は、平成二十二年にロボット安全検証センターを設置した、さらに、生活支援ロボットの安全性に関する国際標準化機構（ＩＳＯ）規格の発行にも、主導的に貢献している。

日立製作所は平成二十七年七月に、

「意見がそれぞれ分かれるテーマ（たとえばカジノを禁止すべきか）について、それぞれの理由をつけて意見

を発表する人工知能ソフト」を開発した。

人工知能は約九七〇万件の英文のニュース記事を分析し、カジノ禁止の議題で実験した。そして様々な単語が記事の中でどう使われているかを解読し、根拠になる文章を抜き出したのである。カジノを禁止すべきだとする意見としては、

「ギャンブルは健康によくない」

「犯罪が増加する」

などの意見が表明され、その反対意見としては、

「シンガポールでは経済成長につながった」

と指摘した。

将来は人間の判断を助けるような役割が期待される。企業の業務書類を使い、仕事に役立つ意見が提案できるようになるのではあるまいか。

（人工知能とがん治療）

人工知能（ＡＩ）は、物事を学習し、考える能力を持たせたコンピュータープログラムのことであるが、一九五〇年代に開発が始った。いろいろな分野での活躍が始っているが、医療分野でも病気の画像診断に使われるほか、論文や症例などから治療法を探し出すシステムの開発が進んでいる。

血液がんの一種である「急性骨髄性白血病」で東大病院へ入院している患者が、当初の半年間は二種類の抗がん剤で治療したが回復がおそかった。

東大病院では、平成二十七年からＩＢＭと共同で、がんに関連する約二千万件の論文をアメリカＩＢＭのＡＩ「ワトソン」に学習させて、診療に役立てる臨床研究を行っていた。そこで患者のがんに関する遺伝子情報をワトソンに入力したところ、急性骨髄性白血病のうち、診断や治療が難かしい「二次性白血病」という特殊なタイプだとの分析結果が、わずか十分で出たのである。このワトソンの治療法の変更に従って、別の抗がん剤を採用し、患者は数カ月で回復、退院した。

膨大なデーターの学習で的確な判断を行うＡＩは、多様な分野で応用が模索されているが、今後は医療への応用も本格化するであろう。

（中国のロボット研究）

現在、中国でもＡＩの研究が空前のブームである。

国を挙げて関連企業や技術を振興し、二〇一八年（平成三十年）までに、一千億元（約一兆六千億円）産業にする目標を立てている。そのために、ネット大手の「百度」（バイドウ）や、「騰訊控股」（テンセント）をはじめ、百社強の企業が参入している。

百度は二〇一六年九月に、北京市で、新技術戦略発表会を開いた。その中で注目を浴びたのが、バーチャルのＡＩ秘書「度秘」が、バスケットボールの試合映像に合わせ、合成音声で実況を始めた時であった。それは、これまでのスポーツ解説者の実況内容をＡＩに学習させ、独自開発した画像識別技術を使って、話すべきことを自己判断させて、語らせたのである。

この百度のＡＩシステム「百度大脳」の開発したのは、アメリカ・スタンフォード大学から引き抜いた、アンドリュー・ングである。そしてＡＩの基幹技術である深層学習の世界的権威であるアメリカ・グーグルと共同研究をしたのである。

また騰訊控股（テンセント）は、電子決済などの大量データーから消費者の行動をＡＩで分析し、提携企業の業務効率化を後押しする。中国側がとくに有利とするのが、音声認識技術であった。中国語の音節は四百音余りと日本語の数倍で、同音異義語も多い。従って将来中華圏では、中国のＡＩ技術を使った音声処理が普及する可能性がある。

超業熱に拍車をかけたのが、中国政府が二〇一六年五月に打ち出した、「人工知能三年行動実施プログラム」である。

「二〇一八年までに、世界をリードするＡＩ大手を生み出し、年一千億元規模の市場を作る」―というもので、画像認識や音声処理、センサーといった技術には、中央や地方の政府が補助金を出す。大口貸出先を優先しがちな銀行に対しては、ＡＩ企業へも重点的に貸し出すように指示した。政府もＡＩ振興のために、年間数百億元規模の予算をつぎ込むとみられている。

なお、中国でＡＩ事業を手がける主な企業は次のような企業である。

百度―自動運転車やＡＩ秘書、自動翻訳に力を入れる。

テンセント―対話アプリの蓄積データーをＡＩに解析。

ＡＩ記者も。

アリババ集団―電子商取引やクラウドのデーター分析にＡＩを活用

科大訊飛―ＡＩを活用した音声識別と音声入力が主力

優必選科技―ＡＩ搭載のロボットを開発

北京旷視科技―ＡＩを使った顔識別に強み、決済サービスへ応用も

地平線機器人―ＡＩ向け半導体チップを開発

（つづく）

吉宗と大岡越前
―享保の改革―

千坂精一

「石高一万石につき、百石を幕府に献米すること」であった。つまり、総石高の一パーセントを上納しろというのである。

そのかわり、

「献米制度実施中の参覲在府期間を半年に短縮する」恩典を与えた。

窮余の策として吉宗は上手いことを考えたものだ。

というのは――。

諸大名には出府して一年滞在が莫大な出費であった。それが、石高の一パーセント拠出すれば在府期間を半年間短縮されるというのだから、悪くない話であった。

幕府は諸大名の在府期間を半年間短縮したところで費用がかかるわけではないから、痛くも痒くもなかった。

この法令は、表面的には幕府の互譲の精神のように見

諸大名に上納（上米）を課す

累積赤字に喘いでいる企業を再建させるにはまず組織を単純合理化して諸経費を収入以下に削減し、縮少均衡を図るのが応急処置であることは誰もが承知しているのだが、これが言うは易くしてなかなか難しいのだ。

もっとも手っ取り早い再建方法は、ずばり収入の増大を図ることである。

吉宗も、そう考えたに違いない。

だが、幕藩体制といっても幕府の収入は天領の総石高四百万石の税収だけで諸藩からの上納制度はなかった。

そこで吉宗はまず財政の窮乏を訴えて諸侯に一部協力して貰おうと身勝手に考えた。体のいい集りである。

吉宗が諸侯に発した『上米令』は、

えるが、実のところは諸大名からの無償取りである。

「窮すれば通ず」

というよりまさに吉宗の苦肉の策そのものであった。

この開府以来前代未聞の上納政策は十年つづき、財政再建に少なからず寄与した。

年貢率の引き上げを策す

吉宗の改革の最重点政策は、年貢率の引き上げと、課税対象地を拡大する新田の開発であった。

吉宗が年貢の徴収方法を検見取法から定免法に変えたのは、合理化だけではなく、年貢率引き上げのための段階だったのである。

吉宗は、三割にまで落ち込んでしまっている年貢を、幕府創設期の七割は無理としてもせめて五割（五公五民）にまでは戻したいと考えて、定免法をいいことに強硬な引き上げをやったので、農民の抵抗が激しかった。

そこで吉宗は、妥協策として収穫時に大目に徴収しておき翌年春から夏にかけて農民の食い扶持が不足すると返す『扶食拝借法』に改めた。現代の年末調整である。

そして、凶作時には検見取法に戻すことも約束した。

しかしこの妥協案も収穫時の徴収年貢と扶食借りとの差額が一定しないので農民の不満解消にはならなかった。

そこへもってきて、のちに勘定奉行に抜擢される勘定吟味役の神尾若狭守春央が、

「百姓と胡麻油は、絞れば絞るほど出る」

そう放言して年貢増徴に辣腕を振るったので、幕府の強行な年貢増徴策に堪りかねた農民の一揆が多発した。

この享保一揆は、数千人単位からときには万を超す大規模なもので、世はまさに一揆時代に入っていった。

開府百年の歪みを是正するための『享保の改革』は大規模で凄まじく、上意下達の一方通行だったので、農民にとってとても善政とはいえないものであった。

新田の開発

平和な時代を迎えた江戸期初頭は大開発時代で、社会資本の整備とともに新田開発が大々的におこなわれた。

だが、四代家綱時代の寛文のころになってくるとそれまで開発一辺倒で保全処置を怠ってきた付けが回ってきて、さまざまな障害がいちどに噴出した。

労働力不足で米の質が低下し、雨がつづくと田畠の冠水や洪水が起こって人畜に被害がおよび、さらには、共同で所有している肥料用の入会採草地が流出してしまうなど、散々に痛めつけられた。

増産につぐ増産で遮二無二突っ走り、足許を疎かにしてきた罰であった。

なにごともそうだが、均衡感覚を失ってはいけない。

これによって、開発至上主義農政は挫折し、転換を余儀なくされてしまった。

そんなことから、つぎの綱吉時代の元禄期は経済的に豊かになったということもあって、新田の開発には極めて消極的であった。

吉宗は財政の立て直しにあたり、年貢増徴策の一環として、この綱吉以来中断している新田開発に着目した。

吉宗は、人々の往来で賑わう日本橋の袂に『新田開発に関する高札』を掲示して、開発人を募った。

財政窮乏のおりから、開発費用を大商人たちの資本力に依存しようとしたのである。

他人の褌で相撲を取ろうというちゃっかりした思考であったが、そのかわりに恩典も与えた。

開発に成功したら、その投資金額の十五パーセントを小作料として年貢同様に徴収することを保証した。

つまり、投下資本の十五パーセントを新田の賃貸料として認めたのである。

この享保七年（一七二二）に吉宗の発想で誕生した、農民に新田を貸し付けて賃貸料を取るだけで自身は農業経営をしない寄生地主制度は、明治維新の地租改正によってさらに発展し、昭和二十一年（一九四六）二月一日に施行された『農地調整法の改正』（農地改革）にいたるまで延々と二百二十五年もつづいた。

もうひとつ、吉宗のとった積極策がある。

それは『代官見立新田制度』というもので、幕府直轄地（大領）を支配している勘定奉行配下の代官達に土地を見立てて開発させればその身一代限り新田の年貢の十パーセントを支給するという思い切った奨励金制度を設けたので、代官達は新田用地の発見に躍起となった。

沈滞した雰囲気を活性化させようとするときには、こういう蘇生剤の役目を果たす報奨制度が手っ取り早く、しかも確実に効果をあげる。

吉宗は、人を積極的にさせる術を心得ていたようだ。

こうして吉宗は、新田開発の推進に意欲を燃やして、積極的にのめり込んでいった。

消費の抑制を図る

元禄時代は、減税による可処分所得の増大で庶民の生活水準がどんどん向上し、世をあげて華美で贅沢な生活に浸るようになっていったことはすでに述べた。

そのころ吉宗は紀州藩主であったが、一日二食の習慣が一般的になってもなお、

「身を養うには一日二食で充分であり、それ以上はみな腹の奢りである。太平の世に腹一杯食べる癖をつけておいては、非常の時に充分働くことができない」

そういって、家臣がいくら勧めても二食を固執した。

また、衣類も絹を用いずに、質素な木綿でとおした。

そんな吉宗であったから、倹約は改革政治の座右の銘であり合言葉であった。

吉宗の『倹約令』は、身分相応にといった程度の生温いものではなく、

「過剰な消費は贅沢」

そう決め付ける厳しいものであった。

一例をあげると、諸商品が潤沢に供給されていることに慣れて使い捨てする傾向を戒めているし、主食の米麦や医薬品以外の増産または新製品の開発を禁止して、贅沢な商品をつくって購買意欲を刺激する風潮に歯止めをかけている。

しかし、これとても、贅沢に慣れた庶民生活の向上を食い止めるまでにはいたらなかった。

そこで吉宗は、さらに翌年追い打ちをかけるように具体的な『倹約令』を出した。

○　破魔弓に金銀の箔、金物などをつけてはならぬ。従来通り丹、緑青などで彩色すること。

○　羽子板は今後飾り用の大型のものをつくってはならぬ。

羽根つき遊びの普段用のものはよいが、それも贅沢な飾りはつけないこと。

○　雛人形は八寸（約二十四センチ）以上の大型雛をつくってはならぬ。近年だんだん贅沢なものになってきているができるだけ質素にすること。

○　子供の遊び人形も八寸以上のものをつくってはならぬ。また、金銭の彩色や緞子の衣装もならぬ。人形台も質素にすること。

そう事例をあげて戒めている。

このことについて、町奉行大岡忠相は、業者のなかから実力者百人ほどを選んで組合をつくらせ、その組織力を利用して徹底させようとした。

だが、華美、贅沢な生活に慣れてしまっている庶民は、過剰消費の抑制や新規商品禁止の『倹約令』に反発して、慎もうとはしなかった。

出版物を規制する

『元禄』という絢爛豪華な時代は、人の心を浮わつかせ金儲けと情事に現を抜かす頽廃の方向にはしらせた。

その様子は、以前にわれわれが経験したあの高度成長時代のことを思い起こしてみればわかるはずである。

当時の世相を書いたのが浮世草子といわれる小説本で、井原西鶴が『好色一代男』『好色一代女』『好色五人女』『日本永代蔵』『世間胸算用』などを、その西鶴に私淑した江島屋其磧が『傾城色三味線』『商人軍配團』『世間子息気質』など、現実主義的で享楽主義的な人々の生きざ

まを書いてつぎつぎに発表した。

また、身分制度の束縛と快楽主義世相との狭間で苦悩する若者たちのすがたを、近松門左衛門が『國姓爺合戦』『博多小女郎波枕』『心中天網島』『女殺油地獄』『曽根崎心中』などの心中物として描き、人形浄瑠璃や歌舞伎になって人々の共感をよんだ。

吉宗は立法の好きな将軍で、各種の法令を発布しているが、行政法、刑法、民法をまとめた二巻の法典を開府以来はじめて制定した。『御定書』といわれるこの法典は、上巻は幕吏の執務や警察行政、刑罰などが、下巻には刑法、訴訟法が定められていて、この下巻が『御定書百箇條』といわれる百六の判例付法令集であった。

〝不義密通〟の条項では、姦通した妻と相手の男ともに死罪であったが、そこに、

○ 密通した妻と、相手の男を夫が殺した場合は、構いなし。

○ 相手の男を殺したが、妻は逃れた場合は、妻を死罪。

○ 相手の男が逃げてしまった場合、のこされた妻の処分は、夫の心次第。

などの具体例を追加している。

このことは、世をあげてかなり男女の情交が盛んだったことを物語っている。

吉宗は、この乱れた世情に眉を顰め、因はといえば西鶴、其磧、門左衛門らが『浮世草子』で煽り立てているからだと極め付けて、享保七年（一七二二）十一月に出版統制を強化する方針を打ち出した。

その『出版物についての法令』は、

○ 儒教、神書、医書、歌書については、これまでの説はよいが、新説を混じえた新刊書の発行を禁止する。

○ すでに出版されているものであっても好色本の類は、その現象描写が風俗の乱れをおこしているので絶版にする。

○ 他家の先祖などのことについて、これまでの通説をこえた新説を加えて新刊することを禁止する。

○ どのような書物であっても今後出版するときは、著者と出版元を実名で記した奥書を付けること。

（これによって筆名は使えなくなり、どこの誰が書いたものか明確になるので、取り締まりが容易になることを狙ったように思われる）

○ 徳川家に関する記事を載せた書物は一切禁止する。

○ 心中物の報道仕立ての読み物や、それを物語りにして売ることを禁止する。

など、出版物について厳しく規制した。

これが、わが国で初めての大々的な出版統制である。

米価対策に奮闘

〈応仁の乱〉から〈関ヶ原の戦い〉にいたるまで百五十年つづいた戦乱によって田畑は荒廃し、江戸初期の全国米麦生産量は極端に減少してしまっていた。

ために、幕府や諸大名は、米麦生産に重点をおく重農政策をとった。

しかし、江戸をはじめ諸国の城下町が整備されるとともに都市人口が急増していくと、またもや供給不足になって米価は値上がりしていった。需要急騰現象である。

幕府は、米価の上昇を防止するために、需要の抑制に乗り出した。

というと、太平洋戦争を経験した人々は、米穀統制による配給制度のことを思い出されるであろうが、このとき幕府のとった政策は、食糧米や酒造米の実需要の削減ではなく、仮需要の抑制であった。

諸藩は、年貢米を大坂市場で換金していたが、その行為をそれぞれ出入りの商人たちに代行させていた。

委任された商人たちは、売買契約から実際に買入れるまでのあいだに米価が値上がりすると、すかさず売却して利潤を稼ぐ空米取引を市場でさかんにやっていた。

現物を渡さずに伝票だけで売買するので、これを延米取引とよんでいた。

幕府は、この延米取引を不実商といってその取り締まりに監視の目を光らせ、仮需要の抑制に躍起になった。

綱吉の代には、その不実商をした商人の全財産を没収して本人を追放するという強硬手段で対処した、ともいわれている。

また酒造も製造を制限して米の需要を削減するだけでなく、売価に五十パーセントの酒運上という税金を課し、利潤を薄くすることによって製造意欲を抑制させた。

これが、酒税という間接税のはじまりである。

このように江戸初期の米価対策は、値上がりを阻止する需要抑制に汲々としたが、元禄以後から享保にかけては需要供給の割合が逆転して、米価が反落しはじめた。

しかし、幕府の政策は変化に対応出来ず、依然として米麦中心の重農政策をつづけたために事態はますます悪化して米価の下落が由々しき政治問題になっていった。

武士階級は、収入の米を換金して生活費や諸経費に充てているのだから、その米価が下落したことで実収入が目減りしてしまい、困窮していた。

吉宗は武士階級救済のために米価の値上げを図り、江戸初期の抑制策とは逆の需要奨励政策を打ち出した。

まず、これまで禁止していた仮需要の不実商を公認して、商人たちの投機による購買を許可し、延米取引を復

活させた。

つぎに酒造制限を撤廃するとともに、運転資金を貸し付ける融資制度まで設けて、積極的に酒造を奨励した。

こうして需要を喚起させるとともに、いっぽうでは供給を抑える方策も講じた。

天領や諸国大名領の生産地に『置米令』を出して、米麦の貯蔵備蓄を奨励した。

諸大名は、かつての『上米令』は石高の一パーセントを幕府に献納させられたのだが、これは貯蓄であって拠出ではないので異存はなかった。

また、生産地から江戸や大坂市場への供給を制限する『廻米制限令』を出した。

こうして需要を上回る供給を抑制して米価を引き上げようとしたのだが、いっこうに効果は表れなかった。

焦った吉宗はついに強権を発動して公定価額を設定し強引に米価の引き上げを策したが、需要と供給の均衡を抑え切れなかったために公定価額は有名無実に終わってしまった。

こうして吉宗は、米価の引き上げに躍起になってつぎつぎに諸施策を構じていったので、世間では吉宗のことを『米将軍』とよんで揶揄した。

大岡忠相の知恵

米価の引き上げに悪戦苦闘している吉宗に、町奉行大岡忠相は『物価引き下げに関する意見書』を提出した。

忠相の考えは、米価が下がって俸禄の実収入が目減りしても米価と諸物価の均衡がとれていれば問題はないのだから、米価を無理に引き上げようとしなくとも適正な流通政策で諸物価を下げればよい、というのである。

この忠相の意見は、経済原則に適っている。

彼は、官僚には稀有の経済感覚を身につけていた。

現代の賃金改訂でもそうだが、かりに名目賃金が五パーセント上がっても物価が同率上昇してしまえば実質賃金は昇給しなかったとおなじであり、たとえ不況で昇給しなくても物価が上がりさえしなければ目減りはしないし、減給されても物価が下落すれば家計に影響はない。

つまり忠相のいうように、物価との均衡がとれていれば賃金の変動にいちいち気を揉むことはないのである。

では、忠相の諸物価引き下げ対策はどんなものだったのだろうか。

忠相はまず、ある物の価額が上がりはじめると業者が一斉に飛び付いて買い締めしようとするから価額が急騰するという過程を吟味して、その対策として業者仲間をつくり、流通過程を整理することからはじめた。

問屋、仲買、小売の三段階ごとに仲間をつくって商品の買い置きをやめさせ、利潤は当時の適正金利十五パーセントを目安にして不当な商いを相互に監視させること

にした。

しかし、こんな統制経済のようなことを商人たちが受け入れるはずはなく、結局は相互監視のはずが話し合いで表面を取り繕われてしまい、成果はあがらなかった。

また、生産者が特定の問屋仲間にしか売れないようにすれば競争がなくなり物価は下がると考えたことも、自由販売できなくなった生産者の不満が昂じて闇経路をつくられてしまい、抑え切れなかった。

さらに、国内最大の消費市場である江戸へ入ってくる商品を監視するため、浦賀に関所をつくって積荷を報告させ、流通機構を統制する方法も講じられたのだが、これとても、大坂の商人たちに江戸湾へ入る直前の品川沖で船止めして値上がりを待つ、という対抗手段に出られてしまって、なんの意味もなさなかった。

いかに経済政策通の高級官僚大岡忠相といえども、所詮商人たちの知恵には勝てなかったのである。

しかし、忠相は負け犬のままでは終わらなかった。

大岡忠相の貨幣対策

物価を引き下げるにはもうひとつの方法があった。貨幣対策である。

江戸時代の基本通貨は、金・銀・銭の三種類だった。

銭は、庶民生活に使用される全国通用の小額通貨で、金・銀は商取引のみに使用されていた。

ところが、この金・銀は全国通用ではなく金は東国・銀は西国と通貨が分かれていて、商品代金の決済額は変動相場制の交換比率で決められていた。

現代の輸出入取引における円弗相場とおなじである。

では、金と銀のどちらが強いかというと、西国経済圏のほうが圧倒的に優位であったために、つねに金安銀高の傾向であった。

江戸市民百万人の生活を安定させるには、西国経済圏からの物資補給が頼りであり、その供給量の多寡が物価を変動させていた。

金安になったり、商品の需要が過剰になると、物価は上がり、金高になったり、商品の供給が過剰になれば、物価が下がるのは当然のことである。

商品の需要と供給の均衡は、前述したように商人たちによって作為的に調整されてしまうので手の打ちようがなかったが、交換比率はこれまでにも行政の力でなんとか安定させようと努力してきた数々の実績があった。

幕府は当初、金一両につき銀五十匁を希望していた。

それが、元禄バブルが崩壊して大不況に陥り、財政が極端に逼迫してしまったことから、元禄十三年（一七〇〇）に三貨の交換比率を金一両＝銀六十匁＝銭四貫文と改め、両替商の手数料を除く上限を金一両＝銀五十八匁＝銭三貫九百文とする布令を出した。

銀二十パーセントの切り下げである。

上方商人は怒って市場から銀を引き上げて抵抗した。

翌年、幕府は追い打ちをかけて上方でも金貨を使用させて通貨の二元化を図ったが、これは成功しなかった。

元禄九年（一六九六）に勘定吟味役から勘定奉行に昇進した荻原重秀が、貨幣流通量増加の必要性を説いて改鋳策を提案し、柳澤吉保の信任を得て金銀の含有量を減らす貨幣改鋳にとりかかったことがあった。

〝元禄金銀〟といわれるもので、小判のほうは慶長小判の含有量を百として六十七に下げ、銀はおなじく慶長銀を百として八十に下げた。

どちらも悪貨にして通貨量を増やしたわけだが、さらに、金の純度よりも銀の純度を低くして実質交換比率を下げたのである。

これによって短期間のうちに幕府の財政は潤沢になり、逼迫は解消した。

この天才財政家といわれた荻原重秀は、寶永小判でも金の含有量をさらに四十七に下げると、銀を五十、四十と段階的に下げて、正徳元年（一七一一）には二十五にまで下げてしまった。

ここまで銀の含有量を下げれば上方商人がどんなに交換比率に抵抗しても金に対する銀の相場は自然に下落するはずだった。

この純度の割合を〈品位〉というから幕府はこの元禄・寶永の改鋳でみずから「品位を下げた」ことになる。

だが、この貨幣流通量の増加が物価騰貴を招いて、経済が混乱してしまった。

この事態を重くみた新井白石は、将軍家宣に荻原重秀を三度弾劾させて、ついに勘定奉行を罷免させた。

そして、正徳四年（一七一四）に金銀を改鋳して慶長の純度に戻した。

しかし、金一両＝銀六十匁には戻らず、当初希望していた五十匁も下回ってしまったのであった。

吉宗が将軍になって二年後の享保三年（一七一八）には、さらに金が低落して銀四十匁になってしまい、江戸市民は猛烈な物価高に悩まされた。

そこで、この異常な銀高をめぐって町奉行大岡忠相と両替商とのあいだで熾烈な闘いがはじまった。

忠相は両替商を六百人に限定して組織をつくらせ、その統制力を利用して交換比率を銀六十匁の固定相場にするよう命じた。

この実勢相場を無視した一方的な上意下達に腹を立てた両替商は、一斉に休店することで抵抗した。

両替商は現代でいえば金融を支配する銀行の立場であるから、その両替商が一斉に休業してしまっては経済が混乱してしまう。

忠相はやむなく一歩譲って五十五匁の妥協案を提示したが、強気の両替商は頑として譲歩せず休店をつづけた。

現代の金融機関は財務省に支配されているが、この当時の両替商は行政より強かったようだ。

万策尽きた忠相は、やむなく、

「金銀相場は相対取引に任せる」

ことにしたので、圧力に屈せず自己主張を貫いて勝利した両替商は四箇月ぶりに店を開いて営業を再開した。

その後は両替商が忠相に協力する姿勢を示したこともあって、金相場は銀六十匁近くにまで復活して落ち着いたが、金融を支配する両替商といえども生き物の経済を調整することは出来ず、またまた五十一匁の銀高相場に撥ね上がってしまい、〝米価安の物価高〟という異常騰貴になってしまった。

怒った忠相が両替商に強圧的な態度をとったのでやや安値になったものの、全面的解決にはいたらなかった。

そこで忠相はあくまでも幕府に楯突く両替商の鼻を明かすために元文元年（一七三六）五月貨幣改鋳による報復手段に踏み切った。世にいう〝元文の改鋳〟である。

この改鋳は、まえに述べた元禄の改鋳が慶長の金銀を百として金六十七、銀八十だったのに対して金六十、銀五十八とさらに品位を落とし、金貨の下げ率よりも銀貨の下げ率のほうを大きくして金の比価を高くした。

銀の価値を下げることによって江戸の諸物価が下がり、庶民生活は安定するはずであった。

ところが、改鋳を嘲笑うかのように四十九匁という著しい銀高になってしまった。

忠相は、この銀高相場を悪貨に改鋳したことへの意趣返しと睨んで両替商たちを奉行所へ呼びつけたが、出頭してきたのが手代ばかりだったので虚仮にされて権威を傷つけられたことで怒り心頭に発し、その場で手代たちを逮捕監禁してしまった。

この時代の商家の使用人は番頭・手代・丁稚という序列であって、番頭は営業部長、手代は営業課長といったところであるから、実務責任者がいなくては営業に支障をきたしてしまう。

両替商たちはなんども奉行所へ出頭して謝罪し、手代の釈放を嘆願したが、忠相は頑として諾かず、ついに監禁は一箇月以上に及んだ。

ところが、この不穏な膠着状態がつづく最中の八月十二日に忠相はとつぜん一万石に加増されて大名格に列せられ、寺社奉行に抜擢された。

改革にあたって民政担当で大活躍した褒賞といえなくもないが、それにしてもこの抜擢人事は異例であった。

譜代大名が幕閣に入るときは、まず奏者番になってから寺社奉行を兼務し、そして大坂城代、京都所司代、若年寄を経て老中に昇進してゆくのが定型の順序であって、旗本職の町奉行からいきなり大名職の寺社奉行に昇進するなどという事例は前代未聞であった。

なぜ忠相が前例のない大抜擢に浴したのだろうか。

経緯の詳述がみつからないので臆測の域を出ないが、手代を人質にとられて困り果てた両替商たちが老中に泣きついて執り成しを頼み、政界と金融界との政治的取引がおこなわれたのではないだろうか。

その結果、名奉行大岡越前守忠相は、大栄転というかたちで町奉行をおろされてしまったのである。

忠相が両替商の怨みをのこして去ったあとの町奉行には、勘定奉行の松波正春が任命されたが、松波は着任早々に手代たちを釈放しているところをみると、やはりこの人事はあらかじめ仕組まれたものだったに違いない。

両替商たちは忠相の強圧的態度に懲りたのか、それとも老中との誓約があったのか、改鋳の報復手段として銀相場の釣り上げを謀っての買い占め行為をやめたので、その後は一両＝六十匁の交換期待比率に落ち着き、〝米価安の諸物価高〟も解決に向かったので、吉宗は米の公定価額を撤廃した。

忠相は旗本から一万石の大名に出世したのだから、それ相応の所領が与えられたはずである。

あちこち史料を調査してみたら、小禄の大名は居城が持てないから、陣屋を構えてそこを居所にしていた。

忠相も三河國西大平（愛知県岡崎市）に陣屋をおいたが、下賜された知行地はなんと三河、相模、武蔵、上總、上野國に点在しての合計高であった。

それをみると、幕府が忠相に一万石の領地を与えるのに慌てて各国から天領の半端地を拾い集めて辻褄を合わせたのがうかがえて、西大平藩の急拵えが読み取れる。

忠相が寺社奉行になったとき、二人の先任者がいた。井上正之が四十一歳、牧野貞通が三十歳、松平信岑が四十一歳であったから、六十歳の忠相は遅過ぎた。

同役たちは忠相の栄転を心よく思っていなかった。

寺社奉行に就任してはじめての登城の日、忠相が同役二人のいる詰所に入ろうとすると、先任の井上正之が、

「ここは寺社奉行ではなく奏者番の控室ゆえ、兼ねておられぬ貴殿は入ることができぬ。お引き取り下さい」

そういって襖を閉められてしまった。

寺社奉行は奏者番の大名が兼務していた。

寺社奉行は旗本の町奉行、勘定奉行に比べて実務があまりなく閑職だったので奏者番の兼務だったのだろう。

だから、寺社奉行の控室はないわけで、奏者番ではない忠相は休息する控室もないまま勤務時間中は殿中の廊下をうろうろして過ごす惨めな日々がつづいた。

いつかこの噂が広まり、事情を知った吉宗が哀れに思って奏者番控室の隣りに忠相の控室を仮拵えしてくれたので、忠相はようやく屈辱から解放されたという。

忠相が同役の控室に出入りできるようになったのは、十二年後奏者番兼務になったときからである。

そのときすでに七十二歳になっていて、三年後の寶暦元年（一七五一）十一月二日寺社奉行のみを免除されたあと、十二月十九日に七十五歳で世を去った。

民政に辣腕を揮ってきた忠相の晩年の閑職はなんとも退屈で辛く、潔しとしなかったことであろう。

組織はむかしもいまも上意下達に変わりはなく、上司の着想を部下が実践させられる。奮闘努力の結果たとえ成功してもその功績は上司のものになってしまうし、失敗しようものなら責任はすべて部下に被せられる。

この『享保の改革』も、吉宗の指示を受けて実践に汗を流し泥を被って悪戦苦闘したのは忠相なのであるが、改革の成功者は吉宗になってしまっている。

演劇でも裏方は奈落で舞台の成功を支えているのだが、観客に認められることはない。

忠相も南町奉行の『大岡政談』だけが読物になったり劇化されたりして広く世に知られ、脚光を浴びているが、政策官僚として改革の実践に火の粉を被って努力したほうは陰に隠れてしまっている。

［番外］尾張藩主徳川宗春の抵抗

吉宗の『享保の改革』にただ一人真っ向から反対した尾張藩主徳川宗春の治政とその信念にも触れておく。

吉宗は、質素な生活を奨励して、みずから実行した行動派の将軍であった。

衣服は、厳寒でも襦袢を着ることはなく、鷹狩りの服装も木綿羽織に小倉木綿袴という身支度であった。

食事も、青年時代から飽食を慎み、元禄の頃には一日三食が一般的風習になっていたが、吉宗は、

「身を養うには一日二食で充分であり、それ以上は腹の奢りだ。太平無事に飽食する癖をつけておいては、非常の時に充分なる働きが出来ない」

そう主張したことはすでに述べたが、朝食は辰の刻（午前八時）、夕食は申の刻（午後四時）にそれぞれ一汁三菜の食事を摂るだけで、側近たちがいくらすすめてもけっして昼食を摂ろうとはせず、自説を固持した。

また、吉宗はかなり酒好きであったが、それもあらかじめ晴方に酒量を伝えておいて、それ以上過ごすようなことはなく、祝いの昼酒は銚子三献ときめ、肴は朝食のときに残しておいた菜だったという。

「酒に呑まれるな」

というが吉宗のは自制心の強い飲酒方法であるから、これでは心地よく酔うということはなかったであろう。

これらのことでもわかるように、吉宗はかなり意志強固な人だったのである。

だから吉宗は、八代将軍に就任すると、早々に改革政治に取り組むにあたり、まず改革の大きな柱に『倹約』を掲げて、統制経済を実施した。

元禄の繁栄で贅沢な傾向が蔓延している消費優先の華美な風習を引き締めて質素で勤勉努力する正常な社会に

戻そうと図り、奢侈に流れる生活を取り締まり使い捨ての風潮を戒めたのである。

そんな吉宗の政策を真っ向から批判した大名がいた。御三家筆頭の尾張藩主徳川宗春である。

宗春は、二代藩主綱誠の三十二子で、生母は側室三浦氏、名は通春といった。

三十二子というのは誤植ではない。

綱誠は、のちの十一代将軍家斉の側室十六人、子女五十七人には及ばないが、精力絶倫で側室二十四人、子女三十七人であったから、通春は三十二子といってもまだ五人の弟妹がいたことになる。

そんな部屋住みで厄介者の集団に埋もれていた通春に、幸運が舞い込んできたのは三十四歳のときであった。

享保十四年（一七二九）八月、一族の梁川松平義眞が嗣子なくして歿したので、通春が選ばれて陸奥梁川（福島県伊達市梁川町）三万石の藩主になったのである。

ところが、幸運はそれに留まらずさらにつづいた。

翌年、こんどは尾張藩五代藩主の異母兄継友（綱誠の二十二子）が三十九歳で急死したことから六代藩主に迎えられたのである。

通春は将軍吉宗の一字をいただいて宗春と改名すると、御三家筆頭の当主になった。

ここまでは、吉宗が紀州藩主になるまでの込み入った事情と酷似している。

だが、二人の性格はまったく違っていた。

宗春は、派手好きで勝手気儘だった。

藩主に就任早々は、

「公儀の法度を守り尾張家代々の法規を遵守するよう」

布令を出したが、それは慣例に従ったまでのことで、やがて本性を現わして改革政治をすすめている吉宗の政策を批判し、反骨精神を剝き出しにして、放縦濶達な政治をうち出した。

それは、規制緩和の開放政策を実施して、消費経済を積極的に推進する、というものであった。

江戸屋敷への出入りを昼夜の別なく解放して遊芸、音曲、鳴物を自由にさせたので、閑静だった屋敷内は活気をとり戻して大いに賑わった。

尾張へ入部するときの行列は、領民たちが戸惑うほど華やかなものであった。

宗春の外出するときの身形がまた派手で、その異様な風体に人々はおどろき唖然とした。

一例をあげると、あるときの寺社詣でのおりに宗春は、猩々緋の装束に紅色頭巾を冠り、豪華な鞍と鐙をおいた白牛に乗って出掛けた。

帰路は羽織を脱いで白練衣服の着流しになり、帯を前結びにして二間（三・六メートル）の長煙管を茶坊主に担がせ、ぷかりぷかりとふかして戻ったという。

それは、まさに遠いむかしの室町時代に起こった派手

に見栄を張る婆娑羅さながらの遺風であった。

また、宗春は領民たちが今年は藩主の娘の喪中につき盆祭りを自粛するという話をきくと、年に一度の娯しみを奪っては気の毒と七日間の盆踊りを許すとともに、盂蘭盆会の最終日には町中の踊り組二百組を次々に屋敷に招いて一昼夜踊らせて打ち興じ、各組ごとに褒美の金銀を与えた。なんとも派手好きの人である。

そんな宗春であったから、武士や町人たちの遊興にも寛大であった。

願い出ていれば遊女町を無制限に許可したから、全国から遊女たちがどんどん集まってきた。

歌舞伎も許可して積極的に興業させたので、領内各地に芝居小屋が出来て芸能が盛んになった。

これが芸どころ名古屋の文化繁栄の基礎になった。

藩主自身が率先垂範して領内を自由闊達な気風にしているのだから、士農工商の別なく挙って表は黒か紫、裏は紅縮緬の派手な頭巾を冠り、咥え煙管で遊女や野郎を引き連れ手を執り合って小唄を謡い、昼夜を問わずぞろぞろと町中を歩き回るのが流行した。

そのため尾張藩では、江戸も国許もともに元禄の繁栄が再来したような華やかな雰囲気に満ち溢れた。

これらは無為無策の放任状態のように見えるが、実は吉宗の倹約令に対抗する宗春の政策であったのだ。

宗春は、

「上が無駄遣いをするから下々にまで金が回っていくのであって、これは自分一人の贅沢でも浪費でもない」

そう言いつづけていた。

吉宗のように倹約一辺倒ではますます景気は落ち込んでしまう。消費を促進して金を回さなくては景気は回復しないという。貨幣経済重視の宗春の政策は正しい。

吉宗が綱紀粛正の一環として江戸の岡場所や私娼窟の取り締まりを強化したことにより各藩ともそれに倣うなかにあって、ひとり尾張藩だけは積極的に遊女街を新設していったために全国の城下町が灯が消えたように沈滞したのに名古屋だけは明るく賑やかに繁栄していった。

名古屋が日本の中京といわれるようになったのはこのときに築かれたもので、城下町の賑わいを鳥瞰図的に描いた『享元絵巻』（名古屋城管理事務所蔵）がその繁栄ぶりを今日に伝えている。

だが、吉宗がこの宗春の幕政批判の反抗状態を放任しておくはずはなく、なんとも詰問使を派遣して厳しく譴責したが、宗春は表向きは陳謝しつつもなお反撥して、いっこうにその方針を変えようとはしなかった。

しかし、そういつまでも財源がつづくはずはなく、財政が窮迫して金が回らなくなると、途端に景気が翳って領内が沈滞してしまったので、やむなく方針を転換して藩士たちの風俗取り締まりを強化したり、遊里や芝居小屋などを縮小して粛正したのだが、そのあまりにも急激

な緊縮政策に領内は混乱してしまった。

吉宗は、その機会を逃さず元文四年（一七三九）正月に宗春の失政を非難して、

「治政よろしからず」

を通告して宗春に隠居を強制し、謹慎を命じて尾張藩麹町中屋敷（現上智大学）に閉じ込めてしまった。

それは両親の墓参も許さぬほど厳しいものであった。

吉宗の憎悪の執念は凄まじく、ついに宗春を赦免せぬまま十二年後の寛延四年（一七五一）六月二十日に六十八年の生涯を閉じた。

宗春は吉宗の死から十三年後の明和元年（一七六四）十月八日に六十九歳で歿したが、ときの将軍十代家治は宗春が幕府に反抗した罪人ということでその墓石に金網をかけさせたという。

子（九代将軍家重）や孫（家治）にまで厳命して宗春を徹底的に葬った吉宗のこの異常なまでの執念はいったいなんだったのだろう。

確証があるわけではなく、推測の域を出ないのだが、宗春が幕政に反抗したというのはあくまでも表向きの理由であって、実は、将軍の座を狙う強力な対抗者の御三家筆頭尾張家を完膚無きまでに叩き潰してしまおうとしたのではないだろうか。

宗春がその罪を赦されたのは、死後七十五年も経った天保十年（一八三九）十二代将軍家慶のときであった。

［結び］改革の功罪

吉宗は、元禄好景気崩壊後の大不況で破綻した幕府の財政再建を担って改革を成し遂げた江戸幕府中興の名将軍といわれる人であるが、その改革政治は、開府百年間の矛盾の滓や皺寄せを是正する大事業であったのだ。

幕府内部の行政組織や、人材抜擢、能力給の導入など画期的な改革をおこない、その合理化によって経常支出を節減した功績は大きい。

だが、財政の増収については、新田の開発は自助努力だから評価できるが、上げ米令や年貢率の引き上げは諸大名と農民に負担を強制しての増税であって、背に腹はかえられぬ自分本位の悪政といわざるを得ない。

また、米価対策に難航すると、公定価額を設定して強引に従わせようとするなど、形振り構わぬ無謀な施策は〝米将軍〟と揶揄されて呆れられた。

家康の清貧を重んずる風習を鑑としてきた吉宗は、元禄以来の華美贅沢を戒めるために過剰消費や浮世草子、好色本などの出版をきびしく取り締まったので、娯しみを奪われた庶民の顰蹙を買った。

人は誰しもいったん贅沢な味を覚えてしまうとなかなか清貧の生活に戻れるものではないから、緊縮政策は徹底しなかった。

通貨価値の下落で物価騰貴になったことから、金相場を上げようとして懸命になった大岡忠相が、両替商と渡り合った闘争は壮絶なものであったが、しかし、貨幣経済が進行している現実を無視して、行政が強引に米穀経済に戻そうと時代に逆行したところに無理があった。

やむなく、金より銀の品格を下げる改鋳で交換比率を是正しようとしたのだが、姑息な手段で相場が変わるはずはなく、業を煮やした忠相は強権を発動してまで解決を図ろうとしたのだが、結局は幕府首脳と両替商との政治的取引で一時凌ぎの辻褄を合わせて辛うじて体面を保ったものの、抜本的解決にはいたらなかった。

このように、吉宗の『享保の改革』は、米穀経済にこだわって進行しつつある新しい貨幣経済と正面から取り組もうとしなかったために、経済改革はすべて失敗に終わったが、行政改革による組織再構築では成果を挙げたし、貨幣経済による高度成長に浮かれて堕落した人心を目覚めさせる指針を与えたことについては評価できる。

（了）

主な参考文献

徳川将軍列伝　北島正元編　秋田書店
藩史事典　秋田書店
年表日本歴史(5)　筑摩書店
徳川吉宗　笠谷和比古　ちくま新書
大岡越前守忠相　大石慎三郎　岩波新書
大岡越前守　辻達也　中公新書

世界の国旗から学ぶ（第一回）

米村典紘

はじめに

リオデジャネイロ五輪で感じた各国の国旗のことを、いろいろな観点から考察してみました。

間違い探しのゲームでは、幼い子供達は、まず「色の違い」に気付くといいます。大人達は「形の違い」から気付くと聞いた事があります。

国旗は、基本的には四角形の狭い世界の中で原色と形の組み合せで、自国のシンボルを主張するという大変興味ある存在なのです。今回リオデジャネイ五輪やパラリンピック競技会（以下省略し、リオ五輪とする）を通じて、私達はカラフルな国旗を目に致しました。アメリカ合衆国、英国の国旗は既にお馴染み、フランス、イタリア国旗もレストランの軒先でよく見るので割とポピュラーなのでしょうか。でも、そんなポピュラーな国旗でさえ、私自身、しっかり理解しているかなと思うと、聊か疑問を持ち始めたのです。リオ五輪が終わり、パラリンピックも終わった今、未だかつてない程の盛り上がりを経験致しました。リオ五輪開催前と開催後の評価がこれ程違った五輪は、今迄になかったのではないでしょうか。「素晴らしい大会でした」「心のこもった大会でした」と多くの参加者が絶賛致していました。競技場が良かった訳ではありません。大成功した要因は、「ブラジル人の国民性にあったのではないか」と私は思っています。私は以前、3年半の間、ブラジルのサンパウロで仕事をした事がありましたが、自分が日本人である事を、感じた事が殆どなかったのです。

4年後の東京五輪が開催される前までに、私は、もう一度、世界の国旗についての、頭の整理をしてみたいと思いました。世界から日本にやってくる観光客が、自国の国旗を持ち、衣服や顔に国旗を書いて来る。その国旗をまず理解しよう！競技場等のハード面も重要ですが、「笑顔」を持って世界の国を理解するソフト面も大変重要な事だと感じたのでした。その第一歩が「国旗を理解する事」によりその国の理解度が深まると感じた訳です。

例えば「フランス、イタリア、オランダ、ハンガリー、」の国旗が三色旗である事はお分かりだとして、「どの国が何色の三色」で「縦柄か横柄か？」「色の順番は？」等々は分かりますか？こんがらがってしまいそうです。

もしお分かりだとしても、フランスの三色（青：白：赤）の色面積の割合が30：33：37に成っている事を知っている人は「ちょっと　物知り博士」だなと思います。

本誌では、カラー印刷で、様々の旗の形や面積などを紹介できないので、活字表現のみでまとめました。その為、この誌を読まれる方は、パソコンで「世界の国旗」を検索するか、一枚に纏められた「世界の国旗」をお手元に置いて読まれると良くご理解出来るのかなと思っています。リオ五輪をきっかけとして、国旗と宗教との関係。地域による国旗の傾向。国旗の形やルール等も触れ、最後に、今回のリオデジャネイロ五輪で、金メダル獲得数の多かった国の紹介をし、「世界の国旗についてはちょっと物知りだな」と感じて頂ければと願っています。

1：世界の国々。

国があれば国旗は必ずあります。自治区と呼ばれる地域にもその存在を示す旗があります。今は国際連合（この旗もあります）に加入している国193か国と、国連が認めている国がバチカン、コソボ共和国、クック諸島、ニウエ、と4か国を含め、合計で197か国となっています。リオ五輪では、国旗を持って行進した台湾や香港などを含め、202地域代表が国旗を持って参加いたしました。

ところで、第一次世界大戦が始まる前の1914年（大正3年）以前、この地球上に国家はいくつあったとお思いでしょうか？その頃の中東アジア、東南アジア、東アジアでの独立国は何か国だったと思いますか？1910年1月時点では、世界の独立国は52か国、内、アジア地区では、ペルシャ（イラン）、トルコ、タイ、清（中国）韓国、日本の6か国しかなかったのです。二つの大戦後、多くの国が独立致しました。東南アジアの国々も日本の敗戦を機に多くの国が誕生致しました。アフリカ大陸では、4か国であった独立国が54か国にも増えたのです。

1991年頃、社会主義、共産主義の崩壊により、旧ソビエト連邦から14か国が独立復活致しました。バルト三国のエストニア、ラトビア、リトアニア（命のビザ

を発行した杉原千畝氏が領事をしていた国）やベラルーシ、ウクライナ、モルドバ、ジョージア、アルメニア、の5か国、アゼルバイジャン：トルクメニスタン：カザフスタンのカスピ海に面している国3か国とウズベキスタン、タジキスタン、キルギスの3か国の合計14か国が復活や独立致しました。民族間の闘争や国家の体制が変わる事により多くの国が生まれ、又国旗も生まれ、又変わって参りました。

①：日の丸の由来

日本の「日の丸」は一般的に、古代信仰として天照大神が太陽神である事から始まるとされています。「日の丸」は、聖徳太子が隋の国（今の中国）に遣隋使に託した文の中に「日出ずる国」が日本であると書かれていた事に由来するからだそうです。

江戸時代に、「日の丸」が外国向けの公用旗として使用されていた事が、絵図の資料として残っています。18世紀から19世紀にかけて、「日の丸」が日本国共通の船舶旗として江戸幕府によって布告され、北方ロシアとの警備や、日米和親条約調印後に船舶区別の為に使われていた事実もありました。当時の日本は、鎖国政策をとっていた為、ヨーロッパの強国やアメリカ等から開国を求められ、必然的に国旗を掲げる必要性が出てきた訳です。

初めて、日本の国旗が外国で掲げられたのは、1860年（万延元年）に日米修好通商条約批准書交換の為に江戸幕府の代表者が米国に渡り、「日の丸」を持ってニューヨークをパレードしたと記録されています。その10年後、1870年（明治3年）に「日章旗」を船舶の識別旗として定め、同時に陸軍御国旗として旭日旗を定めています。

しかしながら、日章旗を公式な日本の国旗として定めたのは、なんと、1999年（平成11年）の事で、つい最近の出来事なのです。つまり「国旗及び国歌に関する法律」によって「日章旗」を定め、他に、自衛隊法施行令によって、自衛艦旗、自衛隊旗を定め、そして自衛隊の飛行機等に記されている国籍マークも法律によって定めて、現在に至っています。

余談ですが、世界では、太陽が赤色で描かれている事は少なく、黄色か金色が一般的だそうです。

日章旗の「白地に赤丸」の由来は源平合戦にあると云われています。源氏の旗が「白地に赤丸」として、平家は「赤字に金の日輪」が使われていましたが、源氏が勝利した事により白地に赤丸が定着したのとの説があります。

②：古代ギリシャの旗がヨーロッパのはじまり。

古代マケドニア王国の「ヴェルギナの星」

そもそも、旗の由来はと云うと、紀元前12世紀の中国、殷の時代から周王朝に移った頃が起源と云われています。

その目的は戦いで、旗や「のぼり」を掲げる事により、味方を鼓舞し、敵を威嚇する為に使われていました。

その後、オリエントを経てギリシャ、ローマに伝えられていったのでした。

今年（2016年）6月に東京国立博物館で「古代ギリシャ・時空を超えた旅」の展示があり、私も行って参りました。

紀元前6千年前に既にバルカン半島のギリシャ近辺では、高度な文明を持った都市国家が競い合っていた頃、日本は縄文初期でしたから、古代ギリシャ文明には驚かされます。その後、ミノス文明→ミュケナイ文明を経てアルカイック時代→クラシック時代→古代オリンピック時代、そして紀元前808年から紀元前168年迄、大帝国を築いたアレクサンドロス大王のマケドニア王朝へと続いてゆく訳です。アレクサンドロス大王がペルシャを破った年が紀元前334年で日本の弥生時代中期にあたります。戦いの先頭を切って勝利した時の旗が「ヴェルギナの星」と云われる国旗でした。

ヴェルギナの星は古代マケドニア王国の家紋でもあり、十六本の鏃の様な黄金色の光線を放つ星が赤字の旗の中央にデザインされているものでした。

人類は古今東西、常に争い事の連続でありました。国旗は自軍と敵軍とを見極める為に、又、国に忠誠を誓うシンボルとして使用されてきました。

ヨーロッパの戦史は、古代ギリシャに於ける都市国家間の争いから始まっていますが、大帝国を作り上げたマケドニアも「盛者必衰」の理で、古代ローマとの戦いを繰り返へし、紀元前197年に古代ローマに敗れ、古代ローマ帝国時代に移行していくのです。その後にも、民族間の争いや強国の覇権争いが続くのです。

そして、17世紀の大航海時代に入り、ヨーロッパに於ける強国、（イギリス、スペイン、ポルトガル、デンマーク、オランダ、フランス）は、未開地を自国の植民地にする為、新大陸を目指していきました。国旗は船舶の国籍を見分ける為に使用され定着していったのです。現在では平和目的で船舶の識別、国家の祝事、スポーツの祭典等に幅広く使われる様になって来ましたが、やはり争い事は絶えていません。

古代オリンピックから1500年後の1894年に、フランスの教育者であったクーベルタン男爵の発案により、ギリシャのアテネで第一回近代オリンピックが復活致しました。

その近代オリンピック憲章には、「いかなる差別をも伴うこともなく、友情、連帯、フェアプレイの精神を持

って相互に理解しあう事で、よりよい世界の実現に貢献する」と書かれ、人類共通の理想社会実現に向かってスタートし、理想社会のシンボルとして5大陸の結束を意味する五輪の旗が作成されました。

リオ五輪男子体操個人総合で内村選手と競い、僅かの差で2位になったウクライナのオレグ・ベルニャエフ選手の話は「真にオリンピック精神の原点」感じさせてくれた言葉でした。

外国報道記者から内村選手に対しの質問で、「貴方は、審判から好意的に見られているのでは?」と、「本当は貴方が2位だったのでは」と感じられる様な意地悪い質問でした。それを隣で聞いていたベルニャエフ選手が突然「今の質問は無駄な質問だ、航平は体操界ではカリスマ的人物。彼が一番だと云う事は、体操選手なら誰でも知っている事だ」と不快の念を示し、内村選手に代わって答えたのでした。その話にはまだ続きがありますが、ベルニャエフ選手の美談に応えてウクライナの国旗について解説致しましょう。

ご存じの通り、ウクライナは、ソビエト連邦解体後の1992年に復活した国です。国旗は横柄の二色旗で、表向きは上部の空色は文字通り澄み切った空の色、下部の黄色は穀倉地帯としての小麦の色と云われています。しかしながらウクライナの旗にはもう一つの意味があり、スカンジナビア北方戦争で、ロシア（フィンランド）と戦ったスエーデン国旗の色と全く同じ色、即ち鮮やかな空色と黄色を意識した横柄二色旗を使用する事で、反ロシアを示し、共産独裁主義に反対し、自由で民主的な国家を目指した旗なのです。しかしながらご存じの様に、ウクライナはクリミア地方を切り取られ、現在も国境線を超えロシアからの侵略を受けているのです。

旗には「目的を一つに纏め様とする意思の力」と「一つに纏まる不思議な力」があります。その変遷が旗の歴史であり、その国の物語でもあるのです。これからは、国旗が戦いの歴史となるのではなく、国旗がオリンピック精神に沿った平和の歴史として使用される事が、国旗制定時に考えた、各国の為政者達の真の目的であったはずで、「国盗り」の為の国旗ではなかったはずなのです。

2　国旗のルール

国、地域、民族、氏族などの象徴である旗、紋章、家紋などを体系的に整理し、研究する旗章学という、学問があります。その旗章学では、旗図形を一応10パターン（長方形に「縦、横、斜めの線を引き、面を分割した旗。三分割旗、二分割旗、十字やカルトンによる分割旗」）等を、決めていましたが、独立国家が増えている状況下では収まらなくなってきました。

旗章学会としては、1967年に国際旗章学会として旗章学協会国際連盟が設立されています。日本の学会としては、2000年に日本旗章学協会が設立されました。しかしながら、他の社団法人や協会に比べ、認知度が非常に低い事が残念でなりません。原因は「日の丸」が一部の人達に「軍国主義」との妙な偏見を与えている事に原因があるのではないでしょうか。「日の丸」の歴史は、他国と比べて長い歴史を持ち、シンプルで素晴らしい国旗であると多くの国民が感じているはずです。

私が子供の頃、国民の祝日には「旗日」と言って必ず門の脇に、国旗を飾っていた事を思い出します。「日の丸の国旗」は政府機関、その関係者のみの「日の丸」ではなく、広く国民に愛される国民の為の「日の丸」でなくてはならないのではないでしょうか。オリンピックで、日本の金メタリスト達が揚げた「日の丸」の国旗に誇りを感じる様に。

①国旗が承認されるには

「国旗が新しく出来る」事はそこに必ず国が新しく出来る事を意味します。又、革命等により新しい体制に生まれ変わる場合に旧国旗を一新する場合も数々あります。

国旗の基本的ルールとして「国旗は、国旗を定めている法律に従って、国民に公布する。そして国連等の国際的団体に通知をする事」が最低限の決まりとされています。

しかしながら、「デザインは同一にならない事を考慮する」というルールも一方ではあります。

〈参考〉旗章学用語のひと言。

旗章学の決め事

そもそも、旗は海外との貿易で船の所属識別の為に用いられた為、基本的な名称があるのです。

名称　旗地の部分＝フィールド（Field）

旗竿側＝ホイスト（hoist）

たなびく側＝フライ（fry）

ホイストの上半分＝カントン（canton）

○基本的には四角形で表裏はない事。

○描かれている動物や文字は旗竿の方向を表とする事。

例外（例外：パラグアイの国旗に表裏あり。ネパールの国旗が異形。）

○縦、横の比率は2対3が基本である。（採用している国は88か国のみで厳密には徹底していない。

○色についても原色とだけの決められている（厳密ではない）

②複雑な事情のある国旗

現代では、ユーゴスラビアが崩壊し、八つの独立国（アルバニア：クロアチア：コソボ：スロベニア：セルビア：ボスニア・ヘルツェゴビナ：マケドニア：モンテネグロ）が戦乱の末に誕生し、それぞれの国旗が制定さ

れました。
その中で、コソボの国旗とマケドニアについて生じた問題から説明致します。
コソボはリオデジャネイロ五輪の柔道女子52キロ級で、準決勝で日本の中村選手を破り、決勝で勝ち、優勝したマイリンダ・ケルメンディー選手を称える為、初めてメインポールに揚げられたコソボの国旗。それには複雑な背景があったのです。
コソボは、セルビアの自治州であった為、セルビアの同意ないまま分離独立を宣言した国家でした。その為、国旗のデザインは紛争を避ける為に、国際公募の形をとりました。その結果、多民族共存を象徴となっているボスニア・ヘルツェゴビナ国旗を参考とし、現在の国旗（色も青、黄、白と六星は多民族を表している）が採用されました。その旗が今回初めてセンターポールにはためいた訳です。
ユーゴスラビアの崩壊後、復活したもう一つの国にマケドニア共和国がありますが、その国名と国旗にクレームが出ました。紀元前4世紀、古代ギリシャ時代に前述致しましたマケドニア王国がありました。
今のギリシャを含むバルカン半島を支配し、ヨーロッパで最も尊敬されている英雄アレクサンドロス大王が作りあげた偉大な国家でありました。その為、新マケドニアの国名に対し、ギリシャから「マケドニアを継承しているのは我が国で、新マケドニアは一切関係ない」との反論が持ち上がり、「マケドニア」ではなく「マケドニア・旧ユーゴスラビア」との長い国名で妥協したのでした。しかし、ギリシャでは、今でも国名を「スコピエ（マケドニアの首都の名前）」とよんでいます。
同様に国旗についても、異論がでました。当初はアレクサンドロス大王が掲げた「ヴェルギナの星をデザイン化したもの」（前述の）でしたが、国旗も認められず、赤字に黄色の日輪が八本の広がる光線放す現在の国旗となった訳です。（日本の旭日旗に類似する国旗となった。）
その他にも、1936年のベルリンオリンピックの時に、中米ハイチの国旗とリヒテンシュタイン国旗が類似している事から問題となりましたが、現在ではリヒテンシュタインは、金色の公爵位を示す王冠を旗竿側上部に付け、ハイチは、中央に国章を付ける事で解決した事例もあります。
（【参考】国章や紋章についても大変奥が深いものがあります。紋章学によれば、ゴシック時代に最初の開花期を迎え、その後衰退しましたが、18世紀に神学者や法律家の手で目覚ましい飛躍をとげています。）
しかしながら、話合いでも相容れないケースもあります。インドネシアがオランダから独立した際に、新たに制定した国旗がモナコ公国の国旗と、横柄の赤と白で全く同じでした。モナコは1339年からその原型が使い、現在使用している旗は1881年から使用していると主張しました。それに対して、インドネシア側は、1293年から1478年にインドネシアを治めていたマジャヒト王国のシンボルカラーであったと譲らず、未だにそのままの状態が続いています。
おそらく、インドネシアは、オランダ領であった関係から、オランダの承認のもとに独立する必要があった事情もあり、オランダ国旗（赤：白：青の横柄三色旗）の二色（赤：白の横柄二色旗）を使用したのが真相ではないかと思われる節があります。しかし、モナコは隣国でもなく、経済にも影響がない事から現状のままで推移しています。
最近では、2016年にニュージーランド政府が、自国の国旗があまりにもオーストラリア国旗に類似している事等から、新しいザインを決め、国民に提案しましたが、国民投票で否決されるというケースもありました。
又、今回のリオデジャネイロ五輪で、中国旗の星の並びが違う事（注あり）でニュースになった事は記憶に新しいと思います。
（注）旗竿に最も近い大きな星（中国共産党を意味する）を半周丸く囲む様に四つの小さな星（上から労働者：農民：知識人：愛国的資本家の人民階級を表す。）がそれぞれ大きな星の中心を指すように傾いていなければならないが、が四つの星は傾かずにそのまま半周丸く囲んでいた旗でした。しかし、この旗を作成した企業が、中国の業者であったとの事で、責任問題にはなりませんでした。

③ヨーロッパ諸国と国旗の変遷

国旗は基本的にはシンプルである事、誰でも簡単に描ける事、そして他国との判別が可能な事が第一であります。実際に国旗の歴史を考える場合、ヨーロッパ諸国から学ぶ事が多い。何故なら、人類の歴史と進展がユーラシア大陸から始まったと言い切る事が出来るからです。即ち、古代（古代ギリシア→古代ローマ→フン族・ゲルマン民族スラブ民族）、中世（ヨーロッパ封建時代多くの王国が生まれる）、近世（ルネサンス→大航海時代→宗教戦争）、近代（啓蒙主義→帝国主義→社会主義→世界大戦）そして現代（欧州連合→ユーゴスラビア紛争→イスラム原理主義→テロリズム）へと続いていきます。国家、民族、宗教等の対立による数多くの侵略と争いの歴史が繰り返され、国家が生まれ、国旗が生まれる、革命によって国旗も変わっていったのです。
その間、無くなった国旗もあります。まさかと思うかも知れませんが、インカ帝国にもカラフルな国旗があったのです。それぞれの国旗には、それぞれの国が持つ文化や歴史もしくは伝統を知る重要な手掛かりとなるので

す。

その事を記述するには枚挙に暇がない為、その辺は歴史学者に委ねるとして、現代使用している国旗をベースとし、「国旗の傾向と意味合い」を考察して行きたいと思っています。

3：国旗を覚える為の簡単分類法

カラフルな国旗を200近くしっかり覚えるのは至難の業なので、まずシンプルな三色旗と二色旗の話から覚えてみてはどうでしょうか。実はそれだけで三十か国と成ります。この種の旗はシンプルが故に、色の順番が問題となるはずです。

始めに、白いボール紙を、正方形に切って一つ用意して、三分割する線を引いて下さい。次に色鉛筆を用意し、三分割の正方形（本来は長方形）に色を塗っていきます。

①横縞の多色旗（三色旗から発生）

まずトリコロールと呼ばれるフランス国旗から入りましょう。縦三色のフランス国旗（青：白：赤）を横三色にし、赤から横柄で吊るすとオランダ（赤：白：青）の旗になります。今度はオランダの旗の一部の色を変えてみましょう。青色を空色に替えるとルクセンブルグ（赤：白：ブルー）黒に替えるとイエメン（赤：白：黒）、青色を緑に替えるとハンガリー（赤：白：緑）の国旗になります。この旗を縦の三色旗にするとイタリアの国旗（緑：白：赤）になり、赤をオレンジにすると、アイルランドの旗（緑：白：オレンジ）になります。他にオレンジ色を使用した横縞三色旗はアルメニアの国旗で、謂れは、ノアが神から授かった旗と云う赤、青、オレンジの三色旗だそうです。話を続けてゆくと、オランダ国旗の色の順番を入れ替えるとロシア（白：青：赤）の国旗になります。当時のピョートル大帝がオランダの旗を気に入って自ら考案したと言われている国旗です。ロシア国旗の真ん中の青色を緑に替えるとブルガリアの旗になります。

ドイツ国旗もオリンピックや首脳会議で良く目に付くので、ご存じの方も多いと思います。横柄三色はドイツ（黒：赤：黄）でこの旗を縦柄にして黒、黄、赤にするとベルギーの国旗になります。横柄三色旗で黒が入っている国はドイツとエストニア（ブルー：黒：白）の二カ国だけです。横柄で黄色が入っている国はドイツに加えてリトアニア（黄：緑：赤）とガボン（緑：黄：ブルー）の国々です。

縦縞の三色旗ですと、ルーマニア（青：黄：赤）とアフリカのギアナ（赤：黄：緑）とチャド（青：黄：茶）そしてマリ（緑：黄：赤）です。アフリカでシンプルな横

縞三色旗を使用しているほかの国はシェラレオネ（緑：白：空色）で縦縞はコートジボアール（オレンジ：白：緑）です。

以上21か国が縦柄、横柄のシンプルな三色旗を使用しています。（但し、実際の旗は正方形ではなく長方形です）これで、二十一か国はもう頭に入りましたでしょうか。とりあえず、旗図鑑をみて頂ければより分かりやすいと思います。

②次に、二色旗の横ラインと縦ラインの国旗についての覚え方です。

二色旗については横は横、縦は縦なので非常にシンプルです。

但し、横2色旗でもロシアから復活独立したラトビア（茶：白：茶）は両端を茶色で真ん中が白となっています。オーストリア（赤：白：赤）で白を赤で挟んでいる国旗もあります。

シンプルな二色旗の国旗としては、赤が上で白が下の国が2カ国あり、前述した様にインドネシア（赤：白）モナコ（赤：白）です。その逆の白が上で赤が下の国はポーランドです。それにこれも前述しましたウクライナ（空色：黄）の二色旗です。

③横柄と縦柄（三角形：長方形）の多色旗

次はちょっと複雑になりますが、縦柄に旗竿側から三角又は長方形の形を入れた旗があります。

（アジア）では、フィリピン、ヨルダン、東ティモール、パレスチナ自治政府がそうですが、新興国が多いアフリカ大陸では、南アフリカ共和国の旗の様に6色を使った複雑な旗もあります。その他の国として、エリトリア、コモロ連合、サントメ・プリンシペ民主共和国、ジブチ、ジンバブエ、スーダン、赤道ギニア、中央アフリカ連邦（旗の中央に縦の赤線がある）、南スーダン、モザンビーク、西サハラ、「横2色、縦長方形一色の旗」はベナン、マダガスカルの国々がそうです。

（中南）ではキューバ、バハマ、プエルトリコ米国自治連邦区、の3カ国と南米大陸の東北部カリブ海に面したガイアナ共和国

（オセアニア）南太平洋、メラネシアにある83の島々からなるバツアナ共和国がそうです。この形は3色旗や縦三色旗では収まらず、縦と横三角形等を組み合わせる事で色の選択の幅が広がった例なのです。

新興国の旗には、キューバやリベリアが米国国旗をヒントにしたり、ベラルーシ（赤赤：緑）の様に赤の面積が緑の約二倍にする事や、赤の織物柄を入れる事で他国との差別化をした国旗もあります。

④斜め縞の他色旗→それでも、他国と差別するには無

理があると云う事から、斜め縞の旗がアフリカなどの新興国で採用されています。コンゴ、タンザニア、ナミビア等がそうです。斜め柄の旗に出会ったら、「この辺だな」と思って下さい。

⑤太陽や宇宙、星等をシンボルとする国

日本、バングラデシュ、ブラジル、韓国等が宇宙や太陽を採用、星はアメリカ合衆国の影響下の国々等、リベリア、プエルトリコ、にみられます。しかし、アフリカ諸国の国旗に、一つ星が描かれている国々が多くありますが、それぞれ独自の意味を持っています。

⑥キリストの十字をデザインする

北ヨーロッパで多くみられ、デンマークが昔から使用していたスカンジナビアクロスを、スウエーデン、ノルウェー、フィンランド、アイスランド等が採用しています。スカンジナビア十字と呼ばれる旗は（長方形に十字架縦線の部分を5分の2に、横線部分は等間隔に描いた十字）因みにデンマーク国旗は、現在使用されている国旗で最も古い云われ13世紀にデザインされたそうです。（実はデンマークと云う国家は、北ヨーロッパの強国で、以前はノルウェーやアイスランドを支配していました。その為、ノルウェーの国旗は、デンマークの国旗の白十字の部分に青十字を入れた旗であり、アイスランドの旗も、ノルウェーの旗色の青と赤を入替えた旗となっています。又世界一大きな島であるグリーンランドはデンマーク領である事を付記して置きます）スイス、ギリシャ、ジョージア等も一部十字を取り入れています。実はイギリスの国旗（注）は漢字の「米」みたいに見えますが、英国旗もキリストの十字を重ねた旗なのです。

（注）英国の国旗には非常に興味深いデザイン旗となっています。良く「ユニオンジャック」（ジャックとは船の先に掲げる旗との意味がある）と呼ばれていますが「ユニオンフラッグ」の呼び名のほうがしっくりします。即ち、イングランド地方（聖ジョージの白地に赤十字旗）の旗、スコットランド地方（聖アンドリューの青地に白バツ十字旗）の旗、北アイルランド地方（聖パトリックの白地に赤バツ十字旗）の旗が合体して出来たのがユニオンフラッグなのです。尚、ウェールズ旗はドラゴン旗ですが、儀式には良くでてくる程度で、イングランドに併合された為、三つの十字が合体した見事な国旗となっています。

⑦イスラムの新月や星をデザインする。→イスラム教国として、新月や星を使用しているイスラム教の国はアフリカで7か国、アジアで11カ国の18か国あるのです。

○：アフリカ7か国が採用。：（モーリタニア・イスラム共和国：アルジェリア：チュニジア：リビア：ジブチ（星）：ソマリア（星）：コモロ連合が国旗に新月や星を採用。

○：アジアでは：トルコ：パキスタン：シリア・アラブ共和国（星）：ヨルダン（星）モリディブ：マレーシア：ウズベキスタン：トルクメニスタン：アゼルバイジャン：タジキスタン（星と緑）：の11か国が採用。

（シンガポールの国旗は三ケ月と星が使われていますがイスラム教のシンボルを表すものではありません）

注【赤十字旗と新月旗】

日本では日本赤十字社として「白地に赤十字」の旗が人道的支援を行う機関として一般的ですが、イスラム教の国では「白地に赤新月」の旗が一般的です。

「赤新月」を使っている国はアフリカで10か国（上記十エジプト、スーダン、モロッコ）アジアで23か国（上記十サウジアラビア：イエーメン：アラブ首長国：カタール：バーレーン：クエート：イラン・イスラム共和国：バングラデシュ：ブルネイ・ダルサラーム：キルギス：カザフスタン）と合計33か国もあるのです。

⑧国章、紋章等のシンボルマークを加える。

スペイン、エジプト、が代表格ですが、以外と国章、紋章を使用している国旗は多いのです。アフガニスタン：イラン・イスラム共和国：オマーン：カザフスタン：ブルネイ：フィジー：カンボジア：スリランカ等の国々。又アルバニア：クロアチア：セルビア：モンテネグロ等旧ユーゴスラビアの国々やアンドラ：サンマリノ：スペイン：バチカン：スロバキア：モルドバ：カナダ（カエデを国のシンボルとした）：メキシコ：エクアドル：ペルー：ボリビアがあり、「五月の太陽」と呼ばれる太陽をシンボルとしたアルゼンチン：ウルグアイ：パラグアイの国々も使用しています。

⑨連邦国家の国旗をカントンに取り入れ

オーストラリア、ニュージーランドが代表格ですが、イギリスから独立した国となると40か国近くになります。その内未だにカントンに取り入れている国々は上記の2か国の他に三カ国があります。いずれも南太平洋でオーストラリア同様の形と色ですが、少しづつ異なっています。ポリネシア最西端の九つの主要な島を持った国、ツバル。と盾紋の紋章を右側部分に入れた国旗のフィジー諸島、そしてポリネシア南西部にあるクック諸島と呼ばれる国々です。現在は五か国となっていますが、以前はカナダやソロモン諸島もイギリス国旗をカントン部分に入れていました。

（余談ですが、ハワイの州旗には米国の州にもかかわらず英国旗がカントン部分に入っています。）

⑩独立時に宗主国であった国旗の一部の色等を取り入れる。

インドネシアがオランダの赤と白を、ノルウェーがデンマークの旗に青十字を、アイスランドもデンマークから独立しましたが、ノルウェーの旗の赤と白を入れ替えるとアイスランドの旗になるのですが、宗主国に気を使っていたのでしょうか。

⑪色で主張する

緑色（イスラム）オレンジ色（ヒンズー）赤（社会主義又は革命で流した血の色）

又、スラブ民族は、ヨーロッパ最大の民族と云われ（スラブ系言語を話す民族）、ロシア、ポーランド、チェコ、スロバキア、フィンランド、ブルガリア、ウクライナ、ベラルーシ、や旧ユーゴスラビアの国々（クロアチア、セルビア等）があります。それらの国旗が使用している色が汎スラブ色の「白：青：赤」なのです。その代表がロシアであり、スロバキア、チェコ、クロアチア、スロベニア、セルビアが横縞の「白：赤：青」をベースとした国旗を使用しています。その他、ベラルーシは、旧ソビエト連邦時代に白ロシアと呼ばれ、国旗には「ハンマーとクワ」の図柄を使用していましたが、1991年のソビエト連邦解体後、1995年に国旗から「ハンマーとクワ」をはずした事により現在の国旗（縦に織物模様を持つ、横柄赤：緑）となって、汎スラブ色は使っていません。

＊一部の例外も当然ある訳で、むしろ、社会主義国家から、離脱を強める意味もあり、ウクライナは、スエーデンと同じカラーを使用、フィンランドはスカンジナビア十字を使用し北ヨーロッパ色を強め、バルト三国（エストニア、ラトビア、リトアニア）はロシア、ドイツから中立独立を主張する為、独自の国旗となっています。

又インドの旗とアイルランド共和国の旗色は類似していますが、インドの緑はイスラム教を、オレンジはヒンズー教を意味し、アイルランドの緑はカトリック教、オレンジ色はプロテスタント教を意味するものと解釈され、各国で色の意味は異なっています。但し、緑色はイスラム教国家の国旗で多く使われています。（例外がインドネシア）

4：国旗を様々な角度から考察する

：色から見て分かる事。

国旗に使用されている色で赤色が8割以上の国が使用し、中でも赤、青、白の三色旗を使っている国が多いのです。

①三色を使った旗の国々。

（ヨーロッパ8か国） アイスランド：イギリス：オランダ：チェコ：スロバキア：ノルウェー：フランス：ルクセンブルグ：ロシア

（南北アメリカ4か国） アメリカ合衆国：キューバ：パナマ：チリ：

（アジア4か国） タイ：北朝鮮：ネパール：ラオス：台湾

（オセアニア4か国） オーストラリア：サモア：ニュージーランド：クック諸島

（アフリカ1か国） 1847年、リベリア独立。＊米国で自由になった奴隷たちに新天地を提供し、独立目的で1822年から白らの手で開墾独立を果たした。その為、米国国旗と色、形とも類似しています。

②赤、白の二色を使った旗について

（ヨーロッパ6か国） オーストリア：スイス：デンマーク：フィンランド：ポーランド：モナコ公国

（南北アメリカ1か国） カナダ

（アジア5か国） ：インドネシア：ジョージア：トルコ：日本：パーレーン

（オセアニア1か国） トンガ王国

（アフリカ） チュニジア（トルコの支配）

等があります。

③地域で見る色の特徴

アフリカは緑、黄色、赤、黒の四色が多い

アジア　ヨーロッパは赤、白、青

オセアニア諸国は　青又は空色が多い。

アフリカ、アジアのイスラム諸国では　緑、が基本で白、赤が使われる。

ひと口コメント：分かりやすい、書きやすい、色は原色使用で類似はダメとなると「早いもの勝ち」の傾向である事が良く分かります。貴方が自国の国旗を選定する立場であったらどうでしょうか。「色は一色じゃつまらない」「二色かな？いや三色が綺麗だ」と云う事でしょうかね。二色から三色の旗が比較的歴史のある国で採用されて来た訳です。逆に新興国は、多色、複雑な形の旗を使用する傾向が見られます。

④：国旗を形から見る地域の傾向

ア：三色旗や十字旗はヨーロッパ及びヨーロッパの流れを汲む国に多くみられる事。

イ：中央アメリカや南米の国々では、国章紋章入りが17国近くあり、スペイン支配の名残りが感じられる事。

ウ：東アジア地区は、日本や韓国、中国、ヴェトナム等、旗の地色は単色でシンボルとして太陽、星などが描かれている事。

西アジア地区、アラビア半島は、横縞三色旗に縦を一本入れたり、三角を入れたりした形。中央アジアに入る

と、横縞三色と旗の地色が単色のものや、2色を地色として、イスラムの新月をデザインしたものが特色。

エ：アフリカ諸国では、旗の形も複雑となります。独立時の様々な問題が凝縮して描かれていますが、色としては、緑、黄色、赤、黒、の四色で各国の主張を表明しています。

5：リオ五輪で上がった国旗

リオ五輪では、193か国と台湾、などの9地域が参加し、相互に競い合いました。その内センターポールに上がった国旗は58か国（個人資格の金メタリストを除く）銀、銅メタリストの国旗を含めると86カ国の国旗が上った事になります。

4年後に東京オリンピックが開催され、世界各国から、選手や観光客が大挙して訪れるでしょう。ハード面の準備が万全でも、自国の国旗を持って応援や観光に来る外国人の小旗を見て、すぐに笑顔で「○○国の人ですね」と声を掛けるホスピタリティーも大切な事だと思います。

本項では、リオ五輪で金メダルを獲得した順番に、その国の国旗を紹介して行きたいと思います。

金メダルを獲得した上位10か国の国旗については、殆どの人がご存じの国旗だと思います。（米国：英国：中国：ロシア：ドイツ：日本：フランス：韓国：豪州：イタリア）これ等の諸国は経済的にも比較的大国である事で知られ、毎日の様に、ニュースになっている国々です。

米国（金43：銀37：銅36）は「星条旗」と呼ばれていますが、独立（1776年）以来、デザイン変更が27回もあった事をご存じでしょうか。それは、カルトン部分の星の数が米国の各州の数と一致させている為なのです。アラスカ州とハワイ州が加わりカルトン部分の星の数が50個に並び替えられた最新の国旗が現在の星条旗となっています。

英国（金27：銀22：銅17）はユニオンフラックとして、前述した様に三つの十字を重ね合わせた見事な国旗です。実は4人の君主の紋章を組み合わせて出来た芸術的国旗なのです。四人とは云っても、ウエールズ旗（赤いドラゴンに白と緑の二色旗）は、イングランドに強制的に統合された為に三つの旗の統合旗となっています。（前述の為省略）

中国（金26：銀18：銅26）の正式名称は中華人民共和国であり、その国旗は通称「五星紅旗」と呼ばれる。旗地の赤と星の黄色は旧ソビエト時代の国旗を手本にしたと云われ、赤地は共産主義革命と中国古来の色を表し、五星の内一番旗竿に近い大きな星は中国共産党を表し、四つの小さな星は、労働者、農民、知識人、愛国

的資本家を表わしています。又、中国本土を中心に、満州、モンゴル、新疆ウイグル、チベットの地域を表すと言った別説もあります。最近の中国は世界第二の経済大国となり、その経済力を背景に、軍事力を増強し、海洋進出によって、日本、フイリピン、ヴェトナム等との紛争が絶えていません。

ロシア連邦（金17：銀17：銅19）は、1991年の旧ソビエト連邦崩壊により、社会主義のシンボルである「赤旗」から旧ロシア帝国の国旗に戻りました。ロシア国旗は横柄の白、青、赤で、その三色は汎スラブ系の旗の基本と云われ、スラブ系言語を使う国々にで良く使われています。ロシアは世界最大の面積（17,075,400キロ㎡）を有し、他国と接する国境が14か国あり、更に海上境界線は日本と米国の2か国にあります。

経済は天然資源に大きく依存していた為、原油などの暴落と、ウクライナを巡る欧米諸国の経済制裁により、かなりの打撃を蒙っています。今回のリオ五輪では、国家ぐるみのドーピング問題も発生、オリンピックの一部参加停止や、パラリンピックの全面停止等の処分が行われました。

ドイツ連邦共和国（金17：銀10：銅14）はシュワルツ（黒）ロット（赤）ゴルト（金）と呼ばれる三色旗で、1813年にナポレオンと戦ったプロイセン王国の義勇団の制服の色と云われています（同じ様にアルゼンチンの国旗も空色と白が、使われていますが、この色も義勇軍の帽章の色と云われています）黒は勤勉と力、赤は自由を求める情熱、金は栄誉と真理を求める輝きを表すものとなっています。

日本（金12：銀8：銅21）はお馴染み日章旗として歴史的にも一貫して使用されている国旗です。（前述した通りです）。

フランス（金9：銀17：銅14）は元祖トリコロール旗（フランス語で三色旗を意味する。赤：白：青）として自由、平等、博愛を表した旗として有名。しかしながら、色の謂れについては定かではない様です。それは、1789年7月14日バスティーユ襲撃時の絵画の旗が、色の順番や縦柄横柄もマチマチでしたので「定かではない」と云われているのです。しかしながら、この時期に絶対王政と封建主義が崩壊し、三色旗が誕生した事は事実です。現在は、ヨーロッパ経済大国として、ドイツ、イギリスにつぐ第三の地位を占めています。

その後フランス国旗の「三色旗」は、イタリア国旗やヨーロッパ各国の国旗作成にあたって大きな影響を与えました。

韓国（金9：銀3：銅9）旗については、少しコメントをすると、通称は太極旗と呼ばれています。その原点は易学にあり、中央の赤（陽）と青（陰）の巴形の丸も、天と地、太陽と月、昼と夜等の相対する調和を意味

しているものです。四隅の記号は易学の「卦」を意味するもので、かなり奥行が深い旗なのです。

豪州（金8：銀11：銅10）は英国のユニオンフラックをカントン（少分割）部分に描いたもので、その下の七つの光を放つ大きな七稜星（七つの光を放つ星）は連邦星と呼ばれオーストラリア連邦を構成する6州と一つの直轄地を象徴しているものです。右側の五つの星（いずれも七稜星）はご存じ南十字星を描いています。（よく似た国旗としてニュージーランドの国旗がありますが、やはり南十字星を五稜星）（五本の光を放つ星）でデザインしたもので、その形の大きさは少しずつ異なっているそうです。

イタリア（金8：銀11：銅7）国旗も「トリコローレ（イタリア語で三色旗）」と呼ばれるお馴染みの国旗。（余談ですが、真ん中の白い部分にアステカの鷲の紋章を加えるとメキシコの国旗となります）

イタリア旗の原型は1848年～1946年に使用されていた現在の三色旗の白の部分に、サルデーニャ王章の盾の形を象った旗が始まりでした。サルデーニャ王国とは、18世紀から19世紀に現在のイタリア、フランスの一部にかけて存在したサヴォイヤ家が支配する王国で、現在のイタリア統一運動の中核であったと言われています。現在のイタリア国旗はその盾を外した三色旗となっています。フランス国旗と同様に「自由、平等、博愛」を意味し、緑は国土を、白はアルプスの雪と平和を、赤は愛国者の熱い血を表すと言われています。ご参考に、サルデーニャ島は、ほぼ日本の四国と同じ位二万四千㎢の広さでイタリア本土の西に位置する島。高級観光地としても有名でサルデーニャ自治州を構成しています。

さて、続く11番から20番の十か国となると、どうでしょうか。恐らく皆さんがご存じの国旗は半分位になるのでは、と思います。

オランダ王国（金8：銀6：銅4）の国旗は、1568年から1648年のスペインと争ったオランダ独立戦争（80年戦争）に遡ります。国旗は、横柄同じ間隔で赤：白：青の三色旗ですが、日本とは歴史的にも古い友好国であります。

ハンガリー共和国（金8：銀3：銅：4）の国旗は、イタリア国旗を横柄にした（横柄で赤：白：緑）デザイン。三色旗が採用されたのは1848年ですが、1918年に社会主義体制となった際には、旗の中央に小麦とハンマーが国章として入れられていました。その後、ハンガリー動乱後は政治色の濃い紋章が外され現在の国旗となっている。

スペイン（金7：銀3：銅4）の国旗は、（横柄で真ん中が黄色でやや旗竿側に国章が描かれ隅が黄色）スペインは南米大陸のブラジルを除く殆どの国を植民地とし

ていた大国であった事により、南米の言語はスペイン語となっています。

ブラジル連邦共和国（金6：銀6：銅6）は、今回の五輪でお馴染みになりましたが、南米で唯一ポルトガルが支配した国家。その為言語も唯一ポルトガル語であり、又独立時も無血革命の国なのです。ブラジルはサッカー大国であり、緑に黄色はサカーのカナリヤ軍団のユニフォームの色として有名ですよね。実はこの色は国旗の色から来ています。又国旗の真ん中の星座図に描かれた星は、現在の26州と一つの連邦区（首都としてゴイアス州から分離したブラジリア市）を表しています。真ん中の白い帯には「秩序と進歩」とポルトガル語で書かれていますが、私もブラジルに3年近く住んでいた経験では、ブラジルに欠けている二文字で、それを目指す為の意思を表した国旗なのです。

ジャマイカ（金6：銀3：銅2）は短距離のボルト選手で有名ですね。×十字はスコットランドの聖アンドリュー旗にならったもので、（×十字を使用した国旗はその他に、アフリカのブルンジがあります。）×十字で仕切った黄色は太陽と天然資源を、左右の黒はアフリカ系黒人を、上下の緑は農業と希望を意味しています。ジャマイカにはブルーマウンテンと言う山があり、最も高い高地で採れる僅かなコーヒー豆が「ブルーマウンテン」と呼ばれ、その下で採れる豆を「ハイマウンテン」更に又下の高地で採れる豆が「ジャマイカ」と名付けられています。

ケニア共和国（金5：銀6：銅1）は、陸上長距離の強い国ですが国旗の特徴は、黒：赤：緑の横三色旗で三色の境界部分が白線になっています。中央部分にはマサイ族の槍と盾が旗の中央に描かれています。原始マサイ族はアフリカの遊牧民として特別戦いに強い事から、戦う槍と守る盾を描き、武具を描いた国旗として大変珍しく、特徴のある国旗となっています。（注：私が子供の頃、「少年ケニア」という連載雑誌がありました。アフリカを舞台にした物語で、孤児となった日本人のワタル少年を、マサイ族の酋長ゼガや、大蛇ダーナが少年を助ける物語です。）

クロアチア（金5：銀3：銅2）国旗は、横柄赤：白：青の汎スラブ色で、ユーゴスラビアから1991年に独立しました。中央の紋章には「サホブニツア」と呼ばれる赤白の市松模様が目立つ国旗です。紋章の上部に描かれている五つの盾紋章はクロアチアを構成する地域の紋章を表したものです。クロアチアは歴史的にもハプスブルク家の伝統が残され、更にアドリア海に面した風光明媚な観光地として大変人気のある国でもあります。

キューバ（金5：銀2：銅4）は、最近米国とも国交回復し、安倍首相も訪問した等、脚光を浴びている国です。国旗は何故か米国に似ています。

国旗を作成した当時は、米国が英国を相手に独立戦争で戦っていた時期で、米国を称えて作成した国旗だからなのです。両端と真ん中に三本の青い横線を、その間を二本の白い横線が走り、旗竿部分から中央少し手前まで伸びる三角形の赤い旗、その中央には白い五稜星が一つ描かれ長方形の旗を構成しています。

赤い三角形は、自由平等博愛の精神と秘密結社「フリーメイソン」を意味し、三本の青は東部、中部、西部の軍管轄地を、二本の白い線は独立戦争の純粋性と高い理想を表わしたものです。キューバは西インド諸島最大の島で、今後、美しい海と音楽、ラム酒、カストロが愛用していたコヒバの葉巻等で観光資源国家としては勿論、コバルト等の鉱物資源についても開発が期待されています。

ニュージーランド（金4：銀9：銅5）の国旗については、豪州の中で少し述べましたが、先住民はポリネシア系マリオ民族の島でした。その為、2015年、現在の政府が、英国カラーを弱める意味からも、新しい国旗図柄を提案し、国民投票に掛けましたが、否決され、今もユニオンフラックを抱えた国旗となっています。

カナダ（金4：銀3：銅15）は、お馴染みの縦柄赤：白：赤で、白い部分に赤いカエデを描いた国旗（メイプル・リーフ・フラッグ）の愛称で呼ばれているポピュラーな国旗です。実はカナダは、ロシアに次いで世界第2位の広大な面積を持つ国家なのです。首都はオタワなのですが、人口は80万人と少なく、トロント（550万人）、モントリオール（400万人）、バンクーバー（200万人）の方が人口も多い。国民はイギリス系46%フランス系24%で世界で最も住みやすい国家の一つであると云われています。1922年から1965年までオーストラリアやニュージーランドの様にカントン部分（旗竿側上半分）に英国国旗が描かれ、他は赤地で右側中央に主な入植者のシンボル（カナダのカエデ、イングランド、スコットランドのライオン、フランスのユリ）を組み合わせ、盾紋を描いた代用旗を使用していた時期もありました。

カナダは、前述した様に世界第二の広大な大地（9984670㎡）を持ち、エネルギー資源も豊富でG7に加盟している先進国です。しかも他国との紛争は殆どない国家で、これは立地の問題もありますが、イギリス系カナダ人とフランス系カナダ人が上手に融合しあい、隣の米国の様に、黒人やヒスパニック系が多い構成国と根本的に異なっているのです。

その次の21番から30番となると、カザフスタン、コロンビア、イラン、ギリシャ、アルゼンチン、スウエーデン、南アフリカ連邦、ウクライナ、ポーランド、北朝鮮となりますが、恐らく2カ国程度の国旗はご存じな

のでしょうが、うろ覚えの人が多いのではないでしょうか。

カザフスタン共和国（金3：銀5：銅9）は西をカスピ海に面した、世界で9番目の大きな面積（272万平方キロメートル）を持つ国家。一時はウラル海の公害問題がありましたが、農業と鉱業に方向性を見出している多民族系（カザフ系、ロシア系、ウズベク系、ウクライナ系、等）国家です。

国旗の地色は、トルコ石のブルー、（穏やかな統一を表す）真ん中に金色のデザイン化された太陽とその廻りを32の小さな炎で囲んでいます。更にこれもデザイン化された金色の草原鷲が太陽の下半分を翼を広げて飛んでいます。旗竿側には、盾に金色で忍冬文（ニントウモン）と呼んでいる古来からの伝統装飾を施してあります。一度見たら忘れられない程手が込んでいてシンプルな国旗となっています。

コロンビア共和国（金3：銀2：銅3）は、1810年にスペインから独立した事もあり、スペイン国旗の色である横柄上部に黄色（二分の一）と下部にオレンジ（四分の一）に近い赤色が使われ、赤の上に青（四分の一）が配色されています。この組み合わせは、いずれもスペインから独立した、エクアドル、ベネズエラも同配色であり、南米諸国独立の先駆者であるフランシスコ・デ・ミランダにちなみ、「ミランダ旗」と呼ばれています。（ヴェネズエラはコロンビア旗の黄色部分に国章を、青の部分に8つの白い星を並べています。エクアドルは真ん中に国章を描いた国旗でいずれも「ミランダ旗」と呼ばれている）。

コロンビアの名前の由来は、アメリカ大陸発見者、クリストーバル・コロン（コロンブス）に由来します。経済については、南米12か国の中でブラジル、アルゼンチンに次ぐ3番目の国ですが、その規模は日本の大阪府規模と小さい。しかし南米特有のインフレ等で悩む事は無く、安定した国家であり、女性も美人が多いと云われています。

イラン（金3：銀1：銅4）の正式な国名は、イラン・イスラム共和国でイスラムの文字が国名に入っています。（国名にイスラムの文字がある国としては、他に、パキスタン、アフガニスタンと、アフリカのモーリタニアがあります）イランは国名通り、西アジア・中東のイスラム共和制国家で、ペルシャとも云われ古代ペルシャ迄遡ると紀元前3000年とその歴史は長い。1979年4月のイスラム革命により、現在の国旗となりましたが帝政時代の国旗も横柄緑、白、赤の三色旗でした。帝政時代は、中央に王の中の王を意味するライオンの国章が描かれていたが、それに替わるものとして、力と不屈の精神を表す剣とイスラムの発展を祈願する4つの三日月を図案化した標章を中央に描き、色の交わる線

の部分にアラビヤ文字で「神は偉大なり」と上下11回ずつ、合計22回繰り返し書いた国旗となっています。我が国との関係は原油の輸入国として、サウジアラビア、アラブ首長国連邦に次ぐ3番目の国であり、核開発問題が解決した現在、貿易拡大が期待されています。人権問題、特に女性に対しては（美人が多い国とも云われている為なのだろうか）「ヒジャーブ（覆い隔てる）」が強制され、男女の自由な恋愛行動は、厳しく制限されています。

ギリシヤ（金3：銀1：銅2）は、古代ギリシヤやオリンピック発祥の地として、五輪開会式の選手入場ではＡＢＣ順の例外として一番始めに行進する事で有名です。掲げる国旗は、青地に白十字をカントン部分に描き、同様に青と白の9本の縞は、9年間続いたオスマン帝国からの独立戦争と9音節を持った「生か死か」のシュプレヒコールに因んだと云われています。

アルゼンチン（金3：銀1：銅0）国旗は、英国軍のブエノスアイレス侵攻時、義勇軍の帽子の色から採ったと云われている。横柄二本のブルーが中央の白線を挟みその真ん中に「五月の太陽」と呼ばれるスペインからの独立闘争に決起した時の太陽をデザイン化した象徴（隣国のウルグアイ東方共和国でも使用）を入れ込んだ爽やかな国旗となっています。

スウェーデン王国（金2：銀6：銅3）の旗は、ライトブルーに金色のスカンジナビア十字旗（デンマーク国旗を見本とした）として1560年に制定されました。スカンジナビア4か国の中で、デンマーク、スウエーデン、ノルウエーの3か国は「Kingdom」であり、正式にはスウエーデン王国です。（フィンランドは共和国）ノーベル賞と福祉国家として名高い国であり、世界幸福度調査でも、デンマーク、スイス、アイスランド、ノルウェー、カナダ、オランダ、ニュージーランド、オーストラリアに次いで第10位（前年は4位）でした。（2016年調査では日本も46位から53位に落ちた）

南アフリカ共和国（金2：銀6：銅2）は、以前アパルトヘイト（人種隔離政策）をとり、国際社会から反発を招いていましたが、1994年の公平な議会選挙によって、黒人大統領の新政権が誕生し、国旗も大きく変わりました。以前は、国旗の中に3か国の国旗がある等、植民地の名残がある旗でしたが、現在は、6色を使った多色旗で原型は「黒人解放組織・アフリカ民族会議」の党旗でした。赤が革命によって流された血、青は空と海、緑は農業と森林資源、黄色は豊かな鉱物（金、ダイヤモンド等）を、国は黒人、白は白人を表しています。旗竿部分が黒の三角形でその回りを金色のVで囲っていますが、文字通り勝利のVを表しています。多色旗であるところから、「レインボー・フラッグ」の愛称で呼ばれています。

ウクライナ（金2：銀5：銅2）国旗については、前述した通り、ロシアからの民族解放旗として採用された為、スウエーデン旗の二色（ライトブルーと黄色を使用した二色旗となっています。民族はウクライナ人が78％で最も多く、次がロシア人の17％となっています。ご存じの様に、政治、経済とも多くの問題を抱え、日本、米国、ドイツ、カナダ、英国等の援助を必要としており、特に、クリミア問題でロシアとの紛争は重大問題で、西側諸国が支援し続けていますが、先の見通しは立っていません。

ポーランド共和国（金2：銀3：銅6）の国旗は、横柄上部白色、下部赤色ほぼ半分ずつのシンプルな国旗となっています。然しながらポーランドの歴史とその遍歴は長く、凄まじいものがあり過去に三度も国土を分割された事から「悲劇の国」と呼ばれてきました。王国時代から、モンゴル帝国の侵略、ドイツ騎士団、ユダヤ人移民、二つの世界大戦の戦場となり、旧ソビエト共産主義体制下の属国時代を経て、ワレサ第三共和制時代での民主主義、が実現しましたが、共産主義時代の厖大な借金と生産性の悪さで経済は益々深刻化していきました。1999年にはＮＡＴＯに加盟し、西側のメンバーとなりました。

北朝鮮（金2：銀3：銅2）は、リオ五輪金メダル獲得数30番目の国となります。

北朝鮮の正式名称は、全く実態と掛け離れたもので、「朝鮮民主主義人民共和国」として、国連には加盟していますが我が国は国と認めていない為「北朝鮮」と呼んでいます。国旗は朝鮮伝統色と云われる、赤、青、白が使われ、横柄両端部分のそれぞれ5分の一が青（青と赤の交わる線は白）真ん中の5分に3部分が赤であり、中央左の部分に、陰陽思想のシンボルと称される「ラウンデル」と呼ばれる、円を基調とした赤い一つ星が描かれています。北朝鮮は1948年9月9日に旧ソビエト連邦の支援の基に金日成を主席として独立し、息子の金正日に引継がれ、現在は三代目の金正恩が国務委員会のトップとして独裁国家を続け、様々な問題を起こしています。

その次の10か国となると、セルビア（金2：銀3：銅2）、ウズベキスタン（金2：銀2：銅5）、ベルギー（金2：銀2：銅5）スイス（金2：銀2：銅2）タイ（金2：銀2：銅2）、スロバキア（金2：銀2：銅0）、旧グルジアで現在は英語なに国名を変えたジョージア（金2：銀1：銅4）となりましたが、ジョージア迄が金メダル2個以上の国家です。（例えば、スイスの十字が縦と横の長さが異なる事など次回に紹介する予定です。）

意外なのは、メキシコ（銀3：銅2）、インド（銀1：銅1）、ノルウエー（銅4）、エジプト（銅3）、

イスラエル（銅2）、ポルトガル（銅1）の諸国は、名だたる国でありながら、一度もセンターポールに国旗が上がらなかった国々でした。

5　国旗を様々な指標から見る

①ＧＤＰから見る：

ＧＤＰの指数は、国力を表す一つの指標です。その指標から捉えると、どの様な傾向が分かるでしょうか。

一位アメリカ：二位中国：三位日本：四位ドイツ：五位イギリス：六位フランス：七位インド：八位イタリア：九位ブラジル：十位カナダ。となっています。当然先進国と云われる国（アメリカ：日本：ドイツ：イギリス：フランス：イタリア：カナダ）のＧ７メンバーの国々は金メタルの多い国のなので全て紹介済みです。それでは、ＢＲＩＣｓ（ブラジル、ロシア、インド、中国）と云われている国々は、どうでしょうか。広大な国土を持ち、人口も多く成長率の高い国と云われている国々です。４か国の人口は世界の４３％を占め、国土面積も30％近くを占めています。ＧＤＰも4か国合計で３０％となっている国々です。しかし、その中でインドだけは、ご紹介出来なかった国ですので、ここで付け加えさせて頂きます。

インド（金０：銀１：銅１）

１９４７年英国からの独立戦争によって、現在のインドが誕生しましたが、国土も広く人口は、世界で2番目の人口が住む大国でありながら、「何故？メダル数が少ないのでしょうか。」その理由にカースト制度にあると、云われています。（カースト制は身分の高いクラスに成る程、頭脳労働をし、身分の低い人は肉体労働者であるとの固定観念が定着しているからと云われています。）スポーツ選手も云わば、究極の肉体労働者との観念なのです。

インドの歴史は、紀元前３千年前に遡ります。インダス川流域で古代インダス文明がおこり、紀元前２３００年から１８００年に亘ってアーリア系民族（南ロシア地方牧畜を営んでいた民族）が北方から居住し、独自の文明を創り上げました。現在のインド国旗は、横縞三色旗で上からサフラン色はヒンズー教を表し、二段目の白地に真ん中の法輪はインドを統一したマウリヤ王朝の三代目アショーカ王ゆかりの記念柱に描かれている法輪（チャクラ）の標章が描かれ、（仏教と、他の宗教との融和を白で表す）、そして下段の緑色はイスラム教を意味するものです。

おわりに。

今回、リオデジャネイロ・オリンピック・パラリンピックを契機に、世界の国旗をご説明致しました。「興味

を持ち→調べる。」又「興味を持ち→調べる。」それを繰り返していると、どんどん限りなく話が広がり、そしてまた広がると云う状況に陥りました。

深い歴史のある国でも、新興国でも、当初からの国旗らしき旗を永年使用している国家が非常に少ない事も分かりました。

又、人類の文明が紀元前3千年あたりから、メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、黄河文明などが、学生時代から教えて頂いている歴史でしたが、それぞれの国家に深い歴史と文明があり、栄枯盛衰を繰り返しながら、現在の国家へと引き継がれている事が曲がりなりにも少し分かった様な気がします。

そして、現在の国旗は「その国が何を求めているのか」「どの様な歴史があったのか」をも考察する事が出来る大変興味深い材料である事も気ずかされました。

どの国も当初は、都市国家から始まり、自国内の権力争い、領土の拡張、国家間の争い、思想の争い、宗教間の争い、経済的争い等々、で古今東西、争う姿は変っていません。

動物も群れをなし、他の群れと戦い、強い、生き残った群れが大きくなってゆく。人類も同じで、強い国家が生き残り、現在があるのです。

今迄はそうであっても、我々人類は果たしてそれで良いのか？を真剣に考えてゆかねばならない時期に来ていると思っています。

今回、国旗と云うテーマから気軽にスタートした訳ですが、私は「日本と云う国の立ち位置」が何となく理解出来た様な気がしました。

即ち、「日の丸と言う国旗」がいろいろな時代を経て来ましたが、世界の先進国と比較しても人口一億人以上の国家として、ＧＤＰ第3位の国家として、国民一人当たりのＧＤＰ２６位の国家として、立派な立ち位置である事を再認識させてくれました。

それでも、人類の歴史が争いの歴史である事を考えると将来どの様にならなければいけないのかを考えさせられるのです。「日章旗」は古から現在に至るまで（一時戦火の状況という異常な精神状態で、国旗を悪用する時代こそありましたが）、穏やかな国民の誇るべき国旗として「日章旗」のもとで、国民一人当たりのＧＤＰが１０番以内に入り、より平等でより幸福な国家を目指し、かつ、世界平和を祈願して第一回目の筆を置きます。

【参考文献】

今回の執筆にあたり、早稲田大学中央図書館とパソコンの利用で大変助かった面がありますが、下記文献を参考にさせて頂きました。

世界の国旗大百科（人文社）：世界の国旗全図鑑（小学館）：世界の国旗図鑑（偕成社）

以上、著者：刈安望
世界の国旗（新星出版社）著者：辻原康夫
世界の国旗（仮説社）著者：板倉聖宣
世界の国旗・国歌総覧（岩崎書店）：藤沢優
西洋紋章大図鑑（美術出版社）ヴァルター・レオンハート（訳：須本由喜子）
世界の国旗と国章大図鑑：平凡社。

（つづく）

古い物・遠い夢

忠内正之

逃げる『有楽斎』（茶道史余滴）

中途ではあるが、物語りを滑らかに進める上で、有楽斎の年譜を記す。

一五四七年（天文十六年）
織田信秀の十一男として生まれる。
一五七四年（天正二年）
尾張国知多郡に所領を与えられ、大草城を居城とする。
一五八二年（天正十年）
織田信忠（信長の嫡男）の旗下で甲州征伐に参陣する。
一五八二年（天正十年）
本能寺の変で二条城から決死の脱出を敢行し、岐阜へ逃れる。
一五八四年（天正十二年）
小牧・長久手の戦に織田信雄（信長の次男）方として参戦。講和を仲介する。
一五九〇年（天正十八年）
信雄が改易され、秀吉の御伽衆に加入。「有楽斎」と称する。
一六〇〇年（慶長五年）
関ヶ原の戦に東軍方として参戦。武功により大和に三万二千石を拝領。
一六一四年（慶長十九年）
大坂冬の陣が起こり、豊臣方として和睦の締結に尽力する。
一六一五年（慶長二十年）
大坂夏の陣を前に、大坂城から退去する。
一六一八年（元和四年）
京都建仁寺の正伝院を再興、茶室「如庵」を建てる。
一六二一年（元和七年）
京都で死去。享年七五。

法号は「正伝院殿如庵有楽大居士」

三

長益が堺に着いたのは、六月七日であった。今井宗久親子は長益を温かく迎え入れた。

いろいろ語り合い、長益の立場と心情をよく理解しながらも、長益が一時考えた佛門に入ることだけは賛成しなかった。

とりあえずは、堺の宿院町に新築したばかりの別邸を供されて休息することになった。

別邸は、築地塀をめぐらした広い敷地に、まだ柿葺の簡素な書院が一棟だけで、渡り廊下の先に侘びた茶室がついている。

長益はすっかり喜んで、出家することをやめて、宗久らの助言に従い、好意に甘えて別邸に潜むことにした。

十一日の昼すぎ、宗久の倅、宗薫が小走りにやって来た。興奮気味である。

「長益さま、大勢はほぼ決しましたぞ」

情勢判断に敏い、宗薫は既に秀吉側であった。

「明智は、孤立無援でございます。主君を弑するがごとき者に、味方する部将はおりませぬ」

宗薫は、大返しして姫路まで来た、羽柴軍団と摂津尼が崎まで強行軍を共にしていたのであった。秀吉とも、途中語り合う機会があったという。

長益は表情を押し殺して聞く。

「秀吉さまは、いち早く、大坂城に籠城しておられる信孝さま（信長の三男）に弔合戦の総大将を願い上げる使者を出され、丹羽長秀さまにも参戦を呼びかけられ、御両所から快諾をいただいたと、天を衝くばかりの勢でありました」

さらに驚かされたことは、今朝方、尼ヶ崎の本営に着くと、そこに本来なら明智軍団に属する池田恒興（摂津伊丹城主）、中川清秀（摂津茨木城主、古田織部の妻女せんの実兄）、高山右近（摂津高槻城主）の、それぞれの家老が出頭しており、秀吉に弔合戦参加を申し出る、その光景に接したというのである。

また、次の情報では明智一族といわれる細川藤孝、忠興父子も居城である宮津から動かず、明智に加担する気配は見えないという。

筒井順慶は一部の兵を明智陣営へ派遣したものの、本人は郡山城にいて、去就を決めかねている模様とのこと、いずれも秀吉が信孝を旗印に、大軍を催したとなれば、なだれをうって寝返りして弔合戦に加わる見通しとなったとのこと。

長益はその夜、ひとり、ゆらめく燭台の火を見つめながら、苦い酒を呑んだ。

形勢は予想通りとなり、明智軍一万数千と、四万余に膨張した羽柴軍団とが激突したのは、十三日である。

京への喉にあたる、天目山の麓、山崎が主戦場となり、明智軍は惨敗を喫した。

その夜、再起を計るべく夜道を主従五、六騎で居城の坂本へ落ちて行く光秀は、途中の小栗栖の竹やぶで、落武者狩りの雑兵の竹槍で絶命したのである。

（明智光秀の天下は、たったの十一日間であったのか）と、

長益は感無量の思いで一杯であった。そして表面は茶の湯三昧の日々であったが、織田家の先々のことを考え、心の中は決して穏やかではなかった。

突然堺に秀吉の使者が現れたのは長益が落ち着かぬ日を過ごしていた、数日あとのことである。宗薫から長益の消息をいち早く秀吉が知った上での動きであった。

まだ若年に見える使者は、秀吉の密使、石田三成と名乗って長益に直々の面会を乞うた。使者は唯の一人、しかも戦乱の地をかいくぐってきた忍びの姿である。

遠路を駆けてきたらしく薄汚れているが、具足を付けたらさぞ凛々しい若武者振りだろうと思わせる容貌である。（時に石田三成は、二十一・三歳か）長益は三成と相対した。

「実はあるじ秀吉様からの内意を受けてまかりこしました」

三成は平伏したままの姿勢で言った。

「秀吉どのには、上様の敵、明智光秀を討たれたとのこと、祝着至極。今はどこに居られるか。安土城でも占拠致したか」

「安土城は焼失致しました」

「焼けた？あの城が、明智が火を放ったか」

初耳である。あの華麗な城が焼失したとは。

「山崎での決戦のために明智軍が安土城を退去したあと、織田信雄様が誰も居らぬ城を火攻めにしたとか」

「なんと信雄が焼いたのか―」

信雄は信忠と同じ正妻の子だが、兄に較べると生来愚鈍であると言われていた。

因みに、信長の正妻は斎藤氏（濃姫、帰蝶）と伝わるが、子がなく、三人もの子を成した生駒氏（吉乃）が正妻として扱われた。信忠、信雄そして徳川信康の妻となった、五徳姫の三人である。

「只今あるじは京に陣を敷かれておりますが、なんとしても長益様にお頼みの儀があるとのことで、こうして私が参上仕りました。三法師様御後見の儀につき、よろしかったら京、本圀寺までお出ましいただきたいとの仰せにございます」

わしに京まで来いというのか、猿奴も偉くなったものだ、長益は内心むっとして睨みつけたが、三成は澄まし

た顔である。
「三法師どのの後見とはどういうことか」
「先般上様傘下のお歴々が岐阜城に集まって評議されました。新たな御主君を決めるために皆様論議の末、ここのところは長益様に束ねていただくのが最良だとの結論でございました。あるじも賛同され、拙者が使者の役目を言い付かりました次第でございます」
「お歴々とは」
「柴田様、丹羽様、滝川様などでございます」
「柴田どのは信孝を押しているのではないのか。明智を攻める折には信孝が総大将になったと聞いたが」
信孝は柴田勝家が烏帽子親であった。
「ところが丹羽様が、信孝様は三子、しかも庶出であるのを指摘されて信雄様を推されました。滝川様もそれに賛意を表されておいでです」
「信孝と信雄、そこに何故わしの名が出るか」
「直系の三法師様をどなたが後見なさるかということですが、信孝様、信雄様に異論がある以上、ここは御年長の長益様に出ていただくしかないと」
「それが秀吉どのの内意でござるか。信孝を推す柴田、信雄を推す丹羽、滝川はどう思うか」
「私奴には詳しい事情はわかりかねますが、評議の席で三法師様についていた信忠様の近習とやらが信忠様の御遺言を明かされたとのことでございます」

長益の顔が苦痛にゆがんだ。二条城での最後の間際、信忠は三法師を頼むと遺言した。いかに命令だったとは言え、信忠を敵中に残して逃れ出た悔いは胸底深く刻まれている。
「秀吉様がそれじゃ、と手を打たれ、他の方々が異議を差し挟む余地はなかったとか」
わしが出て行けば柴田も丹羽も黙ってはいまい。上様譜代の猛将どもが成り上りの秀吉の言うままになるとは思えない。結局は信雄と信孝の争いになろう。わしは織田一族が争うのをこの上見たくない。
長益は三成の面に視線を当ててきっぱりと言った。
「帰って秀吉どのにお伝えくだされ、わしはもともと武士には向かぬ男、この際隠棲致すと心に決めておる故、お言葉には添いかねると。まして京まで出て行く気はござらぬ」
そう言いながら嫌な予感に身体が戦くのを覚えた。巻き込まれたくないと拒絶しながらも、天下の情勢が知らぬうちに自分を押し流していくのではないか。暗澹とした気持のまま長益は秀吉の使者三成を見送った。

長益の不安に追い討ちをかけるように、その七日後には秀吉の親書を持った石田三成が再び長益の前に現れた。
「この度はぜひ御承諾いただきたく参上つかまつりました」

三成は決死の表情である。
「秀吉様直々に伺いたいとの御意志でございましたが、今は京の本圀寺に陣を敷いて指揮を取られている最中で離れぬことが出来ませぬ。この文に思いのたけを書き記した故、願いを聞き届けていただきたいとの御依頼でございます」
手紙の内容は知れている。秀吉はいかにしても長益を担ぎ出したいらしい。
「これは長益様に差し上げるようにとの品でございます」
三成は大事そうに抱えていた包みの袱紗を解いて桐箱を取り出すと長益の前に進めた。
「秀吉様秘蔵の茶碗とか、ぜひ長益様茶室の一品に加えてほしいとの言上でございます」
茶碗ひとつでわしを誑かすつもりか、秀吉の意図が見えすいているだけに、長益は苦々しい思いで箱にチラと視線を走らせた。
「どうぞ蓋を開けてご覧なされませ」
長益の困惑を承知の上で三成は中味を見ることをすすめた。手紙を開く前に餌を先に差し出せというのも、秀吉の命令であろうか。
箱の中は見事な青磁の茶碗であった。がっちりと大きく肌が所々白味を帯びていて美しい。それでいて手に持つとぴったり掌に合う。秀吉はこの名品をいつの間にどこから手に入れたのであろうか。

「これをくれるというのか」
長益は呟くように言って茶碗をそっと布の上においてから文を開いた。
特徴のある勢いのいい字が長々と連っている手紙を丹念に読んだ。
「いつぞや堺の宗久の所であったか、長益様のお点前でいただいた茶の味が忘れられず、そちらに伺って久方ぶりに一服所望仕りたいが、今は京を離れるわけにいかず残念至極である」
と始まって、信長公無念の死に対する悲しみ、憤りが書き連ねてある。
「備中高松城の守りが堅いので、てこずった。攻めあぐねた末に上様の御出陣を乞うたのだが、届いたのは本能寺での御最後の報せであった。あの上様が討たれることがあるなど、考えもしなかった。油断であった。光秀奴に隙をつかれた。無念―」
紙面から秀吉の無念さが伝わってくる。
長益とて、信長の死など及びもつかなかった。不滅の兄だと信じていた。秀吉の文章をわざとらしいと、うとましく思いながらも、反面信長に愛された子飼いの将としての真情だとも思えてくる。
「ここに至っては上様の御意志を継ぐために、織田家の筆頭であられる長益様の御出馬をぜひお願いしたい。信忠様の御遺言は、跡目は三法師様へ、しかし幼少ゆえ成

人するまでは長益様に後見職を頼むということだったと聞く。信忠様の御遺言はそのまま上様のお言葉である。織田家の家来である者は従わねばなりますまい。天下に公言しても何の支障もない。秀吉にもそれが最上の策と思われる。ぜひお引き受けいただきたい」

切羽つまった秀吉の願いが切々と伝わってくる文章である。

書状を膝元に置いた長益を、三成はよい答えを得なければおめおめ帰れないとばかりに必死の面持ちで凝視している。

「秀吉どのの仰せの儀はよくわかった。しかし、前から申している通り、私は上様御存命中より弓矢には向かぬと言われた男、とても織田家相続の器ではない。この件は辞退致したいと既に心に決めておる。このまま隠棲致して世の中を見守りたいと思っておる」

なりふり構わず懇願する秀吉の内心は長益には見えていた。秀吉には煙たい存在である譜代の武将、信雄を推す丹羽長秀や滝川一益、信孝を奉じる柴田勝家に先んじるには、長益を後見人につけた三法師が必要だったのである。

更に信忠の遺言という切り札がある。秀吉が織田を看板に天下を取るための道具立てであった。

「しかし織田家の方々を抑えて三法師様を盛り立てるのは長益様しかないとのあるじのお言葉でございます」

長益は秀吉のおだてに乗るつもりはなかった。秀吉が智力と戦略に秀れた武将に成長したのは認めるが、利用されるのは御免蒙りたい。

「何度も言うように私は武将の器ではない。信雄、信孝と争いになるのも好まない。跡目相続のことは御辞退申し上げたい」

「ではこのあとどのようにしたらよろしいか、そのお考えもお聞きしたいとの秀吉様の御意向でございました」

「私のように戦さに向かぬ者より、素早く仇の明智を討った秀吉どのが後見職になられたらよろしかろう」

なかば面倒になって言い放った長益の言葉に三成は喰らいついた。

「そうお思いでございますか。長益様は秀吉様が後見職になったらよいとの仰せでございますか。そのお言葉、しかとあるじに伝えますが、なにせ書状を携えて来た使者の身、返書がなくては、戻れません。そのお言葉、しかと書面に表して下さいませ。それがなくては使いの面目が立ちませぬ」

秀吉にしてやられたような、わり切れない気持のまま、長益は思った通りを書状にしたためた。

三成は返書を手に早々と京に向って駆けて行った。進物の茶碗も返書と共に返そうとしたが、三成はあるじの気持故と受けとらなかった。秀吉にすれば最上の目的を

達したのだと、南宋青磁の茶碗の肌を愛でながら長益は苦笑した。

この時から三法師推戴を金科玉条とする秀吉の天下取りが、着々と始まるのである。

四

翌年秋、長益は秀吉から旧領大草をそのままとし、堺屋敷を賜り、今井宗久の世話で侘び茶室を備えた家を構えた。ここを足場にして京、大坂の茶の湯にもしばしば出向いた。秀吉の三法師推戴を承認した見返りに、望んでいた隠居同然の暮らしを保障されたのである。

織田後継者を決める清洲会議は、長益の言質を得て諸将を味方に引き入れた秀吉の勝利であった。柴田勝家は信長三男の信孝を推しており、筆頭家老である自身の力からして生来賢明であると言われる信孝が後継者になると信じていた。

次席家老の丹羽長秀は次男信雄を戴いていたが、信雄の凡庸さは知れ渡っていたので、議論になれば勝家方に傾くであろうと考えていた。

ところが長秀は最後の最後で秀吉の主張に与した。長秀もまた秀吉の下工作に狙われていたのである。勝家に味方したのは、勝家軍団の滝川一益と佐々成政だけであった。同じ立場の前田利家はなぜか中立を通した。池田恒興、細川藤孝、忠興父子など諸将は大方が秀吉派であった。

勝家はこの成行きにあわてたが、時既に遅く、跡目は三法師に決定した。

織田家領土は信雄が尾張を、信孝が美濃を引き継ぐことになった。三法師は修復された安土城に入り、守り役には秀吉配下の堀秀政が当った。

会議の席上では秀吉は後見職を辞退し、信雄、信孝にその役を振ったという。名目だけの後見職だが、いずれ起るであろう主導権争いを見越したのだと、あとで聞いた長益は、秀吉の奸智に舌を巻いた。

政治は柴田、丹羽、池田、秀吉の四人合議で決める。この中丹羽と池田は秀吉派であり、柴田が孤立するのは目に見えている。秀吉と柴田の間に戦さが起こる。長益はそう直感し、柴田に嫁いだ姉のお市の身を思いやったのである。

お市の方は長益の異母姉で、幼い頃同じ屋敷で育っている。共に暮らしたのは幼時だけだが、時に目にする成長した姉の美しさに眼を見張ったものである。

信長の政略で近江の浅井長政に嫁がされ、朝倉と結託して敵となった浅井が滅ぼされると、長男は殺されたが三人の娘を連れて織田に戻った。秀吉が藤吉郎の時代からお市に懸想していたことは有名で、信長亡き後実力を

つけた秀吉を嫌って、お市は勝家に嫁いだのである。

かつて、近江小谷城から逃れてきた三人の姫たちを垣間見て、長益はその可憐さに眼を瞠った覚えがある。

余談だが、織田家は美男・美女の家系だったと言う。大勢いた信長の妹たちのうち、お市の画像は高野山持明院に、お犬（お市の次の妹で佐治信方の妻となる）の画像は龍安寺に伝わっていると言うが、どちらもすばらしい美貌が筆写されているという。

ここでまた勝家の北の庄城が秀吉に落とされたら、お市と娘たちはどうなるか。長益は男たちの権力争いの犠牲になる女たちの運命に胸を痛めるのだった。

天正十一年四月、秀吉の攻撃によって北の庄城は落ちた。お市の方は城を逃れず勝家と生死を共にした。三人の娘たちはお市の懇願で敵方に託された。この時長益は秀吉の意を受けて、三人の姫を迎えるために戦場に足を向けている。

秀吉の本陣で城から逃れてきた三人の姫、茶々、はつ、お江を長益は出迎えた。三挺の女駕籠には、乳母である大蔵卿局と護衛の武士が十人ほど付いていた。若武者の中には大蔵卿の子息である大野治長、治房兄弟が混じっている。

大蔵卿局は、近江小谷城主浅井家の重臣、大野政治の妻であった。長男を生んで間もなく、主君の正室お市の方が長女を出産、才媛の聞こえが高かったことと乳の出の豊かさで乳母に選ばれた。

夫が討ち死にし、寡婦になったあとは、女主人お市の方の守役をつとめながら、わが子を育て上げたのだった。治長と治房は既に初陣をすませている。今や一人でも手が欲しいなかを、勝家、お市の方の心遣いによって、親子共に生き延びるよう命ぜられたのであった。

駕籠から降り立った姫三人はさすがに頬をこわばらせていたが、すっくと背筋を伸ばして誇りを隠さない十七歳の茶々の姿に、長益はお市の面影を見て驚いたのであった。

秀吉に願って三姫を大草城で預かることにした。越前から山越えして美濃に抜け、郡上八幡城、清洲城を経て知多に入った。風光明媚で潮風の吹く大草の地に姫たちは満足した様子であった。

今しばらく、三人の姫は、長益の妻お清の保護の下平穏に暮らしている。

三姫を引きとってほっとしたのも束の間、長益にはまたも痛恨の事件が起った。

柴田勝家と秀吉の戦さはそのまま信孝と信雄の対立となった。北の庄城の落城で信孝は孤立し、秀吉に降伏する。信雄は三法師後見職を一人勝ち取った具合になり天下を治める気になっていた。

間もなく、安土城から使者が来て、信雄が信孝に切腹を申し付けたという。信孝は南知多内海の大御堂寺に移された。長益に信孝の切腹を見届けてほしいという使者の言上であった。

長益は驚ろいて清洲城に来ているという信雄に進言に走った。兄弟が争うことの愚を説いたが、信雄は聞き入れない。秀吉の本心を見抜けず、甘言を信じている信雄には何を言っても無駄であった。長益は、かつて信長が次弟の信行を謀反の罪で誅した事実を思い起こし、肝が冷えた。戦国の世、兄弟相争うのは常の事だが、長益には耐えられない。

しかし今や織田の頭領と思い上がっている信雄は聞く耳をもたない。うかうかすると、織田が邪魔である秀吉に足を掬われる恐れがある。致し方なく長益は知多にとって返し、内海の大御堂寺に向った。

ここ野間大御堂寺は、かつて平清盛と戦って敗れた源義朝が落ちのびる途中、家臣に騙し討ちされた因縁の場所である。のちに鎌倉幕府を開いた頼朝が父の菩提を弔って建立した真言宗の古刹である。

信孝は覚悟を定めて寺に蟄居していた。

「叔父上が来て下されたか」

長益を慕っていた信孝は検視が長益と知って喜んだ。

「叔父上、今は織田家の一大事、織田の将来、信雄兄上や、三法師のこともよろしくお願い申し上げます」

賢明な信孝は兄が秀吉にたぶらかされていることを見抜いていたのである。

弱冠二十六歳の信孝は長益が見守る前で見事に腹を掻き切ったのである。

辞世の三十一文字を残していった。

むかしより　主をうつみの野間なれば
　むくいをまてや　羽柴筑前

秀吉の世になってから最初の身内の犠牲であった。後始末を信雄の家臣に任せ、沈痛の思いで長益は大草に戻ったのであった。

賤ヶ岳合戦の結果、信雄は尾張、伊勢、伊賀の三ヵ国を手に入れ、信孝は自害した。

長益は、織田家の血脈故の悲劇に、ひとしきり慨嘆した。と同時に自分に課せられた宿命を予感した。

「秀吉は、織田の家名を利用しているに過ぎない」

そのように思い知らされたのは、信雄と長益、ほぼ同時であった。そして、長益が信雄に切り出す前に、信雄は、父信長の盟友、家康に共闘を求めていくのであった。

続く

里見氏と北条氏
―房総の戦国興亡史（2）

山田嘉久

四　房越同盟―上杉謙信と里見氏

永禄3年（1560）5月、北条氏康は里見義堯の居城である久留里城（君津市）攻撃を再開した。

そして小櫃川の向かい側に、新しい城を築城したのである。危機的な状況に陥った義堯は、現状を打開しようとした。

そこで、義堯は小田喜城（大多喜町）の正木時茂を通すことにより、越後の戦国大名上杉謙信に関東への出陣を要請したのである。前年の永禄2年、上洛した謙信は13代将軍足利義輝から、関東管領上杉憲政と協力し関東支配を行うよう命を受けていたので、断る理由はなかった。

北条氏康は古河公方足利義氏を擁立して関東支配を目論んだが、謙信は上野国の長野業正や常陸国の佐竹義重など反北条氏の立場にある諸将を糾合したのである。反北条氏勢力は、謙信の関東出陣を大いに歓迎した。

彼らは北条氏の勢力拡大に強い危機感を抱いていた。こうした里見による謙信への出陣要請は房越同盟の成立を示すものだった。

謙信は永禄3年8月、上杉憲政とともに越後を出発した。同年9月には上野国沼田（群馬県沼田市）に到着した。この一報を受けた武蔵野国忍城の成田氏や岩付城の太田氏らは瞬く間に北条領へ攻撃の手を伸ばしたのである。

反北条勢力が攻勢に転じたことは、久留里城を包囲した北条勢にも情報が伝わった。北条勢は急遽退却して謙信討伐に向かわざるを得なかったのである。

それほど謙信の勢力は凄まじいものがあった。

こうして里見氏は、北条氏の脅威から逃れた。

同年12月には攻勢に転じ、正木時茂、時忠兄弟が下総国の香取、小見川へ進出した。正木兄弟は謙信が援軍で駆けつけているという心強いこともあり、北条氏に味方した原氏の居城である臼井城（佐倉市）を攻撃するまで

になったのである。

五　里見対北条の大激戦―第2次国府台合戦

永禄6年（1563）に上杉謙信は安房の里見義堯、義弘に手紙を送り、南敵（北条氏）の根を切り枝葉をたやすのはこの時なので、何をおいても出兵するようにと出陣を要請した。

これに応じた里見義堯は早速、嫡子義弘を大将とし、その主力は下総市川に陣を敷いた。

この里見軍の動きを下総小金城の高城氏や江戸城からの知らせによっていち早く察知した北条氏康は相模、伊豆、武蔵の一族家臣に檄を飛ばして早急な参陣を命じた。

このように氏康が迅速な出陣を命じたのは、戦いが長ければ上州に居る上杉謙信に知れ、来援の上杉軍に背後を襲われる。これを避けるためだった。

一方、里見軍は岩槻の太田資正の軍勢とともに市川の北方国府台の上に陣して北条軍を迎え撃った。有名な第2次国府台の合戦である。

国府台は下総国府の置かれた場所であり、今でも近くに国分寺跡や国分尼寺跡がある。（因みに上総国府は市原、安房国府は安房郡三好村）

また文明11年（1479）には、扇谷上杉家の家宰である太田道灌がこの地に国府台城を築いている。

国府台はまた、古来より交通の要所でもあった。

下総から武蔵へ渡る通常の経路は江戸川（当時は太日川）を松戸の相模台から渡る経路であったが、このほか市川の国府台から渡ることもできたし、また江戸湾の内海と岩槻（現埼玉県）とを結ぶ水路もあった。いずれも国府台が拠点となっている。

このため、里見氏はたびたび安房、上総から国府台に出陣しているし、一方、江戸城や葛西城（現葛飾区青戸）を奪取した北条氏にとっても国府台一帯が勢力の境目となっていたのである。

因みに、それより25年前の天文7年（1538）に小弓御所足利義明が里見義堯など上総、下総の軍勢を従えて北条氏康と同じ国府台で戦った合戦が第1次国府台の合戦である。

この戦いは、古河公方足利高基と小弓公方足利義明との兄弟対立を背景にして起きたものだが、結果は義明は子息とともに討死して、小弓公方家は滅亡した。

里見義堯はかろうじて逃げて、小弓城にいた幼少の遺児たちを連れて安房久留里城に帰った。

これを機に、上総の諸将の多くは北条氏綱に服属するようになる。また義明に追われて相模方面に亡命していた真里谷信隆も、再び真里谷一族の惣領に返り咲いた。

当時、北条氏は河越城（川越市）を支配するなど、関東一円に支配権を確立しようとしていた。従って房総で勢

力を築きつつあった義明は、邪魔な存在であった。一方の義明も同じく北条氏を快く思っていなかったであろう。

結果は義明にとって悲惨なものであった。この戦いによって、房総の勢力図は大きく変わった。

余談だが、討死した義明の遺児は里見義堯の庇護を受けるようになりその後、出家して鎌倉の太平寺に入寺、青岳尼と名乗った。ところが弘治2年（1556）、里見義堯の嫡子義弘は北条氏の領域鎌倉を攻めた際、太平寺を訪ねて青岳尼に自分の妻になるよう説得して強引に還俗させようとした。説得に応じた青岳尼は還俗して義弘の正室となった。

住持である青岳尼を失った太平寺は北条氏によって排寺となった。青岳尼の墓は南房総市の興禅寺にある。

第2次合戦では、当初は里見軍が優勢で勝利を収めたので、北条軍の先鋒は敗退した。しかし、その夜、戦勝に気をよくして油断していた里見軍の陣営に、北条軍は総力を挙げて夜襲をかけた。

不意をつかれた里見軍はたちまち混乱、敗走した。里見義弘や重臣正木時茂も安房を目指して逃げた。

里見軍を追って南下した北条軍の先鋒は上総に入ったが、当時背後に関東に出馬中の上杉謙信がいたので、深追いを止め兵を返した。この合戦で里見氏が大敗して退くと、上総は殆ど北条軍の支配下に入り、ただ土気城（現千葉市）のみが辛うじて北条軍と戦っていた。

かくて里見氏は上総一国をまるまる失った。

その上、重臣で勝浦城主であった正木時忠にも反旗を翻されたのである。（後述）

弱り目に祟り目というが、里見氏は北条氏への敗北に加えて、苦しい立場に追い込まれた。

その後ようやく反乱を鎮め、再び上総進出を開始することになる。

実は、この第2次国府台合戦には永禄6年説と永禄7年説とがあり、両者が混同して伝わっているようである。現在では天文7年が第一次、永禄7年が第2次と称されているが、実際には永禄6年にも合戦があったのかもしれない。

それほど北条と里見の戦いは熾烈であった。

六　池和田城攻防戦と三船山合戦

―里見氏と北条氏の死闘

池和田城は市原市にあった城郭であり、同地は交通の要衝にあることで知られている。真里谷城と庁南城の中間に位置する上、大多喜街道や茂原方面への街道が交差している。永禄7年（1564）に起こった第2次国府台合戦以後、この地をめぐって攻防が繰り広げられた。

第2次国府台合戦で里見氏が北条氏に敗れると、北条氏の勢力は上総へと深く侵攻した。その際、里見氏が最

後の砦として拠ったのが池和田城である。

攻撃する北条氏政は周囲を崖などで囲まれた池和田城を攻めあぐねた。

一方、同城を守る多賀蔵人、兵衛兄弟や正木大膳亮らが多くの死傷者を出しながら猛攻を防ぎ、なかなか城は陥落しなかった。

しかし城内に相模出身の吉山七郎太郎という者がおり、日頃から多賀蔵人に怨みを抱いているという情報を得た北条側は、吉山氏を調略、内応させることに成功した。そして深夜に放火し、見事に落城させることに成功した。

この戦いによって里見家の重臣だった正木時忠は北条氏に通じるようになり、里見氏の弱体化がいっそう進展した。

手痛い敗北を喫した里見義堯、義弘父子であったが、その後は徐々に勢力を盛り返した。永禄9年（1566）から翌年にかけて、再び久留里城（君津市）、佐貫城（富津市）などを掌中に収めるようになった。

この頃、相変わらず関東の政治情勢は流動的であり、上杉謙信、北条氏政、武田信玄が三つ巴になって勢力争いを展開していた。そのなかで、氏政は勢力を戻しつつあった里見氏を再度叩くべく、上総へと進軍するのである。

北条氏が上総侵攻を開始するのは、永禄10年（1567）8月のことである。氏政は武蔵野国岩付城主である太田氏資（うじすけ）らとともに、上総国に入国した。同時に、北条綱成に命令して、三浦半島から海上ルートを利用して、安房国を攻撃する作戦を立てたのである。

北条軍は上総の西海岸の沿って南下し、三船（舟）山に陣を構えた。三船山は佐貫城の北に位置して標高130メートルの小高い丘になっている。

同年8月下旬、里見義弘の率いる軍勢が、この地に陣を敷いた北条軍と激突した。結果は里見氏の大勝利であり、北条軍は多くの兵が討ち死にしている。

なかでも太田氏資を失ったのは、痛恨の極みだった。

海上から侵攻した北条綱成も、里見水軍と交戦して手痛い敗北を喫した。

三船山合戦によって、再び里見氏は息を吹き返した。

七　勝浦城主正木時忠の寝返り

これまで何度が登場した正木氏であったが、その系譜についてははっきりしたことは分かっていない。

一説には相模三浦氏の系譜を引くというが、この説もいまだ十分な確証を得ることができない。

15世紀の半ば以降、正木氏は里見氏に仕えるようになり、以後は安房国長狭郡に本拠を築いた。

正木時忠は時綱の3男として大永元年（1521）に誕生した。兄が時茂、子が時通、頼忠である。正木氏は里

見氏と協力して真里谷武田氏を放逐すると、東上総を配下に収めるようになった。兄の時茂は小田喜城（大多喜町）に入り、時忠は勝浦城（勝浦市）を任されるようになった。

以後、正木氏は北条氏と死闘を繰り返し、房総で里見氏と正木氏に反旗を翻す真里谷武田氏の残党や千葉氏などと戦った。しかし、永禄7年（1564）の第2次国府台合戦によって事情は大きく変わった。

まず、里見氏の勢力が大きく後退し、北条氏が積極的に房総に攻め入るようになった。

ほぼ同じ頃、時忠の兄である時茂が亡くなったため、実質的に正木家の当主となった時忠は弱体化した里見氏から徐々に距離を置くような態度をとるようになった。正木氏は自立化の傾向をいっそう強めていったのである。

時忠は、子息の頼忠を北条氏政に人質として送った。これにより北条氏の軍事的支援を受けることになり、里見氏との対決姿勢をさらに強めていった。

八　千葉一族最後の光彩

―千葉介胤富

本稿は主として戦国時代の北条氏と里見氏の抗争を取り扱っているので、鎌倉時代から房総に君臨してきた千葉氏については敢えて触れないで来た。

それは名族千葉氏も、この戦国期に入ると一族内が分裂して、あまり大きな力を持たなくなってきたからである。そして末期には小田原北条氏に服属する地位に甘んじるようになっていた。

しかし、その中にあって千葉一族最後の光彩を放った人物千葉介胤富に触れないわけにはゆかない。

胤富は千葉介昌胤の子として大永7年（1527）に、千葉一族の東方の最重要拠点である森山城（現香取郡小見川町）で生まれた。

千葉介は長男利胤が継いだが32歳で病没、その後嫡子近胤も弘治3年（1557）、家臣によって殺されてしまった。

そのため一族、重臣に推されて千葉介に継いだ叔父胤富は千葉氏の本拠である下総佐倉城に移った。

この時、森山城には千葉胤次を、小見城にはその子光胤を置いた。

この光胤こそ、北条氏の当主氏康の9男で、胤次が北条氏に願って貰い受け養子とした人物である。

このように、当時北条氏は下総の千葉一族の中にも深く根を張っていたことを示している。

佐倉城に移って、千葉一族の宗主となった胤富に最初にふりかかった試練は永禄3年（1560）、上杉謙信の関東出兵だった。

謙信に立ち向った北条氏康は防衛を断念して、古河城にいた公方足利義氏を奉じて小田原城に立て籠った。一

方、謙信軍に呼応した里見義堯、義弘は上総から相模に侵入し、また重臣正木時茂は西下総に攻め入った。

千葉介胤富は救援に駆けつけたが力及ばず、佐倉城に立て籠った。

その後、謙信軍は小田原城を落とすことができず、鎌倉鶴が岡八幡宮の神前で、関八州の諸将を従えて正式に上杉管領家の家督を継ぎ、上杉氏を名乗ることになった。そして越後春日山城に帰った。

謙信が関東を去ると北条氏康は着々と勢力を挽回したため、謙信は再び関東へ出陣しなければならなかった。謙信の要請に応えて里見義堯も下総に出陣して下総市川に着陣した。

胤富は里見軍に応戦したが、北条氏の後援の届かぬ今は戦況を好転させることはできなかった。

この下総の状況を大きく転換させたのが、前述の永禄7年正月の国府台の合戦だった。この合戦での北条軍の大勝利は、里見軍を再び南方の安房に追いやった。

北条方として参戦した千葉介胤富は小弓、臼井の両城を再び奪回することができた。

しかし、これでも胤富は、安閑としてはおられなかった。再び関東に出陣してきた上杉謙信は下総に攻め入ったからである。

永禄9年3月には上杉軍は千葉氏領国の中でも重要な城である下総臼井城を囲んだ。急を聞いた胤富は臼井城救援に駆けつけた。

しかし昼夜攻めかかる上杉軍の前にもはや落城は間もないとみえたが、上杉軍の無謀な攻撃により、千葉軍は奇跡的に勝利を収めることができた。これにより上杉軍は城の囲みを解き退却した。

その後の胤富は北条方に参陣して各地を転戦、また下総に侵入してくる里見軍の防戦と落ち着く暇もなかった。

そのような中で小田原では元亀元年（1571）に北条氏康が没し、氏政が後を継いだ。そして天正元年（1573）に武田信玄が亡くなり、翌2年には胤富を悩まし続けた里見義堯もこの世を去った。その子義弘はついに北条氏政と和睦、翌6年には上杉謙信も没した。

これによって下総は小康状態を保ったが、天正7年、千葉一族最後の光彩を放った千葉介胤富もこの世を去った。享年53歳であったという。

九　北条氏、里見氏の滅亡

―房総戦国の終焉

中央政権に目を転じると、京都で政権を握った豊臣秀吉は、九州の平定も終えたのち、関東への関心を強めてきた。

とくに、秀吉にあくまで反抗の態度をとって、招きに応じない北条氏に業をにやしていた。

北条氏と姻戚関係にあった徳川家康は、北条氏直に秀

吉の招きに応じて上洛するよう熱心にすすめたので、氏直もようやく天正16年（1588）に叔父の北条氏規を秀吉のもとに送り、和睦を申し入れた。

秀吉がこの年の11月に、安房の里見義康の使いに送った書状には、北条氏直が、なにごとも「上意次第」にすると約束したので、赦免したと書いている。

しかしこの後も北条氏は小田原城を始め領内の諸城を修築して戦争の準備を進めていた。そして伊達正宗と同盟して、上野国に出兵して真田昌幸の名胡桃城を奪った。これは秀吉が定めた「惣無事令（大名間の私闘を禁じた法令）に違反するとして激怒した秀吉は、家康を通じて宣戦の書状を小田原に送った。

一方、北条氏も領内に総動員を発した。

上総国武射郡坂田城主井田因幡守に届いた書状には、総勢225名の出陣を求め、1騎1兵の不足ないようとの厳命が記されていたという。

このように秀吉の小田原攻めは開始されたが、結局、天正18年（1590）、3ケ月余の籠城戦の挙句、北条氏は豊臣秀吉に降伏した。

氏政、氏照兄弟は自刃、当主氏直は高野山に入った。こうして戦国大名北条氏は滅亡したのだが、5代目当主氏直が助命されたのは、家康の娘と結婚していたのが一因といわれる。

翌年、氏直は赦されて1万石に封じられたが、その直後の11月に病没。ここに北条家の嫡流は断絶した。（ただし氏直の叔父氏規の子孫が河内狭山藩として大名に列して北条の名を後世に伝えている。）

一方、その後の里見家はどうなったであろうか。

里見義頼が天正15年（1587）に没すると、その子義康が里見家を相続した。この義康の時に、前述の通り、関東の時代を一変させた豊臣秀吉の小田原北条氏攻めに遭遇するのである。

義康は好機到来とばかり秀吉方について、年来の敵である北条氏を攻めた。しかし、すぐに小田原を囲む秀吉の許に馳せ参じず、上総から三浦半島に出兵して鎌倉を占領することに力を入れていた。

その為、小田原に着いた義康は、遅参を理由に秀吉から上総国を没収され、安房一国の領地だけにされてしまった。

戦国の雄里見氏も秀吉配下の一大名にされてしまったのである。更に不幸なことは当主の義康が急死したことである。

慶長8年11月に相続した嫡子の梅鶴丸はまだ僅か10歳の子供だった。それでも里見家は徳川氏配下の一大名として生きようと努力していた。

慶長11年、梅鶴丸は将軍徳川秀忠の前で元服し、秀忠の一字を賜って忠義と名乗った。また慶長16年には当時、

幕府の中で最大の実力者であった大久保忠隣の孫娘を妻として迎えた。

これによって、里見家は安泰と思われたが、のちにこれが裏目と出た。

慶長19年、幕府内部の権力闘争の結果、本多正信、正純の陰謀に敗れて大久保忠隣（小田原藩　大久保家初代）が失脚すると、その累は里見家にまで及んだ。同年9月9日の重陽の賀儀のために江戸城に出仕した里見忠義は、突如将軍から減封、国替の命令を受けた。

安房の国は没収、鹿島3万石の替え地は伯耆国倉吉で与えるというのである。驚いた正木時茂ら重臣は早速駿府に走って大御所家康に哀願したが空しかった。

家康は江戸に近い関東の地に、戦国以来の外様大名を置くことに不安を感じたのであろう。現に、江戸入府後の家康が安房（里見本拠地）に最も近い上総国大多喜に配したのは徳川四天王の一人本多忠勝であった。

草深い田舎の一藩に過ぎない大多喜藩にしては分に過ぎた大物の配置であるが、これもすべて南接する外様里見藩に対する警戒のためであった。

突如、国替の命令を受けた里見忠義と家臣たちは再び国許へも帰れず、そのまま伯耆国倉吉へと旅立った。

ここに170年間、房総の地を基盤として育った大名里見家は、ついに滅亡することとなったのである。

伯耆国倉吉に流された忠義は、元和5年（1619）冬、倉吉からまた十数里も山奥の小鴨川上流の堀村に移され、29歳の若さでこの世を去った。

この時、8名の家臣が主君の後を追って殉死したと伝えられる。その戒名に共通して「賢」の字が入ることから、俗に「8賢士」と呼ばれが、実は彼らこそ、江戸後期に発刊された「南総里見八犬伝」の登場する「八犬伝」のモデルといわれる。

また余談だが、現在房総には復数の里見家埋蔵金伝説が存在する。

里見家が断絶した際に幕府の役人が里見家の接収に出向くと、千両箱がたったの2箱しか残っていなかったという。いかに零落したといえ関東の名門一族の財産が千両箱2箱とはあまりにも不自然。一説によると粘土と松脂で包んだ金の延べ棒が、家臣の手によって房総半島の嶺岡山中に埋められたという。

南房総市千倉町の小松寺にも里見氏の財宝伝説がある。寺の縁起書には「旭さす夕日輝く双樹の下に漆千盃、朱千盃、銭十億万貫埋めておく」という暗号めいた一文が記されていると云う。

昭和39年には松戸市下矢切で唐銭や宋銭など31種類の古銭が大量に出土している。発見場所は「国府台合戦」を繰り広げた戦場に近いことから、里見氏の軍用金という可能性も捨てきれない。

また昭和46年には市原市馬立の根元神社の敷地内から、銅銭1万枚以上が詰まった壺が発見された。これも発見当時は里見氏の埋蔵金ではないかと、新聞等に大きく報道された。

あるいは今でも房総内のどこかには、里見氏が再興を期して隠した莫大なお宝が眠っているのかもしれない。

秀吉の小田原攻めに際して、秀吉方に味方し参戦したのは、安房の里見義康のみで、上総北部から下総にかけての諸大名、武将たちは殆ど小田原に参陣した。

すなわち千葉氏の宗主重胤とその一族、臼井城の原胤栄、土気城の酒井康治、下総布川の豊島頼継、上総万木の土岐少弼などである。前述の坂田城の井田因幡守もその一人であった。

しかし徳川家康を先鋒とした秀吉軍に抗する術もなく、短期間の間に、北条氏に味方する房総の諸城はほとんど落城した。

そして小田原城に籠城した房総の戦国大名たちも、ほとんど全て北条軍の滅亡と運命を共にした。

かくて房総の戦国時代は終わったのである。

（続く）

千家尊福伝（一三）

隈板内閣打倒を率いた貴族院議員

村上邦治

はじめに

明治三一年（一八九八）六月三〇日は、憲政史上最も記念すべき日となった。明治七年板垣退助らの民撰議院設立建白書を皮切りに、板垣、片岡健吉、林有造らによる初の政治結社を高知で結成して二四年、明治二三年帝国議会開設以来八年、まさに艱難辛苦の末、ついに、大隈重信を総理大臣、板垣退助を内務大臣とする、憲政党による「隈板内閣」が成立、わが国初の政党内閣が誕生した。長年お互い激しく反目していた自由党と進歩党（前立憲改進党）両党は解体し、新たに「憲政党」を結党して、わずか一週間後の事であった。

静岡県知事の職にあった貴族院議員千家尊福は、これまで常に政府攻撃に終始し、西欧列強諸国に対峙するわが国の行く末を顧みない、衆議院二政党の政策と行動を身近でみていた。今度はその政党が、政権に就くという新事態に、内務省地方官として、県知事を続けていくことは、もはや我慢できなかった。

大隈内閣成立と同時に、静岡県知事辞職を申し出た。大隈首相と板垣内相から、直接強く慰留されたが、信念は変わることなく辞任した。

新内閣は衆議院の八割を占める憲政党内閣である以上、もはや尊福の表舞台への復活は、望めなくなったと思われた。

一　憲政党結党

第二次伊藤内閣は、内（日清戦争後不況による企業営

業税軽減）外（列強諸国の中国分割）情勢から、急を要する地租増徴政策の実現に、渾身の努力を続けた。しかし六月一〇日、衆議院の過半を占める民党二党により、賛成二七票反対二四七票という圧倒的多数で否決された。伊藤首相はこれに対抗すべく、即日議会を解散した。

追い詰められ苦境におちいった伊藤内閣から、政権奪取の匂いを感じ取った民党二党は、議会解散の翌日、早くも幹部たちによる評議員会を設置・開催、そこで新党結成を決定、合同後の宣言や綱領などの準備に入った。新党の党名は、「憲政党」とすることが決まった。そして次の日には、憲政党宣言と綱領を発表した。

宣言では、

「憲法発布・議会開設以来一〇年ならんとす。この間解散はすでに五回の多きに及び、憲政の実また全くあがらず、国務の遅滞を致せり。

今やわれらは、内外の形勢にかんがみ、断然自由・進歩の両党を解き、広く同志を糾合して一大政党を組織し、更始一新もって憲政の完成を期せんとす。」（一部抜粋）

と、結党に至った経緯と目的を明らかにした。

新党の綱領は、検討時間の余裕はなく、ほとんど明治一五年立憲改進党結党の規約（皇室尊崇、国権拡張、歳計権衡、通商貿易発展、地方自治の発達、陸海軍の適度な設備など）を、援用せざるを得なかった。

これらの準備をしたうえで、大隈には自由党松田正久、林有三、片岡健吉を、板垣のもとには、進歩党楠本正隆、尾崎行雄、大東義徹をそれぞれ訪問させ、民党大合同の計画を説明した。大隈・板垣の二人は、即座に快諾し協力を誓った。

二一日両党解党、二二日に新党結成式を挙げた。設立委員を代表して鳩山和夫（旧進歩党後衆議院議長）は、

「藩閥政府（伊藤内閣）は、わが党の結成を聞いて、喪心落胆必ず城を明けて逃走するであろう。」

と述べて、政権奪取の意気込みを語った。

民党二党による新党結成という事態をみていた伊藤首相は、すべての勲位顕爵一切を返上して野に下り、予てからの持論である、自ら憲政党に対抗する一大政府党（伊藤新党）の結党を目論み、着手したのである。博文の構想はまず側近の井上蔵相に打ち明け、議論の末ようやく協力を得られた。しかし元老会議では、全員に反対され、新党の結党は、断念せざるを得なかった。さりとて、予想すらしなかった突然の大政党出現に、首相を引受け乗り切ろうとする元老は、誰一人としていなかった。ここに至り伊藤首相は、新しく結党された憲政党大隈と板垣に、政権を渡す以外、残された道はなかったのである。

解散してなお続くと思われた伊藤内閣の総辞職に、憲政党員は沸き上がった。伊藤が内閣を投げ出すという急展開の事態に、憲政党党首格の二人は、党員の前では虚勢を張ったものの、本音では、内外に山積する難題に立ち向かい、解決させる自信はなかった。

伊藤は天皇の裁可を受けて、二人に次期政権の担当を要請した。

自信家で楽天的な大隈でさえ、

「にはかの辞職はまことに意外であった。われわれが政権を担当して果たしてうまく行くか案ぜられる。」

と、本音を吐いた。

小心で潔癖な板垣は、

「私にとっても意外であった。今度民党が合同して政綱が発表されたといっても、まだほんの輪郭だけであって、将来の国務に関し、その計画も実行の具体的方法も十分審議してはいない。この合同は、まだまだ甚だしく薄弱である。」

と、新党の現状を正直に話した。

両首脳は、伊藤内閣の突然の辞職に対し、結成して間のない憲政党の政権担当に、自信も準備もないことを自覚し、伊藤に不安を吐露したのであった。意気上がる一般党員の前では、決して見せない姿であった。実際二人の発言は、新党の内情と政権担当能力を、よく言い表していたことは、直ぐに露呈してくる。

二　大隈内閣成立

明治三一年六月三〇日、憲政党を基盤とする大隈内閣（第一次）が成立した。わが国最初の政党内閣であった。いわゆる「隈板内閣」と呼ばれるもので、大隈首相は外相を兼務、板垣は内相を担当した。その他閣僚には、松田正久（大蔵旧自由）、大東義徹（司法旧進歩）、尾崎行雄（文部旧進歩）、林有造（逓信旧自由）、大石正巳（農商務旧進歩）が入閣し、結党の立役者が選ばれた。桂太郎陸相（長州）、西郷従道海相（薩摩）の二大臣は、大隈の奏上に基づき、天皇の勅命として留任した。

中央の行政機構においては、全ての次官に憲政党員が就き、局長の一部、参与官、秘書官も憲政党員に入れ替わった。警視総監、北海道長官も更迭し、憲政党員がなった。地方官である府県知事では、東京府、富山、静岡、長野、石川、栃木、群馬、香川の八府県知事が入れ替わり、憲政党員が新たに就任した。結局大臣を除き、三五名の党員が政府高官の職に就き、猟官欲の強い党員の要望を一部実現し、名実ともに憲政党内閣として、これまでの藩閥政府を一新する陣容で発足したのである。

発足一か月後の八月一〇日、前伊藤内閣による解散を受けて、憲政党内閣の下で、第六回総選挙が実施された。この選挙では、立憲選挙の模範とすべく、前回選挙では、

刀剣その他人を殺傷するに足る物件の携帯を禁じたのに対し、今回は新たに、買収、利益誘導等を禁止する取締罰則を追加した。選挙結果は、衆議院議員定員三〇〇名のうち、九割弱の二六三名を憲政党が占める、与党の大勝利であった。

大隈首相は、衆議院の安定した勢力を背景に、最初の政治目標として、行政整理の実施と官制の改革に着手した。

先ず各省の局・課を整理・統一することであった。その成果は、一〇月に官制改革要綱として公布された「官治の標準」に結実した。その中で、事務官進退の厳正化、官吏俸給制の完備、定員の削減、経費の節減などが規定され、政権交代の成果といえるものであった。

三　半身不随内閣

憲政史上初の政党内閣が成立したものの、大隈や板垣が認識していたように、当初より多くの問題を抱えての発足であった。

まず憲政党内閣といっても、桂、西郷の両軍部大臣は、前伊藤内閣から引き続き留任していた。政党内閣と言われたものの、陸海相の二人は、藩閥の有力者であり、内閣に協調的であるはずはなかった。軍備予算は、前内閣の作成した軍備拡張計画を変更させない、という確約をとったうえで留任した。それだけではなく、三二年度予算案や目玉であった官制改革についても、閣内協議では持論を展開し、批判的姿勢を崩さなかった。桂は当初より、この内閣を、「半身不随内閣」と見做していた。

短期間で合同した憲政党内では、内閣成立した後においてさえも、旧自由党派と旧進歩党派は、何かにつけて、対立的な姿勢が次第に目立ち始め、自派に有利な主張・要求をするようになった。

内閣成立直後、大臣について、旧進歩党派五（首相外務兼務、司法、文部、農商務）、旧自由党派三（内務、大蔵、逓信）の配分は、旧自由党派に不満を生じさせるとともに、板垣の指導力に疑問を抱かせた。

また旧党内においては、党員一致して合同に賛同したわけではなかった。進歩党内では、反地租増徴政策に固執する内閣に対し、行財政整理を進め民党の姿勢を維持しながら、地租増徴を主張する「毎日（新聞）派」と呼ばれる島田三郎（元東京横浜毎日新聞社長）、田口卯吉（「東京経済雑誌」創刊者）ら、主流派に対立する批判集団を抱えていた。

自由党内には、合同に反対する星亨（衆議院議長後逓信相、東京市議会議長）が、党内実権者の立場にいた。星は前伊藤内閣時より、駐米公使として赴任し、憲政党結党時日本を離れ、反対活動はできなかった。しかし、

大隈首相兼外相の制止を聞かず、八月突然帰国、自由党の不満分子を纏め始めた。

憲政党を批判する星の帰国により、旧自由党内では、大隈は兼任している外務大臣の職を、星に譲ることで、旧自由党派の不服を緩和させるものとみていた。ところが大隈は、勝手に帰国をした星を快く思わず、また側近の尾崎文相が強く反対し、外相の椅子を手離さなかった。これにより旧自由党派の不満は、一層高まることになった。

中央で民党二党は一党化を果たしたものの、長年敵対してきた地方での両党合同は、表向きの看板だけであり、お互い疑心暗鬼が続いた。末端組織まで一体化するには、かなりの時間を必要としたのである。千家静岡県知事の後任に、加藤平四郎自由党幹事が任命された時、旧進歩党選出議員や県内党員が、激しく反対運動を行い、大隈首相に、加藤県知事から進歩党員に交代を迫った、ことなどがその好例である。各地の支部では、憲政党としての活動よりは、これまでと同様、旧自由、旧進歩に分かれ、別々の活動を続けていたのである。

四　貴族院の逆襲

内閣の一体化がなかなか進まず、多くの不満を抱えていた大隈内閣に、正面から最も厳しい対立姿勢を示し脅威となったのは、貴族院勢力であった。

貴族院は発足当初より、非政党主義が基本とされ、藩閥政府の擁護勢力として、期待されていた。しかし貴族院の自立を主張し、反藩閥政府姿勢を明確にする五摂家筆頭近衛篤麿が率いる「三曜会」や、国粋・国本の立場から谷干城が率いる「懇話会」と、藩閥政府との協調を重視する「研究会」の二つの潮流があった。研究会は政党並みの決議拘束主義をとったため、二五年と三〇年の有爵互選選挙で、三曜会・懇話会に圧勝した。選挙毎に派内勢力を拡大した研究会は、貴族院の最大勢力になった。幹部である幹事には、伯爵大原重朝、同萬里小路通房、子爵岡部長職、同堀田正養ら子爵六名、男爵では千家尊福ただ一人であった。

尊福は、明治三〇年の有爵議員総改選を機に、子爵勢力が中心の研究会から独立し、男爵議員を取り纏めた「木曜会」を結成し、その領袖となった。

一方、勅選議員を中心に、緩やかな会派として「茶話会」が結成された。これを纏めたのは、山縣有朋側近の平田東助（米沢山縣側近内務・大蔵官僚勅選議員後農商務、内務大臣）であった。また無所属議員は、憲政党結党を目の当たりにして、「無所属派」として纏った。

藩閥政府擁護の研究会・木曜会・茶話会・無所属派の各派は、衆議院で野党であった自由党と進歩党が、合同して憲政党を結党し、しかも短期間で初の政党内閣であ

る大隈内閣を成立させたことに、大きな衝撃を受けた。貴族院ではその対抗策として、以前から民党と親密な三曜会や懇話会、それに進歩党系の多額納税者議員を除き、各派が糾合して、政党内閣を倒閣しようと動き始めたのである。

貴族院各派は、最大派で当時清浦清吾（肥後山縣側近司法・内務官僚勅選議員後法相、枢密院議長、総理大臣）が取り纏める研究会、研究会から独立し団結力の強い尊福率いる木曜会、山縣系平田の茶話会と、勅任議員を中心とする無所属派の各派（後に一派に纏り「幸倶楽部」となる）が、大隈内閣打倒でまとまった。総数は二四〇名を超え、貴族院議員の八割を占め、衆議院最大政党の憲政党と真っ向から、対立する形が整ったのである。参加した議員の多くは、これまでも政党に対し批判的であったが、憲政党内閣が発足以後、凄まじい猟官行動と施政の混乱を身近にみて、倒閣運動は一気に盛り上がった。

各派から委員を選び、政府を糾弾することとして、一一月に開催される第一三回帝国議会（特別・通常会）劈頭に、「隈板内閣弾劾上奏案」をまとめ、大隈内閣の政権の諸問題を糺し、倒閣の姿勢を明確にすることにしたのである。

この弾劾上奏の内容は、

「内閣成立以来熟々その為す所を視るに、いたずらに党利にしたがひて国家の利害を顧みず、みだりに吏僚を取り替えて政令を渋滞せしめ、外交緩慢にながれ、財政姑息（地租増徴策に変わる間接消費税増税）を事とし、はなはなだしきに至っては教育を司るの閣臣にして国体と相容れざるの言論（尾崎文相の共和演説）をなしてはばからず、司法の職にある者にして官権を濫用（警視総監に党員西山志澄就任）するもいましめず、官僚の選叙政令の施設またこれを党員の要請に聴きて怪しまず、官紀日に紊乱し政綱しだいに弛廃す、是ただ輔弼の責任を欠くのみならず、しいては大権を傷つけむとすることを申し出るものなり。」（一部略）

と、大隈内閣の失政を追及し、総辞職を求めるものであった。

国会開設以来藩閥政府は、予算成立に際しては、衆議院民党に反対され、苦労の連続であった。政党内閣である大隈内閣は、衆議院では盤石の基盤を持つに至ったが、今度は貴族院の反対に直面しなければならなくなった。頼みの親政府派の三曜会・懇話会や、進歩党系の多額納税者議員を含めても二割程度に過ぎずなかった。大隈首相は貴族院対策として、組閣当初貴族院議長近衛篤麿を、文部大臣に起用しようとしたほどであった。大隈内閣は、次第に反政府に纏るのをみて、今度の国会では、貴族院対策に、最も頭を悩ませることが予想された。しかも政府には、衆議院と違い、貴族院に対しては解散権を有せず、対抗手段は皆無に等しいものだったのである。

この貴族院各派の糾合における尊福の行動は、大きな影響を与えた。大隈内閣発足と同時に、即刻静岡県知事を辞任し、団結力を誇示する木曜会の最高責任者として、反政府弾劾の先頭に立ちあがり、積極的に貴族院議員を団結させたのである。

五　官僚の反発

憲政党内閣によるすさまじい猟官熱は、高級官僚や内務省地方官達を、一気に不安に陥れるものであった。内閣発足後、各省次官や局長は突然更迭され、その後任には、憲政党員が就いた。内務省では、地方官である府県知事の職を、逐次党員に代えていった。重要な府県については、期間に関わらず更迭した。こうした目に余る大々的な党員の就官により、官僚層はその職を失っていったのである。

こうした大隈内閣の現官僚を無視した党員優先人事に対し、熊本県知事であった大浦兼武（内務官僚後警視総監、逓信、農商務大臣）は七月二八日、宮城県知事の辞令を受けたが、転任を電報により拒絶、着任することなく辞任し、大隈内閣の地方官人事に、抵抗を示した。大浦の宮城県知事在任は、履歴上は七月二八日から八月九日の一〇日余りの期間となっている。

官僚達は抵抗するものの、当時の制度ではいかんともしがたく、次の内閣による文官任用令の改正（奏任官である資格なき者つまり政党員は、勅任官に任用できない）を待たねばならなかった。不遇に直面した官僚たちが頼ったのは、山縣有朋であった。第一次山縣内閣（明治二二年一二月発足）では、自ら内務大臣を半年間兼務して以来、部下あるいは門下をうまく使いこなし、官僚を重視することから、信奉者が次第に増えていった。そして何よりも、官僚たちを惹きつけたのは、有朋が政党嫌いであったことである。伊藤博文は政党との協同により、議会運営を乗り切った。しかも二度までも自ら政党を結党しようともした。また第二次伊藤内閣では、自由党板垣退助を内相に任命し、自由党と連携したのである。

それに引き替え、有朋の政党嫌いは一貫していた。一次山縣内閣では政党を無視した超然主義を採り、政党との妥協を拒絶した。博文の結党構想に際しては、強硬に反対した。そうした有朋の周辺には、各省官僚や地方官を中心とする山縣系官僚群が形成されていった。

これら山縣系と呼ばれる官僚群が、貴族院反大隈内閣糾合派と連携し、大隈内閣倒閣運動を進めたのである。

六　尾崎文相共和演説事件

一一月の議会開催を前に、貴族院議員と内務省官僚らによる、倒閣網が形成されていたおり、奇怪な事件が起きた。尾崎文部大臣の共和演説事件である。

事件は、八月二一日尾崎文相が、教育者の集まりである帝国教育会の茶話会に招待され、そこで演説したことから起きた。講演の内容に「不敬の言」ありとして、大隈政権を揺るがせるまでに発展した。

尾崎は大隈内閣最年少（四一歳）大臣として、藩閥政府の抑圧的な教育行政から、開放的な教育政策を果断に推進していた。この演説の前日、教員の言論集会に種々の制限を加えてきた、明治一四年から三一年に至る省令・訓令・内訓・達・内達二二種類を一括して廃止した。この中には、第二次伊藤内閣時に出された河野敏鎌文相の議会への請願運動抑圧の内訓（明治二五年）や、井上毅文相の教育団体に政論を禁止する箝口訓令（明治二六年）が含まれていた。参加した教育関係者は、新文相のこれら施策に、大いに盛り上がりをみせていた。

尾崎文相の演説は、参加した五百余の教師などを前に、翌日の『東京日々新聞』（長州閥系新聞）では

「若し我国にして千百年の後共和政体設立するが如きことあるも（勿論なかるべきも）、拝金熱熾なれば到底之を維持すること能はざるべし。」

と、論じたことが報道された。

ところが同じ東京日々二五日の記事では

「若しも我国にして千百歳の後共和政体設立せらるるが如きことあらば、三菱三井は大統領たるに至らん。此く拝金熱熾なれば到底之を維持する能はざるべし」

と、より具体的に報道した。

尾崎はこうした過熱した報道を鎮めるべく

「日本に於いては共和政治を行う気遣いはない。例え千万年を経るも共和政治を行ふと云うことはないが、説明便利の為に、日本に仮に共和政治ありと云う夢を見たと仮定せられよ、恐らく三井三菱は大統領の候補者になるであろう。」

と、速記により正確な内容を公表し、各新聞で報じられた。これによれば尾崎演説は、日本における共和政治を主張し、共和政治を理想としているとは到底思われず、この問題は沈静化するものとみられた。

しかし、藩閥系新聞（東京日々、山縣有朋支援の『京華日報』、国民協会系の『中央新聞』）は、こののちも、

「尾崎は心中共和政治を理想としている」

「速記録を改竄した」

などと、批判を繰り返した。最後には

「仮定の引例にせよ、共和政体を口にしたこと自体、文部大臣として不適格である」

と、執拗に尾崎を追詰め、文相辞職を迫った。

一方、進歩党系『報知新聞』は尾崎擁護を報道し、中立的であった『時事新報』（福沢諭吉創刊）や、反藩閥の

『日本』（陸羯南）ですら、『京華日報』の強引な報道に、

「余りに業々しき偏狭に向かって、実に黙するにしのびざるなり」

と、難ぐせを繰り返す新聞を、厳しく論評したのである。

これで本事件は収まるものとみられたが、共和政治という言葉に、宮中が敏感に反応したことから、再熱複雑化する。侍従長（徳大寺実則）や宮内大臣（田中光顕）が、尾崎に事実を照会したことから、内閣が動揺し始めたのである。

首相の大隈は、帝国教育会の速記録や尾崎本人から直接聴取した上で、不都合なことは何もないと判断した。しかし桂、西郷の陸海軍大臣はまだしも、閣内旧自由党派の板垣、林、松田の三大臣は、尾崎を不問に付すことは許されず、何らかの処置を要求したのである。

これら旧自由党派の行動の裏には、当時深刻な問題が生じていた。板垣内相の「仏敵問題」である。この事件は、板垣が監獄の教誨師に、これまでの僧侶だけでなく、キリスト教の牧師を採用したため、僧侶側から

「板垣は仏敵なり」

の意見書を広く配布して、板垣を攻撃していたのである。板垣は、僧侶側の反発に当惑し、尾崎自身の回顧録では、

「共和事件を蒸し返し、非難することで、仏敵問題は収まる」

と、藩閥側から示唆されたことから、板垣以下三大臣の行動になったものとしている。新聞を利用した藩閥側の攻勢をきっかけに、桂、西郷は、政権奪回を意図し、板垣ら旧自由党系閣僚は尾崎を辞任させ、仏敵問題の終息や、文相後任を旧自由党派に奪いたい、との思惑があった。

尾崎文相は、内容に全く問題ないとして、

「共和演説が理由なら、辞表は出さない」

と最後まで反対したが、仏敵問題という弱みを抱える板垣内相が、

「尾崎文相と同一内閣に両立できない」

と、上奏したことから、これ以上の抵抗はできなかった。尾崎は、ついに一〇月二一日に辞任を表明した。

文相後任問題は、旧自由党派にとって、閣僚劣勢の是正好機ととらえ、自派の星亨や片岡健吉らの起用を、大隈首相に強く働き掛けた。しかし大隈は、二六日またもや強引に、旧進歩党派の犬養毅（後総理大臣）を任命した。八月星亨が帰国し、大隈首相が兼務していた外相を、板垣らは要求したが、これを拒み、今度もまた、旧自由党派の要求を拒絶したことに、旧自由党派の忍耐も、もはや限界であった。

巷では、

「野山這う　蛇の長虫　ふたつくび
右も左も　ゆきがてにする（行きかねている）」

と、大隈内閣を風刺した川柳が掲載され、初の政党内閣の混乱振りを皮肉った。

旧自由党派の実質的指導者になっていた星は、これ以上同一政党として、旧進歩党派と協力関係を続けていくことはできないと決断し、憲政党分裂の具体化を急いだ。二九日旧自由党員だけで、憲政党大会を開催し、現憲政党の解散を決議、新たに同一名の「憲政党」を結成した。旧進歩党派は、この決議を無効とし、同じく憲政党を名乗ったが、板垣内相の名をもって、解党した憲政党を名乗ることは禁止された。その為、「憲政本党」と変更せざるを得なかった。ついにここに、憲政党は分裂した。結党以来わずか四か月のことであった。

旧自由党派が新「憲政党」を結成した二九日に、板垣ら旧自由党三大臣は、大隈首相ではなく、直接天皇に辞表を提出した。この内閣が、大隈・板垣の二人に、大命が下りたことからであった。大命自体一本化されず、隈板内閣とよばれる、二人による内閣であったのである。総理大臣が内閣の最高責任者という当然あるべき姿から、大命降下自体、すでに矛盾を孕んでいたのである。

七　大隈内閣崩壊

強気な大隈首相は、憲政党分裂、三閣僚の辞任、という事態を奇貨として、憲政本党による内閣改造を行い、政党内閣の存続を目論んだ。国民新聞は、三一日大隈首相が参内して、内相犬養毅、外相鳩山和夫、司法相楠本正隆、逓信相大東義徹、文相島田三郎、蔵相神鞭知常らによる、旧進歩党単独内閣の奏上を報じた。

しかしすでに、大隈内閣成立の根幹であった憲政党は分裂、大命降下の一人板垣内相は辞表を出し、その拠り所が崩壊していた。そして何よりも、国会開幕時には、貴族院の研究会、木曜会、茶話会、無所属派が糾合して、大隈内閣を弾劾することが決まっていた。第一三回帝国議会は九月に、一一月七日に特別（大隈内閣成立後の解散総選挙）と常会をあわせての招集が決定していたのである。

貴族院、衆議院いずれにおいても、反大隈反憲政本党派が過半を占め、国会運営は乗り切れないことから、ついに大隈首相は、三一日閣内不統一の責めを負い、辞表を提出した。

憲政史上最初の政党内閣であった大隈内閣は、結局一度も国会に臨むことさえできず、わずか四か月の短命で、しかも閣内および党内の自壊により、倒れたのである。

八　山縣内閣（第二次）の成立

憲法停止してまでも、政党内閣樹立阻止を強く主張した元勲たちを抑えて、隈板内閣の生みの親ともいえた伊藤博文は、この時日本を離れていた。半年にも満たないで瓦解するとは夢にも思わず、列強諸国による中国分割の現況と、清国の内政状況を視察するため、韓国を経由して北京、天津を訪問後、上海に滞在中であった。大隈内閣崩壊による次期首班を決める元老会議に出席のため、天皇より急遽帰国を求められた。しかし元老会議には、その途上で間に合わず、欠席となった。

本来の順番からすれば、今度は薩摩系が首相になるはずであったが、政党内閣成立以来、貴族院議員を団結させ官僚をまとめた、山縣有朋が総理大臣に指名された。

一一月八日第二次山縣内閣は、山縣系長州人脈（青木外相、桂陸相）と、内相西郷、蔵相松方、文相樺山、海相山本権兵衛ら薩摩閥の協力を得て成立した。これまで有朋は、政党を否定し超然主義をとってきたが、もはや政党の協力なくしては、議会運営はできない事は明白であった。その為憲政党（旧自由党）党首板垣や実力者星の協力を求めた。星もまた、政党のみでは何も進まない前内閣の経験から、提携には前向きで、山縣内閣の与党となった。しかも星は、党員の猟官を、一切求めなかった。党員の就任により、行政の混乱を招いた教訓からのことであった。

山縣内閣として最初にやらなければならないことは、大隈内閣が多数の政党員を官僚へ選任した人事を、元に戻すことであった。内閣各省は、人事異動により手間なくできたものの、問題は地方官の更迭であった。八月実施した主要地方官の大規模人事から、僅か三か月しか経っておらず、地方自治の観点からは、短期間の更迭は難題であった。

特に首都東京の府知事は、全国府知事の代表であり、政府と一体となり政策を進める必要から、直ちに憲政党内閣による任命者を、更迭せねばならなかった。

九　東京府知事更迭

明治三〇年一〇月より、東京府知事は、貴族院議員で最大勢力を誇る研究会派の幹事（幹部）岡部長職（子爵元岸和田藩主）が務めていた。国会開設後四代の府知事は、蜂須賀茂韶（元徳島藩主侯爵貴族院議員後議長、文相）、富田鉄之助（日本銀行総裁貴族院議員）、三浦安（貴族院議員）、久我通久（侯爵貴族院議員）が就任、首都にふさわしい大物を、厳選任命していた。

大隈内閣成立後、板垣内相は七月一六日付で東京、大阪両府知事と北海道庁長官の三名を、在任期間に関係なく更迭し、それぞれ憲政党員を任命した。

東京府知事に任命されたのは、横浜毎日新聞主筆の経歴を持ち、大胆で新しい言論活動で注目された肥塚龍で

あった。筋金入りの改進党員であり、政治家としても、神奈川県県会議員、東京市会議員、赤坂区会議員、衆議院議員三選、と豊富な経験を有していた。松隈内閣の時には、農商務省鉱山局長に就任し、当時改進党員の田中正造が告発にしていた足尾鉱毒事件を担当、被害の調査や対策に携わった。大隈首相は政権を取ったとはいえ、就任わずか九か月で、貴族院の大物岡部を更迭したが、その後任には、政治経歴、政治見識、行政経験いずれをとっても憲政党議員の中で、最右翼の人物を起用したのであった。

当時東京府は、地方自治制度の基本となっていた明治二一年制定の「市制」「町村制」において、東京・大阪・京都の三市は、「市制特例」により、府知事が市長を兼任するという変則的な形がとられていた。これらの市は政府にとって特に重要視され、政争に乱されることなく、政府の施策を、直ちに実施する必要があったことからであった。しかし、国会開設以来特例廃止の要求は、政党や自治を望む各市から根強く、一〇年経過し、伊藤内閣は、この特例の廃止を決めたのである。

東京府が特例により管轄していた東京市は、一〇月から名実ともに自治体として発足することとなり、府庁舎の一部を間借りして、市業務の開始したところであった。一一月一三日には上野公園にて、親任官、各国公使、各省庁高等官、知事、貴・衆両院議員など一二〇〇名を集め、大々的に東京市開庁の式典を開催する予定になっていたのである。

いくら大隈内閣から、山縣内閣に変わったとはいえ、わずか四か月で肥塚現府知事を更迭することは、政党の猟官行動を批判した藩閥政府としては、なんとしても肥塚以上の人物を府知事に当て、批判を抑える以外になかった。しかも開庁式は一週間後に迫っていた。

こうした切迫した中で、貴・衆両院議員、府・市職員府・市民、新聞・雑誌の報道機関など、誰からもこの更迭を受け入れ、納得させることができる人物を起用する必要があった。

山縣内閣の西郷従道内相は、この人選に際し、難しい二県を円滑に統治した豊富な地方官としての行政経験、政治家として貴族院有力会派の重鎮であり、大隈内閣倒閣に功績があり、人物として器量が大きく徳望がある千家尊福以外に見当たらなかった。伊藤博文系とみられていた尊福であったが、躊躇することなく尊福の起用を決め、山縣首相の了承を得たのであった。

明治三一年一一月一二日第一七代東京府知事として、従三位勲三等男爵千家尊福が就任した。

一三日の博物館前での開庁式には、はれて新東京府知事として列席した千家尊福の姿があった。

おわりに

明治三一年は東アジアとくに中国をめぐって、まさに激動の年であった。列強諸国は、中国から要地・要港の租借や鉄道敷設権を獲得した。ロシアは東清鉄道南支線（ハルピン・旅順間）の敷設権と旅順・大連を、ドイツは膠州湾を、イギリスは九龍威海衛を、それぞれ租借した。フランスはインドシナに隣接する広東・広西・雲南各省の権益を確保し、翌年には広州湾を正式に租借した。「モンロー主義」（孤立主義）を外交の基本にしていたアメリカさえも、この年ハワイ、グアム、フイリッピンを領土とした上、門戸開放宣言により、中国進出を明確にした。これに反し日本は、日清戦争勝利による遼東半島割譲を三国干渉により、明治二八年（一八九五）放棄せざるを得なかったのみならず、この年はわずか清国との間に、台湾を護る為、対岸福建省の不割譲条約（他国に割譲せず）を締結したのみであった。

外交に大きく後れを取った原因の一つは、国内政治の混乱であった。立憲制から一〇年を経過するも、藩閥対政党の角逐が、地租増税問題（軍備増強を目指す藩閥政府政策）から混迷を深め、この年内閣は三度更迭（松方、伊藤、大隈各内閣）、総選挙は二度（松方内閣解散による三月第五回、伊藤内閣解散による八月第六回）実施された。こうした国内政治の混乱は、地租増徴により軍備増強を早期に図りたい藩閥政府を、悩まし続けたのである。

立憲国家発足以来、一〇年間続いた藩閥政府体制を、二大政党の合併という思いもよらない荒業で、政権奪取した憲政党内閣は、貴族院や行政官僚の圧迫を受けていたが、結局内紛により自壊、僅か四カ月の短命で終わってしまった。

この失敗から、藩閥内で急速に勢力を伸ばしてきた山縣有朋や伊藤博文、さらに弟分の桂太郎や西園寺公望が、再度国内政治を固めて、風雲急を告げる東アジアに対し、日本の足場を築いていくことになる。

その日本の帝都東京を統治する府知事として、尊福は、待ち受ける国難を、政府と共に立ち向かうこととなるのである。

（つづく）

（参考文献は最後に記します。）

『時評家　新明正道』（評伝その六）

山本鎭雄

第五章　社会学事始め

一　社会学研究の習練時代

新明正道博士（一八九八～一九八四）は東京帝大法学部政治学科を卒業し、神戸の関西学院文学部教授に就任した。新明は東京帝大新人会本部で先輩や後輩とともに卒業直前まで共同生活をおくって、新人会機関誌の編集を担当し、しかも多種多様なジャンルの原稿を掲載した。東京帝大法科大学政治学科の吉野作造教授を慕って入学した新明は、新人会の活動の傍ら、吉野教授の政治学や政治史の講義を熱心に受講した政治学徒であった。新明の新人会の活動はまさに「政治学の社会的実践」（田野崎昭夫）である。

新明は関西学院に採用される最終の段階で、学院当局から政治学と社会学の講義を依頼された。ところが、政治学を専攻した新明にとって最大の懸案は「社会学」の講義の担当だった。そこで、新明は一年先輩の嘉治隆一に相談したところ、「社会思想や社会問題を研究した貴君なら社会学を担当出来るだろう」と助言され、洋書店から購入されたハーバード・スペンサー著『社会学原理』（全三巻）をはなむけとして贈られ、関西学院に赴任することになった（着任は遅れて一九二一年五月）。

学生時代の後半、新明は独力で古代ギリシアの反権力主義、反国家主義のソフィストらの思想（西洋哲学史では詭弁学派と称されている）を「批判的相対主義」として特徴づけ、早くも関西学院に赴任した秋に『ソフィストの政治学的研究』（一九二一年）を出版した。また社会学の講義を担当し、早くも二年目に主としてドイツ・オーストリア社会学派の学説や社会主義の思想などを参照し、『社会学序説』（一九二二年）を出版した。もっとも、新明は学問的関心を政治学から社会学へと移行したが、のちに内容的にみて本書を「政治社会学序説」と言えると回

顧しているように、必ずしも社会学プロパー（固有、特有）の研究とは言えないが、社会学者として「綜合社会学」を探求する若き新明の問題意識の有り様を了解することが出来よう。

関西学院教授の新明は極度の過労のために、赴任した秋に微熱から高熱を発症した。たまたま所用で来宅した神戸の新川の賀川豊彦牧師が「チフスかも知れない」と疑い、賀川の懇意の病院へ行き、真性のチフスに罹患していると診断された。約一か月半、新明は入院生活を送り、自らのこれまでの体験、生き方や思想、専攻した政治学から独学した社会学という学問のあり形について熟考されたことであろう。

新明は退院して久しぶりに神戸の商店街の元町を散策し、川瀬日進堂で高田保馬の新刊書『社会学概論』（一九二二年）を見て、直ちに購入した。高田は広島高等師範学校教授として「社会学」を講義し、新明が赴任する二年前から関西学院で「社会学」の集中講義を担当した。恐らく、高等専門学校の講義案をもとに高田は大著の『社会学原理』（一九一九年）に次ぎ、より平明にかつ画期的な『社会学概論』を上梓した（出版時、高田は広島高師教授を退き、東京商科大学教授に在職）。

若き新明は迂闊にも、関西学院で「社会学」を担当した前任者の高田の社会学の著作をまったく検討していなかった。後任の新明は高田の『社会学概論』を日本人による最初の本格的な社会学書として耽読した。新明はこれまで社会思想や社会問題を研究し、自己流の「社会の印象記」をもって社会学序説とした。その後、新明は社会学プロパーを独学する習練時代を経て、本格的に社会学プロパーの研究に取り組んだ。

新明にとって政治学および人生の師は吉野作造教授であるが、社会学の師として私淑したのは高田保馬教授である。だが、新明は一五歳年長の高田を学問的・人格的に大いに尊敬したが、決して忠実な一人の弟子に終始したのではなかった。新明は社会学の研究を推進し、自らの構想を体系化するようになって、一般社会学（社会学理論）では高田保馬の社会学理論に影響を受けながらも、自ら構想した社会学理論をもとに「社会学理論論争」を厭わなかった。それは東京帝大新人会とそれ以降に培われた新明の学問的・思想的資質であろう。

二　「世間」と「社会」

社会学 sociology という学問はたしかに「社会の科学」science of society であるが、社会学は社会生活の一般的原理を体系的に解明する一般社会学の理論のほか、社会生活の個別的・部分的領域を対象とする家族社会学、農村社会学、都市社会学、地域社会学、さらに経済社会学、政治社会学、法律社会学、あるいは職業社会学、産業社会学、組織社会学などなどと多種多様な分科社会学が各

人各様に社会者によって独自に提唱されて来たことに、いささか戸惑を感じるであろう。

古代・中世・近世の語彙を収録した『古語辞典』（岩波版）には、「社会」の項目はないが、「世間」の語彙は丁寧に説明されている。なぜなら、「世間」という言葉は六世紀に仏教伝来とともに、日本に伝わった。聖徳太子の没後（六二二年）、妃の橘大女郎が作らせた天寿国繍帳に聖徳太子の言葉として「世間虚仮、唯仏是真」（世間は偽りで、ただ仏のみ真なり）と記されている。仏教では「世間」は煩悩の多い汚れた「穢土」であって、極楽は仏と菩薩の住む「浄土」（天寿国）である。

その後、八世紀末に完成されたと言われる日本最古の歌集『万葉集』の巻第五「雑歌」は、大伴旅人の歌「世間は空しきものと　知る時し、いよいよますます悲しかりけり」で始まる。世間は「空しいもの」であり、無常の世界だと観念された。同じ巻第五で山上憶良は公地公民は「父母を見れば尊し　妻子見ればめぐし愛し」（父母を見れば尊い　妻や子はいとし可愛い）こともまた「世間の道理」と歌った。世間は「虚仮」の世界だけではなかった。

古代以降、「世間」という言葉は世の中、人の世を示す言葉として用いられ、何らかの人間関係を意味した。明治初期、societyの漢語翻訳語として「社会」が用いられるようになって、「世間」はほとんど公的にも用いられなくなったが、ただ日常生活では頻繁に使われている。ちなみに、「世間は広いようで狭い」、「世間体を取り繕う」、「渡る世間に鬼はない」、「世間の口に戸は立てられぬ」と表現されているように、日常生活のおける格言や警句が多い。

しかも、政治家や経営者が何らかの問題を起こし、テレビでは「世間を騒がせて申し訳ありません」と丁重に頭を下げる場面がしばしば放映されている。彼らは起こした事件にたいして一応「世間」に向って謝罪はするが、それ以上の事実関係の解明を不問するのが通例であろう。このように、日本では「世間」という語彙は長い歴史を持つが、今日でもあまり公式的に用いられていないが、「謝罪」するのは、あくまでも混乱させた「世間」にたいしてである。

明治前期以降、societyの翻訳語として「社会」が当てられ、曖昧で多義的であるが、今日では現実社会、現代社会、社会構造、社会体制、社会現象、社会秩序、社会問題などとして用いられている。しかし、「社会」には「世間」（世の中）のように、日常的に用いられる格言や警句はない。

三　福沢諭吉の『学問のすゝめ』

幕末から明治初期にかけ、文明開化のもとで開明的知識人は欧米書を盛んに読み、頻繁に登場するsocietyとindividualという英語をどのように理解し翻訳語を与えるかという問題に直面し、悪戦苦闘した。福沢諭吉の『学問のすゝめ』（一八七二～七六年・明治五～九年）は「天の上に人を造らず、人の下に人を造らずと言えり」という天賦人権説で始まる。その前半はアメリカのブラウン大学学長のF・ウェーランドの『道徳科学要論』（一八五五年）を翻案して学問論や道徳論について論じた。

その初編の「端書」で、故郷の中津に慶應義塾の分校を開き、福沢はいわば通信教育教材として初編を執筆した。「広く世間に布告せばその益もまた広かるべし」（傍点、引用者）という人の勧めもあって公表した（この時点では、「世間」はとくに「社会」と表現されていない）。福沢は順次十七編まで書き継ぎ、『合本学問之勧』（一八八一・明治一三年）として上梓した。私が当時のベストセラーに注目するのは、福沢がsocietyという翻訳語と翻訳語「個人」にたいしてどのように考えたかということである。

福沢はsocietyの翻訳語として「人間交際」を当て、individualの翻訳語として「一人たる身」を当て、個人と社会の二つの観点から学問の精神について述べている（九編）。ところが、「人間の結合する」に由来するsocietyにたいして具象的な「人間交際」、さらに「仲間」、という翻訳語を当てたのでは、管理社会や経済社会などなどの部分社会、さらにより広くて抽象的な人類社会、世界社会という包括的で抽象的な全体社会が脱落することになる。

さて、新聞記者の福地源一郎が『東京日日新聞』（一八七五年・明治八年一月）の社説に「ソサイチー」という片仮名をつけて、それに「社会」という漢語に由来する翻訳語を当てた。その出典は中国宋代の『近思録』（一一七六年）の「郷民為社會」（郷民が社会をつくる）で、「社」は土の神を意味し、それを祭るために一定の地域の人々が集まる（＝會う）ことを言う。「社会」という翻訳語は時期的には中国よりも日本の方が早かった（なお、一九六五年に始まる毛沢東が指導した中国文化大革命で紅衛兵は「造反有理」、四人組らとともに、「郷民為社会」をスローガンとして盛んに叫んだという）。

福沢は『学問のすゝめ』の最終編の一七編（一八七六・明治九年）で初めて「社会」という言葉を用いた。

その（世間）の栄誉なるもの果して虚名の極度にして、医者の玄関、売薬の看版（薬屋の金看板）の如くならば、固よりこれを遠ざけこれを避くべきは論を俟たずと雖ども、また一方より見れば社会の人事（出来事の意味）悉皆虚をもって成るものに非ず。人の智徳はなお花樹の如く、その栄誉人望はなお花の如し（傍点、括弧内は引用者）。

ここでは、福沢は「世間」という言葉にたいして「社会」という言葉を二重の意味で対立させていることが分かる。一つは、「世間」は「極端な虚名」というように否

定的であるのにたいして、「社会」は「虚ではない」というように肯定的に表現されている。二つは、「世間」は「医者の玄関、売薬の看版」というように具体的で比喩的に表現されているのにたいして、「社会」は「人の智徳はなお花樹の如く」と抽象的で比喩的に表現されている。

このように、「世間」は価値的には「否定的」で、内容的には「具体的」に表現されている。それにたいして、「社会」は価値的には「肯定的」で、内容的には「抽象的」に表現されている（柳父章『翻訳語成立事情』、一九八二年）。当然、幕末・明治期の啓蒙家の福沢にとって伝統的な「世間」にたいして、文明開化に向かう近代的「社会」は「肯定的」だが、内容的には「抽象的」である。

四「個人」と「社会」

「個人が社会をつくり、社会が個人をつくる」というように、両者は「つくりつつ、つくられる」という関係である。社会学は理論的・経験的に「如何にしてつくり、如何にしてつくられるのか」というその関係と構造（システム）を明らかにすることであり、微視的な「ミクロ」の世界から巨視的な「マクロ」の世界と、その関連もまた社会学の研究対象となる。

福沢はウェーランドの『道徳科学要綱』を参照し、執筆した『学問のすゝめ』ではsocietyを最初は「人間交際」と翻訳した。個人は、社会においてそれ以上はもはや分割することの出来ない究極の存在であるが、福沢はindividualを「一人の身」の翻訳し、さらに『文明論之概略』（一八七五年）ではindividualityの翻訳語として「独一個人の気象」と表現されている。その後、「独」と「一」が欠落し、今日ではその翻訳語として「個人性」（個性）が定着している。

ところが、「個人」という翻訳語は「社会」よりもはるかに遅れ、一八八二（明治一五年）頃から用いられるようになった（阿部謹也）。ただの翻訳語に過ぎないが、なぜ、「個人」の翻訳語は「社会」よりも遅れたのであろうか。これまで人々は「世間体」を重んじ、かつ「家のため」や「お国のため」と称して、他人本位に自己の態度や意志を選択し、生活してきたからであろう。また「個人主義」はしばしば自己の利益の追求を最優先する「利己主義」（エゴイズム）と同じ意味に理解されているが、それは甚だしい誤解であって、「自己本位の立場」を意味する「個人主義」は「利己主義」と同じではない。

晩年の夏目漱石は「自己本位の立場」を強調した。それは自己の個性を人格的に発展させるためには個人の自由、義務、責任を尊重する「道徳上の個人主義」である。人格のない人間が無暗に個性を発揮しようとすれば、他人を妨害することになり、権力を無暗に行使しようとすると、濫用に流される。あるいは無暗に金力を使おうとすれば、社会に腐敗をもたらすことになる。漱石は明治

維新以降の「他人本位の立場」、つまり強固な家父長制、偏狭な「国家主義」や排他的な「党派主義」の危険性を指摘し、「自己本位の立場」、つまり「道徳上の個人主義」を主張したのである（『私の個人主義』、一九一四・大正三年）。

「個人」と「社会」は、日本が近代化や欧化主義の社会となるために生み出された基礎的な翻訳語といえる。当時、市民革命を経て国民国家を形成し、近代化した欧米諸国と異なり、日本は明治維新を遂行した政治家や啓蒙家が中心となって「上から」の西洋化（「文明開化」）によって政策的には「富国強兵」と「殖産興業」を推進し、国民国家を形成しようとした。翻訳語の「個人」と「社会」について、このような近代日本の歴史的・政治的背景が顧慮されて然るべきである。

五　社会学的認識の方法

デカルト「我思う、故に我あり」というように、人間は個人として独我的に存在するのではなく、「社会的動物」（アリストテレス）として「社会の子」であるとともに「社会の親」である。個人は他者との関係で自我を形成し、固有の人格と個性をもつ社会的個人となる。他方、社会は諸個人を基礎として他者との関係的行為、行為の関連によって形成される。このように、人間は個人的であると同時に社会的でもある。新明は「個人と社会」について、「個人」は社会的個人であり、「社会」はそのような諸個人の「行為的な統一体」であって、「個人」と「社会」は対立的に考えられるものではないと強調した。

ところで、社会学的認識の方法として「方法論的個人主義」と「方法論的全体主義」（ここで、「全体主義」の「全体」は「集団」または「社会」と言い換えることにしている）。前者は、例えば、「社会的なもの」を個人が他者との「心的相互作用」からなるものと見なし、最も単純な社会化という形式を研究対象としての経済や政治などの内容から区別し、ちなみに政党・官僚・軍隊・企業・組合などの諸集団に見られる形式として、例えばヒエラルヒー（位階性）やセクショナリズム（縄張り意識）はその代表的事例である（ゲオルク・ジンメル）。

マックス・ヴェーバーは自らの社会学を「理解社会学」と称した。「社会的行為」とは、ある行為が（一）行為者にとって「主観的に考えられている意味」（動機）をもち（＝有意味的行為）、（二）他者の行動に関係づけられ・他者に志向している（＝他者関係的行為）場合をいう。そのような条件を満たす「社会的行為は、科学としての社会学にとっていわば構成的な意味を持つ中心的な事実である」。しかも「社会的行為」の動機の意味を理解し、社会的行為の過程および結果の因果関係を説明しようとするのである（『社会学の基礎概念』、一九二一～二二年）。

ヴェーバーは「方法的個人主義」に依拠しているよう

に見えるが、名著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（一九〇四～五年）ではカトリシズムからプロテスタンティズムへの宗教改革、とくに改革派教会のカルビニズムの「宗教倫理」を検討し、魂の救済は神の恩寵によるという新約聖書に由来する厳格な「予定説」に着目し、「プロテスタンティズムの世俗内的禁欲」という理念型を提案し、この「宗教倫理」が原因の一つとして近代ヨーロッパにおける「資本主義の精神」を生み出す「意図せざる結果」であると結論づけた。

だが、その因果関係はプロテスタントの宗教倫理が彼らの「主観的に考えられた意味」（動機）であるが、その歴史的な経過を考察すると、皮肉にも「予期されない、意図されざる結果」だったのである。日常生活では意図した社会的行為が意図した通りの結果を生むことは大いにあり得る。その反対に日常生活に限らず、いつの時代でもその歴史的過程では「予期されない、意図せざる結果」が生ずることもまた大いにあり得る。

なお、現代社会学の「機能分析」では人間の社会的行為が「機能的諸結果の正味の差引勘定により、行為者の主観的な動機と客観的な機能の結果を対比して、「意図した結果」の生じることを「顕在的機能」といい、「意図せざる結果」の生じることを「潜在的機能」という（マートン『社会理論と社会構造』、改訂版・一九五七年）。

このような認識の方法論の反対が方法論的全体主義である。全体（社会）はそれを構成する部分や要素（個人）の総和を超え、有機的に統合している超個人的全体と見なす。社会学の命名者のフランスのオーギュスト・コントは生物有機体から類推し、社会の全体的統一性を社会有機体として解釈し、それぞれの細胞（個人）は有機体（社会）が新陳代謝をすることで存在する。さらにイギリスのハーバード・スペンサーは生物有機体との比喩によって社会を「社会有機体」として考察した。ちなみに、生物有機体における栄養器官は産業施設であり、感覚・運動器官は政治組織であり、血液循環器系は交通運輸機関であると解釈した(1)。

六「社会名目論」と「社会実在論」を超えて

社会の考察に当たり二つの対立する見解が認められた。「社会名目論」と「社会実在論」がそれである。新明正道著『社会本質論』（一九四二年）によれば、社会学は客観的方法により観察された事実に基づき社会の「本質」を全体的総合的に認識する経験科学である。ところが、社会の「本質」を認識するにあたり、個人をもって究極的な実在と見て、社会を擬制的な存在とする個人中心的な「社会名目論」という見解が認められる。

新明はその実例としてホッブス、ロック、ルソーの近代自然法論を指摘した。彼らの共通した特徴は個人が社会に先行して存在し、それに自然権を認めたことである。

国家または社会は平等な個人間の自由意志に基づく契約によって成立する。この社会契約説は絶対的個人に論理的な先行性を与える個人中心主義の見解であって、社会の独自な存在を名目化しているのである。

それにたいして、個人とは区別された社会の独自な実在が成立すると認め、いわば社会中心的な「社会実在論」が存在する。たしかに社会について実在を説く種々の学説があるが、個人と区別し、社会の独自の実在を強調しても、社会の本質が把握されたことにはならない。社会学史においてこの「社会実在論」の代表的実例はすでに触れた古典的社会学のコントやスペンサーが提唱した社会有機体論である。この学説は社会の実在性を主張したが、それは社会を実質的に把握したことにはならない。

新明はこの二つの見解にたいして、社会の本質を解明するために、何よりも具体的な個人を他者との相互的に種々の交渉をもち、生活において関係する「社会的個人」として把握し、さらに社会有機体説のように類推によらず、具体的な個人の関係として社会の本質を内在的・経験的に把握しようとした。そのさい、個人の諸関係は「行為関連」によって生じる集団が存在し、総じて種々の社会も存在する。

政治学徒の新明は五年間の関西学院教授の後半、社会学の研究に本格的に進出した。その後、新明は将来的に有望な若手の社会学者として東北帝大法文学部助教授として転任した。新明が到達した最も主要な学問的功績は、「行為関聯」という立場に立脚し、綜合社会学を体系化したことにある。その探究の道程は懸命な学問的な努力、とくに内外の社会学の文献を広く渉猟し、社会学理論への独自の模索によって可能だった(2)。

だが、新明は大正期から昭和期の激動する時代に直面する政治的・思想的課題と真摯に対話する「時評家」であり、それと同時に綜合社会学の体系を探究した学問的営為を看過することは出来ない。その際、新明が発表した政治的・思想的時評は新明社会学の源流と見なしても決して過言ではない。

（二〇一六年七月二七日、擱筆）

注

(1) スペンサーはイギリスの生物学者のダーウインの生物進化論の影響を受け、当時のイギリスが社会進化として「軍事型社会」から「産業型社会」の段階に到達していると見なしたが、必ずしも自由な諸個人の存在を否定していない。その将来はレッセ・フェール（自由放任主義）によって生存競争の結果、「適者生存」の社会が実現し、神の「見えざる手」の働きで自ずから社会の秩序と調和が生まれると主張した。

イギリスのスペンサーの社会進化論は南北戦

争後、アメリカ北部では急速に発展した産業社会（資本主義）が勃興し、初期のアメリカの社会学者のほか、ロックフェラー、カーネギー、J・J・ヒルなどの巨大企業の創業者の苛烈な「生存競争」と「弱肉強食」を正当化するイデオロギーとして支持された。ところが、そのアメリカで未曽有の大恐慌（一八八四年）が起こり、失業と貧困、労使間の対立、犯罪と非行などをもたらし、アメリカ社会学者は「スペンサーからの解放」が共通のテーマになった。そのほか、フランスのテュルケムのように、個人に対して「外在性」と「拘束性」をもつ「社会的事実」を提唱する社会学理論が認められる。しかし、ここでは検討するには長文を要するので、割愛する。

(2) 「綜合社会学」および「行為関聯」の「綜」と「聯」は旧字だが、新明の指示に従う。以後、そのように使用する。

「農ある暮らし〜私の日常〜」(1)

古屋富雄

東京一極集中により、ますます地方の疲弊が深刻な状況になりつつあります。このような背景を踏まえ、都市と農村のあり方をテーマとした歌のCD「古屋富雄作品集」をリリースしています。

一人でも多くの人に現状を知ってもらう、有効なツールが音楽と考えたからです。

そして、さらに理解者の裾を広げるため、自分の日常をしたためた散文詩「農ある暮らし〜私の日常〜」を朗読したCDのリリースを計画しています。

女性アナウンサーによる臨場感のある語り、そして、演奏家「平野融氏」のアコースティックギターとをコラボさせた仕上がりを考えています。

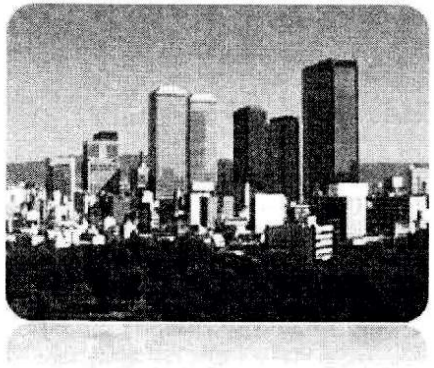
また、書いた詩は、曲が乗せることが出来るものになっていますので、歌としてのCD化にも期待をしています。

とにかく、ゆっくり、じっくりと朗読の世界を満喫していただければと思います。

都会

長い間、村には帰って来ませんね
都会の暮らしは快適ですか
ニュースで言っていました海が綺麗になって
海水浴が出来るそうです
川には鮎が泳ぎシジミも採れるそうですね
都会に自然が戻って来ました
少年時代あなたと海で、川で遊びました

これから先も村には帰って来ませんか
都会の暮らしは好きですか
新聞に出ていました東京一極集中
寂れゆく地方の現状
働く場所も遊ぶ場も自由に選べて楽しめる
すべてが都会に集まっています
無人のモノレールに今日も乗っているのですね
皆が都会へ行ってしまうそんな時代が来ています



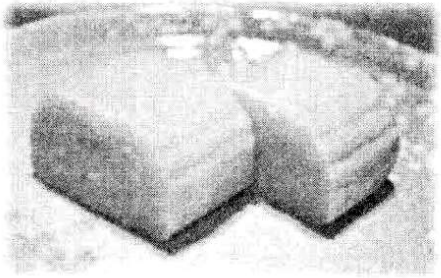
母の命日

明日は母の命日です
花をたむけに参ります
和菓子が好きな母でした
馴染みの店で買っていきます

働き者の父と一緒で大変でしたね
腰が曲がるほど仕事をされましたね
育ててくれてありがとうございます

今日は母の命日です
百日紅が咲いています
ピンクの花が綺麗です
優しい母の化身でしょうか

働き者の父と一緒で大変でしたね
農家に嫁いで苦労をされましたね
育ててくれてありがとうございます
好物だった「すあま」を一緒に
食べましょう



中のおばさん

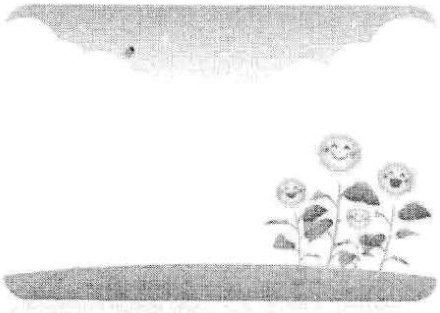
中のおばさん　屋号が「中」でそう呼んでいます
久しぶりに中のおばさんに会いました
歳を聞いたら暮れに90になるそうです
笑顔が母を思い出させます
今日は息子と畑を見に来たと言っていました

どこの家も貧しかった頃　助け合っていた頃
葬式まんじゅうも分けてくれました
わけ隔てなくありがとうございました

中のおばさん　屋号が「中」でそう呼んでいます
母ととても仲良しだった中のおばさん
母が生きていたら丁度100歳になっています
笑顔をずっと見ていたかった
中のおばさん、100まで元気でと言いました

どこの家も貧しかった頃　支え合っていた頃
お稲荷さんがご馳走でした
お裾分けと持ってきてくれました

中のおばさん100まで元気でいてください
母の分まで元気で長生きしてください
中のおばさんお変わりなくと、祈ります



性と化粧の物語（六）

鈴木守

第二話　性と歯の化粧（二）

第二節　抜歯風習と性

前節『性と歯磨き』を引き継いで、本節では『抜歯風習と性』を取り挙げる事にします。抜歯風習については『本誌、一〇八号、二〇〇八』で既に紹介しましたので、本誌では抜歯風習と性の結び付きに視点を注ぐ事にします。

一項　抜歯風習の実際

健全な歯を何らかの目的で、意図的に抜去する習俗を抜歯風習と呼んでいますが、この風習が、いつ頃から始まったか不明です。現在知られている最古の抜歯例は、沖縄県の港川遺跡で発掘された旧石器時代後期一万八千年前の遺体に残された抜歯の跡です。抜かれた歯は下顎中切歯でした。切歯と云う用語は一般の辞書には掲載されていません。切歯を糸切り歯（犬歯）と混同するといけませんので切歯について説明しておきます。切歯は門歯とも云いますが一般的には前歯と呼んでいます。切歯には上顎、下顎夫々に左右の中切歯と側切歯、併せて8本の切歯が生えています。

(1)海外の抜歯風習

沖縄港川人の抜歯風習が伝播したと想定されている新石器時代の抜歯風習が中国で発見されています。『貝塚茂樹、伊藤道治、古代中国、講談社、一〇〇〇』には「七千～六千年前頃黄河下流山東省から江蘇省にかけて大紋口文化が出現し、この文化圏では抜歯風習が認められたが、仰韶文化の頃（六千～五千五百年前）には見られなくなった」と述べられていました。

新石器時代よりも古く中石期時代（一万四千～七千年

前）には、アフリカに抜歯の形跡が残されていました。一方、時代を下って古代ローマの時代には、皇帝ネロ（三七～六八）の妃ポッパペア等が、抜歯して煌やかな入れ歯を嵌めておめかししていましたが、アフリカの例も古代ローマの抜歯も性との関りは不明でした。

春山行夫も『おしゃれの文化史、平凡社、一九七六』に抜歯風習を扱っていました。彼の書によりますと「アフリカ各地や南アジア、インドネシアの諸族の間では、門歯を削ったり、穴を開けてボタンのような飾りを付けたりする。この風習は台湾の高砂族にも認められる。また、曽っての中国南部の地方では、娘が嫁に行く時は、前歯を二本抜き取る風習があった」と認めていました。その外「アフリカの或る部族では、前歯を一、二本抜いて、獣との差別をした」とも述べていました。

次に、インドネシアの成人式を話題にします。一九九九年にアジア化粧品技術者会インドネシア大会がバリ島デンパサールで開かれ、それに出席した際に入手した情報です。その情報によりますと、成人式の主要なイベントとして、お歯黒を施し、研歯して成人を迎えます。但し実際に歯を染め、研歯するのではありません。檳榔子を一口噛み、鑢を歯に当てる真似をして研歯をするのだそうです。最近の若い人達はお歯黒や研歯、抜歯の風習に否定的な為、成人式のイベントも曽っての風習の真似事を演じる事によって折り合いをつけているのだそうです。将に、インドネシア風俗史の曲角に立ち合っているような感じを抱きました。

(2)我が国の抜歯風習

沖縄港川人の抜歯は別として、日本々土の抜歯風俗の歴史は縄文初期に始まり、縄文後期に盛行しましたが、弥生初期の頃から衰退の道を辿りましたので、縄文時代と弥生時代以降の抜歯風習に分けて我が国本土の抜歯風習の歴史を池田次郎著の『日本人の起源、講談社、一九八二』を中心に紹介します。

①縄文時代の抜歯風俗：　日本本土における抜歯風習は、縄文前期（六千～五千年前）から現われ、中国の大汶口抜歯と同時代に広島県太田貝塚と熊本県轟貝塚から抜歯遺体が発掘されました。

縄文中期（五千～四千年前）には岡山県の羽島貝塚と西之浜貝塚、遙か北方の仙台湾沿岸部の貝塚から抜歯個体が出土しています。縄文後期（四千～三千年前）には抜歯風習が全国的に敷衍し始め、縄文晩期（三千～二千三百年前）には抜歯風習の最盛期を迎えました。

縄文抜歯様式を時代別に見ますと、西日本の縄文人は前期から中期にかけて、下顎左右中切歯を抜去した港川人に類似した様式で抜去していましたが、後期から晩期

になりますと、図に示すように切歯に加えて犬歯と第一小臼歯も抜去するようになりました。図に示した抜歯例では中切歯(Ⅰ)2本、側切歯(Ⅱ)4本、犬歯(C)4本、第一小臼歯(P)4本、併せて14本の歯を抜いています。

このように14本にも及ぶ歯を一時に全部抜いたとは迚も考えられません。従って、必要な通過儀礼の度びに抜去したと想定されます。尚、成人抜歯には上顎犬歯、婚姻抜歯には下顎犬歯、服喪抜歯には第一小臼歯を対象としたとする説もあります。

又、抜歯様式の地域差も認められました。浜名湖と渥美半島の間を境界とする東日本の地域では、犬歯を中心とした抜歯様式でしたが、西日本の抜歯様式は、犬歯のみならず切歯や第一小臼歯も抜く複雑な様式を採用していました。総じて縄文人が抜去した歯は表面から可視できる切歯・犬歯・第一小臼歯に限定されていました。

図　縄文抜歯様式
（14本抜歯）の図

抜歯した歯の種類と記号（Ⅰ：中切歯，Ⅱ：側切歯，C：犬歯，P：第一小臼歯）



②弥生時代以降の抜歯風習：縄文晩期に朝鮮半島から移住民が本州西北端の響灘に面する土井ヶ浜に渡って来ました。土井ヶ浜には彼等の遺体207体が埋葬され、うち90体に抜歯の痕が認められ、60体以上の遺骨は上下犬歯と側切歯を抜いた様式でした。

斯様に土井ヶ浜人は抜歯と云う保守的な習俗を身に付けていたにも拘らず、彼等の骨格には進歩的な形質が観察されましたので、彼等渡来者の主力を占めていた男性達は、移住先の縄文女性を娶り、土井ヶ浜弥生人は縄文人と渡来人の混血集団であったと想定されています。

土井ヶ浜弥生人に類似した特徴を示す骨格の人骨は、山口県の吉母、中の浜及び福岡県立岩、佐賀県三津浜等の北九州や山口地方の弥生前期、中期の遺跡から出土していますが、南九州や西九州の弥生人骨には土井ヶ浜人骨の特徴は観察されていません。

土井ヶ浜渡来人より遅れて、弥生、古墳両時代を通じて半島から近畿地方に押し寄せて来た為、彼等が到来した地域住民の体質が一変したと云われています。

斯様に渡来人と縄文人の混血集団が強大になるにつれて、所謂〝弥生人類〟が拡がって来ました。しかし、弥生時代とは云え、日本全体が弥生化したのではなく、最後まで稲作等の弥生文化を踏襲する事なく、しかも体質的にも縄文のまゝで残る地方も多く、彼等縄文人の生き

残りは、その体質と共に可成り遅くまで生存していました。

混血の弥生人が拡散しなかった地域、云い換えれば、体質的に縄文人として残存した地方では、縄文人が弥生文化を受容して〝弥生時代人〟になりましたが、〝人種的弥生人〟に進化しなかったのであり、南九州や南関東地方の弥生人がこれに該当します。

南関東の弥生人骨としては、房総半島の毘沙門と大浦山が知られており、これらの弥生人の骨格の特徴を比較しますと、中期初頭の佐野と天神山人骨には縄文的特徴が色濃く残り、後期の安房神社人骨は縄文人と古墳人の骨格が混合したタイプであり、中期後半の毘沙門と大浦山の人骨は古墳時代人に近い骨格を有していました。また、天神山遺跡を除く四遺跡は全て海岸に面した洞穴遺跡であり、これらの遺跡のうち、安房神社と大浦山遺跡の人骨には抜歯の跡が残されていました。これらの証拠を俯瞰しますと、南関東の弥生人達が行っていた抜歯習俗は、縄文的な抜歯様式を踏襲した漁撈生活者の習俗だった事が窺えます。

これとは別に、弥生文化の先進地・九州にも南関東同様の後進的地域がありました。南九州や西北九州では、弥生時代人であっても稲作する事なく、体質にも縄文人として残存していました。この事を換言すれば、渡来人の血が流れていない縄文人体質の弥生人が生存していたのです。中でも東シナ海に面する西九州の人達は、縄文時代には抜歯風習に抵抗的でしたが、弥生時代に入りますと、抜歯し始め、多くの人達がこの習俗を弥生後期まで維持していました。

しかし、長崎、大分両県の水上生活者の間では、成女式の一環として、この習俗を近代まで持続していましたが、我が国の現代社会では既に抜歯風俗を見る事が出来なくなりました。

二項　抜歯風習を考える

一項では抜歯風習の実態を取り上げてきましたが、この項では抜歯行為の発祥から抜歯風習の成立までの過程を考察する事にします。

抜歯風習成立に対する最大のネックは抜歯と痛覚の問題を解決する事ではないかと思います。ましてや、沖縄港川人よりも古い時代の御先祖が局所麻酔（局麻）に関する知識があったとは到底考えられません。果してご先祖の方々は抜歯による痛覚緩和の術を施したのでしょうか。

(1)心理的局所麻酔

抜歯風習に限らず、風習と云う現象は少くとも部族単位以上の集団構成によって維持されています。要するに

集団のほぼ全員が継続的に同一行動をとる現象を風習と呼称しているのではないでしょうか。

従って、或る集団に統一行動を持続的に生じさせる為には施術者は、集団を構成する人達から信頼される事が肝要です。信頼は心理現象であるから心理効果によって痛覚刺激を緩和できないかと考えました。

今現在、地球の裏側リオデジャネーロでオリンピックが開かれており、実況報送がテレビ画面に写し出されています。画面には傷の痛みを耐え乍ら競技に参加するアスリートの姿も見られます。彼等はアナウンサーの質問に対し異口同音に「競技中は痛さを忘れていました」と答えていました。全てのアスリートが正しく答えたか解りませんが、競技中に痛みを忘れるのは心理的局麻作用に基づくと咄嗟に思い付き、薬理学的な肉体的局麻効果とは別に心理的局麻現象の存在を信じるようになりました。

(2)抜歯風習成立の過程

今、私の眼前に筋骨逞しい屈強の壮丁が佇んでいます。彼は私に近着く時、微笑みを泛べました。彼は怪しい者でない事を知らせる為に微笑んだ違いありませんが、彼の綻びた口の中に切歯欠損の痕が認められました。彼は部族間抗争に際し数々の武勲を樹てた勇士であり、部族の英雄でした。彼の歯の欠損は戦闘に際して負った向傷です。彼の周囲には彼を慕う若物達の姿が見られました。数人の者は部族の英雄に肖って歯を欠損させていました。彼等は歯を欠く時、痛みを感じなかっただろうと察しました。又、彼等は英雄に肖って実績を挙げ、欠損した歯が勇士の標識となりました。やがて彼等の部族では切歯欠損を切歯抜去に置き換え、抜歯行為は一人前の大人の資格を得る肉体的試練に位置付けられ、抜歯が成人標識の徴証になりました。

女子の場合は、男性抜歯風習成立の後を追って、少女が一人前の女性の資格を得る為の肉体的試練として抜歯するようになったと云われています。女性の肉体的試練とは妊娠による陣痛、分娩の痛苦に耐える肉体の形成でした。

(3)抜歯風習と性

前掲の図『縄文抜歯様式』に口を開いた唇を重ねたネガを見ますと、口腔内空洞化の様子が認められ、成人抜歯と既婚者抜歯の両者を済ませた女性を象徴しているように観察されます。縄文の人達も既婚者表示の抜歯を施した女性の口腔内を見て女性陰部を想像したと思います。従って、女性の既婚者表示の抜歯は性との関係をずばり表現した抜歯模様だと思います。

これまでに『性と毛の化粧』に登場した眉落としの化粧、月代、丁髷等は成人或は元服の化粧であるから一人

前の男になった事を表示している点で性と化粧の関係が結びついています。従って、成人表示を意味する抜歯も性の化粧の範囲に入ると思います。

参考文献

R・コーソン著、石山彰監、メークアップの歴史、ポーラ文化研究所、一九八二

パンセ・デランドル共著、青山典子訳、美容の歴史、白水社、一九六一

村沢博人、津田紀代編、化粧史文献資料年表、ポーラ文化研究所、一九七九

酒井伝六、古代エジプト人の肌色と美、化粧文化15号、一九八六

埴原和郎編、日本人の起源、小学館、一九八九

鈴木守、コスメトロジー入門、幸書房、一九九三

リズ・マニカ、ファラオの秘薬、八坂書房、一九九四

岡田英弘監、中国の歴史一、原書房、一九九五

（抜歯風習と性・終）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

明治時代の著述者
渋江保の一生（その七）

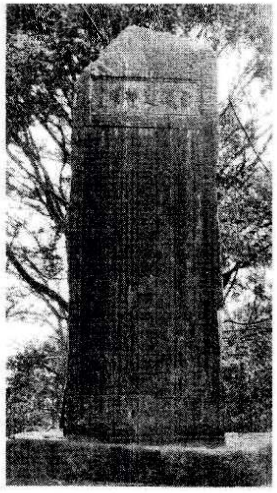
山本勉

第六期　宝飯中学校長時代（愛知県豊川市（旧宝飯郡国府町））

一八八一年（明治十四年）八月～一八八二年（明治十五年）十二月

東名高速道路音羽蒲郡インターチェンジから二〇分程車を走らせたところに弘法山公園がある。桜の花見には未だ早い三月小雨降る日に弘法山公園を訪ねた。弘法山公園は音羽川が流れる傍らにある国府小学校の脇の細い坂道を上がったところにある。坂を少し上がったところで石碑らしいものはないかと捜してみると奥まったところにひっそりと建っていた。ここを訪れる人はいないのだろうか、高さが四メートルを超えるであろう石碑であるが何となく寂しげだ。

この石碑、実は渋江が宝飯中学校長時代に深く関わりを持った武田準平翁（一八三八～一八八二）の碑である。



武田準平の碑

渋江が宝飯中学校に在職していた期間は僅かに一年五ヶ月余りである。しかし渋江と自由民権運動との関わり、そして渋江の博文館時代の翻訳スタイルを考える上で極めて重要な時期であったと考えられる。渋江の後々の人生に大きな影響を与えたのが武田準平である。

では、宝飯中学校在職中、渋江はどのような活動をしていたのか、武田準平との関わりを中心に見ていきたい。

森鴎外の『渋江抽斎』その百二に「保は三河国宝飯郡国府町に着いて、長泉寺の隠居所を借りて住んだ。そして九月三十日に愛知県中学校長に任ずという辞令を受けた。」(1)とある。ここで言うところの「愛知県中学校」とは「宝飯中学校」のことである。

同じく『渋江抽斎』その百二に武田準平との出会いについて次のようにある。「当時保は一人の友を得た。武田氏名は準平で、保が国府の学校に聘せられたとき、中に立って斡旋した阿部泰蔵の兄である。準平は国府に住んで医を業としていたが、医家を以て著れずに、かえって政客を以て聞えていた。準平はこれよりさき愛知県会の議長となったことがある。某年に県会がおわって、県史と議員とが懇親の宴を開いた。準平は平素県令国貞廉平の施設にあきたらなかったが、宴たけなわなるとき、国貞の前に進んで杯を献じ、さて「お殿は」と呼びつつ、国貞に背そむいて立ち、衣をかかげて尻を露わしたそうである。保は国府に来てから、この準平と相識になった。既にして準平が兄弟になろうと勧めた。保はへりくだって父子になる方が適当であろうと言った。ついに父子と称して杯をかわした。準平は四十四歳、保は二十五歳の時である。この時東京には政党が争い起こった。改進党が成り、自由党が成り、また帝政党が成って、新聞紙は早晩これらの結党式の挙行せらるべきことを伝えた。準平と保とは国府にあってこういった。「東京の政界は華々しい。我ら田舎に住んでいるものは、淵に臨んで魚を羨むの情に堪えない。しかし大なるものは成るに難く、小なるものは成るにやすい。我らも甲らに似せて穴を掘り、一の小政社を結んで、東京の諸先輩に先んじて式を挙げようではないか」と言った。この政社の雛形は進取社と名づけられて、保は社長、準平は副社長であった。」(2)ここで述べられている「改進党」は立憲改進党のことで、一八八二年に結成されている。党首は大隈重信で主なメンバーの中に慶應義塾で机を並べた犬養毅がいる。立憲改進党はイギリス流の立憲君主制や二院制等の立憲政治を目標に掲げて活動した。「自由党」は一八八一年に板垣退助らによって結成された。フランス流の一院制や主権在民を掲げて活動した。「帝政党」は立憲帝政党のことで一八八二年に結成され、自由民権運動に対して国粋主義的な御用政党としての色彩を帯びた。武田準平の進取社は自由党と成立が同じ頃であるが、他の二党に先駆けて結党されたと思われ、当時の自由民権運動のうねりが地方にまで及んでいたことが窺える。武田準平のことは、山田東作・武田三夫共著の『三河最初の中学校』にも次のように述べられている。「武田準平は、シーボルトの弟子伊東玄朴の門で学んだ蘭法医として著名であった。明治十二年第一回愛知県議会に議長として選ばれ、議事を巧みにさばいた。当時の副議長であった近藤担平も医師であった。準平は修道館の教官としての経験もあり、愛

知県会初代議長として愛知県中学校の運営を知ることが出来る立場にあった。たとえば、教育費のうち、中学校費について審議している。また、すでに述べたように、彼は阿部泰蔵の兄であり、弟を通じて広く教育情勢を知ることが出来た。宝飯中学校の創立には、様ざまな角度から尽力し、『公立中学校設立同』には森村人民惣代として著名している。ところが明治十五年一月に劇的な事件によって悲運の最期を遂げ、多くの人々から惜しまれるところとなった。その事件には政治結社である進取社と絡んで、宝飯中学校長渋江保も関連したとみられる。渋江保はその社長であり準平は副社長であった。彼の略歴は豊川市国府町の弘法山の石碑に刻まれている。昭和五十七年（一九八二）は彼の死後百年を迎えることになるので次に掲げ併せて大意を示すことにする。なお、この碑文は宝飯中学校長渋江保が語り、宝飯中学校の第一回卒業生で、のち、高等小学校長となった木村永太郎によってまとめられ墨書きされたものである。」(3)同書には石碑の文面の元となった木村永太郎墨書きの全文が『枕石武田先生五十年に就ての感想』として掲載されている。この文章は渋江が語り、武田準平はもとより渋江自身についても書かれた数少ない貴重な資料であるのでここに掲載したい。

「嗚呼枕石武田準平翁！私が翁の知遇を辱うし親交の栄を担ひたるハ僅々四箇月に過ぎなんだ。志かし私の脳裏に終身不磨の印象を刻されたる事ハ五六十年の親交よりも更らに一層深かった。回顧すれば今を距ること四十七年前明治十四年八月の或る日、小畑篤次郎先生が我芝松本町の僑居に来られ、近日三州宝飯郡の有志が相謀りて郡立の中学校を設立した。就いてハ適任の人を迎へたしとの事である。想うに青年を善導するハ創立の当初が最も緊要なれバ足下往きて其の任を負担せられよ福沢先生も固より同感であると。当時少壮なまぎき盛りの私ハ近日の時事を以て悉く非なりとし、集会条例の発行、開拓使官有物の払下、大隈河野等辞職の顚末日く何、日くなんと見るもの聞くもの一として癪癪の種子ならぬハなく、如何せんと考慮しつ、あったが、又考ふるに諺に淵に臨んで魚を羨むハ退いて網を結ぶに如かずと、なまなか役にも立たぬことに運動して無用の月日を費さんよりハ民立の学校に教鞭を執りて、不羈の精神を鼓舞養成したる力優しならんと心窃かに一決したれバ、間も無く招聘に応ずる趣を小幡先生件に報じ、両三日の後、行李を整へ家慈を伴ひ同地に向ひて出発した。即にして無事に到着し驀て校長兼教頭の辞令に接した。此れハ八月三十一日の事であった。久しからずして開校式の挙あり、時の愛知県令国貞廉平氏来臨、当局官吏及び人民側よりハ十数名の創立委員等が来会せられた。この委員の中にて私の見識れるハ旧知加藤幸三郎（のちに六蔵）君と新たに知り合ひとなりたる竹本穂山（長三郎後に元僚）君及び平

松茂八君のみであった。而して其見知らぬ委員中に阿部泰蔵君に酷似して、年令は梢や長じ、先づ四十有余と覚しく背は余り高からず、何処となく一と癖ありそうな活気に富んだ達磨のやうな人がいた。言ふ迄もなく当時は今日の如き華美を競ひ紳士風を吹かせる時世とハ異なりて、至って質素であったれば―且つ世に武田君なる者の存在して居ることを知らなんだ私ハ、何者とも知るべきやらハなかったなれども、志かし敵であるか味方であるかどちらにしても話せさうな人物だと思った。スルト其の翌日彼れハ私の寓居なる国府の長泉寺に尋ね来り、刺を通じて面会を求めた。私は悦んで引見した。聞けバ阿部君の実兄だそうな。道理で容貌がよく似て居た。そして恰も符堅と王猛とが会見したと一般一見旧の如くであった。時世に就て段々議論を闘はせた末、翁の言はるるよう、君子は義に喩り小人は利に喩る、足下他日若し変節せらるる事あらば何を以て予に謝するやと。私は直ちに右手を以て我が首を斬るに擬し、励声して言う。この物を呈すべしと。今人をして評せしむれバ狂態笑うに堪えたりと言はん。左りながら私は当時一滴の杜康を口にせず、翁も亦然り。私は此の折り、始めて以心伝心なる語の真味を味ひ、其真意を実験し得た。而して他日「以心伝心」と題する所の正続二編を著し得たのハ是に由りてである。数日を経て後翁又言う、予ハ真に肝胆相照すの友を得た、是程喜ばしい事は無い、就てハ今より改めて足下と兄弟となり足下に兄事せんと。私ハ一言の下に謝絶し、且つ云ふ。私は年歯纔に二十三年若干月君ハ四十四才許り、私よりハ二十年の長者である君が、真に此契約を結ばんとならば、父子の契約を結ばんと。即日証券界紙に書せし契約書を交換した翁の証書は爾来他の重要書類と共に大切に保存し置いたが、惜むべし大正十二年の震火災に、他の重要書類と共に消滅した。実に残念の至りである。だが志かし此の震火災にハ十九才になる一人の姪すらも祝融氏に奪われたのだから天命と諦めるの外はない。爾来翁ハ益々進歩的の人と為り、殊に福沢先生崇拝者と為り済まし、近き未来に京地に出で君紹介を得て先生に見え、門下の一人に加はらん、就てハ先生の染筆が、若し足下の手にあらバ予に賜はれかしと請ハれた。左るに、あひにく先生の書ハ東京遺し置き、只だ時事小言（当時先生の新著）の草稿の断片があるのみであったれバ取敢えずそれを翁に呈した。翁は火いに喜びて早速表装させて私に見せた。私が国府に居た時、今から畢生の間莫逆の友としても遺憾なしと思った人が纔に三人あった。其一人ハ翁、一人ハ竹本穂山翁、又一人ハ木村永八郎君である。穂山翁とハ毎週二回ハ朝か晩か必らず玉鮓に会して校務又ハ世務に就て意見を交換して居た。されど在官のお人ゆえ、政治に就て覆蔵なき議論を交ゆることも少しハ遠慮せねばならず、又木村君ハわづか十七、八才の少年にして、私よりも八九才の弱年であ

り殊に我が中学校の学生でもあれバ、其の人に向って政治の批判を試むることは益寡くして寧害あり。それゆゑ只々相対して覆蔵なく意見を闘はせ行動を共にし能ふハ独り我が枕石翁のみであった。是の歳十一月、阿部泰蔵君が保険勧誘の為めに来県せられた時、有志者ハ歓迎会を豊橋の百花園に開いた。無論枕石翁ハ首唱者の一人であった。宴酣に、翁の発起で宴席を他所に遷すことに決し、折節盆を覆へすやうな大雨であったが、阿部君を始め我れ々々は皆、腕車に乗せられ母衣を懸けられて、ガラガラ曳かれたれバ、何処を目当に行くやら更に分らなんだ。軈て車が止まりて、イザと案内されて出て見ると、そこハ広い敷台で直ちに座敷に案内されたが、通路の座敷の床の間がありて、其の床の間にハ人間大の達磨が安置されてあった。阿部君も私もそれは真の置物だと心得、別に怪みもせなんたが、我等の通行中にその達磨は俄かに踊り出した。アッ！と思って目を留めて観ると、アナ奇蹟それハ枕石翁であった。私ハ北斎の画いた達磨の一軸を所持して居るが其容貌風采恰かも荘子が夢に胡蝶になった如く、どちらが北斎の達磨やらどちらが活人画の達磨的枕石やら見分けが附かぬ程であった。政界の波瀾は久しからずして物論を喚起し、一方に自由改進の両党が団結せられんとすれバ、他の一方にハ之に対抗して帝政党、即ち三人政党（孤挙党）なるものが起らんとしつつあった。我れ等ハ此の機運に乗じて三河にも政党を団決せんと一決し、マダ三党の成立せざるに先だちて進取社なるものを組織せんと企て、私は枕石翁と謀り、先づ十数名の有志を集めて之と協議したが皆一同に之に賛成したれバ、乃ち投票に依りて私ハ社長に翁ハ副社長に選ばれ、爾来苦心憺惨の末、社員も意外に増加して次第に隆盛の曙光を認め始めた。恰かもその頃武田氏関係の訴件が起り、豫て「予は正人なれば未だ嘗て裁判所の門を届りしことなし而して今後も障害届ることとなかるべし」と言はれたる枕石翁ハ止むを得ずして法廷に勝敗を争うこととった。事の次第ハ局外者たる私の知るべき所にあらず、又固より口を緘すべき事なれバ只々翁の身を気遣ふのみであった。正しく其の同時に年も将に暮れなんとする頃、一夕法律を業とする某が（故さらに名を記さず）拙寓へ尋ね来り、舌も廻らぬ程の泥酔にて一半は嘲笑的に一半は警告的の口気を以て云ふ。○○派（当時乱暴を以て知られたる派）の人々が、君等の所為を不快に感じ近日退去して鏖殺すべしと豪語せり、厳に警戒すべしと。私は固より歯牙に掛くるに足らずと思ひたれど、念の為め、之を枕石翁にも報じ私の家族（母と姉）は毎夜銘々拳銃と竹槍とを寝床の下に備へて不虞を警めた。左れど其年は何の事もなく暮れた。明くれバ明治十五年元旦、我れ等進取社員ハ予定の如く講演会を某所（その場所は今、名を記憶せず）に開き、私と翁とが講演を試みた。だがいつも活発なる翁がいつになく気勢揚らず楽屋に寝

転んで居た。而して講演了りて後例の通り太白を挙げたる時、常に真ッ先に進める翁が気を腐らし独り鬱々として帰り去った。ソコで私は何か理由のある事と推察したが、其の夜ハ其の健に過し、翌二日私ハ自分に関係のある事やら否やは知らねど、兎に角重も立ちたる者一同豊橋へなりと避けたる方が得策ならんと思考し、七八輩の同志を伴ひ、先づ翁を訪ひて切に同行を勧めた。志かし翁は止む得ぬ用事あれバ直きに跡より行くべしと謝した。堅く約束して、私ハ豊橋なる千歳楼へ行き、今か々々と待ち受けつつ其の日を過した。当時同志の習慣としてかかる場合には必ず妓楼へ宿泊した。が、私は未だ嘗て登楼したことなけれバ規定を破るハ本心の肯んぜざる所と思ひ夜半迄飲み明したが眇として翁の消息に接せなんだゆゑ、待ち草臥れて帰途に就いた。豊橋より国府まで三里半、もちろん徒歩して帰りたれば東天は既に白んだ「マァ無事でよかった」と疲れ切って一睡するや否や日頃毎日牛乳を配達し来れる老婆が武田氏の依嘱を兼ねて倉皇入り来り、「元功様が大変だなんし早くおいでて下され」と叫んだ。驚いて取敢えず往訪したがアナ無残や！翁は十四箇処の傷を負いて既に異境の人となり竹本郡長、佐藤警察署長は既に来りて席に居った。アア真に夢なるかな—その他の事ハ既に諸君の直接又ハ間接に知らるる所なるべけれバ今磁に贅せず。」当日即ち二日ハ武田氏に於て下男及び下山某といえる書生に宿下りをさせ至って無人であったゆえ、賊は之を奇貨とし、機失ふべからずとして来寇せしものか、聞く夜半過ぎし頃、台所か騒がしかったれバ、只見るに浴室より火を失したるものの如く多分下婢が火の始末を忽かせにせしより起ったならんと、それかあらぬか翁は行燈を提げナンダナンダと云ひつつ外該所へ急いだ。宛も此の時「引き廻し」を着用した一人の賊が入り来りて翁を襲った。翁ハ燈火を滅して座敷へ引揚げたが、賊ハ直ちに追ふて座敷に至った。—此の時翁ハ戸棚に隠れて居た様子であったが、発見せらるに垂んとしたので、再び座敷に出で天窓を毀ちて小さな庭へ出た。賊も追ふて出た翁ハ築山から塀を超えて逃亡せんとしたが、此の時背後より致命傷を負はせられた様子であった。遥か隔りたる家屋に居た人の話に日頃嗄れ声の持主なる翁が、遠方へ聞えた程の大声を発して「人殺しヽヽヽ」と絶叫したりといふ。幾程もなく翁の遺骸ハ、国府の某地へ野辺の送りを営まれ、私も多数の人々と共に会葬した。其の後東京にて当時飯倉に住せる阿部氏よりハ幾回となく電報を以て私方へ問合はされ、養子秀三氏は勿論帰郷し、私も亦秘蔵弟子なる大矢尋三郎なる者（当時高等師範の学生）を態々呼戻して百方刺客の捜索に尽力せしめた。左れど無効であった。世迷言はこれでお仕舞ひとす。今や翁の記念碑は建てられんとし、伝記も亦編纂せられんとするに際し　云々」[4]とある。

冒頭で述べた武田準平翁の石碑であるが、碑文の最後

に「昭和三年一月　弘前渋江保撰御油木村永八郎書」と刻まれている。「御油」とは、現在の豊川市御油町であり、当時宝飯郡役所が置かれていたところである。『三河最初の中学校』によれば、木村永八郎について「彼は慶応元年十二月十九日、宝飯郡御油駅二〇二番地、平民彦十郎の長男として生まれた。」[5]とある。

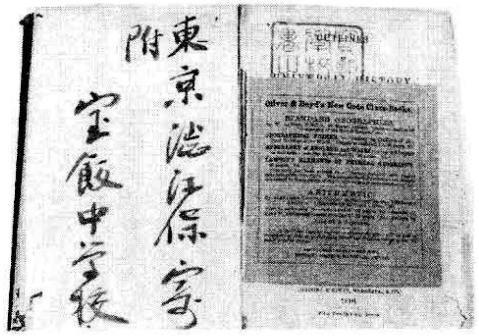
渋江の宝飯中学校赴任後の仕事として『渋江抽斎』に次のような記述がある。「保が学校に往ってみると、二つの急を要する問題が前に横たわっていた。教則を作ることと罰則を作ることである。教則は案を具して文部省に呈し、その認可を受けなくてはならない。罰則は学校長が自ら作り自ら施すことを得るのである。教則の案は直ちに作って呈し、罰則は不文律となして、生徒に自力の徳教を誨えた。教則は文部省がたやすく認可せぬので、往復数十回を累ね、とうとう保の在職中には制定せられずにしまった。罰則ははたして必要でなかった。一人の註違者をも出ださなかったからである。」[6]ここで触れられている「教則」について、稲田雅洋は『境　第二号』で次のように述べている。「宝飯中学校が発足する直前の七月二九日、文部省より「中学校教則大綱」（同省布達第二八号）が発表された。これは、中学校の教則の基準を細かに決めたものであり、日本の中等教育に関しての最も早い規則である。その内容は全一三条からなり、授業科目、入学資格、修業年限、授業時間等に関して、かなり詳しく規定したものである。そのために、つまりこの大綱により、全国の既設の中学校は、教則の再編を迫られることになったのである。このことは、新設の宝飯中学校の場合とて同じであった。それ故に、着任間もない渋江校長は、既に決定され運用されていた『宝飯中学校規則』と、文部省の出した「大綱」の間で、苦慮することになったのである。例えば、修業年限についてみても、宝飯中学校では、予科一年、本科三年の計四年であったが、「大綱」の第一一条では、初等中学校（修業年限四年）と高等中学校（同二年）の計六年（場合により五年でも可）と定められていたし、カリキュラムにしても、僅か三名で出発した同校では、「大綱」の定めた内容をまかなうことはとうてい出来なかった。こうして、中学校側と文部省の間で、何度も折衝がなされたのである。」[7]稲田雅洋も述べているように、教則を巡る文部省との折衝に渋江が苦悩している姿が浮かびあがってくる。

渋江の宝飯中学校長時代のその他の資料としては、明治十四年九月十二日付で出された「中学校教師雇入届」がある。それには「英語教師兼校長　渋江保　月給金四拾円」[8]と渋江の名前が確認できる。また、宝飯中学校で当時使用された教科書について『三河最初の中学校』の「第四章使用された教科書」にまとめられているが、その中に「東京　渋江保寄附　宝飯中学校」と墨書きさ

れた教科書が現存している。この教科書はホワイト著『万国史』で、『三河最初の中学校』には「豊川市立平尾小学校蔵」(9)とある。愛知県豊川市教育委員会に問い合わせたところ平尾小学校には既になく、現在は豊川市桜ヶ丘ミュージアムに所蔵されているとのことであった。実際に桜ヶ丘ミュージアムに出向きその所在が確認できた。

宝飯中学校についての詳細な研究は『三河最初の中学校』にあるので参照されたい。

渋江は一年五ヶ月余りの宝飯中学校での勤務を終え、一八八二年（明治十五年）十二月に東京に戻った。



ホワイト著『万国史』
（愛知県豊川市桜ヶ丘ミュージアム蔵）

注記

（一）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二八四頁

（二）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二八四頁

（三）山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫　一九八一年十一月三日）二四五・二四六頁

（四）山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫　一九八一年十一月三日）二五三～二六〇頁

（五）山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫　一九八一年十一月三日）三三五頁

（六）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二八四頁

（七）稲田雅洋『境　第二号』（佐々木啓之　一九八四年十二月二十日）五十二頁

（八）山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫　一九八一年十一月三日）二九一・二九二頁

（九）山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫　一九八一年十一月三日）一六一頁

上上上

匠　克仁

上上上（うえかみじょう）を筆名にすると書いたが、『上上上』はタイトルにする。題名でなくペンネームまで上上上に変えると、次号も使わないといけない。勢いで上上上と『男男男』で書いた。まさか書いたときの六月上上上旬、あれれ、パソコンの調子がおかしいぞ。上が上上上と変換する。品字様を書き過ぎたせいだろう。『上上上』をタイトルにすると想像できなかった。でも『上上上』だけでは少しだけもの足りない。タイトルを『上上上（上）』としようと思った。二回の連載で次号を『上上上（下）』にしようと、考えたのである。ところが、『上上上』のネタでは二回に分けて書くほどの分量が、紙上上でできない。「表面」と「関して」の意味でつけて紙上上と書いたが、誤植でない。二回に連載できずに、『上上上（上）』とならず、残念である。さすがのぼくでも上上上で二文字目を揃えるのは無理と思ったが、意外に上上上でまとまっている。エッセイの書き出しとしては上上の出来である。書き出しがスムーズにいくと、首尾上上、つまり、書き出しだけでなく途中も書き終わりも上上になるだろう。このように書いている本人は、気分上上である。今までに書いた、ぼくのエッセイの中でも上上品な作品になりそうである。前号でも書いたのだが上上品（じょうじょうほん）は上品の中でも最も品性が上上なのである。

上が二文字目に来る文章を考えているとイライラして逆上しそうになる。というのは嘘でこんな文を書くのに逆上せているのである。関係ないが、小学生の頃ぼくは逆上がりが苦手であった。ところで、一行前に書いた、逆上せてを正しく読めただろうか。「のぼせて」である。

逆上がりをして逆上せて真赤なぼくは笑われて逆上した。逆上ばかり読まされて、読んでいる人は馬鹿にされたと逆上したかもしれない。読者が逆上すると作者のぼくは逆上せるのである。ぼくは、下らない文章を書くことに逆上せている。風呂に長く入って、ぼーっとすることを逆上せるというが、転じて夢中になるという意味である。逆上だけで随分と行を使った。下らないと思うだろうが、逆上が結末の伏線となっている。このエッセイを書けて逆上せ上がっている。ハイテンションである。ちなみに逆上（のぼ）せるは、逆の字を取って、上の字だけでも逆上と同じく、上（のぼ）せる、と読む。それにしても逆上せ上がるだと、きちんと、のぼせあがると読めるのに上せ上がるだと、のぼせあがると読みづらい。どこか逆上（さかがみ）さん、という人名があるだろう。他にも上を逆にして、上逆（うえさか）さんもいそうだ。井の上に逆で、逆井という地名がある。セールスで逆井駅の上で待ち合わせした。なおサカイでなくサカサイでイの上にサが入るのである。人名ではなくて、地名の方で逆上というのが無いか探したが見つからなかった。代りに上上という住所が無いか調べてみた。兵庫県篠山市に八上上という地名がある。地図で見ると神戸駅のまっすぐ上の場所にある。一字はウエと読むものと思ったのだが上の上と下の上もカミと読む。ヤカミカミというのが八上上の読み方である。この地名を早口で読もうとしたら上の歯で舌を噛んでしまった。ぼくは滑舌が良くないが上上いやカミカミになった。この場所に住む嫁さんは八上上上さんである。

上という文字が生命を持って人間の様に動いて鉄棒で逆上がりをしている映像が思い浮かぶ。ぼくにとっては『上』という文字自体が、人格を持って映画のスクリーン上に映し出されているのである。映し出される、つまり上映される。上映なんていう言葉を使うだけで、ぼくは上上の出来映えを想像する。この調子で書けると、首尾上上の出来である。しまった。同じ表現を使っていては上上品な作品にならない。もっと品よく、哲学的・形而上学的な話を書こう。死について考察する。死ねば、天上界、天国に行くだろう。いや、ぼくの場合は、地獄の上の煉獄あたりかもしれない。どうせ死ぬならぼくは腹上死がいい。そんな状態で死んだら、ぼくの煩悩くんは上を向いて死後硬直するかもしれない。そうなら棺桶の上からはみ出てしまう。そのときは「ハンカチ王子」の上を行く「ハミダシ王子」と呼んでほしい。王子様より上で「ハミダシ皇太子」・「ハミダシ天皇」・「ハミダシ上皇」の方が偉そうだ。仏門に入って、法皇となり、天上天下唯我独尊と叫ぶのである。ところで読み方だが天上はテンジョウだが天下はテンカでなくテンゲである。天上天下という熟語が出てきたついでに似たような熟語で上と下のあるものを紹介しよう。

『上意下達（じょういかたつ）』が最初に浮かんだ。意味は上の者の意思や命令を下の者に通じさせること。これの上と下を入れ替えた似たような四字熟語もある。『下意上達（かいじょうたつ）』である。下の者の気持や考えが上の者に届くことである。これと似た四字熟語は『下学上達（かがくじょうたつ）』手近な所から学んで次第に向上していくことである。

『上行下効（じょうこうかこう）』上の者が行うと下の者が上を見習うこと。

上と下が入る熟語は四字だけでなく、三字もある。『下克上』である。これと同一の意味の四字熟語もある。『下陵上替（かりょうじょうたい）』下の者が上の者をしのいで上の者が衰えることである。

『一上一下（いちじょういちげ）』の意味は多くあり一つは上がったり下がったりすること。他に、その場に応じた上で適切に処理すること。その他の意味では、日本刀で上から切り、下から払うという斬り合いもある。

『上下一心（しょうかいっしん）』多くの人の心を一つにし上下の身分を問わないこと。

『上下天光（しょうかてんこう）』天地に光が満ちること。

『上円下方墳（じょうえんかほうふん）』古墳の一つであり上が円で下が四角である。明治・大正・昭和の天皇陵は上円下方墳である。

上手いエッセイが書けたと思う。うまいというより下手上手（へたうま）なエッセイだなと我ながら思う。

上手い…といえば、美味い酒を飲むとついつい飲みすぎ上下左右前後不覚になる。

上の字を使って、自己紹介しよう。ぼくが生まれたのは上方である。十九まで大阪にいたが、大学進学するため上京したのである。初めて東京に住んだのは、新宿区の上落合にあった四人部屋の学生寮であった。就職先には上場企業を考えていたが、都市銀行に就職した。新宿・上野・京都・赤坂の各支店に配属された。その他に人事上は研修生であるが、本部の融資部門も経験した。性格上合わないので入社後すぐ辞めるつもりであった。石の上にも三年と我慢したら、十三年六ヶ月も勤めた。石の上にも十三年ということになった。〇〇ショックで一身上の都合で退職した。次に勤めたのが、米国から日本に上陸した外資系生命保険会社である。その後に、〇〇海上グループで働いた。他に薬局・文具・自動車等十社以上に勤めたことになる。今は不動産業界で働いている。以上で終わりだが、前回は男で新しい字を作った。今度は上の字を重ねて大きな上の字を書こうと思った。しかし上の字では行の二文字目が空白になってしまう。そこで上の代りに大きな下を書くことにした。それだけでなく上を逆さにした大きな字も作ろう。これだと二文字目も上の字で埋まって、ぼくも満足である。これが本当の逆上である。